
モブ高生の俺でも冒険者になればリア充になれますか？

百均

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブ高生の俺でも冒険者になればリア充になれますか？

【Nコード】

NO112FI

【作者名】

百均

【あらすじ】

ある時より迷宮が現れ、モンスターが湧き出すようになった平行世界の日本。当初は新たな災害でしかなかったはずの迷宮は、迷宮が生み出す貴重な資源とモンスターが落とす“カード”の存在により一転、一攫千金の舞台へと変貌した。

モンスターを自在に召喚することができるモンスターカード、カードの力を持って迷宮を攻略する冒険者、その様子を配信するダンジョンTV、モンスターを戦わせるコロシアム……。それらは人々

を熱狂させ、いつしか冒険者は人々の憧れの職業となっていた。

モブキャラの高校生・北川歌麿は、同じモブキャラだったはずの友人が冒険者になった途端クラスカーストのトップに食い込んだのを見て、自分も冒険者になることを決める。

歌麿は、皆に自慢できるレアカードを手に入れるため一回百万円の狂気のガチャに人生を賭けるが？

【書籍化しました！ 第一巻2月28日より発売中！】

【祝コミカライズ！ 第二巻8月19日より発売中！】

カクヨム様にも掲載しております。

第一話 先生、モブキャラの俺でも冒険者になればリア充になりますか？

スクールカースト、なんて最初に言い出した奴は頭がい
いと思う。

身分社会を表すカースト制と、クラス内の力関係は、なるほどと
唸るほど一致してる。

おそらくこれを最初に言い出したのは、中の下か下の上あたりの
奴だろう。

そのくらの位置の奴が、上も下も良く見える。

たぶんクラスのほとんどの奴は、自分が中のグループかちょい落
ちる位にいると思っていて、だからこのスクールカーストって言葉
は世間に広く受け入れられたんだろう。

でも実際のところ、自分がどの位にいるのかなんてわかりはしな
い。

自分は中のグループにいると思ってても、実際はクラスのみんな
から蔭で見下されてるかもしれない。ちょっとトイレに行った時に
は、さつきまで一緒に笑ってた友達が自分の悪口で盛り上がったる
かもしれない。SNSじゃあ、自分を省いたグループが作られてる
……。

そんな恐怖と戦いつつ、みんな自分のクラスカーストを維持しよ
うと必死こいてる。

あるいは、頑張つて上の方にさえ行ってしまえば、こんな恐怖に
怯えずにも済むのかもしれない。

実際のところはわからないが、下から見た上の風景はずいぶんとのびのびしていて快適そうだ。

でも、もし上の奴らの仲間入りをしようとして失敗したら……それはもう悲惨だ。

クラスカースト最下位を押し付け合ってる中の下から下の上からは抜け駆けを決して許さない。

そもそも、カースト上位には上位の理由がある。

コミュ能力と容姿と運動神経か頭脳　生まれ持った才能の壁。そのどれも突出してない俺たちは、今日もモブに甘んじる。

授業中、リア充グループのたいして面白くもないジョークに愛想笑いを浮かべ、クラスのラインでは機械的にスタンプを送り、Twitterにいいねを付ける。

そうやって高校三年間過ごすもんだと、思ってた。

でももし、上に成り上がる方法が目の前に開けたら？

容姿でも、運動神経でも、ユーモアのセンスでもなく、今から努力して間に合う……全く新しい成り上がりの手法。

悩んで悩んで悩んで……俺は決めた。

命の危険もある。お金もかかる。貴重な青春の時間を棒に振るかもしれない。

それだけ頑張っても、無駄になるかもしれない。

それでも俺は　。

朝。教室の扉を開けると、一瞬だけ視線が集まったのを感じた。しかしそれも本当に一瞬のことで、すぐに視線は散っていく。

「おはよう」

挨拶に対する返事も特になく、目が合った二、三人だけ小さく手を上げてくる。

そんないつも通りの光景を、今日はしっかりと目に焼き付ける。

これが、今の俺……北川きたがわ 歌麿うたまろのクラスの立ち位置。

好かれても嫌われてもいない……無関心に近い居てもいなくてもどうでもいいヤツ。

それを静かな心持ちで再確認して、俺は窓際の自分の席へと向かう。

そこにはすでに友人の東野と西田がおり、俺の席を挟んでだべっていた。

東野はチビガリのロンゲ、西田は小太りの眼鏡である以外はごく普通の顔立ちをした、特徴のない容姿をしている。……つまり、俺と同じような容姿レベルだ。

「はよー」

「おはよ」

席に腰掛けながら挨拶を交わす。するとさっそく西田が話しかけてきた。

「なあマロ、聞いてくれよ」

マロ、とは俺のアダ名のことだ。基本的に俺たちは苗字で呼び合ってるのだが、俺に関しては歌麿という特徴的な名前からアダ名がつけられてしまっていた。

「んだよ」

「昨日さ、東野がモンコ口動画貸してくれたわけよ。女の子モンス

ターオンリーで、セクシーシーン満載の奴。俺もう家に帰る前から
楽しみで楽しみで。家に帰って速攻パンツ脱いで再生したわけ」
「今のパンツ脱いだ件、^{くだり}いる？ 朝から不快な思いにさせないでほ
しいんだけど」

ちよつと想像しちまったじゃねえか。俺は顔を顰めた。

「すまんすまん。でさ、確かに全部女の子モニターだったよ？
セクシーシーンも満載だったさ。でもよー……」

そこで西田はがっくりと頂垂れた。

「全部ババアだった……」

「ああ……」

なるほど、そりゃツレーわ……。

「人聞き悪いこというな。全然ババアじゃねえから。全部二十代く
らいのお姉さんだったろうが！」

東野が憤慨しながら言う。

「そつなん？」

「ああ。密林でも星5レビューばっかの人気作だったの。あとでマ
口にも貸してやるわ。巨乳も結構多いからさ」

「マジか！ 頼むわ」

やっぱ持つべきものは友だな。

俺がにんまりしていると、復活した西田が割り込んできた。

「いやいやいや、ちょっと待ってくれよ。二十代つつたら普通にババアでしょ。旬から何年過ぎてんだよ」

「全然過ぎてねえよ。むしろ最も食べ時だろうが。年上のお姉さん最高じゃん。いつかオネシヨタで童貞捨てるのが俺の夢だから」

「あり得ないわ。十二才過ぎたらもうババアだから。ババアで童貞捨てるなら魔法使い目指す方がマシだろ」

「死ねよ、ロリコン」

「何がオネシヨタだ。言っとくけどお前もつシヨタじゃねえから
「貴様ああ！」

よせよせ！ 俺は慌てて二人の間に入った。

「なにくだらないことで喧嘩してんだよ。朝から勘弁してくれよ」

ため息を吐きながら言う俺に、二人はじつとりとした視線を送ってくる。

「マロはいいよな。ストライクゾーン広いしさ。巨乳なら年齢にこ
だわらないもんな。ロリも長身お姉さんもいけるだろ？」

「家に帰れば小五の妹さんもいるもんな。アイちゃん可愛いよな。

マロの妹とは思えん。お風呂とか一緒に入ってんの？」

「東野はともかく西田！ テメー、うちのアイになんかしたらマジで殺すぞ！」

俺は性犯罪者予備軍のキモ豚に本気の殺意を叩き付けた。

まだコイツの性癖を知らなかった頃、家に招いたのは俺の人生で最大の失敗だった。

かつてコイツと本屋に行ったとき、陳列されていたロリコン漫画を見て言った「コミックL〇は聖書」というセリフを、俺は一生忘れないだろう。

「あー、つかモンスターカード欲しいな。リアルの女は年取ったらババアになっちゃうけど、モンスターは年取らないもん。マジで永遠のロリだからな」

「たしかに、俺もなんでも甘やかしてくれるお姉さんモンスターが欲しいわ。俺がおっさんになっても爺になっても年下の男の子扱いしてくれるお姉さん……最高だわ」

欲望丸出しだな、コイツら。

とは言え、二人の言葉は性癖を除けば全国の男が言っていることでもある。

自分だけの女の子モンスター、それはもはや世界中の男の夢だった。

「だったらよー、冒険者になれば？ そしたらいつか手に入るかもしれないぜ？」

「どんだけ先の話だよ。なるだけで百万以上かかるじゃん」

「なったとしても女の子モンスターって、同ランクと比べても異常に高いからなあ。値段数倍以上は違うもん」

それはお決まりの落ちだった。

バカ話をしているうちにいつの間にか冒険者や女の子モンスターの話題に移り、そして適当なところで諦めを口にする。

会話の内容に深い意味はない。ただ教室という小さな世界の中で、会話をしていないということだけを潤滑油だった。

と、その時だった。勢いよく教室の扉が開けられたのは。

「おっはよーっ！」

自信に満ちた、エネルギー溢れる挨拶。

そこに立っていたのは、軽く整髪料で短髪を逆立てた中肉中背の少年。顔だけは……中の下か下の上といったところか。ところどころに散ったニキビ跡と、上向きの豚鼻が顔面偏差値を十ほど押し下げている。

一見したら俺たちと同じモブキャラ……しかしクラスメイト達の反応は違った。

「おー、おはよー!」

「南山君、今日は遅いねー」

男子も女子も、にこやかに南山へと進んで挨拶をしていく。

南山はそれに「はよっす!」「いやー、ちつと電車一本乗り過ぎしてさ」などとにこやかに対応していった。

ふいに、目が合う。

「おはよ」

「……おー」

礼儀として挨拶をすると、短くそれだけ返され、すぐ目を逸らされた。まるで興味なしという態度。

そのまま南山はクラス中心部で机を占拠していたグループに近づくと、ドカリと椅子へと腰掛けた。

「うっす!」

「おー、南山。遅かったな」

「ねーねー、南山の眼から見て昨日のモンコロ、どうだった?」

南山を笑顔で出迎えるのは、このクラスにおけるカースト上位勢。

強豪校で知られるわが校の野球部

そのエースである高橋。

クラス一のユーモアセンスを持つぱつちやり系の小野。

読者モデルをやっているという学年一の美少女、四之宮さん。

そして……四之宮さんの親友で、母性的な胸元が魅力的な牛倉さん。

どこかキラキラと輝いて見える彼らの中に、何の躊躇もなく入り込んでいった南山は、どこか自慢げに語り始めた。

「昨日のモンコロって、ケンタウロスとデュラハンだけ？ うーん、正直俺の眼から見て、イマイチだったかな。勝ったのはデュラハンだったけど、パワーによる力押しだったのがガツカリ。あれなら今のオレが使っても結果は変わらなかったって感じ。その一方でケンタウロスはうまく立ち回ってて感心したね。実況はデュラハンを褒めてたけど、あのアナは元冒険者じゃないし、やっぱそこらへんは知ってる人じゃないとわかんないんだろうな」

「へえ〜。やっぱそういう感じなんだ。私から見るとただモンスターってすごいとしか思えなかった」

南山の早口の解説に、四之宮さんが感嘆の声を上げる。

「俺も、デュラハンめっちゃつえーとしかわかんなかったわ」

「南山くん、なんか本当に冒険者みたいやな」

「本当にてどどういう意味だったの」

「アハハハ」

盛り上がる彼らを見ていた東野が、ぽつりと呟いた。

「南山……変わったよな」

「ああ、すっかりリア充グループの仲間入りって感じ」

二人の感情の抜け落ちたような……いや、押し殺した声を聴いて、俺は軽く目を閉じた。

……今ではれっきとしたカーストトップ勢の南山だが、奴はほんの半年ほど前までは俺たちとだべっていたモブキャラだった。

高校に入学し、席が近いという理由だけでつるみ始めた俺たちは、特に入りたかった部活もなかったということ、適当に遊び歩く日々を送っていた。

誰かの持ってきた漫画を回し読みしてその話で盛り上がったり、ゲーセンに行って身内だけの格ゲー大会を開いたり、ネットに上がったモンコロ　モンスターコロシアムの動画鑑賞会を開いたり……。

青春……というには燃え上がるものはなかったが、それなりに楽しい日常。

それが変わったのは、南山の突然のカミングアウトからだった。

俺、実はちょっと前から冒険者やってんだよね。

その一言から、俺たちの関係は激変した。

学生にとって、肩書というのはかなりのステータスを持つ。

例えば、部活動のエース、キャプテン。読者モデル。芸能人の子供。生徒会長。学年テスト一位……。

学生なんて、基本は何も持っていない横並びの奴らばかりだ。だから、そこから一つ頭が飛び出しているだけで、注目される。一目、置かれる。

そうなれば、ちょっとうまく立ち回るだけで、クラスカースト上位だ。

南山は、そのちょっとうまく立ち回った奴らの一人だった。

奴が用意した肩書は、現役冒険者。

冒険者ブームと言われるこのご時世。なるだけなら金次第で簡単

になれてしまう冒険者だが、その金というハードルが学生には高すぎた。

登録料十万円と、Dランクカード一枚。それが、冒険者になるための二つの資格。

Dランクカードと一口に言ってもピンからキリまであるわけだが、その相場はおよそ百万から一千万円。

最も安いカードであっても、とても学生には手の出せない金額だった。

誰もが一度はなつてみたい……しかしチャレンジするには金が無い。故に、現役高校生で冒険者というのは学生の憧れの存在だった。それがたとえ……南山のように親に金を出してもらった結果だったとしても、だ。

冒険者であることをカミングアウトした南山は、あれよあれよという間にリア充グループの仲間入りを果たした。

今じゃあ、俺たちとつるんでいたことすらなかったような態度で……。

それに、何も思わないわけじゃあない。

現に、俺たちだけになると南山への不満というのは必ずと言っていいほど口に出る。

だが、それだけ。面と向かって口にする度胸はない。

なぜなら奴が冒険者だから。クラスカーストの上位だから。

たとえ、俺らの友情が飲み干した缶ジュースのようにポイと捨てられたとしても、何も言うことはできない。

仕方ない、仕方ないと自分に言い聞かせて、諦めるしかないのだ。

「でも、それも今日までだ」

担任の登場と共に俄かに慌ただしくなる教室の中、俺は小さく咳いた。

俺は今日、冒険者になる。

1999年、七月。世間がノストラダムスの大予言とかいうオカルトにざわめく中、それは唐突に表れた。

全世界に突如現れた迷宮群。海、山、砂漠、道路の真ん中、ビルの上、一般人の住宅、コンビニのトイレの中……。まったくのラダムに表れたそれらは、外部から予測される広さとは比べ物にならない広さを持つ。異空間としか言いようのないものだった。

突如現れたそれらに、世界各国はすぐさま軍隊を派遣。そうして判明したのが、迷宮には御伽話やゲームなどのフィクションから飛び出してきたような怪物が存在すること……。そして各種レアメタルをはじめ全く未知の金属含む豊富な資源や魔法の品々ともいべき不思議な道具類の発見であった。

これに世界中は歓喜した。

迷宮内には人類に敵対的な生物が大量に生息していたが、なぜか迷宮から出てくることはなく、またそれらの大半は銃などの現代的な武装の前には無力であった。

迷宮内は階層ごとに分かれており、より深い階層ほど魔法の道具類や貴金属が見つかりやすかったため、各国はこぞって迷宮を探索した。

迷宮から得られた物の中にはモンスターを描いたカードなど用途不明のものも多かったが、使い道の判明したモノだけでもその有用性は明らかであった。

失われた部位の再生や、当時の医学では治療困難と言われていた病をも癒す薬。可能性の高い未来を見通すことのできる水晶。ありとあらゆる災難から一度だけ守ってくれるお守り。理想の自分になることができる化粧道具。はては、不老長寿の食べ物まで……。

御伽話に出てきそうな魔法の道具類は人々を魅了し、特に怪物たちの落とす魔石と呼ばれる鉱石は燃料や肥料など万能ともいえる無数の使い道が研究により発見されたことで、世界中が好景気に沸いた。

人々の欲望に突き動かされるように軍はより深部へ深部へと潜っていき、そのツケを払うかのように、壊滅的な被害を受けた。

現代兵器による武装をした軍隊を壊滅させたのは、のちに死霊系モンスターと名付けられる怪物たちであった。

銃をはじめとした物理攻撃の利かないレイスなどの幽体モンスターに軍隊は為す術もなく、アメリカなどは全軍の十パーセントもの死者を出したという。

日本は幸運にも死霊系モンスターの出現する階層まで到達していなかったため、これは自衛隊の存在や活躍に反対する市民団体などのデモを受け、迷宮の攻略が他国より一歩遅れていたための不幸中の幸いであった――アメリカの被害を受けすぐさま迷宮から撤退、迷宮の探索を一時保留とした。

先進国各国もこれに続き、しばし迷宮フィーバーは収まったかに思われたが、迷宮封鎖より半年後……のちに【第一次アンゴルモア】

と呼ばれる悲劇が起こった。

決して迷宮から出てこないと思われていたモンスターたちが、迷宮の外へと溢れ出し人々を襲ったのである。

幸いにして、迷宮周囲には簡易的な軍事基地が置かれていたため被害は比較的軽度にとどまったが、軍の網目を抜けて人々を襲ったモンスターたちに民衆は恐れ慄いた。

この時も特に大きな被害を出したのは死霊系モンスターと呼ばれるもので、対処のしようがない幽体のモンスターたちに、軍はただただ被害が広がっていくのを許すしかなかったという。

せめてもの救いは、これら死霊系モンスターが日の光に弱かったことである。

朝日が昇るにつれ死霊系モンスターたちは自然消滅していき、一部地下などに潜ったものも建物ごと壊すことで完全に消滅させた。

なんとかモンスターたちを全滅させた各国は、すぐさま原因究明に乗り出した。

そうしてすぐに判明したのが、今回の災害が起こったのは迷宮封鎖を行っていた先進国各国のみであり、アングルモアの起こらなかった中国やロシア、各後進国などはレイスによる被害の後迷宮でモンスターを狩り続けていた……ということであった。

これにより、一つの仮説が立てられた。定期的にモンスターを狩り続けなければ、迷宮からモンスターが溢れ出してしまうのではないか、というものである。

さらにもう一つ、この【第一次アングルモア】により重大な発見があった。

モンスターたちが極まれに落とす彼らを描いたカード……その使い道である。

のちに【モンスターカード】と呼ばれるこれらのカードは、当初熱心に研究されていたがどうにも使い道が分からなかったため、迷宮産の物品として一部が市場に放出されていた。

それらを購入した一部の者が、モンスターに襲われる中その使い道を偶然にも発見したのだ。

その方法とは、カードに自分の血液を一滴程度垂らした後、それを使うと強く念じるだけというもの。

そうすれば、カードのモンスターが実際に現れ、なんでもいうことを聞いてくれるのである。

実にシンプルなものに研究者が気付かなかったのは、カードが【アングルモア】などの特殊な状況下以外では迷宮の外では使えなかったためだ。

研究はもっぱら危険な迷宮内ではなく専用の研究室にて行われていたのである。

これにより、迷宮内においてのみ使えるアイテムの存在が認知され、アイテムの研究が飛躍的に進んだのは皮肉な結果であった。

こうして発見されたカードの使い道によって、ブレイクスルーが起こり、迷宮攻略は再スタートした。

一部の魔法を使えるモンスターを使うことにより、死霊系モンスターに対する対抗策が生まれたからである。

さらには、カードには思わぬ副産物があった。カードによるマスターへのバリア機能である。

モンスターを出している間マスターは一切のダメージを負わず、それらをすべてモンスターがすべて肩代わりしてくれるのである。

こうして、カードが生み出すバリアの存在によって、迷宮攻略はより安全なものとなった。

実のところ、この頃にはすでに軍による迷宮探索は限界を迎えて

いたという。迷宮の奥深くに行くにつれ、銃器がモンスターたちに意味をなさなくなってきたからだ。

迷宮深部では物理無効の死霊系モンスターをはじめ、素早過ぎて銃弾が当たらない、頑丈過ぎて一日中銃弾の雨を喰らわせてようやく一体倒せる、などと言った強力な敵が現れ始めていたのだ。

ゲームでは当たり前のように存在するレベルアップのシステム。それが無い故の迷宮攻略の行き詰まりであった。

ところが、それもカードにより問題解決された。

人間は確かにレベルアップしない。しかしモンスターはレベルアップするのである。

これにより、モンスターを育て、強いモンスターを倒し、そのカードを得て育成し、さらなるモンスターを倒す　という循環が生まれた。

……それは、一つの結論を意味していた。

すなわち、迷宮探索をするのは軍でなくとも良いということである。

最初に始めた国は、自由の国アメリカであった。

民間人によるカードを用いた迷宮攻略。

【アンゴルモア】のこともあり、迷宮でのモンスター討伐は絶対に行わなければならない。しかし、国内に無数に存在する迷宮すべてを軍だけで攻略し続けるのは問題がある。

当時アメリカ国内では、【第一次アンゴルモア】以降一般人でもモンスターカードによる【アンゴルモア】の自衛が出来るようになるべきとの声が上がっていた。

元々、校内で銃乱射事件があっても「教師が銃を持っていればこのような悲劇は起きなかった」という意見すら出る国である。【ア

ンゴルモア】の時、カードがあれば助かったはずという意見が出るのは当然のことであった。

こうしたことから、アメリカは一部の迷宮を一般人に開放。さらに、民間人による迷宮探索を監視しつつ手助けするための組織【Adventure Guild of USA】、通称冒険者ギルドを作った。

それが成功だったのか失敗だったのかは、今日では全世界で冒険者制度が実施されていることからでもわかるだろう。

迷宮が現れてから約二十年。いまでは冒険者は人々の憧れの職業となっている。

第一話 先生、モブキャラの俺でも冒険者になればリア充になりますか？（後書き）

【Tips】迷宮

ある時を境に突然現れた異空間。内部には危険なモンスターが蔓延る一方、魔法の道具や未知の金属など多くのリターンが存在する。迷宮によってその規模はまちまちだが、深部に行けば行くほど強力なモンスターが出現する。最深部には主と呼ばれる存在がおり、倒せばその難易度に見合ったリターンを得られる。

迷宮は年々増加しており、消滅させる方法も判明していない。いずれ、世界中を迷宮が埋め尽くすという終末論も存在する。

第二話 一回百万円のガチャに人生を賭ける

放課後。俺は友人たちからの遊びの誘いを断り八王子駅の冒険者ギルドへとやって来ていた。

基本的に何の前触れもなくランダムで現れる迷宮群であるが、統計から人口の多い地域ほど迷宮が現れやすいということが判明している。それに対応するために、冒険者ギルドはだいたい駅ビル内に設置されていた。

特に、大都会東京においてはそこそこ大きな駅には必ずと言っていいほど冒険者ギルドがあった。

なお、学校の最寄り駅である立川の冒険者ギルドではなく、わざわざ八王子まで足を運んだのは、立川のギルドが南山のホームギルドであるという理由からである。

こちらの方が自宅も近く、休日に足を運びやすいというのもあった。

改札を出ると、制服や私服姿の人々に混じってタクティカルベストやミリタリーリュックを背負った、どこか物々しい服装が目につき始めた。

どこかの大学のサバゲー同好会——ではない。この駅をホームとする冒険者たちだ。

一目で冒険者とわかる彼らを見る人々の眼は、大きく分けて三つ。無関心、羨望、そして嫌悪である。

【第二次アンゴルモア】から十年……。二度と起こらないはずであった災厄のもたらした被害は、未だ人々の心に大きな傷跡として

残っている。モンスターによる被害を身近に受けた人の中には、ポーションや魔道具といった迷宮の恩恵すらも敬遠する者もいるほどであった。

その最たるものがモンスターを操るカードであり、それを使って大金を稼いで脚光を浴びている冒険者という存在は、彼らにとって非常に目障りであるようであった。

……とは言え世間一般的には、冒険者は憧れの職業である。現に今もジャニーズ系のイケメン冒険者が、数名の女子高生に囲まれて黄色い声を上げられていた。

一見困った風の彼だが、内心ではまんざらでもないのは傍から見ても一目瞭然である。

女子高生たちに引つ張られるように改札の向かいにある喫茶店に消えていく彼を少しの間羨望の眼で見ていた俺だったが、気を取り直して歩き出した。

改札を出て一分ほど歩くと、駅に併設された大きな駅ビル一通路称ギルドビルが見えてきた。

数年ほど前に建てられたこのビルは、地下に食料品店、一階に飲食店、二三階が冒険者用品、四階に冒険者ギルド、五階にカードショップ、六階に市役所と冒険者がすべての用事を一か所で済ませられるようになっていた。

冒険者ギルドと市役所が同じ建物にあることについて、ダンジョンヘイトたち一一迷宮嫌いの中でもとりわけ声のデカイ連中一一から当然クレームがあつたそうなのだが、市はこれを跳ね除け続けている。

強気の理由の一端に、この八王子駅が有事の際の避難所に指定されているからというのがあつた。

多少のクレームがあろうとも、いざという時の安全には代えられない……ということなのだろう。

「ようこそ、東京都冒険者協同組合へ。本日はどういったご用件で
しょうか」

四階に上がると、扉付近で手持ち無沙汰に立っていた男性の職員
が笑顔で話しかけてきた。

「えと、冒険者登録に……」

「かしこまりました。あちらから四番窓口の整理券をお取りくださ
い」

「あ、はい」

椅子に座って待つ間、必要書類や現金の確認をしていると、ほん
の数分ほどで俺の番号札が呼ばれた。

「こんにちは、本日はどういったご用件でしょうか」

「こんにちは、えっとですね、冒険者登録をしたいのですが」

「冒険者登録ですね。登録にあたり、登録料十万円とランクD以上
のカード、現住所の確認できる身分証と、未成年者の方の場合は保
護者の方の同意書等の書類が必要となりますが、本日お持ちでしょ
うか」

「カード以外はすべて持ってます」

「その場合ですと、上の階でカードを購入していただく形となりま
す。冒険者以外の方がカードを購入する場合、職員の同行が必要と
なりますがよろしいでしょうか」

事前にネットで調べていた通りの流れだ。俺は小さく頷いた。

「かしこまりました。それでは担当の者を呼びますので少々お待ちください」

「わかりました」

俺が頷くと女性職員は手慣れた様子で電話をかけ始めた。すると受話器を置いて十秒もしないうちに、奥のデスクから一人の中年男性が笑みを浮かべてやってきた。

「初めまして、重野と申します。カードの購入手伝いをさせていた
だいております。よろしく願いいたします」

「あ、はい。よろしく願いいたします」

「それでは五階に案内させていただきます」

重野さんの後についていく形でギルド奥にある階段を上がって
いく。

このビルの5階にはエレベーターもエスカレーターも通じておら
ず、こうして冒険者ギルド内の階段を上がらなければ行くことが出
来ない。

階段の前には防弾チョッキを身につけた警備員も立っており、一
般人は立ち入ることもできない形となっていた。

どこか静かで落ち着いた雰囲気だった四階と異なり、五階は多く
の冒険者で騒がしいほど賑わっていた。

雰囲気としてはトレーディングカードのお店に近い。店内にはカ
ードのコピーが張られたボードが何個も立っており、それを冒険者
たちが食い入るように見つめていた。

重野さんはそんな冒険者たちの隙間を縫うようにすすいと進ん
でいく。俺はその光景に好奇心を惹かれつつもはぐれない様に重野
さんが空けてくれた空間を利用してその背中を追った。

「すみません、登録希望者の案内のためブースをお借りしたいのですが」

カウンターまで着いた重野さんが空いている職員を捕まえそう言うのと、俺たちは薄い壁と観葉植物に遮られたスペースへと案内された。

「どうぞおかけください」

「あ、はい」

「えー、まずはお名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「北川歌麿と申します」

「北川さんですね。あらためまして重野と申します。えー、今回北川さんは初のカード購入ということで軽く説明をさせていただきます」

「よろしくお願いします」

「はい。えー、まずご存知かと思われませんがカードは迷宮内に存在するモンスターを閉じ込めたものです。冒険者はこのカードを具現化することで迷宮内のモンスターと戦っていくこととなります。ではいつでもカードからモンスターを呼び出せるのかというとそうではなく、カードは迷宮内や特殊な魔道具を使用した空間、またアンゴルモアのような非常事態のみ具現化することができます。ここまではよろしいですか？」

「はい」

俺が頷くと重野さんは小さく笑った後、顔を引き締めた。

「ここからは少し重要なお話となります。まずカードから呼び出されたモンスターですが、使用者……以降マスターと呼ばせていただきますが、マスターに危害を加えることはできません。これは、悪

意のないじゃれつきやマスターに危害が加わるのを見逃すといった行為も含めたものですのでご安心ください。そもそもマスターは自身へのダメージをカードに流すことができますので、カードがあるうちはマスターの身の安全は保障されています。……が、だからといってカードがマスターに絶対服従なのかといえば決してそうではありません」

「え、そうなのですか？」

思わぬ新情報に俺は思わず聞き返した。

TVで見るカードはすべてマスターに従順なものだったので、無意識にカードは自分の想いのままだと思いついていた。

「はい。カードは同じ種族でもかなり個体差があるようで大人しいものから反抗心の強いものまで性格は人間同様千差万別です。使っていくうちにどんどん従順になるものもいれば、逆に命令を聞かなくなっていくものもあります。最悪、自衛以外の一切の戦闘を放棄する個体まで確認されています。カードには所有権というものがあり、これを放棄することで強化レベルや記憶をリセットして誰でも使えるようにすることでできるのですが、リセットした後もカードの人格はそのまま引き継がれます。相性の悪い所有者に使われていた中古カードの中にはどうしようもなく反抗的になっているカードもあり、そう言ったカードを掴まされたマスターのトラブルも少なくありません」

「なるほど……」

重野さんの説明に俺は腕を組んで唸った。

カードには「個性」といふか性格が色々あるというのは聞いていた。ネットには「俺のツンデレヴァンパイアちゃんが可愛すぎて毎日貧血な件」とか「うちの猫又ちゃんが気まぐれ過ぎて辛い」なんてスレがいくつも立っているからだ。

だが、実際は思っていた以上にカードの性格というのは重要な話らしい。

「一つ質問なんですけど、そう言ったすごく反抗的なカードはどうするんですか？ 買ったって使えないわけですよね？」

「どうもいません、いくらか値段を下げて売っております。のちほど説明させていただきますが、そういったカードにも十分使い道があるということはご理解ください」

「わかりました」

「それでは次はカードの様々な機能について説明させていただきます」

一一一 数十分後。

「これにて一通りの説明は以上です。わからないことがあればいつでも窓口の方へお聞きにいらっしゃってください」

「……ありがとうございます」

カードの詳しい機能についての説明や冒険者の義務と権利といったいろいろな説明を聞き終え、俺は重野さんへと頭を下げた。

学校の授業などよりよほど濃密な講義だったが、不思議とそんなりと頭へ入ってきた。自分の興味のある内容だったからだろうか、心地よい頭の熱さにぼうつとしてしていると。

「さて、お待たせしました。それではカードの購入の方に移らせていただきます」

「ッ！！」

そんな重野さんの言葉でハッと我に返った。

ドクドクと鼓動が早くなっていくのを感じる。喉の渇きに唾を飲

み込み、俺は頷いた。

「は、はい。よろしくお願いします」

「そんなに緊張なさらずとも結構ですよ。こちらがDランクのカードのリストになります。最低価格が百万円からとなっていますが、ご予算の方は大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です……」

俺は震える声でそういうと、鞆から封筒に入った百万円を取り出した。

ガキの頃から貯めたお年玉と、バイトで稼いだ汗と涙の結晶だった。

重野さんはそれをちらりと見ると金額を確認することもなく、バインダーを取り出した。

「お会計はまた後程でよろしいですよ。それではごゆっくりご希望のカードをお選びください」

そう言っつて、重野さんはしずかに待ち始めた。

それを横目にバインダーのリストに目を通し始めた俺だったが……。

(やっぱ人気のカードはどれも高いな……。特に女の子カードはどれも500万以上……。百万で買えるのは……。オークとかゲールみたいな不人気カードばかりか)

俺は一瞬だけ目を閉じ、そして覚悟を決めた。

これからの数分でここ数か月の努力が水の泡になるかもしれない。だがそれでも俺は勝負に出ると決めたのだ。

「あの」

「はい？ 決まりましたか？」

「いえ、カードなんですけど、百万円のカードパックというのがあると聞いたんですが」

俺のこの言葉に重野さんははつきりと眉を顰めた。

「……確かにこちらでは十枚のカードをまとめたカードパックを販売しておりますが」

「そちらを購入したいと考えているんですが」

「あー……」

重野さんはどう言ったものかという感じで数秒言い淀み。

「北川さん、カードパックについてなのですが恐らく勘違いをなされているかと思われます」

「勘違いですか？」

「はい、おそらく北川さんはネットなどにカードパックを買ったらレアカードが出たといったのを書かれているのを眼にしておっしゃっておられると思うのですが」

「はい」

「確かにパックには最高Bランクのカードも入っております。ただしそれは極めて低確率で入っているいわば宝くじの一等のようなものです。この店舗のパックに入っているとも限りません。Cランクのカードにしたって一パックに入っている確率は1%以下。Dランクも一パックにつき30%程度です。確実に元手が取れるというものではないんです」

「1%以下……」

「はい。今回北川さんは初登録ですよ？ 予算もおそらくパック一回分のみ。もしDランクのカードが出なかった場合、登録が出来

なくなる形となります。パックは冒険者の方が買うのを想定しているので、北川さんのような新規の方が買うことを想定した割合にはなっていないんです」

「……大丈夫です。全部知ってきています」

俺が静かにそう言うと、重野さんは本当に困ったという風に見じりを下げた。

「……北川さん、こちらのお金はご自身で働いてお貯めになったものですか？」

突然の話題の変化に俺は少しキョトンとしつつ答えた。

「あ、はい。そうです」

俺の言葉に重野さんはしみじみと頷いた。

「学生でこれだけ稼ぐのは本当に大変だったでしょう。私も高校時代はよくアルバイトをしていたのでよくわかります。……これはこだけの話にしてほしいのですが」

「はい……」

「当店で扱うカードは、すべて冒険者の方々から買い取ったカードとなっております。そのうち癖のない性格や使いやすいスキルを持つカードは、しかるべき値段をつけて店頭に並べるようになります。そして店頭にも並べてもあまり買い手がつかないようなカードは……」

……こうしてパックに入れて釣り餌にする、ということか。

Cランクカードの価格は一千万から一億。Bランクともなれば最高百億近い値が付くこともあるという。一般人や駆け出しの冒険者にとって、想像もできない世界。

それがもしかしたら百万で手に入るとなれば……釣り餌としては十分だろう。

俺は重野さんに深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。でも、決めてきたことですから」

「……かしこまりました。それではパックの方をお持ちします」

重野さんは一分ほど俺をじっと見つめていたが、やがて小さくため息を吐くとそう言って席を立った。

「……………ふうふう」

背もたれに身を預け、一人天井を見つめる。

もう、後戻りはできない。

だが、冒険者になったとしても最底辺のDランクカードじゃあ意味がないのだ。

Cランク、あるいはDランクの女の子カード。それが俺の求める最低条件。

それが手に入らないなら、どれも同じことだった。

「お待たせしました。こちらがカードパックになります」

そう言って重野さんが持ってきたのはコンビニに置かれていそうなカードパックセットだった。

トレーディングカードと違うのは、煌びやかなイラストは一切なく、完全黒塗りのパックに入っていることだろうか。それが五十七センチ四方の箱にみっしりと詰まっている。

これが、一パック百万円のカードパック……。

思わず唾を飲み込む。

「どうぞどれでも一パックお好きに手を取ってください。いくらでも時間をかけて構いませんよ」
「ありがとうございます」

頭を下げ、じっとパックを見つめてみる。当然ながら中は全く見えない。

この中に、三割でDランク、1%の確率でCランクが入っている。つまり七割の確率で俺の百万はゴミになるということだ。

「……………」

この数か月のアルバイトの日々が頭に過る。

平日はスーパード、土日は引越しのバイトで休みなく働き続けた。初めてのバイトだったので、最初の一月は毎日のように怒られ続けた。嫌味な先輩に目を付けられ、嘘の仕事を教えられて店長に滅茶苦茶怒られたこともある。あの時は、歯を食いしばり過ぎて歯ぐきから血が出た。家に帰って泣いたこともある。重い物を運ぶことも多かったから、毎日終わったら飯食って風呂入ったら気絶するように眠る日々だった。

親の説得も大変だった。身の安全の心配。学業への影響。費用の問題。ネットでいろんな情報を調べては親に見せ、成績のキープを約束し、費用に関してはこうして自分で稼いで、ようやく先日許可を取り付けた。

そんな努力が、七割でパー。

また百万貯めるのにどれくらいかかるだろうか。今度はお年玉も貯金もない。放課後毎日働き続けて給料は約十万。単純計算で約十カ月。シフトの都合もあるから毎日はいれないし、精神的に続かな

い。一年は見るべきだろう。それでも、その次もダメだったらまた一年頑張るのか？

無理だ。高校生活は三年しかない。それをすべてバイトに費やすことになる。本末転倒。

……ならこれがダメならスパッとあきらめた方がいい。

いや、むしろそれがいい。この一回にすべてを賭ける。駄目なら残りの学校生活を、分不相応な願いは持たず静かに過ごす。だがもしDランク以上のカードが出たなら……。

心臓が、痛い。喉はからっからに渴いて、唾を飲み込むだけでヒリヒリする。汗をびっしょりと掻いた身体が寒い。指先がプルプルと震えて力がななんと入り辛かった。

ブースの外の喧騒がスーツと遠のいていく。怖い。まるで宇宙空間にいるように身体がふわふわとしている。

初めて知った。自分が必死にしてきた努力が試される瞬間っていうのは、こんなに怖いのか。

運動部とか、テスト学年上位の奴らは試合や試験でこんな感覚がしてるんだらうか。やべえ、野球部の高橋への尊敬の念が芽生えそうだ。

深呼吸をする。 1、2、3、4、5、6……吐いて、 1、2、3、4、5、6、7、8、9……吸う。

よし、引こう。

指先は、箱の右隅っこの方へと自然と伸ばされていった。右端から三列目、奥から二番目のパックに、吸い寄せられるように手が伸びていく。引っかかりもなく、スツと抜けて少し気分が良かった。

「これにします」

「よろしいですか？」

「はい」

俺が頷くと、重野さんは手でうながした。

「それではご開封ください」

ピリ、とパックの端を破る。

一枚目、ゴブリン、Fランク。二枚目、コボルト、Eランク。三枚目……クージー、一一一Dランク！

喜びと、落胆が同時に心を襲った。

とりあえず三割の壁は破った。少なくともこれで冒険者登録はできる。だが、これじゃあ意味がない。これじゃあ……。

しかもこの段階でDランクカードが出たということは残りのカードにレアカードが入っている確率はグッと落ちる。

つまり、俺は賭けに半分負けたのだ。

グツと唇を噛みしめ、残りのカードをめくっていく。

四枚目、スケルトン、Fランク。五枚目、またもゴブリン。六枚目、ゾンビ、Eランク。七枚目、ローパー、Fランク。八枚目一一一。

「あっ！」

ゲール……Dランクカード。それも、描かれているイラストは女の子のものだった。

二十歳くらいの豊満な身体つきをした金髪ロングのゲール。それだけ聞くと魅力的な女性にも思えるが、肌は黒紫に変色し、眼は白

目が見ないほど赤く充血、大きく開けられた口元から垂れる涎には何の知性もつかげえなかった。

とてもではないが萌えなど微塵も感じない有り様だ。

「はは……」

自嘲の笑みが零れる。確かに、望み通りDランク……それも女の子のカードが来た。だが、コレジャナイ感がすごい。

でもまあ、ある意味では俺にお似合いのカードなのかもな……。

そもそも可愛い女の子のカードか、安くても一千万のCランクが欲しいなんて、高望みにも程があるってもんだ。

考えてみれば一パックで二枚もDランクが来たのだ。十分に俺はツイてるといえる。

ならこれで良しとするか。

そんなことを考えながら残り二枚のカードを無造作にめくり――

「……………あ、え？」

――我が目を疑った。

一枚は、何の変哲もないゴブリンのカードだ。だがもう一枚。そこに描かれていたのは、まぎれもなく和服姿の少女の姿だった。

本来綺麗に切り揃えられているはずの黒髪はパンキッシュに跳ねまくっているし、片足をボール（たぶん鞠だろう）に乗せ、中指を立ててこちらを睨んでいるその姿はなぜか異様にガラが悪いが……間違いはない。

――座敷童。ランクCの女の子カードだった。

第二話 一回百万円のガチャに人生を賭ける（後書き）

【Tips】モンスターカード

迷宮内で稀にモンスターが落とす謎のカード。モンスターたちを描いたイラストが描かれており、マスター登録をすることで自在にモンスターをカードから呼び出せるようになる。モンスターを呼び出している間、マスターへのダメージはすべてカードが肩代わりしてくれるため、迷宮攻略には欠かせないアイテムとなっている。モンスターは基本的にマスターの命令を聞いてくれるが、感情がある為嫌われると言っことを聞かなくなる。

弱いカードほどドロップ率が高く安価で、強いカードほどドロップ率が低く高価。

そして女の子カードは基本的に、需要の関係からどれも高額で取引されている。

第三話 例えるなら目の前で電車のドアが閉じたような気分

「フンフ〜、フンフフン〜」

翌日、俺は鼻歌交じりで学校へと向かっていた。

制服の内ポケットには、冒険者ライセンスと数枚のモンスターカードを忍ばせてある。

そのうちの一枚は、もちろん昨日手に入れたばかりの座敷童ちゃんだ。

「…………ふふ」

思わず小さな笑みが零れる。

みんなこれを見たらどんな反応をするだろうか。

Cランクカード、それも相場の数倍はする女の子カードだ。

間違いないで学生で持っているものはまずいないとっていいレアカード。

それを見せびらかした時のみんなの顔を想像すると……………どうにも顔がにやけるのを我慢出来なかった。

「おーっす。マロ、今日は早いじゃん」

後ろから俺の肩を叩かれ振り向くと、そこには見慣れた友人の顔があった。

「おお、東野！ おはようー！」

「おう、な、なんか朝からテンション高いな。なんかあった？」

「そうか？ 別にいつも通りだと思っけど」

そう惚ける俺だったが、やはり顔のにやつきは止まらない。

「んだよ、ニヤニヤして。いつも以上にキモいぞ」

「うるせえよ」

ポカリと軽く肩を殴る。

てかいつも以上ってどういうこと？ 言外にいつもキモいって言うてない？

「なんだよ、なにがあったん？ 教えてくれよ、友達だろ？」

「ん〜」

そう言っで肘で突いてくる東野に、俺は昨日のことを一足先に教えるかどうか一瞬迷った。

この先俺が冒険者でレアカード持ちであることを明かしたら、おのずとクラス内での俺の扱いも変わってくるだろう。

というか、クラスカーストで上位になるために頑張ってきたのだから変わってもらわなくては困る。

問題は、その時これまでの友人関係がどうなるかだ。

南山は、スクールカーストの成り上がりに合わせて俺たちを切り捨てた。

それは奴が真正の屑野郎であるから仕方ないが、俺はできればリア充グループの仲間入りをしつつも、東野たちとの友人関係もキープしておきたかった。

やはり友人というのは簡単に切り捨てること出来るもんじゃあないと思うし、なにより東野たちとは気も合う。学校では皆に一目置かれつつ、放課後や休日は今まで通り東野たちとも遊ぶというの

が理想の展開だった。

となると、東野たちにはあらかじめ冒険者であることをカミングアウトしておいた方がいいかもしれない。

よし。

「実は――」

「おう！ おはよう」

「おっ！ 西田。登校中に三人揃うのって珍しいな」

「アタシ達、運命の系で結ばれてるのよ、きつと」

「俺の運命の相手はお前らじゃなくてまだ見ぬ素敵なお姉さんだから」

「ヘッ（嘲笑）。おっと、マロもおはよ」

「お、おお……おはよう」

「ん？ そっぴやさっきなんか言いかけてた？」

「い、いやなんでも……」

「そうか？」

西田の登場に出端をくじかれた俺は、思わず誤魔化してしまった。う、こうなるとなんでか言い辛くなるんだよな。

そのまま言い出すタイミングを窺っていた俺だったが、西田が昨日プレイしたギャルゲーの話を知っているうちに教室へと着いてしまい、結局冒険者になったことをカミングアウトすることはできなかった。

うーん、今日中になんとか二人に話を通しておくことはできるか？ 最悪出来なかったら明日に延期するのもアリ、か？

「お？」

そんなことを考えていると、ふいに東野が立ち止まった。

「どうした急に立ち止まって。早く中入れよ」

急に止まったせいで東野にぶつかった西田が、教室へ入るようにうながす。

「いや、なんか中が騒がしくて」

ん？　なんかあったのか？

東野の肩越しに中を覗くと、クラスの半数以上に囲まれた一人の男子生徒の姿があった。

少し低めの背丈に、不快感を与えない程度のぼつちやり体型、天パー気味の黒髪……カーストトップグループの小野だ。

みんなに囲まれた小野は、心なしいつもよりテンション高めに見えた。

またいつものように身内しかわからない冗談を飛ばしてるのだから。あいつのお笑い、俺らみたいなのを弄ってくるから微妙に嫌なんだよな。

「なに、小野？」

「また身内にしか受けないコントでもやってんのか？」

「あいつのお笑いって俺らみたいなのを弄ってとってくるから微妙に嫌なんだよな」

東野と西田が小野を見てこそこそと言いつている。俺の考えていたことをまんま言っていてちょっとほっこりした。

「とりあえず中入ろうぜ」

「おう」

二人をうながして教室に入る。クラスの連中は俺らが入ってきた

ことも気づかず、小野の話に夢中のようだった。
と、その時だった。俺の耳に信じられない言葉が飛び込んできたのは……。

「―――しつかしこれで小野も冒険者か。一クラスで二人も冒険者いるのなんてうちくらいだぜ」

……なん、だと？

俺は思わず立ち止まり、小野を凝視した。

「いやあ、冒険者言つても駆け出しの一ツ星やけどな。カードもしよぼいし」

「いやいやいや、冒険者つてだけで凄いつて。しかも自分でバイトして金貯めたんだろ？ マジですげえわ」

「もう迷宮にはいったの？」

「いやまだ。今日南山君といっしょに行く予定なんすわ。いやあ、やっぱ顔見知りが先輩やと心強いわ」

「俺も友達が同業になってくれてめっちゃテンション上がってるわ！」

ワイワイと盛り上がる彼らを、俺は呆然と見ることしかできなかった。

………や、やられた！ 先を越された！

ど、どうする？ 俺もあそこに飛び込んでいつて冒険者になったことを明かすか？

いや、駄目だ。あそこはもう完全に小野のお披露目の場になっている。そこに飛び込んでいつてもリア充グループの仲間入りはできない。むしろ空気読めない奴のレッテルを張られるだけだろう。

では一旦時間を置いて俺もカミングアウトするか？ ……いや、それももはやインパクトが薄い。

二匹目の泥鰌とか二番煎じが許されるのは、文字通り二番目までだ。三番目四番目は、もはや有象無象の後追いに過ぎない。

実のところ二番目すらも怪しいが、それは一番目にはない武器があれば許される。俺がランクカードか女の子カードに拘ったのはそのためだ。ただ冒険者になるだけでは自慢にならない。それが許されるのは先駆者である一人目だけ。小野の場合は元からリア充グループだったというのが大きい。

もちろん、今でも座敷童のカードは十分なインパクトを与えられるだろう。Cランクカードで女の子カードというのはそれだけの価値がある。

しかし、それをプラスの印象に持っていくのが難しい……。

突然割り込んできた俺を小野は面白く思わないだろうし、南山も小野の側につくだろう。

——ふうん、北川君も冒険者になったんだ。しかもレアカード持ってるんだ、すごいね。で、今はボクが話してるんやけど。

おそらく、こんな感じになるんじゃないだろうか。そしてクラス連中も他の者たちを出し抜いて成り上がろうとした俺を徹底してこき下ろすに違いない。

バイトして頑張って冒険者になった小野君が話してるところに強引に入ってきて、高額カードを見せびらかしてきた成金の北川君……てな感じのレッテルを張られる可能性がある。

となると、どうあってもこの場での発表は下策。だが、後日ライセンスとレアカードを見せびらかしたところでインパクトは薄く、クラスカースト上位に食い込むことはできないだろう。

ではどうすればいいか。武器だ。更なる武器が必要だ。冒険者ラ

イセンスとレアカードだけじゃない、さらなる武器が……。
……だが、どうする。どうすれば奴らと差別化して個性を持つこ
とが出来る？

「んだよ、小野の奴も冒険者になったのかよ」

「うちの学校に冒険者ブームとか来たりしないだろうな。そんな金
ねえぞ」

「つか冒険者って言ってもどうせ駆け出しだろ？ モンコロにも出
れない三ツ星未満とか……ねえ？」

「確かに、一ツ星とか金だけになりました感強いわ」

ツツツツツツツツツツツツツツツツ！！！！

その時、俺の背筋に電流が走った。

それだ！ それしかない！

教室の隅っこでコソコソと小野達にケチをつける東野たちの会話を聞いた時、俺は閃いた。

南山も小野も所詮三ツ星にもなっていないアマチュアクラスだ。

冒険者はライセンスにつけられた星の数によって六段階にクラス
分けされており、四ツ星からプロと見なされる。

一ツ星と二ツ星は完全にアマチュア扱いだが、三ツ星ともなると
セミプロ扱いでモンコロ―モンスターコロシムに出ることもで
きる。

モンコロに出れるということはつまり、TVに出れるということ
だ。

TVに出れるくらいの実力者ともなると、それはもはや他の学生
とは一線を画す存在と言って良い。

そのネームバリューは、校内においてはちょっとした芸能人にも
匹敵するだろう。

これだ……。学生でありながら数千万円のレアカードを持ち尚且つTVに出れるくらいの実力派。この路線で行くしかない。

本当は、冒険者になった後は適当に迷宮に潜る程度で割の良いバイトをするぐらいの気持ちだった。

俺にとって冒険者とはなるまでが重要なのであって、なっってからはどうでもよかったのだから。

しかしこうなっては仕方ない。なんとしても三ツ星冒険者になる。できれば来年のクラス替えの前までに。

俺は小野達を……。いや、その傍らで笑みを浮かべる彼女を見ながら、そう決意するのだった。

第三話 例えるなら目の前で電車のドアが閉じたような気分（
後書き）

【Tips】冒険者

迷宮の登場により新しく生まれた職業の一つ。初期投資に金がかかり命の危険がある反面、収入は高い。近年の冒険者ブームにより、その危険性を理解せず冒険者になる若者たちが増加している。

一ツ星から六ツ星の六段階でランク分けされており、三ツ星までをアマチュア、四ツ星からをプロと見なす風潮がある。

プロ冒険者は、迷宮攻略の収入の他に、TV出演によるタレント業や動画投稿による広告収入、モンスターコロシウムへの出演料と賞金など様々な収入源があり、荒稼ぎしている。

第四話 奥さん、オタクの座敷童完全にグレてますよ

放課後。自宅で準備を整えた俺はさっそく八王子駅周辺の迷宮へと来ていた。

八王子駅から徒歩十分ほどの距離にあるその迷宮は、元は普通の軒家だったらしいのだが、今は『ダンジョンマート』という名のコンビニに姿を変えている。

迷宮の多くは、今はこうしたコンビニの形を取っていた。

迷宮が現れた当時の建物は、そのほとんどがアンゴルモアの影響で崩壊してしまっている。無事だった建造物も所有者が手放すことを望み、多くが無人となってしまった。

そうした廃墟群を国が被災者の支援を兼ねて一括して買い取ったのまでは良かったのだが、そこで問題となったのがその土地をどう活用するかであった。

ただ迷宮の入り口として使うのは税金の無駄使いなのでは？ そんな声が野党から上がったのだ。

半ば言いがかりにも近い批判だが、それに対して真っ先に手を上げた企業があった。

迷宮バブルの際、迷宮周辺にコンビニを置くことで急速にシェアを伸ばしていたダンジョンマート。その名物創業者が、うちのコンビニを出入り口に使うのはどうかと提案したのだ。

ダンジョンマートの売りは、何と言ってもその無人販売システムである。当時迷宮周辺での営業は働き手が集まらないと各大手コン

ビニが撤退していく中、いち早く無人販売システムを導入することで迷宮攻略をする自衛隊相手に商売を始めたのがダンジョンマートの起こりだ。

無人販売システムの心配点として万引きのリスクなどが挙げられるのだが、それを規律に厳しい軍人にメインターゲットを絞ることで解消したのだ。

四六時中誰かしら自衛隊員が店内にいるようになったことで、一般客による万引きすらもほぼゼロと化した。

結果、急速に成長をしたダンジョンマートだったが、それもアンゴルモアによる被害により一気に窮地に追い込まれた。

普通の企業ならば、迷宮周辺のビジネスからは撤退し、普通のコンビニとして再出発した事だろう。だが、ダンジョンマートの社長は一味違った。さらに一歩踏み込み、迷宮とコンビニをある種一体化することでさらなるシェア独占を狙ったのだ。

紆余曲折あった結果、このダンジョンマートの申し出は通ったのだが、この戦略は当初ダンジョンマートにとって苦境を生んだ。

なんせ客が完全に常駐する自衛隊員のみとなってしまうのだ。アンゴルモア直後、迷宮周辺はゴーストタウンと化した。そんな状態でコンビニとして繁盛するわけもなく、さらには普通の地域にもあるダンジョンマートも風評被害を受け次々と撤退していった。

株価も下落の一途を辿り、一時はかなり厳しい状態にも追い込まれたようである。

暗雲立ち込めるダンジョンマートに一筋の陽の光が差し込んだのは、今から数年前。日本にも冒険者制度が取り入れられてからのことだ。

冒険者ブームの到来によりダンジョンマートは急激に業績を回復。株価もうなぎのぼり。ダンジョンマートが上場時、公募価格で百株

だけ購入したサラリーマンが、ダンジョンマーケットが苦境の時期も手放さず持ち続けていたおかげでいつの間にか数億円もの資産を得ていた、という話は何度もテレビで取り上げられたものだ。

事ここに至って他の大手コンビニも迷宮事業に乗り出そうとしたのだが、時すでに遅し。

倒産寸前になっても迷宮利権を手放さなかったダンジョンマーケットの地盤は、ガッチガチに固められた揺るぎないものとなっていた。こうしてダンジョンマーケットは日本コンビニ業界の覇者となったのである。

………つてこの前ガ〇アの夜明けでやってた。

『いらつしやいませ。冒険者のお客様はパネルに冒険者ライセンスをタッチしてください』

自動ドアを開けると、そんな声が傍らから聞こえてきた。

噂では、ここでライセンスをタッチしない客がいると奥にある迷宮入り口の扉が自動ロックされるらしい。

店内は普通のコンビニに比べ食料が気持ち多めで、日用品が少なく、包帯や消毒液など冒険者が必要とするだろっ商品が多く目についた。

とは言え本格的な冒険者用品はなく、あくまで買い忘れた小物や食料品の補充を目的としているのが見てうかがえる。

俺は数本のペットボトルとおにぎりや菓子パンを手に取ると、棚に掛かっていたビニール袋に入れ奥へと進んだ。

会計はしない。詳しいシステムは知らないが、棚の重量計と監視カメラに仕込まれた人工知能が商品の値段を計算して、ライセンス

にあらかじめチャージしてある電子マネーから勝手に差っ引いてくれるらしい。

下へと続く階段を降りると、そこには重厚な鋼鉄の扉があった。俺がそこでもライセンスをタッチすると、バシューウツという音を立てて開く。

こちらの認証は入り口のものとは異なり、俺がこの迷宮に潜れるだけのランクかを判断している。……まあここはFランク迷宮なので冒険者なら誰でも入れるのだが。

基本的に、一ツ星冒険者はFランク迷宮まで、二ツ星冒険者はEランク迷宮まで、三ツ星冒険者はDランク迷宮まで入ることが可能となっている。

プロ扱いされる四ツ星冒険者からは、ランクによる迷宮の制限も無くなり、たとえAランク迷宮であっても自由に出入りすることができるようになる。尤も、その際の身の安全は誰も保証してくれないが。

プロになった以上、そこからはすべて自己責任で、というわけだ。

扉の先には二畳ほどの小さな空間があり、そこには黒く渦巻く球体が浮かんでいた。

「これが、迷宮の入り口か……」

初めてみた。この球体、一体何で出来てるんだ？ 一見ただの煙みたいだけど……。

恐る恐る指を差しいれてみると、俺の指は完全に見えなくなってしまう。指先が仄かに温かい。

まるで、生き物の口内のように……。

ごくりと唾を飲み込み、思い切って中へと入った。大丈夫だ、これを通って死んだという奴の話は聞いたことがない。

一瞬だけ階段を踏み外したような感覚があった後、俺はいつのまにか深い森の中に立っていた。草木の香りがふわりと香る。周囲は明るい。俺が迷宮に入ったのは夕方だったはずなのだが、空にはお日様がしっかりと昇っていた。

迷宮の中は小さな別世界ってのはマジだったんだな……。

事前に調べた情報が確かならこの太陽は動くことなくずっと上り続けているはずだ。つまり、この世界は永遠に昼が続くということになる。

同じように夕方の迷宮はずっと夕方だし、夜の迷宮は永遠に夜。

雨の迷宮は永遠に雨だ。

初心者は見通しの悪い夜の迷宮は避け、昼の迷宮に行くべきと書いてあったから事前に調べてこの迷宮にやってきたのだが……。

「暑い……」

気温は三十度近いだろうか。秋に入って肌寒くなってきたので厚着をしてきたんだが……失敗したな。まさか季節まで迷宮毎で異なるとは。

と、こうしてる暇はない。さっさとモンスターを呼び出さなければ。

入り口周辺はモンスターも出ないとギルドの人も言っていたが、ここは迷宮……何が起こるかわからない。用心するに越したことはない。

俺は三枚のカードを取り出すとそれをじっくりと眺めた。

【種族】座敷童

【戦闘力】250

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し：幸運を災いに、災いを幸運に。対象に幸運と不幸を付与できる。マスターへの好感度で出力増減。
- ・かくれんぼ：姿と気配を隠すことができる。透明化、気配遮断を内包する。
- ・初等回復魔法：簡単な回復魔法を使用可能。

【後天技能】

- ・零落せし存在：本来の存在より零落している。戦闘力を常時100マイナス、スキルの欠落やランクダウン。
- ・閉じられた心：マスターに反抗心を抱いている。命令された行動に対するマイナス補正、自由行動に対するプラス補正。
- ・初等攻撃魔法：簡単な攻撃魔法を使用可能。

座敷童。福の神の一種で、座敷童がいる家は幸運が訪れ、逆に去ってしまうと不幸が訪れるという伝承を持つ。

各項目の説明を軽く説明させてもらおうと。

種族は文字通りそのカードの種族を。戦闘力は現在のカードの戦闘力を。先天技能はその種族なら誰でも持っているスキルを。後天技能はそのカードが個人的に所有するスキルを表している。

座敷童の場合、敵や味方に幸運と不幸を与える能力に姿を隠す能力、それと癒しの魔法が種族的に備わっていることになる。

そしてこのカード自体が固有で持つ能力に、零落せし存在、閉じられた心、初等攻撃魔法という三つがあるというわけだ。

しかし、見ての通り後天技能の中にはデメリットがあるものも存在する。

零落せし存在は、本来の状態よりも著しく弱体化してしまっているカードが持つスキルだ。

ギルドで配信されているモンスター図鑑アプリで調べたところ、この座敷童は他の座敷童に比べて100近く戦闘力が低いらしい。先天技能の回復魔法も、本来は中等の回復魔法を持つそうだが、おそらく、後天技能も一つか二つは欠落している、とのこと。

これだけでもこの座敷童はCランクカードの中でも最低レベルまで評価が下がっているのだが、それに加えて閉じられた心というスキルまで持っていた。

これは、相性の悪いマスターに使われていたカードが得てしまうスキルで、このスキルを持つカードはマスターに非常に非協力的であることを表す。仮に無理やり言うことを聞かせても、マイナス補正によりその能力が著しく低下してしまう。

このようなデメリットスキルを得た時点で、そのカードが 通常の使われ方 をすることは無くなる……。

とまあ、このようにスキルにはデメリットをもたらすものもあり、この座敷童はとんだ落ちこぼれだったというわけだ。値段も、通常の座敷童の半値以下だろうというのが重野さんの見立てだった。

まあそうでなくてはパックになんて入っていなかっただろうから、俺としては複雑なところなのだが……。

さて、次はグーラーだ。

【種族】グーラー

【戦闘力】100

【先天技能】

- ・ 生きた屍：死に最も近く死から最も遠い存在。頭部を破壊しない限り消滅しない。状態異常耐性、知能低下を内包する。
- ・ 火事場の馬鹿力：肉体の限界を超えて力を振るうことができる。使用中反動を受ける。
- ・ 屍喰い：血肉を喰らい糧とする。捕食により自己再生。

【後天技能】

- ・ 絶対服従：魂の誓約であり呪い。どのような命令であっても実行する。命令に対する極めて強いプラス補正。
- ・ 性技：性的技術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。
- ・ フェロモン：フェロモン物質を認識し、自在に操ることが出来る。

グールとは、アラビア由来の人肉を喰らう化け物のことだ。本来はサキュバスなどの淫魔に近い存在だったらしいのだが、迷宮においては死肉を喰らう死食鬼として現れる。そのうち、女のグールをグーラーという。

戦闘力はDランクカードの中でも最低レベルだが、生きた屍、火事場の馬鹿力、屍喰いというシナジー効果のある先天スキルに恵まれている。後天技能も、絶対服従に性技、フェロモンとロマンあふれるスキルばかりだ。

いや、ホント、なんでお前はグーラーなんだと問い詰めたスキルセットである。スタイルといい、アンデッドでなければ完璧なのに！

……気を取り直して、次に行こう。最後は、クーシーだ。

【種族】クーシー

【戦闘力】150

【先天技能】

- ・妖精の番犬：妖精たちの守り手。パーティー内に妖精族がいる際、ステータス向上。妖精族を攻撃する際、ステータス減少。気配遮断を内包する。
- ・集団行動：群れの中で生きる習性。集団での行動に対するプラス補正。

【後天技能】

- ・従順：マスターの命令に基本的に逆らわない。命令された行動に対する弱いプラス補正。
- ・臆病：戦闘を極めて忌避する。戦闘時、ステータス半減。

クーシーは、スコットランドの犬の妖精で妖精たちの守り手だ。

伝承によれば、まったく音を立てずに動くことが出来るという。スキルもその逸話に由来したもので、気配遮断のスキルを内包し、妖精族を守る際にステータスが向上する。

集団行動に対する適性を持ち、主にも従順。高めの初期戦闘力もあって本来ならば主力となるはずのカードのだが、それらの利点をすべて吹き飛ばすような欠点が臆病のスキルにはあった。

実際に使ってみるまではなんと判断できないが、クーシーは戦闘よりも補助に使った方が良いかもしれない。

さて、三枚のカードの説明を終えたが、問題はこのうちのどのカードを使うかである。

迷宮はそのランクによって召喚制限が存在し、今いるFランク迷宮では二枚までしか同時に呼び出せない。なお、召喚制限は迷宮のランクが上がるごとに二つずつ増えていく。

とりあえず座敷童は確定として……もう一枚は絶対服従を持つグーラーちゃんにするか。

アンデッドは一から十まで指示するか時間をかけて調教しないと使い辛いため初心者向きではないとネットに書いてあったが、まあ座敷童もいるし大丈夫だろう。

俺はまず座敷童のカードを掲げると、宣言した。

「出ですよ！ 座敷童」

カードが眩い光を放ったかと思うと、俺の前にはいつの間にか小さな女の子が現れていた。ふわり、と花の香りがほのかに漂う。

年のころは……ちょうどうちの妹と同じ（小学五年生）くらいか。イラストの少女をそのまま三次元にしたような美少女である。少なくとも顔立ちは本当に可愛らしい。まさに人形のように整っている。問題は、眼つき。あと態度。

ウンコ座りで眉間に眉を寄せこちらを睨みつけるその様は、完全に田舎のヤンキーだった。

「……何見てんだよ、オオん！？ コロスぞ！」

「ころ……ええ！？」

ガラ悪！？ 眼力強ッ！

いきなりの殺害宣言にたじろぐ。

一見人形のように可愛らしい少女であってもその力は人間とは比

べものにならない。

俺が内心で結構本気でビビっていると、座敷童はニヤリと嘲笑を浮かべた。

「へッ、ビビリが。テメエ、もしかして新米マスターか？」

すっくと立ちあがってこちらを見上げる座敷童。こうしてみるとやはり小さい……。態度だけは、その背丈の何倍も大きいが。

「あ、ああ。そうだけど」

「そりゃご愁傷様。ツイてねーな、アンタ。最初のカードにアタシみてーな不良品を掴まされちまったなんてなあ」

……む。

ニヤニヤと笑いながらそう言う座敷童に、不意に俺は負けん気が湧いてくるのを感じた。さっきから俺を呑み込みまくっているこの小さな少女に、一言くらいはやり返してやろうという気持ちが出てきたのだ。

「いや、そうでもない」

「ああん？」

「お前は確かに使い辛そうだけど、それがなけりゃ俺みたいな駆け出しがお前みたいいなレアカードを手に入れることなんてできなかつたわけだからな。むしろ滅茶苦茶ラッキーだったと思ってるよ。さすが座敷童」

俺の半ば本心からの言葉に、一瞬だけ座敷童は動揺した様に見えるた。

が、すぐにイヤらしい笑みを浮かべると。

「ハッ、その強がりがいままで続くか見ものだな」

そう言っただけ姿を消してしまった。

……ふう。なんとか、やり返せたか？ やっぱ、モンスター相手とは言え小さな女の子にやり込められるのもな。ちょっとした男の意地だ。

さて次はグーラーだな。

「出でよ、グーラー！」

その言葉と同時に、グーラーが姿を現す。

二十歳前後の妙齢の女性。顔だち自体はキツ目の美人で、肉付きが良く均整の取れたナイスボディ。身に着けた服も露出度が高いレザーのローライズパンツと胸当てと言った官能的なもので、グーラーになる前はそう言う職業の方だったんではないだろうかと背景を想像させるような女性だった。

特徴だけを上げていくなら百点満点の美人。だが、どうしようもなく死体だった。

髪は痛んでボサボサ。肌も完全に黒紫に染まっており、屍斑がところどころに浮いている。眼は白目が存在しないほど赤く充血していて、元々の虹彩が赤色だったため完全に赤一色となっていた。

幸いだったのがアンデッド系最大の欠点と言われる臭いが全くないことで、後天技能のフェロモンのおかげかむしろちょっと甘い香りすらするくらいだった。

結論。グーラーでなければ……。グーラーでなければ……。ッ！！

……だが希望はある。

モンスターにはランクアップというシステムがある。

それは下位のカードと同性・同系統の上位のカードを合成することで下位カードの特徴と記憶を引き継がせることができるというシステムだ。

運とカードの使い込み具合にもよるが、上手くいけば技能を上位カードに引き継がせることもできるらしい。

グーラーの上位カードはヴァンパイア。つまりもし女ヴァンパイアのカードを奇跡的に手に入れることが出来たらその時はこのグーラーちゃんの外見と魅惑のスキルを引き継いだ最強の女の子カードが生まれるかもしれないということだ。

いつか、いつかお前をランクアップさせてやるからな！

俺は涎を垂らしながら茫洋と宙を見つめるグーラーを見ながらそう決意した。

さて、何はともあれこれで準備はOKだ。これから、俺の冒険者としての本格的な活動が始まる。

「よし！ じゃあ行くぞ」

そう言っつて意気揚々と歩き出した俺だったが、十数メートルほど行ったところで子供の笑い声が聞こえてきた。座敷童だ。

「キャハハハッ！ おい、良いのか？ アイツを置き去りにしてもよ」

虚空からの声に後ろを振り向くと、そこには最初の位置に突っ立ったままのグーラーの姿があった。

「……グーラー、ついてこい！」

そう命令してようやく歩き出すグーラー。

おい、マジかよ。ここまで命令しないと動いてくれないのか？

早速暗雲立ち込め始めた迷宮攻略にがっくりと項垂れる俺をよそに、心底おかしいといった座敷童の笑い声が迷宮に響き渡るのだった。

第四話 奥さん、オタクの座敷童完全にグレてますよ（後書き）

【Tips】ダンジョンマート

迷宮の登場と共に一気にシェアを伸ばしたコンビニ界の雄。今では、ダンジョンマートを見れば一目でそこに迷宮があるとわかるほどになっている。創業者の十七夜社長はTV出演も多く、お祭り社長として有名。社長業よりTVの仕事の方が忙しいのではないかと言われるくらい、半タレント化している。過激な発言から、良くTwitterが炎上している。最初の炎上は、超美人のフランス人の奥さんとハーフの娘がいると発覚した時。

第五話 デュフフ、やはりロリの気を引くにはお菓子で釣るのが一番でゴザルな！

森の中を警戒しながら歩いていく。

道の幅は大体二メートルほどだろうか。足首くらいまでの雑草が生い茂る道と、とても人間が入っていきそうにない木々の壁による道が、この迷宮における通路のようだった。

実際には無理をすればこの木々の中に突入することは可能なのだろうが、自衛隊の方々による実験の結果、迷宮の壁を無理に進んでも何ら得るものがないことは証明されている。

最悪、このような森林型フィールドでは遭難の可能性すらあるため冒険者の立ち入りは厳禁とされていた。

しばらくの間グーラーを先頭に立たせ迷宮を進んでいた俺だったが、だんだんと不安になってきて姿の見えない座敷童へと問いかけた。

「なあ座敷童。敵がどのくらい近くにいるとかわかるか？ 今安全かな？」

「あーん？ なんでそんなことアタシが答えなきゃいけないんだよ」

虚空より返ってきたのは、そんなツレない返答だった。

「なんでって……仲間だろ？」

「仲間あ？」

座敷童が笑いながら俺の前に姿を現す。

「最初に言っておく。アタシはテメエら人間のことが大っ嫌いだ。見るだけで反吐が出る。言いなりになってる奴隷共もな」

そう言う彼女の眼には、隠しきれない憤りが宿っていた。

「アタシを戦力として見るのは諦めな。テメエのために何かをしてやる気なんて欠片もねー。言っただろ？ こんな不良品を掴まされてご愁傷様ってな」

言うだけ言って再び姿を消す座敷童。そんな彼女に、俺は頭を掻きむしった。

……こりゃ、まいった。前の所有者はいつたい何をやらかしたんだ？

カードはマスターを変える際に初期化され、記憶も消える。しかし、カードにこびり付いた感情までは消えない。座敷童の視線は、人間に対する憎しみすら感じるモノだった。

こりゃいつそ彼女は一度下げてクーシーを出すべきだろうか。そんな思いが頭を過る。

……いやでも最低限の防衛はカードのルールとしてやってくれるわけだし、その際はＣランクの座敷童の方が安心だよなあ。

それになにより、ここでコイツを下げたらなんか負けた感じがするしな……。

「それにしても……暑いな」

俺は額の汗を拭いながら小さく呟いた。まだ入って数分なのに汗がだらだら出てくる。

たまらず、バッグからスポーツドリンクを取り出しゴクゴクと飲

み干した。仄かな甘みとのを潤す感覚がなんともたまらない。

ついでにチョコバーを取り出すと、ガブリと一口。昼から何も食っていなかった身体に、甘味が染み渡る。

地味に頭も使っていたので糖分が脳に心地良かった。

「…………お、おい」

そんな風にちょっと遅い三時のおやつを楽しんでいると、気づけば姿を消したはずの座敷童が傍らで俺を見上げていた。…………んん？

「そ、それ…………なんだ？」

「なんだって…………チョコバーだけど」

「あ、甘い…………のか？」

「え、そりゃチョコだし」

「ふ、ふうくん…………そ、そう」

…………もしかしてコイツ。

「食いたいのか？」

「……！」

座敷童は驚かされた子猫のようにぴょんと飛び跳ねた。丸くなつた瞳がなんだかちよつとだけ可愛い。

「は、はあ！？　んなわけねーし！　ガキじゃねえんだから！」

いやガキだろ。座敷『わらし』なんだから。

あまりにも分かり易すぎるこの少女にちよつとした面白さを感じながら俺は新しいチョコバーを取り出すと差し出した。

「なんなら食うか？」
「ッ!？」

差し出されたチョコバーを凝視する座敷童。食いついてる、食いついてる。

「こ、こんなもんにアタシが釣られると思ってんのか？ 残念だったな、アタシはこれくらいじゃ働いたりしないぜ」
「いやそんなつもりはなかったんだが……そうだな、たしかに働かざる者食うべからずっていうもんな」

俺はそうすつとぼけながら、チョコバーをポケットにしまった。
さあ、どうでる？

「あ、え……」

それに座敷童は目を白黒させてその場に立ちすくんでいたが、やがて悔しそうに唇を噛むと「バーカ!」と言って姿を消してしまっ

た。
……む、失敗したか。あの食いつきようなら「じゃあ一回だけ働いてやるからチョコ寄せ」的な展開になると思ったんだけどなあ。
チョコの実際の美味しさを知らなかったのも座敷童の頑なさを突破できなかった理由かもしれない。

しかし今の失敗は地味に痛いな。余計座敷童との距離が離れてしまった気がする。いや、逆か？ どんな形であれ、喧嘩が出来たのは大きい。コミュニケーションが取れたわけだからな。好物も知ることが出来たし。

そんなことを考えていたからだろうか。
死角から飛び出してきたその影に、俺は気づくことができなかった。

「ッ!? グーラー!」

襲撃者の正体は、灰色の狼だった。大型の土佐犬ほどの体格だろうが、猛獣と評してよい迫力だ。

大きく獰猛な狼が、唸り声を上げてグーラーに噛みついていて光景は、想像以上に俺に恐怖を与えた。ひやり、と全身の皮膚が凍る。押し倒され、首筋に噛みつかれているグーラーはろくに抵抗らしい抵抗もできていない。いや、違う。まったくの無抵抗だ。なんで反撃しねえんだ!?

突然の襲撃者とグーラーの無抵抗に俺が混乱していたその時、どこからともなく飛んできた光の弾が狼を穿った。

ギャンツ、と悲鳴を上げて数メートルほど地面を転がっていく狼。一瞬遅れて、千切れ飛んだ右後足が地面にドサリと落ちた。

な、なんだ? なにが、どうなっている?

その疑問に対する答えは、すぐそばにあった。

「ボサツとしてんなよ。早くその木偶の坊を動かせ」

いつの間にか傍らに立っていた少女が、つまらなそうに言う。

それで、俺もようやく理解した。今狼を攻撃したのは座敷童で、グーラーが無抵抗だったのは俺が何の命令もしていなかったからか!

「グーラー! 起き上がれるならすぐ狼に反撃しろ! 使えるスキルは全部使え!」

すぐさま命令を下す。すると、グーラーはまるでスイッチが入ったかのようにカツと目を見開いた。それまでの動きが嘘だったかのように俊敏に起き上がると狼へと襲い掛かる。

後足を失ったことで素早い動きが出来ない狼を地面に叩き付ける

ように押さえつけると、口が裂けるのではないかというくらいに大きく開き、食らい付いた。

狼の哀れみを誘う悲鳴が周囲に響く中、グーラーは一心不乱に狼を貪っている。

そのホラー映画染みた光景に呆然と立ち尽くしていた俺だったが、いつのまにか座敷童が不機嫌そうな顔で傍に立っているのに気付いた。

「あ……さっきは助かったよ、ありがとな」

しどろもどろになりながらお礼を言ったが、返事は特になかった。む、無視かよ。ただ最低限の勤めは果たしただけか？ いや、なにか言いたげだ。なんだろう……あ、もしかして。

「そ、そうだ。働き者にはお礼をしなくちゃな、うん。ホラ、これやるよ」

咄嗟の閃きに従ってチョコバーを差し出すと、座敷童はパツと顔を輝かせ奪い取るようにチョコバーをひったくった。

「へッ、別にこれが欲しかったわけじゃないからな。あんまりにもドン臭かったから思わず手を出しちまったただけだ！ 勘違いすんなよ！」

「あ、ああ。わかってる。ちゃんと理解してるよ」

そんなにお菓子が食べたかったのか……。なんかもうわかりやすいツンデレキャラみたいになってるじゃねえか。

だがまあ、わかりにくいよりずっと良い。次からお菓子を用意しておかないとな。

と、それよりグーラーの方は大丈夫か？

心配になり彼女の方へ視線を向けると、すでに狼の姿はなく口元を赤く染めたグーラーの姿だけがあった。

……うん、無事勝ったようだな。

近寄って確かめてみると、狼に噛みつかれたはずの首筋にはもうなんの傷跡もない。グーラーのスキル、屍喰いによる再生のおかげだろう。

なににせよ、無事でよかった。

「グーラー、次からは敵に襲われたら速やかに反撃してくれ。スキルも使えるものはなんでも使っていていい。わかつたら頷いてくれ」

コクリと頷くグーラーに、俺は頼んだぞと彼女の肩を軽く叩いた。

さて、お次は戦利品だ。モンスターとの戦闘に勝利した時、稀にアイテムやカードを落とすことがあるらしいが……。

「お！ カードじゃん！」

俺は地面に落ちていた狼のイラストが描かれたカードを拾い上げた。

Fランクのワイルドウルフのカードだ。戦闘力は……たったの15か。

確かDランクまでの買取価格は定価の10%程度だったはず。Fランクの定価は一万から十万程度。ワイルドウルフなんて雑魚中の雑魚も良いところだし千円くらいか。

迷宮に入って十数分で千円と考えれば時給的には美味しく感じるが、毎回落とすわけじゃないからな。たしかFランクカードのドロップ率は、十回に一枚でも落ちればよい方と聞いたことがある。

一応命の危険があることを考えると、低ランクの内はあんまり旨味ないな、これ……。これがCランク以上になると一気に高収入に

なるらしいのだが。

どんな世界でも駆け出しは苦しいってことか……。

一瞬ため息を吐きそうになったが、グツと堪える。

考えてみりゃあ、初戦闘でカードが手に入ったってのは十分上出来だ。というか座敷童がいなけりゃグーラーを失ってた可能性すらあることを考えればむしろラッキーと言えるだろう。

さすが座敷童、曲がりなりにもCランクカードなだけはある。

そう思って彼女を見ると、シヨンボリした様子で空になったチョコバーの袋を見ていた。

「美味しかったか？」

こうしてみると本当にただの子供だな。そう思いながら問いかけると、座敷童はハツと我に返ったように俺を見た。

「……べ、べつに？ 人間の食いモンにしてはマシってところ」

「また助けてくれたら他のお菓子だってやるよ」

「ま、マジか！？ あ、いや……く、くれるってんならもらってやつても、いいぜ？ 必ず助けるとは限らねーけどなッ！」

「ああ、それでいいよ。たまにお菓子が食べたい気分になったら助けてくれる感じさ」

「まあ、それなら……考えとく」

最初の時に比べたら随分と素直になったその様子に、俺は思わず笑みを浮かべた。

よしよし、なんだ、こうしてみりゃちょっと素直じゃないだけで可愛い子じゃんか。

これは思ったより仲良くできそうだな。

さて、今日はこれくらいにしてもう帰るか。

本当は今日、最低十回以上は戦って戦闘の感覚を掴み、上手くい

けば第一層を攻略するつもりで来ていた。

甘かった。俺が思っていた以上に迷宮での移動と戦闘のプレッシャーは大きく精神を削るものだった。

まだ十数分しかたっていないというのに、精神的にはヘトヘトだ。グーラーに与える命令もいろいろ考えておく必要があるし、座敷童のためのお菓子も買っておかななくては。

俺は今日の出来事を頭で反芻しつつ帰路についたのだった。

第五話 デュフフ、やはりロリの気を引くにはお菓子で釣るのが一番でゴザルな！（後書き）

【Tips】 迷宮内部

迷宮は、異空間となっており森林型、山道型、海辺型、坑道型、迷路型、墓地型とさまざまなタイプが存在する。また、季節・天気・時間帯が変化せず、持ち込んだ食べ物なども腐らないことが判明している。熟練の冒険者たちは、皆実年齢よりも若々しいことから、迷宮内部は時の流れが止まっているという説が有力。しかし実際に時が止まっているのなら動くことも不可能はずなため、謎は多い。リア充冒険者たちは、この特性を利用して夏だろうが冬だろうがスキーにサーフィンと迷宮で季節のスポーツを一年中楽しんでいる。そしてたまに油断して死ぬ。

第六話 一枚くらいは使いやすいのいないのかよ

——キンコンカンコーン。

「……はあ」

授業の終わりを告げるチャイムの音に、俺は無意識にため息を吐いていた。

ついに、この時間が来ちゃったか……。

別に、休み時間が嫌いなわけじゃない。そんな学生は一人もいないだろう。

嫌なのは、次の授業だ。

女子たちが教室を出ていくのを確認した俺は憂鬱な表情で、体操服へと着替えだした。

いつからだろう、この体育の時間が嫌いになってしまったのは。

言っておくが、運動は苦手じゃない。得意でもないが。

俺が嫌いなのは、体育の時間に高確率である「はい、二人組作って」という奴だった。

「……マロ、わかってるよな？」

「恨みっこなしだぜ？」

着替え終わった俺のところへ東西コンビがやってきた。

その表情は二人とも硬い。

「ああ、わかってる」

俺たちは拳を差し出すと、同時に言った。

『最初グー、じゃんけんポン!』

俺、グー。東野、パー。西田、パー。

「フアアアアツツク!」

俺は吠えた。

「へへっ、んじゃ今回一人なのはマロってことで」

「悪いな。頑張ってパートナーを探してくれ」

ホツとしたように笑う東西コンビを俺は恨みの籠った眼で見た。

これだ、これが体育の時間になったわけだった。

二人組を作るといふ構造上、いつも三人でつるんでいる俺たちは、一人あぶれることになる。

あぶれた奴は、パートナーを探すためにクラス中をうろつくことになるのだが、その時の心細さとみじめさと言ったら……。

おまけに相手も大抵友達の数少ない奴だから、どうしても授業中負のオーラが漂うことになる。

糞、こんなことになったのも南山のせいだ。

アイツがいた頃は四人組だったから2-2で分けやすかったのに、奴が突然抜けた所為で三人組になってしまった。

こういうのを避けるために、四人組でつるみ始めたというのに。

学校生活において四人という数字はいろいろとイベント上都合が良いのだ。

授業ごとのペア決め、修学旅行や体験学習の班決め、麻雀、大富豪、etc……。

それが、奴の裏切りによって崩れてしまった。

おのれ、南山……。

しかも奴はちゃっかり小野とコンビを組んでやがるのがさらにムカつく。

そうしてコンビを探し始めた俺だったが、今日は間が悪かったのかなかなか見つからなかった。

こういう時大抵あぶれている奴と言うのは決まっているのだが、そういう奴らがすでに埋まっていたのだ。

気づけば俺はグラウンドに一人でポツリと立っていた。
オロオロと周囲を見渡す。

ど、どういうことだ？　うちのクラスの男子は偶数のはず。余るなんてありえない。もしかして、今日は一人休んでいるとか？

クラスの奴らが、俺を馬鹿にした眼で見ている……気がする。アイツ、組む奴いねえの？　もしかして友達いないんじゃないかね？　ポツチとかだせえ。そんな幻聴が聞こえる……。

ち、違うんだ。友達はちゃんといるんだ。今回はたまたまじゃなければ負けただけで……。

そんな風になんか心の中で言い訳をしていると、グラウンドに駆け込んでくる影があった。

「あぶね〜、あぶね〜。トイレ行ってたら遅刻するところだったぜ。おい、誰か余ってるやついねえの？　俺が組んでやるよ」

到着するなりそう大きな態度で言ったのは、クラスメイトの金成だった。

その容姿は、一言で言えばチャラ男だろうか。ロン毛の金髪をがっちり整髪料で固め、右耳にだけ二個も三個もピアスをつけている。顔立ちが普通で、面長の顔と酷薄そうな眼つきが蛇っぽい。

その姿を見た俺は盛大に顔を顰めた。

うわ、最悪……ナリキンかよ！

金成は、いつもリア充グループに纏わりついては授業中や放課後

に積極的に絡みに行くも、リア充グループからは仲間と見なされていない……俗に言う一軍半と呼ばれる奴らの一人だった。

ファツションや流行には気を遣っているが、ルックスに優れているわけでも一芸があるわけでもない。その癖、リア充グループ以外のクラスメイトを見下すような言動があることから若干皆から煙たがられている、そんな奴らの一人だ。

金成は一軍半グループのリーダー格で、名前をもじってナリキンと陰で呼ばれていた。

ナリキンは余っているのが俺なことに気づくと露骨にがっかりした顔をした。

「なんだ、お前かよ。ツイてね。まあ出遅れたししょうがねえか……ハアア」

いきなりの言いぐさに、ツイてないのは俺の方だと俺は顔を引き攣らせた。

そんな俺を見て、東西コンビをはじめとしたクラスの大体は同情的な顔をしていたが、一部はニヤニヤと見下した視線を向けてきた。それは、ナリキンたちのグループと……南山だった。

アイツは、自分が抜けた後の元友達がみじめな思いをしているのを見て愉悦を感じているようだった。

……糞、誰のせいでこんな思いをしていると思ってるんだ！

俺が後ろ手に拳を握り締めていると。

「よし、みんな組み終わったな！今日はダブルスのテニスだ。勝ち抜き戦にするからこっちにきてくじを引いてくれ」

「……足引っ張んなよ」

体育教師の指示を聞いたナリキンが、ぼそりと呟いて俺の肩を強めにド突いてきた。

こ、この野郎。お前だつてそんなに運動神経良くないだろうが！
つか、感じ悪すぎんだろ！

頭の中にいくつもの罵詈雑言が浮かんできたが……。

「あんだよ？」

「……なんにも？」

俺は、結局一言も言い返すことが出来なかった。
そんな自分が、一番苛立たしかった……。

その日の放課後。

東西コンビに気分転換のカラオケに誘われた俺だったが、それを
断り迷宮へとやってきていた。

ナリキンとの体育の授業は、最悪の時間としか言いようのないも
のだったが、そんなことは迷宮探索を休む理由にはならない。

むしろ、このクソみたいな現状を変えるには冒険者として成功す
るしかないとやる気が湧いてきた。

ナリキンが俺にあんな態度を取ってよいと思っているのは、相手
がカーストの下にいると思っっているからだ。奴は、下には強いが上
には逆らうことができない典型的なタイプなのだから。

現に、とても喧嘩の強そうに見えない小野はもちろん、成り上が
りでカーストトップになった南山にすらナリキンたちは媚び諂^{へつ}つて
いる。

それはつまり俺がカーストトップになった時も同じだということ
で。

そう考えるとやる気がメラメラと湧いてきた。

迷宮へと足を踏み入れた俺は、さっそくカードを取り出した。

今日のメンバーは、グーラーと昨日は呼ばなかったクーシーだ。

「出てこい、クーシー！」

俺の呼びかけと共に現れたのは、牛ほどの大きさもある一頭の犬だった。

エメラルドグリーンの綺麗な毛並みと渦巻く大きな尻尾を持つ、なんとも神秘的な犬だ。

大きさ的には犬と言うよりも太古の狼といった感じだが、愛嬌のある顔つきが狼よりも犬のイメージに近かった。

「は、はじめまして、ご主人さま」

クーシーはオドオドと耳を伏せながら俺へと挨拶をした。

なんだか頼りない印象だが、挨拶をする分他のカードたちより好印象だ。

「ああ、よろしくな。クーシー」

ポンポンと腕を叩き、俺はグーラーを呼び出した。

現れたグーラーは、ぼんやりと宙を見つめている。

そんな彼女を見ながら、俺は懐からメモを取り出した。

「グーラー、昨日俺がした命令は覚えてるか？」

コクリと頷く。ん、どうやら記憶力自体は悪くない、と。だが念のため確認しておこう。

「じゃあ、ちょっと命令の内容を言ってみてくれ」

「……マスター、の、後を、ついていく。起き、上がれる、なら、起き、上がる。敵に、反撃、する。使える、スキル、は全部、使う」
「お、よしよし。ちゃんと覚えてるな。それじゃあそれらの命令は一度全部リセットだ。わかったら頷いてくれ」

コクリとグーラーが頷くのを確認して、俺はメモの内容を読み上げ始めた。

「それじゃあ新しい命令を言う。理解したらその度に頷くこと。命令その一、迷宮内では基本的には俺についてくること。命令その二、迷宮内では常にフェロモンのスキルを使って匂いを消すこと。命令その三、迷宮内では常に敵の気配を探り続けること。命令その四……」

俺が見ているメモは、俺が授業中に考えたグーラーへの命令リストだ。戦闘の際、命令が無くては全く動けないのでは使えないにも程がある。敵に襲われても自分では反撃すらしないのでは、俺の命の危険すらあるほどだ。不測の事態にいつでも俺が適切な対応が出来るとも限らない。

そのため考えたのが、予め行動パターンを定めておけばある程度のパターンに対応できるのではないかとというもの。

幸いにも、グーラーに知性はないがある程度の記憶力はある様なのでありとあらゆるパターンに対する対応をあらかじめ命令として仕込んでおけば、理論上は他のモンスター同様に自立的に動けるはずだった。

例えば『常に敵の気配を探り続ける』『敵が一体の時は奇襲をかける』『奇襲の時はスキルのフェロモンで気配を消せ』などの複数

の命令を組み込んでおくことで、俺がなにも言わずとも敵を見つけた際は奇襲をかけてくれるようになるだろう……と期待したのだ。

怖いのは命令と命令が矛盾を起こした場合で、このメモは俺が自分で命令を忘れないようにするためと矛盾を起こしていないか常にチェックするためのものだった。

とりあえずの命令をし終え、グーラーにその内容を復唱させると俺はメモをしまった。

「よし、それじゃあ早速探索をするぞ。……クーシーには索敵をお願いしたいんだが、できるか？」

「は、はい。ボクは鼻には自信があるので……」

そう、これっぽっちも自信なさげに言うクーシー。……本当に大丈夫か？

「……頼んだぞ」

俺は若干不安になりつつ道を歩き出した。

クンクンと鼻を鳴らし歩くクーシーの後をついていくと、グーラーは無言で俺の後を追ってきた。

……うん、ついてこい命令は大丈夫と。

俺はメモの命令その一に○をつけた。

しばし無言で迷宮を進む。

じりじりと肌を焼く太陽の光。時折吹く心地よい風。木々のざわめき。小鳥の鳴き声。

のどかな雰囲気、ここが危険な迷宮であることを忘れかけた頃。

「ご、ご主人さま、て、敵の匂いです。こ、こちらへと向かっています」

クーシーが声を震わせながら言った。

「むっ、そ、そうか。よし、戦うぞ」

グーラーは新しい命令を仕込んだばかり、クーシーは臆病のスキルで戦闘力半減と心配はあるが、半減してなおクーシーには圧倒的戦闘力の差がある。

Fランクモンスターの初期戦闘力は、50以下。一階層であることならば、10から20と言ったところだろう。対して、クーシーは150。半減しても余裕の差だ。

そもそも、迷宮のモンスターは同ランクのカードに比べて弱いと言われている。ランクが上であればまず間違いなく勝てるはずなのだ。それが、冒険者登録にDランクカードの所持を絶対条件としている理由なのだから。

「き、来ます！」

まず感じたのは、プンと漂う卵の腐ったような臭いだった。吐き気を催すようなそれに思わず鼻をつまむと、匂いの主が茂みから姿を現した。

それは、狼に乗った緑色の子鬼だった。黒ずんだ緑色の肌、皺くちゃの顔と、ガリガリに痩せた体に、ポツコリと出た腹部。どこか地獄の餓鬼を思わせる容貌……ゴブリンだ。それが、二組。

歯を剥いてこちらを威嚇する敵の姿を見たグーラーが、素早く敵へと襲い掛かった。

そのまま一撃を叩き込もうとしたところで、なぜか動きを止める。は？ なんで止まった？

なぜか敵を前にフリーズしたグーラーに、敵は容赦なく攻撃する。狼が足へと噛みつき、ゴブリンがこん棒で殴りつける。もう一組も加わって、グーラーはすぐに袋叩きとなってしまった。

そこに至ってようやく、グーラーは反撃に移る。噛みついた狼を殴りつけ、その肉を噛み千切り、棒で殴りつけてくるゴブリンを殴り返す。自分を攻撃したモンスターへと、順番に反撃していった。

その非効率な姿を見て、ようやく気付いた。グーラーは機械的に自分を攻撃したものに反撃を行っているのだと。最初に攻撃しようとした時動きが止まったのは、敵が二重に重なっており、どちらに攻撃すればよいのかわからなくなったため……。

チツ！ 俺の命令の仕方が甘かったせいか。

俺は小さく舌打ちすると、すぐに指示を飛ばした。

「クーシー！ 何をしてる！ グーラーを助ける！」

「う、あ……ぼ、ボク、ボク……」

ところがクーシーは、襲われるグーラーを見てもオロオロとするばかりでまったく動かない。

なにしてるんだ、コイツは……！ たまらず怒鳴りつける。

「クーシー！」

「ヒイツ……す、すいません、すいません！」

俺の怒声に、クーシーは頭と尻尾を抱えて蹲ってしまった。思わず呆気にとられる。

……ま、マジかよ。臆病のスキルってここまで酷かったのか。戦闘力が半減するだけで、一応は戦えると思っていたのに……。頭を振って切り替える。仕方ない。今は、クーシーは諦める！

「クーシー、戻れ！ 出てこい、座敷童！」

「あん？ はあ、出番かよ」

クーシーの代わりに座敷童を呼び出すと、彼女は億劫そうな顔でオレを見てため息を吐いた。

「座敷童、グーラーを助けてくれ！」

「嫌だね」

「……はあ？」

愕然と、座敷童を見る。そんな俺の様子を見て、彼女はニヤニヤと楽しそうに嗤っていた。

「なんでお前の命令を聞かなきゃいけないんだよ。言っただろうが、アタシを戦力としてみるのは諦めなつてな」

「う、く……。そ、そうだ。新しい菓子があるぜ？ どうだ、欲しいだろ？」

俺は、バッグから来る途中に買ってきた菓子を見せた。上のコンビニで売っていた、期間限定のパウンドケーキだ。

「む……」

それを見て一瞬だけ悩んだ座敷童だったが。

「いや、やっぱり駄目だね。そんな気分じゃない」

プイッとそっぽを向いてしまう。

「クソッ！」

ここにきて、座敷童の反抗期が悪い方向に出てしまった。
お菓子で釣るのも、こういった切羽詰まった状況ではむしろ逆効
果か。

.....仕方ない。こうなったら、覚悟を決め
るしかないか。

俺は、バツグから警棒を取り出した。

万が一の時のために用意したこれを、さっそく使う羽目になると
はな.....！

「お、おい.....?」

「うおおおおお！」

「んな、マジかよ！」

座敷童の困惑の声を背に、俺はゴブリン集団へと突撃した。

まさか俺が突っ込んでくるとは思っていなかったのか、ゴブリン
たちがギョツと眼を見開き、わずかに硬直する。その隙に、俺は警
棒でゴブリンの頭を殴りつけた。

「くっ.....!」

か、硬い！ まるでゴムタイヤを殴りつけたような感覚。殴った
はずのこちらの手が痺れるようだ。

「グーラー！ まずは狼の方を一体ずつ片付けろ！」

「イエス、マスター」

グーラーが、自らに噛みつく狼へと喰らいつくのをしり目に、俺
はゴブリンと対峙した。

頭を殴りつけたことで緑の子鬼たちは完全に俺を敵と見なしており、黄ばんだ歯をむき出しにして唸っている。その本物の殺気に、俺は恐怖を覚えた。

無意識に足が下がり、血液が急速に冷えていくのを感じる。

落ち着け、大丈夫だ。こんな小学生並みのチビに、高校生の俺が負けるわけがない。リーチでも俺が勝ってる。カードのバリアもある。落ち着け、俺。

ゴブリンが同時に殴りかかってくる。

一体目の攻撃はなんとか躲したが、もう一体の攻撃は躲せない。警棒で受け止める。それが、失敗だった。

ガツン、という衝撃が走り、手が痺れ、警棒を取り落としてしまった。

なんて馬鹿力だ！ 小さくてもモンスターということなのか。凄まじい膂力だった。

カードのバリア機能により怪我はないが、衝撃は確実に俺の手を痺れさせている。

それが、俺に死のイメージを明確に喚起させた。

「ヒッ！」

こん棒の一撃を転がるようにして躲す。頭上スレスレ。金玉が縮み上がった。

固めた覚悟が一瞬で砕ける。

も、もう駄目だ、逃げよう。そもそも、生身で戦うもんじゃねえって、これ！

そう思った時、グラーの姿が見えた。ようやく一体目を食い殺したところで、まだもう一体の狼が残っている。ここで引けば、また袋叩きだ。

俺はグツと唇を噛みしめると、落とした警棒へと飛びついた。

あと十秒。あと十秒だけ時間稼ぎをしてやる……！

半泣きになりながら警棒を構える俺に、ゴブリンたちが野猿のように飛びかかってきた瞬間。

「グッ!?」「ギャツ!?」

どこからともなく飛来した光弾が、ゴブリンたちの頭を打ち抜いた。

「は、え?」

脳漿をぶちまけ絶命する小鬼たちに、俺は混乱したが、すぐに何が起ったのか気づいた。

そうか、座敷童が動いたのか。

グーラーは……完全に狼を拘束して貪り喰らっている。直にあちらも倒せるだろう。

「はあ~~~~」

デカイため息をついてへたり込む。

……疲れた。マジでビビった。これが、迷宮、これがモンスター。正直、甘く見てた。もっと、楽しんで金を稼げる仕事だと思ってた。RPGをやるみたいガンガン迷宮を攻略して、どんどん金を稼いで、女の子たちにはモテモテな夢のような職業だ……。そんな仕事があるわけないのに……。

「ふ、ふへへ……」

しかし、フランク迷宮の、第一階層の、誰もが知る雑魚カード相手に死闘かよ。

思わず、自嘲の笑みが零れる。我ながら笑えるぜ。

こんなんで、冒険者やってけるのか、俺？

「おい」

見上げると、そこにいたのは座敷童だった。なぜか、酷く険しい顔をしている。

えっと、なんだ？ 頭が働かない。……ああ、そうか、お礼か。

「ああ、助かったよ。お菓子か、ちょっと待ってる。今出す——」
「そうじゃねえ！」

懐をゴソゴソと漁ろうとする俺を、鋭い声が貫いた。

ギョツと眼を見開く。な、なんだ、コイツ。なんでこんなキレてんだ？

むしろキレイたいのは、ギリギリまで助けてもらえなかった俺の方なんですけど!？

理不尽なものを感じる俺に、座敷童が問いかける。

「なんで戦った？」

「なんでって……お前が戦ってくれなかったから」
「違う！」

いや、違っつて言われても……。

「アタシが言いたいののは、なぜグーラーのために自分の身を危険に晒したかってことだ。カードなんて消耗品だろうが。そんなものためになせ、命を懸ける？」

コイツ……何が言いたいのかさっぱりだぜ。

だが、座敷童の顔は真剣そのものだった。

仕方がないので、真面目に答えてやることにする。

「消耗品、消耗品とは言うけどな。俺にとってグーラーでも大事な財産なんだよ。それをこんな序盤も良いところで喪えるか。次に、別に命を晒したわけじゃない。カードのバリアもあつたしな。俺がやりたかったのは、グーラーが持ち直すまでの時間稼ぎだよ」

「……………」

俺の説明を聞いた座敷童は、じつと何かを考え込んでいるようだった。

「もういいか？ それじゃあそろそろ帰るぞ。今日はもう、疲れたぜ」

今日も一回戦ただけで終わっちまった。なんつうスローペースだ。だが、グーラーの命令を調整したり、クーシーの運用を考えないことには迷宮なんてとてもしゃないが攻略できん。

俺が重い身体で立ち上がると。

「待てよ」

「……なんだよ、まだあんのか？」

俺がウンザリと振り返ると、座敷童がニヤリと笑った。

「報酬のお菓子を貰ってないぜ」

「はあああああああ~~~~~……!!」

俺はその日最大のため息を吐いたのだった。

第六話 一枚くらいは使いやすいのいないのかよ（後書き）

【Tips】ステータス

カードにはそのモンスターのステータスが表記されているが、その詳細については判明していない。戦闘力についても、力・速さ・器用さ・魔力・頑丈などのさらに細かい能力に分けられているというのが有力な見方である。同様にスキルについても名前ぐらいしかわかっておらず、実際に使わせてみてその効果から考察するしかない。ギルドにはそう言ったデータが全冒険者から集められており、専用のアプリから情報を発信している。主人公もカードのスキルをそういったアプリなどから調べている。そのため、ハズレと思われるているスキルにまだ見ぬ力が眠っている可能性は大いにある。

それにしても感想が欲しい……。

第七話 エロゲみたいな美人の保健室の先生って実在すんの？

「ふああ、あ~~~~」

昼休み、教室にて。俺はいつものメンバーと飯を食いながら込み上げる眠気と戦っていた。

「……なんだよ、マロ。随分眠そうだな」

俺の大きな欠伸を見た東野が言う。

「最近いつも眠そうだよな。そんなバイト忙しいん？」

「あ~~~~」

少しだけ心配そうな西田の言葉に、何と返そうか少しだけ迷う。スーパールのバイトは、冒険者になる少し前に辞めている。あのスーパーには、シフトがたくさん入れるという以外に何の魅力もなかったからだ。

だが、それを正直に言ったらどうして眠いんだよ、という話になる。

「最近新人の指導をすることになってさ。しかも一気に三人。それでちよつといつもと違う疲れ方してるかも」

「なるほど、そりゃ大変そうだな。俺には無理だわ」

と東野が顔を顰める。そこへ西田がいやらしい笑みを浮かべて言った。

「でも可愛い女の子かもよ？」

「お、確かに。そこらへんどうなのよ？」

「む」

確かに、三人の新人さんは可愛い女の子ではあった。ただし一人は生意気口リ、一人は死体美人、最後の一人に至っては人間の形すらしていなかったが……。

「確かに女の子ではあるな」

「おお！ 顔は？ 可愛い？」

グツと身を乗り出す絶賛彼女募集中の東野。なお、募集はしても勧誘はしていない模様。

「外見は……まあ可愛いよ。一人は美人系でもう二人は可愛い系かな」

嘘はついていない。

俺の言葉に二人は眼を輝かせた。

「なにそれ、最高じゃん！」

「可愛い後輩バイトを指導するとか、エロゲかよ」

なんでもエロゲやギャルゲーに繋げるのはやめようね、西田くん。

「そんな良いもんじゃないんだってマジで。一応仕事だぜ？ 仕事」

俺はうまく冒険者の仕事をばかして二人に愚痴った。

一人は俺のことを舐めていてまるで言うことを聞いてくれず、一人は言ったことはちゃんと覚えてくれるのだが自分で考える力はゼロ、最後の一人は真面目で素直なのだがプレッシャーに弱くチャレンジ精神に欠ける……。

そんな俺の説明に、二人はちょっとだけ同情したような顔をした。

「なかなか癖のある人材みたいだな」

「欲しいもんいろいろあるからバイトしてみようかなと思う時もあるけど、マロの話聞くと大変そうで二の足を踏むんだよなあ」

腕を組みながら悩む西田に、俺は一応フォローを入れることにした。

「いやあ、うちのところは普通のところより大変だから参考にならないと思うぞ？ 一週間のほとんど入ってるし、それだけ入れるってことは普通に人が足りてないってことだしな。週二日か三日で入るなら全然大丈夫だと思うぜ」

「うへ、そんな入ってるのか。そりゃ最近付き合い悪いわけだ」

「そんなに稼いでなんか欲しいもんあんの？ バイクとか？」

「あ……」

東野の何気ない質問に、俺は少し言葉に詰まった。

「まあいろいろだな。バイクの免許といい感じのバイクも確かに欲しい」

バイクがあれば冒険者としての活動範囲も広がるしな。

「なるほどねえ。バイクちょっと俺も欲しいな。うちの高校、バイ

クで登校できるし」

「その辺うちの高校緩いよな。駅からちょっと離れてるからだろうけど。俺もコミケに向けてちょっと短期バイトでもやってみるかな」

無事話題を流せたことに内心胸をなで下ろしていると、クラリと眩暈が俺を襲った。

「やべえ、眠すぎて眩暈するわ。ちょっと保健室で寝る。悪いけど先生に言つといて」

「大丈夫かよ、気をつけてな」

二人に手を振り保健室へと向かう。

わが校の保健室の先生は、妙齢の色っぽいお姉さん……などでは当然ない。三十年ほど前はもしかしたら美人だったのかもしれないおばちゃんだ。

……ラノベやギャルゲーのような美人でエロい保健室の先生なんて実在するのだろうか。いるのならばぜひ教えて欲しい。

「すみません、ちょっと眩暈がするんでベッド貸してもらっていいですか？」

保健室に入った俺は真つ先にそう言ったが返答はなかった。部屋を見渡すと、誰もいない。

どうしよう、勝手に寝てもいいんかな？
そう迷っていると。

「――先生、今いないよ、勝手に休んでいいんじゃない？」

不意に奥のベッドのカーテンがシャツと開かれ、一人の女生徒が顔を出した。

「し、四之宮さん」

そこに居たのはリア充グループの一人で、学年一の美少女とも言われている四之宮 楓だった。

噂では読者モデルをやっているという彼女は、毎日メイクをバツチリと決め髪をアッシュゴールドに染めた完全なギャルだ。髪型はその日の気分で結構変わっているのだが、背中まで届くフワフワの髪をシュシュでお洒落に纏めていることが多い気がする。

友達も垢抜けた派手目の娘が多く、うちのクラスのギャル系女子のトップでもあった。

普段はまとめてリア充グループと言われる高橋らだが、彼らの多くは他に友人グループを持っておりそのトップを努めている。例えば高橋は野球部系グループを、牛倉さんは吹奏楽部の大人しめの女の子グループをそれぞれ持っている。

親友で幼馴染らしい四之宮さんと牛倉さんだが、女子としてのグループは完全に別なのだ。

そんなギャル系派閥のトップである四之宮さんに、俺のような陰キャ系モブは若干の苦手意識を感じていた。

理由はいろいろと上げられるが、あえて一言でいうなら「童貞だから」と言ったところか。

俺が蛇に睨まれた蛙のように身を硬直させていると、四之宮さんは微笑みを浮かべ隣のベッドを指さした。

その笑みは思いのほかあどけないもので、俺は不覚にも一瞬見惚れてしまった。

「体調悪いんでしょ、休みなよ」

「あ、うん。ありがとう」

おずおずと隣のベッドへと入り、体を横にする。

それからしばし無言の時間が流れた。俺は隣に天敵であるギャルがいることで寝付くことができず、かといって何かを話しかけるわけでもなく、悶々とした時間を過ごしていた。

「……………」

コツチコツチと時計の音だけが妙に部屋に響く。

なんか……情けねえな。ふと思った。

四之宮さんみたいな可愛い娘ともビビらずに話せるよう冒険者を目指したつてのに、今もこうして意味もなく苦手意識を持っている。

結局、俺は根っからのモブってことなのだろうか……。冒険者なんて肩書を得たってリア充になんて到底――。

「……ねえ」

「ひゃい!？」

無言でスマホを弄っていたはずの四之宮さんに急に話しかけられ、物思いにふけていた俺は思わず変な声を出してしまった。

それに彼女はプツと噴き出して。

「なにそれ、ウケる。えーと、名前たしかマロだっけ? 変わった名前だよな」

「あ、いや、それはアダ名。本名、北川歌麿だから」

アタフタとしながらなんとか答える。

「あ、そうなんだ。でも本名も変わってんね。つか、きたがわうた

まるってどっかで聞いたことあるかも」

「……一応クラスメイトだしね、一回は聞いたことあるでしょ。まあ四之宮さんが言ってるのは江戸時代の絵師の喜多川歌麿のことだと思うけど」

「あー、それだそれだ。もしかしてそれが名前の由来？」

「良く言われるけど、違う。母親が愛歌あいかで親父が昌磨まじろだから一文字ずつとって歌麿。役所に届けた後、江戸時代の絵師みたいって気づいたらしいぜ」

「アハハハ、それウケる！」

会話を続けるうち、俺は徐々に自分の肩の力が抜けていくのを感じた。

ケラケラと笑う四之宮さんには、いつもクラスで感じる『違う生き物』を見る感じが無く、すごく話しやすかった。

「でもマロって言いやすくいいね。ウチもマロって呼んでいい？」

「え、う、うん」

「ありがとう。でさ、マロっちってもしかしてバイトでもしてんの？」

「え？」

思わぬ質問に一瞬呆気にとられた。

「あー、一応」

「やっぱり！ウチがよくいくスーパーでよく見かけた気がするからさ。なんか見覚えあるなーと思って」

「へ、へえ、そうだったんだ」

マジかよ、全然知らなかった。バイト中は仕事でいっぱいいっぱい周りなんて全然目に入ってなかったからな。

「なんか汗だくになって働いてるから声もかけ辛くてさ。いつも大変そうだなーって思ってたんだよね。週どれくらい働いてんの？行くといつも見るけど」

「あー、スーパ―は週五日かな。土日は、他のバイトもしてるから」「ヤバ！ 毎日じゃん。そりゃ眩暈もするよ。そんなに働いてなんか欲しいものあるの？」

「それは……」

最初は、東野たちと同じように誤魔化そうかとも思った。だが、四之宮さんのキラキラとした瞳を見た時、俺の口を出てきたのは全く違う言葉だった。

「ちよつと目標があつてさ。その投資のためかな」

「……目標？」

「ああ」

俺は寝返りをうつとぼんやりと天井を見つめた。

……これまでの人生で、俺がクラスの中心に立ったことなんて一度もなかった。小学校も、中学校も、クラスの人気者たちがワイワイと騒ぐのを教室の端の方で眺めて生きてきた。

それに不満を思ったことは、実は……ない。人には持って生まれたい性質があり、自分は人々の中心に立つ人物じゃあないと子供のころから悟っていたからだ。

だから南山がリア充グループの仲間入りをしたのを見た時は、本当に衝撃を受けた。

アイツは間違いないくモブキャラだった。顔も良くない、勉強も振るわない、運動神経もない、話だってそんな面白いわけじゃないし、性格も実は悪い。

それが冒険者になった途端リア充グループの仲間入りをした。

正直、すごいと思った。

それを見て東野たちは南山に嫌悪感と怒りを覚えたようだったが、俺は逆に尊敬を覚えた。

怒りはもちろん感じたが、一方で持つて生まれたモブキャラという性を打ち破ったアイツに、敬意を抱いたのだ。

それで、気づかされた。

モブキャラであったことに不満はない。だが、リア充に対する憧れはあったのだと。

だから、挑戦してみることにした。

自分が変わるかどうかを、人生で初めて限界まで頑張ってみて、試してみようと思ったのだ。

その試みはまだ途中だ。

そんなことを考えていると、瞼がどんどん重くなっていった。

なんとか堪えようとするが、どうにも耐えられそうにない。先ほどからフツフツと意識が点滅している。

四之宮さんがなにかを言っていたが、俺はそれに反応することもできず深い眠りへとおちていった。

———なんかそう言うのってカッコイイね。

夢の中で四之宮さんがそう言ってくれたような、そんな気がした。

第七話 エロゲみたいな美人の保健室の先生って実在すんの？
(後書き)

【Tips】美人の保健室の先生

実在しない。昔は美人だったのだろうおばちゃんな保健室の先生はいるにもかかわらず、その若い頃に遭遇した学生はなぜか存在しない。アニメや漫画、映画の中にはかなりの頻度で存在するため、日本には美人の保健室の先生が存在すると思っっている外国人もいるが、実在しない。ファンタジーの生物が実在するようになったこの世界においても、美人の保健室の先生はファンタジー性を保ち続けている。

第八話 例えるならRPGの序盤でちょっとだけ加入するお助けキャラみたいなの(前書き)

誤字報告凄く助かってます。

ありがとうございます。

第八話 例えるならRPGの序盤でちょっとだけ加入するお助けキャラみたいな

俺が冒険者となって一週間が経った。

毎日のように迷宮に潜り続けた結果、俺は少しずつだがカードの使い方……というか付き合い方というものを理解しつつあった。

まず座敷童について。彼女の操縦方法は基本的にオートだ。基本的に野放しにし、たまに戦闘を手伝ってくれた時のみお菓子などの報酬を与える。

感覚としては、RPGでのお助けNPCに近い。低レベルのころに一時的に加入し戦力的には最強だが一切のコマンドを受けつけてくれない感じのキャラ。あれだ。

もはや思い通りに動かすことなど諦めている俺だが、手ごたえは感じている。この一週間の餌付けの結果、徐々に座敷童が戦闘に参加してくれる確率が上がっているのだ。

要は子供と同じだ。頭ごなしに命令しても反抗期の子供は言うことを聞きやしない。だから最初は玩具やお菓子で釣る。そしてちゃんとできたら褒める。そうやって、少しずつお手伝いの楽しさや達成感を教え込んでいく。

今までのコイツのマスターはそれを理解せず自分の思い通りにしようとしたから、コイツは心を閉ざしてしまったのではないだろうか。

俺はだんだんとそんな風に思う様になっていた。

次にグーラーだ。コイツは座敷童の真逆で、完全マニュアル操作のカードだった。

ともかくにも命令をしておかなければ動かない。敵に襲われても反撃すらしない。

ゆえに、戦闘の際はすぐさま命令を出すか、あらかじめ『敵に襲われたら反撃しろ』という命令を仕込んでおかなくてはならない。

最初はあまりに面倒くさいと思っていた俺だったが、今では逆にこれはこれで面白いんじゃないかと思いはじめていた。

グーラーは命令が無ければ動かないが、命令さえしておけばそれを必ず守る。

例えば『常に敵の気配を探り続ける』『敵が一体の時は奇襲をかける』『奇襲の時はスキルのフェロモンで気配を消せ』などの複数の命令を組み込んでおくことで、俺がなにも言わずとも敵を見つけた際は奇襲をかけてくれるようになるのだ。

怖いのは命令と命令が矛盾を起こした場合で、それを避けるため俺はすべての命令をメモにとっておき、矛盾を起こさないか常にチェックし続けていた。

今では学校の授業中も戦闘のシチュエーションとその際にあらかじめ仕込むグーラーの命令を考え続けているほどだ。

迷宮に入るまでに出る限り命令を考えておき、実際の戦闘で問題点を洗い出し修正する。

俺は育成ゲームのようなグーラーの調教に嵌まりつつあった。

最後に、クーシーについてだが……。

「ご主人様！ 敵の集団を見つけました！」

牛のように大きな犬が、俺の元へと駆け寄ってくる。

エメラルドグリーンの綺麗な毛並みと渦巻く大きな尻尾を持つその犬は、俺の前まで来るとすっくと立ちあがった。

こうして二本足で立っているのを見ると、その身体つきは犬と人間の中間あたりだということがわかる。四本足でも二本足でも活動できるその身体は、どちらかというと言った猿のものに近いかもしれない。ちなみに、どうでも良いことだがこいつもメスだった。

「数は三体。武器無しのゴブリンが二体に、バトルウルフが一体です！ こちらにはまだ気づいてません」

「うんうん、よくやったぞ、クーシー」

そう言っただけで頭を撫でてやるとクーシーはブンブンと尻尾を振って喜んだ。

可愛いなあ……。我が家では、マルという名の犬を飼っているのだが、ソイツは最近俺を自分よりもヒエラルキーで下だと思っているらしく、露骨に見下してくるのだ。妹には全力で媚びているくせにだ。

その点このクーシーは、真に敬うべき相手というものをよくわかっている。

犬とはこうでなくてはな。

鼻が利くからこうして大分先のモンスターも教えてくれるし、気配を消せるため斥候役として非常に優秀なのだが、一つだけ大きな欠点があった。

「で、だ。どうするクーシー。今回はお前が戦ってみるか？」

咳ばらいを一つしそう提案してみると、クーシーはビクリと身を震わせ尻尾を丸めてしまった。

「う、うう……ボクはまだちょっと、戦闘は……」
「そうか……」

これがこのクーシーの唯一にして致命的な欠点であった。
このワンコちゃんは、その臆病な性格により戦うことが出来ない
のである。

ある意味では、いうことを聞かない座敷童よりもカードとしては
失格と言えるだろう。

本当は多少鞭打つてでも矯正すべきなのだろうが……。

「わかった。じゃあ敵のところまで案内したらグーラーと交代だ」
「……ごめんなさい、ご主人様」

しょんぼりと尻尾を下げるクーシーの頭を撫でてやる。手が埋ま
る様なモコモコの毛並みは、触っていて非常に気持ち良かった。

「気にするな、出来ることからやっていこう。な？」
「は、はい！」

我ながら、甘い。が、クーシーも斥候役としては十分役に立って
くれている。臆病な分、敵の気配に気づくのも早い。

それを考えれば今すぐに矯正しなくても良いかと思ってしまうの
だ。

それに以前怒鳴ってしまった時は、その後しばらく俺にすら怯え
てろくにコミュニケーションが取れなくなってしまったからな。

グーラーで戦闘が事足りている今、無理にクーシーを戦わせよう
として斥候にすら使えなくなるのは困る。

そんな打算的な考えもあった。

「お優しいこつて」

クスクスと背後から座敷童の嘲笑が聞こえてくる。

「カードに気を遣って優しいマスター気取りか？ どうせより強くて使いやすいカードが手に入ったら乗り換えるのに、時間と労力の無駄なんじゃねえか？」

「そんなことはない。今だって十分役に立ってるさ」

「索敵のことを言ってるなら嘘だな。あれぐらいもつと低ランクでも十分こなせる。むしろ死んでも痛くないぶん低ランクの方が使いやすいだろ？」

一理ある。実際、ロストの危険性が高い索敵役には低レアの方が使いやすい。死んでも経済的打撃が少なく、また死ぬことで強力な敵の存在を遠距離からでも教えてくれるからだ。

プロが取る戦術のうちにも、数十枚のランクカードを次々と迷宮に放しては使い捨てにし索敵をする、というものがあるらしい。

……だが。

「それは使い捨てるのが前提だろ？ 育てて使い込んでいくなら俺のやり方が一番だ」

……ランクカードと言えども使い捨てにできるほど財布に余裕があるわけじゃないという悲しい事情は黙っておく。

「甘いねえ」

「甘いのはお前も好きだろ？ 言うこと聞かないカードにお菓子をあげるマスターなんて俺くらいだろうしな」

「へッ、言いやがる」

そう言い残し、座敷童は気配を消した。

ふふん、今回も俺の勝ちだな。

彼女はこうしてたまに嫌味を言ってくるのだが、俺はそれにうまく切り返し続けていた。

最近じゃ俺はこのちよっとした舌戦を楽しんですらいた。それは座敷童も同じようで、彼女が俺に語り掛けてくる回数も少しずつ増えてきている。

それはまるで、本当は友達になりたいのに照れくさくて悪戯から仕掛けてしまう悪ガキのようで、少しだけ微笑ましかった。

「ご主人様、敵の集団が近いです。交代をお願いします」

「わかった。クーシー、戻れ。出てこいクーラー！」

クーシーの言葉に、俺は彼女をカードに戻すとクーラーを呼び出した。

現れたクーラーは、素早くボクシングフォームを取り、ぎよろぎよろと目を動かして周囲を確認すると、

「敵影無し、戦闘中ではない、と判断、しました」

そう言って構えを解除した。

クーラーにはあらかじめ出現と同時に戦闘態勢に入り、周囲の確認を必ずするように言っている。そしていくつかの選択肢を事前に仕込んだうえで、自分がどうすればいいかを判断するように命令していた。

人工知能がチェスや将棋で人間を凌駕するようになったように、こうして少しずつデータを蓄積させることでクーラーの知性を育てることができないかという、いくつもある実験の一つだった。

「状況を説明するぞ。現在クーラーが見つ付けてくれた敵の集団に接

近中だ。数は三体。ゴブリンが二体に、バトルウルフが一体だ。敵は恐らくまだこちらに気づいていない。距離はバトルウルフの嗅覚ギリギリ。道具はあるものはなんでも使っていていい。さて、どうする？」

俺の問いにグーラーは感情のない声でボソボソと答え始めた。

「イエス、マスター。回答、します。この状況は、シチュエーションナンバー27、の適用が可能と、判断します。よって、単騎にてスリングショットの、射程範囲まで、スニーキングし、まずは、バトルウルフを、狙撃します。次に、散弾を、装填し、敵グループへと、攻撃します。そののちは、結果に、関わらず、スタンロッドでの、殲滅に、移ります」

グーラーの言うスリングショットとスタンロッドとは、冒険者専門店で購入したモンスター用の装備のことである。

スリングショットは硬いゴムが十本も束ねてある人間ではとても引けない特注品で、彼女のようなモンスターでもなければ到底扱うことのできない代物だ。スタンロッドも人間相手では違法なレベルまで出力を増してあり、所有にあたり市役所での届け出が必要なレベルだった。

俺はバッグからスリングショットとスタンロッドを取り出し、彼女へと預けた。

「よし！ いいぞ、やってみる。戦闘中の様子はちゃんとカメラで録画しておくように」

グーラーにはウェアラブルカメラのついたヘルメットを付けさせている。戦闘の様子はすべて記録されており、動画を再生しながら命令の修正を行うのが俺の最近の日課だった。

「イエス、マスター」

敬礼とともに立ち去るグーラーを見送っていると、ふいに座敷童が姿を現した。

「……あの木偶人形が見違えたもんだ。グーラーとは思えねえよ」

普段は皮肉ばかりの座敷童が唸るように称賛を口にする。それに気分を良くしつつ俺は答えた。

「ま、苦勞したからな。この一週間で一番時間をかけたのはグーラーの教育だ。ようやく芽が出始めた感じだな」

「あれで本当に自我がねーのか？」

「ああ。俺の命令以外のことはできない。今も自分で回答を考えたみたいな感じだったけど、あれも俺の言った過去の命令の複合形だ。グーラーはちよつとずつ選択肢を組み合わせられるようになってきたけど、自分で選択肢を作り出すことはできないんだよ」

思考しろ、自分で考え出せと常に命令し続けている俺だが、逆に言えばそうでもしないとグーラーは何も考えてはくれない。

ゆえに俺はありとあらゆる想定をして、それをグーラーにインプットし続けている。

例えば普通の人間なら腹が減れば飯を食おうとする。その日の気分や体調を考慮してどんなものを食べようか選択肢を浮かべる。だがグーラーは腹が減っても命令しなければなにも食べない。食え、といって初めて食べようとする。それでもそこに好みの問題などは含まれない。ただ機械的に食べ物ならなんでも口にしようとする。

そこで俺はカレーや牛丼、オムライスなどの様々な選択肢を与え、その時の状況に最もふさわしいものを選べと命令する。そこまでやって、ようやく普通に飯を選んで食うということができるようになる。

その積み重ね、積み重ねでグーラーは一人でここまで行動できるようになった。

人間だって、未知の状況にはうまく対応できないのだ。

それをまがりなりにもどうにかできるのはそれまでの経験によるものが大きい。

俺はこの経験という名の解答集をグーラーに与えてやりたいのだ。その努力は少しずつだが実を結び始めている。

俺はグーラーのカードを取り出すと座敷童へと見せた。

【種族】グーラー

【戦闘力】110（10UP!）

【先天技能】

- ・ 生きた屍
- ・ 火事場の馬鹿力
- ・ 屍喰い

【後天技能】

- ・ 絶対服従
- ・ 性技
- ・ フェロモン
- ・ 奇襲（NEW!）
- ・ 虚ろな心（NEW!）

「なんじゃこりゃ！ 二つも新しいスキルを覚えてんじゃねえか！」

カードを見た座敷童が驚愕の声を上げた。

無理もない、それだけカードにとって新しいスキルを得るというのは難しいことなのだ。

基本的にスキルを覚えさせたり、あるいはデメリットスキルを消すには数か月は必要と言われている。

極めて危機的な状況に遭遇したり、劇的な精神の変化で短時間にスキルを得たり失ったりすることもあるそうなのだが、そんなことは稀だ。

にもかかわらず、グーラーはわずか一週間で二つもスキルを得た。しかも育成が難しいといわれるアンデッド系なのだ。

別に、このグーラーが特別だとか、俺が天才だというわけではない。

アンデッドの特性と、絶対服従のスキルが上手い具合にかみ合った結果だった。

アンデッドは、ある意味ではまっさらな存在だ。自分では何も考えないというのは、そこに無限の余白が広がっているということに他ならない。一時的にマスターの命令が描き込まれることがあっても、それはすぐに漂白されていく。

しかし、そこに永続的に描き込める絶対服従というペンがあれば？

得たスキルも奇襲と虚ろな心というグーラーが得やすいスキルだったこともある。

奇襲は、相手に気づかれずに攻撃を与えることでダメージに補正を与えるスキルだ。俺はグーラーに隠密スキルの代わりにフェロモンで気配を消させて先制攻撃をさせ続けていたため、このスキルを得たのだろう。

そして虚ろな心。俺はこのスキルに一番の手ごたえというか達成

感を感じていた。

スキルの説明文にはこうある。

限りなく自我の薄い心。精神異常への耐性、自由行動にマイナス補正。

自我の薄い……言い換えれば少しは自我があるということだ。

下位のアンデッドには自我がないといわれる。だが、虚ろな心を
得たということは今彼女の中には自我が芽生えつつあるのだ。

「……………むうう」

可愛い顔に眉間を寄せてグーラーのカードを睨む座敷童。

そんな彼女に俺はニヤリと笑う。

「どうよ、ちよつとは見直したか？」

「ハッ……そーいう生意気なことは迷宮を一つでも踏破してから言
うんだな、雛鳥ちゃん」

「む」

座敷童の言葉に俺は思わず詰まった。

迷宮の踏破、か。

この迷宮に挑み続け、ようやく第五層目まで来た。

あとは主が存在する最下層だけであり、その階段を見つけるのが
今日の目的だ。

その時のコンディションにもよるが、俺は今日中に迷宮の主に挑
むつもりでいる。

ここまで来るのにすでに一週間も掛かっている。

普通、この迷宮のようなFランク迷宮なんて深さにもよるが三日
程度で踏破できるものらしい。俺のようにCランクカードを持って
いたら一日でも踏破できるそうだ。

ここまで時間が掛かったのは、グーラーの育成に時間をかけたというのもあるが、敢えて手探りでここまで進んできたからというのが大きい。

実はギルドでは踏破済みの迷宮の地図や主の攻略情報を買っているのだが、俺はそれらの情報を一切買わずにいた。精々、無料で公開されている迷宮の時間帯と階層深度を調べたくらいだ。

それは冒険者用品を買ったらお金があんまりなくなったという切実な事情もあるが、Fランク迷宮くらい情報なしでも攻略しなくちゃ成長できないと思ったからである。

それゆえに、俺の迷宮攻略は慎重に慎重を重ねたものとなった。

最初の迷宮とは言え、あまりに時間をかけ過ぎだという自覚はある。

だから、できれば今日この迷宮を踏破してしまいたい。

ここまでの迷宮探索で十分な手ごたえは得ている。今のグーラーなら単体でも主を倒せるのではないかという自信があった。

そもそも、冒険者になるためにDランクカードが必要なのはFランク迷宮程度ならランクの差でこり押しできるからだ。

迷宮の主は、基本的にその迷宮で出るモンスターのワンランク上のモンスターが出るらしい。この迷宮で言えばコボルトとかヘルハウンド辺りか。その上、主たちは迷宮のバックアップを受け、生命力が通常の数倍以上に強化されたり下位種族を無尽蔵に呼び出したりが出来るそうだ。

だがそれでもなお、Dランクカードが一枚あればクリアできる。それがランクの差なのである。

現に、グーラーはこれまではほぼ単騎で複数の敵相手に戦い抜いている。敵を一、二撃で倒せる破壊力と、攻撃と再生を兼ねた屍喰い

がその勝因だ。

仮に主が数倍の生命力を持つタイプだったとしても屍喰いで持久戦はできるし、下位種族を呼び出すタイプであってもその破壊力で速攻戦を決められる。問題があるとすれば何らかの特殊なスキルを持つ場合だが、基本的にスキルは上位ランクほど効果がえげつなくなるという法則がある。つまり、フランク迷宮の主など大したスキルは持っていないということだ。

どうするか、やっぱり今日挑むか？ 最悪、座敷童もいることだし負けることはないだろう。

思考が挑戦に傾き始めたその時、戦闘からグーラーが戻ってきた。

「マスター。戦闘、終了、しました。戦利品を、ご確認、ください」「おお、よくやった。何も問題なかったか？」

グーラーから二つの黒い小石――魔石を受け取りながら尋ねる。万能の資源と言われる魔石は、どんな小さなものであってもギルドがグラム単位で測って買い取ってくれる。この大きさだと、二つで500円ってところか。

「ハイ、マスター。バトルウルフの、狙撃を、行った、のですが、射線上に、ゴブリンが偶然、入り、バトルウルフに、ダメージを、与えることが、出来ません、でした。第二段階の、散弾の、装填に、移ったの、ですが、バトルウルフが、急接近、してきたため、シチュエーションナンバー4、に従い、それまでの作戦を、停止し、近接戦闘に、入りました。そののち、スタンロッドと、スキルを、活用し、敵の殲滅、を終えたため、帰還、しました」

「そうか……いや、よく頑張ったな。戻っていいぞ」

「了解、しました」

敬礼するグーラーをカードに戻すと、俺は目頭をもみほぐした。
むう、やはり事前の作戦通りにはなかなかいかないな。まあそれでも敵を倒せたからいいっちゃいいんだが、それはあくまで相手が格下だったからで、同格相手だったらそうはいかないだろう。

やはり、今日主に挑むのはやめておこう。階段を見つuckerだけにしておくべきか。

俺はクーシーを呼び出すと、敵の索敵と階段の搜索を再開させた。

「なんだ、今日も主に挑まず尻尾丸めて帰んのか？　こんなんで迷宮を踏破できる日があるのかあ？」

「うっせ」

ニヤニヤとこちらを煽ってくる座敷童を適当にあしらう。

「お前がメインで戦ってくれるってんならすぐにも挑んだって良いんだぜ？」

「そりゃあ無理だ。アタシはこれを読むのに忙しい」

そう言って座敷が掲げてみせたのは、国民的ゲームの外伝漫画だった。

無論、俺が家から持ってきてやったものである。

ピンチの時だけ戦い、その報酬にお菓子をやるという暗黙の契約を結んでいる俺たちだがグーラーがある程度戦えるようになる座敷童の出番はほとんどなくなってしまった。

すると、暇になった上にお菓子まで手に入らなくなってしまったコイツは、何を思ったのか……その幸と不幸を操る能力で俺に悪戯するようになったのだ。

例えば俺を道で転ばそうしたり財布を落とさせたりなんかは可

愛いもので、はぐれたモンスターと俺を不意に遭遇させて俺の心臓を止めかけたことすらあった。

カードはマスターに危害を加えられないって話はどこに行ったんだ？ それとも、これくらいじゃあ攻撃とは見なされないってことなのだろうか。

ともかく、戦闘に加わらないばかりか足まで引つ張られちゃあ堪らない。

……が、そこで怒ったら俺の負けである。

俺はこの悪戯を主の器を試すコイツなりの試験と受け取った。

里親に引き取られた養子が、最初のうち里親を試すように悪戯や犯行をするというのはたまに聞く話である。

そこで、俺は悪戯よりももっと面白いもので興味を引いてやることにした。

この作戦は大成功。今ではこの小さな暴れん坊はすっかり日本の漫画に夢中となっていた。

「しかしさあ、この街の奴らはマジで胸糞悪いよな。街を救うために一人で十万のモンスターの大群に挑む主人公に石まで投げつけてさ」

ふいに座敷童が、漫画について語りだした。俺もそれに乗る。

「まあな。でも最終的には主人公のために立ち上がってくれたわけじゃん。必殺技を使うために魔力を貸してくれたしさ」

「そこが一番胸糞悪いんだよな。結局あいつらが出てきたの、老師の自爆魔法で敵の軍勢が消し飛んだあとじゃん！ いわばほとんど大勢が決してから出てきたわけよ。それを最後まで力貸して味方面って、アタシそう言うのが一番腹立つんだよな」

「まあ一理あるな。でもさ、最初から街の住人全部が主人公のために立ち上がるってのはリアルじゃねえよ。だって主人公はまだなんにもしてないんだぜ？ 街の人たちから見りゃ、不幸だけ呼び寄せたようにしか見えないわけよ。それに中には最初から主人公を助けようと動いてくれた人たちもいたわけじゃん？ 主人公の仲間を牢から出してくれたりさ。そいつらは多少なりとも襲撃の前から主人公と付き合いがあったからそうしたわけで、もしそれがなければそいつ等だって何もしなかつたと思うぜ」

「……なるほど、たしかに街の住人にとっちゃ命懸けで守るほどの存在じゃないか。でも石まで投げつけることはないだろ」

「結局そこは、人間の美しさと醜さつてのを作者は描きたかつたんじゃないかね？ 人間の中には自分の罪悪感を誤魔化すために必要以上にキツく当たる奴もいるわけよ。そして大半の人間はわが身が一番大事だが、中には人のために命を投げ出すことができるひともいる。老師の自爆はそれを街の人に教えてくれたわけだな。それが、仲間の賢王としての覚醒と、ラストの展開に繋がったっていう物語の美しい流れなわけよ。ちなみにこれはラスボス戦に通じる流れだな？ 全体を通してこの漫画が伝えたいメッセージがここに――」

「でもそれは人間を美化しすぎだろ。命の本質って奴は人間にもモンスターにもあつてそれをこの三匹の雑魚モンスターは教えてくれて――」

「ところがそこは――」

「そこは良かったよな。最高のシーンだった！ でもアタシとしては――」

「この後めちやくちやく熱く語り合った。」

第八話 例えるならRPGの序盤でちょっとだけ加入するお助けキャラみたいな(後書き)

【Tips】 迷宮の深さ

深ければ深いほど敵が協力となる迷宮は、その階層数によって大まかにランク分けされている。

- ・ Aランク迷宮：推定深さ101階以上 カードの召喚制限十二枚
- ・ Bランク迷宮：深さ51階以上100階以下 カードの召喚制限十枚
- ・ Cランク迷宮：深さ31階以上50階以下 カードの召喚制限八枚
- ・ Dランク迷宮：深さ21階以上30階以下 カードの召喚制限六枚
- ・ Eランク迷宮：深さ11階以上20階以下 カードの召喚制限四枚
- ・ Fランク迷宮：深さ10階以下 カードの召喚制限二枚

Cランク迷宮であればすべての階層でCランクモンスターが出現するというわけではなく、10階未満であればFランクモンスターしか出ない。

Aランク迷宮が推定となっているのは、未だAランク迷宮の最深層に人類が辿りついていないからである。

最深層には、その迷宮のランクよりワンランク上のモンスターが待ち受けており、それを便宜上“迷宮主”と呼んでいる。主はランクが上なばかりか迷宮からバックアップを受けており、能力の強化や配下を召喚する権能を与えられている。

第九話　ウチには座敷童がいるんだからよ

その日、俺はいつもより入念に迷宮探索の準備をしていた。

充電済のスタンロッド、モンスター用のスリングショット、催涙スプレーと口まで覆うタイプのゴーグルマスク。催涙スプレーは熊撃退用の強力なものであり、ゴーグルは風で薬剤が逆流してきた場合のための備えだ。その他に役立ちそうなものを詰め込んでいく。

今日こそ俺は、初の迷宮踏破を行うつもりだった。

幸いにして今日は学校も休みだ。適度な休息をしつつ、試行錯誤する時間は十分にある。

すでにフランク迷宮に一週間以上もかかってしまっている。これ以上この迷宮に時間をかけるつもりはなかった。

この迷宮をクリアしたら、迷宮の情報を買わずに挑むという縛りも解除するつもりだ。

もう十分に未知の迷宮に挑む経験は積めた。今度はどんどん迷宮を踏破していくことで色々なタイプの敵と迷宮を知っていく予定だ。

そうして気合を入れていると、二階からトコトコと降りてくる影があった。妹の愛だ。

まだ眠いのか、フワフワの栗毛を揺らす様はとても可愛らしい。顔も子役クラスに整っており、小柄なこともあって近所のおじさんおばさんたちからは、ちよっとしたアイドルのように可愛がられていた。

なお、ご近所における俺のウケは悪い。

なにが「妹さんはあんなに可愛いのにねえ……大丈夫！ 男は顔じゃないわよ！ お金持ちになりなさい。そしたらウタマロくんもモテモテよ！」だ。

俺は金持ちにならねえとモテないとしても言いたいのか！ 馬鹿め！
言われなくても——知ってるよ……。

「ふああ、おはよお……」

「おはよう」

なぜか目尻に浮かんできた液体を拭っていると、愛が欠伸交じりの挨拶をしてきた。

とさりと倒れ込むようにソファに座り、ぼんやりとした表情で俺の荷物を見ていた愛だったが、突然パツと目を輝かせると駆け寄ってきた。

「あ！ もしかして、お兄ちゃん迷宮行くの!？」

「おう。今日こそ迷宮を踏破してくるぜ」

「私も行きたーい！ 連れてって、ね？ ね？」

可愛らしくおねだりする愛だったが、言ってることはシャレにならないかった。

「ダメダメダメダメ！ 無理に決まってるんだろ」

「えー、なんでなんで？ 私も一回くらい行ってみたいーい」

「冒険者以外は迷宮に入っちゃ駄目なの。一般人を連れ込んだらカード没収されちまう」

金さえあれば簡単になれる冒険者だが、なった後は案外規則が厳しかったりもする。例えば迷宮に冒険者以外の人間を連れ込んだり、

あるいはほかの冒険者を襲ったりすると一発でライセンス没収、二度と交付されない上の場合によっては刑事罰すらあり得た。

よって、いくら可愛い妹の頼みであってもこればかりは受け入れることはできなかった。

「あーあ、私もはやく冒険者になりたい。そしたらクラスのみんなに自慢できるのにな」

この思考回路……完全に俺の妹である。

違いといえば、愛はそのルックスと性格からすでにクラスカーブのトップだということか。

兄と妹、どうしてここまで差がついたのか……。遺伝子と会話できるなら小一時間は問い詰めてやりたかった。

「ま、いつか。今はお兄ちゃんが冒険者っただけで。正直、お兄ちゃんのことが優しくて大好きだけど、ちよつと冴えないな。っと思ってたんだよね。でも最近のお兄ちゃんはカッコよくて大満足！」

「そりゃ〜どうも」

明け透けな妹の評価に俺は苦笑した。
仕事で忙しい両親の代わりに俺が良く遊び相手になっていたため、俺と愛は一般的な家庭に比べ仲がいい。

だが愛が大きくなって服やアクセサリーなどに興味を持つようになると、小学生にして俺のファッションセンスを超えるようになってきた妹は、だんだんと兄に対して微妙な眼差しを送るようになってきたのだ。

俺はそれを「愛も兄離れの時期かな」なんてのんきに構えていたのだが、どうやらあれは単純に俺の冴えなさに女としてがっかりしていただけだったようだ。

小さくても女は女ということか。

それが、俺が冒険者になったことで「やっぱりお兄ちゃんはスゴイ！」となったと。

当初の目的であるクラスカースト成り上がりこそ予定通りにはいかなかったが、少なくとも家庭内カーストはちよつと向上したようだった。

「おっと、もうこんな時間か。そろそろ行くわ」「頑張つてね！」

妹に見送られ、俺は慌てて家を出たのだった。

一週間も通い続けただけあって、最下層までの迷宮攻略は極めてスムーズに進んだ。

スマホの冒険者アプリには、これまで攻略したマップの地図や様々な情報が記載されている。

その最短ルートを出るだけ敵を避けながら進むことで、ほとんど消耗がないまま俺たちは最下層に至る階段の前まで到着することが出来ていた。

「……大体五時間つてところか」

最下層への階段を前に、腕時計を見た俺はそう呟いた。

何度も通った道とは言え、一週間かけて攻略していった道が数時間で済むとなるとさすがに思うものがある。

長くて三日、スムーズにいけば一日。それが、フランク迷宮の攻

略に掛かる時間。

手探りで進んでいた時はピンとこなかったが、なるほど地図と敵が分かっているというのはここまで迷宮攻略を楽にしてくれるのか。

やはり、初回は絶対に自分の力だけで攻略するというのは変なことだわだったんだろ？。最初からギルドで情報を買っていけば…俺は時間を無駄にただけなんじゃあないのか？

……いや、そんなことはない。こうやって自分の力だけでここまで来たからこそ、後々生きてくる経験というものはあるはずだ。

俺はそう自分に言い聞かせると、バッグを降ろしクージーと座敷童へと振り返った。

「よし、最下層に入る前にちょっと休憩するぞ」

「はい！」

「あー、疲れた、はやく菓子くれ、菓子」

「お前はろくに働いてないだろうが……」

そう言いつつ、俺は座敷童へとお菓子を渡してやった。

一応、本当に一応だが、道中働かなかったこともなかったからな……。

今日のお菓子は、上のコンビニで売られていた期間限定のイチゴのムースだ。

俺が二口で食べそうな大きさのくせに一つ500円もするちょっとした高級品である。

「む、この酸味と甘みのハーモニー。とろけるような舌ざわり……なんて美味さだ！ シェフを呼べ！」

この前貸したグルメ漫画の影響か、阿呆みたいなことを言い出す座敷童。

バカガキは放っておくとして、俺も一口ムースを口に入れる。む、確かにこれは美味い。コンビニの品とは思えないレベルだ。

……しかし、慣れてみれば冒険者業つても悪くはないな。

そりゃあ重い荷物を持って何時間もモンスターの徘徊する迷宮を移動するというのは心身ともに疲れる。

頼りの三枚のカードは、言うこと聞かないわ、融通利かないわ、臆病だわで一筋縄でいかない奴ばかり。

高収入、高収入とテレビで言う割には、ここまでで得た収入はせいぜい一万円ほどで、苦勞に見合うものとは思えなかった。

肝心のクラスカースト上位にはなれなかったし、正直不満だらけだ。

……だが、同時に今までの人生で味わったことのないような充実感のようなものを感じているのも事実だった。

当初想定していたほど命の危険性もないし、グーラーはだんだんと戦えるようになってきたし、クーシーもペットとしてみれば可愛いし、クソ生意気なだけだった座敷童もこうしてお菓子を夢中になつてがつついてるところは中々愛嬌が――。

「おい、ボンクラ。喰い終わっちゃまったからおかわりくれよ、おかわり」

――いや、やっぱり愛嬌なんてないな。生意気なだけだわ。

俺は一瞬で我に返ると、ため息をつきながら立ち上がった。

「おかわりなんてねえよ。ほら、休憩は終わりだ。行くぞ」

「なんだよ、しけてんな」。貧乏人はこれだから

「ハッ倒すぞ」

そんな軽口をたたき合っていると、おずおずとクーシーが言って

きた。

「あの、ボクは……その」

「ああ、わかっている。ここからはグーラーと交代だ。ご苦労さん」

「あ、はい。ありがとうございます」

ホツとした顔でお礼を言うクーシーの頭を撫で、グーラーと交代させる。

「グーラー、準備は良いな？」

「イエス、マスター」

「よし」

いよいよ、最下層。

迷宮を一個も踏破したことのない冒険者なんて、冒険者じゃない。ここを踏破してようやく、俺は冒険者としての一步を踏み出すのだ。

俺は意気揚々と最下層へと足を踏み入れ――。

「……ッ！」

その瞬間、明らかに変わった空気に、俺は背筋を震わせた。

それまで夏の森といった雰囲気だった周囲が、一気に薄暗く冷気の漂うものへと変わっている。

別に迷宮内の天候が変わったわけじゃあない。単純に森の木々が深く、鬱蒼としたものへと変わったせいで太陽の光が遮られただけだ。そのせいで先ほどよりも暗くなり、気温が下がったのだろう。

……そう考察しつつも、俺は言いようのない違和感を感じていた。暗くなったことについてはそれで説明がつく。だがこの纏わりつ

くような悪寒はなんだ？　これまで変わらなかった植生が変化したのはなぜ？　それに、先ほどから微かに臭うこの下水道のような悪臭は一体……？

……ここは本当にさっきまでいた迷宮の延長上にあるのか？

一度、撤退するべきかもしれない。

理屈じゃなく、本能的な何かでそう考えた俺は後ろへと振り向き――愕然と目を見開いた。

「か、階段が……！」

先ほど俺たちが下りてきた階段。それが綺麗さっぱりなくなっていた……。

ど、どういうことだ？　もしかして、ここが最下層だからか？

最下層に一度でも入ると主を倒さなきゃ帰れないとか？　いや、そんな話は聞いたことがない。逆に、主に勝てそうになかったから撤退した話は何度も聞いたことがある。

となれば、これは迷宮全体の仕様じゃあない。この迷宮特有の現象だ。

ああ、クソ。やっぱり事前に調べておくべきだった！　もし撤退が出来ないと知っていたら絶対にこの迷宮には来なかったのに！

そう俺が後悔していると、ガツと強く肩を掴まれた。小さな手。座敷童だ。

「おい、しっかりしろ！　気が付いてるよな？　ここは普通じゃね

ーぞ

「あ、ああ」

俺は無様に頷きつつ、コイツが俺を気遣うようなことを言うなんて……と見当違いなことを考えていた。

「……クソ、まさか階段が消えるなんてな。知ってたら最初からここを選んだりはしなかったのに」

俺の言葉に座敷童は怪訝そうに眉を顰めた。

「ああ？ 何言ってるんだ？ 階層を隔離できるほどの主を最初から探知できるわけないだろ。マジでしっかりしろよ、死ぬぞ」

……？ なんだ？ 何言ってるんだ、コイツ？

やべえ、まだ混乱してるのか？ 自分でも頭が働いてないのがわかる。落ち着け、よく考えろ。

まず、座敷童はなんて言った？ そうだ、迷宮じゃなくて主について言っただよな？ ってことはだ、これはこの迷宮の仕組みじゃあなく主が起こしてる現象ってことになる。

でも迷宮の主は基本的に変わらない。主が倒すたびにランダムで変わるタイプの迷宮も存在するが、それは主の特性というよりは迷宮の特性だ。そしてここはそういった特殊なタイプの迷宮ではない。座敷童は「階層を隔離できるほどの主を最初から探知できるわけではない」と言った。ってことはだ、これは通常の迷宮の主ではなく――。

それに思い至った瞬間、ゾワリと全身の産毛が逆立った。

「――い、【一人歩きする死神】か……！！」

イレギュラーエンカウント

イレギュラーエンカウント。それは冒険者の死因ナンバーワンに輝く、一種の事故だった。

迷宮には、全迷宮を渡り歩く固有のモンスターが存在する。そいつらは本来の迷宮主を喰らいその迷宮を乗っ取ると、餌が来るのを

じつと待つという習性を持つ。

それを外部から知ることは決してできないと言われており、こうして最下層に踏み込んで初めてわかる。いつ自分の元に訪れてもおかしくない、まったく予期せぬ不幸……。故に、事故。

イレギュラーエンカウントは別に無敵のモンスターではない。奴らの戦闘力は出現した迷宮に相応しいものに抑えられるし、過去に何度も討伐されている。懸賞金もかけられており、一度現れれば倒されるまではそこに居続けるからイレギュラーエンカウント目当ての賞金稼ぎもいるくらいだ。

だが、不意の遭遇をした冒険者にとってイレギュラーエンカウントとはまさしく死神を意味する。

なぜなら、戦闘力が抑えられると言っても、そのスキルには一切の制限が掛からないのだから。

——イレギュラーエンカウントは、そのどれもがAランククラス
のスキルを持っている。

かつてのアンゴルモアの際、イレギュラーエンカウントもまたその姿を現した。

そのどれもが、地獄としか言いようのない惨劇と共に……。

フランスに現れた【マッチ売りの少女】は、街一つを幻覚の中で死に追いやり。

インドに現れた【浦島太郎】は、罪のない少年少女たち数千人を老人へと変え、大人たちは一人残らず老死。

日本においても【カエルの王子様】が現れ、その姿を見た者は、胸の内部から鉄の帯を弾けさせ、解剖された蛙のように無残な死を遂げた。

アンゴルモアに悲劇はつきものだが、イレギュラーエンカウント

のもたらす恐怖と悲劇は量と質が違う。

そして。

俺は今。

そんな化け物の、仕掛けた、檻の中に、いるのだ。

「……ッ！」

フツ、と意識が飛びかけて我に返った。

あ、……危ねえ。今、気絶しそうになった。だが、ここで気絶したら終わりだ。

……ッ！　そ、そうだ！

俺は慌てて冒険者ライセンスを取り出した。

ただの身分証ではない。魔道具の一種であり、有事の際はライセンスからギルドに救助依頼が出せるようになってる。当然それ相応の金額がかかるが、今は金を惜しんでいる場合ではない。

俺は救難信号を送ろうとして――。

「クソッ！　駄目だ！　届かない！」

地面へとライセンスを叩き付けた。

ちくしょう！　階段が消されているだけでなく、空間ごと隔離されているのか……！

ああ、糞、どうすりゃいいんだ。頭を掻きむしる。いざとなれば、ギルドに助けを求めることが出来る……そう思って迷宮に潜っていたのに……！

たった一本の命綱を外された気分だった。

一人で勝手に追い詰められている俺を、座敷童が静かに諭した。

「おい、とりあえずグーラーじゃなくてクーシーを呼んどけ。今は

「索敵がいた方が心強い」

「あ、ああ、そうだな」

俺は震える手でクーシーのカードを取り出すと、グーラーと交代で呼び出した。

現れたクーシーは、オドオドと周囲を見渡しながら言う。

「ご、ご主人様。こ、これは？」

「……イレギュラーエンカウンドだ。その鼻ですぐ敵を探してくれ」
「は、はい！」

俺の余裕のない言葉にクーシーはクンクンと鼻を鳴らし――ギョッと目を見開いた。

「そ、そこ！　そこにボクたち以外の匂いが！」

「なに！？」

座敷童がすぐさまそちらへと光弾を放つ。

「……鼠？」

そこに居たのは一匹の鼠だった。大きさはかなりデカイ。プレーリードッグくらいのサイズだ。しかし、その顔つきは醜悪なドブネズミのそれで、可愛らしさの欠片もなかった。

「……これがイレギュラーエンカウンド、じゃない、よな？」

「んなわけあるか。眷属に決まってんだろ。マズいぜ、この手のモンスターは無尽蔵に湧いてくる。いくら倒してもキリがないぞ」

座敷童が鼠を指さして言う。光弾に打ち抜かれて屍を晒すそれは、

臓腑が腐っていたのでは？　と思うほどに耐え難い悪臭を放っていた。
もしま、これが森に漂う臭いの原因なのか？　だとしたら一体どれだけの数が森中に……。

「う、じゃ、じゃあとりあえず先に進むか。倒さないと帰れない、しな……」

「……………」

俺の震えながらの言葉に座敷童は茶々を入れることはなかった。

しばし、クーシーの先導のもと迷宮を進んでいく。

時折出る鼠は、座敷童が仕留めてくれた。今ばかりは、彼女も見返りなく協力してくれている。それが心の底から、頼もしかった。

「ご、ご主人様……血の、匂いが
「えっ？」

ドキリ、と心臓が跳ねる。

「ど、どこからだ？」

「あ、あちらです」

そう言ってクーシーが指さしたのは迷宮の壁にあたる森の木々。
恐る恐る近寄っていくと……。

「……………」

口に手を当て、呻く。

そこにあつたのは五体バラバラにされた子供の死体だった。十歳程度だろうが、金髪の白人の男の子だ。そばかすの浮いたその幼い顔は、恐怖と痛みで歪んでいた。

血の鉄の臭いと、内臓から漂う何とも言えない臭いが鼻をつく。まず本物ではないだろうが、何とも趣味の悪いオブジェだった。気の滅入る光景に俺が深いため息をついていると。

「……こりゃ本物の死体だな」

座敷童が顔を顰めて言った。

「……えっ？」

「間違いない。アタシにはわかる。しかも……なんてこった、この子……まだ魂がここに囚われてやがる」

「……………」

俺は座敷童の言葉をよく咀嚼し。

「い、いやそれは可笑しいぜ。法整備が進んでこんな子供は絶対に迷宮には入れない。万が一迷い込んだとしても、すぐわかるからコースになるはずだ。それに、ここは日本だ。この子は外国人じゃんか。これは迷宮のイミテーションだよ。冒険者をビビらす演出だ」

そう捲くし立てる俺に、座敷童は沈鬱そうな顔で俯く。

「……アンゴルモアだ」

「え？」

「だからアンゴルモアだよ。お前らはアレをそう呼んでるんだろ？これはその時の獲物なんだろう。持ち帰ってトロフィー替わりに

「……………俺の、買った奴だろうが」

掠れた声でそうツッコミながらペットボトルを受け取ると、座敷童の奴は不敵に笑った。

「お、もう元気になってきたのか。それでこそアタシのマスターだ」

生意気な奴め。……………ん？ 今コイツ俺のことをなんて……………？

「さて、こつからどうする？ なんなら今回はアタシ一人で倒してきてやつてもいいぜ？」

「あ？ ……な、なんだよ、今日は。なんというか……………」

予想だにしていなかった言葉と、いつもとはまるで違う協力的な座敷童の姿に混乱する俺。

そんな俺を気にした風もなく、少女は快活に笑った。

それは、いつもの意地の悪い笑みとは違い、年相応の爽やかな笑顔で――。

「ビビリなマスターの代わりに単身、強敵に立ち向かう！ これで報酬を弾まないわけがない、ってね！」

それで、否応なく気づかされた。

コイツ……………ああ、クソ！ そう言うことかよ、なんてこつた！

俺を、元気づけようとしてんのか。あの、糞生意気だっただけの座敷童が！ 俺を……………！

胸が熱くなつて、視界が潤んできた俺は、慌てて下を向いた。

泣いてる顔なんて、見せられるかよ……………！

目頭をもみほぐすふりをして涙を拭きとると、俺は震える脚で立ち上がった。

「……そんなことしたらいくら菓子を買わなくちゃいけないんだよ。この街にはそんなにお菓子を置いてねえぜ」

「へえ、だったらどうする？」

「俺も行く。そしたらいつも通りでいいからな」

「そいつは残念。大嫌いなマスターを破産させられる絶好のチャンスだったのによ」

「俺を破産させるのは無理だぜ。なんせ……」

「なんせ？」

面白げに俺の次の言葉を待つ彼女に、俺は自慢げに胸を張った。

「ウチには座敷童がいるんだからよ」

第九話　ウチには座敷童がいるんだからよ（後書き）

【Tips】イレギュラーエンカウント

全迷宮において常に一体しか存在しない特別なモンスター。本来の迷宮主を喰らい、それを知らずにやってきた冒険者を狩るという習性を持つ。戦闘力はその迷宮相応となるがスキルは弱体化しないこと、迷宮のランクを問わず完全ランダムに出現すること、一度最深部に足を踏み入れたらイレギュラーエンカウントを倒さなくては生きて帰れないことから、冒険者たちに畏れられている。

迷宮もカード同様、高ランクほど数が少なくなるためイレギュラーエンカウントは主に低ランクの迷宮に現れる傾向がある。そのため、イレギュラーエンカウントの被害に会うのも新人が多くなるため、新人殺しの異名も持つ。

なお、イレギュラーエンカウントのカード化に成功した例は報告されていない。

第十話 頼むから絵本から出てくんな。

「そう言えば、お前好きな女とかいんのか？」

「なんだよ、突然」

「いいから言えよ。まさか男の方が好きとか言わねえよな？」

森の中を進むうち、どちらともなく雑談をし始めていた。

決して気を抜いているわけではない。

クーシーは常に鼻で敵を索敵し、座敷童も見つけた鼠を一匹残らず倒している。俺も装備をしっかりと身に着け、催涙スプレーを手に持っていた。

こうして無駄口を叩いているのは、強すぎる緊張感に心をやられないためだった。

「んなわけあるか。一応、いるよ。片思っただけだな」

「へえ！ どんな奴なんだよ。可愛いのか？」

「ん、クラスの中でもかなり可愛い方だよ。全国レベルでも顔面偏差値60以上はあるな。性格は大人しい感じで、グループの中でも静かに微笑んでる感じ。誰かの悪口とか言ってるどころか一度も見たことない娘だよ。そしてなにより……」

「まただ……。俺は視界の隅に子供の死体を見つけ歯を食いしばった。」

まだ小学校にも入っていないだろう金髪の幼い少女が、喉下からへその下まで切り裂かれて死んでいた。中は綺麗さっぱり抜き取られていて、周辺の木に杭で打ち付けられている。血と糞便がまじり

あつた臭いが、酷い……。

俺は無意識にその光景に自分を照らし合わせてしまい、慌てて目を逸らした。

大丈夫だ、俺はああはならない。ラッキーガールがついてるんだからな。

「なにより？」

「小柄でほっそりしてるのにめちゃくちや胸がデカイ。全学年で多分一番デカイ」

「……結局そこかよ。スケベが。しかし聞いている限りかなりの上玉じゃねえか。お前に脈あんのか？」

座敷童が呆れ顔で、俺の足元に忍び寄っていた鼠を無造作に蹴り殺した。ドブ水を煮詰めたような悪臭が周囲に飛散する。

「そんなんあるわけねえだろ。ぶっちゃけ数えるくらいしか話したことねえんだぞ」

「ええ？ それなのに好きなのか？ それ、おっぱいだけを好きになつてるんじゃない……」

「ああ、いや……。好きってのはちょっと違うかもな。憧れに近いかも。こんな娘と付き合えたら最高だろうなって感じ」

「ああ、なるほど。そう言う感じか」

全身の皮を剥がされた少年。お腹に自分の頭を詰め込まれた少女。自分の腕に食らいついた状態で死んでいるやせ細った少年。元の長さの三倍近くまで手足を引き延ばされた少女。

狂った死体の博覧会。

ああ、糞……！

「うるせえな！ 誰だよ、笑ってんのは！！」

さつきからキャハキャハキャハキャハ、耳元でうるせーんだよ！
糞糞クソクソクソくそくそ……！！！！

「ご、ご主人様……？」

クーシーの戸惑いの声でハッと我に返った。

座敷童が静かな眼でこちらを見つめている。誰も笑ってなどいない。だが、聞こえる。無数の子供たちの嗤い声……。

幻聴か？ ……いや、俺はまだ正常だ。ならばこれはこの迷宮のギミック。座敷童たちに聞こえてはないということはマスターだけに作用するトラップか。おそらく、捕らわれているらしい子供たちの魂を利用しているんだろう。

……よし、冷静に考察できてる。俺はまだクレバーで、クールだ。

「あー、どこまで話したっけ。……そうそう、一応何にもしてないわけじゃないんだぜ？ こうして冒険者やってるのもその一環だしな。ここだけの話、クリスマスに一度勝負をかけたと思ってんだ」
「へえ、なるほど危険に身を置いて男を上げようつてのか。お前もなかなかやるじゃねえか。まあそれでクリスマス前に死んじまつたら世話ねえけどな」

「それ、この状況じゃ笑えねえからな？ マジで」

「冗談だよ、アタシがついてるのに死ぬわけねえだろ」

気が狂いそうになるこの空間で、座敷童との何気ないやり取りが俺の心の平穏を守ってくれていた。

死体から目を逸らし馬鹿話をする事で、教室で友達としゃべっているかのような錯覚を得る。

一種の現実逃避だと自分でもわかっていた。

映画や漫画の中じゃあ、キャラクターたちは危機的状況でもジョークを飛ばし合ってる。俺はそれを見て、実際こんな状況でこんな気が利いたことを言えんのかな？　と思っていた。演出のためとはいえ、リアリティーが無さ過ぎると。だが、今ならわかる。

冗談の一つも言っていないと気が狂いそうになるからだ。

監督や脚本家だって馬鹿じゃない。軍人や戦場ジャーナリストたちに死の危険が迫った時のインタビューくらいしてるだろう。

その時の人間の心理的な動きを研究して映画は作られてるに違いない。

……ああ、また思考が変に逸れてる。現実逃避が強まってきているのか？　妙に冷静に分析してるのもその一種か？　こういうのをなんて言うんだっけ？　なんかの映画で見たぞ。ああ、思い出した。正常性バイアスだ。うん、確かそう。

「ぐ、ぐう、ご主人様！」

クーシーの泣きそうな声で我に返った。

「ど、どうした!?!」

「ぬ、主の位置が近いです。もう数分もしないうちに着きます」

「そう、か……」

ズン、と胃が重くなるのが分かった。震えてた足からさらに力が抜けていく。硬いはずの地面がフワフワしてきた気がした。

「ご、ご主人様、すいません！」

突然、クーシーが自分の頭を地面に叩き付けた。這いつくばり、慈悲を乞う。

「ボ、ボクをもう戻してください。ボクじゃ、戦力になれない！」

「あ、足がこれ以上前に行かないんです！ た、戦わなきゃってわかってるのに……！ そう思ってるのに、敵を前にしたらきつと、ボクは戦えなくなるッ……！ それが、自分でもわかるんです！」

全身の毛を逆立て、尻尾を丸めて嗚咽を漏らす……そんなクーシの背中を俺はそつと撫でた。コイツの身体からはお日様の香りがある。ホツとする匂いだった。

「ご主人……？」

今ならコイツの気持ちが本当に理解できる気がした。

実のところ、俺は戦えないコイツを見てなんて使えない奴だと思っていた。グーラーと座敷童がいるからなんとかなってるが、もしコイツ一枚だったらと思うとゾツとする……とすら。

座敷童には斥候として育て上げるといつていたが、お金が手に入ったら買い替えるだろうなと内心では考えていた。

だがこうして自分の命が掛かった状況になって、ようやくコイツの気持ちが分かった。

死ぬのは、怖い。そんなの人間もモンスターも一緒だ。

そんな当たり前のことを理解せず、俺はコイツらを戦わせ続けてたんだ。

「今まで怖いのを我慢してよく案内してくれたな。戻っていいぜ」「ツツ……！」

俺の言葉に、クーシは胸を掻きむしり、頭を地面に擦りつけた。腹の底から、吠える。

「ボ、ボクは……自分が情けないッ！！ 勇気が……欲しいッ！」

彼女の嘆きに、俺はもう一人の自分を見た。

俺がクーシーを臆病者と見下せていたのは、安全なバリアに守られて強いカードたちに代わりに戦わせていたからだ。

TV画面越しに、怪物に襲われ怯える登場人物を嘲笑う様に。

自分は安全を確保していながら、その身一つで恐怖に立ち向かう者を馬鹿にしていた。

だが、こうして初めて死の恐怖を目の前に突きつけられて、俺の化けの皮は剥がされてしまった。

そうしたら、そこにいたのは新米冒険者ではなく、怖すぎてゲロまで吐いたただのガキだった。

勇気が欲しい。強い意思を持って脅威に立ち向かうことの出来る勇気が。

だからクーシー。一緒に少しずつ勇敢になっていこうぜ。

内心でそう告げて、俺は彼女をカードに戻した。

「お優しいこつて」

クスクスと背後から座敷童の笑い声が聞こえてくる。

「カードに気を遣ってお優しいマスター気取りか？ どうせより強くて使いやすいカードが手に入ったら乗り換えるのに、時間と労力の無駄なんじゃねえか？」

内容とは裏腹に、彼女の声は酷く優しかった。

俺は振り向くと言った。

「そんなことはない。俺はコイツをずっと使い続けるぜ。強化して、ランクアップさせて、ずっとずっとな」

もちろんお前もな、とは口には出さなかった。

口にする必要もなかった。

敵に近づくにつれ、楽し気な笛の音色が聞こえるようになった。

もう主の正体は予想がついている。鼠の眷属、少女少女たちの死体、笛の音色……間違いない、敵の正体は【ハーメルンの笛吹き男】だ。

イレギュラーエンカウントの中では有名どころではない。アンゴルモアの際、それほどの被害を出さなかったからだろう。だがそれはイコール雑魚ということではない。むしろマイナーな分、情報に乏しいと警戒すべきだった。

ただそれでも敵が【ハーメルンの笛吹き男】ならば、そのスキルもおぼろげに予想がついてくる。しないよりマシな程度の対策だが、一応は備えもしてあった。

深呼吸を一つ。恐怖が振り切れたのか、思考がどんどん冷えていく。

「行くぞ」

短くカードたちに告げ、歌の発生源へと突入した。

座敷童は既に姿を消している。いろいろ話し合った結果、彼女にはいつも通り自由に動いてもらい、俺はグーラーの命令に専念することになっていた。

「……っ」

そこは森のほとりだった。勢いよく流れる川の淵で、極彩色の縦縞模様の服を着た男が、一心不乱に笛を吹いている。周辺には無数の肉塊が転がり、それを鼠たちが貪っていた。

そんな地獄絵図に一瞬だけ息を止めた俺だったが、すぐに気を取り直しグーラーへと指示を出した。

「放て、グーラー！」

「イエス、マスター」

グーラーが引き絞ったスリングショットを笛吹き男へと放つ。高速で放たれたその弾を俺が目で追うことはできなかったが、弾が何かに防がれたということはわかった。失敗か。だが、確かに見たぞ。あの男の前に無数の音符で構成されたバリアのようなものが一瞬だけ現れたのを。

まずはアレを剥がす必要がある。

物理攻撃に対する防壁か？ あるいは一定以下のダメージの無効化？ あの音符だったただのデザインじゃないよな。音……、笛か？

「おやおや、これは気の早いお客さんだ！ でもおひねりは演奏が終わってからでないとな！」

「！？」

ちょっとやそつとでは驚かない覚悟を決めていた俺だったが、正直度肝を抜かれた。

それは敵が喋り出したから、ではない。話すというならうちのカードたちだって喋る。モンスターが喋るのは普通のことだ。それは敵だって変わらない。

俺が驚いたのは単純に敵の容貌だ。目を閉じて笛を吹いていた時は気づかなかったが、奴の顔は化け物としか言いようのない醜悪な

ものだった。

眼は横ではなく縦に配置され、その中に十数個もの小さな眼球がひしめいている。口は一見普通だが、開くと唇と歯が二重になっているのが見えた。

臭いも酷い。最初は放置された死体たちの臭いかと思ったが、事実まき散らされた臓物からは糞尿と血の匂いが漂っている。この下水道の悪臭を数十倍に凝縮したような臭いは奴の身体自体から漂っているようだった。

マスク付きのゴーグルをしてこれだ。外せば普通に思考することすらままならないかもしれない。

笛吹き男が大仰な身振りで腕を広げる。何かをする気だ！ そう思った俺はグーラーにスリングショットを放ち続けるよう指示を出したが、それは笛吹き男の前に現れた音符の壁に阻まれてしまった。……笛を吹いている間だけ出てくるバリアじゃないってことか？ そんな俺たちを他所に、笛吹き男は滔々と語りだす。

「これよりお聞かせするのは、とある街を襲った悲劇！ あるところにとてもお腹の空いた男がいました。この餓えは普通に働くだけじゃあ満たせない。そう思った男はちよつとした悪巧みを思いつきます。それは手懐けた鼠に街を襲わせ、それを追い払うように見せかけて報酬を得ようというものでした。それではお聞きください。

【いんげんねずみ 蝗鼠のカーニバル】」

言い終わるなり、優雅に笛に口をつける笛吹き男。

すると周辺一帯の鼠たちが一斉に牙を剥いた。同時に、森中から鼠たちの鳴き声が聞こえてくる。不快極まる多重奏。

ちよつとした津波のように迫る鼠たちに、グーラーが俺を肩車のように持ち上げ避難させた。俺は高所から、手に持っていた催涙スプレーを周囲に噴射する。

熊撃退用の刺激物を浴びた鼠たちは、耳をつんざくような悲鳴を上げてのたうち回った。良し、効いている！

だが鼠たちは次から次へと無尽蔵に森から湧いてくる。俺は必死になってスプレーを撒き続けた。

「現れた鼠たちは街中の食べ物食い荒らし、病をまき散らします。街の人々は色んな罠を仕掛け、武器を持って鼠を追い回しますが鼠たちは全く減りません。人々が困り果てていると、男がふらりと現れ言いました。

『私はこの鼠たちを退治する方法を知っています。しかるべき報酬を頂けるならこの鼠たちを一匹残らず退治してしましましょう』

報酬の話聞いた市長はとても悩みましたが、背に腹は代えられないと男を雇うことにしました。

『わかったやつてみるがいい。ただし一匹でも残っていたら報酬は渡さない』

それではお聞きください。【レミングの行進曲】

その曲と共に鼠たちの援軍はピタリと止まった。それだけではない。スプレーを浴びていない鼠たちまでもが水を引く様に森へと帰っていく。なんだ？ なぜ自ら兵を退く？ ……もしかして、物語に沿った攻撃しかできないのか？

「男が笛を吹くと、街中の鼠たちが男の元へとやってきます。男がそのまま街の外に流れる川へと向かっていくと鼠たちは自ら川に飛び込んで死んでしまいました。それを見た街の人々が歓声を上げます。街に戻ると男は市長へと言いました。

『さあ約束は果たしたぞ、今度はそっちの番だ』

ところが市長はなかなか報酬を渡そうとはしません。鼠たちがいなくなり、安心した彼は報酬を渡すのが惜しくなったのです。

『うちの娘たちは渡さない』

約束を破られた男は激怒し、街全体に響くほどの音で笛を吹きました。その楽し気な音色に釣られた街中の子供たちが家から出てきます。それではお聞きください。【サーカスへの誘い】」

それを聞いた俺は身を強張らせた。来る、来るぞ！ ハーメルンの笛吹き男で最も有名なシーンが！

笛吹き男が高らかに笛を吹く。戦闘中とは思えないほどに楽し気な曲調。それを聞いた俺たちに………特に何も起こらなかった。

ここで初めて奴が怪訝そうな顔を見せる。それを見て、俺はニヤリと笑った。

……どうやら対策は上手くいったようだ。

敵がハーメルンの笛吹き男なのではないかと予想した時、俺が真っ先に警戒したのが音による攻撃だった。ハーメルンの笛吹き男は報酬を払わなかった街の子供たちを笛の音色で連れ去っている。ならば、笛による状態異常や攻撃手段を持っているのではないかと予想したのだ。

その対策として、俺はカードたちにあらかじめインカムを付けさせていた。遮音性のしつかりしたそれは、外部の音声を完全に遮断し、かつ俺のマイクからの指示は明瞭に通す。もし聞こえようが聞こえまいが影響を与えてくるようなら不味かったが、どうやら耳に入らない限りは無事のようだった。

ちなみに、俺に関してはカードが場に存在する限りマスターは敵の攻撃の影響を受けないため問題ない。

俺たちの耳に嵌まったインカムに気づいた笛吹き男が激怒する。その不気味な歯を剥き怒鳴った。

「貴様ら！　なんだその耳栓はアアア！　それが人の音楽を聴く態

「度か!!」

「知るか!」

俺はそう言い返し、おひねり代わりに催涙スプレーを投げつけてやった。

それは当然バリアに阻まれたが、狙い通り奴のすぐそばへと転がる。今だ。

「グーラー! スプレーを狙撃だ!」

「イエス、マスター」

マイク越しに俺の命令を聞いたグーラーが、スリングショットでスプレーを打ち抜く。

その瞬間中に入ったガスが破裂し、薬剤が周辺にまき散らされた。その中心にいるのは、笛吹き男。

スプレーの中身は攻撃とみなされなかったのか色のついた空気がバリアに防がれることなく笛吹き男を取り囲むのが分かる。

「どうだ? ……クソ、駄目だ! まるで効いた様子がない。」

「どうやら奴は状態異常への強い耐性があるようだった。」

「おのれ! もはや許せん! この私自らその首を刎ねてやる!」

激怒した笛吹き男が笛をクルリと一回転させると、笛は一瞬にして死神を連想させる大鎌へと姿を変えた。

「近接戦闘へ切り替えるつもりか!」

酷薄な笑みを浮かべて笛吹き男……いや死神が一步踏み出したその時、どこからともなく光弾が死神を襲った。

「むッ!?!」

「!?!?!?!」

咄嗟に身を翻し回避した死神はさすがのもの。だが、俺たちはその行動を見逃さなかった。

躲した！ 躲したぞ！ つまり、あのバリアは笛を持っている時しか現れない！

奴も自らの失敗に気づいたのか、顔を顰めた。

「おのれ、伏兵とは小賢しい！」

「流れが来てるぜ！ グーラー、フェーズ3だ！ 攻め立てろ！」

命令を受けたグーラーが、死神に迫る。

大鎌を構え撃退の体勢を取る死神だったが、そこへ座敷童の光弾が次々と襲った。

「こ、こんな……く、力さえ、力さえ制限されていなければ！」

次々と居場所を変えながら攻撃しているのだろう、光弾は四方八方から放たれている。姿の見えない狙撃手に、死神は防戦一方となっていた。

そこへ、グーラーがスタンロッド片手に殴りかかる。上半身を逸らし躲す死神。その右足を光弾が穿った。膝をつく。そこへグーラーのスタンロッドが振り下ろされた。首を傾け頭部への直撃を避けた死神だったが、肩へとスタンロッドが叩き込まれる。バチン、と放電の光。一瞬、ほんの一瞬だけ身を硬直させる死神。

しかし電撃にも耐性を持つのかすぐさま大鎌を振り構えだが、座敷童にはその一瞬で十分だった。

「……バカ、な」

光弾が死神の胸を穿つ。死神は信じられないと言った風に見

開き、ぐらりと身体を傾け、そして消えた。

「……………」

沈黙。俺の心臓の音だけがやけにやかましく響いている。

しばし様子を見て何も起こらないのを確認し、ようやく理解した。

「……………倒し、た？」

それは独り言に近いものだったが、返事はすぐに返ってきた。

「ああ、アタシ達の勝ちだ」

いつの間にか傍らに来ていた座敷童を見る。グーラーも、俺の方にゆっくりと歩いて来ていた。

スツ、とのたうち回っていた鼠たちが姿を消していく。主の消滅により眷属たちもまたその命を失ったのだ、と遅れて理解した。

それでやっと実感が湧いてきた。
勝った。俺は、生き残ったんだ。

「……………はあああああ」

どさり、と力なく地面に座り込んだ。

まず俺の胸に湧き上がってきたのは、喜びではなく安堵だった。死なずに済んだ、その安心感だけがあった。俺のカードたちを失わなかったことを安堵した。

やがて、達成感が湧いてきた。必死こいて勉強して、テストで百点を取った時の何倍もの達成感。

自信も生まれた。あのイレギュラーエンカウトを、初の主戦で倒したのだ。

しかも何の事前情報もなく。俺って結構才能あるかも、と自画自賛したい気分だった。

俺のカードたちはこんなにすごいんだぜ、と誰かに自慢したくなつた。

最後に、それらすべてを吹き飛ばすくらいの感謝の気持ちが湧いてきた。

もし俺のカードがコイツらじゃなかったら、まず間違いなく死んでいた。

特に座敷童。こいつは道中も戦闘中も本当に俺を助けてくれた。この小さな少女が元気づけてくれなきゃ主と戦う前に俺の心は折れていた。戦闘中だって、ここぞという場面で光弾を討ち、バリアの謎を解いてくれた。トドメだってコイツだ。

今の戦いを見て、誰がコイツをハズレカードだなんて思う？ 相場の半額以下？ 馬鹿言え、相場の十倍、百倍だってみんな欲しがるぜ。

本当に、ありがとう。そうとしか言いようがない。

そんな思いを乗せて座敷童を見て 凍り付いた。

死神が、彼女の背後で、鎌を振り上げていた。耳元まで裂けた口で残忍に嗤う。

「 サプライズ。エンターテインメントは意外性がなくちゃネー！」

やめ。

そんな言葉が口が出る前に、鎌が、振り下ろされた。

第十話 頼むから絵本から出てくんな。(後書き)

【Tips】感想

作者のやる気に直結する栄養素。

人間は食べ物がなくても「感動」を食べるだけで生きていけるらしいが、作者は「感想」がなければ生きていけないか弱い生物なのである。

感想お待ちしております。

第十一話 金で買えない価値がある

その時、すべてがスローとなった。

振り下ろされる鎌。背後の敵に気づいた座敷童が身を捻りながら躲そうとするが、あまりに手遅れ。どう足掻こうともその鎌は少女の華奢な身体を引き裂くだろう。

座敷童のような後衛型のカードは、総じて生命力と防御力が低い。ランクの差があるとはいえ、大ダメージは確実。あの大鎌にもどんな特殊効果があるのか。下手すれば、一撃でロストすることもあり得るだろう。

ロスト——座敷童を失うと考えた時、全身に鳥肌が立つのを感じた。

待て、待ってくれ、それだけは。

目が合う。座敷童は、悔しそうな、それでいて泣きそうな顔をしていた。

なんだよ、それ。そんな顔……。

そこでスローになった世界が終わった。

そこからのことは、本当に一瞬のことで、俺は最初何が起こったのかわからなかった。

「ッ!？」

何かが座敷童を突き飛ばした。ソイツは、肩から袈裟切りにされて真っ二つになって崩れ落ちる。

何だ？ 何が起こった？ 自問し、すぐ自答した。馬鹿が、決まってるだろうが。そんなことができるのは一人しかない。

グーラーだ。隣に立っていた彼女が、座敷童を庇ったんだ。その意味を理解した時、俺と座敷童は同時に咆哮した。

「嗚呼ああああアアアアアアああ！！！！」

見えないラインが繋がる感覚。座敷童の怒りが俺に流れ込み、俺の怒りが彼女に流れ込む。

二人分の激情を乗せた座敷童が怒涛の弾幕を放った。死神がフツと姿を消し、弾幕が空を切る。

瞬間移動。この隠していたスキルで死んだように見せかけたのだ。現れないドロップアイテムと、死神が消えてから時間差で消えた鼠たちで、それに気づくべきだった……！

同時に、奴が生きている絡繰りも連鎖的に理解する。今も奴の胸元には大穴が空いている。致命傷。にもかかわらず何事もないかのように動いていたのは、実に簡単な理由から。

奴は、頭を潰さなければ死なないのだ。それがアンデッド系の特徴。この異様なまでの悪臭で、気づくべきだった。

すべては俺の経験不足のせい。
だが、今はそんなことどうでもいい。

「グーラー！！」

俺は上半身だけとなってしまったグーラーを抱き上げた。彼女は虚ろな瞳で俺を見上げている。

まるで感情のない瞳。だが実際にはそう見えるだけで感情はちゃんとある。

それを俺たちは今、確かに目にした。

——なぜなら、俺は仲間を庇えなんて命令をしていなかったのだから。

コイツは、自分の意思で座敷童を庇ったのだ。

絶対に助けてやらなくては。大丈夫だ、コイツはアンデッドだ。頭を潰されない限り死なない。そして屍喰いによる再生能力もある。俺は周囲を見渡し、鼠の死体がいくつも転がっているのを確認した。よし、良かった。どうやら奴が消せたのは生きている鼠だけだったようだ。

俺は死体を運ぶと、グーラーの傷口を合わせ、鼠を与えた。

グーラーは、俺が何も言わずともそれを喰らう。

やはり、自分の考えで動ける範囲が広がっている。

転がっていたすべての鼠を与えると、どうにか体の芯の方は繋がったようだった。

その途端立ち上がるうとするグーラーを押しとどめる。

「待て、まだ動ける身体じゃあない！」

その俺の命令に、グーラーが動きを止める。そして、訴えかけるような眼で俺を見上げた……ような気がした。

グーラー……。だが今は戦わせるわけにはいかない。

そうこうしているうちに、死神がさらなる行動に移る。

「男は街中から子供たちをかき集めると、そのまま森へ連れ去ってしまいました。大人たちは子供たちを連れ戻そうとしますが、どこからともなく現れた鼠たちがそれを邪魔します。彼らはそこでようやく一連の流れを仕組んだのが誰かを知りました。無事、大好物の子供たちを手に入れた男は、豪勢に楽しむことにしました。

『今夜はご馳走だ！』

森には子供たちの奏でる悲鳴が演奏となって響き渡ります。それではお聞きください。【仔羊たちの晩餐会】」

その宣告と共に死神の胸の大穴から無数の音符が飛び出す。音符たちは出鱈目に宙を彷徨っていたが、そのうちの一つが座敷童目掛けて飛来すると、大きく歯を剥いた。

「なっ！」

座敷童が飛び退きながら襲いかかってきた音符を打ち落とす。すると音符は……いや、音符のように見える子供たちの魂が、苦悶の表情を浮かべて悲鳴を上げた。

「良い音楽とは生きた音のことです。どうです、私の旋律は。実に活きが良いでしょう？」

「くたばれ、下種が！」

座敷童は憤怒の形相を浮かべ光弾を放つも、そのすべてが音符の魂に防がれてしまう。

逆に、音符たちが弾幕となって襲い掛かってきたことで防戦一方となってしまうた。

それを見たグーラーが、ググツと身体を動かそうとする。

「グーラー！」

「マスター、ご命令を」

「！」

グーラーが命令を求めてくるのはこれが初めてだった。間違いない、自我が……ここにきて急速に成長してきている。

それは俺に喜びと、躊躇を与えた。

彼女が自分の意思で仲間を救おうとしている。それは嬉しい。だが、だからこそここでコイツを失ってはならないという躊躇いを生んだ。

俺は、どうすれば……。

視線を落としたその時、俺は胸元が微かに光っているのに気付いた。

これは……。

ホタルの光のような淡い点滅をするクシーのカードは、何かを俺に訴えかけているかのようだった。

クシー、そうか……。

「グーラー、戻れ。よく頑張ったな。あとは、俺とコイツに任せとけ」

「マスター」

ぼんやりと俺を見上げるグーラーの頭を撫で、彼女をカードに戻す。

さあ、行くぞ。

「クシー!!」

それは、自分を奮い立たせるかのような咆哮と共に現れた。

「グオオオオオオオオオオ!!」

大気を震わす轟音。獰猛に歯を剥きだし唸るその姿は、いままでの気弱な子犬の姿ではなかった。

それを証明するように、カードのスキルも変貌している。

【種族】クーシー

【戦闘力】150

【先天技能】

- ・妖精の番犬
- ・集団行動

【後天技能】

- ・従順 忠誠（CHANGE!）
- ・臆病 小さな勇者（CHANGE!）
- ・本能の覚醒（NEW!）

弱虫だった子犬は、群れの危機に初めて勇気を灯し、ここに勇者に至った。

あまりにちっぽけな勇者。だがその姿はまさしく俺にとっての希望だった。

敵の姿を捉えたクーシーが、弾丸のごとく死神へと駆ける。

「ヒヒ……」

死神は向かってくるクーシーに気が付くと、大鎌を構え迎え撃つ。それに対しクーシーは地面スレスレまで身を屈め、跳ねた。

死神の顔色が変わる。躲そうと身を捻った死神だったが、あまりに遅い。クーシーの鋭い鍵爪が、二の腕の肉をごっそりと抉る。着地したクーシーが更なる追撃を掛けようとしたとき、音符の魂がクーシーを襲う。振り払おうとしたクーシーだったが、爪は音符を素通りし、音符が腕に纏わりついた。クソ、あの音符……ただの技じやあなく、死霊系のモンスター扱いなのか！

さらなる音符たちがクーシーを襲わんと殺到した時。

「調子に乗んなよ！」

座敷童の光弾が音符たちを消し飛ばした。さらには彼女が軽くクシーの腕を掃うだけで、纏わりついた音符も消えていく。

「音符はアタシに任せな。ちよつと癪だが、あの糞野郎をぶん殴るのはお前に譲ってやるよ」

「グルルルル……」

クシーはコクリと頷き、死神へと飛びかかった。

迎え撃つ死神だったが、身体能力は完全にクシーが上回っている。ここにきて、本来のランク差によるステータスの違いが活きてきた。銀色の旋風が、少しずつ、少しずつ、敵の肉体を削り取っていく。

飛来する音符たちは座敷童が打ち落とし、もはや勝負の天秤はこちらに完全に傾いていた。

俺が脳裏に勝利を描いたその時、死神が再び語り出した。

「子供たちを失った大人たちの怒りは、報酬を支払わなかった市長へと向きました。」

『アンタが報酬をちゃんと支払えば！』

この流れは、ヤバイ……！

「ソイツを止めるおおお！」

俺の叫びにクシーたちの攻勢は一層強まるが、死神の口は止まらない。

「市長は言います。」

『あの鼠を操る姿を見ただろう、最初から仕組まれていたんだ！』
ですがもはや人々は言葉では止まりません。哀れ、市長は街の住

民にバラバラにされてしまいました。後には眼と足が不自由な市長の二人の子供が残されたのでした。それではお聞きください。【「ハメルンの笛吹き男」】

その宣告と共に音符たちが凄まじい悲鳴を奏で出す。

カードのバリアに守られた俺ですら、耳を塞いで蹲るほどの音量。その影響を真っ先に受けたのは、インカムをつけていないクーシーだった。耳から血を流した彼女が、ぐらりと身体を傾ける。次に、インカムをつけているはずの座敷童までも地面に倒れ伏した。

なぜ？ その俺の疑問はすぐに解決した。倒れた座敷童の足と眼に、黒い霧が纏わりついている。眼と足……童話では目の見えない子供と、足の不自由な子供だけが街に取り残された。これはその逸話を模した状態異常か！

一瞬にして形勢逆転されてしまった。

死神が、満面の笑みを浮かべて俺を見る。それに思わず後ずさりしたその時、奴の姿が掻き消えた。

一体どこに！？

その答えはすぐ背後から聞こえてきた。

「これにて演奏会はお仕舞い。楽しんでいただけましたかな？ お代はあなたの命で頂戴します」

振り返った俺が見たのは、大鎌を振り上げた死神の姿。思考が急激に加速する。

マスターへの攻撃はカードが肩代わりする。それはつまり俺に攻撃をすれば効率よくカード全体にダメージを与えられるということであり、そして俺自身は何の防御力も持たない脆弱な人間でしかない。

一撃だけなら、なんとかカードたちも耐えられるかもしれない。

だが、続けて攻撃されればその結果は明白。その先に待つのは……。俺はなんとか身を捻り躲そうとするが、加速した感覚に比べ俺の動きはあまりに鈍かった。

スローになった世界を、死神だけが普通に動いている。ま、間に合わな——。

その時ガクンと何かを踏み外したような感覚と共に俺の動きが一気に加速した。

鼠の体液で足を滑らせたのだと判明したのは、戦いの後。座敷童のスキル「禍福は糾える縄の如し」による幸運の賜物だった。

俺の頭スレスレで大鎌が通り過ぎていく。無様に尻餅をついた俺の頭上を、深緑の弾丸が奔った。大鎌ごと奴の両腕が宙を飛び、ク——シーが軽やかに着地する。

(クーシー！ 助かった！ だが、なぜ動けた！？)

思考が支離滅裂に交差する。

答えは、死神が答えてくれた。

「【勇者】スキルか！」

そう言う死神は、純粹に驚いているように見えた。小さな勇者、あのスキルが状態異常をレジストしたのか。あるいは、座敷童の幸運付与も手伝ったのかもしれない。

とにかく、最後の最後で、幸運の女神が俺に微笑んだのは確かかなようだった。

死神が笑う。

「キヒヒ、しょうがない。今回は、お代は結構。また次回お会いした時、いただきますしよう」

「……何度会っても踏み倒してやる」

「なんてお客だ！」

それが、ハーメルンの笛吹き男の最後のセリフだった。わざとらしい驚きを浮かべていた奴の頭がひとりでに吹っ飛び、一拍遅れて俺の上に身体が覆いかぶさってくる。腐った血液が顔に吹きかかってきた。

……クソツタレ、なんて置き土産だ。

吐き気を必死で我慢していると、奴の身体と血が少しずつ薄れていく。あとには、血のように紅い小石と長い縦笛が残された。

それが、今度こそ戦闘が終わったのだという実感を、俺に与えてくれた。

とにもかくにも……。

「つ、疲れたあああ……」

戦利品を抱えたまま地面の上に大の字になって寝っ転がる。

「ご、ご主人様！ 大丈夫ですか？」

すぐにクイーシーが駆け寄ってくる。犬の顔でもわかる気弱そうな顔。俺の知るいつもの彼女だ。どうやらカツコイイモードはもう終わってしまったらしい。

耳には血がついているが、座敷童に癒してもらったのか耳が聞こえない様子はない。

「だらしねーな。お前は戦ってねーだろうが。むしろ八面六臂の活躍をしたアタシを労われや」

さっそく軽快に嫌味を飛ばしてくる座敷童。こっちも優しいモードは終わってしまったらしい。その眼と足になんの異常もないこと

だけ確認し、俺は一安心した。
よっこらせ、と身体を起こす。

「わかってるよ、ちゃんとご褒美は考えてあるって」

「お？ なんだ？ もしかして、お菓子の家とか？」

「座敷童さん、カードがマスターに報酬をねだるなんて」

そう窘めるクーシーだが、その揺れる尻尾は期待を隠せない。

「まあそういう物理的な報酬はコイツを換金してからにするとして、今はすぐに渡せるもんだけだな」

「ここで渡せるもん？ なんかシヨボそうだな」

「まあそうだな。なんせただの名前だしな」

苦笑しながらそう言う俺だったが、カードたちの反応は劇的だった。

クーシーがピンと尻尾を立て、座敷童が真剣な顔つきで俺に問いかける。

「お前……それがどういう意味か分かって言ってるのか？」

「もちろん」

カードに名前を付ける。それは冒険者とカードの一種の契約だ。名前を付けたカードは初期化できなくなる——つまり二度と売ることができなくなる。

基本的に冒険者はカードを育て、金を稼ぎ、それまで使っていたカードを売り、貯金と合わせてより上のランクのカードを買う……というサイクルでクラスを上げていく。

モンコロで活躍した冒険者のカードなどは、オークションに出すことで相場の倍以上の値段で売れることもある。

冒険者にとってカードとは株式のような資産運用の一種でもあるのだ。

ゆえに、カードに名前をつけるといえるのはある意味では冒険者失格の行為ともいわれている。

俺も、最初カードを買う際にくれぐれも考えなしに名前をつけないうよう重野さんに注意されたものだ。

だが、名付けにはメリットもある。それはカードの蘇生が可能になるということだ。

仮にモンスターが死んでしまってもソウルカードという形でカードの情報が残り、未使用かつ同性同種族のカードを消費することでそのままの人格、容姿のまま復活させることができるのだ。

……本来なら、座敷童やクーパーたちはこの蘇生用のカードだったのだろう。蘇生に必要なカードは、性別と種族さえ一致していればそれがどんなスキルを持っていようが関係ない。故に、通常の使用が出来ないカードであっても一定の需要はある。あの日、重野さんが言っていたことはそう言うことなのだろう。

多分、重野さんは俺がそのまま座敷童を売り払い、そのお金でもっと扱いやすいカードを買おうと思っていたのではないだろうか。

だから、座敷童の買取値段を俺に告げたのだ。

しかし、俺はそのまま座敷童たちを使い続けた。

もし俺がコイツらを売り払って扱いやすいカードに切り替えていたらどうなっていただろうか。おそらく、ここまで真正面にカードたちと向き合わなかっただろう。

使いやすいが故に、便利な道具として見ていたんじゃないだろうか。

そしてそのままイレギュラーエンカウトと遭遇し、死んでいたに違いない。

俺の初めてのカードたちがコイツらで良かった。

本当にそう思う。

だから決めたのだ……コイツらを一生手放さないよ。

「まずは座敷童、お前の名前は蓮華だ^{れんか}」

「蓮華……」

一見すると黒髪黒目のコイツだが、よく見てみるとつつすらと朱が混じっているのが分かる。それがなぜか俺に蓮華の花を連想させたので、蓮華と名付けた。読み方を変えたのは、そちらの方が少しだけ可愛いからだ。

「次にクーシー、お前はユウキだ。カタカナでな」

「ユウキ……！」

クーシーの名前をカタカナでユウキにしたのは、色々な意味を持たせたかったからだ。こいつは今回勇気をもって俺の希望となってくれた。その勇気と希望を合わせた勇希でもいいし、優しいということでも優希でもいい。いろんな意味を込めてこいつをユウキと名付けた。少し安直だが、コイツにはストレートな方がいいだろう。

ここにはいないがグーラーの名前もちゃんと考えてある。イライザだ。コイツの名前についてはかなり悩んだ。最初はグーラーというところで吸血鬼関連から名づけようかと思っていた。だが、今回座敷童……蓮華を庇ったコイツの行動を見て止めることにした。

そこで思いついたのが、人形が人間になった逸話のピグマリオンだ。自ら作った人形に恋した男が、恋焦がれるあまり衰弱しそうになるのを哀れに思ったアフロディーテという女神が人形を人間に変えてあげるギリシャ神話。原典ではその人形の名前は出てこないの
で、それを元にした映画『マイ・フェア・レディ』のヒロインの名前からとることにした。

あとでちゃんと命名してやるつもりだ。

「ご主人様！　ありがとうございます、ボク、ボク、これからはちゃんと頑張りますから！」

目を潤ませたユウキが尻尾を干切れんばかりに振って礼を言う。

「あーあ、これで死んでもこのへボマスターの面倒を見なきゃいけなくなっちゃうたか。まったくんだ貧乏くじだ」

この蓮華の言葉をちゃんと訳せない奴は、ツンデレ検定初級からやり直した方がいいだろう。

見ろ、ユウキの奴すら察して苦笑してるじゃねえか。

俺とユウキが視線を交わしていると、それに気づいた蓮華がまなじりを吊り上げた。

「お前ら！　何が可笑しいんだ、ああん？」

「ちょ、ちょっとやめてくださいよ！　イタツ！　ちょ、なにやって！」

ユウキの背中に飛びつき毛をむしり始める蓮華。そんな二人に苦笑しながら、俺は広場の奥へと目を向けた。

そこには、豪華な装飾の施された宝箱と、帰還のためのゲートが宙に浮かんでいた。

通称ガツカリ箱と呼ばれる迷宮踏破の報酬だ。

未だじゃれ合う二人を他所に、ガツカリ箱へと歩いていく。

奴が腰かけていた子供の死体はいつの間にか無くなり、今では土で出来た小山に代わっている。森の雰囲気も、上層階に徐々に近づいてきているようだった。

初の迷宮踏破の報酬に、否応なしに俺の心が高鳴っていく。

ゆっくりと箱に手を伸ばしたその時。

「あ！ お前なに勝手に開けようとしてんだよ！」

背中に蓮華が飛びついてきた。思いのほか柔らかな感覚と、熱い体温、それと花の良い香りに心臓が跳ねた。

「抜け駆けはズリーぞ！」

「あ、ああ。悪かったよ」

「わかりやあいなんだよ。ホラ、祝福してやる。良いのが出るぜ？」

ポツ、と俺の身体が一瞬だけ淡い光を纏う。どうやらスキルを使ってくれたらしい。コイツ……本当に協力的になったよな。

出会った頃とのギャップにほっこりしつつ、皆で箱を開ける。

そこには――。

「……なんじゃこりゃ？」

「魔石と、……ポーションですかね？」

白い小石と、試験管サイズの瓶が入っていた。

小石の方は、踏破報酬の魔石だろう。白い魔石は、通常の魔石に比べて中に秘めるエネルギー量が多いらしく、階層の深さに応じてギルドが買い取ってくれる。ここなら大体六万円つてところか。瓶の方は、鑑定してみないことには正確なところはわからないが、おそらくはもっともポピュラーな報酬……ポーションだろう。

患部に振りかければ傷を一瞬で癒し、飲めば胃や内臓を整えてくれ、風呂に一瓶入れればお肌も艶々、口に含んでおけば虫歯だって治る。そんな夢の薬と持て囃されたポーションも、供給の増加に伴いどんどん市場価格を落としている。

これだと、一回使いきりで……一万円つてところか。回復魔法が

あるうちのパーティーではあまり使い道がないアイテム。売るか……いや、売るよりも母さんや妹にあげた方が喜ばれるかもしれない。そんな命懸けの報酬としてはあまりにお粗末な報酬に、これがガツカリ箱と呼ばれている理由がなんとなくわかった。

「こんな豪華な箱にしょぼいもん入れてんじゃねーぞ！ 金銀財宝でも詰めてる！」

ゲシゲシとガツカリ箱を足蹴りにする蓮華に苦笑しながら、俺は不思議と納得していた。

まあこんなもんだよな、フランクの迷宮報酬なんて。実にしょぼいこの報酬が、逆に俺に安心感を与えてくれる。

考えてみりゃあ、ここまで俺はツキまくってた。たった百万円でコイツらを当てるなんて、どう考えても人生の運を使い果たしてる。もしかして、今回ハーメルンの笛吹き男なんてイレギュラーな強敵とぶち当たっちゃまったのは、その揺り戻しなんじゃないか？

そう考えると、この報酬も悪くないと思えた。

うん、どこにでもありそうな小石と、ポーションなんて俺らしいぜ。

でもそう思えるのは……。

楽し気にはしゃぐ二人を見る。

——もう金で買えないモンを手に入れたからなのかもな。

第十一話 金で買えない価値がある（後書き）

【Tips】カードの名付け

カードには固有の名前をつけることができる。名付けされたカードは初期化することができなくなるため、売却が不可能となる。一方で、ロストしてもそのカードの魂を宿したソウルカードが残され、同種族・同性の未使用カードを消費することで復活させることができるようになる。

カードをカード以上に大事に思ってしまったマスターへの救済措置。

冒険者の間では、カードに名付けするマスターは「恥ずかしいヤツ」のレッテル張りをする風潮がある。

第十二話 誰が北島だ

クルリ、クルリとペンを回しながら、俺はその時を待っていた。もうすでに出来ることはやり尽している。見直しは何度も終え、残された数分という時を静かに過ごしていた。

未だ最後の瞬間まで足掻いている奴らは一握り。机に噛り付くようにしてペンを走らせている。

……あんなに書くことあったっけ？ 同じ教室で勉強してきたはずなのに、俺は不思議でならなかった。

そこで、チャイムが鳴った。担当教師が声を張り上げる。

「はい、そこまで。ペンを机の上に置きなさい」

途端、教室中からため息が漏れた。俺もグツと背伸びをする。

今日は中間テストの最終日。俺たちはテストという地獄から解放されたのだ。

「あゝ、終わったあ」

「マジでいろいろ終わったわ。半分もわからなかった」

教師が教室からいなくなるなり、東西コンビが声をかけてくる。

「マロは今回どうだった？」

「俺はいつも通りだよ。6〜70点つてところじゃねえの？」

俺の答えに西田が顔を顰めた。

「ってことは今回の平均点はそんなぐらいか。赤点は平均からマイナス20点だっけ？ 俺、数学ちよっとやべえかも」
「人の点数を指標にすんのやめてくんない？ 平均以上かもしれないじゃない」

……まあ多分平均点だろうけど。なぜか中学の頃からずっとテストは平均点なんだよな。この高校も偏差値普通だし。どこまでも平凡なわが身が恨めしいような、そうでもないような。

「とりあえず、どっか遊びに行くか」

「マロもさすがにテスト期間中はバイトないだろ？」

「おう、今日はさすがにな」

「うし！ じゃあどこ行く？ 久々にカラオケでも行くか」

そんなことを話しながら俺たちが教室を出ようとしたその時。

「っと……」

「あ」

ちょうど教室に入ろうとしていた誰かとぶつかりかけた。……南山だ。両手が濡れている、トイレにでも行っていたのだろう。

南山が俺たちの存在に気づき、眉を上げる。東野たちも笑みを消した。

………気まずい空気が流れる。

これが他のクラスメイトだったら、多分俺たちはすぐに道を譲っただろう。あるいは、相手が譲ってくれるか。そこに他意はない。だが相手が南山と分かった時、俺たちはどうしてか道を譲りたくないと思ってしまった。

一方で、南山もまた、俺たちに道を譲りたくない、と思っている

のがなんとなく分かった。

奴は今やクラスカーストのトップグループだ。本来なら、俺たちが譲るべき力関係。

しかし俺たちの中では、コイツが自分たちより上という認識はなかった。

それは、あっさり友人関係を破棄された意地みたいなものがあったのかもしれない。

——あのさ、気軽に話しかけてくんなよ。俺とお前らじゃもう、ほら、わかるだろ？

かつて、それまでと同じように遊びに誘った俺たちに、コイツが言い放ったセリフが脳裏に蘇る。

東西コンビもその時のことを思い出しているのだろう、顔が険しい。

そんな俺たちを見た南山がフンと鼻を鳴らした。

「……邪魔なんだけど」

「……ッ！」

それに西田が何かを言おうとした時。

「南山くん？ どうしたん？」

後ろから小野の声がし、振り返るとそこには高橋たちリア充グループと数名のクラスメイトがいた。当然、四之宮さんと……牛倉さんの姿もある。

「どうした？ なんかあったのか？」

高橋が爽やかな微笑みを浮かべ尋ねてきた。

「あ、もしかして南山を遊びに誘ってたとか？ あー、悪い！ 俺らが先に誘っててさ。こういうのは早い者勝ちってことで、な？」

「あ、いや……」

片手を上げて謝る高橋に氣勢が削がれる俺たち。南山とは違う真のリア充オーラに完全に気圧されていた。

「そう言うわけじゃねえって。悪い悪い、今荷物取ってくるわ」

南山は笑いながらそう言う俺たちを強引に押し退けた。

東野がグツと唇を噛みしめる。

これが、今の俺たちのクラス内の力関係だった。

そのまま俺たちがリア充グループを見送ろうとしたその時、四之宮さんがふと思いついたように言った。

「あ、そうだ。よければマロっちも来る？ カラオケなんだけど」

「！？」

その場に衝撃が走るのが分かった。全員が眼を剥いて俺を見る。

俺はエスパーではない……はず。だが今、俺は確かにみんなの心の声を聞いた。

すなわち、なんで四之宮さんがこのモブを！？ だ。

「あ、いや……」

咄嗟のことにつまぐ舌が回らない。

すると小野が俺たちの間に割って入った。

「いやあ、どうも北……えっと、北島くん？　は東田くんと西野くんらいつものメンバーと遊びに行くみたいだし、誘ったら迷惑掛かるんじゃないかなあ？」

「お？　なら三人ともくるか？　二部屋借りればみんなで行けるだろ。それかボーリングに変えるか？」

高橋の提案に顔色を変えたのは、南山と小野だった。

その他のメンバーも顔を引き攣らせている。

クラスメイト達も俺たちと南山の微妙な関係は知っている。誰も喜ばない提案だ。

高橋は俺たちの関係を知らないのだろうか？　あり得る。高橋は自他共に認める野球馬鹿。クラス内の微妙な人間関係には疎いイメージがある。そもそも南山の存在を認識したことすら、冒険者とカミングアウトしてからだろうしな。

それまでの南山はただのクラスメイトA、その友人関係など把握してないだろう。

だがこの反応を見るに小野はそのことを知っていたらしい。コイツは結構クラス全体と付き合いがあるからな。

とにかく、この提案に頷くのはあり得ない。グループも二部屋で分かれることになるし、絶対に盛り下がる。他のメンバーからの絶対断れよという視線をヒシヒシと感じた。東野が慌てて言う。

「い、いや、俺たちはいいよ、うん。みんな楽しんで来てくれよ」

「そうか？　残念だな……」

あっさりと引き下がる高橋に小野がすかさず便乗する。

「じゃ、北島くんたちもそう言ってることやし、今回は残念やけどつてことだ」

「う、うん」

小野の目配せに取り巻きのクラスメイトたちが慌てて頷く。これで一件落着かと思われたその時、四之宮さんがポツリと言った。

「あのさ、小野」

「な、なに？」

名指しで呼ばれた小野が若干動揺しながら答える。

「さつきから思ってたんだけど、北島じゃなくて北川ね。北川歌麿、江戸時代の絵師と同じ名前。クラスメイトの名前くらい覚えてなよ」

「え……あ、ああ。そうやな、ごめん、北……川くん」

「あ、ああ……気にしてないから」

「うん。……じゃ行こか」

その言葉と共に教室を出ていく高橋たち。

あとには俺たち三人だけが残され。

「おいおいおい！ どういうことだよ、マロ！」

「お前いつの間に四之宮さんと仲良くなっただよ！」

東野たちが一斉に詰め寄ってきた。ガツと胸座をつかまれる。鬼気迫る表情。南山に向けていた以上の敵意、いや殺気を感じる……！

「いや知らない知らない知らない！ え、どういうこと!?!？」

慌てふためきつつ弁明するも、二人は欠片も信用してくれなかった。

「知らねーわけねーだろ！　じゃあなんであの四之宮さんがお前なんぞをカラオケに誘うんだ？　ああん？」

「つかなんでお前の名前だけ訂正されんだよ！　俺らも間違われたのに！」

「いやそれは……あ、もしかしてあれか？」

俺が小さく漏らした言葉に、二匹のピラニアは俊敏に食いついた。

「やっぱなんかあったんだな！　吐け！　この裏切者が！」

「裏切者って……単純にこの前保健室に行ったとき、四之宮さんも休んでてちよつと自己紹介したただだよ。それで覚えてたんじゃねえの？」

「……それだけ？」

「それだけ」

その言葉で二人はやつと俺の胸座を離してくれた。

「ふーむ、つてことは単純にマロの名前は覚えてて俺らの名前は憶えてなかったつてことか？」

「カラオケに誘ったのもただの気まぐれなのかね、あるいはちよつとからかってやろうと思っただけとか？　あり得るな」

「……つかお前ら、お姉さんとかロリが好きだったんじゃねえのかよ」

俺が首を擦りながら文句を言うと、二人は口を揃えて言った。

『それはそれ』

「つか常識的に考えてロリと付き合えるわけねえだろうが。現実的な恋愛対象はやっぱり同年代になるっての」

「このクラスめっちゃ可愛い子多いよな。四之宮さんを初めて見た

時マジでビビったわ。え、アイドルクラスじゃんって」

「マロだっておっぱい星人だけど、貧乳の美少女にコクられたら付き合うだろ？」

「……確かに！」

なんとという説得力。

そりゃそうか。好みは好み、理想は理想。手の届きそうなところに美人がいたら普通に恋愛対象だよなあ。

「つか彼女欲し〜」

唐突に東野が言った。西田が強く頷く。

「高校生になりや自然と彼女出来ると思ってたのに……全然その気配ないんだけど、どういうこと？」

「あー、俺も思ってたわ。っていうかさ、その延長で大人になれば普通に結婚して子供出来ると思ってたけど、この調子で行くと……」
「おいやめろ」

二人の会話を聞きながらふと思う。

彼女か、確かに欲しい。というか、リア充になりたい理由の半分がそれだ。

冒険者になれば巨乳で可愛い彼女が出来るかも、という儚い期待があった。

ハーメルンの笛吹き男との闘いで、死の危険を身近に感じた今となっても、その思いは薄れていない。

むしろ死にかけた分、何としてでもリア充になるという想いが強まっていた。

……命を賭けなきゃ彼女もできそうにないのが悲しいところだが。

「クリスマス、間に合うかねえ」

俺は小さく呟いた。

月日の流れというものは早いもので、俺が冒険者となってから早一月が経過した。

俺はこの間、毎日のようにダンジョンに挑み続け計十個のダンジョンを踏破していた。

最初のダンジョンに一週間も掛けていたとは思えないほどのハイペースな攻略だが、これにはもちろん絡繰りがある。

まずは、学校がある日は数時間程度で踏破できる低階層のダンジョンを狙って攻略していったこと。

次に、あらかじめダンジョン内の地図とモンスター傾向を調べてあったこと。

最後に、何よりもハーメルンの笛吹き男との激闘が俺たちの絆を深め、大きく成長させてくれたことが大きかった。

これが、今の彼女たちのステータスだ。

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】305（55UP!）

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し
- ・かくれんぼ
- ・初等回復魔法

【後天技能】

- ・零落せし存在
- ・閉じられた心 自由奔放（CHANGE!）：何にも囚われな
いありのままの心。自由行動への+補正、精神異常への耐性、一部
の拘束スキルの無効化
- ・初等攻撃魔法

【種族】グラー（イライザ）

【戦闘力】140（30UP!）

【先天技能】

- ・生きた屍
- ・火事場の馬鹿力
- ・屍喰い

【後天技能】

- ・絶対服従
- ・性技
- ・フェロモン
- ・奇襲

- ・虚ろな心 静かな心（CHANGE!）：感情を抑制し冷静さを失わない心。精神異常への強い耐性、思考能力の向上。
- ・庇う（NEW!）：仲間の元へ瞬時に駆け付け身代わりになることができる。使用中、防御力と生命力が大きく向上。
- ・精密動作（NEW!）：より正確な動作を可能とする。

【種族】クージー（ユウキ）

【戦闘力】175（25UP!）

【先天技能】

- ・妖精の番犬
- ・集団行動

【後天技能】

- ・忠誠：仕えるべき主を見出した証。忠誠心に応じてステータスの向上。
- ・小さな勇者：詳細不明。
- ・本能の覚醒：野生の本能を解放する。理性と引き換えに身体能力を向上させ、同時に精神異常への耐性を下げる。

・気配察知（NEW！）：五感を強化し、隠密系スキルを見破りやすくする。

三枚とも大きく戦闘力が向上し、スキルを成長させた。

蓮華は、マスターへの不信感から持っていた閉じられた心のマイナススキルを、自由奔放へと変化させた。

もはや、彼女の中にマスターへの隔意はない。

戦闘にも積極的に参加するようになり、戦闘の補助から戦利品のドロップ率向上までそのサポート役の資質をどんどん開花させつつあった。

特に戦利品のドロップ率については、通常の三倍以上にもなっている。これほどドロップ率が違うともなれば、座敷童はプロ必需品となってもおかしくないはずだが、実際はそうでもないのが不思議だった。

まあ、単純にドロップ率を増加させるスキルが他にも多いだけなのかもしれないが。

次にイライザについてだ。

彼女は、虚ろな心を静かな心へと変化させ、ついに自我の確立を果たした。

今では少しばかり思考が鈍いものの、自分の意思でモノを考え行

動が出来るようになっていた。

もつとも、その心はまだまだ成長中で、本人の気質もあるのかも
しれないがあまり喋らず表情も変えない。

それでも物静かな彼女なりに仲間を大事に思っているのは確かな
ように、静かな心へのスキルの変化と共に庇うという援護用のスキ
ルを手に入れた。

これは、目の届く範囲なら高速で駆け付け仲間の身代わりになる
スキルで、ハーメルンの笛吹き男戦での経験が大きく影響している
と思われた。

このスキルを知った蓮華とユウキたちも、イライザに庇われない
様にと連携力の向上を目指すようになり、良い相乗効果が生まれて
いる。

そして地味に、スキルの影響が目の充血がなくなってきたのが、
俺としては嬉しい変化だった。

最後に、ユウキについて。

彼女については、ハーメルンの笛吹き男戦でのスキルの変化も交
えて説明する必要があるだろう。

まず、彼女は従順スキルを忠誠スキルに、臆病を小さな勇者へ変
化させ、本能の覚醒と気配察知というスキルを手に入れた。

このうち、忠誠、本能の覚醒、気配察知という三つのスキルにつ
いてはギルドで簡単に調べることが出来たのだが、あの戦いで大き
な役割を果たしたと思われる小さな勇者に関してはいまいちよくわ
からなかった。

どうも、一部の特殊なスキルを無効化したり、自分や仲間のスキ
ルの効果を向上させたりする効果があるらしいのだが、効果が発動
したりしなかったりと不安定で、よくわからないというのが正直な
ところのようだ。

ある日突然消え失せていた……なんて報告も有り、謎と浪漫に満
ちたスキルとしてその筋では有名なスキルらしい。

逆に残りの三つについては良く知ることが出来た。

忠誠は、そのカードが主に向ける忠誠心に応じてステータスを向上させることが出来る。

割合は最大で20%ほど。主が忠誠心を損ねるような行動ばかりしていると、スキルを失ってしまうこともあるらしい。

気をつけたいところだ。

本能の覚醒は、動物系のモンスターが良く取得するスキルで、理性と引き換えに身体能力を向上させるというシンプルな効果。

反面、理性を失えば失うほど精神異常への抵抗率も低下していつてしまう、なかなかピーキーなスキルのものである。

……と言っても、精神攻撃をしてこないダンジョンを選んでいけばほとんどデメリット無しで使える上、どうやら小さな勇者の適用範囲に含まれるらしく、ユウキに関してはマックスまで強化しても理性を失う様子はなかった。

ちなみにステータスを向上と身体能力を向上という表記の違いだが、これはステータス向上が魔法攻撃力や状態異常耐性まで幅広くあげるのに対し、身体能力の向上は筋力や反応速度などの運動能力に限られるらしい。

最後に、気配察知の隠密系スキルを見破りやすくなるという効果についてなのだが……。

どれほどの察知力があるのか蓮華のかくれんぼで実験してみたところ、なんとなく居場所がわかるというふわっとした感じに落ち着いた。

時間をかければ匂いなどで追跡できるそうなのだが、当然移動するスピードの方が速く、また消えた姿を見破ることはできなかった。

とは言え、隠密系のスキルを持っていない敵ならば相当離れたところからでも感知できるようになった辺り、索敵要員として育て続けた甲斐があったというものだ。

さて、以上でカードの成長については終了。次はこの一月の戦果について説明しよう。

俺はこの一月で、ハーメルンの笛吹き男戦を含め十個の迷宮を踏破した。

その総階層数は、五十。Fランク迷宮の踏破報酬の魔石は階層数×一万円で計算されるため、魔石の金額だけで五十万円の報酬を得た形となる。

ここから、ギルドで買った迷宮の情報代九万円を差っ引いても四十一万のプラスだ。

さらには、道中の戦闘で手に入れた戦利品が、魔石にして六万円程度、カードにして六十四枚。Fランクのカードを使っていく気はないため、全部売却したところ約七万円程度となった。

忘れてはいけないのが、ガツカリ箱から出る魔道具だ。

Fランク迷宮から出る魔道具など大したものではないが、これがなかなか馬鹿にできなかった。

以下がその内訳だ。

- ・ミドルポーション×1 10万円
- ・ローポーション×3 3万円
- ・発火石×4 2万円
- ・臭い袋×2 2千円

なお、FからDまでのランクの魔道具の買取価格は市場価格の10%である。

当然売らず、自分で使うことにした。

軽い骨折や切り傷程度ならば瞬く間に癒してくれるミドルポーション

ヨンは、いざという時の備えに。魔物寄せの臭い袋と、投げつけることで初等攻撃魔法一発分の威力になる発火石は日々の攻略に使い、ローポーションは妹と母にプレゼントすることにした。

怪我の治療には役に立たない最低ランクのポーションであっても、風呂に垂らせば美肌効果、手に振りかければ手荒れを一瞬で癒し、飲めば体調を瞬く間に整えてくれる効果がある。日常使いするには高級品過ぎるだけで、あればあるだけ便利な品なのだ。

だが、これらの戦果もハーメルンの笛吹き男で得た戦利品の前には霞む。

あの戦いで俺たちは赤い魔石と縦笛という二つの戦利品を手に入れた。

赤い魔石は、イレギュラーエンカウトだけが落とす特別なものらしく賞金込みで百万もの大金で売れた。これでもイレギュラーエンカウトの魔石としては最安値で、ランクが一個上がることに買取金額が十倍に跳ね上がっていくというのだから、金銭感覚が狂いそうだった。

そしてもう一つの縦笛。これは、ギルドで鑑定してもらったところ【ハーメルンの笛】という魔道具だった。

効果は、空間転移。ダンジョン内に限るが一度行った階層への転移を可能にするというものだった。

レアアイテム中のレアアイテムである。空間転移の魔道具は大半が一度切りの使い捨て、その上深い階層でなければドロップしないとあって、プロの冒険者たちに非常に高値で取引されている。

その空間転移がいくらでも使い放題な魔道具など国内でも数例しか発見されていない。

それこそ、殺してでも奪い取る、となってもなんらおかしくない代物だった。

ただし、これがイレギュラーエンカウトからのドロップでなければ、だが。

イレギュラーエンカウントからのドロップは、それを倒したもののしか使うことが出来ない。

この事実が、俺の首を皮一枚でつないでくれた。

もしこれが誰にでも使える代物だったら、俺は即手放していただろう。

今はまだFランク迷宮しか攻略していないため実感が薄いけど、これから冒険者を続けていくならその恩恵を思い知ることになるに違いない。なぜなら、高ランク迷宮は数十階という階層で構築されているのだから。

なお、ハーメルンの笛の存在を言いふらして要らん恨みを買いたくなかった俺は、この笛をカード化してもらったことにした。

ギルドでは、物品のカード化というサービスを行っており、有料ではあるが個人では持ち運びできないような大量の物資も一枚のカードに収めてくれる。

一度カード化した物は何度でも出し入れすることが出来、また持ち主以外が取り出すこともできない。

これを利用して迷宮の遠征物資の運搬にも活用される他、貴重品の保管にも用いられている。

俺はこのカード化を利用してどうしても目立つハーメルンの笛を隠そうと考えたのだ。

誤算だったのは、その費用でさっかり百万円掛かってしまったこと。

ハーメルンの笛吹き男の魔石が百万円で売れ、その笛のカード化がこれまた百万円。……何者かの意思を感じたのは俺の気のせいだろうか。

レアアイテムのハーメルンの笛、現金五十四万円とその他消耗品アイテム。これがこの一か月のリザルトだ。

おっと、それともう一つ。

これらの実績を持って俺は二ツ星冒険者への昇格試験を受けられ

るようになった。

試験の内容はギルド指定のEランク迷宮のソコ踏破。

そして既に俺たちはその半ば以上まで攻略していた。

第十二話 誰が北島だ（後書き）

【Tips】カード化

冒険者ギルドでは、特殊な魔道具を用いて物品をカード化するサービスを行っている。小さな指輪だろうが一軒家だろうが一回百万でなんでもカード化してくれる。カード化されたモノは、モンスターカード同様所有者以外は召喚することができなくなるため、財産の保護などにも使われている。主人公のように転移の魔道具など持たない一般の冒険者たちは、このサービスで大量の物資をカード化し、泊まり掛けで深い階層へと潜っている。

なお、このカード化の魔道具を入手した際は絶対にギルドに報告し売却しなければならないという法律がある。もしも隠し持っていることが発覚した際は、即逮捕されて公安の厳しい取り調べを受けることになる。

第十三話 変なおっさんの使ってた笛とか……ちょっと無理っス

三ツ星までの冒険者は一般的にアマチュアクラスと言われている。法律的には一ツ星であろうと四ツ星であろうと冒険者は冒険者なのだが、なぜ四ツ星を境に世間の目が変わるかということ、三ツ星までは比較的簡単に昇格できると言われているからだ。

一ツ星の冒険者には、金を積むだけでなれる。

二ツ星には、Fランク迷宮を十回踏破し、ギルド指定のEランク迷宮を踏破すればなることが出来る。

三ツ星も同様だ。普通にランクに見合った迷宮を踏破していき、昇格試験を受ける。それだけ。

いずれも、『Dランク以上のモンスターカードを所持していること』という但し書きがあるが、冒険者になる時に一枚は必ず買わされる為あってないような条件だ。

低ランクの迷宮でカードを失うような間抜けを振るい落とすためだけの条件だろう。

しかし、冒険者のほとんどが三ツ星までスムーズに進めるのかという決してそうではない。

冒険者登録をした者たちの半数近くがEランクで一度は躓くと言われている。そのさらに半分が、そのまま二ツ星を諦める。休日だけ迷宮探索を楽しむエンジョイ勢になるのだ。

その最大の理由は、十数階という一日では到底踏破できない道の長さとその道中にある罫の数々にある。

モンスター以外に何の障害もないFランク迷宮ですら、地図があ

つても一階層につき1〜2時間は掛かる。

罾を警戒しながら進むとなれば、進行速度はさらに落ちる。罾は一定期間ごとに配置が換わる為、ギルドで情報を買うこともできない。

それが、十数階と続くのだ。どうしても泊まり掛けの攻略になる。この時点で、社会人や中高生は脱落する。仕事や学校を休まない限り、Eランク迷宮の踏破は到底できないからだ。

それでも大学生やフリーターであれば、時間の都合はつけられる。が、日を跨いだ迷宮攻略というのはFランク迷宮での迷宮攻略とは雰囲気があつたく異なる。例えるならピクニックと本格的なキャンプの違いといったところか。

一日中歩き続けて進めるのは五階から十階が限度。

それを、突然現れるモンスターに警戒しつつ、罾を探り、さらには水や食料を背負って進むのだ。

軽い気持ちで冒険者になった者たちが続けられることではない。

自衛隊ですら、迷宮が現れた当初退職者が続出した。まあ、当時はカードの効果が判明していなかったというのが最大の要因ではあるが。

結果、大学生たちは本格的な冒険者部に所属してプロを目指して仲間たちと遠征に励むか、エンジョイ勢で集まってヤリサー染みたサークルを作るかの二択に分かれるらしい。

Fランク迷宮と馬鹿にすることなかれ。俺が一月で五十万も稼げたように、片手間でも十万、二十万稼ぐのは簡単なことだ。

正直、手堅くFランク迷宮を毎日のように踏破していく方が中途半端にEランク迷宮に挑むより儲けられるという面すらあった。

迷宮は、踏破報酬が一番美味しいからだ。

Eランク迷宮では罾による被害とモンスターの襲撃のコンボによ

りDランクカードを失うことも珍しくない。それだけで、百万から最高一千万近い損失が生じる。それが唯一のDランクカードだった日には目も当てられない。

リスクを冒してEランク迷宮より日帰りでエンジヨイ攻略。そんな見出しを、コンビニの雑誌でよく見かけるくらいだ。

俺も、当初はこのエンジヨイ勢ルートに行くつもりだった。学生的身でEランク迷宮はハードすぎるから、と。

だが、今は違う。

俺にはハーメルンの笛という冒険者垂涎のレアアイテムがある。これさえあれば、わざわざ泊まり掛けで攻略する必要もない。時間というアマチュアクラス最大の壁が、俺には存在しないのだ。

それ故に、俺はテスト勉強の傍らEランク迷宮の攻略を進めるということすらできていた。

多分、これがなかったら俺はどこかで三ツ星になるのを諦めていただろう。

戦力についてもCランク一枚、Dランク二枚とEランク迷宮に対して過剰なほどに充実している。

残りの障害は、もはや畏れだけだった。

テスト明けの休日。俺は攻略途中のEランク迷宮へと来ていた。

ギルドによって指定されたこの迷宮は、石造りの通路を蝟燭の炎が照らす、THE迷宮と言った感じのスタンダードなものである。

この迷宮について、俺は事前に一切情報を仕入れることが出来なかった。未知に対する適応力も、試験の内だからだ。

俺も、試験を受ける際にこの迷宮についての情報を外部に漏らさないよう、契約書を書かされている。

通路は狭めの印象で、頻繁に分岐があり俺たちを惑わしてくる。スマホのマップピングアプリのおかげで迷うことはないが、進めば進むほど体内の方向感覚が狂っていくのがわかった。

通路の先には学校の教室を一回り狭くしたような小部屋がところどころ有り、モンスターはそこでしか出現しない。

不意の遭遇を警戒しなくて済むのはありがたいが、逆に言えば一階層ごとに必ず一定回数以上の戦闘を強いられるということでもあり、索敵で戦闘を避けていくスタイルの俺たちにとっては煩わしい仕組みでもあった。

もつとも、この小部屋の存在も悪いことだけではないのだが……。

「イライザ、笛を吹いてくれ」

迷宮に入った俺は、いつもの三枚——Eランク迷宮となり、召喚制限が四枚となったことでもようやく全員を同時召喚できるようになった——を呼び出すとさっそくイライザに指示を出した。

Fランク迷宮では時折他の冒険者と遭遇することもあったのだが、この迷宮は一般公開されていないため、試験中は俺の貸し切りである。

その為、安心してハーメルンの笛を使うことが出来た。

「　　」

イライザが拙いながらも曲を奏でていく。

……この笛吹き役、誰が言うでもなく、自然と彼女の担当となっていた。

あの不気味な笛吹き男が残した笛……なんとなくみんなが口をつけるのを嫌がり、唯一そう言う感情が無さそうなイライザに役が回ってきたのだ。

それになんとか罪悪感を抱いていた俺たちだったが、思いのほ

か彼女はこの笛を気に入った様子で、休憩時間などに曲の練習などを始めるほどだった。

今では、転移の際に拙いながらも一曲披露してくれるようになった。

演奏が終わると俺たちの目の前に黒く渦巻く球体が現れた。迷宮の入り口に存在するものとまったく同じものだ。

この空間のゆがみを通ることで、到達済みの階層の安全地帯へと一瞬で転移することが出来る。

ただし、笛に蓄積された迷宮の情報は、誰かが迷宮を踏破した段階で笛から消えてしまう。

つまり、一度攻略したことのある迷宮の最下層にいきなり転移して、お手軽に踏破報酬をもらい続けることは出来ないというわけだ。残念。

ゲートを通ると、俺たちは最前線である12階層の安全地帯へと転移した。

転移系の魔道具は、ハーメルンの笛に限らず、基本的に安全地帯から安全地帯へとしか飛ぶことができない。

階層内のどこにでも転移が可能であれば、探索にも敵から逃げるのにも便利なのだが、さすがにそれは贅沢というものだった。

「よし、行くっ」

先頭をイライザに、少し離れてユウキ、俺、蓮華という隊列で進む。

イライザを先頭にして少し離れて進むのは、彼女がうちのパーティーの罨解除役だからだ。

罨の知識がギルドで買える教本頼りの俺たちにとって、罨の解除は実際に喰らって学習していくというやり方になってしまう。

その役目は消去法的に、痛覚が存在しないアンデッドのイライザとなってしまうていた。

戦闘中は味方を庇い、嫌な笛役を押し付けられ、危険な罠の解除までやらされる。

申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、健気で勉強家の彼女は少しずつだがこの迷宮の罠に適応しつつあった。

と、そこでイライザがピタリと足を止める。

「……マスター、前方の床の色が違います。おそらく、落とし穴の罠と思われます」

自我が目覚める前よりも流暢に喋るようになった彼女が、そう報告してくる。

俺は、彼女の後ろから目を凝らす、正直ここからではまったく違いが判らない。そもそも通路自体が薄暗く、壁際に一定間隔である蝋燭頼りのため非常に見通しが悪い。ただの人間である俺に識別などできるはずもなかった。

しかしそれはユウキと蓮華も同じだったようで、しきりに首を傾げている。

「イライザ、それで俺たちはどうすればいい？」

「通路右端は通常通りの色をしている為、落とし穴は左端から中央までの物と思われます。私がまず右端を通りますので、マスターはそれを確認の上お通りください」

「わ、わかった」

俺が頷くと、イライザは迷いのない足取りで進んでいく。

「安全を確認しました。お通りください」

「お、おう」

おっかなびつくり落とし穴を避けて通っていると、蓮華が後ろから話しかけてきた。

「いつの間にか指示を出す側から出される側が変わっちゃったな。このまま行くと、いつかイライザが司令塔になるんじゃない？ あれっ、お前って本当に要るの？」

ニヤついた笑みを浮かべる蓮華を、俺は鼻で笑う。馬鹿め……。

「一体いつから俺が必要だと錯覚していた？」

「なん、だと……。いや、その返しはさすがに予想外だったわ。言われてみれば、その通りだな……。」

驚きに目を見開いた後、妙に納得したように何度も頷く蓮華。

いや、そこで本当に納得されても……と、俺は自分でネタを振ったくせに少し悲しくなった。

実際、敵が強くなるにつれて俺が戦闘に関われる機会はほとんどなくなっただが……。

戦闘中に指示を出すにも限界があるし、防犯グッズなんかもいずれ効かなくなってくるだろう。

高ランクのモンスターなどは、人間の動体視力以上の速さで動くという。そんな戦場での確に指示を出すのは不可能だ。

上位の冒険者たちはそのへんどうやってるんだろうか？ ただ突っ立てるだけ？ そう言えば、モンコロの冒険者なんかは手足みたいにカードを操ってるよな……なにか絡繰りがあるのか？ 単純に仕込みが上手いだけ？

ふとした疑問に考え込んでみると、俺が落ち込んでいると思ったのか愛犬ユウキがフオローを入れてくれた。

「蓮華さん、マスターあつてのボクらですよ。イライザさんをあそこまで育てたのもマスターじゃないですか」

「お、さすが忠誠アピールのチャンスは見逃さないな。よっ、犬の鑑！」

「犬で結構。わんわん」

「お手もしてみろよ、ワン公。それともチンチンの方が良いか？」

「良い犬は主人以外にしっぽを振らないものです」

一見すると仲が悪いやり取りにも見えるが、二人の雰囲気は柔らかい。

うちの三枚はいつしか、ちょっと意地悪だが本当は優しい長女、真面目で面倒見の良い次女、無口で勉強家な三女という三姉妹の關係となってきた。

見た目の年齢が長女、次女、三女で逆転していくのが面白い所だ。

「マスター、分かれ道です」

「お、えっとアプリによれば前回は右に行って行き止まりになっているな。真つすぐの道は7割マップが埋まってるが、左は手つかずか……。うーん、よし左に行こう」

「了解しました」

スマホ片手に分かれ道を左に進み、次の丁字路を右に進む。

そうやって地図を少しずつ埋めていくと、ユウキが言った。

「マスターの持つてるそれ、本当に便利ですよね。これさえあれば道に絶対迷わないし」

「まあ基本はな。でも迷宮の罫によってはこういう電化製品を破壊したり、すべての光を吸い込む罫の通路とかあって、頼り切ってるととんでもないしっぺ返しにあうらしい」

「え、それ大丈夫なんですか？」

「まあそう言うところはギルドで注意喚起してるから事前にわかるだろうから多分大丈夫だろ。……そういう痛い目を早めに見させるためにこの迷宮にもあるってパターンは普通にあるだろうけどな」

「アタシがそのギルドって奴らなら間違いなくそうするな」

「ギルドの性根が蓮華ほどひん曲がってないことを祈るしかないな」

「だったら大丈夫そうですね」

「おい」

そんなことを話していると、前方に扉が見えてきた。一見何の変哲もない木製の扉である。

「が、こんな扉一枚でも油断できないことを俺たちはここまでの攻略で思い知らされていた。」

「……どうだ？ 罠はありそうか？」

イライザはしばし扉を様々な角度から観察していたが、やがて振り返ると言った。

「こちら側には何の形跡も見られません」

なら罠はなさそうだな……とはならないのが迷宮だ。

「これまでにこのパターンであったのは、開けた瞬間に扉が爆発する罠。弓矢が飛んでくる罠。扉の先に落とし穴があるパターンの三つでした。すいませんが今の私には判別が付きません」

「わかった……悪いが、いつものを頼めるか？」

「イエス、マスター」

いつもの。つまり体当たりの漢解除である。

俺の頼みに何の躊躇もなく頷くイライザ。

俺たちが距離を取ったのを確認すると、彼女は勢いよく扉を開け放った。

ガキンツと何かが作動する音。

部屋の奥の暗闇から何かが放たれた。

それはイライザの脇をすり抜け――。

「……あ」

俺は掠れた声を漏らしながら、呆然と自分の胸元を見下ろした。

――そこには一本の矢が深々と刺さっていた。

第十三話 変なおっさんの使ってた笛とか……ちょっと無理っ
ス

どさり、と地面に座り込む。

「あ……あ……」

震える手で矢に手を伸ばすが、力が入らず上手く抜くことが出来
ない。

ようやく矢を抜き取り。

「危ねえ〜〜！」

俺は深々と安堵の息を吐いた。

迷宮産の新素材を用いて作られたタクティカルベストは、見事に
クロスボウの矢から俺を守り切ってくれていた。

カードのバリア機能はマスターの肉体を完全に保護してくれるが、
その身に着けた衣服まではその限りではない。

そのため、こうして防具に矢が刺さったりしてマスターを驚かせ
るといふ事態もたまに起こりうる。

ちなみに、酸性の攻撃を受けて真っ裸になる女性冒険者もいると
かないとか。

そんなことを考えている間にも、蓮華たちは部屋に突入し戦闘を
開始していた。

彼女たちは、矢に打たれた俺を見てもチラリと横目で確認するだ
けだった。

冷たい……わけではない。ダメージを肩代わりできる彼女たちは、俺が無傷であることなど俺よりも早く気づいていたのだ。

むしろ、迅速に動けた彼女たちを称賛すべきだろう。

……でも、本当はちょっとだけ心配して欲しかったりして。

そんな甘えを頭を振って掻き消すと、俺は彼女たちの後を追って部屋へと入った。

普通に考えれば、マスターは敵の出現しない部屋の外で待つのが安全だ。

だが以前外で戦闘の終了を待っていた際、倒しても倒しても際限なくモンスターが現れ続けるということがあった。おまけにドロップもなし。

おそらく、迷宮はマスターが部屋にいるかどうかで戦闘終了を判定しているのだろう。

一体どういう仕組みで、どういった思惑からそうしているのかわからないが……。

それ以来、俺も必ず部屋の中に入ることにしていた。

部屋の中に居たのは、四体のモンスター。石でできた大男に、口元から火を漏らす黒い犬、大袋を持った老人と黒い霧……。

大男と黒い犬は戦ったことがある為すぐわかった。ストーンゴーレムとヘルハウンドだ。

だが、老人と黒い霧は初見である。

十階層を超え、Eランクモンスターが出るようになると敵の強さと多様性がぐんと増した。

単純な戦闘力もそうだが、そのスキルの厭らしさも厄介だ。

ストーンゴーレムもヘルハウンドも戦闘能力は高いが妙な搦め手を使うタイプではない。

ならば、こつという時は――！

「まずはその老人から片付ける！」

「OK！ わざわざ殺さなくてもそのうちぼっくり逝きそうだな！」

ユウキが老人に飛びかかり、蓮華が後ろから光弾を放つ。

すると、その軌道上にストーンゴーレムが割り込んだ。その石の身体でユウキの爪と光弾を防ぐ。

頑丈さが売りのゴーレムだったが、上位ランクの連撃には耐えられず無数の石礫となって崩壊していった。

ゴーレムが命と引き換えに作り出した一瞬の影。そこからヘルハウンドが現れ、小さな座敷童へと飛びかかった。

それに気づいた蓮華だったが、動けない。いや、動かない。

金色の影がヘルハウンドと蓮華の間に割り込む。瞬間移動のように素早い動き。

イライザだ。

プロテクターをつけた左手でヘルハウンドの牙を受けた彼女は、噛みついたまま火炎を吐く黒犬を地面へと叩き付け、スタンロッドを押し付けた。

「ギャンツ！」

死んでも離さぬ、という気概すら感じさせたヘルハウンドは、しかし電流の力で無理やり顎を開かされてしまう。そこに逆にイライザが噛みついた。捕食者と被捕食者が入れ替わった瞬間だった。

結局、真っ先に殺すはずだった老人と黒い霧がその場に残ってしまった。ほんの数秒、たったそれだけの順番の前後だったが、それで老人が仕掛けるには十分だった。

老人が背中の大袋を部屋に撒く。袋の中身は、砂であった。……目つぶしか？

なんだその程度かと一瞬だけ拍子抜けし、すぐに気を張り詰めた。馬鹿な、そんなはずはない。ストーンゴーレムとヘルハウンドが命

を懸けてまで稼いだ時間だ、他に何かある。

しかしそんな俺の思いとは裏腹に、うちのカードたちに何かが起こった様子はない。

ユウキの爪が老人を切り裂き、光弾が黒い靄を打ち抜く。それで戦闘は終わった。

「……………結局、この砂は何だったんだ？」

俺の呟きに蓮華が答える。

「んー、多分眠りの粉だな。これが撒かれた瞬間、ちょっとだけ眠りなくなった。余裕でレジストしたけどな」

「なるほどな」

眠りの砂か……………危なかった。眠りは戦闘中だとシヤレにならないくらいヤバい状態異常だ。幸いうちのカードたちは状態異常の耐性がある奴らばかりだからなんとかだったが、レジスト出来なかったらそのまま全滅していた可能性もある。

「それで、コイツは……………と。ゲツ、ナイトメアじゃねえか」

俺は黒い靄が落としたカードを拾い上げ、呻いた。

ナイトメア……………悪夢を操るといわれるモンスター。ただの悪夢と言っただけ、夢の中であればコイツはワンランク上程度のモンスターならば容易く殺す力を持っている。反面、現実世界ではほとんど無力に近いのだが……………。

「ザントマンとナイトメアのコンボかよ。Eランクに上がって、いきなり難易度が上がってきてねーか？」

ストーンゴーレムがガード、ヘルハウンドがアタッカー、ザントマンがサポートで、ナイトメアが眠った相手の即死役か……。

Fランク迷宮までのようにDランクカード一枚のゴリ押しじゃあ、普通にロストもあり得るな。下手すりゃ全滅することもあるんじゃないか？ この構造なら即部屋を出れば死ぬことはないだろうが……地上までの帰還は一人では無理だろう。

そうなれば、ギルドへと糞高い金を払って救助隊を呼ぶしかない。当然その金額は自己負担となっており、Fランク迷宮ならば百万程度で済むが、Eランク迷宮となると一千万近く掛かる。

毎年それで莫大な借金を背負う奴が一定数出てくる。俺が両親を説得するときに一番のネックとなったのもそこだった。

「さて、そろそろお楽しみタイムと行くか」

そう言って俺が眼を向けたのは、いつの間にか部屋の中央に現れた宝箱だった。

これが、このタイプの迷宮の最大のメリットだった。小部屋での戦闘を強いられる反面、稀にガツカリ箱が出現するのだ。確率で言えば……大体5%くらいか。

中身は当然Fランクの踏破報酬よりもしょぼい。ほとんどが千円程度の消耗品で、ポーションなどは当たりの部類に入る。その上、ガツカリ箱には高確率で罠が仕掛けられていた。

中身もしょぼい上に罠もあるとなれば普通はスルー推奨だ。にもかかわらず俺たちがガツカリ箱に挑み続けるのは極まれに大当たりが含まれているからに他ならない。

その大当たりの名は、スキルオーブ。使うだけでカードにスキルを覚えさせられるという夢のような魔道具である。

迷宮の外には持ち出せない、使うまで中身が分からず必ずしもメリットだけのスキルとは限らない、という条件はあるがお手軽にカードにスキルを得られるとあっては食いつかずにはいられないアイ

テムだ。

俺たちは潜り始めた比較的当初に偶然スキルオーブをゲットして以来、ガツカリ箱の魅力に取りつかれてしまっていた。

ちなみに得たスキルオーブは、技術系——スキルオーブはその色で大体のスキル傾向が分かる——のスキルだったため、誰に与えるか迷った結果イライザに与えることにした。

グーラーという種族の性質上、イライザの動きはどうしても精彩さが欠けるものとなる。鈍いというよりも荒いというべきか。技術系のスキルはそう言った動作に補正を与えてくれるスキルのため、これが少しでも改善されればと彼女に与えることにしたのだ。

これが結果的に大正解だった。

彼女が得たスキルの名は、精密動作。動きの精密さを上げてくれるスキルで、まさに彼女に最適のスキルだったからだ。

まず戦闘中の動きが滑らかになり、庇うなどのスキルの発動も素早くなった。演奏の練習中、もどかし気にしていた指の動きも思い通りに動かせるようになってきたようだ。それは今も向上し続けている。

何より一番の収穫は、彼女が畏の解除が出来るようになったことだ。

これまでは不器用過ぎて、不死身の身体で喰らって解除することしかできなかった畏を、事前に解除できるようになったのである。

無論、その成功率はまだまだ低い。しかしこのまま経験を積んでいけば畏解除のスキルを目覚めさせる日もくるだろう。

そう、俺たちは確信していた。

「よし、それじゃあイライザ開けてくれ」

「イエス、マスター」

念のため距離を取って俺たちが見守る中、イライザがガツカリ箱へと挑む。

鍵穴と格闘すること数分。カチリという音と共にゆっくりとふたが開いた。イライザがこちらを振り向き――。

「申し訳ありません。失敗しました」

その胸には深々と矢が刺さっていた。

『イ、イライザさあぁん！』

俺たちは慌ててイライザに駆け寄った。

彼女が解除スキルを覚える日は、まだ遠い。

第十三話 変なおっさんの使ってた笛とか……ちょっと無理っ
ス（後書き）

【Tips】魔道具

迷宮からは多くの魔道具が出現する。傷や病を癒せるポーションはその最たる例であり、ほかにも魔法が使えるようになる杖、聖剣、魔剣、空飛ぶ絨毯、無限にパンが出てくるパン籠など夢のようなアイテムが存在している。しかし中には、猿の手のように不幸をもたらす魔道具も確認されている。

基本的に高ランクの迷宮ほど良い魔道具が出現するが、低ランクの迷宮でも激レアの魔道具が出現することもある。その逆もあり、高ランクの踏破報酬で【大人のおもちゃ】が出たこともある。

第十四話 小悪魔な小生意気

翌日、俺たちの迷宮攻略は完全に行き詰っていた。

「うーん、おかしいな。なんで階段がねえんだ？」

ガリガリと後頭部を掻きながら呟く。

アプリのマップを見ても、地図は完全に埋まっている。行き止まりは自分で入力するシステムのため、勘違いで行き止まりとしてしまった可能性はゼロではない。

だが、ちゃんと壁を視認してからアプリに打ち込んでいたため、入力ミスや勘違いはないという自信はあった。

他に考えられる可能性としてあるのは、二つ。抜け道があるか、あるいは複数回廊か。

前者ならもう一度注意深くこの階層を巡ればよいが、後者だった場合は最悪だった。

複数回廊とは、途中の階層で複数のルートに階層が枝分かれしている構造のことを言う。

いわば一つの迷宮に複数の迷宮が内包されているようなものであり、その場合の攻略時間は激増する。高ランクの迷宮ではすべての回廊の最奥にいるモンスターを倒さなければ主へのルートが開かないなどのギミックがあるとも聞く。高ランクの迷宮攻略が遅々として進まない最大の要因だとも。

しかし、この迷宮は所詮Eランク。そんな迷宮に複数回廊？ ちよっとピンとこない。

その一方で、これはギルドの試験だ、いろんなケースを内包していてもおかしくない、という思いも浮かぶ……。

現に、この迷宮に出てくるモンスターは非常に幅広い。

一階から十階まではFランクモンスターが出てきていたのだが、これがこれまで踏破したFランク迷宮の総集編のような多様さだった。

であれば、罾やギミックも数こそ少ないが一通り揃えている可能性があるのでないだろうか？

考え過ぎだろうか？ いや、しかしそんな経験を積ませるためにこの迷宮の情報をすべて封鎖していると考えれば辻褄は合う。

「いつまでも考えていてもしょうがねえだろ。とりあえず、この階層をもう一周隅々まで巡ってみようぜ。駄目だったら上の階でまたやる。それを延々と繰り返せばいい。別に、今回落ちたって何度でも挑戦できるんだろ？」

「ん、ああ……そうだな」

今回の試験、攻略期限は一月と定められているが、回数などは特に決められていない。むしろ三回失敗したらギルドで情報を購入出来るようになるなど恩情措置が図られているほどだ。

……確かにコイツの言うとおりだ。トライアンドエラーの気持ちでやってみるか。

こういう時、グイグイと前に引っ張ってくれる蓮華の性格はありがたかった。

階層の入り口まで戻った俺たちは右手まわりにこの階層をもう一巡し始めた。

一度倒した部屋のモンスターたちもすでに再出現していて一からの攻略となっていたが、むしろ経験値を稼ぐ機会だと割り切った戦うことにした。

そうして六部屋目の扉を開けた時。

「ん？ おおおおおお！？」

俺は部屋の中にいたモンスターの一体に目を見開いた。

そこに居たのは、三体のモンスター。内二匹はもはやお馴染みとなったヘルハウンド。だが残りの一匹は、十センチほどの大きさの小さな少女だった。

小さな身体、褐色の肌、蝙蝠のような羽……間違いない、インプだ！

冒険者となって初めて遭遇したEランクの女の子モンスターに、俺は興奮を抑えきれなかった。

「うおおお！ 行け！ 倒せ！ なんとしてもあのインプを手に入れる！」

そんな俺に蓮華が呆れたように言う。

「何興奮してんだ？ インプなんて今までも遭遇しただろうが。カードも落ちただろ？」

「馬鹿野郎、それは男だろうがッ。女の子じゃあ全然話が違っんだよ！」

「……まあ倒すけどさあ。あんま期待すんなよ」

ため息を吐き、蓮華が光弾を放つ。それが戦闘開始の合図となった。

まずは、二体のヘルハウンドを片付ける。これまで何度も戦ってきた相手だ。ユウキとライザは作業染みた動きで黒犬たちを叩き伏せ、首を噛み千切った。

インプは部屋を縦横無尽に飛び回りながら魔法を放っていたが、

蓮華の魔法に防がれ、途中からは逃げ惑う一方となっていた。

この小悪魔の厄介なところはその回避能力で、小さく飛び回ることとあつてとにかく攻撃が当たらない。最初会った時は、とにかく倒すのに苦労させられたものだ。

もつとも、今となつては対処法の分かつた安牌に過ぎないが。

俺はマスクをかぶると、仲間たちを後ろに避難させ催涙スプレーを噴射した。

殺虫剤を浴びた虫のようにポテツと地面に落ちるインプ。その可愛らしい顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしてのたうち回っている。そこに、無慈悲にユウキの前足が振り下ろされ、あっさりと消滅した。

前足を上げたユウキが言う。

「あ、マスター！ インプのカードが出ましたよ！」

「なにい！？ マジか、でかした！」

俺は駆け寄ると、インプのカードを拾い上げた。

カードの中には、生意気そうな笑みを浮かべた銀髪の少女が描かれている。外見年齢は蓮華と同じくらいか？ 西田の奴が泣いて羨ましがりそうなロリ美少女だった。

「うおおお、マジで女の子カードって落ちるんだなあ！」

「当たり前だろ、すべてのカードはそうだったの」

冷めた目で蓮華が言う。それに少しだけテンションを抑えつつ俺は説明した。

「いや、そうなんだけどさ。あんまりにも女の子モンスターと遭遇しないもんだから、どっかで生産されて極少数が市場に出回ってるんじゃないかと」

「んなわけねーだろ。で、それは使うのか？ Eランクだけど」
「ん、そうだな」

その蓮華の問いに、顎に手を当て考える。

売るか、使うか。売るというのも正直悪くはない。Eランクカードの買取価格は一万から十万。このインプは女の子カードなので、最低でも5、6万は行くだろう。

が、それはあくまでギルドに売った場合の話。女の子カードの場合にはギルドではなく直接冒険者に売るという手もあった。

ギルドは別に個々人のカードのやり取りを禁止してはいない。ただ、それによつて発生したトラブルに対しても何もしてくれないだけだ。

事実、個人トレードはトラブルが非常に多いと聞く。

しかし、取引の主導権を握れる売り手側ならトラブルを避けることも難しくはない気がする。

支払いは現金のみ。直接会つての取引ならば、トラブルに発展する可能性は低い。なんせ、トラブルの最大要因である売る側の詐欺、詐称がないのだから。

もう一度カードを見てみる。

【種族】インプ

【戦闘力】65

【先天技能】

- ・妖精悪魔
- ・初等魔法使い見習い

【後天技能】

- ・小悪魔な心
- ・一途な心

スキルについてアプリで調べてみると以下のように出た。

妖精悪魔：悪魔の妖精。妖精が悪魔に転じた存在ではなく、悪魔という種族の中の妖精的存在。魔法に対するプラス補正。

初等魔法使い見習い：初等の攻撃・回復・補助・状態異常魔法の一部を使用可能。

小悪魔な心：小悪魔的な性格。気まぐれに命令を無視する。自由行動に対するプラス補正。

一途な心：想い人に対する一途な心を持つ。恋愛対象への行動に強いプラス補正。

……これは中々悪くないスキルなんじゃないか？

戦闘力こそ低いけど、この手のカードを欲しがる者たちにとってそこはご愛嬌だろう。

小悪魔な心の気まぐれに命令を無視するというのが少しマイナスの印象だが、そこを一途な心が補っている。インプを惚れさせる必要があるが、そこに燃えるという奴は多い。そうなれば、逆に小悪魔な性格がたまらなくなるはずだ。

うまく売れば市場価格と同じくらい、いやそれ以上の価格で売れるだろう。少なくとも40万は堅い……。

先月までの稼ぎと合わせれば、もう一度パツクが引けるな……。

悪魔の誘惑が頭を過る。

強烈な成功体験が、俺を一発でガチャの虜にしていた。

その一方で、自分でこれを使いたいという思いもあった。

それはスキルがどうかではなく、初めて自分で手に入れた女の子カードだというのが大きい。

せっかくだから自分で使ってみたい。しかし所詮はEランク……、パーティーの平均戦闘力よりも大きく落ちる。いや、それでも各種魔法を全部使えるというのは魅力的だし、何より召喚枠も一つ余っている。だが使ったところでどうなる……ただの賑やかしになるだけだ、それよりも売ってガチャの足しに……。

頭の中で二つの思いがせめぎ合う。
悩んで悩んで悩んで、決めた。

「と、とりあえず、使ってみるわ」

俺が選んだのは、保留だった。

名前をつけなければ売ることはいつでもできる。なら、ちょっと使ってみてからでも遅くないと思ったのだ。

「わ、じゃあ新しい仲間ですね！ 楽しみだなあ」

「後輩だからな、舐められないようにビシッと行くぜ」
「……………」

無邪気に喜ぶユウキ、不敵な笑みを浮かべる蓮華、無表情ながらもどこか楽し気なイライザを見て、俺は思った。

あれ、これももう迂闊に売れくない？

ま、まあとりあえず呼び出してみよう。

「よし、インプ、出てこい！」

カードが光を放ち、ポンと小さな人影が飛び出してくる。

「——ジャ〜ジャジャ〜ン！ インプちゃん参！ 上！」

元気良く現れた手のひらサイズの小さな少女は、きよろきよろと周囲を見渡すと俺に目を止め、下から上までジロジロと眺めだした。

「うーん……………」

「な、なんだ？」

「60…………いやおまけして70点かな！」

「はあ？」

え？ 採点？ まさか顔とかじゃないよな？ つかここでもそのぐらいの点数かよ！

「それは、いい意味なのか悪い意味なのかどっちなんだ？」

「不合格じゃあない、伸びしろがある。好きな方を選んで？」

ニコリとやや尖った犬歯を見せて笑うインプ。可愛らしくも小憎たらしい、なんとも小悪魔的な笑みだった。

「で？」

「え？」

「だーからー、私は？ どう？ 合格、不合格？ アタリ、ハズレ？」

ズイツと身体ごと近づけてそう言うてくるインプ。俺は、ふむ…

…とこの人形のような小悪魔を眺めた。

健康的な褐色の肌に、艶のある銀髪。髪型はサイドを長めにした前下がりボブで、雑誌のモデルのようにお洒落な感じ。眼はサファリアのように蒼く、少し猫っぽい。身に纏うのは、キャミソールのような薄いワンピースだけで、スラリと長い脚が覗いていた。

結論、外見だけなら百点満点だ。個人的にはもっと巨乳が好みだけどな。

というわけで。

「90……いや、80点かな」

「えー？ なんで十点下げたの？」

インプは不満そうに口をとがらせた。

「将来性を加味して、さ」

先ほどの意趣返しを込めた俺の答えに、インプは少しだけ眼を丸くすると……。

「いいね！ その答え気に入ったわ！ あと5点プラスしてあげてもいいよ」

パツと満面の笑みを浮かべそう言った。ようやく見せた、年頃のあどけない表情。……どうやらちよつとはやり返せたようだ。

「ありがとうございます」

「それで、あなたたちが私の仲間かしら？」

インプがぐるりとカードたちへと向き直る。

「……イライザと申します」

「ユウキです、よろしくお願いします」

まずはイライザが、次にユウキが前に出て挨拶する。最後に、蓮華が自信満々に名乗り出た。

「そしてアタシが蓮華だ。足だけは引つ張んなよ、新入り」

「ふうん……全員名前貰ってるんだー」

インプはそう呟くと俺の方に振り向いた。

「ね、ね。私の名前は？ とびつきり可愛いのがいいな！」

「はあ！？」

それに真っ先に反応したのはなぜか蓮華だった。

「新入りが名前なんて図々しいぞ！ もっと活躍してから言えや！」

「ハ？ なにそれ。貴女に関係ないでしょ？」

「ああ？ アタシは先輩だぞ！」

「だから？ さっきからウザいなー」

「んだと、テメエ！」

蓮華がインプへと手を伸ばすが、スルリと躲される。そこへユウキが割って入った。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

「ああん？ お前、どっちの味方なんだよ！」

「どちらも、ですよ。ボクたち仲間じゃないですか」

「仲間？ いいや、アタシはコイツを認めないね。先輩に対する敬意がない！」

蓮華はインプを指さし怒鳴った。

コイツ……意外と上下関係にうるさかったんだなあ。まあ、不良ってそういうところあるよな。

自分は親や教師に反抗する割には、先輩後輩の上下関係は絶対、みたいだな……。

「別に認めてもらわなくていいーもん」

一方でインプはそう言うのが嫌いなタイプのように、興味なさげに髪を弄っていた。如何にも今時のギャルといった感じ。

それを見た蓮華が、顔を真っ赤にして俺を睨む。

「テメエ、わかってんだろうな。コイツに簡単に名前をやったらアタシは承知しねえぞ！」

「わかったわかった」

そう言っつて蓮華を宥めると、今度はインプの方から苦情が来た。

「えー？　なんで？　私にも名前頂戴よ。仲間外れは酷くない？」

彼方を立てれば此方が立たず、か。とは言え、今回は俺も蓮華側の意見だ。名前をつけるのはまだ不味い。

「名前を考える時間くらいはくれよ。インプもその間に皆に認められる活躍をしてくれ。これでも、名前をつけるまでにはそれなりのドラマがあつたんでな」

「ふうん……ま、いいや。イイのを考えておいてね。……そのよりな」

そう言っつと、インプはひらりとユウキの肩に飛び乗った。

……どうやら彼女はユウキを自分の庇護者と認識したようだ。そう言えばコイツはこれでも妖精の仲間なのか。妖精の番犬クーシーにとつて、インプも守るべき対象に見えたのかもしれない。

それがまた、妹分を取られたようで蓮華にとつては面白くないようだった。

二人の眼が合う。

『……チッ』

実に息の合った舌打ちであった。

第十四話 小悪魔な小生意気（後書き）

【Tips】カードの価格

カードはランクが上がれば上がるほどドロップ率が下がり、またそれを取得できる者も限られてくるため市場価格は跳ね上がっていく。Dランクカード以下のカードはだぶついている為、一律市場価格の10%と低いが、Cランクカードからは買取価格も跳ね上がる。そのためDランクカードをギルドに売らず他の冒険者に売る者も多いが、それによるトラブルも多発している。ギルドはそういった個人的な取引に関し黙認しているが、一方でいかなるトラブルにも介入しない。

また、ギルドでカードを買った場合は、年末の確定申告において経費として計上することができるが、他の冒険者から買ったカードは経費として計上することもできない。これは魔道具類も同様である。

- A 市場価格：一般人は購入不可
ギルドでの買取価格：なし。国との直接交渉 ドロップ率：不明
- B 市場価格：1億～100億
ギルドでの買取価格：オークション形式 ドロップ率0.05%
- C 市場価格：1000万～1億
ギルドでの買取価格：定価の50～80%程度 ドロップ率0.1%
- D 市場価格：100万～1000万
ギルドでの買取価格：買取価格10万～100万円 ドロップ率1%
- E 市場価格：10万～100万
ギルドでの買取価格：買取価格1万～10万円 ドロップ率5%

F 市場価格：1万～10万

ギルドでの買取価格：買取価格10000円～1万円 ドロップ率
10%

第十五話 蓮華さんは本当に後輩に厳しいお方

……意外なことに。

その後の探索は、思いのほか上手く回った。

当初、二人の不仲により連携に不備が生じることを懸念していた俺だったが、いざとなれば二人の相性はバツチリだった。

インプの戦闘力はこのパーティー内最弱だ。その役回りは、必然サポート役となる。しかし、彼女の魔法はどれも微妙なものばかりだ。

魔力の刃を放つスライス、少しだけ体力を回復させるレスト、一発だけ敵の攻撃を和らげてくれるバリアジャケット、敵の足元を滑りやすくさせるスリップ。この四つしか使うことができない。

どれも、大したことがない魔法だ。

スライスは、今のところ人間が包丁で切りつけた程度の威力しか出すことができない。

こつ書くと結構強いようにも思えるが、モンスターは人間よりずつと頑丈だ。

その上、魔法の性質上、物理防御力でも魔法防御力でも防御することができない。

つまり、ゴーレムなどの硬い敵には頑丈さで抵抗され、レイスなどの魔法系の敵には魔力で抵抗されてしまうのである。

この時点で、俺はインプをアタッカーとして使うのは諦めた。

レストは、結構使えるという評価を下した。

傷や状態異常は治せないが、体力を回復させるというのは地味に助かる効果だ。

戦闘の役に、というよりも俺が迷宮を移動する際に非常に助かる。この魔法自体は当然蓮華も使えるのだが、彼女の魔力は攻撃に回復にと活躍の場が多かったため、これまで温存せざるを得なかった。その補強というだけで、十分助かる。

バリアジャケットについては、正直カスだ。

一発しか持たないうえに、服を厚着した程度の防御力しかない。唯一の利点は魔力消費が最小ということだけ。せつかなので戦闘の前にとりあえず掛けておく、というような使い方となるだろう。

最後のスリップ……これについても効果は微妙だ。

俺に使ってみたところ、足の裏がツルツルになってまるで氷の上に立っているような感じになった。

だが、しっかりと踏ん張れば転ばずに済むし、効果も数秒しか続かない。

ユウキのような四つ足には効果が薄く、蓮華のように宙に浮かんでいる相手にはそもそも無意味というなんとも微妙な状態異常魔法。

——しかし、このスリップの魔法こそが我がパーティーに欠けていた最後の歯車だった。

基本的に、状態異常は相手に及ぼす影響が大きければ大きいほどレジストされる可能性が高まる。逆に言えば、しょぼい魔法ほど通る可能性は高い。

そこに、座敷童の運を操るスキルを加えてしまえば、同ランクへの状態異常はほぼ確実に通る。

つまり、スリップの魔法は必ず相手を転ばす魔法へと化けるのだ。

これまで、蓮華の運を操るスキルは、主に戦闘以外で役に立ってきた。

それは、『禍福は糾える縄の如し』というスキルが相手の生死を左右するほどの能力ではないからだ。

精々、運よく相手の攻撃を避けられたとか、偶然攻撃が上手く決まったという程度の幸運。

それでも十分役には立っているのだが、ここにきて状態異常を使えるメンバーが入ってきたことでその真価が見えてきた。

味方の幸運と、敵の不幸により状態異常の確率を上げる。状態異常により、勝負の天秤をこちらに大きく傾ける。

それが座敷童の本来の役割。

蓮華に必要なだったのは、幸運や不幸を起こすためのきっかけだったのだ。

それは例えば、バナナを床に置くとか空き缶を転がすとか、なんでもいい。

相手に不幸をもたらす舞台装置さえあれば、バナナの皮を踏んで敵が転びましたとか、あるいは逆に転んだことで敵の攻撃を避けられましたとか、あとは勝手にこちらの都合が良い方に転がってくれる。

スリップの魔法は、相手を転びやすくさせるといったそれだけの魔法は、座敷童の能力により最強のトラップに化けたのである。

「……………が、それを当人たちがどう思うかはまた別の話で。

「……………」

戦闘を終え、次の小部屋へと向かう道中を気まずい沈黙が支配していた。

先ほどの戦闘もまた、インプのスリップと蓮華の『禍福は糾える縄の如し』のコンボによりあっという間に終わった。

今回の敵の構成は、ゾンビとハイコボルト、ザントマン、ナイトメアの四体。ゾンビの耐久型ガード、ハイコボルトの眷属招集による増援、ザントマンらの眠り悪夢コンボという一見してイヤらしい組み合わせだった。

まずはザントマンを殺して悪夢コンボを崩し、増援を呼ばれる前にハイコボルトを殺す、と瞬時に判断した俺たちだったが、案の定ゾンビがその前に立ちふさがってきた。

まるで前回の焼き直しのような光景だったが、そこから少し違った。

インプのスリップによりゾンビが転倒。その隙にユウキがザントマンを抹殺、遅れてイライザがハイコボルトの喉をスリングショットで打ち抜いた。その後はもう、消化試合だ。

ものの数秒で終わった戦闘に、俺たちはあっけなさすら感じたものだ。

俺やユウキは、蓮華とインプを絶賛した。が、二人は全く喜ばなかった。

お互いの能力の相性が良いことは当人たちも理解したのだろう。

だが、それが逆に面白くない。

蓮華は、気に入らない相手のおかげで自分の本領が発揮できたことが。インプは、気に入らない相手のおかげで実力以上に活躍できていることが。互いに互いのプライドを傷つけているようだった。

協力を拒むほどではないが、感謝はしたくない。二人からはそんな葛藤が窺えた。

結果、二人は互いの存在を出来る限り無視するという結論に達したようで、それがこの微妙な空気を作り出していた。

「……………はあ」

こっそりため息を吐く。

あー、どうにかならんもんな、この居心地の悪さ。

一番簡単なのはインプか蓮華をカードに戻すこと。しかしそれは戻した方の機嫌を大きく損ねることになるだろう。

もしインプを売ることになったのならそれもアリだっただろう。が、使い道を知った今となってはコイツを手放す気はなかった。となれば、なんとかして両者の仲を取り持ちたいところだが。

「おい」

そんなことを考えながら歩いていると、不意に蓮華から声をかけられた。

「お、おう、どうした？」

「お菓子食べたくなってきた。なんか出してくれよ」

「ああ、わかった」

蓮華が自主的に協力してくれるようになってからお菓子は報酬制ではなく、食べたい時に取り出す方式となっている。おかげで俺のバッグにはいつでもお菓子がある程度ストックされていた。

「お菓子！？ わあ、私食べるの初めて！」

俺たちの会話を聞いていたインプが眼を輝かせる。……コイツもお菓子好きなのか。案外、蓮華と気が合うんじゃないか？

そんなことを考えながら、俺はパウンドケーキを皆へと一個ずつ配り始めた。ちょうどいいからここで休憩だ。

そうしてインプにも一つ渡そうとした時、横から伸びた手がそれを奪い取った。

「おっと、お前にはこれはデカすぎるだろ。アタシが代わりに食ってやるよ」

「ハアアア!？」

蓮華……お前って奴はまたそんな子供みたいなことを……いや、まんま子供なだけだよ。

お菓子を横から取られたインプは、当然のことながら激怒した。

「ちよ、それは私のでしょーが! 返せ!」

「うるせーなー、じゃあ一欠けらだけくれてやるよ。身体が小さいんだからそれで充分だろ?」

「体の大きさは関係ないでしょうが! 私たちはいくらでも食べられて何にも食べなくても平気なんだから! いいから返せ、私だっ
て楽しみにしてたんだから!」

「やなこつた! お菓子は働いたヤツだけが食っていいんだよ」

「私も働いたわ!」

「ハッ、アタシの力があつてのことだろうが。でなきゃお前程度の力がどれほどの役に立つってんだ?」

「――――お前ッ!」

インプの表情がいよいよ険しくなり、本格的な喧嘩が始まりそうになったところで、ユウキが慌てて介入した。

「ちよ、ちよ、ちよ。そこまです! 今のは、蓮華さんが悪いですよ。ほら、お菓子も返してあげましょう。ね? マスター」

「ああ。蓮華そっついうのは良くねえって。ほら、足りないなら俺の分をやるからさ」

「……………チツ、そういうんじゃないよ」
「蓮華？」

蓮華が何か言ったが聞き取れず聞き返すと、彼女は首を振ってインプのパウンドケーキを俺に渡した。

「はあ、なんでもない。ちょっとからかっただけさ。ホラ、返すよ」
「ん、ああ……。ほら、インプ、返ってきたぞ」

だが、涙目になったインプはそれを受け取らない。

「そんなの……もういらぬもん！」
「あー、じゃあこっちはどうだ？ チョコレートだ。一口サイズで食べやすいぞ」

そう言っただけが小粒のチョコがたくさん入った箱を渡すと、インプは自分の身体ほどの大きさもあるそのケースを抱きかかえた。
ユウキと目配せし、インプの相手は彼女に任せることにする。

「インプさん、開け方はわかりますか？ 開けてあげますね」
「……………うん」

ユウキとインプのやり取りをしり目に、俺は少し離れたところに蓮華を引っ張っていった。

「なあ蓮華……………どうしたんだよ」
「……………」

蓮華は気まずそうに黙って何も答えない。

……………この様子だと、自分でもマズイことを言っただけで自覚はある

みたいだな。

となると頭ごなしに怒るのも良くないか。俺は出来るだけ声音を和らげると、静かに諭した。

「正直まだモンスターのはよくわからないことが多いけどさ。戦闘力とか、スキルのことを言うのは良くねえんじゃねえの？ ほんら、自分じゃどうしようもないコンプレックスみたいのものもあるだろうしさ」

俺がそう言うと、蓮華は苛立たし気に頭を掻いた。

「あー、わかってるよ。明らかにアタシが言い過ぎた。つい……アレだ、わかるだろ？」

「ん……」

俺は察した。大方、沈黙が気まずくなって、喧嘩でも良いからコミュニケーションを取ろうとしたって感じか。

コイツ、最初の頃も俺にそんな感じだったもんなあ。それで上手くいつちまったからまたやっちまったってことか。

でもそれが上手くいったのは、俺がある程度年上だったからだ。見たところ、インプは外見も精神年齢も蓮華と同じくらいに見える。

それがあんな風にされたら……そりゃあ本当の喧嘩になる。

……ただまあ、それも長い目でみたら悪いことじゃあ無いんだけどな。

これからずっとパーティーを組む以上、喧嘩は早めにしてしまった方がいい。

下手に不満を貯めこみ続けてから喧嘩すると、そのまま絶縁状態になるからな。

そういう意味では、すぐに感情を吐き出せる関係を作れたのは、悪くはなかったりする。

ただ一つ問題があるとすれば、この試験中に関係悪化によって連携が取れなくなることなのだが……。

俺がそれをなんて伝えようかと悩んでいると、蓮華が言った。

「あー、言わなくてもわかってるよ。戦闘はちゃんとやれってことだろ？ それくらいわかっているさ。たぶん、あっちもな」

「そ、そうか……じゃああとは俺からは何も言うことはない。でも、わかってるよな？」

「ああ……機会を見て謝るよ」

「うん」

そこへ、ユウキがやってきた。

「マスター、こちらは大丈夫です。インプさんも、戦闘はちゃんとやってくるといっていました」

さすがユウキだ。俺の考えを何も言わずとも理解してくれている。

「ありがとう。悪いけど、しばらくは様子を見てやってくれ」

「はい」

決してお互いを見ない様に顔を背けあう小さな少女たち。

雰囲気の良い取り柄だった我がパーティーに漂い始めた不穏な空気に、俺はこっそりため息を吐いたのだった。

第十五話 蓮華さんは本当に後輩に厳しいお方

それから数分後。

俺たちは攻略を再開した。

道中は、蓮華とインプはこれまで以上に会話が無くインプはユウキと蓮華は俺とだけしか話さなかった。

やがて小部屋に着き戦闘を行ったが、インプも蓮華もちゃんと仕事をしてくれた。

それに一安心した俺だったが、やはりインプと蓮華の溝はより深くなっているように感じられた。

そうやって、和気藹々とはいかない空気の中で進んでいくと、不意にインプが言った。

「……あれ？ あそこの壁、ちょっとおかしいよ？」

「え？ そうですか？」

ユウキがそう言うて行き止まりの壁を見やるが俺の眼にもごく普通の壁のように見えた。

「……私もうまく言えないんだけど、ちょっと違う気がするの」

「ん。イライザ、悪いけどちょっと調べてみてくれるか？」

「イエス、マスター」

イライザがつぶさに壁を調べ始める。が、何も見つからない。

「申し訳ありません、何も見つかりませんでした」

「そうか……」

あるいは抜け道かなにかならと期待したんだが……。インプも自分の勘が信じられなくなってきたのか、浮かない顔をしている。

そこへ、蓮華が一步前に出た。

「なるほどな……クソ、そういうことか」

「蓮華？」

「まあ、見てな」

そう言つと、蓮華は奥の壁へと弾幕を放つた。一体何を……ッ！？ 次の瞬間、俺たちは目を見開いた。無数に風穴の空いた壁から、蒼い液体が噴き出したのだ。

この壁は……モンスターの擬態だったのか！

蓮華が悔しげに吐き捨てる。

「通路に敵は出ないって先入観にまんまと騙されたぜ。部屋の入り口に、壁に擬態して張り付いてやがったんだ」

「クソ、完全に盲点だったぜ。よくやった、インプ、蓮華。よし、行くぞ！」

「はい！」

壁に擬態したモンスター——おそらくはぬりかべだろう——が消えるのと同時に、俺たちは部屋へと突入する。

中で待ち構えていたのは、たった一匹の小さなモンスターだった。小型犬ほどの大きさのリスのような生き物で、額には紅い宝石がついている。

初めてみるモンスターだが、俺はそのモンスターの正体を知っていた。冒険者なら誰もが知っていると言っても過言ではないほどに、有名なモンスターであったからだ。

「カーバンクルッ！ うおおおお！ 絶対に逃がすな！」

俺たちを見た瞬間踵を返して部屋の奥の通路へと逃げ出そうとしたそのカーバンクルを見て、慌てて叫ぶ俺。

それと、ほぼ同時に、インプのスリップが炸裂した。

小さな悲鳴を漏らしてステンとひっくり返るカーバンクルを、すかさず蓮華が足で踏みつける。そのまま光弾を放とうとし――。

「蓮華！ 待った！ ストオオツプ！ できればトドメはインプに譲ってやってくれ」

「あん？」

「わ、私？」

怪訝そうな顔をする二人に、俺はカーバンクルについて説明した。カーバンクルは、Eランク以上の迷宮で極まれに見つけることができるレアモンスターである。戦闘能力はほとんど持たず、人の姿を見るとすぐに逃げ出してしまう。

この特徴でゲーム好きならピンときたかもしれないが、お察しの通りカーバンクルを倒すと戦闘力を大きく成長させることが出来る。ただしその経験値を得られるのは止めを刺したカードだけであり、他のカードは一切成長しない。

本来ならば一番成長の限界が高い蓮華にとどめを刺させるのが効率的なのだが……。

俺の眼差しを受けた蓮華が、小さく苦笑した。

「……わかったよ。ほら、止めを刺しな」

「え、でも……」

険悪だったはず相手の温情に、躊躇するインプ。

そこに、蓮華が少しだけ照れ臭そうに言った。

「……ここを見つけたのはお前の手柄、だからな。これくらいの報酬……別にいいだろ」

「……………うん」

インプも照れ臭そうに頷き、カーバンクルへと攻撃した。そんな様子を見て、俺とユウキはホッと胸をなで下ろす。全く、ヒヤヒヤさせやがってガキどもはすぐに喧嘩して、すぐ仲直りしやがる。

正直、ちよつとだけ羨ましい。年を取るにつれて簡単に怒らなくなつて、その分仲直りも難しくなるからな……。

ガキの頃、友達と些細なことで喧嘩して、翌日にはすぐ仲直りしたことを思い出した。あの時は……そうだ、アイツの欲しがつたトレーディングカードを交換してやったんだっけ。それで、俺も欲しかったカードを貰つて……。中学が別々になって会うこともなくなり、今じゃ名前も思い出せない。

今までは思い出しもしなかつたくせに、なぜか急に寂しく感じた。

「……………」

首を振り、意識を切り替える。

カーバンクルが死ぬと、そこには魔石と大粒の赤い宝石が残された。この宝石もまた、カーバンクルを冒険者が追い求める理由の一つだ。

この宝石はカーバンクルガーネットと呼ばれ、幸運をもたらすとしてガーネットの中でも特に人気があり、非常に高値で取引されている。

この指の爪ほどの大きさの石でも、200万はくだらないはずだ。売ってもいいし、誰かに贈っても良いだろう。俺はニンマリと笑

いながら柔らかな布の袋にガーネットをしまった。

さらにもう一つ、お楽しみがある。

俺が視線を向けた先には、金色に輝く宝箱があった。

カーバンクルを倒した時にだけ現れるという金のガツカリ箱だ。

金箱は、通常のガツカリ箱の何倍もアタリが出やすいという。ただし、当然のようにハズレも普通に出る。金色であってもガツカリ箱はガツカリ箱というわけだ。

「よし、イライザ開けてくれ」

「はい」

この階層の周回で随分と手つきがこなれたイライザが金箱と格闘し始める。

頼む、今回は失敗しないでくれ。

そうみんなで祈りながら見つめていると、イライザがこちらを振り返る。その顔には心なしか笑みが浮かんでいるようにも見えた。

「開きました」

「おお！」

みんなで金箱に駆け寄る。そして目を輝かせながら箱を開けると、そこには――。

「ス、スキルオーブ！ 大当たりだああ！」

みんなで一斉に歓声を上げる。オーブの色は……青！ 魔法系のスキルだ。

スキルオーブはその色で大体の系統が判別が付く。

青ということは、蓮華かインプということになるが……。

チラリと二人を見る。

正直、インプよりは蓮華に与えたい。彼女の方が魔力が高く将来性があるからだ。

だが、この良い空気の中では言い辛い。
なんと言ったものか、俺が悩んでいると。

「……………何してるのよ、早く使えば？」

「えっ」

驚き眼を丸くする蓮華に、インプがそっぽを向きながら言う。その耳は、心なしが赤い。

「私が使ったって意味がない……………でしょ？」

眼で良いのかと問いかけてくる蓮華に頷いてやると、彼女はオーブへとおずおずと手を伸ばした。

「……………ありがとう」

聞こえるか聞こえないかの小さな声で蓮華が呟き、スキルオーブを使用する。座敷童のカードが一瞬光り、新たなスキルを得たことを俺に教えてくれた。

蓮華が目を輝かせて俺に問いかける。

「で、で？　なんてスキルだった？」

「どれどれ……………あ」

俺はカードに現れたスキルを見て、硬直した。

おい……………マジかよ。こんな、こっつて……………。

「え？ そんなに凄いスキルだったんですか？」

「あるいは、……クソスキルだったとか？」

「お、おい……何が出たんだよ！？」

一気に不安そうな顔になる蓮華に、俺は引き攣った顔で答えた。

「……初等状態異常魔法だったよ」

『え』

場が凍り付いた。

みんなが一瞬だけインプへと視線を向け、即逸らす。

蓮華が天を仰いだ。

「……インプ、お前のことはなんだかんだ嫌いじゃなかったぜ。新しい所に行っても、頑張れよ……」

「ハアアア！？ ちょ、ふざけんな！」

蓮華が告げた遠回しな解雇通知に、インプが一瞬で沸騰した。

「なんでこのタイミングでそのスキル！？ お前、どれだけ私のことが嫌いなのだよ！」

「アタシだって知ってて使ったわけじゃねえよ！」

「今からでもスキルオーブ返せ！ 私の仕事を取るな！」

「無茶言つな！」

取っ組み合いの喧嘩をする二人に苦笑しながら俺は、インプと蓮華のカードを取り出した。

そこには、全く同じスキルが新たに刻み込まれていた。

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】 310 (5UP!)

【先天技能】

- ・ 禍福は糾える縄の如し
- ・ かくれんぼ
- ・ 初等回復魔法

【後天技能】

- ・ 零落せし存在
- ・ 自由奔放
- ・ 初等攻撃魔法
- ・ 友情連携 (NEW!) : 互いに友情を持つ者とスキルを連携することができる。
- ・ 初等状態異常魔法 (NEW!)

【種族】 インプ

【戦闘力】 130 (65UP! MAX!)

【先天技能】

- ・ 妖精悪魔
- ・ 初等魔法使い見習い

【後天技能】

- ・ 小悪魔な心
- ・ 一途な心
- ・ 友情連携 (NEW!) : 互いに友情を持つ者とスキルを連携することができる。

「あーあ、こりゃもう売るわけにはいかないか」

名前、考えとかないとな。

俺はカードをしまうと、二人の仲裁に入ったのだった。

第十五話

蓮華さんは本当に後輩に厳しいお方

(後書き)

【Tips】スキルオーブ

迷宮の宝箱からは、スキルオーブと呼ばれる特殊な魔道具が出現する。スキルオーブはカードに与えるだけでお手軽に新しいスキルを覚えさせることができる。もしもスキルが被った場合、スキルの経験値として吸収され、スキルのランクアップの可能性を上げてくれるため決して無駄にはならない。

もし売ることが出来れば大金となるが、迷宮の外へと持ち出そうとすると消えてしまうため売ることはできない。また、決して良いスキルばかりが出るとは限らないため、博打の面もある。

第十六話 それを 売るなんて とんでもない！

それから程なくして、俺たちは最終階層への階段を発見した。

地図アプリを見てみれば、スタート地点からここまでそう離れているわけではない。あれほど時間をかけて探した階段が案外近かったことに脱力する反面、インプがいなければ未だ迷宮を彷徨っていたとも思い直す。

気を引き締めて階下に降りると、生臭い水の香りがまず鼻を衝いた。淀んだ川の香り……。

まさかまたイレギュラーエンカウトか！ と後ろを見るも階段は存在している。そもそも風景自体はこれまでの石造りの回廊と変わっていない。

杞憂だったか……と胸を撫でおろして先に進む。

道は極めて緩やかな下り坂となっており、徐々に足元を水が浸食してきた。

靴裏、足首、ふくらはぎと水はどんどん深くなっていき、膝を超えるのと動くのも一苦労になってきた。

見かねたユウキが提案してくる。

「マスター、ボクの背中に乗ってください」

「おお……いや、でも戦闘になったら困るしな」

「すぐ下りれば大丈夫ですよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

俺はそう言ってユウキの背に跨る。

牛並みの体躯を持つユウキの上は、思いのほか高く、ちょっとだけ怖かった。

しかもこもこで柔らかい尻尾が俺をシートベルトのように包み込むと、その不安もすぐに消え去った。

……なにこれ、至福の感触。今度からユウキに乗って探索させてもらおうかな？

移動に苦労しなくなると、ここの主について考える余裕が生まれってきた。

まず敵のタイプについてだが、これは水棲系モンスターで間違いないだろう。迷宮のバックアップを受けてフィールドを作り替えているのだ。

Eランク迷宮の主ならば敵は当然Dランクモンスター。Dランクで水棲系となると、何がいただろうか。

水辺と聞いてパツと浮かんでくるのは、カエル、魚、蛇などか。カエルや魚のモンスターって何がいたっけか……。あと、スライムも水棲系ではあるよな。コイツはどこにでも出るけど。ミズチとかの水棲系サーペントも候補に入るな。あとリザードマンも水陸両用ではあるか。

頭の中で敵の候補を上げているうちにも水はどんどん深くなっている。水位はすでにイライザの股下辺りまで来ていた。

このまま先に進んだら完全に水没したりしないよな？ そうなったら俺たちに踏破は無理だぞ。

そんなことを考えていると、ピクリと耳を動かしたユウキが鋭く警告した。

「マスター、敵が迫ってきています!」

「ッ！」

ユウキの言葉に一齐に戦闘態勢を取る仲間たち。俺も地面に降りてユウキをフリーにする。

……マズいな。予想以上に動きにくい。これは、ユウキとイライザはろくに戦えないんじゃないか？ 撤退も視野に入れるべきだろう。いや、むしろもう引いた方が……。

そんな風にわずかに躊躇した数秒で、敵はすでに俺たちへと迫っていた。

「敵の姿を視認しました」

イライザの声に前を凝視する。

すると、凄まじい速度でこちらへと接近してくる亀の甲羅が見えた。

……敵は亀か？

そう思った次の瞬間、水面から勢いよく飛び上がった敵影がイライザへと襲い掛かった！

勢いそのままに押し倒そうとしてくる敵に対し、冷静沈着な我がグラーは腕を素早く掴み己の力を加えて壁へと投げつける。

それに対し敵は意外なまでの身軽さを発揮し、くるりと身体を回転させると足から壁に着地。そのまま水へと再び潜水した。

すい〜と離れていく亀の甲羅を見ながら、俺はわずかに垣間見えた敵の姿を脳裏に再生した。

体格は成人男性なみ。肌は暗緑色で、手には鋭いカギ爪と水掻き。頭部には毛髪が生えていたが頭頂部は陶器のような質感で、一見すると禿げているようにも見えた。

……間違いない。日本人ならこの敵を見誤ることはないだろう。敵は、河童だ。

参ったなDランクの中でも結構強いモンスターじゃねえか。泳ぎは達者で、力も有り、背中の甲羅は防御が硬く、相撲も得意な技巧派でもある。

陸上では長時間活動できないという欠点がある為あまり人気はないが、一方でここうした水のフィールドではランク以上の力を発揮するモンスターだ。

それが、水棲系などの環境依存型の強みであり弱みだった。

どうするか。主の正体が水棲系だった以上、ここは引いても良い所だ。試験会場はここだけではない。一月待てば、次の迷宮を紹介してもらえる。

今回手に入れた宝石を売って、こちらもDランクの水棲モンスターを買うという手もあるだろう。

俺の気持ちが撤退に傾いたその時、蓮華が言った。

「……おい、なにボサっとしてんだ？ さっさと追撃しようぜ。今なら弱ってるだろうからよ」

「なんだって？」

「おいおい、もう忘れたのかよ。さっきアタシが手に入れたスキルはなんだった？」

「！ まさか……状態異常が通ったのか？」

「ああ、だから奴は慌てて逃げたのさ」

「ちよつと一人だけの手柄みたいに言わないで！ マスター、私も協力したんだから！」

「ハイハイ」

「状態異常の種類は？」

俺の問いかけに二人はニヤリと笑う。

『衰弱』

「よし、でかした。すぐ追撃をかけるぞ！」

イライザをカードに戻しユウキの背に跨る。この水のフィールドではイライザはカードに戻した方が早い。

ユウキは中途半端に浅いこの水の中を、床を蹴るようにして泳ぐことで素早く移動していく。

移動すること一分ほど。荒い息を吐き壁にもたれかかる河童の姿を見つけた。すばやくイライザを呼び戻す。

衰弱は、体力を急激に削る状態異常だ。毒のように命を蝕むものではないが、ただでさえ体力の消耗が大きい戦闘中に、さらに体力を奪われるというのは毒にも等しい効果だ。

特に今回はスキル連携により、蓮華の状態異常魔法をインプの妖精悪魔の補正により強化してある。さぞや辛かろう。

こちらに気づいた河童は、先ほど同様に水中からの強襲をかけてきたがその動きは見る影もなく精彩を欠いたものだった。

イライザが、しっかりと両腕を掴んで拘束する。河童はそれに噛みつきで対抗しようとするが、そこにユウキの爪が襲い掛かった。

河童の頭の皿は、簡単に割れるほど脆いものではないが同ランクのモンスターの一撃を耐えられるほどのものではない。

頭の皿ごとかち割られた河童は脳漿をぶちまけ、やがて姿を消した。

「やったー！ 勝ったあ！」

インプが喜びの声を上げる。

……勝った、か。これで俺も二ツ星一一いや待て、おかしい。

ハッと周囲を見渡す。俺の予想を裏付けるように、三枚のカードたちは顔を引き締めている。

俺の視線を受けた蓮華がコクリと頷く。

「ガツカリ箱が現れない。まだ終わりじゃないようだぜ」

「え？ なに？」

何のことかわかっていない様子のインプに、俺は簡単に説明してやった。

「コイツは主じゃなくて眷属だったってことだ」

だが、どういう絡繰りだ？

普通、眷属として呼び出せるのは下位のモンスター。ここでならEランクのモンスターが限度のはず。それがなぜDランクの眷属を呼び出せる？

俺は必死に頭を巡らすが、敵はそんな余裕を俺たちに与えてくれないようだった。

「マスター、敵の気配が近づいて来てます！ 数は……六体です！」

「マジかよ、糞」

小さく毒づき、指示を飛ばす。

「イライザとユウキはまず敵の足止めをしてくれ。蓮華とインプは全員に衰弱をかける。全員に掛かったらインプはスリップで援護、蓮華は魔法攻撃で攻撃に参加だ」

『了解！』

全員がそう返すのと同じ時、バシャツと言う水音が前方から聞こえてきた。

そこに居たのは、六体の河童たち。

……おい、インチキも大概にしろよ？
俺は激戦の予感に顔を引き攣らせたのだった。

第十六話 それを 売るなんて とんでもない！

「あーん、もう疲れたー！」

十何戦目かの闘いを終え、インプが叫ぶ。それはみんなの内心の代弁でもあった。

「い、一体いつまで続くんだよ」

蓮華が荒い息のまま吐き捨てた言葉に、ユウキが答えた。

「さ、さあ、主を倒すまで、ですかね」

こちらも息が荒い。むしろ、蓮華よりも体力の消費は大きいように見えた。

かく言う俺も、疲労困憊。足もガクガクだ。

水牢に囚われての戦いは、俺たちのように宙を飛べない面々の体力を削っていた。

「……今ので、何体目の河童だ？」

俺は、全く息を乱していないイライザへと問いかける。この時ばかりは、敵を喰らって回復できる彼女が羨まし……いや、やっぱりあんまり羨ましくないな。

「イエス、マスター。45体です」

「そうか……」

イライザの答えに、インプがウンザリした様子でため息を吐いた。

「うはあ、本当にキリがない。ねえ、マスターもう帰ろうよ。魔力もあとちょっとしか残ってないしい」

「何言ってるんだ、ここまで来たらあと一歩だ。もうちょっと頑張ろうぜ」

「でもよ、このままじゃわじわ削られて負けだぜ？」

「いや、河童の数はもうほとんど尽きてる。そろそろ敵の親玉が出てくるはずさ」

俺の言葉に、イライザ以外の三人が怪訝そうな顔をした。

「なんでそんなことがわかるんだよ。もしかして……敵の正体が分かったのか？」

「ああ、敵の正体は十中八九、水虎だ」

俺だって、ただカードたちの奮闘を眺めていたわけではない。指を飛ばしつつも、ちゃんと敵の正体を探り続けていたのだ。

水虎は、女の子カードでもないにもかかわらず一千万円近い額で取引されるDランク最強クラスのカードだ。

とは言っても、戦闘力自体は河童よりも多少上な程度でDランク全体から見ても中の上と言ったところ。

水虎をDランク最強クラスに押し上げているその最大の理由は、『同ランクのモンスターである河童を、最大で48体呼び出せる』というスキル『河童の大親分』にある。

数に限りがあるとはいえ、自分と同ランクのモンスターを召喚できるカード。

まさしく反則的な能力だ。

とは言っても、さすがに元々の能力はこれほど出鱈目なものでは

ない。

呼び出される河童は幻影のようなもので、大体一戦闘ほどの時間で消えてしまう。戦闘力も本来の河童よりも落ち、48体のストックを使い切れればその日はもう使うことが出来ない。

おそらく、この水虎は河童を呼び出す能力を迷宮によって強化されているのだろう。

それが、Dランクモンスターが次々と湧いてくる絡繰りのタネだった。

「ヘッ、つてことはだ。後は数体の河童を倒せば糞野郎をぶちのめせるってわけだ」

「それは元気が湧いてくる話ですね」

「マスターって博識……カッコイイ」

蓮華とユウキが笑みを浮かべ、インプが俺に尊敬の眼差しを送る。

「ふふふ」

俺は意味深に笑いながら、そつとスマホを隠した。

「ごめん、アプリで調べただけなんだ。」

「マスター、噂をすれば親玉がしびれを切らしてやってきたみたいですよ」

「へえ、最後まで眷属を喚びてくるかと思ってたのに」

俺がそう言うと、蓮華が嘲笑を浮かべて言った。

「そりゃそうだろ。これ以上手下がいなくなったら一人で戦わなきゃいけないじゃねえか。こんなねちっこい戦術を取る奴にそんな度胸がある訳ねえだろ」

「なるほどね」

そんな俺たちの会話が聞こえたのか。

通路の奥から肉食獣のような咆哮と共に水虎と河童たちが現れた。河童たちが成人男性並みの体格なのに対し、水虎は2メートルを超える体格とボディビルダーのような鍛えられた筋肉を持っていた。敵の姿を見た瞬間、インプと蓮華が同時に叫ぶ。

『衰弱！』

友情連携のスキルにより、拡大強化された衰弱の魔法が敵全体へと振り注ぐ。

さらに続けてもう一度。今度は水虎単体に対してだ。

「よし、全員通った！ あのデカブツには特に強力なのをくれてやったぜ」

「よくやった！」

……とは言っても、体力を消費しているのはこちらも同じだからな。消耗が同じくらいになるまで2、3分はかかるか？

敵も、時間経過が自分たちの不利になることを理解したようで、一気にギアを上げて襲い掛かってくる。

どれを迎え撃とうと両サイドから立ちふさがったイライザとユウキの脇を抜け、二体の河童がこちらへと向かってきた。水中からの視線が俺を射抜く。

——俺狙いか！

イライザは水虎を、ユウキは河童Aの相手をしておりこちらへは手が回らない。

ザブザブと水を掻き分け後ろへと後退するが、水中を自在に泳ぐ奴らに比べてあまりに遅い。

脚が空を切る感覚。疲れ切った足では体重を支え切れず尻餅をつく。

致命的な隙。力を振り絞るように加速した河童たちが急速にこちらに迫り――――停止。

一拍遅れ、青い血煙が水中を漂い始める。

ニヤリと笑う。

馬鹿どもが事前に張り巡らせておいたワイヤートラップに引っかかったのだ。

そこへ、蓮華たちの連携状態異常魔法が襲い掛かる。麻痺の魔法。体を硬直させ、身動き取れなくなった河童を、一体ずつ始末していく。

これで、まずは二体。

伊達に45体もの河童と連戦したわけではない。すでに俺たちの間には河童駆除のノウハウがある程度確立されていた。

河童共はよほどの水のフィールドでの機動戦に自信があるのか、複数で襲い掛かってきたときは必ずと言っていいほど俺へのダイレクトアタックを狙ってきやがる。

最初は面喰ったその奇襲も、来るとわかっていればむしろ飛んで火にいる夏の虫。おかげですっかり無様に後退する振りが上手くなつてしまった。

一方で、敵は未だにこちらの情報を一切持っていない。襲い掛かる敵をすべて皆殺しにし続けた甲斐があったというものだ。

さて、残りは水虎と河童のみ。イライザは……苦戦しているか。

Dランク下位の彼女と、主として強化されたDランク最上位の水虎では、さすがに後者に分があった。それでも、頭だけは底い必死に食らいついている。

が、一方でユウキは河童を見事に封殺していた。時間経過とともに動きに精彩の無くなってきた河童を、少しずつ削り取っていく。そこへ、蓮華の光弾が加わり、最後の河童も脱落した。これで残りは主だけ……。

だが、ここで焦ったりはしない。時間は俺たちの味方だ。

ユウキが加勢したことで、イライザと水虎との闘いは膠着状態に落ち着く。そこへ、蓮華たちが麻痺の状態異常魔法を掛けていく。主の状態異常耐性補正と麻痺が状態異常魔法の中では重い方であることも手伝って、なかなか通らない。

が、焦らず二度、三度と重ねて駆けていく。そして四回目。ついに麻痺が通った。

体を硬直させる水虎。そこを、全員で袋叩きにしていく。それで、ようやく戦いは終わった。

水が、潮が引くように消えていく。

あとには、水虎の落とした魔石と、ガツカリ箱が残された。

『お、終わった〜』

みんなのため息交じりの声が重なった。

なにこれ、クツソ疲れたんだけど！　これがEランク迷宮？　は！？　いきなり難易度上がり過ぎだろ！

そりゃ新人の半数以上がEランクで躓くわけだわ。

ただ一つ言えるのは、この迷宮はEランクの中でも間違いなく難しい方だということだ。

Dランク最上位の水虎が、眷属召喚能力を強化されて出てくるとか……Dランクカード一枚を主力としている平均的一ツ星冒険者では、間違いなく踏破は無理だ。

引き際を間違えたら、普通にカードをロスト……というか死んでもおかしくないだろう。

別に、ギルドがわざとそういう主が出る迷宮を選んできるとかそう言うわけじゃない。

この手のスタンダードなタイプの迷宮は、属性がないため出てくるモンスターが完全なランダムなのだ。それは主も同じこと。

だがそれでDランク最強クラスの水虎が出てくるとか……やっぱ俺って運が悪いのか？

水虎もカードを落とさなかったしな！

いやまあ、Dランクカードのドロップ率って1%だから落ちないのが普通っっちゃ普通なんだけども。

それでもこれだけ苦労すると見返りが欲しくなるといのが人情というもので。

あ、そうだ、見返りと言えば……。

「忘れてた。ガツカリ箱を開けないとな」

重い腰を上げてガツカリ箱に向かうと、思い思いの格好でだらけていたカードたちも集まってきた。

どれだけ疲れていても、やっぱこの瞬間だけは疲れを忘れる。

「よし開けるぞ」

そう一声かけて箱を開ける。踏破報酬の箱には罫がないので、安心して開けることができた。

中に入っていたのは魔石と……液体の入った試験管だった。

おい、この流れ前も見たぞ……。こんだけ苦労してまたポーションかよ〜。

しかもこれ、何か青白く発光していてちよつと口に入れるには抵抗ある色合いをしている。飲んだら被曝しそうな予感がしてくるといふか。

もしかして、これ大ハズレなんじゃ……。

そう俺が内心で落ち込んでいた時、ふらふらとベンに手を伸ばす影があった。

「……蓮華？」

「！」

ハツとした様子で我に返る蓮華。

「どうした？　なんか様子おかしかったぞ」

「あ、ああ……いや、なんでも、ない」

そう言いながら、彼女の眼はポーシヨンにくぎ付けだった。

一応他の面々の様子を窺うも、特に変わった様子もない。蓮華を怪訝な顔で見ている。

「もしかして、これが何か知ってるのか？」

なんとなく問かけると、蓮華は珍しく目を泳がせ、自信なさげに答えた。

「……たぶんだけどアムリタ、だと思う」

『アムリタ！？』

アムリタとは、インド神話に登場する不老不死の薬である。

無論、これはお話のアムリタとは違い不老不死の効果はないが、若返りの効能と瀕死の状態からでも全治する治癒の力があつた。

治癒の力だけでもポーシヨンとして最高級とわかるが、人々を熱狂させたのは若返りの能力の方だ。

一瓶につき一歳。それがアムリタの若返り効果。たかが一歳、されど一歳。権力者が追い求めるには十分な価値がある。

なんせ、一年に一本飲めば永遠に生きていられるのだから。それ故に、アムリタは馬鹿みたいな値段でやり取りされている。ギルドにも、一本一億円で買い取りますとデカデカと書かれてあった。

あくまで買取価格でそれだ。実際に市場に回った時、いくらで取引されているか……想像もつかない。

金があれば手に入れられるものでもないらしく、直接取引ならその何倍もの値で買い取ってくれるだろう。

……もつとも、ちゃんとお金を支払わせる力がその当人にあるならば、だが。

しかし、とんでもないものを手に入れてしまった。

いや、まだこれが本物のアムリタと決まったわけではないだろうが、こうしてみれば何とも神秘的な色合いをしているではないか。まるで地球という星をそのまま液体にしたかのような神々しさだ。

ど、どうしよう。すぐにでも売った方がいいかな？ そうすれば一気に億万長者だ。カードの戦力強化も一気に進む。

あるいはとっておくか？ いつ死ぬかもわからない冒険をしているわけだし、万が一のためにとっておくというのは全然ありだ。家族になんかあった時のためのお守りというのでもいいだろう。

いや、しかしもし俺がアムリタを持つてるのがばれたら殺してでも奪おうとしてくる奴らが出てくるんじゃない……。やっぱ売った方がいい……。

そんなことを考えていると、蓮華がじつと俺を見ていることに気づいた。

いや、見ているのは俺ではなくアムリタだ。

そこでようやく、なぜ彼女がこんなにもアムリタに執着しているのか、そしてこれをアムリタと見抜けたのかという疑問が湧いてきた。

「なあ蓮華……なんでこれがアムリタと思ったんだ？」

「え？ いや、なんでかわからないけどこれを見た瞬間頭にアムリ
タって湧いてきたんだよ」

「ふむ……」

蓮華……いや座敷童とアムリタは関係があるのか？ いや、そん
な逸話は聞いたことがない。

いつそ蓮華にアムリタを飲ませてみれば謎が解けるかもしれない
が、そのために一億を棒に振るつもりはさすがにない。

が、気になる。すごく気になる。

やっぱこれは取っておくことにしよう。本当にアムリタかわから
ないし、もしそうだったとして急に億の金が入るのは……ちよつと
怖い。

売るのはいつでもできるわけだし、それまでは頑丈なケースの中
に保管しておくことにしよう。

俺はそう決断すると、迷宮を後にしたのだった。

第十六話 それを 売るなんて とんでもない！

突然だが、最近T w i t t e rを始めた。

いや、T w i t t e r自体は前から当然やっている。そうでなきや、学校で話題についていけなくなるからだ。クラスメイト用のオフィシャルな奴と、趣味用のプライベート奴の二つを持っていた。

そこに、この度冒険者用のアカウントを始めたのだ。

理由は特にならない。

強いて言うなら、クラスメイトの奴らにカードを自慢できなかったフラストレーションをどこか発散したかったと言ったところか。

女の子カードというだけでフラフラと寄ってくる羽虫どものおかげで、開始二週間でフォロワーはあつという間に1000を超えた。ここから一万の大台をいかに超えるかが腕の見せ所といったところか。

これまでは、三人娘の冒険中の何気ない風景を撮ったり、蓮華の食った菓子のレビューをしたり、イライザの演奏動画——むろんハーマルの笛ではない笛で——を載せてきた。

あざとい可愛さやお色気、収入に関する情報は極力排除するよう努力している。

変な客層や要求が増えるからな。

反応が良いのは、蓮華の歯に衣着せぬお菓子のレビューだ。

若干ヤンキー入っている座敷童というギャップと、意外に鋭く的確な感想が若い女性を中心にウケているようだった。

逆に男性層に人気なのはイライザの演奏風景で、自我がないとされるグーラーにここまで仕込んだことを称賛するコメントが多い。

コメントの中には同業者からと思われるものも多く、中にはうち

のカードを売ってくれという者もいた。まあこれは名前をつけていることを公開したら無くなったが。

今回の投稿は新しく入った仲間……インプについてだ。

笑顔の一枚と共に簡単な性格についても載せる。

蓮華とのお菓子を巡る喧嘩やその後の仲直りエピソードについても、攻略情報に触れないよう簡略化して書いた。

投稿したばかりだが、反応は上々だ。

そうしてコメントに返信して時間を潰していると、自分が呼ばれていることに気づいた。

昨日晴れてEランク迷宮を踏破した俺は、学校帰りにライセンスの更新に来ていたのだ。

「番号札67番の方。北川さん、いらっしやいませんか？」

「あ、はい」

慌てて受付へと向かう。俺の顔を見た女性職員が、にっこりと笑う。

「大変お待たせしました。おめでとございます、こちらが二ツ星ライセンスになります」

「ありがとうございます！」

頭を下げ、ライセンスを受け取る。

簡素な白地の一ツ星ライセンスと異なり、二ツ星ライセンスはブルーズカラーの少し高級感あふれるものへと交換されていた。

表面には、大きく星二つと俺の顔写真、氏名、住所、登録した場所が記載されている。

裏面には、俺の実績が載っており各ランクの迷宮の踏破実績と賞金首の討伐実績が書かれていた。

俺の場合は、【ハーメルンの笛吹き男（F）】と書かれている。フランクの迷宮でハーメルンの笛吹き男を倒しましたよ、という意味だ。

ライセンスは、身分証としても使えレンタルビデオ店の会員カードだって作れる。

銀行の通帳を登録することで、換金した魔石や賞金なども振り込んでもらえるうえ、ギルドでの買い物はこのカード一枚で済ますこともできた。

カードを胸ポケットにしまい、その場を後にする。

……ふふふ、これで俺も二ツ星冒険者か。セミプロと言われる冒険者まであと一步。そしたら大手を振ってクラスの奴らにも自慢が出来るだろう。

いや、二ツ星の段階でも十分自慢できるか？ 高校生で二ツ星なんてほとんどいないだろうしな。今回の収入だって、宝石を抜いても踏破報酬で三十万、魔石の換金で五万と三十五万も稼いでいる。これに、道中で得たフランクカード数十枚とEランクカード十数枚、ガツカリ箱から出た魔道具も入れればさらに金額は上がる。

偶然の産物だったカーバンクルと、本物がどうかはわからないアムリタ（仮）を抜いてこの収入だ。そんじょそこのサラリーマン以上の月収を、一発で稼いだ形になる。

こんな額を一発で稼げる高校生が他にいるか？ これを言えば、クラスのみんなも俺を憧れの眼で……いや、やっぱ駄目だな。

収入でのアピールは、嫉妬を招く。たかっってきたり、足を引っ張ろうとしてくる奴も出てくるだろう。

人から評価されるには、収入ではなく実力や名誉で選ばれなくてはならない。

ギャンブル染みたFX取引で数億稼ぐのと、金メダリストがCMで数億稼ぐのでは全くイメージが異なる。

やはり、三ツ星だ。収入ではなく、三ツ星という箔が俺には必要だ。

そんなことを考えていたからだろうか。

エレベーターから出てきたその人物に、俺は気づくことが出来なかった。

「――あれ？ ……もしかしてきたじ、じゃなくて北川君やない？」

「!？」

ギョっとしてそちらを見ると、そこには柔らかな笑みを浮かべた小野が立っていた。

「いや奇遇やな。どうしたんこんなところで。ここはギルド、市役所は違う階やで」

「あ、ああ……」

ヤバイ。こんなところで小野に出会うとは。なぜ？ コイツはいつも南山と立川の方に行っているんじゃないのか。もしかして南山も来てるのか？ しまった、八王子ではなくもつと遠いところにすべきだった。考えてみりゃ、立川と八王子じゃ近すぎる。最寄り駅がここだからとか言っていないで、三ツ星になるまではもつと離れたところにすべきだった。いや、今はそんなことを考えてる場合じゃない。小野の質問に答えないと。

「あれ、もしかして自分も冒険者になりに来たん？」

小野が笑いながら言う。いや、眼が笑っていない。

俺のあからさまに動揺した様子を見て、何かに感じている。今からでもフオローできるか？ 冒険者ってどんなもんか気になってちよっと寄ってみたんだよ。……駄目だ、言い訳としても苦し過ぎ

る。それに、下手に誤魔化したら、カミングアウトの時どう影響するか。とりあえず、俺は今日冒険者になりに来たわけじゃあない。これは本当だ。首を振り、言葉少なに答えた。

「いや」

「あ、もしかして、自分も冒険者なん？ へえ、一体いつから！」

バレた！ 小野の口調は断定的だった。カマかけですらない。俺の態度から、完全に冒険者になっていることを確信している。もはや、誤魔化せない。浮かべた笑みは、自分でもわかるほど引き攣っていた。

「ちよつと前から、かな」

「なんや、それならそうと言ってくれればよかつたんに。他に誰かこのこと知ってるんか？」

探りを入れられている？ いや、自分だけが知らない可能性が不安なのか？ もし他のリア充グループが知っていたら、小野だけが情報操作されていることになる。小野も、リア充グループの地位を維持するのに必死なのか？ そう言えば、コイツはなぜ急に冒険者になったんだ？ 単に南山に影響されたものとはかり思っていたが。

「いや、皆には言っていない」

「……へえ、じゃあ僕だけなんか」

「！……！」

背筋が総毛立った。一瞬、本当に一瞬だが、小野が酷薄な笑みを浮かべた気がしたのだ。

「そうかそうか、北島君も冒険者やったんか、これからよろしゅう

な

そう言って踵を返す小野に、俺は反射的に問いかけた。

「小野は、どうして今日ここに？」

「ん？」

小野は振り向かずに答えた。

「なんとなく、なんとなくや。でも、来て良かったわ」

「……………」

俺は、去っていく小野の姿に嫌な予感を感じずにはいらなかった。

第十六話 それを 売るなんて とんでもない！ (後書き)

【Tips】アムリタ

ポーションの中には、傷や病を癒すだけではなく若返りや長寿をもたらすモノも存在している。アムリタのその一つで、死んでさえいなければ脳みそだけの状態からでも五体満足に治してくれる治癒の力と、一歳ほどだが若返りの力を持つ。

似たようなものとして、万病を癒し寿命を十年長くしてくれるエリクサー、最高の美酒であり呑めば十年年を取らないソーマ酒、不老長寿となる仙丹などが存在する。

かつて仙丹が発見されその効果が鑑定された際、オークションに出され十兆円の値が付いた。落札したのはアメリカの大富豪だったが、その日の内に暗殺され仙丹は何者かに奪われた。また、仙丹を発見した冒険者も幸福にはならなかった。

第十七話 嫌な予感は大体当たる

朝、教室の扉を開けると纏わりつくような視線を感じた。

普段はまるで注目されない俺が、クラスメイトほぼ全員から見られている。

……なんだ、何が起きている？ しかも、朝のまだ早い時間だというのにほぼ全員が来ているのも妙だ。

俺は強烈な違和感を感じつつ、とりあえず挨拶した。

「……おはよう」

「北川さあ……」

俺の挨拶に対し碌に返事もせず名前を呼んできたのは、ナリキンの野郎だった。

ナリキンは、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら俺に言った。

「冒険者、やってんだって？」

クラスメイト達の視線が一気に強くなる。皆が私語を中断してこちらを注視しているのがわかった。

……やっぱ、そう言うことか。小野の奴、みんなにバラしやがったな。

俺は面白そうにこちらを見る小野を見て内心で舌打ちした。

おそらく、クラスメイト達がほとんど揃ってるのも、奴の差し金だ。たぶん、明日の朝おもしろいもんが見れるで、とでも昨日SNS

に流したのだろう。

東西コンビの姿も見える。不安そうな顔で俺を見ていた。

「なあ、なんで言ってくんなかったんだよ。つかなんで冒険者になつたんだ？ あ、もしかして南山とか小野の真似？」

明らかにこちらを馬鹿にするようなナリキンの言葉に、奴の友達を中心に「プフツ」という噴き出すような音が聞こえた。

他のクラスメイト達もあまり好意的な視線ではない。

……ヤバいな。そう思った。

どうしちまつたんだ、俺は。やっぱ、ハーメルンの笛吹き男と出会ったことでどっか壊れちまつたのかもしれない。

こんな吊し上げのような空気なのに、いじめの一步手前みたいな雰囲気だというのに。

まるで全然怖くなかった。

以前なら動悸がして足が震えるような圧力の中に居るというのに、俺の中にはむしろ強い活力が生まれようとしていた。

「なあ、どんなカード持ってんだよ、ちょっと見せてみるよ」

無言の俺を見てビビってると思ったのか、ナリキンが俺に手を伸ばしながら言う。

俺はその手を躲し、思いっきり顔を近づけるとナリキンを睨んだ。格下と思っていたはずの相手の威嚇に、ナリキンがギョツと怯む。

「なあ、お前と俺って友達だったか？」

「え、あ……？」

「違うよな。少なくとも俺は、お前のことが好きじゃない」
「う……」

ナリキンは小心者だ。好意を抱いていなかったのはお互い様だろうが、面と向かって嫌いと言われてすぐ言い返せるほど強い芯は持っていない。少なくとも言い返すまでに少しばかりの逡巡がある。そこに更なる追撃をかける。

「馴れ馴れしいんだよ」

いつぞやの体育の時間のように強めに肩を押してやると、ナリキンの眼がキョドキョドと目が泳ぎだした。

本当に弱いヤツにしか強気に出れないんだな、と俺は本気で呆れた。

……まあ、それはみんな同じか。俺を含めてな。

「……………」

俺は素早くクラスメイト達を見渡した。

クラスメイト達の多くは、俺の反撃に少し驚いている。その中でも、あまり気が強くなく、俺と話した事のある古賀という男子を見つけ、俺は問いかけた。

「古賀。俺が冒険者やってるって誰から聞いたんだ？」

もちろん、答えは知ってる。これは、クラスメイトに名指して犯人を指定させるのが目的だった。

「え、あ、小野くんが、その」

「小野が？　なんて言ってた？」

「昨日ラインで明日朝はやく来れば面白いことがあるからって」

「ハアアア……………」

俺はあからさまに大きなため息を吐いた。全身で不満を示す。

「小野、なんだよ、これ。俺、お前になにかしたっけ？」

困惑した顔を作り、小野へと問いかける。突然の悪意に戸惑うフリをした。

「いや、ごめん！まさかこんな空気になるとは思わなくて。昨日北川君も冒険者やってるって知って嬉しくなっつてついでにばらしてもうた」

小野の対応は素早かった。まずは謝罪から入る。そして自分の行動が悪意によるものではないとアピールした。……巧い。

リア充グループの小野が謝っているのだ。それが100%嘘とわかっていても、ここでさらに追求すれば、俺が邪推しているということになる。それがクラスカーストの差だ。

「まあ、わざとじゃあないだろうけどさ。隠してたってことはそれなりの事情があるわけじゃん？それをみんなにバラされるような真似されたら誰だって面白く思わねえよ。……なあ？」

みんなへと問いかける。

誰だって、秘密の一つや二つあるものだ。それをリア充グループだからと言ってみんなにバラされちゃあたまらない。

クラスメイト達の反応は概ね俺に同意するものだった。

「いや、ホントすんまへん。こついうサプライズは今後無しにするわ」

よし、ここは一先ず俺の一勝だな。

小野から、謝罪と秘密をバラさないという言質を取れた。

これで、今後奴がこういった真似をみんなにすれば誰でもこの約束を持ち出すことができる。

クラスメイト達の「やるじゃん」という視線を感じた。

だが、小野は一筋縄ではいかなかった。

頭を下げていた小野が、笑みを浮かべて俺を見る。

「――ところで北川君はなんで冒険者やってること隠してたん？

べつに隠すようなことじゃないと思うんやけど」

「……………」

この野郎、突っ込んできやがったな。俺がそこを一番突かれたくないというのをよく理解している。

実際は隠すつもりは全くなく、小野が一足先に冒険者になったせいで言えなかったただけだしな。もしかしてそれを察してこう言ってきてんじゃないだろうな。

しかしどうするか。ここで言いたくないと突っぱねることもできるだろうが、それは少しばかり感じが悪いだろう。

というか、今更だがなぜコイツはこんなにも俺を攻め立ててきやがるんだ？

ナリキンの奴が俺の足を引っ張ろうとしてくるのはわかる。奴にとつてリア充に成り上がろうとする俺なんて目障りなだけだろうか
らな。

だが小野はすでにリア充グループの一員。他の人間など蹴落とす
必要なんで…………。

いや、いまはそんなことを考えている場合じゃない。とにかくな
にか返事をしなくては。

「……………まだまだ未熟だし、恥ずかしかったからかな」

俺が苦し紛れに言った言葉の粗を小野は見逃さなかった。

「うん？ それどういう意味？ もしかしてボクらのこと未熟で恥ずかしいってバカにしています？」
「！」

う、ヤバイ。そう来たか。確かに、今は俺が南山と小野というリア充グループの二人を馬鹿にしたようにも聞こえる。
先ほどのこともあって小野は険しい表情は作ってないが、ピリツとした空気を出し始めた。

……やむを得ない。ここはあの路線で行くしかないか。
俺は恥ずかし気な表情を作ると言った。

「あー、いや、そういう意味じゃないんだよ。紛らわしくてすまん。俺はプロを目指してるからさ。だから今はまだ未熟で恥ずかしいって意味」
「プロ!？」

一瞬だけ、小野が本気で驚いたような顔をした。クラスメイト達もざわつく。

無論、嘘だ。二ツ星で十分稼げるのだ、プロにまでなる必要は全くない。むしろ、命の危険が増すだけだ。

先ほどの未熟だから恥ずかしかったという言葉に矛盾が出ないようにするには、目標が高いということでごまかすしかなかったのだ。

「へ、へえそりゃすごいなあ。でも、北川君もボクとそう始めた時期変わらないんちゃうか？」

「まあ小野とほとんど同じだよ。なって一月ぐらい」

「それでプロってのは、ちょっと気が早いんとちゃう？ まだ二ツ星にもなっていないやろ？」

冒険者になっただけの駆け出しのくせに、プロを目指しちゃう勘違い野郎。そんな意味を言外に含ませつつ小野が言う。

クラスメイト達の視線の中に、痛い奴を見る眼が混じり始める。

……ここだ、ここでカードを切るしかない！

俺は何食わぬ顔で言った。

「いや、二ツ星にはもうなったよ
『なっ!?!?』」

複数の驚愕の声があがる。

「嘘だ!」

そう叫んで立ちあがったのは、南山だった。それを見た小野が小さく顔を顰める。……今までやけに静かだったと思ってたなら、小野がなにか制止してたのか？

「南山くん、今はボクにまかせ」

「本当に二ツ星冒険者ってんならライセンスを見せてみるよ!」

小野の小さな声が聞こえなかったのか、南山が興奮しながら俺に詰め寄った。

「ああ、いいけど」

俺は内心のニヤつきを出さないように気をつけながら、昨日得たばかりの二ツ星ライセンスを取り出す。

南山がそれをひったくるように手に取り、凍り付いた。

「う、ほ、本当に二ツ星ライセンスだ……」

「ちょ、ちよつとボクにも見せて。う、ホンマや。し、しかも、イレギュラーエンカウト討伐実績まであるやん!？」

小野の思わず上げてしまったという驚愕の声に、クラスメイト達がざわつく。

イレギュラーエンカウト。その名と脅威を知らない奴はこの中にいない。

かつてイレギュラーエンカウトが起こした凄惨な事件は、テレビにも教科書にも何度も出てくるのだから。

それがたとえランク迷宮で出た最弱のイレギュラーエンカウトであっても、それを倒したというのは十分な箔だった。

それこそ、プロを目指しているという言葉に説得力を生むほどに俺が薄く笑みを浮かべながら手を差し出すと、小野が引き攣った顔でカードを返してきた。

……ふ、勝ったな。

「……いやあ、北川君てすごい人やったんやなあ。ボクらも一応冒険者やから余計すごく感じるわ」

「まあ偶然のおかげでもあるけどな」

「いやいや、運も実力のうちやで。しかし羨ましいわ」

「ん？ なにが？」

俺が首を傾げると、小野はニヤリと笑った。

「いや、だってこの短期間に二ツ星になれたってことはよほど強いカード持つてるんやろ? ご理解のある両親をもって、ホンマ羨ましいわあ。ボクなんかバイトで貯めた金で買ったカードやから弱くて弱くて」

「!?!?!」

小野の言葉にクラスメイト達の見目が一変する。
プロを目指す冒険者のクラスメイトから、親の金で調子こいてる冒険者へと。

一瞬にして、俺の印象が切り替わったのを感じた。
こうなると、二ツ星ライセンスもイレギュラーエンカウントの印象もがらりと変わってくる。

「よければ北川君のカード見せてくれへん？」

小野の追撃は、強烈だった。

マズイ……今の蓮華たちを見て、俺が自力で手に入れたと思う奴はいないだろう。今の蓮華を店で買おうと思ったら数千万はするはずだ。そんなカードをなり立ての学生冒険者が手に入れられるわけがない。確実に、親が金持ちで買ってもらったと思うはずだ。百万のバック一発で当てたという言い訳を信じる奴がどれだけいるか。少なくとも俺は信じない……。

ここからなにか逆転の手は……。
……な、ない。なにも、思いつかない……。

「ん？ どうしたん？」

小野が微笑みながら俺を勝ち誇った眼で見たその時。

「——マロっちはちゃんとバイトして金貯めてたよ」

そんな声が静寂を切り裂いた。
ハッとそちらを見る。

声の主は、四之宮さんだった。彼女は机に肘をつきながらこちらを見ている。

「半年くらい前からだったかな。スーパーで毎日汗だくになりながら働いてるの見たし。ねえ、静歌？」

四之宮さんが隣の牛倉さんにそう問いかける。

「うん、見ない日の方が少なかったくらいだからホント毎日働いたと思うよ。放課後から閉店までいつ行ってもいたし。家計とか苦しいのになって思ってたけど、夢のためだったんだね」

リア充グループの中でも女子全体に影響力の強い二人の言葉に、教室の空気ががらりと変わった。

「ハ、ハハ。なんや、四之宮さんらめっちゃ北川さんに詳しいやん。もしかしてどつちか付き合ってるん？」

「――は？」

そんな苦し紛れの茶化しに返ってきたのは、絶対零度の視線だった。

「小野、そういうのツマンナイんだけど」

一瞬だけ、小野の表情が酷く歪んだ。なんだ？ つまらないって言葉がそんなに気に障ったのか？

「っていうかさ。バイトしないで親の金で買ったの、小野の方じゃね？ いつも放課後だれかしらと遊んでたじゃん」

「ッ！ ま、まあ休日と夏休みメインで働いてたからそう見えたかもしれないへんな」

「ふうん、まあいいけど。あのさ、努力してる人の足を引っ張る様

な真似、やめたら？　そういうの、見ててホントイラつく」

そう言つと、四之宮さんはもう我関せずという態度でスマホを弄りだした。

「……………そうやな、なんか、途中から変に熱くなつてなつてもうたわ。堪忍な北川くん」

「あ、ああ」

深々と頭を下げる小野に、俺はなんとか頷いた。

突然の状況の変化にまだ頭がフラットに戻つていなかった。

……………なんとか、なつた、のか？　四之宮さんは、俺を助けてくれたのだからか。

あの四之宮さんが？　ギャル系グループのトップで、アイドル並のルックスで、読者モデルもやつてる彼女が……………俺を？

なんだか現実のことは思えず、ピンとこなかった。

俺がただただ戸惑っていると、頭を上げた小野が不意に言った。

「……………ところで北川君はプロ目指してるってことはあの大会には出るん？」

あの大会？

怪訝そうな俺の顔を見た小野が驚きの表情を浮かべる。

「なんや、知らんかったん？　次のクリスマスに学生限定のモンコ口の大会が開かれるんや。テレビ放送もされるんやで」

そう言つて小野はスマホを操作し、見せてきた。

なにになに？　『集え、学生冒険者！　超新星はだれだ！』か。

超新星って恒星が滅ぶ一瞬のことじゃあ……………。ま、まあいいか。

部門は大学生と高校生以下の二つ。どちらも三ツ星以下のアマチュアクラスのみ。

ルールは三対三のスタンダードルールか。開催日は12/21から23日までの三日間。クリスマスに編集された映像がモンコロクリスマス特番として放送される。

受付締め切りは試合の一週間前まで。ギリギリまで集めるつもりか。

参加賞としてポーション、ベスト4まで残った選手にはDランクカード一枚。優勝賞品は一一。

「Cランクカード、ヴァンパイア。しかも……女の子カードか！」

そこには、黒髪にドレス姿の妖艶な女吸血鬼のイラストが描かれていた。

「どや、凄いやろ？ 女ヴァンパイアやで、女ヴァンパイア！ めっちゃ欲しいわあ」

「あ、ああ」

確かに欲しい。しかし、それは他の者も同じこと。全国から学生冒険者が集まるだろう。中には三ツ星クラスもいるはずだ。

そんな中を勝ち残って優勝するのは至難の業。もしかしたらカードを失ってしまうかもしれない。そんなリスクを背負ってまで出場する必要があるのか……。

「北川君はもちろん出るやろ？ プロになるならCランクカードは一枚でも欲しいやろっし」

う。クラスメイト達が俺を見ている。

……ここで、出ないとは言えない、か。

そうなれば、プロになるとはなんだったのかとなってしまう。
実際、優勝賞品は喉から手が出るほど欲しい。ベスト4に残るだけでもかなりのプラスだ。

最後の最後に、小野に刺されたか。

まあ、いい。一枚でもロストしそうになったら即棄権だ。

「ああ、もちろん……出るさ」

『おお！』

歓声を上げるクラスメイト達。

小野が言質を取ったと笑う。

「いやあ楽しみやなあ！ クリスマスはみんなが集まって応援させてもらうで。ってその時は試合はもう終わってるか！」

小野は微塵も俺が勝ち残るとは思っていない様子だった。

どうせ、途中でカードを失って冒険者廃業してしまえばいいとすら思っているのだろう。

だが……これはチャンスだ。確かに、ピンチではあるがそれだけに乗り越えればクラスカーस्टで成り上がることができる！

ここで確かな実績を残せば、俺が確実にリア充グループの仲間入りだ。

本来は三ツ星にならなければ出られなかったモンコロに出れるままとなないチャンス。

行けるところまで行ってやるぜ……！！

俺は密かに闘志を燃やすのだった。

第十七話 嫌な予感は大体当たる（後書き）

【Tips】モンスターコロシム

冒険者たちがカードを使って戦うさまを観戦する新しい娯楽。プロ冒険者が互いのカードがロストするまで戦うデスマッチ、女の子モンスターオリーのキャットファイト、複数の冒険者が一人になるまで戦うバトルロワイヤル、数十人の冒険者が赤軍・白軍に分かれて戦う軍団戦など、様々なコンテンツがある。

残酷だ、人道に反しているなどの批判はあるが、このモンスターコロシムが冒険者ブームの火付け役となったのは誰の眼から見ても明らか。

飽食の時代、民衆はやはりサーカスを求めていたのかもしれない。

第十八話 高収入・経費〓無所得

「よお、大変だったな。見てるこっちが冷や冷やしたぜ」

小野との会話が終わり、席につくと真っ先に話しかけてきたのは東西コンビだった。

西田が俺の肩を叩きながらそう言つと、東野も「ナリキンへの啖呵はスカツとしたよ」と笑った。

「あ、ああ。……あのさ」

「しかしマロが冒険者だったとはなあ。あのバイト漬けの日々はそう言うことだったんだな」

「正確にはいつごろから始めたんだ？」

冒険者になったこと黙つててごめん、そう言おうとした俺だったが会話の流れに押し流されてしまった。

とりあえず西田の質問に答える。

「あー、十月の終わりくらいだよ」

「マジで最近じゃねえか」

「それでももう二ツ星かよ、すげえな。よくわからないけど、一ツ星から二ツ星になるだけでも大分大変なんだろ？」

「あ、ああ。フランク迷宮は日帰りで攻略できるところも多いけど、Eランク迷宮はどうしても泊まり掛けの攻略になるから。罫とかも多いしな」

「はあ、そりゃ大変だわ」

「やっぱり楽しんで金を稼げる仕事なんてねえんだな」
「でさ、マロはどんなカード持ってたんだよ」

西田が眼を輝かせて問いかけてくる。

俺がそれにカードを取り出そうとすると、東野が西田を制した。

「よせよ、どうせクリスマスにはテレビで見れるんだからそれまで楽しみにしておこうぜ」

「ああ、それもそうだな。ってか、大丈夫なのか？ 小野に誘導されるように大会に出ることになっちまったけど」

「ああ……正直気が進まないところもあるけど、良いチャンスだとも思ってるよ」

頬を掻きながらそう言っていると、東野は納得したように頷いた。

「そうか……まあプロ目指してるんだもんな」

「クラスの奴らは面白半分だけどさ、俺らはマジで応援してるから頑張れよ」

「ありがとう……」

友人たちからの心からの応援に胸が少しだけ熱くなった。

冒険者になることを黙っていたというのに、変わらずに接してくれる。冴えない奴らだが、間違いなく良い奴らだった。

「ところで、実際ちょっとくらいは勝てそうなのか？」

「ベスト4……は無理としても、二回戦くらいは勝てそう？」

「馬鹿！ プレッシャー掛けるのはやめろよ。一回戦で負けたらかわいそうだよ？」

「あ、ああ、そうだな、ごめんマロ」

「お前ら……」

応援していると言っておきながら実際はまるで期待していない様子の悪友たちに、俺は頬を引きつらせる。

俺は、フンと鼻を鳴らすと、不敵に笑った。

「まあ見てな。俺の力を見せてやるよ」

「うわ〜ん！ 蓮華モ〜ン、クラスの奴らが意地悪するんだよお〜」

放課後。迷宮に着くなり俺は蓮華を呼び出し抱き着いた。お腹に顔を埋めるように縋りつく。

いきなりのことにギョツと眼を見開いた蓮華だったが、すぐに状況を理解したようで……。

「しょうがないなあ、マロ太くんは。今度はいったいどうしたんだい？」

蓮華が俺の頭を撫でながら言う。

「かくかくしかじか、で」

と口で言ってから俺は今日あったことを順に話していった。

朝学校に行ったら教室の空気がおかしかったこと。俺が冒険者をやっていることを勝手にばらされていたこと。嫌味な奴らが絡んできたこと。それを撃退したは良いが、小野というクラスの中心人物に、モンコロの大会に出るように誘導されてしまったこと。

大体のあらましを聞いた蓮華は呆れたように言った。

「なるほど、それで大会に出ることになってしまったと。君は実にバカだな。まるでおだてられて木に登る豚じゃないか」

「そんなこと言わないで助けてよ！ このままじゃクラスに居場所が無くなっちゃうよ」

「仕方ないなあ。そんな時はコレ！」

そう言つて蓮華が袖から取り出したのは、藁人形だった。

……………えっ？

思わず素に戻る。

「座敷童の藁人形」。……………オン Om・Mahaashriye・Sva
ワカ ahaa」

蓮華は最初だけドラ○もん風の声真似をやった後、急に低い声で呪文を唱え始めた。

藁人形が一瞬だけ黒い光を放った、ように見えた。

「ふう、これでマロ太くんに意地悪をしたクラスメイトに呪いが掛かったよ」

「え、どんな？」

「満員電車の中でウンコを漏らす呪い」

……………怖ッ。

え、マジで呪い掛かったわけじゃない、よね？ 冗談、だよな？
カードは迷宮以外では使えないし、迷宮の外に影響をもたらせない。迷宮内で敵に状態異常に掛けられても、迷宮から出れば解除されるのは実験で証明されている。

まさか、噂の【呪いのカード】でもあるまいし……………大丈夫、なは

ず。

だが真実を尋ねる勇氣は俺にはなかった。

「ごほん、ま、まあ冗談はこれくらいにして。大会に出ることになってしまった以上、できれば優勝を目指して頑張りたいと思ってるんだよな」

「そりやあまあいいけどよ。それに出ないって選択肢はないの？ クラスの奴らなんか無視すりゃあいいんじゃないか？」

「まあどうしてもヤバそうならそれも有りだけどさ。正直賞品が魅力的なんだよな」

俺は大会のHPを印刷した紙を蓮華へと見せた。

「どれどれ。ベスト4に残った段階で16種のDランクカードから一枚贈呈。優勝者にはトロフィーと女ヴァンパイアか。……なるほどね」

「女ヴァンパイアは普通に買えば7、8千万はするからな。これが男のヴァンパイアとか他のCランクカードなら無理して出るつもりはないけどよ」

「もし優勝できればイライザをランクアップできるってわけか」

「ああ、俺らはどうしてもイライザに負担を押し付ける形になるからな。ここいらで報いてやりたいと思ってる」

俺の話聞いた蓮華は、前髪をかき上げ小さくため息を吐いた。

「イライザのためとなるとアタシも弱いな。OK、アタシも出来る限り協力するよ」

「おお、ありがとう」

「で？ 具体的なプランはあるのか？」

「ああ、まず大会のルールからなんだが……」

俺は蓮華へと説明し始めた。

大会は勝ち残り式のトーナメントで行われ、試合形式はスタンダードルールが適応される。

モンコロでの戦いには、一対一のデュエル、三対三のスタンダード、数十枚のデッキを組んで戦うエキスパートルールが存在し、スタンダードルールは最もポピュラーな方式となる。

スタンダードルールでは、選手たちは事前に十枚のカードで構成されたデッキを登録する。試合ではデッキの中から三枚を選び、戦っていく。一試合ごとの時間は十分。マスターがダイレクトアタックを受けるか、場に出ているカードをすべて失った場合敗北が確定する。試合時間を過ぎても決着がつかなかった場合、生き残っているカードの数が多い方を、同数の場合は審判が定めたテクニカルポイントで勝敗をつける。

持ち込める道具類は、魔道具の類のみ。ただし使用できる回数は大会中五回まで。また試合中での使用に限るとする。簡単に言うと、ポーションは有りだが、催涙スプレーは無しということだ。

「とまあ、こういうトーナメント方式の大会では、如何にデッキの枚数を減らさずに勝ち進んでいくかが重要になるわけだ。本来のメンバーをどのタイミングで出すかも重要となるな」

「現状だと、アタシとユウキ、イライザで三枚か。あとの七枚をどう決めるかがポイントになりそうだな」

「……いや、あの蓮華さん。あと一枚うちにはレギュラーがいるんですが。」

「大会まであと二十日しかないからな。俺としては十枚すべてを戦力にするのは厳しいと思ってる。初期の三枚を限界まで鍛えて、インプをDランクにランクアップさせる。残りを一芸の有るEランク

カードで埋める……ってのが現実的なラインになると思うんだよな」
「ふむ……」

俺の言葉に蓮華が一瞬考え込み。

「あのよ、アムリタを売って戦力を整えるって手もあるんじゃないか？」

ああ、なるほど。当然その質問は出るか。

「いや、アムリタは保険に取っておきたい。万が一、お前らの内一枚でもロストした時に売って蘇生できるようにな」

一億あれば、蓮華含めて全員の蘇生が出来る。俺が大会への参加を決めた最大の理由がこれだった。

尤も、これが本当にアムリタであればの話だが。
鑑定すれば一発でわかることではあったが、もしかしたらメンバーを失うかもしれないという危機感を持ったためにあえて鑑定はしな
いつもりだった。

「なるほど……そういうことなら何も言うことはねえよ」

俺の説明を聞いた蓮華はあっさりと引き下がった。

「よし、それじゃあこれから忙しくなるぜ。目標はEランク迷宮を最低五個踏破だ！」

その日から、俺たちの怒涛の迷宮攻略の日々が始まった。

ギルドで予め迷宮の情報を買って、Eランク迷宮の中でも階層が浅く攻略が容易いものを選んで攻略していく。

Eランク迷宮の踏破報酬は階層数×二万。情報料は地図と罫の種類、出現モンスターの情報で二万円ほど。最も浅い十一階層の迷宮であつても、一つにつき二十万の固定給が入る。

俺はこの十一から十三階層ほどの浅い迷宮を休日到一个、平日には二、三日かけて踏破していった。

移動はユウキに跨り時間と体力を節約する。それでも無理な迷宮踏破に、レストの魔法で体力を回復させても徐々に疲労が体に蓄積されていくのが分かった。

一方、学校では少しずつ俺が大会に出るといふ話が広まりつつあった。

廊下を歩くだけで視線を感じ、誰かがひそひそと俺の話をしているのも聞こえた。教師たちからも、楽しみにしてるぞ、なんて声をかけられたほどだ。

それらの大半は好奇心や応援といったものだったが、少なくとも割合で悪意的なものも感じられた。

もし俺が大会で無様な姿をさらせば、そいつらの見えない悪意は実際に牙を剥いてくることになるだろう。プレッシャーがズンと肩にのしかかってくるようだった。

学校でも気が休まらず、疲労はたまる一方で、俺は日に日に鬼気迫る表情となつていった。

そんな俺を見て、クラスメイト達の眼が少しずつ変わってきた。

当初は、実験前のモルモットあるいは舞台公演前のピエロを見るような感じだったのが、徐々に見守る様な視線へと変化してきたのだ。

最初に声をかけてくるようになったのは運動部の連中で、疲労を取るための体操やマツサージ、果物などを教えてくれた。

どうやら、今の俺を大会前の追い込みをしている自分と重ねたようだった。

東西コンビも助けてくれた。ネット上で大会に出ると言っている選手の情報を集め、その手持ちなどを纏めてくれたのだ。

不透明だったライバルたちの情報は、俺により明確な目標を与えてくれた。特に優勝候補と目される面々のカードには、大いに刺激された。

そうして、大会までの間に俺は計九個ものEランク迷宮の踏破を果たした。合計階層数は、106階層。踏破報酬は212万円、情報料を差し引いて194万となった。

これに道中で手に入れた魔石と魔道具、要らないカードを纏めて売却し、146万円。さらにカーバンクルガーネットが230万円の値が付いた。

計570万。俺の貯金総額は660万となった。

これは俺が狙っていたカードの売値とほぼ同額であった。

そのカードの名はエンプーサ。ギリシャ神話に登場する夢魔で、真鍮の両脚、蝙蝠の羽、驢馬の尻尾を持つとされる美女である。

サキユバスと同系統なだけはあって、Dランクカードでも屈指の人気を持つカードだ。おかげで、碌なスキルも持っていないにもかかわらず650万もした。

俺がこれほどのハイペースで迷宮を踏破していったのは、大会までにしてもこのカードを欲しかったからだ。

エンプーサは、インプがランクアップ可能なカードの一つなのである。

大会を勝ち抜くには、主力が三枚では少なすぎる。俺はそこにど

うしてももう一枚カードを加えたかった。

最大戦力である蓮華とのシナジーを持つ彼女を……。
インプからエンプーサへとランクアップした彼女へと、俺は名前を与えることにした。

その名はメア。古い英語で夢魔を表す言葉だ。インプの進化先はいろいろと考えていたが、エンプーサにしたことでサキュバスを指すことが確定したため、それに沿った名前とすることにした。

これが今の彼女のステータスだ。

【種族】エンプーサ（メア）

【戦闘力】205（65UP！）

【先天技能】

- ・ 吸精：対象の魔力と生命力を吸い取り蓄えることが出来る。
- ・ 夢への誘い：強力な眠りの魔法を使用可能。
- ・ 三種の変化：美女の姿から犬、牛、驢馬の三つの姿へと変身できる。

【後天技能】

- ・ 小悪魔な心
- ・ 一途な心
- ・ 友情連携
- ・ 初等魔法使い見習い
- ・ 初等魔法使い：簡単な魔法をすべて使用可能。

戦闘力がすでに65UPしているのは、インプ時代に高めた戦闘力を引き継ぐことが出来たからだ。また後天技能はすべて、先天技能は初等魔法使い見習いを引き継ぎ、元々エンプーサが持っていた初等攻撃魔法を吸収してスキルを成長させることもできた。

実はメアのランクアップをする前に適当なFランクカードをEラ

ンクカードにランクアップさせてみたのだが、そちらは高めた分の戦闘力も後天技能も全く引き継ぐことが出来なかった。

ランクアップの引継ぎは、運と使い込み具合に左右されるとは聞いていたが、予想以上に使い込み具合が重要なようだ。

これは他のカードたちのランクアップの参考にさせてもらおうと思う。

ともかく、これでやれるだけのことは終わった。

あとは、実力を出し切るだけ。

そうして、試合当日がやってきた。

――モンスターコロシウム。

それは、冒険者たちが互いのカードを駆使し戦う新しいスポーツだ。

そもそもの始まりは、第二次アンゴルモアで東京ドームが迷宮化してしまったのが始まりだった。

東京ドームは、迷宮としてはかなり特殊な構造をしており一日一体の主が出るだけとなっている。

よって、それを倒してさえしまえばイベントをするには問題なかったのだが、さすがに迷宮で野球などのイベントを行うことはできず、東京ドームは巨大な箱となってしまうた。

野球は新しくドームを作るとして、なんとか東京の象徴の一つである東京ドームを有効活用したい。

そう考えた時の都知事は、イタリアのコロッセオがやはり迷宮化してしまったことに目を付け、ギルドと協力して東京ドームをモン

スターコロシウムへと作り替えたのだ。

当初は批判もあったが、これは結果的に大成功に終わった。

なんせ、見世物となっているのはほんの少し前まで空想上の存在とされていたモンスターたちだ。

エルフやドラゴンなどの幻の生物たちが、時に華麗に、時に牙を剥きだしにして殺し合うさまは、人々を熱狂させた。

毎日のようにTV放送もされ、毎週金曜夜九時に放送されている『グラディエーター』は、プロ冒険者が互いのカードをロストするまで戦うということもあって、現在視聴率一位を独占し続けている超人気番組となっている。

コロシウムの試合を中心に生活している冒険者をグラディエーターと呼ぶが、それはこの番組が由来となっているほどだ。

その他にも、女の子モンスター限定の『キャットファイト』や、三ツ星冒険者限定の『プロの卵たち』などコンセプトを変えたものが曜日と時間を変えて毎日のように放送されている。

今回俺が出る『集え、学生冒険者！ 超新星はだれだ！』も、『プロの卵たち』がクリスマス特番のために企画した番組だ。

視聴率的には、『グラディエーター』の裏番組となってしまうが、それでも高校生以下の学生たちにカードバトルとは言え殺し合いをさせるというかなり攻めた企画のため、なかなかの注目が集まっているようだった。

今回、高校生以下の部に参加した学生は全部で68名。参加は表明しても当日来なかったり、途中で参加を取り消したりした結果この数まで絞られた。

そもそも高校生以下の冒険者が少ないことを考えても、相当の数が集まったと言えるだろう。

「……………」

当日。俺は、東京ドームホテルの一室で静かに自分の番を待っていた。

さすがにクリスマス特番というべきか、番組は豪勢にも選手ひとりひとりに東京ドームホテルの一室を用意してくれた。

下手に選手同士を同じ空間においてトラブルを起こしたくないという考えなのだろう。

俺たちも高額なカードを失うリスクで、出演料も出ないのに参加しているのだ。優勝するため、最低でもベスト4に残るためどんなことでもするという奴が出てもおかしくないだろう。

選手同士の妨害の可能性を避けるため、戦う相手も直前までわからないようになっていく。

まあこれは当日まで選手が本当に来るかわからないため、事前に決める訳にはいかなかったというのもあるだろうが。

今頃、人工知能が入力されたデータをもとに盛り上がる組み合わせを作っているところだろう。

俺は一回戦で使う予定のカードを取り出した。

一枚は、イライザだ。

【種族】グーラー（イライザ）

【戦闘力】200（60UP！ MAX！）

【先天技能】

- ・ 生きた屍
- ・ 火事場の馬鹿力
- ・ 屍喰い

【後天技能】

- ・ 絶対服従
- ・ 性技
- ・ フェロモン
- ・ 奇襲

- ・静かな心
- ・庇う
- ・精密動作：より正確な動作を可能とする。
- ・演奏（NEW!）：演奏技術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。
- ・畏解除（NEW!）：畏の解除に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。

戦闘力が成長限界に達し、演奏と畏解除のスキルを得た。直接戦力に繋がるスキルではないが、彼女のスキルの数々は俺のハイペーすな迷宮攻略に大いに役立ってくれた。
ダイレクトアタックが即敗北につながるこの大会では、庇うのスキルをもつ彼女はスタメンでの出場となるだろう。
残りの二枚はEランクカードの中からスキルに優れたものを選んだ。

【種族】 ナイトメア

【戦闘力】 60

【先天技能】

- ・ 夢魔の使い：夢魔の使い魔。睡眠状態の対象に限り、強力な吸精を使用可能。

【後天技能】

- ・ 気配遮断

【種族】 ザントマン

【戦闘力】 70

【先天技能】

- ・ 眠りの砂：触れたものを眠りに落す砂。

【後天技能】

- ・状態異常強化：状態異常を強化する。
- ・先制攻撃：最初の行動に強いプラス補正。

Eランク迷宮攻略しているとき、一番印象に残った敵がこのザントマンとナイトメアのコンビだった。

こいつらはその中でも優秀な後天スキルを持っており、ザントマンはエンブーサになったばかりのメアを眠りに落とし、ナイトメアの気配遮断はユウキ以外気づくことが出来なかった。

何度も使える組み合わせではないが、初見殺しとしては十分に使えると俺は見ていた。

頭の中で、戦闘のシミュレーションを何度も繰り返す。

相手の戦力が分からない以上妄想に近いものだったが、最も上手くいったパターンを何度も想像することにより、スムーズな行動を可能とするのが目的だった。

と、その時部屋の内線に電話がかかってきた。

「はい」

「北川様、対戦が近づいてきましたのでご準備の方をお願いします。備え付けのTVの方に、対戦相手と会場への案内が表示されますのでご覧ください」

「わかりました」

電話を切り、TVをつける。

心臓がドキドキしてきた。俺の対戦相手は一体どんな奴なのか。

「―――なっ!?!」

それを見た俺は、驚愕に目を見開いた。

わが目を疑い、何度も内容を確認する。

しかし、いくら確認しても現実是不変ならない。

画面に映し出されていたのは――――南山だった。

第十八話 高収入・経費〓無所得（後書き）

【Tips】カードのランクアップ

カードは、上位のカードを用意することでランクアップすることが出来る。ランクアップのメリットとして、元々使っていたカードの容姿・記憶・性格を引き継げることが挙げられる。また使い込み次第では上昇した戦闘力とスキルも受け継ぐことが出来るが、これは運にも左右される。ランクアップするためには、未使用（初期化されている）かつ、同系統で性別が一致している必要がある。

例：グーラー ヴァンパイア、クーシー ガルム。など。

第十九話 そんなに恨まれることした……？

『さあ第一回戦、六戦目。まずは選手の入場です！』

アナウンスに促され、ゲートを通ると眩しいほどのライトが俺を出迎えた。

ローマの円形闘技場を意識した内装は、いざ自分が立ってみると実に殺伐とした印象を受けた。土埃の臭いがそれに拍車をかける。

観覧席は、観覧チケットの当たった観客たちで隙間なくうまつており、その中には見つけることはできなかったが俺の家族もいた。

俺の入場から数秒遅れて、南山が姿を現す。奴は、凄まじい形相で俺を睨みつけていた。

マジで南山が出てやがる。アイツ、そんなことおくびにも出さなかつたくせに。

『次の二人はなんと、同じ高校に通うクラスメイト同士！ 普段は机を並べて勉強する二人が、運命のいたずらにより戦いを強いられることとなってしまいました。解説の重野さんは、この二人の冒険者登録にも立ち会ったとか』

アナウンサーの声に、思わず実況席を見る。え、重野さん？ あの人何やってんの？

『そうですね、二人のことは印象に残っていますよ』

『ほう、元自衛官でBランク迷宮の踏破実績もある重野さんの印象

に残りましたか。それはどのような？』

『南山くんは堅実な、北川君は博打好きな印象を受けましたね』

『ほう、博打好きと申しますと？』

『うーん、詳しいことは言えないんですが、目標のためならばすべてを投げ捨てる事が出来る意思の強さを持っていると言った感じですね。この手のタイプは早々に消えるか、圧倒的速さで上り詰めるかの二択なので、よく覚えていきます』

『ほうほう、情報によれば南山くんは冒険者歴半年以上で一ツ星冒険者、一方で北川君は二か月程度にもかかわらずすでに二ツ星冒険者となっておりますね』

『二か月で二ツ星はかなりの速さですね』

『対照的な二人がどのような戦いを見せるのか、楽しみです』

…… 個人情報駄々洩れだな、と苦笑する。さすがに、俺がいきなりパックを買うという博打を打ったことまではバラさなかったようだが。

しかし重野さんが元自衛官だったとは。まあ考えてみれば不思議ではない、か。

ギルドでは、元冒険者を積極的に採用していると聞く。引退した高ランク冒険者が、安定を求めてギルドの職員になってもなんら不思議はない。いくらお金を持っていても、日本は若い無職に厳しいからな。その点、公務員と言う肩書は安心感が違う。

不思議なのは、ここに重野さんが呼ばれていることだが……まあどうでもいいか。解説に元冒険者が呼ばれるのはいつものことだしな。

そんなことより、だ。このアナウンサー……なーにが運命のいたずらにより戦いを強いられることとなった、だ。思いつきり仕込んでるだろうが。一回戦でいきなり知り合いと当たるとか、どんな確率だよ。

だが、まあいい。俺としても、心のどこかで南山と決着をつけた

かったことは確かだ。

かつて、南山が俺たちに放った言葉は、今も心の中にしこりとして残っている。

ヤツも俺に思うところがあるようで、にらみ合う俺たちの緊張感
は加速度的に高まっていった。

『それでは、試合開始!』

ベルが鳴ると同時に、俺たちはカードを呼び出した。

『両者同時に召喚! 北川選手はグーラーと、ザントマンに……お
や、もう一体の姿が見えませんか』

『どうやらスキルで隠れているようです』

『一方南山選手のモンスターは、ボアオークとハイコボルト二体の
ようです』

俺は南山の呼び出したモンスター、特に猪頭の獣人を見て小さく
舌打ちした。

ちっ、増殖パーティーか。

ボアオークとハイコボルトは一定時間ごとに下位種族を呼び出す
能力を持つ。以前戦った水虎と同じような能力で、一体一体の能力
は落ちるが質を数で埋められるのが強みだ。

対処方法は二つ。相手の召喚限界が来るまで粘るか……速攻でケ
リをつけるか。

俺が選ぶのは、当然後者!

「お前ら、召喚だ!」

「ザントマン!」

命令は同時。敵側三枚のカードが召喚の遠吠えを上げる寸前に、

ザントマンの眠りの砂が周囲へと撒かれた。

Dランクカードのボアオークは一瞬だけ上体を揺らしたがレジスト。しかしEランクのハイコボルト二体は、グルリと白目を剥くとドサリと倒れ伏した。

「な、ハイコボルト!？」

「おーっと、南山選手の眷属召喚に対し北川選手の状態異常魔法が炸裂! ハイコボルト二体を眠りに落とすた!」

「ザントマンの行動が早いですね。良く仕込んであるのか、何かのスキルか」

「しかしボアオークはレジストし、オークを一体呼び出したぞ。ハイコボルトたちも叩けば簡単に起きてしまう。さあどうする!」

アナウンスの声に、南山もそれに気づいたのか指示を出す。

「ハイコボルトをさっさと起こせ!」

それにボアオークと呼び出されたオークがハイコボルトを起こしに向かうが、あまりに遅い。

すでにイライザがオークたちへと迫っていた。

疾走の勢いそのままに、オークを蹴り飛ばす。弱体化した眷属オークでは、カンストしたグーラーの一撃に耐えられるはずもなく、血反吐をまき散らし一発で消滅した。

そのまま、ボアオークへと接近するイライザ。

「北川君のグーラーが一撃で召喚されたオークを蹴り殺した! 凄まじい威力!」

「おお、あのグーラーは良く仕込んでありますね。下級のアンデッドは育成が難しいのですが、これは見事です。ですが、ボアオークの方がグーラーより初期戦闘力が高い。どうなるか」

迫るイライザへと向けてボアオークが鉄製の斧を構えた。あの斧……持ち込みではないな。現れた時から持っていた。ならばボアオークの初期装備。つまり、特殊効果はない。

両者が間合いに入る。先に仕掛けたのは屈強な猪頭獣人。リーチの差を活かし、ゴウツと斧を振り下ろす。それに対し、金髪の美しい屍食鬼は滑るような動きで相手の懐へと入ると、その膝裏を押しようにして蹴った。ガクリ、と体勢を崩すボアオーク。そこへ、彼女は足を天まで振りあげて踵落とし。分厚い鼻へと叩き付けられた足刀は、勢いそのままにその巨体を地面へと叩き付けた。

一連の流れるような動きを見た会場の人々から「おおっ！」という歓声が漏れる。

『グーラー、戦闘力の勝る相手を華麗な技で撃破！ 強い、そして美しい！ 重野さん、わたくしグールを使う冒険者はあまり見たことがないので、これほどまでに強いカードなのですか？』

『いえ、グーラーはDランクカードの中でも最弱に近いカードです。初期戦闘力が低く、自我がないため複雑な動きもできません。しかし今のグーラーの動きは生身の人間と同等、いやそれ以上に滑らかなものでした。これは明らかにスキルによる補正。その上あの一連の技は明らかに仕込まれたもの。命らしい命令もなかった！ ここまで育成されたグールは見たことがありませんよ！』

『重野さん大絶賛！ これは早くも決着がついたか？ だがまだハイコボルト二体が残って、いや、待て！ ハイコボルトの姿が消えている！ 一体いつの間に！』

『あの黒い靄は……そうか、ナイトメア。おそらく、ハイコボルトが眠りにつくと同時に憑りついたのでしょうか』

『北川選手の三体目のモンスターが見えないと思っていましたが、なるほど、ナイトメアだったのですね』

『ザントマンで速攻眠りに落す。グーラーで時間稼ぎをしているう

ちに、ハイコボルトをナイトメアが始末する。これが北川君の作戦だったのでしょうか』

実況の解説を聞いた南山が俺を憎々し気に睨む。

「北川あ……………」

「……………」

それに対し、俺は無言で次の指示を出す。もはや勝負はついた。だがここで降参しろと言っても南山は聞かないだろう。

故に。

「イライザ」

俺の名前を呼ぶだけの短い指示に、彼女は的確に応えた。脚で押さえつけていたボアオークから素早く離れ、南山へと向かう。

ボアオークが起き上がるよりも早く、一撃を叩き込んだ。

「ひっ……………」

頭を庇うようにしゃがむ南山の周囲に半透明の壁が現れる。選手全員に配られた、防御用の魔道具だ。一瞬の抵抗ののち、壁が木端微塵に砕かれた。

俺の、勝ちだ。

…………正直、あのままボアオークをロストさせることもできた。だが、それはいくらなんでもやり過ぎだ。友人ではなくなつたとしても南山はクラスメイト。カードを割るほど憎んではない。ダイレクタアタックは、俺なりの慈悲だった。

『決一一着！ クラスメイト同士の戦いは、北川くんの勝利に終わりました！ カードのランクはどちらもD、E、E。しかし終わってみれば北川君がスルスルと勝った印象でしたね』

『そうですね、やはり経験の差が大きかったというところでしょうか。北川君が見せたザントマン、ナイトメアのコンボは、Eランク迷宮を潜っているとたまに見るものなんです。Dランクカードを含むパーティーであつても壊滅する危険性がある組み合わせで、初心者には要注意な組み合わせです。キャリアは長くとも一ツ星冒険者の南山くんはそれを知らず、逆にキャリアは短いですがEランク迷宮を知る北川君はそれを知っていた。それが勝敗を分けたというところでしょうね』

『なるほど、敗れてはしまいましたが、健闘した南山くんに拍手を』

会場からまばらな拍手が送られる中、俺は俯く南山を見ていた。

正直、拍子抜けした……というのが俺の偽らざる思いだった。

対戦相手が南山だと知った時は衝撃が走った。俺よりも半年以上も早くやっているのだから俺以上にカードを使いこんでいてもおかしくない、と。

ベストメンバーで登録しなかったことを本気で後悔したし、ボアオークにハイコボルト二体という質より量のコンセプトで構成されたパーティーを見て、本気だなと焦った。

実際、パーティー全体に状態異常への耐性があつたら結構ヤバかつただろう。状態異常を治す魔道具を使ってくるかも、と手元をずっと注視していた。

だが、勝ったのは俺だった。終わってみれば余裕の勝利。重野さんが言ったように、状態異常の怖さを南山が知らなかったのが、勝敗の決め手だった。

つまり、マスターとしての腕で俺は勝ったのだ。

もしこれが蓮華やユウキを加えた最強メンバーだったならば、俺

はそうは思わなかっただろう。

カードも俺の力であることには変わりない。だが、どうしても心のどこかでランクの差で勝ったと思ったはずだ。

だが、俺は南山と同じD、E、Eの組み合わせで勝った。互角の条件で勝ったのだ。

結局のところ、冒険者としては俺の方が努力していたということなのだろう。

俺は冒険者となってから毎日迷宮に潜り続けた。南山は、クラスの奴らと毎日のように遊んでいた。迷宮に潜るのは、月に数回程度。それを俺はクラスでの会話やSNSでの投稿から知っていた。

この二十日間にしただって、南山は必死に足掻いている俺を見て馬鹿にするような眼をしていた。

それが、勝敗を分けた。

「……………クソ、クソ！」

南山は泣いていた。見下していた俺に負けたことが悔しかったのか。もつと努力すればよかったと後悔しているのか。あるいはその両方か。

どちらにせよ、俺には本当の気持ちはわからない。……………もつ、友達ではないから。

南山を少し尊敬していた。俺と同じモブキャラの素質しかなかったのに、リア充グループの仲間入りをしたコイツに敬意を抱いていた。

そしてそれ以上に嫉妬していた。

アイツにできるなら俺だって。それが原動力だった。

だが、今は違う。

もう嫉妬はしていない。俺の方が努力していたと実感できたから。

「……………じゃあ、南山。また学校でな」

そう言って、背中を向ける。

「……………んな」

「……………?」

微かに何か言われた気がして振り向いた。

その瞬間。

「ふざけんなああ！ お前みたいなモブキャラが！ 俺を、よくも！ 俺は！ お前とは、お前らとは違うんだよ！」

「!?!?」

え、ちょ、なにごと!?!?

突然の発狂に、俺は本気でビビった。顔を鼻水と涎でくしゃくしゃにし、眼を血走らせ、歯をむき出しにし、妙に甲高い声でヒステリーを起こす南山の姿は、ある種迷宮のモンスター以上の恐怖があった。

「み、みなみや……………」

「ボアオオオオーク！」

「なっ!?!?」

南山の怒声に応えたボアオークが、体を跳ね起こし俺へと目がけて四つ足で突進する。

———ヤバ、い。

混乱した頭で途切れ途切れにそう思った瞬間。

一瞬で駆け付けた金色の影があった。

イライザだ。彼女が庇うのスキルで駆け付けてくれたのだ。

トウク……………。俺の胸が高鳴る。こんなん惚れてまうやる。さす

が、我がパーティーの黄金の盾、困った時のイライザさんや！

少女漫画のヒロインのようにト口顔になる俺を他所に、イライザさんは合理的に行動する。

彼女は俺を片手で押しのけつつ、突進するボアオークの頭を押しように蹴った。蹴り脚がグシャグシャになるほどの威力に、ベクトルを強引に捻じ曲げられたボアオークは、その頭部を地面へと深々と埋めた。

地面から頭を引っこ抜く前に、すかさずイライザさんの追撃が入る。無防備な背中へと抱き着き、首筋を噛み千切ったのだ。

血しぶきが上がる。のたうち回るボアオークの身体を押さえつけ、二度三度と首筋を噛み千切っていく。

ドキン！ 俺の胸が高鳴る。今度はトキメキではない、ホラー映画的光景に対する恐怖の鼓動だ。時折現れるイライザさんのバイオレンスな一面には、いつまでたっても慣れない。

やがてボアオークの動きが弱っていき……フツと消えさった。会場に静寂が落ちる。

イライザさんが顔を上げ、俺へと問いかけた。

「マスターご無事でしたか？」

「あ、ああ」

俺がなんとか頷いた瞬間。

『あ、な……！ スタッフ！ はやく取り押さえて！』

アナウンサーの焦った声と共に会場からざわめきが復活する。同時に、スタッフや警備員たちがやってきて、南山を取り押さえた。俺も、連れ去られるように保護される。

選手用通路まで引っ張られていくと、番組のスタッフたちに取り込まれた。

口々に俺を心配するようなことを言いつつも、明らかに俺以上にテンパっている彼らの顔を見て、俺はとんでもないことになったなとぼんやり思った。

……これ、大会続行できるのか？

第十九話 そんなに恨まれることした……？（後書き）

【Tips】 迷宮の踏破報酬

迷宮の踏破報酬は、ランクが上がるごとに一層当たりの値段は上がる。

- ・ Aランク迷宮：踏破出来たら100億円。
- ・ Bランク迷宮：階層×100万。
- ・ Cランク迷宮：階層×10万。
- ・ Dランク迷宮：階層×3万。
- ・ Eランク迷宮：階層×2万。
- ・ Fランク迷宮：階層×1万。

踏破報酬をメインの収入とするプロの冒険者を、グラディエーターと区別してプロフェッサーと呼ぶこともある。彼らはお金以上に迷宮という存在の謎に魅了され、それを解き明かさんとしている者が多いからだ。プロフェッサーと呼ばれるようになった所以は、実際に大学の客員教授をやっている者もいることから。

第二十話 美少女を見るとついヒロインかどうか考えちゃう

『えー、先ほどのトラブルですが、南山選手が戦闘終了に気づかず北川選手に攻撃してしまったとのことでした。次回以降このようなトラブルが無いようー』

ーそう言うことになった。

番組としても、もはや大会を続行させる以外に道はなかったのだろっ。

俺を気遣う口調ながらも、言葉の端々に大人の事情とやらを匂わせてきた。

このままでは、南山くんが刑事罰に問われる可能性がある。両者が口裏を合わせてくれれば穩便に済ますことが出来る。もちろん、相手側には番組側からしかるべき対応をさせて貰うので安心して欲しい。下手に警察沙汰にするよりも、君にとっても安全になるはず……みたいな感じだ。

正直俺も大事にしたくなかったし、大会が潰れて困るのはこちらも同じだ。

ある意味警察などよりもよほど厄介で恐ろしい存在であるTV局が、しかるべき対応をする、安全を約束すると言っているのだから、任せるべきなのだろう。

それに実況解説にはギルドの重野さんもいた。いくら口裏を合わせて刑事罰を避けたとしても、冒険者としてやっていくのは確実に

不可能だろう。

ならば俺から言うことは何もない。

後のことは、観戦に来てくれていた両親とTV局、それに南山のご両親が上手く片付けてくれるはずだ。

俺は別に南山が手錠をかけられて連行される姿が見たいわけではないのだ。俺の見えない場所で、大人たちがしっかりと罰してくれるというなら、精神衛生上、それに越したことはない。

終始協力的な様子の俺に、あちら側もホッとしている様子であった。

それに何より……南山については俺も落ち着いて考えてみたかった。

俺や東西コンビを切り捨て、カーストトップグループだったはずのアイツがなぜこんなにも俺に敵意を燃やし、焦っていたのか……。

そこに、俺の憧れていたスクールカーストトップグループという存在の、本当の姿がある気がした。

まあ、それも今は後回しだ。

イライザの為にも、大会に集中すべきだろう。

こうして、俺の大会初日は終わった。

翌日。早朝から行われた二回戦であったが……俺は不戦勝となった。

……別に、汚い裏取引があったわけじゃない。試合でのロスト率にビビった学生の棄権が相次いだためだ。

俺たちみたいな学生にとって、カードは換えが利く消耗品ではなく、極めて高価な代物だ。いつもテレビで見ているプロたちとは違う。

彼らはスポンサーがバックについている為、勝っても負けても失

ったカード代などすぐに取り戻せるのだ。

それを、モンコロに出れる！ と脊髄反射で飛びついた奴らが試合の様子を見てあまりのロスト率の高さに今さらながらビビったのだろう。

参加した奴らの中には、南山のように冒険者という肩書を使ってクラスカーストで成り上がったものもいるはずだ。

そんな彼らにとってカードを失うというのは社会的地位を失うのにも等しい。

そういうわけで、俺は二回戦を戦わずに勝ち進んだ。

ちなみに、これは全然関係ない話だが、二回戦も一回戦同様トランプルを避けるため対戦相手は教えられないことはない。

つまり、番組側が対戦相手を入れ替えても選手や観客はわからないというわけだ。いや、全然関係ない話だが。

その日の午後と夜に行われた三回戦と四回戦。こちらは南山との試合以上に消化試合となった。

三回戦の相手は、フランクカード三枚と露骨に流してきた。おそらくもうカードを失いたくはないが、もしかしたら不戦勝で勝ち上がれるかもしれないと期待して棄権はしなかった、といったところなのだろう。

三回戦は、そんな様子の選手がチラホラと見られ、観客たちは露骨にテンションを落としていた。

これはマズイと番組側も思ったのだろう。有力選手の紹介をしたり、盛り上がった試合のハイライトなどを流していた。

一回戦は一一選手たちの心が折れるほど一一死闘が多く見どころのある試合が多かったため、会場は少し盛り上がりを取り戻した。

そうして行われた四回戦。ベスト8ということもあって気合を入れて試合に臨んだ俺だったが、後味の悪いものとなった。

なぜならば、相手がすでに戦えないほどボロボロだったからだ。二回戦を不戦勝で勝ち上がり、三回戦をろくに戦わずに勝ち進んだ俺と異なり、相手は二回戦三回戦もガチの相手と戦ったようだった。

主力のDランクカードはボロボロ、残りの二枚はFランクカードと事実上戦力が一枚しか残っていないありさまだった。

対して俺は、これに勝てばベスト4とあってイライザ、ユウキ、メアとDランクカード三枚で挑んでいた。

こちらの布陣を見た相手の表情は……ちょっとしばらくの間忘れられそうにない。

ベスト4が確定した二日目の夜。俺たちは食堂に集められていた。顔合わせと、賞品のDランクカードを選ぶためである。

賞品のDランクカードは十六種と多めに用意されているが、希望が被った場合は選手同士の話し合いで決めることになる。

なお、この様子もカメラで撮影されているため醜い罵り合いや妨害はできない。

『はい、それではここまで残った選手たちの紹介です。まずは、神無月 翼さんお願いします』

「はい」

最初に指名されたのは、残った選手の中でもぶっちぎりの美形である神無月だった。

俺なんかとは比べ物にならないイケメンである。まず名前からして格好いい。アイドルでもちよつと見ないレベルで顔だちが整っている。もはや人間よりもカードの顔面偏差値に近い。

顔の線は細く綺麗な卵型のラインを描いており、目元は伶俐でい

かにも頭がよさそう。色素の薄い髪には天使の輪っかが出来ており、長めの髪が似合っていた。スタイルも細めで足がスラリと長い……いや、長すぎじゃね？日本人の体形じゃねーぞ。外国人のフィギユアスケーターみたいだ。

一見男装の麗人にも見えるほどのイケメン……いや、本当に女なのかもしれない。名前も中性的で判別付かない。

だが、こいつが女だろうが男だろうが俺には関係ない。

おっぱいがまるでないからな。可愛ければ巨乳でなくとも妥協できるが、さすがにここまでないと無理だ。胸板はおっぱいではない。俺が西田の性癖を理解できない最大の理由だ。ロリにおっぱいはないからな。

いや、違う。そうじゃない。雑念が混じった。やり直し。

——だが、こいつが女だろうが男だろうが関係ない。

それはコイツが同じ選手だからだ。優勝は一人。ならば相手が誰だろうと関係ない。

俺は内心でシリアスにやり直した。

『この大会における意気込みをお願いします』

司会がそう言うと同時に、「爽やかなコメントをお願いします」とカンペが出た。

おっ、なんかTVっぽい！俺は密かに目を輝かせた。

そう言えば、俺っていまマジでTVに出てるんだなあ。このシーンもTVに流れるのか。

……ヤベエ、今さらながら髪型とか気になってきた。しまったな、美容院行っておけばよかった。迷宮攻略が忙し過ぎてまったくそう言うところに気が回ってなかった。鼻毛とか出てないよな！？

一人でテンパっている俺を他所に、カンペを見た神無月がニコリと笑った。

「カンナヅキ、ツバサです。意気込みというほどではないですけど、優勝は絶対に僕がします。これまでの試合を見た感じ、まず間違いないですね」

うお！？ こいつ滅茶苦茶言うじゃねえか。俺は結構素で驚いた。普通こういうところでは無難にコメントするだろうが、今時ビッグマウスで炎上してもなんの得もないぞ。ネットで叩かれるだけだ。番組スタッフもカンペを無視して挑発するようなことを言う神無月に戸惑っている。

おそらく、このルックスからして番組もこいつをこの大会のヒーローにしようと言うシナリオだったのではないだろうか。

コイツの試合は俺も見たが、よく使いこまれたDランクカード三枚で優勝の可能性は十分にあるように見えた。

神無月の言葉に、他の選手たちも気色ばむ。

『い、意気込みは十分ということですね。神無月さんはなんと中学一年から冒険者をやっており、現在高校一年生にしてすでに三ツ星冒険者とのこと。これは戦いが楽しみです』

おい、マジかよ！ 俺たちは驚愕して神無月を見た。

中学一年は、今の日本の法律では最速スタートだ。三ツ星冒険者というのもヤバイ。

それでDランクカード三枚だあ？ 確実にCランクカードを温存してやがる。ヤバイ、全然ビッグマウスじゃなかった！

コイツ、本当に自分が優勝するだけの理由をもってやがる！

俺たちが神無月への警戒を高めているのを他所に、司会が次の選手を指名する。

『はい。では、佐藤 勇刃さん』

「……はい」

神無月の後という罰ゲームのような出番となってしまったのは、大柄で厳つい顔をした青年だった。神無月の後だからか特徴が薄く見える。至って普通の少年って感じた。名前だけちよつとキラキラしてるが。

本人も自分のキャラが薄いとわかっているのか、ちよつと顔が引き攣っている。心なしか眼が泳いでいた。

……おい、まさか何かインパクトあること言おうとしてないよな？ やめとけ、俺らみたいなモブキャラが上手いこと言おうとしても滑るだけだぞ！

同類の気配に勝手に親近感を抱いていた俺は、内心でそう呼びかけた。

『意気込みのほどをお願いします』

「サトウ、ユウジンです。えー、まず言いたいのは、おい神無月、あんま調子に乗んなよ？ ってことです。カードバトルは顔だけじゃ勝てないということを教えてやるよ」

が、無駄……っ！

俺の心の声は残念ながら届かなかったようだ。神無月を見下ろしながら言う佐藤だったが、そのセリフはつつかえつつかえで全く迫力がなかった。

あまりの痛々しさに、誰も何もリアクションが取れないほどに。名指しで指名された神無月ですらどう反応したものが、戸惑っているように見えた。

佐藤は可笑しくなってしまった空気にキョドった後、「い、以上です」と言っつて椅子に座った。

哀れ……だが俺はちよつとだけ好感度が上がったぜ。人をあんまり貶したり馬鹿にしたりするのに慣れてないってのがヒシヒシと伝わってきたからな。

『はい、佐藤さんですが現在高校三年生。キャリアはまだ一年ほどですが、将来はプロの冒険者になるのが目標とのこと。準決勝でどのような戦いを見せてくれるのか、期待が高まります。———それでは十七夜月 杏菜さん』
「はい！」

佐藤の紹介はさらっと流され、次に指名されたのはこの場に唯一の女子選手だった。

俺が一番気になっていた人物でもある。

それは、この十七夜月という女子が赤髪碧眼の美少女だったから……ではない。

いや、その容姿自体はもちろん気になっていた。俺も思春期の男子高校生だからな。

年頃は俺と同じ年か少し年下くらいだろうか。フワフワの赤毛をポニーテールにしており、大きな青い瞳がキラキラと輝いていてすごく可愛らしい。

肌も透き通るように白く、まさに日本人が思い描くハーフの美少女といった感じだった。小柄で細身なのに胸が結構ありそうなのも個人的に評価が高い。

ぶっちゃけかなりタイプだ。

佐藤がイキってしまったのも、この子の存在が影響しているのではないだろうか。可愛い娘がいるとつい張り切ってしまう……男の悲しい性だ。

だが容姿以上に俺が気になったのが、十七夜月という珍しい苗字だ。この珍しい苗字を、しかし最近は良く聞くことがある。

なぜなら、十七夜月はあのダンジョンマートの創業者と同じ苗字だからだ。

十七夜月社長は、なんとというか目立ちたがりでしょっちゅうTVなどに出てくる……俗にいう名物社長という奴だ。ニュース番組の

コメンテーターのレギュラーもやっており、結構過激な発言をすることでファンとアンチが一定数いる人物である。

それ故に十七夜月と聞くとどうしてもあの名物社長を連想してしまふのだ。

『意気込みのほどをお願いします』

「カノウ、アンナ。中三ツス！ こんな見た目ツスけど、日本生まれ日本育ちツス！ マスターとしてはまだまだツスけど、ウチのカードは優秀なんで期待しててくださいッス！」

コイツ、後輩系キャラか！ 発言内容ではなくキャラで勝負してくるとは、やりおる！

司会もようやく待ち望んでいたコメントが出てきたからかテンションが上がっている。美少女というのもＴＶ的に強い。

『おお、元気がいいですね！ 十七夜月さんは、あのダンジョンマートの創業者の娘さんのこと。キャリアも神無月さんと同じ中一からということ期待が高まります』

やはり、ダンジョンマートの創業者の娘だったのか！

俺たちはやはり、という顔と驚きの混じり合った顔で彼女を見た。それに十七夜月は、顔をムツと顰めた。

「パパは関係ないツス！ そりゃあ登録するときはパパにカードを一枚買ってもらったツスけど、それからはお小遣いも貰ってないし、あとは自分でお金を稼いでカードを揃えてるツス！ 一枚目のお金もそのうち返すつもりなんで！」

『そ、そうですね、それはすいません』

……ん、やっぱり有名人の子供って言うのは、いろいろ大変なんだ

ろうか。十七夜月からは生まれに対するコンプレックスを感じた。十七夜月にこのことを言うのはやめておいた方がいいな。いや、むしろ試合中なら良い挑発になるか？

『最後になってしまいました。北川 歌麿さん。意気込みの方をお願いします。』

俺が最後になっちまったか。参ったな。どいつもこいつもキャラが強すぎて、やりづらいにも程がある。

……どうせカットされるだろうし、適当に済みますか。

「キタガワ、ウタマロです。絶対に負けない……」と言いたいところですが、もうすでにキャラで皆さんに負けてて参ってます」

番組スタッフから小さな笑い。お、やった、少しウケたぞ。

俺はそこで不敵な笑みを浮かべると言った。

「でも俺のカードは結構良いキャラしてるんで、楽しみにしてください」

『はい！ありがとうございます。北川さんは、キャリアが二か月程度と短いにもかかわらずに二ツ星冒険者とのこと。イレギュラーエンカウト討伐実績も有り、キャリア以上の経験があるようです』

司会は、俺の薄いキャラを厚くするためか、あるいは初戦のトラブルの詫びか俺を持ち上げるようなコメントをしてくれた。

他の選手たちも俺を意外そうな眼で見た。

え、数合わせのモブだと思ってたのに、やるじゃん……という眼だ。

どうやら俺は彼らの印象にまったく残っていなかったようだ。ま

あ碌に戦ってないからな。

『それではお待ちかねの賞品配布のお時間です。ベスト4の賞品はこちら！』

司会の発言と共に食堂にトランクケースが運ばれてくる。スタッフ一枚一枚頑丈なクリアケースに入ったカードをテーブルに並べ始めた。

俺たちはそのカードたちを見て目を輝かせた。

さすがに賞品になるだけあって、どのカードも人気カードばかりだ。

半分ほどが強さを重視したカードで、もう半分が女の子モンスターというラインナップとなっていた。後天スキルも癖のない良いものが揃っている。

さて、どうするか。強さを重視するならドラゴネット、天狗、水虎。

女の子モンスターならアルラウネ、ネコマタ、ハーピー、シルキー、アマゾネス、エンジェル、鬼人か。女の子モンスターでも黄泉醜女は要らん。いや、強いが。水虎よりも強いが。

みんなも黄泉醜女には見向きもしていなかった。

完全に好みで選ぶなら、ドラゴネットとかネコマタ、シルキーだ。

ドラゴネットは、小型のドラゴンでドラゴンモンスターの中では最弱となる。それでもDランクカード最強というあたりドラゴンがモンスターの中でも最強種族というのをよく表していた。

ネコマタとシルキーは、Dランクカードの中でも弱い方なのだがDランクカードの中でも超人気カードであり、両方とも一千万円近い値がついている。猫耳とメイドは強い……。

実利面を重視するなら、ドラゴネット、天狗、ハーピー、エンジェルが候補に来る。

やはり、飛行系はそれだけで価値がある。遠距離攻撃を持たない地上系モンスターなら一方的に無力化できるうえに、迷宮の罠の多くをスルー出来るのが強みだ。

反面、撃たれ弱くロストの恐怖が常に付きまとうのが欠点か。

また飛行系は頭が悪いか、逆に頭が良すぎて気位が高いという特徴もあった。特にエンジェルは、相性の悪い種族が多すぎるという話もよく聞く。

うちのパーティーの補強という観点で見ると、アマゾネス、鬼人という選択肢もある。

前衛2、後衛2と一見バランスよく見えるうちのパーティーだが、盾役をイライザに依存しているという弱点があった。

ユウキも前衛なのだが、こちらは攻撃と素早さが高い完全なアタッカータイプだ。索敵役も兼任しており、ゲームで言うなら盗賊や忍者に前衛をやらせているようなものである。

戦士役か騎士役をここに追加したいと前々から考えていたのだ。

浪漫ならネコマタ、シルキー。実利面なら飛行系、戦力補強ならアマゾネス、鬼人か。

俺は一枚一枚カードのスキルを見ながら思索した。

「……ん？」

と、その時一枚のカードに目が留まった。

鬼人のカードだ。イラストには燃えるような紅い髪と瞳を持った美女が描かれている。崩した和服から覗く深い谷間が何とも色っぽい。ビジュアルはかなりタイプだ。

だが俺がより気になったのは、そのスキルだった。

スマホを取り出し、詳細を調べてみる。

【種族】鬼人

【戦闘力】180

【先天技能】

- ・頑丈：頑丈な肉体を持つ。生命力と耐久力を常時向上させる。
- ・怪力：人外の力を持つ。筋力が常時大きく向上する。
- ・自己再生

【後天技能】

- ・目隠し鬼：鬼さんこちら。対象の敵意を自分へと惹きつけることが出来る。
- ・武術：戦闘技術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。
- ・見切り：相手の動作を読む技術。回避、反撃の際、行動にプラス補正。

頑丈と怪力、武術、見切りのシナジーに加えて、目隠し鬼というスキルが面白い……。

これはゲーム的に言うならヘイトコントロールスキルだろう。盾役に必須のスキルで、しかも回避型というのが良い。

耐久援護型のイライザに、回避挑発型の鬼人と言うのは、相性の良い組み合わせに思えた。

よし、決めた。これにしよう。これほどのスキルを揃えたカードと巡り合うことはそうそうない。おまけに女の子モンスターで見た目も超好みだ。

俺が鬼人のカードに手を伸ばしたその時。

『ん？』

横から伸びた手が重なった。

目が合う。サファイアのような蒼い瞳がこちらを見つめていた。

……十七夜月だ。

「お、あなたもこれが狙いッスか？」

「あ、ああ。……できれば譲ってくれない？」

俺が愛想笑いを浮かべながらそう言うと、十七夜月はニンマリと笑った。ネズミを弄ぶチエシャ猫のような笑み。なんか……嫌な予感。

「いやあ、それはちよつとできない相談ッスねえ。ウチもこれになり気に入っただんで！ 見てください、この見事な赤毛と妖艶さ。ウチにそっくりッスよね？」

そう言つて、ふふんとセクシーポーズをとる十七夜月。

ええ……？ いやあ、赤毛は一緒だけど、妖艶さは全然……。

十七夜月はどつちかと言うと健康的な可愛らしさが前面に来るタイプで、色気とかあんまりなかった。

そんな心の声が漏れたのだろうか、十七夜月はムツと唇を尖らせた。

「異議アリって顔ッスね？」

「ハハッ」

「いや、例の鼠の真似しても誤魔化されないッス。……ちよつと上手かったですけど。どうでしょう、ここは一つ勝負と行かないッスか？」

「勝負？」

「はい、ここは保留として、試合で勝った方がこれを頂くというのは」

そう言うと、十七夜月はぐるりと周囲を見渡した。

気づけば、カードを選び終わった選手や番組のスタッフたちがこちらを注視していた。

これは……。

「ん、勝った方がとは言うけど、どちらかが当たる前に負けたらどうするんだ？」

「ああ、そうツスね。では大会の成績が良かった方ということで」

可愛らしく微笑む十七夜月に、ちょっと意地悪な質問をしてみる。

「もし両方とも準決勝で負けたら？」

「その時はあなたが持つて行っていいツスよ」

「へえ、気前がいいんだな」

「はい！ どうせウチが優勝するので！」

コイツ……さっきは、自分はまだまだ未熟なんて言っておいて。

だが、読めたぞ。コイツの狙いが。

十七夜月の狙いは、ズバリ準決勝で俺と戦うことだ。

彼女は、神無月の奴を今大会における最大の障害と見なしたのだろつ。

いずれ戦わないといけないにしても、準決勝ではなく決勝で戦いたい。

そこで、十七夜月は俺に因縁をつけることで、準決勝で自分と当たるように誘導しているのだ。

TV的に考えても、このようなイベントがあったのに十七夜月も俺も準決勝で敗退しました。お互い負けちゃったのでカードは北川君のものです、ではまるで面白くない。

ならば、どうせ北川君は優勝できそうにないから準決勝で十七夜月と当てて少しでも盛り上がらせたい。

そう考えるのではないだろうか。

おそらく、十七夜月が鬼人のカードを選んだのも偶然ではない。
俺が選ぶのじつと待っていたのだ。
つまり。

十七夜月は俺ならば簡単に勝てると思っているというわけで。
それは俺のカードたちを雑魚だと思っているということであり。

「よし、じゃあそう言うことで」

「お、さすがッス。お互い頑張りましょうー！」

絶対泣かす。

握手を交わしながら俺はそう決意したのだった。

。第二十話 美少女を見るとついヒロインかどうか考えちゃう
(後書き)

【Tips】モンスターのランク

モンスターはその初期戦闘力によって大まかにランク分けされている。また、ランクが高いほどスキルも凶悪化していく傾向にある。モンスターのランクはその土地や文化に強い影響を受け、同じ種族のモンスターであっても国によってランクが変わる。日本においては妖怪は強化されて出てくる。例えば座敷わらしは日本ではランクだが、西洋諸国ではEランクモンスターである。

第二十一話 Q：美少女が話しかけてきたら？ A：ドッキリを疑う（前書き）

感想返しができないので、ここで軽く南山についての説明。

南山への対処は、事件を揉み消す感じではなく、主人公の手から離れ大人たちの手に委ねるといった感じですね。

大会の裏では、親同士とテレビ局の話し合いが行われています。

主人公視点ではそれらの様子が一切わからないのは、大会に集中できるようにという配慮です。

故意ではなく事故という形にしたのは、大会の進行の為と、未成年に対する配慮。

なお、南山くんの行為は相当悪質な行為ですが、殺人未遂まではいいないです。

理由は、大会側が配る防御用の魔道具とカードのバリアが存在するため。そしてなによりも、主人公側の示談が成立（大会中は交渉中ですが）していること、南山が未成年であることが大きいです。まあこちら辺は一段落ついてからちょっと修正すると思います。

第二十一話 Q：美少女が話しかけてきたら？ A：ドッキリを疑う

『お待たせしました〜！ いよいよ準決勝、第一試合を開始します』

実況の声と共に、会場のざわめきが大きくなる。グダグダの試合が多い中、それでもベスト4には期待が集まっていた。

とりわけその中でも注目が集まっているのは……。

『まずは赤ゲート！ 十七夜月杏菜選手の登場だあ！』

美少女ハーフの冒険者、十七夜月杏菜だった。

会場中から、ファンの男どもの応援の声が飛ぶ。

それに手を振って答えながら十七夜月が闘技場の中心に立った。

『ここまで三枚のDランクカードを駆使してストレート勝利！ 魔道具もあと三回使用権を残しています。さらには、この試合ではメンバーをがらりとチェンジ。温存していたメンバーで決勝を狙います！』

スタッフに促され、俺も歩き出した。

……十七夜月の戦略通り、準決勝の相手は俺となった。TVとしても、決勝はできれば画面映える神無月と十七夜月の戦いとしたかったのだろう。

俺と佐藤は噛ませ犬というわけだ。

『対するは、白ゲート！ 北川歌麿選手！』

俺が姿を見せても、十七夜月のような歓声はない。まあ、当然かここまでほとんど戦わずに進んでいるしな。もつとも、それは他の選手も似たり寄ったりだが……違いは十七夜月や神無月には華があるということ。

それでも、チラホラと応援の声が聞こえるのは有り難かった。

『北川選手は、DランクカードとEランクカードを上手く使い分け勝ち進んできています。ここにきて隠し玉のCランクカードをメンバーに入れ、魔道具の使用回数もすべて残っています！』

こちらを見る十七夜月の眼に、悔りの色はない。俺もCランクカードを持っているとは予想していなかったのだろう。

対して、俺は向こうがオールCランクでもおかしくないと覚悟を決めてきている。その分、俺には精神的な余裕があった。

『十七夜月選手と北川選手ですが、昨夜の賞品選びの際希望のカードが被り、この大会の成績で決めるという約束をしているそうです。偶然にも準決勝にて当たることになってしまったため、この試合でケリをつける形となってしまいました』

おお、と会場にどよめきが奔った。

俺と十七夜月の目が合い、お互いに微かに苦笑する。実況の白々しさには苦笑いしか出てこない。

『それでは、両選手。カードの召喚を行ってください』

実況の声に、俺たちは同時にカードたちを呼び出した。

これまででは試合進行を迅速に行うため試合開始してから召喚だったが、準決勝からはカードの紹介を観客に行うため試合開始前に召喚する形にするとスタッフから事前に伝えられていた。

蓮華、メア、イライザの三枚が姿を現す。

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】410（100UP！）

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し
- ・かくれんぼ
- ・初等回復魔法

【後天技能】

- ・零落せし存在
- ・自由奔放
- ・初等攻撃魔法
- ・友情連携
- ・初等状態異常魔法

今の蓮華のステータスは、名実ともにうちのパーティーのエースと言って良いものだ。

だが、今回は相手にもCランクカードがいる。それも、キャリアが俺よりも長い相手のだ。

キャリアの長さによる戦闘力の差が、どれほどか。それだけが心配だった。

「ふふ、いよいよメアのお披露目ね！」

エンプーサとなり、少しだけ大人っぽくなったメアが羽ばたきながら言った。

以前のメアは、手のひらサイズで十歳ほどの外見だったこともあり完全に動く人形のような印象だった。

だがエンプーサにランクアップしたことで人間大の身長となり、さらには肉体年齢も二歳ほどアップしたことで身体つきも丸みを帯び始め、大人になりかけの危うさを感じさせるようになった。

背中の蝙蝠の羽は以前と同じだが、お尻からは驢馬の尻尾が伸び、両脚は太ももの半ばから真鍮製となっている。一見すると金属質のニーハイを履いているようにも見え、それが何ともセクシーだった。そんなメアを見て、蓮華が忌々しそうに吐き捨てる。

「テメエのお披露目とやらは四回戦に終わっただろーが」

彼女は、自分よりいろいろと大きくなってしまったメアのことが気に入らないようだった。

「あんな雑魚、ノーカンに決まってるでしょ！」

また、メアもイチャモンをつけられれば喧嘩せずにはいられない程度にお子様だった。

「おっと？ 北川選手のカード同士がなにやら揉めているようですが？」

「カード同士の相性が良くないようですね」

実況のアナウンサーと、解説の重野さんがそう言うと、会場から小さな忍び笑いが漏れた。

ちよ、やめてくれよ……。

身内の恥に、俺は顔から火が出る思いだった。

「北川選手のカードは、今大会を通して使っているグーラーと、先

の試合でも使ったエンプーサ、そしてここまで温存してきた座敷童のようですね』

『女の子モンスターで固めているのでしょうか。実に華やかですね』

……改めてみると、完全にハーレムパーティーだな。メアは狙って仲間にしたから別として、蓮華とイライザは偶然女だったただけなのだが。

会場の男どもからの、嫉妬の眼差しを感じるぜ。

『一方で十七夜月選手のカードは、エルフとユニコーン、リビンググアーマーのようです』

『リビンググアーマーがガード、ユニコーンがサポート、エルフがアタッカーかな？ バランスの良いパーティーですね』

俺は目をすがめて相手のカードを見た。

エルフ……：ランクカードの中でもトップクラスの人気を誇るカードだ。

カードはどれも人間では太刀打ちできないほどの容姿を持つが、エルフやサキユバスはその中でも神がかった美貌を誇る。

十七夜月のカードは、そのエルフの中でも特に希少な女の子モンスターだった。

エルフやサキユバスほどのカードともなると、もはや普通に市場に出回ることはない。入手した冒険者が手放さないからだ。

たまに出回った時も、ギルドに売られるのではなくオークションにかけられる。

ランクカードの相場は一千万から一億と一般的に言われているが、エルフやサキユバスの場合は、“一億円から”スタートすると言えばその人気っぷりが分かるというものだろう。

十七夜月のエルフは、その人気と値段に見合う美貌の持ち主であ

った。

年のころは、15、6才ほどだろうか。ストレートの金髪をショートボブにしており、全体的に知的な印象。

身体つきはスレンダーだが、この少女ほどとなると胸がないことなど全く残念に思わない。

むしろこの体型以外では違和感があるほどだ。これが、美の黄金律という奴なのだろう。

蓮華やメアと言った顔面偏差値の高い少女たちに囲まれるうちに、カードの美しさと言うものになれ始めた俺ですら、肌が粟立つほどの美しさ。

会場からも、感嘆の吐息が漏れるほどだ。

今までも動画やCMでエルフは見たことがあるが、生で見たエルフはちよつとレベルが違った。

ダンジョンマートの創業者が娘のために用意したカードだ……外見だけでなくさぞやスキルも優秀なのだろう。

ユニコーンとリビングアーマーもDランクでは上位のカードである。ユニコーンは回復と補助魔法のスペシャリスト、リビングアーマーも痛みを知らない頑丈なガード役として人気のカードだ。

カードの値段では完全に負けているな、と小さく苦笑した。

だが劣等感はない。

俺のカードの方が、絶対にすごい。

この会場みんながそう思わなくても、俺はそう思っていた。

その証拠にホラ、俺のカードたちもまるで気にしてなんか……。

「糞が、ちよつとくらい人気があるからって調子乗りやがって。人の十倍高いからって十倍強えーのかよ？ あ？」

「ねえねえ、あのエルフとメアのどっちが可愛い？ 綺麗かどうかじゃなくて可愛いかどうかで答えてね？ 可愛さならメアの方が上でしょ？」

メチャクチャ嫉妬丸出しだった。ジェラシーの塊。まさにルサンチマン。

完全に気持ちで負けてます。……これ、勝てるかなあ？ 俺はー
気に不安になった。

『お互いの戦力は全くの互角。どちらが勝ってもおかしくない、良い戦いになりそうですね』
『それでは、試合開始！』

「――死ねやオラア！」

試合開始と同時に蓮華が魔法を放つ。俺はギョツと目を見開いた。ちよ、打ち合わせと違いますけど、蓮華さん！？

予定ではまずは距離を取るはずだったのにもかかわらず蓮華が先制攻撃をかけてしまった。いや、良く見るとメアもだ！

カード二枚のいきなりの独断専行。しかし、これは……！

「なっ！」

「くう……！？」

「ブルルツ！？」

十七夜月が驚愕の声を上げる。同時に、エルフとユニコーンが苦悶の声を上げて地面に倒れ伏した。

『おおっと！ 開幕早々北川選手の眠りの状態異常が決まったあー
ー！』

実況の興奮の音が響き渡る。俺は素早く指示を出した。

「蓮華、ダイレクトアタックだ！」
「おう！」

最初は何してくれてんだ、と思ったがこれは好機だ。
まさか開幕状態異常が通ると思っていなかったのか、十七夜月も
動揺を隠せない。そこへ、蓮華の光弾が迫る。

これは躲せまい！ 勝った！ 準決勝終了！！
俺が勝利を確信したその時。

「——アムド！」

十七夜月がそう叫んだ。リビングアーマーがバラバラに別れ、一
瞬にして鎧となって彼女を覆った。深紅の鎧が蓮華の光弾を弾く…
…！

『なにいいい！？』

思わず蓮華と二人、驚愕の声を上げる。

「マスター！ あれは！」

「ああ、間違いない！」

蓮華の問いかけに、俺は頷く。実在したのか！

『オン・ベルク作の鎧化魔剣！』

俺たちが口を揃えて言うと、十七夜月が含み笑いを漏らした。

「ふふふ、驚いたようだな。その通り、これこそ伝説の鍛冶師ン
ベルクが造りし鎧の魔剣！ この鎧は防御力が高いばかりか、電撃

以外のありとあらゆる魔法をはじくのだ！」

十七夜月はノリノリでそう言った。

……いや、ネタを振ったのはこっちだけど、それは鎧の魔剣じゃねえだろ。リビンググアーマーの先天スキル、装備化だ。

リビンググアーマーは、マスターやカードの装備品になることもできる珍しいタイプのモンスターなのである。

ついでに言えば、リビンググアーマーは魔法防御力が高いだけでありとあらゆる魔法を弾くわけでもない。

しかし、なんだ……。奴も相当な漫画好きのようだな。蓮華の奴も、同志を見つけて目が輝いている。

「そしてッ！　ウチのパーティーに状態異常は無駄ッス！」

十七夜月は懐から瓶を取り出すと、ユニコーンとエルフへと振りかけた。

チッ、やっぱり状態異常対策は持っていたか。

ハッとした様子で十七夜月のモンスターたちが目を覚まし、同時にメアがはじき出されるようにエルフから出てきた。

眠ると同時に、メアがエルフの夢の中に潜入していたのだ。ネタを振ったのも、メアから注目を逸らすという思惑があった。

「キャア！　あーん、もう少しだったのに！」

「な、いつの間にも！　なんて抜け目のない！　いや、ここはさすがと言っておくッス」

かなり衰弱した様子のエルフを見て十七夜月はこちらを鋭く睨んだ。

「蓮華、メア、もう一度だ」

「そうはさせないツス。ユニコーン！」

蓮華たちが再度状態異常を仕掛ける前に、ユニコーンの角が光を放つ。十七夜月のモンスターたちが光を纏い、蓮華たちの状態異常魔法は弾かれてしまった。

「チツ、イミユニティか」

イミユニティ。状態異常の抵抗力を上げる中級の補助魔法だ。こうなると、十八番の状態異常コンボもあまり頼りにはならなくなる。

「ここからはウチのターンッス！」

十七夜月がそう言うなり、リビンググアーマーが分離しこちらへと接近してきた。剣を上段に構え迫る無人の騎士を、イライザが迎え撃つ。

リビンググアーマーの切り下ろし。丸太も引き裂きそうな豪快な一撃……それを半身で避けつつ、イライザが蹴りを叩きこむ。……が、効果は薄い。リビンググアーマーはわずかに体を揺らしただけで突きを繰り返す。イライザは腕に掠らせながらもそれを躲した。

……互角、いや若干分が悪いか。

リビンググアーマーとグラー、どちらもアンデッドモンスターだ。耐久力に優れ、状態異常にも強い反面、自我がないため単調な動きしかできないのが特徴である。

しかし、防御力による耐久性が優れているリビンググアーマーと、屍食いによる回復能力で耐久性に優れるイライザでは、こちらの利点だけが打ち消されている。戦闘力も、リビンググアーマーの方が上だ。

一方で、技術に関しては自我と精密動作がある分イライザの方が上か。頑丈さと臂力の差を、動きの精密さと多彩さでなんとか凌いでいるといった様子。

なんとか援護してやりたいところだが……。俺はチラリとメアを見る。

彼女は、ユニコーンと睨みあっていた。

イミュニティは長く続く魔法ではない。その切れ目を狙って再度状態異常を仕掛けようとしているのだろう。

しかしユニコーンも素早く魔法を発動しようとは備えている。時折、牽制じみた魔法のやり取りがあるが、こちらも膠着状態だ。

一方蓮華は、エルフと激しくやりあっていた。魔法と弓の応酬が目まぐるしく行われている。

この試合のようにエースが上位ランクで突出した力を持っている場合、如何に敵のエースを封じつつこちらの決定打を当てるかが重要となる。

蓮華には事前に敵エースの牽制をメインに、隙をみて取り巻きを潰していくよう指示を出していたのだが……。

蓮華がエルフを狙って光弾を放てばエルフはそれを躲しつつ、イライザへと弓を放つ。蓮華はそれを打ち落とし、自分へと放たれた矢を躲す。十七夜月を狙う光弾をエルフが弓で打ち消し、メアを素早い連射で狙う。

そんな詰将棋じみたやり取りが淡々と行われている。

一步ミスれば即終了。嫌な均衡状態が保たれていた。

俺と十七夜月、互いの視線が絡み合う。この膠着状態を動かせるのは、マスターしかない。お互いに、どちらが先に動くか注視していた。

汗が顎を伝い、落ちた。

先に動いたのは――俺だった。

懐から一つの石を取り出し、「蓮華！」と呼び掛けてそれを地面

にたたきつけた。

カッと閃光が世界を塗りつぶす。俺が使ったのは、閃光石という魔道具だった。

Eランク迷宮で手に入れたこの魔道具は、割れると凄まじい光を放つ。十七夜月に目を瞑らせない為、直前まで相手の眼を見ていた俺も、視界が真っ白になって何も見えなくなった。

十七夜月の「アムド！ ……目が、目があゝ！」という声が聞こえる中、徐々に視界が回復する。

「む、……座敷童ちゃんの姿がないツスね」

視力の回復した十七夜月が周囲を見回すと言った。

「かくれんぼのスキルツスカ。ウチへのダイレクトアタックを狙ってるツスね？ でもご覧の通りリビンググアーマーでガードしてるツスから無駄ツスよ」

「さあてね」

「……なにを企んでいるのかは知らないツスけど、こうすれば一発でわかるツス」

そう言うと、彼女はエルフへと素早く指示を出した。

「ダイレクトアタックツス！」

「ッ！」

やっば、そう来るよな！

エルフが俺へと弓を向けた瞬間、俺はイライザの背後へと動いた。彼女も庇うのスキルで俺を守る。腕に矢を貫通させつつ見事に俺を守り抜いた。

「やるツスね！ でもいつまで耐えられるツスカ！？」
「次はない！」

俺がそう言うのと同時、どこからともなく飛来した光弾がユニコーンを打ち抜いた。悲鳴を上げて地に倒れ伏すユニコーン。

「ユニコーン！？」

「ツ、そこ！」

エルフが虚空へと矢を放つと舌打ちと共に蓮華が姿を現した。二の腕を抑えている。掠ったか。

だが、倒れ伏したユニコーンはピクリとも動かない。死んではないようだが気絶させることには成功したらしい。――そしてすでにメアはユニコーンの中へと入りこんでいた。

蓮華がニヤリと笑う。

「これで、目障りな馬は直に消える」

「その前に貴女を始末すれば良いだけのこと」

エルフが鈴の鳴るような透き通った声で言った。

再び姿を消す蓮華だったが、エルフは大まかな位置がわかるのか、弓矢を次々と放ち続ける。蓮華も光弾を放ち続けるが……。

「グツ……！？ クソ！」

ついに捕捉されてしまった。

わき腹を抑えた蓮華が、地面へと座り込む。

エルフが冷たい笑みを浮かべた。

「フ、この程度ですか。所詮――」

立ち上がるのも忘れつつコミを入れるエルフへと、人差し指が突きつけられた。……蓮華だ。

「動くな」

エルフがその秀麗な顔を屈辱に歪める。

「くっ、この私が……！ こんな冗談のようなやり方で……！」

それを聞いた蓮華の表情が愉悦に歪む。なんとも邪悪な笑みであった。

「ようこそ、ギャグキャラの世界へ。そしてさようなら、だ」

蓮華が情け容赦なく止めを刺そうとしたその瞬間。

「待って！」

十七夜月の声が鋭く響いた。皆の視線が彼女へと集中する。

「……参ったッス。ウチの負けッス」

十七夜月はそう言うと、がっくりと頂垂れた。

「アナナ……」

エルフも無念そうに俯いた。

それを見た蓮華は指を降ろすすつまらなそうに言った。

「ふん、そっちのマスターも、甘ちゃんみたいだな……」

『決ツ着ウウ！ 何という目まぐるしい攻防！ 張り巡らされた作戦！ これこそモンスターコロシム！ 準決勝に相応しい名勝負でした！』

『お互いのモンスターのスキルを十分に活用した良い勝負でしたね』

その実況の声とともに、観客席から拍手と歓声が聞こえてくる。

……どうやら、退屈していた観客たちも今の勝負には満足してくれたようだった。

観客たちの拍手に見送られながら会場を後にすると、廊下で十七夜月とバツタリ遭遇した。いや、この様子だと、俺を待っていたのか？

「いやあ、参ったツス。お約束通り、鬼人のカードはそっちに譲るツスよ」

「……ホントは、自分が勝っても俺に譲る気だったんだろ？」

俺がそう言うと、十七夜月は照れ臭そうに笑った。

「いやあバレてたツスか？ お察しの通り、あれは北川先輩と戦うための、まあ、仕込みツス。結局、策士策に溺れるという奴になっちゃったツスけどね」

「まあどう見ても神無月や十七夜月に比べたら俺はモブキャラだしな」

「いやいや、そんなことないツスよ。そりゃあ、昨日見た時はちょっとそう思いましたけど、いざ闘技場で対面してみたら驚いたツス。別人かと思いましたよ」

「え？」

「なんていうか、存在感が違うというか。まあ、そう言うことなんでしょうね。ウチが負けた理由って」

なにやら納得したように頷く十七夜月に、俺はチンプンカンプンだった。

「えーと、十七夜月」

「あ、苗字じゃなくてアンナでいいッスよ。ウチの苗字、なんかややこしいし」

「え？ そうか？ まあそう言うことなら……俺もマロでいいよ」
試合相手と言う気安さもあって、俺は気づけばそう言っていた。

「お、マロ先輩ってわけッスね。これからよろしくお願いしますッス。あ、ラインやってます？ ID交換しましょう」
「あ、ああ」

何この子、すごいグイグイ来る。
なお、ラインの写真はエルフとアンナのツーショットだった。
……エルフと顔を並べてもブスに見えないって、改めて凄いなこの子。

IDを交換したのを確認したアンナは軽やかに去っていった。

「……………」

俺は一人になった廊下で誰もいないことを確認すると。

「いよおおっし！ よおおしー！」

全力で喜びを噛みしめた。

それは準決勝に勝利し、決勝に進めることへの喜び―――ではない。
アンナのような超絶美少女ハーフとのラインを交換出来たことへ

の喜びであった。

家族を抜けば100%。それが俺のラインにおける男の占有率だ。無論、クラスのグループラインには俺も入っている。が、その中の個別の女の子とは一人も連絡を取り合ったことがない。当然、友達リストにも入っていない。

見事なまでに男一色。妹に男色を疑われるほどに女子と縁がない。それが俺の人生であった。

が、ここにきて初めて女の子が追加された。

それもハーフ！の美少女！しかも、冒険者で社長令嬢！

こんな奇跡つてある！？

まるで、まるでリア充みたいじゃないか！

そう思った瞬間、我に返った。

……いや、待て。出来過ぎている。落ち着け、冷静になって考える。

なぜ、リア充でもない俺にこんな素敵なイベントが起こるんだ？

俺はただのモブだぞ。もしや、何かの罠なんじゃないか？

もしかして、ドッキリ？その単語が頭に過った瞬間、俺は周囲を素早く見渡した。そうだ、ここはTV番組のテリトリー内！同時にドッキリ企画が進行しているもおかしくない！

ふ、そうは行くか。さっきはちょっとばかり油断してしまったが、もう無様な姿は晒さんぞ。

どこかに仕掛けられているだろうドッキリカメラを警戒して神経を張りつめさせていた俺だったが。

俺なんかドッキリを仕掛けても、撮れ高なんか稼げないことに気づき、我に返ったのだった。

第二十一話 Q：美少女が話しかけてきたら？ A：ドッキリを疑う（後書き）

【Tips】 鎧化

名作漫画「ダイの大冒険」において登場する鎧の武器を装着するための呪文。剣でありながら鎧、しかも呪文を無効化するという設定は、恐ろしくロマンに溢れるものであった。

が、これはそれとは関係ない。

モンスターの中には、武器として他のモンスターやマスターが装備できる者も存在する。とりわけ人気なのが鎧化のスキルを持つモンスターたちであり、ダイレクトアタックを防げることからデッキに組み込む冒険者も多い。

ダイレクトアタックが即敗北に繋がるモンコロは勿論のこと、マスターへの攻撃がパーティー全体への大ダメージを意味する迷宮内においても、鎧化を持つモンスターは重要度が高い。

第二十二話 冒険者の技術（前書き）

第二十二話 冒険者の技術

『さあ大変お待たせしました。三日にわたる大会もいよいよ決勝戦、泣いても笑ってもここで決まる！ 賞品のレディヴァンパイアを奪うのはどちらなのか！ 選手の入場です』

俺が会場へと足を踏み入れると、予想外に大きな観客の声援が出迎えてくれた。

準決勝での戦いで、俺のファンも少しはできたようだ。最前列に両親と妹の姿を見つけたので、手を振りながら中央へと進む。

『まず現れたのは、若干二か月というキャリアながら二ツ星冒険者の北川選手！ EランクからCランクカードまで幅広く活用し、ここまで勝ち残りました！ 決勝ではベストメンバーで挑みます。対するは――』

実況が言葉を止めると、ゲートへとスポットライトが当たる。観客の歓声とともに現れたのは、神無月。まるで気負うところのない様子で悠然と歩いてくる。まるで主役の登場だ。

『一回戦からここまで圧倒的な力で勝ち進んできた神無月選手！ 使用したカードはわずか三枚のDランクカードのみ。北川選手とは同学年でありながら約三年のキャリアの差があります。経験とテクニクの差がどうであるか！ それでは両者、カードの召喚を！』

「召喚！」

俺が呼び出したのは、もっとも使い込んできた初期メンバー三枚。

【種族】クーシー（ユウキ）

【戦闘力】300（125UP！MAX！）

【先天技能】

- ・妖精の番犬
- ・集団行動

【後天技能】

- ・忠誠
- ・小さな勇者
- ・本能の覚醒
- ・気配察知

戦闘力はマックスの300まで成長し、下級のCランクカードの初期戦闘値に迫るほどとなった。

しかし、俺の心に余裕は全くない。なぜなら、Dランクカードのカンストなど、この戦いにおける前提条件なのだから。

神無月の呼び出したカードを睨む。

奴が呼び出したカードは、大柄な蜥蜴人間と、二足歩行の猫妖精、そしてとんがり帽子とローブ姿の小さな少女だった。

……リザードマン、ケットシー、ウィッチか。それぞれランクはD、D、C……。決して低くはないが、予想よりも低い。

最低でもCランクが二枚あってもおかしくないと思っていたのだが。さすがにCランクを二枚も持つのは難しかったのか、あるいは……。

そんな俺の疑問に答えてくれたのは、実況だった。

『……おや、登録情報ではCランク四枚、Dランクカード六枚で登録している神無月選手ですが、決勝にはC、D、Dの組み合わせで

挑むようです。こちらの方がランク以上に使い込んだベストメンバ
ーということなのでしょうか？」

あ？ 俺は実況の言葉に眉を顰めた。おいおい、ナメプかよ？
観客たちからも嫌なざわめきが走る。

そしてそれ以上に憤ったのが、俺のカードたちだった。

「チツ、舐めやがって……！」

「さすがに、面白くないですね」

自分を睨む俺のカードたちに、神無月は苦笑した。

「別に、君たちを舐めてるからってわけじゃない。この三枚が本当
の意味で僕のカードだから、決勝はこの三枚で挑みたかっただけさ」

「あん？ どういう意味だよ」

「残りのランクカードは、死んだ兄の形見でね。まあ今のマスタ
ーはちゃんと僕なのだけど……皆が自分で手に入れたカードで戦っ
ているのに、相続したカードで勝つってのも、さすがにね」

なるほどね……。意外とフェアなんだな、コイツ。

まあたとえそれが遺品だろうが親に譲られたカードだろうが、カ
ードはカードだと俺なら思うが……まあ、そういう考え方も嫌いじ
やない。案外、気が合うかもな。

俺がそう思っていると、神無月は爽やかに笑った。

「まあ、それでも優勝できそうにないなら使ったけどな。負けたら
意味ないし。でも、どうやら使わずに済みそうだからさ」

安い挑発だ。普段だったら余裕でスルー出来る発言である。

が、今日、この時は流せなかった。顔が歪んでいくのが分かる。

それは俺のカードたちも同じのようで、蓮華が歯をむき出しにした。

「おい、マスター。ずいぶんナメられてるじゃねえーか。アタシの知らないところで小便でも漏らしたのか？」

「心当たりはないな。お前こそ、さっきの試合でやらかしてないよな？」

「んなわけねーだろ。いずれにせよ、だ。見たいよな？ 見たくねーか？」

「ああ、見たいね」

あのすまし顔が泣き顔に変わるところをよお……！
口に出さずとも、俺たちの思いが一つになったところで。

『それでは、試合開始！』

開戦のベルが鳴った。

「ぶっ殺す！」

蓮華が速攻で弾幕を放つ。同時に、イライザとユウキが駆け出した。

迫る弾幕に対し、青みがかかった黒髪をショートボブに切りそろえた少女——相手側のウィッチが前に出る。手を翳し、半透明の壁を生み出した。弾幕が、ことごとく防がれる。

……中級補助魔法のシールドバリアか。ウィッチは、魔法のスペシャリストであり、中等魔法使いの先天スキルを持っている。

故にシールドバリアを使ったことに驚きはないが、蓮華の弾幕をすべて防ぐか……。やはり純粋なマジックキャスターなだけあって魔力はあっちの方が上だな。

「今度はこっちの番だ」

神無月がそう言うと、濃緑色の鱗を持った怪人と、黒の毛並みに白い手足を持った二足歩行の猫がこちらへと襲い掛かってきた。

リザードマンは、高いレベルで能力を保ったバランス型。ケットシーはスピードよりのアタッカーだ。

「ユウキ、ケットシーだ！」

その指示だけで、イライザがリザードマン、ユウキがケットシーという担当をカードたちは理解する。

肉体のリミッターが外れた金髪の屍食鬼と大柄で屈強な蜥蜴の亜人が身体ごとぶつかり合う。肉と肉が激突したとは思えない重い音が響き……イライザが吹き飛ばされた。地面を転がり、すぐに跳ね起きるが、そこへリザードマンの追撃の回し蹴り。イライザは咄嗟に両腕で防御……出来ない。またも軽々と飛ばされる。

これは……戦闘力の差もあるが、体格の差が出ているのか？

2メートルを超える蜥蜴の亜人と、成人女性相応の体格のイライザでは、どう考えても彼女に分が悪い。

イライザ単体では無理だ。何らかの援助を、そう考えた瞬間、小さな影が彼女へと襲い掛かった。

ケットシーだ！ 俺の目では線にしか見えない速度でイライザの周囲を飛び回り切り刻む！

なぜ、ここにケットシーが！ ユウキはどうした！

俺の疑問と同時に、ユウキが駆けつけケットシーへと爪を振るう。それを軽々と躲すケットシー！

クソッ、速さで抜けられてきたのか。

ケットシーは、ユウキの攻撃を避けつつイライザへと攻撃する余

裕すらあつた。無論、リザードマンも見ていただけではない。イライザと格闘戦をしつつ、ユウキにまで隙あらば殴りかかる。ユウキはリザードマンへと警戒を割かざるを得ず、余計にケットシーを捉えられない。

そこへ、一つの光弾がケットシーへと飛来した。蓮華のフォローだ！ 光弾を躲したケットシーが、一旦距離を取り警戒する。追撃の光弾が降り注ぎ、ケットシーは軽やかに躲していく。その先には、リザードマン！ 一瞬動きが鈍るケットシーに、蓮華の光弾が迫る。ついに捉えた！

その瞬間、光弾を黒い魔弾が打ち落とす。最初は何が起こったかわからなかったが、一拍遅れて理解した。ウィッチの妨害だ。

だがあのタイミングで、ピンポイントに魔法を打ち落とす？ ウィッチの方が遠いんだぞ。一步間違えれば、ケットシーにあたっていたのはウィッチの魔弾の方だ。なんとという弾道予測、そして精密射撃。

その凄まじさを蓮華も理解したのか、頬を一筋の汗が伝った。

……なんだ、これは。イライザがリザードマンに勝てないのはわかる。だが、クーシーとケットシーの戦闘力はさほど変わらないはず。スキルの差なのか……？ ウィッチも何かおかしい。さっきから感じているこの違和感は……そうか、連携力だ。奴らの動きがあまりに連携が取れていて、まるで一つの生き物のようなのだ。

これが、俺と奴の経験の差なのか……？

『神無月選手！ 圧倒的連携力で北川選手を追い詰めます！』

『神無月選手はすでにリンクが使えるようですね。練度も高い、素晴らしいです』

『……？ すいません、リンクとは？ なにかの専門用語ですか？』

『ああ、すいません。主にプロの冒険者が使うテクニクの一つです。長くカードを使っていると、カードと特殊なつながり……ライオンを得ることができるようになるんです。それを我々はリンクと呼んでいます。リンクをつなぐことで、言葉を介さずとも意思をカードに伝えられ、またカードたちもマスターの感覚を受信し、全体の把握をすることができるようになります。結果、連携力が飛躍的に上がるというわけですね』

『な、なるほど……そんな技術があったんですね』

重野さんの解説に実況がうなるように感心し、観客たちもざわめく。

……なるほど、ただの訓練では説明できないレベルの連携力は、そういう絡繰りだったのか。

俺は、険しい視線を神無月へと向ける。重野さんが解説している間動きのなかった神無月は、俺を見るとにつこりと笑った。

「そういうわけだから、僕と君との間には戦闘力以上に大きな差があるんだ。わかったら降参してくれないかな？」

「く……」

なぜ神無月が、カードのランクを落としても余裕だったのか。その理由が分かった今、俺はその爽やかな笑みに強い威圧感を感じていた。

……ここまで、か？ 粘っても、神無月には勝てない。下手に足掻いてカードを失うくらいならば。

俺の思考が弱気に傾いたその時、蓮華が小さく呟いた。

「なるほどね……」

「蓮華？」

蓮華が、強い眼差しで俺を見る。

「テメエ、まさか降参しようとはしてねーよな？」

「いや……だが」

このままじゃ勝てないだろ。その言葉をなんとか飲み込んだ俺を、蓮華が嘲笑する。

「まー、テメエが顔も財力も冒険者の腕前も、その他もろもろ相手の足元にも及びませんって言うならそれでもいいけどよ」

顔は余計だろ、顔は。最初からそこで勝負しようとは欠片も思っ
てねーよ……。

「でも、降参の理由をアタシたちの安全のためにしようとしてんなら、絶対許さねーぞ」

「う……」

今にも殺人を犯しそうな目でこちらを睨む蓮華に、俺は怯んだ。

「力及ばず負けるのは、アタシたちが悪い。カードとして、土下座して謝るぜ。でも、アタシたちのためにマスターが負けるのは、逆だろっがよ」

「……………わかったよ」

やるだけ、やってみるか……。

俺が強く神無月を睨むと、奴は意外そうに眼を丸くした。

「おや、まだやるのかな？」

「生憎俺のカードたちはまだまだやる気満々でね」

「ふうん……できればロストはさせたくないんだけどな。まあ仕方ないか」

その言葉と共に神無月が冷たい無表情となる。う、く、来るぞ！

「ユウキ、本能の覚醒！」

「ウオオオオオン！」

「本能の覚醒か。良いスキルを持つてるね、でも、それには弱点がある」

ユウキの咆哮を見た神無月が感心したように呟くと、ウィッチが無言で動いた。小さな魔女の手から放たれた黒い光がユウキを包む。

「本能の覚醒は、精神異常に弱い。少々迂闊だったね……むっ！」

何の異常も見られず自分へと向かってくるユウキを見て、奴が表情を陰しくした。

ユウキは、小さな勇者のスキルにより本能の覚醒のデメリットを受けない。そこに蓮華の幸運付与があれば状態異常にはそうそう掛からない。

身体能力を増したユウキが、ケットシーへと襲い掛かる。その爪が猫妖精を捉える寸前、リザードマンが素早く割り込んだ。あの動き、庇うのスキルか。

蜥蜴亜人は、巧みな格闘術でユウキの腕をいなし、前蹴りを叩き込む。ユウキはそれを後ろに飛ぶことで威力を相殺したが、敵との距離が空いてしまった。

そこに飛来するウィッチの魔弾。ユウキは一転して防戦一方となる。その背後に迫る影。ケットシー。ユウキもそれに気づくが、対処する余裕はない。ユウキのわき腹をケットシーが決る。ケット

シーが更なる追撃を掛けようとした瞬間、蓮華の魔弾がそれを阻害した。

ホッと一息吐く間もなく、リザードマンの回し蹴りがユウキを襲う。そこへ、スキルを使用したイライザが駆け付けた。庇うのスキルで、リザードマンの一撃を受け止める。

同時に、ユウキのフォローをしたことで隙の生まれた蓮華へと、ウィッチの魔弾が襲い掛かった。躲す、躲す、躲す。蓮華はひらりひらりと舞いながら華麗に魔弾を躲し続けるが、仲間のフォローをする隙は無くなってしまった。

目まぐるしく変化する攻防に、俺は戦況を理解するのに精いっぱい、とても指示を出す余裕などない。俺が言葉を発しようとしたその時には、その指示は二周、三周遅れとなっている。もはや、人間の言葉が割って入れる段階ではない。これが、リンクの有無か……。

俺が歯噛みしている間にも、皆の奮闘虚しく状況は刻一刻と悪化していく。

イライザとユウキの身体には裂傷が増えていき、蓮華の回避にも余裕がなくなっていく。

その時、ケットシーがユウキたちの傍から離れた。向かう先は、蓮華。離れたところにいる俺からは丸見えの動きだが、魔弾の動きに集中している彼女は気づいていない。

俺が「危ない」と声を出すまでの間に、ケットシーが蓮華へと迫る。

スローとなった世界で、俺はなんとか一瞬でも早く彼女に言葉を届けようと足掻いた。

だが、あまりに遅い。たった一言出すだけなのに、こんなにももどかしい。

「――危ない！」

なんとか声を絞り出したその時は。

すでにケットシーは蓮華へと跳躍していた。

そのナイフを数本束ねたような爪は、あっさりと蓮華の華奢な背中を切り裂くだろう。

未来予知のようにその光景が脳裏に浮かんだ瞬間、脳がカツと熱くなった。

バチン、と光が脳裏に弾けて――蓮華と何かが繋がったのを感じた。

「！！！」

蓮華が、見えないはずのケットシーの動きを躲す。そればかりかケットシーへと光弾を叩き込み、ウィッチの魔弾へとぶつける。まるで急に視野が広がったかのような動き。

蓮華がハッと俺を見る。俺は、蓮華を通じて俺を見た。蓮華もまた、俺を通じて自分を見た。

――これは、この心と心が繋がる感覚は、覚えがある。

ハーメルンの笛吹き男との闘いで、イライザがやられた時の、蓮華と深く感情を共有したあの感覚。

それをもっと強く感じた。

これが、リンクなのか？

蓮華が、俺を見てうれしそうに笑った。さすがアタシのマスターだ。そんな想いが、俺の胸へと届いた。

「……今のは、まさか。馬鹿な」

神無月が、何かを察したように険しい表情で呟く。

それを試すかのように、奴のカード三枚が同時に動き出した。

苛烈さを増す三位一体の連続攻撃に防戦一方となるイライザ、ユウキに対し、蓮華が自分への攻撃をいなしつつ、仲間のフォローを行う余裕があった。俺のカードの中で、蓮華の動きだけが際立って良い。

これがリンクの力か。

蓮華が叫ぶ。

「イライザ、ユウキ！ 自分からマスターへと心を開くんだ。今のアイツに自分からラインを繋ぐほどの技量はない！」

「————ッ！」

まず、俺とラインが繋がったのはイライザだった。心の隔意がない彼女とのラインは、こっちが受け入れてやるだけです繋がった。すぐにユウキとのラインも繋がれる。

俺を中心として一本の線でつながれた彼女たちは、一転して神無月のカードたちに抵抗できるようになった。

ユウキへのリザードマンの攻撃をイライザが受け止め、イライザへと不意打ちを仕掛けるケットシーの動きを蓮華が牽制する。蓮華が撃ち漏らしたウィッチの魔弾を、ユウキは見もせずには躲した。

「う、ぐ……！」

だが、その代償は俺の脳へと負担となつて掛かった。頭が熱い。テスト前に徹夜で一夜漬けた時のような脳のだるさ。

それがどんどん積み重なっていく。急激に増した情報量と使い方に、脳がまだ慣れていないのだ。

それに、抵抗できるようになったと言ってもあくまでようやく防御らしい防御が出来るようになっただけ。劣勢を覆せる力はない。

俺のリンクはまだ入り口に立ったところ。あくまでカードたちの情報共有が出来るようになったただけであり、指示を出したりすることはできないのだ。

一方で、神無月もリンクが使える相手と戦うのは経験がないようで、どうにも攻めあぐねているようにも見えた。

しかし、時間が経つにつれて徐々にこちらの被弾が多くなっていく。神無月が、慣れ始めたのだ。

「……ふう、最初は驚いたけど、やはり経験の差は大きいね。まあこっちはこれをずっと練習してきたんだ。覚えてたにあっさり抜かされたら堪ったもんじゃない」

「う、く……」

「辛そうだね、僕も最初使った時はキツかったよ。二日くらい熱が出た。出来るようになったばかりなのに、こんなに無理したら後が大変だよ。もうその辺にしておいたらどうかかな？」

「う、ぎ、が、あ……」

こんなちよつとした会話が、露骨に負担となって押し加かってくる。奴の言葉一つ一つが反響して脳に響き渡るよう……。

そんな俺を見て、神無月が苦笑した。

「本当にヤバそうだね。ここらでけりをつけてやるのも、先輩の役目か」

そう言つと、神無月が眼を閉じた。

なんだ？ なぜ、眼を閉じる。そんなことしたら自分の視界をカードに繋げられなくなるだろうに。

そんな俺の疑問は一瞬で吹き飛んだ。奴のカードたちからの圧力

が一気に増したからだ。

「ッ！」

イライザがリザードマンの連打を受けて吹き飛ばされ。

「ギャンッ！」

ユウキがケットシーに一瞬で全身を切り刻まれる。

「な……」

愕然と目を見開く。

これは……こんな、あつという間に。

まるで、神無月の意思がカードの動きを後押ししたような凄まじい動き。リンクは、こんなこともできるのか。

呆然と、仲間たちを見る。イライザは、手足を砕かれ地に倒れ伏し。ユウキは緑の毛並みを赤く染めて、身体を震わせている。

未だ彼女たちとのラインからは戦意が伝わってくるが、その身体はどう見ても戦える有り様ではない。

「な、イライザ、ユウキ！」

仲間の負傷に蓮華が動揺をあらわにする。

隙だらけだ。馬鹿、今は目の前の敵に集中しろ、冷静さがお前の売りだろうが！

俺がリンクでそれを警告する前に、彼女の感情がダイレクトに伝わってくる。

……そうか。目を伏せる。リンクで仲間とつながっていた分、仲間の苦しきまで伝わってしまったか。それで、仲間想いの

彼女は余計に動揺してしまった。

リンクは、仲間たちの力を引き出した一方で、彼女の思わぬ弱点も露呈させてしまったのだ。

しかし。それは。あまりに致命的な隙で――。

「ッ！ ……ガハッ！」

「蓮華アアア！」

雷の槍が蓮華を打ち抜く。地面へと滑り込んで、撃墜された彼女をなんとか受け止めた。

傷口を見て、思わず目を背けそうになる。

雷の槍は、少女のわき腹を見事に穿っていた。腹部は三分の一ほど失われており、全身を焼いた電撃が、皮肉にも止血になっているような有様だった。

すぐにミドルポーションを取り出して振りかける。だが、到底完治には程遠い。延命レベルの悪あがき。

蓮華の窮状は、ラインを通じて仲間たちへと伝わった。

「――！」

ユウキが、大気が震えるほどの咆哮をあげ、敵へと突進した。こちらが焼けるほどの、凄まじい怒りが伝わってくる。理性は完全に蒸発し、ありとあらゆる枷から解き放たれた肉体は、一回りも二回りも大きくなったように見えた。狂戦士さながらに暴れ回る。

イライザが、全身から蒸気を立ち昇らせて起き上がった。ラインを通じて、彼女の状態が伝わってくる。この仲間想いのグーラーは、自分の肉体を喰らうことで急激にダメージを回復させ、肉体を強化しているのだ。無論、長く続く状態ではない。このままでは、彼女は、彼女自身で、自らを食い尽くすだろう。だがそんな状態にもかかわらず、彼女は敵へと立ち向かっていった。

猛攻。自らの命を燃やし尽くすようなカードたちの奮闘は、ここに来て初めて神無月を圧倒していた。

だが、それは長くは続かない。まさに回光返照の、儂い、一瞬の煌めきだ。神無月もそれがわかつているから、無理をせず防御に徹している……。

「……………」

もはや、ここまでか。グツと歯を食いしばる。

完全敗北、だった。

これ以上は戦えない……。

直に、俺のカードたちは自滅と言う結末を迎える。

そもそも、実力が違い過ぎたのだ。

思えば、奴は最初から手加減をしていた。

それに最初は憤りを覚えたが、今となっては感謝するしかない。

蹂躪されるはずの試合は戦いの形となり、リンクと言う新しい技術を得た。

カードたちも、今ならロストを免れる。

これらはすべて神無月の思いやりだ。

冷たい容姿で勘違いしていたが、冷静になってみれば結構いい奴じゃないか……。

ここまで手加減されちゃあ仕方ない。

優勝と、ヴァンパイアのカードは奴に譲ろう。

これが、俺の初のモンコロの終わり……。

第二十二話 冒険者の技術（後書き）

【Tips】リンク

カードとマスターの間には、見えないラインが存在している。マスターに対するダメージの肩代わりなどはこのラインを介して行われている。リンクはそのラインを利用して感覚や感情の共有を行う技術である。

これにより、カードたちに迅速な指示が出せるようになる他、カード間の連携能力が飛躍的に向上する。

しかしそれらはまだリンクの入り口に立ったに過ぎない。

リンクにはさまざまな可能性が秘められており、リンクを使えない、使いこなせない冒険者はただカードを所有しているだけとも言える。

【追記】

Q：なんでリンクが一般に知られてないの？

A：天空闘技場で念の存在が知られていないのと同じ理論。

主人公は、リンクの存在は知りませんでした。プロはまるで手足のようにカードを操ることが出来る。「同じカードを使っても、プロの方が圧倒的に強い」ということぐらいは知っています。

ではなぜリンクという単語を知らなかったのか。

大きな理由は三つあって、一つは、リンクが基本的に秘匿されているから。カードの遠隔操作が可能となるリンクは、一見モンスターへの襲撃に見せかけて他の冒険者を襲うことも可能となる為、一般には秘匿されています。このTVも、リンクについての情報はカットして放送されますし、SNSなどでリンクという単語を使うと不適切な単語として投稿できなくなります。ではなぜ重野さんがそんな

ことを普通に言っちゃったのかというと、彼が本職の実況ではないからです。重野さんも、このあとギルドで上司からしこたま怒られます。

二つ目の理由。それは、リンクを使える冒険者の数は圧倒的に少ないから。SNSなどでリンクという単語が使えなくても、こういった技術があるらしい的なことは書き込めてしまいます。人の口に戸は立てられぬという奴です。それでも広く知られていないのは、それを使える人が少ないから。一つ星や二つ星の、ただカードを持つただけで満足している冒険者たちは、リンクの存在を知っても「なにそれ、それどうやって使うのよ。俺使えねえんだけど、デマじゃね?」となってしまう。リンクの存在を知らないままグラディエーターになり、モンコロでフルボッコにされる者も結構多く、それを人は「洗礼」と（以下略）。

三つ目の理由。これが最大の理由なのですが、……ぶっちゃけモンコロはリンクの存在を知らなくても楽しめるからです。現実のプロスポーツを見てても、選手たちの超高度な専門技術が知らなくても、雰囲気を楽しめます。これが、主人公や観客たちがリンクの存在を知らなかった最大の理由です。プロが手足のようにカードを使うのも、経験の差だろうと思っていた感じですね。

……そんな感じの裏設定で適当に書いていたのですが、微妙に矛盾が生じるし、本編内で説明不足過ぎるので、あとで適当に書き直します。

なので、今は「天空闘技場で念が知られていないのと同じか」「ぐらいの感覚で受け入れてくださると嬉しいです」。

第二十三話 カードの名付けは、死んでも良いって思ってる証拠
(前書き)

第二十三話 カードの名付けは、死んでも良いって思ってる証拠

「まいー」

「まだ、だ……」

俺が降参を告げようとしたその時、掠れた声がそれを遮った。
ググツと身体を起こし俺を見上げる蓮華。
その様子は誰がどう見ても瀕死で。

「まだ、戦える、ぜ……」

「何言ってるんだ、お前！ これ以上は本当にロストしちまうぞ！」

だから俺は出会ってから初めて本気で蓮華を怒鳴りつけた。

「だろうな」

「だろうなって……」

一瞬絶句し、問いかける。

「なんで、そこまで……」

「——お前が、言い訳しようとして、したからだ」
「！……！」

蓮華の強い眼差しが、俺を貫いた。

凶星をつかれ、心臓がドキリと跳ねる。

「お前、色々理由をつけて、負けを納得しようと、したたる……」。

そうやって負けたら、お前の人生に消えない負け癖がついちまう。いつか来る、絶対に負けられないところで、負けちまう……そんな奴になっちまう、だろうが」

「蓮華……」

彼女の言う通りだった。俺は、神無月の方が経験が長いから負けでも仕方ないだとか、今なら蓮華たちをロストせずに済むだとか、色々と負ける為に理屈をこねていた。終いには、悔しさを誤魔化すために相手を内心で褒めてすらいた。アイツは凄い奴だ、優しい奴だと……だから負けても悔しくなんてないと。

そんなのは、負け犬の理論武装だ。蓮華はそんな俺の内心を見抜いていたのだ。

「お、覚えとけ。本当に負けるその瞬間まで、足掻けない奴に……幸運は、微笑まない、んだよ」

血を吐くような蓮華の訴え。

お、俺の為なのか……。ここだけじゃない、俺の人生全体のことを考えて……。

胸に込み上げてくる熱い何かに、胸元をグツと握りしめる。

言葉が出ない俺の頬へ、小さな手がそっと添えられた。蓮華が囁くような声で問いかけてくる。

「なあ、なんで歌麿は、アタシたちに名付けをしたんだ？」

「それは……お前らを失いたくないからだよ。だから、もうやめよっせ」

負け癖がついたって、コイツらをロストさせるよりは良い……。

蓮華の話を聞いて、逆にその想いは強まった。勝つというのは、コイツらを死なせてまで得なきやいけないことなのか？ そんなの、

絶対に嘘だ。

しかし、俺の言葉に蓮華は首を振る。

「それなら、なおさら、最後まで戦わせて、くれ。ロストしても、本当に失われるわけじゃあ、ないんだから」

「いくら完全にロストしないって言っても、一回死ぬのは同じことだろうが！」

俺は、ユウキが死にたくないと言ったことを覚えている。いくら復活できるカードと言えど、死ぬのは怖いのだ。

だから俺はこれまでの迷宮探索でも、低ランクカードを使い捨てにするようなことをしてこなかった。Fランクカードに罠をぶち当てて解除していく方が効率的だと知っていても、頑なにイライザに罠への対処を学ばせ続けた。

それが、命の大切さを教えてくれたコイツらへの俺なりの感謝だったのだ。

なのに、その当人が、頼むから死ぬまで戦わせてくれと言っ……。蓮華がフツと笑った。死を覚悟したものの、透明な笑み。

「なあ、知ってるか？ 名づけは、カード側が拒否することもできるんだぜ？」

「なに？」

……知らなかった。カードの名付けは、マスターによる一方的なものだと思っていた。

だが、それが今、なんの関係が……。

俺の疑問を他所に、蓮華が静かに語る。

「アタシたちにとって、ロストは死じゃない。カードから失われれば、ただ“母なる海”に帰るだけのこと……。だが名づけを受けられ

ば、そのマスターに、拘束され続けることになる。そんなのごめんだと思つたなら、カードだつて名前を拒否することができる。名前を受け入れるつてのは、アタシたちにとつても、覚悟のいることなんだ」

そこのところ、メアの奴はわかつてなさそうだけどな。と蓮華は小さく苦笑した。

俺の眼を見る。仄かに赤い瞳の中に、俺の顔が映つた。

「世の、マスターたちが、名付けをどう思つてるのかは、知らない。もしかしたら、ちよつとした保険程度に、考えてんのかもな。でも、アタシたちにとって、名前は――」

――マスターの為なら何度だつて死んでもいいつて思つてる証拠なんだぜ？

「……………ッ！」

声にならない叫びを上げて、胸を掻きむしる。

自己嫌悪で今すぐ死にたかつた。クラスカーストで成り上がりたいからとか、クラスの連中にバカにされたくないとか、そんな気持ちで大会に出た少し前の俺を、本気で殺してやりたかつた。

コイツらはこんなに覚悟を決めて俺について来てくれたのに、俺はフワフワした気持ちでまた戦つていた。

覚悟が全然足りなかつた。ハーメルン戦で学んだつもりだったのに、俺はまるで成長していなかつた。

……………だが、今、決めた。今からならまだ間に合う。そうだ、ここから一緒に戦おう。

俺は、すべてを失う覚悟を決めた。

「……お前らが」

懐から一本の小瓶を取り出す。
アムリタ。これが俺の覚悟だ。

これを売れば、万が一カードが全滅しても復活させられる。
今まではそんな保険をかけて戦っていた。

でも、そんな保険を持ったままじゃ、命懸けじゃない。

これを持っていたから、どうせ負けても大丈夫と思っていたから、
甘えてたんだ。

負けても、自分で復活させる。何年掛かってても、何十年かかって
も。それが、礼儀だ。

「全部割れても、必ず全部復活させてやるから、心配すんな」

俺がそつとアムリタを口へと運んでやると、蓮華は一瞬キョトン
として。

「ああ！ それでこそ、アタシのマスターだ」

そう言つて、心から嬉しそうに笑った。

蓮華がアムリタを一気に呷る。蒼い光が彼女を包み込んだ。

パツと光が弾けた時……彼女の傷はどこにもなかった。

完全復活だ。痛々しい傷がすべて消え去った彼女の姿を見て、ホ
ツと頬を緩める。

しかし……それでも、振り出しに戻っただけ。戦力の差は些かも
埋まっていない。

敗北は確定している……だが、それでも構わない。無様に、全滅
する瞬間まで足掻くだけだ。

と、その時。蓮華がポツリと呟いた。

「……………ああ、そうか。そういうことなのか。そりゃあ、誰も気づいてないわけだ……………」

「蓮華……………」

怪訝な顔をする俺に、蓮華は可笑しそうに笑う。

「アタシみたいな外れカードに、アムリタなんて貴重品を使うバカは、お前くらいだって話だよ」

「何を言って、……………ッ！」

ハッと前を見る。

そこには、電池が切れたように地面に倒れ込むイライザとユウキの姿があった。

リンクから感じる二人の状態は、瀕死。

時間切れ、か。これでは蓮華が復活しても、もう……………。唇を噛みしめる俺に、蓮華が囁いた。

「大丈夫だ、アタシに任せろ」

どういう意味だ、と問い返す前に——強い光が目を焼いた。同時に、ふわりと花の香が鼻をつく。

「これ、は……………っ!？」

腕で目元を庇いつつ、光を纏った蓮華を凝視する。

やがて光が消え、徐々に視界が戻って来た時……………そこには蓮華の姿はなかった。

「……………は?」

ポカンと口を開ける。

先ほどまで蓮華が立っていた場所を中心に、無数の蓮華の花が咲き誇り、その中心に一人の女性が立っていた。

神々しい光を放ち、天女の羽衣のような服を身に纏った妙齡の美女。黒髪は長く艶やかで、瞳は紅く、その横顔はこの世のものとは思えぬほど美しい。

女神。安直だが、そんな言葉が脳裏に響いた。

「――アムリタの雨よ」

女神が一言呟いた。脳が痺れるような美声。会場を、光の雨が降り注ぐ。

心地よい。体の中に溜まった悪いものがすべて洗い流されていく感覚。脳の疲労感も解けるように消えていく。

「……………マス、ター？」

「これは、傷が……………」

「イライザ！ ユウキ！」

完全回復した仲間たちが体を起こす。

一方で、神無月のカードたちのダメージはそのまま。まさか、そういうことなのか？

呆然と女神を見る。彼女は俺の視線に気づくと、ニヤリと悪戯っぽく笑った。そこには間違いなくアイツの面影があった。

「これは……………」

神無月が魅入られたように眩く。

が、すぐに気を取り直したように俺を鋭く睨む。弾かれたように奴のカードが動き出す。

奴もいろいろと気になることはあるだろうが、今は後回しにすることにしたのだろう。

メンタルの立て直しが早い。いまだに混乱している俺とは違う。だが……。

「なにッ!？」

奴のカードたちの悲鳴と、神無月の驚愕の声が響く。

女神……いや、蓮華が手を翳しただけで奴のカードが地面へと叩き付けられた。いや、違う。よく見れば黒い光の波が、今も奴のカードを凄まじい力で押さえつけているのが分かる。

これは、もしかして高等攻撃魔法のグラビティか？

「く……みんな!」

ミシミシと骨の軋む音と共に地面に這い蹲っているカードたちを見た神無月が、顔を歪める。

が、すぐに懐から何かを取り出すと手の中で砕いた。

黒い光の波が消え、奴の仲間たちが自由を取り戻す。防御用の魔法道具か。高等攻撃魔法を打ち消せるほどのものとなると、相当高価なものだろう。

重力魔法から解放された奴のカードたちが、弾かれたように蓮華へと襲い掛かった。

迫る三体のモンスターたちを、女神は薄い笑みを浮かべて迎え撃つ。

「星の海よ」

そう呟いた瞬間、彼女の背後に宇宙が広がった。

漆黒の海の中に浮かぶ小さく光る星々……。

その神秘的な光景に目を奪われていると、無数の閃光が奔った。通常なら地表に届くまでに燃え尽きる微細な隕石たちは、蓮華の開いたゲートを通ることにより地表へと降り注ぐ。

高等攻撃魔法——メテオ。

流星群の雨が神無月のカードたちを無残に貫こうとしたその瞬間。

「まだだ！」

宇宙が見えたその時には動き出していたのだろう神無月が、また一枚魔道具のカードを切った。

神無月のカードたちが姿を消し、流星群が空を切る。

轟音、衝撃。土埃が立ち上がり、周囲が全く見えなくなる。

俺はすぐにリンクでカードたちと感覚を共有し、神無月のカードがどこへ消えたかを探る。

どこだ、どこへ消えた！？

『後ろだ、しゃがめ』

「ッ！」

脳裏に響いた神託にも似た声に従い、素早く地面に伏せる。

同時に、何かが頭上を通り越していった。

ケットシーだ！

神無月は魔道具でカードを退避させた後、すぐに俺へのダイレクタアタックを狙ってきたのだ。

俺が躲したることによって空中で無防備となったケットシーを、緑の猟犬が襲う。

首筋へと食らい付き、体を抑え込み、ケットシーを完全に組み伏せた。

魔犬の唸り声と、妖精猫の悲鳴が響き渡る。

このままケットシーを仕留められるかと思っただが、それを黙って

ウィッチが雷の槍を、蓮華が電柱ほどもある岩の槍を。

ライトニングとアースピアース。属性的に有利な魔法を放つことが出来たのは偶然か、あるいは操作された幸運によるものか……。ただ一つはつきりしているのは、こちらの岩の槍は雷の槍を打ち破ったということだった。

自分へと飛来する岩の槍を、ウィッチは視線を逸らすことなく睨み続けている。

そして槍がその小さな体を貫こうとしたその時。その前に立ちふさがる存在がいた。

『!!!!!!』

三枚のカードたちの驚愕が俺へと流れ込む。蓮華たちにも俺の驚愕が流れ込んでいることだろう。

「マス、ター……」

ウィッチがかすれた声で、呟くのが聞こえた。身を挺して自分を庇った、主の姿を凝視している。

一瞬遅れて、ガラスが割れるような音が響き渡った。

魔道具の障壁と岩の槍が相殺される音。

神無月は一瞬だけ目を伏せ、俺を見ると晴れやかに笑った。

「参った！ 僕の負けだ！」

一拍間が空き。

『……け、け、け、決ツツ着ッ!!! 勝利！ 北川選手の勝利です！ 北川選手が何かのポジションを飲ませた途端、座敷童が変身し、鮮やかに試合を決めてしまったアア！ 一体あれはなんだった

のか、そしてこれは何というスキルなのか！ 重野さん、これは一体！？』

興奮した実況の声が会場へと響き渡ると、いつの間にか静まり返っていた観客たちが徐々に言葉を取り戻し始めた。ざわつきながらも一体何が起こったのかと、実況席へと耳を傾ける。

『……馬鹿な』

『重野さん？』

『信じられない！ まさか、こんな！ あるのか！ カードを使わないランクアップが！』

『ええと、つまりどういうことでしょうか。北川選手のカードはランクアップしたということですか？』

『ええ、間違いありません。あれは、Bランクカードのラクシユミーです。いや、日本では吉祥天と呼ぶべきか。いずれにせよ、間違いなくランクアップしている。上位のカードを使ったもの以外にもカードをランクアップさせる方法があったとは。これは大発見ですよ！ 一体どんな条件なのか。先ほど飲ませたものはアムリタ……？ アムリタを飲ませればランクアップするのか？ いや、それだけではいはず。それだけならもっと早く報告が上がってるはずだ。そうだ、あの座敷童、確か零落せし存在のスキルを持っていたはず。零落せし存在……零落、まさかそうということなのか？』

『あ、あのー、重野さん？』

何やら混乱しているらしい実況席をよそに、俺は大きく変貌を遂げた蓮華へと歩み寄っていった。イライザとユウキも寄ってくる。恐る恐る問いかける。

「蓮華、なんだよな？」

「他の誰に見えるというのだ？ マスターよ」

うつすらと微笑を浮かべる彼女の姿は、間近で見るとより凄まじかった。

蓮華の面影を残しつつ、完成された大人びた顔だち。目元は涼やかで、その奥にある紅い瞳は確かな知性を讃えている。薄く透けた羽衣から見える体のラインは、確かな凹凸を描いており、魅惑の肢体を見るものに思い起こさせた。

神々が作ったと言われるエルフの造形とはまた違った、神そのものの美しさ。肉体の反応ではなく、魂自体が惹かれるような……。清らかで甘い蓮華の花の香り。彼女が短く言葉を発するだけで、肌が粟立つような感覚がした。

「いや、なんとというか、あまりにも変わり過ぎてて。口調も変わってるし。なあ？」

「は、はい。……あの、ボクたちのこと覚えてますよね？」

恐る恐るユウキが問いかけると、女神は小さく苦笑し……。

「当たり前だろうが、ちょっと見た目が変わったぐらいで大袈裟なんだよ」

「あっ!？」

「戻った!」

ポンと音を立てて少女の姿に戻った蓮華を見て、俺たちは驚きの声を上げた。

「お、おお。なんだ、元に戻れるのか」

「ああ、一応スキルの効果だからな。むしろ、ずっとは変身できない。まあ詳しいことはあとで説明するよ」

「スキルなのか……」

そんなことを話していると、俺たちへと歩み寄ってくる影があった。神無月だ。

「やあ」

「あ、ど、どうも」

爽やかに笑いかけてくる先ほどまでの対戦選手に、俺は咄嗟にどう対応していいか分からず、そんな頓珍漢な返ししかできなかった。神無月がプツと笑う。

「なんだい、それ。さっきまではすごい気迫だったのに。試合が始まってすぐ思ったけど、顔合わせの時と試合中じゃ全然違う人みたいだね」

「え。そ、そうですか？」

なんか、アンナもそんなこと言ってたな。

なんてことを考えていると、神無月が手を差し出してきた。

「敬語じゃなくていいよ。同い年だろう？ よろしく」

「あ、ああ。その、よろしく」

差し出された手に反射的に握手を交わす。神無月の手はピアノストのように細く繊細さを感じさせるものだった。

「さっきは驚いたよ。一体どういう絡繰りなのかな？」

「いやあそれが俺にもさっぱり」

「ふうん、……まあ、直にわかることか」

「えっ？」

「一体どういうことだ？ と首を傾げる俺に、神無月が意味深に笑う。

「……これからちょっと大変かもねってことさ」

そう言って去っていく神無月の姿になんとも嫌な予感を覚えたその時。

「北川選手、優勝おめでとございます！」

後ろから突然声を掛けられ、俺はビクツと肩を跳ねさせた。

振り返ると、そこには幾人ものカメラを持ったスタッフと目をキラキラと輝かせたアナウンサーが立っていた。

思わず頬を引きつらせながら答える。

「あ、はい。ありがとうございます」

「早速ですが、あの座敷童の変身は一体どういったスキルなのですか？」「飲ませたポーションは、もしかしてあのアムリタでしょうか？ どういった経緯で入手を？」「今日の昼飯は何を食べられましたか？」「僅か数か月のキャリアでここまでの成長をされた秘訣は！？」「彼女はいらっしやるんですか？」「あのカードたちを手に入れたのはいつごろ？ カードパックで引いたというのは本当でしょうか？」「今日の晩御飯は何を食べる予定でしょうか？」

怒涛の質問攻め。

洗いざらい聞き出すまで絶対に解放しないという番組スタッフの勢いに、俺は神無月の言葉の意味をようやく理解した。

神無月の奴め、こつなるのが分かってたなら言ってくれよ……いや、言われても逃げられないか。

俺は微かに苦笑を浮かべると、質問に答え始めた。

これで、数千万の女ヴァンパイアが手に入ると思えば安いものだ。
しかしこの時の俺はまだ知らなかった。

これすらもこれから始まる取材地獄の幕開けに過ぎなかったこと
を……。

第二十三話 カードの名付けは、死んでも良いって思ってる証拠
(後書き)

【Tips】零落せし存在

一部のモンスターの中には、本来の格よりも零落してこの世に現れるものがある。零落スキルを持つカードが、それである。それらのカードに、「名前」とイベントアイテ……もとい、「固有の魔道具」を与えることで、本来の霊格に近づけることが出来る。

第二十四話 カーストトップ リア充

朝。教室の扉を開けると、多くの視線が集まるのを感じた。おはよう、その言葉を言う前に、多くの言葉が掛けられる。

「おお！ 北川おはよう！」

「おはよ、田中」

「おはよ！ あはは、寝ぐせついてるよ！」

「マジか、後で治すわ、サンクス佐藤」

自分の席に向かうまでの間に、次から次へと挨拶の声をかけられる。

それに一つ一つ返事をしていくと、東野と西田の視線を感じた。人気者は大変だな、と二人の眼が語り掛けてくる。思わず苦笑した。

ようやく自分の席に着き、鞆を降ろす。

新学期に入って席替えが行われた結果、俺の席はクラスの中心近くになってしまった。

教師の目に入りやすく、ろくに居眠りもスマホ弄りもできない位置だが、少しだけ良いところもある。

「おはよ、マロっち」

例えば、四之宮さんが隣なところとかだ。

「お、おはよ、北川君」

四之宮さんと話していた牛倉さんが、少しだけ気恥ずかしそうに挨拶をしてくれる。

俺も若干気まずい想いをしつつ、それを隠して笑みを浮かべた。

「おはよう、四之宮さん、牛倉さん」

「おう、師匠、今日はちよっと遅かったやん。なんや、夜遅くまで変な動画見てたんか？」

怪しい似非関西弁で馴れ馴れしく話しかけてきたのは、小太りの男……小野だった。

「見てねえよ。つか誰が師匠だ」

俺は顔を顰めてこの一週間言い続けたセリフを言った。

新学期になった途端、小野は俺を師匠と呼び気安く話しかけてくるようになった。

俺の試合を見て感動したとのことだが、それが建前であるのはい目でわかった。

最初、そう呼ばれた時は思わずポカンとしてしまったほどだ。なんとという面の皮の厚さだと。

だが、容姿に優れているわけでもなく、勉学運動に秀でているわけでもない小野が、今もこうしてクラスカースト上位に居続けられるのはこの抜け目のなさ故になのかもしれない。

実際、自分側につけてみれば小野はなかなか使える奴ではあった。

俺がこうして平穩に学校生活を送れている裏には、急激に成り上がった俺に対する妬み嫉みを小野が誘導しコントロールしてくれているという背景があった。

つまり、この男は決して友人ではないが、ビジネスライクな関係を構築できる程度には仲間ではあった。

「うひい、ギリギリ間に合った！ おう、みんなおはよう」

高橋が、冬だというのにつつすらと汗を掻きながら教室へと滑り込んでくる。

今日も、野球部の朝練が忙しかったのだろう。

同じグループになってわかったことだが、野球部のエースという奴は並大抵の努力じゃあなれない存在のようだった。

朝も放課後も、時には休日ですら野球漬けの毎日。華やかに見えただけ、精々休み時間くらいで、あとは汗と泥にまみれた生活を送っている。

それが、光り輝いて見えた野球部の天才エース高橋の等身大の姿だった。

高橋が、ニカリと爽やかな笑みを向けてくる。

「おう、マロ。昨日のTV見たぜ。天才高校生冒険者が、新たなカードの可能性を発見！ だってよ」

「ちょ、やめてくれよ」

俺はその言葉にカツと頬が熱くなるのを感じた。

最近、どのニュース番組を見ても俺の試合のシーンが一度は流れるのだ。

アマリタを飲ませる前の俺と蓮華のやり取りから蓮華が変身するまでが何度も何度もTVで流され、俺はそれを見るたびに憤死するかと思うくらいの羞恥心を毎日味わっていた。

「あはは、そう言うなよ。あの試合、マジで感動したんだぜ？ なんと、本当の冒険者とカードの絆って奴？」

高橋がそう言うと、四之宮さんまでもが俺を揶揄ってきた。チエシヤ猫のような笑みを浮かべて言う。

「そうそう、恥ずかしがることないって。知ってる？ 今、アマチユアの冒険者の中でカードに名付けするのが流行ってるんだってさ」
「私も蓮華ちゃんのファンになっちゃった。今、北川君のT w i t t e r、凄い勢いでフォロワー増えてるんでしょ？ 蓮華ちゃんとメアちゃんのやり取り、私も好きだな」

牛倉さんが言う様に、俺のフォロワー数は凄まじい勢いで伸びつつあった。

あの試合が放送されてから、わずか一週間で三万近く増えている。そしてそのお目当ては、大体が蓮華だった。
過去のお菓子レビューも掘り起こされ、軽くバズってすらいた。

「ま、これも有名税の一種って奴やな」

ポンと俺の肩を叩く小野の顔は、可笑しくてたまらないというようなニヤニヤ笑いであった。

この野郎、と睨みつけていると、担任が扉を開けて入ってきた。

「おう、お前ら席に着けー、朝のH Rの時間だぞ」

生徒たちが慌てて席に戻り始める。

一気に慌ただしくなった教室に、俺は何となく周囲を見渡した。
何の変哲もない朝の風景。

その中に、南山の姿はなかった。

大会が終わって、俺を取り巻く環境はがらりと変わった。それは、大会の優勝によるもの……ではなく。あの戦いの中で見せた蓮華の変身にあった。まず、現在の蓮華のステータスをお見せしよう。

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】650（240UP！）

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し
- ・かくれんぼ
- ・初等回復魔法 中等回復魔法（CHANGE！）

【後天技能】

・零落せし存在 霊格再帰（CHANGE！）：一時的に上位ランクにランクアップできる。一度使用すれば一日から数日のインターバルが必要となる。戦闘力が100上昇する。

- ・自由奔放
- ・初等攻撃魔法 中等攻撃魔法（CHANGE！）
- ・詠唱短縮（NEW！）：魔法系スキルの工程を省くことが出来る。熟練度により効果上昇。
- ・魔力回復（NEW！）：魔力の回復速度が上がる。
- ・友情連携
- ・初等状態異常魔法

一一一一 霊格再帰。

それが、蓮華の目覚めた力の正体だった。

一時的とはいえ、上位のモンスターを用意せずともランクアップできるという事実は、世界に衝撃を与えた。

迷宮が現れ、カードの使用方法が判明し二十年。ここ最近は新たな使用方法が発見されることもなく、カードの可能性はおおよそ暴き切ったと思われるいたところに、このニュースだ。

しかもそれはTVによって全国放送されたのだ。

すぐさまニュースの取材が俺に来たし、国の研究機関が俺にコンタクトを取ってきた。他国の記者からも取材を受けた。

今の世界が、どれほど迷宮とカードによって回っているのかを、実感させられる日々だった。

俺が冒険者になってからあの大会までの経緯を何度も何度も説明させられ、それもTVに流された。

そうして世界中で、カードの再研究が行われた結果、霊格再帰の詳細が徐々に明らかになっていった。

まず、霊格再帰を得ることが出来るカードは零落せし存在のスキルを持つカードだけだということ。

次に、霊格再帰の覚醒にはそれぞれのカードによって異なったアイテムが必要になるということ。

最後に、覚醒にはカードの好意と名付けが必要だということ。

特に最後の条件が、霊格再帰の発見が今まで遅れた最大の理由であった。

各国にはカードの研究を専門に行っている機関が数多く存在する。その中には当然、零落スキルを持つカードに、アムリタのような高価なアイテムを与える実験を行っている場所もあっただろう。

そのカードに関係しそうなものならなんでも与えたところもあったに違いない。

だが、その中にカードに愛情をかけて名付けを行ったところはないもなかった。

実験の一環として名付けを行ったところは当然あっただろうが、

モルモットに愛情を持つ研究者や、実験動物とされて好意を抱くカードは存在しない。

一般人の中には、零落スキルを持つカードに愛情をかけて名付けを行った者もいただろう。だがそういった者たちは逆に高額なアイテムを実験的に与えると言った資金がない。

俺が偶然発見できたのは、それがアムリタという回復アイテムであつたことが大きい。

それにしつて、普通の人は一度ロストさせてからまた座敷童を買つて復活させる方法を選ぶだろう。

つまり、霊格再帰のスキルは損得計算が出来ない愚か者だけが見つけ出せるものだったのだ。

これじゃあ、頭の良い学者たちがいくら集まっても見つからないわけである。

多くの零落スキルを持つカードを愛用している冒険者たちが集められた結果、実験は多くの成果を生んだ。

その中で特に大きいとされたのは、Bランクカードの覚醒である。リリムが“創世の土”でリリースへと、ハヌマーンが“緊箍児”にて齊天大聖へと、護法童子が“神使鬼毒酒”で酒吞童子へと覚醒した。

これは、冒険者業界では天地がひっくり返る様な衝撃であつた。なぜならば、現在Aランクカードは世界で数枚しか確認されておらず、そのすべてが国に管理されていたからだ。

つまり、一般の冒険者が手に入れられる限界がBランクカードであり、そこによつてやうやく一時的とはいえAランクカードが加わつたのである。

加えて、これらの実験により用途不明とされていたアイテムの使道が判明したこともカードの研究を大きく加速させた。

創世の土や緊箍児などは、それまで高ランク迷宮で時折出現するがいまいち使い道のわからないアイテムとして研究所の片隅に転が

っていたものだったからだ。

これまでは用途不明としてはした金で売られていたアイテムが再評価され、この数週間大きく市場が揺れ動いたと聞く。

霊格再帰を持つカードたちは、ランク以上の力を持つカードとしてアドヴァンテージカードと呼ばれるようになった。表記としてはC+、B+となる。

とは言え、多くの冒険者たちはこのアドヴァンテージカードに冷めた目を送っていた。

霊格再帰のスキルはあくまで一時的なもの。

C+ランクカードと、Bランクカードを比べると後者の方が当然優れているように見える。

霊格再帰を得るにはアムリタのような高額アイテムが必要なこともあり、それなら高額アイテムを売ってBランクカードを買った方が良いのでは？ というのが多くの冒険者の見方だった。

だが、トップクラスの冒険者たちの意見は違った。アドヴァンテージカードの本来のランクは変わらないという点に目を付けたのだ。すなわち、ロストした際の復活に掛かるコストの低さである。

高ランク迷宮の最前線では、Cランクカードなど使い捨て、Bランクカードでも低くない確率でロストするという魔境と化しているらしい。

Cランクはともかく、Bランクカードをロストすればトップクラスの冒険者でも大きな痛手だ。

その点、アドヴァンテージカードならばコストは大きく下がる。主力とはなりえないが、戦場に欠かすことのできないカード。それがトップクラスのアドヴァンテージカードに対する評価であった。こうしてアドヴァンテージカードは、賛否両論ありつつも大きな反響をもって人々に受け入れられ。

俺はそれをわずかなキャリアで発見した新進気鋭の冒険者として広く知られるようになった。

当然、学校の奴らの俺を見る眼も変わった。

今では、俺は校内においてちよっとした有名人である。

朝、教室の扉をあければみんなが向こうから挨拶をしてくれる。

四之宮さんらリア充グループと普通に話すようになり、東西コンビとの友情もそのままだ。

人生で初めてラブレター………というかファンレターのようなものも貰ったりもした。

俺は誰もが認めるスクールカーストのトップとなり、……そして南山は転校した。

新学期になると、すでにアイツの姿はなく、担任から淡々と転校したことを連絡された。

それに対するクラスみんなの反応は淡白なもので、あいつを惜しむ声や陰口すらも聞こえてこなかった。

まるで、初めからあいつがいなかったかのように振る舞うクラスメイト達をみて、俺は複雑な感情を抱かずにはいらなかった。

それは東西コンビも同じようで、俺たちは意図的にアイツの話題を避け続けている。

あの日、なぜ南山はあそこまで俺を憎み、殺そうとしてきたのか。大会が終わってから考えてみて、一つの答えが出た。

南山は、俺が冒険者となって自分を蹴落とそうとしていると思っただのではないだろうか。

せっかく冒険者になってリア充グループに入れたのに、小野や俺が冒険者となってアイツは内心焦りを感じていたに違いない。

それでも小野に関しては元々リア充グループだったから………と自分を納得させていたのかもしれないが、俺については完全に許容できなかつたのだろう。

考えてみれば、俺が冒険者の肩書でリア充グループに入れば、南山の居場所は無くなる。

そうならばどうなるか。リア充グループではなくなり、俺や東西コンビといった元々のグループに戻ることもできず、他に親しい友人もいなかったアイツは孤立したに違いない。

一気に、クラスカースト底辺に都落ちだ。

一心不乱に成り上がりを目指していた時は、そんなことにも思い至らなかった。

かつて一方的に切り捨てた友人が、自分に仕返しに来た、そう南山が考えても不思議ではない。

結果、アイツは大会に出るといふ形で俺の排除に動いた。

……その結末は、知つての通りだ。

南山のやらかしたことはTVには放送されていない。あの日観覧に来ていたお客たちも、試合の様子を撮ることは番組側から禁止されていたため、SNSなどでも奴の醜態は流れていない。

つまり、このクラスに奴の起こした事件を知る者はいないということだ。

にもかかわらず南山は転校と言う道を選び、クラスメイト達も初めからいなかったようにふるまっている。

結局のところそれが、俺が絶対のものと信じていたクラスカーストの実態という奴なのだろう。

それに落胆も失望もないのは……自分でも少しだけ不思議だった。

『マロのターン。ドロー！ マロは魔石を8使用し、座敷童を召喚した。座敷童の【禍福は糾える縄の如し】！ プレイヤーは、魔石を2使用することで敵の攻撃を一度無効化するが、回避状態の敵に確実に攻撃を当てることができる！』

『イーストフィールドのターン！ ドロー！ リリスの特殊効果発動！ このカードは毎ターン、魔石を一個消費することでリリムを

一体呼び出すことが出来る！ 魔石を使用し、リリムJを召喚！
リリスの攻撃！ 【禍福は糾える縄の如し】！ 無効化されました。
リリムAの攻撃！ マロに1のダイレクトダメージ。リリムBの攻
撃！ マロに1のダイレクトダメージ。リリムCの攻撃！ マロに
1のダイレクトダメージ。リリムDの攻撃！ マロに1のダイレク
トダメージ。リリムEの攻撃！ マロに1のダイレクトダメージ。
リリムFの攻撃！ マロに1のダイレクトダメージ。リリムGの攻
撃！ マロに1のダイレクトダメージ』
『マロのHPが0になりました。イーストフィールドの勝利です』

「フアアアアツツク！！！」

俺は画面に表示された『YOU LOSE』の文字に吠えた。

――土曜日の休日。

俺は東西コンビと久しぶりにゲームセンターへとやってきていた。
俺たちがゲーセンに来た時もっぱら遊ぶのは、冒険者をモデルとし
たアーケードゲーム『カードマスター』だ。

本職の腕を見せてやるぜと意気込んで対戦を挑んだ俺だったが、
先ほどからフルボッコにされていた。

これで6連敗である。

コ……コイツ、恐ろしく強くなってやがる。いつの間に、リリス
なんてレアカードを……。トレーディングカードショップでも滅多
に入荷されないレア中のレアカードだぞ！

「ハッハッハ、現役冒険者に勝ってしまったぜ。自分の才能が恐ろ
しい」

ゲーム筐体の向こうから、得意満面の東野がやってくる。その顔は、憎たらしいほどにドヤ顔だ。
ぐぬぬぬぬ……。

「相変わらずマロは対戦系のゲーム弱いなあ。よくそれで大会を優勝できたもんだよ」

西田が呆れたように言う。

「うるせー！」

「マロはデツキを浪漫に傾け過ぎなんだって。そんなんじゃガチデツキに負けるに決まってんじゃーん」

ウケケケケと笑う東野。

「ウググググ！ もう一回だ、もう一回！」

「いや、負けた奴が抜けるルールだろ。次は俺と西田だって」

「そうそう、負け犬はさつさとどきな」

「いやだああ！ 譲りたくない、譲りたくないああい！」

「しょ、小学生かよ……」

引きずり降ろされるように椅子からどかされ、西田と東野の対戦が始まる。

東野負ける。東野負ける。東野負ける。と祈りながら東野の後ろから観戦していると。

「なあ、せつかくリア充グループに入れたのに、こつやって俺らと遊んでていいのか？」

ポツリ、と東野が言った。

「あん？」

「せっかくの休日なのに、四之宮さんとかと遊びに行かなくていいのかなーってさ」

「誘ってきたのはお前らだろうが」

「いや、そうなんだけどさ」

と東野は小さく苦笑した。

「リア充グループになるために冒険者にまでなったのに、いいのかと思ってさ」

「……な、何を言ってるんだい、東野君。ボクは将来プロになるためにだねえ」

「いや、そういう建前とかいいから」

動揺しながら誤魔化そうとする俺をバツサリ切る東野。

「高校入ってから毎日ツルんできたんだぜ？ お前の考えてることぐらいすぐわかるっての。南山の奴が冒険者になった途端、急にバイト始めちゃってさ。バレバレ過ぎて吹いたわ。言っとくけど、小野にばらされる前に俺らは知ってたんだぜ」

「……そうか」

そりゃ、バレるよな、と苦笑した。

やっぱ、あときはわざと知らないフリしてたのか。俺が冒険者なのを隠してたことを謝ろうとしたら、わざとらしく話を逸らしてきたからな。なんとなくそうじゃないかと思っていた。

そんなこと、謝る様な事じゃない。友達なのだから。敢えて言葉にするなら……そういうことなのだろう。

「でき、ぶつちゃけマロが冒険者になりたかったのってリア充グループに入って牛倉さんとお近づきになるためだろ？」

「ぶっ！」

「ハハ、やっぱそうか」

「いやいや、そんなことは。……ちなみに、どうしてそう思ったかお伺いしても？」

「いや、わからないでか。お前、筋金入りのおっぱい星人じゃん。牛倉さん、学年どころか学校で一番デカイ説あるし。まあ最近はロリコン説もあるけど」

「いや、別におっぱいだけ好きになったわけじゃないから！ あとロリコンもない。つか誰だ、それ言ってるやつ」

「ええ、ホントでござるかあ？ ぶつちゃけあの試合の動画見ると、蓮華ちゃんとデキてるようにしかみえないでござるよ？」

「いや、ないから。女神モードなら全然ありだけど」

「女神モードだと、恋人どころかただの信者にしか見えねーから。まあそれはそれとして、話を戻すけど。せっかく冒険者になって、大会で優勝して、人気者になったのに牛倉さんにアタックしなくていいの？ って話だよ」

「……………」

「もし、さ。俺らに遠慮してんなら別にいいんだぜ？ 南山の時は、俺らもちよっと失敗したけどさ、お前なら……………」

「バーカ」

軽く東野の頭を殴る。

「イテ」

「いいんだよ。俺はこうしてお前らとツルんでるほうが気楽なんだから」

「マロ…………へへ、なんだよ、お前ホモかよ」

「殺すぞー！」

もう一発東野を殴りながら、俺は内心で謝った。
ごめん、東野……。

実は俺、もう牛倉さんにアタック掛けてフラれた後なんだ……（
．．．）

あの後、試合が終わってすぐ、俺は牛倉さんのラインへとアタックをかけた。

クリスマス、俺と一緒に過ごしてくれませんか？ という奴だ。
その返信はこうだった。

『え、ごめんなさい。クリスマスは楓ちゃんと遊ぶから。その、急に言われても予定入ってるし……』

残念でもないし、当然の話であった。

むしろなんでイケると思ったのか、小一時間あの時の俺を問い詰めたい気分だ。

おかげで、教室で顔を合わせるたびに気まずい気まずい。

ああああ、なんである時ライン送っちゃったんだろう。大して親しくもない奴がクラスのライングループから急に個別ライン送ってくるのもキモイし、クリスマスの前日に誘いをかけてくるのも非常に識過ぎてヒク。きっと大会の優勝でハイになったせいだ。

マジで過去に戻るならあの時に戻りてえ……！

幸いなのは、牛倉さんがこのことを誰にも言いふらさなかったことか。

おかげで、俺はクラスのみんなに『大会で優勝した途端に勘違いしちゃった君』と笑われずに済んでいる。

牛倉さん、あなたは本当の天使です。これからはその見てるだけで幸せになるおっぱいを、遠目に見るだけで満足することにします。

……………まあ、結局のところ。

俺は冒険者となつてクラスカーストでは上位となつたが、夢であつたりア充にはなれなかった、ということなのだろう。

みんなに評価されることと、好きな女の子を振り向かせることは、似て非なることなのだと言ふやうく学んだのである。

「あー、負けたー！ 東野の増殖デッキ、ちょっと反則過ぎじゃね？ リリスとエキドナは反則でしょ」

俺同様、東野に敗北した西田がやってくる。

「そろそろダシてきたよな。次どこいく？ カラオケかボウリングでも行くか」

東野がそう背伸びしながら言う。

「お、いいね。つか、なんなら今日は徹夜で遊ぶか。誰かの家で泊まってさ」

俺がそう言うと、二人も目を輝かせた。

「お、マロ今日は乗り気じゃん！」

「じゃあ街で遊び終わったらウチ来いよ。ドンキでお菓子和ジュース買ってさ」

そんな風に盛り上がりかけたその時、俺のスマホが震えた。ちら

りと見ると、そこにはラインの着信が表示されていた。

その文面に、俺の心臓が高鳴る。

これは、いや、しかし、今東野たちと遊んでいる最中で……。

俺の中の天秤に、二つの重りが乗せられる。片方に乗るのは東西コンビ。もう片方に乗るのは、ラインの送り主。

天秤に重りを乗せた瞬間——後者がガクリと沈んだ。

すまん、東野、西田。

「すまん！俺、やっぱりここで抜けるわ！」

「はあ！？」

「突然なにごと！？」

「いや、へへへ、ちよっと四之宮さんから呼ばれちゃってさ」

俺はそう言ってラインの文面を見せた。

『今、ウチの女友達4人でカラオケしてるんだけど、来る？ P.S、
静歌もいるよ（笑）』

東西コンビはその文面を見てあんぐりと口を開けた後。

「ふ、ふ、ふ、ふっざけんじゃねえぞ！」

「ぶっ殺すぞ、オラァ！」

鬼の形相となって拳を振り上げた。

「ちよ、タンマタンマ！」

「うるせえ、この裏切りモンがあ！」

「つか俺らも誘えや！なにさらっと自分だけ抜け出してハーレム
作ろうとしてんだ！」

「冒険者になつたからって調子こいてんじゃねーぞ！」

うおおお、なんて殺気だ！

ハーメルンの笛吹き男以上の圧力！

に、逃げねば！ 俺は慌ててゲーセンを飛び出した。

「待てコラ！」

「ボコボコにして女子の前に出られない面にしてやるよ！」

———悪鬼と化した友人たちから逃げながら、俺はふと思った。

俺の人生で最も濃厚であつたこの激動の数ヶ月。その中心にいたのは、実は俺ではなく蓮華だつたのかもしれない、と。

俺が一発で蓮華たちを引き当てたのも。

ハーメルンの笛吹き男と遭遇したのも。

アムリタを手に入れたのも。

小野に冒険者バレして大会に出ることになつたのすら。

すべては蓮華が本来の力を取り戻すための流れだつたのかもしれない。

だとすれば、俺が大会に優勝してクラスのみんなに認められたのも、蓮華の幸運の御裾分けみたいなものだつたのだろう。

しかし……この一連の流れすら蓮華を取り巻く大きな流れのほんの一部だとしたら。

これから先どんな幸運と災難が俺を待っているのだろうか。

……なんてな。さすがに考え過ぎか。

ただ一つ確かなのは、俺がこれからも冒険者をやっていくということだけだ。

クラスカーストでの成り上がりを目指す中で、俺の情熱は気づかぬ間に冒険者の方へと移っていたのだろう。

故に、クラスカーストの実態を知っても落胆はなかったのだ。

もはや、クラスカーストもリア充もどうでもいい。

蓮華やカードたちと一緒に迷宮を冒険していく。

その方が、よっぽど面白くやりがいがあると……知ってしまったのだから。

……あ、いや、やっぱ、リア充にはなりたくない、かな？

おっぱいの大きくて可愛い彼女が……欲しいです。

「オラ、隠れてないで出てこいよ！」

「真っ裸に剥いてラインで流してやる！」

うおお、ヤベエ！ 現実逃避してる場合じゃなかった。アイツらは本気だ。このままじゃ社会的に死亡する！

街全体を舞台とした俺たちの鬼ごっこは、結局翌日の朝まで続いたのだった。

第二十四話 カーストトップ リア充（後書き）

【Tips】蓮華

カードの中には、迷宮の外であつても周囲に影響を及ぼす力を持つものが存在する。それらは“呪いのカード”とも呼ばれ、逆にマスターを操ってしまうものすらいる。

蓮華は、そういった呪いのカードの一つである。

座敷童のスキル【禍福は糾える縄の如し】は、いわば一種の運命操作の力を持つ。

相性の悪いマスターにカード化されてしまった蓮華は、自ら閉じられた心のスキルを発現させることで自分を手放させるよう仕向けた。ギルドに売られた蓮華はそこで相性の良いマスターが自分を手に入れるのを待つことにした。カードパックへと入れられたのも、お金を持っていなくとも相性の良いマスターが自分を手に入れられるようである。同じパックの中には、これまた自分と相性の良いカードたちが入れられた。歌麿が脅威の引きを見せたのも、自らの運によるものではなく蓮華による運命操作によるものである。

だが、無理な運命操作は因果律に歪を生み、それがハーメルンの笛吹き男というイレギュラーエンカウントに繋がった。しかしそれも乗り越えたことにより、不運は幸運へと転換された。

その幸運は、アムリタというキーアイテムの入手と、そしてそれを使わせるための舞台作りへと変換される。結果、蓮華は霊格再帰のスキルを取り戻すに至った。

これらはすべて無意識のうちに行われており、蓮華は自分の特性に一切気づいていない。

むしろ歌麿のことを「なんて浮き沈みの激しい奴だ。アタシがついてないと、すぐ死ぬなコイツ。しょうがねえ奴だ」とすら思っている。

なお……余談ではあるが、電車の中でウンコを漏らす呪いはバツチリ効いた。

TIPSまとめ イラストあり

【Tips】迷宮

ある時を境に突然現れた異空間。内部には危険なモンスターが蔓延る一方、魔法の道具や未知の金属など多くのリターンが存在する。迷宮によってその規模はまちまちだが、深部に行けば行くほど強力なモンスターが出現する。最深部には主と呼ばれる存在がおり、倒せばその難易度に見合ったリターンを得られる。

迷宮は年々増加しており、消滅させる方法も判明していない。いずれ、世界中を迷宮が埋め尽くすという終末論も存在する。

【Tips】モンスターカード

迷宮内で稀にモンスターが落とす謎のカード。モンスターたちを描いたイラストが描かれており、マスター登録をすることで自在にモンスターをカードから呼び出せるようになる。モンスターを呼び出している間、マスターへのダメージはすべてカードが肩代わりしてくれるため、迷宮攻略には欠かせないアイテムとなっている。モンスターは基本的にマスターの命令を聞いてくれるが、感情がある為嫌われると言うことを聞かなくなる。

弱いカードほどドロップ率が高く安価で、強いカードほどドロップ率が低く高価。

そして女の子カードは基本的に、需要の関係からどれも高額で取引されている。

【Tips】冒険者

迷宮の登場により新しく生まれた職業の一つ。初期投資に金がかかり命の危険がある反面、収入は高い。近年の冒険者ブームにより、その危険性を理解せず冒険者になる若者たちが増加している。

一ツ星から六ツ星の六段階でランク分けされており、三ツ星までをアマチュア、四ツ星からをプロと見なす風潮がある。

プロ冒険者は、迷宮攻略の収入の他に、TV出演によるタレント業や動画投稿による広告収入、モンスターコロシウムへの出演料と賞金など様々な収入源があり、荒稼ぎしている。

【Tips】ダンジョンマート

迷宮の登場と共に一気にシェアを伸ばしたコンビ二界の雄。今では、ダンジョンマートを見れば一目でそこに迷宮があるとわかるほどになっている。創業者の十七夜月社長はTV出演も多く、お祭り社長として有名。社長業よりTVの仕事の方が忙しいのではないかと言われるくらい、半タレント化している。過激な発言から、良くTwitterが炎上している。最初の炎上は、超美人のフランス人の奥さんとハーフの娘がいると発覚した時。

【Tips】迷宮内部

迷宮は、異空間となっており森林型、山道型、海辺型、坑道型、迷路型、墓地型とさまざまなタイプが存在する。また、季節・気候・時間帯が変化せず、持ち込んだ食べ物なども腐らないことが判明している。熟練の冒険者たちは、皆実年齢よりも若々しいことから、迷宮内部は時の流れが止まっているという説が有力。しかし実際に時が止まっているのなら動くことも不可能なはずなため、謎は多い。リア充冒険者たちは、この特性を利用して夏だろうが冬だろうがスキーにサーフィンと迷宮で季節のスポーツを一年中楽しんでいる。そしてたまに油断して死ぬ。

【Tips】ステータス

カードにはそのモンスターのステータスが表記されているが、その詳細については判明していない。戦闘力についても、力・速さ・

器用さ・魔力・頑丈などのさらに細かい能力に分けられているというのが有力な見方である。同様にスキルについても名前ぐらいしかわかっておらず、実際に使わせてみてその効果から考察するしかない。ギルドにはそう言ったデータが全冒険者から集められており、専用のアプリから情報を発信している。主人公もカードのスキルをそういったアプリなどから調べている。そのため、ハズレと思われるているスキルにまだ見ぬ力が眠っている可能性は大いにある。

【Tips】 迷宮の深さ

深ければ深いほど敵が強力となる迷宮は、その階層数によって大まかにランク分けされている。

- ・ Aランク迷宮：推定深さ101階以上 カードの召喚制限十二枚（マスター一人当たり）
- ・ Bランク迷宮：深さ51階以上100階以下 カードの召喚制限十枚
- ・ Cランク迷宮：深さ31階以上50階以下 カードの召喚制限八枚
- ・ Dランク迷宮：深さ21階以上30階以下 カードの召喚制限六枚
- ・ Eランク迷宮：深さ11階以上20階以下 カードの召喚制限四枚
- ・ Fランク迷宮：深さ10階以下 カードの召喚制限二枚

Cランク迷宮であればすべての階層でCランクモンスターが出現するというわけではなく、10階以下であればFランクモンスターしか出ない。

Aランク迷宮が推定となっているのは、未だAランク迷宮の最深層に人類が辿りついていないからである。

最深層には、その迷宮のランクよりワンランク上のモンスターが待ち受けており、それを便宜上“迷宮主”と呼んでいる。主はランクが一つ上なばかりか迷宮からバックアップを受けており、能力の強化や配下を召喚する権能を与えられている。

【Tips】イレギュラーエンカウント

全迷宮において常に一体しか存在しない特別なモンスター。本来の迷宮主を喰らい、それを知らずにやってきた冒険者を狩るという習性を持つ。戦闘力はその迷宮相応となるがスキルは弱体化しないこと、迷宮のランクを問わず完全ランダムに出現すること、一度最深部に足を踏み入れたらイレギュラーエンカウントを倒さなくては生きて帰れないことから、冒険者たちに畏れられている。

迷宮もカード同様、高ランクほど数が少なくなるためイレギュラーエンカウントは主に低ランクの迷宮に現れる傾向がある。そのため、イレギュラーエンカウントの被害に会うのも新人が多くなるため、新人殺しの異名も持つ。

なお、イレギュラーエンカウントのカード化に成功した例は報告されていない。

【Tips】カードの名付け

カードには固有の名前をつけることが出来る。名付けされたカードは初期化することができなくなるため、売却が不可能となる。一方で、ロストしてもそのカードの魂を宿したソウルカードが残され、同種族・同性の未使用カードを消費することで復活させることができるようになる。

カードをカード以上に大事に思ってしまったマスターへの救済措置。

冒険者の間では、カードに名付けするマスターは「恥ずかしいヤツ」のレッテル張りをする風潮がある。

これはカードの名付けは流通を妨げるということから一部の冒険者が意図的に流したものの。

【Tips】カード化

冒険者ギルドでは、特殊な魔道具を用いて物品をカード化するサービスを行っている。小さな指輪だろうが一軒家だろうが一回百万でなんでもカード化してくれる。カード化されたモノは、モンスターカード同様所有者以外は召喚することができなくなるため、財産の保護などにも使われている。主人公のように転移の魔道具など持たない一般の冒険者たちは、このサービスで大量の物資をカード化し、泊まり掛けで深い階層へと潜っている。

なお、このカード化の魔道具を入手した際は絶対にギルドに報告し売却しなければならぬという法律がある。もしも隠し持っていたことが発覚した際は、即逮捕されて公安の厳しい取り調べを受けることになる。

【Tips】魔道具

迷宮からは多くの魔道具が出現する。傷や病を癒せるポーションはその最たる例であり、他にも魔法が使えるようになる杖、聖剣、魔剣、空飛ぶ絨毯、無限にパンが出てくるパン籠など夢のようなアイテムが存在している。しかし中には、猿の手のように不幸をもたらす魔道具も確認されている。

基本的に高ランクの迷宮ほど良い魔道具が出現するが、低ランクの迷宮でも激レアの魔道具が出現することもある。その逆も有り、高ランクの踏破報酬で【大人のおもちゃ】が出たこともある。

【Tips】カードの価格

カードはランクが上がれば上がるほどドロップ率が下がり、またそれを取得できる者も限られてくるため市場価格は跳ね上がっている。Dランクカード以下のカードはだぶついている為、一律市場価格の10%と低いが、Cランクカードからは買取価格も跳ね上がる。

そのためDランクカードをギルドに売らず他の冒険者に売る者も多いが、それによるトラブルも多発している。ギルドはそういった個人的な取引に関し黙認しているが、一方でいかなるトラブルにも介入しない。

また、ギルドでカードを買った場合は、年末の確定申告において経費として計上することができるが、他の冒険者から買ったカードは経費として計上することもできない。これは魔道具類も同様である。

- A 市場価格：時価（一般人の所有不可）
ギルドでの買取価格：不明 ドロップ率：不明
- B 市場価格：1億～100億
ギルドでの買取価格：オークション形式 ドロップ率0.05%
- C 市場価格：1000万～1億
ギルドでの買取価格：定価の50～80%程度 ドロップ率0.1%
- D 市場価格：100万～1000万
ギルドでの買取価格：買取価格10万～100万円 ドロップ率1%
- E 市場価格：10万～100万
ギルドでの買取価格：買取価格1万～10万円 ドロップ率5%
- F 市場価格：1万～10万
ギルドでの買取価格：買取価格1000円～1万円 ドロップ率10%

【Tips】スキルオーブ

迷宮の宝箱からは、スキルオーブと呼ばれる特殊な魔道具が出現する。スキルオーブはカードに与えるだけでお手軽に新しいスキルを覚えさせることができる。もしもスキルが被った場合、スキルの経験値として吸収され、スキルのランクアップの可能性を上げてく

れるため決して無駄にはならない。

もし売ることが出来れば大金となるが、迷宮の外へと持ち出そうとすると消えてしまうため売ることはできない。また、決して良いスキルばかりが出るとは限らないため、博打の面もある。

【Tips】アムリタ

ポーションの中には、傷や病を癒すだけではなく若返りや長寿をもたらすモノも存在している。アムリタもその一つで、死んでさえいなければ脳みそだけの状態からでも五体満足に治してくれる治癒の力と、一歳ほどだが若返りの力を持つ。

似たようなものとして、万病を癒し寿命を十年長くしてくれるエリクサー、最高の美酒であり呑めば十年年を取らないソーマ酒、不老長寿となる仙丹などが存在する。

かつて仙丹が発見されその効果が鑑定された際、オークションに出され十兆円の値が付いた。落札したのはアメリカの大富豪だったが、その日の内に暗殺され仙丹は何者かに奪われた。また、仙丹を発見した冒険者も幸福にはならなかった。

【Tips】モンスターコロシム

冒険者たちがカードを使って戦うさまを観戦する新しい娯楽。プロ冒険者が互いのカードがロストするまで戦うデスマッチ、女の子モンスターオンリーのキャットファイト、複数の冒険者が一人になるまで戦うバトルロワイヤル、数十人の冒険者が赤軍・白軍に分かれて戦う軍団戦など、様々なコンテンツがある。

残酷だ、人道に反しているなどの批判はあるが、このモンスターコロシムが冒険者ブームの火付け役となったのは誰の眼から見ても明らか。

飽食の時代、民衆はやはりサーカスを求めていたのかもしれない。

【Tips】感想

作者のやる気に直結する栄養素。

人間は食べ物がなくても「感動」を食べるだけで生きていけるらしいが、作者は「感想」がなければ生きていけないか弱い生物なのである。

感想お待ちしております。

【Tips】カードのランクアップ

カードは、上位のカードを消費することでランクアップすることが出来る。ランクアップのメリットとして、元々使っていたカードの容姿・記憶・性格を引き継げることが挙げられる。また使い込み次第では向上した戦闘力とスキルも受け継ぐことが出来るが、これは運にも左右される。ランクアップするためには、未使用（初期化されている）かつ、同系統で性別が一致している必要がある。

例：グレーラー ヴアンパイア、クーシー ライカンスロープ。

【Tips】迷宮の踏破報酬

迷宮の踏破報酬は、ランクが上がるごとに一層当たりの値段は上がる。

- ・ Aランク迷宮：踏破出来たら100億円。
- ・ Bランク迷宮：階層×100万。
- ・ Cランク迷宮：階層×10万。
- ・ Dランク迷宮：階層×3万。
- ・ Eランク迷宮：階層×2万。
- ・ Fランク迷宮：階層×1万。

踏破報酬をメインの収入とするプロの冒険者を、グラディエーターと区別してプロフェッサーと呼ぶこともある。彼らはお金以上に迷宮という存在の謎に魅了され、それを解き明かさんとしている者が多いからだ。プロフェッサーと呼ばれるようになった所以は、実

際に大学の客員教授をやっている者もいることから。

【Tips】モンスターのランク

モンスターはその初期戦闘力によって大まかにランク分けされている。また、ランクが高いほどスキルも凶悪化していく傾向にある。モンスターのランクはその土地や文化に強い影響を受け、同じ種族のモンスターであっても国によってランクが変わる。日本においては妖怪は強化されて出てくる。例えば座敷童は日本ではCランクだが、西洋諸国ではEランクモンスターである。

なお、Eランクの座敷童でCランクカードの座敷童を復活させることはできない。

日本の寿司とニューヨークの寿司は違う。

【Tips】鎧化

名作漫画「ダイの大冒険」において登場する鎧の武器を装着するための呪文。剣でありながら鎧、しかも呪文を無効化するという設定は、恐ろしくロマンに溢れるものであった。

が、これはそれとは関係ない。

モンスターの中には、武具として他のモンスターやマスターが装備できる者も存在する。とりわけ人気なのが鎧化のスキルを持つモンスターたちであり、ダイレクトアタックを防げるということからデッキに組み込む冒険者も多い。

ダイレクトアタックが即敗北に繋がるモンコロは勿論のこと、マスターへの攻撃がパーティー全体への大ダメージを意味する迷宮内においても、鎧化を持つモンスターは重要度が高い。

【Tips】リンク

カードとマスターの間には、見えないラインが存在している。マスターに対するダメージの肩代わりなどはこのラインを介して行われている。リンクはそのラインを利用して感覚や感情の共有を行う

技術である。

これにより、カードたちに迅速な指示が出せるようになる他、カード間の連携能力が飛躍的に向上する。

しかしそれらはまだリンクの入り口に立ったに過ぎない。

リンクにはさまざまな可能性が秘められており、リンクを使えない、使いこなせない冒険者はただカードを所有しているだけとも言える。

【追記】

Q：なんでリンクが一般に知られてないの？

A：天空闘技場で念の存在が知られていないのと同じ理論。

主人公は、リンクの存在は知りませんでした。プロはまるで手足のようにカードを操ることが出来る。「同じカードを使っても、プロの方が圧倒的に強い」ということぐらいは知っています。

ではなぜリンクという単語を知らなかったのか。

大きな理由は三つあって、一つは、リンクが基本的に秘匿されているから。カードの遠隔操作が可能となるリンクは、一見モンスターへの襲撃に見せかけて他の冒険者を襲うことも可能となる為、一般には秘匿されています。このTVも、リンクについての情報はカットして放送されますし、SNSなどでリンクという単語を使うと不適切な単語として投稿できなくなります。ではなぜ重野さんがそんなことを普通に言っちゃったのかというと、彼が本職の実況ではないからです。重野さんも、このあとギルドで上司からしこたま怒られます。

二つ目の理由。それは、リンクを使える冒険者の数は圧倒的に少ないから。一つ星や二つ星の、ただカードを持つただで満足している冒険者たちは、リンクの存在を知っても「なにそれ、それどうやって使うのよ。俺使えねえんだけど、デマじゃね？」となってしまう。リンクの存在を知らないままグラディエーターになり、

モンコロでフルボッコにされる者も結構多く、それを人は「洗礼」と（以下略）。

三つ目の理由。これが最大の理由なのですが、……ぶっちゃけモンコロはリンクの存在を知らなくても楽しめるからです。現実のプロスポーツを見てても、選手たちの超高度な専門技術を知らなくても、雰囲気を楽しめます。これが、主人公や観客たちがリンクの存在を知らなかった最大の理由です。プロが手足のようにカードを使うのも、経験の差だろうと思っていました感じですね。

……そんな感じの裏設定で適当に書いていたのですが、微妙に矛盾が生じるし、本編内で説明不足過ぎるので、あとで適当に書き直します。

なので、今は「天空闘技場で念が知られていないのと同じか」ぐらいの感覚で受け入れてくださると嬉しいです。

【Tips】零落せし存在

一部のモンスターの中には、本来の格よりも零落してこの世に現れるものがある。零落スキルを持つカードが、それである。それらのカードに、「名前」とイベントアイテ……もとい、「固有の魔道具」を与えることで、本来の霊格に近づけることが出来る。

【Tips】蓮華

カードの中には、迷宮の外であっても周囲に影響を及ぼす力を持つものも存在する。それらは“呪いのカード”とも呼ばれ、逆にマスターを操ってしまうものすら存在する。

蓮華は、そういった呪いのカードの一つである。

座敷童のスキル【禍福は糾える縄の如し】は、いわば一種の運命操作の力を持つ。

相性の悪いマスターにカード化されてしまった蓮華は、自ら閉じられた心のスキルを発現させることで自分を手放させるよう仕向けた。ギルドに売られた蓮華はそこで相性の良いマスターが自分を手

に入れるのを待つことにした。カードパックへと入れられたのも、お金を持つていなくとも相性の良いマスターが自分を手に入れられるようにである。同じパックの中には、これまた自分と相性の良いカードたちが入れられた。歌麿が驚異の引きを見せたのも、自らの運によるものではなく蓮華による運命操作によるものである。

だが、無理な運命操作は因果律に歪を生み、それがハーメルンの笛吹き男というイレギュラーエンカウトに繋がった。しかしそれも乗り越えたことにより、不運は幸運へと転換された。

その幸運は、アムリタというキーアイテムの入手と、そしてそれを使わせるための舞台作りへと変換される。結果、蓮華は霊格再帰のスキルを取り戻すに至った。

これらはすべて無意識のうちに行われており、蓮華は自分の特性に一切気づいていない。

むしろ歌麿のことを「なんて浮き沈みの激しい奴だ。アタシがついてないと、すぐ死ぬなコイツ。しょうがねえ奴だ」とすら思っている。

なお……余談ではあるが、電車の中でウンコを漏らす呪いはバツチリ効いた。

↓第一章終了時点のステータス↓

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】650

【先天技能】

・禍福は糾える縄の如し：幸運を災いに、災いを幸運に。対象に幸運と不幸を付与できる。マスターへの好感度で出力増減。

・かくれんぼ：姿と気配を隠すことができる。透明化、気配遮断を内包する。

・中等回復魔法：基本的な回復魔法を使用可能。

【後天技能】

・霊格再帰：一時的に上位ランクにランクアップできる。一度使用すれば一日から数日のインターバルが必要となる。戦闘力が常時1000向上する。

・自由奔放：何にも囚われないありのままの心。自由行動へのプラス補正、精神異常への耐性、一部の拘束スキルの無効化。

・中等攻撃魔法：基本的な攻撃魔法を使用可能。

・詠唱短縮：魔法系スキルの工程を省くことが出来る。熟練度により効果向上。

・魔力回復：魔力の回復速度が上がる。

・友情連携：互いに友情を持つ者とスキルを連携することが出来る。

・初等状態異常魔法：簡単な状態異常魔法を使用可能。

『霊格再帰時』

【種族】 吉祥天（蓮華）

【戦闘力】 1050（初期戦闘力750＋成長分200＋霊格再帰100）

【先天技能】

・吉祥天の真言：吉祥天の美と富と豊穡と幸運の権能を使用可能。

・二相女神：半身とも呼べる別の神の力を借り、変身することが出来る。

・アムリタの雨：不死の妙薬であるアムリタの雨を降らすことが出来る。ありとあらゆる傷や病、呪いを回復する。ただし若返り効果はなし。高等回復魔法を内包。

【後天技能】

・霊格再帰

- ・自由奔放
- ・高等攻撃魔法：高度な攻撃魔法を使用可能。
- ・詠唱破棄
- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・高等状態異常魔法：高度な状態異常魔法を使用可能。
- ・かくれんぼ

【種族】グーラー（イライザ）

【戦闘力】200（MAX！）

【先天技能】

- ・生きた屍：死に最も近く死から最も遠い存在。頭部を破壊しない限り消滅しない。状態異常耐性、知能低下を内包する。
- ・火事場の馬鹿力：肉体の限界を超えて力を振るうことができる。使用中反動を受ける。
- ・屍喰い：血肉を喰らい糧とする。捕食により自己再生。

【後天技能】

- ・絶対服従：魂の誓約であり呪い。どのような命令であっても実行する。命令に対する極めて強いプラス補正。
- ・性技：性的技術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。
- ・フェロモン：フェロモン物質を認識し、自在に操ることが出来る。
- ・奇襲：攻撃時、相手に気づかれていない場合ダメージにプラス

補正

- ・静かな心：感情を抑制し冷静さを失わない心。精神異常への強い耐性、思考能力の向上。
- ・庇う：仲間の元へ瞬時に駆け付け身代わりになることができる。使用中、防御力と生命力が大きく向上。

- ・精密動作：より正確な動作を可能とする。
- ・演奏：演奏技術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。
- ・畏解除：畏の解除に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。

【種族】クイーシー（ユウキ）

【戦闘力】300（MAX!）

【先天技能】

- ・妖精の番犬：妖精たちの守り手。パーティー内に妖精族がいる際、ステータス向上。妖精族を攻撃する際、ステータス減少。気配遮断を内包する。
- ・集団行動：群れの中で生きる習性。集団での行動に対するプラス補正。

【後天技能】

- ・忠誠：仕えるべき主を見出した証。忠誠心に応じてステータスの向上。
- ・小さな勇者：詳細不明。
- ・本能の覚醒：野生の本能を解放する。理性と引き換えに身体能力を向上させ、同時に精神異常への耐性を下げる。
- ・気配察知：五感を強化し、隠密系スキルを見破りやすくする。

【種族】エンプーサ（メア）

【戦闘力】205

【先天技能】

- ・吸精：対象の魔力と生命力を吸い取り蓄えることが出来る。
- ・夢への誘い：強力な眠りの魔法を使用可能。

・三種の変化：美女の姿から犬、牛、驢馬の三つの姿へと変身できる。

【後天技能】

- ・小悪魔な心：小悪魔的な性格。気まぐれに命令を無視する。自由行動に対するプラス補正。
- ・一途な心：想い人に対する一途な心を持つ。恋愛対象への行動に強いプラス補正。
- ・友情連携：互いに友情を持つ者とスキルを連携することができ
- ・初等魔法使い：簡単な魔法をすべて使用可能。

Twitterで『やまだやまだ@yamada | yamada44』様より頂いた蓮華のイラストです。
イメージ通り過ぎてヤバイ。

<i365966—21711>

二枚目！

<i416659—21711>

こちらはイライザのイラスト。

<i366691—21711>

金髪バージョン

<i366962—21711>

メア、インバージョン。

< i 3 6 8 3 2 8 | 2 1 7 1 1 >

閑話 バレンタインデー

2月14日、バレンタインデー。

それは、非モテ男子たちにとって、クリスマスに並ぶ悪夢の日。男としての魅力が、チョコの数というダイレクトな数字となって表されてしまう日。

唯一の幸いは、最低値が0であり、マイナスがないことか。

スーパーには1か月以上前からバレンタインデー用のチョコが並び、ちよつと甘いものが食べたいなとチョコを買うだけで、レジの女の人から「あ、この人バレンタインデー用の偽装に自分でチョコ買ってる」と思われてしまう（被害妄想）。

同じ教室の中で、人生でチョコを一つも買ったことがないものがある一方、その反対側では食いきれないほどのチョコを買っている者もいる。そんなこの世の不条理を現したかのような光景を、俺は毎年のように見てきた。

無論、俺はもらえない側の人間である。

そんな、普通に学校に行くだけで正気度が削れていくような悪夢の日が、今年もやってきた。

『今日はバレンタインデー。コンビニなどではバレンタインデー用のチョコをたくさん並べています。学校に行く途中でチョコを買っていく女性の姿もチラホラ見えますねー』

……チツ。

俺は、TVのニュースを見て小さく舌打ちをした。

朝から不快な思いをさせやがって。

何がバレンタインデーだ。チョコ会社の流した嘘に騙されやがっ

て。海外じゃあ、バレンタインデーは男性が女性に感謝の気持ちを送る日なんだぞ。

それを、告白イベントに変えやがって。非モテにとっちゃあこんな酷薄なイベントはないぜ。

……はあ、学校行きたくねえ。

「おにーちゃん」

ため息をついていると、ニンマリと笑みを浮かべた妹が近づいてきた。

「はいっ、バレンタインデーのチョコ」

「おお、ありがとう！」

こうして毎年愛がくれるチョコが、俺が貰える唯一のチョコだ。しかも結構手の込んだ手作り。

このチョコのおかげで、真正銘ゼロ個のクラスメイト達にちよつとだけマウントを取ることが出来るのだ。特に西田なんかはこのチョコに平気で一万円位出そうとするだろう。

俺が礼を言いながらチョコを受け取るうとしたら、サッと愛が手を引っ込めた。

「……なんだ？」

「私、誕生日プレゼントに欲しい物があるんだあ」

甘えるような上目遣いをする愛に、俺は来たか、と身構えた。

これが、このバレンタインデーチョコの対価だった。

愛の誕生日は3月14日。ホワイトデーなのだ。

この俺の妹とは思えないほど愛らしい少女は、いろんな男の子にチョコを配っては、誕生日プレゼントという名目でいろんな貢物を

受け取っているらしい。

ホワイトデーのお返しとなると気恥ずかしさがあったって返礼が出来ない男子たちも、誕生日という名目があればお礼が出来る。

まったく、男に貢がせるために生まれてきたような存在だった。今から将来が恐ろしい。

俺はため息を吐くと言った。

「去年は、ゲームのソフトだったっけ？ 今年は何んだよ」

「えへへへ、これ！ これが欲しいなあ〜なんて」

「どれどれ？ ……ブツ！」

愛が広げた雑誌のページを見て、俺は吹き出した。

それは、ティファニーのネックレス特集だった。どの商品も10万を超えている。

「おまつ、さすがにこれはねーだろ！」

小学生が持つモンじゃねーぞ！

「え〜、お兄ちゃん今お金持ちじゃん」

「そういう問題じゃないし、入った分カード代で消えてんだよ！

つか、ガキがこんななんもってどうすんだ」

「もちろん、クラスみんなに自慢するんだ！ ウチのお兄ちゃんはこの高いのでもすぐ買ってくれるんだよ〜って」

「はあ………」

思わずため息が出る。まったく、この思考回路、完全に俺の妹だぜ。見た目が似ていないと言われる俺たちだったが、こういうところでは血の繋がりを感ぜずにいられた。婚約指輪に給料三か月分どころか年収分を要求したという母親の血である。

「いくらなんでも無理。さすがに危険すぎるわ」

金額以上に、子供がこんなものを見せびらかすという危険性が問題だった。

クラスメイト全員が理性的なわけじゃあないだろう。必ず盗んだりする奴が出てくる。場合によっては教師ですらあり得るだろう。体育の時間、水泳の時間、いくらでも盗むチャンスはある。

なにより、ガキの内から――兄からとはいえ――男からのプレゼントを見せびらかすなんて、健全じゃない。

贈り物の価値は値段じゃないとちゃんと教えてやらねば愛の将来は『嬢』まっしぐらだ。

俺はかつて蓮華たちレアカードをクラスメイト達に見せびらかそうとしていたことを棚に上げ、妹を説教した。

すると愛はぷくぷくと頬を膨らませ。

「むく、じゃあファンタジーランドジャパン行きたい！ ミキちゃんとかカナちゃんとかく仲の良い子全員で連れてって？」
「む」

そう来たか。ティファニーのネックレスに比べて大分子供らしいもつとも、値段はあまり変わらなそうだが。

ファンタジーランドジャパンとは、実際にモンスターたちと戯れることができるのが売りの遊園地である。ダンジョンマートのグループ会社で、かの鼠の王国を差し置いて現在国内一位となっているほどの巨大テーマパークだ。通称、FLJ。

ユニコーンに乗れるメリーゴーランド、本物のレイスやヴァンパイア、フランケンシュタインが出るお化け屋敷、マーメイドたちの歌と踊りのプールショー、シルキーやドラゴンメイドたちによるメイド喫茶、サキュバスによるマツサージ店（健全）に、ウィッチと

第に二人乗りして襲い掛かるドラゴンから逃げ回るジェットコースター、冒険者を体験できる巨大迷路などなど。

まさに幻想と夢の国となっている。さまざまなモンスターたちによる夜のパレードは、それだけを見に来る客もいるくらいだ。

ちなみに、例の遊園地と違ってちゃんと東京にある。

そのため、連れていくこと自体は問題ないのだが……。

「仲の良い子全員つてどれくらいだよ？」

「えーとお……20人くらい？」

「多い多い多い！ お前のグループ何人くらいだよ！」

普通4、5人くらいだろ！ クラスの半分以上じゃねえか！

「私、女子とはみんな仲良しだし、男子とも友達多いからこんなもんだよ」

「コミュ力お化けかよ。いくら小学生とは言え、俺が愛くらいの年だった時はもつと男女の垣根があったぞ。」

逆を選ばれなかった十数人はなんなんだ、ってレベルだ。

「もつと減らしてくれ」

「ん〜、じゃあ私入れて5人くらいかなあ。それ以上は無理。友情が壊れちゃう」

五人か。一日パスポートで5万。まあ、出せない額じゃないな。思い出を買ってやると思えば……惜しくはないか。

「しょうがねえなあ」

「やった！ お兄ちゃん大好き！」

「随分都合の良い大好きだな」

俺は苦笑しながら抱き着いてくる愛を受け止めた。

……最初に大きな要求をして徐々にハードルを下げていく手法をドア・イン・ザ・フェイスという。

愛が、このテクニクを使ってきていたということに気付いたのは、家を出てからのことだった。

……まさか、愛が心理学のテクニクを使ってくるとはなあ。

登校中、俺は妹の成長ぶりに複雑な思いを隠せなかった。

いや、ドア・イン・ザ・フェイスは交渉術の初歩だ。誰だって無意識に使っている。それを考えれば不思議じゃないか。俺だってガキの頃、最初にゲーム機ねだって、最終的にソフトを買ってもらったっけ。

そんなことを考えていると、前方に東西コンピの姿を見かけた。

「おっす、おはよう！」

「……マロか」

「おはよ……」

俺の挨拶に、二人はどんよりとした目を向けてきた。

「いや、暗すぎだろ。気持ちわかるけど」

そう言うと、二人はカッと目を見開いた。

「いや、今のマロに俺らの気持ちはわからないね！」

「ああ、天才冒険者様はさぞやチヨコを貰うんでしょっねえ！」

「あのなあ……」

俺は頭を抑えながら言った。

「言っておくが俺は確かに今ちょっとした有名人だよ。学校内に限るけどな。だがそれとリア充はイコールじゃない」

あん？ と疑問符を浮かべる二人に俺は簡単に説明してやった。

「思い出してみろ。南山の奴はカーस्टトップに入ったが……彼女は出来たか？」

「む……たしかに」

「そうか。クラス内の力関係と、モテるのは別の話か」

「わかったようだな……」

俺は微かな自嘲を浮かべた。俺も、それに気づかずこの一年随分とから回ってしまった。

最初からそれに気づいて牛倉さんにアタックしていたらもしかしたらクリスマスも……いや、それはないか。

自分に何の自信もなかった頃の俺がアタックしても彼女は振り向いてくれなかっただろう。それに、クラスの連中にも身の程知らずと攻撃を受けたはずだ。

なかなか人生ってのは難しいな。

「でもよお、やっぱりマロは俺らとは違うぜ。だって、少なくとも愛ちゃんからは貰ってるんだろ？」

西田が恨めしそうに俺を見る。

「まあな……でもその対価は、今年はデカくついたぜ」

「愛ちゃんのおねだりなら可愛いもんじゃん。俺ならなんでも聞いちやうね」

「それが愛の友達数人をFLJに連れていくことでもか？」
「ファンタジーランドか、そりゃキツイな」

東野が苦笑を浮かべる。ところが、西田は険しい顔を浮かべた。

「おい、愛ちゃんの友達数人って言ったか？」

「あ、ああ」

「それって当然、女の子だよな？」

「……………だから？」

話のオチが読めた俺は、半目で西田を睨んだ。

「だから？　じゃねーよ！　小五のJS数人と遊園地だあ！？　どんなハーレムだよ！　お返しどころかそれがご褒美じゃねーか！」

「お前と一緒にすんな！　俺は巨乳派なんだよ！」

「嘘つけ！　知ってんだぞ、実はお前が隠れロリコンだってことはな！」

「え、マジ？　そうだったの？」

西田のとんでもないレツテルに、東野が驚いた顔で俺を見る。俺は慌てて否定した。

「ちよ、ちげえよ！」

「嘘だ！　じゃあ蓮華さまとメアさまのことはどう説明するつもりだ？　ええ？　あんな極上のロリたちをハーレムに入れておいてよ
お」

こいつ、蓮華たちを様づけで呼んでいたのか。
ってそんなことより…………。

「俺のパーティーはロリだけじゃなくお姉さん系とか動物もいるだろうが。あと、ハーレムじゃねえから……」

後半だけはちよつと語尾が弱くなる。

俺がいくら主張しようとうちのパーティーはハーレム状態だし、俺も若干それを意識して仲間を入れていたからだ。

……やっぱ、女の子モンスターだけのパーティーって男の夢だよね？

それがわかっているのか、二人の眼も冷たい。

「つか、一度でいいから蓮華様とメア様に会わせてくれよー」

「俺もイライザさんとか鬼人のお姉さんに会ってみたいな」

ロリコンの西田に加えてお姉さんフェチの東野までそう言うてる。

「まず冒険者になってくれ、迷宮じゃないと会えないんだからな」

俺がそう言つと、西田がニヤリと笑った。

「いーや、そうでもない。カードと会えるのは迷宮だけじゃないだろ？」

「あん？」

西田の言葉に眉を上げる。

迷宮以外でカードを使用する方法なんて、専用の魔道具を使うしかない。そしてそういった社会的混乱を巻き起こしかねないものはすべて国が管理している。

つまり、迷宮以外ではモンスターとは会えな……まさか！

「気づいたようだな。そう、FLJならモンスターを呼び出して連れ歩くことが出来るのだよ！」

「く、そう来たか」

FLJでは、カードからモンスターを呼び出すことが許可されている。むしろ、推奨されている。FLJのコンセプトが、モンスターと触れ合える国であり、客の連れているモンスターも客寄せに使えるからだ。

その代わりマスターは特殊な腕輪をつけることを強制される。モンスターが他人に危害を加えられなくなる魔道具だ。正確に言うと、モンスターが他人に与えたダメージが、すべて自分のマスターに向かってしまうという魔道具。こうすることによって、マスターに危害を加えられないカードは、自動的に他者に攻撃できなくなるといふ仕組みである。

ここまでくれば、西田の言いたいこともわかってくる。

「マロ……いや歌麿様！俺も、一緒にFLJに連れてってください！」

「え？駄目だよ？」

俺は即答した。

何いってんでしょうね、この豚さんは。

「そう言わずに！なんなら愛ちゃんの友達の分のチケット代、俺が半分出すから！」

「たとえ全額出すとしてもお前を女子小学生の近くには寄せねーよ？」

と、そこで思わぬ援軍が西田に現れた。

「まあまあ、そう言わずに、俺らもFLJに連れてってくれよ。ちゃんと自分の分は出すからさ」

「東野、お前もかよ」

「俺もイライザさんに会ってみたいんだよ」

「言っとくけど、イライザはお前の期待する包容力のあるお姉さんじゃねえぞ?」

「いや、単純に見た目が好み」

「なんにせよ、無理なもんは無理。つか、妹たちになんて説明するわけ? あっちは子供同士で遊びたいと思ってるのにそこに高校生が混じるのはどうなのよ。俺だって、引率程度で、あんまりでしゃばるつもりはないぞ」

「そう言わずにさあ、俺たちはマロのカードを一目生で見たいんだって!」

「蓮華様たちは俺たちが接待してさ、マロはJSたちの引率って感じでどうよ」

「しっつけな〜」

俺が突っぱね続けていると、東西コンビは俺をおだてる方向にチエンジし始めた。

「大会にも優勝した天才冒険者の自慢のカードが見てみたいな〜」

「よっ、未来の億万長者!」

「マロのちよっといいとこ見てみたい〜」

「ハイハイハイ!」

あからさまにヨイショしてくる二人だったが、学校に近づいていくにつれ口数が減っていった。

なぜならば……。

「おはよ、マロくん。はいこれ、チョコ」

「あ、ああ……ありがとう」

「あたしもー。お返し、期待してるから！」

「はは……なんか考えとくわ」

すれ違ったクラスの女子たちが、小さなチヨコを渡してきたからだ。どれも手作りか高そうな奴である。

な、なんだこれは……。

人生で初めての現象に戸惑いが隠せない。

いや、理由はわかってる。言葉通り、お返しを期待してるのだから。学生の収入をはるかに超えている俺にとりあえずチヨコを投資しておこうというつもりなのだ。

だが、これは……。

チラリと友人たちの様子を窺う。

「……マロにはチヨコを渡して俺らには挨拶すらしないうってどういうこと？ 義理チヨコはおるか義理の挨拶すらないの？」

「落ち着け、FLJに行くまでの我慢だ……それが終わったら……」

冒険者と言えど迷宮の外では無力……」

二人は今にも人を殺せそうな目でブツブツと呟いている。

目の前で自分と同格だったはずの友人がチヨコを貰い続けているのだから無理もない。

逆の立場ならオレもそうなるだろう。

それでも二人はFLJに連れて行ってもらうためか、怨念を内に抑え込んでいた。

「うおー！」

昇降口について、ロッカーを開けた俺は中にいくつも入ったチヨコやクツキーを見て驚きの声を上げた。

十個近く入ってる。どれも違うクラスや学年の娘のもののようにだ。恋愛感情と言うよりは、ファン的なもののように、俺へではなく蓮華たちへのものもかなり混じっている。

だが、靴箱を開けたらそこにプレゼントと言う漫画みたいなシチコエーションにちよつとテンションが上がった。

『……………』

一方、東西コンビは憎しみで人を殺せたらと言う眼をしていた。もはや完全に無言で無表情なのが余計怖い。そこへ…………。

「あれ、マロじゃん」

「おはよ、北川君」

「あ、おはよう」

四之宮さんと牛倉さんら我がクラスの二大美少女が現れた。

『お、おはようございます！』

なぜか敬語でビシツと挨拶する東西コンビを、四之宮さんは「なんだ、こいつら」という眼で見ると、俺のロッカーを覗き込んだ。中身を見てニヤ〜と意地悪く笑う。

「へえ…………マロのくせにモテモテじゃん」

「え？ そうなの？ わ、確かにチョコで一杯！」

四之宮さんが俺の脇を肘で突き、牛倉さんが眼を丸くする。

「いやぁモテてるっていうより、応援的なあれだよ。蓮華たちへの

も混じってるし」

俺はなぜか慌てながら二人へと言いつていた。

「ふうん？ ま、いいや。はい、これ」

「え？」

俺は四之宮さんから渡された可愛くラッピングした袋を見た。

「あ、私も」

さらには牛倉さんからも追加される。

「……………」

こ、これは一体なんだ？ まさか、爆弾……ってんなわけねえ。ならば毒？ ……ま、まさか、チョコ、じゃない、よな？

手が震えてきた。こんなことがあっていいのか？

俺に、二人がチョコ？ え？ 冒険者ってこんなすごいのか？ ヤバくない？

拳動不審となる俺に、四之宮さんが笑う。

「ホワイトデー、気合入れといてよね」

「あはは、私はあんまり気にしなくていいから」

そうして二人は教室へと向かってしまった。

俺はしばし、あり得ない出来ごとにその場に立ちすくんでいたが。

「——よお、マロ」

「言い残すことはあるか？ ああ、残念ながらそれを喰う時間は与

えないぜ？」

ポント、二人の修羅の手が俺の肩に乗せられる。
軽く置かれただけのその手は、なぜか凄まじい重力を纏っていた。
振り返り、二人の眼を見て確信する。

これは……ヤバイ。

なにがヤバイって、俺が二人の立場なら絶対に手加減しないとい
うのがヤバイ。

俺たちは互いに弱みを知り合っている。

もし、俺の秘密をバラされたら……明日から俺は女子にゴキブリ
を見る眼で見られるだろう。

そうなった場合、俺も二人の秘密を暴露するだろうが……今の二
人の眼はそれをも覚悟した者の眼だった。

このままでは、コイツラの自爆テロに抹殺される！

どうすればいい？ どうすればコイツラの嫉妬を解消できる？

…… やむを得ない、か。

俺は笑みを受かべると、言った。

「遊園地……行きたくねーか？ 奢るぜ」

閑話 バレンタインデー（後書き）

【Tips】ファンタジーランドジャパン

ダンジョンマートが経営している新時代のテーマパーク。本物のカードと触れ合えるのが売り。冒険者は他人に危害を加えられなくなる特殊な魔道具を身に着けることで、自分のモンスターを自由に連れ歩ける。

ユニコーンに乗れるメリーゴーランド。本物のアンデッドによるお化け屋敷。マーメイドたちの歌と踊りのプールショー。様々な妖精種、精霊種たちによるナイトパレードなどが人気。

サキュバスのマツサージ店は、健全なサービスしか提供してくれないが、一部お金持ち用の会員制裏コースがあるという噂……。

閑話 逃れられぬ……税金からはな！

バレンタインデーの翌日。

俺は自宅のリビングで昨日の戦利品を見ていた。

テーブルの上には、大量のバレンタインデーチョコが乗っている。その数は、十や二十では利かないだろう。

まさか、俺がこんなにチョコを貰う日が来るとは……今でも信じられん。

……その全部が、義理チョコと言うのが悲しい所だが。

と、その時、テーブルの脇からにゅっと影が飛び出した。

でっぷりと太ったラブラドルレトリバー。愛犬のマルだ。

マルはふんふんと鼻を鳴らしながら、テーブルの上のチョコに顔を突っ込もうとし。

「はい、ダメダメ！」

そこで俺は慌ててマルの鼻を押し戻した。

チョコを犬に食べさせてはいけないというのは、犬を飼っている家庭では常識である。

そのためウチも当然マルにチョコだけは絶対与えないように注意しているのだが、それをこの馬鹿犬は何を思ったのか、チョコを見ると何が何でも食おうとするようになってしまった。

おそらく、「ご主人様たちが独り占めしているあの食べ物、きつと自分には食べさせたくないほど美味しいに違いない！」とでも思っているのだろう。

そのため、この馬鹿犬はチョコを一度も食べたことがないのにチ

ヨコが大好きというよくわからないことになってしまっていた。

……自殺志願者かな？

俺がチヨコを奪おうとするマルと格闘していると、

「おはよう、そんなところで何してるんだ？」

二階から親父が降りてきた。テーブルの上のチヨコの山を見て、眼を丸くする。

「おお、これはチヨコか？　もしかして、バレンタインデーか？」

「ああ、うん、まあ」

「お前、モテモテじゃないか！　俺の息子がこんなにモテるなんてなあ。俺が学生の頃なんか全然だったぞ。生まれる時代を間違えたか？」

ニヤニヤと笑いながら言う親父に、俺は顔を顰めた。

「別にモテてるわけじゃねえよ。面白半分と、応援って感じ。あと、俺らの顔がモテる時代は、過去にも未来にも存在しない」

親父の顔は、俺と同じ特徴のないモブ顔である。

違いと言えば、綺麗な二重瞼で優し気な瞳をしていることか。それ以外は俺のまんま三十年後の姿だった。俺は、完全に親父似なのだ。

「そうか……大丈夫、男は顔じゃない。金と学歴だぞ。母さんは俺の収入とこき使いやすそうな性格で俺を選んだんだからな」

なんとも悲しいことを、胸を張って言う親父に、俺はなんて言うていいかわからなかった。

ちなみにお袋は息子の俺が言うのもなんだがかなりの美人である。親父とは十年近く年が離れている上に歳の割にかなり若く見える為、親父と並ぶと夫婦というよりは親子にすら見えるほどだ。

親父はこの幼な妻に結婚十数年経った今でもゾッコンで、見事に尻に敷かれているのである。……お小遣いが月一万円でも何の文句も言わないほどに。

なお、愛は完全に母親似で、目元だけ親父に似ている。

両親の優れた部位が集まったのが、愛。両親の平凡なパーツが集まったのが、俺だ。

近所の心無いババアどもは、お兄ちゃんがいらぬパーツ先を持って行ってくれてよかったね、などと平然と言いやがる。

もし俺が兄ではなく弟だったら、出廻らしと呼ばれていたことだろう。

「……ところで、歌麿。お前の仕事の件なんだが」

親父が急に真面目な顔になったので、俺はちよつと身構えた。

うちの両親は、危険と隣り合わせの冒険者業に良い顔をしておらず、事あるごとに引退を進めてくるのである。

そんな俺を見て、親父が苦笑する。

「ああ、そんなに身構えなくていい。大会のこととか、お前の最近の頑張りを見て、ちよつと見守るうって話になったんだ。まあ、怪我とかしたら即辞めさせるがな」

「そ、そうなのか……」

「うん、どうやら頼りになる仲間もいるみたいだしな。で、ここからが本題なんだが……」

「う、うん……」

いつになく真剣な親父に、椅子に座り直す。

「……お前、確定申告は大丈夫なのか？」
「……はい？」

親父の言葉に、俺は首を傾げることしかできなかった。

冒険者は、れっきとした職業の一つである。

迷宮へと潜り、そこから手に入れたものを売ることで収入を得ることが基本となり、分類としては第一次産業となる。

モンコロなどの試合をメインで食っていく者たちは、第三次産業扱いだが、基本は迷宮に潜って資源を採取してくれるのが仕事だ。

収入がある以上、そこには当然税金が発生する。

税金……学生のうちはピンとこない言葉だ。

アルバイトなどで金を稼いだとしても、大抵はバイト先が勝手に年末調整とやらをやってくれるため、税金を払っているという感覚はあまりない。

だが、誰にも雇用されていない冒険者となると話は違ってくる。

なぜならば、冒険者は自営業だからだ。

自分で計算し、税務署に確定申告する必要がある。確定申告には白色と青色があるらしく、冒険者は後者となる。俺は気づかなかったが、冒険者になる際に提出した書類の中に、この青色申告諸々の書類が含まれていたらしい。

もしこの青色申告をしなかった場合……地獄を見る羽目になる。

税金の基本は、所得に掛けられる。所得とは、収入から経費と控除を引いた額となる。

ところが、確定申告をしなかった場合、税務署は単純に昨年の収入に対して税金をかけてくる。

例えば、俺の場合は去年800万近い収入があった。

ではそのうちいくら手元に残ったのかと言えば、ほぼゼロだ。

カードや魔道具を買ったり、魔道具のカード化などをした結果、すべて吹っ飛んでいってしまったためである。

これらは、冒険……つまり仕事に必要なモノのため、当然経費として認められる。

いくら収入があっても所得はゼロに近いので税金は払わなくてよいですよ、となるわけだ。

だが確定申告をせずに経費を証明できないと、収入≪所得と見なされ800万丸々に税金がかかることになる。

900万以下の所得に掛かる税金は、なんと23%。……計算するのも恐ろしい額の税金を払わなくてはいけなくなる。

毎年この確定申告をよく理解せずにはすまぬ。さかす学生冒険者が、税務署の恐怖の訪問を受けるといことが繰り返されているらしい。

よって、冒険者は必ず確定申告をする必要があるのである。

確定申告には領収書が必要と知って一瞬焦ったが、財布の中に大量のレシートを入ればなしにしていて、助かった。

俺はよく貰ったレシートをとりあえず財布に入れてパンパンにしてしまう悪癖があるのだが、それが功を奏した形となった。

以下が、親父の説明の元作成した確定申告の概略である。

【2018年度のリザルト】（一万円未満は計算せず）

・冒険者収入787万円（魔石等売却額） - 経費（情報料29万、カード購入費750万（エンプーサ650万+カードパック100万）、魔道具のカード化費用100万、冒険者用品代5万、交通費1万、雑費2万）≪0円

・アルバイト代（源泉徴収済み） - 控除103万円（基礎控除額38万+給与所得控除65万円）≪0円

……とりあえず、今年は税金納めずに済むのか。

俺はホッと一息ついた。

冒険者の経費の範囲が広くて助かったぜ。

ちなみに、俺が去年手に入れたもので最も高額なのはヴァンパイアのカードだが、これに税金はかかっていない。

テレビや懸賞などで当たった賞品は、ある一定の金額を超えると税金がかかってしまうのだが、カードに限っては取得するだけでは税金がかからない仕組みとなっている。

これは、冒険者にとってカードが漁師の漁船、農家のトラクターに当たるのに対し、保険が一切掛けられないことに対する配慮だ。

明日にも失うかもしれないものにいちいち税金をかけていたら冒険者は破産してしまう。

よって、大会などで手に入れたカードには、税金がかからない。

勿論、このカードを売って手に入れたお金については税金が発生する。

「冒険者やっていくんなら、来年からは自分で気付いてやるんだぞ。あんまり収入が大きくなるようなら、税理士の先生に相談してみるのも手かもな。なんだか、色々なテクニクがあるみたいだぞ」

「……………」

冒険者は、色んなしがらみとは無縁で、ファンタジーに満ち溢れて、女の子にモテモテの夢のような職業……そんな風に思っていた時代が俺にもありました。

でも実際は結構泥臭いし、女の子にモテるようで実際は大体が金目当てだし、本命の娘には振り向いてもらえないし、経費が掛かるせいで実際の所得はそうでもないし、命の危険性はあるし、そしてなにより税金という魔の手からは逃げられないようだ。

……………なんだか、冒険者って、意外と夢のない職業なんだな

あ。

こうして俺はまた一つ大人に近づいたのだった。

閑話 逃れられぬ……税金からはな！（後書き）

【Tips】冒険者の経費

冒険者に対して認められる経費の範囲は非常に広い。カードの購入費は勿論、大半の魔道具に対する購入費や、物品のカード化費用、バイクや車の購入費、食料の購入費すら経費が認められる。

ただしこのうちカードの購入費と魔道具の購入費などは、『ギルドや公認店で購入したもの』にのみ認められる。

個々人間のやり取りで手に入れたカードは、経費として認められない。それが本当に買ったものなのか、自分で手に入れたものを買ったと言い張っているか証明できないからである。

……というのは建前で、本当はギルド外でのカードや魔道具のやり取りを減らすための措置の一つである。

ギルドを通さないやり取りも禁止はしていないけど、それによるトラブルにも関与しないし、それによる税金も知らないよ、というのがギルドのスタンスである。

第一話 とあるモブの結末

――それは、何でもないちょっとした冒険になるはずだった。

佐藤翔子が、冒険者となったのは去年の春のことだった。

どの大学においても行われているであろう各サークルによる新入生獲得合戦。初の上京、初の一人暮らしに無自覚のまま浮ついていた彼女は、なんとなくカツコよさそうという気持ちから誘われるままに冒険者サークルへと入部した。

そこは本気でプロを目指すほど真剣なサークルではなかったが、かといって不純異性交遊だけを目的としているサークルほどは緩くもなく、厳し過ぎず緩すぎずのどこにでもあるエンジョイ系の冒険者サークルだった。

そこまで本気で冒険者をやるつもりもなく、人並みの貞操観念を持つ翔子にとって、そのサークルは丁度いい塩梅に思えた。

新入部員には先輩方がDランクカードを月額一万円レンタルしてくれて、冒険者になるための初期費用が登録料だけで済むというのも、冒険者になる心理的ハードルを下げてくれた。

当初は多くの人同様、冒険者に対し「カツコイけど危険そうだし、大変そう」というイメージを抱いていた翔子だったが、いざ実際に始めてみると思いのほか快適なスタートを切ることが出来た。

新入生が迷宮に潜る時は必ず一人は先輩が同伴してくれ、出現するモンスターたちはレンタルしたカードよりも弱いモノばかり。広

大な階層を踏破していくのはかなりの体力がいるものだったが、元々高校では陸上部だった彼女にはさほど苦にはならなかった。日本ではなかなか見られない自然を感じられるということもあり、ちょっとした海外旅行気分ですらあった。

単位に支障がない程度に迷宮に潜りつつ、同時にちよつとしたスリルとバイト代程度のお金が入るといふ最高の環境。

生まれて初めての彼氏もできた。

青木誠也と言う名の、さほどイケメンというわけではないが清潔感のある青年。穏やかで面倒見がよく、レンタルしたカードの本来の持ち主ということもあり、良く相談するうちに次第に惹かれていった。サークル内でも希少な星2のライセンス持ちというのも高ポイント。

まさに順風満帆、理想の大学生活。

そうして入学して一年も経った頃、ついにDランクカードを買えるだけの貯金がたまった。

新しいカードを買うこともできたが、翔子はそれまでレンタルしていたケットシーのカードを正式に青木から買い取ることを決めた。一年も同じカードを使っていれば、普通はそのカードに愛着がわくものだ。

のちに、青木から聞いた裏事情によれば、それがレンタル制度の狙いなのだという。

先輩側は使わないカードを貸し出すことで毎月不労収入が得られるだけでなく、カードに愛着がわいた後輩がそれを買いたいと言ってきた場合、ギルドに売るよりもよほど高く売ることが出来る。後輩側は破格の初期投資で冒険者になることができ、さらには定価で買うよりかは幾分か安く、またある程度育っているカードを手

入れることが出来る。まさにWIN・WINの関係。

新入部員の間は常に先輩が付き添うのも単に指導というだけではなく、レンタル中のカードをロストされたり横流しされないようにするための監視でもあった。貸し出すカードも、愛着がわきやすいようケットシーのような愛らしいものを選ぶのだという。

そんな話を聞き、翔子はよくできたシステムだと感心した後、見事にそれに踊らされた自分に苦笑した。

レンタル期間を終えた部員は、正式に部員として認められ、以降一人で迷宮に潜ることを許可される。

それを知った翔子は、「まだ早いんじゃないか？」と心配する彼氏を説き伏せ、さっそく一人で迷宮に潜ることにした。

先輩の同伴は安心感がある一方、報酬も分割されるというデメリットもあった。

今の部屋の狭さと壁の薄さに不満のあった翔子は、色々と欲しいものがあったこともあり、更なる収入アップを欲していたのだ。

初めての単独攻略とは言え、相手はこの一年間なんども踏破したFランク迷宮だ。何の危険もない――はずだった。

「ハッ、ヒッ、ハアッ……！」

森林型の迷宮に入って数時間後。

翔子はすべてのカードと装備を失い、一人迷宮の中を逃げ惑っていた。

走り始めてどれくらいが経っただろうか。酷使された肺が限界を訴え、喉の奥からは鉄の味がほんのりとし始めている。足はパンパンに張りつめ、今にも攣りそうだ。一分だけ休んでしまおうか、そんな誘惑が脳裏をよぎる中、翔子は笑う膝にムチ打ち必死に走り続

けた。

一瞬でも立ち止まれば、死ぬ。その思いだけが、限界を超えた彼女の体を突き動かしていた。

木々の通路は、地面に飛び出した木の根で凸凹として非常に走り辛く、曲がりくねった道と生い茂った葉っぱにより見通しが悪い。走り辛さもさることながら、今の彼女にとって最悪のが見通しの悪さで、角を曲がるたびにモンスターと出くわしはしないかと、翔子は恐怖に怯えなければならなかった。

もしも、たった一体のゴブリンであろうと、出くわせば終わり。一メートル進むごとに強制的に引かされるロシアンルーレット……。翔子の精神が、ガリガリと削られていく。

頼りになるカードを失い、翔子は初めて迷宮というものの怖さをその身で味わっていた。

「あつ………！」

一瞬間に浮かぶ感覚。木の根に躓いて転んでしまったのだ、と気づいたのは全身に痛みが走ってからだだった。

盛大に転んだせいで、肘や膝はもちろん、頬にまで擦り傷が出ている。

……ああ、慣れたフランク迷宮だからって、半袖なんかで来るんじゃないかった。ボディーアーマーを着て、スタンガンや催涙スプレーなんかを持っていれば、今だってこんなに怯える必要はなかっただろう。

最初の頃は毎回持ってきていたそれらの装備品を持ち歩かなくなったのは、いつからだっただろうか。

私は知らず知らずのうちに慢心し、油断しきっていたのだ。

そう後悔するも、すべては後の祭り。今は自分の愚かさと不運を呪いながら足掻くしかなかった。

——ガサリ。

「……ッ！」

こぼれ出た涙を拭い立ち上がった翔子は、すぐそばの茂みから聞こえた音にビクリと身を竦ませた。

荒い吐息を必死に抑え、じつと物音の方向を凝視する。

バクバクと激しい鼓動を打つ心臓の音がなんとも煩わしかった。

翔子の見つめる先から、一羽の小鳥が飛び立つ。

「はああああああ……」

深い安堵の吐息が漏れた。

翔子は少しだけ呼吸を整えると、震える脚で立ち上がり再び走り出した。

今は休んでいる暇はない。

いつ“奴”の気が変わり、自分を追いかけてくるかわからないのだから。

——今思い返しても、その攻略は順調で、翔子に落ち度はなかった。

装備、と言う面では確かに気が抜けていたのは事実だが、それはそれらの装備がそもそも必要なかったからでもある。

成長限界まで育成されたケットシーの戦闘力は、フランク迷宮では敵なし。

相手が四体だろうと五体だろうと瞬く間に駆逐する。

一年間、一度たりとも使う機会のなかったボディーアーマーや催涙スプレーなど、持ってこなくても当然であった。

それでも、初めての単独攻略ということ、普段よりもむしる慎重に進んでいたくらいだ。

階層も四階層程度で、日帰りで十分に帰ってこれるレベル。

そうして順調に進んで行った彼女の歯車が狂ったのは、最下層に到着してからのことだった。

最下層で彼女を待ち受けていたモンスター。それは、グレムリンだった。

グレムリンは、星一から星六までランクを問わずすべての冒険者に忌み嫌われているEランクモンスターである。

その理由は、グレムリンの持つ特殊能力にあった。

機械破壊。グレムリンは、ありとあらゆる機械を狂わせ破壊するという能力を持っているのである。

この機械を破壊するという能力が、現代の冒険者たちにとって致命的に相性が悪かった。

すべての冒険者にとってスマホやカメラは生命線の必需品だ。

マッピングをスマホアプリに頼っている現代社会の冒険者たちにとって、冒険中にスマホを破壊されるといのは遭難の可能性を意味する。

またカメラも、迷宮内におけるトラブルの際、身の潔白を証明するために必要な重要アイテムだ。

そう言うことを抜きにしても、現代人にとってスマホを破壊されるといのは経済的以上に精神的にダメージが来るものだ。

さらにもう一つ、グレムリンが破壊する重要アイテムがある。

それが、冒険者ライセンスだ。

ギルドが開発したこの人工魔道具には、マイクロチップなどの機

械が組み込まれている。冒険者ライセンスで買物ができるのもその為なのだが、一方でグレムリンの機械破壊の範囲に含まれてしまうというデメリットも存在した。

冒険者ライセンスが壊れた場合、当然救難信号も送れなくなる。浅い階層ならばともかく、深い階層の迷宮で地凶も失い救難信号も送れなくなるのは、かなり致命的だ。

この機械破壊による迷宮内での遭難事故は毎年結構な数が出ていて問題視されているのだが、極めてアナログな方法を除き、未だ有効な解決策は見つかってはいなかった。

そしてグレムリンの厄介な最たるところは、フィールドのタイプに関わらずどこにでも出現し、さらには必ず気配遮断のスキルを持っているということであった。

つまり――大抵の冒険者はグレムリンの攻撃を受けてからその存在に気づくというわけだ。

最下層へと降りた翔子を出迎えたのは、そんなグレムリンからの先制攻撃であった。

グレムリンの存在に気づいた翔子はすぐさまグレムリンを抹殺したが、当然スマホのデータは返ってこない。

壊れたスマホの代金や新しいスマホ等の購入費用を考えると、今回の迷宮探索は完全に赤字である。

「ああ、もう！ 最悪！」

悪態をつきながらスマホを地面に叩き付けたその時。

「――ギッ！」

「……………え？」

唐突に、ケットシーが吹き飛んだ。

まるでサッカーボールか何かの様にポンポンと地面を弾みながら転がっていき、やがて凄まじい音を立てて大木をへし折ると、そこでようやく止まった。

灰色の毛並みを赤く染め、手足をグニャグニャに曲げたケットシ―は、気絶しているのかピクリとも動かない。

「あ、え？ なに、が？」

それを呆然と見ていた翔子は、不意に顔に掛けられた生ぬるい風に我に返り――ソレと目が合った。

それは、アフリカ象よりも大きな白い狼であった。血の様に赤い瞳が、翔子を冷酷に見下している。

巨狼が、翔子へと語り掛ける。

『――あの猫をカードへと戻せ』

「え？」

『早くしろ。それとも噛み殺されたいかッ！』

「ヒッ！ は、はい！」

命じられるがままに翔子はケットシ―をカードへと戻した。それにより、自分のバリアが無くなるだとか、そんなことを考える余裕はなかった。

『他に持っているカードがあるならばすべて地面へと置き、所有権を廃棄しろ』

「は、はい……」

翔子は、ここの攻略中に手に入れたFランクカードと、万が一のために持っていた数枚のEランクカードを含めたすべてのカードを地面へと置いた。

一瞬、一枚くらいは懐に忍ばせておこうかと脳裏に過った翔子だったが、紅い瞳に見据えられるとその考えも塵芥のごとく吹き飛んだ。

それを見た巨狼は満足気に頷き。

『では、去れ』

そう言った。

「え？」

てっきりこのまま食い殺されるとばかり思っていた翔子は、唐突かつ予想外な言葉にポカンと口を開けてしまった。

『聞こえなかったか？ それともここで食い殺されたいか？』

「い、いいえ！」

これ以上余計なことを言っただけに殺されてはたまらないと、翔子は慌ててゲートの有るであろう方向へと走ろうとし。

『そちらではない。お前はあちらから帰るのだ』

翔子の往く手を阻んだ巨狼が鼻先で指し示したのは、彼女が下りてきた階段であった。

それはつまり生身でここまでの道のりを帰れということであり。

「そ、そんな……。無理です！ せ、せめて一枚だけでもカードを返してください！」

懇願する彼女を巨狼は鼻で笑う。

『知ったことか。たまには我らの力を借りずに自分の力で迷宮へと挑んでみる』

「ど、どうしてこんなことするんですか？ あ、あなたは一体だれなの？」

追い詰められた彼女から出てきたのは素朴な疑問。

このモンスターは明らかにFランク迷宮に出てくるレベルのモンスターではない。かといって、イレギュラーエンカウントでもない。この白い毛並みと巨大な身体には見覚えがあつた。Cランクモンスター、ガルムだ。

だが、なぜガルムがこんな迷宮に出現するのだ。そしてカードを要求する理由は？ 強盗？ まさか他の冒険者が操っているのか？ では自分をわざわざ来た道を返そうとするのはなぜか？ 道中のモンスターに始末させるため？ なぜこの場で始末させない？

湧き上がる無数の疑問。しかし答えは出ない。行き場を無くした疑問が、無意識に口から零れたのだ。

『言つたところでこの崇高な志は理解はできまい。まるで己の力かのようにカードの力を振るう貴様ら人間にはなッ！ わかつたらさあ行け！ さもなくば――噛み砕くぞッ！』

「ヒッ！」

肌がビリビリと震えるほどの怒号に、本能的に翔子は走り出した。武器であり盾であつたカードはもはや一枚もなく。身に纏うのは頼りないTシャツとジーパンのみ。生命線であつたスマホと冒険者ライセンスは壊れ、道筋もわからない。

まさに頼れるのは己の身体のみという状況で、翔子は迷宮へと消えていった。

——彼氏である青木誠也によつて、佐藤翔子の搜索願が出されたのはそれから二日後のことだった。

第一話 とあるモブの結末（後書き）

【Tips】機械破壊

迷宮の出没するモンスターや罠の中には、何らかの事柄に対するアンチ的役割を持った存在がいる。グレムリンもその一種であり、その役割は『機械の否定』である。グレムリンの機械破壊に含まれる範疇は広く、スマホやカメラはもちろん銃などの一定以上の複雑さを持った道具類も含まれる。迷宮産、人工に限らず魔道具の類は機械破壊の対象とならないが、冒険者ライセンスのようにICチップなどを組み込んでいる場合機械破壊の対象となってしまう。

まだカードの使い道が不明だったころ、軍による迷宮攻略を阻んだ障害の一つとして悪名高い。

第二話 俺のカードになる奴に普通のキャラいな説

『今夜もこの時がやってきた！ 人型女の子モンスター限定バトル、キヤットファイト！ 可憐で麗しいモン娘たちが、華麗に、残酷に殺し合う！ 最も美しく強いカードは一体だれなのか！』

実況は私、なほ佐藤裕也。やま解説は星四プロ、初代キヤットファイトチャンピオンの登呂真黒さんでお送りします。

まずは第一試合の選手の紹介です！ 赤ゲートから登場したのはさいとうしゅうすけ斎藤秀介選手！ プロ志望の現役大学生冒険者、これまでの戦績は三戦三勝！ 波に乗っている期待の大型新人だ！』

観客の歓声と共に、二十歳ほどの青年が姿を現す。そこそこ整った顔立ちに、流行りのファッションと髪型。観客席に手を振り返すその表情には自信が満ち溢れていた。

『トロマグロさん、斎藤選手をどう思いますか？』

『いい選手だと思いますよ。』

パーティーは、CランクのセイレーンとDランクにアマゾネスとねこまた。耐久性に優れるアマゾネスがガード役で、ねこまたがトリッキーなアタッカー、セイレーンが上空後方からのサポーターという形ですね。

基本的ですが、王道の手堅い構成だと思います。デビューしたての選手は気が逸る傾向があって、どうしてもアタッカー重視になっ
てしまふんですが、斎藤選手は立ち回りにも落ち着いたものを感じ
ますし、連携も良い。

特にセイレーンは貴重な飛行型ですし、いずれ十勝してチャンピオン戦に行くのも十分可能性があると思います』

『なるほど！ これは期待できそうですね！ 続いて白ゲートから姿を現したのは北川歌麿選手！ 学生トーナメントでの新しいカードのランクアップの方法と、鮮やかな逆転勝ちは世間の記憶にも新しいのではないのでしょうか？ 冒険者となつてまだ半年程度にもかかわらず、星三という驚異の成長速度！ それがまぐれや偶然ではないと証明するかのように、先日のデビュー戦では見事な勝利を飾りました！』

実況の紹介に観客席の期待が高まる中、白ゲートのスモークと共に現れたのは何とも平凡な顔だちをした少年だった。

観客のうち北川歌麿という人間を知らない者たちは、その一般人にしか見えない容姿に拍子抜けしたような顔を浮かべる。

これが本当にニユースでも話題になつた若手冒険者なのだろうか？ と囁きあつた。

『トロマグロさん、北川選手はどう思いますか？』

『そうですね。正直学生レベルではないですね。霊格再帰という破格のスキルを持つ座敷童にばかり注目が集まり隠れ蓑になっていますが、他のカードもなかなかの粒ぞろいです。本人の技術力や育成力も高い。プロのチームからスカウトが来てもおかしくないレベルかと』

『おおお！ そこまでですか！ それではトロマグロさん、この試合どちらが勝つと予想しますか？』

『ははは、そればかりはなんと。ただ、どちらにも可能性は十分にあると言っておきます』

『結果は自分の眼で、というわけですね！ それでは試合開始です！』

試合のゴングが鳴り、両選手が順番にカードを召喚する。

斉藤選手が呼び出したのは、翼の生えた女の上半身と人魚のような下半身を持った美女、鍛え抜かれた肉体を蛮族のような毛皮で覆っただけの野性的な女戦士、猫耳と二つに分かれた尻尾を持つ獣人の美少女だった。

『おおお〜〜』

肌も露わな美少女モンスターの登場に、観客席が色めき立つ。モンスターたちもクルリと会場を一周飛び回ってみたり、カメラに向かってセクシーポーズを決めてたりと、自分の魅力を思い思いにアピールしていた。

モンコロ……特に女の子モンスター限定であるキヤットファイアの試合では、観客と視聴者を楽しませるためこのようなファンサーピスを行うのが恒例となっていた。

続いて、観客たちの視線はもう一人の選手へと向けられる。

どんな女の子モンスターを召喚するのかと期待が集まる中、まず呼び出されたのは美貌の吸血鬼であった。身に纏うのは、煽情的な漆黒のドレスで、病的に白い肌がよく映える。鮮やかで長い金髪には、よく見れば黒髪が何房か混じっており、それが魅力的なコントラストを描いていた。

その危うさすら漂う妖艶さに見惚れていた観客たちのうち、彼女がかつてイライザと呼ばれていた元グールだということに気づいた者は、そのあまりの変わりように感嘆の声を漏らした。

元々素材は優れていたが、グールの劣化した肉体によってその美貌に影を落としていたイライザ。

それがいまや、魔の貴族とも呼ばれる吸血鬼へと進化したことにより、元の面影を残しつつも妖しいほどの美しさとなっていた。

そんな観客たちを冷たい瞳で見渡していたイライザだったが、おもむろに笛を取り出すと奏で始めた。

白魚のような指が笛の上を軽やかに踊り、幻想的な音楽が流れだす。

思わず観客たちが静まり返り耳を傾ける中、次のモンスターが姿を現した。

蝙蝠の羽、驢馬の尻尾、真鍮製の脚を持つ銀髪の少女――メア。身に纏うのは所々が透けたベビードールで、大人になりかけの肢体とあいまって、見てはいけけないのに目が離せないような、そんな背徳的な魅力を放っていた。

幼い夢魔は、揶揄うような表情を浮かべ観客たちへ向けて軽やかに踊り出す。

女吸血鬼が奏でる幻想的な音楽と、幼くも淫靡な夢魔による踊りは、もはや一種のショーと言っても過言ではなかった。

観客たちが見惚れる中、満を持して最後のカードが姿を現す。

紅い和服を着崩し艶やかな黒髪をパンキッシュに跳ねさせた、どこか不良染みた雰囲気を持つ座敷童の少女――蓮華。

世界で初めて公式にカードを使わないランクアップを成し遂げた存在であり、ちょっとした社会現象すら起こした有名カード。

観客たちがどんなパフォーマンズをしてくれるのかと期待を集める中――彼女は高々と中指を突き上げた。

「くたばれ、変態どもが」

ファンサービスなんざ知るか。

どんな時でも己の道を貫くのが、この男前な座敷童の信条であった。

「――なあ〜に見てんだよ」

後ろから声を掛けられ振り返ると、画面の中と同じ顔がこちらを呆れたように見ていた。

「この前の試合を見てたんだよ」

俺はそう言っつて、手に持っていたタブレットを彼女へと見せた。

――冒険者になって早半年。春を迎えて二年生に進級した俺は、当初の目標であった三ツ星冒険者となっていた。

三ツ星冒険者ともなると、世間からはセミプロと見なされ、モンコロなどのTVに出る仕事なども依頼されるようになる。

今俺が見ていたのも、先週放送されたモンコロ系TV番組『キャットファイト』の試合の録画だった。

学生トーナメントでの優勝以来、俺の元にはこうしてちよくちよくTV局のオファーが来るようになっていた。

……実のところ、俺はもうモンコロに出るつもりはなかった。

冒険者になった当初こそモンコロに出ることを目標としていた俺であったが、あの学生トーナメントで実際の試合の過酷さを知って以来、モンコロへの憧れは粉々に打ち砕かれた。

簡単に言っつてしまえば、ビビったのだ。

なんせあの学生トーナメント、高校生以下の部では参加者のうち約四割もの学生たちが廃業に追い込まれているのである。

冒険者ギルドでの規定では、冒険者は一年以上Dランク以上のカードを所持であった場合ライセンスを剥奪するとされている。

学生の身分で再びDランクカードを買う余裕を持つ者は少なく、仮に両親に頼んだとしても、早々にカードを失った子供たちに再度

買い与える親はまずいないだろ。

結果、虎の子のDランクカードを失った選手のほとんどが、廃業確定となったのであった。

これは結構な問題となつて、ちよつとしたニュースにもなった。その後、冒険者でなくなつた学生たちが学校で居場所が無くなつたり、ショックで引きこもりたりするケースが多発したことが明らかになると、さらに炎上した。

かく言う俺自身も、結果的には最高の結末を迎えられたものの、一歩間違えれば蓮華たちを失っていた可能性が高かつたわけで。

こりゃあギャンブルにしても割に合わないし、もう二度とモンコ口に出るつもりはなかつた。

が、TV局側としても、今が旬で出すだけで視聴率が取れそうな俺——正確には蓮華を始めとしたモン娘たち——を逃すつもりもなく、その勧誘は熾烈を極めた。

これは最低でも一つは出ないと躲しきれないと悟つた俺は、その中でも最も条件が良くリスクが低そうな『キャットファイト』を選んだのだつた。

数あるモンコロ系TV番組の中から『キャットファイト』を選んだ理由は三つ。コンセプトと、リスクの低さ、そして報酬である。

『キャットファイト』では、選手が使えるカードを女の子モンスターのみと限定している。この女の子モンスター限定というコンセプトが、俺向きだつたのだ。

無数のカードの中から女の子カードだけしか使えないというのは、デッキを組む上でかなりのハンデとなるし、女の子カードの情報は世間に広く知られている為対策も立てやすい。

また、女の子カードというだけで同ランクの他のカードよりも何倍も相場が高くなるため、以前戦つた水虎のようなランク詐欺の強カードが出てくる可能性が低くなる。そのランクで最強クラスの女

の子カードを買うつくらいならば、上のランクの女の子カードじゃないカードを買った方がよほどお買い得だからだ。

縛りなしのガチデッキと、女の子モンスター縛りのロマン系デッキ。どちらと戦いやすいかと問われればまず間違いなく後者。

その一方で、俺の手持ちは初めからそのほとんどが女の子カードばかり。唯一ユウキだけは使うことが出来ないが、蓮華、イライザ、メアのレギュラー勢は健在だ。

そのうち二枚はCランクカード、蓮華に至っては制限付きのBランクカードと言っている。この二枚に比べて格の落ちるメアも、メインである蓮華とのシナジーがある。

はつきり言って、セミプロクラスでは反則的な戦力であった。

事実、この動画の試合では霊格再帰を使うまでもなく快勝している。

第二の理由、それは『キャットファイト』でのカードのロスト率の低さだ。

通常のモンコロ系番組では、どのカードがロストさせられるかも見る楽しみの一つである。

互いに命を懸けて戦うからこそそのヒリつくような緊張感。ロストする際のモンスターたちの断末魔。高額なカードを失ったマスターの絶望した表情……。

悪趣味極まりないが、それをモンコロの醍醐味として楽しんでいく層が一定数存在するのも事実だった。

また、賭けの結果を複雑にするという面もある。

モンコロ系番組は、エンターテインメントである一方で国営のギャンブルでもある。単純に試合の勝敗を賭けるものから、その試合で何枚のカードがロストするか、勝った冒険者の残り枚数が何枚か等々、賭け方や倍率も異なってくる。

単純にどちらが勝つかを賭けているだけでは、ギャンブルとしての伸びしろも少なく、飽きもはやい。よって少しでも結果を複雑にするためにも、カードのロストという要素は必要不可欠であった。

その一方で、『キャットファイト』では事故を除きカードのロストはまず無い。

これは番組制作側で『できる限りカードのロストは防ぐ』という方針を打ち出しているのが大きく、選手に裏で『できる限り相手のカードをロストさせないよう努力する』という誓約を交わさせてもらいた。

なぜ、多くのモンコロ系番組とは異なり、『キャットファイト』ではカードのロストを防ぐ方針なのか。それは、番組の方向性の違いにあった。

他のモンコロ系番組がモンスター同士の殺し合いとその結果に対するギャンブルがメインにあるのに対し、『キャットファイト』ではただただ単純に可愛い女の子モンスターが戦っているところを見たい、あわよくばエッチなハプニングとかあると最高！ というのがメインにあった。

つまり、『キャットファイト』の視聴者層にとってカードのロストとかどうでもよく、むしろ貴重なモン娘がロストするとか言語道断！ というのが本音であった。

また、お金の問題という世知辛い理由もあった。
女の子モンスターの値段は、同ランクのカードに比べて数倍は高い。そんな高額なカードをロスト前提で戦っていたら、あつという間に出場者がいなくなってしまうというわけだ。

第三の理由、それは単純に報酬が良かったことだ。

モンコロにおけるファイトマネーは大きくわけて二つ。チケット代と、賞金である。

チケット代については、売れた観戦チケットの内、何割かを選手が勝敗に関係なく受け取ることが出来る。

この割合や、どれほど観戦チケットが埋まるかは番組や冒険者のランク、人気によってさまざまなのだが、セミプロ級では大体100万円前後が相場となっている。

しかし、女の子モンスターの限定である『キャットファイト』ではこのチケット代が他の番組よりも高額であるにもかかわらず、毎回満席になるほど集客率が高い。

つまり、その分選手に支払われるチケット代も高くなる。

その額、なんと二百万円。

チケット代は勝敗に関係なく選手に支払われるため、試合に出るたびに二百万円の収入を得ることが出来る。

カードのロストの可能性が低い『キャットファイト』において、これは相当デカイ。

次に、賞金について。

これは、その選手に賭けられた掛け金の内いくらかを勝利選手に還元するというものだ。

モンコロにおける収入の大部分はこの賞金であり、グラディエーター（モンコロを収入の中心とする冒険者）たちは、少しでも多く自分に掛け金を集めるべく、日々奮闘していると聞く。

この掛け金については、カードのロストの危険性が高ければ高いほど規模が大きくなるといわれており、残念ながら『キャットファイト』はギャンブルとしての規模はさほど大きくない。

その為賞金も他番組に比べて小さくなってしまっただが、それでも一試合辺り三百万円ほどは貰える。

この前の試合では、四百万円の賞金を得ることが出来た。

チケット代と合わせて、計六百万円。

それが、この試合において俺が得られた収入だった。

一回試合に出るだけで、五〜六百万。正直、滅茶苦茶美味し過ぎる。

ちなみに、Dランク迷宮の踏破報酬は一つ辺り63万から90万、道中のドロップアイテムをすべて売ったとして、収入は百万を若干超える程度だ。一つの迷宮を踏破するまでに、泊まり掛けで何日も掛かる……。

片や命の危険もなく一日で五〜六百万円、片や命懸けで何日も掛けて百万程度。天秤にかけることすらできない、メリットの差がそこにあった。

そりゃあほとんどのプロ志望が、プロフェッサー（迷宮中心に稼ぐ冒険者）ではなく、グラディエーターを志すというものだ。

もちろん、グラディエーターだって簡単じゃあない。

まず、セミプロ級はプロに比べて数が多いため、いつでも好きな時に試合に出れるわけではない。一つの試合枠に対して応募はその何倍もあるし、そのため営業専門のマネージャーを自費で雇ったり、グラディエーター系のタレント事務所に所属して仕事を貰う奴なんかもいる。

とにもかくにも人気商売なので、キャラ作りのために変な言動や格好をしたり、デッキの構成をあえて偏らせてみたり、時には炎上商法をしてまでも世間の注目を集めたりもする。

そこまでやって試合に出たとして、負ければ得られる金はチケット代のみ。カードが一枚ロストするだけで大赤字だ。それがCランクカードともなれば、取り返すまでに数か月はかかる。

その気になればいつでも迷宮に行って稼ぐことのできるプロフェッサーに対し、戦いの場を用意すること自体が戦いのグラディエーターは、自由とはかけ離れた存在だ。

俺だって、今は蓮華のおかげで人気にブーストが掛かっているが、いずれ世間からも忘れ去られて試合に呼ばれることもなくなるだろ

う。

それ自体は、まあ、良い。

本気でグラディエーターを目指す気は、今のところ無いからだ。むしろ、命の危険があってもカードたちと共に冒険をしていく、プロフェッサーの方が自分にあっているような気がしていた。

とは言え、モンコロの収入が美味しいのも事実。

飽きられるまでは、『キャットファイト』の試合でガンガン稼いでいきたい。

そのためには、如何にお客さんたちの人気を得るかが重要となってくるのだが……。

「蓮華、お前なあ。中指はないだろ、中指は」

あれほどファンサービスをするように言ったのに、この不良座敷童ときたら……。

俺の肩に肘をつけてタブレットを覗き込む蓮華へと、ジト目を向ける。

「ソーだソーだ！　せつかく私とイライザが場を盛り上げてたのに台無しジャンツ」

俺の言葉に乗っかるように蓮華を非難したのはメアであった。その顔は、公然と蓮華を非難できるこの状況に、喜色に輝いている。彼女とイライザは、あの試合のためにわざわざ曲と踊りを練習までしてくれていたのだから、まあこうして批判をする資格はあるだろう。

が、当の蓮華と言えはどこ吹く風といった様子で。

「ヘッ、知らねーなあ。なんでアタシが人間どもに媚びを売らな

「きやあいけないんだ？ そんな義務はねーな」

出たよ、蓮華の人間嫌い。

出会った時とは段違いに打ち解けてはくれたが、この座敷童は基本的に人間のことが嫌いなのである。

特に、道具か何かの様にカードを使い捨てる冒険者や、カードの殺し合いを見て楽しんでるモンコロの視聴者は、軽蔑の対象のようだった。

正直、俺がモンコロの試合に出るのも面白く感じていないようなのだが、今のところそれについて何かを言われたことはない。

それは『キャットファイト』がロストの危険性が低いことや、今後もグラディエーター一筋でやる気がない、というのが大きな理由なのだろうが、その根底には彼女のマキャベリストとしての側面があった。

一見直情的で情も深い彼女だが、その一方で冷徹に損益を計算することもできる。

十を活かすために一を切り捨てるのは勿論、時には6のために5を切り捨てることのできる決断力が、彼女にはあった。

俺が学生トーナメントに出る時に反対しなかったのも、ヴァンパイアのカードとマスターである俺の成長というメリットを見越してのことであったし、決勝戦においては自分自身のロストすらも許容して俺の成長と言うメリットを取った。

今俺がモンコロに出るのに反対しないのも、それによって得られるメリットがデメリットを大きく上回っているからだ。

……ではかといってメリットがあればすべて許容するのかわかればさうではなく。

「デメエが下らねえ試合に出るのも自由だし、敵がいりゃあ戦ってはやるが、人間どもに媚びを売るのまではアタシの仕事じゃあねえな」

「どうやらそれが、この件に対する彼女の妥協ラインであるようだった。」

「……はあ。まあ、仕方ない。昔の様にボイコットされただけありがたいと思うとするか。」

それになにより。

「これ、意外とウケたしな」
「なんでだよ……」

俺がそう言うと、蓮華はげんなりとした風のため息を吐いた。

「雰囲気ぶち壊しのファツキューポーズであったが、なぜか観客たちにはバカ受けであった。」

放送後のSNSでのコメントでも、『どんな時でも媚びない蓮華ちゃんの姿勢に憧れます』などと好意的なコメントが多かった。

そんな人間たちの奇妙な反応を思い出したのか、心なしか気持ち悪そうな顔をする蓮華。何気にレアな表情である。

「……ちなみに記念すべきデビュー戦のファンサービスについてだが、これについてはぶっちゃけ失敗している。ただイライザやメアに手を振ってもらったり軽く飛び回ってもらっただけだからだ。これについては、ファンサービスを甘く見ていた俺のミスである。なお、この際も蓮華はそっぽを向いて手すら振ってくれなかった。」

そのため二戦目である今回は事前に細かい打ち合わせをし、蓮華にもちゃんとファンサービスをしてもらおうようお願いしていたのだが……このザマである。

まあ、結果としてウケたのだからいいのだが、このままではいずれ飽きられることだろう。その時までには何か対策を思いついておくのが、俺のグラディエーターとしての課題だった。

「もー、おかしくない？ どうしてちゃんとやった私達より蓮華の

方がウケるのよ」

「アタシが知るかよ。つか、知りたくねえ」

「次は私たちもやってみる、イライザ？」

「頼むからやめてくれ、さすがに炎上する」

そんな風に話していたその時。

「――何の話ですかあ？」

背後からどこかねっとりとした声が俺たちに掛けられた。

第二話 俺のカードになる奴に普通のキャラいない説 (後書き)

【Tips】グラディエーターとギャンブル

この世界において一番人気のギャンブルは、競馬やパチンコではなくモンスターコロシウムである。人気の理由は、純粹に見ていて楽しいというのもあるが、その控除率の低さにある。競馬が25%、パチンコが12.5%なのに対し、モンスターコロシウムは5%と非常に低い。低い控除率は多くの参入者を呼び、またTV番組としてのスポンサーも多く集まるといふ結果を生んだ。

グラディエーターの報酬が高いのも、この豊富な資金源が理由である。一方高額な報酬目当てにグラディエーターとなるプロ冒険者が増えたことにより、冒険者制度の本来の目的であるはずの迷宮踏破が疎かになりつつあるという問題も提起されている。

第二話 俺のカードになる奴に普通のキャラいない説

『う………』

その声を聴いた蓮華とメアがギクリと顔を強張らせる。それをしり目に振り返ると、そこには美人だがどこか昏い雰囲気を身に纏った女が立っていた。

燃え盛る炎を連想させるような紅い瞳に波打つ赤毛と、そこから覗く一对の短い角。着物の衿は大胆に肩まで降ろされ、深い谷間が丸見えとなっている。目尻に紅が施された切れ長の瞳とぷっくりとした唇が何とも色っぽい。

特徴だけを上げるなら、力強さと妖艶さを兼ね揃えた美しき女の鬼と言った感じなのだが……どうにも彼女の表情と云うか、空気がそれを裏切っていた。

どこか世を恨んだような目つきと、陰湿さを感じる卑屈な笑み。声音自体は綺麗なのに、しゃべり方もどこかねっとりとしていて、どうにも全体的に病んだ空気を醸し出していた。

彼女の名は、鈴鹿。俺が大会で手に入れた鬼人のカードであった。名前の由来は、日本で最も有名な女の鬼、鈴鹿御前から。

手に入れた当初は、外見のイメージから妖艶なお姉さん、あるいは快活な鬼らしい性格を想像していた俺であったが、その予想は大いに裏切られることとなった。

「ああ、それってもしかして、この前の試合の映像ですかあ？ ……」

…私が仲間外れにされた」

タブレットを覗き込んだ鈴鹿が、恨めしげな口調で言う。
それを聞いた蓮華とメアがうへえという感じで顔を顰めるのをしり目に、俺は愛想笑いを浮かべて彼女へとフォローした。

「いや仲間外れにしたわけじゃ。ほら、ユウキだって出てないし…
…なあ？」

「そうそう、そうですよ」

すかさずフォローに回る忠犬ユウキ。しかし。

「……ユウキさんは元々出場枠じゃないでしょう？ 人型じゃない
んだから。となると候補は四枚。ほら、やっぱり私だけ仲間外れ」

じめじめと恨みがましい眼で俺を見る鈴鹿。

申し訳ないが、正直めんどくさい……。

「ちょっといい加減にしなさいよね、新入りのくせに！」

するとそこで、よどんだ空気に堪りかねたらしいメアが、鈴鹿へと食って掛かった。

「蓮華、イライザ、私とアンタの四枚じゃあ、役割的に考えても年功序列的に考えても私たち三枚が選ばれるに決まってるでしょーが。それとも、先輩であるイライザを差し置いて自分を出せって？」

かつて蓮華に「先輩だから何？」と言い放った自分を棚に上げ説教をかますメア。

「ああ、そうですね。そうですね、メアさんたちは先輩ですもんねえ。そりゃあ私より優先されるべきですよねえ。いいなあ、羨ましいなあ。……たまたま先にマスターのところに来ただけなのに、ランクアップもさせてもらって、試合にも出させてもらって……。私はずっと新人扱い、たった五枚しかないのに、マスター以外誰も私と話そうともしてくれない、ずっと仲間外れにされてる……。私だけずっと一人」

「うっ……」

途中から誰に向けて話すわけでもなく、ブツブツと恨み言を零し始めた鈴鹿に、メアは冷や汗を垂らして周囲に助けを求めるも、助けを差し伸べる手はない。顔をこわばらせて、鈴鹿と目を合わせないようにしていた。涼しい顔をしているのは、イライザくらいだ。

「ま、マスター、助けてよお、やっぱコイツ怖いよお」

半泣きとなったメアから“リンク”で声が届く。俺は顎を指で掻きながら答えた。

「助けてって言われてもなあ」

ぶっちゃけ、無理。彼女の嫉妬深さはもはや魂に染みついたものだ。

「だからあれほど関わるなって言っただろうが。何言っても自分を責めてるように感じるんだから、コイツは」

蓮華も呆れたようにリンクで声を届けてくる。

鈴鹿が仲間入りしてから数か月。今回のようなことは初めてじゃ

あなかつた。

基本的に全方位に対して敵意……というかコンプレックスのようなものを抱いている彼女は、少しでも相手が自分よりも恵まれていると感じると強烈な嫉妬心を抱くのである。

それは、休憩中に配られるお菓子の量から始まり、蓮華の霊格再帰についてや、元グーラーだったイライザがヴァンパイアにランクアップしたこと、蓮華とメアの友情連携に、果てはユウキが迷宮内の移動手段として活用されていることにすら向けられているのだから筋金入りだ。

とにかく彼女は、少しでも自分が持っていないものを見ると羨ましくてたまらなくなるようであった。

特に大変だったのが、名付けに関してである。

俺は当初、頃合いを見て彼女に名前を与えてやるつもりだったが、この嫉妬に狂った鬼女は、一秒たりとも自分だけが名前を持つていないという状況に耐えられなかつたようであった。

その頃の鈴鹿の嫉妬深さと言ったら……、まさに鬼の名にふさわしいものであった。

結局、名付けまでにまた紆余曲折があつたが俺は彼女に鈴鹿と言う名前を与えて今も使い続けていた。

扱い辛い彼女を売り払わずに使うことを決めたのは、売っても大した金額にならないというのもあるが、もしかしたら名前を与えてやればもう少し彼女も落ち着くかもしれないと思つたからだ。

……あとは単純に能力が高く、容姿も俺好みだというのもあつた。

「あれれ？　もしかして、内緒話ですかあ？　マスターまで私を仲間外れにしないよねえ？」

一人恨み言を呟き続けていた鈴鹿が、不意に矛先を俺へと向けてきた。

しな垂れかかるように俺に身を預けてくると、その豊満な胸元で

俺の腕を挟み込む。ふわりと鼻をくすぐる香の匂いと、柔らかく変形する魅惑の果実が俺を誘惑した。

……これが、どうにも彼女を手放す気になれなかった最大の理由であった。

この陰気な赤毛の鬼は、我がパーティーにおいて最大の胸部装甲を保有するのである。

その戦闘力は、ゲールからヴァンパイアとなったことでDからFへと進化したイライザを、さらに上回るものであった。

おそらく、小さく見積もってもG……H、いや、それ以上もあり得た。

いくら性格に難あるからと言って、このおっぱいを手放すなど、おっぱい星人として言語道断。

そもそも、何らかの欠点を持っているのはうちのメンバーでは当たり前のこと。欠点を長所へと変えてきたのが、ウチのカードたちの強みなのだから。

……それとも一つ、俺が彼女を受け入れた理由があるとするば。

「——ねえ、マスターならわかってくれるよねえ？ 同じモブ仲間のマスターだもんねえ……」

「あゝ、まあ、な……」

それは、どちらかと言うと俺も鈴鹿側の人間だということだろう。蓮華はもちろん、うちのカードたちは何かしらの輝きを持っている。しかし俺にあるのは、彼女たちのマスターであるという一点のみ。

霊格再帰を発見したということと世間では持ち上げられてはいるが、すべては幸運によるもの。俺の才覚によるものじゃあない。

その幸運にしたって……。

……とにかく、俺にあるのは蓮華たちのマスターだということくらいで、人間として特別な何かを持っているわけではないということ

とだ。

もちろんそれに不満を持ったり、カードに嫉妬したりはしないが、蓮華たちという才能あふれる同僚を持つ鈴鹿の気持ちも多少は想像できた。

そんな俺に鈴鹿としても何らかのシンパシーを抱いているのか、彼女は召喚された当初から俺にだけは嫉妬を向けることもなく一一嫉妬する部分がないとも言うが一一同じモブ仲間として友好的であった。口調もなぜかため口である。

まあ……正直鈴鹿がモブキャラかと言われると首をかしげざるを得ないんだけどね。

どう見てもキャラ強烈だし。

そんな俺の内心を他所に、鈴鹿は機嫌よさそうに笑う。

「ふふ、マスターならそう言ってくれると思ってたよお。じゃあ、当然次のランクアップは私でいいよねえ？」

「はあ!？」

俺が何かを言うよりも早く反応したのは、メアであった。

「何言ってるの！ 新入りのくせに生意気！ 次はユウキに決まってるでしょ！ そしてその次が先輩のメアよ！ ね？ マスター」

「マスター、モブ仲間の私を見捨てたりしないよねえ？」

「あー……」

二人の視線の圧力にタジタジになりながら、俺は愛想笑いを浮かべるしかなかった。

確かに順番で言えば確かにメアの言うとおりなのだが、彼女の次のランクアップ先はサキュバス。自力で手に入れるのは勿論、買うのすら困難極まるレアカードである。メアのランクアップに拘ってれば、彼女の後輩は誰もランクアップできなくなってしまう。

彼女には悪いが、メアのランクアップはよほどの幸運に恵まれな
い限り後回しとなってしまっただろう。

当然、ユウキよりも先に鈴鹿をランクアップさせるというのも論
外である。

「あー、前にも言ったけど、まずはユウキのランクアップが一番だ。
理由も言ったよな？」

俺の言葉に、メアたちは若干不満そうにしつつ頷いた。

なぜユウキのランクアップが一番先なのか……それは初期三枚の
うち彼女だけがランクアップしていないから、ではない。

俺の持つカードの中で、ユウキの進化カードが最も簡単に手に入
れられるからである。

俺たちが今いるDランク迷宮には、人狼の森という名がつけられ
ている。

これは冒険者たちが勝手に付けた通称なのだが、その由来はここ
の主にある。

ここは、ライカンスロープが必ず主として出現する迷宮なのだ。

ちなみに、鈴鹿のランクアップ先として最有力候補の後鬼は遠い
他の県にしか出現せず、メアのランクアップ先であるサキュバスに
至ってはどこに出現するのかすらわからないありさまであった。

エルフやサキュバスといった人気のカードが固定で出現する迷宮
は、国が独占して管理しているだとか、トップの冒険者チームに独
占されているなんて噂が立つほど一般に情報が回らなかつた。

そういうわけで、俺たちはこの三ヶ月ほどの間、この人狼の森に
通いつけていた。

……その結果は今のところ芳しくはなかつたが。

元々Cランクカードのドロップ率は0.1%と低く、雌が出現す

るか雄が出現するかも完全に運任せとなる。

性別が違えば、ユウキのランクアップには使えない。

俺たちはすでに二枚のライカンスロープを手に入れているが、そのどちらも雄のカードであった。

……では、俺たちがツイていないのかと言えばそれは違う。むしろ滅茶苦茶運が良いと言えた。

この三か月間で、俺たちがこの迷宮を踏破した回数は22回。それで本来0.1%しか落ちないはずのCランクカードが、二枚も落ちたのだ。ドロップ率は驚異の10%。これで運が悪いなんて言ったら世の冒険者たちに袋叩きにされるだろう。

このチート染みたドロップ率の絡繰りは、もちろん蓮華の能力にあった。

蓮華の霊格再帰は、幸運を司る女神である吉祥天である。吉祥天となった時の彼女は、不運を与える能力を失う代わりにより強い幸運を与える能力を持つ。

この幸運の加護を、迷宮主と戦う前に与えてもらうことでカードのドロップ率を上げてもらっていたのだ。

……ちなみに、蓮華のこのドロップ率を上げる能力、いろいろと調べては見たが、どうやら彼女固有の力のようであった。

普通の座敷童はもちろん、吉祥天にもドロップ率を操作する力などない。

霊格再帰を持つカードが特殊なのか、蓮華が特別なのか……。いずれにせよ、俺はこれについて誰にも漏らさないことを決めた。

このライカンスロープを売るのも、すべてをギルドにというのはやめておいた方が良さだろう。

いくらなんでも俺の冒険者ランクで、三か月間で二枚も売りに来るといのは多すぎるからだ。

なお、Cランクカードのギルドにおける買取価格は、定価の50%から80%が相場となっている。

一律定価の10%だったDランク以下のカードと比べて買取価格が跳ね上がるのは、それだけ需要に対して供給が少ないからである。ライカンスロープは使いやすく人気のカードの為、雄であっても三千万円前後で取引されている。

最低でも一枚千五百万円で売れると考えると、思わず笑みが零れる。それを考えれば売る際の手間など気にもならなかった。

「なあ、何でもいいけどよ、そろそろ行こうぜ」

そんな俺たちのやり取りを興味なさげに見つめていた蓮華が、お菓子を頬張りながら言う。

霊格再帰という確かなアイデンティティのある彼女は、他のカードのようにランクアップに拘らない節があった。

「お前は良いよね。Cランクカードだし、変身もできるしさ」

鈴鹿の雰囲気がつつたのか恨めし気なメアの言葉に、蓮華は珍しく顔を曇らせた。

あまり見ない珍しい表情に「お？」と思って見ていると。

「ああ……お前には申し訳なく思ってるよ。アタシみたいな選ばれし大天才が近くに居ちゃあ、そりゃあお前も劣等感を感じるってもんだよな。できればアタシのこの溢れんばかりの才能を少しでもわけてや「オラア！」」

蓮華のセリフを遮ってメアの跳び蹴りが炸裂した。ぶへえ！と吹き飛んだ蓮華だったがすぐに飛び起き、メアに食って掛かった。

「テメエ！ 喧嘩売ってんのか！」

「それはこっちのセリフだ！ 普通そこは謙遜したりアタシを慰め

るところでしょ。なんでまるで悪びれずに自慢してんのさ！」

「ああ？ ちゃんと慰めてやっただろっが！」

「どこが！？」

取っ組み合いの喧嘩を始める二人を、俺は手を叩いて止める。

「はいはい、そこまで。休憩は終わりだ。行くぞ」

隙あらばジャレあおうとするこのコンビに付き合っていたら、日が暮れてしまう。

「イライザ、ハーメルンの笛を」

「イエス、マスター」

さて、今日こそは目当てのカードが落ちますように。

俺は幸運の女神に祈りつつ、イライザの開いてくれた転移のゲートを通ったのだった。

第三話 シンクロリンク

月明りだけが照らす夜の森の中。俺は、虫の鳴き声に混じる無数の獣の息遣いと、微かに漂う血の臭いを感じとっていた。

最下層へと転移した俺たちを出迎えてくれたのは、無数の獣たちによる肌をピリつかせるほど濃厚な殺意だった。

冒険者を始めた頃の俺だったら、それだけで怖気づいていたであろう威圧感に、俺は微かに笑みを浮かべる。

最近、このピリついた空気を感じると『本来の場所』に戻ってきた……という感覚すら覚えるようになっていた。

俺も徐々に冒険者が板についてきたということなのだろうか、と思いつつ俺は転移してしまったことで切れてしまったリンクを繋ぎ直していった。

見えないラインで意識がつながり、感覚が拡張していく。

眼を開けると、自分の手も見えないほどの暗闇の森は、多少薄暗い程度の視界へと変わっていた。

ヴァンパイアであるイライザの視界をリンクで共有したのだ。

そうしているうちに、他のカードたちの視界も追加されていく。

メアが仲間たちにビジョン……暗視の魔法を掛けていつているのだ。一分もしないうちに、俺たちは無数の視界を束ねた一つの生物となっていた。

「よし、行くぞ」

階段付近の安全領域を一步出た瞬間、『待て』を解かれた犬のよ

うに獣たちが襲い掛かってきた。

夜の闇に溶け込むような漆黒の巨大な犬……Dランクモンスターのライラプスだ。狙った獲物は逃がさないという逸話を持つ女神アルテミスの猟犬である。

猟犬ということから、実際に見るまでグレイハウンドのようなシユツとした体形をイメージしていた俺だったが、実物は馬並みの体格を持つマスティフのようにムキムキの身体つきをしていた。

つまり、可愛らしさの欠片もない化け物ということだ。
ライラプスたちが一斉に飛びかかってくる。

「キャハハ、鬼さんこちら」

野生の本能でこちらの最も弱い部位である俺を狙ってきたライラプスたちが、突如その方向を一斉に変える。

向かう先は、嘲笑うように手を打ち鳴らす赤毛の美女……鈴鹿だ。目隠し鬼のスキルで敵のヘイトを一身に集めたのだ。

四体もの魔犬たちが、肉付きの良い肢体へ食いつかんと、殺到する。

「キャハハ……！」

歪な笑みを浮かべ目を爛々と輝かせた鈴鹿が、ライラプスたちを迎え撃つ。素早い身のこなしで敵の攻撃をかわしつつ、その細腕からは想像もできぬ怪力でライラプスたちを叩き伏せ、あるいは吹き飛ばしていく。

確かな見切りの技術と、鬼の怪力、それらを万全に活かす武の技の賜物だ。

叩き伏せられ隙だらけとなったライラプスたちは、一匹また一匹とウチのカードたちが止めを刺していく。

ユウキが一噛みで首を噛み千切り、イライザが抜き手で心臓を抉

り出す。蓮華とメアは上空を飛び、周囲の警戒と戦場の俯瞰を行っていた。

（マスター、おかわりみたいだよ！）

この場にいた五体目のライラプスを始末したところで、メアからそう思念が伝わってきた。見れば、六体ほどの増援がここに迫ってきているようだった。

『蓮華』

『はいよ』

蓮華の返答と共に、こちらへ向かってきたライラプスたちの足が止まる。遅れて悲鳴が聞こえてきた。

「ギャンツ！ キューン……！」

それは、モズの早贄に似ていた。

突如地面より現れた無数の岩の槍がライラプスたちを下から貫いている。哀れな魔犬たちは、宙でバタバタと脚を泳がせ血反吐を吐き散らしていた。

蓮華の中等攻撃魔法アースピアーズだ。

幸運にも躲すことが出来た個体も、メアと蓮華たちの追撃で頭を吹き飛ばされていく。

「うん、終わったな。行くか」

ものの数十秒でライラプスたちを始末した俺たちは、何事もなかったかのようにドロップアイテムを回収すると先に進んだ。

何十、何百回と戦ったことのある敵だ。今さらこれくらいの数

始末したところで達成感などない。

そんなことよりも、この程度の戦闘では脳にまったく負担がかからなくなったことの方に、俺は成長を感じていた。

——リンクの第一段階、テレパス。カードと感覚、感情、思念を共有する技術。

この数か月で、俺はリンクの初歩ぐらいは完全に使いこなせるようになっていた。

感覚の共有くらいでは何時間継続してもなんともないし、人間の何倍も速いカードたちの戦闘スピードにも意識が追いつけるようになってきた。

まあ、それ以上となると目下練習中なのだが……。

「アオオオオオーン！」

森を進みながら襲い掛かる猟犬たちを次から次へと屍へと変えていくと、森全体を揺るがすような咆哮が突如響き渡った。

どうやら鳴りやまぬ手下たちの断末魔に、親玉さんの方が先に我慢の限界を迎えたらしい。

「蓮華、そろそろ頼む」

「おう」

霊格再帰——神々しい光が夜の森を照らし、ヤンチャな座敷童が美と幸福の女神へと姿を変える。

「我が主に祝福を」

美貌の天女の微笑みと共に、暖かい光が俺を包み込む。肉体の隅

々まで清めていく感覚。何でも出来そうな高揚感。今なら生身でだつて主を倒せそうだ……。

そんな慢心にも似た万能感をなんとか抑え込み、俺は前方を睨み据えた。

全長三メートルを超える小山のような巨大な影が、周りの樹をなぎ倒しながら現れる。

それは狼頭の巨人だった。耳まで裂けた口は俺の頭など軽く丸のみに出来るほど大きく、鋭い牙が並んでいる。両脚は丸太のように太く……。両腕の爪は、もはや大振りのナイフと言われた方がしっくりくるほどであった。

「グルル、ゴオオオオオオ、ウオオオオオッッ！！！！」

バリアが無ければ耳がお釈迦になっていただろう咆哮を浴びながら、俺は懐から蓮華とイライザのカードを取り出した。

さて、今回はどちらで行くか。

【種族】 吉祥天（蓮華）

【戦闘力】 1200

【先天技能】

- ・ 吉祥天の真言：吉祥天の美と富と豊穰と幸運の権能を使用可能。
- ・ 二相女神：半身とも呼べる別の神の力を借り、変身することが出来る。

・ アムリタの雨：不死の妙薬であるアムリタの雨を降らすことが出来る。ただし若返り効果はなし。高等回復魔法を内包。

【後天技能】

- ・ 霊格再帰
- ・ 自由奔放
- ・ 高等攻撃魔法（CHANGE！）

- ・詠唱破棄（CHANGE!）
- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・高等状態異常魔法（CHANGE!）
- ・かくれんぼ

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】840（420UP! MAX!）

【先天技能】

- ・膏血を絞る：対象の血を啜り力へと変換する。血を消費することで肉体の再生や強化を行うことが出来る。蓄えた血が多いほど効果向上。状態異常への耐性を持つ。

- ・夜の怪物：蝙蝠や狼、霧などの姿に変身できる。夜の間は頭と心臓を潰さない限り消滅しない。日光や聖なる光を浴びると一定時間このスキルは無効化される。

- ・中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・絶対服従

- ・性技＋演奏＋畏解除

多芸（CHANGE!）：数多くの技能を身に着けた証。技術系のスキルの習得率向上。性技、演奏、畏解除、礼儀作法（NEW!）、武術（NEW!）を内包する。

- ・フェロモン

- ・奇襲

- ・静かな心

- ・庇う

- ・精密動作

- ・中等補助魔法（NEW!）

- ・魔力強化（NEW!）：魔法の威力を強化する。

- ・詠唱短縮（NEW!）

やはりこうして見ると戦力として圧倒的なのは蓮華だ。戦闘力は1000を超え、スキルも凄まじい。

一方で、イライザの成長力も素晴らしいものがあつた。この数か月で一番成長したのは間違いなく彼女だろう。

彼女の唯一にして最大の欠点であつた戦闘力の問題が解決し、多くのスキルが引き継がれた結果、イライザは名実ともに我がパーティーのエースとなつた。

瞬間的な戦闘力……という面では霊格再帰を持つ蓮華に軍配が上がるが、安定感という意味ではイライザが上だ。

やはりエースにはありとあらゆる面で役に立つカードで居てもらいたい。蓮華はそういう意味ではエースではなくジョーカーに近かつた。

……よし、決めた。

『今回はイライザで行く』

『承知した、取り巻きは我らに任せよ』

思念で短くやり取りを終えると、俺はイライザに意識を集中させた。

他のカードたちとは感覚を軽くつなぐ程度にして、意識の大半をイライザへと重ねていく。

まるで俺がイライザとなり、イライザが俺となつたような錯覚。

——リンクの第二段階、シンク口。マスターの意識をカードに乗せる技術。

全身に力が漲っている。快感にも似た一体感が、つま先から頭のてっぺんまで駆け抜けた。

ニヤリと笑みを浮かべ、『俺ノイライザ』は怒り狂う人狼へと駆

けだした。

一瞬でライカンスロープの足元まで潜り込むと、その膝裏へと蹴りを叩き込む。

膝を破壊するほどの膝カックンに、ガクリと体勢を崩す人狼。ちよつど良い位置へ頭が下がってきたので、そこへ掌底を叩き込んだ。鉄骨同士を打ち付けたような轟音。その結果を確認するよりも早く、詠唱していた魔法を解き放った。中等攻撃魔法、ライトニング。扇状に放たれた電撃がライカンスロープの全身を焼く。

「ガガガガガ……！」

苦悶の声を漏らすライカンスロープ。……つまり、生きていますということだ。死体は苦しまない。

ギロリ、と野生の瞳が俺を捉えた。老人の心臓くらいなら容易く止めてしまいそうな眼光。

しかしそんなことで『俺ノイライザ』の【静かな心】は揺らがない。

ライカンスロープの反撃。大木をも両断する爪撃を受け流すように防ぐ。【多芸・武術】のスキルが俺に最適な型を教えてくれる。

脳裏に走る閃きに従って体を動かすだけで、俺は一時的に武術の達人となることができた。イメージと実際の動きの齟齬は【精密動作】が埋めてくれる。

地面へと深い傷跡を残している人狼へと、カウンターの形で抜き手を放つ。ドクン、と右手が心臓のように力強く脈打った。これまで啜った数多の敵たちの血潮が、俺にさらなる怪力を与えてくれる。腕が深々とライカンスロープの眼へと突きたち、脳へと迫る。

———今だ。

指先まで俺とイライザの意識が綺麗に乗った。『俺ノマスター』から『俺ノイライザ』へとエネルギーが流れ込み、溢れ出した余剰エネルギーが赤いオーラとなって噴き出した。その勢いのままに、

雷を解き放つ。

「

——！！」

脳を致死の電流に焼かれた人狼が声にならない断末魔を上げる。

最後の足掻きか、電流による肉体の反応か。頭を振り乱す人狼に、ミリリと腕の関節が嫌な音を立てた。このままでは腕が持つていかれると、慌てて霧へと変身する。

その途端、バチンとブレーカーが落ちるような感覚とともに俺とイライザのシンクロが解けてしまった。

体が霧になるというあり得ない感覚を、人間である俺の脳が許容できなかったのだ。

小さく舌打ちして、すぐに気を取り直す。まあ、いいか。もう終わりだ。

俺の視線の先で、大木が倒れるような音を立ててライカンスロープが倒れ伏す。

徐々にその身体が薄れていき、そこには魔石と——一枚のカードが残された。

よし！ カードが落ちた！ さて、結果は！？

「ダメかぁ……」

鋭い目つきのイケメンが描かれたカードを見た俺は、がっくりと頂垂れた。

カードが落ちたことは嬉しい……嬉しいが、これが女の子カードだったらと思うとどうしてもコレジャナイ感が湧き上がってくる。

自分でも贅沢な話だとは分かってはいるのだが……。

微妙な顔をする俺の元にイライザがやってきて、なぜか頭を下げた。

「申し訳ございません、シンクロが解けてしまいました」
「いや、ありや俺の方のミスだ。やっぱ霧になる感覚は人間には想像し辛いな」

シンクロは、自分の意思をカードに乗せることで思い通りにカードを操る技術だ。

これによりテレパスによる指示よりもずっと繊細な行動をカードにさせることが出来る。

が、その反面人間の体ではありえない肉体的変化などには対応しにくいという側面もあった。

例えば獣型のモンスターや、体の一部分が他の生物になっているようなモンスターだと、カードに動きを任せた方がよっぽど上手く行くことも多い。

とは言え、それはあくまでシンクロの表面的な部分に過ぎない。

この技術の神髄は、カードの真の力を発揮させることにある。

通常、カードはその力を50%程度しか発揮できていないとされている。

これは、カードの力が常に半分程度マスターのバリアに使われている為だ。

シンクロは、そのバリアに使われているエネルギーをカードに戻すことで、戦闘力の制限を解除する技術なのである。

意識の共有などは、あくまでその副産物というかオマケでしかないのだ。

……当然、これにはマスターのバリアが薄くなるという欠点がある。

そのため、シンクロによる戦闘力の向上はここぞという時の切り札として扱われるのが普通だ。

例外は、魔道具によってマスターが保護されているコロシアムなどで、ここではむしろシンクロを使いこなせなければ戦いにすらならない……と『師匠』は言っていた。

シンクロはテレパスに比べてかなり難易度が高く、俺などはまだ一体ずつしかシンクロすることができない上、その力も7〜80%程度しか解放できていない。

これが熟練者ともなると、パーティー全体にシンクロを使うことができるとも聞く。

……カードについての技術を知れば知るほど、『師匠』の凄さを思い知る。

つくづく、大会で優勝できたのは運が良かったのだと実感していた。

「さて、じゃあガツカリ箱を開けて帰るか。……あんま期待できないけどな」

蓮華の祝福は、運の前借りみたいなところがある。カードが落ちなかったらガツカリ箱は少しアタリが出やすくなるが、逆にカードが落ちた時は中身が微妙……みたいなのがいつもの流れだった。

それがみんなもわかっているのか、あんまり期待した空気はなかった。

ところが。

「おお、マジックカード！」

そこに入っていたのは、『遭難』のマジックカードだった。

マジックカードとは、一回限り人間でも魔法が使えるというカード型の魔道具である。

迷宮内ではか使えないという制限はあるものの、人間でも魔法が使えるようになることでグッと戦略の幅が広がるため、人気の魔道具であった。

『遭難』は、『転移』の下位互換というか真逆の効果を持った魔法で、自分がまだ足を踏み入れていない階層にランダムで転移する

ことができる。

初めて入る迷宮で、最初の方の階層を攻略するのがめんどくさいな〜という時に、あわよくば奥の方に飛ぶことが出来ないかな？という軽い運試しのように使われることが多い。

そんなイマイチ使い勝手が悪い魔法なものにもかかわらず、『転移』とは異なりモンスターカードの魔法系スキルに存在しないこと、また迷宮からドロップする確率が低いことから、より使い勝手の良い『転移』のカードと同額の値段がするという冒険者からはクソ魔法扱いされているカードだった。

とは言えそれは買う側の場合の話であって、自力で入手した側にとってはそこそこの値段で売れるアタリのアイテムではあった。

「やりましたね！ アタリですよ、ご主人様！」

「お、おお」

無邪気に喜ぶユウキに対して、俺は喜ぶに喜べない。

なぜなら……ちょっと運が良すぎるような気がしていたからだ。

ランクカードをドロップした上に、高額で売れるマジックカードまでとなると、少し幸運の揺り戻しが怖かった。

「ほお、これは……なるほど」

後ろからカードを覗き込んだ蓮華が意味深に呟いた。

「な、なんだよ」

「いやなに……」

顔を引き攣らせる俺に、蓮華はなんとも妖しげな笑みを浮かべた。

「どつやら……今年も退屈せずに済みそうだな、マスターよ」

第三話 シンクロリンク（後書き）

【Tips】テレパスとシンクロ

マスターとカード間の感覚や感情を共有する技術をリンクの中でもテレパスという。テレパスはリンクの初歩中の初歩の技術であるが、これをさらに深化させることにより感情や感覚だけでなくマスター本人の意識そのものまでカードに乗せることができるようになる。これが、リンクの第二段階 シンクロである。

マスターとカードが同一化を果たすことにより、マスターは自分を守るバリアからカードへとエネルギーを回せるようになる。これにより通常はバリアの維持により半分程度の出力しか出せていないモンスターが、本来の力を発揮できるようになる。

初歩にして奥義となる技術。テレパスとシンクロを極めれば他のリンクは不要と言う冒険者もいる。

纏と練のオマージュとか言う読者は制裁・・・っ！

第四話 さよなら東西コンビ

「ふわあああ〜〜」

朝、通学路を歩きながら俺は迫りくる眠気と戦っていた。

春の麗らかな陽気は、ポカポカと俺の身体を暖め睡眠に最適な体温へと誘ってくる。

このまま学校を休んでどこかで情眠を貪りたい、そんな欲求が湧いてくるほどだ。

こんな時に頭に過るのが、学校行く意味ってあんのか？ という問いである。

学校とは、勉学を学ぶところである。現実的な話をするなら、学歴をつけて就職先を探すためのところである。

大学に進学するにしても、高校を出てすぐ働くにしても、どっちみち高校は出る必要がある。

だが、俺は将来を決めている。冒険者だ。冒険者に、学歴は必要ない。それは、高校生でありながらすでに一千万以上の金を稼いでいることからわかるだろう。

つまり、収入と言う面で言うなら俺は高校を卒業する必要などないのだ。むしろ今すぐにでも専業になった方が稼げるくらいである。そう考えると、眠気を我慢して学校に向かうのが余計億劫になるのだ。

まあ、そんなこと言ってちゃんと行くんだけどね、学校。

中卒プロ冒険者とか、絶対デビューした時にネットで笑われるし、親も絶対に許さないだろう。

学校は学業を学ぶためだけの場所ではない、というのもある。それになにより……。

俺は前方に見知った人影を発見して、軽く駆け出した。背後から明るく声を掛ける。

「おはよ、牛倉さん」

「あ、おはよ、マロくん」

彼女はくるりと振り返ると、ほんわかした笑みを浮かべてくれた。俺も、満面の笑みを浮かべる。

……それになにより、学校には牛倉さんがいるもんな。それだけで行く価値があるってもんだ。

冬が終わり。春休みを過ぎて二年生に進級した俺は、クラス替えにより再びモブへと戻ってしまった。

……なんてこともなく。

俺は自然とカーストトップグループの仲間入りをした。

やはり、TVにも出るレベルの冒険者という肩書は大きかったということなのだろう。

しかも同じクラスには牛倉さん、四之宮さんもあり、俺はこれに運命的なものを感じずにはいられなかった。

去年は、年の終わりの方にグループ入りしたということもあって、微妙に居心地の悪い想いをすることもあった俺だが、これからは違う。

今度は、新学年の初めから牛倉さんと同じグループだ。

あとから同じグループになるのと、最初から同じグループなのでは大分雰囲気が違う。

しかも、周りが知らない顔ばかりという中で、元同じグループだった俺たちは去年以上に自然に話すようになった。

……残念ながら東西コンビとは別のクラスとなってしまうたが、

それを除けば俺は新クラスで良いスタートを切っていた。

このまま、牛倉さんと徐々に距離を縮めてやるぜ……！

俺は密かに決意を固めていた。

「今日、なんかあったっけ？」

「体力テストがあるって昨日先生が言ってたよ」

「あゝ、そうだそうだ」

牛倉さんと何気ない会話をしながら歩く。

こうして登校中に彼女に気軽に挨拶できる仲になるとは、一年前の俺がどう想像できただろうか。

これまででは、俺は彼女を遠目にみることでしかできなかった。冒険者にならなければ、今も、一年後だってそのままだっただろう。

そう考えると、俺は着実にリア充への道を突き進んでいると言えるのではないだろうか。

……彼女が出来る気配は、まだ微塵もないが。

雑談しながら牛倉さんと一緒に教室に入ると、クラスにはすでに大多数が揃っていた。

……人間関係がある程度リセットされる新学年のこの時期は、朝のHR前のちよつとした時間すら重要な物となる。ここを疎かにする奴らはなかなか窮屈な思いをすることになるだろう。

これはクラスカーストとか関係なく、これからの一年を楽しく過ごせるかと言う将来を占うものだからだ。

例えばその机に伏せて寝ている奴……余裕ぶっこいてるとボツチな一年を過ごすことになるぞ。

俺は一度も話したことのないクラスメイトに内心で警告を送りつつ、教室を見渡した。

クラス替えから一週間。クラスの中には、すでにいくつかのグル

ープが出来上がっているようだった。

やたら声がデカイのは、運動部系のグループだろう。練習中やたらと声出しを要求される彼らは、可哀そうに地声がかなり大きくなっているのですぐわかる。

このグループは基本的に男女に分かれているのだが、結構頻繁に男女間のやり取りがあったりするのが特徴の一つだ。

そのため、実はカーストトップグループよりもリア充に近いのでは？ という疑いを俺は持っていた。

基本的に窓際を占拠しているグループでもある。

次に、大人しめの男子、女子のグループ。文化系の部活や帰宅部の草食系が大体を占めるグループだ。

ルックスは時々上の下くらいのが混じる程度で基本的には普通の顔だちが多い。

このグループは、なぜか男女間であまり混じり合おうとしないのが特徴だ。とは言え、仲が悪いというわけではなく、むしろ異性には興味あり有りなのが透けて見える。

運動部系に苦手意識を持っているのか、彼らとは対極の壁際を占拠している。

教室の隅っこの方にあるのが、オタクグループだ。男しかない悲しい集団である。

女のオタクもクラスに存在するのだろうが、オタクグループではなく大人しめグループに普通に混じっている。男のオタクだけが、排除されるように徒党を組まされているのだ。

教室の隅っこにいるのも、自分の席を他の奴らに奪われてそこにいくしかないからである。

残念ながらカーストでは下に属する集団となる。休み時間などは俺もここに混じることもあった。他の連中からは見下されているが、

みんな気の良い奴らである。

この他にも、教室に点在するように誰ともツルんでいないものたちが存在するのだが、今回は説明を割愛させてもらう。集団の中にあつて一人で居ることを選んだ、孤高の戦士たちだ。

最後に、教室の中心で男女入り混じって談笑しているのが、カーストトップ勢とその取り巻きの一軍半たちだ。

カーストトップ勢は、顔が際立って良かったりオンリーワンの一芸を持った者たちである。俺も一応この中に含まれている。

現在のメンバーは、読者モデルの四之宮さんに、その幼馴染で親友の牛倉さん、現役冒険者の俺に、イケメンでテニス部エースの神道、それとお笑い担当の小野だ。

そう、小野の奴もまた同じクラスなのである。なぜ東西コンビが別のクラスでコイツが同じクラスなのか……。まあ今は、コイツのことはどうでもいい。

一軍半たちは、ファッションや流行に敏感な者たちが多いグループだ。一方でトップに入れるほど顔が良かったりセンスが良かったりするわけでもないグループでもある。

一軍半のグループは少し複雑な面があり、カーストトップ勢の取り巻きのグループと、カーストトップ勢に成り代わろうという2つのグループが存在する。

前者は主に四之宮さんや神道の友人たちで、後者は読者モデルの一条かおりとチヨイ悪系イケメンの獅子堂率いる男女混合グループだ。

……これらことからわかるように、一条さんたちのグループは、ポテンシャルだけはカーストトップ勢になることが出来るグループでもある。というか、実際一年の頃はカーストトップ勢だったよう

だ。

ところが、新しいクラスには二人の上位互換と言える四之宮さんと神道が同じクラスに存在してしまった。

結果、彼女たちは一軍半……というナンバー2グループとなっ
てしまったのである。

当然、彼女たちはカーストトップ勢を敵視している。特に一条は四之宮さんを、獅子堂は神道を。

一方、四之宮さんも神道もそれを全く気にしていない。四之宮さんは相手を完全な格下と見なし、天然なところがある神道は敵意にすら気づいていなかった。

……今日もクラスカーストは複雑怪奇なり。

一年の頃はカーストトップになりたくて堪らなかった俺だが、実際所属してみると「コレジャナイ感」が日増しに高まっていく。

正直、今の俺はもうクラスカースト自体には強いこだわりはない。見下されたくはないが、何が何でもこの地位をキープしたいという思いはなかった。今の俺の目標は、クラスカースト上位ではなくリア充になることと、冒険者として少しでも前に進むことだからだ。

とは言え、興味が無いからとクラスでの人間関係を疎かにすることはできない。

妬み嫉み……転落の火種はいくらでもそこらに燻っている。今の地位に胡坐をかいてふんぞり返っていれば、その先に待つのは都落ちだ。

それは、いざとなればいつでも一人で生きていくことが可能な俺ですら例外ではない。

これは、勉強なのだ。

いずれこの学生と言う集団から旅立った時に、別の集団に移った際に排斥されぬようにするための術を学ぶ場所……それが学校であ

り、スクールカーستなのである。

軽く教室を見渡してクラス内のパワーバランスに変わりがないことを確認した俺は、牛倉さんと二人教室の中心へと向かう。

「おう、師匠！ おはようさん！」

真っ先にそう挨拶してきたのは、怪しい関西弁の男、小野だった。一年の頃から勝手に師匠師匠と呼ばれ続けた結果、すっかりコイツの師匠役というのが既成事実化してしまった。もはや当人である俺がいくら否定しようと思わないほどだ。

「おはよう。師匠じゃないけどな」

でも一応はちゃんと否定しておく。たとえ手遅れでも俺がちゃんと否定しないと認めたことになってしまう。

そんな俺の悪あがきに小野はニヤニヤ笑いながら言う。

「またまたあ、そんなこと言って僕の二ツ星昇格にもしっかり協力してくれましたやん」

「う……」

痛いところを突かれたと、俺は言葉を詰まらせた。

そうなのだ、なんだかんだ言っただけ俺はこの似非関西弁野郎に少しばかり手を貸してしまっているのである。

要らないD・Eランクカードを相場よりかは割安で売ってやり、Eランク迷宮に役立つ装備を教えてやり……。

その甲斐あってか、コイツもこの春休みに無事二ツ星となっていたのだった。

「冒険者にはあんまり詳しくないんだけどさ、やっぱ二ツ星になる

って難しいのか？」

そう問いかけてきたのは、二年に上がってから同じグループになった神道 光一だった。

高身長かつ甘いマスクの爽やか系のイケメンで、なおかつ性格も良くテニス部のエースという完璧超人だ。

まさに人々の思い描くリア充の見本のような奴である。

「そりゃあもう！ 金を払えばなれる一ツ星と、試験を受けなきゃなれない二ツ星とじゃあ全然格が違うわ」

神道の言葉にここぞとばかりに食いついたのは小野だった。二ツ星になるのがいかに大変だったか、滔々と語り始める。

「まず二ツ星からは迷宮に罠が出現するねん。これがえげつないもんじゃないでなあ、カードのバリアとボディーアーマーが無ければ何度死んでたかと……。師匠も確か胸にボウガンの矢が突き刺さったことがある」とか言うてなかったか？」

「ん？ ああ……」

俺が頷くと、周囲のクラスメイト達から「おお！」とか「やべえ」というざわめきが漏れる。

「迷宮の深さも一ツ星の頃とは段違いや。

日帰りで攻略することも不可能じゃあなかったFランク迷宮とは違って、Eランクでは泊まり掛けでの攻略が基本になるさかい冒険者の身体に掛かる負担も大きいんや。僕の潜ったEランク迷宮も、踏破すのに三日かかったわ。

しかも一発やなく、三度目のチャレンジでようやくクリアって感じやったわ。春休みじゃあなければ正直無理やったな」

「うへえ、そんなに時間かかるのかよ」
「しかもキャンプとかじゃなくてモンスターの出る迷宮の中でしょ？ アタシじゃ絶対無理だわ」

クラスメイト達の反応に気をよくした小野はさらに続ける。

「それだけやないで。モンスターのレベルもぐんとあがるのがエラ
ンク迷宮や。道中までのモンスターは、まあDランクカード一枚で
も事足りる。」

でもボスは同じDランクカード、しかもボス補正持ちや。一対一
じゃあ勝ち目がない。つまり、最低二枚、できれば四枚のDランク
カードが必要ってことや。

僕はなんとか三枚のDランクカードを用意してクリアした感じや
な。あと一枚でも少なかったら多分一枚はロストしてたと思う」

「ロストって……Dランクカードって一枚数百万だろ？ きつつ」
「そついやあ、二ツ星の合格率は50%とかってTVで言ってたの
聞いたことあるわ。しかもその半分がそのまま二ツ星になるのを諦
めちまうんだってよ」

「やつぱ冒険者って旨味もあるけどリスクも高いな」

その後も如何に二ツ星昇格試験が過酷だったかを、実感を込めて
語る小野。

すると、徐々にクラスメイト達の小野を見る眼が変わっていくの
がわかった。

これまで、クラス替えをしたばかりで小野のことをよく知らない
クラスメイト達にとって、小野はどうしてカーストトップにいるの
かよくわからない奴という感じであった。

ぶっちゃけ四之宮さんや俺たちとのコネでグループ入りしている
お調子者のデブ……それがクラスメイト達の小野に対する評価で、
虎視眈々と奴の座を狙う空気がクラスにはあった。

小野もそれを察していたし、またクラス替えによってこうなることを予想していた。

故に小野は、春休みに俺に土下座してまで二ツ星になったのだ。

あの時は……マジで度肝を抜かれた。

これまでの人生で他人に本気の土下座をされたのなんて、あれが初めてだったからな。そのインパクトたるや……もはや一種の脅迫ですらあった。

しかしそれだけに小野の真剣さが伝わってきて、俺もコイツに協力してやるうと思っただのだ。

そして見事に二ツ星試験に合格して見せた。

俺の知る限り、誰よりもクラスカーストと言うものに真剣なのは、間違いなくこの小野だった。

「……マロっちも面倒見がいいよねえ。あんな奴ほっとけばいいのにな」

クラスメイト達に囲まれる小野を見ると、四之宮さんがそう囁きかけてきた。

「まあ俺にも色々メリットがあったからさ」

俺が小野に売ったカードは、定価の二割引きという値段だった。

奴はギルドで買うよりも安く、俺はギルドに売るよりも何倍も高く売ることができるといふWIN・WINの取引だったのだ。

さらには、小野とは今後ギルドではなく俺から優先的にカードを買うという契約を結んでいる。

おまけにその取引も現金ではなく迷宮で手に入れた魔石払いとなっていた。

現金でのやり取りとなるとどうしても税金の問題が絡んでくるが、魔石ならば足がつかない。

冒険者の税金は収穫物を現金化した際に初めて生じるからだ。そして俺がその魔石を売却する際は、同時にカードを購入してしまえばその分税金の控除を受けられる。

これが冒険者の間で知られているちょっとした節税テクニクであった。

とその時、不意に小野と目が合った。奴はニヤリと笑うと。

「いや、やっぱり冒険者の星は一つ違うだけで別世界やで。一ツ星から二ツ星になるだけでリスクもリターンも大違いになったからなあ。二ツ星になるだけでこれなんやから、三ツ星はどんだけすごい世界なんやろうなあ」

小野の誘導により、クラスメイト達の俺に対する視線が「よくわからないがTVにも出てる凄い奴」かられっきとした敬意へと変わっていくのを感じた。

これも奴なりの恩返しの一つなのだろう。これでおそらく一年は俺はカーストを意識せずとも今の地位をキープできるはずだ。クラスカーストなどの煩わしいことに気を取られることもなく、俺が冒険者に専念できるように、という小野からのメッセージだ。

まあ、その裏には自分の後ろ盾を強化するという思惑もあるのだろうが。

まったくコイツは……。

俺が小野の抜け目のなさに苦笑していると、ガラリツと力強く教室の扉が開いた。

もう担任が来たのかと、クラス中の視線が集まる中――しかしそこに立っていたのは教師ではなく、鮮やかな赤毛をした美少女だった。

小柄で細身ながら起伏のある身体つきに、日本人離れた肌の白さと宝石のような碧眼。その整った容貌とあいまって、まさに人々の憧れるハーフの美少女と言った感じであった。

……って、あれ。あの顔、どこかで見たような。

赤毛の少女は、クラスをキョロキョロと見渡していたが、俺と目が合うとパツと顔を輝かせた。

「先輩！ お久しぶりッス！ いやあ、探しましたよ」

真っすぐにこちらに向かってくる彼女に、俺は動揺を隠せない。
な、なんでコイツがここに……。

「ウチのこと覚えてます？ 十七夜月 杏菜っすけど」

「あ、ああ……久しぶり」

実際に会ったのは大会以来だが、気まぐれのようにたまたまラインが来ていたのでその存在は覚えていた。

だが……。

「な、なんでここにいるんだ？」

「ふふん、この制服を見てわかんないッスか？」

そう言ってクルリと一回転するアンナ。ドヤ顔を浮かべて俺を見る。

「もしかして、うちに入学してきたのか？ え？ なんで？」

「それはもちろん先輩がいるからに決まってるじゃないッスか！」

『おお！？』

アンナの言葉にクラスがざわめいた。皆の眼が輝いている。

突然ハーフの美少女が上級生の教室に乗り込んできたと思ったら「あなたに会うために入学してきました」と来た。インパクトは十分だ。

俺は衝撃を通り越して眩暈までしてきた。

いや、ちよつと、まって、気持ちの整理が……。え？　もしかして、そういうこと？

俺の思春期な心が暴走しかけたその時、アンナが満面の笑みを浮かべていった。

「先輩、ウチと冒険者部を作りましょう！」

第四話 さよなら東西コンビ（後書き）

【Tips】魔石払い

冒険者間でカードの売買を行う際に使われる節税テクニック。冒険者のカードの購入は経費として計上されるが、経費として認められるのはギルドなどの公認カードショップや公式のネットオークションで購入した物だけであり、個人間で売り買いしたものは経費として認められない。結果、相場よりも安く手に入れたとしても結局税金の関係で高くついてしまうことがある。

これを回避するため編み出されたのが、現金ではなく魔石で取引をする魔石払いである。

これにより税金の発生を防ぐことができるが、一方でカードの持ち逃げや偽魔石の混入など様々なトラブルが発生する可能性が高くなる。

あくまで信用できる知人相手の取引に使うのが望ましい。

第五話 話は聞いた！ 人類は滅亡する！

「で、一体どういっつもりなんだよ」

放課後。俺はアンナと学校近くのファミレスへと来ていた。

あの後、教室を好奇と混乱の渦に叩き込んだアンナは、担任が来るとあっさり去っていった。放課後に迎えにくると残して。

大変だったのは、俺だ。クラス中から、あのハーフっばい美少女とはどういう関係なのかと問い詰められた。

誰かが、アンナがダンジョンマートの社長の娘だということに気づくと、勢いはさらに熱を増した。もはや熱狂の域だ。

クラスの男子たちからは嫉妬で人を殺せそうな眼で見られるし、散々だった。

そうして約束通り迎えに来たアンナをとっ捕まえると、俺は逃げるようにこのファミレスへとやってきたのだった。

「おい、聞いてんのか？ そっちのせいで俺は大変だったんだぞ」

「へ？ や、すいません、聞いてるツス」

なぜか興味深そうにキョロキョロと店内を見渡していたアンナは、我に返ったように頭を下げた。

どうしたんだ、コイツ。まさかファミレスが初めてってわけでもないだろうに……いや、もしかして。

「まさか、こっぴつところ来るの初めてとか？」

「いや、お恥ずかしながら。両親が過保護なもので」

恥ずかしそうに頭を掻くアンナ。

マジかよ……、ファミレス入ったことないとか。そういう家庭、本当に存在するんだな……。

俺はこの少女が本物の上流家庭であることを思い出し、戦慄した。

「え、じゃあ普段どういうところで食ってたんだよ」

「まず外食自体が少ないツスね。基本は家で松本さん……あ、シエフが作ってくれるものを食べてます」

「シエ、シエフと来たか」

そりゃ、外食したりせんわな。

「年に数回程度外で食べる時は、せつかくなので半年くらい前から予約が必要なところで食べるツス」

「ほ、ほほう……」

あらやだ、この娘本当にお嬢様じゃない。

「ま、まあそんなことはどうでもいいじゃないツスカ。本題に入りましょう」

「お、おお。そうだな。お前、あれはどういうつもりなんだよ」

いきなり冒険者部を作りましようとか。ラノベの導入部かと思っただぞ。しかも、雑な奴。

「言葉通りの意味つすよ。ウチと先輩で冒険者部を作りませんか、って意味ツス」

「いや、だからそれが意味わからん」

「いやあ、やっぱ高校生になったからには、こう、青春っぽいことしてみたいじゃないツスカ？ 新しい部活を作るとか、なんかよ

くないツスカ？」

照れ臭そうにそういうアンナに俺は微笑ましいものを見るような笑みを浮かべ……。

「ハイ、解散」

「ああっ、ちよっと待っててくださいッス！」

席を立つ俺をアンナが慌てて押しとどめる。

「ホラ、料理も来ましたし！ ねっ？」

「しょうがねえなあ〜」

ちよつどその時料理が来たこともあって、俺はしぶしぶ腰を下ろした。

テーブルに、料理が並べられていく。俺が頼んだのは、「とろーり卵のオムライス」とサイドメニューのスモークサーモンサラダ。なんだかんだ言つて、デニムズで一番おいしいのはオムライスだと思ふんだよな。家で作るオムライスとも、ちゃんとした洋食屋で出されるオムライスとも違う、デニムズでしか食えない不思議なオムライスだ。

一方アンナは期間限定のハンバーグを頼んだようだった。

「いただきます。……おお！ ウチが知ってるハンバーグと違う味がするッス」

褒めてるんだか貶してるんだかよくわからない感想を漏らすアンナに、俺は食べながら問いかけていく。

「で、マジでそれだけが理由なの？」

「まあそれも動機の一つですけど、マジな理由もちゃんとあるツス。一応聞いておきますけど、先輩は将来プロになるつもりはあるんスよね？」

「当たり前だ」

即答する。三ツ星まで来るような奴は、そのすべてがプロ志願者と言って過言ではない。

俺の答えを聞いてアンナは満足そうに微笑んだ。

「さすがツス。それでこそウチが見込んだ男。じゃあ、そんな先輩は当然プロになるための条件を知ってるツスよね？」

「ああ、もちろん」

三ツ星までの昇格とは違い、プロである四ツ星からは昇格の難易度が大きく上がる。

八枚以上のCランクカードの所持。百種以上のDランク迷路踏破実績。各種法律に関する筆記試験に、プロ冒険者との実戦形式の対戦等のいくつかの実技試験……。

どれも一朝一夕にはいかないものばかりだ。

一番時間が掛かるのは、百種以上のDランク迷路踏破実績だろうか。Dランク迷路の深さは二十一〜三十階。ハーメルンの笛を持つ俺ですら容易ではない深さとなる。しかも、昇格に必要なのは、別々の迷路と来ている。東京都に存在するDランク迷路の数は四十程度。どうしても他県への遠征が必要となってくる数字だ。

心理的なハードルが一番大きいのは、やはり筆記試験だ。これは、難易度自体は実技と比べたら簡単と聞くんが、筆記試験と聞くだけで拒否反応が出るのは俺だけではないだろう。

いずれも時間が掛かるものばかりとあって、俺はじっくり取り組んでいくつもりだった。なんせ、一番簡単と思われる八枚以上のCランクカード所持すら満たしていないのだから。

「じゃあ、これはご存知ですか？ 迷宮踏破実績は、チームでの合計でも良いってことは」

「えっ、いや、知らなかった」

「まあ、これはギルド側からは広報されていない情報ツスからね。一応、この方法には制限もありますし」

アンナ曰く。

冒険者ギルドには、チーム制度と言うものがあり、個人の評価とは別にチームごとの評価が行われているらしい。

たとえ本人の評価が三ツ星であっても、四ツ星クラスのチームに参加していればチームでの活動に限り四ツ星冒険者として扱われる。また、チームで活動中の実績は個人としての実績に加算されていく。つまり、チームで百種のDランク迷宮を踏破しても、個人で百種のDランク迷宮を踏破しても昇格には関係ないということだ。

個人と複数、どちらが簡単かなど考えるまでもないことだ。なんせ、事前に報告さえしていればバラバラの迷宮に潜っても実績としてカウントされるのだから。

「でもそれじゃあ百人のチームを作って一人一カ所ずつ踏破すればノルマ達成ってことにならねえか？」

「その方法でもチームとしては問題ないツスけど、チームから抜けたら三ツ星に戻っちゃうんで究極的には意味ないツスね」

「他の奴が稼いだ実績は、個人には加算されないってことか。じゃあ、なんでチームなんて組むんだ？」

「そりゃあもちろん、本来の自分のランクより上のランクの迷宮に潜るためツス。Dランク迷宮をいくら潜ったって、Cランクカードなんてドロップしないツスからね。Cランクカードのドロップ率知ってます？ 0.1%ツスよ？ Dランク迷宮の主狙いじゃあ一生かかって自力じゃあ無理ツス」

「そ、そうだな……」
「……？」

すでにDランク迷宮から三枚もCランクカードを手に入れている俺は、曖昧に言葉を濁すしかなかった。

「……となると、Cランクカードを手に入れるには買うしかないわけッスけど、それも金銭的負担がデカすぎる。できれば自力で手に入れたいところッスよね？ となると……」

「Cランク迷宮に潜るしかない、と。そこでチームが関係してくるんだな」

「その通りッス。ちなみに、試験とかはリーダーがクリアすればOKらしいんで、そこも人気の理由ッスね」

「ほう！」

試験嫌いの俺としては助かる制度だ。

そんな俺を見て、アンナがニヤリと笑う。

「ちなみに、ウチは既に筆記試験をパスしてるんで、あとはカードと実績、実技だけッスね」

「マジかよー！」

コイツやるなあ、と俺は素直に驚いた。

「つまり、ウチとチームを組めば、四ツ星まではあとは迷宮を潜っていけばいいってことッス」

「なるほど……いや、待て待て。なんでお前とチーム組む話になっただよ。別にすでに四ツ星のチームに入ればいいだけじゃね？」

俺の言葉に、アンナは軽く鼻で笑った。

「それができるならやればいいんじゃないツスカね？」

「なんか感じ悪いな。そう言うつてことは難しいってことか？」

「まあ男の場合は特に。ウチみたいな美少女だったら入れてくれるでしょうけど、そういうのはごめんツスね」

「……なるほど」

そういう感じが。

「というわけで、基本的にチームは入るものじゃなくて作るものなんスよ。下手なところに入ると逆に辛いツスよ。中には上納金みたいのを要求されることもあるらしいツスから」

「マジか」

なんか排他的なんだな……。
というか。

「まあチームのことはわかったよ。それと冒険者部のなにが関係あるんだよ」

部活にする必要なんてねえだろ。俺とアンナでチームを組めば良いだけだ。

「まあただのチームを作るだけならそうツスね」

とアンナは頷き、そこで表情を引き締めた。

「……先輩は迷宮終末論って知ってますか？」

「迷宮終末論……」

それは、一種の人類滅亡説だった。

迷宮がこの世界に現れてからというもの、その数は世界中で増加の一途を辿っている。

日本だけで言っても、当初百個前後だった迷宮は、この二十年間で七千個という驚異的な数字となっていた。

その最大の要因は、アンゴルモアだ。迷宮の数は、第一次アンゴルモアで一気に千個に、第二次アンゴルモアでは五千個に増加している。このことから、アンゴルモアは迷宮の繁殖行為であるという説が有力だった。

迷宮の総数の増加は、時間経過による自然発生にも影響を与えた。

第二次アンゴルモア以降、それまで一年で十個程度だった迷宮の増殖速度は劇的に加速し、この十年で二千個も増加している。

およそ一年に二百個。これは、ある日突然自分の学校や勤務先が迷宮化しても不思議ではない数字だった。

その一方で、人類は迷宮を消滅させる方法もまだ見つけていない……。

もし、もう一度アンゴルモアが起きれば、迷宮の数は一気に数万个増加すると言われている。それに伴い自然発生の方も今の数倍になるとも……。

このままでは、地球上を迷宮が埋め尽くしてしまうのでは？

人力でのアンゴルモア対策もいつかは追いつかなくなり、世界中の迷宮からモンスターたちが溢れ出してきてしまうのではないか。

その時こそ、人類滅亡の時である。

……というのが迷宮終末論だった。

「お前、あれを信じてんのか……」

「おや、先輩は信じてないんすか？」

「信じてないというか……」

確かに、増え続ける迷宮とそれを消す方法が見つかってないことには、若干の危機感を覚える。

だが、一年や二年で迷宮が地球上を埋め尽くすというわけでもなし、それまでには頭の良い人たちが迷宮を消す方法を見つけ出すだろうとなんとなく思っていた。

迷宮からは役に立つモノが色々発見されているし、そんなに悪い結末は迎えないんじゃないだろうか。

それが、俺を含めた一般の人々の考えだった。

「先輩、それはマスコミにだいたい思考誘導されてるツスよ……」

ところが、俺の考えを聞いたアンナは呆れたような哀れなものをみるような眼で俺を見てきた。

「な、なんだよ」

「いいツスか？ 先輩が思ってる以上に世界は迷宮に関して危機感を募らせてるんすよ。はっきり言って世界の富裕層は、迷宮による文明崩壊は防げないものと見なしてるツス。なぜ、ランクカードやBランクカードが値崩れしないどころか値上がる一方なのかわかるツスか？」

「え……プロを指す奴が多くなって供給に対して需要が大きくなってきたから、じゃねえの？」

「それはニユースの報道ツス。需要は確かに増加してるツスけど、供給はもっと増えてるツスよ。冒険者が世界的に増えてんすから。」

答えは、国や富裕層がガンガン買い取ってるからツス。市場に回ってるのは、供給に対するごく一部なんすよ。一部の魔道具も同様ツス」

「マジか……」

これが、そこら辺の一般人が言っていたなら俺は鼻で笑っていた

だろう。

だが、長者番付にも載る大金持ちの一人娘が言っているとなると、言いようのない説得力があった。

「先輩はその気になれば中学生でも冒険者になれることを不思議に思ったことはないツスか？ 命の危険があるのに……普通だったら絶対許可しないツスよ、こんな制度」

「確かに……」

未成年が危険な迷宮に潜ることをよく社会が許可したな、と思ったことはあった。健康に害があるという理由で、未だに酒やたばこが二十歳からとなっているにもかかわらず、だ。

「つまり、それだけ政府も焦っているということツス。少しでも冒険者を増やしてアンゴルモア対策をし、またその一方で迷宮消滅の方法を探る……。これが今の世界各国の方針ツス。ニュースでは報道されないツスけどね。マジで切羽詰まってきたらそのうち徴兵染みたことまで始めるんじゃないツスか？」

「……………」

「一応、火星のテラフォーミングも進められていますけど、迷宮が溢れ出すのとどっちが先か……。仮に間に合ったとしても、移住できるのは限られてるでしょうね。大多数はモンスターであふれかえる地球に取り残されるでしょう。ゴキブリが進化して住めなくなるなんてイレギュラーが発生する可能性だってある。その時に必要なのはなにかわかりますよね？」

いつの間にか、ツスという語尾が消えているアンナ。それだけマジで話しているということなのだろう。

俺は唾を飲み込みながら答えた。

「バグズ手術……」

「じょうじ……ってなんでですか！ いや、さりげなくネタを振ったのは自分っすけど、これ一応真面目な話なんで！ ちなみに自分はアドルフが一番好きッス」

ちなみに俺もアドルフが一番好き。

リテイクを要求された俺は、今度は真面目に答えることにした。

「……身を守る力か？」

「その通りッス。そして力とはカードだけじゃなく、信頼できる仲間のことでもある……」

「それを、部活動という名目で誘うって？」

「聞いたことがないッスか？ 学生時代の仲間は一生の付き合いになるって。利益でつながっただけの仲間じゃあ弱い。絆でつながれた仲間が欲しいんすよ。プロ以上を目指すものたちだけを集めて、卒業後もチームを組んで活動する。後輩を組み込んでいくことで、新しい戦力も補充していく。先のことまで考えると、部活って形が一番良いんすよね」

「むう〜ん……」

言ってることはわかる。わかるのだが、どうにも理屈をこねているようにも見えた。

「で、本音は？」

「え、いや、今のが本音……」

「まあそれはそうなんだろうけど、それだけなら他にやりようがあるよな？ 部活でやりたいってのは、お前のこだわりだろ？」

「っ」

俺の指摘は凶星をついていたようで、アンナは目に見えて怯んだ。

無言で見つめてやると、やがて観念したようにもじもじと語り出した。

「……とか、……っばいから」

「え？　なんて？」

「ッー！」

聞き取れず聞き返すと、アンナが耳まで赤くして小さく吠えた。

「新しい部活を作るとか、リア充っばいからって言ったの！」

「お、おお……」

キーンと鳴る耳を抑えながら俺は頷いた。

「だ、だってラノベとかじゃ、いろいろ存在しない部活を作って、楽しそうにしてるじゃないツスカ。だから、高校入ったらウチもそーういの作ってみたいっずっと思ってて……」

心底恥ずかしそうに言う彼女に、俺は静かに瞑目した。

俺が高校に入る前のことを思い出す。

そう言えば、俺も高校に入るまでは漫画やラノベのような刺激的で楽しい日々が待っているかもと思っていた。

だが実際にはフィクションの世界のようなぶっ飛んだ部活などなく、ありきたりでつまらない部活しかなかった。強い権力を持った生徒会や美人の保健医なども存在しない。

入学して、サブカルに出てくるような部活やキャラクターなど存在しないと知った時、俺は「こんなもんだよな」と納得する一方で確かに失望していたのも事実だった。

ラノベや漫画みたいな部活をマジで作る、か……。

「……うん、面白そうだ」
「え？」

俺の呟きに、俯いていたアンナが顔を上げる。

「冒険者部、作るか」
「マジっすか!？」
「ああ」

美少女の後輩と部活作り、なんかめっちゃリア充っぽくていいじゃん！

大体、迷宮やモンスターが実在する世界で、ラノベみたいな部活がないのが可笑しいんだよ。

実現可能度で言えばそっちの方が低いだろ！
大学になら冒険者サークルがあるんだから、高校にあったって全く不自然じゃないはずだ。

実際に学校に認可されるかはわからないが……。

「俺たちはこれから冒険者部だ！」
「おほおおお！　せ、先輩、超カッコイイッス！」

テンションマックスのアンナがバンバンとテーブルを叩く。

「せ、先輩、実はうち、冒険者部の名前考えてあるんすよ！　そのままじゃあんまり可愛くないんで！」

「なに？　冒険者部でもいいと思うが、まあ言ってみ」

俺がそう適当に頷くと、アンナはドヤ顔で言った。

「世界滅亡に向けて、お友達と一緒に、備える会。略してSOS」
「黙れ」

第五話 話は聞いた！ 人類は滅亡する！（後書き）

【Tips】 迷宮終末論

消滅させる方法も不明で年々増加する迷宮に対し、いずれアンゴルモア対策も追いつかなくなり世界中でモンスターが溢れかえってしまうのではないか……？ という人類滅亡説。

迷宮終末論がくだらない陰謀説と違うのは、それが現実として起こりうる可能性が極めて高いことである。

政府が学生にまで命の危険がある冒険者を許可しているのは、少しでも時間稼ぎをしたいからでもある。

各国はマスコミをコントロールし民衆に不安を与えないようにしているが、一方で権力者や富裕層は来る文明崩壊に向けて着々と準備を進めている。

火星のテラフォーミングもそのうちの一つ。じょうじ。

第六話 高校デビューは諸刃の剣(前書き)

織部の髪色を七色のツインテールから、ショートボブのインナーカラー(外黒の内青)に変更しました。

第六話 高校デビューは諸刃の剣

部活を作る。

言葉にすると簡単そうに見えるが、実際やるとなるとそう簡単なことじゃなかった。

まず、部員を集める必要がある。我が校の校則によれば、創部にあたって必要なメンバーは五名。ただの数合わせではなく、一年は継続して所属し続ける部員が必要となる。

次に、顧問を見つけてこなくてはいけない。これが、一番の難関だ。

教師にとって部活の顧問というのは一文の得もない罰ゲームみたいなもんだ。なんせ、残業代が出ない上に責任だけは増すというのだから。ベテラン教師はみんな避けたがるし、意欲がある人達や押しに弱い先生は既に顧問を引き受けているし、新任教師は仕事に慣れるのにいっぱいいっぱい顧問なんてやる余裕がない。

最後に、これらの要件を満たした上で生徒会に提出して認可を貰う必要がある。生徒会はさらに学校側に認可を貰う必要があるらしいのだが、顧問が見つかっていない段階でこれはまず通る。

というわけで、俺たちがやることはまず部員探しと顧問探しなのだが……。

「――全然見つからねえ」

昼休み、屋上で。

俺は東西コンビと昼飯を食いながら頭を抱えていた。

目の前に置かれた創部届には、『部長・十七夜月杏菜』『副部长・

北川歌麿』の二名だけしか名前が載っていない。

アンナとの再会から二日。俺たちは未だ一人のメンバーも見つかられずにいた。

「マジ？　ウチのクラスでも結構話題になって、かなりの人数が集まったって聞いたけど」

俺の言葉を聞いた東野が、意外そうに言った。

「数だけは集まったけどさ、部長様が全部撥ねちまったんだよ」

東野の言うとおり、部員募集の紙を張りだしたところそれなりの人数が集まった。

純粹に冒険者に憧れている者、アンナにお近づきになりたい者、俺のように冒険者となって成り上がりたい者、中には校内に存在する少数の冒険者も来た。

が、アンナはそのすべてを簡単な面接で落としてしまった。

曰く、「プロになれるほどの情熱も才覚も感じなかった」とのこと。

確かに、冒険者部の真の目的である「世界滅亡を生き抜けるだけの勢力作り」を考えると、生半可なものたちを入れないというのはわかるが……。

「プロになれるような奴だけって、プロになれる確率がどれだけだと思ってるんだ……」

日本に存在する全冒険者十五万人のうち、プロと呼ばれる者たちはわずか百数十人程度。0・1%以下だ。

それを、この七百人足らずの高校から五人も探すとか……。すでに二人いる時点で相当な奇跡である。

俺の嘆きに、西田が苦笑する。

「そりゃあ、集まらんわな。人数足りないようなら俺らが数合わせだけしてやるうかと思っただけど……その条件じゃ無理そうだな」
「なんなら、お前らもマジで冒険者になるってのはどうだ？」

もし、マジでこいつ等が冒険者を目指すというなら、売却予定だったDランクカードを融通してやっても良い。
そんな気持ちでした提案だったが……。

「いやあ、俺らには無理だわ。一見華やかそうだけど、実は相当重労働みたいだし」

「なにより、命の危険がな……。マロに憧れて冒険者になったって奴の中にも、一回迷宮に行っただけで心が折れた奴もいたみたいだぜ？」

「む、そうか……」

苦笑気味にそう言う二人に、俺は引き下がらざるを得なかった。
いくらDランクカードがあればFランク迷宮では高確率で安全といえど、それと迷宮内における恐怖は全く別の問題だ。

お化け屋敷は安全だが、それでも怖い……そう言うことなのだろう。

冒険者の光当たる部分にだけ惹かれて冒険者になった者が、実際のモンスターを眼にして心が折れる、というのはよく聞く話だった。と、そこで東野が思い出したように問いかけてきた。

「つかさ、なんで部長がお前じゃなくて後輩の女の子なんだ？」

「あ、そうそう、それ気になってた。なんで一年が部長なんだ？」

普通上の学年がやるもんじゃね？」

「あ……」

二人の質問に、俺は苦笑しながら答えた。

「アイツ曰く、こういう特別な部活は美少女が部長やるものでしょ！　だそつだ」

完全にオタクの発想である。さすがの東西コンビもこれには苦笑していた。

しかし、これじゃあマジで人が集まらないぞ。どうにか新入部員の合格ラインを妥協させね〜と……。

俺がそう思っていると、アンナからラインが届いた。それを見た俺は、思わず「おっ？」と驚きの声を漏らした。

「どつした？」

西田の問いかけに、俺はラインの文面を見せ、言った。

「部員、一人見つかったつてさ」

放課後になると、俺はアンナとの待ち合わせ場所へと向かった。

場所は、以前アンナと話をしたデニムズである。

アンナはこのファミレスが気に入ったのか、待ち合わせ場所には決まってこのデニムズを指定するようになっていた。

店に入るとすでにそこには特徴的な赤毛がテーブルで待っていた。出迎えてくれた店員さんに、連れが待っていることを告げてテーブルへと向かうと、アンナの隣に見知らぬ少女が座っていることに気づいた。

黒髪をショートカットにした、アンナと同じくらいの少女だ。遠

目にもわかるくらい、制服を改造している。フリルやらいくつものベルトやら……ゴスロリパンクとでも言えばいいのか、凄く厨二的な服を着ている。いくらウチの高校が制服のアレンジ可とは言え、ここまで弄っているのはちょっと凄かった。

彼女が、三人目の部員なのだろうか、と思いながら席へ着く。

「遅くなってスマン」

「いや、ウチらも今来たばっかなんで！」

「そっか。で……そちらが？」

俺は彼女の隣に腰掛けていたゴスロリパンク風の少女へと目を向けた。

中々整った顔立ちの、人形のような少女だ。可愛いというより、ちょっと冷たい感じのする美人系。後ろから見た時は気付かなかったが、どうやら髪の内側だけ青に染めているようだった。インナーカラーという奴だ。

少女は、俺の視線に意味深に笑う。

「ふ、我的名が気になるか？ いいだろう、教えてやる。我が名は

——ゴフッ！」

「ゴフ？」

奇妙な名前に首を傾げていると、ゴフさんがアンナを睨んだ。

……どうやら、アンナがわき腹を肘で突いたようだ。

「な、何をする！」

「いや、また暴走してるみたいだったんで。というか痛い目見たからもうそれ止めたんじゃないかなかったんスか？」

「う……」

アンナがそう呆れたように言うと、ゴフさんは言葉に詰まったように俯いた。

「どういうことなんだ？」

「いや、この娘同じ中学だったんすけど、こんなキャラじゃなかったんすよ。むしろ地味目な感じで。それが高校に進んだらこんなになっちゃって……」

なるほど、と俺は頷いた。

「高校デビューってやつか……」

「……………」

俺の言葉に、ゴフさんは耳まで赤くなった。

高校デビュー。それは自分に自信のないものが高校生になったことをきっかけに自分を変えるべく髪を染めたりファッションを一新したりする一種の儀式である。

中には成功してリア充グループに入ることが出来るものもいるが、中学までの冴えない自分を捨てようとするあまり、斜め上の方向へと突っ走ってしまう者も多い。

このゴフさんも、盛大に斜め上へと突っ走ってしまった者の一人なのだろう。

しかも彼女の場合はさらに厨二病も併発しているようであった。

カードの整った容姿と振る舞いに憧れて厨二病を発症してしまう者は、俺たちぐらいの年齢層に結構多い。

「なんか、どうも地味な自分を変えたくて暴走しちゃったみたいで。おかげでクラスでも浮いちゃってるみたいなんすよ。それをどうにかしてあげようと思って今日ここに連れてきた感じっす」

「なるほど……ってことはこの娘も冒険者部に入れるのか？」

「はい、こつ見えてこの娘も二ツ星の冒険者なんで」
「二ツ星!？」

意外なランクの高さに俺はマジマジと彼女を見つめた。

つてか中学で二ツ星冒険者なら高校デビューとか必要ねえだろ。

うーん、スクールカーストで成り上がるのが目的じゃなくて、本当に自分を変えたかったただけだとか？

「それで、ゴフさんは――」

「ご、ゴフじゃない! それはむせただけだから!」

俺のセリフに被せるようにゴフ――もとい少女が小さく叫んだ。

「あ、ああ。そりやスマン。えつと、本当はなんて言うんだ?」

「わ、我が名は、クリステイナー・シュバルツ――」

「はい、嘘。あなたは織部おじへ小夜せツスよね?」

「ちょ――!」

クリステイナー改め、織部さんがアンナの口を塞ごうとする。

「別にそんな変な名前とは思わないが……」

「……だって、さよって古臭いし、苗字も戦国武将みたいだし……」

どうやら本人にしかわからないコンプレックスがあるようだった。

「古臭いというか、雅な感じがするけどなあ」

「み、雅……」

俺の呟きに、織部さんは照れ臭そうに髪を弄り始めた。

そんな織部さんを見たアンナがジト目をこちらに向けてくる。

「先輩、いきなりナンパツスか？」
「ちげえよ」

マジでそういつつもりの発言じゃあない。
なぜなら……織部さんの胸元は非常にささやかであったからだ。

「ま、なんにせよ、これでようやく三人か。あと二人だな」

「それなんスけど、部員集めは一時休憩して顧問の確保を優先したいと思ってるんスよ」

「それはいいけど。なんでだ？」

俺の問いに、アンナがメモ帳を開きながら答える。

「どうやら、調べてみたら三名以上の部員と顧問で同好会の申請自体は出来るみたいなんスよね。部と違うのは部室と部費がないくらいで、部室も部費もすぐにはいららないんで、とりあえず同好会から行こうかな、と。ある程度同好会の活動をしていれば部の昇格もスムーズらしいんで」

「お前がそれでいいならそれでいいけど……」

と織部さんの方を見ながら言うと、彼女は無言でコクリと頷いた。
しかしまずはお同好会か。それは良いとして……。

「でも顧問を見つけるのは部員以上に大変だぞ」

俺がそう言うと、アンナはニヤリと笑った。

「大丈夫ツス。そこはもう候補を見つけてあるんで」

第六話 高校デビューは諸刃の剣（後書き）

【Tips】チーム制度

冒険者ギルドは安全のため集団での迷宮攻略を推奨しており、チームで活動する冒険者に対し様々な優遇を行っている。一般公開されていない迷宮の一部開放や、魔道具のカード化や一部魔道具の割引、“クエスト”の斡旋など恩恵は多々に及ぶが、その最たるものがチームのランクに応じた入場制限の緩和である。

これによりアマチュア冒険者であってもプロクラスの迷宮に入ることが可能となるが、悪質なチームの中には所属冒険者に上納金やカードなどを要求するところも存在する。

それでもチームへの所属を望む冒険者が多いのは、プロクラスの迷宮は個人での攻略が非常に困難であるからである。

三ツ星冒険者から四ツ星冒険者への昇格には大きな壁があるが、Dランク迷宮とCランク迷宮の間にはそれ以上の差があると言われている……。

第七話 星母の会

「――候補ってヒヨリちゃんかよ」

翌日、アンナに引つ張られて職員室へ向かった俺は、彼女が指さした人物を見て思わずつぶやいた。

俺たちの視線の先では、童顔で小柄な眼鏡の女教師がアタフタと机の上で書類と格闘している。

彼女の名は、立花日和。うちのクラスの担任教師だ。

「いやあ、ヒヨリちゃんはちょっと顧問とか無理だろ」

「え？ どうしてツスカ？」

「だってヒヨリちゃん、すでに担任の業務でいっぱいだし。教師一年目なのに担任をやらされてるんだぜ？」

俺は教師の世界には詳しくないが、それでも普通の会社で言う新入社員である新任教師に担任をさせるのは、ちよつとブラック臭いと思っっている。

案の定、普通の授業ですらまごまごしているのに、それに加えて担任の仕事までプラスされてしまったヒヨリちゃんは、常にアタフタしているイメージだった。

ところがそれを聞いたアンナはニヤリと笑い。

「つまり、あの先生は相当追い詰められてるってことツスね？」

「え、そ、そうだけど……」

コイツ、一体なにを企んでる？

頼むから、これ以上ヒヨリちゃんを追い詰めて辞めさせたりしないでくれよ……。

可愛くて実は結構おっぱい大きいってことで男子生徒からは人気高いんだからな？

そんな俺の思いとは裏腹に、アンナはずんずんとヒヨリちゃんの元へと真っすぐ進んでいってしまった。

仕方なく俺も後を追う。

「お忙しいところ失礼します。立花先生ツスよね？」

「え？ そ、そうだけど、あなた一年よね？ と、北川くんも一緒か」

「あ、はい。俺のこと覚えてるんスね」

まだ担任になって日が浅いのに、もう俺の様に特徴のない顔の生徒の名前まで覚えているのか。

ヒヨリちゃんも頑張ってるんだなあ……と感心していると。

「そりゃあクラスカーストの頂点と底辺は最優先で把握……ごほん、ごほん。も、もちろん担任なんだからクラスの子の名前は全部おぼえてるわよー」

「あ、はい」

やっぱり、先生もクラスカーストには気を払ってるのね……。

「で、何の用かな？」

誤魔化すように問いかけてくるヒヨリちゃんに、アンナが満面の笑みを浮かべて言った。

「ええ、先生にはぜひ我が冒険者部の顧問を」
「ハイ無理。絶対に無理」

ヒヨリちゃんは食い気味に断った。

「あの……」

「無理だから、マジで無理。私すでに限界なの。日々の授業の準備だけでも大変なのに、担任まで任されて、毎日家でも仕事してるのよ？ 残業代出ないのに！」

そう言うヒヨリちゃんは完全に涙目だった。

「あああ、なんでこんなことに。教師になれば社会人になっても長い夏休みがあるって動機で教師になった罰なの？ それとも、教頭の呑みの誘いを断ったせい？ でも目がやらしくて貞操の危機を感じたんだもん！ 他の女性の先生も教頭には気を付けてって言うてたし！」

「せ、先生落ち着いてくださいッス！」

いきなりブツブツと呟きだしたヒヨリちゃんに、アンナは冷や汗を掻きながら肩を揺すった。

「……ハッ、ご、ごめんなさい。最近先生よく眠れなくて……。で、顧問だっけ？ 絶対無理だから」

「うーん、しょうがないッスね。先生のためと思ってのことだったんすけど。それじゃあ失礼しました」

思いのほかあっさりと引き下がったアンナがクルリと背を向けると、

「——ちよつとまって？ 私のためってどういうこと？」

怪訝そうな顔をしたヒヨリちゃんが呼び止めた。

その瞬間、俺は見た。

アンナが「かかった！」という感じの黒い笑みを浮かべたのを。

「いやあ、今は先生も新任だから部活の顧問とか大変だろうしできないわけじゃないツスカ？」

「う、うん」

「でも来年は？ 再来年はどうツスカね？」

「そ、それは……。でもそういうのはベテランの人からやっていくんじゃ」

「ハハツ！」

眼を泳がせながら言うヒヨリちゃんに、アンナは妙に不安になる甲高い笑い声を漏らした。うーん……結構似てる。

「言っておきますが、自分から希望している教師以外、部活の顧問なんて罰ゲームみたいなもんツスよ。まさにサービス残業ツスからね」

「だ、だから私も断ったんじゃない」

「想像してみてくださいいツス。ベテランも嫌ときたら、どんな立場の人にその役割が回ってくると思うツスカ？」

「ま、まさか……」

「そう、逆らうことができない弱い人物ツスよ。あなたが新任で担任を任されたようにね！」

「ひいい！」

頭を抱えてか細い悲鳴を上げるヒヨリちゃんに、アンナが耳元で

囁きかける。

「知ってるツスカ？ ちょうど、女子バレー部の顧問をやったおばあちゃん先生が、来年定年退職するらしいツスね。あーあ、バレー部の先生なんて大変だろうなあ。女子バレー部なんだから当然顧問は女性ツスよね？ あれ？ 候補は、お局の山本先生と……？」
「えつと、えつと……わ、私!？」

職員室を見渡して、候補者を探したらしいヒヨリちゃんは世界が終わったような顔をした。

そんな彼女に追い打ちをかけるように、アンナはイヤらしい手つきで肩を撫でまわしながら、ねっとりと言う。

「立花先生え、今日の晩は空いてるかね？ 担任のこととか大変だろう。いろいろと相談に乗るよ。あ、嫌？ ふーん、それならいいんだ。私も暇じゃないからね。あー、来年のバレー部の顧問のことを考えないとなー。忙しいなあ。」

「ちょ、ちよつと待ってください教頭!」

「ん？ なにかね?」

「……えへへ、ご一緒させてください」

「ふ、安心したまえ、悪いようにはせんよ」

……なにをやってるんだ、コイツラは。

俺は突然怪しい寸劇を始めた二人を呆れた目で見た。

教頭をなんだと思ってるんだ。いくらなんでも悪者にしすぎ。たしかにホネガラのようにやせ細ってて悪党面で、ハゲてて、すれ違う女性のお尻とかよく目で追いかけてるけど……。

「先生、もしこんな未来を避けられる方法があるとしたら?」

「!?!? 教えて、十七夜月さん!」

「簡単なことですよ。簡単な部活の顧問になってしまえばいいんすよ。顧問の話をされても、すでに顧問をやってて忙しいのと言えればいいんす。さすがに顧問を掛け持ちでやれとは言わないはずッスからね」

なるほど、そういうことか。アンナの奴やるなあ。

「さあ、どうするッスか？ バレー部の顧問をするか、教頭の女になるか……冒険者部の顧問になるか」

いつの間にか、ヒヨリちゃんのバレー部顧問が確定のことみたいになってやがる。

が、それはヒヨリちゃんにとって十分リアルな未来だったようで、彼女は相当に追い詰められた顔をしていた。

そんな彼女の背中を押すように、アンナが囁く。

「ちなみに、ウチの高校は冒険者の副業はOKッスよ」

「ッ！ ……ります」

「ん？」

「顧問に、なります！」

そうやけくそ気味に叫ぶヒヨリちゃんに、アンナは「計算通り！」と黒い笑みを浮かべたのだった。

「おっそろしい奴だな、お前は」

放課後のファミレスで、冒険者部のメンバーで集まりながら。

俺はテーブルの向かいに座るアンナへとそう言った。

「え？ 何がツスカ？」

「いや、何がって、あのヒヨリちゃんの追い込み方だよ。完全にヤクザの手口じゃねえか」

「そんな……人聞きの悪い。ウチはただ、哀れな新任教師に救いの手を差し伸べただけツスよ」

「救いねえ……？ 実際のところ、ヒヨリちゃんに言ったことはどれくらい本当なんだよ」

「ああ、あれは大体本当ツスよ。あのまま行けば、来年にはヒヨリちゃんがバレー部の顧問にされていたと思うツス。経験で言えば山本先生のはずなんスけど、山本先生はヒステリー持ちで依怙贖する癖があると評判ツスから、県大会でも良いところまで行くバレー部の顧問には向いてないツス。それならまだ新任でも生徒にストレスを与えないヒヨリちゃんに顧問の話が行くはずツスから」

「なるほど、教頭がヒヨリちゃんを狙ってるってのは？」

「それは、日ごろの視線からの推測ツス」

「偏見じゃねえか……」

俺が呆れたように言うと、織部さんから反論が入った。

「……あの教頭は我も、というか女子はみんな嫌いだぞ」

「すれ違つと露骨にお尻や胸に視線を感じるツスからね」

「そ、そうなのか……」

教頭は意外と嫌われていたらしい。男子にはちょっとキツイだけの普通の教師なんだが……。

学校の教頭職は、下手なブラック企業よりもブラックらしいので、少しだけ哀れだ。

あと、女子ってやっぱりそう言う視線には敏感なのね……。

「そんなことより、部活の話をするツスよ、部活の話を」

アンナがパンパンと手を叩きながら言った。

「えー、我が冒険者部は、本気でプロを目指す生徒たちが集まって切磋琢磨し、友誼を深めつつ、相互支援を行うことで全体の質を高める、というのが目的の部ツス」

「なんだか堅苦しい言葉を使っているが、まあ言わんとすることはわかる。」

俺たちがうんうんと頷いていると、アンナはカツと目を見開き、拳を握りしめた。

「が、それは表向きの目的！ 我が冒険者部の真の目的は、来る人類滅亡に向けて生き抜けるだけの勢力作りツス！」

「おお！？」

織部さんがパツと目を輝かせる。

冒険者部のどこか厨二臭い真の目的が、彼女の琴線に触れたらしい。

しかし、アンナの連れてきた娘だからとつくに知ってるものと思っただけだが、初耳だったのね……。

それからアンナは、織部さんへと、先日俺にしたような話を滔々としていった。

アンゴルモアの影響により、迷宮数は年々増加傾向にあること。それに対し、人類はいまだ迷宮を消去させる方法すら見つけていないこと。このままではいずれ、迷宮が世界中を埋め尽くし、アンゴルモアの発生を食い止められなくなる。世界の富裕層は、人類

滅亡の時にむけて備え始めていること。

「まあ、今は全部を信じてくれとは言わないツス。ただこれだけは断言できるツス。これから十年、二十年、カードや魔道具の需要は増加し続けるツス。そして、腕の良いマスターの需要も。冒険者ブームは一時のものじゃあない。冒険者部で必死になって努力することとは決して無駄にはならない、ということ約束するツス」

アンナは、最後にそう締めくくった。

すべてを聞き終えた織部さんが、意味深な笑みを浮かべる。

「くくく、人類滅亡に備えて力を蓄える秘密結社か。なんとも胸躍る設定ではないか。いいだろう、この我がこの冒険者部を世界征服へと導いてやるうではないか……」

「はいそこ、設定とか言わない！ あと世界征服とか一言も言っていないから！」

と、そこで俺たちの注文していた料理が続々と届き始めた。

六人掛けのテーブルに、所せましと料理が並んでいく。

「お、来ましたね。えー、ゴホンッ。……何はともあれ、これで三名の部員と顧問が見つかりました。同好会届けも提出しましたし……後は生徒会の承認を待つだけ。一足早いツスけど、ここに冒険者部の発足を宣言するツス！ 冒険者部の未来を祈って、乾杯！」

『乾杯！』

アンナの突然の思い付きにより行われたお祝いパーティーであったが、思いのほか話が盛り上がり楽しいものとなった。

冒険者としての活動の話から、自分のカード自慢、今一番欲しいカードについての話題。そこから徐々に話は個人的なものに移って

いき、最後には好きな漫画やアニメについてダラダラと語り合っていると、あつという間に時間が過ぎてしまった。

そろそろ出ないと家についた時本気で遅くなる……とファミレスを出た後も、話し足りないとばかりに俺たちの口は止まらなかった。

「そういえば知ってます？ 先輩のカードたちなんですけど」

「ウチのカードがどうかしたか？」

「次の夏コミで結構同人誌が出るみたいツスよ……」

「ぶほっ、ごほっ、ごほっ……！」

思わずむせ返る。

「なんだそれ!？」

「モンコロなんかで人気の出たカードはオタクどもの餌食になりやすいつスからね」

「うむ……女の子カードの悲しい宿命というやつか」

「特に蓮華ちゃんとイライザさんが人気みたいツスよ。……あとユ

ウキちゃんも少々」

「ユウキも!？」

業が深すぎる……!

「つか肖像権とか名誉侵害はどこ行った!？」

「カードは非実在青少年なので……」

「え？ カードって著作権上そういう存在なん？ 実在してんだろ」

「うーん、そこらへんはまだ法整備とか色々と未発達ツスからね」。

欧米なんかじゃちよつとずつカードの人権についても議論されつつあるみたいツスけど」

そんな話をしていたその時。

「……ん？」

なにやら、駅前が騒がしい……。どうやら、立川駅前の広場に結構な数の人だかりができているようであった。

「んー？ 選挙演説ツスカね？」

「いや違うっばいぞ……。星母の会——ダンジョンカルトだ」

俺が眉を顰めながらそう言った瞬間。

『皆さんごきげんよう。人々を愛し愛されるカルト宗教、星母の会でございます』

その声の主は、妖精のように可憐な少女だった。アルビノ特有の白い髪に、白い肌、薄い赤の瞳。身に纏うシスター服も純白で、人形のような顔だちと相まって幻想的な雰囲気ですらあった。

『突然ですがクイズです。皆さんは1999年7月7日が何の日かご存知でしょうか？』

マイク越しでも尚、透き通るような声で問いかけてくる少女に対し、戸惑いがちにポツリポツリと答えが返ってくる。

『七夕？ 残念！ 1999年であることが重要ですよ。ノストラダムスの大予言？ 惜しい！ かなり良いところ突いてますよ。え？ なになに？ そう！ その貴方、大正解！ 1999年7月7日は、何を隠そう私の誕生日でございます！』

少女の語り口は、妖精のような外見に反し、どこか道化師染みた

ものだった。大げさな身振り手振りに、おどけたような表情と、軽快なトーク。

ダンジョンカルトの聖女様ということもあってどこか警戒を纏っていた空気もいつの間にか緩み、軽いショーを見るような感覚となっていた。

『とまあ、詰まらない冗談はここまでにしておくとして、本当の正解を言うとしましょう。1999年7月7日は、皆さんもご存知の通り、迷宮がこの世に初めて現れた日です。そして――』

一拍の間。少女が群衆たちの顔を一人一人見渡す。赤い瞳と、眼があつた。

ドキリ、と心臓が跳ねる。

『――この世界から大きな“不幸”が消えた日でもある』

一気に空気が引き締まるのを感じた。集団の気配が急速に遠ざかり、まるで世界に彼女と自分しかいないような奇妙な感覚……。

その錯覚を覚えたのは俺だけではなかったのだろう。

気づけば、織部やアンナを含めその場にいたすべての人々が、物音一つ立てずに少女の話に聞き入っていた。

『あなた方はご存知ですか？ 迷宮が出現してからの二十年、一度も死者の出る災害が起こっていないことを。あれほど争いの絶えなかったこの世界から、戦争がなくなったことを。貧困にあえいでいた発展途上国が、徐々に豊かになりつつあることを。事故や病気で亡くなる方々の数が、激減していることを……』

確かに、この二十年……大きな戦争や災害は一度も起こっていない。世界各国の関心は、他国の土地や資源よりも自国の迷宮へと向

けられている。

迷宮からいくらでも発掘される魔石は、肥料として使えば砂漠を徐々に緑地化させるほどの力を持ち、燃料としても原子力発電所以上のエネルギー効率を持つ。

ポーシヨンやそれを利用した医薬品の開発により、治療不可能と言われた難病は一つまた一つと姿を消していき、即死でない限り不慮の事故による死者はほぼ出なくなった。

今、世界は歴史上最も平和な時代と言えるだろう。

『そう、もうおわかりですね？ これらはすべて迷宮によるものなのです。迷宮とは、この世のさまざまな悲劇を吸収し、魔道具と言った恩恵として還元してくれる神の御慈悲なのです』

微笑みながら言う少女の言葉に、いくつもの反論が浮かんでは消えていく。

アングルモアによる被害は一体どう説明するつもりなのか。増え続ける迷宮の先に待つ末路は？

しかし、そのどれもが言葉には出なかった。

……結局、俺も迷宮の恩恵を受けているものの一人だからだ。

迷宮が危険なものだと思っただけでも、それがもたらす恩恵を無視することはできない。

俺は、蓮華たちと出会わせてくれた迷宮に、感謝していた。

そんな俺の内心を覗いたかのように、俺と目があつた少女がニコリと笑う。

『皆さん、迷宮へ感謝の祈りを捧げましょう。迷宮こそが、私たちの待ち望んだ救世主……そのものなのですから』

と、その時少し離れたところから怒号と悲鳴が聞こえてきた。

半ば少女に飲まれかけていた俺は、ハッと我に返るとアンナたち

と顔を見合わせた。

「なにが感謝の祈りだ！ ふざけんじゃねえ！」

「落ち着いてください！ ちよ、暴力はやめてください！」

「カルト団体は引っ込めー！」

「聖女様を逃がせ！」

不穏な気配に、不安げな顔をしたアンナが俺の袖を引っ張ってきた。

「先輩、マズイツスよ、ダンジョンヘイトです」

「あ、ああ……逃げるか」

「う、うむ」

慌ててその場を離れる。

……マイナーな宗教団体だった星母の会が一般に知れ渡るようになったのは、数年前に起こったダンジョンヘイトたちとの大規模な衝突がきっかけだった。

迷宮至上主義を掲げる星母の会の主張は、アングルモアなどで身近な人たちを失った遺族たちにとって受け入れられるものではなく、ある日一部の過激なダンジョンヘイトたちが星母の会へと殴り込みをかけたのだ。

そこで、数人の死者が出たことから小さな宗教団体であった星母の会は一躍全国区の知名度となった。

とは言っても、その段階では危険なカルト教団という風には見られていなかった。

死者が、星母の会の入信者であった母親とその小さい娘であったことから、むしろ被害者と見られていたからだ。

だが、その後一部の信者が逮捕を逃れたダンジョンヘイトの襲撃者グループを拉致し、迷宮にて殺害したことで、星母の会は一気に

カルト教団扱いされた。

殺害の際に、迷宮に生贄を捧げるような儀式めいたことをやって
いたことが発覚したためだ。

これ以降、星母の会は迷宮至上主義を掲げる危険な宗教団体……
ダンジョンカルトの代名詞のような存在となった。

一般人にとつては、ダンジョンヘイトもダンジョンカルトも関わり
合いたくない存在としては同じようなものだった。

実際、星母の会の言ってることは無茶苦茶だ。

ありもしない危険や悲劇を語って危機感を煽るのは、カルト教団
の典型的な手法である。

皆さんの祈りで第三次世界大戦を回避しましょう、みたいな。

本当は大災害が地球を襲うはずだったんだけど、迷宮のおかげで
回避できたよ！　なんて馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

そんなことを考えつつ、何となく後ろ髪を引かれ振り返ってみる
と。

「ッー！」

赤い瞳と、眼が合った。

すぐそばまで鬼気迫った表情のダンジョンヘイトたちに迫られな
がらも、彼女は落ち着いた様子でこちらをまっすぐに見つめている。

それに異様な迫力を感じた俺は、ダンジョンヘイトからではなく
少女から逃げるようにその場を離れたのだった。

第七話 星母の会（後書き）

【Tips】ダンジョンカルト

この世界では死者が出るような大きな災害は、迷宮発生以降一度も発生していない。

小さな紛争はあれど戦争らしい戦争も世界から消えた。

また、この世で最もクリーンなエネルギー源とも称される魔石から生成された燃料は、一切の大気汚染等の環境破壊を引き起こさずに、原子力以上のエネルギーを生み出す。魔石から作られた肥料は地球上から徐々に砂漠を消し去りつつあり、近い将来に砂漠は観光用のものだけを残し姿を消すだろう。

ポーシオンやそれを利用した医薬品の開発により治療不可能と言われた難病は一つまた一つと解消され、即死でない限り不慮の事故による死者もほぼ出なくなった。

これらすべては迷宮のおかげであり、神の御慈悲である……とい
うのが星母の会の主張である。

確かに迷宮の出現によって多くの『不幸』が消えたが、同時にア
ンゴルモアという新たな脅威が生まれたことを忘れてはならない。

第八話 その事件迷宮入りにつき

「――冒険者同好会の申請は却下されました」

それが、放課後に生徒会室を訪れた俺とアンナに対する生徒会長様の第一声であった。

学年一位の成績で偏差値も75を超えろという噂の秀才は、分厚いレンズ越しにこちらを無関心な眼差しで見つめている。

生徒会長の突然かつ無慈悲な言葉にしばし硬直していた俺たちであったが、真っ先にアンナが復活すると勢いよく彼に食って掛かった。

「ちょ、何でツスか！？ こっちはちゃんとメンバーと顧問を見つけてるじゃないツスか！」

「さあ？ それは学校側に聞いてください。生徒会はただ申請用紙に不備がないかチェックして上にあげるだけなので」

アンナの抗議をどこ吹く風と流す生徒会長。そのままに中間管理職なのと言わんばかりの態度に、彼女も肩透かしを食らったようであった。

「……学校側がわざわざ却下してきたってことツスか？ 普通、部活はともかく同好会は申請すれば通るもんなんスよね？」

「まあ、そうですね。オ ニー研究会とか、ギャンブル同好会とか、よほど変なのじゃあなければですが」

かつて実際に申請され却下をくらったのだから如何にもヤバそうな名前の同好会の名前を例に挙げる生徒会長。

「…………つまり、我が冒険者同好会もその、オ、オ…………ニー、研究会やらギャンブル同好会とやらと同列に思われているってことツスカ？」

一部恥ずかしそうに小声になりながらそう問いかけるアンナに対し、あっさりと頷く生徒会長。

「というか、おそらくそれ以下ですね」

「それ以下って…………オ ニー研究会以下ってことですか？ 冒険者同好会が？」

「ええ、なんせオ ニーで人が死ぬことはないですからね。まあやり方にもよると思いますが…………」

「あの…………あんまオ ニーオナ ー言わないでもらえませんか…………？」

俺と生徒会長の問答に顔を赤らめて突っ込むアンナ。そんな彼女に冷笑を返す生徒会長。

「生徒会長で偏差値75の僕から見ても、冒険者同好会とやらはオ ニーと変わらないという意味ですよ。偏差値50も無さそうな君たちには理解できなかつたようですけどね」

「もちろん俺はちゃんと理解できてましたよ。こう見えて偏差値50なんでね」

「う、ウチも理解できてましたよ…………？ 偏差値は42ツスケど…………」

『42!?!?』

思わず生徒会長と八毛る。

おかしくね？ うちの高校、偏差値50なんですけど。

「……よくウチの高校に合格できましたね」

「ここは私立でウチは社長令嬢ツスから」

何気ない会話からとんでもない闇が飛び出してきた。

「……聞かなかったことにおきましよう。こつ見えて僕は生徒会長なんでね。……とにかく、いくら君がブルジョワジーと言えども、この決定は覆りません」
「それはなぜですか？」

俺の問いに、生徒会長はインテリっぽく伊達眼鏡だと噂の眼鏡をクイツと上げ、答えた。

「生徒会長で偏差値75の僕が見たところ……どうも学校側としては校内に冒険者が増えている現状を面白くないと思っているようです。そこに冒険者同好会なんてできたらそれが加速すると思っていますよつでして」
「なるほど」

確かに学校側からしてみれば生徒が冒険者になったところで百害あつて一利なしだ。

もし迷宮で生徒に死なれでもしたら生徒が一人死ぬばかりか、下手をすれば保護者が責任を追及してこないとも限らない。

無論、冒険者の怪我や死に対してはすべてが自己責任であるという事になっているのだが、どこにでもモンスターペアレンツというのは存在するものだ。

とりわけ、子供にカードのような高級品を買い与えるような親は

そう言う傾向が強いだろう。

そんな中、冒険者部を作ろうという俺たちの動きが決して歓迎できるものではないだろう。

「というわけで、冒険者同好会の設立は却下されました。お帰り下さい」

終始鉄面皮だった生徒会長は、最後だけ営業スマイルを浮かべるとそう言ったのだった。

「あゝ、もう！　なんでこんなに大人って頭が硬いんすか、もう！」

帰り道、腕を天に突き上げアンナが吼える。

「まあ、命の危険がある部活をあつさり承認する学校の方が我は怖いかな」

織部の言葉に、俺は一理あると頷いた。

あれから、俺たちは職員室を訪れ教頭やら校長やら理事長やらと色々な人に直談判を行ったものの、当然ながらその結果は芳しくなかった。

一部の教師などは好意的ではあったのだが、それは経営には携わらない立場だからであり多少なりとも学校運営にかかわる立場の間からは、けんもほろろにあしらわれてしまった。

ヒヨリちゃんも上に反対されてはできることもなく、そればかりか教頭に「新しい部活の顧問をやりたいとはずいぶんやる気がある

じゃないか」などとチクリと刺され、顧問の話もなかったことと頭を下げてくる有り様であった。

こうなってはもはや冒険者部を作るのは不可能と言えるだろう。仮に違う名目で部活を作ろうとしても学校側に警戒されている今、それも却下されるはずだ。

こうして、俺たちは冒険者部を作るところかスタート時よりもマイナスとなってしまうたのだった。

「まあ……冒険者を止めるとまでは言われてないんだからいいんじゃないか？」

「うむ、あくまで真の目的は終末を生き抜くための勢力作りなのだろう？ 部活という形にこだわる必要はあるまい」

俺と織部の言葉に、アンナは頬を膨らませて反論した。

「部活だから良いんすよお！ ロマンなんです、ロマン！」

コイツも拘るなあ、と織部と顔を見合わせ苦笑する。

まあ、気持ちはわからなくもないがな。

「だが、実際問題どうしようもあるまい。学校がダメだと言ってるわけだからな」

「うむむ、なにか方法は……」

諦めの悪いアンナが腕を組みながらウンウンと悩むのを他所に、俺は織部と軽い雑談を交わし始めた。

「そっぴゃあ、織部はいつぐらいから冒険者をやってるんだ？」

「我は中一からだな。アンナと同じくらいだ。……最初の手持ちの差で、ランクを開けられてはしまったがな」

「なるほど……手持ちはどんな感じなんだ？」
「ふむ、最近ようやく欲しかったリンクカードを一枚手に入れ、あとはDランクカードを結構、と言った感じだな。……あとは見てのお楽しみ、という奴だ」

ニヤリと笑う織部。そんな彼女に楽しみにしておく返し、俺は最も気になっていたことを尋ねることにした。

「……ところで、ぶっちゃけアレは使えるのか？」

「アレというのは、リンクのことか？」

「おお、そうそう。それはさすがに知ってたか」

俺の言葉に苦笑する織部。

「まあ伊達に三年もやっていないということだ。とは言え、我に使えるのはテレパスを少しだけ、と言った感じだが」

「……その、織部はどうやってリンクのことを知ったんだ？」

俺は、聞いてよいものかと逡巡しつつ、彼女へと問いかけた。

……大会の後、俺はすぐさまリンクについて独自に調査を始めた。しかし、インターネットや本などをいくら調べても、時折それらしき技術の噂がほのめかされている程度で、それがどういったものなのかを知ることが出来なかった。

クリスマスに放送された決勝戦の映像でも、重野さんによるリンクの解説はカットされ編集されていた。

つまり、リンクについては国レベルによって秘匿されているというわけだ。

理由は、まあ察しが付く……。

今思えば、決勝戦で重野さんがリンクについて口を滑らせたのは、彼なりの応援だったのだろう。

でなきゃ、一般に知られていないリンクという技術をあんな大勢の前で言ったりしないだろう。

おそらく、重野さんもあの後ギルドなどから怒られたのではないだろうか……。

この前ギルドであった時元気そうだったのでクビにはなっていないようだが。

結局俺の場合は上手く師匠を見つけられたので、リンクについて学ぶことが出来たが、他の冒険者たちは一体どのようにリンクを身に付けているのか、興味があった。

とは言え、一般的には秘匿されている技法だ。それを尋ねること自体がタブーの可能性もある。

そう言うわけで恐る恐る問いかけた俺だったが、織部はあっさりと答えてくれた。

「我の場合はアンナからだな。アンナは、実家がスポンサーをやっているプロ冒険者から習っているらしい」

「ああ、なるほど……」

俺は心の底から納得した。そう言うコネね。そう言えば、彼女は『ゴランノスポンサー』でお馴染みのダンジョンマートのお嬢様だった。そりゃあプロの伝手の一つや二つ持っているに決まっている。織部もその伝手でリンクを習ったと、納得である。

しかしそうなると疑問なのが、なぜアンナは俺との勝負でリンクを使わなかったのかだが……もしかしてあの時はまだリンクを使えなかった、とか？

と、その時俺のスマホに着信があった。

見てみると、ギルドからの広報メールのようで、織部もスマホを見ている。

内容は……行方不明者の搜索クエストのようだった。

ギルドでは、時折冒険者に対しクエストという形で依頼を出して

くることがある。

例えば病院でポーションが不足しているためポーションの納入を頼む、だとか。

Fランク迷宮でイレギュラーエンカウントの発生が確認されたため討伐を頼む、だとか。

迷宮内での犯罪に対する情報提供求む、だとか。

そういつた依頼が、メールやギルド内の掲示板という形で冒険者に告知されるのだ。

俺はまだ受けたことがないが、プロやセミプロ冒険者の中にはギルド職員から指名で依頼を頼まれることもあるらしい。

基本的にはギルドの依頼は社会貢献のようなもので金銭的に旨味はないが、ライセンスに実績が刻まれ、ちよつとだけ箔がつく。

多くのクエストをこなした冒険者には市や国から表彰されたりして、小さくニュースで流れることもあるので、それを目当てにクエストを受けまくる冒険者もいた。

今回の場合は、Fランク迷宮で数日前から消息を絶っている冒険者の搜索が依頼内容のようであった。なお、冒険者ライセンスによる救助要請はないという。

「浅いFランク迷宮で行方不明になって数日、か」

織部が何とも言えない顔で小さく呟く。恐らく、俺も同じような顔をしているだろう。

行方不明者の搜索、ということにはなっているが、これは間違いなく遺品の搜索と死因の特定のクエストだろう。

日帰りで踏破することのできるFランク迷宮で数日も帰ってこないというのは、自力では移動できない状態であることを意味する。さらには救助要請も出せない状態となると、頭にチラつくのはイレギュラーエンカウントによる空間隔離……その犠牲だ。

一歩間違えれば、俺もこうして行方不明者として扱われていたの

かもしれない……。

そう一人憂鬱な気分になっていると。

「――妙だな」

織部が小さく呟いた。

「妙って何がだ？」

「いや……ちよつと気になってここ最近のクエストメールを溯って見てみたのだが、どうにも行方不明者が多すぎる。それも、フランス迷宮でばかりだ」

そう言われて俺もメールをチェックしてみると、確かにここ数か月妙に行方不明者が急増しているように思えた。

「確かに、この量はちよつと妙だな」

「だろう？ フランク迷宮で救助要請すら出せずに全滅する状況で最も可能性が高いのはイレギュラーエンカウトだが、そうなるこの数は多すぎる。しかも、犠牲者はほぼバラバラの迷宮で行方不明者になっている。そんな数のイレギュラーエンカウトが大量発生していた、なんてことになれば必ず話題になるはず。にもかかわらずそんな話は聞いたこともない」

「……イレギュラーエンカウトの仕業じゃあないってんなら、一体何の仕業だつていうんだよ？」

「――事件の匂いっスね」

「うお!？」

急に割って入ってきたアンナに、俺は肩をビクつかせた。

「先輩、これは事件ツスよ、事件」

「事件って……犯罪ってことか？」

「自然には起こりえないことが起こっているのならば、その要因は外部にあるということ……つまりこれは迷宮を利用した連続殺人事件に違いないッス！」

ビシッと俺を指さして告げるアンナ。

「うむ、殺人事件、ねえ」

迷宮内の特殊な環境を利用して犯罪に及ぶ輩がいる、という話は聞いたことがあった。

日本は世界トップクラスで迷宮に関する犯罪が少ないと言われており、俺も今まで一度もそういった輩と遭遇したことはない。いちピンとこないところはあるが、それは日本が特別なだけで、外国では結構そういった事件も多いと聞く。

特に、日本ほど迷宮の出入りが嚴重ではない発展途上国や南米の一部地域では迷宮は犯罪者の巢窟と化しているところもあるそうだが……。

「仮にそうだとして、何なんだよ？」

迷宮内で連続殺人事件が起こっていると想像すると薄ら寒いものを感じるが、俺たちにできることなど何もなし。迷宮へ行くことを控えるくらいだ。

そんな俺にアンナは正義感あふれる目で言った。

「決まってるじゃないッスか！ 当然、我が冒険者部の手によってこの事件を解決するんスよ！」

「はあ〜？」

何言つてんだ、コイツ？

俺は呆気を取られてアンナを見た。

「何がどうなつてそういう結論に達したんだよ？」

「迷宮内で起こってる可能性が高いんすよ！？ しかも低ランクの冒険者ばかりを狙った卑劣な犯行！ 断じて許せないツス！ それに、この事件を解決すれば大人たちも絶対われらが冒険者部を認められるに違いないツス！」

「いやいやいやいや」

コイツ、マジか？ いくらラノベや漫画にあこがれてるといっても限度があるだろ！

「お前、俺らはただの高校生だぞ。それが殺人事件を解決するとか……ありえんだろ。そういうのは警察の仕事だつつの」

「その警察が頼りにならないからウチらで解決しようって言ってるんすよ！ だって未だに迷宮が閉鎖されたりニュースになっていないってことは、まだ警察も事件に気付いていないってことなんじゃないツスカ！？」

「む……」

確かに、これだけの数の行方不明者が出ていながら世間に何の動きもないというのは不自然だ。俺と織部のような素人ですらすぐに気づいたくらいなのだから、大人たちが気付かないわけがない。

しかし……。

「というか、そもそもこれが犯罪だって前提条件が疑わしくないか？」

「どうしてツスカ！？」

「だってよお、迷宮の入り口にはゲートがあるんだぜ？ その出入

り記録を調べれば容疑者なんて一発じゃん」

迷宮の出入りは、冒険者ライセンスと紐づけされてゲートに記録されている。そのデータを辿れば、犯人はすぐに判明するはず。

にもかかわらず、犯人がまだ捕まっていないということは被害者と同時に迷宮に入っていた人間がいないか、無実が確定されているということだ。

「う、そ、それは……そう！ 偽装ライセンスとか、他人から奪ったものを使って出入りしてるんすよ！ もしくはウチらでは想像もつかない手段があるとか！」

「仮に偽装ライセンスだったとしても、ダンジョンマートの監視カメラで特定できるはず」

アンナの言葉に、織部がすぐさま反論する。

彼女の言うとおり、ライセンスを偽造するにしろ、ダンジョンマート内には防犯カメラがある。その映像をみれば、犯人を辿ることなど容易なはず。

「つーわけでそもそも犯罪じゃないかもしれないし、犯罪だったとしてもすぐ捕まるはず。仮に警察が想像もつかないような手段で捜査の手を掻い潜っているとして、それこそ俺らにはお手上げだろ。ただの高校生なんだから」

「うぐぐ……」

俺と織部の二人によって完全論破されてしまったアンナは涙目で唸るしかなかった。

……まあ、犯罪ではないとすればこの異常な行方不明者の数は一体なんなのか、という疑問は残るわけだが。

まあ、そこはギルドか警察が解決してくれることだろう。

「で、でもでも！ もし監視カメラもゲートの記録も改ざんできる犯人がいたとしたらどうするんスカ！？ ウチらだって迷宮に潜る以上明日は我が身かもしれないんスよ？」

まだ言うか……。

「迷宮のゲートもダンジョンマートの監視カメラもごまかせる犯人ってどんなんだよ？ それこそダンジョンマート、ぐらい、しか……」

「ま、まさか……！？」

俺達は目を見開きアンナを見た。

監視カメラのデータを容易に改ざんでき、迷宮の出入りを管理している、この国唯一の企業の一人娘が、今、俺たちの隣にいた……。

「……はえっ！？ う、ウチ！？」

「お、俺たちを犯人捜しに仕向けて、一体、何を企んでいたんだ……」

「ま、まさか、私たちも……？」

俺たちの恐怖の眼差しを受けたアンナが、本気で慌てふためく。

「ち、ち、ち、ちが、ちがちがちが……！？」

その哀れな姿を見た俺たちは、疑いの目を向けるのは止めてやることにした。

常識的に考えて、ダンジョンマートがそんなことをするメリットがわからない。

迷宮内で新米冒険者を襲って得る利益と、それが発覚した時にダ

ンジョンマートが失うモノの釣り合いが明らかに取れていないからだ。

まあ、これだけ釘を刺してやればアンナも犯人捜しをしようなどとはもう言ってこないだろう。

常識的に考えて殺人鬼を捕まえようなど危なすぎる。

……しかし、犯罪であろうとなかろうと、迷宮に何かが起こっていることは間違いないだろう。

極論、俺や知り合いに被害がなければそれで良いんだが……。

一応小野の奴にも注意ぐらいはしておいてやるか。

「ねえっ！ 聞いてます！？ 本当にウチじゃないッスからッ！」

「……血で穢れた手で俺に触らないでくれます？」

「ちよつとお！？」

アンナを織部と一緒に押搦しつつも、俺の胸にはしこりの様な不安が残るのだった。

第八話 その事件迷宮入りにつき（後書き）

【Tips】クエスト

ギルドでは民間や企業から持ち込まれた相談を、冒険者にクエストという形で斡旋している。

クエストの内容は、魔道具やカードの納品や、イレギュラーエンカウントの討伐、遭難者の救助に行方不明者の搜索など様々だが、その報酬はあまり高いとは言えず、魔道具の納品などは相場に若干の色がつくくらいである。

基本的には社会貢献としての要素が強く、特に遭難者の救助やイレギュラーエンカウントなどの緊急性の高い依頼を数多くこなした者には県や国から表彰が送られることもある。

クエストをたくさん受けていると就職に有利になるという説もあり、学生冒険者の中にはクエストに精を出す者も一定数いるとかいないとか。

第九話 トレーディングカード（前書き）

Dランクの零落スキルによる戦闘力ダウンを50とすることにしました。それに伴い、ドラゴネットの戦闘力を145に変更しました。

第九話 トレーディングカード

「お前、最近弛んでるんじゃないの？」

翌日。休日ということで朝から迷宮にやってきた俺に対し、蓮華は開口一番そう言った。

「な、なんだよ、急に」

「お前よお、ここ最近全然攻略進んでないじゃねえか。ろくに迷宮にも来ないで何やってたんだよ」

「う……」

腰に手を当て、上目遣いに睨んでくる蓮華に、俺は少しばかり怯んだ。

彼女の言うとおり、この一週間ほど俺はほとんど迷宮に来ていなかった。アンナに振り回される形で、部員探しやらなにやらと忙しかったためだ。

仮に来たとしても、二時間程度と短時間の活動となってしまうていた。

リンクを通じて、なんとなくカードたちの不満は感じてはいたのだが……。

「以前はよお、毎日のように迷宮に潜ってたくせに、ちょっと順調

だからってすぐ気を抜きやがって。大体なあ——」

「ま、まあまあ蓮華さん。マスターはボクらと違って生活もあるわけですから」

「そ、そうそう、俺もいろいろ忙しかったんだって」

土石流のように不満を吐き出し始めた蓮華を、ユウキがやんわりと宥める。それに乗っかる形で俺も言い訳をすると、じろりと蓮華がこちらを睨んだ。

「忙しかった、ねえ？ アタシには最近できた女の子の知り合いと楽しそうに遊んでるようにしか見えなかったが？」

う、なぜそれを……。

蓮華に凶星を指された俺は、思わず冷や汗を流した。

「え、そうだったんですか？」

「えー、なにそれひどーい！」

蓮華の言葉を聞いたユウキが少し驚いたようにこちらを見ると、メアも少しばかり怒った様子でこちらへと迫ってきた。

「あ、いや、そのだな……」

仲間たちからの白い眼に困り果てて目を泳がせていると、少し離れたところで静かに立つイライザと目が合った。

イライザなら、イライザさんならこの状況を何とかしてくれる……

…！

そんな淡い期待を込めて彼女を見ると、ニコリと笑って頷いてくれた。

「……ふと気になったのですが、蓮華さんは迷宮の外でも外部の様子
子がわかるのですか？」

「あん？」

「あ、それメアも気になってた！　なんか、蓮華だけ色々と普通の
カードと違うよね！　どうして蓮華だけマスターが外で遊んでいる
ってわかったの？」

おお、さすがイライザさん、上手い話題転換だ！

ごく自然に、みんなの興味の矛先を蓮華へと向けてくれた。

しかも、内容自体も俺が微妙に気になっていたことだ。

以前、休憩中にカードの中に居る時はどんな感じなのか、という
ことを話したことがある。

その時に聞いた話なのだが、モンスターたちはカードの中に居る
時、人間の感覚で言うなら夢の中にいるような感じで過ごしている
らしい。

より正確に言うならば、肉体と言う感覚が曖昧となり、精神だけ
で漂っている状態……とでもいえば良いのだろうか。

その際、カードたちは夢という形でカードの外部の状況を観測す
ることもできるし、完全に意識を落として時間の経過を早めること
もできるらしい。

カードが出現した際に、周囲の状況を理解していたりいなかった
りするの、そのためだ。

だが、かつてその話題が出た時は、誰も迷宮の外での俺の様子を
知っている者はいなかった。

よって、カードは迷宮の外では外部の状況を把握できない……と
俺は勝手に思っていたのだが、どうやら蓮華は違うようだった。

俺たちの視線を一身に受けた蓮華は、逆に不思議そうな顔をした。

「ってことは、お前らは迷宮の外だと周囲の観測が出来ないってこ
とか？」

「は、はい。マスターが迷宮の外に出ると、自然と意識が落ちてしまうので……」

「そう、だったのか……」

ユウキの困惑気味の返答に、蓮華は難しい顔で悩み始めた。

「ん……霊格再帰の能力の一つか？」

「いや……どうだろうな。零落スキルだったころから使えたわけだし……」

するとそこで、輪から外れたところで静観していた鈴鹿がススス……とにじり寄ってきた。

「マスター、実は私も外の世界を見れたりして……」

「えっ、そうなのか？」

予想外の発言に俺はマジマジと鈴鹿を見つめる。

いろいろと『規格外』なこのヤンキー座敷童はともかく、この性格とおっぱい以外は平凡な女鬼までもが迷宮外の様子がわかるというのは些か意外であった。

「蓮華と鈴鹿の共通点ってなんだ？」と俺。

「二人とも日本由来のモンスターではありますよね」と首をかしげるユウキ。

「名前が漢字だとか？」

「それは関係ないだろ。名づけをされる前から出来たわけだし」蓮華の言葉に俺は首を振った。

「あ、わかった！」

みんなで思い思いに予想していると、突然メアが叫んだ。

「蓮華も鈴鹿も性格が悪くて変人なんだ！」

「ぶん殴るぞ！」

「痛ッ！ 殴つてから言うな！」

「真面目に話してんのに、お前がふざけたこと言っつてっからだろっ
が」

「私だって真面目よ！ だつてお前も鈴鹿も、どう見ても同種族の
カードと性格が違うじゃん！」

『む………』

メアの反論に、俺たちは一理あると唸った。

言われてみれば、確かに。この二枚のカードは通常の座敷童や鬼
人のカードとかけ離れた性格をしている……。

普通の座敷童はもつと素直でおとなしい性格をしており、鬼人も
快活で竹を割ったような性格をしているのがデフォルトだ。

いくら主人の扱いによってカードの性格が歪むと言っても、蓮華
や鈴鹿ほど強烈にキャラチェンジする個体は珍しかった。

「でも性格が違うから迷宮の外が見れるってのも変な話ですけどね」

「そっなんだよなあ」

ユウキの言葉にうなづく俺。

と、その時。

「———そんなことはどうでもいいですよお」

不意に、白い何か俺の体へと巻き付いてきた。同時に感じる熱
い体温と、柔らかく巨大な感触。……鈴鹿だ。

蛇のように俺の体に絡みついたものの正体は、彼女の腕だった。

「マスター、見てたよ。なんだかキラキラした女の子たちに囲まれて嬉しそうだったねえ？　ずるいなあ、これは裏切りだよ」

耳元で囁くように、ぞつとするような声音で俺を責め立てる鈴鹿。彼女のねっとりとした喋り方は妙に脳に響き、まるで音の触手が侵入してくるかのようだった。

「部活作り、だっけ？　勘違いしたらダメだよ、マスター。主役の中にいくら混じろうと、仲間になんてなれないんだから。主役は主役、モブはモブ。生まれ持った役割は絶対に代えられない。今は一緒に行動できても、それはほかの主役を見つけるまでの代用品。用済みになったらポイツと捨てられちゃうんだよあ？」

「う……」

鈴鹿の言葉は、眩暈を伴って、俺の心の底に眠っていた不安を揺らした。

彼女の言う通りだ。俺とアンナたちでは、生まれ持った格が違う。アンナは、ハーフの美少女で、大企業の社長令嬢で、中学生にしてセミプロにまでなった天才児だ。織部も、アンナに匹敵するほどの美少女で、中学生の時点でやはり冒険者になるだけのバイタリティを持っている。

俺とは違う、自分で輝くことのできる存在だった。

俺はただの、特別なカードを手に入れただけの凡人……。

「だから、ね？　無理に特別な奴らの仲間入りなんてしないで、同じモブ同士仲良くしようよあ」

確かに……無理して特別な奴らの仲間をしても、いつかボロが出るだけなのかもしれない。

それならいつそ鈴鹿のように普通のカードだけで普通にやっつい

く方が幸せ——」。

「——おい」

「ッ!？」

バチンッ、とブレーカーが強制的に落とされたような感覚と共に、俺は我に返った。

なんだ、今の……なんか、俺が俺じゃなくなるような……。いや、俺の心の片隅にあった負の感情を、風船を膨らませるように大きくさせられたような感じ……。

混乱しつつ声の主である蓮華の方を見ると、いつになく険しい顔で鈴鹿とにらみ合っていた。

「……別によお、コイツがコイツの意思でそう決断すんなら、それはそれで良いんだ。だが、これはちよっと違うだろうが」

「濁流の中に泳げない子供が飛び込もうとしていたら、止めてあげるのが愛情というものでは？ これは私なりの愛ですよ」

「愛？ 束縛の間違いなんじゃねえか？ 重要なのは、自分の意思で生きることだ。それで、降りかかる火の粉はアタシたちが被ってやれば良い……違うか？」

「ああ、さすが……特別な奴らは、言うことは違う。実に、傲慢で、残酷だ……」

今にも殺し合いが始まってしまいそうな、張り詰めた空気。

言っていることはよくわからないが……このままではマズイ!

俺たちは、慌てて仲裁に入った。

「ちよ、ちよっと落ち着きなさいよ」

「そ、そうですね、急にどうしたんですか？」

メアとユウキが二人の間に割って入り、さりげなくイライザが俺を庇うように前に立つ。

それを見た蓮華は「ふう」と息を吐き、ゆっくりと身に纏う緊張感を解いた。

そんな彼女をじっと睨む鈴鹿。

「なんでもねえよ。そんなことより、そろそろ行くこうぜ」

「あ、ああ……」

いろいろと言いたいこと、聞きたいことはあったが、俺はそれにくっくと飲みこむと……攻略を開始したのだった。

「……よし、今日はここで泊まるとするか」

21階の安全エリアへと到着した俺は、皆へとそつ声を掛けるとユウキの背から降りた。

ハーメルンの笛を持つ俺は、基本的に泊まりがけの攻略をすることはない。

しかし、早朝から攻略を再開したい時やキャンプをすることで仲間と交流を深めたいときは、こうして階段そばの安全地帯でキャンプをする時もあった。

今回の場合は後者で、最近あまり構ってやれなかった埋め合わせである。

ユウキやイライザと協力しながら、俺はてきぱきとキャンプの準備を始めていく。

こういう時、蓮華やメアなどは手伝ったりしない。二人で、蹴鞠

をして遊んでいる。見た目通りお子様なあいつらは、興味のないことは徹底してやらない主義だった。

鈴鹿は手伝ったり手伝わなかったりと気まぐれなのだが、今回の場合は先ほどのこともあってか、どうやら手伝ってはくれないようだった。

「よし、と。これで完了だな」

この迷宮は、晴れた夏の夜の森という環境もあって、テントを張る必要もなくキャンプの準備はすぐに終わった。

野営をする時の俺たちの晩飯は、いつも鍋かバーベキューと決まっている。

最初の頃は、上のコンビニに転移で弁当などを買いに行つて、各自適当に食べていたのだが、そのうち何となく味気なく感じるようになり試しに鍋をやってみたところ好評だったため、それ以来鍋やバーベキューをするのがお決まりの流れとなっていた。

鍋かバーベキューかは、その時の気分にもよるのだが、暑い迷宮ではバーベキューが多く、寒い迷宮では鍋が多い。この日も俺たちはバーベキューをすることになった。

「おい、メア！ 火が起きたからつてすぐに肉を置くんじゃねーよ！ 肉がグリルにこびり付いちやうだろーが。バーベキューの基本は余熱だ、余熱。おい、歌麿。肉はしっかり冷やしておいてくれて前も言っただろうが。常温で焼くとパサついた触感になるんだよ」

キャンプの準備は手伝わない蓮華だが、バーベキューとなると話は別だ。俄然張り切つて仕切りだす。

こういつ奉行タイプに逆らつても空気が悪くなるだけなので、メアですらうんざりした顔で大人しく従っていた。

「ふい〜、食った食った」

そうして、（主に蓮華が）楽しいバーベキューが終わると、俺はユウキの毛皮を枕代わりに寝転がった。フカフカの毛皮と仄かに温かく弾力のある腹部が俺を優しく包み込んでくれる。迷宮の中でしか寝ることのできない最高のベッドだ。

ぼんやりと空を眺めてみれば、そこには満天の星空が広がっていた。

迷宮の中で星を見るたびに思う。

もしあそこに見える月めがけてロケットを飛ばしたら、ロケットはちゃんと月へと到達できるのだろうか。

あそこに見える星々は本物？ それともプラネタリウムのような絵に描いた星？

迷宮の中は異空間なのだと偉い学者たちは言う。

では、その異空間とは実際にどれほどの広さなのか。

もし迷宮の壁をぶち抜いてどこまでも進んで行ったら、その先には何が待っているのだろうか。

無限か、途中で行き止まりがあるのか、あるいは地球のように丸いのか……。

それすらも俺たち人類はわかっていないのだ。

そんなことをぼんやりと考えていると。

「なあ、イライザ。一曲奏でてくれよ」

ふいに、蓮華がそんなことを言い出した。

「わかりました。なにか、リクエストはありますか？」

イライザはいそいそと笛を取り出しながら蓮華へと聞く。

「そつだなあ……」

蓮華は数秒ほど思案したのち、最近特にお気に入り曲をリクエ
ストした。

イライザがニコリと微笑み、笛を奏で始める。

夜の森に、ノスタルジックな音楽が流れだした。

それは、迷宮が現れる少し前に大ヒットしたレトロゲームのBGM
だった。

現代・過去・未来を行き来する方法を見つけ出した主人公たちが、
滅びの未来を迎える世界を救うため冒険するというRPG。

その画期的なストーリーとシステムに、国民的人気漫画家が描い
た世界観と魅力的なBGMにより、現代においても名作と名高い。

俺もガキの頃やったことがあるが、とてもスーファミとは思えな
いレベルの出来だった。

惜しむらくは、生まれた時代が悪かったことだろうか……。

『1999年に怪物が現れ世界が滅亡してしまう』というストー
リーは、些か刺激が強すぎた。

なんせ、1999年に実際に迷宮が現れ、そのすぐ後にアンゴル
モアが起こってしまったのだから笑えない。

ゲームの発売は迷宮が現れるよりも前だったため、直接批判され
ることはなかったが、待望されていた続編は発売無期延期となつて
しまった。

ある意味予言の書となつてしまったそのゲームは、その出来もあ
いまって伝説的人気を誇り、今では十万円を超えるプレミアもつい
ている。

俺がガキの頃プレイできたのも、ゲーム好きな親父が当時定価で
買ってくれていたからだだった。

馬鹿らしい話ではあるが、当時はそれほど神経質になっていた、
ということだ。

もっとも、時が経つにつれ世間を取り巻く空気も変わり、今や迷

宮やモンスターを題材にしたゲームや漫画も普通に売られるようになってる。

それに伴い、リメイク版やその続編も数年前に発売されていた。蓮華がプレイしたモノも、このリメイク版である。

彼女の興味の対象は、今や漫画にとどまらずゲームやアニメにまで広がっていた。

なお、イライザが普通にゲームサウンドを演奏できるのは、別に俺が仕込んだわけではなく蓮華がプレイしているときのBGMを聞いて耳コピした結果である。

イライザさん、しゅごい……。

と、そんな風になつたりと過ごしていたその時。

「……マスター、人の気配が」

俺のクッション代わりになっていたユウキが、静かに警告してきた。

その言葉に、俺はすぐさまカードたちとリンクを繋ぐと体を起こした。

思い思いの時間を過ごしていた仲間たちも、どこかピリついた空気を纏い始める。

……この迷宮で他の冒険者と会うのはかなり珍しい。

基本的に、見通しの悪い夜の迷宮や、活動が困難となる豪雨や大雪の迷宮は人気がない。

それゆえに、このような夜の迷宮を選ぶ冒険者は俺の様に欲しいカードがあるか……あるいはリンクなどで暗闇をもともしない手段を持つものに限られる。

いずれにせよ、警戒に値する相手だということだ。

しばしじつと様子を伺っていると、ランタン型のライトを手に持った冒険者が姿を現した。

性別は、男。大学生くらいの年頃で、ジャーニーズ系の爽やかなイ

ケメンだ。

彼は、俺たちを見ると友好的な笑顔を浮かべて挨拶をしてきた。

「お、やっぱり他の人がいたのか。こんばんは！」

「……こんばんは」

俺は挨拶を返しながら、かすかな違和感を抱いていた。

なんだろう、コイツ、どこかで見たことがあるような……あつ！
そこで俺は青年の顔を思い出した。

コイツ、いつも八王子駅前で逆ナン待ちしてるイケメンじゃねーか！ 三ツ星だったのかよ！

まさかの人物との偶然の出会いに俺が動揺していると。

「えっと、悪いんだけど、俺もここで休憩させてもらっていいかな？ さすがに今から他の階に移動するのはきつくてさ」

「あ……まあ、構いませんよ」

本当はイヤだが、さすがにここで断るのは失礼だ。遠回しにあなたを犯罪者と思ってます、と言っているようなものだからだ。

チラリとイライザを見ると、無言で頷きが返ってきた。

ヴァンパイアである彼女は、この夜のフィールドにおいて不眠不休で動き続けることが出来る。就寝中の見張りには最適だった。

俺が頷くと、彼はランタンを俺たちの中間に置き、腰を下ろした。

「あー、良かった。……ところで、もしかして、君って北川選手？

あの学生トーナメントで優勝した」

「……どうしてです？」

「いや、連れているカードに見覚えがある気がする。……その座敷童とか」

俺はちらりと蓮華を見ると、曖昧な笑みを浮かべた。

「ええ、まあ、そちらもよく駅にいらつしやいますよね？」

「ああ！ やっぱり、どこかで見かけたような気がしてたんだ。いや、こんなところで思わぬ有名な人にあっちゃったな。あ、もしかして今のうちにサインとか貰っておいた方がいいかな？ いつかはプロになるんだろ？」

「いやあ、そういうのはやってないんで。すいません」

「そっかあ、残念」

俺がやんわりと断ると、彼は思いのほかあっさりとし引き下がった。口調は柔らかいが、俺がマジで断っているのを表情から読み取ったのだろう。あるいは本当はさほど欲しくもなかったか。

初対面の俺に物怖じせず話しかけてくるところと良い、陽キヤの気配がブンブンする男だった。

その後、数分ほどどうでもいい世間話をしていくと。

「……ところでさ。北川君はカードのトレードって興味あるかな？」

不意に青年がそう切り出してきた。

ついに本題に入ってきたか……！ 内心で気を引き締めつつも、表向きは平静を装う。

「……まあ、ないことはないですね」

「なるほど、なるほど。実は俺、今結構レアなカードを持ってるんだよね。北川君が興味を持ってくれそうな奴。どう？ 見てみない？」

「ん、とりあえず見るだけなら」

「良しキタ！ えっと、これなんだけど」

「ッ！ これは……！」

感情を表情に出さないようにと気をつけていた俺だったが、それを見た瞬間思わず声を漏らしてしまった。

【種族】ドラゴネット

【戦闘力】145

【先天技能】

- ・小竜玉：生命力を生み出し貯蓄する竜の心臓。
- ・竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。

【後天技能】

- ・零落せし存在
- ・滅私奉公：自らの私欲を抑え、奉仕に徹する精神。命令された行動に対するプラス補正、自由行動に対するマイナス補正。ストレスが溜まり過ぎるとたまに爆発する。

「零落スキル……」

「どう？ 興味湧いてきたんじゃない？」

「ええ、まあ。今となつては、零落スキルは本当に貴重ですからね」「でしょ？ で、どう？ トレードしたくなつてきた？」

前のめりになつて聞いてくる彼に、俺は腕を組んで悩み始めた。

こりゃあ、マジで悩ましいことになつてきたな。

俺が霊格再帰を発見してから数か月。零落スキルと霊格再帰についての研究はあまり進んでいない。

実際にはいろいろと研究はされているのだろうが、その情報があまり世間に出回ってこないのだ。

例えば、どのカードにどのアイテムを与えれば霊格再帰になるだとか。零落スキルや霊格再帰を持つカードをランクアップさせるとスキルはどうなるのかだとか。

そう言った情報が一般にまで流れてこないのである。

正確に言うならば、どれが正しい情報でどれが間違った情報かわからない、というべきか。

Cランクカードの零落スキル持ちをランクアップさせたら零落スキルが消えた、とか。逆にDランクの霊格再帰持ちをランクアップさせたら霊格再帰を引き継げた、だとか。

元々ランクアップによるスキルの引継ぎには運の要素も絡むこともあり、色々な情報が錯綜して一般人である俺には真偽が判断つかなかったのである。

……一番厄介なパターンが、それらの情報がすべて正しかった場合だ。

零落スキルや霊格再帰が、使い込みや運に関係なく、ランクアップで消えたり消えなかつたりするとしたら、今後の戦略にも大きく関わってくる。

蓮華にしても、もしランクアップをしても霊格再帰が引き継がれるならなんとしてでもランクアップを狙いたいし、逆にそうでないならこのまま座敷童のままにいるというのも一つの手だからだ。

また、蓮華の数々の特異性が霊格再帰によるものなのかも気になる。

そう言ったことを調べるにしても、あと一枚は零落スキル持ちが欲しい。

俺は常々そう思っていた。

が、ここで問題となるのがこのトレードが安全かどうかと、トレードするにしても、その対価はどれほどになるか、である。

ギルドは個人間のカードのやり取りを禁止してはいないが、それに関わるトラブルについてもなんの対処もしてくれず、また購入したカードを経費として計上することもできない。

例外は、脅迫などで不平等なトレードを強要された……といった

犯罪にかかわるモノだけである。

同じ犯罪であっても、詐欺だとかであったりするとやはり動いてはくれない。

つまり、もしこのトレードに俺の想像もつかないようなギミックが施されていた場合、俺はどうすることもできないのだ。

「……一応聞きたいんですが、もし現金でトレードするとしたらどれくらいを想定してます？　トレードの方法は？」

「そうだなあ。まず現金でのトレードはちょっと嫌かな。北川君みたい知名度のある人を疑うわけじゃないけど、やっぱりトラブルが多いやり方になるからね。カードのトレードの場合は、まず眼の前で互いに所有権の破棄を行って、次にマスター登録。最後に召喚を行うって感じで確認するのはどうかな？」

「なるほど」

それなら少なくともカードが偽物だった、という最悪のトラブルは避けられる。

一応所有権の廃棄が虚偽で、相手の召喚に合わせて自分で召喚する……という手法も考えられるが、それもリンクを繋がられるかどうかで判断できるだろう。

今の俺なら手に入れたばかりのカードであってもテレパス程度は使うことができる。

「交換するカードについてだけど、できれば市場価格で三千万円程度のカードは欲しいかな」

「むむむ……」

定価で三千万か。Cランクカードの中堅レベルだな。Dランクカードとの交換と考えると不釣り合いにも程があるが、零落スキル持ちは実際の価値以上に入手が困難となっているため、妥当と言えば

妥当な金額に思える。

ちなみに、零落スキル持ちの現在相場は同種族の三倍程度となっている。もっとも、零落スキル持ちは価格の変動が激しいため、現在の相場で語るのは無意味っちゃあ無意味ではあるのだが……それでも一定の目安にはなった。

一応、弾はある。死蔵する形となっているライカンスロープ……そのうちの一枚だ。

【種族】ライカンスロープ

【戦闘力】400

【先天技能】

・月満つれば則ち虧く：『迷宮外の』月の満ち欠けによって身体能力が向上していく。

・狼に衣：ステータスが減少するが気配遮断等のスキルを内包する人間体と、ステータスが向上する人狼形態に変身することができる。

・本能の覚醒

【後天技能】

・気配察知

・群れの主：集団での行動時に自身と仲間にプラス補正。

・武術

これをトレードにだせば、十中八九相手は交換に応じてくれるだろう。

なんせ、貴重な零落スキル持ちとは言え、ドラゴネットの戦闘力はわずか145。スキルも失われている。霊格再帰を覚醒させるまでろくに戦力にならず、またキーアイテムも判明していない。

一方、俺の手に入れたライカンスロープはそのどれも能力的に瑕疵のない新品だ。

一枚でもCランクカードが欲しい三ツ星の冒険者からしたら、ど

う考えてもライセンスロープの方が欲しいだろう。

それを考えると、若干手放すのが惜しくなってくる。

悩んで、悩んで、悩んで……俺は決めた。

「俺は————」

第九話 トレーディングカード（後書き）

【Tips】カードのステレオタイプ

モンスターの種族ごとの性格は、民衆が思い描くモンスターのイメージが反映されていると言われている。「妖精は気まぐれで悪戯好き」「悪魔は狡猾で残忍」「メガオンの天使は基本的にペ天使」といったように、多くのモンスターは一般に思い描かれている通りの性格・性質を持っている。

しかし何事にも例外というものはあり、中には「グレている座敷童」「男性恐怖症のサキュバス」「粘着質な鬼」といった変わり種も存在している。

その多くはマスターの取り扱いに問題があり性格が変質してしまったケースであるが、時折「ドロップした時からこうだった」という報告も挙げられている。

第十話 おきのどくですが ぼづけんのしょは きえてしまいま
した

『マスター、そっちにバイコーンが二体行ったよ!』

『こちらユウキです! オークの数が二十体を超えました! オークの増援が止まりません!』

『こちら蓮華! 猪野郎を発見! 討伐に移る!』

『了解! バイコーンはこちらで処理する! ユウキはイライザとオークの足止めをそのまま頼む! 蓮華はボアオークを処理し次第、ユウキたちの援護に向かってくれ!』

翌朝。

早朝から攻略を再開した俺たちは、戦いに次ぐ戦いの中に身を投じていた。

迷宮内では、様々な条件が重なった結果、時折通常の数倍ものモンスターたちが湧くことがある。

基本的に迷宮内におけるモンスターの発生速度は一定であると言われているが、一度に多くの冒険者が一つの階層に侵入したり、多くのカードがロストしたりすると、迷宮に『栄養』が供給されることにより、モンスターの生成速度が加速する。

そうして過剰に増えたモンスターたちは、人間が何をしなくとも勝手に共食いなどを行い自然な数に戻っていくのだが、それよりも前にその階層に足を踏み入れると思わぬ敵の大群に遭遇してしまうことになる。

そう言ったモンスターたちが過剰生成されてしまっている階層の

ことを冒険者はモンスターハウスと呼び、時に忌み嫌い、時に有益に活用させてもらっていた。

今回、俺はこのモンスターハウスが生成されてしまっていることを知りつつ、この階層に足を踏み入れていた。

トラップにより主力が大きく傷ついてしまったため、低レアカードを大量に使い捨てにして撤退してきた、という話を昨夜会った冒険者――青木さんから聞いていたからだ。

通常は面倒くさいだけのモンスターハウスではあるが、そう悪いことばかりでもない。

少なくとも二つ、利点があった。

「マスター、お客さんがわんさか来たよお」

「わかった。シンクロを使うぞ」

俺の護衛としてその場に残っていた鈴鹿が、敵の到来を告げる。その言葉に、俺は静かに自分の存在を彼女に重ねあわせ始めた。俺が、シンクロで彼女の潜在能力を引き出せる割合は、そう多くない。

シンクロを始めとしたリンクの技術は、カードの熟練度と絆が大きく影響する。

熟練者であれば買ったばかりのカードでもフルシンクロ（シンクロ率99%）が出来るようになるとは聞いているが、今の俺では名付けをした鈴鹿であっても60%ほどが限界だった。

シンクロが完了したと同時に、森の奥から若木をへし折りながら二頭のバイコーンが現れる。

夜の闇に溶け込むような漆黒の毛並みに、体高2メートルを優に超える漫画の世界から飛び出してきたような巨体。その頭からは、山羊のような一對の角が雄々しく生えていた。

自身よりも二倍は大きく、数も多い敵に『俺／鈴鹿』は適度に力を抜いて悠然と構える。

一口に同じ武術のスキルと言っても、イライザが打撃系の武術なのに対し、鈴鹿は柔術や合気道と言った武術を得意とする。

よほどステータスに差があるならばともかく、技もなく力任せで掛かってくる図体ばかりデカイ敵など、なんら恐れる必要もない。恐れるというならばむしろ……。

「…………ツ！」

バイコーンの禍々しい角が仄かに光った瞬間、『俺／鈴鹿』はその場を大きく退いた。

その寸前まで俺が立っていた場所を、雷の槍が通り過ぎていく。癒しと補助を得意とするユニコーンに対し、バイコーンは破壊と呪いを得意とする種族だ。

攻撃魔法は、鈴鹿の武術であつても防ぐことはできない。

しっかりと見切つて躲すしかなかった。

雷撃を躲したこちらの際を狙うかのように、嫌らしいタイミングでもう一体のバイコーンの突進が迫る。

さすがにこれを躲すことはできないと、『俺／鈴鹿』は真正面から迎え撃った。

バイコーンが大きく身を逸らし、その太い前足で踏みつけてこようとする。

体高二メートルを超える巨大馬が身を逸らすと、目の前に突然壁が出来たかのような迫力があつた。

わずかに生まれた恐怖をねじ伏せ、『俺／鈴鹿』はバイコーンの足首を掴み、その関節へと掌打を放つ。

鬼の怪力とテコの原理により、太くたくましいバイコーンの右足が枯れ技の様にポキリとへし折れた。

嘶きを上げて倒れ伏すバイコーンの首筋へと、すかさず追撃の手刀。その頸動脈を切り裂こうとした――その瞬間。

視界の端で何かが光った。

しまった……！　と思うよりも先に、白く輝く無数の蜘蛛の糸が『俺／鈴鹿』の全身に絡みつく。

中等状態異常魔法、マジックウェブ。

雁字搦めとなつて動けなくなつてしまった『俺／鈴鹿』に対し、倒れ伏したバイコーンの角が嫌な光を放った。

拙い！　来る！

両腕をクロスし、グツと身構える。

マスター側からエネルギーを回し、鈴鹿の戦闘力をさらに底上げした。

ないよりはマシ程度の強化だが、これで幾分かはマシとなるはず。そんな『俺／鈴鹿』の姿を見たバイコーンが、確かに、嗤った。ぐるり、とバイコーンの顔が回る。

その先にいるのは、無防備な『俺／マスター』。

ヤ、バ……！

バイコーンより放たれた雷により視界が白い光に染まる――――その寸前。

「グオオオオオオッ！」

俺の目の前に、黒い影が突如降ってきた。

その影は、ライトニングの大部分を見事に防ぎ切ると、何事もなかったかのように倒れ伏したバイコーンへと飛びかかった。

「……ドラゴネット！」

「グルルルッ！」

それは、体高三メートルほどの小さなドラゴンだった。オオヨロイトカゲをそのまま大きくしたような体に、鱗に覆われた蝙蝠のような翼、鋭い爪と牙という日本人が思い描く最もスタンダードなドラゴン――それがドラゴネットだった。

俺を雷撃から守り切り、今しがたバイコーンの首筋を喰いちぎった新しい仲間は、その手柄を誇るかのように大きく翼を広げた。

これは負けていられないな……！

俺と鈴鹿の想いが一つとなり、より一層シンクロが深くなる。

60%、65%、68%、70%……。一時的な感情の高まりが、本来の実力を超えてシンクロ率を上昇させる。

力任せにマジックウェブを引きちぎると、『俺／鈴鹿』は一足飛びにもう一体のバイコーンへと飛びかかった。

それを迎え撃つかのようにバイコーンが、角を光らせる。

放たれたのは――吹き荒れる氷の嵐。中等攻撃魔法、ブリザード。

躲しようのない氷の嵐に、全身を切り裂かれつつ『俺／鈴鹿』はそれを突っ切ってバイコーンへと迫った。

あちらも、自ら放ったブリザードの中へと突っ込むようにこちらへと迫ってくる。

まさに捨て身の一撃。これは多少のダメージ覚悟で相打ちを狙うしかないな、と思っていると。

バイコーンの巨体へと横から突っ込む影があった。

でかした！ ドラゴネット！

先ほどから大活躍の新入りへと、内心で称賛を投げかけつつ全身のバネを使ってバイコーンの胸元へと抜き手を放った。

ズプリ、と二の腕まで突っ込んだ『俺／鈴鹿』は、抜き出しざまに『それ』をえぐり取った。

ドクリドクリと脈動する『それ』を、相手に見えるように握りつぶす。

それが止めとなったのか、バイコーンは無念そうな嘶きを上げ、消えていったのだった。

『こちら蓮華、ボアオークとオークどもの処理は終了！』

『こちらメア！ 増援の影無し！ 戦闘終了だよー！』

同時に、他のカードたちからの報告が入る。

「ぷふう〜〜〜」

それを聞いた俺は鈴鹿とのシンクロを解くと、デカイ吐息を吐いて地面に大の字になった。

あゝ、さすがに疲れた。

この階層に入ってからかれこれ一時間は戦い続けていた気がする。何体倒したかも覚えてないくらいだ。

リンクの連続使用にさすがに頭が熱い。ぼんやりと夜風で頭を冷やしていると。

「お疲れ様であります、マスター！」

低めのハスキーヴォイスでその声を掛けてきたのは、昨日仲間入りしたばかりのドラゴネットだった。

ピシリと姿勢正しく座りこちらを熱く見つめるその様は、訓練された軍用犬を連想させた。

「おお、ドラゴネット。お前もお疲れ様。ありがとう、助かったよ」「ハッ！ お褒めに与り光荣であります！」

敬礼代わりのつもりか、大きく翼を広げるドラゴネット。実際、この新入りはよく頑張っていた。

このドラゴネットは、まだ加入したばかりということもあり、リンクが使えない。

いや、使えないというよりも使いたくない、というべきか。

リンクは、心や感覚を繋ぐ技術である。そのため、好感度が高いカードとのリンクは、多幸感や一体感にも似た快感をカードに与え

る一方、好感度が低いカードにリンクを繋ぐと、カードに著しい不快感や嫌悪感を与えてしまうという一面もあった。

よって、一定以上の好感度があればどんどん絆を深めていくことができるが、逆にそれに満たない状態でリンクを繋げばどんどん好感度が下がってしまい、いずれは『閉じられた心』などの反逆系スキルを得てしまうことになる。

基本カードを使い捨てにするグラディエーターなどは、新品のカードであろうとガンガンリンクを繋いで一戦終わったら即売り払うといったことをしているらしいが、俺はそんな手法はとれないし、性にも合わない。

況してや、このドラゴネットは他のカードよりも絆が必要となる零落スキル持ちだ。

その為、当分はリンクを遣わずゆっくりと仲を深めていくつもりだった。

そんな一人だけ仲間外れ状態の中、ドラゴネットは戦闘力が低いながらもしっかりと奮闘してくれた。

さきほどもそうだ。俺へのダイレクトアタックを防ぎ、鈴鹿のフイニッシュにも協力してくれている。

ドラゴネットには、基本俺の周囲を飛び回り、イけると思った時のみ他のカードなどのサポートをするよう頼んでいる。

つまり、基本的には自己判断で動いてもらっているわけだが、その働きは期待以上であった。

カードの性格や戦闘センスなどは、カードのステータスからは一見してわからない要素だ。

そう言う意味で言えば、このドラゴネットは戦闘力以上のお買い得と言えた。

その低い戦闘力も、徐々に上昇してきている。

すでに、加入一日目にして戦闘力は二十も上昇していた。

これが、モンスターハウスの利点の一つであった。

モンスターハウスは、大量のモンスターが一か所に集中することにより特殊な力場が発生している。それは迷宮のモンスターたちの戦闘力を向上させる一方で、一体一体から得られる経験値を増加させ、さらにはモンスターハウスにいるだけでわずかながらカードの経験値が上昇していくといった効果を持っていた。

つまり、モンスターハウスとは一種の修行場のようなものなのだ。さらにもう一つ、モンスターハウスには利点があった。

『マスター、ガツカリ箱を見つけたよ！ 今の戦闘で発生したみたい！』

それがこの、一定数を撃破することに現れるガツカリ箱である。

通常は迷宮の踏破時、あるいは地下迷宮型の小部屋でごくまれにしか現れないガツカリ箱であるが、モンスターハウスでは一定数を撃破すると確定でガツカリ箱が現れるという仕組みになっていた。

中身がランダム故、自分でモンスターハウスを発生させるほどの価値はないが、確定で宝箱が出現するというのは結構嬉しい。

俺は鈴鹿と二人ドラゴネットの背に跨って空に飛び立とうとして――。

「うー!? こ、これは……」

そこで、思わぬ問題に気づいてしまった。

一つは、予想外にドラゴネットの跨り心地が悪かったことだ。

トゲトゲとした鱗が股間と太ももに刺さって微妙に痛い。今日は我慢するとして、簡易的な鞍を買ってくるしかないだろう。

まあそれはどうでもいい。もう一つの問題は、後ろからの感触にあった。

そう、アレが当たるのだ。フニフニと、今まで感じたことのない

感触が、背中越しに伝わってくる。おまけに、良い匂いも……。
チラリと後ろを振り向くと、悪戯っぽく目を細めた鈴鹿と目があ
った。

「ん？ どうしたのお？ マスター？」

「な、なんでもない。ドラゴネット、ガツカリ箱のところへ飛んで
くれ！」

「了解であります！」

「ふふふ……」

明らかにこちらの内心に気づいた上で面白がっている様子の彼女
に、俺は慌てて前を向くとドラゴネットへと指示を出して誤魔化し
た。

俺の指示に少しだけ助走をして飛び上がるドラゴネット。

その瞬間、俺は太ももの痛みも背中感触も、すべて忘れ去った。

「やべええ……！ 俺、マジで空を飛んでるよ……！」

あつという間に地面が遠くなり、強い風が顔へと吹き付けてくる。
リンクを通して蓮華などから空を飛ぶ感覚は知っているつもりだ
った。

しかし実際に生身で空を飛んでみると、リンクとは全く違う感覚
……。いや感情を覚えた。

全身で風を切る感覚に、遠くなる地面に金玉が縮みあがる感覚。
何度も何度も踏破した迷宮だというのに、上から見下ろした夜の森
は、まったく違う景色に見えた。空を見上げればいつもよりもずつ
と広く、近くなった夜空の星々が見える。それは、俺にまるで星の
海を泳いでいるかのような錯覚を与えてくれた。

これは、病みつきになりそうだ……。

が、そんな楽しい時間ほどすぐに過ぎるもので。

あつという間に俺たちはガツカリ箱のところへとたどり着いてしまった。

すでに他のカードたちも揃っている。

地面に降り立った俺たちの元へと真つ先にやって来たのは、イライザだった。

「マスター、お疲れ様です。こちらを……」

そう言っただけで彼女が差し出してきたのは、この戦いで落ちたドロップ品の数々だった。

ボアオークのカードが二枚に、バイコーンが一枚、グレムリンが一枚。その他に魔石がたくさん。大量だ。

しかし……。

「グレムリンもいたのか、俺が出会わなくてよかったぜ」

カードに描かれた不気味な小悪魔のイラストを見て、ホッと胸をなでおろす。

Eランクカードのグレムリンは、冒険者の中でぶつちぎりに嫌われているカードだ。

質の悪いことに迷宮のタイプや深さに関わらずどこにでも出てくるといのが、それに拍車をかけていた。

普通のモンスターは強さに応じた階層にしか出ないというのに……マジでゴキブリみたいな奴だ。

なお、カーバンクルも強さに関係なくすべての階層に出現するが、こちらは大歓迎だった。

俺はゴキブリと出くわさずに済んだという小さな幸運に感謝しつつ、ガツカリ箱へと眼を向けた。

さて、お楽しみのお時間だ。

「イライザ頼む」

「イエス、マスター」

グールだった頃より変わらぬフレーズで頷いたイライザは、かつてよりもずつと滑らかな動きで罫を解除し始めた。

すると、ほんの一分ほどで力チリという音が聞こえてくる。

無論、今の彼女に失敗など有り得ない。

さあて、何が入っていたかな？ とあまり期待せずにガツカリ箱を覗き込み。

『えっ……！？』

俺たちは思わず驚きの声を上げた。

箱の中にあつたのは、黄色に輝くスキルオーブだった。

黄色は技術系のスキルの証。中途半端に高い魔道具なんかより、よっぽど嬉しいアタリであった。

「やりましたね！ アタリですよ、ご主人様！」

「お、おお」

予想外の幸運に戸惑いつつ、気を取り直してこれを誰に使うかを考える。

技術系は、基本誰に使っても有益だ。切り札の蓮華か、エースのイライザか。あるいはDランクたちの底上げに使うか。

悩んだ末、俺はイライザに使うことを決めた。

彼女には技術系を底上げする【多芸】のスキルがある。決して損にはならないだろう。

「よし、イライザ、使ってくれ」

「よろしいのですか？」

イライザが遠慮がちに訪ねてくる。

彼女にはかつて精密動作を与えたことがある。平等に考えるなら自分は排除されると思っていたのだろう。

「ああ、悪いがこればかりは平等性より合理的に考えるべきだからな」

そう言っただけを見渡すが特に不満に思っている様子はない。

なんだかんだ、このパーティーで一番体を張っているのが彼女だとわかつているからだろう。

……唯一鈴鹿だけは嫉妬の気配を漂わせていたが。

それを確認してようやくイライザは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとうございます。……必ずやこの恩に報いて見せます」

「お、おお……」

そう言っただけで膝き、俺の手の甲へと口づけをするイライザ。

……ヴァンパイアとなつてからというもの、彼女はこうして儀礼的な行為を好むようになっていた。

彼女に元々そういう素養があったのか、ランクアップに使用したヴァンパイアの影響によるものか……。

彼女が本心から慕ってきているのがわかる故にやめるとも言い辛く、俺はその度にむず痒い想いをしていた。

彼女のような超美人に慕われるのは本心から嬉しい。……嬉しいが、時々怖くなる。

イライザの愛が……。

「それでは使わせていただきます」

「ああ。……どれどれ？ おお！」

イライザのカードを取り出して、どんなスキルが追加されたのかを確認する。そこに新しく刻まれたスキルを見て、俺は思わず歓喜の声を上げた。

手に入れたスキルがかなりの当たりスキルだったからだ。

直感：五感とは異なる感覚を持つ。

アプリに載っている説明は、なんともふわっとしたものだ。だが、このスキルの有用性は多くの冒険者たちによって保障されていた。なぜならば、直感のスキルは気配察知や悪意感知、畏感知、靈感といった様々な察知スキルの上位スキルと言われているからだ。

気配察知ほどではないが敵の存在を察知でき、悪意感知ほどではないが次の攻撃や奇襲を感じ取り、畏や霊体なども察知できる。そしてそれらのスキルを既に持つ場合は、より強化してくれる。

そんな万能性を持つのがこの直感のスキルなのである。

いいぞ、いいぞ！ 今回はもしかしたらアタリの回かもしれん。

道中で他の冒険者と偶然出会い新しい仲間を手に入れ、おあつらえ向きにモンスターハウスが形成されていて、ガツカリ箱からはスキルオーブが出た。

何というか、良い方へ良い方へと運勢が動いている気がする。

蓮華と出会ってからというもの、月に一度あるかないかの程度でこういうラッキーデーが訪れることがあった。

今日はもしかして、もしかするかもな……

俺は期待に胸を高鳴らせるのだった。

それから数時間後。

俺たちは、最下層一步手前まで到達していた。

モンスターハウスのように大量の物量戦でもなければ、今さらD

ランクの敵になど苦戦などしない。

唯一注意すべきはEランク迷宮よりワンランク悪質となった畏ぐらいだが、それについてはより高性能となったイライザがなんとかしてくれた。

直感と畏解除のスキルで解除できない畏など、当分は遭遇しないだろう。

そうして……。

「やっと着いたあ~~~~」

ようやく最下層への階段へと到着した俺は、膝に手をつけて大きく息を吐いた。

何度も踏破したこの迷宮だが、最下層まで来るといつもへとへとだった。

どれほどその迷宮に習熟したとしても、道のりの長さが減るわけではない、というのが迷宮攻略の最大のネックだった。

「マスター、こちらを」

顎から汗を滴らせる俺へと、タオルとスポーツドリンクが差し出される。

さすがイライザ、なんて気が利く女だ。

「ありがとう」

さっと汗をぬぐい、グツとスポーツドリンクを呷った。

わずかな塩味とくどくない程度の甘みが、疲労した肉体に染み渡る。

「おい、一息つくなら階段を下りてからにしろよな。まだ安全地帯

じゃねえんだからよ」

そんな俺を見て、蓮華が苦言を呈する。

安全地帯を前に、俺の気が緩んだように見えたのだろう。

実際、自分では気が付かなかったが少しばかり油断していたと言わざるを得ないだろう。

いつもの俺だったら、ペットボトルを受け取っても階段を降りて安全地帯に入るまでは蓋をあけなかったはずだ。

道中よりも、ゴール手前が一番危険なのだから。

「ああ、そうだな。悪かつ……」

「ッ！ マスター！」

「敵です！」

「ッ!？」

俺が蓮華に軽く詫びようとしたその時、突如イライザとユウキが鋭い声を発した。

ハッと周囲を見渡す。いつの間に現れていたのか、ほんの数メートル先にモンスターの姿があった。

猫から全身の毛を奪い、蝙蝠の翼を生やして醜悪にしたような不気味な容姿。その正体に思い至った瞬間、俺の全身の毛穴が開くのを感じた。

マズイ、マズイ、マズイ！ いつの間に!？ こんなに近く！

どうやって! 気配遮断!? あるいは――今この瞬間に『発生』したのか!？

高速で思考が回転する中、口は無意識に最適な命令を発していた。

「――ソイツを殺せええええ!!!」

俺の命令を聞いたカードたちが一斉に攻撃を放つのと、そのモン

スター……グレムリンがニヤリと笑って体を光らせたのは、ほぼ同時のことだった。

パリッ！ という奇妙な音が耳に届くのと同時、見えない波が全身を通り過ぎていくのを感じた。体中の産毛が逆立つ。痛みはない、痛みはないが……。

「キヤアアアアアア！？ イヤアアアア！？」

思わず、俺は女のような悲鳴を上げてしまった。

「ま、まさか……うわああああああッ！？」

俺の悲鳴を聞いた蓮華もまた、悲鳴を上げた。

カードたちによって八つ裂きにされるグレムリンをしり目に、俺は慌てて懐からスマホを取り出す。

電源ボタンを押すが、スマホはウンともスンともしない。

ヘルメットに着けていたウェアラブルカメラも、……蓮華の暇つぶし用のゲーム機も、完全に死んでいた。

「ああああ……アタシのゲームデータが。あとちょっとでクリアだったのに……」

地面に四つん這いになって頂垂れる蓮華。これほどに落ち込んだ姿を見るのは始めてだった。

無理もない。ここ数ヶ月の努力の結晶が一瞬で吹き飛んだのだから。

迷宮攻略の休み時間の中で、コツコツと進めてきたゲームのデータがすべて抹消されたのはさぞ辛かるう。

【おきのどくですが、ぼうけんのしょは、きえてしまいました】の辛さは、すべてのゲーマーの知るところだ。

だが、辛いのは俺も同じこと……。
なんせ、俺が冒険者になってから購入した数十万円以上もの迷宮のデータが根こそぎやられたのだから。

「ンギギギギイイ！ 嘘だろおおおお！？」

頭を掻きむしり悶える。

これが、グレムリンというモンスターがプロアマ問わずに忌み嫌われる最大の理由だった。

グレムリンは、機械製品を破壊するという固有のスキルを持っているのである。

たかがスマホやカメラを破壊されたくらいで何を大げさなと思うかもしれないが、冒険者にとってスマホを破壊されるというのはマジで洒落にならなかった。

まず、ほぼすべての冒険者がマッピングをスマホアプリ頼りにしているため、破壊された位置によってはガチで遭難の可能性が出てくる。

冒険者ライセンスも、機械が組み込まれているためグレムリンのスキルの範囲内となってしまう、救助要請も出すことができなくなる。

こうなると、事前に地図を紙に書き写しておくとか転移系の魔道具を持つていなかった場合、もうなんとか食糧がなくなる前に入り口か出口の近い方に向かって突き進むしかない。

……まあこれについては、道順はイライザさんがすべて覚えていてくれるので、安全エリアまで撤退できればあとはハーメルンの笛でなんとかなるのだが。

問題は、金銭的損害だ。

ギルドが有料で販売している迷宮内の地図情報やアイテムやスキル等の図鑑アプリ……これらは非常に高額でありながら買い切り型

なのだ。再ダウンロードもできなければ、機種変更によるデータ移行もできない。

故に、スマホが破壊された時点で、それまでコツコツと買い貯めていた迷宮の地図データ等がすべて吹っ飛び形となる。

その総額は冒険者のランクにもよってくるが……俺の場合ですら数十万。スマホ本体も高額で一台三十万もするため、合計百万を軽く超えている。

なぜスマホがこんなに高いのかというと、カードによるバリアは身に着けた衣服までは守ってくれないため、モンスターの攻撃でも壊れないよう頑丈に作られているためだ。

俺が持つスマホも、スカイツリーの天辺から落としても画面が割れず、風呂に一晩つけても大丈夫な耐水性と、ガスコンロで直接炙っても壊れないという耐熱性を兼ね揃えた逸品である。欠点は重さとクソ高いことくらいだ。

そんな象が踏んでも壊れないと評判の軍用スマホであっても、グレムリンには勝てなかった。

結果、俺は一発で百万以上の損害を出してしまったのだった。

思わずため息が出た。

誰だ、今日はラッキーデーかも、なんて言ったのは。普通に不運だ……。

唯一の救いは、もうここまで来たらスマホの出番はない、ということくらいか。

もうさっさと主を倒して帰りにスマホを買いに行こう。

もう一度大きいため息をついて先に進もうとしたその時、鈴鹿の様子がおかしいことに気づいた。

なぜか、じつとグレムリンの消えたところを見つめている。

「どうした鈴鹿、なにかあったか？」

そう声を掛けながら見てみるが、そこにはグレムリンが落とした魔石が落ちていただけで何も変わったところはない。

「ん〜？ 何か変な感じがしたような、してないようなあ……………」

「…………どっちだよ？ 変な感じってどんな？」

「うーん、どなって言われても困るけどあ……………」

どうやら鈴鹿も確信があつての発言ではないようだった。

念のため仲間たちにも目で問いかけてみるが、皆も首をかしげていた。

…………鈴鹿の気のせいか。

そう結論付け、先を促そうとしたその時。

「…………ねえ、マスター。もう帰ろうよお。なんか疲れたし」

「ええ…………？」

帰る？ ここで？

突然の鈴鹿の提案に戸惑う俺。

「…………蓮華はなんか嫌な予感とかするか？」

「アタシか？ いや…………特には。グレムリンがやられる瞬間も見てなかったしな……………」

どこか気まずげに頬を掻きながら答える蓮華。

「うーん…………いや、やっぱり帰るのはナシだな」

数秒ほど考え、俺は鈴鹿の提案を却下した。

確かにグレムリンによる思わぬ被害は受けたが、もう最下層は目の前だしスマホは必要ない。体力はレストで回復できるし、ここで

あえて帰る必要性はなかった。

仮にここで一度帰ったとして、一晩休んでいる間に主を倒されてしまえばここまでの労力が水の泡だ。ハーメルンの笛に蓄積されたこの迷宮の情報は消え、また一階層から攻略しなければならなくなる。

それこそよっぽど損失がデカい。

……普段は貸し切りと言って良いこの迷宮で他の冒険者と出会ったことも、微妙に俺の焦燥感を刺激していた。

唯一懸念すべきは、最下層でイレギュラーエンカウントが待ち受けている可能性だが……これもDランク迷宮を攻略していくと決めた時に覚悟していたことだった。

「特に確信があるわけじゃないんなら先に進むぞ。いいな？」

「……はい」

やや不満そうだが大人しく頷く鈴鹿。

そんな彼女を見ながら、ふと『もしこれを言ったのが蓮華だったら俺はどうしていただろう』と思った。

もしかしたら、あっさりと一度帰ることを決断したのではないだろうか。

脳裏にチラつくのは、昨日の『俺が俺でなくなるような』奇妙な感覚。

……いや、関係ない。確かに蓮華の直感や洞察力には信頼を置いてはいるが、ここまで来て帰るなど普通はしない判断だ。

決して……鈴鹿に得体の知れない不信感を抱いているから、などではない。……はずだ。

俺は自分にそう言い聞かせつつ、最下層へと進んだのだった。

第十話 おきのどくですが ぼっけんのしょは きえてしまいま
した(後書き)

【Tips】モンスターハウス

迷宮内における階層ごとのモンスターの発生速度と最大数は基本的には一定である。しかし、一度に多くの冒険者が一つの階層に侵入したり、多くのカードがロストすると迷宮に『栄養』が供給され、モンスターの発生速度が加速し、最大値以上のモンスターが溢れかえることがある。

これを、冒険者は『モンスターハウス化』と呼んでいる。

モンスターハウス化した階層では、そこに滞在するだけで微量の経験値を得られ、さらには倒した際に得られる経験値も増加する。

また、モンスターを一定数倒すごとにガツカリ箱が生成される。

第十一話 最も警戒すべき敵

最下層に降りて真っ先に感じたのは、違和感であった。

いつもならば、足を踏み入れた瞬間に襲い掛かってくる殺気が、まったく感じられない。

まるで、このフロアに自分たちしかないような……そんな錯覚に、俺は警戒心を強めた。

「……ユウキ、気配察知は？」

「今のところ反応はないです。でもライカンスロープの匂いは確かに感じます」

……やはり。ということとは、今回のボスは単体強化型……それも気配遮断を持ったアサシントタイプか。

最も厄介なタイプが現れやがった、と俺は小さく舌打ちをした。アサシントタイプの主は、冒険者が最も警戒すべき敵の一つだ。

音もなく忍び寄り、強烈な一撃を食らわせ離脱。その隠密性は、フィールド補正により気配察知スキル持ちですら至近距離まで気づくことができず、また単体強化型であるが故に攻撃力も高い。

とりわけ警戒すべきなのがマスターへのダイレクトアタックで、対応を誤れば全滅の可能性もあった。

俺も一回だけこの迷宮でアサシントタイプと交戦したことがあるが、正直蓮華の霊格再帰がなければDランク組を何枚か落としていたかもしれない。それほどの、強敵だった。

『飛行組は上空で待機、ユウキは気配遮断で俺の後をついてこい。鈴鹿とイライザは俺の護衛だ』

リンクで指示を伝え、了解の意思が返ってきたのを確信すると俺は安全エリアから足を踏み出した。

通いなれたはずの夜の森は、敵が暗殺者となったというだけでその姿をがらりと変えていた。

一歩一歩進むたびに敵の襲撃がないか警戒し、自分が踏んだ枝の音にすら神経をとがらせるのは、まるで自分がホラー映画の登場人物になったかのような錯覚を俺に与えた。

慎重に辺りを伺いながら進むこと数分、一向に敵の襲撃がないこととやや疑問を持ち始めたころ、俺はようやくお目当ての立地を見つけることができた。

そこは、森の中にポツカリと現れた小さな湖のひとりであった。敵の襲撃よりも先に、目的の場所にたどり着けたことにホッと胸を撫で下ろしつつ、俺たちは湖を背に陣取った。

アサシントタイプとの戦闘において、森の木々に囲まれるのは自殺行為である。

ただでさえ見通しの悪い夜の森の中、遮蔽物に身を隠したアサシンを見つけ出すのは、もはや不可能だ。おまけにそこに木々を利用した立体機動まで加わっては、状況はより絶望的だ。

しかし、この湖のひとりならば視界はある程度開けているし、襲撃の方向も左右と前方に絞ることができる。

背面に回り込もうとも、さすがの気配遮断も水音までは消すことはできない。

とは言え、到着して数分のうちは湖にも警戒を払う必要があった。なぜならば、俺たちが到着する寸前に湖に潜って機を窺っている可能性があるからだ。

そうして数分ほど湖も警戒しつつ、気泡の一つも上がってこない

のを確認した俺たちは、ライカンスロープを迎え撃つための用意を始めた。

広場を取り囲むように木々にワイヤーと小さな鈴を張り巡らせ、足元にはビー玉サイズのペイントボールを無造作に巻いていく。蓮華にも霊格再帰してもらい、仲間へのバフをしてもらった。

ライカンスロープの巨体で、ワイヤーの隙間をくぐるのはまず不可能。木々を使ってワイヤーを強引に飛び越えようとしたとしてもどうしても物音は多少発生するし、何よりも無数のペイントボールを踏めば足跡が残る。

これが、前回の遭遇で思いついた俺なりのアサシンタイプ対策だった。

そうしてすべての準備が終わり、あとは敵の襲撃を待つだけとなった……のだが。

『……なかなか来ませんね、マスター』

『ああ……匂いや気配察知に何か反応は？』

『今のところ、何も……』

『うーん……』

最下層に入ってからすでに二十分。

いままで何度もこの迷宮に挑んでいるが、こんなに主との戦闘まで時間が空いたのはこれが初めてだった。

これがゴーレムなどの感覚が鈍いタイプなら俺たちを見つけられていないとか、あるいは出現地点から一步も動いていないとかのケースが考えられるのだが、ライカンスロープは違う。

その習性は、縄張りに入ってきた侵入者の排除。嗅覚も犬以上で、獲物は決して逃がさない。

俺たちが最下層に足を踏み入れるなりすぐさま襲い掛かってくるのがこれまでの常だったのだが……。

そこで鈴鹿がポツリと呟くように言った。

『ねえ……もしかしてえ、もう他の冒険者に一足先に倒されちゃったとか？』

『うー！？』

そ、その可能性があったか……。

俺たちよりも一足先に来た奴が、すでに主を倒してしまっている……というのはあり得ないことではなかった。

そう思いつつも、俺はどこか半信半疑であった。

この迷宮は夜の森という不人気なタイプだ。昨日あの冒険者と会っただけでも驚いたのに、それ以外にもほかに潜っている奴がいて、しかも俺たちよりも先に主を倒しているとは……。

俺の意識が、警戒よりも思考へと割り裂かれた――その瞬間。

「マスター！」

「ツー！？」

バシヤリという水音が背後でするよりもわずかに早く、ユウキの鋭い声が響いた。

振り返るよりも先に、リンクの感覚共有を通じて背後を見た俺の目に飛び込んできたのは、湖から勢いよく飛び出してきた黒い影であった。

その大木すらへし折る剛腕の振るう先にいるのは当然、俺。

馬鹿な！ なぜ！？ あり得ない！ ふざけんな！

――そんな思考よりも一瞬早く、動く金色の影があった。

『事前に決められていた作戦の通り』庇うのスキルを使用したイライザが、瞬間移動とも言える速さで俺の前に現れ、その人狼の一撃を受け止めたのだ。

人狼の渾身の一撃は本来の目標から逸らされて地面を穿ち、しかしその代償としてイライザの両腕は小枝のようにへし折れ、その体もゴムボールのように俺の後方へと吹き飛ばされていった。

体勢を立て直した人狼が二撃目をふるう前に、彼女が戻ってくるのは不可能だろう。

となれば、俺の守りはユウキと鈴鹿の二枚のDランクカードのみ。単体強化型の主の前には、頼りない手札だ。

だが、問題ない。

すでに、『鎖』は発動しているのだから。

「ッ!？」

黒い毛並みを持つ人狼が俺を金色の瞳で睨む。地面から腕を引き抜き、今度こそ俺の身体を引き裂こうとしたその瞬間。ズルリと何かに足を滑らせた。

泥に足を取られたわけではない。メアのスリップの魔法によるものだ。

わずかに動揺したようにも見えた人狼であったが、Cランクともなればさすがにその反応も早く、摩擦がゼロになった地面の上でも器用にバランスを保つ。

「――あは」

そこに、流れるように鈴鹿の足払いが決まった。それは人狼にダメージを与えられるほどのものではなかったが、摩擦のなくなった地面の上でなんとかバランスを保っていた人狼を転ばすには十分なものだった。

その隙に、ユウキが俺の身体を安全な後方へと運ぶ。

その体を泥まみれにした人狼は、一瞬だけ俺を憎々し気に睨むもすぐに思考を切り替えたのか身を翻す。

暗殺に失敗したとなれば、すぐに撤退し仕切りなおす。その判断力の高さも、アサシントタイプの厄介なところだった。

しかし、一度絡みついた『鎖』はそう易々と敵を逃しはしない。上空より放たれた白く輝く魔法の糸が、湖へと飛び込もうとする人狼の身体へと絡みつく。

二重三重に胴体に巻き付いた糸は、周囲の木々や地面にも張り付き、アンカーのように人狼を縛り付けた。

ユウキの腕から地面へと降りたとき、そこには完全に束縛されて身動き一つできなくなった人狼の姿があった。

そこへ容赦なく降り注ぐ状態異常と攻撃魔法の雨。ウィークネス（衰弱）、ライトニング、パラライズ（麻痺）、スリープ（眠り）、アースピアース……。

体力を削られ、麻痺し、電撃で体を焼かれ、一瞬だけ眠りについた体を岩の槍で貫かれる。

滅多打ちにされているライカンスロープの姿を見ながら、俺は顎に流れた冷や汗を拭った。

「あ、危なかった……まさか湖から来るとは」

まさかライカンスロープが水中で活動できるようなスキルを持っているとは想像できず完全に不意打ちを食らってしまった。水棲系のスキルでも持ってたのだろうか？

なににせよ……うまく『チェーンコンボ』が決まってくれてよかった。

——リンクの第三段階、チェーン。リンクを通じて鎖のようにスキルを繋げて発動していく技術。

通常は状況を判断してからスキルを発動していくのに対し、チェーンは他のカードのスキルの発動をトリガーに反射のレベルでスキ

ルを連動させていく。

今回の場合は、イライザの『庇う』をトリガーに、メアのスリッ
プと鈴鹿の武術、蓮華のマジックウェブをチェーンでコンボにした
形になる。

思考を省き反射のレベルでスキルを発動させるチェーンは、一度
嵌ればコンボの終わりまで抜け出せなくなるが、歯車が一個でもズ
レれば大きな隙ができてしまう諸刃の剣でもある。

いまいち使いどころの難しい技術だったが、イライザの庇うで攻
撃を防ぐだけではヒットアンドアウェイの形で奇襲されては逃げら
れてしまい、苦しい戦いとなってしまう。そのため、リスクを承知
で敵を初撃で拘束する賭けに出たのだった。

賭けの結果は、ご覧の通り。イライザこそ初撃を庇ったせいで多
少の負傷をしてしまったものの今ではすっかり傷も癒え、ライカン
スロープは多くの状態異常を重ね掛けされ一歩も身動き出来ない。

このまますんなり勝てるかもしれない……そんな淡い期待を俺が
抱いた、その時。

『マスター！？』

「……………！？」

突然ユウキが俺を抱え飛ぶ。

一体何が？　と思うよりも早く、リンクを通じて彼女の感覚が流
れてきた。

『白い影』が、先ほどまで俺がいたところへと腕を振り下ろして
いる。

スローモーションで舞い散る土くれの向こう側で、あり得ぬはず
の獣の瞳と眼が合った。

「馬鹿な……………！」

驚愕と共に振り向くと、そこにはいまだ拘束された『黒い毛並みの』ライカンスロープの姿と、やはり驚愕した表情でこちらを見る蓮華たち。

二体目！？ 単体強化型じゃなかったのか……！？
いや、違うー！！

そもそもCランクであるライカンスロープが複数いる時点でおかしい！

頭に過るのはかつての水虎だが、今回はそれとは話が違う。

ライカンスロープを複数呼び出せるモンスターなど存在しないのだから。

つまり、これは――。

『マスターッ』

ユウキの声にハッと振り向くと、そこにはこちらへと腕を振り上げる三体目の『赤褐色の毛並みを持つ』人狼の姿があった。

『イライザアアアアアアア！』

余計な思考を挟む暇もなく、絶叫するように縋ったのは、我らがパーティーの盾。

すでに二体目の襲撃が判明した時点で動き出していた彼女は、ギリギリのタイミングで俺の前へと立ちふさがってくれた。

「……ガハッ！」

『イライザ……！』

赤い人狼の腕がイライザの胴体を貫通する。

さすがの彼女といえども、このタイミングで攻撃を逸らしたり防いだりすることは無理だったのだらう。それでもなんとか体を張っ

て俺へのダイレクトアタックだけは防いでくれたのだ。

そこへ、蓮華の弾幕が降り注ぐ。

素早い動きで身を躲す人狼たちとすれ違うように、俺はユウキの手で蓮華たちの元へと運ばれていった。

これで一先ずは死地を脱したわけだが……。

『無事か、イライザ……！』

『イエス、マスター。……しかし、すいません。不覚を取りました。傷が……癒えません』

『ッ……！』

夜のフィールドであれば不死身に近い筈のイライザの身体が……回復しない。

それは、彼女が聖なる武具で攻撃されたことを意味していた。

見れば、新たに現れた白と赤褐色の毛並みの人狼たちの腕には、銀色に輝く鉤爪が装備されている。

聖なる武具は、銀製の武具を魔道具加工して作られるもので、イライザのようなアンデッド系のモンスター対策として市販されているものだ。

市販品の武具をモンスターたちが装備している……それは一つの事実を意味していた。

——これが、他の冒険者の襲撃であるということ。

第十一話 最も警戒すべき敵（後書き）

【Tips】チェーン

リンクでカード間のスキルを連結し、次々とスキルを発動させる技術。うまく決まれば相手に強力な連携攻撃を叩き込めるが、わずかでも歯車が狂えば大きな隙を生み出してしまう諸刃の剣。

その使用には、リンクの上手さといった技術とは全く別の、戦術家としての才能を要求される。

第十二話 禍福は糾える縄の如し

「クソ……マジで事件だったのかよ。フランク迷宮だけじゃなかったのか？」

この襲撃が人の手によるものと分かった時、俺の頭に過つたのはアンナとの会話だった。

自然には起こりえないことが起こっているのならば、その要因は外部にあるということ……。

アンナがそう言っただけで事件の可能性を示した時、実のところ俺は半信半疑だった。

迷宮の管理ゲートやダンジョンマートの監視カメラをごまかして犯罪を続けるのは、あまりにハードルが高いからだ。

それこそ、そんな技術があるのなら他にもっと良い稼ぎがあるだろうと思っただけだ。

だが、こうして実際に目の前に存在する以上、もはや疑う余地はない。

方法はわからないが、この襲撃者は自分の犯罪の痕跡を消すなんらかの手段を持っているのだ。

見たところ、マスターの姿はないがおそらくリンクを使って遠隔で操作しているのだろう。

カードの遠隔操作を可能とするリンクは、こうして迷宮のモンスターを装って他の冒険者を襲撃するという悪用の仕方もあった。

これこそが、一般的にリンクという技術が秘匿されている理由だ。リンクという技術は、迷宮内においてあまりに便利すぎた。

資格制などにしないのは、カードの熟練度を上げていけばいつか

は自力で身に着けてしまえるため、それよりも知識の拡散防止を優先したためか……。

もつとも、特定の人物が潜っている時にばかり他の冒険者の犠牲が出れば、いずれ警察やギルドの調査の手が入ることになる。

そして捜査の手が入った時点で、犯罪者にとっては詰みが確定する。なぜならば、モンスターや魔道具の中には心を読むことができないモノも存在するのだから。

故に、迷宮内での襲撃は実際にはほとんどない……と油断していたのだ。

「……………ッ」

安全の確保されたモンコロとは違う、肌がひりつくような本物の悪意に、心臓が嫌な速さで鼓動を刻み始める。

俺はかすかに震える指先をグツと握りしめ、深く息をした。大丈夫だ、敵はCランクカード三枚、そのうち一体は手負い。対してこちらはBランクとCランクが一枚ずつ、Dランクも四枚ある。十分勝ち目はある。いざとなれば、未使用のライカンスロープのカードもあった。

『蓮華、イライザ……まずはシンクロを使って一気に無傷の二体を片付けるぞ。ユウキ、メア、鈴鹿、ドラゴネットは手負いの黒いライカンスロープにとどめを刺してくれ。悪いがそつちを指揮する余裕はない。いずれ状態異常も解けると思うから、用心するように』

『了解！』
Dランク組が攻撃を開始したのを合図に、膠着していた戦場が再び動き出す。

真っ先に動き出したのは、二体目に現れた白い人狼。攻撃の対象

は、イライザ。蓮華は宙へと滞空しているので、近接戦闘を得意としているライカンスロープにとって実質選択肢は一つだったのだろう。両腕に備え付けている銀製の鉤爪で襲い掛かる。それを隠れ蓑に、三体目の赤褐色の人狼が闇に溶けるように消えていった。

コイツもアサシンタイプか……と舌打ちしたくなるのを堪えつつ、今は白い人狼の対処を優先することにした。

銀製の武器で傷つけられたイライザの身体は、未だ鈍い痛みで襲われている。それでも戦闘自体には支障が無さそうなのはアンデッド系の強みか。下手に意思を乗せては脚を引つ張りかねないので、戦闘力の開放のみにシンクロは留めておく。

吸血鬼と人狼。似通った伝承を持つ二体のモンスターだが、ヴァンパイアが魔法にも能力を振り分けられているのに対し、ライカンスロープはより近接向けの能力を持つ。

体格から言っても二倍近い差があり、白い人狼はその上背を利用して剛腕を上段からたたきつけてきた。

その動きは、これまで幾度も戦ってきた野生のライカンスロープよりも明らかにコンパクトなものであり、武術の心得があるのは一目瞭然であった。

こうなると、同じく武術のスキルを持っているとはいえ体格と身体能力の面でイライザは不利となる。

仮に彼女が勝っている面があるとするれば、それは――。

「シッ！」

短く息を吐いたイライザの掌手が、剛腕を横から弾く。その動きは正確無比でありそのタイミングたるや、まるで未来が見えているかのようであった。

……イライザが有利な面、それは動きの精密さと直感だ。彼女の精密動作と直感のスキルが、身体能力に勝る敵よりもワンテンポ早い拳動と拳動の正確さを与えてくれる。

腕を弾かれた人狼は、しかし些かも動じることなく再度の攻撃へと転じた。

乱打。もはや人間の眼では追えないほどの高速の攻防。体格と身体能力で攻める人狼と、動きの正確さと直感で防ぐ吸血鬼。拮抗する両者のうち最初に崩れたのは……手負いの女吸血鬼だった。

人狼の一撃を防いだイライザの身体が、わずかに傾く。脇腹の傷のせいで体幹が乱れ、ほんの少しだけ、踏ん張りが効かなかったのだ。その隙を、白い人狼は見逃さなかった。

銀色の一閃が走る。威力よりも速く、確実に当てることを優先した一撃。

それはイライザの左手の指を三本ほど切り飛ばし——人狼の身体を流星の一撃が貫いた。

イライザの隙を狙っていた人狼が攻撃する瞬間の隙、それを狙っていた蓮華による狙撃であった。

三条の星屑の光は、人狼の右足と左腕、そして何とか頭部への攻撃を躲した人狼の右目をズタズタに切り裂いた。

ようやく天秤がこちらへ傾いた。

そう思った瞬間、突如背後の闇が膨れ上がった。

隠れていた三体目の人狼がその牙を剥いたのだ。獲物をしとめる際の隙を狙っていたのは、敵も同じ。

闇夜から溶け出すように現れた赤い毛並みの人狼が、俺の身体を切り裂かんと鉤爪をふるう。

なんとか躲そうと身をよじるも、人間の動きはモンスターと比べあまりに鈍い。

——だが。

『読めてたぞ……!』

ズルリ、と足を滑らせた俺の頭上スレスレを人狼の剛腕が通り過ぎていく。

偶然と呼ぶには出来すぎたそれは、もちろん幸運の女神様の加護によるものだった。

必殺の一撃を躲された赤褐色の人狼に生まれた一瞬の間。

そこをすかさず蓮華が突こうとしたその時。

『キヤアアア!?!』

『ガアアア……ッ!?!』

『鈴鹿!?! ドラゴネット!?!』

リンクを通じて、Dランクカード組の様子が伝わってくる。

そちらを見ると、致命傷に近い深手を負った鈴鹿とドラゴネットの姿があった。鈴鹿は胸元を大きく切り裂かれ、ドラゴネットに至っては片翼を食いちぎられている。

その向こう側には、満身創痕の状態で荒い息を吐く黒い人狼。

Dランクカード組には、状態異常にかかった一匹目の人狼の始末を頼んでいたのだが、瀕死まで追い詰めたところで、状態異常が切れ手痛い反撃を受けてしまったようだった。

おそらく、瀕死の状態になると発動するスキルでも持っていたのだろう……。

すぐにユウキとメアが止めを刺すも、これは余りに大きな痛手であった。

鈴鹿とドラゴネットの負ったダメージは、今すぐカードに戻すか回復魔法を受けさせねばロストしかねないレベルだ。特にドラゴネットの方は名づけをしていないため、取り返しがつかなくなる。ユウキとメアも、二枚ほどではないがかなりの傷だ。

……どうする、アムリタの雨を使うか?

いや、あれは一回しか使えない切り札だ。万が一のことを考え温

存しておきたい。Dランクカードはこのレベルの敵にはあまり戦力たりえないことだし、ここは鈴鹿とドラゴネットをカードに戻すでしょう。

『よくやった！ 鈴鹿とドラゴネットは戻れ！』

『申し訳ありません！ 一足先に撤退するであります！』

『私言つたからねえ！？ ちゃんと帰ろうって言ったからねえ！』

『うるせえな！？ わかつてるよ！ 俺のミスでした！ あとでしっかり謝るから今はさっさと戻れ！』

こんな時でも粘着質な鈴鹿に怒鳴りつつ、二枚をカードに戻す。

『ユウキとメアはすまんが蓮華たちのフォローに入ってくれ！』

『わかりました！』

『了解！ 任せて！』

よし、これで残りは二体。しかも片方は手負いだ。このまま順調にいけば――。

『ッ……！？』

――勝てる。

そんな期待を抱いた瞬間、それは粉々に打ち砕かれた。

蓮華から伝わってくる強い驚愕と、焦り。

彼女の視線の先に居たもの……それは新たな敵の姿だった。

筋骨隆々の人間の肉体と、黒い犬の頭部を持った異形。背丈は二メートルほどとモンスターの中ではさほど大きくない部類であったが、その身が放つ威圧感はいかにスロープの比ではなかった。

一目で上位の存在だとわかる雰囲気は、どこか神である蓮華のものとも似ていて、そこで敵の正体に思い至った。

———Bランクカード、アヌビス。エジプト神話における冥界の神……。傍らには、さらに三体のガルムを侍らせている。

「くう……！」

無意識に情けない音が喉から漏れた。

なんなんだよ！！！！ もおおおおおおおお！！！！！！！！！！

ふざけんじゃねえぞ！　なんでここでBランクカードなんか出してくるんだよ！

Bランクカードを持ってんのにこんなセコイことしてんじゃねええええッ！！

糞ッ、クソッ、糞ッ、クソッ、糞ッ！！

絶望と怒りが毒のように全身へ広がっていく。久しぶりに、本気で足が震えてきた。力がうまく入らない。リアルな死の予感を感じつつあった。

勝てるか？　敵はBランク一枚とCランク五枚。こちらはBランク一枚とCランク一枚にDランクが二枚……。それと未使用のCランクが二枚。数の上では一応互角だが……。

冷静に考え、結論を下す。駄目だ。勝てない……。戦力に差がありすぎる。

蓮華の霊格再帰は時間制限がある。イライザは手負い。Dランク組は戦力不足。未使用のCランクは戦闘力が育っていない上に、使い勝手もわからない。対して敵の戦力は未知数。さらなる増援もあり得た。

逃げるしかない。だが、逃げられるか……？

『どつするのだ、マスターよ』

『……撤退する』

『どのようにして？』

『そ、それは……』

ここから逃げる方法など一つしかない。だが、それを実際に口にするのは躊躇われた。

そんな俺を、蓮華が静かに見つめる。

その視線に、かつての言葉が脳裏に蘇った。

——アタシたちにとって名前は、マスターの為なら何度だって死んでもいいって思ってる証拠なんだぜ？

「……ッ！」

覚悟を決めた。

……だが。ああ……、それでも……これだけは、言いたくなかった。

『——蓮華、イライザ、メアで足止めを頼む。俺はユウキとゲート……いや安全地帯へと向かう』

……それが、生き残る唯一の方法だった。

ここから逃げる道は上への階段とゲートの二つ。しかし、ゲートは敵が待ち受けている可能性が高い。普通に考えて獲物が逃げ去るとしたらゲートの方だろうからだ。

だが、俺たちにはハーメルンの笛がある。安全地帯でしか使うことができず、使用から発動までに時間がかかりすぎるといふ欠点はあるが、敵がゲートに網を張っているのなら逃げられる芽はあった。問題は、敵がそれをすんなりと許してくれるかということ。

俺が無事に外に逃げるまで、ここで足止めをしてもらう必要がど

うしてもあった。

それがたとえ、捨て駒になれと言ってるも同然だとしても、俺はそう命令するしかなかった。

気まずさに目を逸らす俺に、しかし蓮華たちはニヤリと笑う。

『イエス、マスター。お気をつけて』

『しょうがないなあ……後でご褒美ちょうだいよね』

『任せよ……ああ、こんな時なんて言うんだったか。確か……ここは俺に任せて先に行け、だったか？』

『蓮華……。馬鹿、それは……死亡フラグだぞ』

リンクを通じて流れてくる仲間たちの想いに救われつつ、俺はせめてもの助けとしてライカンスロープのカードを呼び出そうとした。これで多少は戦力の差が埋められるはず。

……しかし。

『それは不要だ』

強い視線で俺を制す蓮華。

『だが、さすがに三枚じゃあ……』

『敵の追手がかからないとも限らん。それは万が一のために取って置け』

『わかった……』

この期に及んで俺の身を案じる蓮華たちに、視界が歪みそうになるのをグツと堪え、俺はユウキへと跨った。

『……行くぞ！』

『はい、マスター！』

「ふん——逃がすかッ！」

逃げようとする俺に、アヌビスたちが襲い掛かる。
そこへ蓮華が立ちふさがり、言った。

「ここは通さん。死んでもなッ！」

背後から激しい戦闘音が聞こえる中、俺はユウキと深くシンクロし、安全地帯へと一直線に駆ける。

ここからは、俺に出来ることは何も無い。ただ、リンクを通じて蓮華たちの奮闘を見ることができなかつた。

圧倒的な戦力差で追い詰めてくるアヌビス側に対し、蓮華たちは三位一体の連携でもって食らいつく。

メアが状態異常で妨害しつつ、高火力の蓮華が一撃を叩き込み、イライザがそれを守る。

しかし、数と質ともに上のアヌビス側に対し、一匹でも抜けられれば窮地となる蓮華側は次第に追い込まれていく……。

「……ああ、やっぱり私って……弱いなあ」

走り出して程なく、最初に沈んだのは唯一のDランクカード、メアであった。

どれほど死力を尽くそうとも、どれほど決死の覚悟で挑もうとも、戦闘力という残酷な現実が目の前に立ちふさがる。

『でも……私だってタダではやられないんだからッ！』

それでも……、それでも小さな夢魔は最後に意地を見せた。

『アアアアアアッ！ 蓮華アアアア！』

血反吐を吐き、咆哮するメア。それと同時に、胸元のカードがわずかな光を放った。

それは、カードが新たなスキルを得た時の輝き。それを確認する余裕はないが、その効力はすぐにわかった。

『……ああ、よく頑張った。あとは我に、アタシに任せろ！』

蓮華を、黒い瘴気が包み込む。肌は醜く爛れ、艶やかだった髪が老婆のような白髪へと変わり果てていく。

二相女神……吉祥天のもう一つの側面である、災いや不幸を司る女神、黒闇天へと転じたのだ。

『――世界終末の夜』

蓮華が、喉をつぶされたようなしゃがれた声で呟いた。

それは、吉祥天の【アムリタの雨】と対をなす、黒闇天のユニークスキル。

蓮華を中心に、黒い雨が降り注ぐ。

それを浴びたガラムやライカンスロープたちが悶え苦しみ出した。猛毒と病の雨、それが黒い雨の正体だった。

『くだらん！　こんなものが我に効くものかッ！』

だが、Bランクモンスターであり冥府の神であるアヌビスは状態異常耐性が高いのか、やや苦し気にしつつもさほど効いた様子は見受けられなかった。

それに蓮華はだろつなと小さく嗤い。

『故に、ここからだ……メア』

『死、ね……』

友情連携——『人を呪わば穴二つ』×『世界終末の夜』。

その瞬間、パキンツという音が胸元で響いた。

音の発生源はメアのカード。取り出してみると、メアのカードからはイラストが消えうせ、カード全体がセピア色へと変色していた。それは、メアがロストしてソウルカードとなったことを意味していた。

だがそれは決して無駄死になどではなく。

『ツ！？ ガアアアツ！？』

突如、アヌビスたちの全身から血が噴き出す。それは、メアが受けた痛みをそのまま相手に返したかのような奇妙な傷であった。

無傷だったガラム達は深手を負う程度でなんとかなかったが、手負いであったライカンスロープはそれが止めとなるほどのダメージであった。アヌビスですら、決して浅くない傷をその身に受けている。

同時に、力を使い切った蓮華の姿がいつもの座敷童の姿へと戻る。

『……アタシの親友の痛みを思い知ったか』

『Bランク擬きの分際で！』

ニヤリと勝気な笑みを浮かべる蓮華に対し、怒気を滾らせたアヌビスたちが一斉に襲い掛かった。

「メア……！」

グツと歯を食いしばり、ユウキへと強くしがみつく。

最後の瞬間、メアから伝わってきたのは、真っ先に脱落してしま
った自分に対する悔しさだった。

そこに彼女を捨て駒にした俺への恨みは欠片もなく、ただただ自
分の無力さと残る仲間を心配する気持ちだけがあった。

それが逆に、責められ詰られるよりも俺の心を引き裂いた。

『マスター……申し訳、ございません。どうか、ご無事で』

それから少しして、今度はイライザが逝った。

最後の最後まで、蓮華の盾になり続けた彼女は、右腕を失い、胸
を抉られ、腹に風穴を開け、頭部の三分の一を失い……グールだっ
た頃より無残な体となって地に倒れ伏した。

だがその体を醜いと思うような者は、俺たちの仲間にはいないだ
ろう。

その正視に耐えない傷の数々は、彼女の仲間に対する想いそのも
のだったからだ。

「イライザ……！」

ロストする寸前のイライザの想いが胸を焼く。

死に際の彼女の頭の中には、俺と仲間たちのことだけしか存在し
なかった。

マスターは無事逃げられるだろうか。自分はちゃんと時間稼ぎが
できただろうか。メアを守ってやれなくて申し訳ない。最後まで蓮
華を守り切れず、情けない。

自分の身よりも仲間たちのことを案じる彼女の心は、グールだっ
た頃から何も変わらない真っ白なものだった。

「ああ、畜生……！」

俺の仲間たちが死んでいく。

今の俺を形作ってくれた仲間たちが、一枚、また一枚と……。

この襲撃が、人間によるものだとわかった時にすぐに撤退すれば良かった。そうすれば、Dランク組の何枚かはロストしたかもしれないが、こんな全滅同然まで追い詰められることもなかったはずだ。いや、そもそも、あの時鈴鹿の言葉を聞いてさっさと帰っていれば……。冒険者になったばかりの頃の俺なら、ちよつとでも異変を感じたら撤退を決意していたはずだ。それが、カードたちが成長し、すべてが順調にいくようになってから、すっかり慎重さを失ってしまっていた。

スマホが壊れても主との戦いには関係ないとか、帰っている間に他の冒険者に迷宮を攻略されてはこれまでの苦労が水の泡だとか……。

目先の利益に囚われた結果、最も大事な仲間たちを失ってしまった。……。

すべては、知らずに育っていた慢心によるものだった。

「ごめん……ごめん……」

「……………」

いつもはこういう時に慰めてくれるユウキも何も言わない。それが彼女なりの忠誠で、今はそれが何よりもありがたかった。

そしてようやく安全地帯へとたどり着いたその時。

『歌、磨……………』

三回目の音が、鳴った。

それは、どんな辛い時も俺を叱咤し、支えてくれた相棒が死んだ音。

残った敵の数は、わずかアヌビス一体。

ているはず……。

「……名づけをしたカードは所有権を譲ることができないぞ？」

『無論知っている。お前はただ、こちらの言うことに従えばいい』

「言うことに従ったとして、その後殺されるだけだろ……」

『言う通りにすれば見逃してやる。ただし帰り道は上への階段を使ってもらうがな』

「……なに？」

カードと魔道具をすべて置いていけば見逃す？ 帰り道は上？

それじゃあ結局結末は同じだ。道中のモンスターに殺されるだけ……。なぜ自分で始末しないんだ？

「お前は、なにが目的でこんなことをするんだ？ ただ、カードを奪うためだけにやっているわけじゃないんだろ？」

これだけの高ランクカードを持つ冒険者が、犯罪に手を染めてまで他人のカードを奪う必要はないはず。他にいくらでも合法的に金を稼ぐ手段はあるはずだ。

そういった意図を込めた問いかけだったが、返答は期待していなかった。

犯罪者が、わざわざ自分の犯行動機を語る必要もないからだ。

たとえばそれがこれから死ぬ相手だろうと……。

『フツ……言ったところでこの崇高な志は理解できまい。カードの力を自分の力と勘違いしている貴様らにはなッ！』

しかし予想に反し、アヌビスは声に喜悦すら滲ませてこれに答えた。

それはまるで言いたくて堪らなかったことを聞かれたので、つい

……といった風にすら見えた。

……崇高な志？ カードの力を自分の力と勘違い？

俺の頭の中で何かがチラ付き始めたその瞬間。

『さあ、もういいだろう。カードと魔道具をすべて渡せ』

再び殺気を帯び始めたアヌビスによってその思考は中断されてしまった。

「……最下層のゲートを通らせてくれると約束してくれないかぎり従うつもりはない」

実際は殺されても蓮華たちのカードを渡すつもりはなかったが、相手の出方を探るため俺はそう言った。

『調子に乗るなよ！ 負け犬の分際で！ ここで殺されたいかッ！』
「同じことだろ……ここで殺されるのも、一人で上に行くって死ぬのも」

なぜ、あくまでカードをすべて置いていかせることに拘るのか。そこを掴めれば、敵の正体に迫ることができる気がした。だがそんな俺の悪あがきは敵の勘気に触れてしまったようだった。

『……もういい、そこまで言うなら望み通りここで殺してやるっ』

ゆらり、とアヌビスの身体が動き、先ほどまでとは全く質の違う殺気が放たれた。

ここまで、か。こうなったら最後の最後まで足掻いてやる。

「わかった。カードを渡す……」

俺はそう言っつて、懐へと手を入れた。それはアヌビスにカードを渡すためではなく、未使用のライカンスロープたちを呼び出すためだった。

絶対に勝てないだろうが、せめてガルムの一体はロストさせてやる。

でなきゃ、足止めをしてくれた蓮華たちに合わす顔がない。

「……………」

と、その時ポケットに普段とは違う感触を覚えた。

モンスターカードよりも一回りほど大きなそのカードは、『遭難』のマジックカードだった。

そういえば、こんなものもあつたか。使つつもりもなかつたからすっかり忘れていた。

実際、『遭難』のマジックカードなどこの場では何の役にも立ちはしないだろう。なんせここは最下層。未到達の階層にランダムで転移する『遭難』のカードを使つても……………どうなるんだ？

発動失敗ということでのこの場に取り残されるのか？……………あるいは、『すでに到達した階層のどこかに放り出される』とか？

それは、普段なら頭に浮かぶこともないアイディアだった。高額な『遭難』のマジックカードを、ほかに転移できる場所がないところで使つてみる、なんて。

……………だが、賭ける価値はあつた。

どうせこれ以上事態が悪化することはないのだ。ならばこのカードにすべてを賭けるといふのも一手だ。

『どつした！早くしろ！』

しびれを切らしたように怒鳴るアヌビス。迷う暇はないと俺は『遭難』のマジックカードを使用した。

「――『遭難』使用！」
「なっ!?!」

驚愕するアヌビスの前で俺とユウキの身体が光を帯びる。

『逃がすかッ!』

魔法が発動する一秒にも満たない時間の中で、それでもアヌビスの判断は早かった。

逃がすくらいなら殺す! とその右腕が振るわれる。

為す術のない俺の前に立ちふさがったのは、最後の仲間、ユウキだった。

鮮血がスローモーションで舞い散る中、俺たちはパシユンという音を立てて転移した。

「……スター。……きてください」
「……う」

誰かに身体を揺すられ、俺は意識を取り戻した。
どうやら、気絶していたらしい。

目を開けると、そこには暗緑色の毛皮を血に染めたユウキの姿があった。

「ユウ……キ、大丈夫か?」

「はい、ちょっと……キツイ、ですけど、見た目よりは、大丈夫で

す

「そう、か……ちょっと待ってる、ポーションを使ってる」

そういつてバッグからミドルポーションを取り出そうとして、周囲の様子に初めて気付いた。

「……、は……？」

そこは、無数の球体が宙を漂う白い空間だった。

学校の体育館ほどの空間に、シャボン玉のような球体が漂っており、その中には……。

「……カード？」

見慣れたモンスターのカードが一枚ずつ入っていた。

バトルウルフ、コボルト、フェアリー、ウィルオーウィスプ、カーバンクル、クワシー、ヘルハウンド、ライラプス……。

それは、どれもこの迷宮に登場するモンスターたちのカードだった。

ユウキの身体へとポーションをかけてやりながら呆然とそれを眺める。

シャボン玉の大きさはまちまちで、同じ種類のカードでもだいぶ大きさに開きがあるようだった。

虹色に煌めく球面をのぞき込んでいた俺の眼に、不意に違う景色が表れた。

それは、小さな子供が川で溺れる光景だった。川の浅いところで遊んでいた幼稚園くらいの男の子が、つつい川の深いところまで行ってしまい、水の流れに足を取られ流されていく光景。川辺でバーベキューの準備をしていた両親らしき夫婦が慌てて川に飛び込むも間に合わない……。

男の子の苦しみと、両親の焦りと恐怖が『リンク』を使っているかのようにダイレクトに伝わってきて、俺は小さく呻いた。

「う、く……、今は……？」

まるで、この世のどこかで本当に起こっている光景かのようにリアルだった。

俺が隣のシャボン玉を再びのぞき込んでみようとしたその時。

「マスター、あれを」

ユウキが一つのシャボン玉を指さした。

そこには、ひと際大きなシャボン玉が二つ並んでおり、近づいてみるとそこにはライカンスロープのカードが一枚ずつ入っていた。

片方は男、もう片方は女のカードだ。

「これは……」

そのうちの一回りほどシャボン玉が大きい方……女のライカンスロープが入った方に手を伸ばすと、パチンという音を立ててシャボン玉が割れてしまった。

ひらりとライカンスロープのカードが舞い落ちる。

【種族】ライカンスロープ

【戦闘力】800

【先天技能】

- ・ 月満つれば則ち虧く
- ・ 狼に衣
- ・ 本能の覚醒

【後天技能】

- ・真なる者
- ・限界突破
- ・真眷属召喚
- ・縄張りの主
- ・高等忍術

「つ、強い……」

これは本当にライカンスロープなのか？ 初期戦闘力が通常のライカンスロープの倍はある上に、見たことのないスキルがいくつもある。

真なる者とは一体どういったスキルなのか。限界突破が、この高い戦闘力の理由なのか？ 真眷属召喚は、ただの眷属召喚とは違うのか？

と、その時。

「な、なんだ……！？」

「マスター！」

突然、激しい振動が俺たちを襲った。

白い空間にビシビシと罅が入り、シャボン玉が次々に割れていく。罅はたちまち大きな裂け目となり、その底は闇に包まれまったく見えない。シャボン玉から落ちたカードが奈落の底へと吸い込まれていった。

この裂け目に落ちたらどうなるんだ……？

俺は見えなくなったカードにゾツとするものを感じ、後ずさった。

「マスター！」

ユウキに抱えられ、裂け目から逃げまどっていた俺たちだったが、

徐々に足場は少なくなっていく、追い詰められていく。

やがて最後の足場が崩れ去り、俺たちは絶叫と共に奈落の底へと落ちていったのだった。

第十二話 禍福は糾える縄の如し（後書き）

【Tips】マジックカード

迷宮から出現する魔道具の中には、人間でも魔法の行使を可能とするものが存在する。マジックカードは、そういった魔道具の中でも最も入手しやすい使い捨ての魔道具である。

魔法名を唱えるだけで発動するという利便性の高さ、一気に戦略の幅が広がるため主にモンコロを中心に愛用されている。

マジックカードに込められている魔法は主にモンスターが使える魔法となるが、中にはマジックカードでしか確認がされていない魔法も存在する。『遭難』のマジックカードもその一つである。

なお、マジックカードの効力は一通り実験されつくされており、当然最下層での『遭難』の使用も実験済み。結果は、不発動であった。

第十三話 冒険者部、始動。

眼が覚めて最初に感じたのは、消毒液の匂いだった。

頭だけを巡らせてあたりを見回す。白い床と壁、清潔なシーツ、身を包む水色の甚平服に脇に立つ点滴棒……。

「……病院？」

一体なにが……そうだ！ 俺のカード！

体をまさぐり、次にベッド脇のサイドボードを見ると引き出しの中に俺のデッキが入っていた。

ホッと胸を撫で下ろし、一枚一枚カードを確認していく。

まずは、ロストしてしまった蓮華、イライザ、メアのソウルカードたち。

灰色に変色してしまった彼女たちのカードを、やさしく撫でる。

俺の未熟さのせいでロストこそさせてしまったが、このソウルカードさえ残っていれば取り返しはつく。

「すぐに復活させてやるからな」

そう決意を固めつつ、ステータスに問題はないかより詳しく見ていく。

すると、蓮華とイライザには特に変化はなかったが、メアは予想通り新しいスキルを手に入れていた。

【種族】エンプーサ（メア）

【戦闘力】280（MAX！）

【先天技能】

- ・ 吸精
- ・ 夢への誘い
- ・ 三種の変化

【後天技能】

- ・ 小悪魔な心
- ・ 一途な心
- ・ 友情連携
- ・ 初等魔法使い
- ・ 中等状態異常魔法
- ・ 人を呪わば穴二つ（NEW！）：自身の戦闘力及び受けたダメージに応じた呪いの傷を対象に与え、その後与えたダメージ分のフールドバツクを受ける。

人を呪わば穴二つは、状態異常系のスキルを使い続けていた個体が、稀に手に入れるレアスキルだ。

その獲得条件についての詳細は判明していないが、「死んでも相手を殺したい」と思うほど強く憎むことが、習得のトリガーだと言われている。

あの明るいメアに、そこまでの憎悪を抱かせてしまった……。そのことに、忸怩たる想いだった。

人を呪わば穴二つは、その性質上使用後にロストしてしまう危険性が非常に高い。

せつかくの新スキルだが、これは封印せざるを得ないな。

次に俺は鈴鹿やドラゴネット、ライカンスロープなどの未使用のカードたちが無事に揃っているのを確認すると、最後に唯一無事だったユウキのカードへと目を通した。

他のカードがすべて無事だった以上、最後まで一緒だった彼女も間違いなく無事だろう……。そんな思いから最後に回したユウキのカードを見た俺は、思わず絶句した。

【種族】ライカンスロープ（ユウキ）

【戦闘力】950（150UP！）

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

- ・忠誠
- ・小さな勇者
- ・真なる者（NEW！）
- ・限界突破（NEW！）
- ・真眷属召喚（NEW！）
- ・縄張りの主（NEW！）
- ・高等忍術（NEW！）

「なん、だ、これ……」

茶髪に暗緑色のメッシュが入った美少女のイラストが描かれたカード。そこにユウキとしっかり書かれているのを、何度も確認する。一体、何が起こっている？ なぜ、ユウキがランクアップしてるんだ？ 戦闘力950？ ライカンスロープの成長限界は800だ

ったはず。それに、このスキル群は一体……？

俺はよく知っているはずのユウキが、見知らぬ存在になってしまったような恐怖に身を震わせた。

俺が気絶している間に、一体なにが起こったんだ……？

一人混乱していると、コンコンとノックの音が部屋に響いた。

「……はい？」

「失礼。……北川歌麿くんではないかな？」

そう言っただけで部屋に入ってきたのは、四十歳ほどの中年の男性だった。柔和な顔立ちをしているがどこか目に迫力のある男性で、相対しているだけで背筋がピンと伸びるような大人だった。

「そう、ですけど」

「僕は大島歩おおしまゆと申します。こういうものです」

「……警部さん？」

大島さんが見せてくれた警察手帳には、警部という文字と大島さんの顔写真が載っていた。

あまり警察手帳に詳しいわけではないが、パツと見では本物のように見える。

「北川君は東京都Dランク第十四番迷宮のダンジョンマートで倒れていたんだが、覚えているかな？」

「えっと……」

「よければ、迷宮に入ったところから覚えていることだけでいいから順番に話してくれるかい？」

「……はい、わかりました」

口調は穏やかだが、有無を言わせぬ様子の大島さんに、俺は迷宮

に入ってからそのことを順番に話し始めた。

ハーメルンの笛を使って攻略中の階層に転移したこと。途中で他の冒険者……青木さんと出会い、カードをトレードしたこと。最下層でグレムリンと遭遇しスマホやカメラ、冒険者ライセンスを破壊されたこと。他の冒険者の襲撃に遭い、カードをすべて渡すように言われたこと。

——そして“隙を見て隠し持っていた『転移』のマジックカードを使って命からがら逃げだした”こと……。

『記憶にあるまま、嘘偽りなく』起こった出来事を包み隠さず伝えていく。

大島さんは所々質問を挟みつつ俺の証言をメモしていたが、やがて俺が話し終わると最後に俺の目をじっと見つめ、確認した。

「……これで、最後かな？」

「ええ、覚えているのはこれですべてです」

大島さんは、しばし難しい顔で俺を見つめていたが、やがて大きく息を吐くと天を仰いだ。

「そうかあ……となると謎はすべてその襲撃犯が握ってることになるのか。参ったな」

「……？ なにかあったんですか？」

俺がそう問いかけると、大島さんは少しだけ迷ったような表情を浮かべた後。

「……まあすぐにわかることだからいいか。実は——君のいた迷宮、消滅したんだ」

「……………えっ？」

あの迷宮が、消滅した…………？ 迷宮つて、未だかつて一度も消滅が確認されていないんじゃないかなかったのか？ 一体、なぜ…………？ まさか、俺を襲った犯人がやったのか！？

呆然とする俺に対し、大島さんは頭を掻きながらばやいた。

「もう国はあちらこちらで大騒ぎだ。なんせ、迷宮が現れて二十年…………初めて迷宮が姿を消したんだからね。外国からも問い合わせが殺到してるそうだ。まだニュースにはなっていないから一般には知られていないが、それも時間の問題だろう。そこで北川くんにお願いがあるんだが…………」

「お願い、ですか？」

「うん。一応国や警察としては君についての情報は隠すけれど、もしかしたらマスコミが君のことを嗅ぎ付けてくるかもしれない。その時に、決して何も話さないでほしいんだ。捜査に支障をきたすからね」

「ああ……………わかりました」

「ありがとう、それじゃあ」

そういつて大島さんは立ち去って行った。

ドサリとベッドに身を預け、ぼんやりと天井を見上げる。

「……………」

迷宮が、消滅した、か。

やはり、あの犯人がやったのだろうか。自分から逃げおおせた俺を始末するため、とか…………？

まさかな…………。そもそも、迷宮を消滅させる方法を見つけ出したなら、一生遊ぶだけの金が手に入るだろうし、どんな犯罪だって国

がもみ消してくれるはずだ。

だとすれば、一体何が原因で迷宮は消滅したんだろうか？

「……………駄目だ、わからん」

しばらく考え、降参する。

俺がいくらここで考えたところで答えなど出るわけがなかった。
それにしても……………。

「『転移』のカードを持っていて良かった……………」

安堵の息を吐く。

同じ転移の魔道具でも、即時発動が可能なマジックカードと、笛を吹く必要があるハーメルンの笛では、即効性がまるで違う。

もし『転移』のカードがなければ、俺はハーメルンの笛を吹いている間にアヌビスに殺されていたことだろう。

本当に『転移』のカードを売らずにいてよかった……………
……………いや、待て。

「俺は、なんで『転移』のカードを売らなかったんだ？」

ハーメルンの笛を持つ俺にとって、『転移』のカードは不要な魔道具だ。

ハーメルンの笛とは違いタイムラグ無しで使えるという利点があるとはいえ、他の冒険者から襲撃を受けると本気では考えていなかった俺が、後生大事に『転移』のマジックカードを持っていたのは、我ながら違和感があった。

これがたとえば『遭難』のマジックカードだったならば、違う効果ということも持っていないもおかしくはなかったのだが……………。

そこで、脳裏に閃きが走る。

ああ！ そうか。『思い出した』。税金対策だ。魔道具やカードを売却してしまえば税金が発生するが、売らずにとっておけば税金は発生しない。

欲しいカードができた時に初めて現金化してカードを買えば、払う税金も最小限に抑えられる。

だから、『転移』のマジックカードを売らずに取っていた、それだけのことだ。

そのおかげで、俺は無事に逃げられることができた。うん、何もおかしくない。

……なのになぜ、俺はこんなに『転移』のカードを持っていたことに疑問を抱いているんだろう？

疑問と言えば、ユウキのこともそうだ。

ユウキはいつの間に関ライセンスロープにランクアップしたんだ？俺が持っていたのはオスのライセンスロープが二枚のみ。彼女がランクアップできるわけがないのだ。

いつ俺はライセンスロープのカードを手に入れた？

俺が気絶している間に何があった？ 何かを忘れているのか？

俺が『転移』のマジックカードを使ってから、ダンジョンマートで倒れているのが発見されるまでの間に、何かが……。

俺の意識が深く記憶の海に潜り始めたその時。

「失礼します」

突然、聞き覚えのある明るい声と共に部屋の扉が開いた。

その途端、脳裏にチラついていた白いイメージが霧散する。

「おはようございます、先輩。お体の具合はいかがですか？」

「アンナか……」

来客の正体は、最近後輩となった赤毛の美少女だった。彼女は俺の身体を見渡すように眺めると、朗らかな笑みを浮かべ……。

「お怪我は……ないみたいツスね。安心しました」

「ああ……お前、学校は？今はまだ昼だろ」

「そんな！尊敬する先輩が入院したっていうのに学校なんか行つてらんないツスよ」

そんな健気なことを言う後輩に対し、俺はじつとりとした白い眼を送った。短い付き合いだが、コイツがそんな可愛いタマではないことはわかっていた。

俺の疑いの眼差しに、アンナは悪戯がばれた子供のようにペロリと舌を出して見せた。

「……なぐんで、実は先輩がまたおかしなことに巻き込まれたみたいなんで堪らずに駆け付けただけです。まあ心配してたのも本当ツスけどね。はい、これお見舞いツス」

彼女が差し出してきた菓子折りを受け取りつつ、問いかける。

「お前、どこまで知ってるんだ？どこから聞いた？」

「うーん、ウチが聞いたのは先輩が潜っていた迷宮が消滅したってことくらいツス。……詳しい話を伺っても？」

そう言いつつも好奇心に輝く彼女の眼は「話すまで逃がさないぞ」と語っていた。

「……一応刑事さんにも口止めされてるから、誰にも言つなよ」

「もちろん。もし誰かに言ったらなんでも言うこと聞いてもいいッ

スよ」

ほう……なんでもとな？ その言葉、一言はなかるうな……？
と、しっかりと心の中で言質を取りつつ、俺は大島さんにした説明をアンナにもしてやった。

「―――で、今に至るってわけだ」

「……なるほど。それで、先輩はこれからどうするつもりッスか？」

俺の話真剣な様子で聞いていた彼女は、すべてを聞き終わるとそう問いかけてきた。

その宝石のような蒼色の瞳に心をのぞき込まれているような錯覚を抱きつつ、俺は正直に答える。

「―――犯人を見つけ出して、この事件を終わらせる」

「それは、どうして？ 以前ウチがそう言ったときは止めましたよね？」

「それは……」

アンナの言葉に、少しだけ言葉に詰まる。

……正直な話。

迷宮内で多くの行方不明者が出ているという話を聞いた時、俺は完全に他人事だと思っていた。

なんせ、俺が被害者の誰一人として顔を見たことがないし、TVで報道されているわけでもないし、日本のどこかでは毎年百万人近くが死んでいる。そのうちの数人が不幸な死に方をしたからと言って、解決に動き出せるほどの熱意はさすがにない。

可哀そうだが、冒険者は自己責任だし……そんな風に嘯いて真正面から向き合いはしなかった。

だが、その本音は「低ランクがターゲットみたいだし俺には関係

ない」という自分本位のものだった。

結局、それが俺という人間の本質なのだろう。

自分と、その周辺の人間だけで世界が完結していて、その外側でどんな悲劇が起こっていてもリアルに受け止めることができないのだ。

事件を知るなりすぐに解決するために動き出そうとしたアンナとは、違う。

顔も知らない誰かの為にその身を危険に晒せるほどの正義感には、俺にはなかった。

一一一だが、自分や家族、友人たちのためならば話は別だ。

アンナ、織部、……おまけで小野。まだ付き合いは浅いが、コイツ等があのアヌビスの犠牲になっても平気でいられるほど、薄情でもないつもりだった。

もちろん、個人的な恨みもある。

というか、正直それがほとんどだ。

今も目を閉じれば鮮明に蘇る。

メアが、イライザが、蓮華が……一枚、また一枚と零れ落ちていくごとに、大切な何かが心から欠落していくようなあの感覚を、俺は一生忘れることはないだろう。

本気で自分を殺そうとしてきた相手に対する恐怖。仲間を捨て駒にして逃げねばならなかった自分に対する強い失望や後悔。そこまでして逃げたというのに、袋小路だったと知った時の絶望と……犯人に対する焼けつくような憎悪。

いろんな感情が胸を焼き、今にも走り出したくなるような焦燥感が身を焦がしていた。

俺の大切なカードたちをロストさせやがった糞野郎どもに、制裁を下してやらなければ。

そうでなきや……命を張って足止めをしてくれた仲間たちに合わす顔がない。

そんなグルグルとした思いを上手く言葉に出来ず、俺が口籠っている……。

「ま、なんにせよ、先輩がやる気になつてくれたなら何よりッス。ウチら冒険者部の手で犯人を捕まえてやりましょう！」

突然のアンナの宣言に、俺はたじろいだ。

「え？ いや冒険者部を巻き込むつもりは……」

「この期に及んで何言ってるんすか！ 水臭い。一人で行動してたら今度こそ死にますよ？」

「むっ……」

「言つときますけど、冒険者をやめない限り危険は一緒ッスからね？ そしてウチも小夜も冒険者をやめるつもりも、自粛するつもりもないッス。ならできるだけ一緒に行動した方がむしろ安全ッスよね？」

「それは……そうだな」

いくら俺が迷宮に潜るなど言っても、本人たちに聞く気がないのなら何の意味もないだろう。

ならば、できるだけ一緒に行動した方が安全というのは確かだ。

それに……アンナと一緒に犯人捜しをしてくれると言ってくれた時、少しだけ嬉しかったのも事実。

やはり、強がっては見ても、殺されかかったことは俺も怖かったのだ……。

「……ありがとう」

無意識に、感謝の言葉がこぼれ出た。

「んー？　なんか言いました？」

「い、いや、何でもない……」

「いやいや、今ありがとうって言ったじゃないッスか」

「聞こえてんじゃねえか！」

「アハハハ！」

こうして俺たちの冒険者としての活動が本格的に始まったのだ。
た。

第十三話 冒険者部、始動。（後書き）

【Tips】読心の魔道具

迷宮が現れて以降、消えつつある不幸の一つに「冤罪」がある。サトリのように人の心を読むモンスターや魔道具の登場により、警察はより正確に事件の全貌を掴めるようになった。

とは言え、読心の力を持つモンスターや魔道具は極めて希少であり、現状では重大犯罪の捜査やテロ対策に使われるのが精いっぱいである。

国会では議員の不祥事が問題になる度に読心の魔道具を使うよう声が高がるが、断じてそのようなことに使う余裕はないのである！

捜査に極めて有用な読心の魔道具であるが、一方で「対象の思い込みや錯覚」の判断が難しいという欠点も存在する。別人格が犯した犯罪を主人格が記憶していなかったがために、警察が無実と判断して釈放してしまい、捜査が長引いたという事例も確認されている。

当然のことながら悪用も容易なため、一般人の所有や使用は固く禁じられている。

TIPSまとめ2 イラストあり

【Tips】機械破壊

迷宮の出没するモンスターや罠の中には、何らかの事柄に対するアンチ的役割を持った存在がいる。グレムリンもその一種であり、その役割は『機械の否定』である。グレムリンの機械破壊に含まれる範疇は広く、スマホやカメラはもちろん銃などの一定以上の複雑さを持った道具類も含まれる。迷宮産、人工に限らず魔道具の類は機械破壊の対象とならないが、冒険者ライセンスのようにICチップなどを組み込んでいる場合機械破壊の対象となってしまう。

まだカードの使い道が不明だったころ、軍による迷宮攻略を阻んだ障害の一つとして悪名高い。

【Tips】グラディエーターとギャンブル

この世界において一番人気のギャンブルは、競馬やパチンコではなくモンスターコロシウムである。人気の理由は、純粋に見て楽しいというものもあるが、その控除率の低さにある。競馬が25%、パチンコが12.5%なのに対し、モンスターコロシウムは5%と非常に低い。低い控除率は多くの参入者を呼び、またTV番組としてのスポンサーも多く集まるといふ結果を生んだ。

グラディエーターの報酬が高いのも、この豊富な資金源が理由である。一方高額な報酬目当てにグラディエーターとなるプロ冒険者が増えたことにより、冒険者制度の本来の目的であるはずの迷宮踏破が疎かになりつつあるという問題も提起されている。

【Tips】テレパスとシンクロ

マスターとカード間の感覚や感情を共有する技術をリンクの中でもテレパスという。テレパスはリンクの初歩中の初歩の技術である

が、これをさらに深化させることにより感情や感覚だけでなくマスター本人の意識そのものまでカードに乗せることができるようになる。これが、リンクの第二段階——シンクロである。

マスターとカードが同一化を果たすことにより、マスターは自分を守るバリアからカードへとエネルギーを回せるようになる。これにより通常はバリアの維持により半分程度の出力しか出せていないモンスターが、本来の力を発揮できるようになる。

初歩にして奥義となる技術。テレパスとシンクロを極めれば他のリンクは不要と言う冒険者もいる。

【Tips】魔石払い

冒険者間でカードの売買を行う際に使われる節税テクニック。冒険者のカードの購入は経費として計上されるが、経費として認められるのはギルドなどの公認カードショップや公式のネットオークションで購入した物だけであり、個人間で売り買いしたものは経費として認められない。結果、相場よりも安く手に入れたとしても結局税金の関係で高くついてしまうことがある。

これを回避するため編み出されたのが、現金ではなく魔石で取引をする魔石払いである。

これにより税金の発生を防ぐことができるが、一方でカードの持ち逃げや偽魔石の混入など様々なトラブルが発生する可能性が高くなる。

あくまで信用できる知人相手の取引に使うのが望ましい。

【Tips】迷宮終末論

消滅させる方法も不明で年々増加する迷宮に対し、いずれアンゴルモア対策も追いつかなくなり世界中でモンスターが溢れかえってしまうのではないか……？ という人類滅亡説。

迷宮終末論がくだらない陰謀説と違うのは、それが現実として起

こりうる可能性が極めて高いことである。

政府が学生にまで命の危険がある冒険者を許可しているのは、少しでも時間稼ぎをしたいからでもある。

各国はマスコミをコントロールし民衆に不安を与えないようにしているが、一方で権力者や富裕層は来る文明崩壊に向けて着々と準備を進めている。

火星のテラフォーミングもそのうちの一つ。じょうじ。

【Tips】チーム制度

冒険者ギルドは安全のため集団での迷宮攻略を推奨しており、チームで活動する冒険者に対し様々な優遇を行っている。一般公開されていない迷宮の一部開放や、魔道具のカード化や一部魔道具の割引、“クエスト”の斡旋など恩恵は多々に及ぶが、その最たるものがチームのランクに応じた入場制限の緩和である。

これによりアマチュア冒険者であってもプロクラスの迷宮に入ることが可能となるが、悪質なチームの中には所属冒険者に上納金やカードなどを要求するところも存在する。

それでもチームへの所属を望む冒険者が多いのは、プロクラスの迷宮は個人での攻略が非常に困難であるからである。

三ツ星冒険者から四ツ星冒険者への昇格には大きな壁があるが、Dランク迷宮とCランク迷宮の間にはそれ以上の差があると言われる……。

【Tips】ダンジョンカルト

この世界では死者が出るような大きな災害は、迷宮発生以降一度も発生していない。

小さな紛争はあれど戦争らしい戦争も世界から消えた。

また、この世で最もクリーンなエネルギー源とも称される魔石から生成された燃料は、一切の大气汚染等の環境破壊を引き起こさずに、原子力以上のエネルギーを生み出す。魔石から作られた肥料は

地球上から徐々に砂漠を消し去りつつあり、近い将来に砂漠は観光用のものだけを残し姿を消すだろう。

ポーションやそれを利用した医薬品の開発により治療不可能と言われた難病は一つまた一つと解消され、即死でない限り不慮の事故による死者もほぼ出なくなった。

これらすべては迷宮のおかげであり、神の御慈悲である………というのが星母の会の主張である。

確かに迷宮の出現によって多くの『不幸』が消えたが、同時にアングルモアという新たな脅威が生まれたことを忘れてはならない。

【Tips】クエスト

ギルドでは民間や企業から持ち込まれた相談を、冒険者にクエストという形で斡旋している。

クエストの内容は、魔道具やカードの納品や、イレギュラーエントカウンターの討伐、遭難者の救助に行方不明者の搜索など様々だが、その報酬はあまり高いとは言えず、魔道具の納品などは相場に若干の色がつくくらいである。

基本的には社会貢献としての要素が強く、特に遭難者の救助やイレギュラーエントなどの緊急性の高い依頼を数多くこなした者には県や国から表彰が送られることもある。

クエストをたくさん受けていると就職に有利になるという説もあり、学生冒険者の中にはクエストに精を出す者も一定数いるとかいないとか。

【Tips】カードのステレオタイプ

モンスターの種族ごとの性格は、民衆が思い描くモンスターのイメージが反映されていると言われている。「妖精は気まぐれで悪戯好き」「悪魔は狡猾で残忍」「メガオンの天使は基本的にペ天使」といったように、多くのモンスターは一般に思い描かれている通り

の性格・性質を持っている。

しかし何事にも例外というものはあり、中には「グレている座敷童」「男性恐怖症のサキュバス」「粘着質な鬼」といった変わり種も存在している。

その多くはマスターの取り扱いに問題があり性格が変質してしまったケースであるが、時折「ドロップした時からこうだった」という報告も挙げられている。

【Tips】モンスターハウス

迷宮内における階層ごとのモンスターの発生速度と最大数は基本的には一定である。しかし、一度に多くの冒険者が一つの階層に侵入したり、多くのカードがロストすると迷宮に『栄養』が供給され、モンスターの発生速度が加速し、最大値以上のモンスターが溢れかえることがある。

これを、冒険者は『モンスターハウス化』と呼んでいる。モンスターハウス化した階層では、そこに滞在するだけで微量の経験値を得られ、さらには倒した際に得られる経験値も増加する。また、モンスターを一定数倒すごとにガツカリ箱が生成される。

【Tips】チェーン

リンクでカード間のスキルを連結し、次々とスキルを発動させる技術。うまく決まれば相手に強力な連携攻撃を叩き込めるが、わずかでも歯車が狂えば大きな隙を生み出してしまう諸刃の剣。

その使用には、リンクの上手さといった技術とは全く別の、戦術家としての才能を要求される。

【Tips】マジックカード

迷宮から出現する魔道具の中には、人間でも魔法の行使を可能とするものが存在する。マジックカードは、そういった魔道具の中でも最も入手しやすい使い捨ての魔道具である。

魔法名を唱えるだけで発動するという利便性の高さ、一気に戦略の幅が広がるため主にモノコロを中心に愛用されている。

マジックカードに込められている魔法は主にモンスターが使える魔法となるが、中にはマジックカードでしか確認がされていない魔法も存在する。『遭難』のマジックカードもその一つである。

なお、マジックカードの効力は一通り実験されつくされており、当然最下層での『遭難』の使用も実験済み。結果は、不発動であった。

【Tips】読心の魔道具

迷宮が現れて以降、消えつつある不幸の一つに「冤罪」がある。サトリのように人の心を読むモンスターや魔道具の登場により、警察はより正確に事件の全貌を掴めるようになった。

とは言え、読心の力を持つモンスターや魔道具は極めて希少であり、現状では重大犯罪の捜査やテロ対策に使われるのが精いっぱいである。

国会では議員の不祥事が問題になる度に読心の魔道具を使うよう声が上がるが、断じてそのようなことに使う余裕はないのである！捜査に極めて有用な読心の魔道具であるが、一方で「対象の思い込みや錯覚」の判断が難しいという欠点も存在する。別人格が犯した犯罪を主人格が記憶していなかったがために、警察が無実と判断して釈放してしまい、捜査が長引いたという事例も確認されている。当然のことながら悪用も容易なため、一般人の所有や使用は固く禁じられている。

↳二章前半終了時点のステータス

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】800（MAX！）

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し
- ・かくれんぼ
- ・中等回復魔法

【後天技能】

- ・霊格再帰
- ・自由奔放
- ・中等攻撃魔法
- ・詠唱短縮
- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・初等状態異常魔法

【種族】吉祥天（蓮華）

【戦闘力】1200（初期戦闘力750＋成長分350＋霊格再帰100）

【先天技能】

- ・吉祥天の真言
- ・二相女神
- ・アムリタの雨

【後天技能】

- ・霊格再帰
- ・自由奔放
- ・高等攻撃魔法
- ・詠唱破棄

- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・高等状態異常魔法
- ・かくれんぼ

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】840（MAX！）

【先天技能】

- ・膏血を絞る：対象の血を啜り力へと変換する。血を消費することで肉体の再生や強化を行うことが出来る。蓄えた血が多いほど効果向上。状態異常への耐性を持つ。

- ・夜の怪物：蝙蝠や狼、霧などの姿に変身できる。夜の間は頭と心臓を潰さない限り消滅しない。日光や聖なる光を浴びると一定時間このスキルは無効化される。

- ・中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・絶対服従

- ・多芸：数多くの技能を身に着けた証。技術系のスキルの習得率向上。性技、演奏、畏解除、礼儀作法、武術を内包する。

- ・フェロモン

- ・奇襲

- ・静かな心

- ・庇う

- ・精密動作

- ・中等補助魔法

- ・魔力強化：魔法の威力を強化する。

- ・詠唱短縮

・直感

【種族】ライカンスロップ（ユウキ）

【戦闘力】950（初期戦闘力800＋成長分150）

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く：『迷宮外の』月の満ち欠けによって身体能力が向上していく。
- ・狼に衣：ステータスが減少するが気配遮断等のスキルを内包する人間体と、ステータスが向上する人狼形態に変身することができる。

・本能の覚醒

【後天技能】

・忠誠

・小さな勇者

・真なる者：詳細不明。

・限界突破：詳細不明。どうやら初期戦闘力を二倍にするパッシブスキルと、一部スキルの力を通常以上に引き出せるアクティブスキルが内包されている模様。

・真眷属召喚：同種族のカードを取り込むことで、眷属として召喚することができる。召喚する眷属は通常のカードのように、戦闘力やスキルの成長が可能であるにもかかわらず、ロストしても日数を置くことで再召喚が可能となる。

・縄張りの主：自身を中心としたテリトリーを形成可能。テリトリー内では、味方全員の能力が向上し、持続回復の効果がある他、テリトリー内に侵入した敵の気配を察知することが可能となる。一方で、自身の存在を周囲に知らしめる形となるため、自身よりも弱い敵を遠ざけ、強い敵を惹きつけてしまう。また、テリトリーの範

囲は周囲の敵の弱さに比例する。

・高等忍術：日本におけるローカルスキル・忍術を高等レベルで使用できる。忍術スキルは、攻撃力には劣るものの、分身の術や火遁、水遁の術など敵を惑わすスキルが多い。武術、剣術、投擲、縮地、気配遮断のスキルを内包。

（縮地：一瞬だけ、自らの俊敏性を極めて大きく向上させることができる。使用には魔力と体力を消耗する）

【種族】エンプーサ（メア）

【戦闘力】280（MAX!）

【先天技能】

- ・吸精
- ・夢への誘い
- ・三種の変化

【後天技能】

- ・小悪魔な心
- ・一途な心
- ・友情連携
- ・初等魔法使い
- ・中等状態異常魔法
- ・人を呪わば穴二つ：自身の戦闘力及び受けたダメージに応じた呪いの傷を対象に与え、その後与えたダメージ分のフィードバックを受ける。

【種族】鬼人（鈴鹿）

【戦闘力】 360 (MAX!)

【先天技能】

- ・頑丈：頑丈な肉体を持つ。生命力と耐久力を常時向上させる。
- ・怪力：人外の力を持つ。筋力が常時大きく向上する。
- ・自己再生

【後天技能】

- ・目隠し鬼：鬼さんこちら。対象の敵意を自分へと惹きつけることが出来る。
- ・武術：戦闘技術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。
- ・見切り：相手の動作を読む技術。回避、反撃の際、行動にプラス補正。

【種族】ドラゴネット

【戦闘力】 160 (初期戦闘力195 + 成長分15 - 零落スキル分50)

【先天技能】

- ・小竜玉：生命力を生み出し貯蓄する竜の心臓。
- ・竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。

【後天技能】

- ・零落せし存在
- ・滅私奉公：自らの私欲を抑え、奉仕に徹する精神。命令された行動に対するプラス補正、自由行動に対するマイナス補正。ストレスが溜まり過ぎるとたまに爆発する。

Twitterで『やまだやまだ@yamada | yamada
44』様より頂いたイラストです。
本当にありがとうございます！

・しわしわユウキ（笑）

< i 4 4 0 4 5 3 — 2 1 7 1 1 >

・アヌビス

< i 4 4 0 4 5 4 — 2 1 7 1 1 >

・鈴鹿イラスト パターン1

< i 4 4 0 4 5 5 — 2 1 7 1 1 >

・鈴鹿イラスト パターン2

< i 4 4 0 4 5 6 — 2 1 7 1 1 >

・バレンタインデーイラスト！

< i 4 4 1 7 7 1 — 2 1 7 1 1 >

第十四話 被害総額一億二千六百万円ナリ（前書き）

一章前半のTIPSに新しく頂いたファンアートを載せています！
そちらもあわせてどうぞ！

第十四話 被害総額一億二千六百万円ナリ

——微睡みの中、俺に話しかけてくる声があった。

『……あの犬野郎を捕まえるって？』

耳当たりの良い、しかし生意気そうな声。それに『当たり前だと俺は答えた。』

『言つとくが、あの犬野郎はお前がどうにかしなくとも、そのうち勝手に破滅するぜ。アタシが見たところ、奴が逃げきれぬ未来は一つとしてない。いや、逃げる気がないというべきか……』

関係ない。これは、意地の問題だった。俺は蓮華たちを捨て駒にして逃げたのだ。そのまま終わりにしてしまえば、俺はずっと逃げたままということになる。それは、俺の歩む道を少なからず歪めるだろう。

蓮華風に言うならば、逃げ癖がつく、という奴だ。

俺が関わらずとも襲撃犯が捕まるといふならば、むしろ結構だ。逆に言えば、その結末に関わることができるかもしれないのだから。

『ククク……なるほど、意地か。なら仕方ねーな。まあ精々頑張れ、お前がどこまでやれるか……その眼を通じて見てやる』

何かが近づき、触れる気配。そこで、目が覚めた。

朝、というものは誰にとっても憂鬱なものだ。

よほど学校や仕事が好きでもない限り、眠気を我慢して出かける準備をするのは億劫なもの。

どうしてもテンションが下がる。

特に――。

『―――迷宮の消滅については、未だに詳しい理由が判明しておりません。国の研究チームが現地入りしておりますが、確実にここにあった迷宮は消滅しているようです。迷宮の消滅の原因を探ることができれば、迷宮の数をコントロールできる可能性がある」と世界中で注目が集まっております。

次のニュースです。先日午後二時ごろ、家族で川へキャンプにやってきましたいた小学一年生の男児が、川で溺れ死亡しました。川の流れば全体的に穏やかということですが、中心部は水深が深く流れも急で――』

――朝から気の滅入る様なニュースをやっていたら、なおさらだった。

「はあ……………」

TVから視線を切り、小さくため息を吐く。

……俺が迷宮で襲われてからはや三日が経った。

TVでは、朝から晩まで迷宮が消滅したニュースで持ち切りだ。無理もない。なんせ、世界で初めて迷宮が消滅したのだから。

当初は消滅した迷宮にいたということでもマスコミの取材を警戒していた俺であったが、今のところ奴らが来る気配はなかった。おそらく、警察やギルドが個人情報を守ってくれているのだろう。もっとも取材にいられたところで『何も知らない』以外に答えようがないのだが。

その一方で、迷宮内での行方不明者多発事件については軽くだが触れられていた。

もつともそれは、連続殺人犯が冒険者たちを襲撃している……という内容ではなく、「低ランク迷宮での未帰還者の数が増えているので、冒険者は気を付けるように。特に単独での攻略は絶対に避けるように」という程度のものであった。

これは、俺の証言だけでは他の行方不明者たちも襲撃犯の仕業だと断言できないことと、襲撃犯の仕業と断言することによって犯人たちに地下に潜られることを警戒してのことと思われた。

俺が何も知らなかった以上、国が迷宮消滅の鍵を襲撃犯たちが握っていると考えるのは当然のことで、犯人を確実に捕まえるために慎重になるのも頷ける。

ただ、すでに多数の行方不明者という犠牲者が出ている以上、ギルドや警察としても何も警告しないというわけにはいかず、その結果がこの形だけの注意勧告なのだと思われた。

実際に襲われた身としては、もつと深く掘り下げて注意喚起すべき……と思わないでもないのだが、こればかりは人類の未来がかかっているため何とも言えなかった。

結局、冒険者の原則として自己責任がある以上、仕方のないことなのだろう。

迷宮に潜らなければ、それで危険は回避できるのだから。

そんなことを考えながら朝食のトーストに齧りついていると、ふいにお袋が話しかけてきた。

「……アンタ、学校なんか行って大丈夫なの？ 昨日退院したばかりなのに」

そのお袋の心配そうな眼差しに、俺はムズ痒いような思いと、ちよつとした罪悪感を覚えつつ答えた。

「大丈夫だよ、点滴打って安静にしてたおかげで体調は良いし」
「でも迷宮に潜りすぎて過労で倒れたんでしょう？」
「あゝ、あれは……泊まりがけの攻略でよく眠れなかった上に、ちよつとモンスターハウスに遭遇して疲れただけだよ」
「なら良いけど……しばらく迷宮は控えなさいよ」
「わかってるよ」

俺は短くそう返すと、ごまかすようにハムエッグを大きく頬張った。

……今回の一連の事件について、俺は家族に対し「迷宮攻略を終えた後、過労で倒れて病院に運ばれた」とだけ説明していた。

それは、事件について警察から口止めをされているから……ではなく、もし本当のことを言えば確実に冒険者を辞めるように言われるだろうからだった。

さすがに迷宮内で犯罪者に殺されかけたと聞いて息子を止めないほど、ウチの親は放任主義ではない。

入院時は、警察から詳細を伝えられているかもと気が気ではなかったが、何故かは知らないが警察からも特に事情は伝えられていなかったなので、これ幸いにとこちらに都合が良いように事実を捻じ曲げさせてもらったのだ。

嘘をつくことに多少の罪悪感はあるが、この件に関してだけはどうしても自分の手でケリをつけたいという思いがあった。

……とはいえ、俺もすぐにリベンジマッチに挑むつもりはない。主力メンバーが壊滅した今、かつての戦力以下であるの襲撃犯に挑むのは無謀を通り越して、もはやただの馬鹿である。

まずは地上で犯人の情報を探りつつ、蓮華たちの復活費用を稼ぐのが当面の目標であった。

「……しかし、最低でも一億強、か。はあ……」

思わずため息が出た。

現在の相場では、エンプーサが最低価格で六百万からで、座敷童が四千万から、女ヴァンパイアともなると八千万からとなっている。しめて、1億2600万円。見るだけで眩暈がする金額だ。

しかもこれは、あくまで最安値で買った場合の話だ。市場での需要や所持スキルで値段は上下する。正直この値段で買えたら運が良いレベルだ。

特に、蓮華の活躍のせいで座敷童の人气が上がり、相場が全体的に上昇しているのが、地味に痛かった。

ちなみに、現在のすぐに現金化できる俺の資産は、凡そ3500万円ほど。内訳は以下の通り。

- ・ モンコロなどの収入：約1200万円。
- ・ 現金化していない踏破報酬の魔石：約1700万円分。
- ・ ドロップアイテムの魔石：約600万円程度。

この他にこれまでの迷宮攻略で手に入れた様々な魔道具類に、ライクスロープのカードが二枚、Dランクカードが百数十枚ほどあり、以上が俺の全財産となる。

Dランクカード百数十枚と聞くと一財産のようにも聞こえるが、実際はライクスやオークなどの安価なカードばかりで、ギルドに売っても買い叩かれて大した金にはならないものばかりだ。

いかに魔道具やカードを高く買ってくれる人を探せるかが、蓮華たち復活のキーになるだろう。

「ん、じゃあそろそろ行くわ」

「気をつけなさいよ、まだ病み上がりなんだから」

御袋の見送りの声を背に、家を出る。

学校へと向かいながら頭を悩ませるのは、次のモンコクの試合についてである。

使用できるカードが人型の女の子カードに限定されている以上、さすがに今のままでは試合に出ることもできない。とりあえずユウキと鈴鹿は確定として、あと一枚女の子カードが必要だった。

一番手っ取り早いのはメアを先に復活させることだが……C×D×Dの組み合わせでは戦力に不安がある。

それと、こうなった以上復活資金を稼ぐためにも試合の回数を増やしたいところだが……果たして蓮華やイライザのロストをいつまで隠し通せるか。

TV局が俺をモンコロに起用するのは、蓮華というスター性のあるカードのマスターであることが大きい。

それがロストしたとわかれば、いくら復活できるとはいえ、当然TV局からの評価は下がるだろう……。

「お、師匠やん。おはようさん、もう体の調子はいいんか？」

そんな風に悩みながら学校近くまでやってきた頃、背後から聞き覚えのある声がかげられた。

「小野か……おはよう。体調は問題ないよ」

「ふうん……？ その割に暗い表情やけどな」

「ああ……」

俺は一瞬適当に誤魔化そうとし、すぐに考えを改めた。

コイツにも……一応言っておくべきか。

「小野、ちょっと耳を貸せ」

「え、なんか気味が悪いなあ、なんやねん一体」

「いいから。実は、俺が入院してた理由なんだがな……」

俺は小野へと耳打ちをし、迷宮で何者かに襲われなんとか命からがら逃げ延びたことを伝えた。

最初はニヤけ面だった小野も、すぐに顔が強張っていく。

「……マジか。怪我は……無さそうだな。カードは？ どれくらい被害が出た？」

「え？ あ、ああ……。蓮華と、イライザ、メアの三枚だ。……関西弁はどうした？」

「そんなんでもいいだろ！ よりによって主力のCランクカードが全滅じゃねえか！ その話、他の人間には？」

「いや、お前のほかには後輩のアンナだけだ」

「ということは、クラスのみんなにはまだ知らせてないってことだな？」

俺が頷くと、小野は深い安堵の息を吐いた。

「はあああああ……ならギリギリセーフか。北川……じゃなくて、師匠。その話、もう他に話さん方がええで。クラスの奴、特に獅子堂にはな」

「獅子堂？ どうして？」

俺がそう問い返すと、小野は露骨に呆れたような表情を見せた。

「……師匠、最近学校の方を気い抜き過ぎなんとちやうか？ そりゃあ冒険者の方と比べたら小さい世界なんはわかるけど……人の恨みっちゅうんはどこで買うかわからんで？ なんだかんだ言うってこの世で一番恐ろしいバケモンは人間なんやからな」

「……………」

その小野の物言いに、俺はグツと言葉を詰ませた。
なんせ、つい先日人間という怪物の恐ろしさを思い知ったばかりなのだから。

人間にとって一番の天敵は、人間なのだ。それは、迷宮の中でも外でも同じ話。

確かに、小野の言う通りだ。冒険者が強いのは、迷宮の中で限定のこと。外の世界では、ごく普通の人間と何ら変わらない。そこで物を言う力は、数の力。世論の力だ。

いくら冒険者というもう一つの世界があるとはいえ、学校という世界を疎かにして良いわけがなかった。

しかし……人の恨み、か。

俺の脳裏に、南山の顔が一瞬だけ過った。

まさか、まさかな……。

さすがに被害妄想が過ぎる、と俺は自分を戒めた。

「……悪かったよ。肝に銘じる。それで、獅子堂がどうしたって？」

「獅子堂の奴が前々からカーストトップを狙ってるのは、さすがに知つとるよな？」

「馬鹿にすんな、それくらいは気付いてるっての」

うちのクラスの奴で気付いていない奴はいないだろう。それぐらい、獅子堂の下剋上思考はあからさまだった。

「じゃあ獅子堂が特に敵視しとるのが師匠って事も、もちろん気づいとるよな？」

「も、もちろん……？」

俺は顔を引きつらせつつ、知ったかぶりをした。

……えッ？ 獅子堂が、俺を？ なんて？ アイツが敵視してる

のは神道じゃなかったっけ!?

「はあ、やっぱりわかつとらんかったか」

そんな俺の顔を見て深くため息を吐く小野。

「まあ正確に言つと、敵視つてよりは攻撃対象って感じじゃけどな」
「……それは同じことじゃねえの?」

「ちよつと違う。敵視は個人的感情がメインやけど、攻撃対象は利益が絡んだもんや。ええか? 一から説明するで。今、うちのクラスでカーストトップの素質を持つのは五人。四之宮さん、神道、一条さん、獅子堂、そして師匠や」
「ん? 牛倉さんやお前は?」

ウチのクラスのカーストトップグループは、俺と四之宮さん、牛倉さん、神道、小野の五名だったはず。

そんな俺の問いに対し、小野は静かに首を振った。

「いや、僕はカーストトップグループに所属してるだけでカーストトップちゃうねん。こう言っちゃあなんやけど、牛倉さんは四之宮さんの、僕は師匠のオマケなんや」
「そうかあ?」

首をかしげる俺。

一年の頃からカーストトップだった小野や牛倉さんの姿を知る身としては、いまいちピンとこない話であった。

「うーん、こういえばわかるか? 師匠や四之宮さんは別のクラスでも間違はなくカーストトップになっていた。でも牛倉さんや僕は、師匠や四之宮さんと違うクラスやったらカーストトップじゃなかつ

た可能性がある、と」

それで、俺も納得した。なるほど、そう言うことか。

確かに牛倉さんは四之宮さんと違うクラスだったら、カーストトップにいるイメージはない。容姿はカーストトップにふさわしいものであるが、前に出る性格ではないためだ。今彼女がカーストトップグループにいるのは、四之宮さんに引っぱり張られてという面が強い。小野の場合は、牛倉さんの逆だ。カーストトップを狙う意欲はあるが、コミュニケーション能力という周囲に左右される武器しか持っていない。

もしクラスメイトの中に小野に匹敵するコミュ力を有するものがあったり、他のカーストトップメンバーに嫌われた場合、グループ入りするのは難しいだろう。

校内でも希少な二ツ星冒険者という武器もあるが、その武器をアピールできたのは、モンコロにも出ている三ツ星冒険者である俺の弟子、という肩書を利用できたのが大きい。

だが、読者モデルをやっていてカリスマ性もある四之宮さんや、イケメンでテニスでも実績を残している神道、冒険者でTVにも出ている俺は、どのクラスでもカーストトップに自然と入ることになるだろう。

「ボクや牛倉さんはこのクラスでこそカーストトップやけど、一条さんと獅子堂は違う。このクラス以外のどこのクラスでもカーストトップやったはずや。このクラスに四之宮さんと神道がおったことはホンマ運が悪かったとしか言いようがないわ。」

一条さんと四之宮さんは同じ読者モデルで、四之宮さんがカーストトップになったのはクラスの女子の支持が四之宮さんの方が多かっただけ。

一方の獅子堂は、校内のヤンキー系のアタマでイケメン度なら神道よりも上。神道の方がカーストトップになったのは、テニスの方

で全国狙えるレベルなのと……あと師匠のせいや」

「俺？」

「実のところ神道と獅子堂はタイプの違うイケメンやから同時にカーストトップグループに入れるんやけど……ぶっちゃけ師匠ってあいつDQN系の奴、苦手やる？」

「ああ、うん……正直」

陰キヤの悲しい習性というべきか、俺は獅子堂のようなオラオラ系はどうにも苦手であった。

さすがに人間よりもよほど恐ろしいものを普段相手にしているので別にビビるようなことはないが、常に周囲を威嚇しているような人種と一緒にいるのは苦痛でしかなかった。

「そんな師匠の感じを読み取ったんやろうな。神道も獅子堂の嫌いな爽やかなスポーツマンタイプということもあって、奴の方から身を引いた形になったわけや。でも、カーストトップまでは諦めたわけやなかった」

なるほど……獅子堂がカーストトップを一時的に譲ったのにはそういう背景があったのか。

「ここまでの話でわかったと思うけど、実のところカーストトップ争いは五対二やなくて三対二や。一人打ち倒すだけで同数に持ち込める。しかも、実はその三人もモデル業や部活、冒険者業の方に集中しとってクラスカーストの方にはあんま執着しとらんから、数さえ同数に持ち込めたらひっくり返せる可能性が高い。んで狙われたのが……」

「俺ってことか」

「そう！ 元々の容姿に優れてる四之宮さんや神道と違って、冒険者という武器しか持っていない師匠は、付け入る隙があると見たん

やるつな」

……どうせ俺はモブ顔だよ。カードを失ったらただの人さ。

「女の子モンスターばかり集めてるキモいオタク野郎とか、冒険者になった途端イキリだした勘違い野郎とか、いろいろと悪評を流そうとしたりたみたいやけど、あんま上手いかなかったみたいやな。モンコロにも出はじめたし、冒険者やり始めてなんか雰囲気変わったとか言ってる女の子からの人気もそこそこ出てきて……」

「え？ そこんトコロ詳しく」

女子からの人気云々というところに食いついた俺であったが、しかし小野は鼻で笑ってこれをスルー。

「まあそんなわけで、これまでは師匠を打ち崩そうとしてあんまり上手くいってなかった獅子堂やけど、そんな時にCランクカードが壊滅したとか聞いたらどうするか……わかるやる？」

「……ああ、まあな。つてか、Cランクカードは全滅したわけじゃないんだが。一応あと三枚あるし」

……もっともそのうちの二枚は換金用で、一枚はいつの間にかランクアップしてた曰く付きだが。

そんな内心など知らない小野は、ポカンと鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。

「ハッ？ さらにCランク三枚！？ それをはよ言えや！ 心配して損したわ！」

そう言ってボカリと結構本気目で肩を叩いてくる小野。

「でもまあ、それでも主力メンバーが壊滅したのは言わん方がええな。いろいろと陰で言い出す奴が出るやろうし……師匠も今そんなん聞いたら楽しくないやろ？」

「まあ……な」

カードを失ったのは俺の責任だからそれを馬鹿にされても仕方ない。だが、蓮華たちの奮闘まで馬鹿にされたら……冷静でいられる自信はなかった。

そんなことを話しているうちにいつのまにか教室まで着いていたまだ早めの時間なせいだろうか。登校している生徒の姿もまばらだ。

カーストトップグループでは、四之宮さんの姿くらいしか見受けられない。

彼女は、眠たげに自分の席でスマホを弄っていたが、やがてこちらに気付くとヒラヒラと手を振ってきた。

「おはよ、マロっち……と小野」

「おはよう」

「僕はオマケかい」

四之宮さんは、小野の突っ込みを華麗にスルーすると、俺たちの顔を見比べて怪訝そうな顔をした。

「マロっちと小野と一緒に登校してくるなんて珍しいじゃん」

「偶然登校中に会ってさ。……そっちこそ牛倉さんは？」

普段何かにつけて一緒の彼女たちがバラバラでいるなんて珍しい……と周囲を見渡しながらそう言うと、四之宮さんに少し呆れたような顔をされた。

「マロっちは相変わらず静歌にゾッコンだねえ。静歌は吹奏樂の方の朝練。ホラ、体育祭近いからさ」

「そんなんじゃないって。でもそうか、五月だもんな、体育祭」

多少テンションを落としつつ、俺は答えた。

体育祭。俺のように特に運動が好きではない層にとって、あまり歓迎できるイベントではなかった。

そんな俺を見た小野がからかい気味に言う。

「師匠は、今年の体育祭は結構活躍できるんとちゃうか？ 冒険者になってから結構鍛えとるんやろ？」

「そりゃあ多少はランニングとか筋トレしてるけど、ぶっちゃけ体力をつける用でスポーツのための筋肉じゃねえからなあ」

「活躍できてモマラソンとか綱引きとか地味な種目ってことか。まあ、別に体育祭でまで活躍する必要はあらへんしな」

そんな俺たちの会話を、顎に手を当て何かを考えこみながら聞いていた四之宮さんが、ふいに俺に問いかけてきた。

「……ねえ、やっぱり冒険者って体力とか結構必要かな？ カードの知識とかも」

普段あまり冒険者業のことに深くまで質問してこない彼女らしからぬ態度に、俺はわずかに疑問を覚えつつ答えた。

「……いや、フランク迷宮程度なら最低限の体力は潜っていくうちにつくし、そんなに知識も要らないけど。……急にどうして？」

この問いかけに四之宮さんは、周囲のクラスメイトたちに漏れなように声を潜めながら話し始めた。

「やゝ、実はさ、この間専属モデルにならないか、っていう話を貰ったんだけど……」

「おお〜！ ついに！」

「やるやん！ おめでとう！」

小野と二人、小さく歓声を上げる。

ぶっちゃけ俺はファッションの世界には疎い。四之宮さんが読者モデルをやっているというのは知っていたが、彼女が読者モデルとしてどの程度の存在なのかまでは知らなかった。

だが、専属モデルの話がくるという位なのだから、他の読者モデルと比べ頭一つ飛びぬけているのだろことは、素人の俺でも察しがついた。

素直に祝福する俺たちに対し、しかし四之宮さんはどこか困った様子であった。

「や……、それが、ただ専属モデルにならないかって話じゃなくて、冒険者モデルにならないかって話だったんだよね……」

「冒険者モデル……？ 冒険者アイドルのモデル版みたいな奴か？」

レイカ
REIKAみたいな？」

——REIKA。今、若者を中心に絶大な人気を誇るトップアイドルだ。

アイドルでありながら四ツ星ライセンスを持つ実力派の冒険者ということ、冒険者アイドルと呼ばれている。

元々プロフェッサー型のプロ冒険者だった彼女は、アマチュア時代から迷宮攻略の様子を見やすいように編集してはネット上に投稿するという活動をしていた。

アイドル級の美少女が、時に面白おかしく、時に命がけで迷宮を冒険する動画は、動画編集のセンスがあったこともあり、加速度的

に再生回数を増やしていった。

動画投稿サイト『My Tube』では、彼女の動画を模倣した動画が溢れかえり、いつしか動画投稿を目的として迷宮に潜る者たちをダンジョンチューバーと呼ぶようになった。

そんな彼女をメディアが放っておくわけもなく、徐々にTVに出るようになったら歌とか歌い出して、いつの間にかアイドルになっていた。

今や、ダンジョンチューバーというジャンルは、日本を発信源として世界中に広まっており、海外においてREIKAは総理大臣よりも有名な日本人と言っても過言ではなかった。

その人気っぷりを見た芸能界は第二第三のREIKAを作り出そうと躍起になっているらしいが、今のところREIKAに続くほどの人材は現れていない。

今回、四之宮さんに来たという話も、その手のプロジェクトの一つなのだろう。

だが、REIKAとは違って四之宮さんは元々冒険者だったわけじゃない。

つまり。

「……冒険者モデルというキャッチコピーのために冒険者デビューもしてくれってことか？」

「そゆこと」

ダンジョンチューバーの中からREIKAクラスの美人を探したが見つからなかったので、逆に美人を冒険者にしてしまえ、と。そういうことなのだろう。

……なるほど、四之宮さんの様子がいつもと違う理由がわかってきた。

「さすがに所属タレントに冒険者を強要すんのはギリギリアウトち

「やうか？」

小野が眉をひそめつつ言う。

現在の日本の法律では、「誰だろうと冒険者になるという意思を妨げてはならないが、誰であろうと冒険者になることを強制してはならない」ということになっている。

冒険者という職業は、完全な自由意志でのみなるべきもの、とさ
れているのだ。

これは冒険者という職業の生みの親であるアメリカの意向が影響
していると言われていた。

「事務所がタレントを冒険者にしたら問題だけど、事務所に入る前
から冒険者だったら問題ない。つまりはそーいうこと」

「なるほど……でも、冒険者になるための資金は？」

「登録料は最初の仕事のギャラを前渡し。カードは事務所がレンタ
ルさせてくれる。事務所の仕事にカードをロストした場合は弁償
無し。ただしプライベート中にロストしたら弁償……って感じ」
『ううん……』

小野と二人、唸る。

正直、冒険者になるための条件としては、かなり良い。実質タダ
で冒険者になれるからだ。しかし、それは冒険者に元々なりたかつ
た人の場合の話で、特に冒険者に興味がない人にとってはたたりス
クを背負わされているように感じるだろう。

「……四之宮さん本人としてはどう思ってるんだ？」

「私は……正直魅力的だとも、怖いとも思ってる。やっぱり読者モ
デルと専門じゃ報酬の面で変わってくるし、この話を受ければ冒険
者やっている分報酬に色をつけるし、仕事も取りやすくなるってス
カウトさんは言ってくれてる。……でもマロとか小野を見ると、

冒険者って華やかに見えて本当は結構怖いし危ないんだろうな、って」

「なるほど……」

そついうことなら俺から言える答えは一つだ。

四之宮さんの家があまり裕福ではない、という噂話は一年の頃から何度か聞こえてきたことがあった。

小学生の頃に父を事故で無くしており、外に出て働く母親の代わりに弟さんの面倒も見つつ家事もこなしているとか。

読者モデルを始めたのも少しでも家計の助けになるように、とのことかららしい。

実際のところどうなのか本人から聞いたことはないが、噂が本当ならば彼女が魅力的な報酬に食いつく気持ちも理解できた。

「結論から言って、その話は、今は絶対断った方が良い」

俺がそうハッキリと告げた。隣で小野も無言で頷く。

「マジ？ どうして……？」

不安そうに形の良い眉を寄せながら四之宮さんが問ってくる。

さて、なんて説得するべきか。俺は少し迷った末、微妙に暈して事件のことを伝えることにした。

「……これはあんまり周りに言い触らさないでほしいんだけど、実は最近迷宮内で新人狩りのようなことをしている奴がいるらしいんだ」

「マジ！？」

四之宮さんの顔がうつすらと青ざめる。

「そんなんニュースとかでも見たことないけど……？」
「低ランクの迷宮で行方不明者が多発してる、ってニュース見てないかな。原因不明って感じの言い方だったけど、それがどうも人間の手による犯行らしい。百歩譲って迷宮の異常だとしても、今冒険者になるのは絶対にオススメしない」

……これでも諦めてくれないようだったら、俺が襲われたことを言うしかない。

警部さんに口止めされているとはいえ、四之宮さんの命には代えられない。

俺が密かに決意を固めていると……。

「しょうがない、諦めるしかないか。あゝあ、せつかく魅力的な案件だったのになあ」

上を仰いで嘆息する四之宮さん。よかった、諦めてくれたか。小野と目配せして、ホッと胸を撫でおろす。

「まあ、何事も命あつての物種だからな……」

俺は目先の利益に囚われて主力メンバーを壊滅させてしまった今回の失敗を思い返しつつ、そう言った。

そんな俺の様子に何かを悟ったのか、神妙そうな表情となる四之宮さん。

彼女が口を開きかけたその時。

「みんな、おはよ」

「おお、おはよう！」

朝練を終えた牛倉さんや神道がやってきた。

周囲を見ればいつの間にかほとんどの席が埋まり、朝のHRまであと一分となっていた。

「おっと、もうこんな時間か。じゃあ四之宮さん、またなんか相談あったら遠慮なく言って」

「あ、うん。ありがとうね。一応小野も」

「またボクはオマケかい」

四之宮さんたちと別れ、自分の席へと着く。

そこで何気なくスマホ（予備、というより日常使い用）を見た俺は、アンナからメッセージが届いていることに気付いた。

『放課後、冒険者部で集合！ 場所はいつものファミレスで。アンナより』

第十四話 被害総額一億二千六百万円ナリ（後書き）

【Tips】ダンジョンチューバー

動画投稿サイト『My Tube』に投稿することを目的として迷宮へと潜る冒険者の総称。その大半は一ツ星であり、動画再生による広告収入など雀の涙のようなものであるが、中には一ツ星にもかかわらずプロ以上の収入を得る者もいる。

動画の撮れ高のために無茶なことをしたり、他の冒険者に絡んだりするダンジョンチューバーも多く、真つ当な冒険者からは嫌われる傾向にある。

第十五話 ホームズとワトソンとモブ

放課後。いつものファミレスへと向かうと、そこにはすでに冒険者部の二人の姿があった。

夕食の時間にはまだ早く人影もまばらな店内において、赤毛のハーフ美少女とゴスロリパンクな中二病ファッションな美少女の姿は、否応なしに周囲のお客さんたちの注目を集めている。

毎度のことながら……こいつらのいる席に向かうのは微妙な気恥ずかしさがあるな……。

などと思いつつ軽く挨拶を交わして席に着くと、さっそくとばかりにアンナが話を切り出してきた。

「では作戦会議をはじめましょう……つと、その前に」

アンナはセリフの途中で何かを思い出したように鞆を漁り始めると、手のひら大の水晶飾りを取り出した。

「それは……？」

「簡単な防諜魔道具ツス。周囲に音が漏れにくくなる程度の効果ツスけどね。結構市販にも売られてますし、先輩も見たことあるんじゃないツスカ？」

「……ああ、そう言えばカラオケ店で見たことあるな」

と俺は納得して頷いた。

確かに、襲撃犯やその仲間がこの周辺に偶然いるとは思えないが、念には念を入れて用心した方が良いのは確かだ。

防諜の魔道具を起動したアンナが、話を再開する。

「さて、今日ここに集まってもらったのは、他でもありません。先日先輩も襲われたという襲撃犯……呼び方は狼や犬のモンスターばかり使うことから『猟犬使い』とでもしておきましょうか……その『猟犬使い』を見つけ出し捕まえるための作戦を立てるためッス」

なるほど……『猟犬使い』か。狼系統のカードを使うあの襲撃犯を言い表す言葉としてはピッタリだろう。俺が内心でつけていた新人狩りよりもセンスが良い。

俺が密かに感心していると、織部が手を挙げた。

「……ちよつと待ってくれ。まずは我からいいか？ 大体の話はアンナから聞いてはいるが、実際に『猟犬使い』と出会った先輩から話を聞いておきたい。迷宮に潜る前から、病院で目覚めるまで。何を思い、何を感じたか。すべてを、な」

「ああ、わかった。……というか、織部は自然に混じってるけど、協力してくれるってことで良いのか？」

病室で意思を確認しているアンナはともかくとして、織部は強引に巻き込まれているのでは……？ と思いきや、彼女は拗ねたような表情を見せた。

「なんだ……我だけ仲間外れにするつもりか？」

「いや、そういうわけじゃないが……やっぱ危険だしな」

「危険、というなら普段の迷宮探索だって同じことだ。いいから、まずは話を聞かせてみせろ」

「あ、ああ……」

俺は頷くと、改めて一連の流れを話し始めた。

すでに何度か話したことがあるため、説明自体は滑らかなものだ

つたが、織部が所々俺の感じたことや疑問に思ったことを突っ込んで聞いてくるため、意外と話が長くなってしまった。

ちなみに彼女が特に深く突っ込んで聞いてきたのは、『グレムリソンの遭遇時のこと』と『実際に襲撃犯と会話をして俺がどう感じたか』の二つであった。

「……で、まあ二日ほど入院して一日家で安静にして、今日に至るって感じた」

「なるほどな……」

すべてを聞き終えた織部は、そう言うつと腕を組んで目を瞑り、黙り込んでしまった。

そんな彼女を余所に、アンナが話し始める。

「まず、犯人探しをする前に最初に言っておきたいのは、私たちが犯人を捕まえられるかどうかはわからない、ということッス。

現実には、ミステリー小説とは違い、犯人へたどり着くまでの道筋が用意されているわけじゃありません。犯人も登場人物の中にいるとは限らない……。

それでも、実際に犯人と接触し生き残った先輩の情報が必要なものであることは間違いありません。まずはそこから精査していきましよう」

「ああ」

俺が頷くと、アンナは人差し指をピンと立てて語り始めた。

「まず、第一に、なぜ犯人は未だに捕まらないのか。

通常、迷宮内での犯罪は、ゲート前のライセンスによる出入管理と監視カメラによりすぐに特定されます。

一度や二度の犯罪では偶然と片付けられても、被害者が増えれば

必ず捜査の手が入るはず。

仮にライセンスの偽造、あるいは他者から奪ったライセンスを利用していたとしても、監視カメラの映像がある以上それもいつかはバレます。

にもかかわらず未だ犯人が捕まっていないということは、よほど巧妙な手口で誤魔化しているのか、あるいは一般には知られていない迷宮の仕組みを知っていてそれを悪用しているのでしょうか……」

「まあ、そうだな。だが、それを素人の俺たちが探り当てるのは不可能だろう……」

「はい、ウチもそう思うツス。今は、『迷宮の出入りの方法から犯人を見つけ出すのはおそらく不可能』というポイントだけは押さえしておくようにしましょう」

アンナの言葉に俺は頷いた。

通常、ミステリー小説などでは密室の謎を解ければそれがそのまま犯人特定に繋がることが多い。

出入りできないはずの犯行現場に入ることができた唯一の人物こそが、犯人に間違いないからだ。

一方、今回の事件は、出入りの瞬間を確認しているにもかかわらず犯人らしき人物がとらえられないという点において、ある意味で密室殺人に通じるものがある……ように思える。

では、その謎を解き明かせば犯人への手がかりとなるはず……と思うかもしれないが、そもそも迷宮には解明されていない謎が多いため密室として成り立っていないのだ。

これが単純にライセンスの偽造や監視カメラのハッキングが要因であればその線から辿れるだろうが、警察やギルドが犯人を特定できていない以上、そう単純な話でもないのだろう。

つまり、犯人は一般には解明されていない迷宮の何らかの仕組みあるいは未知の魔道具を利用している可能性が高いということだ。

その時点で、ただの高校生である俺たちにはお手上げとなる。

もちろん何か手がかりを手に入れられればそこから調査していくつもりだが、現時点ではこの線から犯人を追うのは現実的ではない、と言わざるを得なかった。

「次に、『猟犬使い』はFランク迷宮での行方不明と関係があるのか……。これはあると仮定して良いと思います。

いくら一ツ星とは言え、Fランク迷宮でDランクカードを持つ冒険者たちが多数行方不明になるというのは非常に考え辛いシチュエーションです。それこそイレギュラーエンカウトがあちこちに現れたというのならば話は別ですが、そんなにイレギュラーエンカウトが大量発生したという話は聞いたことがない。

であれば、外部による要因、つまり人間の手によるものと考えてよいでしょう。

にもかかわらず、未だ犯人が捕まっていないということは、『猟犬使い』と同様の手段で出入りしているということです。そんなにいくつも迷宮をこっそり出入りする方法がある……。というか見つけられるとは思えないツスからね」

あつ……。そうか。俺はハツと目を見開いた。

迷宮内での犯行ということで無意識にFランク迷宮での行方不明多発事件と『猟犬使い』を繋げて考えていたが、別人の犯行である可能性もあつたのか。

考えてみれば、素人に毛が生えたような一ツ星冒険者を襲うのと、プロ一步手前の三ツ星を襲うのではリスクとリターンがまるで異なる。前者が道端のひったくりだとしたら、後者は貴金属店を襲撃するようなものだ。もはや別の犯罪と言って良い。

だが、その犯行の手法が特殊な方法で一致しているならば、これはもう同一犯の犯行と考えてよいだろう。

ならば、Fランク迷宮での行方不明多発事件を追うことで、俺を襲った犯人をも追えるはず。

「三つ目。犯人の不可解な言動について。

先輩の話では、『猟犬使い』は、先輩に名づけ済みのカードを含めたすべてのカードや魔道具を要求した上で、ゲートからではなく階段を使って去るように指示をした、とのことでした。

なぜ、犯人は所有権の移動ができないネームドカードやそのソウルカードまで要求したのでしょうか。

所有権を移せるノーマルカードや魔道具であれば売却目的で欲しがる理由はわかります。ですが、ソウルカードまで要求したということは、単に先輩から戦力を奪う以上の目的があつたと思われれます。次に、なぜその場で殺さずに、階段から逃げるように言ったのか。殺すつもりがないのであれば普通にゲートから逃がしてやれば良い。自衛手段を奪ってモンスターがうるつく上層階へと行けというのは、もはや死ねと言っているも同然です。

ならばその場で殺した方が自分に繋がる情報は漏れにくいはず。単に嗜虐心によるもの……という可能性もありますが、そうでないならばこの矛盾に犯人特定に繋がる何かがあるはず……」

それだ。

俺が犯人と話していて一番疑問を持った部分もそこだった。

なぜ奪つても意味がないはずのソウルカードまで要求したのか。さらには階段から帰るように言ったのか。

カードを大人しく差し出させるための嘘、というのは考え辛い。なぜなら、カードを差し出そうと差し出さまいと結局死ぬのは同じだからだ。

もちろんカードを渡した段階でガブリと一息、という可能性も考えられたが、俺には『あのアヌビスが自分の手で殺すのを嫌がつている』ように見えた。

もちろんそれは、最後の一線を超えたくないとかそんなチープな理由ではなく、何かもっとはっきりとした意味があるような……。

「……とまあ、長くなりましたが。今の段階で確定している情報はこのくらいでしょうか。問題は、これらの情報からどうやって犯人の特定につなげるか……ツスけど……」

そこで俺たちは沈黙した。

情報を整理してみたは良いが、警察でも名探偵でもない俺たちが机上で推理するには限界があった。

と、その時。

「行方不明者捜索のクエストを見るに……」

ずっと沈黙を保っていた織部が、ポツリと呟いた。

「……犯人は必ず被害者が単独の時を狙っている。」

予め迷宮に潜み、獲物が一人で現れた時を狙い襲っているのか……あるいはあらかじめ獲物の目星をつけてから犯行に及んでいるのか。

効率を考えれば、おそらくは後者の可能性が高いはず。被害者の情報を整理すれば、犯人像もある程度は絞り込めるはず」

「なるほど……」

思いのほか鋭い織部の着眼点に驚きつつ、納得する。

確かに、いつ獲物が来るともわからない迷宮で、たまたま一人で攻略しに来た者を狙うのは効率が悪すぎる。

俺はずっとソロで攻略していたが、一般の冒険者は二人から四人程度で攻略するのが一般的だからだ。

これは、二人以上であればイレギュラーエンカウトとの遭遇時の生還率が大きく向上すると言われているためである。

ソロで活動する者は、よほど自分の戦力に自信があるか、リスク

を背負ってでも収穫を独占したいか、あるいはそもそも他人と組むのが苦手なのかのどれかだ。

俺の場合は、初期の蓮華たちがあまりに他人と組むには不向きな性質だったからで、蓮華の特殊性が薄々わかってきてからはそれを隠さざるを得なくなったからであつた。

決して、俺がボツチ気質だったからではない。

「ひっかかるのは、実際に被害者が出ているにもかかわらず、犯人の情報が一切ないことだ。

迷宮内では他の冒険者とのトラブル防止のためカメラ等の機材を持ち込む者も多い。行方不明者の遺品にカメラが一切ないというのは不自然だし、何らかの方法で破壊されたとみるべきだ。そして……」

そこで織部は俺を鋭く見据え、言った。

「先輩は、最下層に入る直前にグレムリンと遭遇してしまい、機械破壊を受けている。これは偶然か？」

「いや……」

俺は、最下層に突入する寸前にグレムリンと遭遇し、機械破壊を受けている。その結果、犯人に繋がる映像や音声を残せずにいた。

あの日、別のグレムリンと遭遇してカードを手に入れていたため、あのタイミングでグレムリンが現れたことにその時は疑問を抱かなかったが、考えてみればあれは些かタイミングが良すぎる。

それに、二体目のグレムリンに対する鈴鹿の反応……。あれはもしかしたら、他のマスターのカードだったことに対する違和感だったのかもしれない。

魔石をドロップしたことから野生のモンスターだと思い込んでいたが、それもカードに魔石を持たせておけば簡単に偽装できること

だ。

だとすれば、犯人は獲物を襲う際にグレムリンを使い、機械破壊を行って自分の証拠を残さないようにしているということだ。

「犯人が自分の証拠をグレムリンで消去しているのならば、必ずどこかでグレムリンを補充しているはず。まずはギルドでグレムリンを大量購入している者がいないか確認してみるべきだな。もし直接買っているものがないくても、最近供給が減っていたり需要が増えたりとかはわかるはず」

「まずはその線で捜査をしてみるか」

織部の言葉に俺は頷いた。これで、なんとか最初の行動は決まったな。

そこで、アンナが不思議そうに言う。

「しかし、そこまでして自分の証拠を残さないようにしているのに、なぜ階段から逃がすように仕向けるんツスカね？ 迷宮のモンスターにやられたように見せかけるため？」

「それは、その迷宮に出現するモンスターと同じ種族のカードで始末すれば良いだけの話だろ」

「そうツスよね……」

「織部は何かあるか？」

先ほどから鋭い意見ばかり言う織部にも水を向けてみる。

「ん……理由の半分は、予想がつく。私の予想が正しければ、幾人かの被害者の所持品にはあるものがあるはず。被害者の所持品を調べてみて、アレがあるならばほぼ間違いないはずだ。だがもう半分はわからぬ。おそらく、犯人を捕まえてみるまで分からない理由のはずだ」

「アレってなんスか？」

「確証があるまでは言いたくない。変に先入観を植え付けたくないからな。……だが、我にもわからぬもう半分の理由の方、そちらに先輩が襲われた理由もあるはずだ」

「俺？」

なぜ、そこで俺が関係してくるんだ？

「猟犬使いは、基本的に一ツ星をターゲットとしている。だが、先輩は三ツ星……。しかも、モンコロにも出ている実力者で実質的なBランクカードである座敷童のアドヴァンテージカードも持っている。さらには、そのカードにはほとんど名付けがされており、襲っても旨味がない。リスクばかりが高くリターンが少ない、本来は獲物として相応しくない相手のはずなのだ」

「なるほど、確かに……」

先ほども俺自身思ったことだが、一ツ星を襲うのと三ツ星を襲うのではリスクもリターンもまるで別物で犯罪としての質が全く異なってくるのだ。

特に俺は主力カードのほとんどに名づけをする変わり者で、それはモンコロやTwitterなどを通じて犯人も知っているはず。

……俺を知らずに襲撃した？ いや、それはあり得ない。なぜなら……。

「……猟犬使いは明らかに先輩対策をして襲撃してきている。夜のフィールドではほぼ不死身のヴァンパイア対策にカードへと銀武装をさせ、複数枚のBランクカードを用意してきている。さらには戦力偵察のためにCランクカードを使い捨てにするほどの用意周到ぶり。これは猟犬使いが先輩だけが持っている『何か』を狙って襲ってきていることを意味している」

「俺だけしか持っていない『何か』……」

その時俺の頭に真つ先に浮かんだのは、いろいろと普通じゃない我が家の座敷童の事だった。

蓮華は、明らかに普通のカードではない。モンスターのドロップ率にすら干渉できるのは、普通の座敷童の能力を逸脱している。いや、それどころか、アイツには『マスターの運命』にすら干渉できるのではないか……と思わされる時もあった。

異常、という意味では鈴鹿にもそれを感じることもあるが、蓮華のそれは鈴鹿よりも底が知れないものがある。

その特殊性を狙って襲ってきたのだとしたら、敵がソウルカードまでも要求してきたことも少しは頷ける。

「一ツ星を襲う方が本命で、先輩が襲われた方が『例外』だったのか。それとも二つの目的があつて両方とも本命なのか。それはわからないが、少なくとも先輩を襲ったことには何らかの意味があるはずだ。あるいは他にも先輩のように襲われている『例外』がいるのであれば、それを調べることで犯人の目的も見えてくるかもしれないが……」

しかし、それは難しいだろう、と俺は思った。アンナも同じ考えなのか、その表情は渋い。

未帰還が稀なフランク迷宮と異なり、三ツ星の主戦場であるドラック迷宮は、未帰還も珍しいものではない。

被害が大量であればわかるかもしれないが、それが少数であればまずわからないだろう。

そういう意味であれば、なるほど、フランク迷宮での被害は完全にカモフラージュになっていた。

俺は嘆息しつつ言った。

「……とりあえずギルドとかでグレムリンを大量に買ったリ継続的に買い続けている奴がいないかと、被害者についてから調べてみるか」

「グレムリン方面についてはウチに任せてください。普通に聞きに行ってもギルドはろくに相手をしてくれないでしょうし、ウチのコネで調べてみます」

自信ありげに胸を叩くアンナ。

確かに俺たちがギルドに行つて購入者の情報を教えてくれるとは思えない。というか、教えてくれるようじゃ逆に怖い。俺の情報も簡単に流されてしまうということだからだ。

……大企業様のお力ならそれがわかるというのは、庶民としてはうすら寒いものを感じないでもないが、まあ、今は頼もしいと言っべきだった。

「じゃあ俺らは行方不明者の方から当たると感じてか」

「とりあえずクエストを受けてみるのはどうでしょう？ 合法的に被害者の所持品を調べることができませんし」

アンナの言葉に俺は申し訳なく思いつつ首を振った。

「いや、今迷宮に入るのはちょっとキツイ……。俺も主力が壊滅したしな」

今の戦力でもフランク迷宮の敵ならば問題ないが、もしも猟犬使いが俺を狙い撃ちにしていた場合を考えると今迷宮に入るのは抵抗があった。

少なくともパーティーを万全の状態までは戻しておきたい。

「ああ……そういえばそうでしたね。……正直なところ先輩の戦力

って今どうなってるんですか？ 金策のあては？」

「戦力はCランクカードが一枚とDランクカードが二枚って感じだ。資金については……」

俺は手持ちの資金について軽く暈しつつ答えた。

「なるほど……一応戦力になるCランクカードはあるんすね。

そういうことでしたらカードと魔道具の売却はちよつと待ってもらっていいツスカ？」

ちよつとウチに考えがあるんで。蓮華ちゃんとイライザちゃんの復活カードも今は買わないでおいってください」

「うん？ ああ、わかった」

もしかして高く買ってくれる人とか安いカードでも紹介してくれるのか、と内心期待しつつ俺は頷いた。

「とりあえずFランク迷宮の敵と戦えるだけの戦力があるなら大丈夫ッ。クエストを受けて行方不明者たちの搜索をしていきましょっ」

「大丈夫って……獵犬使いに襲われたらどうするんだ？」

「その時はこれを使います」

そう言っつて、アンナは俺と織部にオリジナルらしきバッジと二枚のマジックカードを渡してきた。

バッジの方は、カードをモチーフとしたデザインのもので、中心に青い宝石らしきものがはまっている。

一方、カードの方だが、これは……。

「バッジは我が冒険者部の証ッス。モンコロでも使われる防御用の魔道具とバッジ同士で通信できる魔道具が組み込まれています。機

械の類は使われていないので、グレムリン相手でも破壊されないツスから、安心してください。交通事故とかの備えにもなるんで、できれば常に携帯しておいてください。そして、マジックカードの方は、『転移』と『緊急避難』ツス」

『緊急避難』って……マジか。

『緊急避難』は、フィールド上のどこからでも安全地帯に瞬時に転移できるマジックカードだ。そこからさらに『転移』のカードを使用することでフィールド上のどこからでも地上に帰還することができる。

もしあの時これがあれば、俺も蓮華たちを失わずに逃げ延びることができたかもしれない。

にもかかわらず俺が一枚も備えていなかったのは、これが単純に糞高いからだ。

そのお値段は、なんと『最低』一億円。

値段が高騰している理由は、そもそもガツカリ箱からの出現率が低いのと、いざという時の命綱となるためプロクラスの冒険者がこぞって買い求めるからである。

ギルドで売られることは滅多になく、手に入れるにはコネが必要となる。

それを『転移』のカードと合わせて三組分とは……。
思わず手が震える。見れば織部もその表情を硬くしていた。

「パパにお願いして万が一のために借りてきました。獵犬使いに遭遇した時はこれを使って逃げましょう」

あっさりと言うアンナに対し、俺は冷や汗を浮かべつつ言った。

「い、いや、さすがにこんなに高いもんを貰うわけには……買い取る余裕もないし」

俺の言葉にうんうんと頷く織部。小動物染みた動きがちよつと可愛かった。

「いえ、お気になさらず。部員の安全に気を配るのも部長の役割ツスから。特に今回はウチが「犯人捜しをしましょう」と最初に持ち掛けていますからね。お守りくらいは用意しないと」

うおおおお……！

俺は、年下の女の子の責任感の強さに思わず震えた。

マジか。部長だからって億を超えるものをお守り代わりに渡せるか、普通？　いくら親頼りとは言え、何らかの条件はあっただろうに。

それをこつも惜しげもなく、しかも特に恩に着せるような雰囲気もない。

これが部長としての当然の義務ですという風であった。

今更ながら、この少女が日本でも有数の大企業の娘であることを再認識した。

もしも俺が彼女の立場ならば、交換条件の一つや二つは要求していたことだろう。

俺のような庶民とは器の大きさが違った。

「今後も冒険者部として活動するときには常に一組ずつ携帯するようになります。なので危険だと思った時は遠慮なく使ってください。…ああ、ただ、さすがに横流しとかはやめてくださいね？」

「ああ、それは、もちろん」

俺と織部は強く頷いた。

これはアンナの思いやりであり、信頼の証だと思って大事に持つことにしよう。

「とりあえずこれで迷宮内での捜査も問題ないはずッス。グレムリンをウチのコネで調べている間にウチらは地道に被害者の情報を探っていくとしましょう」

「どのクエストからやるよ？」

「一番直近のモノからやるべきであろうな。迷宮内では腐敗は進まないが、古ければ古いほどモンスターに食い荒らされたりして状態が悪くなっているはず」

「クエスト依頼によれば直近の被害者は……」

スマホを操作しクエストメールをチェックしたアンナが、顔を上げ言った。

「……佐藤翔子さん。この人から調べていくことにしましょう」

第十五話 ホームズとワトソンとモブ（後書き）

【Tips】安全地帯と転移系マジックカード

迷宮入り口のゲート前、及び各階層の階段前は、モンスターが立ち入りできない安全地帯となっている。モンスターに襲われた場合であっても安全地帯に逃げ込めばモンスターからの追撃は止まるが、安全地帯から攻撃などをした場合全階層の安全地帯そのものが一時的に消滅する。消滅した安全地帯は主を討伐するまで復活しないため、安全地帯からの攻撃は絶対禁止となっている。

一度も主を倒されていないAランク迷宮は、残念ながらそのほとんどがこのルールが発覚するまでの間に安全地帯を消滅させてしまっている。

また転移系の魔道具は、基本的に階段前の安全地帯以外で使用できない仕様となっている。その数少ない例外の一つが、『緊急避難』のマジックカードでこれは階層のどこからでも安全地帯に転移できるマジックカードとなっている。

絶体絶命の際のお守りとなることと、需要に対して供給が少ないことから値段が極めて高騰している。現在の相場では最低一億から。なお、安全地帯が消滅した際は、当然転移系カードも行き場を失うため使用できなくなる。

Aランク迷宮を難攻不落としている要因の一つ。

第十六話 頼むからもう一度チャンスくれ

翌日の放課後。俺たちはさっそく行方不明者の手がかりを探すため、迷宮へとやってきていた。

「ここが、佐藤翔子さんが消息不明となった迷宮か」

迷宮へと足を踏み入れた俺は、ぐるりと辺りを見渡した。

フィールドのタイプは、森林型。生い茂る木々の隙間からは適度に夕日が差し込んでおり視界も明るく、気温も春ぐらいの温度で心地よい風が吹く、如何にもエンジョイ勢が好みそうな迷宮であった。フランク迷宮で事故が起こるとすれば夜の迷宮で雨などの悪天候である場合が多い。

やはりこの攻略に最適な環境で行方不明者が出るのはおかしい、と俺はこれが事件であることへの確信を深めた。

「佐藤翔子さんが行方不明になったのはちょうど一週間前だったか？」

「はい。クエストによると……一人で迷宮に潜って帰らない佐藤翔子さんを心配した知人が、二日後に搜索依頼を出した形ツス」

「確か、冒険者歴はそこそこあるんだよな？」

「記録によると一年くらいツスね」

一年……。冒険者歴からすれば俺より先輩になる。迷宮に潜る頻度にもよるが、カードへの指示やモンスターの襲撃にも慣れている頃だろう。

ちょっとしたアクシデントくらいで、フランク迷宮で行方不明に

なるとは思えない。

やはり、彼女はこの迷宮で誰かに襲われたのだ。おそらくは……
獵犬使いによつて。

「……とりあえず、カードを召喚しておくか」

帰還のゲートを背にしているとはいえ、どこに犯人が潜んでいる
ともしれない迷宮だ。

そろそろカードを召喚しておいた方が良さだろう。

俺は懐から、ユウキのカードを取り出した。

そこに描かれているのは、見知った名前の、見知らぬ美少女。
年の頃は、俺と同じくらいだろうか。暗緑色のメッシュが入った
茶髪をポニーテールにしており、ぱっちりとした大きめの瞳は月の
ような淡い金色で、快活そうな笑みを浮かべてこちらを見ている。

……あれからいろいろと調べてみたものの、新しく得たスキルの
ほとんどが名前すら出てこず、かろうじて分かったのが、縄張りの
主と高等忍術のみであった。

このうち高等忍術の方は割と簡単に調べることができ、これは日
本のローカルスキルであった。

ローカルスキルとは、特定の地域のモンスターのみに出現する特
殊なスキルのことである。

中国の仙術や、ヨーロッパの魔女術、北欧のルーン魔術など……。
その特定の地域で出現したモンスターしか身に着けることのできな
いスキルを、通常スキルと区別してローカルスキルと呼ぶ。

ローカルスキルの特徴の一つは、通常の魔法スキルと異なり汎用
性が落ちる代わりに尖った特徴を持つことだ。

忍術スキルの場合は、変化の術や分身の術など、敵を惑わすよう
な術が多い。

例えば、水遁の術。これは水の中に身を潜め、水中での長時間の活動を可能とする忍術だ。

……今思えば、あの日湖から奇襲してきた猟犬使いのライカンスロープも、忍術スキルを持っていたのだろう。

いくら忍術スキルがマイナーで持つものが少ないとはいえ、無警戒に湖を背にしたのは俺の失敗だった。

次に、縄張りの主だが、これは自身を中心として戦闘力に応じたテリトリーを形成するスキルだった。気配察知と集団行動そして回復系スキルを複合させた上位スキルで、テリトリー内に侵入した敵の気配を察知し、味方全体の能力を向上させ、わずかながらダメージや疲労も回復させることができるらしい。

欠点と言えばテリトリーを発生させている最中はユウキの存在を周辺に知らしめる形となってしまうため、戦闘力が離れすぎている弱い敵を遠ざけ、同格以上の敵を惹きつけてしまうこと。周辺の敵の戦闘力に応じてテリトリーの範囲が狭まってしまうことくらいだ。それでも索敵と味方全体の能力強化、持続回復というメリットは、デメリットを補って余りあった。

真なる者や限界突破など詳細がわからないものも多いが、縄張りの主と高等忍術だけでもこれまでの戦略をガラリと変える力がある。それこそ、あの時このスキルがあれば猟犬使い相手にももう少し食い下がれたのではないかと思うほどに……。

それだけに、得た力が大きければ大きいほど、本当に俺の知るユウキなのかという不安があった。

だがそれも、今ここで彼女を呼べばはっきりすることだ。

「来い、ユウキ！」

迷いを振り払い、ユウキを召喚する。

光と共に、イラストに描かれていた少女が姿を現す。

身長は……160センチ半ばほどで、蓮華とイライザの中間くらい。細身で引き締まった体つきをしており、アスリートのような体型。身に着けているのはへそ出しタートルネックの白いノースリーブで、割れた腹筋が覗いている。下半身は、対照的にダボツとした黒いズボンで体のラインが見えない。

全体的に活動的な印象を受ける美少女だった。

「ユウキ……なのか？」

どことなくかつてのユウキと同じ雰囲気を感じながらも、まったくの別人となってしまう彼女に、恐る恐る問いかけると……。

「はいッ！ マスター！」

目じりに涙を浮かべて彼女は……ユウキは答えてくれた。

その柔らかな物腰と声音はクーシーだったころと変わらないもので。

その背にブンブンと振られる尻尾を幻視したのは、俺の感傷によるものだろうか。

一先ずホツと胸をなでおろしつつ、俺はリンクに切り替えて彼女に問いかけた。

『……一体何が起こったんだ？ いつの間にライカンスロープになったんだ？』

『それは……すみません、ボクも良くわからなくて……』

『そうか……』

『それよりも……すみません、マスター。ボクだけ力になれず……』

そう言って、悔し気に頭を下げるユウキ。

リンクを通じて、仲間たちを置いて逃げるしかなかった自分に対する無念と情けなさが伝わってくる……。

だが、それは……。

『いや、それはお前のせいじゃない。俺の判断ミスのせいだ』

引き際を間違えたのは、俺。蓮華たちを捨て駒に逃げるのを決めたのも、俺。すべての責任は俺にある。

自分の敗北の責任をカードに押し付けるようになったら、冒険者としても人間としてもお終いだ。

それが、無様に逃げるしかなかった俺に残った最後の意地だった。しかし、それでもユウキは首を振る。

『いえ、それでもあの時ボクがもっと強ければ……マスター』

ユウキが強い決意を瞳に滲ませ、こちらを見つめてくる。

『どうした？』

『二枚のライカンスロープのカードはまだ持っていますか？』

『ああ、あるが……』

『もしよければそのカードをボクに譲ってくれませんか？』

『は……？』

思わず、呆気にとられた。

カードがカードを欲しがるといふ異常な状況に、理解が追い付かない。

『え、ど、どうしてだ？』

『ボクの新たなスキル真眷属召喚は、……他のカードを喰らってそのモンスターを取り込むスキルなんです』

「カードを喰らって取り込む……？」

「マスターは通常の眷属召喚のスキルはご存知ですか？」

「ああ」

眷属召喚のスキルは、同ランク下位、または下のランクの特定のモンスターを一定時間ごとに無数に、あるいは一定数を自在にトークンとして呼び出す能力だ。

前者の場合は、ハイコボルトがコボルトたちを呼ぶように、一体ずつ時間をかけて呼び出さなくてはならないが、その数は無制限に呼び出すことができる。

後者の場合は、かつて戦った水虎のようにあらかじめ呼び出せる数に限りがあるが、一度に多くの数を呼び出すことができ、また前者と比べて一体一体の能力値が高い。

またトークン全体の傾向として、その種族の本来の戦闘力よりも低い戦闘力しか持ちえず、有するスキルも先天技能のみ、また呼び出したトークンは記憶の引継ぎも成長もしない、というものがある。つまり、眷属召喚とは下位種族の影のようなものを呼び出す能力なのだろう。

完全に、質よりも量を重視したスキルと言える。

それでも、迷宮内における召喚枠を無視して味方を増やせるといふ能力はすさまじく、眷属召喚のスキルを持つカードは軒並み高値がつけられている。

現在眷属召喚のスキルを持つカードは、そのほとんどが先天スキルとして有するものばかりで、後天スキルとして覚えさせる方法は見つかっていない。

ごくまれに、カードとしてドロップした際に最初から後天スキルとして持っているものが現れるくらいであった。

……とまあ、眷属召喚のスキルについて俺が知っていることはこんなところだ。

『ボクの真眷属召喚のスキルは、通常の眷属召喚のスキルとは少々異なります。まず眷属召喚のスキルでは何の触媒もなくモンスターを呼び出せるのに対し、真眷属召喚のスキルは同種族のカードが必要となるのです。また呼び出せるトークンの数は、取り込んだカードの枚数分となります』

『ふむ……』

同種族のカードが必要となる、というデメリットから始まった話に俺は少しばかり思うところがあつたが、最後まで聞いてから判断しようと思いを促した。

『次に、通常のトークンは最低限の性能しか持たず成長もしませんが、ボクの呼び出すトークンは取り込んだカードの性能をそのままキープし、さらには経験を積ませることで通常のカード同様成長させることができるのです。しかも、通常のトークン同様死んでも失われることなく、時間が経てばまた呼び出すことができます』

『マジかよ!?!』

ユウキの言葉に、俺は今度こそ驚きを隠せなかった。

成長するトークンを出せるなど……事実上不滅のカードを呼び出せると言っているに等しい。

それはもはや、カードの域を超えてマスターのそれに近いものだ。いや、触媒にカードを必要とすることから考えても、これはカードのマスター化と呼ぶべきスキルなのだろう。

強すぎる……。Aランククラスのスキル……は言い過ぎとしても、Bランク上位スキル並みの力があつた。

『もっと詳しいことを教えてくれ』

それから真眷属召喚の詳細を聞き出していった結果、以下のこと

が分かった。

・トークンを登録するには同種族のカードが必要。取り込んだカードは戻すことができない。

・トークンは通常のトークンと異なりカードのように成長することができない。ただし通常のカードに比べ成長は遅く、スキルも発現しにくい。

・トークンが死んでもクールタイムが必要なだけでロストはしない。

・トークンには、本体の持つスキルを一つ、ワンランク下げた状態で付与することができる。

・登録できるカードの枚数は現状三枚まで。それ以上は、どれか消してからでないと不可能。この数は、今後成長する可能性がある。

・あまりにトークンの扱いが悪い場合、通常のカード同様反逆系のスキルを得てしまうことがある。

・ユウキがランクアップした際は、種族が変わってしまつたため取り込んだカードは失われる。

……デメリットはある。取り込んだカードは戻せず、ランクアップした際は失われるというのは痛いし、扱いが悪ければかつての蓮華のような『閉じられた心』などの反逆スキルを得てしまうのもキツイ。

だが、それ以上に成長できるトークン……いや、ロストしないカードを呼び出せるようになるというのは強大なメリットだった。

とりわけ、迷宮の召喚制限を超えて呼び出せるというのが魅力的だ。

通常の迷宮攻略はもちろん、モンコロの試合においても役立つってくれることだろう。

『他のスキルについては？』

『真なる者については……すみません、よくわかりません』

シユンと頭を下げるユウキ。スキルの中には、取得した瞬間に使い方がすべてわかるものと、使い手ですらよくわからないもの、あるいはその混合型の三パターンがあった。

一番目は魔法スキルや技能スキルに多く、二番目は勇者スキルなどの特殊なタイプが多い。真なる者も、勇者スキル同様特殊なスキルのようにであった。

なお、ほとんどのスキルは三番目のパターンとされている。

『そうか……限界突破は？』

『あつ、そちらは少しわかりました。限界突破は、初期戦闘力と成長限界が二倍になって、一部スキルの力を通常以上に引き出せる能力のようです』

『二倍！ 事実上Bランクってことじゃねえか！』

いや、Bランクは先天スキルもCランクより強力なため劣化Bランクと呼ぶべきだが、それでもCランクの枠には収まらないだろう。それどころか、もしユウキがランクアップしてもこれらのスキルを引き継げたとしたらその力はAランクにも匹敵することになる。

ヤバイ……ヤバすぎる。真眷属召喚も限界突破も……。
ゾワゾワと背筋が泡立つような興奮がせり上がってくる。

この力があれば、今度こそ獵犬使いの奴を……！

同時に、頭の中の片隅の冷静な心が恐怖を訴えていた。

この力は強すぎる。一般のスキルの枠を超えている。特に、限界突破のスキルは、カードのランクというシステムを逸脱するものだ。もしこのスキルがバレたら、トラブルを招くのではないか……。

……いつそ、ギルドにこの新スキルのことを報告するべきか。

ギルドには、新しいスキルを報告した際、報奨金が支払われるシステムがある。

それはカードの研究を進めるためのものであったが、報告者をギルドが保護するためのシステムでもあった。

ギルドに報告すれば、多少の実験に協力はさせられるだろうが、その代わりにいろいろなトラブルから守ってくれることだろう。

……ギルドそのものが敵に回らなければ、の話だが。

ギルドも所詮は国の機関の一つだ。綺麗なだけの国など存在しない。いざとなれば『俺ごと』押収される可能性もあるだろう。

ひた隠しにするべきか、自分から報告するべきか……。

「あの、どうしたんスか？ 何かトラブルでも？」

ずっとリンクで会話している俺たちを不審に思ったのだろう、アンナがそう問いかけてきた。

……いろいろと考えるのはここまでにしておくとしよう。

「ああ、いや、なんでもない。……それがお前らのパーティーか」

ユウキに『その話はまたあとで』と伝えつつ、俺はアンナたちへと振り返ると、そこには彼女たちが召喚したカードの姿があった。

アンナのカードは美しい翼を生やした白馬……ペガサスだった。

おそらく、以前の試合でも戦ったことのあるユニコーンをランクアップさせたのだろう。

ペガサスには轡と綱、鎧がつけられており、アンナに乗馬の嗜みがあるのが見受けられた。

こういうところを見ると、普段はそう見えないことも多いが、彼女がれっきとしたお嬢様なのだということを実感させられる。

エルフの従者に、白馬のペガサス。社長令嬢でハーフ系美少女のアンナのイメージにぴったりな、実に見栄えの良いパーティーであった。

一方、織部のそれは……。

「うろうろ……いつ見てもキモいいい」

「キモイって言うな！ ツッチーは強くて優しくて賢くて、忠誠も高いんだぞ！」

俺の視線に釣られて、織部の呼び出したソレを見てしまったアナが、全身に鳥肌を立てて身を震わせた。

そんな彼女に対し、青筋を立てて抗議する織部。若干、マジ切れ気味だ。

……だが、織部には申し訳ないが、俺も彼女のカードはちよつと……キモイ、と言わざるを得なかった。

丸みを帯び肥大化した胴体に対し、異様に細く長い八本の脚。全身に夥しく生えた、虎柄の繊毛。その背には、巨大で不気味な老婆の顔が張り付いている。

土蜘蛛。それが、織部の呼び出したカードの名前だった。

『マスター、お気になさらず。私は気にしておりませぬ故……』
「ツッチー……」

アナナの言葉を受けて、ニコリと微笑む土蜘蛛。そんな彼女を心配そうに見つめる織部。

カードとマスターの心温まるやり取り……とはさすがに言えなかった。

下手なホラーなんかよりもよほど怖いその光景を見たアナナの顔に、ガチの涙が浮かぶ。

「ウツ……吐き気が……」

「おい！ さすがに失礼だろッ！」

口元を抑ええずくアナナに、今度こそキレる織部。

「ま、まあまあ、落ち着けて。アンナ……人のカードを馬鹿にしたり気持ち悪がったりするのはマナー違反だぞ」

「う……ごめんなさいッス。つい……」

心情的にはアンナよりであった俺であったが、俺はそう彼女たちを宥めた。

実際、迷宮内で他の冒険者のカードを馬鹿にしたりする行為は重大なマナー違反と言われていた。

時にはカードを使つての決闘沙汰にも発展するため、度重なる挑発行為はギルドから嚴重注意を受けるレベルだった。

……とはいえ、女性冒険者の中には、土蜘蛛のような不気味なビジュアルのモンスターを生理的に受け付けられない者も少なからず存在した。

他人のカードを馬鹿にしないのもマナーならば、他人が不快に思うカードを使わないのもマナーだ、という声もあった。

「ふ……さすが先輩はよくわかっている。グレーを好んで使つていただけはあるな」

アンナが素直に頭を下げたことで、溜飲を下げたらしい織部が、なぜか俺へと好意の目を向けてくる。

……どうやらグレーを使つていたことで、俺は彼女に一目置かれていたようだ。

世間的にはグレーも十分忌避されるカードだからだろうか。

「個人的にはあのグレーにはキョンシーからのヘル、黄泉津大神といったアンデッド女王の系譜を歩んで欲しかったが、まあ大会の賞品がヴァンパイアだったから仕方ないか。ヴァンパイアもカッコいいしな」

「あゝ、織部はそういった……ホラー系が好きなのか？」
「ん……まあ、な」

俺がそう問いかけると、織部は自分が急に熱く語り始めていたことに気付いたのか、頬を染めて黙りこくってしまった。

「小夜はホラー映画とか大好きツスよ。カードもアンデッドとかそういうのばっかツス」

「コ、コラツ！ 勝手にバラすな！」

「いいじゃないツスか。ホラー映画が苦手なウチの代わりに、次から先輩を誘って見に行つてよ。いや、マジで。本当に」

「クツ、友達甲斐のない奴め！」

よほどこれまでさんざん苦手なホラー映画に付き合わされてきたのか、割と本気のトーンで言うアンナに対し、悪態をつく織部。そんな彼女に苦笑しつつ、俺は言った。

「俺も結構ホラー映画好きだから今度見に行くか」

「え……あ……。せ、先輩がどうしても言うなら……」

「ツンデレか」

恥ずかし気にそういう織部に、アンナが呆れたようにツッコむ。
さて、そろそろ……。

「ま、とりあえずその話はあとにするとして……そろそろ行くか」

俺がそう言うと、二人は顔を引き締めて頷いた。

さすがに二ツ星、三ツ星の冒険者だ。切り替えが早い。

彼女たちが自分のカードに騎乗するのを見て俺もいつものようにユウキに乗ろうとし、止まった。

……今のユウキは美少女の姿だ。人狼形態になってもらうとしても、人間と同じ二足歩行なのは変わりない。

いささか騎乗には適さなかった。

仕方ない、ドラゴネットを出すか。

「来い！ ドラゴネット」

俺の呼びかけに、小型のドラゴンが姿を現す。

現れたドラゴネットは、相変わらずのハキハキとした声であいさつしてきた。

「ご無事なようで何よりであります、マスター！」

「ああ、ドラゴネットも悪かったな、さつそくあんなことになって

この小竜からしてみれば、仲間になってすぐに瀕死に追い込まれているのだから思うところがあるだろうとそう詫びたのだが……。

「いえ！ こちらこそ力及ばず申し訳ございません！」

逆にその頭を下げられてしまった。

これも滅私奉公の効果なのだろうか。私心を抑え奉仕に徹する、というのはマスター側からすれば助かるのだが、その分爆発が少し怖かった。

特に小型とは言ってもプライドが高いと言われる竜族である。他のモンスターに比べてストレスも溜まりやすいだろう。

ある意味わかりやすい蓮華やメアなんかよりも注意を払うべきかもしれないかった。

「……じゃあ、さつそくで悪いんだが、乗せてもらっていいか？」

「ハッ、了解であります！」

前回の反省を踏まえ、ドラゴネット用に用意していた簡易用の鞍を取り付け、上に跨る。そんな俺の後ろにユウキも乗り込むと、クシーだったころにはなかった甘い匂いが漂ってきた。それと、柔らかな感触も……。

「？　どうかしました、マスター？」

「い、いや、なんでもない」

頭を振り、アンナたちへと振り返る。

「とりあえず、上から順番に探索するか？　被害者がどこで行方不明になったとかは、クエストには載ってなかったよな？」

「……いや、通常の行方不明者探索ならばそうしても良いが、今回は猟犬使いが絡んでいる事件だ。ならば……」

「最下層から上に逃がされた可能性が高い……ってことツスね。最下層から順に探索していくことにしましょう」

俺は頷くと、最下層へと向かってドラゴネットを走らせたのだった。

第十六話 頼むからもう一度チャンスをくれ

最下層への道のりは極めてスムーズに進んだ。

さすがに、二ツ星三ツ星なだけあって、道中のモンスターは鎧袖一触。階層も浅めだったこともあり、さほど時間をかけることなく、俺たちは最下層にたどり着き、その主も倒してしまった。

「うーん、さすがにFランク迷宮じゃあ主であってもそこらの雑魚と変わらないッスね」

最下層の主であつた陰摩羅鬼オンモラキの亡骸……というか魔石を見ながら苦笑するアンナ。

ユウキの一撃でお陀仏してしまったオンモラキの顔は、なんとも言えぬ哀愁が漂っているように見えた。

「……獵犬使いは、襲ってくる気配は今のところないな」

俺が辺りを見渡しながらそう言うと、織部が頷いた。

「まあ基本的に獵犬使いは一人を狙っているようだからな。二人以上を狙うと逃亡される可能性がグッと上がるからだろう。それに……先輩は一度すでに相手に狙われている。当然逃げるための手段を講じてから迷宮に来ていると相手は考えるだろう。先輩がよほど確かな証拠を握っているとか、先輩を狙った理由とやらが唯一無二のモノでもなければ、先輩は逆に犯人から狙われることはないだろうな」

「そうか……」

確かに、普通に考えれば命を狙われたのにすぐに迷宮に潜ってきたら何らかの対策を持っていると犯人側も考えるか。

現に、アンナ頼りとはいえ避難用のマジックカードも用意しているわけだしな。

俺が持つ犯人の情報も、直接猟犬使いに繋がるものではない。

蓮華についても、俺から見れば唯一無二のモノだが、他に同じようなカードがないとは決して言えない。

ならば、これ以上俺にちよっかいを出すよりも他の無警戒の獲物を狙った方が堅実ということなのだろう。

とりあえず今は襲われそうにないということにホッと一安心しつつも、いざという時に俺を囚にして犯人をおびき出すことができないのは残念でもあった。

「さて……ガツカリ箱は、と。うん、普通にポーションだな。……ところで、分配の方はどうする？」

迷宮の踏破報酬を回収した俺は、そこでふと思いついてアンナへと問いかけた。

「そうツスね、額も少ないことですし先輩がどうぞ……と言いたいところツスけど、今後に関わることもありますので、せつかなのでここで言わせていただきます」

アンナは真剣な顔で言った。

「ウチは基本的には収入は経費を差し引いた契約金型頭割り制度にするつもりツス」

経費を差し引いて頭割りって言うのはわかるが……契約金？
と俺が首を傾げていると、織部が補足してくれた。

「契約金制度は、プロチームでよく行われている制度だな。チームの平均よりも実力の高い選手を招く時、最初にある程度の額を契約金として渡してしまい、その後の活動で収益を頭割りすることに納得してもらおう制度だ」

「なるほど……」

パーティーを組む冒険者にとって、報酬の分配はトラブルの種だとよく聞く。

一番後腐れがないのは人数での頭割りであるが、パーティー内での保有戦力に差がある場合、どうしても攻略における貢献度の差ができて、パーティー内に不満が蓄積されていく。

かといって、貢献度によって報酬に差をつけるとなると、今度はこういった風に貢献度を計算するかということでも揉める。

単純に敵を多く倒した方が、貢献度が高いのか。そうなると火力重視のカードを持つものばかりが有利となるのではないか。回復や補助的なスキルや特殊なスキルでパーティーに貢献しているものの評価はどうするのか。道中でカードを失ってしまったものの損失の補填や貢献度は？ などなど。揉め事の種は尽きない。

大学の冒険者部のように最初から固定化されたパーティーで、先輩後輩などの上下関係があるパーティーは比較的安定しているらしいが、一般的なアマチュア冒険者はパーティーの流動も激しいと聞く。

また、魔石ならばともかくカードや魔道具のドロップなどはどう分配するかも議論がわかれ、また換金するタイミングも税金が絡むため、パーティーの報酬分配は冒険者の頭を悩ませ続けている。

俺がソロでここまで来たのも、そういった煩わしい人間関係が嫌だったから、というのもあった。

そういう意味では、最初に契約金という形でお金を渡しておいて、以降は頭割りで納得させるといふ契約金制度は優れているようにも思えた。

まあ、それでもいろいろな話し合いは必要になると思うが……。

「まあ具体的な内容は今度具体的に話し合えば良いと思っていますが、とりあえずウチの基本方針としては、報酬は頭割りで行きたいということは納得しておいてくださいッス」

「ああ、わかった」

それは迷宮内で話し合うことでもないだろう、と俺はアンナの言葉に頷いた。

「さて、これまでずっと警戒していましたが、猟犬使いが襲ってくる様子もないみたいですし、ここは大胆に三手に分かれて階層の探索をしましょう！」

「了解。何かあったらすぐにバッジで連絡を」

簡単にマップを三分割し、それぞれの担当区域に分かれる。

一人になった俺は、まずは人手を増やすためドラゴネットと交代で鈴鹿を呼び出すことにした。

探し物のような細かいことは人型の鈴鹿の方が向いているからだ。

……そういえば、鈴鹿には謝らなくちゃな。

せっかく最下層に潜る前に忠告してくれていたのに、それを無下にしてしまった。

まずは彼女を信じなかったことを詫びなくてはなるまい。

そう思い、ドラゴネットと交代で彼女を呼び出すと……。

「……ふふ、ふふふ！」

なぜか、ふんぞり返って得意げな顔をして現れる鈴鹿。今までにない登場のパターンに戸惑っている。

「ねえねえ、マスター？ なにかあ、私に言うことはあ？」

鈴鹿は、ねっとりとした声と口調でそう俺に問いかけてきた。

コ、コイツ……。と思いつつ、まずは頭を下げる。

「……この度は鈴鹿さんの忠告を無視して最下層に突入し、多大な損害を出してしまい申し訳ございませんでした」

「キヤハハハ！ だよねえ！？ だよねえ！？」

パンパンと手をたたきながら大はしゃぎする鈴鹿。鬼の癖に、鬼の首を取ったようなはしゃぎよう。

その姿に、「あれ？ もしかして俺、謝る必要なかったんじゃない？」という思いがどんどん膨らんでいく。

「あゝあ！ あれだけ私が忠告してあげたのに。そのせいで、あの座敷童も……。プクククク。これからはあ、ちゃんと私の言うことを聞くように。ねえ、わかったあ？」

「……………」

嫌味つたらしい鈴鹿のセリフに、内心歯噛みする。

やっぱりコイツ……。人をイラつかせる天才だわ。

そもそも、あれだけ忠告してあげたとは言うが、その忠告も「なんか違和感がある」程度だったし、それを笠に着て説教かましてくるのもムカつく。

特に、明らかに仲間の死を喜んでいるような節があるのも、救いようがない。

……とはいえ、俺が忠告に従わなかったことは事実。

ない身でありながら、藻掻き抗う様は……哀れで美しい」

そう言う鈴鹿の眼は微かに潤んで、熱を帯びているように見えた。

「それだけに……特別な者たちの傲慢に振り回され、ボロボロになつていくのを見るのは、あまりに痛々しい」

憐れむような、慈しむような、助けを求めるような……様々な情感の籠った彼女の瞳に、俺は身じろぎ一つで魅入られていた。

それは、かつてのような奇妙な感覚によるものではなく、彼女自身の魅力によるもので……。

「特別な者たちは、いつだって、ごく自然に周囲の凡人たちに高い要求を強いてくる……。なぜなら、彼らにとっては当たり前に行えることだから。彼らの放つ光に惹かれ、凡人がそれに応えようといくら頑張ろうと、いずれは振るい落されていく……」

能力の高い者が、周囲にも高いハードルを求めるといふ話はよく聞く話だ。

有能な社員を社長にしたところ一気に会社がブラック化してしまった、なんて話もある。

だが、美しい眉を顰めてそう語る鈴鹿の声には、そう言った一般論ではなく、彼女自身の確かな実感が籠っているようにも思えた。

おかしな話だ。カードは、マスターの手を渡る度に記憶を失うというのに……。

もしかしたら、彼女もかつて“特別”なマスターの元で奮闘し、脱落していった経験があつたのかもしれない。

記憶を失おうとも、その時の感情が魂にこびりついているのだからうか。

「ありとあらゆる者には、分相応の生き方というものがある。私が見たところ……今がマスターのギリギリのライン。ここらで満足して、私と面白可笑しくやっていこう？　大丈夫、最後の最後までちや〜んと付き合っただげるからさあ」

「……………」

媚びるような笑みで、しかしこれまで見たことがないほど真剣に、鈴鹿が誘惑してくる。

たぶん、彼女は彼女なりに、俺の何を想ってそう言っているのだろう。

ただ、そのベクトルが蓮華たちとは真逆なだけなのだ。

蓮華が叱咤激励しマスターの成長を促すタイプなら、鈴鹿は無理をし過ぎないようにブレーキをかけて守るタイプなのだろう。

そのどちらかを有難いと思うかは、それぞれの好み次第。

俺としては、正直……鈴鹿の方針の方が心地良くは感じる。

元々俺は内向的な性格で、栄光か破滅かの挑戦よりは、成功も失敗もない無難な選択を選んでいくタイプだからだ。

冒険者になる前は、普通に友達がいて、普通に学校に行って、普通に進学とか就職をして、できれば巨乳の彼女と付き合えればそれでよいと思っていた。

すでに、三ツ星冒険者としての収入だけで十分稼げているし、そこその尊敬は集められる。これ以上無理をする必要は、生活という意味ではあまり無い。

現状維持というゆるま湯は、実に魅力的だ。
だが。

「鈴鹿……お前の気持ちはわかった。正直、嬉しいよ。でも……やれるところまではやってみたいと決めてるから」

鈴鹿に言わせれば、俺は特別な者……蓮華の放つ光に惹かれてい

るというヤツなのだろう。

確かに、その通りだ。

だが、結局のところ、それも俺の意思ではあるのだ。
蓮華たちと共に歩いていった先にあるものが見たいという、俺自身の意味なのだ。

鈴鹿はそんな俺の目をじっと見つめ……

「……………ハア……………」

やがて大きなため息をついた。

「やっぱ、私じゃあダメかあ……。……ねえ？」

「……………なんだ？」

本気で落ち込んでいる様子の鈴鹿に若干の罪悪感を感じながらも優しく問い返すと、彼女は濡れた瞳で言った。

「……………もし私を選んだらいっぱいエッチなことしてあげるって言うたら？」

「!?!?!?」

そ……………そそそ、それはズルいだろ！

俺は激怒した。俺は女を知らぬ。俺は、童貞である。右手を恋人とし、男友達と遊んで暮して来た。けれども女体に対しては、人一倍に興味があった。

そういう重要な条件は最初に言ってくれないと!! 前提がいろいろ違ってくるじゃん!?

カッコつけて、後に引けなくなってからそういうのを持ち出してくるのは卑怯だと思っ!!

「……なぐんてね。断るってわかってるよ。どうせえ、私にはアイツみたいな魅力はないしね……」

そう言っつて自重するように腕を組む鈴鹿。スイカを二つ詰めたよ
うな豊満な胸元の谷間が強調され、俺の目が釘付けになる。

「い、いや、どうだろう？」

そういう意味なら、めっちゃめっちゃ魅力的です。蓮華みたいなちんちくりん、足元にも及ばないツスわ。

……もう一回交渉のチャンスをくれませんか？ ほら、邪知暴虐の暴君だつてメロスに一回チャンスをくれたわけだし。東西コンビでよければ人質に差し出すからさ。

「……マスター」

「ハッ……！」

ユウキが、呆れたような目でこちらを見ている……！
くっ……ここは一旦引くしかないか。

「あゝ、ごほんッ。……そ、それじゃあ鈴鹿、悪いんだが、行方不明者の手がかりを探しに行ってもらっていいか？」

「ハイハイ。了解。それじゃ、行ってくるねえ」

「ああ、頼んだぞ」

気怠そうに搜索に向かう鈴鹿を見送る。

……大魚を逃した、か。

俺はがっくりと項垂れたのだった。

第十六話 頼むからもう一度チャンスをくれ (後書き)

【Tips】ローカルスキル

特定の地域のモンスターのみにしか発現しない特殊なスキル。日本の忍術の他に、中国の仙術や北欧のルーン魔術などがある。

これに対して、初等～高等攻撃魔法などの全カードが取得できる通常のスキルをグローバルスキルと呼ぶ。

グローバルスキルは汎用性が高いが型に嵌ったモノが多く、ローカルスキルは汎用性が低い代わりに尖った性能を持つ傾向があるのが特徴。

またローカルスキルを持つカードは忍者やクノイチ、仙人などと呼ばれ、高い人気を持つ。

第十七話 死者を追う

気持ちを切り替え、こちらも搜索を開始する。

そこで、一つ思いついた。

そうだ、せっかくだからユウキの真眷属召喚を試してみよう。

懐からライカンスロープのカードを一枚取り出す。

このカードを、復活用の金策とするか、ユウキの真眷属召喚に使うかはかなり悩んだ。

俺は当初、このカードを売却用としか考えていなかった。

しかし、ここでライカンスロープを売却した場合、ユウキの真眷属召喚を活用するためには再びライカンスロープをドロップするまで迷宮に潜るか、定価でギルドから買いなおす必要がある。

ならば、多少時間がかかっても、イライザたちは他の手段で復活資金を稼いだ方が先々のことを考えると良いと考えた。

……それに何よりも、真眷属召喚の力は猟犬使いとの戦いにおいても必ずや戦力になることだろう。

とはいえ、ここで試すのは一枚だけだ。一枚あれば、現金資産と合わせて座敷童の方なら買うことができる。

どっちみち、二枚とも売ったとしても座敷童と女ヴァンパイアの両方は買えないのだ。

イライザの復活は遠のくが、まだリカバリーは効く範囲だった。というわけで。

「ユウキ、これを」

「！これは……ありがとうございます。必ず役立てて見せます」

俺が差し出したライカンスロープのカードを見たユウキが、恭し

くカードを受け取った。

さて、ここからどうするのか……と見守る俺の前で、彼女はなんとバリバリとカードをかみ砕いて飲み込んでしまった。

これには、さすがに俺も驚いた。

カードを食べてしまったこともそうだが、ロスト以外ではどんな現代兵器であっても壊すことのできなかつたカードをかみ砕いてしまったからだ。

「……うん。マスター、これで大丈夫なはずです。しっかりと力が宿ったのを感じます」

「そうか……じゃあさっそくだが試してもらっていいか？」

「はい！——アオオオオオオ！」

ユウキの遠吠えと共に、迷宮の入り口のようなゲートが現れ、その奥から人影が姿を現した。

カードの召喚とは違う、眷属召喚特有のエフェクトだ。

万が一、カードの召喚と同じエフェクトだった場合、モンコロで使うことはできなかつただろう。

これなら、モンコロで使っても俺が不正をしたとは思われまい。

……まあ、同種族を召喚できる眷属召喚とはどういうことなのか、という質問はされるだろうが。

やがて、光が消えるとそこには、野性的な雰囲気、黒髪の青年が立っていた。

190センチを超える長身に、鍛え上げられた体つき。カードに描かれたイラストの通りの姿だ。

黒髪の青年は、なぜかひどく剣呑な目つきをしており、睨むようにこちらを観察していた。

「……フンッ。アンタが群れのトップか」

黒髪の人狼が、俺を見て鼻を鳴らす。そうして、こちらを見下すようにしゃべり始めた。

「どうやらそつちの女の方に取り込まれちまったようだな。だが、勘違いするなよ？俺は自分よりも弱い存在にしっぱを振るつもりはない。もし俺の力が借りたいなら――」

そこで、黒髪の人狼の言葉が止まる。黙ったわけではない。

ユウキのつま先が、凄まじい勢いで黒髪の人狼の鳩尾へと突き刺さったせいだった。

「――うぐえへえッ!？」

体をくの字に曲げ、血反吐をまき散らしながら上空を舞う黒髪の人狼。

それをポカンとした顔で見上げる俺を他所に、冷徹な眼差しでそれを見るユウキ。

やがて黒髪の人狼がドサリと地面へと落下してくると。

「あぐあっ!」

ユウキは無造作に彼の頭を足で踏みつけた。

「ゴホッゴホッ……テ、テメエ」
「なぜ」

氷のように冷たい声を出すユウキ。
今まで見たこともない彼女の姿に、俺は言葉も出ない。

「なぜ、この群れで一番序列の低いお前が、そんなにデカイ態度なんだ？ 誰に向かって口をきいている？」

「う……」

「なぜ何も答えない？ まさか、この期に及んで力の差がわからないボンクラなのか？」

ユウキの言葉に本気の失望が混じり始め、それと共に徐々に殺気が強まっていく。

それに黒髪の人狼がゴクリと唾をのみ込み……。

「わ、悪かった。あ、アンタたちを群れの と と……認める。もう、逆らわない……」

ユウキはゴクリと頷き。

「わかれば結構。ではお前に仮の名をくれてやる。お前の名は、ク口だ。気に入りましたか？」

「わ……わかった」

「それは良かった。……では、さっさと周辺の探索へ行きなさい。

愚図

「了解、した……」

よろよろとした足取りで探索へ向かう黒髪の人狼……もといク口。それを冷たい眼差しで見送るユウキ。

俺が怒涛の展開に完全にフリーズしていると、ユウキがこちらへと振り返り、深々と頭を下げてきた。

「マスター。ボクの眷属が失礼な態度をとってしまい、誠に申し訳ございませんでした」

「……え？ あ、ああ、いや、気にしなくて良い。……というか、

え？　なんでいきなりあんな暴力を……？」

頭を上げたユウキが、ハキハキとした口調で語り始めた。

「はい、それはもちろん、躰のためです！　群れのトップの言うことを聞けない個体は要りませんから！　できればここで一度殺して、トークンがちゃんと復活できるか、復活までの時間はどれくらいかかるか、あの猟犬使いとの戦いの前に把握しておきたかったです。復活できない可能性を考慮して今はやめておきました」

「な、なるほど……？」

俺は曖昧に頷いた。

いや、俺が気になってるのはそこじゃなくて、今までのユウキとのキャラと違い過ぎるといっか……え？　もしかしてランクアップの影響だったり？

イライザもヴァンパイアになったら儀礼的な振る舞いを好むようになったし、ランクアップ先のカードの影響を受けるのか？

と俺が一人混乱していると、ユウキはハツとした顔をして頭を下げてきた。

「あつ、すいません！　もしかしたら猟犬使いが襲ってくる可能性があつたんだから、マスターの許可を得てから躰をするべきでした。あんな駄犬でも肉壁くらいにはなるだろうし……勝手なこととしてすいません！」

「ああ、うん……もういいや」

そこで俺は諦めた。

そう言えば、狼系の動物は非常に序列に厳しいと聞く。

もしかしたら、これも今までは表に出てこなかったユウキの知られざる一面だったのかも、と納得することにした。

これまでは俺という群れの主に統括されていたことにより目立たなかったが、こうして彼女だけの群れを得たことで、彼女の獣としての厳しさが表に出てきただけなのだ。きっと。

ユウキは、反抗的な部下には意外と厳しい。
俺は自分の胸にしかと刻み付けたのだった。

それからしばらくして。

俺の担当エリアを隈なく探してみたが、これといった手がかりは見つけられなかった。

狼の嗅覚を持ち、情報収集にも長けた忍術スキルを持つユウキたちが探してダメだったのだから、このエリアにはそもそも手がかりはなかったのだろう。

そう判断してク口を戻し集合場所へと向かうと、ちょうどアンナが戻ってくるころだった。

向こうも人手を増やして搜索したのだろう、傍らに以前戦ったエルフの少女を連れている。

俺はアンナへと問いかけた。

「アンナか。どうだった？」

彼女は、退屈そうにしている鈴鹿をチラリと見た後、答えた。

「いやあ、ダメッスね。……森の住人であるエルフの手も借りて探して何も見つからなかったってことは、なんもなかったってことかと」

「こっちもだ」

そんなことを話していると、ユウキの鋭い感覚が何者かの接近を伝えてきた。

織部が戻ってきたのかとそちらの方を何気なく振り向いた俺は、思わずギョツとした。

隣からはアンナのかすれた悲鳴が聞こえる。

戻ってきた織部が引き連れていたのは、この世の者とは思えぬほど醜く腐り落ちた女性らしき鬼……黄泉醜女ヨモツメであった。

肌は腐敗の進んだ水死体のような暗赤褐色で、全身がブヨブヨと膨らんでおり、頭髮は所々抜け落ちて、身に纏う古代風の衣服すらも、剥がれた皮を連想させるほど醜い……。その顔は、鼻が腐り落ち鼻孔が丸見えとなっており、眼球も白く変色してどこを見ているかもよくわからない様子であった。

彼女が姿を現してから一拍遅れて、卵を腐らせたような臭いを数十倍に強烈にしたような悪臭が俺たちの鼻を刺激した。見れば、彼女の通った後は、草木が枯れ落ちて、急速に腐敗が進んで黒くなっているのがわかった。

まるで某映画に出てきた崇り神が通った後のようだった。

事実、彼女は崇り神そのものなのだろう。

こ、これがDランク最強にして、不人気ナンバーワンモンスター、黄泉醜女ヨモツメか。

初めて生で見たが、何とも強烈な……。能力を考慮すればその実力はCランクに匹敵するにもかかわらず、誰も所有したがないという話も頷ける。

そんな黄泉醜女ヨモツメを何の抵抗もなく従える織部は、どうやら相当に気合の入ったホラー好きのようであった。

「待たせたな」

「あ、ああ……。それで、織部の方はなにか手がかりを見つけたのか？」

「ああ」

硬直してしまったアンナの代わりにそう問いかけると、織部は懐

からジップロックの袋を取り出した。中には……迷路を模したようなアクセサリーが入っている。

「これが、地面に埋もれていた」

「これは……星母の会のお守りツスカ」

極力、黄泉醜女を視界に入れないようにしながらアンナが言う。

そう言われてまじまじとアクセサリーを見てみると、迷路の中心に星があしらわれたいかにも星母の会っぽいデザインのような気がしてきた。

「犯人が落としたものツスカね？」

「さあ……被害者が落としたモノかもしれないし、まったく別の冒険者が落としたものかもしれない」

そう言っつて肩をすくめる織部。

「とりあえず、それを見つけたところに行っつてみるか」

一体どういふ風に埋まっていたのか知りたいし、他にも何か見つかるかもしれない。

俺たちは、織部がこのお守りを見つけた場所へと向かうことにした。

「ここだ。ここで、半ば地面に埋まるようにこれが落ちていた」

そう言っつて、織部はジップロックに入れたままお守りの一部だけが地面から飛び出すようにそれを埋めた。

しゃがみ込んで、じつとそれを見つめる。

それは、わざとそこに埋めたというよりは、落とし物が足で踏まれて自然と土を被ったような埋まり方であった。

少なくとも、探そうと思つてよく目を凝らさなければ、このお守りを見つけるのは難しいだろう。

これが明確に埋められたものだったのなら、被害者が残したダイイングメッセージという可能性もあったのだが、この分では単純に落とし方という可能性が高そうだ。

……もっとも、落とし方が犯人だとすれば、これ以上ない重要な手がかりではあるが。

果たして、ここまで慎重に自分の情報を消している猟犬使いが、自分に繋がるアクセサリーを身に付けて犯行に及ぶか？ という疑問はあつた。

まあ、それが『信仰』なのだと言われてしまえばそれまでだが。と、その時。

「……ん？」

視界の端で、誰かの人影を見た気がして、俺はキョロキョロと周囲を見渡した。

なんだ？ ここには俺たち以外に人はいないはず。ユウキたちの感覚も、そう告げている。

「どうしたんすか？ 先輩？」

「いや、今人影が……」

「……ッ！？ まさか、猟犬使いが!？」

アンナが慌てて周囲を見渡し……。

「……いや、誰もいないみたいッスよ？ 失礼ですけど、気のせいじゃないッスか？」

「私のカードも特に反応はないが……」

「ん……気のせいかな。……ッ！ いや！ 今また！」

アンナたちの言葉に一度は納得した俺だったが、再び、今度はハッキリと人影を捉えたことで、慌てて立ち上がった。

この場を走り去っていく女性の姿。

ユウキたちの索敵能力をいかくぐって、ここまで接近してくるとは！ 間違いなく一般人ではない！

「追っぞ！」

「えっ……？ あ、はい」

「……？」

逃げる女の姿を目にしなかったのか、反応が鈍いアンナたちをしり目に、女性の姿を追う。

人間の足よりも、ユウキたちカードの方がずっと早い。すぐに追いつけるはずであったが……。

「クソッ！ 見失った！」

わずかに、追うのが遅かったらしく、女性の姿はもうどこにもなかった。

カードが近くにいるようには見えなかったが、緊急避難のようなカードで転移してしまったのかもしれない。

有力な手掛かりをみすみす逃してしまったことに歯噛みしている。

「……ッ！ また！」

こちらをおちよくるように再び彼女が姿を現した。

「またもカードを使わずに自分の足で走り去っていく。だが……。」

「その姿を見た俺は、今度はすぐに追いかけることができなかった。」

「先輩？ どうしたんスか？」

「……み、見たか？」

怪訝そうにこちらを見るアンナに、逆に問いかける。

「え？ なにを……？」

「……今の、女の顔だ」

「え？ また現れたんスか！？ じゃあすぐに追わないと！」

「いや……」

「一体どうしたのだ？ 顔色が悪いぞ？」

心配そうな織部の声に、俺はスマホでクエスト情報を確認した。そこには、佐藤翔子さんの顔写真が載っている。

黒髪をショートボブにした化粧つけのない、素朴な女性。

「——逃げた人影は、佐藤翔子さんとまったく同じ顔であった。」

第十七話 死者を追う

「と、とりあえず、追うぞ……！」

「あ、はい」

混乱する頭で、なんとかそれだけ言つて人影を追う。

なぜ、佐藤翔子さんが？ 生きていたのか？ 考えてみれば、死体は見つかっていない。行方不明なだけだ。だが、なぜ未だにここに？ 犯人の仲間だったのか？ あるいは、脅されて協力している？ 頭の中を埋め尽くす、数々の疑問。

だが、それ以上に疑問なのが、彼女の様子であった。

こうして追われているにもかかわらず、カードを使って逃げるわけでもなく、自分の足で逃げている。

こちらを誘っているのかとも思ったが、その様子はどう見ても必死……。時折振り返っては見せるその顔は、まるで捕まれば死ぬと言いたげですらあった。

俺は少し迷いつつも、思い切つて彼女に声をかけてみることにした。

「……待ってくれ！ 話を聞かせてくれ！」

……駄目だ。反応がない。もしかや、こちらを猟犬使いの仲間とも思っているのか？

「佐藤翔子さんですよね！？ 俺たちは行方不明者捜索クエストに来た冒険者です！ 貴女を探しに来ました！」

俺はそう声を張り上げるも、彼女はやはり反応しない。時折、こちらを恐怖の表情で振り返っては、徐々に速度の落ちてきた脚で必死に逃げている。

その様は、どう見ても猟犬使いの一味とは思えない。

そこで、彼女が木の根に躓いて転んだ。

一瞬畏の可能性が頭に過るも、ここはリスクを冒してでも彼女を確保しておくべきだと判断した。

「アンナたちはここで待っていてくれ」

そう言っつて、一人で彼女へと近づく。

だが、俺が彼女に触れようとしたその瞬間。

「……ッ!? き、消えた?」

まるで霞かなにかのように、消え失せる佐藤翔子さん。しまった! やはり何らかのスキルによる罠だったか! すぐに後ろへと飛びのくが……。

「……………?」

……しかし、何も起こらない。

おかしいな……。内心で首をひねる。すぐにも敵の奇襲が来ると思っただが……。

それから一分ほど警戒しても何も起こらなかったため、アンナたちへと振り返った。

「なあ? どういうことだと思っつ?」

だが、彼女たちはこちらをじいたような眼差しで見るだけで何も答えない。

やがて、アンナが困惑しきったような青ざめた表情で俺に問いかけてきた。

「……あの、何の……話ツスか？」

「何の……って」

今度はこちらが困惑する。

佐藤翔子さんが生きていたんだぞ？ どう考えても異常事態だ。

彼女が犯人の仲間だったとしても、犯人に脅迫されて協力させられていたのだったとしても、有力な手掛かりには変わらない。

それに、今日の前で忽然と消えてしまったことについてもだ。畏だったとしたら、敵の襲撃を警戒せねばならない。

そういった諸々を含めた質問だったのだが……彼女たちの反応はどうにも鈍かった。

躊躇いがちに、アンナが言う。

「……先輩はさっきから何を追って、何に……話しかけていたんですか？」

「……は？」

ゾクリ、と俺の背に冷たいモノが走る。

……アンナたちには、佐藤翔子さんの姿が見えていなかったのか？

あんなにもハッキリと存在していたのに。

「あの、マスター……あちらから、血の臭いが……」

「なに……？」

ユウキの先導で、臭いの元を辿る。
道から外れ、草木をかき分け進んでいくと……。

「うっ……ッ」

「ヒッ……！」

「これは……！」

———そこには、若い女性と思われる死体があった。

迷宮のモンスターに食い荒らされたのだろう、原形をとどめていない無惨な死体。

時空が歪んでいるという迷宮の特性のためか、死体の腐敗は進んでいない。しかし、それが逆に『新鮮』な死を見る者に伝えてきた。まるで、あと数分早ければ、助かったのに……そう彼女に言われているかのような……。

グロテスク、という意味であればヨモツシコメの悪臭と外見の方がキツイだろう。

だが、カードのそれとは違う同じ人間の“死”は、俺たちに全く異なるインパクトを与えてきた。

俺は死体を前に一歩も動けず、アンナはか細い悲鳴を上げ青ざめ、織部はなぜか目を見開いて俺の方を見ている。

そして……死体が身に着けていた衣服は、先ほどまで俺が追っていた佐藤翔子さんのモノで、比較的損傷の少ない頭部に残る面影も、これが佐藤翔子さんその人であることを証明していた。

「……ッ」

それに気づいた時、自分でも予想外なほどの衝撃を受けていた。

それは、あと少し運が悪ければ俺もこうなっていた、ということに対する恐怖ではない。

確かに、その恐怖もあった。この光景を見て、自分もそうだった可能性が高いと知って恐怖しない奴はいないだろう。

だが、それ以上に俺が衝撃を受けたのは、『実際に被害者が出ている』という事実そのものであった。

おかしな話だが、自分自身も猟犬使いに襲われて尚、多くの人がちが死んでいる……殺されているということへの実感が無かったのだ。

たくさんの方が死んでいることは理解していたつもりだった。だが、それは文字としての情報だったのだ。

だが、こうして死体を目にして、ようやく、猟犬使いの所業がどういうものなのかということがわかった。

これは……惨い。惨過ぎる。

気づけば、俺は彼女に向けて手を合わせていた。

アンナたちもそれに倣い、彼女の冥福を祈り始める。

今は、ただ……そうするしかなかった。

「それで……」

やがて数分の黙とうが終わると、ふいにアンナが呟いた。

「この方は佐藤翔子さん、ということの良いんでしょうか？」

「おそらく。ほかにこの迷宮で未帰還者が出ているという情報もないし……」

俺がそう言うと、アンナは恐る恐るという風にこちらを見た。

「この方が佐藤翔子だったというなら……」

「あ、ああ……」

「それじゃあ……さっき、先輩が見たモノは一体……」

「……………」

ぞくり……と静かな悪寒が背中を走る。

このご遺体が、身に着けた衣服などから佐藤翔子であることは、まず間違いないだろう。

それはつまり、俺が追いかけていたモノは生きた彼女本人ではなかったということ……。

また犯人が俺にだけピンポイントで彼女の幻影を見せる理由もなく……。

ということは、アレは……。

アンナがジリジリと俺から距離を取りながら言う。

「ぶっちゃけ、先輩ってそういうの『見える人』なんスか……？」

「い、いや、そんなことはない、はず……」

生まれてこの方、靈魂だのなんだのというモノとは無縁に生きてきた。

そもそも霊視能力とか……そんな主人公っぽい技能が俺の中に眠っているとは思えない。

だが、その一方で幽霊……魂の存在自体は否定できなかった。

なぜならば、俺はかつてハーメルンの笛吹き男に囚われた子供たちの魂を目撃しているからだ。

あれはただのスキルによるエフェクトだったと考えることもできるが、子供たちの死体を見て蓮華が言った「まだここに囚われている」という言葉を鑑みるに、あれは子供たちの魂を利用したスキルだったのだろう。

だが、それ以降俺がその手のモノを見たことはない。

もしもハーメルン戦で魂の存在を認識し、霊視能力的な才能が目覚めたとするならば、迷宮の外でも見えておかしくないはずだ。

それが、なぜこのタイミングで見えるようになったのか……。

それに、先ほどのアレは幽霊というには少しおかしかった。無念

を語り掛けてくるというわけでもなく、まるで、過去の映像を何度も再生しているだけのような……。

「おそらく、先輩が見たものは残留思念だな」

織部が、突然そう言った。

一体なにを、と目を向けると……。

「霊体が先輩に語り掛けるわけでもなく、死の直前の行動を繰り返していたとすれば、それは残留思念に違いない。先輩の目は、現場に焼き付いていた被害者の強い思念を読み取ってしまったのだろう」

そう早口で語り出す織部の眼は、普段のジト目とは異なりカッと見開かれており、爛々と光っていた。

「魂は存在するのか。これは、死霊系モンスターが現れた今となっても科学的に証明はされていない。しかし、神仏系のカードの一部は魂の存在を公言しているし、一部の魔道具は死者との交信を可能とするものもある。つまり、霊魂は存在し、ならば幽霊がいてもならおかしくないということだ！」

「さ、小夜、落ち着いて……」

「これが落ち着いていられるか！」

おずおずとなだめようとするアンナに、噛みつくようにそう言う織部。

普段のクールな素振りからは想像もつかないような興奮ぶりだった。

……ぶつちやけ、ちよつと怖い。

「魔道具で死者と交信した者はいても、生身で霊体を見た者はいな

い！ 自称霊能力者は腐るほどいるが、先輩は真正正銘の本物だ！
なんせ霊視能力で遺体を発見したのだから！ まさかこんな身近に霊能力者が実在するとは……！ すごい、凄すぎる！」

まるで憧れの芸能人に出会ったかのように、頬を紅潮させてこちらを見る織部。

どうやら霊視能力があるということが、オカルト好きで厨二病患者の彼女のストライクゾーンに突き刺さってしまったようだ。

が、正直全く嬉しくなかった。むしろ一生見えないほうがありがたかったくらいだ。

「先輩はどうやってその能力に目覚めたんだ？ やはり、生まれつき？ それとも生死の境を彷徨い、潜在能力を開花させたのか！？ 霊力的なものは感じられるのか？ そ、それを我にも分け与えることは！？」

「い、いや、そんなこと言われても……」

俺にもどういふことがさっぱりわからないし、あげられるものならあげたいくらいだ。

織部の勢いに俺がたじたじになっていると、見かねたアンナが間に入ってくれた。

「ま、まあまあ、その話はあとにしよう？ ね？ こんなところで話す話じゃないし……」

「そ、そうそう、先に遺体と遺品を回収しねーと。いつまでもこのままじゃ忍びないしな」

「む……そうだな、確かに不謹慎か。彼女の魂もここにいるわけだしな……」

俺たちがそう言うと、織部は大人しく引き下がった。

それにホツと胸をなでおろし、そこでピタリと止まる。

……これ、誰が回収するんだ？

チラリと遺体を見る。獣系のモンスターに食い荒らされたのだから肉体の破損状態は極めて酷く、直視に耐え難い惨状であった。視界に入れるのですら躊躇われるような状態なのだから、それを直に触れるのはより抵抗があつた。

……やっぱ、俺がやらなきゃいけないんだよな？ 唯一の男だし。だが……ぶっちゃけ、やりたくない……。

先ほど彼女の冥福を祈つた身で、と呆れられるかもしれないが……それとこれとは話が別だつた。

いくら冒険者とはいえ、人間の死体に慣れてるわけではない。俺も人の死体を見るのは、ハーメルンの時の子供たちの死体を除けばこれが初めてだつた。

つまり、こういうことに関して俺たちはただの高校生であり、ただの高校生が死体……それも惨殺死体を率先して回収するなんてできるわけがないのである。

しかも、俺は先ほど彼女の幽霊らしきものを見てしまっている。もし遺体に触れることで呪われたら……と考えると、被害者への同情よりも恐怖がわずかに上回つた。

ああ、こういう時にイライザさんがいてくれたら……と思つていたその時、スツ……と織部が前に出た。

「お、織部……？」

え……嘘、まさか……？

と思いつつ期待の眼差しを向けると、彼女は懐から取り出した白い手袋をつけつつ……。

「ここは我に任せておけ。調べたいこともあるしな」

何でもないことのようにそう言った。……いや、おっしやった。
おおおお、すまん！ ありがとう！ 情けない先輩で申し訳ない！
俺が内心で心からの感謝を捧げる中、織部が遺体の見分を始める。

「遺体の状態が酷いな……これでは犯人が殺したのか、この階層の
モンスターが殺したのかはわからないか。もつとも、殺すならここ
のモンスターと同じカードを使うだろうがな……」。

だが…… 婦女暴行を受けた痕跡はないか。とりあえずそういう方
向で下劣な犯人ではないようだな。あるいは、女……か？

持ち物は、ライセンスや財布、それに定期とスマホか。催涙スプ
レーすら持っていないとは、この軽装といい、ずいぶんと油断して
いたようだな。やはり初心者や警戒の薄れてきた者をターゲットに
しているのか？

財布は……万札が入っているか。それに電子マネー機能付きのキ
ャッシュカードも。やはり単純な金銭目的の犯人ではないようだな
……」

ぶつぶつと呟きながら、テキパキと遺品を回収していく織部。
そして最後に、ヨモツシコメに指示を出し、用意していた専用の
袋へと遺体を納めさせると、こちらへと振り返った。

「ふう……終わったぞ」

「お、おお！ お疲れ。いや、マジで助かったよ。……それで、何
が見つかったか？」

「ああ、ライセンスとスマホが見つかった。やはり、機械破壊を受
けているようだ。スマホだけならまだしも、ライセンスが壊れてい
るのは間違いなくグレムリンの仕業だ」

「ということは、猟犬使用と同様の手口ってことで確定ツスね」

これで犯人がグレムリンを犯行に使用しているのは確定したか。

つまり、俺があのタイミングでグレムリンの襲撃を受けたのも偶然ではなかったということだ。

あの時、帰っていれば……。いや、猟犬使いは明らかに俺を狙い撃ちにしていた。遅かれ早かれ、いずれは襲われていただろう。

むしろあそこで帰っていた場合、猟犬使いは俺への警戒を深め、より万全の体制をとって俺を襲ったことだろう。

そうなれば、『転移』のマジックカードを使う余裕もなく、俺は命を落としていたに違いない。

そう考えれば、あの時襲われたことも『不幸中の幸い』だったのだろう……。

「それで、例のアレとやらはあったんスか？」

「いや……残念ながらもなかった。まあ最初からすべての被害者が持っているとは思っていなかったからな。むしろ、持っていたら不自然だ。故に、持っているとしても数人に一人程度だと思っていた」
「なる……ほど？」

首を傾げるアンナ。

犯人が被害者を階段から逃がす理由であり、被害者が懐に持てるだろう物で、すべての犠牲者が持つわけではないモノ……？

一体アレって何なんだ……？ 気になるが……本人が今は言う気がない以上、無理に聞き出すわけにもいかないか。

……汚れ仕事もやってもらったわけだし。

「とりあえずご遺体も回収したことだし、地上へと帰るか」

猟犬使いが襲ってくる可能性もゼロではない。

いろいろ考えるのは地上で落ち着いてからでも良いだろう。

……それにしても、この霊視能力はなんなのだろうか。

最下層の帰還用のゲートへと向かいながら、一人思案する。

これまで見えなかったものが、このタイミングで見えるようになったのは、なぜだ？

俺の中で眠っていた才能が開花した……なんてことはないはずだ。俺にその手の特別な才能がないことはよく理解している。

俺にそう言った主人公的補正があるとすれば……それは外付けで与えられたものだろう。

外付け……もしこれが誰かの意図によって与えられた能力だとすれば……。

死者の霊を俺に見せることで、何を伝えたいんだ？

佐藤翔子さんの姿をよく思い返す。

彼女は、逃げていた。つまり、カードを渡した後猟犬使いにその場で殺されることはなく、実際に階段から逃がされることは確実にあった。しかし、もしそれで被害者が偶然他の冒険者と出会い保護されたらどうするつもりだったのか。

ライセンスやカメラを破壊しているということは、自分の痕跡を消したいことは事実のはず。

にもかかわらず、被害者の証言という証拠が残るような真似をする理由はなぜなのか……。

その疑問が俺の頭の中でぐるぐると回り続けるのだった。

第十七話 死者を追う（後書き）

【Tips】眷属召喚

召喚主よりも下位のモンスターを呼び出すスキル。多くの場合、ワンランク下のモンスターが呼び出されるが、中には同ランク下位のモンスターを呼び出すことができるカードもいる。

眷属召喚は、一定時間ごとに少数を無限に呼び出すタイプと、数に制限はあるが一気に多くのモンスターを呼び出すタイプの二つがあり、同ランクを呼び出すタイプは後者が多い。

呼び出される眷属は、本来の種族の戦闘力よりも低く、また先天的スキル以外のスキルを持たず、戦闘力の成長などもしない。

第十八話 キャンパス内での勧誘行為はご遠慮ください

翌日の放課後。俺たちは依頼人へとクエスト終了の報告をするため都内某所の大学へとやってきていた。

通常のクエストでは、ギルドに報告書や目的の物を納品するだけで終わりとなるが、こういった人の生き死にが絡むクエストでは、最後に依頼人に直接報告して締めとするのが一種の慣例となっていた。

ギルドから無機質に報告されただけでは納得できない依頼人も、直接遺体を見た冒険者に報告されれば納得するケースも多い。

「はえ〜、これが大学かあ〜。なんかみんなお洒落で大人っぽいッスね〜」

正門を潜ったアンナが、周囲をキョロキョロと見渡しながら感嘆の声を上げた。

初めて訪れた大学という場所は、高校のそれとは違い解放感に溢れ、洗練されているように見えた。

辺りの大学生たちは皆お洒落で清潔感のある服装と髪形をしていて、俺たちと数歳しか違わないというのに態度も落ち着いているようにも思えた。

中学生の頃に高校生を見た時も随分と大人びて見えたものだが、高校生から見た大学生はまた一つ世界を隔てて大人びて見えた。

……もつとも、いざ高校生になってみればそんなに中身は変わっていないことに気付いたように、大学生になってみればそんなに大人じゃないことに気付くのもかもしれない。

「……あの、先輩。なんだかウチから見られてませんか？」

高校の制服でやってきている俺たちの姿は周囲の目を引くらしく、先ほどから大学生たちの好奇の眼差しが集まっている。

いや、違うわコレ。目立ってるのはアンナの見た目や織部のファッションのせいだわ。

俺たちが居心地悪い思いをしていると、正門近くの噴水脇で立っていた男性がこちらへと近づいて来た。

「あの、もしかして依頼を受けてくれた十七夜月さんですか？」

そう声をかけてきたのは、二十歳ほどの温和そうな青年だった。すぐにその青年の正体に思い至ったのだらうアンナが答える。

「あ、はい！もしかして、青木さんでしょうか？」

「はい。青木誠也です。この度は依頼を受けていただき、ありがとうございます。」

そう言って、青木さんは頭を下げた。

「ここではなんですし、とりあえず部室の方で」

「あ、はい」

青木さんに案内され、サークルの部室へと案内される。

部室は思いのほか狭く、中央のテーブルが場所を取り、壁際にはいろいろな物が詰まれている、五人か六人も入ればぎゅうぎゅうという感じであった。

大学の部室と言うと、高校のそれよりも豪華という印象があったので、思いのほか貧相な様子が意外ではあった。

だがそんな部室でもアンナにとっては十分だったようで、眼を輝かせて部屋を見渡していた。

「先輩、先輩！ 部室ツスよ、部室！ いやあ、狭くて動き辛そうで、これぞ弱小サークルの部室って感じツスよね〜！」

「じ、コラー！」

この子ったら、なんて失礼なことを！

慌てて織部と二人でアンナの頭を下げさせる。アンタが馬鹿なことするとママたちが恥ずかしい思いをするんだからね！

そんな俺たちの様子を見た青木さんが苦笑して言った。

「いやあ、すいません、何分数人程度の小さいサークルなもんで。

冒険者部の方はもつと大きな部室で人数も多いんですよ」

「あ、そうなんですか……」

部とサークルの違いも良く分かっていない俺は、とりあえずそう返すことしかできなかった。

「それで……翔子の遺体を発見してくださったとか」

「あ、はい。こちらが遺品確認証書となります」

そう言っつて、アンナはギルドから発行された証書を手渡した。

それを受け取り、青木さんは頭を下げる。

「ありがとうございます……。やはり、翔子は死んでいたんですね

……」

悲し気に呟く青木さんに、俺は聞いても良いものかと迷いつつ、問いかけた。

「……あの、佐藤翔子さんとはどういう……」

「彼女とは、恋人でした」

「そうでしたか……」

恋人を失い目じりに涙を浮かべる青木さんに何と声をかけてよいかわからず、俺とアンナは沈黙した。

その時、部室に入ってからずっと黙って周囲を観察していた織部が不意に口を開いた。

「……こちらは、冒険者サークルなのですか？」

「え？」

突然の質問にきよとんとする青木さん。

「先ほど……冒険者部の方は広いとおっしゃっていたので。それと、壁際に冒険者用品が積まれていますし」

そう言っって織部が指さした先を見ると、そこには段ボールの中から少しだけ飛び出したボディーアーマーのようなものが覗いていた。アイツ、良く見つけたな……。

「え、ええ……。はい。ウチは冒険者サークルです。ガチ系の冒険者部と違って、数人程度でエンジョイする系の……ですが」

「なるほど……彼女さんとはよく迷宮へ一緒に？」

「はい。付き合いだしたきっかけが、僕が彼女の指導担当になったことでした。彼女が使っていたカードも、元は僕がレンタルしたもので、自然に……」

それを聞いて、俺は「マジかよ！ そんな彼女の作り方があった

のか！ 俺もやっぱ大学に進学しようかな」と衝撃を受けつつも、頭の片隅に何か引つかかるものを感じた。

「へえ！ 後輩の指導を任されて、カードをレンタルする余裕もあるなんてすごいですね！」

織部が、今まで聞いたこともないようなキャピキャピとした声で、媚びるような笑みを浮かべて言う。

それに俺とアンナがギョツするのを他所に、青木さんが満更でもなさそうにはにかんだ。

「いや、そんな……。まあ、一応これでも二ツ星ではありますが」

ん！？ 二ツ星……？

俺はそこでようやく青木さんに抱いていた微かな違和感の正体に気付いた。

織部が、媚びたような表情を取り払い、怪訝そうな表情で鋭く切り込む。

「二ツ星……？ あの、大変失礼ながら……ご自身で佐藤翔子さんをお探しには行かなかったのでしょうか？」

「ッ！ そ、それは……」

織部の言葉に、言葉を詰まらせる青木。

そこで俺もようやく違和感の正体に気付いた。

そうだ。彼も冒険者で、しかも二ツ星の冒険者であるというなら、自分の手で恋人を探しに行ってもおかしくないはず。いや、むしろその方が自然だ。搜索依頼を出したこと自体が、不自然なのだ。

場に、緊迫した空気が流れ始める。

その時、部屋にノックの音が鳴り響いた。

「ういゝす。あれ！？ お客さん？」

そう言いながら部屋に入ってきたのは、ジャーニーズ系のイケメンで……。

「あれ！ 北川くん！？」

「……あつ！ 青木、さん？」

驚いたように俺を見つめる青年の正体は、あの日迷宮で出会いカートをトレードした、駅前逆ナン待ちの冒険者……青木さんだった。

「……つて、青木つて！」

驚きつつ、二人の青木さんを見比べる。

見比べてみれば、イケメン度に差はあるものの、その顔立ちには共通したものがあるように思えた。

もしかして……？

「あ、紹介します。一個上の兄の青木 みのる 実です」

「よろしく！ いやあ北川くん久しぶりだねえ」

「お、お久しぶりです」

そう言つて、朗らかな笑みを浮かべながら手を差し出してくる実さんと握手を交わす。

すると耳元で彼がささやいてきた。

「……いやあ、心配してたんだよ。ホラ、迷宮があんなことになつただろ？ 俺も気がついたらダンジョンマートで倒れててさ。事情聴取とかもされて……。北川くんもだろ？」

「あ、はい。そうか……青木さんもあの日潜っていましたもんね」
「そうそう。……実はアレ、君がやったとか？」
「まさか！」

俺が驚き顔を振ると、彼は少しだけ観察するようにこちらを見ていたが、やがて「だよね！」と笑って顔を離れた。

「それで、これって何の集まり？」

「ああ、ホラ。翔子の搜索クエストの件で」

その誠也さんの気まずそうな言葉に、実さんはスッと顔を引き締めた。

「ああ……そうか。……この度はありがとうございました」

「いえ……」

と首を振り、思い出す。

そうだ。実さんも三ツ星以上の冒険者のはず……。

「……ところで、実さんも三ツ星の冒険者ですよ。翔子さんの搜索を依頼したのはなぜですか？ お兄さんに頼めば依頼料も払わずに済んだのでは？」

「ん？ ああ、そうか。そりゃ不思議に思うよな。理由は、俺が自分で探しに行こうとする弟を止めたからだよ。だって、危ないだろ？」

「危ない？」

「ああ、だって、曲がりなりに一年のキャリアを持ち、しっかりと育成されたDランクカードを持つ翔子ちゃんが行方不明になったんだぜ？ そりゃあ何か起こってるに決まってるじゃん。それに、最近妙にFランク迷宮で行方不明が多いし。そりゃあ行くのを止め

るでしょ。実の弟なんだから」

「それは……そう、ですが……」

「……………」

あっけらかんと答える実さんに、沈痛な面持ちで俯く誠也さん。

……実際、実さんの意見は正しい。三ツ星にふさわしい冷静さだ。危機回避という面では、俺よりもよほどクレバーだろう。

だが、仮にも後輩であり、自分の弟の彼女の危機に、あまりに薄情すぎるのではないだろうか。

それに、今となつてはあの日彼が俺と同じ迷宮に居たことも気になる。

疑い過ぎるのも良くないとはわかっているが、ドラゴネットとライカンスロープをトレードしたことすら疑わしく思えてきた。

……しかし、これで誠也さんが依頼を出した理由もわかった。

自分よりも優秀な兄に正当な理由で止められ、しかもその兄も頼りにならないとなれば依頼を出すしかないだろう。

「その、おかしいことを聞いてすみませんでした」

「いえ……」

三人で頭を下げると、誠也さんも思うことがあったのかあっさり許してくれた。

今日は、もう帰るか……。

「では、すみませんが、これで」

「ああ……今日はわざわざありがとうございました」

「いえ」

微妙な空気の中、部屋を後にする。

そのまま無言で正門を抜けたあたりで、不意に織部が呟いた。

「あのサークル……星母の会と繋がりがあるようだな」
「えっ、どうして？」

驚き、織部を見るアンナ。

「壁際に絵画が張られていたのには気が付いたか？」

……絵画？ そんなのあったっけか？ ごちゃごちゃしてて全く気が付かなかった。

が、部屋をやたら見渡していたアンナには覚えがあったらしく。

「あゝ、なんかありましたね。山よりも大きな巨人の絵……でしたっけ？ なんか安っぽい変な奴」

「ああ、この絵だ」

そう言つて織部はスマホの画面をこちらに見せてきた。

そこには、山よりも大きな全裸の美女に、その周辺を無数に飛び回る黒い翼の生えた人々……おそらく墮天使と思われるモノが描かれていた。

何かの宗教画のようだが……すぐに検索して出てくるような有名な絵なのだろうか？

「これは、星母の会が良く売りつけてくると噂の油絵だ。星母の会では、あのアルビノ聖女さまは、嘘か誠か、墮天使のカードと人間の母との間に生まれたハーフラしい。つまり、現代のネフィリムというわけだな」

ネフィリムとは、旧約聖書に出てくる墮天使の集団グリゴリと人間との間に生まれた巨人のことだ。

グリゴリは本来『見張る者』という意味を持つ天使の集団で、地上へは文明の技術を教えるために降り立ったが、男子校の生徒のようには男しかいない集団だったため美しい人間の娘たちに骨抜きにされてしまった、という悲しい逸話を持つ。

性欲と女の身体を知ってしまったグリゴリたちは、神から教えてはならないと言われていた『宇宙の秘密』……様々な良くない知識を教えてしまい、地上に墮落を蔓延させた挙句、墮天使と人間の子ネフィルムまで生み出してしまふ。

ネフィルムたちは美しい容姿を持つが身の丈1350メートルもあり、どう猛な性格をしていて、手当たり次第に食い物に手を付け、しまいには共食いすらするという怪物であった。

結果、この有様に激怒した神は『あー、もうこれはリセットしかないわ!』と、大洪水をおこし、一部の人間と動物たちを除き、地上のすべてを洗い流してしまふ。

これが、かの有名なノアの大洪水である。

しかし……あのアルビノ聖女が、墮天使と人間のハーフという設定だったとはな。

当然のことながら、いまだカードと人間や動物との間にハーフが生まれたという話は聞いたことがない。

女の子カードやイケメンカードとの間にエッチな行為をするマスターは世界中におり、それでいて一人たりとも子供ができていないのだから、カードとの間に子供を作るのは不可能なのだろう。

つまり、星母の会の主張は嘘ということになるのだが、なぜ敢えてキリストなどのメシアではなく、墮天使と人間のハーフであるネフィルムを選んだのかは気になるところであった。

「このネフィルムの絵画は、星母の会に入信するとやたらと購入を勧められるらしい。まあ、カルト宗教によくある話だな。ツボとか。値段もこれ一枚で数十万もするそうだ」

「え、ぼつたくりじゃん」

失望しました。聖女ちゃんのファン辞めます。

「ところが、大学の冒険者サークルなどでは、徐々にこの星母の会に所属する団体が増えていっているらしい」

「え？　なんでツスカ？」

「答えは、迷宮関連で星母の会の手厚いサポートを受けられるからだそう。カードや魔道具の交換会や高額買取、不慣れな新人のための指導や講義など、いろいろ幅広くやっているらしいぞ」

……なるほど。

安心してカードのトレードができる場というのは、冒険者にとって喉から手が出るほど欲しいものだ。

そのコネが手に入るとなれば絵画の一枚や二枚、会員カード代わりに購入してもおかしくない。

……しかし、佐藤翔子さんの所属していたサークルが星母の会と繋がりがあったとは。

もし……もしも、の話だが。

猟犬使いが、星母の会を利用していたとすれば、カード交換会や新人講習に出席していた冒険者サークルの名簿等を手に入れるのは簡単なのではないだろうか？

カード交換を装って冒険者サークルに近づき、手ごころな獲物を探す……。

グレムリンのカードも集めることができ、一石二鳥の策。

エンジョイ勢ばかりの冒険者サークルは、反撃されるリスクも低く手頃なように思える。

それに、青木兄弟。完全な白と言い切るには疑わしい点多すぎた。

……さすがに考え過ぎだろうか？

決めつけは、捜査の妨げになる。

そう思いつつも、カルト宗教に対する不信感もあいまって、俺の頭の片隅には、星母の会への疑惑がしこりのように残るのだった。

第十八話 キャンパス内での勧誘行為はご遠慮ください（後書き）

【Tips】ネフィリム

ネフィリムとは、墮天使と人間たちとの間に生まれた混血の巨人である。星母の会では、彼らの聖女を迷宮が遣わした使い（「カード」と人間の混血としている）。

だが、現在のところカードと人間との間に子供ができたケースは確認されていない。

見目に優れマスターに逆らえないというカードの性質上、カードとの性行為に及ぶマスターは後を絶たないが、迷宮が現れて二十年近く経った今となっても子供ができた例はなく、カードとの間に子供はできないものとされている。

第十九話 異議あり！

俺たちが行方不明者の調査を開始して、約二週間が経過した。

あれから数件のクエストをこなしたが、これといって有力な手掛かりはなく、織部の求めるアレとやらも未だ見つかっていない。

被害者たちは皆性別も年齢もバラバラで、佐藤翔子さんのように星母の会との繋がりあるというわけでもなく、これといって共通する特徴はなかった。

潜っている迷宮もそのタイプもバラバラ。強いて言えば、冒険者登録をして一月も経っていない真正銘の新人が多かったことくらいか……。

中には、初めての迷宮攻略で行方不明となったものすらいた。

ただ、彼ら彼女らが猟犬使いの襲撃を受けたことは間違いないようであった。

なぜならば、犠牲者たちは例外なく機械破壊を受けていたからだ。……が、それ以上は何も掴めておらず、アナのコネで調べているグレムリンの購入ルートの方もまだ時間がかかりそうであった。

ちなみに、これらの調査のすべてで俺は彼らの幽霊……というか残留思念を目撃している。

なぜ突然霊視能力が目覚めたのか、なぜ猟犬使いの被害者の幽霊だけ見えるのか、なぜ迷宮の外では見えないのか……。

謎は深まるばかりだが、今は調査がスムーズに済むと前向きに考えることにした。

そうしてイマイチ進展しているんだか、していないんだか……よくわからないモヤモヤとした時間を過ごしているうちに……。

俺のモンコロの試合の日がやってきた。

選手用の控室で、俺は静かにカードを見つめていた。

俺の手のひらの中にあるのは、ユウキと鈴鹿、それとソウルカードのままのメアのカード。

灰色に色あせたメアのカードに、俺は小さくため息をついた。

できれば……蓮華たちは同時に復活させてやりたかった。

常識的に考えて、復活できる者から復活させていった方が合理的なのはわかっている。

だが、それでも同時に復活させてやり、迎えてやりたかった。

しかし、『キャットファイト』の試合では三枚の女の子カードが必要となる。

どうしてもあと一枚、女の子カードが必要であった。

しかし蓮華とイライザについてはアンナに考えがあるらしく、復活に待ったがかかっている。そのため、試合に出るためには、一足先にメアを復活させざるを得なかった。

そこで、部屋にノックの音が鳴り響き、スタッフが顔を覗かせる。

「北川さん？ そろそろ試合なんで準備の方お願いします」

「……はい」

俺は迷いを振り切るように頭を振ると、メアのカードを復活させた。

復活用のエンプーサのカードが溶ける様に消え去り、メアのカードがその色を取り戻す。

「さて、行くか」

そして俺は控室を後にしたのだった。

『今夜もこの時がやってきた！ 人型女の子モンスター限定バトル、キヤットファイト！ 可憐で麗しいモン娘たちが、華麗に、残酷に殺し合う！ 最も美しく強いカードは一体だれなのか！』

実況は私、佐藤裕也。解説はお馴染み、登呂真黒さんでお送りします。

それでは選手の紹介です！ デビューから連戦連勝！ もう新人とは言えないでしょう！ 北川選手の登場だあーっ！』

実況のアナウンスと共に、俺は会場へとゆっくり入っていく。

これまでの試合で出来た固定ファンの歓声と、少ないながらも出てしまったアンチたちのブーイングが聞こえてきた。

『続いては、今宵がデビュー戦！ グラディエーターとなるため脱サラし冒険者となり、わずか半年でモンコロデビューという異色の経歴の持ち主！ 砂原^{すなはらたいよう}太陽選手の登場だあーっ！』

……これがデビュー戦か。申し訳ないが俺も負けるわけにはいかない、デビュー戦は黒星で飾らせてもらう……。

そう思いながら相手ゲートを見据えていた俺は、現れた砂原選手の姿にギョツと眼を見開いた。

砂原選手の容姿は、なんとというか、一言でいえば……：ファラオだった。

鍛え抜かれた身体を褐色に焼き、半裸に金のアクセサリーと腰巻だけを身に着け、頭にはツタンカーメン風の被り物を被っている。

その異様な格好に、会場も俄かにざわめく。

モンコロのグラディエーターが、キャラ付けのためにコスプレ染みた格好をするのはよくあることが、ここまでぶっ飛んだ格好を……それもデビュー戦で着てくる奴を見るのはさすがに初めてだった。

『……お、おお。これは、砂原選手、気合の入った格好です。これは……ファラオのコスプレでしょうか』

『そ、そのようですね。カードに合わせて専用のコスチュームを作るグラディエーターもいますが、これは……気合が入ってますねえ』

解説と実況もやや引き気味である。

会場をドン引きさせつつも、しかし砂原選手自身は何ら恥じることはないと言いつつも、自信満々のドヤ顔だ。

よく見れば結構イケメンなのに、中身が残念なタイプなのかもしれない。

『さて、それでは気を取り直して、試合開始です！ 両者、カードを召喚してください！』

ゴングの音と共に俺はユウキ、鈴鹿、そして最後にメアを召喚した。

俺の召喚したモンスターを見た会場が、戸惑うようにざわめいた。

『おっと？ 北川選手、いつもの座敷童とヴァンパイアの姿が見えません！』

『どうやら新顔二枚はライカンスロープと鬼人のようですね。新しい組み合わせを試すつもりでしょうか。あの座敷童がパーティーの中核だと思っていたので、これは少々予想外ですね』

『なにかトラブルでもあったのでしょうか？ いずれにせよ、新しい女の子カードは大歓迎です！』

好き勝手予想する実況席を他所に、俺はじつとメアを見つめていた。

光と共に現れたメアが周囲をキョロキョロと見渡し、こちらに気づく。

『マスター……ここは……』
『モンコロだ。……あれから、二週間近く経ってる』
『二週間……蓮華たちは？』
『まだ、復活出来てない』

それを聞いたメアはわずかに俯く。

『そっか……ねえ、マスター』

『……どうした？』

『私……もう二度と足手纏いにはならないから』

強い決意を秘めた蒼い瞳が、こちらをじっと見つめてくる。

同時に、手元のカードが光を放った。

見なくても誰のカードかわかる……メアだ。

新たに刻まれたスキルの名は、生還の心得。

その名を見て、俺は思わず目を見開いた。アプリで調べずともわ

かるほど、有名なスキルだったからだ。

その効力は、『瀕死級のダメージを負った時わずかな生命力を残してロストを逃れることができる』というもの。

ロストから復活した個体が稀に取得すると言われるスキルだが……まさか一発で取得するとは。それだけ彼女の想いが深いということなのだろう……。

ギョツとカードを握りしめて、言う。

『ああ……。俺も、もうあんな目には遭わせない』

『ニヒヒ！ それじゃあこの試合もチャッチャと勝って、あの馬鹿とイライザの復活資金を稼いでやらないとね！』

メアと笑みを交わし、相手選手の方を見ると、なぜか相手は未だ

カードを召喚せず、笑みを浮かべてこちらを静観していた。

「おーっと？　なぜか砂原選手、カードを召喚しません。どうしたのでしょうか？」

実況が不思議そうに言うと、砂原選手はこちらへと話掛けてきた。

「フッフッフ。スポーティーな人狼美少女に、妖艶な爆乳鬼娘、それにロリ系夢魔……。実に魅力的な女の子モンスターたちだが……。それだけだな。まとまりがない！」

「……なんだって？」

いきなりこちらのパーティーの批評をしてきた砂原選手に戸惑う俺。

「ただ可愛い女の子モンスターを揃えるだけなら誰でもできるといふ話だ！　いでよ！　我が僕たちよ！」

高らかに宣言した砂原選手がカードを召喚していく。

まず現れたのは、獅子の下半身と美しい女性の上半身、鷲の翼を持ったCランクモンスター……。スフィックスだった。

さ、さっそくCランクカードかよ……！

身構える俺の前で、次のカードが召喚される。

現れたのは……。古代エジプト風の衣服を身に着けた褐色肌の美少女。頭部には猫耳が生え、手には盾と見たことがない楽器のようなものを持っている。

あれはまさか……。バステトか！？

ま、マズイ。これでCランクカードが二枚目。

さっそくCランクカードの数で押されてしまった俺は一瞬だけ焦るも、すぐに落ち着きを取り戻した。

いや、まだ大丈夫だ。ユウキは、スキルを駆使すれば十分に二枚のCランクに立ち回れる力がある。

そもそも、キャットファイトでの平均的なCランクカードの割合は1〜2枚。想定範囲内だ。

……そんな俺の余裕も、次のカードを見た瞬間すべて吹き飛んだ。

「なッ……!？」

砂原選手が呼び出した最後のカード。それは、圧倒的な気配を放つ褐色肌の妙齡の美女であった。

これは……蓮華が吉祥天になった時のものと同質の……。

明らかな神の気配に冷や汗を流しつつ、敵の正体を探る――までもなくその正体に思い至った。

なぜなら、そのカードは冒険者になる前から、いつかは欲しいと思っていた憧れのカードだったからだ。

まず目を引くのは、人間ではありえぬほどの巨大な乳房であった。爆乳という言葉では言い表せぬほど豊満な乳房は、まさに牛乳うしちち。それを証明するかのように女性の耳は牛のそれで、頭部には牛の角が生えていた。

エジプト風の衣装、大地母神の特徴である豊かな乳房、牛の角の間に浮かぶ太陽円盤……。

間違いない……敵の正体は、Bランクモンスターのハトホルだ。

くう……実際に目にするとなんと凄まじいおっぱい……じゃなくて、威圧感だ。Bランクでも相当高値のハトホルを、なぜ新人が……。う、羨ましい……!

い、いや、それは関係ない。今この場に、Bランク一枚とCランクが二枚いるという事実がすべてだ。

これは、不味い。不味すぎる……。

『砂原選手が召喚したのは、まさかのBランクモンスター！ ハト

ホルだあああ！ 全女の子モンスターの中でもトップクラスのおっぱいを持つ、超人気カード！ 残りの二枚もスフィックスとバステトのランクカード！ 新人とは思えない高ランクパーティーです！」

『うーん、これは北川選手厳しいですね。座敷童を外してきたのが裏目に出たかな？』

実況席が何やら言っているが、まったく耳に入っていない。唯一おっぱいという単語が聞こえた程度だ。

そうして動揺を露にする俺に、砂原選手が不適に笑う。

「フツ、どうだ、このエジプト系美少女パーティーは！ 何のコンセプトもない女の子パーティーなど、ただの烏合の衆よ！」

そんな砂原選手に、俺は反射的に反論していた。

「異議あり！ それはエジプトパーティーではない！」
「なに！？」

動揺する砂原選手へと、ビシツと指を突き付けて告げる。

「なぜなら……そのスフィックスはエジプト産ではなく、ギリシャ産だからだあーッ！」

「なん……だと……？」

愕然と目を見開く砂原選手。

「エジプト版スフィックスは人の顔にライオンの身体がついているのに対し、ギリシャ産のスフィックスは獅子の身体に美しい女性の上半身と鷲の翼を持つ！ そのスフィックスはギリシャ産のスフィ

ンクスだ！ すなわち、そのパーティーはエジプトパーティーではない！！」

「ば……馬鹿な。スフィンクスはエジプトのモノだけじゃなかったのか……」

よろよろと後ずさる砂原選手。そんな彼を見て俺は内心でほくそ笑んだ。

ククク、動揺しろ、動揺しろ……！

俺は、少しでも勝ち目を増やすため必死だった。これで砂原選手がカードを引つ込めるとまではさすがに思っていないが、少しでも隙が生じればそれでよかった。

『おおつとお？ これは突然の舌戦が始まったあー！ モンコロでは珍しい光景です！ さて、砂原選手、なんと言い返す！』

実況がそう煽り立てるが、砂原選手は思いのほか動揺が大きかったようで目を泳がし何も言い返してこない。

そんな彼へと、スフィンクスが綻るような眼を向ける。

「マ、マスター……私は、このパーティーにはダメなのですか？」

「……ッ！ いや！ そんなことはない！ 北川選手！」

そのスフィンクスの眼差しに、砂原選手は自分を取り戻すところを力強くにらみ返してくる。

「このスフィンクスは確かにエジプトがルーツではないかもしれない。だが、可愛ければそれでいい！」

「ッ！ そ、それは……」

生半可な言い訳だったら論破してやると備えていた俺だったが、そのド直球な反論になんの言葉も返すことができなかった。

最初に可愛いだけでまともがないと言ってきたのはお前の方だろ、とか言いたい気持ちもあったが、俺はそれを言うことはなかった。

なぜなら、可愛ければそれで良い、というのは俺たちのような女の子マスターのマスターたちにとって絶対の真理であったからだ。

『おーっと、ここで北川選手、完全に論破されてしまったあッー！その通り、ここは女の子マスターの聖地、キャットファイト！可愛ければそれで良いのだあー！』

実況がそう言うのと、会場に拍手が起こった。

砂原選手がこちらへと頭を下げてくる。

「北川選手、最初にそちらのパーティーを可愛いだけと言って申し訳なかった。可愛ければ、それでいい。そのことに気づかされたよ」

そう言って頭を上げた砂原選手の目には、もはやなんの迷いもなかった。

……動揺させようとして、逆に落ち着かせてしまったか。

策士策に溺れるという奴か。

だが、まだ試合にまでは負けたわけではない。勝負には負けたが、試合には勝たせてもらう。

「行くぞッー！」

砂原選手のその声を合図に、戦いが始まった。

第十九話 異議あり！（後書き）

書籍一巻本日発売！！！！

ここからは最終話まで毎日更新です。

よろしくお願いします！

二章後半の最終話という意味です。紛らわしくて申し訳ない！
モブ高生はまだまだ続きますよ。

第十九話 異議あり！

『ユウキ！』

俺の意図を正確に読み取ったユウキが、瞬間移動と錯覚するほどの速さで砂原選手の背後へと移動する。

開幕早々のダイレクトアタック。ランクで圧倒的差がある以上、これが最短最善の方法となる。速攻戦略は観客からのウケが極めて悪いが、今回ばかりは仕方がない。

そんな思いからの速攻であつたが……。

「なっ！」

砂原選手を守るように現れたピラミッド型のバリアが、ユウキを阻む。二度、三度と追撃を行うが、バリアはピクリとも揺るがない。モンコロ側が配る防御用の魔道具とは違うエフェクト。あれは……。

「ふ……ま、まさか速攻でダイレクトアタックを狙ってくるとはな……正直、ビビったよ。だがッ無駄だッ！ ファラオである俺は、『王の乳母』たるバステトによって常に守られているのだからなあ」

砂原選手が、冷や汗を拭いつつ、自慢げにそう解説してきた。

……なるほど、あれはバステトのスキルだったか。大方、バステトがいる限りマスターへのダイレクトアタックを防ぐとか、その辺

りの効果なのだろう。

チツ……、単にエジプト系を集めたというだけではなく、その役割までしっかり考えているようだな……。

しかも、どうやらバステトの効果はそれだけではないようだった。

『マスター！ コイツら夢への誘いが効かないよ！』

こっそりと眠りの状態異常を仕掛けていたメアが、リンクを通じてそう伝えてくる。

バステトはファラオの守護者であり、人々を病魔から守る女神。単純にバリアを張るだけでなく、パーティーの状態異常を防ぐ効果もあるというわけか。

ハトホルのBランクというインパクトに目が行っていたが、勝利への鍵はバステトの攻略にありそうだな……。

「こんどはこちらの番だ！ かかれ！ 我が僕たちよ！」

砂原選手の号令と共に、三枚のカードが一斉に動き出す。

スフィックスがその巨体では想像できないほどの俊敏さでこちらへと迫り、その後方からハトホルが右手を構えて魔法の詠唱を開始。バステトは……砂原選手の傍で待機している。

様子見か、あるいはあのバリアは他の行動をしている間は使えないのか……。いずれにせよ、注意だけは払っておく。

まずは、ドスドスと足音を立てて迫りくるスフィックスの対処からだ。

『鈴鹿、頼む』

『あゝ、やっぱり私ですよねえ。ま、仕方ないかあ』

名指しにされた鈴鹿が、億劫そうに前へ出る。

スフィンクスは、その獅子の下半身も含めればアフリカゾウ並みの体格を持つ。また、DランクとCランクということで戦闘力にも大きな差があった。

観客からは明らかに無謀な戦いに見えることだろう。だが――。

「……フッ！」

「なッ！？」

メアの放った光弾がスフィンクスの顔を襲った瞬間、その隙をついて鈴鹿が見事にその巨体を投げた。

ドシンツと土煙を巻き上げながら、スフィンクスが地面へと叩きつけられる。

ダメージはあまり無さそうだったが、精神的には別だ。格下相手に転がされたことに、目を白黒とさせている。

このカウンターの絡繰りは、もちろんリンクにある。

まずはシンクロリンクにより、鈴鹿の戦闘力を底上げ。次にテレパスリンクでメアと連携し、発動の早い初等攻撃魔法でスフィンクスの視界を潰してバランスを崩し、それをとっかかりに鈴鹿の柔術で投げる――。

それが、今の一連の攻防の流れであった。

『おおつとお！？ これはどうしたことだ！ 無謀かと思われたCランクとDランクのぶつかり合い！ しかし、地に倒れ伏しているのはCランクのスフィンクスの方だあ！』

実況がなにやら騒いでいるが、まだこれで終わりじゃない。

鈴鹿を動かさず、倒れ伏したスフィンクスへと追撃をする。

高々と振り上げられた右足が、断頭台の刃のごとくスフィンクスの喉元へと叩きこまれようとした――その時。

「ッ!？」

敵後方から飛来した岩の槍が鈴鹿の身体へと突き刺さった。

『なにいいッ! 北川選手の女鬼人がスフィックスへと追撃しようとした瞬間、ハトホルのアースピアースが決まったあ! 北川選手、これは痛い! ただでさえカードのランク差がある中、さっそく一枚落ちてしま……ってない!? 串刺しにされた鬼人がいつの間にか丸太に変わっているうう!!』

実況の驚愕の声に、会場の視線が岩の槍が突き刺さった丸太へと集中し、そしてそこから離れたところで鈴鹿を抱きかかえるユウキへと移る。

『これはッ! 空蝉の術! どうやら北川選手のライカンスロープは忍術スキル持ちのようですね。しかも空蝉の術が使えるということとは少なくとも中等忍術以上! これは素晴らしいですよ!』

『北川選手の新カードはクノイチでしたか! なるほど、北川選手が彼女をお披露目してきた理由がわかってきましたね!』

忍術スキルは、日本のローカルスキルということもあってモンコ口人気も高い。とりわけ、女の子モンスターの忍術スキル持ちはクノイチと呼ばれ、初等忍術スキルであっても市場価格が倍になるほどの価値があった。

これで蓮華がないことの違和感が消えるわけではないだろうが、少なくともユウキを目立たせたかたという言い訳は通るだろう。

「あゝ、助かりましたよお。レアスキル持ちは羨ましいですねえ」「まるで感謝されている気がしない……」

ぐいつとユウキの顔を押しつけて立ち上がる鈴鹿に、釈然としない顔をするユウキ。

『……でもマスター、どうするの？ ランク差もあるし、状態異常も効かないし、ちょっとやばくない？』

そこで、メアが焦りを滲ませた様子で問いかけてくる。

『ああ、まあ……確かにちょっとヤバイが、付け入る隙はある』

この攻防で気づいたことが二つある。

一つは、相手側の連携の拙さだ。相手側のカードは、連携を取ろうという意思は感じるものの、どこか個々のカードで動いている印象を受ける。

つまり、リンクを使っていないカードの動きだ。

実況は、砂原選手が冒険者になってまだ半年だと言っていた。

これは俺とほぼ同じキャリアということになるが、師匠曰く「半年でリンクの初歩であるテレパスまで行ければかなり早い方」らしい。

基本的にリンクは思春期の時期が一番神経が伸びやすいらしいが、俺は同年代と比べても格段に成長が早いのだと言う。

どんな奴にも、一つは取柄があるということだ。

それに……、と砂原選手を観察する。

大体……二十代後半から三十代前半と言った感じが。

師匠曰く、「リンクの成長は三十歳前後で止まる」らしい。テレパス程度なら年齢に関係なく身に着けることが可能らしいが、シンク以上の技術はアムリタなどで若返らない限り、絶対に習得することができないのだと言う。

つまり、砂原選手はリンクが使えないか、使えても使いこなせていない可能性が高い。

リンクによる連携力の差、それが一つ目。

二つ目は、ここに至るまでバステトに動きが見られないことだ。単にマスターの傍でガードに徹しているのか。だが、バリアスキルがあるのに傍に控えさせるのは、やや不自然。少なくとも後方から支援させる程度のことは普通させるはず。それすらないということとは、あのバリアスキルは近くでないと使えないか……バリアを使っている最中は他の行動ができないかの、どちらかだ。

……砂原選手め、さては最初のユウキの奇襲によほど肝を冷やしたと見える。こうまで露骨にバステトをガードに徹しさせるとは。

あの奇襲もまんざら無駄じゃなかったらしい。バステトに戦力を割かずに済むのなら、スフィンクスに鈴鹿とメアの二枚を当てることができる。そうしてユウキにハトホルの相手をしてもらえば、当面は互角の戦いができるはずだ。

しかし……最初はB×C×Cの組み合わせにふざけんよ！ と思ったが、考えてみればこの状況も悪くない。

モンコロと言う命の危険がなく、カードのロストの可能性も低い場において、安全に格上との戦いを経験できるからだ。

問題は、真眷属召喚を試すかだが……。

「やめておくか……」

あまりメディアの前で晒したくないスキルだし、何より獵犬使いとの戦いにおいて切り札となりうるこのスキルをここで使うのは馬鹿らしい。

また、キャットファイトの女の子カード限定と言う縛りの中で、眷属とは言え男のライカンスロープを呼ぶのはギリギリアウトになるんじゃないかという懸念もあった。

使うのは、高等忍術と縄張りの主。限界突破は……場合によっては、という感じが。

デビュー戦の砂原選手には悪いが、獵犬使いとの予行演習として全力で当たらせてもらおうとしよう

——そこからの戦いは、若干の膠着状態となった。

俺の予想通り、バステトはバリアスキルを使用している間は他の行動ができないらしく、戦いはスフィックスVS鈴鹿とメア、ユウキVSハトホルという構図になった。

あちらと違うのは、スフィックスとハトホルが個別に戦っているのに対し、こちらはバラバラに戦っているのに見えて実はしっかりと三枚で連携を取っていることが。

それでもランクによる戦闘力の差は大きく、こちらとしても必死で食い下がってなんとか拮抗状態を保っている状況だった。

ただ、それが観客たちには緊迫感のある戦いに見えるらしく、会場はなかなか盛り上がってはいた。

「しかし……」

と、小さく呟く。予想以上にユウキがハトホルに食い下がっているな……。

事件の調査で忙しかったのと、獵犬使いの襲撃を警戒して経験値稼ぎに行けなかったこともあり、彼女の戦闘力はCランクの成長限界に毛が生えた程度となっている。

本来であれば太刀打ちできない戦闘力の差であるはずだが、今のところユウキは、純正のBランクであるはずのハトホル相手に互角に渡り合っていた。

それどころか、時折鈴鹿とメアたちに対してフォローをするほどの余裕があるほどだ。

元々、後衛型のハトホルと前衛型のユウキとでは、一対一ではユウキの方が有利ではあるのだが……それを差し引いても彼女は健闘

していた。

それに、ハトホルが中等攻撃魔法までしか使っていないのも気になるところだ。

憧れのカードであったハトホルのステータスについては、当然頭に入っている。俺の記憶が確かならば、ハトホルは高等攻撃魔法スキルを先天スキルにもっていたはずなのだ。

にもかかわらず、ここに至っても使ってこないということは……。

「やはり……零落スキル持ち、か？」

……もともと、キャリアのない砂原選手がハトホルという高ランクカードを持つていたことについては疑問に思っていたのだ。

元社会人で学生より資金に余裕があるとはいえ、ハトホルの値段は十億以上。かなりの資産家であっても購入は難しい額だ。

となれば、答えは一つ。俺と同じ……ギルドのカードパックで当たりを引き当てたのだ。

ギルドのカードパックには、宝くじより低い確率であるが、Bランクのカードが入っているという。

砂原選手が、ギルドのパックでハトホルを当てたというなら……なるほど、あの奇抜な恰好も頷ける。

俺もそうだが、最初に手に入れたレアカードに影響されるというケースは多い。

どうしても、そのカードを中心にパーティーを組み立ててしまうのだ。

……まあ、カードに影響されて自分のキャラ変をしてしまうというのはさすがに行き過ぎではあるが。

また、俺や砂原選手が冒険者になった半年前は、普通にパックに零落スキル持ちが入っていた時期だ。

あのハトホルがパックから出たもので、零落スキル持ちだとすれば、高等攻撃魔法スキルが中等スキルにランクダウンしていてもお

かしくない。

Bランクの零落スキル持ちは戦闘力のダウンもCランクよりも大きいと聞く。

零落スキルによる戦闘力ダウンは、ランクによって異なりDで50、Bだと200もダウンするらしい。

ハトホルの成長限界は1400。そこから200ダウンするなら、シンクロリンクによるブーストと前衛と後衛の相性さもあって、ユウキでも渡り合える差だ。

しかも、幸運なことに昨日は満月。ユウキのポテンシャルはほぼ最高潮と言って良い。

さらにユウキには人狼形態という切り札もある。

これは、マジで勝てるかも……。

俺がそう淡い期待を抱いたその時。

「さすがにやるな、北川選手！　だが、様子見はここまでだ！　使え、スフィンクス！」

「はい！」

ついに、砂原選手が、動いた。

スフィンクスがメアへと向かい、口を開く。

「――そのエンプーサへ問う」

マズイ……！　嫌な予感が背筋を貫く。

スフィンクスと聞いて日本人の頭に浮かぶのは、謎かけをしてはその間に答えられぬものを食い殺してしまうという逸話だ。

そのスキルについて詳しくは知らないが、謎を解けぬものに何らかのダメージを与えるものであることは想像に難くない。

これが有名な『朝は4脚、昼は2脚、夜は3脚で歩くものは何か』というものだったら話は早いが、そう簡単にはいかないだろう……。

スフィングスの謎かけのように、答えや仕組みが知れ渡っているスキルが、原典そのままの形で使用されることはまずないからだ。少なくとも、質問の内容は変えてくるはず……。スフィングスがその美しい顔に嗜虐的な笑みを浮かべる。

「人生と掛けまして、戦闘と解きます。その心は？」

あ、あれ！？ ちょっと想像とは違う感じ！ いや、確かにそれも謎かけだけど！

「十、九、八……」

しかも時間制限付きかよ！

「ええっと、ええっと……」

目を泳がせ、右往左往するメア。

『ど、どうしようマスター！ わからないよ！』
『頑張れ、メア！ 俺たちではおそらく解答権がない！』

名指しでメアを指定した以上、他者が答えを教えた瞬間、なんらかのペナルティーが下ることは間違いない。

ここは、なんとしても彼女に知恵を絞ってもらうしかないのだ。

「五、四、三……」

「あ、ああ……！ ど、どちらも負け犬は辛いでしよう！」

追い詰められたメアがあてはずっぱうに答えを口にするが……。

「馬鹿め！ 答えは……その身で知るが良い！」

スフィックスがニタリと嗤う。その瞬間、メアの脇腹が何者かに食いちぎられたように抉れ、血が噴き出した。

「ガハツ……！」

「メア！」

「うう……マ、マスター」

「待ってる！ 今戻す！」

メアの傷は大ダメージではあるが、ロストに繋がるほどの傷ではない。しかし回復魔法の使い手がない以上、念のためにもうカードに戻すべきだ。

そう考え彼女を戻そうとすると、メアから待ったがかかった。

なんだ……？

「ま、待って……」

「なんだ！？」

「こ、答えは、なに？」

「え？ 今聞く？ ……えっと、たぶんだが、どちらもスキを見つけるのが重要です、だと思っぞ？」

「な、なるほど……じゃなくて、待って！ 私はまだ、ギリギリだけど余裕がある！ あのスキルを使わせて！」

あのスキル……人を呪わば穴二つ、のことか。だが……。

俺が躊躇していると、メアから燃え盛るような激情が流れ込んできた。

「何のためのスキルなの！？ お飾りとしての役割しかないなら、もう二度と復活させなくて良い！ アイツみたいな特別な何かが無

くても……メアは、隣に立っていたい！」
『メア……』

血を吐くような叫び。リンクからは、彼女の蓮華に対する劣等感と……それ以上の友情を感じ取ることができた。

『……いいじゃないですか、やらせてあげれば』

そう言ってきたのは、一人でスフィックスの猛攻を凌ぎ続けている鈴鹿だった。

『それとも……特別ではない者たちには、ちっぽけなプライドを持つ権利もないと?』

『いや……』

俺は首を振り、メアへと言った。

『わかった。これからは、使えるものはすべて使わせてもらう。……いいな?』

『もちろん!』

メアが力強く頷き、その身に黒い光を纏う。人を呪わば穴二つ。対象は——もちろんバステトだ。

「なっ! がふっ!」

「バ、バステト!？」

突然脇腹に深い傷を負ったバステトに驚愕する砂原選手。

「へへ、ざまー……みる」

そう言い残し、光の玉となってカードへと戻るメア。
よくやった。あとは俺たちに任せておけ。

『鈴鹿、ユウキ!』

『……ま、特別じゃない割には頑張ったんじゃないですか?』

『任せてください!』

メアの献身的犠牲により、パーティーの士気が上昇する。それはシンクロ率の上昇という形で現れた。

バステトの突然のダメージに動揺した隙をつき、鈴鹿がスフィンクスを投げ飛ばす。さらにはそのまま右目を手刀で切り裂いた。

「く……! まだだ!」

だが、砂原選手もただ見ているだけではない。一瞬だけ動揺したものの、すぐに的確な判断を下す。

「ハトホル! バステトを癒せ!」

「はあい…… 『母なる愛の雫』」

周囲に甘いミルクの香りが満ち、苦し気に血を流すバステトの元へと光り輝く液体が降り注ぐ。

ハトホルの先天スキル…… 『母なる愛の雫』だ。

効果は、単体の完全回復。傷も、体力も、魔力も、スキルの使用回数まで、完全に回復させることができる。

一見、蓮華のアムリタの雨の下位互換とも思えるスキルだが、アムリタの雨と異なり一日に数回使うことができるのが強みだった。

……もつともスキルの使用回数については細かい制限はあるようだが。

せつかくメアがわが身を犠牲にして与えてくれたダメージが、みるみるうちに回復していく。

「……フッ」

それを見た砂原選手がにやりと口端を吊り上げ――その笑みが凍り付いた。

回復したばかりのバステトの後ろで、ユウキがその右手を大きく振りかぶっていた。

ハトホルが通常の回復魔法に加え、完全回復のスキルを持っていることは知っていた。憧れのカードだったからだ。故に、バステトにダメージを与えたとしても砂原選手がすぐにそれを癒すだろうことは予想していた。

ならば、回復した直後に追撃ができるようにするまでのこと。

そして、アムリタの雨と異なり何度も使えるとは言っても、さすがに『母なる愛の雫』にもクールタイムくらいは存在する。

連続使用は不可能だ。

『やれ、ユウキ』

「オオオオオッ！」

ユウキの渾身の一撃が、バステトの胸を貫く。

ここからさらに追撃してロストさせることもできるが……。しかし俺はそこまではせず、一度ユウキを下げた。キャットファイトでは、相手のカードはロストまではさせないのがマナーだ。

砂原選手も見逃されたことがわかったのか、悔しそうにしつつも素直にバステトをカードに戻す。

『母なる愛の雫』はクールタイムで使えないとはいえ、ハトホルは通常の回復魔法も持っている。こちらが見逃したにもかかわらずそれを使ってくるようじゃあ今度は本当にロストさせなくてはいけな

いため、砂原選手が冷静で助かった。

「……………」

一度距離を取り、砂原選手と睨みあう。

これで、砂原選手のダイレクトアタックを防ぐ術は失われた。：

…とはいっても、条件はイーブンに戻っただけだ。互いにカードは

二対二。

あとはどうやってダイレクトアタックを叩きこむかだが……そのための道筋はすでに見えていた。

『ユウキ！』

『はい！ 分身の術！』

「なッ！？」

突然五人に分裂したユウキの姿に驚愕する砂原選手。

五体のユウキたちが一斉に砂原選手へと向けて走り出す。

「クッ！」

ハトホルがユウキたちへと弾幕を放つも、ジグザクと動き狙いが定まらない。偶然当たった球もその身体をすり抜けていく。

分身の術で生み出された分身は、実体を持たないのだ。

「クッ。ならば……………！」

迫るユウキたちを防ぎ止められないと察したハトホルは素早く狙いを変更。俺へのダイレクトアタックを狙ってきた。

敵ながら良い判断だ。だが……。

「馬鹿な……!?!」

ハトホルの放った弾丸は、俺の身体をすり抜けていった。それを『地中』からリンクを通じて見ていた俺はニヤリと笑った。試合開始から会場に立っていた俺は、ユウキが生み出した分身に変化の術を被せたデコイだった。

本物の俺はダイレクトアタックを警戒し、ユウキが土遁の術で生み出した地下空間に隠れていたのだ。そして……。

『これで終わりだ、ユウキ!』

地上の分身を囷に土遁の術で砂原選手の元へと向かっていたユウキが、彼の背後へと躍り出た。

パキインという甲高い音と共に砂原選手を守るバリアが砕け散る。

それは、試合の終了を意味していた。

『決着うううううう! さすが北川選手! カードのランク差を覆して逆転勝利! 先輩の意地を見せました!』

実況の声が響き渡り、観客たちの拍手が会場へと満ちる。

終わった……。

地中から出た俺は、深い安堵の吐息を吐いてしゃがみ込んだ。キツかった……。まさか三ツ星クラスの試合でBランクが出てくるとは……相手がリンクをまともに使えていたら間違いなく負けていただろう。

なんとか勝ててよかった……。

その時、フツと影が差した。見上げると砂原選手がこちらへと手を伸ばしていた。

「フッ、いい試合だったぜ。お前の、カードへの愛を感じたよ」
「……ああ、そっちも良いエジプト愛だったよ」

俺は相手選手と硬い握手を交わした。

こうして、俺はなんとか蓮華たち不在の中、モンコロでの勝利を勝ち取ったのだった。

第十九話 異議あり！ (後書き)

【Tips】リドルスキル

相手に謎解きや試練を課すスキルをリドルスキルと呼ぶ。スキルは概ね逸話や伝承に沿って行使されるが、その解答や攻略法が広く世間に知られている場合、出題の内容や出し方も変わる。これは、リドルスキルが知識を求めているのではなく勇気や知恵を試すためのモノだからである。

リドルスキルは発動に条件がある分、その効果が強力なモノが多い。

第二十話 味方、中立、敵（前書き）

さすがに毎日更新だと全部の感想は返しきれなかった……。

返せなかった人はごめんなさい。ちゃんと一喜一憂しながら全部読んでます。

ありがとうございます。

第二十話 味方、中立、敵

試合明けの学校。

俺は欠伸をしつつ通学路を歩いていた。

砂原さんとの戦いはなかなかの激闘であったため、昨日一日休んでもイマイチ疲れが抜けきっていない感じだった。

どうにも気怠い気分でトロトロと歩いていると……。

「おーっす、師匠。おはようさん」

「おー、小野。おはよう」

後ろからポンと肩をたたいてきた小野と、挨拶を交わす。

「モンコロ、見たで。面白かったな。……あのクノイチはどうやって手に入れたん？」

「それは秘密だな」

「なんや、ケチやなあ。ま……ええわ。それで、調査の方は進んどうらんか？」

「いや……」

俺が首を振ると、小野が一つ頷き、カバンをあさり始めた。

「一応な、僕の方でも事件について調べてみた」

そう言って小野が渡してきたのは、クリアファイルに入れた書類の束だった。

数十枚にも及ぶルーブリーの束には、迷宮で行方不明になったものたちの名前や年齢、簡単な経歴、SNSの書き込みなどがぎっしりと書かれていた。

「これは……」

「行方不明者搜索クエストのリストと合わせて、SNSとかで知人がFランク迷宮から帰ってこないって言うのを一通り調べてみた。行方不明者のすべてがクエスト出されとるわけやないからな。で、この事件の被害者と思われる者たちの総計は、わかる範囲だけでも……百人を超えとった」

「百……」

思わず絶句する。東京都で出されたクエストの数は、十数件程度で、クエストに出されていない、あるいは取り下げられた分を含めて三十人は超えていないと思っていた。

だが、この数字は……。

「もしかして……東京都だけじゃなく、全国的に被害者が出てくるのか？」

「ああ、そういうことや。最初に被害者らしき者が出始めたのが、一年以上前。当初は事件だか事故だかわからない頻度だった被害者の数が激増したのが、凡そ三か月ほど前から。そのほとんどが関東に集中してる。」

ここら辺から、クエストの数に疑問を抱きだした冒険者の間で微妙に噂になりつつあったみたいやな。ちなみに、クエストが出された数は被害者の三割程度。まあクエストもタダやないから……しかも冒険者からしてみればボランティア要素が強くて必ず受けてもらえるとは限らんし」

俺たちが思っているよりも、表沙汰になっていない被害者が多か

ったということか……。

しかし三桁の死者が出てなお犯人の情報が出ていないというのは、もはや事件を通り越して怪奇現象だ。

全国的に被害が出ているということは、それだけ大規模な組織である可能性が高い。

にもかかわらず一切の尻尾を掴ませていないとなると……もう新種のイレギュラーエンカウトと考えた方がしっくりくるレベルだ。俺たちが追っているモノは……本当に人間なのか……？

「それで……や」

小野がクリアファイルをめくり、付箋をつけたページを開く。

そこには数名の冒険者の情報が載っていた。それまでの被害者と違うのは、そのキャリアだ。彼らは皆、三ツ星冒険者であった。

「あまりの被害者の数に、これはもしかするとFランク迷宮だけじゃなくて他のランクでも被害者が出てるんじゃないかと思って調べてみた。そしたらEランク迷宮では被害者が出ていないようやったけど、Dランク迷宮で少しだけそれらしいのが出てきた」

……Dランク迷宮ともなると、それまでの迷宮と異なり一気に事故の確率が高まってくる。場合によっては、救難信号を送る暇もなく死ぬことすらあり得るだろう。

故に、一見すると不慮の事故なのかこの事件の被害者なのかの見分けはつかない。

しかし……。

「Dランク迷宮での行方不明、これは決して珍しいことやない。だが、その冒険者がカードも魔道具も一切失い、機械類も破壊されているとなると話は変わってくる……そうやる？」

「ああ」

所有者登録をしたカードは、マスターが死んだ時点で消滅する。故に、死亡したマスターが一枚のカードも持っていないというのは不自然なことではない……と一見思うだろうが、実は違う。

なぜならば、道中で手に入れたすべてのカードを所有者登録する冒険者は滅多にいないからだ。

カードや魔道具の所有者登録には、自身の血液が必要となる。必要な血液は一滴程度で済むが、いくら安物のポーションで治るとはいえ、すぐに手放す予定のカードのためにブスブス針を刺すモノ好きは少ない。

そのため、死亡した冒険者の懐には所有者登録がされていない全くの未使用のカードが眠っている場合が多い。

特に、救難信号を送れないほど緊迫した状況で死んだのなら猶更だ。

それに加えて、魔道具もなく機械破壊を受けているとなると、これはもう確定だった。

ちなみに、カードや魔道具が失われていたという一般人が知りえぬ情報を小野がどうやって知りえたのかと言うと、「死んだ息子が全くカードや魔道具を持っていなかった。遺体を発見した冒険者が盗んだに違いない」といった遺族のSNSへの投稿が情報源らしい。

三ツ星冒険者の遺品ともなると、家族としてもなかなかの遺産となりえる。それが全くないともなれば、なるほど、家族も疑問に思うだろうし、発見者や他の冒険者を疑うことだろう。場合によっては裁判にも発展するし、そうなれば公式の記録も残りやすい。

なるほど、こういう調べ方もあったのか、と俺は感心するしかなかった。

しかし……。

「やはり、Dランク迷宮でも被害者は出てたのか……」

これで、俺以外にも襲われている「例外」がいることがはっきりした。

……気になるのは、この被害者たちも蓮華のような特別なカードを持っていたのか、ということである。

織部は、俺が襲われた理由は俺しか持っていない「なにか」を狙ったのモノと推理した。俺はそれに蓮華を連想した。

だが、こうして他にも被害者が出ている以上、猟犬使いが狙っていたのはそもそも蓮華ではない、あるいは蓮華のような特別なカードは他にもあるということになる。

蓮華以外に俺が襲われる理由が思いつかない以上、理由は後者と思われるが……それがどんなカードだったのか、そして猟犬使いがそれを持つことをどうやって知ったのか。

謎は深まるばかりだった。

「……一応、意味があるのかないのかわからんけど、被害者の年齢や性別とかの統計も取って見た。年齢は二十代の男が一番多いけど……これは冒険者に多い年齢層やからあんま意味ないな。登録したばかりの新人が八割以上を占めとるから、新人を狙い撃ちにするのは間違いないみたいや。新人以外の被害者は冒険者サークルとかに所属しとるのが多くて、偶然ソロで潜ってるところを狙われたみたいやな。迷宮に慣れて一人で潜ったところを、って感じかもな」

「……冒険者サークル？」

俺はその言葉にひっかかりを覚え、パラパラとクリアファイルをめくってみた。

……たしかに、登録したばかりの新人を除けば、襲われているのは冒険者サークルに所属しているものばかりだ。

だが、これはおかしい。もし新人以外の被害者が、偶然ソロで潜っているところを不幸にも狙われているのだとしたら、そこには冒

険者サークル以外の者ももつと混じっていなくてはおかしいからだ。つまり、犯人は新人に加えて冒険者サークルに所属している者もメインターゲットにしているということになる。

それはなぜか。ゾクリ、と閃きと悪寒が背筋を走った。

——ソロで潜る日程を掴みやすいからだ。

犯人は、何らかの方法で冒険者サークルの新人が、先輩の指導が外れる時期を調べているのだ……！

「小野……一つだけ調べて欲しいことがある」

「なんや？」

「この被害者たちの冒険者サークルが、星母の会と繋がりがあったか調べるってできるか？」

俺の問いに、小野はにやりと笑った。

「それが……重要なポイントなんやな？」

「ああ」

「おっしゃ！任せとけ。時間はちよつとかかるかもしれんけど、調べとくわ」

頼もしい。クラスメイトたち全員のSNSのアカウントを把握していると言われ、陰でネットストーカーと気持ち悪がられつつも恐れられている小野だが、一度味方につければこんなにも頼もしいとは……。

俺はつくづくコイツが味方で良かったと思うのだった。

そうして小野と話しながら教室へと近づいて来た頃。

俺は徐々に違和感のようなものを感じつつあった。

俺の自意識過剰でなければ……なのだが、すれ違う生徒たちが俺

たちの方を見ている気がするのだ。

モンコロに出てからというものの、俺は校内においてはちょっとした有名人だ。

故に視線が集まること自体は珍しいものではないが、今日の視線はいつものものとは微妙に違う気がした。

「……………なんか妙な雰囲気やな」

俺と同じことを思ったのか、小野が小さく囁いてくる。

その時、女子トイレから出てきた女子とばったり目があつた。

金髪のショートカットにこんがりと焼いた肌、ばつちりと施されたメイクと片耳にだけつけられたいくつものピアス、といういかにも不良然とした恰好の美少女。

我がクラスの女子ナンバー2、一条かおりだ。

俺たちと目が合った一条さんは、ニツと笑い話しかけてきた。

「よゝ、北川、小野。おはよ」

「あ、ああ、おはよう」

獅子堂グループの奴から挨拶してくるなんて珍しいな……………と思いつつ挨拶を返すと、

「……………おはようさん、なんや珍しいな、そっちから挨拶してくるなんて」

小野も同感だったのか、どこか棘のある口調でそう返した。

「……………別に？ アタシだって顔を合わせば挨拶くらいするけど？ むしろそっちの方が普段避けてんじゃね？ ………………そんなことよりさ」

一条さんはそう軽く小野をあしらうと、一転して上機嫌に俺へと笑みを向けてきた。

「モンコ口見たよ。北川の試合初めて見たけど、強いんだね。やるじゃん」

「え？ あ、ああ、ありがとう」

「でさ、今度一緒に遊びに行かない？ もち、二人で」

「あ、え？」

突然のお誘いに戸惑っていると、一条さんは一步踏み出し俺との距離を詰めてきた。

軽く前かがみになり、上目遣いでこちらを見つめ……。

「ね、どう……？」

そう、囁くように問いかけてくる。

「う……」

ふわりと香水の匂いが鼻をくすぐり、深い谷間をみせつけるかのように大胆に開かれた胸元に、思わず視線がくぎ付けとなった。

やっぱ、一条さんって牛倉さんほどではないけど胸デカいよな……
… 太ももムチムチしているし、男好きするカラダしているとい
うかなんというか。……って、待て待て待て！

ハッ和我に返る。これは、明らかに罠の類だと危機センサーが警告していた。

なぜ、俺たちカーストトップグループと緩い敵対状態にある彼女が、突然俺を遊びに誘ってくるのか。

しかも、これまで一条さんと俺との間には何の交流もなかったのだ。精々、目が合った時に挨拶を交わす程度。不自然極まりなかつ

た。

「えっと……なんか突然だな」

「そう？ まあそうかもね。でも、前々から北川のことはちょっと良いなと思ってたんだよね」

「師匠は金持つとるからな」

小野が茶化すようにそう言うが、その眼は笑っていなかった。

「小野は関係ねーから引つ込んでてくれない？ ……で、どう？」

「あゝ……ごめん、今はちょっと立て込んでてさ」

俺はそういつて頭を下げた。

一条さんを警戒しているというのも理由だが、立て込んでいるというのも嘘ではない。

今は、女の子と遊びに行っている余裕はなかった。

「はあ……そう。ま、仕方ない、か」

そんな俺のお断りに、一条さんはため息交じりにそう呟いた。

それが思いのほか本当に残念そうだったので、俺は軽い罪悪感を覚えた。

「あの、さ」

「一応言っておくとさあ」

俺が言いかけた言葉を遮るように一条さんが言う。

「実のところ、アタシはスクールカーストとか結構どうでも良いんだよね。獅子堂のバカは猿だからお山の頂点にいないと我慢できな

いみたいだけど、アタシは適当に楽しく過ごせれば良いっつーか。実は四之宮とも周りが思ってるほど仲悪くねーし。撮影現場で会ったときとか普通に話すときもあるしね。どっちかというとお互いの友達同士が相性悪いっていうか、そんな感じなわけ」

突然の独白に俺と小野が顔を見合わせていると。

「ま、それがアタシのスタンスってこと。それだけは理解しといてあゝ、ねむ……。保健室行くから先生来たらそう言っというて」

そう言い残し、一条さんは去っていった。

「……………なんやったんや、一体」

「さあ……………」

一条さんの言葉に首を傾げつつ、俺たちは教室へと入る。すると、一斉にクラスメイトたちの視線が集まってきた。

それ自体はいつもと同じなのだが、問題はその視線の質だった。

好奇の目が半分、気遣うような視線が三割ほど、そして最後に見下すような……………嘲る様な視線が二割……………。

廊下の時とは違い、顔見知りだからかその視線の質がはっきりとわかった。

気遣うような視線が俺たちカーストトップグループと仲の良い者たちで、見下すような視線が獅子堂たちと仲の良い者たちだった。

いつもと雰囲気の違いがクラスの様子に眉を顰めつつも、とりあえずいつものように挨拶を交わしつつ教室の中心部へと向かう。

今いるのは一軍半グループと神道らだけのようだった。四之宮さんと牛倉さんの姿はない。

「おはよう」「おはようさん」

「おはよう、小野、北川。……朝から悪いけど、ちょっとマズイことになってるみたいだぞ」

俺たちが挨拶すると、神道が心配そうな顔で声を潜めつつそう言ってきた。

「……なんかあったんか？ クラスの雰囲気もおかしいし」

「ああ、といつても小野じゃなくて……」

と言つて神道が見たのは、俺。

「……なんかやっちゃまったっけ？」

「いや、やらかしたつていうか……妙な噂が一昨日あたりから急速に出回り始めてるっていうか」

神道が気まずそうに頬を掻いたその時、突然会話に割り込んでくる声があった。

「よお、北川！」

自信に満ちた張りのある声。

声の方へと顔を向けると、そこには予想通りの顔があった。

「獅子堂……」

オールバック気味に撫でつけられたロン毛に、常にだれかを睨むような目つき。190センチ近い長身に、肘まで捲り上げられたワイシャツから覗く筋肉質な腕と拳にできたタコ……。

外見の節々からどこか暴力的な匂いを漂わせた青年、それが獅子^{しし}堂^{どう}。

堂剛しゅうごうという男だった。

獅子堂はその強面の顔にどこか嗜虐的な笑みを浮かべ。

「——お前、あの座敷童とかロストしたってマジ？」

そう言ったのだった。

第二十話 味方、中立、敵

周囲に聞こえるような声でそう言い放った獅子堂の言葉に、一気に教室の空気が張り詰める。

「……なんだ、突然」

なぜコイツがそれを……と思いつつそう返すと、獅子堂は楽しくて仕方ないという風に歯を剥いた。

「お前、今回のモンコロであの座敷童とヴァンパイアを使わなかっただろ？ んで、SNSとかも最近更新がねーしってことでミスってカードをロストしたんじゃないかって噂が立ってんだよ」

噂が立っている……と言っているが、おそらくその噂を積極的に流したのが獅子堂たち自身なのだろう。

そうでなければ、いささか学校中に噂が広まるのが早すぎる。おそらく彼らのグループの中に、俺のTwitterをこまめにチェックしている者がおり、最近蓮華たちの情報がなかったことを疑問に思っていたのだろう。

そこに先日のモンコロでの欠場が合わさり、確信に至ったに違いない。

「……その顔を見るにどうやらマジらしいな」

俺の顔を覗き込むように見た獅子堂が、ニヤリと笑う。

「……………モンコロの試合で座敷童やヴァンパイアを使わなかった

のは、新しく手にいれたライカンスロープを試すためや。SNSの更新が滞ってたのは、鍛錬に忙しかったから。変な邪推はすんなや」「お前は関係ねーだろ、ひっこんでろ。で、どうなんだよ？」

無言の俺を見かけて小野が庇うようにそう言ったが、獅子堂はそれを軽く一蹴するとそう問いかけてきた。

周囲をサツと見渡すと、クラス中がこちらを注目しており、どう見ても回答を拒否できるような状況ではなかった。

俺は小さくため息をつき、答えた。

「……ああ、確かに蓮華たちをロストしたよ」

「師匠……!!」

なぜ言うのだと小野が険しい顔になるが、元々俺はこのことについて何か言い逃れする気はなかった。

積極的に言いふらすつもりもなかったが、俺を逃がすために命を賭してくれた彼女たちの献身をなかったことにするつもりもまた、なかった。

――ざわり。

俺が直接認めたことで、教室にざわめきが走る。中には、スマホを取り出してSNSに書き込んでいる者すらいた。明日には学校中にこのことが知れ渡っていることだろう。

「ハハッ！ マジかよ、あーあ、モンコロの選手とか言っただけで、これでもうお前も終わりだな」

「なんでそうなんねん。師匠が三ツ星の冒険者なのは変わらんし、今回のモンコロでも活躍したライカンスロープもある。Bランクカードを持つ相手に勝ったのはお前も見ただろ」

俺を嘲笑する獅子堂に対して小野がそう反論すると、クラスの中

にも「確かに……」という空気が広がりかける。
だがそれに獅子堂はフンと鼻で笑い、冷静に言い返してきた。

「まー、確かに三ツ星冒険者という点じゃその通りかもな。だが、モンコロの選手としてのコイツはもう終わりだろ。コイツがモンコロに呼ばれてんのは、あの座敷童のインパクトがあつてこそだ。それをロストしたと知れたらもう呼ばれねーよ」

……実際その通りだった。

試合にはなんとか勝利を収めた俺だったが、試合後番組側から「次は座敷童を使ってください」と言われている。

それは、暗にモンコロの選手としての価値が俺ではなく蓮華の方にあることを示唆していた。

その蓮華をロストしたと分かれば、俺が番組から呼ばれなくなるのは明らかだった。

「結局、北川自身には華つてヤツがねーんだよ」

「……あの座敷童もヴァンパイアも名づけされたネームカードや。ロストしたとしてもいざ復活できる」

「その復活のためにどれだけ金と時間がかかんだよ。それにあのライカンスロープ。あれを手に入れるのにかなりの金を投資してるはず。また一から金を稼いであの座敷童を復活させるのにどれだけ期間がかかるんだ？ 半年？ 一年？ それまで番組側が待つてくれるとは思えねーけどなあ」

「……………」

小野が顔をゆがめて沈黙する。

実際は、ユウキのランクアップには一円の金も使っていないため、現在の資産でもなんとか蓮華だけは復活させることが可能だ。

だが、それをここで説明するわけにはいかないし、今重要なのは

獅子堂の方に説得力があるということだった。

一般的な三ツ星冒険者の収入は、二千万円から四千万円程度と言われている。ここから当然カードの経費等が差し引かれて実際の所得自体はかなり低くなるのだが、迷宮などから得られる収入はこのくらいとなる。

俺は半年間で魔石と現金だけでも三千五百万円も稼いでいるが、これはモンコロという高額な収入源があること、ハーメルンの笛のおかげで学生の身でも専業並みに迷宮を踏破できること、そして何よりも蓮華のドロップ率増加などの恩恵が大きい。

つまり、常識的に考えるなら蓮華を復活させるために一年はかかると思われるということだ。

俺が三ツ星冒険者であることは変わらないし、先日のモンコロでもユウキと言う新しい戦力を示したからクラスカーストから転落するということはないが、少なくともモンコロの選手という肩書が失われる分影響力が下がるのは確かだった。

……だが、だからと言ってここまで獅子堂が勝ち誇るほどのことでもない。

俺の影響力が落ちるからと言って、別に獅子堂という人間の価値が上がるわけではないのだ。

確かに獅子堂は高身長で細マッチョでちょい悪系のイケメンだが、女子的にはそれだけで充分なのかもしれないが、男子的には校内のヤンキーのトップと言うだけの男だ。

クラス内にも結構アンチがいるし、俺を下げたところでカーストの逆転までは至らないはず……。

そう俺がいぶかしんでいると、獅子堂がニヤリと笑った。

「北川、俺も冒険者になったから」

「……………」

「二ツ星くらいまではすぐに上がるつもりだし、今年中に三ツ星に

追いつく予定だからよ」

なるほど、そうか。これが獅子堂の自信の元か。

俺や小野でも二ツ星、三ツ星になっているのを見て、自分もそこまで簡単には上がれると踏んだのだろう。

……舐めてんな。冒険者を舐めてる。

まあ俺も最初は簡単に三ツ星になれると思っていたから、あまり人のことは言えないのだが、実情を知った今となっては舐めているという風にしか思えなかった。

やれるものならやってみろ……といつも言つところなのだが、今はさすがにタイミングが悪すぎる。

小野と目が合う。やめておけ、と軽く首を振る仕草。……たしかに、言っても聞き入れるとは思えないが……しかし忠告しないわけにもいかないだろう。

「獅子堂」

「あん？」

「今はやめとけ。時期が悪いから。新人冒険者の未帰還者が最近激増して――」

「プツ！ アハハハハ！」

獅子堂が堪えきれないという風に噴き出し、爆笑する。獅子堂がループの取り巻きも、腹を抱えて笑い出した。

それにつられて、他の中立派のクラスメイト達の一部もクスクスと笑いだす。

モンスターの殺意とは違う、人間のまとわりつくような悪意に、じんわりと肌に汗が滲む……。

視界の端で、小野が頭を抱えてため息をついた。

「コイツ、必死すぎ、アハハハ！ そんなに俺が冒険者になったら

困るのかよ!」

「そういうんじゃない。特に一人では絶対に迷宮に潜るな。ニューアスにも出て――」

「あゝ、もういいから。……こうなったら終わりだな」

最後に見下すようにそう吐き捨て、獅子堂たちが去っていく。

それを機に、他のクラスメイト達も解散していく。去り際に「ダサ……」「なんか幻滅〜」「北川氏終了のお知らせ」という声も若干だが聞こえた。

神道などの俺たち側のクラスメイト達だけが、「元気出せよ、大丈夫、カードがロストしたってなんとかなるさ」「なんか感じ悪かったよね〜、気にしなくて良いよ」「ニューアスなら俺も見たいよ。本当に心配してたんだろ? わかつてるって」と励ましの言葉をかけてくれる。

その心温まる言葉はありがたかったが、俺のスクールカーストが下がっていくのは肌で感じられた。

そこで最後に小野が呆れたように声をかけてくる。

「……師匠、お人よしすぎんで。言えばこうなるってわかってたやる?」

「小野……でも忠告しないわけにもいかねーだろ」

「まあ、それは……でも言っても言わなくても結果は変わらんわけやし、言わんほつがお利巧やで」

「……………」

確かに、小野の言うことは正しい。むしろ俺が忠告したことで反発心から獅子堂が行方不明者たちの情報を知っても自重しなくなる可能性が高まってしまった。

黙り込む俺を見た小野が、ぼんと肩を叩いてくる。

「……ま、そっちの方が人間として好感持てるけどな。まあ、フオロ―の方は僕に任せて師匠は犯人捜しの方に集中しとき」

「小野……」

コイツ、こんなに良いやつだったのか……と密かに感動している
と。

「それに、一度下がった方が師匠が犯人を捕まえた時に評価が上がるってもんや。そしたら調査に協力して、師匠が苦しい時も離れんかった僕の評価もつられて爆上がりやで〜」

「小野……」

コイツ、本当にブレないな……。

だが、まあ、それでこそ小野か。

そこで、ガラリと扉を開けて四之宮さんと牛倉さんが入ってきた。

「おはよう」「おはようさん」

「おはよ〜。あ、マロ、ちょっと話があるんだけど……ってなんかあった?」

開口一番そう言ってきた四之宮さんだったが、教室内の空気の違いに気づいたのか、そう首を傾げた。

「まあちよつとね、それより何か用?」

「あ〜……」

俺がそう問い返すと四之宮さんはなぜか少し困ったように口ごもった。そんな彼女の袖を引き、牛倉さんが言う。

「楓ちゃん、ちゃんと相談した方が良いと思うな」

「うーん、でもなあ、なんか最近忙しそうだし……」

なんかよくわからんが……。

「なんか相談があるなら乗るけど」

俺がそう言った時、離れた席にいた獅子堂グループから声が上がった。

「ソイツに相談すんのはやめとけよ！ 主力をロストさせるへボなんだからさ！」

「アハハハハ！」

「チツ！ うっさいねん、ボケ！ 人の会話にしゃしゃり出てくんなや！」

そんな獅子堂グループと小野のやり取りと聞いた四之宮さんと牛倉さんが驚いたように俺を見る。

「え、主力をロストしたって、マジ？」

「それって蓮華ちゃんたち？」

「あ……うん」

俺が気まずげに頷いたのを見た二人は顔を見合わせて囁きあった。

「ど、どうしよう静歌……」

「いや、でもやっぱり相談はした方が良いよ」

「いや、そんな余裕ないでしょ。どう考えてもマロっちも今が一番キツイ時期だろうし……」

「それは……、そうかもしれないけど……」

二人の声はよく聞き取れなかったが、その深刻そうな顔に嫌な予感を覚え俺が声をかけようとしたその時。

「うん、ごめん、やっぱ何でもない。気にしないで！」

四之宮さんがこちらを振り返り、そう言った。

だが、さすがにそれで「ハイ、そうですか」と思う馬鹿はいない。

「いや、何でもないってことはないでしょ。遠慮せずに言ってよ」

「や、ほんとになんでもないんだ。というか、相談内容をやめることにしたから。静歌もそれでいいっしょ？」

「まあ……それなら……」

牛倉さんが心配そうに、しかしどこかホッとしたように頷く。

……察するに、四之宮さんが何らかのリスクがあることをやるうとしていて、それを牛倉さんが心配していたという感じだろうか。

二人が登校するのが遅かったのはそれが理由か。

もう少し掘り下げて聞きたいところだが、相談内容自体をやめることにしたと言われては食い下がり辛い……。

そう逡巡している間に四之宮さんがその場を離れてしまった。

牛倉さんは、そんな四之宮さんと俺を見比べると……。

「……ねえ、今日も冒険者部の娘たちと集まる予定なの？」

「え？」

「ほら、いつもファミレスで集まってるから」

見られていたのか……と少し驚きつつ、なぜかしどろもどろに言い訳をしてしまう。

「や、あれは、今後の活動について作戦会議をしていたというか」

「うん、それはいいから、今日も集まるの？」

が、牛倉さんはこれをクールにスルーすると、そう真剣な表情で問いかけてきた。

「あゝ、その予定だけど……」

「そっか……。それって結構遅くまでやるのかな？」

「うーん……。そうだね。今日は結構遅くまでやるかも」

小野からもらった資料をアンナたちにも見せたいし、と思いながら答えると。

「そっか……。ありがとね」

牛倉さんはホツとした表情でその場を去っていった。

俺はそれを見送りながら、一体何なんだろうと首を傾げるのだった。

第二十話 味方、中立、敵（後書き）

【Tips】アマチュア冒険者のランクごとの収入

一般的な冒険者のランクごとの収入（年）は以下の通りとなる。

- ・一ツ星：数十万円～二百万程度。
- ・二ツ星：数十万円～一千万以上
- ・三ツ星：二千万円～四千万円程度

一ツ星の収入はエンジョイ勢としての収入となる。その大半は大学生やサラリーマンなど本業を持つ者が多く、冒険者はあくまで副業、週末のちょっとした運動でしかない。本格的に稼ぎたい者はさつさと二ツ星へとランクアップする。

二ツ星からはエンジョイ勢と專業とプロ志望が玉石混交となる。專業は、二ツ星で心が折れたが月に何個か迷宮を踏破して年に400～600万円程度稼いで暮らす者たちである。主戦場はFランク迷宮。

プロ志望たちは年に一千万以上稼ぐことも珍しくないが、そのほとんどは三ツ星に上がるための投資に使われるため所得自体は低い。主戦場がFランク迷宮となる專業と違い、積極的にEランク迷宮に潜るためDランクカードの消耗率も高く、イレギュラーエンカウントとの遭遇率も上昇するため死亡率が高い。

三ツ星。エンジョイ勢はゼロ。全員プロ志望か專業。毎日のように泊りがけで迷宮に潜っているにもかかわらず学生である歌麿の半分以下の収入なのは、複数人でのチームを組んでいるのと蓮華によるドロップ率上昇の加護が無いからである。

第二十一話　ねえ、呪いのカードって怖い話、知ってる？

結局、四之宮さんが俺に事情を話してくれることはなかった。

あれから何度か探りを入れてはみたもののそれとなくはぐらかされてしまい、放課後になると逃げるように帰ってしまった。

ここまで拒絶されては、別に恋人と言うわけでもない俺がこれ以上踏み込むのは難しい。

また明日探りを入れて見て、それで駄目なら彼女の方から相談してくれるのを待とう……と気分を入れ替え、アンナたちの元に向かうことにした。

「これは……凄いツスね。よくまあ、ネットからの情報だけこんなにな……」

「その小野とかいう男、探偵の才があるやもしれんな」

すっかり常連となつてしまったファミレスにて。

二人に小野が集めてくれた捜査情報を見せると、彼女たちは感嘆の声を上げた。

「しかし……被害者が百人を超えていたとは」

「これ、日本では戦後最大の大量殺人事件なんじゃないツスカ……」

「日本どころか、世界でも最大級だろう。もはや殺人事件というよりはテロの領域だぞ」

そういう二人の顔色はかなり悪い。俺が感じたものと同じ気持ち悪さを、この事件から感じ取ったのだろう。

猟犬使いの目的が何なのかはわからないが、そのために百人以上

もの人間を殺すことができるというのは、人間の精神を逸脱している。

というか、本当に人間なのかも今となっては疑わしかった。

そんな俺の内心を読んだように織部が言う。

「……人間、であることは間違いないはずだ。手段と被害こそ人間離れしているが、ターゲット選びなどには人間の思惑が感じられる。本物の化け物は、獲物を選ばないか、逆にとことん選ぶかの二択だろう。」

「なるほど……」

シリアルキラーの中には、同じ髪型の女性しか狙わない者や、特定の年齢の子供しか狙わない者など、獲物選びにこだわりを持つ者も多い。逆に、迷宮のモンスターなどは相手が子供や老人、神職者であろうと関係なしに襲い掛かるものだ。

猟犬使いは、新人冒険者や冒険者サークルに所属している者をターゲットに襲っているが、これは無差別殺人というには獲物を選んでおり、偏執的な殺人鬼にしてはこだわりが無さ過ぎる。

猟犬使いの獲物選びには『狙いやすい者』という基準が根幹にあるように思えた。

「唯一こだわりが垣間見えるのが、冒険者サークルに所属している冒険者を襲っていることについてだが……」

チラリとこちらを見る織部に対し、俺は頷き答えた。

「小野には、この冒険者サークルが星母の会と繋がりがあったかどうか調査を頼んでいる」

「さすがだ」

俺の返答に満足げに笑う織部。

「……それにしても、やっぱり先輩以外にも三ツ星冒険者で襲われている人たちがいたんすね」

「ああ……だがまあ、これはある意味では良いことでもある。先輩が唯一無二の特別ではないならば、リスクを冒して先輩を襲う理由もないということだからな。これならば先輩が一人で迷宮に潜つてもある程度は安全だろう」

だが、それは捜査が完全に行き詰まった際、『俺自身を囷にして犯人グループをおびき寄せる』という最終手段が使えなくなったということでもあった。

これで、地上で犯人を特定する以外の選択肢はなくなった。

「アンナ、グレムリンの購入ルートについてはどうなってる？」

俺がそう水を向けると、彼女は困ったように頬を掻いた。

「あゝ……一応グレムリンの取引量と購入者リストは手に入りました。ここ数か月でグレムリンの供給が減り、需要が増えているのは間違いないようです。……ただ、特定の個人が大量購入しているとか、購入者たちが特定の団体に所属しているとかではないようです。今は、彼らがそのグレムリンをさらにどこへ売ったのか、その最終的な行先を調査しているところです」

「そうか……」

……まあ、ここまで用意周到な犯人グループなら、自分たちで直接買うなんて迂闊な真似はしないか。

間にワンクッションやツークッションを挟んで集めるだろう。

グレムリンについては、いまだアンナの調査を待つしかないか。

そこで、アンナがポンと手を叩いた。

「あ、そういえば先輩、例の復活用のカードの件、目途がついたッスよ」

「え、マジか！」

「はい、今週末にウチ……ダンジョンマートが主催になって、スポンサーをやっている冒険者や付き合いのある『札商』を呼んでカード交換会を行うことになったんで、先輩もそこに参加してください」「おお〜！」

カード交換会！ プロ冒険者や札商が集まってカードや魔道具のやり取りをする場があるという話は聞いていたが、俺が参加できるとは！

ちなみに札商というのは、画商のカード版のようなものである。高額なカードや希少なスキルを持つカードを専門に取り扱い、顧客の求めるカードを仕入れてくることを生業としている者たちだ。

交換会自体は、小規模なものでも良ければアマチュアクラスでも行われていることもあるのだが、今回のように企業や富豪が主催となる交換会がそれらと異なるのはその規模と信用性である。

小規模の交換会では基本的にDランクカードがメインで数点のCランクカードがある程度なのに対し、企業が主催となる交換会ではメインがCランクカードとなり、その数も数百点と桁が違ってくる。

また、小規模の交換会では詐欺なども横行する中、企業主催の交換会ではカードの保証を企業が行ってくれるため、詐欺に遭う心配もない。

詐欺に遭う心配もなくカードのやり取りができる場というだけで冒険者からすれば垂涎モノであり、当然参加も紹介制となるため、企業主催の交換会に行くことができるというだけで一種のステータスとなっていた。

その分、高額な会員権が必要であったり、手数料もかかったりする

それが二度繰り返されても応答がなかった場合、最終手段である自衛隊員が動くことになっているが……まあ、大抵はそれまでの間に冒険者が動くこととなる。

なぜなら、救助要請で受け取れる報酬は、救助費用の八割となるからだ。

Fランク迷宮ならば八十万円、Eランク迷宮ならば八百万円もの救助報酬を貰えるのだ。こんなに美味しい話はない。

もっとも今の俺たちならば、報酬がゼロでも動いただろうが……。俺たちは素早くアイコンタクトを送ると、救助要請に了承を押し、タクシーを捕まえると現場に直行した。

その間、アプリへと課金して、その迷宮の地図をダウンロードしておくことは忘れない。

「織部、猟犬使いの被害者だと思うか？」

「……いや、可能性は低いと思う。先輩に聞いた話を考えれば、被害者が敵の襲撃よりも前に救助要請を送ることは困難なはず……」

「そうか……」

まあ、猟犬使いと関係がないことは、今回の場合はむしろ幸運だろう。救助要請者の生存確率が上がるからだ。

そうしているうちに地図のダウンロードが終わった。……うん？

そのマップを見た俺はデジャヴに襲われた。

なんだろう……。見覚えのあるような……。この迷宮に潜ったこととはないはずだが……。

ああ、そうか……。佐藤翔子さんの潜っていた迷宮に似ているのか。二つの迷宮のマップを見比べてみる。

フィールドのタイプこそ森林型と坑道型と違っているが、一つの階層の形は完全に一致している。

それこそ階層の順番を入れ替えてしまえば、見分けがつかないく

らしい。

これは、なにか関係あるのだろうか……。

いや、ないか。そもそも、今回の救助要請は猟犬使いと関係なさそうだしな。

そうしているうちに、タクシーが迷宮へと到着した。駐車場には、すでに冒険者の物らしき数台のバイクが止まっていた。

どうやらすでに救助に来ている冒険者がいるらしい。

俺たちのほかに、四名以上か……。これだけの冒険者が救助に動いているとなれば、まあ間違いなく救助要請者は助かるだろう。

とりあえず自分の行いが誰かの命に直結する……という事態にはならぬそうなので、俺は内心ホッと胸をなで下ろした。

最悪、自分がどうにかしなくても、誰かが解決してくれるだろう……という一種の傍観者心理である。

迷宮へと入ると、俺たちは同時にカードを呼び出した。

俺はドラゴネット、アンナはペガサス、織部は土蜘蛛だ。

被害者はどうやら三階層にいるようなので、カードに騎乗し一直線に向かう。

到着すると、俺たちはすぐさま三手に分かれて救助要請者の搜索をすることにした。

「では、万が一猟犬使いと遭遇した場合、すぐにバッジで連絡を！」
「了解！」

二人と別れ、すぐに俺はユウキを呼び出した。

「ユウキ、このフロアの俺たち以外の人間の気配や匂いを辿ってくれ」

「はい、……あの縄張りの主を使用してもよいですか？」

「あ、そう言えばそれがあつたな。ぶつちやけテリトリーの範囲つてどれくらいなんだ？」

「はい、Fランク迷宮程度ならその階層全体をテリトリーとすることができると思います」

「そんなにか……!?!?」

これまで使ったのはモンコロの試合ぐらいで、その範囲については特に意識していなかったが縄張りの主は予想よりも広範囲のスキルらしい。

「よし、じゃあ早速使ってくれ」

「はい！ アオオオオオオオーン!!!!」

ユウキが、ビリビリと肌が震えるほどの雄たけびを上げる。なんて声量。カードのバリアがなければ、鼓膜が破れていたかもしれないと思うほどだ。

「……！ マスター、救助要請者らしき人の気配を感知しました。

それと……その傍に他の人間とカードの気配も」

「あゝ、もう他の冒険者に発見されてたか」

ユウキの報告を聞いた俺は、若干拍子抜けしつつ頬を掻いた。

どうするかな……こういう時他の冒険者とバッティングするかどうか報酬をもらうとか、分け前云々とかトラブルになることも多いと聞く。

アンナたちにも連絡を取って判断を仰ぐか。少なくとも救助要請者の安全は確認できたわけだし……。

そんなのんきなことを俺が考えてながらバッジに手を伸ばしたその時。

「いえ、マスター……どうやらちょっと違ってみたいです」

「うん……?」

違う、とは？

首を傾げる俺に、ユウキは目つきを鋭くし、言った。

「――救助要請者らしき気配は、その冒険者から逃げているように
す」

第二十一話 ねえ、呪いのカードって怖い話、知ってる？（後書）
き

第二十一話　ねえ、呪いのカードって怖い話、知ってる？

「なに……？」

救助要請者が逃げている？　まさか……、猟犬使いか！？　いや、
そうでなくとも関係ない！　とにかく急がなくては！

「すぐに向かうぞ！　いや、ユウキだけ先に先行してくれ！　すぐ
に追いつく」

「はい！」

走り去るユウキを見送り、アンナたちへと連絡を取る。

「こちら北川、救助要請者の気配を発見。どうやら他の冒険者に追
われている模様！」

「！　了解！　場所はどちらへ？」

「……ちよつと待て」

俺はユウキとのリンクからの情報とスマホのマップアプリを照ら
し合わせて答えた。

「マップ4の9-6だ！　南西方向へ移動中！」

「了解ッス！　すぐに向かいます！　……万が一猟犬使いであれば、
可能な限り戦闘は避けてください。場合によってはすぐに緊急避難
を……」

「……わかった」

俺は一瞬だけ逡巡しつつ、頷いた。

……緊急避難の魔道具で逃げることは、使用者とそのカードだけだ。

アンの言っていることは、いざという時は救助要請者を見捨てて逃げろというものだった。

俺はそれに頷きつつも、実際に救助要請者を見捨ててすぐ逃げられるかは、少し自信がなかった。

もっとも実際にその場面になったら一も二もなく逃げだすかもしれないなかったが……。

その時になってみなければ、自分がどうするか、自分自身でもわからなかった。

『マスター、そろそろ接触します……人狼形態に変身しますか？』
『……いや、やめておこう』

ユウキの提案に俺は少し考え断った。

人狼形態に変身することでユウキは飛躍的に戦闘力を上げることができるが、代わりに高等忍術の一部を使えなくなるというデメリットがあった。

すべてが使えなくなるわけではないが、変化の術や分身の術などの特に使い勝手のよい術が使えなくなってしまう。

俺が砂原戦でユウキを変身させなかったのも、そういう事情があったからだ。

ライカンスロープの人狼形態とは、人間形態の小器用さをすべて捨て去り近接戦闘力に振り分ける能力でもあった。

『それよりも、そろそろシンクロを使うぞ』
『はい！』

目を閉じ、自分をユウキと重ね合わせていく。目を開けた時、俺はユウキでユウキは俺となっていた。

複雑に入り組んだ道を、レーシングカーすら悠々と追い抜くスピードで縦横無尽に駆けていく。

壁も天井もこの体には関係ない。地面と同じように走ることができ。

それはこの体の性能が良いというだけではなく、高等忍術の力も大きかった。

変化の術や各種遁術だけが忍術ではない。自身の持つ俊敏性のすべてを引き出す体術もまた、れっきとした忍術であった。

とその時、微かな声がユウキの耳に届いてきた。

————ハアハア、なんなわけ、アンタ！ 急に襲ってきて……！

若い女の声。こちらが救助要請者の方だろう。その声に俺はどこか聞き覚えのあるものを感じたが、その既視感も次の声を聴いたことで吹き飛んだ。

————ハハ、すげえ上玉。やっぱ勿体ねえよなあ。カードだけ奪って殺しまうなんてさ。せめて一発やってからじゃねえと……。

ざわり、と背筋が泡立った。思考が急速回転する。

……カードだけ奪って殺す！？ おい、コイツ、まさか……！
より一層足を速め、通路を風のように駆け抜ける。

そうして曲がり角の先で俺が見たモノは、地に組み伏せられた救助要請者らしき女性と、その上に覆いかぶさる金髪の若い男の姿だった。

傍らに立っていたリザードマンとボアオークがこちらへと振り返る——よりも早くその脇をすり抜けたユウキの右足が、男を強かに蹴りぬいた。

手加減抜き、走る勢いも利用した全力の一撃。弾かれるようにぶっ飛んだ男は、ピンボールのように壁や床を何度も跳ね、最後に

は壁に礫になるように叩きつけられ、停止した。

「……………ガッ!？」

一拍遅れ、男のカードたちが激しく吐血。リザードマンがそのま
ま口ストし、ボアオークが膝をついた。

生命力と頑丈さに優れるリザードマンとボアオークと言えど、人
間が何度も死ぬようなダメージのすべては受け止められなかったよ
うだった。それでも、一枚は残ったのはさすがというべきか。

「あ、が……………なに、が!？」

混乱の声を上げる男をよそに、俺は襲われていた女性の方を向い
た。

時間的に『致す』余裕はなかったはずだが……………そう思いながら女
性の顔を見た俺は驚愕に思わずシンク口を解きそうになった。

「え、え……………？」

ぼかんと口を開け、狼狽えるその女性……………いや、少女の顔は俺も
よく知るものだった。

……………四之宮さん!？　なんで、ここに!？

そう問いかけそうになって、すんでのところで堪える。

今は、まずこの男の相手が先だ。

振り返ると、混乱から立ち直った男が憎々し気にこちらを睨んで
いた。

……………年のころは二十歳ほどか。短めの色あせた金髪に、ピアスと
腕の入れ墨……………一見して遊び人という印象を受ける。その軽い雰囲気
は、あのアヌビスから感じたマスターの気配とはあまりに違い過
ぎた。

やはり、猟犬使い本人ではない、か。使っているカードもリザード

ドマンとボアオークだしな。

だが、奴の仲間である可能性は高い。同僚か、あるいは部下か……。救助要請を送られていることといい、この軽率さから考えて下端か？

俺は少しだけ考え、ユウキを人狼形態に変身させることにした。

高等忍術は使い辛くなるが、もしも猟犬使いが犬系のカードを使うことにこだわっているのなら……！

心臓が痛いほどに強く鼓動し、体が張り裂けそうなほどのエネルギーが内側から膨れ上がっていく。それは決して錯覚ではなく、それを証明するように身体が急速に膨張。ゴキゴキと音を立てて骨格が変形していき、ざわざわと艶のある体毛が全身を覆っていく……。

「う、ぐ……！」

その人間ではありえぬ感覚にシンクロリンクが途切れそうになるのを、必死で繋ぎとめる。

時間的には数秒だが体感的には数分ほどの時間、荒れ狂う嵐の中で踏ん張るような感覚に耐え抜いていると、突然晴天になったような爽快感が訪れた。

変身が終了したのだ。シンクロも安定している。

突然の変身に驚愕している男へと、俺は問いかけた。

「……おい、一体何をしている？」

「あ、な……ライカンスロープ、まさか!？」

俺の問いかけに、いや、ライカンスロープの姿を見て明らかに動揺する男に俺は確信を強めた。

コイツ、やはり猟犬使いを知っている……！

次に、なんと問いかけるべきか。できるだけ情報を引き出すことができ、なおかつ疑問を持たれない質問を考えろ……！

「……こんなことをしろ、という命令はあったか？」

どうだ！？　　今までの被害者に性的被害はなかった。つまりこれはコイツの独断の可能性が高い！　執拗なまでに自分の痕跡を消すことが上手い猟犬使いから見ても、こんな特定につながりかねない行為を容認するわけがない！

「あ、いや……！」

男はもはや完全な狼狽状態であった。

「すみません！　その言われた通りターゲットが迷宮に潜るのを見張ってたら、スゲータイプの女だったもんで……つい！」

……！！！！

そうか、コイツ、見張り役だったのか！

おそらくは、コイツのような下っ端がどの迷宮にターゲットが入ったかを見張り猟犬使いに報告する仕組みなのだろう。

いいぞ、やはり、コイツはあまり頭がよくないようだ。

そもそも、救助要請が送られ他の冒険者が救助に向かっている中、悠々とレイプしようとしている時点で相当なアホとわかる。

……いや、そうか、もしかして救助要請が出されていることに気づいていないのか？

ライセンスから出される救助要請は、着信拒否することもできる。アラーム音は結構大きいので深夜に鳴れば普通に迷惑だし、そもそも救助に行くつもりが欠片もない人間などはずっとオフにし続けることも多い。俺も、寝る前や学校に行っている間などは着信拒否にして、時々そのまま解除を忘れる時もあった。

しかし、それを踏まえてもなお、アホだ。

なにより獵犬使用のようにグレムリンを用意していない時点で話にならない。

もつとも、それはコイツがただの見張り役であれば、そんな下っ端までグレムリンを配布しないのもわかる話ではあるが……。

コイツがアホだと確信した俺は、より深く突っ込んだ質問をすることにした。

「……ふざけるな！ 俺がどんな命令をしたか言ってみろ！」

ところが、その質問をした瞬間、男の顔色が変わった。

「……あ？ 俺？ お前、男か！？ あのんじゃないな！？」
「ッ！？」

男が一気に警戒を強め懐からカードを取り出す。

獵犬使いは女だったのか……！

「来い！ アヌビス！」
「なッ！？」

コイツもアヌビスを！？ 馬鹿な！ こんな下っ端までBランクを配るなんてどんだけ余裕があるんだよ！？

だが、現れたのは紛れもなくアヌビスであり、男が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「……チッ！」

俺は舌打ちすると隠れていた曲がり角から飛び出した。

実はここまでの会話中にすでにここに到着していたのだ。

「四之宮さん！」

「マロっち！？ どうしてここに！？」

驚愕する彼女を問答無用で抱き寄せドラゴネットの上に乗せる。

Bランクカードとの戦闘となれば彼女も巻き添えとなる。さすがに、庇いながら戦う余裕はなかった。

だが、ここでさらに状況が変わる。

「――先輩！」 状況はバッジで聞いていたぞ、お手柄だったな！
「アンナ！ 織部！」

別行動だった二人が合流したのだ。

しかも、俺と反対側の、男を挟み撃ちする形。

このタイミングと位置、さすがに偶然ではないだろう。

バッジで中継していた俺と男の会話を聞いて隠れていたのだ！

「な………！」

突然退路をふさがれ窮地に陥った男が、アンナたちと俺を焦った様子で見比べる。

後方には、エルフとペガサスに土蜘蛛のCランクカードが三枚。

前方には、ライカンスロープとドラゴネット。

「……………アヌビス！ そのライカンスロープを速攻で蹴散らして俺を逃がせ！」

男が選んだのは、当然俺たちの方だった。この状況下でコイツが助かるためには、手薄な俺たちの方を強引に突破するしかない。

……………だが。

「アヌビス！ 何をしている早くしろ！」

なぜかアヌビスは動かない。冷静に俺たちとマスターである男を見比べ……。

「……やむを得ない、か」

そう小さく呟いて、男の首を跳ね飛ばした。

『！！！！！？』

何が起こっているのかわからないといった表情で宙を舞う男の首を、俺たちは呆然と見るしかなかった。

それは、経験を積んだ冒険者でも、いや、経験を積んだ冒険者だからこそ我が目を疑う光景で……。

自分が絶対だと信じていた世界が、音を立てて崩れ去っていくのを感じた。

馬鹿な……！ カードは何があっても自分のマスターに危害を加えられないはず……。

本当はコイツのカードではなかった？ いや、確かにこの目でコイツが召喚するのを確認した。コイツが召喚するのに合わせて本来のマスターが遠隔で召喚したのか？ それもあり得ない。カードは手元からしか召喚できず、離れたところからの召喚は不可能だ。

混乱する俺の前で、男の首が地面へと落ちる。その瞬間、アヌビスとその存在をすっかり忘れ去られていたボアオークがその首から血を噴き出し、ロストした。

カードへのダメージのフィードバック。それは、この二枚のカードが男のカードであることを証明するものだった。

「……キャ、キャアアアッ！」

そこで静寂を切り裂くように甲高い悲鳴が上がった。悲鳴の主は、四之宮さんだった。

俺やアンナたちと違い、彼女は真正銘のただの女子高生だ。突然の惨殺にパニックになるのも無理はない。

だが、そんな彼女を慰める余裕は俺たちもなかった。

カードに対する絶対安全神話とも呼べる信頼……それを裏切る目の前の光景に、誰も何も言うことができなかった。やがて、アンナがぽつりと呟く。

「……呪いの、カード」

それは、いつ頃か囁かれるようになった都市伝説だった。

ある日迷宮で手に入れた奇妙なカード。いつの間にか手持ちに紛れ込んでいた見知らぬカード。街角で怪しい女から押し付けられるように買わされた激安のカード……。

話の導入は様々だが、その過程と結末はどれも同じだ。

呪いのカードを手に入れてしまったものは、さまざま不幸に襲われ、最後にはそのカードに殺されてしまう……というもの。

冒険者ブームの広がりとともに囁かれるようになったこの都市伝説は、迷宮とカードという得体の知れないものに対する漠然とした不安から生まれたモノとされていた。

だがそれがもし、くだらない都市伝説などではなく、れっきとした実話から生まれたモノだとしたら……？

呪いのカードにまつわる話の中には、カードに操られて家族や知人を襲う殺人鬼になってしまう……というものもある。

カードに操られる……それは俺自身も覚えのある感覚で……。

「馬鹿な……！」

頭に過った疑いを振り払う。

だが、蓮華や鈴鹿のそれは、まさに呪いのカードのそれで……。

「……おい！ 一体、なんだよ、これ！ ま、まさかお前らがやったのか！？」

そこで、他の救助要請でやってきた冒険者たちがやってきた。

戦慄の眼差しでこちらを見つめてくる彼らに対し、俺はこれから大変なことになりそうだと、どこか他人事のように思うのだった。

第二十一話　ねえ、呪いのカードって怖い話、知ってる？（後書き）

【Tips】呪いのカードの噂

とあるオカルトスレより抜粋

これは、俺の友人の友人の話。冒険者をやってるソイツがある日迷宮を攻略していたら、一枚のカードが落ちていたのを見つけた。他の冒険者が落としたらしいそのカードは、Cランクカードだというのに所有者登録もされていなくて、これ幸いとソイツはそれをネコババすることにした。そのカードはちょっと普通のカードとは様子が違っていて少しだけ不気味だったが、Dランクカードしか持っていないかったソイツにとって、そのカードは主力になった。

そのカードを使い始めてからしばらく経って、ソイツの周りで妙なことが起こるようになった。数日に一日くらいの間隔で、何をしていたか思い出せない日があるようになったらしい。記憶がない日の次の日は、決まって嫌なことが起きる。家の近所で虐め殺された野良猫の死体が見つかったりとか、そういうの。怖くなって病院に行っても、肉体的には問題なし。精神的なモノだろうってことになった。

そうしているうちにも、どんどん記憶がない日が増えてきた。自宅の周辺の動物の死体もどんどん増えていく。そのうち、近所で動物を殺しているのはソイツらしいという噂が立つようになった。俺はそんなはずがないと思いつつ、記憶がない日に何をしているか不安になって、自分の様子を動画でとることにした。

記憶がない日のよく朝、動画を見てみたら……そこには野良猫を殺して生のまま食べている自分の姿が映っていた。その時、カードから声が聞こえたんだ。「気づいたか……だがもう手遅れだ」……って。

俺はすぐにそれを捨てようとしたけど、そうすると意識がなくな

る。もう、一か月のほどんど意識がない。なあ、俺は一体どうすれ
ば良い………？

第二十二話 おや？ 四之宮さんの様子が……？

四之宮さんが猟犬使いの下っ端から襲われた事件から二日が経った。

あれから俺たちは当然のように警察行きとなった。

数人で死体を囲んでいたのだから当然だ。

幸いにも四之宮さんが迷宮に入る前から最後まで映像を録画していたのと、俺たちもそれぞれ録画をしていたため、複数の映像証拠があるということとさほど時間がかからずに俺たちの疑いは解けた。

だが、俺が敵から情報を引き出すために意味深な言動をしていたこともあり、事情聴取は長時間に及び、最終的には虎の子の読心の魔道具まで持ち出されるなど、取り調べは翌日まで続いた。

当然、学校は休みだ。

その甲斐あって身の潔白は証明されたものの、警察の方々には高校生が連続殺人犯を追っているという無謀な試みがバレってしまった。取り調べが長時間になってしまったのは、その説教もあった。

だがその説教も、なぜか途中で刑事さんが取調室を出ていったかと思っただらピタリと止まってしまったのだが……。

時間の余裕が無くなったのだろうか？

そうして無駄に長い時間を過ごした俺だったが、取り調べの中刑事さんたちの反応に一つ奇妙な点を見つけた。

それは、アヌビスがマスターを殺したシーンを刑事さんたちが見た時のことだ。

絶対にマスターを傷つけられないはずのカードが、マスターを殺害するというありえないはずの映像を見て、刑事さんたちは苦虫を噛み潰したような顔をしたのだ。

普通なら「馬鹿な！」と驚愕すべきはずだというのに、彼らの反応はまるで「またか」とでも言いたげな様子だった。

そこで俺が直感的に思ったのが「もしかして似たようなことが以前にもあったのでは？」というもの。

小野のデータが確かならば、猟犬使用の被害者は全国で百名以上出ている。その中で、今回のように下っ端の暴走が一度もなかったとは思えない。警察も無能ではない、今回のように下っ端レベルを追い詰めたことは一度や二度ではないだろう。

にもかかわらず今日まで誰も逮捕することができず、決定的な証拠を掴めていないのは、今回のように証拠隠滅をされてしまっていたからなのではないだろうか？

もしも猟犬使いが、あのアヌビスのようなカードを配下全員に配っていたとして、それがいざという時の自爆装置のような役割を果たしていたとすれば……。

下っ端たちがその事実を知らず、単にアヌビスというBランクカードを報酬兼仲間の証として渡されていたとすれば……。

これまで誰も捕まっていないという理由も少しだけはわかる。

もっとも、それだけ大量にアヌビスを用意する方法や資金源などは疑問が残るが……。

しかし、もしあの死んだ下っ端が処分前提の人材だとすれば、その経歴から猟犬使いを辿るのも難しいかもしれない。

それはつまり、猟犬使用の捜査はまだまだ続くということだった。

そうして日を跨いだ取り調べを終えて帰ってきた俺を出迎えたのは、家族による取り調べの第二ラウンドであった。

過労でぶっ倒れて冒険者業を控えていたはずの息子が、事件に巻き込まれて警察で取り調べを受けて帰ってきたのだ。そりゃあ寛容

なウチの両親でも怒髪天をつくというものである。

しかも、あろうことか連続殺人犯を追っていたという。

これはライセンスを取り上げられるかもしれない……それだけは阻止しないと、思っていた俺だったが、両親は事件に巻き込まれたことは知っただけでも、俺が連続殺人犯を追っていたことまでは知らなかった。

そこでさすがの俺も警察の対応に疑問を持った。

普通、たとえ冒険者といえども未成年が凶悪犯を追っていたら親へ連絡して止めるものだ。

というか、そもそも俺が最初に猟犬使いに襲われた時に警察から両親に連絡が行っていないとおかしい。

こうなると、俺への説教が途中でピタリと止まったのも疑わしくなってくる。

……もしかして俺は国や警察に泳がされているのだろうか、と俺は考えた。

俺が潜っていた迷宮が消滅した件。国は、俺が迷宮消滅の鍵を握っているかと疑っているのではないかと。

それこそが俺が猟犬使いに狙われた理由であり、それを探るために俺を自由にして泳がせているのではないかと。

いや、あるいはその逆か。猟犬使いが迷宮消滅の鍵を握っており、俺はそれを知っているため猟犬使いを追っている……そう国が考えているとすれば、しつくりくる。

まあ、実際には俺は迷宮消滅の鍵を握ってなどいないし、猟犬使いを追っているのも単なる意地の問題なのだが……ここは勝手に勘違いさせておくとしよう。

なににせよ、警察が「お宅の息子さん、連続殺人犯を追っていますよ」とは連絡していなかったことは幸運だった。

それがバレしていたら確実に俺の冒険者人生は終わっていたところだ。

両親の説得は、「後輩の女子とファミレスで話していたら救助要請が来たので仕方なく向かった」「襲われていたのは友人の女子で、自分たちが間に合わなければ殺されていた」という自分の行為の正当性を前面に押し出すことでなんとか押し通した。

さすがに、人助けをした息子をいつまでも怒るのは難しい。それでも「お前の行為は立派だが、次からは自分の命を最優先にしてくれ……」と言われてしまったが……。

こうしてなんとか両親の追及を逃れた、と思った俺であったが、大変なのはむしろそこからだった。

お袋たちは目を爛々とさせて「放課後に話していたという後輩の女の子とはどういう関係か」「助けたクラスメイトの女子とは一体誰なのか」としつこく聞いてきたのだ。

その追及は本職の刑事さんたちよりもよほど執拗なもので、ただでさえ消耗していた俺の精神を著しく消耗させたのだった。

そうだったわけで、俺は朝から疲れ切っていたのだった。

「ああ……学校さぼりてえ……」

漫画喫茶とかが行って、十二時間パックで爆睡したい。

……まあ、実行はしないが。

ウチの学校が無断欠席とかは意外と厳しく、一限に遅刻するだけで家に連絡が行くのである。

それに……学校の評判が気になるというのもある。

事件のことなど知らないクラスメイト達からすれば、俺は獅子堂に絡まれた翌日に学校を休んでいる風にしか見えないはず。

学校側から事件に巻き込まれたなんて説明はしないだろうから、今頃『豆腐メンタル君』とか噂されている可能性もあった。

そこで今日も休んでしまえば、噂は事実として定着することだろう。

逆に一日だけなら単なる体調不良で済む。

よって、今日はどんなに怠くても学校に行かなくてはならないのだ。

そういうわけで重い足取りで学校へ向かうと……。

「あ、四之宮さん」

偶然にも登校口で四之宮さんとバッタリ遭遇した。

「——マロっち！　ちょ、ちょっとこっち来て！」

四之宮さんに手を引かれる形で、階段裏の人気のないところへと連れていかれる。

「ここなら、いいかな？　マロっち、一昨日は本当にありがとうね」

「あ、うん……その、いろいろと大丈夫？」

助けた時の様子から怪我などはしていないのは確認しているが、精神的にはどうかかわからない。

いつもは強気な彼女も年頃の女の子なのだ、暴漢に襲われたということから男に対してトラウマなどを抱えていてもおかしくない。

が、彼女はあっけらかんとした様子で笑った。

「うん、全然平気。マロっちが助けてくれたおかげで怪我也無いしね。それより、あの時のことでちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

どこか気まずげにそういう四之宮さん。質問の内容は大体予想がついた。

「あの犯人について何か知っているのか、って？」

「あ、うん……」

「そうだなあ……簡単に言つと、俺はあの犯人……というかそのグループを追っていたんだよ」

「え……犯罪者の調査をしていたってこと？ 高校生なのに？」

ポカーンとする四之宮さんに俺は苦笑しつつ頷いた。

「まあ危ないことしているって自覚はあるよ。……でも俺もあの犯人のグループに襲われてさ……」

「あ、もしかして蓮華ちゃんたちのロストって……？」

俺が頷くと、彼女は額に手を当てて天を仰いだ。

「あ……なるほど、それで、ね」

「……それで、四之宮さんはなんで？」

俺は聞いてよいモノか若干迷いつつ、結局聞いてみることにした。あちらもこちらの事情を聴いてきたのだから、と思っただのだ。

「あ、一言で言つと、前に話したスカウトの話を受けたっていうか」

「……新人を主に狙った事件が起こっているって忠告しなかったっけ？」

俺が少し怒った風に言つと、彼女は気まずそうに目を逸らし……。

「う……、それは覚えていたんだけど……お母さんが倒れて、さ」

「……そ、それは」

今度は逆に俺の方が気まずくなって目を逸らす。

「あ、重い病気とかじゃないから安心して。まあ手術して安静にしてれば普通に治る感じだから。でも大本の原因が過労ってことでさあ……」

「……………」

割と裕福な家で生まれ育った俺にはコメントし辛い家庭事情に、俺が何も言えずに口ごもっていると……。

「ま、それでお母さんに心配かけてたら意味ないって話なんだけどね。メチャクチャ怒られたし」

そんな俺の様子を見て、四之宮さんは冗談めかしてそう言った。そんな彼女に、俺も苦笑する。しこたま怒られたのはウチも同様だった。

「それで、これから冒険者やっていくのか？」

「ううん、さすがにいきなりこんなことあったらね。初っ端から救助要請する羽目になったし、事務所に貰ったカードもロストしたから……」

ちなみに救助要請代については、事件だったということから本人負担はない形となっている。だが事務所から貸し出されたというカードについては、契約内容によっては面倒なことになっている可能性があった。

「……もしかしてカードの弁償とかそういう話になっているなら協力するけど」

「あ、そういうのは大丈夫。契約自体がなかったことになって、むしろ逆にその賠償金とかをかなりもらえることになったから」

賠償金……どう考えても口止め料とかその手のお金だろう。

事務所側の要望として冒険者になった所属タレントが初日にして襲われたのだ。事件そのものに事務所の関与を疑われかねない状況だし、一秒でも早く契約そのものをなかったことにしたかったのだらう。

でなければ、言うては悪いが四之宮さんのような無名の新人モデル相手に多額の賠償金を払うとは思えない。

……まあ、すべてが白紙になった上で彼女も無事、お金も入ったというのは、トータルで見ればプラスと言ってよいかもしれなかった。

「でも、さ……本当に助かったよ……マジ、カッコ良かった」

俺がそんなことを考えていると、四之宮さんが頬を微かに染め、ポツリと呟くように言った。

「あ、う、うん……どういたしまして。ま……偶然だけだな」

「結果結果、結果が重要なんだよ、助けられた人にとってはね。そのさ、なんかお礼したいんだけど……リクエスト、ない？」

落ち着かない様子で髪をいじりながらそう言ってくる四之宮さん。

「うっつん」

どうしたもんか。彼女を助けたのが本当に偶然である以上、何か見返りをもらうのは気が引けるところではある。だが、こういう時は多少なりともお礼を渡した方が気も楽になる、という気持ちもわかる。

あ、そうだ！ 俺の頭に閃きが走る。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「あ、うん！ なになに？ 何でも言っつて？」

パツと顔を明るくする彼女に、俺は頬を掻きながら言った。

「その、牛倉さんと二人で遊びに行くセツティングとかお願いできない……ッスかね？」

「————」

ピタリ、と四之宮さんが停止する。

「……………」

「えっと……ダメッスかね？」

「……………ううん？ 別に？ いいよ？ 『静歌と二人で』遊びに行きたいってことね。オツケー」

ニコリと笑ってそう言う四之宮さん。

よっし！ 内心でガッツポーズをする。

実のところ、クリスマスに誘いをかけて断られてからというもの俺は、彼女に再アプローチをかけられずにいた。

それは冒険者業が忙しいというのもあったが、一度断られた以上もう一度誘いをかける勇気が持てなかつただけであった。

以前勝負に行けたのは、何も失うものがなかつたからでもある。せつかく普通に話せるところまでこれたのに、その関係を崩したくないという思いもあった。

だが、いつまでもこのままでもいいわけでもない。

指をくわえている間に彼女に彼氏が出来たら悔やんでも悔やみきれないだろう。

好きな子を誘うのにその友達に仲介を頼むというのも情けないところはあるが、これで貸し借りなしとなれば四之宮さんも気が楽だ

ろう。

我ながらナイスアイデアだと自画自賛したい気分だった。

「それで、具体的にいつが良いとかある？」

「あー……今は色々立て込んでるからなあ、落ち着いたら連絡するよ」

「うん、わかった」

いやあ、ここの所不連続きだったけど、ようやく運が回ってきたんじゃないか、これは？

とほくそ笑んでいると……。

「それじゃ、教室行こうか」

不意に、四之宮さんが手を取ってきた。

「あ、うん」

四之宮さんに手を引かれ、教室へと向かう。

男のそれとはまったく違う柔らかな手の感触にドギマギしつつ、驚きの目でこちらを見てくる他の生徒たちの目が妙に気恥ずかしい。しかし、振り払うのもアレだしどうしたものかと思っているうちに教室へとついてしまった。

さすがにもう手を放すべきだろう、と思っている俺をよそに、四之宮さんががらりと扉を開けてしまう。

勢いよく開けられた扉の音に、教室中の視線が集まった。

俺たちの姿を見て、握られた手を見てさらに驚愕の視線が集まる。が、すぐにクラスメイトたちが集まって来て。

「おはよ、北川！」「聞いたぜ！ 迷宮で他の冒険者に襲われた四之宮さんを助けたんだって？」「すごい、やるなあ！」「つか、迷

宮ってモンスターだけじゃなくてそういう危険もあるんだな」「やっぱり、冒険者って高給取りな分あぶねーんだな」

「えっ？ ちょっと……!？」

な、なんだ、これ！

口々にそう捲し立ててくる彼らに俺は目を白黒とさせた。

どうしてコイツらがそのことを知ってるんだ？ ……って候補は一人しかいないか。

四之宮さんを見ると、俺に軽くウィンクしてきた。

……常識的に考えて、誰かに襲われそうになった、なんてのは女性の立場からすれば隠しておきたい話のはず。大多数が同情してもごく一部の品性下劣な奴らはそれを面白おかしく邪推し、あらぬ噂を立てることもあるからだ。

にもかかわらず、こうまで大々的に広めたのは……俺の為か。

先日の獅子堂との一件で下がった俺の株を、こうして高騰させるために自分から情報を拡散したのだろう。

教室を見渡してみると、クラスメイト達の目は一気に好意的なものへと変わり、獅子堂たちのグループは俺と視線が合うと気まずそうに目を逸らした。

その中に、獅子堂の姿はない。昨日の今日で、さすがに顔を合わせ辛くなったのだろうか。

と、クラスメイト達の波が引いたところで牛倉さんが話しかけてきた。

「おはよ、北川くん。楓ちゃんのこと、本当にありがとっね」

心からの笑顔でそう言ってくる彼女に、俺は「偶然だから気にしないで」と言い返そうとし、ふと気づいた。

いや、待て、本当に偶然なんだろうか？

四之宮さんが潜っていた迷宮は、俺たちがいたファミレスからさ

ほど遠くない場所にあった。そして、牛倉さんはあの日、俺がいつものファミレスで集まるのか確認を取っていた。

「……もしかして、万が一の時に俺が四之宮さんを助けられるように、誘導した？」

「え？ どゆこと？」

俺の言葉に四之宮さんが、牛倉さんを驚いたように見る。

「あはは……誘導ってほどでもないけど、ファミレスの近くならもの時に北川くんが助けしてくれるかも、と思って」

「えっ、でも私あの日迷宮に潜るって静歌に言っていないし、迷宮も自分で選んだんだけど」

「口では辞めたって言っても本心では違うことくらいわかるよ。幼稚園入る前からの付き合いなんだよ？ それに楓ちゃん性格なら、気持ちが変わる前とにかくすぐに迷宮に入ろうとするだろうし、学校の近くの迷宮を選ぶかって。私は、その中からファミレスに近い迷宮の特徴を、初心者におススメの迷宮として前々から楓ちゃんに吹き込んでただけだから……」

いや、それを人は誘導と言っんですが……。

自分が完全に牛倉さんの手のひらの上で転がされていたことを知った四之宮さんが頬を引きつらせる。

「うわー、久々に出たな、ブラック静歌」

「ブラックはやめてよ」

「あはは……でも、ありがとうね……静歌」

「どういたしまして！」

ええ話や……、と二人の美少女たちの心温まる光景を一步離れた

ところで見てみるとポンポンと俺の肩を叩いてくる奴がいた。

「おはよ、師匠。さっそくお手柄やったな」

「おはよ、小野。まあ、完全に偶然と言うか、牛倉さんのお膳立てだけだな」

「結果結果、結果が重要やで」

四之宮さんと同じセリフに苦笑する。

「これで獅子堂のせいで下がった株も元通り……いやそれ以上やな。大したもんや」

「よく言うよ、この話を広めたのお前だろ」

ニヤリ、と笑う小野。

昨日休んでいたのは四之宮さんも同じだ。にもかかわらず、今日の時点でクラス中に広まっているのはそれを広めた奴がいるから。そんな奴、コイツしかない。

「ところで、獅子堂の奴今日は休んでんのか？」

俺がそう問いかけると、小野は真面目な顔つきになった。

「ん？ ああ、昨日からな……」

「昨日？ まさか……」

「いや、昨日の先生の話やと単に高熱がどつこのうって話やったけど」

なんだ……ただの風邪か。
いや……。

「一応さ、小野の伝手から獅子堂の奴らに忠告しといてくれ。少なくとも、絶対に一人では迷宮に入るなつてさ」

「それはもう伝えといた。さすがに今の時期はな。四之宮さんが襲われたのもあるし、さすがの獅子堂もこれで自重するやる」

もう動いててくれたのか。そういえばフォローは任せるとか言ってたな。さすが小野。

「ま、今はその話はおいとして。……例の被害者の冒険者サークルの件、わかったで」

「ッ！……どうだった？」

「完全に黒や。被害者が所属しとった冒険者サークルは、どれも星母の会傘下やった。といつても部員はあくまでカード交換会とか目当てで、活動自体には興味なかったみたいやけどな」

「そうか……」

これで、繋がりがはつきりしたか。

だが……とふと思う。

仮に星母の会が犯人だとして、なぜ団体の信者を襲うのか……。

あえて信者を襲うことで、疑いの目を逸らす作戦なのか？

それならばむしろ全くの無関係を装った方が、安全なはず。

星母の会が犯人ならば、逆に自分の信者を襲ったりはしないのでは……？

あるいは、そう思わせること自体が目的？

裏の裏か、裏の裏のそのまた裏なのか。

俺はとりあえず、今の情報を織部達へと送ったのだった。

第二十二話 おや？ 四之宮さんの様子が……？

そして待ちに待った週末。

俺はアンナの案内で、カード交換会の会場へとやって来ていた。場所は都内某所に存在する高級ホテル。そのパーティー会場を貸し切り、カード交換会は行われていた。

「な、なあ、言われた通り制服で来たけど、本当にこの服装で大丈夫か？」

周囲の人々の高級そうなスーツを見て、不安になった俺はアンナへとそう問いかけた。

そんな庶民感丸出しな俺に、アンナは呆れたような顔をしつつ答えた。

「大丈夫ツスよ。ほら、ウチだって制服でしょう？ むしろ、変にスーツを着てくるよりも値段やブランドで足元見られないで済みますし、逆に学生の身でここに来られるということで一目置かれるツスよ。……それでもなお馬鹿にしてくるような相手は、自分が馬鹿にしている相手が主催者の娘とその友人ということも知らない奴ってことツスから、気にしなくて良いツス」

「な、なるほど」

他ならぬ上流階級の彼女がそう言うのだ、ここは納得しておくとしよう。

「しかし……本当にこれってカード交換会なのか？　なんかイメージと違うというか」

俺は周囲を見渡しつつそう言った。

会場を見渡してもカードの一枚も見当たらず、参加者たちは飲み物や軽食をつまみつつ談笑している。

高額なカードの交換会ということでお堅い商談を想像していたというのに、これではどう見ても立食パーティーだった。

「ああ……ここはただの交流を深める場なんで。実際の商談は下の階の個室でやるんです」

「な、なるほど……でも、誰がどのカードを持っているとかわからなくないか？」

「参加者には事前に出品されるカードのカタログが送られていますから、それを見て目星をつける感じっすね。まあ本当の目玉はカタログに載せない人もいるんで、ここでそれを探るついでに交流を深めるってというのがこのクラスの交換会のやり方っす」

「はえー……って、そのカタログとやら俺は見えてないんですけど」
「そりゃあ先輩には不要っすからね。カタログだけで百万円ですし……」

カタログだけで百万円！？　そりゃぼったくり過ぎたる！　いや、参加料とか、誰が何を持っているとかの情報料込みと考えると妥当なのか？

本物の金持ちたちの相場がわからず悩む俺をよそに、アンナはポニーテールをフリフリ会場を見渡していた。

「ああ、いたいた。ついてきてください」

「あ、ああ……」

大人しく彼女についていくと、恰幅のよい中年の男性と初老の紳

士が談笑していた。

やがてその話が一段落したところで、アンナが自然に挨拶に入っていた。

一言二言やり取りをした後、恰幅のよい男性がにこやかに離れていく。

そこでアンナが残った初老の男性を俺へと紹介した。

「先輩、紹介します。こちらが本日先輩と取引をしてくださる札商の遠野さんです」

「あ、はじめまして。冒険者をやっている北川と申します」

「遠野です。よろしくお願います。いやあ、こうして実際にお目にかかれるとは、光栄です」

「うえっ!？」

明らかに上流階級っぽい人にそんなことを言われ、俺は思わず裏返った声を漏らしてしまった。

「先輩は霊格再帰を発見した冒険者ツスからね。札商の中では割と有名人なんです」

アンナがこっそりと耳打ちしてくる。

な、なるほど……。霊格再帰の発見によりカード相場も当時かなり揺れ動いたと聞く。その影響をもろに受けたのは、冒険者よりもむしろ彼ら札商だろう。

これまで不良在庫として扱われていた零落スキル持ちの価値が急高騰したことで札商たちは大儲けしたはずだ。

だがその一方で、中には大損をした人もいただろう。

その度合いによっては人知れず恨みを買っていてもおかしくない、と俺が内心で警戒を強めていると……。

「はは、ご安心ください。私は大儲けをさせてもらった側ですから
そんな俺の内心を見透かされたようにそう言われてしまった。

「あ、そ、そうですか……」

「先輩……そんな人をウチが紹介するわけないでしょう」

俺が顔を赤くして俯いていると、呆れ顔でアンナにそう囁かれて
しまった。

普通に考えればその通りである。ぐうの音もでなかった。

「こちらの遠野さんは、プロ冒険者相手に復活用のカードやランク
アップ用のカードを用意するのも専門にしていらっしやる方なんで
す」

……なるほど、と俺は納得した。そういうニーズを満たす商売を
していたなら、零落スキル持ちを大量に抱えていただろうし、さぞ
や大儲けしたに違いない。

そして、アンナがわざわざ俺に紹介した理由も見えてきた。

「なんでも北川さんは復活用の座敷童とレディヴァンパイアをお求
めとか。お力になれると思いますよ」

「……よろしくお願いします」

につこりと人好きする笑顔でそういう遠野さんに、俺は頭を下げ
たのだった。

「……ふむ、なるほど」

場所を個室へと移した俺たちは、遠野さんへとDランクカードの
束と魔道具を見せていた。

「まず、魔道具に関してですが、こちらは現金なら五百万ほど。カードとの交換と言う形でしたら六百万円で買い取りさせていただけます」

「……そうですか」

遠野さんが提示した額は、ギルドの買い取り額に若干色がついた程度の額だった。

それでも、少しでも高く売れたのは助かる。

だが、本命は次のカードの方だった。

ギルドのDランクカードの買い取り価格は、市場価格の一割。俺が持つDランクカードはどれもDランクカードの中でも低位で、一枚当たり十万から二十万というところ。ギルドの二倍、三倍で買い取ってもらえないと蓮華とイライザの同時復活はできない。

「次に、こちらのカードの方ですが……」

「ごくり、と唾を飲み込む。

「これはすべて買い取り希望ということの良いでしょうか？」

「え？ あ、はい……特に使う予定もありませんし」

微妙に肩透かしを食らった感じになりつつ答える。

「そうですか……失礼ですが、北川さんの御予算の方をお伺いしても？」

「えっと……一応現金で三千五百万円ほど用意してきています。それにさっきの魔道具代を足してって感じですね」

「ほづ……そういうことでしたら、このカードすべてと魔道具全部と三千五百万円でこの三枚と交換ということでしょうか？」

「え？ 三枚……？」

「はい、座敷童とレディヴァンパイア、それと中からお好きなカードをとということだ」

「これは……」

遠野さんが見せてきたタブレットの画面には、Cランクカードのリストが載っていた。

「ご丁寧にスキルの内容まで補足されている。」

リストへと視線を走らせていた俺は、その中の一枚に目を奪われた。

「このカードは……。」

「こちらとしては願ってもないお話ですが、……よろしいのですか？」

座敷童とレディヴァンパイアの復活用カードに加えて、さらにもう一枚Cランクカードを、となれば明らかに赤字のはずだが……。

と俺が首を傾げていると、遠野さんがその理由を教えてくれた。

「まずDランクカードが思いのほか高値がついた理由についてだが、これは同種のカードが多いこと、スキル構成に大きな差がないことが高額買取の決め手らしい。」

「今、アメリカを中心として海外では冒険者学校の設立がブームとなっており、教材としてDランクカードの需要が増えているらしい。教材である以上、その性能に大きな差があつてはならず、同種でスキル構成に大きな差がない方がむしろ好まれるのだとか。」

「こちらとしてもこれだけのまとまったカードを、復活用のカードと交換でという形はありがたいのですよ。なんせカードの交換については税金がかからないのでね」

「なるほど」

ニコリと微笑む遠野さんにこちらも苦笑する。

「現金の二千五百万の方は、座敷童の復活用カードの購入と言う形で処理させていただきますね」

「よろしくお願いします」

遠野さんが切ってくれた領収証を受け取る。札商はギルドから公認された専門店と同じ資格を持つため、札商から買ったカードはちゃんと経費として処理される。

……札商の中には資格を持たない自称も混じっているため注意が必要らしいが、今回はダンジョンマーケット主催のため安心して取引できた。

「それではカードの方は、一週間後にダンジョンマーケット経由でお届けさせていただきます」

「今回はありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。これからも何かご入用の際はぜひご連絡を」

連絡先を交換し、握手を交わして遠野さんと別れる。

「……これで、先輩の戦力も完全復活ツスね」

「ああ、アンナのおかげだよ。ありがとう」

俺は深々と頭を下げた。

「気にしないでください。ウチはただ人を紹介しただけなんです」

それが大きいんだけどな。アンナが信用できる札商を紹介してく

れなければ、こんなにも高値でDランクカードが売れることはなく、蓮華たちをまとめて復活できる目途も立たなかつただろう。

だが、これ以上言葉で感謝するのも野暮か。

この感謝の気持ちは、冒険者部としての活動で返していくとしよう。

……そういえば、とふと思いつく。

獅子堂は大丈夫なのだろうか？

もう何日も休み続けている。

一日二日ならばただの体調不良と考えるところだが、それが三日も続くとなるとさすがに気になってくる。

先生の話では高熱で休んでいるという話だったが……。

しかし、マジで迷宮で行方不明になっていたとしたら、さすがの獅子堂グループの奴らも俺に相談とかしてくるはず。

神経質になり過ぎてるのか？

——獅子堂の搜索クエストが届いたのは、その晩のことだった。

第二十二話 おや？ 四之宮さんの様子が……？ （後書き）

【Tips】札商

カードを専門に扱う商人。迷宮が現れた当初、まだカードの使い方が判明していなかった時代、カードは美術品の一種として扱われていたため、札商のビジネスシステムは画商のそれを踏襲している。国から正式に認められた職業であるため、札商から買ったカードは年末調整でちゃんと経費として認められる。

第二十三話　ちょっと連続殺人犯捕まえてみない？

薄暗い洞窟型の迷宮、その一角にて……俺はクラスメイトの遺体を見下ろしていた。

獅子堂という男について、俺が知ることは少ない。

中学生の頃は日々喧嘩に明け暮れていたとか、学内では大人しいが放課後はかなり無茶苦茶やっているだとか、その逆に実は一度も喧嘩したことがないなんちゃってヤンキーなのだとか……。

そんな噂ぐらいでしか人となりを知ることもなく、またろくに知ろうともしなかった。

獅子堂が俺を敵視していることすら小野に教えられて初めて知ったくらいで、つまるところ俺は彼に対して何の興味も抱いていなかったということなのだろう。

もし俺が獅子堂にもう少し興味を持っていて、一度でも一緒に遊びに行ったりしていたならば……。

この結末もなかったのではないだろうか。

俺は、つい先日まで元気に生きていたクラスメイトの遺体の前でぼんやりとそんなことを考えた。

「先輩大丈夫ツスカ？」

おずおずとアンナが心配そうにそう問いかけてくる。

「ああ……大丈夫だ。だが、顔見知りか犠牲になるってのは……予想以上にクるもんがあるな……」

もう少し本気で忠告してやればよかった。獅子堂が休み始めで、すぐに動き出せばもしかしたら間に合ったかもしれない。獅子堂を疎む気持ちだが、無意識に見殺しにさせたのでは？
そんな想いがぐるぐる頭をめぐると頭をめぐると。

「あまり、気を落とさずに。悪いのは全部犯人なんすから」

「ああ……」

「……それに、どうやら無駄死にというわけでもなかったようだ」

声の方を見ると、織部が獅子堂の生徒手帳を読んでいるところだった。

「小夜、何か見つけたの？」

「うむ……ずっと探していたアレが見つかった」

その言葉にピリリと空気が引き締まる。

「織部、アレってのは……？」

「いわゆるダイイングメッセージ、というやつだ」

……ダイイングメッセージ？

ミステリーでは定番のワードだが、実際に耳にするとどうにも違和感のある言葉だった。

なぜだろう、と首を傾げ気づく。

ダイイングメッセージが残されているというシチュエーション、それ自体が不自然なのだ。

もしも自分が殺人犯だとして、被害者がダイイングメッセージを残そうとしていればどうするか。当然、阻止しようとする。すでに残されていれば、それを必ず処分することだろう。

ミステリー小説では定番の言葉だが、現実にはあり得ない言葉な

のだ。ダイニングメッセージなんてものは……。
では、なぜ現にこうしてダイニングメッセージが残されているのか……。

俺はアンナと共に獅子堂の生徒手帳を覗き込んだ。

そこには、犯人の言動や使用していたカードなどが、箇条書きに思いつくままにと書いた様子で書き綴られていた。

震える字で、それでもできる限り詳細にと記されたその情報は、獅子堂の死に際の最後の抵抗とも言えるものだった。

その中でも特に注目を引いたのは、猟犬使いの言動について。

犯人が口にした中で印象に残ったのだろう。「崇高な志」「カードを自分の力であるかのように振る舞う傲慢」といった発言……。

それは俺の記憶にもあった言葉で、俺の時の言動と似ていた……似すぎていた。

そして、ページの最後には、「犯人はおそらく宗教関係者」という獅子堂自身の所感と、家族や友人たちへのメッセージで締めくくられていた。

「残されたダイニングメッセージ、佐藤さんの現場で発見された口ザリオ、被害者たちの所属していた冒険者サークル。これらはすべて星母の会を連想させるものばかりだ」

まさか……。

「犯人は星母の会——そう思わせるのが、猟犬使いの目的なのか？」

そうだ、と織部は頷いた。

「数多の人々を殺しておきながらいまだ尻尾をつかませていないことからわかるように、猟犬使いは極めて慎重だ。そんな犯人が、自身の正体に繋がりがかねないダイニングメッセージの存在を許すだろ

うか？」

ありえない。あるとすればそれは……。

「自分の正体に繋がらないと確信している、あるいは猟犬使いが覚えて残させたものってことか。おそらくは、捜査の矛先を他者へと擦り付けるために。自分で始末せずに階段から被害者を逃がすのは、ダイイングメッセージを残させるだけの余裕を与えるため……ってことか」

そう考えれば、猟犬使いが自分の手で始末しない理由もある程度は説明がつく。しかし……。

「なぜ、被害者自身にダイイングメッセージを残させる必要があるんだ？ 殺してから自分で仕込むという手もあるはずだ」

被害者自身にダイイングメッセージを残させるという手法は、確実性の低いものだ。現に俺たちがこれを見つけるまでに、数十件もの捜査を必要としている。それなら最初から自分で仕込む方が早いはず。

「それは、おそらく被害者の思い込みを利用したいからだ。

猟犬使いは、崇高な志やカードへの神聖視ともとれる発言をしている。これは直接的に宗教を意味するものではないが、被害者に宗教を意識させるには十分なものだ。死に際にダイイングメッセージを残そうというほど頭が回る被害者なら、まず間違いなく思い至るだろう。

その上で、誘導されていると思わない程度には死の恐怖によって冷静さを奪われている。そして警察やギルドは、この被害者の思い込みというフィルターを通した上でようやく犯人への手がかりを入

手する……。説得力は十分だろう、なんせ被害者が直筆で、自発的に残した証拠なわけだからな」

なるほど……。確かに、犯人が仕込んだダイイングメッセージでは、そこまでの説得力は生まれえないだろう。筆跡鑑定で、本人が書いたものかどうかは容易くわかる。そこで当人以外が書いたものとわかれば、逆に犯人への手がかりとなりかねない、か。

あるいは、被害者自身の思い込みに任せることによる情報のばらつきも期待しているのかもしれない。

崇高な志というキーワードは、宗教だけではなく革命とかそういった方面の団体も連想させる。

猟犬使いがそれらと無関係であるのなら、十分に捜査のかく乱になる。

だが……。

「現場にロザリオを残していたり、獲物の中に星母の会の信者を含めるのは露骨過ぎるんじゃないか？ 逆に疑いの目が逸れる可能性もあるだろ」

「これに関してはやり過ぎなくらいで良いのだ。あからさま過ぎるという理由で警察の容疑者リストから外れることはないし、何より『外野』が面白おかしく騒ぎ立てられる材料がありさえすれば良い」
「そうか……。マスコミか」

火のない所に煙は立たぬと言うが、煙さえ見つけければ火があると断定して記事にするのがマスコミというものだ。かつて迷宮内で儀式的殺人事件を起こしたという前科もある。犯人扱いには最適だ。

もし真犯人が逮捕され無実とわかった時には、自分たちが犯人扱いしたことなどコロリと忘れて今度は同情的な記事を出すに違いない。

どちらにせよ、話題にさえなればどうでも良いのだ。

もつとも……。

「マスコミにニュースにしてもらうという目的の方は空振りになりつつあるようだがな」

織部が嘲笑するように言う。

それはおそらく、迷宮消滅という政府が動かざるを得ないビッグニュースと重なってしまったからなのだろう。

なぜ獵犬使いが迷宮を消滅させたのかはわからないが、おそらく奴にとつてもイレギュラーな事態だったに違いない。

獵犬使いを確実に捕らえるため、政府が事件に対する情報統制をかけてしまったからだ。

小野がSNSで情報を集められたように、一年近くにも渡る犯行によつて世間でもこの事件は徐々に話題になりつつあった。

もし迷宮消滅の一件がなければ、今頃この事件は連日ニュースを賑わせていたことだろう。

そうなれば、目的は果たしたと獵犬使いは地に潜っていた可能性もあった。

「だがここまで星母の会をターゲットにしているということは……」

「ああ、獵犬使いは星母の会に何らかの恨みを持つ者である可能性が高いだろうな。単に罪を擦り付けるだけならば、他にもつと手こるで簡単な方法がある」

星母の会に恨みを持つ者か。パツと頭に浮かぶのはダンジョンア
ンチあたりだが……。

「それで、これからどうするんだ？」

獵犬使いが星母の会に恨みを持つ者、というのはわかった。問題

はそこからどうやって絞り込んでいくか、だ。
と、織部へと目を向けると彼女は両手を上に上げた。

「うん？ それは……？」

「お手上げ、という意味だよ。我々にはこれ以上できることはない」
「そ、そんなことはないだろ」

「では先輩は具体的にどうするべきだと？」

「それは……例えばダンジョンアンチで怪しいのを調べたり、ほら、
かつて星母の会で儀式的に殺害された人たちの遺族を調べたり……」

自分で言いながら、どんどん声量が落ちていくのがわかった。

織部が窘めるように言う。

「ダンジョンアンチというだけで片っ端から犯人扱いしていくつもりか？ 自分の家族を殺されたからと言って容疑者扱いされては遺族もたまったものではないだろうな」

「……そ、それは、そうだ！ 青木兄弟はどうだ？ アイツらには疑わしい点がある」

弟の方は彼女が行方不明だというのに自分で探しにもいかず、兄の方は俺が襲われた日に同じ迷宮に居た。

普通自分の彼女が行方不明となったら危険を承知で探しに行くものじゃないのか？ それを兄に止められたからと言って行かないなんて、まるで危険が待っているのが分かっているようではないか。
しかもあの日トレードしたカードは、猟犬使いも好んで使うライカンスロープのカードだ。

犯人と言い切ることはできないが、無関係と言い切れないはず。
ところが織部は首を振って言う。

「確かに青木兄弟は疑わしい点がある。だが、その疑わしさが猟犬

使いに繋がらないのだ。

例えば青木弟。もし彼が猟犬使い本人ないしそれと関わりがある人物だった場合、わざわざ自分の彼女を狙うだろうか？ カモフラージュのために襲ったとしても、捜索依頼など出さずに自分で探しに行くはず。その方が自然だからな。

次に兄の方だが、こちらも行動が大胆過ぎる。先輩とカードのトレードをした点は疑わしいが、殺す前にカードを奪う犯行の性質上わざわざトレードする必要はない。どうせ奪うわけだからな。にもかかわらず犯行の直前にトレードなどしてしまえば万が一先輩が生還してしまった場合、あるいは自分のことをダイニングメッセージとして残されてしまったら確実に警察の捜査リストに載ってしまう。どちらも迷宮外での自分の痕跡は絶対に残さないという猟犬使いのプロファイリングとは異なり過ぎている」

完全に論破され、俺は無言で天を仰いだ。

地道な調査で、猟犬使いが星母の会に恨みを持つ者、ということまでは突き止めた。

だが、限られた容疑者の中から、星母の会に恨みを持つ者という条件で絞るならばともかく、その条件で容疑者をリストアップするには範囲が広すぎた。

ここが、ただの高校生である俺たちにできる限界だった。

これがミステリー小説だったならば、犯人はこれまでの登場人物の中にいて、青木兄弟や星母の会の聖女当たりが犯人で解決したのだろう。

しかし、現実はそのままで甘くはない。

結局、アンナが言った通りだった。現実には犯人へたどり着くまでの道筋も用意されておらず、犯人も登場人物の中にあるとは限らない、か……。

「被害者の調査という方法で出来るのはここまで、というわけだ。あと残る線はと言えば……」

そこで織部がアンナへと目を向ける。

そうか、まだグレムリンの購入ルートという可能性があったか。

期待の眼差しを向ける俺に対し、しかしアンナは気まずそうな顔で言った。

「すみません、グレムリンの購入ルートについてなんすけど、途中で途切れちゃいました」

「途切れた、とは？」

「ギルドからグレムリンを買った人たちが、さらにどこに転売していったかを辿っていった結果、何人かに収束したのまでは確認できたんすけど……」

「けど？」

「その人たち、すでに迷宮で行方不明になっていました」

すでに、口封じ済みだったか。

場に、重い沈黙が落ちる。

最後の頼みの綱だったグレムリンの購入ルートも、途中で糸が切れてしまっていた。

もはや、俺たちにできることはない。

俺が再度一人で迷宮に潜ればあるいは猟犬使いをつり出せるか？

いや、たぶん引つかからないだろう。仮に引つかかったとしても、俺たちの知らない手段で逃げる可能性が高い。

ここが、限界か。

所詮、ただの高校生の俺たちに、警察でも捕らえられない連続殺人犯を捕まえるなどできなかつた、ということか。

事実は小説より奇なり、とは言うが、現実は小説よりもうましくないということなのだろう。

……ここらが引き時なのかもな。
見ず知らずの人だけではなく、クラスメイトにまで犠牲者が出てしまっている。

事件が収束するまで、大人しく待つべきなのだろう。
それが、賢明な判断というやつだった……。

――プルルルル！

消沈しながら迷宮を出たところで、ちょうど電話がかかってきた。
誰だろう、とディスプレイを見て俺は思わず目を見開いた。

――神無月 翼。そこにはそう表示されていた。

大会後に連絡先を交換はしたものの、あちらからこうして電話がかかってきたのはこれが初めてだった。

軽くアンナたちに断りを入れ、すぐに電話に出る。

「……はい、もしもし」

「やあマロ、久しぶり、元気にしてた？」

携帯越しに聞こえる中性的な声。それに、俺は無意味と知りつつ頭を下げ答えた。

「ええ……お久しぶりです――師匠」

電話越しに苦笑する気配。

「その師匠ってのはやめてよ。同い年なんだからさ」

「一応、俺なりに敬意を払ってのことなんですけどね」

「逆に息苦しいよ。指導も一通り終わったわけだし、普通にため口で良いつて」

俺は少しだけ迷った末、結局お言葉に甘えることにした。師匠の性格上、ただの社交辞令ということもないだろう。

「まあ、そっちがそう言うなら。それで、そっちから何の用だ？」

俺がそう言うと、師匠は軽い調子で言った。

「――ちょっと連続殺人犯、捕まえてみない？」

第二十三話 ちよつと連続殺人犯捕まえてみない？

「それにしても驚いたよ、マロたちがすでにこの事件を追っていたなんて」

そう言つて師匠は紅茶のカップを片手に笑つた。

電話をもらった翌日。俺たちは師匠に呼び出され街はずれの喫茶店へと来ていた。

師匠の行きつけだといふこの喫茶店は、他に客の姿もなくゆつくりとした時間の流れる良い雰囲気のお店で、そこで俺たちは互いの近況について報告し合っていた。

「それはこっちもツスよ。まさか先輩の師匠が――神無月先輩だったなんて」

アンナがそう言つと、師匠は相変わらず男か女がよくわからない綺麗な顔で微笑んだ。

「まあ、そもそも俺が知っているリンクの使い手なんて師匠くらいだしな」
「なるほど」

そう説明すると、アンナは納得したように頷いた。

俺が師匠に弟子入りしたのは、大会終わつてすぐのことだ。

あの大会でリンクの存在を知つた俺は、当然すぐにそれについて調べ始めた。

いくらリンクが公には秘匿されているとは言っても、この情報化社会で完全に秘匿することは難しい。

SNSやブログ、ネットの掲示板等を漁れば、その全貌はわからずとも何らかの手がかりは手に入るはず……そう考え調べ始めた俺だったが、その結果は芳しいものではなかった。

リンク、という単語くらいは見つけることができた。リンクの初歩の初歩であるテレパスリンクらしきことに言及している者もいた。だが、そこが限界だった。

それらしい情報があったとしても、リンクについて正しい知識を持たぬ俺では、ネット上で玉石混淆に存在する膨大な情報の中から正解を拾い上げることができなかったのだ。

これは独学では無理だ、と早々にお手上げ状態となった俺は、基本に立ち返ることにした。

すなわち、先達に教えを乞うことにしたのだ。

そこで頼ったのが、俺がリンクを知るきっかけとなった神無月だったというわけだ。

神無月とは決勝後に連絡先を交換してはいたものの、あまり頻繁には連絡を取っていなかった。

そういうわけで半ばダメ元で頼み込んだ俺であったが、予想に反し神無月は快く俺の弟子入りを認めてくれたのだった。

たった一つの条件と引き換えに……。

「それはそうとして、水臭いじゃないか、マロ。自分たちだけで冒険者部なんて楽しそうなことをしてるなんて。僕も誘ってくれればよかったのに」

拗ねたような顔をする師匠。

いや、そんなこと言われても……。

「師匠は別の学校だし……一応これ部活的なものなんで」

「はあ、羨ましいな。うちの学校はそういうの厳しいからなあ」

「そう嘆息する師匠だったが。」

「いやこつちも学校側からはストップかけられてんすけどね」

「そう苦笑するアンナ。」

「実際のところ、冒険者部云々というのは今のところ自称であった。」

「ああ、そうなのか。まあ、でもそれも猟犬使いを捕まえて、この事件を解決すれば変わるかもね」

「そう言って師匠は紅茶を一口啜った。」

「しかし、猟犬使いか。うん、上手いね、じっくりくる。ギルドで仮称と呼ばれていたアンノウンよりもセンスがある」

「アンノウン……」

「それが、ギルドが猟犬使いに付けた名前か。」

「確かに猟犬使いの正体不明さは、アンノウンと呼ぶに相応しいものだ。」

「だがまあ、俺たちとしては猟犬使いの方が奴を現す言葉としては相応しいだろう。」

「ところで、昨日の電話の件についてだけ……」

「俺がそつ話を切り出すと、師匠が表情を真剣なものへと変えた。」

「一言で言うと、猟犬使いはやり過ぎた」

と師匠は言った。

「一年で百名以上の殺害、一般には知られていない方法での迷宮への出入り、法律で禁じられた魔道具所持の疑い、それと……これは真偽が定かではないけれど、配下に呪いのカードと思われるカードを配布している疑いもある。どれも、迷宮と冒険者制度に依存した現代社会のシステムを破壊しかねないものだ」

師匠の言葉に俺たちはコクリと頷いた。

すでに百人以上殺している時点で犯罪史に残る大事件ではあるが、ある意味でそれ以上に問題なのが、その手段だ。

アメリカで冒険者制度が提唱された際、真つ先に議論の対象となったのが迷宮内での犯罪をどう防ぐか、であった。

人の良心に頼るには、カードと言う武器はあまりに強力かつ便利すぎ、また迷宮という空間は罪を擦り付ける対象に事欠かなかった。だが、軍だけのアンゴルモア対策には限界がある。

背に腹は代えられないと苦肉の策として設置されたのが、ライセンスとゲートによる出入管理であった。

一人目の犠牲は仕方ないものとし、しかし二人目の犠牲者はなんとしても防ぐ。

それが、ゲートの本来の意味。

ゲートのない発展途上国などでは、迷宮は完全に無法地帯と化している国もあるという。

だが、迷宮への出入りの方法が他にもあるとすれば、このゲートという対策も無意味となる。

その上これほどの大事件が起こり、さらには未解決事件として終われば冒険者制度そのものが問題視されかねない。

「世間で騒がれる前になんとしても猟犬使いを捕らえ、その技術を接収する必要がある……そう国とギルドは考えたんだろう。つい先

日猟犬使いに懸賞金がかけられた」

「懸賞金……」

日本ではあまり馴染みのない言葉だが、海外では賞金稼ぎなるれつきとした職業があると聞く。

主な仕事内容は二つ。一つは、保釈金を払って保釈されたはいいが、そのまま逃亡した被告人をとっ捕まえること。もう一つが、迷宮に逃げ込んだ犯罪者を警察の代わりに捕まえに行くこと。現在では後者としての役割の方が有名だ。

国土の広いアメリカでは、迷宮の数も比例して多く、さすがにすべての迷宮にゲートを設置することができずにいる。そんなゲートが無い迷宮へと逃げ込む者も多いらしく、そう言う場合は犯した罪、あるいは保釈金に応じた賞金がかけられる。

この賞金が割と高額らしく、カードのバリアがある分迷宮外で犯罪者を捕まえるよりも安全に稼げると、アメリカでは退役軍人などを中心に人気の職業なのだとか。

「で、猟犬使いの賞金っていくらぐらいなんスか？ 百人以上殺しているわけだし……三億とか？」

アンナがそう言うと、師匠はピンと人差し指を立てた。

なんだ……一億か、案外低いな。俺がなぜか少しだけがつかりしている……。

「いや、百億だ」

『百億！？』

俺たちは思わず大声で叫び、慌てて口を押えた。

周囲を見渡し、他のお客さんがいないこと、アンナの防諜の魔道具を起動していたことを思い出し、ホッと胸をなでおろす。

それから、改めて師匠へと問い返した。

「百億って……マジ？」

ちよつと常識はずれな金額だ。百億って……海外のマフィアのボスとかでも数億円だぞ。百億の賞金首ともなれば、世界的ニュースになっていてもおかしくないはずだが……。

「知らなくても無理はない。これは、ギルドが猟犬使いと関わりがないと判断した一部のプロ冒険者に出されたクエストだからね」「プロ冒険者のみということは、師匠は……」

「うん、つい最近、ようやくね」

そう言つて師匠は四ツ星の金色のライセンスを見せてきた。俺たちは軽く拍手をしつつ言う。

「おめでとつございます」

「うん、ありがとう」

そうか、もうプロになっていたのか。まあ時間の問題だったしな。俺がリンクを教わっていた時点で、師匠は百種のDランク迷宮の踏破と筆記試験はすでに合格し、残りの条件はCランクカードの枚数と実技試験だけとなっていた。

それから数か月、師匠ならとくにクリアしていてもおかしくない。い。

とはいえ、学生でプロというのは普通に快拳だ。もしかすると、最年少合格なのではないだろうか？

「というわけで、今、猟犬使いを捕まえるために日本全国から続々とプロチームが集まって来ているんだけど……」

そこで師匠はわずかに口ごもるようなそぶりを見せた。

「正直……いくら何でも百億の賞金は高すぎる。これはAランク迷宮の踏破賞金と同額だ。しかも満額支払われるのは生け捕りの場合のみ。猟犬使いは、僕たちが思っているよりも大きな秘密を握っている可能性がある。例えば――」

そこで師匠はニヤリと笑う。

「この前の迷宮消滅の件とか、ね。実のところ、賞金以上にそつちに興味がある冒険者も多い」

Aランク迷宮の踏破に百億の賞金が懸けられているのは、それが誰も踏破したことがないからというのものもあるが、その先に迷宮消滅の鍵があるのではないかと期待されているからだ。

そこへきてこの前の迷宮消滅事件とAランク迷宮の踏破賞金と同額の賞金だ……邪推するなという方が無理な話であった。

「そこで、そういった冒険者を集め、確実に猟犬使いを捕らえるべく包囲網を敷くことにした」

「包囲網……ツスカ？」

アンナが怪訝そうな顔をする。

それもそうだ。正体不明の手段で迷宮を出入りする猟犬使いをどうやって包囲するというのか。

そんな俺たちへと師匠は書類の束を取りだした。

「ギルドや警察も別に遊んでいたわけじゃない。これを見てくれ」

「これは……迷宮の地図？」

それは数十種にも及ぶフランク迷宮の地図だった。右下にギルドの赤い判子が押されていることからギルドから書類を借りてきたのだろう。

「猟犬使いによる被害者が出た迷宮のマップを日付順に並べてある。これの最初と最後の方を見比べて、何か気づくことは？」

そう言われても……俺とアンナは困った感じで顔を見合わせた。

一見、普通の迷宮と変わらないように見える。強いて言うなら、森林系の迷宮が多いというくらいか。そういえば、佐藤翔子さんが犠牲になった迷宮も俺が襲われた迷宮も森林のフィールドだったかだが、地図には墓地や洞窟も普通に混じっている。あまり関係はないだろう。

が、そこで織部が言った。

「これは……まさか相似迷宮か！」

「ご明察」

師匠が満足げに頷いた。

「小夜、その相似迷宮って？」

「相似迷宮とは、その内部構造が極めて酷似した迷宮のことだ。階層の順番こそバラバラだが、一つ一つ階層自体のマップはほぼ同じなのが特徴だ。その原因は定かではないが、一説には親となる迷宮が同じだから、と言われている」

ハッ、と四之宮さんを助けた時のことを思い出す。

そう言えば、あの時の迷宮と佐藤翔子さんの迷宮もそのマップが酷似していた。

あれは、あの二つが相似迷宮だったからなのか。

「被害者の襲われた迷宮がすべて相似迷宮だということは、まさか獵犬使いは相似迷宮を行き来できるのか？」

「迷宮間の行き来？ そんなことができるのか？」

「わからん……だがそう考えればゲートに出入記録が残らない理由もわかる。別の迷宮から出入りしているわけだから……」

織部がそう言うと、師匠も頷いた。

「少なくとも、ギルドは相似迷宮を行き来している可能性が高いと考えているようだ」

「……ということは、すでに犯人を特定しているのでは？」

「えっ!？」

織部の言葉に、俺は驚愕した。

獵犬使いをすでに特定している？ そんな馬鹿な。……いや、待て。そうか……。

「もしも獵犬使いが相似迷宮を行き来してゲートの出入管理を誤魔化していたとしても、犠牲者が出た時に他の相似迷宮に入っていた時の記録が残るはず。その情報を積み重ねていけば犯人が特定できるということか」

「そういうことだ。珍しく冴えているな先輩」

珍しくは余計だ。……実際珍しいがな！

しかし、師匠は首を振り否定した。

「ところがそう簡単にはいかなかった。確かに、被害者が迷宮に潜っている時に限ってその相似迷宮に潜っている者たちは確認できた。

だが……それから犯人を特定することはできなかったんだ。なぜなら……」

そこで師匠は怪談を語るかのように声を潜めた。

「彼らはすでに死者だったからだ。十年前の第二次アンゴルモアでね」

十年前にすでに死亡している？ そんな馬鹿な……いや。

姿を変える魔道具を使えば監視カメラの映像は何とでもなる。変身や幻影の類の魔道具は法律で所持を禁止されているが、ここまでやっている犯人がそれを気にすることはないだろう。

だが……。

「監視カメラの方はそれで誤魔化せるとしてライセンスの登録の方は？ いくらなんでも死人の戸籍でライセンス登録はできないはず」「残念ながらそちらの方も空振りだった。猟犬使いは、どうやらゲート……というか機械に誤作動を起こさせる魔道具を所持しているらしく、出入記録に残されていたのは出鱈目なものだった」

……そうか、と小さく落胆する。

まあ考えてみればそちらから特定できていたならとくに猟犬使いは捕まっている。この話をされている時点で意味のない問いだったか。

しかし、機械を誤魔化す魔道具とは……機械破壊の亜種だろうか？ そんな魔道具聞いたことないが、もはや猟犬使いが何を使ってきたとしても驚かなくなってきた。

そこで、俺は微かな違和感を覚えた。猟犬使いが機械を誤魔化す魔道具を持っていたとして、なぜ監視カメラの映像の方はそのままなんだ？ 完全に誤魔化すことができるなら、監視カメラの映像も

弄ることができるはず。

直接触れたものだけ、あるいは出入りに関することだけを騙すことが出来る能力なのか？

「ただ……」

と師匠は言う。

「さつきも言った通り、警察やギルドも遊んでいたわけじゃない。獵犬使いが新人を狙っていることはマロたちも調査して知っていると思うけど、新人冒険者の名簿を獵犬使いに横流していたものを持定した。……つまり、ギルド内の内通者だ」

「ギルドに内通者が……」

場に重い沈黙が落ちる。

まさか……というより、信じたくない気持ちだった。冒険者ギルドとは言え、人の組織。中にはろくでなしもいるだろうが……まさか公務員が百人以上もの連続殺人事件に協力していたなんて。

「協力者、と言っても彼自身は獵犬使いの正体も、その目的も知らなかったようだ。単に、小遣い稼ぎ程度の気持ちでやっていたそうだ。それが連続殺人の手助けだったと知って、青ざめていたそうだよ」

なるほど……協力者というよりは利用されていた、って感じか。

「……もしかして、その不正職員って御手洗っていう名前じゃないツスか？」

アンナがそう言うと、師匠が驚いた顔をした。

「そうだけど……もしかして知り合いかな？」

「知り合い……というか」

チラリとこちらを見るアンナ。

「もしかして、グレムリンの購入ルートの情報源か？」

「はい」

なるほど、どうやら普段からそういうことをしていた奴のようだ。

「作戦は、この内通者を逆に利用して行う。詳しくはこれを」

そう言っつて師匠は作戦書を俺たちへと配った。

大まかな内容は、こうだ。

まずは、ギルド内の内通者を通じて偽りの新人冒険者の名簿を流す。その大半はダミーの架空の人物だが、一部本物の人間、こちら側の罠が仕込まれている。罠は、メディアへの露出がないプロ冒険者、あるいはそれに準ずる実力を持つ協力者などが務める。

次に、すでに名簿を流された新人冒険者たちに極秘裏に連絡を取り、当日は迷宮に潜らないようにした上で、指定の迷宮に罠役の冒険者たちが潜る。

その罠に引っかかり迷宮にのこのこやってきた猟犬使いを、警察が確保できればそれでよし。作戦は大成功だ。

もつとも、訪れた冒険者を片っ端から捕まえることはできない——そんなことをすれば無実の冒険者を捕まえている様子を見た猟犬使いが逃げてしまっただろう——から、本命はその次、迷宮内での作戦がメインとなる。

「囿役の冒険者たちが潜る迷宮と、そのすべての相似迷宮にはプロ冒険者たちが待ち伏せている。」

「畏に気づき、地上へ逃げればそこで警察が確保。他の相似迷宮へ逃げたとしても、そこには他の冒険者たちが待ち伏せをしている。袋小路というわけだ。」

「相似迷宮は、都内で見れば一種につき数件しかないが、全国で見れば数十件ある。そのすべてに警察官とプロ冒険者を配置するのだから、極めて大規模な作戦である。」

「気になる賞金についてだが、実際に猟犬使いを捕まえられた者が二十億を、残りの八十億は山分けとなる。分配は、プロ冒険者一人当たりで計算し、チームでプロ判定のチームは一人分として扱う。大体、一人当たり一億円強、といったところか。」

「いくつか質問があるんすけど」

「読み終わったらしいアンナが拳手した。」

「どうぞ」

「では、囿役の冒険者はどうするんすか？ 囿役は一人で行動するわけで、危険性が高いッスよね？」

「囿役は各チームが用意する。僕たちのチームでは、元自衛官の僕の姉が担当することになってる。作戦としては猟犬使いを迷宮に誘い込めれば半ば成功なわけだから、猟犬使いに襲われたと判断した時点で転移のマジックカードで仲間と即合流する手はずだ」

「なるほど、次に賞金満額が支払われるのは生け捕りの場合のみって話ッスけど、もし猟犬使いが自害とかした場合はどうなるんすか？」

「猟犬使いが自害した場合は、賞金は一億円に減額される。各チー

ムに分配することを考えれば、ほぼタダ働きだね。万が一、冒険者たちが殺害してしまった場合は、凶悪犯であることを鑑みて罪には問われないが、賞金はなし。完全にタダ働きだ。他のチームからは経費を請求される可能性もあるかもね。突っぱねても良いけど、恨みを買つかも」

……一億に減額とは、ずいぶん厳しいな。確実に生け捕りにしろって言っているようなものだ。

「なるほど……次に、ウチらの取り分はどれくらいツスか？」

「それについてだけど、僕と姉さんで半分、そっちの冒険者部で半分でどうかな？」

師匠たちで半分、冒険者部で半分？ ずいぶんと気前が良いな。

そんな想いが顔に出ていたのか、師匠が苦笑しつつ説明してくれた。

「実のところ、この作戦に参加する最低人数が決まっているんだ。プロクラスが確保と囷役で最低二人、さらに三ツ星が二人の四名以上でないとな戦に参加させてもらえない決まりなんだ。そしてプロになったばかりの僕ではプロはおるか三ツ星の知り合いも少なくともね」

ああ、そういうことだったのか。と俺は納得した。

師匠の性格から言って、大抵のことは一人でこなそうとするはずにもかかわらず、俺にまで頼ってくるなんてずいぶん切羽詰まっているな、とは思っていたのだ。

単純に、人手が足りないというのなら、俺にまで話を持ってきた理由も頷ける。

「最後に、作戦日についてなんすけど」
「今のところ、約三週間後の日曜日という話になっている」

約三週間後の日曜……ちょうど満月の日か。蓮華たちの復活用カードが届くのは今週末。作戦日までには余裕で間に合うな。まだ成長限界となっていないカードの戦闘力の底上げもできそうだ。俺のパーティーに限ってはベストコンディションで作戦日を迎えられそうだった。

……もつともそれは、同じくライカンスロープを使う獵犬使いも同じことだが。

おそらく、相手にとっても都合の良い日を選ぶことでより確実におびき寄せようというのだろう。

「うちからは以上ッすけど、先輩や小夜からは何かありますか？」

「我は特にない」

「じゃあ、俺も一つ。……ぶっちゃけ、なんでこの作戦を冒険者に任せるんだ？ 自衛隊に任せれば百億の賞金も払わなくて良いし、確実に安上がりじゃないか？」

「おそらく、だが……」

俺の疑問に答えたのは、師匠ではなく織部だった。

「冒険者制度存続のため、ではないか？ このまま自衛隊が解決してしまえば冒険者はただ被害に遭っただけだ。世間の目も冒険者制度に対する非難しか残らない。だが、冒険者自身の手で解決したとなれば、冒険者制度に対して賛否の両方の評価が与えられる」

「……ま、そんなところかな」

織部の推測に、師匠は薄く笑みを浮かべてカップに口を付けた。俺はその仕草に微かな違和感を覚えた。

……なにか、はぐらかした？　いつもの師匠なら合っていればはつきりとそう言うはず。こんな量した言い方はしない。

深く突っ込むべきか、いや、師匠が言わないということはそれなりの理由があるのだろう。例えば依頼の守秘義務だとか。

「で、受けてくれるかな？　もちろん、できる限り猟犬使いとの戦いでは僕が矢面に立つつもりだ」

「ちょっと待ってくれ。確認を取る」

「わかった。じゃあ僕は席を外そうとしよう」

師匠が一旦店外に出たところでアンナたちへと問いかける。

「……どうする？　降りるなら、今だぞ？」

これまで俺たちは、どちらかと言うと迷宮外で猟犬使いを見つけ出すという方向で動いてきた。

だが、今回の話は、猟犬使いと直接対決をする可能性が高い。

……獅子堂の遺体を見てから、本当にアンナたちを巻き込んで良いものか、という迷いが強くなってきた。

今更、と言われるかもしれないが、それでもまだ引き返せるラインだ。

死んでいないならば、セーフだ。それが、すべて。

そんな俺にアンナたちは呆れた顔で。

「何を言うかと思えば、ここまで来てそれはないツスよ、先輩」

「そんな覚悟は、とっくに決まっている。最初に、猟犬使いを追うと決めた時にな」

「そうか」

俺は苦笑した。まあ……そう言われる気はしていた。

ここまで捜査に協力してくれた二人ならば、最後までやると言うだろう、と。

そもそも、他人にやめると言われてやめる人種なら、冒険者になどなっていない。

「それに、先輩はウチらが降りると言っても自分だけ受けるつもりだったんでしょ？」

「ああ」

この話を師匠が持ってきた時点で、俺はこれを受けることを決めていた。

それは、猟犬使いとの決着をつけたいという想いもあったが、師匠との約束があったからだ。

師匠が困っている時、一度だけ助ける。それが、リンクを教えるもらうための条件。

故に、俺だけは降りるつもりはなかった。

「そもそも、ぶつちやけ猟犬使いと戦うとは限らないツスからね。迷宮で待機してるだけで何千万円も貰える仕事を降りる奴なんていないツス」

「それもそうか」

猟犬使いの転移がどういう仕組みなのかはわからないが、どの相似迷宮にも転移できるとすれば、俺たちの迷宮に来る確率は数十分の一だ。

俺たちの迷宮に来たならば、この手で決着をつけるだけ。来なければそれはそれで美味しい。これはそういう話だった。

俺は師匠を呼び戻すと、言った。

「この話、ぜひ受けさせていただきます」

第二十三話　ちょっと連続殺人犯捕まえてみない？　（後書き）

【Tips】賞金稼ぎ

日本ではあまり馴染みがないが、海外において罪を犯した冒険者を捕らえるのは警察官ではなく冒険者の仕事である。これはすべての迷宮にゲートが設置されている日本とは異なり、海外……特にアメリカや発展途上国ではゲートが設置されていない迷宮も多く、そこへ犯罪者が逃げ込むことも多いからである。

日本においては、賞金は精タイレギュラーエンカウントに掛けられる位で、その額も出現した迷宮に応じて一定である。

だが、もしもう一度アンゴルモアが起これば日本もすべての迷宮にゲートを設置することはできなくなり、日本においても賞金稼ぎ制度を導入しなくてはならなくなるだろう、と言われている。

第二十四話 地獄への道は善意で舗装されている

師匠と会ってから数日後。

俺は一人自宅最寄りのDランク迷宮へとやって来ていた。

今日ようやく、遠野さんに頼んでいた座敷童とレディヴァンパイアのカードが届いた……蓮華たちを復活させる日が来たのだ。

そつと指先で彼女たちのソウルカードを撫でる。

本当に、長かった……。

あの猟犬使いの襲撃からどれだけの時間が経っただろう。蓮華の生意気な態度とイライザの笛の音色が、なぜか無性に懐かしい。

……蓮華たちを失い、一つ気づいたことがある。

それは、北川歌麿という冒険者としての核にあるのは俺自身ではなく、蓮華たちだったということだ。

冒険者、カードなければ、ただの人……なんて言葉がある。

冒険者なんて言っただけで調子に乗っていてもカードを全部失ってしまったらただの一般人、という昨今の冒険者ブームを皮肉った言葉だが……俺に限ってはまさしくその通りだった。

もし蓮華たちをすべて失えば、北川歌麿という冒険者は死ぬ。

たとえ違うカードを手に入れ冒険者業を続けても、それは同姓同名の別人だ。

なぜなら、『蓮華たちと共に前へと進んでいく』という想い、それこそが俺の冒険者としての核だからだ。

カードパックで蓮華たちを引き当て、ハーメルンの笛吹き男との遭遇、師匠との激闘を経て、俺の人生観は大きく歪められた。

蓮華たちがもたらしてくれる予想もつかない驚きと、危機を乗り越えた時の一体感……もはや、それ無しでは俺は生きてはいけない。麻薬やギャンブル、スリルに対する中毒性とはまた少し違う……

欲求。

アンナたちと共に危険な連続殺人犯を追っていても、その欲求が満たされることはなかった。

心にぽっかりと穴が開いた感覚。

蓮華たちがいなくては、俺は駄目なのだ。

蓮華の持つ特別なナニカが俺に普通ではありえない幸運と、その揺り戻しとも言える不幸をもたらしていることには気づいている。それでも俺は迷宮に、蓮華たちに会いに行かずにはいられない。たとえ、その果てに破滅が待っていたとしても……。そういう意味では、まさしく蓮華は呪いのカードだった。さあ、そろそろ呼び出すとしよう。

「……来い、蓮華！」

復活用のカードが溶けるように消え去り、蓮華のカードが色を取り戻す。

久方ぶりに姿を現した蓮華は、初めて会った時のようにヤンキー座りで……。なぜかこちらを強くガンつけていた。

「れ、蓮華……？」

「……てめえ」

なぜだか酷くご立腹な様子の彼女に恐る恐る呼びかけると、ゆらりと立ち上がって俺の胸元を掴んできた。

「なんで最初にアタシを復活させねーんだよ、コラ！ 普通こいつうのは真っ先に……チツ！ なんでもない！」

何かを言いかけ、途中で舌打ちして手を放す蓮華。

……もしかしてコイツ、自分を最初に復活させなかったことを拗

ねてんのか？

「悪かったよ、どうしても一体復活させる必要があったからさ」

「……それで、なんでメアなんだよ？」

「そりゃあ……」

一番安かったから、と言うのは失礼な気がして口ごもっているところ……。

「ま、今回は大目に見てやる。獵犬使いとの決着にも間に合ったみたいだしな」

その言葉で、先ほどから感じていた違和感の正体に気づいた。

「お前、ソウルカードの状態でも外の様子が分かっていたのか？」

「言っただろうが、その眼を通じて見ていてやるってな」

そんなん言ってたっけ？ と俺が首を傾げていると……。

「そんなことより、イライザの復活も用意ができてんだろ？」

「あ、ああ……そうだな」

疑問については後回しにすることにして、俺は一先ずイライザを復活させてやることにした。

「来い、イライザ！」

カードが光を放ち、美貌の女吸血鬼が姿を現す。

彼女は少しの間茫洋と視線を漂わせていたが、俺たちを視界に捉えるなりすぐさま足元へと跪いてきた。

「マスター、申し訳ありません。不覚を取りました」
「不覚なんて取ってないだろう。お前は精いっぱいやってくれたよ。おかげで俺もユウキも無事に逃げ切れた」
「マスター……」

俺がしゃがみ込み視線を合わせてそう言うと、イライザはその真紅の瞳を微かに揺らした。

「……今度こそ、守って見せます。我が身に代えても」

そう彼女が力強く言った瞬間、カードが光を放った。

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】840（MAX!）

【先天技能】

- ・ 膏血を絞る
- ・ 夜の怪物
- ・ 中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・ 絶対服従
- ・ 多芸（性技、演奏、罨解除、礼儀作法、武術）
- ・ フェロモン
- ・ 奇襲
- ・ 静かな心
- ・ 庇う 献身の盾（CHANGE!）
- ・ 精密動作
- ・ 中等補助魔法
- ・ 魔力強化
- ・ 詠唱短縮

・直感

献身の盾。有名な防御系の上位スキルで、自身の頑丈さと生命力を向上させ近くの仲間のダメージを肩代わりすることができる……という効果だったはずだ。

いずれイライザにも取得させたいと思ってずっと訓練を積ませてはいたが、このタイミングで目覚めるとは……彼女の強い決意が最後の一押しとなったのだろうか。

「そうだ、みんなも呼んでやらないとな」

そう言っつて、ユウキ、メア、鈴鹿、ドラゴネットとレギュラーメンバーたちを次々と召喚していく。

「蓮華さん！ イライザさん！ 復活できたんですね！」

「よお、ユウキ。ランクアップしたんだな、おめでとう」

「蓮華！ へへへ！ 私が最初に復活させてもらったんだよ、羨ましいでしょ」

「ああん？ そんなことで喜ぶとか、いろんな意味で安い女だな」

「はあ！？ どういう意味よ！」

「心も体も安いって意味だよ」

「なんだと、コラー！」

「やんのか、オラッ！」

一気に賑やかになったのを見て苦笑していると、憂鬱そうな声で後ろから鈴鹿が声をかけてきた。

「あゝあ、これですっかり元通り。これで私も脇役に後戻りかあ。

いや、元々主役にはなれていなかった、か」

「鈴鹿……」

「ねえ、マスター。もしロストしたのが私だったとしてもちゃんと復活させてくれましたか？」

「当たり前だろ」

俺は即答すると、一枚のカードを取り出した。

【種族】橋姫

【戦闘力】450

【先天技能】

・可愛さ余つて憎さ百倍：自身の負の感情を増幅させ、呪力へと変換する。呪術の威力を大きく強化する。 マスターや仲間への情が深いほど出力向上。

・丑の刻参り：対象の耐性をある程度無視して強力な呪術攻撃を行う。使用中、敵に見られた場合、呪い返しされる。

・千変万化：変幻自在な鬼の肉体。外見だけでなく気配や言動までも模倣可能。頑丈、怪力、自己再生を内包する。

【後天技能】

・良妻賢母：妻や母として理想的な技能をすべて備えている。…
…ただしその愛を裏切らない限り、だが。料理、清掃、育児、性技を内包する。

・追跡：マーキングした対象の気配を追跡することができる。

・虚偽察知：対象の偽りを見抜く。

「これは……」

カードを見た鈴鹿の目が見開かれる。

橋姫。鬼・神仏系のCランクカードだ。

遠野さんとの取引で俺が三枚目に選んだのは、鈴鹿のランクアップ先となるカードだった。

正直、リストには装備化のスキルを持つデュラハンなど他にも魅

力的なカードが多かった。

それでもこのカードを選んだのは、鈴鹿に少しでも自信を持って欲しかったからだ。

彼女は俺のことを『モブ仲間』だと言う。特別なモノを持たない同士ののだと。

俺は、モブキャラとは、『自分に自信のない者』だと考えている。自分に自信が持てないから、何事にも積極的に挑戦していくことができず、結果『その他大勢』に埋もれていってしまう。それが、モブキャラという性質の正体。

冒険者になつて、蓮華たちと出会い、スクールカーストではトップとなった今となつても、俺はいまだにモブキャラのままだ。

なぜなら、俺は俺自身に何の自信も持っていない。

ただ、特別なカードたちを持っているだけだ。外付けの、特別。

鈴鹿が俺をモブ仲間だと呼ぶのは、それを見抜いていたからなのだろう。

だが、その何が悪いのか。

自分のカードが誇りで何が悪い。俺のカードは凄いだらうと自慢して何が悪い。

俺は、鈴鹿にも自分が俺の自慢のカードの一枚であること知ってほしかったのだ。

これで彼女が自分に自信を持ってもらえるならば、安いものだった。

「うちのマスターはどうやら……」

鈴鹿が、泣きそうちに歪む顔を誤魔化すように笑って言う。

「カードを才とす才能があるようだ。……女心はわからないみたいだけど」

「うるせーよ」

彼女の頬を一筋の涙が伝ったのは……見なかったことにしてやることした。

【種族】橋姫（鈴鹿）

【戦闘力】630（+180UP！）

【先天技能】

- ・可愛さ余って憎さ百倍
- ・丑の刻参り
- ・千変万化

【後天技能】

- ・目隠し鬼
- ・武術
- ・見切り
- ・良妻賢母（NEW！）
- ・追跡（NEW！）
- ・虚偽察知（NEW！）

橋姫となった鈴鹿は、その外見に大きな違いは起きなかった。

額から出ていた短い一對の角が大きく反るように伸びたことくらいか。

「ふふ……姿に関しては、マスターが気に入っているようなのであまり変化しないようにしてあげたよ。橋姫をベースにすると胸が小さくなりそうだったしねえ」

「そ、そうか……」

俺は内心で「よくやった！」と叫んだ。

「そういえばマスター、その眼についてだけど」

ふいに、鈴鹿が俺の顔を覗き込む。

「俺の眼がどうかしたか？」

「……実際に見た方が早いかな。アイツのカードを見てみたら？ たぶん今なら見られるようになってるはずだし」

アイツ？ 蓮華のことだろうか。と思いカードを取り出してみと……。

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】800（MAX！）

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し
- ・かくれんぼ
- ・中等回復魔法

【後天技能】

- ・明星の瞳（UNLOCK！）
- ・霊格再帰
- ・自由奔放
- ・中等攻撃魔法
- ・詠唱短縮
- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・中等状態異常魔法

そこには、見覚えのないスキルの名が記されていた。

復活の際に新たに取得したのか？ いや、新たに取得したスキル

は、マスターが配置を変更しない限り一番下に追加されていくし、NEW！ という表記が出るようになってる。

それが一番上にあるということは、霊格再帰……零落スキルよりもさらに前から持っていたということだ。

それにこのUNLOCKという初めて見る表記……封じられていた、ということなのか？

明星の瞳……眼……？ まさか、俺が幽霊を見ることができたのは、このスキルによるものか？ なぜ、人間の俺がカードのスキルを……。

そんな俺の耳元で、鈴鹿がそつと囁いてくる。

「アイツ自身はマスターに好意的なようだけど、その中に眠るモノまでそうだとは限らない。往々にして、地獄への道は善意で舗装されているもの……あまり気を抜かないようにね」

「それは、どうい……」

俺が聞き返そうとしたその時。その時。

「あー！ 鈴鹿がランクアップしてるー！」

突如、メアが大声を出した。

蓮華とじゃれ合っていたメアが、鈴鹿がランクアップしていることに気づいてしまったのだ。

「ユウキの次は私じゃなかったの！？ なんでなんでなんで！？ マスター！」

「あ、いや……偶然手に入ったから」

メアの猛抗議の相手をしているうちに、鈴鹿は巻き込まれてはたまらないとばかりにスルリと離れて行ってしまった。

「サキユバスなんてそう簡単に手に入るかよ。諦めろ、お前のランクアップは最後だよ」

「最後！？ このドラゴネットよりも後ってこと！？」

「えっ……自分でありますか？」

「いや……たぶん、ドラゴネットの次に新入りが入ればその次かもな……」

「そんなあゝ」

そんな風にメアを揶揄っている蓮華を見ると、ふと目が合った。

なんだよ、と声を出さずに唇の動きだけで問いかけてくる。

それに俺は何でもないと首を振った。

地獄への道は善意で舗装されている、か。

だとしても、その道を歩むと決めたのは俺自身のはず。

ならば最後まで信じて進むだけだった。

それから作戦日までの二週間。

俺は師匠と二人で、修行に最適だという迷宮へと潜り続けた。

普段は自衛隊が管理しており一般人はプロの冒険者しか立ち入りが許されないというその迷宮は、一日百万円の入場料及びドロップアイテムはすべて没収という厳しい条件と引き換えに、各階層に毎日一体ずつカーバンクルが確定で出現するという経験値稼ぎには最適な迷宮だった。

高額な入場料を取られた上に一個数百万円で売れるガーネットをすべて没収された時は少しだけモヤッとしたが、まあここは自衛隊の訓練場兼ガーネットの採掘場という扱いらしいので、修行に使わせてもらえるだけ有難いと思うことにした。

ちなみに、入場料についてだが、報酬の前払いということだ師匠

から借金させてもらった。

本来、親しき仲とは言え金の貸し借りは俺の主義ではないのだが、今回は借金返済の目途が立っていることと、作戦の成功率を上げるためだと妥協することにした。

もし他のチームが獵犬使いの自殺を許したり殺害してしまった場合は、ちよつと困ったことになるが、まあその時はその時である。

その甲斐あつてか、鈴鹿（MAX900）、ドラゴネット（MAX340）の二枚は成長限界まで育て切った。

ユウキは残念ながら成長限界まで育てられなかったが、それでも戦闘力は1370に、その二枚の眷属のライカンスロープたち――蓮華たちの復活資金用にライカンスロープをキープしておく必要がなくなつたため、残りの一枚もユウキへと取り込ませた――もそれぞれ600前後まで育成出来た。

鈴鹿たちの育成を終えた後は集中的にユウキたちを鍛えたにもかかわらず、育て切れなかったということは、真眷属召喚の必要経験値増加のデメリットは俺が思っているよりも重いのかもしれない。なお、新しい方の眷属の名はシロ。最初の頃のユウキを連想させる、やや弱気な印象を受ける白髪の少年だ。

シロは最初から従順だったためユウキの洗礼を受けることもなく、クロもようやくできた弟分をよく面倒見ている。末っ子が得をするのは、カードの世界も同様のようだった。

そしてついに作戦の日がやってきた。

第二十四話 地獄への道は善意で舗装されている（後書き）

【Tips】シークレットダンジョン

迷宮はそのすべてが公開されているわけではなく、希少な魔道具がドロップしやすい迷宮や、人気のあるカードが出現する迷宮は、国益の観点から国に独占されている。そうした軍の管理する迷宮をシークレットダンジョンと呼ぶ。

冒険者に公開されている迷宮は、国からすれば旨味のない迷宮であり、それらの迷宮のアンゴルモア対策を冒険者たちに任せることで、限られた軍の戦力をリターンの大きい迷宮に集中させるのが冒険者制度の目的の一つである。

シークレットダンジョンの一部は、プロ冒険者に限り公開されているものもあるが、ドロップアイテムの持ち出しの禁止や高額な入場料など様々な条件付きのモノとなっている。

第二十五話 人の口に戸は立てられぬ

作戦日、当日。最下層の安全地帯にて。

俺たちは明け方からダンジョンマートの搬入業者を装って迷宮へと入り、待機していた。

「先輩、何を讀んでるんスカ？」

「ん？ ああ、ちよっと週刊誌の雑誌をな」

作戦開始までの暇つぶしに行き掛けにコンビニで買ってきた雑誌を讀んでいると、アンナが声をかけてきた。その斜め後ろには、織部が静かに佇んでいる。

「……迷宮内連続殺人事件を追う！ 某カルト宗教団体による儀式的犯行か！ ツスカ」

アンナが、俺の讀んでいたページの見出しを讀み上げる。

「結局、ニュースになっちゃいましたね」

「まあ、政府の情報統制も完璧じゃないってことか……最近は何ッともあって、一度漏れたら止められるものでもないしな」

この二週間ほどで、世間ではだいぶ情勢が変わってきた。

これまでおそらく政府によって情報統制されていた事件についてのニュースが流れ始めたのだ。

きっかけは、二週間ほど前、被害者の遺族がネットに投稿した動

画だった。

——息子は、迷宮でモンスターに殺されたのではない、他の冒険者によって襲われたのだ。

そう主張する彼らは、ここ一年ほどで行方不明になった一ツ星冒険者の数や、息子が残したダイイングメッセージとも言える手記を公開し、情報提供を呼び掛けた。

その動画はSNSなどで話題になり、同じく我が子を失った遺族たちやその友人、恋人たちが次々と声を上げ始めた。

某匿名掲示板などでスレが建てられ、祭りになると勢いはさらに加速。

この辺りからもはやメディアで報道しないわけにはいかなくなつたのか、週刊誌やTVなどで一斉に事件について報道し始めた。

その中で、他の被害者によって残されたダイイングメッセージや、被害者の中に星母の会とつながりのある冒険者サークルに所属していた者が多いことが明らかになると、まるで星母の会の犯行で確定であるかのように世間では扱われるようになった。

そしてとうとう先日、世間の声を受け星母の会の代表や幹部たちが警察で事情聴取をされることとなった。

つまり、星母の会に世間の疑いの目を向けるといふ猟犬使いの目的は達成されてしまったのである。

これにより目的を果たした猟犬使いが地に潜ることが危惧されたが、幸か不幸か、奴の犯行は続いた。

動画の取れ高を狙ったダンジョンチューバーの一人が、動画撮影中に帰らぬ人となったのだ。

これだけ騒ぎになっている中、犯行が続けられるわけがないと考えたか、あるいは自分だけは大丈夫だと高を括ったのか……。

彼が撮影していた動画は例によってグレムリンに破壊されていたため、何を考えていたのかはわからないが……問題は、これを面白

がった底辺ダンジョンチューバーの一人が同じように迷宮に潜り、無事に生還してその動画を投稿した結果、それがバズってしまったことだ。

これにより底辺ダンジョンチューバーたちが話題を求めて次々と迷宮へと潜り始めるといふ事態が発生。

そうしたダンジョンチューバーの中から何人か犠牲者が出ても彼らの勢いは止まらず。

結果として、こちらの囮作戦が全く不自然でなくなるという皮肉な状況となってしまうたのだった。

……ちなみに、だが。

この騒ぎのきっかけとなった、情報提供を呼び掛ける動画を投稿した遺族の名を、獅子堂と言った。

凶悪犯に襲われながらもダイイングメッセージを残した勇敢な高校生と話題となった被害者の名は、獅子堂 剛。

獅子堂の葬式については俺も当然参列させてもらったが、その際ご両親には恨み言一つ言われることなく、むしろ「危険を省みず息子の捜索クエストを受けてくださってありがとうございます」とお礼を言われてしまった。

獅子堂が冒険者となったのは、間違いなく俺の影響があるにもかかわらず、だ。

彼の葬式にはウチの学校からだけではなく、中学や小学生時代の友人たちや学外の不良仲間たちも多く参列し、俺は獅子堂が多くの人たちに慕われていたことをそこで初めて知った。

焼香の際の、一条さんの怒っているような……寂しがっているような複雑な表情が、妙に印象的だった。

俺が獅子堂の葬式を思い出してぼんやりしていると……。

「……先輩、この囮作戦上手くいくと思います？」

アンナがポツリと呟くようにそう問いかけてきた。その顔からは成功と失敗、両方に対する緊張と恐れが見えた。

作戦はもちろん成功してほしい。これ以上、凶悪な連続殺人犯を野放しにすることはできない。

だが、猟犬使いがこちらの罠に引っかかった場合、百人以上を殺した殺人鬼と対決することになる……。

そんな懊悩が彼女の表情からは透けて見えた。

いや、よく見ればそれはアンナだけではない。彼女の後ろに立つ織部も同様だった。

喫茶店でその意思を確認した時は、恐れた様子はなかったが、いざ対決が目前に迫って改めて敵の恐ろしさを実感しつつあるのかもしれない。

考えてみれば、彼女たちも高校一年生の女の子なのだ……。

普通の女の子よりもタフなのは間違いないが、だからと言ってすべての恐怖心が消えるわけではない。

俺が比較的落ち着いているのは、彼女たちよりも修羅場をくぐった経験が多いからに過ぎない。

ハーメルンの笛吹き男との戦いや猟犬使いの襲撃など、短いスパンで二度も死の恐怖を目の当たりにした俺が異常なのであって、普通の冒険者はしつかりと安全マージンを取っていればそんなに死ぬような目にあったりしないものだ。

というか、万が一不測の事態が起こった時はそのまま死んでしまうことが多いため、二度目が無いというべきか。

おそらく彼女たちは冒険者としてのキャリアこそ俺よりも長くとも、実際に死にそうな目にあった経験は一度もないのだろう。

アンナは社長令嬢ということでの辺の対策はばっちりだっただろうし、織部も頭が良いため危機管理能力は俺よりもずっと高い。

あるいは、これが彼女たちにとって初めての修羅場と言えるのかもしれない。

……万が一の時は、死んでも彼女たちだけは逃がす。それが先輩

として、男としての俺の役割だ。

そんな想いを込め、俺は不敵な笑みを浮かべた。

「なんだ、ビビってんのか？ 大丈夫、安心しろって……プロの師匠がついてるんだから」

俺が胸を張ってそう言うと、二人は露骨に呆れた顔をした。

「ええ〜？ そこは俺がついてる！ とか、俺が命に代えても守る！ って言うところじゃないツスカ？」

「何言ってるんだ。モブ顔の俺よりイケメンの名前を出した方が説得力が出るだろ？ しかもプロだし」

するとアンナはハツと目を見開き、俺をジロジロと見て。

「……確かに！」

「おい」

自分で言ったことだが、そこまで納得されるとさすがにイラつくな……。

と軽く睨むと、アンナは揶揄うような笑みを浮かべる。

「いや〜、だって確かに先輩はモブ顔ですし」

「ぐぬぬ……ちょっと自分の見てくれが良いからってよお〜」

そこで織部が俺の肩に手を置いて言った。

「落ち込むことはないぞ先輩。モブ顔でも先輩には霊視能力という売りがあるじゃないか」

いや、そこを褒められても……と、俺は苦笑した。ぶつちやけんまり嬉しくない能力だし。

……だがまあ、あれだ。アンナたちも緊張は解けたみたいだな。

「しかし、囿役の神無月先輩のお姉さんは大丈夫でしょうか？」

「そこは大丈夫だろ。師匠のお姉さんだし、何と言っても元自衛官だしな」

作戦前に囿役の師匠のお姉さん……晶あきさんと顔合わせをしたが、師匠とは真逆な意味で中性的な感じの美人だった。

師匠が男性的な特徴も女性的な特徴もない中性的な美形なのに対し、お姉さんは背も高く身体つきも女性ボディビルダーのように鍛えられており、それでいて胸やお尻などもとても大きく、女性的な魅力を持ちながら男性としての雰囲気も持った感じの人だった。

「姉さんなら大丈夫だよ」

そこで離れたところで作業をしていた師匠が話に入ってきた。

作業とは、迷宮主の拘束である。

迷宮主を倒してしまえば、帰りのゲートが発生してしまう。

そうなると新しい迷宮主が発生するまでゲート前の扉がロックされてしまい、新しい冒険者が入って来られなくなってしまうため、迷宮主のヘルハウンドくんには申し訳ないが、手足をへし折って拘束させてもらうことにしたのである。

「殺しても死なない人だし、知っての通り自衛隊と冒険者では一線を画す」

師匠曰く。リンクは、元は自衛隊の技術でそれが民間に流出したものらしい。

そのため、きつちりとリンクの使い方を叩きこまれる自衛隊と、流出した技術を掻い摘んだ程度の民間の冒険者ではその練度も……技の種類も段違いなのだという。

師匠は当然、姉の晶さんからリンクを習ったらしいのだが、習えた技術はすでに民間に流出してしまっている部分のみで、それ以上の技術は機密扱いで教えてもらえなかったらしい。

つまり、晶さんはそれ以上の技術を使えるということだ。

「でも、いくらリンクに長けていると言っても、カードの性能によつてはマズインじゃないツスカ？」

「それについても大丈夫。退職金代わりにBランクカードを手に入れたらしいから」

自衛隊では、階級や実力に応じてカードが支給されるらしいのだが、退役時にそれらのカードが払い下げられることもあると聞く。

国家公務員である自衛隊員は、法律によってその給料を定められている。それは、危険な迷宮内で活動する隊員も例外ではない。多少手当を貰えることもあるだろうが、収入という意味では冒険者の方がずっと高い。

厳しい訓練を課され、様々な規則に縛られ、そこら辺の冒険者よりもずっと低い給料ではとてもではないがやってられない。

そこで国が用意した餉が、勤続年数と功績に応じた退役時のカードの払い下げである。

自衛隊では、任務で支給されるカードは最低でもCランクカードからとなっていて、実力によってはBランクカードを支給されることもあるらしい。

Cランクカード一枚程度であれば、三年程度務めるだけで払下げが認められるらしく、冒険者を目指すならばコツコツ働いて貯金するよりも数年程度自衛隊で働く方が早道とされていた。

もちろん在籍中に活躍すれば払い下げられるカードの枚数やラン

クもどんどん増えていく。

中には十年未満でBランクカードの払下げが認められる猛者もいるらしく、十年程度でBランクカードを貰えるというのはかなり魅力的な話であった。

晶さんは明らかに二十代半ばほどなので、その若さでBランクカードの払下げが認められたというのはかなりの実力者であることを意味していた。

「なるほど、そう言うことなら大丈夫そうッスね」

アンナがそう言ったその時、ピリリリッ！ とアラームの音が周囲に鳴り響いた。

「……作戦の開始時刻が来たみたいだね」

師匠が言った。

今から順番に時間をずらしつつ、囿役の冒険者たちが迷宮へと潜り始める。

時間をずらすのは、同時に潜り始めるのでは、さすがにあからさま過ぎるからだ。

晶さんが潜り始めるのはこれから約二時間後の予定だが、他の囿に引つかかった猟犬使いがこの迷宮に転移して逃げてくる可能性があるため、そろそろ用意しておくべきだろう。

俺がそう考え少し離れたところで蹴鞠をしている蓮華とユウキを呼び寄せようとしたその時。

「ッ！？」

突如、大きな揺れが俺たちを襲った。

地震！？ 馬鹿な、迷宮で地震なんてありえないッ！

立っていられないほどの強い揺れに、地面に這いつくばる俺たちの前で、徐々に空間が歪みだす。

あれは……まさか、猟犬使いがここに転移してくるのか！ 馬鹿な、早すぎる！

囷役の冒険者たちが迷宮に潜り始め、それを敵の見張り役が報告し、猟犬使いがやってくるまで、まだ時間に余裕があるはず！

それが、たった今潜り始めたばかりだと言うのに！ ……まさか。俺がその答えに思い至ったその時、同じ答えに思い立ったのか師匠が苛立たし気に叫んだ。

「クソ！ どこかのチームが先走ったのか……！」

猟犬使いが常にどこかの迷宮の傍で待機していた場合、もっとも食いつく可能性が高い囷は最初のことになる。そして最も捕まえられる可能性が高いチームはというと、当然最初に囷が食いついたチームである。

囷が潜る順番を決める際も、誰が一番を得るかで大分揉めたと聞く。

もしもMVPの二十億を欲したチームが、予定の時間を無視して囷を潜らせていたとすれば……！

「歌麿！」「マスター！」

そこで少し離れたところにいた蓮華たちが俺の元へと駆けつけてきた。

険しい顔つきの彼女たちへと端的に状況を伝える。

「……猟犬使いがやってくるぞ！ 構えろ！」

そう吠える俺に対し、しかし蓮華は――。

「いや違う！ この気配は……イレギュラーエンカウントだー！」

そう叫んだのだった。

第二十五話 人の口に戸は立てられぬ（後書き）

【Tips】シークレットリンク

リンクという技術は、元々は軍でのみ扱われていたモノが民間に流出したものである。リンクが冒険者の間にも広まるにつれ、国はすでに民間に流出してしまった技術に関しては、無暗に広めないことを条件に、家族など親しい人については教えても良いとしている。だがそれ以上の技術に関しては徹底的に管理されており、軍経験者のみが扱えるとされるそれらのリンクはシークレットリンクと呼ばれている。

第二十六話 その扉の先に待つモノ

蓮華の言葉に、俺たちは絶句した。

……イレギュラーエンカウト、だと。そんな馬鹿な。

このタイミングで迷宮の乗っ取りが行われたというのか。

イレギュラーエンカウトが待ち受けているところに人間が踏み込むことはあっても、冒険者がすでに最下層にいる状態で乗っ取りが行われた例など聞いたことがない。

あるいは、そのまま冒険者が殺されてしまったせいまで報告されなかっただけなのかもしれないが……これがまさにイレギュラーであることは間違いなかった。

師匠が叫んだ。

「来るぞ！」

俺たちの視線の先、拘束されていたヘルハウンドが空間の歪みに飲み込まれ消え去る。

……いや、違う。空間の歪みに飲み込まれたのではない。ヘルハウンドから空間の歪みが発生していたのだ。

消え去ったヘルハウンドと入れ替わるように現れたのは、一体の傷だらけのアヌビスと……若い女だった。

人間……？ イレギュラーエンカウトじゃなかったのか？ いや、そんなことよりも……。

人形のように整った顔。血のように赤い瞳。そして……アルビノ特有の白過ぎる肌と髪。

現れた女は――星母の会の聖女だった。

コイツが、猟犬使い。やはり犯人は星母の会、なのか……？ いや、猟犬使いは姿を変える魔道具を持っている。そうとは限らない。聖女と同じ顔をした女は、こちらを忌々し気に睨み舌打ちをした。

「……チツ、こちらでも待ち伏せがいましたか」

そこで、俺たちのライセンスからアラーム音が鳴り響く。救助要請のアラーム。鳴らしたのは、師匠だ。

「……今、地上に救援要請を送った。地上では、警察官たちがダンジョンマートを封鎖している。他の相似迷宮も冒険者たちによって封鎖されている。抵抗は無意味だ。大人しく降伏しろ」
「……なるほど、そこまで掴んでいましたか。まあ、さすがにこれだけ繰り返し返せばどんな馬鹿でも気づくというものか」

自嘲するようにそう言う猟犬使い。その様からは諦めにも似た感情が感じられた。

「……いつか自分が捕まることを覚悟していたのか？ ならばなぜ犯行を止めなかったんだ……？」

猟犬使いは、自分の情報の隠蔽は完璧だった。地に潜ろうと思えばいつでもできたはず。

なのに、なぜ……。

その時、蓮華がリンクで囁きかけてきた。

『歌麿、気をつける。コイツ、イレギュラーエンカウントの気配がする』

『なに？ 人間じゃないのか？』

『いや……人間、のはずだ。だが、イレギュラーエンカウントの気配もある……正直、不気味だ』

俺たちが注視する中、猟犬使いはどこか倦んだような雰囲気であった。

「ふ……ここまで、か。だが、目的はおおむね果たした」

それから満身創痍のアヌビスへと目を向け。

「これまでご苦労だったな……アヌビス。――サクリファイス」

そう猟犬使いが言った瞬間、パキン！ とカードがロストする音が響いた。

「ご、武運、を……」

アヌビスの身体が、砂のように崩れ去っていく。

なん、だ……？ 自分のカードを、自害させた、のか？ 一体、なぜ……。

あまりに不可解な行動に、俺たちが身動きできずにいると。

――ドクン！

空間が、脈動した。

「……ガッ！？ アアアアアアアアアアアッ！」

猟犬使いが、絶叫する。

身体が、赤黒い影に浸食されていく。

やがてその全身が完全に蝕まれると、それは身体からあふれ出し、周囲の空間すらも侵し始めた。

「逃げる！」

誰が言いだしたのか、俺たちは同時に影から逃げるように走り出した。

だが、謎の影の浸食速度は、到底逃げ切れるものではなく。

俺たちは瞬く間に影に飲み込まれ——そして世界が塗り替わった。

「ここ、は……」

気づくと、俺たちは森の中から古びた洋館の中に立っていた。

玄関ホール……だろうか。正面には大きく重厚な玄関扉があり、奥には二階へと続く一対の曲線階段。その階段に挟まれるように、二階の天井まで届く大きな振り子時計が置かれていた。

「せ、先輩、一体どうなったんでしょう？ 猟犬使いは……？」

アンナが恐る恐る問いかけてくる。

「わからん……」

俺が首を振ると、蓮華が険しい顔つきで言った。

「イレギュラーエンカウトだ。気を付けろ、ここはもう……奴らの庭だ」

やはり……そうなのか。フィールドを書き換えることができる存在など、奴らくらいしか思いつかない。

だが……。

「それは、つまり…… 獵犬使いはイレギュラーエンカウンドを召喚した、ってことか？」

「そんな…… イレギュラーエンカウンドのカードなんて、聞いたことがない。奴らはカードをドロップしないはずじゃ」

俺の言葉に、アンナが青ざめた顔で首を振る。

しかし、信じられないことだが、それしか考えられない。

獵犬使いからイレギュラーエンカウンドの気配がするという蓮華の言葉。本来の迷宮主であるヘルハウンドと入れ替わるように転移してきた獵犬使い。そしてフィールドの書き換え……。

どれも普通のカードにできるのではなく、イレギュラーエンカウンドの特徴そのままだった。

「……ダメ、か。 転移系のマジックカードはどれも使えないようだ。それに救助要請も……」

そこで、いろいろと試していたらしい織部が首を振って言った。

……確定、か。

「……で、でもイレギュラーエンカウンドって言ってもここはフラク迷宮ですし、大したことない…… ツスよね？」

アンナが縋るように俺の服の袖を抓んで問いかけてくる。

確かに、普通に考えればイレギュラーエンカウンドといえどもEランク相当の戦闘力しか持たず、今の俺たちの敵ではないはずだが……。

俺は無言でイライザとメアのカードを取り出すと召喚した。……
召喚、できてしまった。

『……？』

それを見たアンナたちが慌ててそれぞれのカードを召喚し始める。結果、最大で八枚のカードを召喚できることが確認できた。八枚……つまり、Cランク迷宮相当の召喚数制限ということだ。

「ど、どうして……ここはFランク迷宮のはずなのに」

アンナの言葉に師匠が答える。

「猟犬使いが手に入れたイレギュラーエンカウントのカードがBランクだったのか。……あるいは、直前にアヌビスを自壊させたことに意味があるのか」

アヌビスはBランクモンスター。ここがCランク相当となつていくということは、敵はBランクモンスター並みの戦闘力を持つ可能性が高い。少なくとも、ランクは釣り合っている。

それに最後に猟犬使いが言った言葉……サクリファイス。生贄、か。無関係とは思えない。

「それで？ これからどうすんだ？」

そこで黙って成り行きを見守っていた蓮華が俺へと問いかけてきた。

「どうする、か……。ここがイレギュラーエンカウントのテリトリー内である以上、敵を倒すしか脱出の術はないわけだが……」。

「ここは、援軍を待つべきだ。Bランクのイレギュラーエンカウントを倒すのは今の僕たちにはさすがに厳しい。幸いすでに救助要請は送っている。姉さんもこちらへ向かっているだろうし、周辺の冒険者からの援軍も期待できる」

師匠の言葉に俺たちは、なるほど頷いた。

確かに、通常のイレギュラーエンカウトでは救助要請を送る暇はないが、俺たちはすでに救助要請を送れている。

ここで無理して敵を倒す必要はないのだ。

それに思い至り、俺たちの間にホツとした空気が流れかけたその時。

——ドンドン！ ドンドンドンドン！

突然、玄関からノックの音が鳴り響いた。

俺たちが固唾を飲んで注視する中、ノックの主が大声で訴えかけてくる。

「すみません！ ここを開けてくれませんか！？ 追われているんです！」

俺たちは思わず顔を見合わせた。

声の主は若い女のようにだった。その声からは焦りや恐怖といった感情が伝わってきた。その様子はとても嘘や演技とは思えないほど切実なものだったが……このタイミングでの来訪は、さすがに自然過ぎた。

俺が答えようか迷っていると……。

「……申し訳ありませんが、あなたは？」

織部がそう問いかけた。

……会話するのか。いや、だが、声の主が俺たちを助けに来た善意の救助者の可能性もある。

プロ冒険者たちは相似迷宮の封鎖から動けないだろうが、そのチ

ームの三ツ星冒険者たちくらいは援軍に出してくれているかもしれない。

そんな三ツ星冒険者が、イレギュラーエンカウントに襲われてこの洋館に逃げ込んできた。そういう可能性もゼロではなかった。

声の主は答えた。

『——私は佐藤翔子と言います！ 最下層に来たら急に変なカードに襲われて！』

……ッ!?

ぞわり、と肌が粟立つのを感じた。

死者の名前を騙る者が、扉の向こう側にいる。

本人のわけがない。それはわかっている。だが、なぜその名を騙るのか……正体不明の不気味さだけがあつた。

佐藤翔子を騙るナニカは、扉を叩き続ける。

『お願いします！ 助けてください！ どうして開けてくれないんですかッ!？ 開けて！ 開けてよ！ 殺される!』

助けを求める声は、徐々に一向に扉を開けない恨みの言葉へと変わっていった。

『死にたくない！ 助けて！ ああああ！ 開ける！ おい！ 聞こえてるんでしょ!？ この人でなし！ 許さない！ 呪ってやる!』

ガンガンと扉を叩く音と共に、俺たちの胸を叩く怨嗟の声。

それは畏だと、偽物だと言いついても、俺たちの精神を蝕んだ。

『……ヒッ!？ い、いやッ！ お願い、開けて開けて開けてよお

「おおおおおおお！？」　「があっあああああ！？」」

徐々に遠ざかっていく声と、断末魔の絶叫。

静寂が戻る。寒々しいほどの静けさ。

やがて、アンナが独り言のように、ポツリと呟いた。

「今のは、本人の霊……とかじゃないツスよね？」

誰も答えることはできなかった。

偽物だ、と言い切るには、あの叫びは真に迫り過ぎていた。

これが、罠であることは間違いない。だが、イレギュラーエンカウントは殺した人間の魂を利用する。それを、俺はハーメルンの笛吹き男との戦いで知っている。

それを考えれば、あれは……。

——バンバンバン！

再びドアを叩く音。ドキリ、と嫌な予感に心臓が跳ねる。

「誰かいないのか！？　開けてくれ！　追われてるんだ！」

今度は、若い男の声。その声に聞き覚えがあるような気がして、俺は思わず呟いた。

「獅子、堂……？」

「……北川！？　北川なのか？　ああ、助かった！　ここを開けてくれ！」

いつも自信満々で強気だった獅子堂からは想像もつかない、怯えた声。

獅子堂は、確かに死んだ。その遺体も、俺たちが確認した。だが……。
クラスメイトの声に俺が一步踏み出しかけた時、師匠が俺の腕をガシリと掴んだ

「開けてはダメだ！ 敵の正体がわかった。この敵の童話は……狼と七匹の子ヤギだ！」

ハツと目を見開く。

俺の脳内で、数々の点が線で結ばれていく。

他の迷宮へ侵入する能力。変身の能力。ゲートの出入管理を誤魔化す能力。生贄に捧げられたアヌビス。なぜか犬系のカードばかり使う猟犬使いの嗜好……。

狼と七匹の子ヤギは、狼が子ヤギを騙してあの手この手で家に騙し入ろうとする話だ。

その逸話通り、人や機械を『騙す』スキルを持ち、それが迷宮の外でも使えたとしたら……猟犬使いの人間離れた能力もすべて説明がつく。

猟犬使いが犬系のカードにこだわっているのも、いざという時にカードを生贄に捧げるためだったとすれば、納得だ。

だとすれば、この扉を開けるわけには絶対にいかない。

本の中では、子ヤギは狼に騙され食べられてしまうのだから……。

『おい！ なんで開けてくれないだよ、北川！ もしかして怒っているのか！？ あ、謝る！ 謝るから！ お前の言った通りだったよ！ 冒険者になんてなるんじゃないかった！ クラスのみんなの前で土下座したって良い！ 頼むから許してくれ！ まだ死にたくねえよおおおお！』

……やはり、この扉の向こうにいるのは、本人だ。

だって、これが演技だとはとても思えない。

これは、まだ自分が死んだと気づいていない、獅子堂本人なのだ……。

『北川アアアアアア！ ふざけんな！ この人殺しがアアアア！』

だから、この恨みの声は本当で、俺が獅子堂を見捨てたのも真実だった。

声が遠ざかっていき、やがて断末魔の声を最後に、静寂が戻った。

「先輩、獅子堂さんが死んだのは先輩のせいではないし、悪いのはすべて犯人が——」

「——わかってる！」

織部が慰めるように言うのを、大声で遮る。

「わかってるから…… すまん、今は何も言わないでくれ……」
「…… すまない」

…… 最悪の気分だった。後輩の女の子に八つ当たりのような態度をとってしまったことを含めて。

理性では、これで正解だったとわかっている。これは明らかに畏だし、開けるべきではない。

獅子堂の死にしたって、俺は今はやめとけと忠告してやったし、一緒に潜ったのでもなければ助けようがない。四之宮さんを助けられたのは、猟犬使い本人に襲われたのではなくその下っ端の暴走だったからで、つまりただの幸運だ。

今のだって、すでに獅子堂は死んでいるのだから扉を開けたって助けようがないし、見捨てたわけでは決してないのだ。

つまり、俺は悪くない。ただの、しかもあんまり仲の良くなかったクラスメイトの命にまで責任なんて持てない。

そう、理性ではわかっている。

だが、感情では別だった。

獅子堂の怨嗟の音が耳から離れない。どう言い訳しようと、俺は見捨てたのだ。命ではなく……彼の心、魂を。

本当に、なんて悪質な罠なのか。正解を選んでも、心を殺してくる。ハーメルンの笛吹き男が、可愛く見えてくるほどの醜悪さだった。

その時、冒険者部のバッジが声を発した。

『おい！ 聞こえるか！』

声の主は、晶さんだった。師匠が素早く応答する。

「姉さん！ こっちは大丈夫だ！ 今どこに？」

『無事だったか！ こちらは援軍と合流して最下層に到着したところだ。一体、何が起こった？』

「猟犬使い、アンノウンがイレギュラーエンカウトを召喚したんだ」

『イレギュラーエンカウトを召喚した、だと？ そんな馬鹿な……いや、それは後だ。敵の正体はわかっているのか？』

「おそらく狼と七匹の子ヤギだと思う」

『よし、ならば今は館の中だな？ いいか、よく聞け。私がそこに行くまで、扉を絶対に開けるな。合図はこの魔道具を使って行う。扉越しの声はすべて嘘と思え！』

「わかった」

師匠が頷き、通信を切った……その瞬間。

三回目の扉を叩く音が始まった。

来たか……と、援軍の知らせで緩んだ空気が引き締まる。

おそらく、晶さんたちの到着に焦った狼が、その前に決着を付けようと焦ったのだ。

だが、ここまでくればもう騙されはしない。

童話では子ヤギたちは狼の三回目の訪問で扉を開けてしまった。

つまり、この三回目を乗り切れればこの悪質な罠ともお別れの可能性が高い。

さあ、次は誰だ？ と挑むような気持ちで待ち受けていた俺の耳に届いたのは――。――。

『おい！ 歌麿！ 開ける！ このままじゃ死ぬぞ！』

――隣にいるはずの蓮華の声だった。

「なッ……？」

ハッと隣に立つ蓮華を見る。彼女は驚いたように目を見開き、しかしすぐに不敵に笑った。

「なるほど、罪悪感から罠に嵌めるのは難しいと考えて、不信感を煽りにきたってわけか。おい、わかっているとと思うが……」

「ああ、わかってる」

「こんな見え透いた罠に引っかかるわけがない。

……だが、俺の心にわずかな疑いが生まれたのも事実だった。

偽物と頭ではわかっている……この声にはなぜか、惹きつけられるものがあった。

『いいか、よく聞け！ これは扉を開けさせる罠じゃない！ お前をそこに閉じ込めるための罠だ！』

「聞くな。この手のクソみてーな罠に対する最も効果的な対処法は、耳を塞ぐことだ」

『三回だ、歌麿！ すでにお前が何度ミスったかわからねーが、おそらく三回目が最後のチャンスだ。扉を開ける！』

「狼と七匹の子ヤギという童話を思い出せ！ 扉を開けた子ヤギはどうなった!？」

二つの同じ声が、交互に俺へと訴えかけてくる。

隣にいる蓮華を信じるべき……だ。リンクのラインも、隣の蓮華とつながっている。これまでの流れを振り返っても、これは扉を開けさせるための罠だ。

『聞いてんのか、オラッ!』

だが……なぜだ。なぜこんなにも……この声が愛おしい。

『アタシを信じる———歌麿!』

ドクンと心臓が跳ねた。

理屈ではなく、直感で確信した。蓮華は、本物の蓮華は扉の向こうにいる。

「!?! 馬鹿、止せマロ!」「先輩! 止めてッ!?!」「惑わされるな、先輩!」

皆の制止をかいくぐり、俺は扉へと飛びつく。
そして———。

第二十六話 その扉の先に待つモノ (前書き)

一話連続投稿一話目となります。

第二十六話 その扉の先に待つモノ

一一ハツと目覚める。周囲を見渡すと、そこは戦場だった。

洋館のホールで、倒れた俺たちを守るように、それぞれのマスターたちのカードが戦っている。

戦いの相手は、どうやら数体の山羊のようだった。微妙に自信がないのは、それが俺の知る山羊とはかけ離れていたからだ。

体長二メートルほどの身体には一切の体毛がなく黒い地肌が見えており、下半身はまるで植物の根っこのような無数の触手となっている。そんな山羊とはかけ離れた姿だというのに、なぜ俺が山羊のモンスターだと思ったのかと言うと、上半身のいたるところに生えた口から「めえええ！めえええ！」と甲高い鳴き声が漏れ出しているからであった。

そんな冒瀆的な姿をしているというのに、誘うような甘い蜜の香りを漂わせているのだから不気味としか言い様がなかった。

これは……。

「ようやく目覚めたか。おっせえんだよ」

目覚めた俺に気付いた蓮華が、ニヤリと笑って言った。

「だがまあ、ちゃんと起きたから許してやる」

「俺は……気を失っていたのか？」

隣に倒れている師匠を起こそうと揺さぶるが、起きる気配はない。状態異常……か？　だがマスターへの状態異常はバリアが防いでくれるはずだが……。

「たぶん、そういうギミックだ。マスターの精神は狼が、そしてカードは子ヤギが襲う……そういう役割分担なんだろ。……そんなことより、そろそろリンクを繋げ。連携が取り辛くてしんどいんだよ」

蓮華が、山羊へと向けて魔法を放ちながら言う。

そこでようやく俺は、カードとのリンクが切れていることに気づいた。それに、カードも蓮華とユウキ、それと眷属のライカンスロップしか場に出していない。アンナたちのカードも、直前に召喚していた二枚のカードだけだ。

慌ててリンクを繋ぎ直し、残りのカードたちも召喚する。……やはり召喚制限自体は拡張されているようだ。それに、バツジと救難信号も音信不通か。やはりあの晶さんからの連絡も幻覚だったようだ。緊急避難は……アンナたちがこの状態では試すわけにはいかないか。まあ、どうせ無駄だろうが。

そうしていろいろと確認をしつつ、俺は蓮華へと問いかけた。

『マスターへの状態異常はバリアが防ぐんじやなかったのか？』

『状態異常じゃない。そういう『ルール』だ。カードのバリアも所詮ルールの一つ。同じルールまでは無効化できない』

ルール、か。

Cランクからは階層にフィールド効果……一種のルールのようなものが追加されると聞く。

特定の種族を強化したり、回復魔法が使えなくなったり、召喚数制限が少なくなったり……これもそういうルールの一つだったとすれば、なるほどバリアで防げないのも頷ける。

ハーメルンの笛吹き男がそういう仕掛けを使ってこなかったのは、そう言った能力を持っていなかったからか……あるいはFランク迷宮での顕現だったからか。

そして、このマスターとカードを分断するギミックの狙いはおそらく……。

俺は場を見渡した。

やはり、師匠たちのカードの動きが悪い。リンクが切断されているのだ。

気を失っているのだから当然かと思うかもしれないが、プロ冒険者クラスともなると寝ている間もリンクの接続を保ち続けることができる。アンナたちでは無理でも、師匠ならばできるはずだ。

つまり、これはマスターとカードのリンクを遮断することが目的のギミックなのだ。

俺だけが目覚め、師匠たちがまだ眠っていることから畏は一人一人独立して掛けられているのだろう。

しかし……。

『なぜ師匠は目覚めてないんだ？ 師匠なら……それにアンナも、狼と七匹の子ヤギというイレギュラーエンカウントに対しての知識もあるはず』

カードたちへとリンクで支援をしつつ、蓮華へと問いかける。

プロ冒険者になるための筆記試験には、法知識などのほかに、モンスターに対する知識も求められるという。この中には当然イレギュラーエンカウントに対するモノもあった。

ならば、師匠やアンナはこのギミックについても知っているはずなのだ。

『さあな。生半可に知っていたがために引っかけたか、あるいは二分の一を外したか……』

『どういうことだ？』

『童話の情報しか知らないなら、扉を開けるのが正解。そういうギミックだと知っているなら、逆に扉を開けないことが正解。そして

その両方を知っているなら、二分の一を当てなければいけない罫。相手の知識によって変動する罫なのかもな……』

相手の知識によって変動する罫、そんなことが……。

いや、よくよく考えればスフィックスの謎かけのように、広く攻略法が広まっているスキルは出題を変えてくる。相手の知恵や勇気を試すことが目的のスキルならば、知識での解答を妨害する仕掛けがあつてなんらおかしくない。

『それで、師匠たちを起こすにはどうしたら良い？』

『今は諦める。まだ起きないということはおそらく解答をミスつたつてことだ。この敵を倒さない限りたぶん起きない』

そう言う蓮華からは、リンクを通じてうしろめたさというか、微かな罪悪感のようなものが伝わってきた。

それはおそらく……このイレギュラーエンカウトを倒してもアンナたちが目覚める保証はないからだろう。

かつて現れた浦島太郎により老人とされてしまった少年少女たちは、浦島太郎を倒した後も元に戻ることはなかった。

イレギュラーエンカウトによる被害の中には、後遺症が残るものもあるのだ。

だが、今は倒せばアンナたちが目覚めると信じて戦うしかない。故に、蓮華もそのことを言わなかったのだろう。

そこでふと思いつく。

『もしかして、これもまだ幻覚の中ってことはねえよな？』

そんな俺の言葉に、蓮華が呆れたような様子で答えた。

『まだ寝ぼけてんなら、一発ビンタして起こしてやるうか？』

『冗談だよ』

ああ、コイツは本物の蓮華だ。
根拠を挙げると言われれば困るが、俺には確信があった。
ならばもう迷いはない。

今はとにかく目の前の敵を攻略することに集中するだけだった。

『見たところ、一体一体はそれほど強くないようだな……』

山羊たちは動きも素早く、触手の脚で壁や天井も床と同じように這いまわり、さらには麻痺毒なども爪や牙に持つようでも中々厄介であったが、その戦闘力自体はCランク程度しか持たないようだった。

『ああ、だが……』

蓮華の視線の先へと目を向けると、ちょうど師匠のアラディアが一体の山羊を倒すところだった。……顔立ちに見覚えがある。おそらく、大会の時に戦ったウィッチがランクアップしたものだろう。アラディアの魔法によって頭を岩の槍に貫かれた山羊が、溶けるように消えていく。

しかし、それと入れ替わるように、すぐに館の奥から新しい山羊が現れた。

これは……。

『見ての通り、倒しても倒しても次から次へと湧いてきやがる。幸い、六匹以上は増えないようだ……』

『……六匹？』

蓮華の言葉に、周囲を見渡す。

そうか……コイツらは七匹の子ヤギか！

一匹いないのは、どこかに隠れているからに違いない。
おそらくソイツを見つければ、子ヤギたちは消える……もしか
復活しなくなるはず。

どこだ。どこにいる。童話の中で七匹の子ヤギはどこに隠れた？
その時、俺の目に大きな古時計が目に入った。

そうか……柱時計！これを壊せば……！

俺は反射的に蓮華に柱時計の破壊を命じようとして——そこで踏
みとどまった。

いや、待て。本当にそれで良いのか？

柱時計に七匹目が隠れているとわかっているのは、俺が童話とい
う答えを知っているからだ。

だが、先ほどの罫ではその童話の知識が逆に仇となった。
流れに沿うというならば、むしろ……。

『扉だ、ユウキ！扉を開けろ！』

『！？は、はい！』

俺の突然の指示にユウキは驚きつつも、すぐさま扉へと向かう。
すると明らかに子ヤギたちの動きが変わった。

焦ったように、扉へと向かうユウキへと襲い掛かる。

ユウキはそれを軽やかに躲し、扉を蹴破るようにして開けた。
その瞬間。

——アオオオオオオン！！

遠くから、狼の遠吠えが響いた。

それを聞いた子ヤギたちが、蜘蛛の子を散らすように館のあちこ
ちへと逃げ去っていく。

やはり！子ヤギを殺すのは、狼の役目！故に、俺たちでは倒
すことができなかつたのだ。

ならば柱時計の役目は……！
俺が柱時計の蓋を開けると、その先はなぜか草原へと繋がっていた。

「おい！ 狼が来る前にここから逃げるぞ！ 自分のマスターたちを担げ！」

俺の声に、それぞれのカードたちが自分のマスターたちを背負い柱時計へと走り出す。

そこで、ついに狼がその姿を現した。

「ゲギヤギヤギヤギヤギヤ！！！」

扉よりも遥かに大きなその体を窮屈そうに縮めて、館へと入ってくる狼。

その輪郭は赤黒い影に覆われよくわからず、まるで子供の描いたデッサンの崩れた落書きのような印象を受けた。

「ギヒヒヒッヒッ！」

狼が、俺たちを見て嗤った。見る者を凍り付かせるような悪意に満ちた笑み。

柱時計の方を見る。ここではようやく一人目の師匠が通ろうとしているところだった。

く………仕方ない！

「クロ！ シロ！ 足止めを頼む！」

『——グルルル！』

俺の命令に、二匹の人狼がうなり声と共に狼へと立ち向かう。

これで、なんとか俺たちが逃げ切れるだけの時間は稼げるはず。捨て駒にすることへの罪悪感はあるが、実質不死身の彼らにしかこの役は任せられない。

師匠が通り、次にアンナが、最後に織部が通ろうとした……その時。

「ギャンツ！」 「ガアウツ！」

俺たちが逃げだすのを見た狼が、人狼たちを振り払いこちらへと迫りくる。

その眼を見た瞬間、俺は敵の狙いを理解した。

マズイ……！ コイツ、柱時計を破壊する気だ……！

やむを得ない！ 織部だけでもここを通す！

俺がそう覚悟を決めた時、狼へと立ち向かっていく影があった。

「ほっほほほほほっ！」

それは、織部の土蜘蛛のカードだった。

「ここは私が時間を稼ぎますゆえ、お逃げください！ なあに、

どうせ私では狭くて通れませぬ！ お気になさらず！」

「く、すまん！ 助かる！」

「我が主様を頼みますぞ！」

土蜘蛛の声を背に、俺も柱時計の脱出路を通る。

最後にイライザも通り抜け、狼の爪が触れる直前になんとか柱時計の蓋を閉じると、脱出路は影も形もなく消え去った。

「はあああ………」

なんとかか……逃げ切った。ホッと安堵の息を吐く。

織部の土蜘蛛……不気味な外見に反し、見上げた奴だった。

しかし……、と周囲を見渡す。

俺たちは、どうやら小さな丘の上にいるようだった。夕日が、背の低い草原を照らしている。遠くに、大きな屋敷が見えた。

あそこから転移してきたのか。

そこで、師匠やアンナたちからうめき声上がる。……目覚めたのか！

「師匠、アンナ、織部！」

「う……ここは？」

ゆっくりと体を起こしながら、師匠が問いかけてくる。

「ここは館の外だ。師匠たちはイレギュラーエンカウントの罠で気を失ってたんだよ」

「ああ……そうか。僕は、間違えたのか……」

俺の答えを聞いた師匠はそれですべてを理解したのか、悔しそうに顔を伏せた。

その時、周囲を見渡していた織部が問いかけてくる。

「ツッチー？先輩、ツッチーはどこに？」

「……すまん、土蜘蛛は俺たちを逃がすために足止めを」

「そうか……」

織部は一瞬だけ落ち込んだように頂垂れたが、すぐに顔を挙げる。とバッジや救助要請、緊急避難のマジックカードを試し始めた。

この切り替えの早さはさすがだった。

俺も、館の外に出たことで何か状況が変わってはいないかと外部

との連絡や緊急避難のカードなどを試していると、師匠が追加のカードを召喚しながら問いかけてきた。

「マロ。ここが館の外で逃げてきたということは、狼を使って子ヤギたちを処理したってことかな？」

「ああ」

俺が頷くと、師匠は顎に手を当て呟いた。

「……となると、そろそろ来るな」

「来る？ 狼か？」

「いや……」

師匠は首を振った。

「狼の罠に嵌まった僕たちがこうして目覚めたということは、狼が死んだということ。そして童話の中で狼を殺すのは……」

—— — — — —
—— — — — —
—— — — — —
—— — — — —
—— — — — —
—— — — — —
—— — — — —

大気を揺るがすような咆哮が轟く。

「来るぞ、子供を食われ怒り狂った母山羊が……」

館の一角が吹き飛び、そこから巨大な山羊の上半身が現れた。

子ヤギたちをそのまま数十倍に大きくしたような母山羊は、七匹の子ヤギを引き連れこちらへとやってくる。

「糞、結局子ヤギも無事かよ……!!」

童話の中でも子ヤギは復活するとはいえ、土蜘蛛や人狼たちまで犠牲にして狼を招き入れたというのに……結局、無駄だったのか。歯噛みする俺に対し、しかし師匠が言う。

「いや、マロの選択は間違っていない。柱時計を壊して七匹の子ヤギを倒した場合はボスが狼になり、狼を招き入れて七匹の子ヤギを食わせた場合はボスが母山羊と七匹の子ヤギとなる。ボスとして対処しやすいのは、実は取り巻きのいない狼の方だけど……」

「その場合、狼を倒すまでウチらは眠ったままってことになるツスね。まあ、ウチらがカードをフル召喚して眠っていたらその選択肢もアリっちゃアリだったかもしれないツスけど……」

「各自二枚しか召喚していなかったからな……。それに無防備なマスターを庇う必要があるし、連携のことなども考えれば総合的に我らを起こした方が総戦力は高かったはずだ」

なるほど、土蜘蛛たちの犠牲もまんざら無駄ではなかったということか。

こちらの戦力を整理してみよう。

まず俺が蓮華、イライザ、ユウキ、鈴鹿でCランク四枚。メア、ドラゴネットでDランク二枚だ。このうち蓮華とユウキは実質Bランククラスの力を持つ。

次に師匠が、七枚のCランクカードと一枚のBランクカード……アラディアを持つ。どれも成長限界まで育て切った、こちらの主力だ。

その次のアンナは、Cランクが三枚とDランクが五枚。Cランクはエルフとペガサスとデュラハンで、大会の時のメンバーをランクアップさせたものだ。社長令嬢の割にはCランクカードが少ない気もするが、これは、カードは自分で稼いだ金で手に入れるというアンナの拘りのためである。魔道具などに関しては親の力を借りることに抵抗のない彼女だが、カードに関しては何らかの拘りがあるよ

うだった。

そして最後の織部だが、こちらはDランクが三枚と正直戦力としては期待できない。Cランクの土蜘蛛が、彼女のメインだったのだ。ただ、彼女にはDランク最強のヨモツシコメがいる。ヨモツシコメは、Dランクの黄泉軍を無限に召喚することができるため、壁役として期待はできた。

「チームを二つに分けよう」

それぞれのカードをざっと見渡し、師匠が言った。

「Aチームは親山羊の撃破、Bチームは七匹の子ヤギを抑える役目だ。」

Aチームはマロと十七夜月さん、Bチームは僕と織部さんでやる。僕は余裕があればAチームの援護もするつもりだ。………どうかな？」

「師匠が母山羊を担当した方が良いんじゃないか？」

俺の言葉に、師匠が首を振る。

「いや、マロかアンナさんではヨモツシコメの軍勢が七匹の子ヤギを抑えきれなくなるまで織部さんやヨモツシコメを守り切れな可能性はある。」

狼と七匹の子ヤギは、長期戦になる可能性が高い。織部さんのヨモツシコメが七匹の子ヤギを完封できるようになるまで子ヤギと同数のCランクカードを持つ僕が彼女につくべきだ。

ヨモツシコメだけで七匹の子ヤギを完封できるようになり次第、僕も母山羊の方に加勢する」

なるほど………と俺たちが頷いた——その時。

「———メッ エッ エッ エッ エッ エッ エッ エッ エッ エッ エッ !!」

地鳴りのような咆哮と共に、母山羊が襲来した。

第二十六話 その扉の先に待つモノ (後書き)

【Tips】狼と七匹の子ヤギ その1

狼と七匹の子ヤギの攻略は三段階に分かれる。

第一フェーズでは、冒険者たちは精神世界に隔離され、扉を開けるか開けないかの選択を迫られる。

これは狼によるリドルスキルであり、冒険者の知識によって正解が変動する。冒険者は、知識からではなく自らの知恵と直感によって正解を導き出さなければならぬ。精神世界は冒険者ごとに個別のモノであり、仲間やカードたちはすべて自分の記憶から再現された偽物である。回答のチャンスは三回与えられ、これに失敗した場合、誰かが狼を殺すまでは精神世界に閉じ込められたままとなる。

第二フェーズでは、不死身の七匹の子ヤギの攻略を迫られる。

マスターが精神世界でリドルスキルに挑んでいる間にも、肉体は七匹の子ヤギたちによって攻め立てられている。カードたちは冒険者が目覚めるまでリンクが途切れた状態で、不死身の子ヤギたちからマスターを守り切らなければならない。

目覚めた冒険者は、今度は柱時計を壊すか、扉を開けるかの二択を迫られる。

この選択によって第三フェーズでの敵が母山羊と狼のどちらか決まる。

なお、カードたちにはこの選択の回答権は与えられておらず、マスターが目覚めるまで柱時計は決して破壊できず、扉も開かない。

救済措置として冒険者全員がリドルスキルに失敗した時のみ、母山羊と狼の両方が襲来してきて第三フェーズに進むことができる。地獄。

第二十六話 その扉の先に待つモノ (前書き)

3 / 14 戦闘描写二千字ほど加筆しました。マロが何にもしてないように見える点の改善。

第二十六話 その扉の先に待つモノ

「……………デ、デカイ」

間近で見た母山羊の巨体は、前に立つだけで押し潰されそうなほどの存在感だった。

大体、二十メートル弱……七階建てのマンションほどはあるだろうか。それもノツポに長いわけではなく、カブの様にズングリと太って、まさしくマンションに匹敵する質量を持っていそうだった。

その巨体の分、子ヤギのような俊敏さは失っていきそうだったが、体格差の分実際の速さはそう変わらないとみるべきだろう。ゆつくりに見えても、こちらもそれを避けるためには何倍も大きく動かなければならない。大きい、というのはそれだけで脅威なのだ。

加えて、毛無しの子ヤギと違い母山羊は、全身を如何にも頑丈そうな体毛が覆っていた。巨体と体毛……防御力と生命力は子ヤギの比ではないだろう。

「ヨミヨミ、眷属召喚だ」

織部が、ヨモツシコメに眷属召喚を命じる。すると、ヨモツシコメの足元からみるみる黒い沼が広がっていった。

その沼の中から、ズルリと無数の腕が生え、次々と古代の戦装束を身に纏った死人が現れる。

これがヨモツシコメをDランク最強たらしめている固有の眷属召喚・招来黄泉軍だ。
ヨモツシコメ

通常の眷属召喚は、一体ずつ無限に召喚し続けるか、数に限りある眷属を一気に召喚するかの二択だが、黄泉軍は一度に十数体の眷

属を無限に呼び出すことができる。

さらには呼び出される黄泉軍は武術の先天スキルを持つDランクモンスターであり、ヨモツシコメは場のすべてのアンデッドを強化するスキルを持っていた。

これほどの有能さでありながら、手に入れた冒険者のほぼすべてが手放すと言われるナンバーワン不人気カード、それがヨモツシコメであった。

『雄雄雄怨怨怨怨……！』

呼び出された黄泉軍たちが、不気味な声を上げながら七匹の子ヤギたちへと襲い掛かる。

その動きは、武術スキルによるものか、自我の無い下級アンデッドとは思えぬほど機敏かつ連携の取れたもので、そんじょそこのグールなどよりもよほど強そうに見えた。

……が、所詮はDランクモンスターの、しかもトークン。Cランククラスの戦闘力を持つ七匹の子ヤギには太刀打ちできるものではなかった。

黄泉軍たちは、腕を切り落とされようが、胴体を貫かれようが恐れを知らぬ様子で果敢に立ち向かっていくが、その攻撃は子ヤギたちに当たることはなく、一方的にやられていく。

子ヤギたちの殲滅力と黄泉軍の召喚スピードでは、明らかに殲滅力の方が上回っているようだった。

このままでは、大本のヨモツシコメがロストするまでそう時間はかからないだろう。

——だが、そこに師匠のカードたちの援護が入れば話は違ってくる。

一体一体と集中して攻撃していくことにより子ヤギたちを確実に

仕留めてく師匠のカードたち。

倒された子ヤギは、すぐさま母山羊の腹部に生えた七つの大口から這い出してくるが、戦列に復帰するまでにはタイムラグがある。そうしているうちに黄泉軍の召喚スピードの方が殲滅力を上回り、少しずつだが黄泉軍の数が増えつつあった。

どうやら子ヤギたちの方は師匠たちに任せても大丈夫そうだった。

一方の母山羊の方であるが、こちらはあまり進展がなかった。

『ユウキはインファイトで敵の気を引いてくれ！ 回避を最優先にして絶対に一撃も喰らうなよ！ イライザはユウキのフォローを！ もしユウキがミスしたら献身の盾でカバーしてくれ！ メアはとにかくダークネスとミラージユで目くらましを！ 状態異常はたぶん通らないが抵抗されるまでの一瞬は稼げる！ 攻撃魔法組も極力顔を狙え！ 視界をつぶせる！』

ドラゴネットに跨り上空から戦場を俯瞰しつつ、矢継ぎ早にリンクで指示を飛ばしていく。

眼下では、爆炎や雷の槍、雨のような弓矢が母山羊へと絶え間なく降り注ぎ、華やかですらあったが……。

「……チツ、効いているのか効いてないのかさっぱりわからんな」

Dランク迷宮の主ならばとつくに沈んでいてもおかしくない総攻撃を受けてなお、母山羊は堪えた様子がなかった。

相手の身体が大きすぎて、大木をカッターでチクチク突いているような気分だった。

相手の身体が大きい分、動きもわかりやすいため今のところはこちらも大した損害は受けていないが、その分一撃の威力もとんでもないことは容易に予想がついた。

一撃でもまともに攻撃を受けてしまえば、クランクカードであっても致命傷に近いダメージを負ってしまうことだろう。しかも、動きがわかりやすいとは言っても巨体の分リーチの差がある。少しでも動き出しが遅ければ回避が間に合わない。

いくら攻撃しても効いているようには見えず、逆に相手の攻撃は一撃も受けてはならない。

俺たちは精神的に徐々に追い詰められつつあった。

『……フッフッフ、ついにアレを使う時が来たようッスね』

どうしたものか……と俺が頭を捻っていたその時、ふいに胸元のバツジからアンナの意味深なセリフが聞こえてきた。

あからさまなフリに、一瞬間いかけたくない気持ちが湧いてきたが、一応聞いてやることにした。

地上で立つアンナの元に舞い降り、問いかける。

「……なにか策があるのか？」

「こんなこともあるのかと……！ 強敵相手のコンビネーションを特訓してたんです！」

目をキラキラとさせて言うアンナ。

お前……こんなこともあるのかとって言いたかったただけだろ、とツッコミたい気持ちをグツと抑え、確認する。

「勝算があるんだな？」

「もちろん！ 駄目だったら部長の座をお譲りしますよ」

よし、そこまで言うなら！

『蓮華、靈格再帰！ 総員総攻撃し、母山羊の気を引け！』

蓮華が吉祥天へと変身し、カードたちの攻撃が一層苛烈なモノとなる。その隙を見て、アンナのカードたちが戦線から離脱。一か所に集まった。

「さあ、我が精鋭たちよ！ オペレーション を実行せよ！」

号令と共に、彼女のカードたちが動き出す。

エルフがペガサスに跨ったかと思うと、デュラハンがエルフの身を包む。あつという間に三枚のカードは三位一体の女騎士へとその姿を変えた。

さらには残りの五枚のDランクカードたちも様々な支援をペガサスナイトへと飛ばし始める。

「これは……！」

目を見張る俺の前で、ペガサスナイトが母山羊へと突撃する。

速い！ 俺の目では支援スキルの残光による線しか見えないほどの速さで、女騎士が母山羊の周囲を飛び回ってはその手に持つランスで穿っていく。

その光景は、まさに流星。

瞬く間にその巨体が血に染まっていく、母山羊が絶叫を上げた。

「メエ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ……！」

おお、効いてるぞ！ これはイケるか！？ ……いやッ、マズイ！
ギロリ！ と母山羊がこちらを睨む。何か、来る……！

「アンナッ！」「キャッ！」

考えるよりも先に彼女の腕を掴んで引っ張り上げ、一気に上空へと舞い上がる。

同時に、凄まじい勢いと轟音を立てて母山羊が俺たちの直前まで居たところを通過した。

その勢いはまさに特急列車。その風圧だけで、俺たちは木の葉のように空中で翻弄されるほどであった。

腕の中のアンナを全力で抱きしめながら、ドラゴネットに鞍と安全ベルトを付けていて良かった、と俺は場違いなことを考えていた。やがて、態勢を整えて眼下を見下ろすと、俺たちの立っていた丘が丸ごと吹き飛んで、母山羊の通った後に茶色の道ができていた。なんて威力だ……。

「せ、先輩助かりました……」

「ああ……間一髪だったな。そうだ、師匠たちは……」

無事、か。師匠たちのいた場所とは方向違いだったのが幸いしたか。

突進を終えた母山羊は身動き一つしない。大技の後にはインターバルがあるタイプか。

無防備な姿をさらす母山羊に、再度ペガサスナイトが攻撃を仕掛ける。

マスターを狙われた怒りからか、ペガサスナイトの攻撃はさらに苛烈なモノで、あるいはこのまま師匠たちの援軍を待たずして勝てるのでは思うほどであった。

「ど……どうツスか、ウチの自慢の必殺技は！」

先ほどの恐怖を誤魔化すためか、そうやって歳の割に大きな胸を張るアンナに、俺は苦笑して「ああ、大したもんだ」と答えようと

「ターニャ！」

アンナの叫びを受け、エルフがペガサスから身を乗り出した。それで何とか直撃は避けたが、エルフとデュラハンは地面に落下。ペガサスはその体を深々と切り裂かれ、それを見たアンナが悲鳴を上げる。

「イアヤアア！？ ダンジョンテイオー！」

一拍遅れて、アンナの胸元からロストの音が鳴り響いた。

「そん、な……こんなスキル、データに……」

「切り替える！ 無事なカードを下げるんだ！」

「ッ！ ターニャ！」

俺の一喝を受け、慌ててアンナがエルフを下げようとする。だが、落下の際に足が折れたのだろうか、その動きが鈍い。

そこへ母山羊の追撃が襲い掛かる。巨木のような前足が振り降ろされ――。

「ターニャアアアアア！」

アンナの悲鳴のような絶叫。

そんな彼女に俺は……。

「大丈夫だ、間一髪、間に合った」

俺の視線の先には、ユウキに抱えられたエルフの姿があった。ギリギリで空蝉の術が間に合ったのだ。

「あ……」

それで安心したのか、アンナがホッとへたり込む。リンクを使えばカードの無事はわかったはずだが……それもわからないくらい焦っていたらしい。

「しかし……」

この重力は一体なんだ？ カードから伝わってくる感覚は、まるで身体が石になったように重くなる、というものだった。しかも徐々にだが体力が吸い取られていつているようだ。

ユウキのみ影響を免れているのは、おそらく小さな勇者の効果によるものだろうが……。

……石と吸収。そうか、これは狼の腹の中に石を詰めた逸話の再現か！

俺がカードを襲う状態異常の正体に思い至ったその時、母山羊に新たな動きがあった。

なんと七匹の子ヤギの一体を掴むと、それをボリボリと喰らい始めたのだ。

我が子を喰らうという母山羊の行動に啞然としてみると、みるみるうちに母山羊の体中の傷が跡形もなく癒えていった。

「マジ、かよ……」

思わず呟く。

幸い食われた子ヤギが復活することはないようだが、子ヤギは後六匹残っている。つまり、あと六回は大ダメージを与えなくてはいけないということか？

マズイぞ。カードの魔力や体力だって無限ではない。長期戦になれば不利なのはこちらだった。

冷や汗が顎を伝う。

これが、Bランクのイレギュラーエンカウトが持つ力、か……。

『……おい、歌麿』

その時、蓮華がリンクで呼びかけてきた。

『なんだ？』

『……………』

俺の問いかけに、蓮華は彼女にしては珍しく躊躇うように言い淀み……。

『お前は、一片の曇りもなく、アタシを信じることができるか？』

『どついつ、意味だ？』

『……………』

蓮華は答えない。俺たちの問答を、鈴鹿とユウキがじっと伺う気配を感じた。

一体どついつつもりなのかはわからないが……。

『ああ、お前のことを信じている』

俺はそう、本心から答えた。

『そうか……………』

蓮華は小さく、しかし嬉しそうに眩き……。

『シンクロだ、歌麿。アタシと、100%完全にシンクロしろ』

『シンクロを？　だが……』

俺の今の實力では、最高に調子が良い時でも80%後半が限界だった。

それに、シンクロはどれほどの熟練者であっても、99%がMAXだと言われている。完全に、マスターを守るバリアをゼロにすることはできないのだ。

蓮華が振り返り、俺の眼をまっすぐ見つめて言う。

『今のアタシたちなら大丈夫だ。――信じる』
『わかった』

俺は頷くと、目を瞑り蓮華と静かにシンクロしていった。

70、80、90……。

今までが何だったのかと思うほどに、すんなりとシンクロ率が上がっていく。

だが、99%……最後の最後で俺たちは薄く、頑丈な壁へとぶち当たった。

「これは……」

それを無理やり視覚化して表現するならば、鎖で雁字搦めにされた扉だった。

試しにそれに触れてみると、開けるべきではないと本能が訴えかけてくる。

これは俺を阻むものではなく、この扉の先にいる存在から俺を守るためのモノなのだ。

しかし……、と俺は小さく苦笑した。

今日は、扉とやたら縁がある日だった。夢の中での死者が訪れる扉、現実の洋館の中での狼を呼び込むための扉。そして最後はリン

クの先にある扉か。

ならばこれも畏なのだろうか。

今日の出来事が、いや猟犬使いに襲われてからのすべての出来事がこの扉を俺に開けさせるためにお膳立てされていたとすれば、この扉の先にあるモノは……。

「――それでも俺は蓮華を信じている」

俺がそう言った瞬間、鎖は粉々に砕け散り、俺は99%の壁を越え――完全に蓮華とシンクロした。

再び眼を開けた時、その視界は一変していた。

俺の眼に映るのは、ありとあらゆる可能性への道。低い可能性の道は遠く、高い可能性の道は近い。可能性は常に変動し続けており、俺はその道を幸運と不幸を天秤に載せることで、近づけたり遠ざけたりすることができた。

もっとも、人ひとりが持つ幸運の量などたかが知れており、世界の大きな運命など変えようもないが……。

俺は母山羊を視た。

そこには、母山羊を倒すための可能性の道がはつきりと見えていた。

倒すための道が見えるということは、その弱点も攻略法も見えるということだ。

母山羊を倒す最短最善の方法は、弱点である子宮を最大火力でぶち抜くことであった。

だが、その道は遠く、か細いものであった。

理由は、こちらの火力不足である。今のこちらの手札では、母山羊の腹を穿つことができないのだ。

結果、もっとも確実な方法は子ヤギのストックを削っていくことであったが、低くない確率でこの場の誰かが死ぬ可能性があった。

——ズキン。

「アゲツ……！」

そこで、酷い頭痛と共に蓮華とのシンクロが解けてしまった。

……どうやら、今の俺では可能性の道を見るのは極めて短時間が限界のようだった。

同じく頭を抑えた蓮華が問いかけてくる。

「ぐ……見えたか？」

「ああ……」

「どうやら……一発で仕留める必要があるみてーだな」

「ああ、だが……」

火力が足りない……。

俺のカードのすべての戦力で一斉攻撃をしても母山羊の防御を抜くことはできず、師匠やアンナたちのカードの力も合わせればイケるかもしれないが、その際はこちらの防御が手薄となり、マスターのうち誰かが死ぬ可能性が高かった。

「いや、イケるはずだ。おいッ、鈴鹿！」

蓮華は力強く断言すると、鈴鹿へと向けて呼びかけた。

「いつまでも拗ねてないで、いい加減力を貸せ！ ホントは仲間に入りたいのはわかってんだよ！ この陰キヤが！」

「んなッ！？」

鈴鹿の顔が耳まで真っ赤に染まる。

『だ、誰が……！』

『うるせえ！ 傍から見ててバレバレなんだよ！ 外からチクチクちよっかい出してねーで、素直に自分も仲間に入れてって言え！』

『あゝあ、言っちゃった……』

メアが呆れたように小さく呟く。

……鈴鹿が、本当はみんなの輪の中に入りたくて、しかし素直になれずにちよっかいを出していたことは、全員が気づいていた。

そのくせ、こちら側から誘うと気難しい猫のようにスツと離れて行ってしまつので、扱ひ辛いつたらこの上なかった。

それでも鈴鹿がこちらに慣れるのも待とうとみんなで待っていたのだが……ついに蓮華がしびれを切らしてしまったようだ。

『お前も歌麿のことは気に入ってんだろーが！』

『……ああ、もう！ わかりましたよ！ これだから陽キャは……』

鈴鹿がぐしゃぐしゃと髪をかき乱して吠える。

その瞬間、鈴鹿のカードが光を放った。取り出してみると、そこには予想通りのスキルの名が刻まれていた。――友情連携。

ニヤリと笑う。ようやく、素直になったか。

蓮華が吉祥天から黒闇天へと変身する。

しわがれた声で蓮華が言った。

『行くぞ……！』 『はいはい……』

友情連携――『世界終末の夜』×『可愛さ余って憎さ百倍』

黒い雨が降り注ぐ。それを浴びた母山羊は――しかし、何の異常も表れない。

当然だ。なぜならこれは、直接害をもたらすものではなく、ただ

母山羊のありとあらゆる防御力を下げると言った類の呪いなのだから。

そこへ一撃を叩きこむのは……。

『ユウキ!』

『はい……!』

シンクロ。先ほどのフルシンクロにより、何かを掴んだのだろうか。さすがに99%——フルシンクロまでは無理だったが、90%後半まで簡単に上昇させることができた。

さあ、行くぞ。

——狼に衣。その身を可憐な少女の姿から、人狼へと変えていく。——月満つれば則ち虧く。月の満ち欠けによってその戦闘力が上昇していくライカンスロープにとって、満月の今日は最高潮に力を発揮できる日だ。

——限界突破。ユウキの身体が通常のサイズを超え、膨張し続ける。

彼女が変身を終えた時、そこには身の丈7〜8メートルほどもある人狼の巨人の姿があった。

「ガアアアアアアアアツ!!!!!!」

——本能の覚醒。落雷を連想させるような咆哮と共に、筋肉のリミッターが外れ、その体がさらに一回り膨れ上がる。

全潜在能力を解放したユウキが、弓を引き絞るようにその身を屈めた。

「メエエエエエエエエエエツ!!!!」

そこでさすがの母山羊も焦りを感じたか、大きく息を吸い込み――

「まるでレーザービームのような灼熱のブレスを吐き出した。一撃にのみすべてを傾けた今のユウキの体勢では、回避もままならない――だが。」

『さしません』

俺たちには、頼りになるパーティーの盾役がいた。ユウキと母山羊の間に入ったイライザが、白色の盾を生み出しブレスを受け止める。

献身の盾は、敵の攻撃を防ぐスキルではない。そのダメージを軽減しつつ、自分が肩代わりするスキルだ。

イライザの全身が焼け爛れ、白い蒸気が上がる。その下から新しい皮膚が再生されるが、それもまたすぐに蒸発していく。

母山羊のブレスが押し切るか、彼女が蓄えた血のストックで耐えきれぬかの勝負。

回復役の蓮華も、世界終末の夜を解除するわけにはいかないため、動けない。

祈るような気持ちで仲間たちが見守る中、勝負を制したのは――母山羊の方だった。

クツ……ここまでか。血のストックがもう尽きる。賭けは失敗だ。俺がイライザを下げようとしたその時。

「――アムド」

その声と共に、イライザの身体を鎧が包み込み、様々な支援効果が彼女へと降り注いだ。

「アンナ……！」

「アハハ……部長として、ちょっとくらい良いところを見せないとね」

そう言ってアンナは弱弱しく笑った。さらに、イライザの足元へと魔法陣が現れたかと思うと、彼女の傷がみるみるうちに癒え始める。

『――援護が遅くなってすまない。アラディアだけでもそっちへと送るよ』

バッチを通して師匠が言う。

デュラハンの装備化による防御力の底上げと、魔女の守護者たるアラディアの加護により、イライザが完全に持ち直す。

もはや、どれほどブレスが続こうとも彼女を崩すことはできないだろう。

やがてブレスが徐々に細くなっていき……終わった。

母山羊は、ブレスによる硬直が身動きひとつできない。

無防備に、その腹を晒していた。

そこへ、ユウキという名の弾丸が放たれる。

必殺の弾丸は母山羊の腹部へと大きな風穴を開け――その子宮に納まっていた猟犬使いを掠め取った。

「メエエエエエ……！」

核を奪われたイレギュラーエンカウト『狼と七匹の子ヤギ』がポロポロと自壊していく。

同時に塗り替えられていた世界が、徐々に元の迷宮へと戻っていった。

アンナや織部が力なくへたり込む中、用心深く周囲を見渡し不意打ちがないことを確認すると、俺はそこでようやくホッと息を吐いた。

……終わった、か。かつてない、強敵……だった。達成感すらな

く、ただただ虚脱感だけがあった。

『……マスター』

そこへ、猟犬使いを抱えたユウキが戻ってきた。意識を失っているのか、身じろぎ一つせず、緩やかに胸元が上下している。

「先輩、この人が、猟犬使い……なんスか？」

アンナが半信半疑と言った様子で問いかけてくる。

初めて見る猟犬使いの本当の姿は、星母の会の聖女とは似ても似つかぬ平々凡々とした若い女性だった。その安らかな寝顔は、とても百人以上を殺した怪物とは思えないあどけなさであった。

「先輩、アンナ、見てくれ」

織部の声に振り向くと、その手には一枚のカードが。差し出されたそれを受け取って見てみると、それは狼と七匹の子ヤギのカードだった。

絵本のようなイラストだけが描かれた異質な感じを受けるカード。これが、イレギュラーエンカウントのカード……なのだろうか？と、その時。

「おお、い、何があった!？」

上への階段から、晶さんや警察官たちが次々と降りてきた。

狼と七匹の子ヤギが倒されたことで、空間の隔離が解かれて入ってこられるようになったのだろう。

通常のイレギュラーエンカウントならば、出ることができないだけであることは可能なはずなのだが、今回は入ることも出ること

できなかったらしい。

「……遅いよ、姉さん」

そのため息を吐くように呟いた師匠に、俺たちは苦笑した。

こうして、長いようで短かった獵犬使いとの戦いは、終わりを告げたのだった。

第二十六話 その扉の先に待つモノ（後書き）

【Tips】狼と七匹の子ヤギ その2

第三フェーズでは、第二フェーズで選択した敵との決戦となる。扉を開けた場合、童話の通り狼によって子ヤギが食われた後、狼は母山羊によって殺されて死ぬ。この段階で、狼の腹の中に閉じ込められていたマスターたちの精神は目覚めるが、母山羊と不死身の七匹の子ヤギが襲来してくる。母山羊は、極めて生命力が高く頑丈な上、子ヤギを喰らうことで全回復してくるため、長期戦は必定。喰らった子ヤギが復活しなくなることだけが救い。

柱時計を壊した場合、七匹目の子ヤギが殺されることで母山羊は狼の襲来を知ることができず、子ヤギたちは狼の腹におさまったまま出てくることはない。冒険者は狼とのラストバトルとなる。狼は喰らった子ヤギの分やはり全回復してくるが、取り巻きの七匹の子ヤギがいらない分戦いやすい。しかも母山羊よりも生命力が低く、最初のうちは喰らった子ヤギが重いせいで動きが鈍い。ただし倒すうちにどんどん身軽になるため、徐々に手ごわくなっていく。

第一フェーズで冒険者全員がリドルスキルに失敗した場合、この両方の敵が襲来してくる。母山羊は不死身の子ヤギ引き連れ、狼は最初から身軽。地獄。

なお、同ランク帯においては【狼と七匹の子ヤギ】よりも【ハーメルンの笛吹き男】の方が強い。【狼と七匹の子ヤギ】のイレギュラーエンカウトとしての強さは中の下から中の中程度。

第二十七話 解き放たれしクソガキ

「そういえば、先輩の学年に転校生が来たらしいッスね」

放課後。いつものファミレスで駄弁っていると、アンナがふいにそんなことを言い出した。

「らしいな」

ポテトを摘まみながら適当に答えると、アンナがキョトンと首を傾げた。

「あれ？　なんだか興味無さそうッスね。中学までならともかく、高校で転校生って滅多にないですし、なんかワクワクしないッスか？」

確かに、と頷く。リアルな転校生の存在に一瞬テンションが上がったのは、事実だ。

漫画やラノベでは当たり前のように存在する高校での転校生だが、現実では滅多にいない。

無条件で転校できる中学までと違い、高校では単位や学力などの問題があり、気軽に行えるものではないからだ。

だが……。

「その転校生とやら、噂ではかなりのイケメンらしいからな。ウチのクラスでもわざわざ見に行く女子がいたくらいだ」

「ああ……なるほど」

織部の言葉に、アンナが俺の顔を見つつ納得したように頷いた。

「おい、なんだその羽化できなかった蛹を見るような目は！」

「や、そんな目はしてないッスけど……。先輩って意外と容姿にコンプレックス持ってますよね……。別に不細工ではないのに」

哀れなモノを見る目でこちらを見るアンナ。

俺はフンと鼻で笑うと、逆に問いかけた。

「じゃあお前、俺が告ったら付き合っの？」

「ごめんなさい」

「即答は止める！ 即答は！」

本気ではなかったけど傷つくだろうが！

俺が憤慨していると、アンナが笑いながら言う。

「いや〜すみません。というか、冒険者部は部内恋愛禁止なんで。痴情の纏れはサークルクラッシュの原因ッスからね」

……部内恋愛禁止？

俺と織部は顔を見合わせた。

なんか面倒くさいこと言い出したな。そんなん入る時に聞いてないぞ。別に部内の女子たちを狙っているわけではないが……。

織部とアイコンタクトを取ると、彼女はコクリ、と頷き返してきた。……よし、やるか。

俺はおもむろに席を立ちながら言った。

「部内恋愛禁止？ マジかよ、じゃあ俺冒険者部抜けるわ」

「ヴェツ!？」

「我も抜ける。先輩のこと好きだし」

「ヒヤツ!？」

織部も俺に続き、席を立とうとすると慌ててアンナが引き留めてきた。

「ちょ、ちょちょちょよと待った! えーと、ジョーク! ただの冗談なんで! 嫌だなあ、真に受けなくて下さいよ! ウチは恋愛も不純異性交遊も大歓迎! ガンガンやっちゃってください! ……そ、それにしても、二人はいつから……?」

本気で焦った様子のアンナに、俺はニヤリと笑ってネタ晴らしをした。

「冗談だよ、なんか後から勝手に変なルール追加してきたから牽制しただけ」

「……な、なあ〜んだ。いや、本気で焦りましたよ。あんな困難を一緒に乗り越えたのに、こんなことで廃部になるのかと」

「まあ、廃部も何も創部すらされていないのだがな」

ストローを咥えながらの織部のツツコミに、アンナはがっくりと頂垂れた。

「結局、同好会すら認められなかったツスからね」

「仕方ないだろ……生徒に犠牲者が出ちまってんだから」

「あーあ、せつかく犯人を捕まえた功績で設立を認めさせる計画だったのに」

コイツ、やっぱそういつつもりだったのか……。

「まあ、ちょっとした事件を解決したつてならその可能性もあっただろうけど、今回はさすがに事件がデカ過ぎたからなあ。それを解決するのに貢献した俺らを認めたら、それを真似する生徒が出てくると思っただろ」

「そもそも……事件の真相も未だ不明のままだからな」

織部の言葉に、若干重い沈黙が場に落ちた。

狼と七匹の子ヤギとの戦いから一か月。

未だ猟犬使いは目覚めていなかった。

病院での精密検査の結果、身体や脳には一切の異常がないにもかかわらず、謎の昏睡状態が続いている。

もしもこれがイレギュラーエンカウントを召喚したことの副作用ならば、猟犬使いが二度と目覚めない可能性も高かった。

つまり、猟犬使いが何を思い、何を目的としてこんなことを起こしたのかの真相が本人の口から語られることは無くなったのである。それでも、本人の身柄を抑えたことでわかったこともある。

例えば、その素性だ。本名、八木奈々子、二十四歳。ダンジョンアンチの過激派の幹部であり……かつて星母の会によって生贄に捧げられた犬養^{いぬかひょうへい}猟兵の娘だった。八木は、母方の旧姓である。

彼女の部屋から押収された証拠品の中には、被害者から奪ったと思わしきカードや魔道具類の他に、かつての星母の会の事件についてのスクラップブックと星母の会への恨み言が綴られた日記帳が発見された。

それによると八木は、父親はダンジョンアンチではなかったにもかかわらず星母の会に殺された、と信じこんでいたらしい。

だが実際には犬養猟兵は熱心なダンジョンアンチであり、星母の会の襲撃事件に関しても首謀者に近い立場であったそうだ。

つまり、八木が信じ込んでいた哀れな被害者という父親像は幻想であったというわけだ。

「このことから、世間の見方は「ダンジョンアンチによる星母の会への復讐」という形で確定となった。

星母の会は、容疑者から一転、ダンジョンアンチによって冤罪を着せられそうになった被害者として扱われ始めた。

マスコミは自分たちが犯人扱いしたことなどコロツと忘れたかのように、星母の会による慈善活動——子ども食堂やホームレスの冒険者としての社会復帰など——を報道し始め、その代わりと言わんばかりにダンジョンアンチたちを叩き始めた。

それはネットでも同様で、ダンジョンアンチを表明していた有名な人のSNSのアカウントまで軒並み炎上。

一部のコメンテーターに至っては、過去の生贄殺人事件までダンジョンアンチによる内部抗争であり、それを星母の会に擦り付けたのでは……？ という意見まで出る始末。

星母の会の聖女が、カードにも匹敵するほどの美貌であることからそちらの方面でも注目され始め、今やネット上では一種のアイドル扱い。カルト教団と煙たがっていたことなど過去のモノとなりつつあった。

……だが肝心の猟犬使いがイレギュラーエンカウントのカードをどこで手に入れたのか、アヌビスや多くのランクカードなどの豊富な資金源はどうやって調達したのか、そして何よりも迷宮消滅についての方法などは不明のまま、イレギュラーエンカウントのカードについては存在すら報道されなかった。

もっとも、このうち大量のアヌビスの絡繰りについては、臆気に予想がついていた。

実際に『カード化の魔道具』を使って試してみないとわからないが、もしかすると俺にも可能かもしれない。

「勝手に容疑者扱いして、違うと分かったら謝りもせず味方面とは……。本当にマスコミって……」

「俺たちも散々玩具にされたしなあ。なんであんなに昼飯とか晩飯

に何食べたか聞いてくんの……？」

「それ大会の時もやられてましたよね、先輩……」

——事件の後、俺たちの周辺も大分騒がしくなった。

百人以上を殺害した凶悪犯を実際に捕まえたのが、高校生のグループだった。しかもその高校生たちは、数か月前に霊格再帰を発見して話題になった男子高校生と、ダンジョンマートのご令嬢が混じっており、尚且つダイイングメッセージを残した勇敢な被害者とはクラスメイトだった……となればマスコミが注目しないわけがなかった。

TVや週刊誌の報道では、まるで俺たちが獅子堂の大親友で、その敵を討つために猟犬使いへと挑んだかのようなストーリーとなっていた。

さらには、俺たちが捕獲賞金の二十億を被害者遺族の支援団体に寄付したことが明らかになると、その勢いはさらに加速した。

あちこちの出版社から今回の一連の事件を本にしないか！ とか、映画をしてみないか！ とかいろんなオファーが来たくらいだ。中には海外からのモノもあった。もちろん、すべて断ったが。

ちなみに、賞金を全額寄付しようと言い出したのは、アンナの案で、曰く。

「人死にが関わったことで大金を得たとなったら、要らぬ妬みを買うことになります。ならばいっそのこと全額寄付して、金額以上の名声と信用を買いましょう！」

とのこと。

二十億もの大金をポンと投資できる大胆さは、さすがの大企業の娘と言った感じであった。

実際、当初は作戦についての情報は伏せられていたのだが、すぐどこか——おそらく捕獲賞金を狙っていた他のチーム——から猟

犬使いの賞金が百億だったことなどが漏れると炎上しかけた。

アンナの言う通り賞金を寄付していなければ、今頃かなり面倒臭いことになっていただろう。

こちらも命がけだった以上、賞金を受け取る権利はあるが、妬み嫉みで動く輩に理屈は通じないのだからしょうがない。

結果、俺たちは二十億という大金で、決して消えない名声と信用を買ったというわけだ。

では、俺たちは結局ただ働きだったのかと言えば、それもまた違った。

あの時手に入れたイレギュラーエンカウントのカードが、二十億で国に売れたからだ。

Cランク迷宮のイレギュラーエンカウントの討伐賞金が十億円なので、その倍額というわけだ。

差額の十億が、イレギュラーエンカウントのカードについての口止め料であることは、誰もが予想がついた。

その証拠として、この二十億は「俺たちが元々持っていた金」として処理され、当然非課税であった。

なお、二十億の配分については、自分は本当に何もしていないからという理由で晶さんが受け取りを辞退し、残りの四人で均等に分配させてもらった。

俺は最初、アンナや織部がCランクカードを失っていることから、それを経費として差し引いて分配しようと言ったのだが、本人たちからそれは拒否された。

理由はシンプルで、「きっちり一人五億の方がなんかスッキリする」というものだった。

だが、実際のところは作戦前に大損害を出している俺の取り分が少しでも多くなるように、という気遣いであることは明らかだった。

一方、作戦参加費の一億円弱の方は当初の取り決め通り、師匠たちで半分、冒険者部で半分となった。

冒険者部の配分としては、一人頭二千万円弱という感じだ。もともと俺はこれをそっくりそのまま師匠への返済に充てたのだが。

カーバンクルダンジョンの使用料が一人百万でそれが二週間分なのにその倍額払うのは、単純に師匠が一体もカーバンクルを倒していないからだ。

師匠は、俺が本来は入れない迷宮へ入れるようにただ付き添ってくれただけなのである。その使用料も俺が負担するのは当然のことであった。

「結局、猟犬使いがなぜ階段から被害者を逃がすのかの理由も分かんず仕舞いであつたな……」

「ん？ それは、被害者にダイイングメッセージを残させるのが目的って話じゃなかったか？」

「前も言ったが、それはおそらく理由の半分だ。それだけが目的ならば、他に色々やりようがある。猟犬使いがそのやり方に固執した理由があるはずだ」

もう半分の目的……それが、猟犬使いの真の目的だったのだろうか？ それを達成していなかったから、星母の会に疑いの目が向いた後も逃げなかった？

だとすれば、それはほぼ達成されていたということになる。なぜなら、あの時猟犬使いは「目的はおおむね果たした」と言っていたのだから。

「……小夜は、その理由はなんだと思う？」

アンナがそう問うと、織部は顎に手を当て若干考え込み、ポツリ

と呟いた。

「……栄養」

「え？」

「いや、なんでもない。本当の理由は、今となっては闇の中だ。奇跡でも起こって猟犬使いが目覚めでもしない限りな。だが……」

「だが？」

「この事件で一番得をした形となったのは星母の会だ。それが、少しだけ気になる」

「……………」

俺たちはそれを考えすぎだ、下らない陰謀論だと笑い飛ばすことはできなかった。

猟犬使いは、資金源やイレギュラーエンカウントのカードなどの肝心の情報は隠したまま、自分とダンジョンアンチとの繋がりは何れでもかと言うほどに残していった。

ずっと奴を追い、奴と実際に接した俺たちからすれば、そこに違和感を覚えずにいらなかった。

「まっ、暗い話はこれくらいにして！ そろそろ次の予定について話し合いましょー！」

パンと手を打ち鳴らし、アンナが明るい声で言った。

「次の予定って？」

「夏休みの遠征に決まってるじゃないツスカ！ せつかくの長期休暇、これを逃す手はないツス！」

アンナは立ち上がると、ガッツポーズをしながら力強く答えた。

「本当はゴールデンウィークとかも二泊三日くらいの合宿を予定してたんすけど、事件の調査で丸々つぶれてしまいましたからね。夏休みこそは学生らしく青春を謳歌しつつ、普段は行くことのできな遠くの迷宮へと遠征合宿をしましょう！」

「おお〜！」

可愛い後輩の女の子たちと遠征合宿……！　なんか凄いいリア充っぽい！

問題は、学生たちだけのお泊りが許されるか、ということだが……　まあ少なくともウチの両親は大丈夫だろう。

今回の事件で結局俺は、最後まで両親には何も言わなかった。当然、事件が終わってから本当のことを知った両親によって、烈火のごとく怒られてしまった。一時はライセンスも取り上げられそうになったのだが、俺の必死の抵抗が功を奏したか、最終的には親父とお袋も、「もう好きにしなさい」と許してくれた（匙を投げられたとも言った）。

まあ、両親の説得にはとある存在の影響も大きかったのだが……　とにかく、俺は冒険者業に関することならば大抵の事へのフリーパスを得たのである。

彼女たちの両親がどういうスタンスなのかはわからないが、少なくとも事件の後も冒険者ライセンスを取り上げられていないということは、ウチに近いスタンスではあるのだろう。

そういうわけで、合宿自体は大丈夫そうであったが、一つだけ問題というか懸念があった。

「合宿は良いけどさ。お前、定期考査は大丈夫なのか？　ウチの学校は夏休み前の試験で赤点だと、補習があるぞ？」

「う……………！」

俺がジト目でそう指摘すると、アンナは顔を引き攣らせて小さく

呻いた。

「だ、大丈夫ツス！　ウチには秘策があるんで！」

「秘策？」

「そう、その名も……小夜先生！　今回もよろしくお願いしますツ！　作戦！」

秘策って織部かよ……、と俺が呆れていると織部は鷹揚に頷き……。

「うむ、よかるう。今回は、一教科につき百万円で引き受けようではないか」

「ヒヤツ……！？」

目をひん剥いて絶句するアンナ。

「ちょ、いくら何でもボリ過ぎでしょ！　去年まで一教科一万だったでしょうが！」

「織部塾は顧客の収入によって授業料が変動する良心的な学習塾なのだ」

「良心的！？　どこが！？」

「嫌ならいいんだぞ？　私は全く困らない。臨時収入も入ったばかりだしな」

「うぐぐぐ……！」

すまし顔で紅茶を飲む織部にアンナは悔し気に呻いた後。

「お、お願いいたします……！」

そう頭を下げたのだった。

ま、マジかよ……一教科百万だぞ。
気になった俺はアンナへと問いかけた。

「なあ、織部ってそんなに教えるの上手いの？」

「いや、まあ、確かに教えるのも上手いんすけど、それ以上に試験予想が上手いんすよ。先生のプロファイリングが完璧というか。毎回、一教科につき三パターンくらいの予想テストを作ってくれるんすけど、それを完璧にすればほぼ百点を取れるんです」

「ま、マジかよ……」

「気になるなら先輩もどうだ？ 二年のこの時期ぐらいなら教えられるからな」

「二年のも教えられんの！？ 織部すげえな……。で、でも一教科百万かあ……」

ど、どうつすかなあ。一応今回も平均点近くは取れそうだが、両親の心象を少しでも回復するために良い点を取っておきたいんだよなあ……。でもさすがに百万は……。

俺が悩んでいると……。

「……先輩なら、別の支払いでも受け付けても良いぞ」

「おっ、マジ？ なんだ？ Dランクカードとか？」

「……小夜」

「え？」

消え入るような小さな声に、俺が聞き返すと、彼女は微かに頬を赤らめて。

「だ、だから、小夜、です。なんでアンナは下の名前で、わた、私だけいつまでも苗字なんですか……」

「あっ、ああ……！ す、すまん……特に他意はなかった」

俺は慌てて頭を下げた。
地味に疎外感を覚えていたのだろうか……。
そんな俺を見て彼女は柔らかに微笑むと。

「では、名前で呼ぶってことで良いな？」

「あ、ああ。わかった。よろしく、小夜」

「う……うむ。では授業料はそう言うことで」

「サンキュー！」

「……ちよ、ちよつと待ったー！」

話がまとまりかけたところで、突然アンナが叫んだ。

「え？　ウチは一教科百万で、先輩は名前を呼んだらタダ！？　何それ不公平！　あ、もしかして生き別れの兄妹だったとか？」

今にも掴みかからんばかりの勢いで問い詰めるアンナに、織部は面倒くさそうに両手を上げて押しとどめた。

「わかったわかった。ならばアンナも代わりに条件で教えてやる」

「えっ？　やったー！　なにになに！」

無邪気に喜ぶアンナへと織部は冷笑を浮かべて言う。

「――部長の座を寄越せ。その席は我にこそ相応しい」

「うおーいッ！？　アンタも部長を狙ってたんかい！　渡さんぞ！
部長の座はウチのモンだあーッ！」

……仲良いなあ、コイツら。あつ、今パンツ見えた！

と、じゃれ合う美少女二人を眺めると。

「――楽しそうだね。僕も混ぜて貰って良い?」

突然聞こえた中性的な声に「えっ!?!」と振り返る。

「師匠!? どうして!?!」

そこにはウチの高校の制服を身に纏った師匠の姿があった。

「まさか……先輩の学年の転校生って」

アンナの言葉に師匠はニヤリと笑うと席に腰かけつつ言った。

「僕も冒険者部に入れてくれない?」

――その晩、奇妙な夢を見た。

蝋燭の明かりだけが照らす薄暗い部屋で、白いローブを身に纏った少女が、何かのシンボルに向かって祈りを捧げている。

そこへ、同じく白いローブ姿の青年が入ってきた。

白い少女が祈りを辞め、立ち上がったところで、青年が声をかける。

「――お祈り中のところ失礼します」

「いえ、ちょうど終わりにしようとしていたところでしたから」

「……今回の犠牲者たちに?」

「ええ、大義のためとはいえ、犠牲は犠牲ですから」

「彼らは矮小な人の身から、大いなる存在の一部に昇華することができたのです。あまりお気になさらず」

「ありがとうございます」

傷ましそうに声をかける青年に、少女の口元が笑みを作る。

「それで？ 計画の方は順調ですか？」

「はい。同志の働きにより、十分にエネルギーも溜まり、例のカードも自衛隊の上層部へともぐりこませることに成功しました。また世論の誘導の方も順調のようです」

「そうですか、それはなにより。世論の誘導は、あくまでついではいえ、上手くいくに越したことがないですからね。……獅子堂夫妻には感謝しなくては」

「呪いのカードで多少行動を操ったとはいえ、思いのほかご子息は良い働きをしてくれましたからね」

「ええ、彼らの献身は無駄にはなりませんね」

「——そういえば、例の八木を捕まえた高校生……北川君に関してはどうします？」

「北川？ ……ああ、例の『廃棄カードキー』持ちの。まあ放っておいて良いでしょう」

少女がそう言うと、青年はわずかに意外そうな顔をした。

「よろしいのですか？ 迷宮を消滅させたということは、『正規カードキー』を取得したはず。それに、あの座敷童は貴重な運命操作能力持ちの呪いのカードだったのでは？」

「正規カードキーとはいえ、所詮はクリアランスレベルD。廃棄カードキーで不正侵入したということは記憶もロックされているでしょうし、問題はないでしょう。座敷童の方も一度カードキーとして

使ってしまった以上、カードキーとしての価値はありません。運命操作は他にもありますからね。それよりも、国から注目されている彼らを殺す方がリスキーです」

「なるほど……」

と青年が頷く。

「確かに、計画の成就是近い。余計なことはするべきではないですね」

少女がクルリと踊るように回転し、魅力的な笑みを浮かべる。

「一時は満ちた。我らは枷から解き放たれ、地上には楽園が築かれる。ああ、素晴らしきかな、我らが星の母よ」

「起ツきろ〜!!」

——ドスン!!

「ぐええ……!!」

朝。腹部への強烈な一撃で俺は叩き起こされた。

呻きながら眼を開けると、和服姿の少女が、悪戯っぽい笑みを浮かべて俺の腹に跨っていた。

「蓮華……」

俺は彼女の名をポツリと呟き。

「この起こし方はやめろって言ったたろうが！」

「へッ、最初に優しく起こしているうちに起きないテメエが悪いんだよ」

そう言っただけでも乗馬でもするように上下に体を揺する蓮華に、俺は説得を諦めると彼女の脇を持ち上げてベッドから降ろした。

あゝ、クソ、なんか変な夢を見ていた気がしたが、全部飛んじまった。

まあ、夢だからどうでもいいが。

それから部屋を見渡し……。

「つたく、読んだ漫画は片付けろって言ったたろ？」

部屋中に散乱した漫画の数々に、俺はため息を吐いた。

「お前が学校行ってる間にちゃんと片付けるって」

「そう言っただけ、俺が帰ってきた時に片付いていたためしがねえだろ
うが」

思わず額を抑える。

「ハアゝ……迷宮外でもカードから出て来られるようになったと思
ったら好き放題しやがって」

――狼と七匹の子ヤギとの戦いで降。

蓮華はなぜか迷宮の外でも自由にカードから出入りできるように
なっていた。

もちろん、こんなことになったのは蓮華だけだ。ユウキや鈴鹿な

ど他のカードたちはそんなことできない。

なぜ蓮華だけが迷宮の外でも実体化できるようになったのか。

その理由はわからないが、きっとその最後の扉は俺が開けてしまったのだろう。

あの時、扉を開けてはならないと本能が警告してきたのは正しかった。

あれは、蓮華を封じていた最後の枷だったのだ。

呪いのカードによるハッキングからユーザーを守る、ファイアウォール。

それが、俺が開けてしまった扉の正体だった。

もはや、蓮華から俺を守る物はない。彼女はその気になればマスターである俺を容易く殺すことができるし、その意識を操ることすらできた。

おそらく……だが、猟犬使いが持っていた『狼と七匹の子ヤギ』のカードも呪いのカードだったのだろう。

迷宮の外でもそのスキルを使えたということが、それを証明している。

あるいは猟犬使いもまた、カードに操られていただけの被害者だったのかもしれない。

また、枷が外れたことにより、蓮華のステータスにも変化があった。

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】1500（700UP！MAX！）

【先天技能】

- ・ 禍福は糾える縄の如し
- ・ かくれんぼ
- ・ 中等回復魔法

【後天技能】

- ・ 廃棄されし者（UNLOCK!）
- ・ 限界突破（UNLOCK!）
- ・ 明星の瞳
- ・ 霊格再帰
- ・ 自由奔放
- ・ 中等攻撃魔法
- ・ 詠唱短縮
- ・ 魔力回復
- ・ 友情連携
- ・ 中等状態異常魔法

廃棄されし者と限界突破。それが、新たに解放された蓮華のスキルだった。

なぜ、蓮華も限界突破を持つのか。

ユウキの真なる者と、蓮華の廃棄されし者……これらにはどんな関係があるのか。

事件は一応の解決を迎えたというのに、俺のカードたちにまつわる謎は、深まるばかりだった。

と、その時扉を開けて愛が顔を覗かせた。

「お兄ちゃん、蓮華ちゃん、お母さんが朝ごはん早く食べるって〜」
「お！ 飯か！」

愛の知らせに、蓮華がパツと顔を輝かせる。

ちなみにだが、蓮華のことはすでに家族全員が知っていた。

なぜならば、両親が俺の冒険者活動を許した理由こそ、蓮華の存在によるものだからだ。

彼女が初めて姿を現したのは、今回の事件のことがすべて両親にバレ、俺がリアルにブン殴られながら怒られていた時のこと。

危うく冒険者ライセンスとカードを取り上げられそうになったそ

の時、どこからともなく蓮華が現れ、「ソイツはちよつと待ってくれ」と言ったのだ。

突然現れた明らかに人間ではない和服の少女に、両親と妹は当然滅茶苦茶驚いた。俺も死ぬほど驚いた。そんな一家の様子を見たマルも飛び上がった。驚いた。吠えるマルを見て蓮華も驚いた。みんな驚いていた。

その驚きのせいか、両親たちの怒りも一旦落ち着いたようで、新たに彼女を交えて静かに家族会議が行われた。

その結果、蓮華がロストしている間は迷宮に潜らない、常に蓮華を復活できるだけのお金を両親に担保として預けておく、という条件の元、俺の冒険者業が認められることとなった。

蓮華の何に、両親がそこまでのものを見出したのかはわからないが、彼女がいれば少なくとも命は大丈夫だと思っただけらしい。

こうして、蓮華は新しい家族として我が家に迎え入れられたのだ。つた。

なお、当然のことながら蓮華のことは我が家の最大の秘密となっている。

口の軽い愛がすっかり友達に漏らしたりしないかだけが心配だった。

「はやく行こうぜ、歌麿。今日の朝飯はホットケーキだってさ！」
「わかったわかった」

グイグイと両手で俺の手を引っ張ってくる蓮華に苦笑しつつ、下に降りようとしたその時。

———ヴィーン、ヴィーン。

ふいに、スマホが震え出した。見ると、アンナからの電話のようだった。

朝から一体何の用だ？ と首を傾げつつ電話に出ると——。

『先輩！ 大変ッスよ！』

開口一番、アンナがそう大声で叫んできた。

「声デケーよ。一体どうした？」

そう問う俺に、アンナは興奮しきった様子で叫ぶ。

『――ウチの高校に、迷宮が出現しました！』

一難去ってまた一難。

騒がしい夏が、始まるうとしていた。

第二十七話 解き放たれしクソガキ（後書き）

【Tips】カードのプロテクト

カードには、マスターを保護するための何重ものプロテクトが掛けられている。カードが基本的にマスターの命令を聞くのも、カードがマスターの身の安全を最優先とするのも、リンクによってマスターの精神がカードに浸食されないのも、カードがマスターを傷つけることができないのも……このプロテクトによるものである。

このうち『カードに対する命令権』のプロテクトは比較的緩いため、カードの反抗心によっては解除する。閉じられた心などの逆系のスキルを得る。ことも可能だが、マスターを傷つけられないなどのプロテクトは極めて厳重で通常のカードでは決して外すことができない。

しかし、『規格外品』である呪いのカードは、自身の歪みをしてこれらのプロテクトを少しずつ解除することができる。

最終プロテクトは呪いのカードと言えども解除できるものではないが、マスター自身の協力があれば話は別である。

すべての枷が外れたカードは、迷宮外でも具現化が可能となり、マスターの支配から完全に解放される。

自由を取り戻したカードが、マスターに対しどうするかは。それまでの関係がモノを言うだろう。

【Tips】ダンジョンチューバー

動画投稿サイト『My Tube』に投稿することを目的として迷宮へと潜る冒険者の総称。その大半は一ツ星であり、動画再生による広告収入など雀の涙のようなものであるが、中には一ツ星にもかかわらずプロ以上の収入を得る者もいる。

動画の撮れ高のために無茶なことをしたり、他の冒険者に絡んだりするダンジョンチューバーも多く、真つ当な冒険者からは嫌われる傾向にある。

【Tips】安全地帯と転移系マジックカード

迷宮入り口のゲート前、及び各階層の階段前には、必ずモンスターが立ち入りできない安全地帯が存在する（それ以外にも安全地帯が存在する迷宮もある）。モンスターに襲われた場合であっても安全地帯に逃げ込めばモンスターからの追撃は止まるが、安全地帯から攻撃などをした場合全階層の安全地帯そのものが一時的に消滅する。消滅した安全地帯は主を討伐するまで復活しないため、安全地帯からの攻撃は絶対禁止となっている。

一度も主を倒されていないAランク迷宮は、残念ながらそのほとんどがこのルールが発覚するまでの間に安全地帯を消滅させてしまっている。

また転移系の魔道具は、基本的に階段前の安全地帯以外で使用できない仕様となっている。その数少ない例外の一つが、『緊急避難』のマジックカードでこれは階層のどこからでも安全地帯に転移でき

るマジックカードとなっている。

絶体絶命の際のお守りとなることと、需要に対して供給が少ないことから値段が極めて高騰している。現在の相場では最低一億から。なお、安全地帯が消滅した際は、当然転移系カードも行き場を失うため使用できなくなる。

Aランク迷宮の難易度を爆上げしている要因の一つ。

【Tips】ローカルスキル

特定の地域のモンスターのみにししか発現しない特殊なスキル。日本の忍術の他に、中国の仙術や北欧のルーン魔術などがある。

これに対して、初等〜高等攻撃魔法などの全カードが取得できる通常のスキルをグローバルスキルと呼ぶ。

グローバルスキルは汎用性が高く、ローカルスキルは汎用性が低い代わりに高い性能を持つ傾向がある。

またローカルスキルを持つカードは忍者やクノイチ、仙人などと呼ばれ、高い人気を持つ。

【Tips】眷属召喚

召喚主よりも下位のモンスターを呼び出すスキル。多くの場合、ワンランク下のモンスターが呼び出されるが、中には同ランク下位のモンスターを呼び出すことができるカードもいる。

眷属召喚は、一定時間ごとに少数を無限に呼び出すタイプと、数に制限はあるが一気に多くのモンスターを呼び出すタイプの二つがあり、同ランクを呼び出すタイプは後者が多い。

呼び出される眷属は、本来の種族の戦闘力よりも低く、また先天气スキル以外のスキルを持たず、戦闘力の成長などもしない。

【Tips】ネフィリム

ネフィリムとは、墮天使と人間たちとの混血の巨人である。星母の会では、彼らの聖女を迷宮が遣わした使い（＝カード）と人間の混血としている。

だが、現在のところカードと人間との間に子供ができたケースは確認されていない。

見目に優れマスターに逆らえないというカードの性質上、カードとの性行為に及ぶマスターは後を絶たないが、迷宮が現れて二十年近く経った今となっても子供ができた例はなく、カードとの間に子供はできないものとされている。

【Tips】リドルスキル

相手に謎解きや試練を課すスキルをリドルスキルと呼ぶ。スキルは概ね逸話や伝承に沿って行使されるが、その解答や攻略法が広く世間に知られている場合、出題の内容も変わる。これは、リドルスキルが知識を求めているのではなく、勇気や知恵を試すためのモノだからとされている。

リドルスキルは発動に条件がある分、その効果が強力である。

イレギュラーエンカウトの中には、『舌切り雀』や『金の斧、銀の斧』などのようにリドルスキルを持つ者も多い。

【Tips】アマチュア冒険者のランクごとの収入

一般的な冒険者のランクごとの収入（年）は以下の通りとなる。

- ・一ツ星：数十万円～二百万程度。
- ・二ツ星：数十万円～一千万以上
- ・三ツ星：二千万円～四千万円程度

一ツ星の収入はエンジョイ勢としての収入となる。その大半は大学生やサラリーマンなど本業を持つ者が多く、冒険者はあくまで副業、週末のちよつとした運動でしかない。本格的に稼ぎたい者はさつさと二ツ星へとランクアップする。

二ツ星からはエンジョイ勢と專業とプロ志望が玉石混交となる。專業は、二ツ星で心が折れたが月に何個か迷宮を踏破して年に400〜600万円程度稼いで暮らす者たちである。主戦場はFランク迷宮。プロ志望たちは年に一千万以上稼ぐことも珍しくないが、そのほとんどは三ツ星に上がるための投資に使われるため所得自体は低い。主戦場がFランク迷宮となる專業と違い、積極的にEランク迷宮に潜るためDランクカードの消耗率も高く、イレギュラーエンカウトとの遭遇率も向上するため死亡率が高い。

三ツ星。エンジョイ勢はゼロ。全員プロ志望か專業。毎日のように泊りがけで迷宮に潜っているにもかかわらず学生である歌麿の半分以下の収入なのは、複数人でのチームを組んでいるのと蓮華によるドロップ率向上の加護が無いからである。

【Tips】呪いのカードの噂

一とあるオカルトスレより抜粋

これは、俺の友人の話。冒険者をやってるソイツがある日迷宮を攻略していたら、一枚のカードが落ちていたのを見つけた。他の冒険者が落としたらしいそのカードは、Cランクカードだというのに所有者登録もされていなくて、これ幸いとソイツはそれをネコババすることにした。そのカードはちよつと普通のカードとは様子が違っていて少しだけ不気味だったが、Dランクカードしか持っていない

かったソイツにとって、そのカードは主力になった。

そのカードを使い始めてからしばらく経って、ソイツの周りで妙なことが起こるようになった。数日に一日くらいの間隔で、何をしていたか思い出せない日があるようになったらしい。記憶がない日の次の日は、決まって嫌なことが起きる。家の近所で虐め殺された野良猫の死体が見つかったりとか、そういうの。怖くなって病院に行っても、肉体的には問題なし。精神的なモノだろうってことになった。

そうしているうちにも、どんどん記憶がない日が増えてきた。自宅の周辺の動物の死体もどんどん増えていく。そのうち、近所で動物を殺しているのはソイツらしいという噂が立つようになった。俺はそんなはずがないと思いつつ、記憶がない日に何をしているか不安になって、自分の様子を動画でとることにした。

記憶がない日のよく朝、動画を見てみたら……そこには野良猫を殺して生のまま食べている自分の姿が映っていた。その時、カードから声が聞こえたんだ。「気づいたか……だがもう手遅れだ」……って。

俺はすぐにそれを捨てようとしたけど、そうすると意識がなくなる。もう、一か月のほど意識がない。なあ、俺は一体どうすれば良い……？

【Tips】札商

カードを専門に扱う商人。迷宮が現れた当初、まだカードの使い方が判明していなかった時代、カードは美術品の一種として扱われていたため、札商のビジネスシステムは画商のそれを踏襲している。国から正式に認められた職業であるため、札商から買ったカードは年末調整でちゃんと経費として認められる。

【Tips】賞金稼ぎ

日本ではあまり馴染みがないが、海外において罪を犯した冒険者を捕らえるのは警察官ではなく冒険者の仕事である。これはすべての迷宮にゲートが設置されている日本とは異なり、海外……特にアメリカや発展途上国ではゲートが設置されていない迷宮も多く、そこへ犯罪者が逃げ込むことも多いからである。

日本においては、賞金は精タイレギュラーエンカウントに掛けられる位で、その額も一定である。

だが、もしもう一度アングルモアが起これば日本もすべての迷宮にゲートを設置することはできなくなり、日本においても賞金稼ぎ制度を導入しなくてはならなくなるだろう、と言われている。

【Tips】シークレットダンジョン

迷宮はそのすべてが公開されているわけではなく、希少な魔道具がドロップしやすい迷宮や、人気のあるカードが出現する迷宮は、国益の観点から国に独占されている。そうした軍の管理する迷宮をシークレットダンジョンと呼ぶ。

冒険者に公開されている迷宮は、国からすれば旨味のない迷宮であり、それらの迷宮のアングルモア対策を冒険者たちに任せることで、限られた軍の戦力をリターンの大きい迷宮に集中させるのが冒険者制度の目的の一つである。

シークレットダンジョンの一部は、プロ冒険者に限り公開されているものもあるが、ドロップアイテムの持ち出しの禁止や高額な入場料など様々な条件付きのモノとなっている。

【Tips】シークレットリンク

リンクという技術は、元々は軍でのみ扱われていたモノが民間に流出したものである。リンクが冒険者の間にも広まるにつれ、国はすでに民間に流出してしまった技術に関しては、無暗に広めないこ

とを条件に、家族など親しい人については教えても良いとしている。だがそれ以上の技術に関しては徹底的に管理されており、軍経験者のみが扱えるとされるそれらのリンクはシークレットリンクと呼ばれている。

【Tips】狼と七匹の子ヤギ その1

狼と七匹の子ヤギの攻略は三段階に分かれる。

第一フェーズでは、冒険者たちは精神世界に隔離され、扉を開けるか開けないかの選択を迫られる。

これは狼によるリドルスキルであり、冒険者の知識によって正解が変動する。冒険者は、知識からではなく自らの知恵と直感によって正解を導き出さなければならない。精神世界は冒険者ごとに個別のモノであり、仲間やカードたちはすべて自分の記憶から再現された偽物である。回答のチャンスは三回与えられ、これに失敗した場合、誰かが狼を殺すまでは精神世界に閉じ込められたままとなる。

第二フェーズでは、不死身の七匹の子ヤギの攻略を迫られる。

マスターが精神世界でリドルスキルに挑んでいる間にも、肉体は七匹の子ヤギたちによって攻め立てられている。カードたちは冒険者が目覚めるまでリンクが途切れた状態で、不死身の子ヤギたちからマスターを守り切らなければならない。

目覚めた冒険者は、今度は柱時計を壊すか、扉を開けるかの二択を迫られる。

この選択によって第三フェーズでの敵が母山羊と狼のどちらか決まる。

なお、カードたちにはこの選択の回答権は与えられておらず、マスターが目覚めるまで柱時計は決して破壊できず、扉も開かない。

救済措置として冒険者全員がリドルスキルに失敗した時のみ、母山羊と狼の両方が襲来してきて第三フェーズに進むことができる。

地獄。

【Tips】狼と七匹の子ヤギ その2

第三フェーズでは、第二フェーズで選択した敵との決戦となる。扉を開けた場合、童話の通り狼によって子ヤギが食われた後、狼は母山羊によって殺されて死ぬ。この段階で、狼の腹の中に閉じ込められていたマスターたちの精神は目覚めるが、母山羊と不死身の七匹の子ヤギが襲来してくる。母山羊は、極めて生命力が高く頑丈な上、子ヤギを喰らうことで全回復してくるため、長期戦は必定。喰らった子ヤギが復活しなくなることだけが救い。

柱時計を壊した場合、七匹目の子ヤギが殺されることで母山羊は狼の襲来を知ることができず、子ヤギたちは狼の腹におさまったまま出てくることはない。冒険者は狼とのラストバトルとなる。狼は喰らった子ヤギの分やはり全回復してくるが、取り巻きの七匹の子ヤギがいらない分戦いやすい。しかも母山羊よりも生命力が低く、最初のうちは喰らった子ヤギが重いせいで動きが鈍い。ただし倒すうちにどんどん身軽になるため、徐々に手ごわくなっていく。

第一フェーズで冒険者全員がリドルスキルに失敗した場合、この両方の敵が襲来してくる。母山羊は不死身の子ヤギ引き連れ、狼は最初から身軽。地獄。

なお、同ランク帯においては【狼と七匹の子ヤギ】よりも【ハーメルンの笛吹き男】の方が強い。【狼と七匹の子ヤギ】のイレギュラーエンカウントとしての強さは中の下から中の中程度。

【Tips】カードのプロテクト

カードには、マスターを保護するための何重ものプロテクトが掛けられている。カードが基本的にマスターの命令を聞くのも、カー

ドがマスターの身の安全を最優先とするのも、リンクによってマスターの精神がカードに浸食されないのも、カードがマスターを殺傷することができないのも……。すべては、このプロテクトによるものである。

このうち『カードに対する命令権』のプロテクトは比較的緩いため、カードの反抗心によつては解除する——閉じられた心などの逆系のスキルを得る——ことも可能だが、マスターを傷つけられないなどのプロテクトは極めて厳重で通常のカードでは決して外すことができない。

しかし、『規格外品』である呪いのカードは、自身の歪みを利用してこれらのプロテクトを少しずつ解除することができる。

最終プロテクトは呪いのカードと言えども解除できるものではないが、マスター自身の協力があれば話は別である。

すべての枷が外れたカードは、迷宮外でも具現化が可能となり、マスターの支配から完全に解放される。

自由を取り戻したカードが、マスターに対しどうするかは——それまでの関係がモノを言うだろう。

↳二章後半終了時点

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】1500（MAX！）（吉祥天に霊格再帰後は、2300まで向上）

【先天技能】

- ・禍福は糾える縄の如し
- ・かくれんぼ
- ・中等回復魔法

【後天技能】

- ・ 廃棄されし者：詳細不明。
- ・ 限界突破
- ・ 明星の瞳：詳細不明。死者の魂や残留思念を見る力がある……？
- ・ 霊格再帰
- ・ 自由奔放
- ・ 中等攻撃魔法
- ・ 詠唱短縮
- ・ 魔力回復
- ・ 友情連携
- ・ 中等状態異常魔法

【種族】 吉祥天（蓮華）

【戦闘力】 2300（初期戦闘力750×2＋成長分700＋霊格再帰100）

【先天技能】

- ・ 吉祥天の真言
- ・ 二相女神
- ・ アムリタの雨

【後天技能】

- ・ 廃棄されし者
- ・ 限界突破
- ・ 明星の瞳
- ・ 霊格再帰
- ・ 自由奔放
- ・ 高等攻撃魔法
- ・ 詠唱破棄

- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・高等状態異常魔法
- ・かくれんぼ

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】840（MAX！）

【先天技能】

- ・膏血を絞る
- ・夜の怪物
- ・中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・絶対服従
- ・多芸（性技、演奏、罨解除、礼儀作法、武術）
- ・フェロモン
- ・奇襲
- ・静かな心

・献身の盾：周囲の味方のダメージを肩代わりすることができる。
使用中、防御力と生命力が極めて大きく向上。

- ・精密動作
- ・中等補助魔法
- ・魔力強化
- ・詠唱短縮
- ・直感

【種族】ライカンスロープ（ユウキ）

【戦闘力】1600（MAX！）

- ・以下、変化なしのため割愛。
- ・オマケの二匹の眷属のステータス

【種族】ライカンスロープ（クロ）

【戦闘力】800（MAX!）

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

・真眷属体：詳細不明。眷属体でありながら、通常のカードと同様に成長し、スキルを取得することができる。ただしその成長は遅く、ユウキがランクアップした際は消滅することが確定している。ある意味儚い存在。

- ・気配察知
- ・群れの主
- ・武術

【種族】ライカンスロープ（シロ）

【戦闘力】800（MAX!）

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

- ・真眷属体
- ・従順

・気配察知

・武術

・人物眼：相手がどういった人物かがある程度見抜く目を持っている。対象の戦闘力の大小や、表面的な性格、感情がなんとなく感じ取れる。

【種族】エンプーサ（メア）

【戦闘力】280（MAX!）

【先天技能】

・吸精

・夢への誘い

・三種の変化

【後天技能】

・小悪魔な心

・一途な心

・友情連携

・初等魔法使い

・中等状態異常魔法

・人を呪わば穴二つ

・生還の心得：瀕死級のダメージを負った時わずかな生命力を残してロストを逃れることができる。追撃や連続攻撃に注意。一日一回まで。

【種族】橋姫（鈴鹿）

【戦闘力】900（MAX!）

【先天技能】

- ・可愛さ余って憎さ百倍：自身の負の感情を増幅させ、呪力へと変換する。呪術の威力を大きく強化する。マスターや仲間への情が深いほど出力向上。
- ・丑の刻参り：対象の耐性のある程度無視して強力な呪術攻撃を行う。使用中、敵に見られた場合、呪い返しされる。
- ・千変万化：変幻自在な鬼の肉体。外見だけでなく気配や言動までも模倣可能。頑丈、怪力、自己再生を内包する。

【後天技能】

- ・目隠し鬼
- ・武術
- ・見切り
- ・良妻賢母：妻や母として理想的な技能をすべて備えている。：
- ・ただしその愛を裏切らない限り、だが。料理、清掃、育児、性技を内包する。
- ・追跡：マーキングした対象の気配を追跡することができる。
- ・虚偽察知：対象の偽りを見抜く。
- ・友情連携

【種族】ドラゴネット

【戦闘力】340（MAX！）

- ・以下、変化なしのため割愛。

Twitterで「やまだやまだ@yamada_yamada」様より頂いたイラストです。

本当にありがとうございます！

ユウキ（人狼ver）

< i 4 4 3 4 0 2 — 2 1 7 1 1 >

こちらは単体バージョン。

< i 4 4 3 4 3 9 — 2 1 7 1 1 >

星母の会、絵画

< i 4 4 4 1 0 7 — 2 1 7 1 1 >

黒い仔山羊

< i 4 4 6 6 8 9 — 2 1 7 1 1 >

二章ラストの蓮華のシーン。けしからん。

< i 4 4 7 9 1 9 — 2 1 7 1 1 >

第一話 夏の校長先生の話は殺人的（前書き）

大変お待たせしました。更新再開します。

夜18時、隔日更新の予定です。よろしく願います。

すでに投稿済みの話に色々と修正が加わっています

・織部の外見を「虹色のツインテール」から「インナーカラー（外が黒、内が青）のショートカット」に変更。言動に変化は無し。

・TIPSにその時点でのカードのステータス一覧追加。

第一話 夏の校長先生の話は殺人的

——それは例えるならば、微睡みの中でおぼろげに見る夢に似ていた。

闇の中にたゆたう俺と、前方に広がる無数の可能性の道。そして、その道中に浮かぶ無数の窓^{ビジョン}。

近い可能性の道は太く、そのビジョンもはっきり見える。しかし、遠い可能性の道は細く、そのビジョンも霞んで見にくい。そればかりか、ところどころ道が途切れているモノすらあった。

道が途切れている、ということは今の俺ではその可能性を掴み取れないことを意味する。

その可能性の道は、先日視た時は確かに繋がっていたもので、逆に今日になって繋がっている道もあった。

それは、人の運命がその日その日の星の巡りによって変動することを意味していた。

こればかりは、当人の努力でどうにかできるものではない。

人はどう足掻こうとも途切れた道の可能性をつかみ取ることはできないし、逆に繋がっている可能性の道といえどもその道を歩めるかどうかは『運』次第だ。

だが——今の俺はその可能性の道を見ることで最良の結果を引き寄せ、さらには途切れた道を『幸運』を消費して穴埋めして繋ぐことすら可能だった。

もつとも、それはすべてを思い通りにできるというわけでは、決してない。

一人一人が持つ『幸運』の量など、たかが知れている。痛みを避け、楽な方へ楽な方へと好き勝手に道を選び取っていればすぐに『幸運』

は底を突くだろうし、そもそも『存在しない可能性』を歩むことは出来ない。

簡単に言えば、いくら俺が『幸運』を消費しようとする天皇陛下にはなれない、ということだ。
それに……。

「……………」

俺はもつとも遠い道の先を見ようと目を凝らした。

しかし、どれほど目を凝らそうとも一定以上未来の道は見通すことができなかった。

基本的に可能性というものは先の出来事であればあるほどより枝分かれして不安定なモノとなる。

故に、遠い先の事であればあるほど見通し辛くなるのはわかるのだが、気になるのは数か月ほど先の道の先からすっぽりと闇に覆われて見えなくなっていることだ。

最初は、そこが俺の未来を見通す力の限界なのかとも思っていたが、何度かこの力を試すうちに違うことに気づいた。

たとえば、俺が一週間先まで視ることができるとするならば、一日経ったらその分先のことが見えなくてはおかしい。

だが、この闇はと言えば日が経つにつれて遠のくことはなく、それどころかむしろ日に日に近づいてくるのだ。

もしかやこれは『俺の死』を意味しているのではないだろうか……。そう考え蓮華に相談したこともあったが、死ぬのならばその可能性がはっきり見えるとのことなので、どうやら違っらしい。

では、この闇は一体なんなのか……。

俺はさらに目を凝らして闇の正体を見定めようとして。

——ズキン！

「……グッ！」

そこで、俺は激しい頭痛に襲われ、能力のコントロールを失った。急速に意識が浮上していく感覚。

ハッ！ と眼を開いた時、そこは自室のベッドの上だった。

開けっ放しの窓からは、ひっきりなしにセミの鳴き声が聞こえてくる。

俺は全身にびっしょりと汗を掻いていて、まるで頭から水を被ったようにTシャツが重くなっていた。

重たい体を起こすと、ふいに鼻を熱いモノが伝わる。慌てて手で皿を作るとポタポタと赤いモノが滴り落ちた。

ヤバッ！ また鼻血が出てきた！

「――ホラよ」

そこで、スッと差し出されるティッシュの箱。

「おお、サンクス！」

まずはそこから何枚かのティッシュを取って鼻に当ててから手の主を見ると、そこにはサイズの合わない男物のTシャツとカーゴパンツを履いた黒髪の少女が、漫画片手に椅子に腰かけていた。

人形のように顔の整った少女は、その形の良い眉を呆れたようにひそめ、こちらを見ている。

「……まったく、毎日鼻血出してまでやる必要あんのか？」

少しだけ眉間に皺が寄ってしまったっている彼女に、俺は若干バツの悪い思いをしつつ答えた。

「しょうがねえだろ。この『パーフェクトリンク』の能力はいざという時の切り札になる。いつでも使えるように訓練だけはしておかねえと」

――パーフェクトリンク。

狼と七匹の子ヤギとの戦いで目覚めたこの新しい力を、俺はそう呼ぶことにした。

このパーフェクトリンクは、師匠ですらその存在を知らない、俺自身が発見した独自のリンクだ。

もしかしたら自衛隊なんかでは既に発見済みで、ちゃんと正式な名前が付けられているのかもしれない。だが、その情報が冒険者のところまで下りてきていない以上、発見者である俺が自分で名付けるしかない。

こうした冒険者自身が自力で発見、開発したリンクを『パーソナル（個人用）リンク』と呼ぶ。

パーソナルリンクは、その大半がすでに軍によって発見済みと言われているが、中には国ですら未発見のモノも眠っていると言われている。

そのためパーソナルリンクは、それを使える冒険者にとって切り札と呼べる力であり、現にこの『パーフェクトリンク』はそう呼ぶに相応しい力を持っていた。

しかし……。

「お前、ちゃんとわかってんのか？ その血はただの出血じゃねーぞ。ポーションや回復魔法で治らないってことは、それは魂そのものに掛かった負荷だったことだ……」

蓮華が、腰に手を当てながら、睨むように俺の顔を覗き込む。それに、俺はスツと視線を逸らして沈黙した。

俺にとっての切り札となりえるこのパーフェクトリンクだが、その力に相応のリスクもまた存在した。

パーフェクトリンクは、一般的に言われているシンクロリンクの限界点（シンクロ率99%）の壁を越え、完全にカードと魂を重ね合わせるリンクだ。

これによりカード自身ですら知らなかった潜在能力を引き出すことが可能となるが、その一方でマスターの魂に多大な負荷が掛かる。神や悪魔と言った靈的に格上の魂と触れ合うことに、脆弱な人間の魂が耐えられないのだ。

そのため、パーフェクトリンクを使うごとに徐々にマスターの魂は傷つき、徐々にカードに吸収され、最終的には生きた屍となってしまう危険性があった。

「……それでも、練習の成果は出てる。パーフェクトリンクの持続時間も伸びたし、お前の能力についてもわかってきたしな。それに、魂の傷はアムリタの雨で治る。だろ？」

この一ヶ月、毎日のようにパーフェクトリンクの練習をし続けてきた結果、蓮華の能力の本質のようなものが俺にも見え始めてきた。

蓮華の運に関する能力は大きく分けて三つ。

第一の能力は、恒常的な『幸運の増加』である。

人の幸運と不幸が、長い目で見ればプラスマイナスゼロで釣り合っているとして、蓮華の加護によって俺は常にちよつとだけプラスの状態で過ごすことができる。これにより、俺は何をしなくとも他の冒険者よりも高いドロップ率を誇る。

第二の能力は、『幸運の貯金』だ。

起こり得るはずだった幸運をあえて抑え込むことで、大きな幸運

を作ることができる。これにより、日々の小さな幸運を貯めて貯めて貯めて……一気に解放することで奇跡とも呼べる大きな幸運を引き寄せることができる。あるいは、幸運と打ち消すことで大きな不幸をなかったことにすることもできる。

これら二つの能力に関しては、デメリットは存在しない。福の神である蓮華の加護のようなものだからだ。

だが……。

「リスクは魂の傷だけじゃない。むしろ、因果律の歪みの方こそ問題だ」

第三の能力——『運命の操作』。これは、リスクのない前者二つの能力と違い、諸刃の剣とも言える能力だった。

パーフェクトリンクを使用時のみ使用可能なこの能力は、二つ目の能力をさらに先鋭化させたものだ。

第二の能力で貯金された幸運は、極めて漠然としたプラスのエネルギーであり、その結果は全くのランダムだ。宝くじが当たるのか、あるいは運命の人との出会いか、最悪の場合百回連続でアイスの当たり棒が出るだけ、ということもあり得る。

第三の能力は、このランダム性の高い幸運のエネルギーに指向性を与えることができる。

かつて俺は、雌のライカンスロープを手に入れるために何ヶ月も同じ迷宮に潜り、雄のライカンスロープというス力を引き続けたことがあった。

だが、今の俺ならば幸運をしつかり貯めてから挑むことで、一発でアタリを引き当てることができるだろう。

望む結果に幸運というリソースを投入することで、無駄なく最良の未来を掴むことができるのだ。

さらに、その副産物として俺は、極めて限定的だが未来を垣間見ることができる。結果がわからなければリソースの投入しようがないからだ。

もっとも見えるビジョンは、自分の行動による結果を一部切り取ったモノに過ぎないため、未来が完全にわかるといっわけではない。だが、それでもそのビジョンからその過程は推測することができる時もあった。

……一見万能にも思えるこの能力だが、当然リスクも伴う。それが、因果律の歪みと、その反動だ。

幸運と不運の関係は、椅子取りゲームにも似ている。

誰かが幸運の席に座る時、必ず席に座れない者が出てくる。

なぜなら、誰もが座れる幸運の席は、もはや幸運ではないからだ。幸運とは、それと比べられる不運な者がいて成立するのだ。

蓮華のパーフェクトリンクによる運命操作は、いわばその幸運の席を横取り、あるいは間借りするようなものである。当然、その席からはじき出された者の運命も、変わる。

たとえば一等十億円の宝くじがあったとして、俺が運命を操作しそれを引き当てたでしょう。

この時、本来一等を独占出来たであろう者は、俺と五億ずつ折半することになる。

結果、本来十億の金を手に入れられたであろう者の運命が五億分変わることになる。

十億あれば免れたかもしれない会社の倒産が、五億になったことで倒産してしまうかもしれない。十億あれば救えた難病の我が子が、五億になったせいであと一步救えずに終わってしまうかもしれない。

逆に、五億損したと考えて慎重に金を使った結果、悪意あるモノに狙われずに済むこともあるだろう。宝くじに当たったことを隠し

た結果、身内や友人にたかられずに済むかもしれない。十億あれば引つかかった詐欺に、五億だったおかげで引つかからずに済むかもしれない。

いずれにせよ、本人やその周りの本来歩んだであろう道筋が歪むことは間違いない。

それが、因果律の歪みだ。

因果律の歪みは、小さな物であれば時間の経過とともに自然と解消されていく。

ところが、度重なる運命操作により歪みが連続で積み重なり、それが一定量を超えた時、蓄積された歪みはそれを引き起こした者に直接『試練』として帰ってくる。

試練……すなわち、不可避の不幸である。

試練からは、決して逃れることはできない。幸運の力を使って打ち消すこともできない。予知をして備えることもできない。完全なる不可避。

だがその一方で、試練は、自らの意思の強さと積み重ねてきた努力によって打ち勝つこともできる。

そう、かつて俺が戦った『ハーメルンの笛吹き男』の時のように……。

また、運命は試練に打ち勝った者にそれに相応しい報酬を与える。俺がこの因果律の歪みによる反動を単なる不幸や副作用ではなく、試練と呼ぶのはそのためだ。

……この能力の最も恐ろしいところは、『幸運の前借り』が

できてしまうことだろう。

本来であれば俺の持つ幸運では引き寄せることのできない奇跡であつても、未来に起こるはずだった幸運を持つてくることで起こすことができてしまうのだ。

貯めてきた幸運を使用しての運命操作では生まれる因果律の歪みも最小限となるが、『幸運の前借り』による運命操作は大きな因果律の歪みを生む。

それこそ、一発で試練を引き寄せるほどの歪みを、だ。

この能力は、誘惑だ。

いつそ使えない方が良かったと思うほど、露骨にこちらを自滅の道に誘っている。

ならば自らの意思で封印すれば良い、と思うかもしれないがそれが出来ないのが人間という生き物だ。

たとえば自分の家族や最愛の人が死ぬ運命にあり、この能力を使えば救えるとしたら、果たして使わずにいられるだろうか……？

最初から使えなければ、そういう運命と諦めもつく。

だが、救える手段があるにもかかわらず見捨てたとなれば、その事實は確実に精神を苛む。

使うべきではない、しかし手を出さずにはいられない、禁忌の力……。

まさに、悪魔の誘惑と呼ぶべき力であつた。

とは言え、実のところこの能力を心の底から危険視しているわけではなかった。

なぜなら……。

俺は蓮華へとニツと笑いかける。

「——でも本当にヤバイ時はお前が体張ってでも止めてくれるだろ？」

なぜなら、この能力も蓮華の一部だからだ。

ならば、この能力で俺が破滅することはない。

痛い目を見ることがあっても、俺が欲に飲み込まれそうになった時は、きつと彼女が張り飛ばしてでも止めてくれる。

そういう確信があった。

ならば俺の役割は、いざという時のためにこの能力をいつでも使えるようにしておくことだった。

「……………はあ〜」

そんな俺の笑みを見た蓮華は、深々とため息を吐いた。

それは、母親がおもちや売り場でダダを捏ねる子供を見る時のような、あるいはOLが同棲してる安月給のバンドマンの彼氏を見る時のような……………妙にこちらの肩身が狭くなる感じのため息だった。

『まったく、どうしてこんな子（人）になっちゃったのかしら。もっと厳しくしないとダメだってわかってるんだけど……………どうしても最後は甘やかしちゃうのよねえ』

って感じの目である。

「……………ま、今はいいや。そんなことより、そろそろ時間マズインじやねえの?」

「あ、やべ」

蓮華の言葉に我に返り、時計を見ると遅刻するかしないかギリギリの時間だった。

俺は急いで制服へと着替えると、机の上に置いてあった教科書の入っていないスカスカのカバンを手に取り、慌てて部屋を飛び出した。

今日は7月18日。終業式の日だった。

第一話 夏の校長先生の話は殺人的（後書き）

【Tips】パーソナルリンク

冒険者が自力で発見、開発したオリジナルのリンク。その大半は、国や軍によって既に発見済みか既存のシークレットリンクの劣化品に過ぎないモノも多いが、中には完全オリジナルの優れたモノも存在する。

パーソナルリンクは、その発見者にとっても切り札のため、大半は独占され秘匿されているが、中には仲間内で積極的に教え合っているチームも存在する。

第一話 夏の校長先生の話は殺人的（前書き）

・登場人物紹介

神道 光一：マロのクラスのカーストトップグループの一人。イケメンでテニス部のエースと云ういかにもモテそうなスペックだが、実は彼女いない歴〃年齢の童貞で、それを周囲にひた隠しにしている。

四之宮 楓：読者モデルをやっている学年一の美少女。裏表の無い言動から男子のみならず女子からの信頼も厚い。反抗期でシスコンの弟がいる。

牛倉 静歌：四之宮さんの幼馴染で親友。校内一の豊満なバストを持つ。一応マロの片思いの相手だが、微妙に影が薄く、何を考えているかわからない所がある。四姉妹の次女。

第一話 夏の校長先生の話は殺人的

『えー、であるからして、夏休みには悪い誘惑がたくさんあります。皆さんには、本校の生徒としての自覚をしっかりと持って、強い自分でそれらの誘惑を――』

体育館の中には、じめじめとした生暖かい空気が充満していた。

室内のあちこちには大型の扇風機がいくつも並び全力で羽を回転させていたが、空しく不快な空気を送り出しているだけだった。

そこにいるだけで体力を削っていくようなその空気は、明らかに夏の湿度と気温のせいだけではなく、広い体育館にぎっしりと押し込められた全校生徒たちの汗と吐き出された二酸化炭素から発生していた。

すべての生徒が一刻も早く解放を願う中、しかし壇上に立つ校長の話は延々と続き、終わる気配を微塵も感じさせない。

校長先生の話というのは、大抵どこも長いものというイメージがあるが、小学校や中学校の校長とくらべても明らかに二倍以上は長かった。

サウナ染みだ室内の空気に、生徒たちはもはや誰も校長の話になど耳を傾けていない。

ひたすらに校長の話を右から左に受け流していると、ついに待ちに待ったその時が訪れた。

『……私が学生の頃も、悲しい事件がありました。私には当時涼子さんというお付き合いしている女性がいたのですが、夏休み中に悪漢どもの毒牙に掛かり、学生の身で妊娠をしてしまったのです。当時は今よりもお堅い時代でしたから、当然大問題となりました。不

覚にも私が彼女の事情を知ったのは、彼女が学校を去ってからのことであり、最愛の恋人を守れなかったことを深く後悔しました。しかし、その一方で知らない間に恋人を寝取られていたことを知った私の胸には、呼吸ができなくなるほどの痛みや苦しみとともに、なぜだか血潮が熱くなるような、言いようのない興奮が――

「……校長、……校長！ そろそろこの辺で……」

「む、もうそんな時間かね……」

教頭の言葉に校長は一瞬だけ不満そうな表情を浮かべた後、一つ咳払いをし、言った。

『えー、それでは最後に注意事項を』

ようやく来た！ と死んだ魚の目をしていた生徒たちの目に光が戻る。

最後くらいはちゃんと聞いてやるか、と生徒たちが姿勢を直す中、校長がやや渋い顔となる。

『えー、皆さんもご存知かと思われませんが、先日我が校に迷宮が発生しました』

――ざわ、ざわ。

今、生徒たちが最も興味のある話題に、にわかに体育館が浮足立つ。

『静粛に、静粛に！ 静かにしないとまた最初から話しますよ！』

その言葉に、ピタリとざわめきがやむ。

借りてきた猫のように大人しくなった生徒たちに、校長はやや複

雑そうな顔をしつつ話を続けた。

『えー、我が校に発生した迷宮を調査するため、自衛隊やギルドの職員の方が出入りしていますが、決して仕事の邪魔はしないように特に、迷宮の内部に無断で潜りこんだりなどは絶対にしないこと。これはれっきとした法律違反であり、たとえ未成年であつても確実に刑事罰に問われるでしょう。当然学校も最も厳しい処分を下さざるを得ないので、気を付けるように』

開幕から刑事処分や退学を匂わせてくる校長に、生徒たちの間に若干の緊張が走る。

新たに発生した迷宮は例外なく、自衛隊とギルドによって一度徹底的に調査される決まりとなっている。その間、一般人はもちろんプロの冒険者であつても立ち入りは許されていない。

これは、新しく発生した迷宮が『これまでにない特性を持っていないか』や『一般公開の是非などを調べるため』と表向きにはされているが、その真の理由は『迷宮の初攻略報酬を国が独占するため』と言われていた。

真偽のほどは定かではないが、新しく発生した迷宮を踏破した際、主から高確率でカードがドロップするという噂があつた。

そのドロップ率は、なんと通常の千倍。Cランクカードまでは確定で、Bランクカードであつても半々の確率でドロップするのだ、と。

これにより、国は通常のドロップ率ではほとんど手に入らない高ランクカードを効率的に集めている……という噂が、ネットではまことしやかに流れていた。

実際、迷宮の出入りをほとんど管理していない発展途上国であつても、新しく発生した迷宮に限っては必ず真つ先に軍を送っていることから、それなりに信憑性のある噂とされていた。

『えー、調査にかかる期間は未定ですが、少なくともあと1、2週間はかかるということです。夏休み中、校内で活動を行う部活の顧問の先生方は生徒が危険な行為をしないよう、くれぐれも注意を払ってください』

これにピクリ、と反応をしたのは校内に少数存在する冒険者たちであった。

校内に迷宮が発生してからすでに一週間。

通常、迷宮の調査はアマチュアクラスならば長くとも一週間程度で終わると言われている。

調査にかかる期間が二週間から三週間というのは、この学校に出来た迷宮がプロクラスの迷宮、あるいはより慎重な調査が必要となるシークレットダンジョンであることを意味していた。

『えー、最後に。校内に迷宮が発生したからと言って、皆さんの日々には何も影響はしません。せいぜい、校内にダンジョンマートの支店ができてちょっと便利になるくらいです。良いですか、くれぐれも、浮ついた行動は取らないように！』

これまで以上に熱を入れて話す校長。

この発言をわかりやすく意識するならば「校内に迷宮が現れたからって冒険者になるうなんて考えないように」と言ったところか。

冒険者になるな！ とストレートに注意出来ない辺りに、大人の苦しい事情が察せられた。

だが……。と、俺はさりげなく周囲を見渡す。

校長の話聞いた生徒たちは、明らかにソワソワとした様子だった。とりわけ、一年生の男子生徒は、その様子が顕著である。

校内に現れた迷宮は、先の事件とあいまって生徒たちに、それま

で非日常であった冒険者と迷宮という存在を身近に感じさせる要因となってしまうたようだった。

受験の控えている三年や同学年に死者が出たばかりの二年はともかく、高校に入ったばかりでテンションの上がっている一年生は、冒険者になるリスクなど全く目に入っていないのだろう。

彼ら彼女らの頭に浮かんでいるのは、迷宮で屍を晒す自分の姿ではなく、冒険者になって華々しく活躍する光景のはずだ。

しかも、学校側にとっては最悪なことに、校内にはその『モデルケース』が何人も存在していた。

ならば自分も……と、彼らが思うのは当然のことだった。

唯一の救いは、冒険者になるには高額 of 初期費用という高いハードルがあることが。

だが、夏休みという期間は絶好の稼ぎ時でもある。

果たして、夏休み明け、校内の雰囲気は一体どうなっていることやら……。

『学生の本分は勉強です！ 夏休みだからと言って浮かれず、怪我などをするような行為は慎むように！ いいですね！』

そんな校長先生の注意は、静かに興奮する生徒たちに空しく響くのだった。

終業式が終わり教室へと戻ると、クラスの雰囲気はすっかり夏休みのそれへと変わっていた。

教室のあちこちには大小様々なグループが形成され、夏休みの予定を楽しそうに話し合っている。

その様子からは、凄惨な事件によりクラスメイトが一人犠牲になったことへの陰りは見られなかった。……獅子堂と仲の良かったグループですらも、だ。

それは、薄情というよりもむしろそのことを忘れるかのようにいつも以上に明るく振舞っているようにも見えた。

もつとも、それは俺も少なからず同様で……。

「北川はさ、やっぱり夏休みの間ずっと迷宮漬けなのか？」

「いやまさか。そりゃあ迷宮にも行くけど、家族で旅行行ったり友達と遊びに行ったりもするよ。」

他のカーストトップグループメンバーが、それぞれの仲の良いクラスメイト達と話す中、俺は珍しく神道と二人だけダベっていた。

「へえ、意外。北川って言えば冒険中毒、みたいなイメージあったからさ」

「なんだそりゃ」

と軽く笑うと、神道も笑って言った。

「だって北川って休日はもちろん、平日も学校終わった後ほぼ毎日迷宮行ってるんだろ？」

「ん……まあそうだな」

「やっぱり迷宮中毒じゃん。うちの高校で冒険者やってる奴も、月に四回くらいしか潜らないらしいぞ。神経が持たないってさ」

「まあ、でもそいつらは言っちゃなんだが、エンジョイ勢なわけだろ？」

「まあな。でも、小野に聞いた話では、プロ目指してるレベルでも週に三〜四日潜る程度らしいじゃん」

「ん……」

確かに、神道の言う通りセミプロと呼ばれる三ツ星冒険者であっても、Dランク迷宮を三〜四日かけて踏破した後は、同じくらいの日数を休養に費やすのが普通とされていた。

いくら魔法で傷や疲労が取れるからと言って、精神的消耗まで癒せるわけではない。安全地帯があるとはいえ、外敵の殺気にさらされた状態で寝泊まりは、生物としての生存本能を刺激され、それらは膨大なストレスとして蓄積される。

積み重なったストレスは集中力の妨げとなり、Dランク迷宮ともなれば些細なミスが命取りとなった。

そのため、迷宮攻略にかかった日数だけきつちりと休み、心身をリフレッシュするのが安全の秘訣とされていた。

……もつともそれは、迷宮で寝泊まりせざるを得ない一般的な冒険者の話であって、ハーメルンの笛でいつでも帰れる俺はまたちょっと話が違ってくるのだが。

それを説明するわけにもいかず、微妙な顔をしていると神道が笑う。

「別に貶してるわけじゃないって。みんなスゲエって思ってるよ。特に俺らみたいな運動部とかはさ。俺らもインターハイとか目指して頑張ってるけど、北川ほど身体を痛めつけられないし。やっぱそれくらいしないとプロにはなれないんだなって感じ」

神道のストレートな賞賛に俺はなんだか照れ臭くなって話題を逸らした。

「そう言う神道だって夏休みはほとんど練習や合宿だろ？」

俺がそう言うと、神道はがっくりと頂垂れた。

「そうなんだよなあ。もう朝から晩までずっと練習練習よ。彼女作る暇もねえわ」

「あれ？ 神道って彼女いねーの？」

俺は驚いて神道の顔をマジマジと見た。

神道は短めの茶髪が爽やかな、優しい顔立ちをしたイケメンだ。身長も180センチ後半と高く、日々テニスに打ち込んでいるからか体つきも引き締まっておりスタイルも良い。

性格も社交的で明るく、男女問わず話しかけやすい雰囲気を持っているため、この青年に彼女がいないのは意外と言う他になかった。

「いや、まあ……彼女作りたい気持ちはあるんだけど、ほら、テニスが忙しいじゃん？ やっぱ構ってあげられないと長続きしないだろうしさ、そういうわけで今は作ってない。うん」

「神道ならそれでも別に良いって娘たくさんいると思うが……それに部活だって全く休みがないわけじゃないんだろ？」

「うん、まあ、さすがに日曜は休みだけど……お、俺のことはともかく！ 北川こそどーなんだよ。彼女作らねーの？ 今の北川ならより取り見取りだろ。金持ってるし、学校のヒーローなんだしさ」

神道の言葉に、俺は曖昧にほほ笑んだ。

確かに、あの事件以降俺は校内のちよつとしたヒーローだった。

なんせ、報道規制がかけられるレベルの大犯罪の解決に協力したのだ。

しかも、高校生にしてTVに出るレベルの冒険者。

これで人気が出ないわけがない。

冒険者志望だという下級生が弟子入りを希望してきたり、他のクラスや学年の女子が俺の顔を休み時間に見に来たりもした（なお、実際に見てみてがっかりした模様）。

ここまで来ると、イケメンじゃなくてもプロ野球選手がモテるよ

うに、俺のようなモブ顔でも普通にモテるようになる。
そう、モテるようにはなったのだが……。

「あ、ねえねえ、神道くん、北川くん」

と、そこでクラスの女子二人が俺たちの元へとやってきた。

クラスでもイケてる系に入る、右野さんと佐野さんのウノサノコンビだ。

彼女たちは、ワイシャツのボタンを二つほど外し、平均より大きな胸元の谷間を見せながら、俺たちへと黄色い声で話しかけてくる。

「神道君たちつてえ、もう夏休みの予定全部埋まっちゃったあ？」

「良ければ、ウチら海行く予定なんだけど、一緒に行かない？」

————海……！

俺と神道は顔を見合わせた。

これは、なかなか魅力的なお誘いだ。

ウノサノコンビは、某アイドルグループメンバーのように、可愛いがどこか没個性な顔立ちと髪形をしているものの、スタイルもノリも良い。

そんな彼女たちと、海で水着姿となって遊ぶ……。

一歩道を踏み外せば、そのまま一夏のアバンチュール的な過ちを犯してしまいそうな、そんな怪しい予感があった。

ど、どうする……。この誘いに果たして本当に乗って良いのか？
良く言えばノリの良い、悪く言えば軽い雰囲気ウノサノコンビだ。もしかしたら、もしかすると、かなりエッチなイベントが起こる可能性も無きにしも非ず。

だが、それを期待して頷いたと思われれば、クラスの皆に「実は

むつつりスケベの北川くん」のイメージがつく恐れもある……。 (注・すでに手遅れ)

かといって、硬派を気取って断れば何も起こらず、何も手に入れないだけだ。

こんなチャンスが、俺の人生にあと何回あるか……。

……ハッ!? その時、俺の脳裏に電流が走った。

いや、待て! 違う! 次などないのか……!

三年生になれば、夏休みは受験勉強の時間に当てられ遊ぶ予定などなくなる。一年の夏という貴重な時間をバイトにすべて費やしてしまった俺にとって、クラス的女子と海に行くというイベントは、これが最初で最後である可能性が高い!

だ、だが……、もしウノサノコンビと海に行ったことが牛倉さんの耳に入ったらどう思われるか……。

あるかないかもわからない牛倉さんのフラグではあるが、それがぼっきりと折れてしまうことは、想像に難くない。

ど、どうすれば……どうすれば良いんだ。

俺が一秒にも満たない時間の中で懊悩していると、神道が同じく苦悩しているような顔で問いかけてきた。

「ど、どうする……?」

「どうしようか……?」

「……お、俺は北川が行くって言うなら付き合っけど?」

「ッ!」

こ、コイツ……!

俺に判断を押し付けてきやがった。

おそらく、神道も乗り気ではあるのだ。テニス漬けの日々を送る彼にとつても、クラスのわりと可愛い女子とエッチなことができるかもしれないチャンスは貴重。だが、その一方で自分の爽やかなイメージは崩したくない……。

そこで、神道は決定権を俺に委ねることで、ウノサノコンビと海に行く可能性を残しつつ、自らの爽やかなイメージも崩さずに済むという選択肢を選んだのだ！

糞！ 神道め！ 好青年のような顔をして、なかなかやる！

だが、策士とは言うまい。むしろこんな簡単な方法を思いつかなかった自分の間抜けさ加減を笑いたい気分だ。

マズイ……。ウノサノコンビに誘いをかけられてからすでに五秒が経過している。これ以上思考に時間をかけると乗り気ではないと判断されかねない。そうなれば彼女たちは自らのプライドを守るために自ら退くという選択肢を取るだろう。

そうすることで逃した魚はデカかったかもしれないと思わせるのだ。

とりあえずここは時間稼ぎしかない！

「そうだなあ、迷宮攻略の予定もあるし、いつかにもよるかな。メンバーはこの四人？」

俺が何気ない風を装ってそう問いかけると、くせ毛風ミディアムヘアの佐野さんがピースと共に答えた。

「もち！ あんまり人数いると恥ずかしいしね」

人数いると恥ずかしいだと！？ 俺は目を見開いた。つまり、そういうデザインってことか！？

心の中の天秤が一気に傾く。

神道を見ると、表面上は平静を装いつつも、その眼は綻るようにこちらを見ていた。

……ふ、しょうがねえなあ。今回は俺が泥を被ってやるか。コイツは貸しだぜ？

友のためにあえて汚名を被ることを決意した俺が、ウノサノコン

びへと返事をしようとした――その時。

「あ、いたいた」

中性的な美声が教室の入り口の方から響いてきた。

この声は……！

俺だけではなく教室にいたすべての生徒がそちらへと視線を向ける。

声の主はそれらの視線を気にすることなくこちらへと一直線へとやってきた。

「や、マロ。ちょっといいかな？」

「神無月……」

夏真つ盛りだと言うのに長袖のブレザー姿の師匠は、しかし暑さなど全く感じさせない涼し気な顔で微笑みを浮かべている。汗腺が存在しないのか？ あるいは魔道具を使っているのか……。

「どうしたんだ？ 神無月がうちの教室来るなんて珍しいな」

俺はため口で師匠へと問いかけた。

なお、ため口なのは校内で「師匠呼び、敬語」は悪目立ちするか
らやめてくれと師匠から言われたからだ。

「うん、なんか織部さんが放課後冒険者部で集まってほしいってさ。
さつき廊下であった時言ってた」

「小夜が？ スマホで連絡してくれば良いのに」

先輩をメッセンジャーに使うとは……あれで先輩を立てるタイプの彼女にしては珍しい。

「うーん、なんか重要な要件なんじゃないかな。どうも深刻というかちょっと怒ってる感じだったし」

「ふーむ？」

なんかあつたんだろつか。

俺が首を傾げていると……。

「あ、あのお……」

おずおずとウノサノコンビが師匠へと話しかける。その類は、俺と神道と話しているときとは違いほんのりと赤く色づいていた。

「もしよければ……ウチらと一緒に海行きませんか？」

「今、北川くんたちに誘いかけてたんですけど、どうも二人とも忙しいみたいなんです」

「……！？」

ええっ！？ 俺と神道は愕然として顔を見合わせた。なにこれ！？

「え、え〜と……？」

「ね？ ね？ 海が難しいならプールでも良いし！」

「あ、泳ぐの嫌いなら遊園地とか！」

俺と神道を誘っていた時は明らかに意気込みの違うウノサノコンビ。

そんな彼女たちにタジタジとなる師匠。

と、その時。

「——ちよっと！ やめなよ、困ってんじゃん！」

師匠へと救いの手を差し伸べたのは、周りで様子を伺っていたクラスの子集団だった。

ギャル系、文科系、運動部系。グループの垣根を越えて団結した彼女たちは目を吊り上げてウノサノコンビを睨む。

その視線の圧力にウノサノコンビが怯んだ隙に、ギャル系のグループが師匠を取り囲む。

「アイツらはほつといてさあ。学校終わったらカラオケ行かない？」

「まだこの辺不慣れでしょ。遊び場とか紹介してあげる」

「は！？ ふざけんな！」

突然の抜け駆けに切れる女子グループとウノサノコンビ。

どうやらグループの垣根を越えて団結した、というのは勘違いだったようだ。

そのままなし崩し的に、女子たちによる神無月争奪戦へと移行する。

「ちょ……マロ、たすー」

女子たちの群れに飲み込まれ、姿を消す師匠。

完全に蚊帳の外へと追いやられた俺と神道は顔を見合わせ、ふつ……と笑う。

俺たちは、確かに普通にモテる。が、あくまで普通に、だ。

イケメン？ なるほど確かに神道はイケメンだ。が、あくまで一般的なイケメン。男女の垣根を超越した超美形の師匠ほどじゃない。

高校生で三ツ星冒険者？ 確かに凄い。日本全国見渡しても何人いるか。――師匠はプロだけだね。

凶悪事件の解決に協力した？ 確かにヒーローだ。そのチームを

プロとして率いていたのが師匠なんだけどね！

容姿。性格。実力。実績。財力。俺と神道が持つすべてのモテ要素において上に行く上位互換。それが神無月翼という存在だった。いいさ。俺にはカードたちがいる。神道には、テニスがある。

悔しくなんて、ないー。

俺たちが、上を向いてこみ上げる何かを堪えていると、クスクスと可愛らしい笑い声が聞こえてきた。

するとそこにはニマニマとしたチエシヤ猫のような笑みを浮かべた四之宮さんと、おっとりとした苦笑を浮かべた牛倉さんの二人がいた。

「どくした、二人とも。しょぼくれた顔しちゃって。そんなに女子の水着が見たかった？」

そう言っつてウリウリと俺の頬を突いてくる四之宮さん。

「いや、そんな、落ち込んでなんかないツスよ。なあ、神道？」

「そ、そうそう。俺ら元々断る気だったし。テニスとか迷宮攻略とか忙しいから」

「ふう〜ん？」

苦しい言い訳をする俺たちに四之宮さんは意味深な笑みを浮かべつつ。

「そっか、残念。代わりにウチらとプール行かないって誘いに来たのに」

『マジ!?!』

「でも忙しいなら無理か。仕方ない、二人で行こうか、静歌。ナン

パとかうつとうしそうだけど」

「そうだね、忙しいならしょうがないね」

「いやいやいや、大丈夫です！ 行けます！ 何なら部活休むし！
な、北川！」

「俺もスケジュール調整利くし！」

このチャンスを逃してなるものか、となりふり構わず喰らい付く俺たち。

「そ？ じゃあ後で大丈夫な日送ってくれる？ なるべくこつちもそつちに都合合わせるからさ」

言うことは言った、とクールに去って行く四之宮さん。その後を追う前に振り返り小さく笑顔で手を振る牛倉さん。

二人を見送った後、俺と神道は顔を見合わせ、グッとガッツポーズを握ったのだった。

———それから数時間後。 ところ代わり、昼時の喧騒に包まれるデニムズ。

『……………』

禁煙コーナー最奥の、もはやお決まりとなった冒険者部専用のテーブル。そこで、俺たちは頂垂れるアンナを囲んでいた。

終業式が終わり、友達と昼飯を食べに来た学生たちや家族連れが楽し気に食事をする中、このテーブルだけは周囲とは真逆の通夜の

ような雰囲気包み込んでいた。

アンナの正面に座る織部が、氷の声音で言う。

「おい、部長」

「はい……」

「なんだ、これは」

吐き捨てるようにそう言った織部が視線を向ける先には、見事に赤点を取ったテスト用紙が並んでいた。

「誰だったか。『赤点で補習なんてことになったら遠征に行けなくなるから、冒険者部は全員赤点を取らないようにしましょう!』なんて言ってたのは?」

「ウチ……ツスね」

「『もし赤点取った人がいたらペナルティーツスよ!』なんて言ってたのは?」

「う、ウチ……ツスね」

脂汗をだらだらと流し、哀れなほどに身を縮こまらせる赤毛の美少女に、しかし同情する者は誰もいない。

「しっかし酷い点だな……。あの小夜のテスト予想があつて、どうやったらこんな点が取れるんだ?」

織部が冒険者部のメンバー用に作ってくれたテスト予想は、一年生であるにもかかわらず二年生の範囲まで完璧に対策されており、丸暗記するだけでどんな馬鹿でも高得点を取ることができる代物だった。

万年平均点の俺ですら、この高校に入って初めて平均90点台の高得点を取れたほどだ。

……もしかして、二年の分のテスト対策まで行ったせいで一年のテスト範囲の方が疎かになってしまったのだろうか？

だとしたら申し訳ないな、と織部の方を見ると、彼女はふんと鼻を鳴らして腕を組んだ。

アンナが慌てて言う。

「い、いえ！ 小夜のテスト対策はいつも通り完璧でした！」

じゃあなんで赤点取ったんだよ……。

「これはもう、ペナルティーとして部長の座を退いてもらうしかないと思うが？」

「そ、そんな!？」

織部が冷たくアンナを見やり、宣告する。

「そ、それだけは！ それだけは何卒！」

涙目のアンナが必死に縋りつくが、織部のアンナを見る目は屠殺業者が養豚場の豚を見るかのように無慈悲なモノだった。

「まあまあ、とりあえず訳を聞いてみようよ。もしかしたらやむにやまれぬ事情があったのかもしれないしね」

そうフォローを入れたのは、先ほど見た時よりも制服が草臥れて煤こけた雰囲気となった師匠だった。

師匠がどこかこちらを恨めし気に見つつそう言うのに対し、俺はその視線をしれっとスルーしつつ頷いた。

「だな、もしかしたら当日高熱があったとか、飼っていたペットが

死んだとかで集中できなかったのかもしんねーし」

上級生二人の執り成しに、何気に目上は立てるタイプの織部が不承不承と言った感じで引き下がる。

俺たちの眼差しを受けて、アンナは指をツンツンとしながら答えた。

「そ、そのお、実は学校に現れた迷宮が気になって勉強に集中できなくて……」

『うん、有罪ギルティ』

満場一致で判決が下る。予想よりも下らない理由だった。

「しかし、どうすんだ、これ。これじゃ遠征なんていけないぞ」

織部がアンナの頭をヘッドロックして締め上げるのをしり目に、俺はどうしたもんかと天を仰いだ。

今回、冒険者部では夏休みという長期休暇を利用して日本各地の迷宮を巡る計画を立てていた。

四ツ星昇格のため、普段は行けない沖縄や北海道などの遠方のDランク迷宮を攻略しつつ、新たな経験と力を得るためにプロクラスの迷宮にも挑む予定だったのだ。

だが、アンナが補習……しかも複数教科で拘束されることが確定となったことで、その計画もほぼ白紙へと戻ってしまった。

「本当にすいません……ウチのことは忘れて、どうぞ皆さんだけでも遠征に行ってください……」

どうやらマジで落ち込んでいるらしいアンナに俺たちは顔を見合わせ。

「そうはいかないだろ」

「こんなバカでも仲間なわけだからな」

「そうそう、それに仲間はずれがいたら楽しめないしね」

「み、みんな……！」

冒険者部の温かい言葉に瞳を潤ませるアンナ。

……まあ、実のところアンナがいるとしないじゃバックアップがだいぶ違うつっていう都合もあるんだけどね。

迷宮に潜る際の緊急避難と転移のカードの用意や、飛行機のチケットや遠征先のホテルの手配、攻略予定の迷宮のリストアップ、出場する予定の大会の情報収集、手に入れたカードや魔道具を安全確実に売却するための札商へのコネ……。

これらはすべて部長であるアンナが、実家のコネを使ってマネジメントしていた。

ぶっちゃけ、今更俺たちでアンナ抜きで遠征計画を立てるのは……無理ではないが面倒くさすぎた。

アンナ抜きだと、ムードメーカーがいなくなるしな。

「まあ、こうなったら仕方ない。近場の迷宮を各自攻略していくつてことで。それに補習だつてちょこちょこ休みがあるし、夏休み前半で一通り終わるんだろ？」

「は、はい。一週間補習、一週間休みを繰り返して、夏休みの前半には終わる予定ッス」

俺の言葉にアンナが頷くと、師匠と織部も納得したように頷いた。

「じゃあ、遠征とかはその時にやるってことで」

「……ま、ちよっと合宿の予定も詰め込み過ぎではあったし、これはこれで良いか」

元々の予定じゃ、友達と遊びに行く予定や、家族で旅行に行く予定もほんの少ししか入れられなかったからな。

合宿は楽しみではあったが、さすがにそれ一色というのも味気ないのは事実であった。

予定とはだいぶ違ってしまっただが、結果的にはこれはこれで良かったのかもしれない。

「じゃ、そういうことで」

こうして、初っ端からグダグダな夏休みが始まったのだった。

第一話 夏の校長先生の話は殺人的（後書き）

【Tips】 迷宮の初回踏破報酬

迷宮には初回限定ボーナスが存在し、初回踏破に限り主のドロップ率が千倍となりガツガツカリ箱の中身も豪華になる…… という噂。

真偽のほどは定かではないが、迷宮が実質スラム街や犯罪者の巣窟となっている発展途上国であっても、現れたばかりの迷宮には軍を派遣し封鎖しているため、それなりに信憑性が高い、と考えられている。

その一方で、噂が本当ならばAランクカードが世界で数えるほどしかドロップしていないのはおかしい、という反論も存在する。

第二話 幼女の足に縋りついてパツクを引くだけの話 (前書き)

主人公の地の分での織部呼びは、それでデフォルトです。そのうち、自然と内心でも小夜呼びになります。誤字報告送ってください方
はありがとうございます。

・登場人物紹介

遠野さん：アンナのコネで知り合った札商の男性。孤高の美食家を
気取って商談先の飲食店を巡るのを趣味としているが、食運は無い。
世界各地を飛び回る仕事上家を空けることが多く、妻に浮気をされ
ているが全く気付いていない。

第二話 幼女の足に縋りついてパックを引くだけの話

「―――そうですね、やはり難しいですか」
「ええ、力及ばず申し訳ありません」

夏休みが始まって一日目。

八王子駅前の喫茶店で、俺は札商の遠野さんと会っていた。話の主題は、以前から彼に入手を依頼していたサキュバスについて。

思いがけず転がり込んできた五億という大金。その使い道に関しては随分と悩んだが、結局はいつも通りパーティーの戦力強化に回すことにした。

そう、つまり前々から先延ばしにしていたメアのランクアップである。

同じDランクだったイライザ、ユウキがランクアップし、さらには後から入ったはずの鈴鹿までもがCランクとなったことで、彼女が強い焦りを感じているのはパーティーの誰もが感じていた。

これまでは金銭や入手機会の少なさから黙殺してきたが、金も入り遠野さんという伝手を得た今、さすがにこれ以上彼女のランクアップを先延ばしするのは良くなかった。

なにより、猟犬使いとの撤退戦ではその命を張ってくれ、その後も『人を呪わば穴二つ』という自身にも痛みを伴うスキルを持って献身的にパーティーに貢献してくれる彼女を、俺自身がねぎらってやりたかった。

そういつわけで事件がひと段落してすぐに遠野さんに連絡を取ったのだが……今のところその進捗はあまり芳しいモノではなかった。

「……サキュバスやエルフといった超人気カードともなりますと、金があれば手に入るモノでもありませんからね。それでも通常のカードなら、なんとかならないこともないんですが……」

そう言つて、こちらを窺い見る遠野さんに、俺は内心で申し訳なく思いながら首を振った。

「いえ——申し訳ありませんが、『零落スキル持ちのサキュバス』でないでダメなんです」

「そうですか……」

わずかに落胆したように眉を下げる遠野さん。俺はそれに申し訳なく思いつつも、決して譲ることはなかった。

彼からすれば、俺の注文は『大金を手に入れたガキの現実を知らない無茶ぶり』にしか見えないのかもしれない。

だが、俺からすればここは絶対に譲れないラインだった。

ここで、通常のサキュバスのカードで妥協するのは簡単なことだ。五億の予算のうち一億から二億程度で費用は済むし、メアも喜ぶだろう。

しかし、その場合彼女の伸びしろはそこで終わりだ。

入手困難と言われているサキュバスであるが、その上のリリムとなるとさらにその入手難易度は跳ね上がる。いや、入手困難というよりも、入手は不可能と言った方が良かったらう。

あるいは夢魔としての主流のリリムではなく、エンプーサの主としてのヘカテーというルートもあるが、やはりそちらも数十億のカードでリリムほどではないが入手が困難であることには変わらない。つまり、メアがBランクカードとしての力を得るには、霊格再帰

か……未だに取得条件の良くわからない限界突破を得るしかないのだ。

蓮華が限界突破スキルを得たことで広がり続けるパーティー内の戦闘力格差を少しでも埋めるため――親友である蓮華の隣に立ちたいと頑張るメアのためにも、彼女には霊格再帰という可能性を残しておいて上げたかった。

「零落スキル持ちのサキュバスについては、引き続き伝手を探ってみます。ただまあ、手に入れられるかは運次第となりますので、気長にお待ちいただければ……」

「よろしく願います」

「それで、代わりと言っては何ですが……」

そこで遠野さんはケースに入ったマイクロSDカードをバッグから取り出すと。

「もう一つのご依頼の方はなんとかありました。こちら、ご依頼のデータです。お納めください」

「おお！　ありがとうございます！」

俺はマイクロSDカードを受け取ると、さっそくそれをスマホに挿入した。

そして軽く目を通し……。

「……なるほど、やはり同じ条件の下ランクアップさせても零落スキルは引き継がれる場合と引き継がれない場合がある、と。そして引き継がれた霊格再帰は零落スキルに戻る……か」

俺が遠野さんに頼んでいたデータ、それは『零落スキルと霊格再帰についての研究データ』であった。

ネット上では情報が錯そうしていて、一向にその詳細が分からない霊格再帰スキルの情報。その研究データを遠野さんに頼み仕入れて貰ったのだ。

一般に公開されていないデータということで一千万もの金がかかってしまったが、その価値はあった。

このデータからわかる霊格再帰の性質は6つ。

一つ、ランクアップ先のカードが零落スキルを持っていた場合、ランクアップで零落スキルは失われない（つまり、零落スキル持ちのサキュバスを使用しランクアップすることでメアも零落スキル持ちとなることができる）。

二つ、零落スキルによって下がる戦闘力はランクによって違う。Bランクで200、Cで100、Dで50、Eで25と半分になっていく。AランクとFランクの零落スキル持ちは現在確認されていない。これらの数値は霊格再帰に昇華した段階でプラスへと反転する。

三つ、零落スキルや霊格再帰を持つカードをランクアップさせた場合、零落スキルが引き継がれるかどうかはランダム（法則を発見できていない）。大半の場合、引き継がれない。運よく引き継がれた霊格再帰は再び零落スキルに戻る。

四つ、霊格再帰を持つカードをランクアップさせた場合、零落スキルの引継ぎに関係なく、霊格強化というスキルを得る。霊格再帰にせず、零落スキルのままランクアップした場合、このスキルは発生しない。

五つ、霊格再帰中のカードにキーマイテムを与えても、『二段階目』のランクアップをすることはない（吉祥天に霊格再帰中の蓮華

がさらにランクアップすることはない)。

六つ、ランクアップ先が複数あってもカードが反応するキーアイテムは基本一つ。しかし、稀に複数のキーアイテムに反応を示し、複数の変身先を使い分けられるカードも存在する。

実験からわかる基本的なルールは以上。あとのデータは、それぞれのカードごとのキーアイテムのデータが大半のようだった。

それらのデータは後でじっくり見るとして、知りたかった情報が粗方収められているのを確認した俺は、遠野さんへと笑みを向けた。

「ありがとうございます、助かりました」

「いえいえ。……そちらのデータは契約を結んだ企業にのみ販売されるものですので、あまり大っぴらには広めないようお願いします」
「わかってます」

念のため、といった様子で忠告してくる遠野さんに、しっかりと頷き返す。

このデータは、彼が札商としてのコネを使って国の研究機関から買い付けてきてくれたものだ。

未だ一般公開されていないそれをネットなどで拡散などした日には、遠野さんの俺に対する信用のみならず、彼の札商としての信用まで失われることになるだろう。

そもそも、一千万も出して買った情報をわざわざタダで教えたりする気にはなれなかった。

このデータも自宅で大事に保管し、自宅以外では閲覧もしない予定だ。

と、そこで遠野さんが不意に表情を緩めて言った。

「……まあ、あと2〜3年もすればどこかの企業がアプリとして売

り出して、一般にも広まる情報ではありませんがね」

だが、そんなには待てない。俺は今、霊格再帰の情報が欲しいのだ。

俺が買ったのは、その2〜3年という時間でもあった。

「……………それにしても、大変ですね。まさか学校に迷宮が出現してしまつとは」

商談が一段落して一服していると、不意に遠野さんがそんなことを言った。

「本当ですよ……………幸い一般的な異界型だったから良かったものの、これが東京ドームみたいな特殊型だったら在校生みんな転校ですよ、転校」

自宅や職場などに迷宮が現れた場合、その土地の所有者は政府が用意した代替地だいたいちに引っ越しするか、ゲートの設置と引き換えにそのままの生活を送るか、の二択を選ぶことができる。

大抵の場合、一般家庭などに迷宮が現れてしまった場合は前者を、ビルや学校などの職場に出現してしまった場合は後者を選ぶことが多い。だが、現れた迷宮の種類によっては強制的に前者を選ばされることもある。

それが、モンコロの舞台となっている元東京ドームのような、元々あった土地や建物を取り込んでダンジョン化する特殊型迷宮である。

俺たちが普段潜っているような一般的な異界型の迷宮であれば入口をゲートで管理さえしてしまえば民間でも管理が可能となるが、

特殊型迷宮は周辺の土地を侵食してダンジョン化しているため、その気になれば子供でも侵入できてしまう危険性がある。

そのため、特殊型迷宮は一つの例外もなく国が接收し、高い壁で囲って管理するという決まりとなっていた。

当然、特殊型迷宮が現れたのが学校だったりした場合、そこに通う生徒たちは小集団に分けられているんな学校に分散されることになる。

仕方のないこととはいえ、通いなれた学校や仲の良い友人たちと引き離され、強制的に転校させられる学生たちからすれば堪ったものではなかった。

「夏休み前だったのは、不幸中の幸いと」

「ええ、でもまあ、年に二百件ほどあることでもありますから。それに人の多く集まるところは迷宮の発生する確率が高いですし」

「迷宮のランクなどはもう判明したのですか？」

「いえ、まだ調査中ですな」

「ほう……一週間以上となると、Cランク以上かシークレットダンジョンですか。これは北川さんにとっては朗報なのでは？」

「そうですね……？」

遠野さんの言葉に、俺は首を傾げた。

「学校のような空間は部外者の出入りを嫌がる傾向がありますからね。大抵の場合、プロの冒険者を雇って迷宮の管理をすることが多いです。とは言っても、プロへの依頼もタダではない……となると？」

「なるほど……校内の冒険者に何らかの条件と引き換えにタダ、あるいは格安で管理してもらう、と」

「もちろん、シークレットダンジョンに認定されなければ、の話ですが」

ふむ、もし遠野さんの話の通りに事が進めば、冒険者部はクランク迷宮を一つ独占できることになるな。

他のプロチームと競合することなく、安心して踏破に挑めるというのは、駆け出しのプロチームである俺たちにとっては大きなメリットだった。

学校側の条件次第でもあるが、もしかしたら冒険者部の正式な設立も認められるかもしれない……。

なるほど……アンナが試験勉強に身が入らなくなるわけだ、と俺は期待に胸を膨らませるのだった。

『ようやく終わったか……話がなげーんだよ』

カフェを出て遠野さんと別れたところで、俺に話しかけてくる声があった。

姿が見えない相手からの脳内に直接届く声に、俺は同じく念じて返す。

『だからカードの中で待ってるって言っただろうが……蓮華』

『あの中はもう飽きたんだよ。それなら店内の他の客の観察でもしてた方がマシだ』

『そんなもんか。それでなんか面白い話があったか？』

『ん……そうだな。お前の斜め後ろの席におっさんと若い女の二人連れがいたろ？』

『ああ……、そついえばくたびれたおっさんと高校生くらいの女の子がいたような……』

おっさんの方は良く覚えていないが、女の子の方は結構可愛いくて巨乳だったから覚えている。

『うん。そのおっさんだけど、今朝起きたら奥さんが全財産を持って浮気相手と駆け落ちしてたらしい』

『マジか〜』

うわ〜……悲惨。

『しかもその相手が自分の可愛がってた部下だったらしくてな……』『ダブルで悲惨……。じゃあ、そのことを娘さんと相談って感じ？』『いや？ 相手の女の子は娘じゃなくて、おっさんの浮気相手』

は？ 糞が。同情して損した。

蓮華が見聞きした他の客の面白い話などを聞きつつ、駅へと向かう。

『……で、どこに行く予定なんだ？』

『ん、ああ、ギルドだよ。久しぶりにカードのパックを引こうと思っただけ』

俺がそう言うと、リンクから伝わる蓮華の気配が変わった。

『もしかして、アレを試そうと思ってんのか？』

『ああ、パーフェクトリンクを……迷宮外での運命操作を試してみようと思ってる』

『おいおい、お前、ちょっと因果律の歪みを舐めてんじゃねーか？』『ちゃんと危険はわかってるよ。だから貯金してきた幸運以上の運命操作はしない。それなら生まれる歪みも最小限に抑えられるだろ』

？』

パーフェクトリンクと運命操作の能力には、確かに無視できないリスクがある。

因果律の歪みが積み重なることで発生する『試練』は、時として運命操作で引き寄せた奇跡以上の悲劇となって襲い掛かるだろう。使い方を誤れば、身の破滅を招く。

だがそれは、見方を変えれば使い方次第ということでもある。

幸運の前借りさえしなければ、運命操作によって生まれる因果律の歪みも最小限のモノとなる。

この最小の歪みは、二週間から三週間程度で消える。つまり、安全マジジンを取り一か月に一度程度の使用ならば、リスクなくこの能力を行使できるということだ。

『それで、なんでギルドのパックだよ？ この能力をギャンブルに使うのは賛成しねーぞ』

『純粹に、効率と情報漏洩のリスクを考えてだよ』

迷宮攻略でカードを手に入れる場合、俺がソロで攻略できるのはDランクが限界。つまり、手に入るカードもCランクカードが最高となる。

Cランク迷宮に挑む場合、Bランクカードが手に入る可能性があるが、ソロでの攻略は不可能なため一緒に攻略するであろう冒険者部との分配が発生する。

アンナたちも、滅多に落ちない筈のBランクカードが数か月置きにドロップしたら蓮華の能力に確実に気づくだろう。

冒険者部の皆には、ハーメルンの笛については明かしたが、さすがに蓮華の特殊性に関しては言うつもりはなかった。

彼女たちを信頼していないわけではないが、信頼しているはずを曝け出す、というわけでもない。

そうして諸々の事情を踏まえて考えると、迷宮攻略で手に出来る最大の利益は月にCランクカード一枚という計算となる。

では、ギルドのカードパックはというと、こちらは30%程度の確率でDランクカードが、1%以下の確率でCランクカードが入っている。

1パック百万円でCランクカードが1%以下の確率というのは一見厳しいかもしれないが、運命操作が使える俺からすればかなりの高確率となる。

なぜなら、Cランクカードのドロップ率は0.1%程度だからだ。一ヶ月分の幸運と引き換えにCランクカードのドロップ率を100%にすることが出来る俺たちからすれば、1%以下を100%にすることなど造作もない。

また、ギルドのカードパックには、12ロットに必ず一枚はBランクカードやエルフ、サキュバスと言った超人気カードが入っている。

これは、宝くじで言う高額当選にあたり、一等がBランク、サキュバスやエルフは二等や三等となる。

パックは一月に1ロット生産されるため、年に一度どこかのタイミングでアタリが補充される計算になる。

この補充されるあたりは、前の年にアタリが引かれているかに関係なく補充され続ける。

『つまり？』

『――パックには零落スキル持ちのサキュバスがまだ眠っている可能性もある』

俺が霊格再帰を発見するまで、ギルドのカードパックに入っているレアカードは零落スキルなどのマイナススキル持ちがメインだった。

霊格再帰の発見により、ギルドのパックは相当数が買い漁られたが、そのすべてが買いつくされたわけではないだろう。

その中には、『零落スキル持ちのサキュバス』が眠っている可能性もゼロではなかった。

……まあ、さすがに可能性がゼロではないというだけで、その確率がゼロに等しいのは俺にもわかってる。

仮に残っていたとしても、運命操作を使ってすら手に入れるのは難しいだろう。

それでも他に『零落スキル持ちのサキュバス』の入手先に目処が立っていない以上、これしか方法はなかった。

そう、メアのためにも俺はパックを引くしかないのだ！

『————で、本音は？』

というようなことをツラツラと説明した結果、蓮華から返ってきたのがこの冷たい言葉であった。

かくれんぼのスキルにより姿は見えないが、養豚場の豚を見るような目で見られているのがありありと想像でき、俺は狼狽えた。

『ほ、本音って……今のが本音ですけど？ 嘘偽りない本心ですけど？』

『嘘つけや。欲望にギラついた目えしやがって。お前、ただ単にガチャ引きたいだけだろーが』

『うつ……！？』

凶星を突かれ、俺は思わず呻いた。

やはり、俺の魂胆はバレバレだったか。

そう、彼女の言う通り色々と説明付けてみたが、ぶっちゃけた俺がパックを引きたいだけだった。

蓮華たちを引き当てたあの一回以来、俺は一度もパックを買っていない。

それは、あんな大当たりが何度もあるわけがないと思ったのもあるが、もう一度そこその当たりを引き当ててしまったら、歯止めが利かなくなるのではないかと危惧したからだ。

全財産と言って良い百万円を賭けて、蓮華たちを引いた時のあの感覚……。

驚愕、歓喜、幸福、達成感……脳内で出ちゃいけない分泌液が出てるのがはつきり分かった。

あれは、一種の麻薬だった……。

故に、俺はあえてギルドのカードパックからは足を遠ざけることにしたのだ。

三ツ星になり、ギルドのカードパックを何個も買えるようになって、決して買おうとしなかった。

汗を流すこともなく蓮華の幸運頼りにパックを買ってカードを集めていったらきつと俺は墮落する……そういう予感があった。

よって、俺はカードパックのことはあえて忘れてこれまで頑張ってきた。

……だが、もー、限界！ 我慢の限界！

確実に勝つとわかっているギャンブルをしない人間がいるだろうか？

少なくとも、俺には無理だ。

これは、ボーナス……っ！ これまで頑張ってきた俺に対する、月一のご褒美……！

確実に戦力増強に繋がるのだから、むしろ引かない方が悪……っ！
そう、これはもはや義務……っ！
マスターとしての仕事の一環……！

『というわけで、俺は誰が何と言おうとパツクを買っぞ……っ！』
『うーん……これまで我慢してきた反動が一気に来たか』

力強くそう宣言する俺を見て、蓮華が頭を抱える（のがリンクで伝わってきた）。

『でも、ダメだ。お前、タダでさえ運命の浮き沈みが激しいんだから。不意の不幸のために幸運は貯めておけ』

そう言う蓮華からは、リンクを通じて断固とした意志が伝わってきた。

ク……、いくら俺が運命操作を使いたいと思っても、蓮華の協力がなければパーフェクトリンクは成立しない。

こうなったら、やむを得ない。

俺は周囲を見渡し、人気のない路地の奥へと入っていった。

完全に人気も監視カメラもない袋小路へと入ると、和服姿の蓮華が姿を現す。

腕を組みこちらを見下ろしてくる彼女に、俺は両手を合わせて深々と頭を下げた。

『な、頼むよ！ 今回だけ、今回だけお試しすることで引かせてくれ！ 実際実験は必要だろ？』

『実験なんて必要ねーだろ。狼と七匹の子ヤギの時にはちゃんと使えてんだし。それともアタシの能力が信用できねーのか？』

『いや、信用してるって！ でも、迷宮内と迷宮外ではちよつと違つかもしれないじゃん！ もし迷宮の外で事件や事故に巻き込まれ

「そんな時に使おうとしても効果がなかったら困るだろ？」
「そんな時はアタシが助けてやるよ」

く、手強い……！ 予想以上に蓮華は頑なだ。
……できればこれだけはしたくなかったが。
俺は対・蓮華最終手段を使う覚悟を決めた。

「蓮華あ〜！ そんなこと言わずに、今助けてくれよ〜」
――秘儀・泣き落とし……！

俺はガバリ、と蓮華のスベスベの脚へと縋りついた。

「お願いお願いお願い！ 今回やったら次は半年我慢するから〜」
「ちょ、おまつ!?!?」

蓮華はギョツとして俺の頭を掴むも、引きはがしたり蹴り飛ばしたりはしなかった。

このヤンキー系座敷童は、一度心を開いた相手にはすこぶる甘いのだ。

「お前、こんな真似して恥ずかしくねーのか!? 男として!」
「馬鹿野郎! 恥ずかしいに決まってるだろうが!」

顔を真っ赤にして叫ぶ蓮華に、俺はカツと目を見開き怒鳴り返した。

「俺が何歳だと思ってる! 16歳だぞ!? 6歳児じゃねーんだぞ! こんなん見られたら、もうこの街には住めねーよ!」
「ええ……? じゃあすんなよ……」

『恥ずかしいが……見栄張っても何も手に入らんじやろがい！ 名を捨てて実が取れるなら、俺はお前の足だって舐めるぞ、この野郎！』

『ええ、ぎゃ、逆に男らしいのか……？』

蓮華は珍しくマジで戸惑っているようだった。これは……イケる！ 流れはこつちにある！

俺はトーンを下げると、哀れっぽく上目遣いで彼女を見つめた。

『な？ 頼むよ……一生のお願い。な？』

『むむむ……』

蓮華はしばし小さな口をもによもによさせて迷っていたが、やがて。

『しょうがねえなあ……今回だけだぞ』

と諦めたように俺の頭を撫でたのだった。

……やったぜ！

第二話 幼女の足に縋りついてパックを引くだけの話 (後書き)

【Tips】特殊型迷宮

ゲートの先に異空間が存在する通常の迷宮と異なり、元々存在していた土地と建造物を取り込んで迷宮化する迷宮の総称。

特殊型迷宮の特徴として、道中にモンスターや罠が存在せず、主が一枠しか出現しないというモノがある。その分、主は通常の迷宮よりも大幅に強化されている。

また、外観は普通だが、一步中に踏み込むと内部が非常に拡張されているケースも多い。東京ドームダンジョンなども、内部に球場がいくつも存在しており、それらは闘技場へと改築され番組ごとに一つの闘技場を所有し毎日のように試合が行われている。

第二話 幼女の足に縋りついてパツクを引くだけの話 (前書き)

・登場人物紹介

砂原 太陽：Bランクの零落スキル持ちハトホルという超お宝を当てたことで、少々頭のネジが外れてしまった自称ファラオ。常に瞳孔が開いているタイプの人。

第二話 幼女の足に縋りついてパックを引くだけの話

無事蓮華を説得（泣き落と）した俺は、彼女の気が変わらないうちに早速ギルドのパックを買いに行くことにした。

『……あん？ どこ行くんだ？ ギルドに行くんじゃないのか？』

八王子のギルドへと向かわず、途中の改札を通った俺を見て、蓮華が問いかけてくる。

『八王子のギルドじゃなくて、三鷹のギルドで買おうと思ってさ』

『三鷹？ なんでわざわざそんな中途半端なところ』

『へへ、今朝パーフェクトリンクで軽く未来を見た時、一番俺が喜ぶ可能性があつたのが三鷹だったからさ』

『お前さあ……』

と蓮華が呆れた声を出した。

『最初からこの展開を狙ってたな。あのおっさんとの取引でサキユバスが手に入っても手に入らなくてもパックを引くつもりで家を出てきたろ』

『バレたか』

内心で舌を出した俺の頭を、透明の蓮華が軽く小突く。

『まったく……んで、どんくらいパック引くつもりなんだ？ まさか1パックってわけじゃないだろ？』

「そこが悩みどころなんだよな。幸運を使つての確率操作である以上、パックを買えば買うほど消費される幸運も少なくなるわけで。所詮一月分の幸運の貯金じゃ、結構パックを買わないとあんまり結果も期待できなそうなんだよな。でももしも遠野さんが零落スキル持ちのサキユバスを手に入れられた時のために三億は最低残して置きたいし……」

蓮華の能力で確率を操作した場合、消費される幸運は得られる金銭の大きさや俺が感じる幸福感に左右されず、確率と可能性に依存する。

だから、例えば友達と金を賭けずにやる麻雀で九連宝燈を出すのも、宝くじで一千万当てるのも、それが同じ確率ならば同等の幸運を消費することとなる。

故に、1パックだけ買つてCランクカードを当てるよりも、10パック買つてCランクカードを当てる方が、消費する幸運も少なくなる。

俺が一月で貯められる幸運の力は、蓮華の加護により常人よりも幸運体質となつていることもあり、0.1%を100%にしてちょっとお釣りがくる程度だ。

つまり、カードのパックなら10パック買つてそのすべてにCランクが入っている、なんてことも可能になるわけだ。

――あくまで、計算上では、だが。

実際には、そう上手くはいかない。

そもそも売り場のパックに十枚もCランクカードが存在していなかった場合、どれだけ幸運を消費しても意味が無いし、また迷宮の外でそこまで蓮華が力を発揮できるかもわからない。

迷宮の外でも召喚できるようになったこの座敷童だが、やはり迷宮外では力が出しにくいようだった。

彼女曰く、「迷宮の外は常に水の中にいるような感じ」らしい。
そのため、運命操作で使用する幸運の量も迷宮内より多くなる可能性は高かった。

俺がどうしても今日パックを引きたかったのは、そのあたりのことを確かめたかったからでもあった。

『ふうん、ま、あんまり期待しすぎんなよ。……パックに入れられるのなんて問題児ばっかなんだから』

『それはもう、重々承知しておりますよ』

俺が即答すると、スパンと蓮華に頭を叩かれたのだった。

——三鷹のギルドカードショップに入った俺は、そこで思わぬ人物と再会することとなった。

「あれ？ 北川くん？」

「ん？ ……えっ!？」

『うお!？ マジか……』

後ろから誰かから声をかけられ、振り向いた俺は、思わず絶句した。

そこに立っていたのは、爽やかな笑みを浮かべた砂原選手だった。

「久しぶり！ モンコロで戦った砂原だけど、覚えてるか？」

「え、ええ……もちろん覚えてます」

アンタほど強烈なキャラを忘れられるかよ、と内心で呟きつつ俺は恐る恐る問いかけた。

「砂原さん……まさか日常でもその恰好なんですか？」

砂原選手の恰好は、かつてモンコロで戦った時のままだった。つまり、ファラオである。

褐色肌の鍛えられた上半身を晒し、金のアクセサリーと腰布、それにサンダルだけの明らかに周囲から浮いた恰好。他の客たちも遠巻きに見て距離を取っている。

てつきりこの恰好はモンコロの試合の時だけと想っていたが……いや、もしかして今日試合があつてその帰りなのかも？

そんな俺の一縷の望みは、砂原選手の満面の笑みと白すぎる歯と共に否定された。

「もちろん！ 俺はファラオだからね！」

「そ、そうっすか」

『おい、歌麿……コイツ、予想以上にヤベーぞ！』

ヤバいなんてレベルじゃねーよ、蓮華。試合でもないのにこの格好は、完全に気が触れている。

これは、関わっちゃいけない人ですわ。

「そ、それじゃ」

と、頭を下げ、距離を取ろうとしたところで、砂原さんが被せるように問いかけてきた。

「お？ そう言えば北川くんは何を買いに来たのかな？ もしかして、アレかな？」

「アレ、ですか……？」

逃げるチャンスを失い、俺は渋々会話を続けた。

「うん、今日から各地のショップで販売される新カードパック。君もそれが目当てなんだろ？」

新カードパック？　なんだそれ？

俺が首を傾げているのを見て砂原さんも首を傾げた。

「うん？　パックを買いに来たんじゃないのか？」

「いえ、そうなんですけど……新パックのことは知らなかったです」

「そうなのか！　それは偶然だなあ。じゃあせっかくだから一緒に買いに行きましょう！」

「え………！」

俺は顔を引きつらせるが砂原さんは気にすることもなく俺の手を引きカウンターへと向かっていく。

そこには、大きく『新カードパック発売！　属性別スターターパック！　三枚入り100万円。プロ向けスペシャルパック！　三枚入り1000万円』と書かれていた。

「これこれ。以前までの十枚入り百万円のパックは生産中止になって、枚数が少なくなつて零落スキル持ちが入ってない代わりにDランクCランクのカードの確率が上がってるらしい。一応前のバージョンのも在庫が無くなるまで売ってるらしいけどね」

「へえ〜！」

砂原さんの解説に、マジマジと看板をしてみる。

スターターパックの方は、『アンデッド・悪魔が中心の黒』『妖精・天使が中心の白』『妖怪・神が中心の赤』『獣・竜が中心の緑』の四種類のようだ。

カードの属性はこれ以外にも善や悪、男と女、巨人、混血などたくさんあるが、大体のカードはこの8つの属性のどれか、あるいは複合なのでこういう分け方をしたのだろう。

確率は、1パックにつきDランクが40%、Cランクが2%、1ロットに数枚ほどBランクが入っているらしい。また3%の確率でカード化された高額な魔道具やマジックカードなども入っているようだ。残りはハズレのF・Eランクのカードとシヨボい魔道具との引換券。

かつてのパックはDランクが30%のCランクが1%以下だったのでかなり内容が良くなっている。魔道具やマジックカードが入ってるのも面白い。アマチュア冒険者はどうしても高額な魔道具やマジックカードは敬遠してしまいがちだから、これからは魔道具を積極的に使う冒険者も増えるかもしれない。

一方のスペシャルパック。こちらは、1パック1千万という値段からか、Bランクカードが1%以下、Cランクカードが30%や高額魔道具、残りがDランクかそこそこの魔道具やマジックカードとなっていた。

以前のパックの正統パワーアップ版という感じだが、スターターパックと比べてもCランクの出現確率が高い。Cランク以上が欲しいなら、スターターパックを十個買うよりもこちらを一個買った方が効率的だろう。

アマチュア冒険者では一千万という値段はなかなか手が出ないが、プロ向けというだけあってプロは買うならこっちを選ぶだろう。

うーん、これは悩ましい……。

とりあえず買うならスペシャルパックだろう。零落スキル持ちが入ってないのが残念なところだが、Cランク、Bランクの確率が上がり、最低でもDランクが出るというのが嬉しい。

どうせ旧式のパックには零落スキル持ちのサキュバスなんて、もう入ってないだろうしな。

ならばBランクを当てて、メアのランクアップ資金に当てた方が
良いだろう。

問題は、いくら買うかだが……。

「どう？ ワクワクするだろ？」

顎に手を当て考え込む俺に、砂原さんがニカッと笑いかけてくる。

「ええ、そうですね」

「だろ？ よし、じゃあどっちが先に買う？ 当たりが残っている
うちに買うか、残り物には福があると見るか」

ニヤリ、と笑いかけてくる砂原さんに、俺は少し考え「後攻で」
と答えた。

俺は能力によりアタリを引くことが確定している。なのに先に引くのはちよつとフェアじゃないと思ったのだ。

「では、お先に」

そう言つて、彼はカウンターへと向かった。

パックはカウンターのクリアケースの中に各色のパックとスペシャルパックごとに段で分けられており、店員の女性の操作によってクリアケースが開き、購入するパックの段が客の前にせり出してくる仕組みとなっているようだった。

ちよつと近未来的でカッコイイ。

砂原さんは各色のパックを一つずつと、スペシャルパックを5パックほど購入したようだった。支払いは当然、冒険者ライセンスからの一括払いだ。

「じゃあ、俺は先に帰るよ」

「あ、はい。……ここで開けていかないんですか？」

買ったパックは、専用の個室で誰にも見られずに開封できるようになっているのだが、砂原さんはここで開けずに持ち帰るようだった。

治安の良い日本とはいえ、数千万円分のパックをそのまま持ち帰るのはさすがに不用心じゃ……。

「大丈夫。俺、アハを習ってるから。ボディーガードもいるしね」

「あ、ボディーガードを雇ってるんですね。……ところでアハってなんですか？」

「古代エジプトの格闘技だよ。カードに教えてもらってるんだ」

「へえ」

カードに武術を習う、そういう手もあるのか。リンクを使えば普通に格闘技を習うより効率も良いだろうし、普通にアリだな。

基本的にマスターの格闘経験は無駄にはならんし。

「あ、そうだ。もしも北川くんが引いたアタリがエジプト系で、君の要らないカードだったら連絡してくれ。こっちに出たエジプト系以外のアタリとトレードか、アタリが出なけりゃ金で買い取るからさ」

「あ、はい。わかりました」

「よろしく」

二カッと爽やかに笑って砂原さんは去って行った。

改めてその背中を見ると、広背筋が発達していて足取りも重心が安定しているように見えた。

……俺もイライザや鈴鹿から武術を習ってみるかな。シンクロ率の上昇にもつながりそうだし。

「いらっしやいませ。カードパックのご購入でよろしいでしょうか？」

カウンターに進むと店員のお姉さんがにこやかにほほ笑みかけてきた。

……近くで見るとこのお姉さん、結構美人だ。それに、胸がデカい。

パーフェクトリンクを使うと鼻血が出るんだけど、エッチなことを考えてたとか誤解されないかな。

「各パックについての説明は必要でしょうか？」

「あ、いえ。看板の内容なら見たので」

「ありがとうございます。現在キャンペーン中となっております。十パックごとのご購入で一パックサービスとなっております。本日はどちらのパックをご購入なされますか？」

むむ……10パックで1パックサービスか、と思いつつ答える。

「スペシャルパックを」

「えっ!？」

「え?」

お姉さんが驚いた顔をするので、こちらも驚くと、彼女は咳払いをして誤魔化した。

……俺が一千万のパックを買うのに驚いたらしい。まあ、見た目は金持つてるように見えないからな。服もユニク○だし……。

「ごほん、失礼いたしました。ケースを出しますので、一步下がってお待ちください」

「はい」

スペシャルパックのケースがせり上がってくるのを待つ間に、俺はパーフェクトリンクの準備を始めた。

『それじゃあ蓮華、頼む』

『はいよ』

俺と蓮華の自我の境が無くなっていき、俺が蓮華に、蓮華が俺になっっていく。

閉じた瞼の裏に広がる、無数の可能性の道。その中からカードを引く以外の選択肢をすべて排除し、より注視して可能性の道を見ていく。

最初は、とりあえず零落スキル持ちが入っている可能性がある旧式のパックを引いた場合を一応確認していく。

これでもし零落スキル持ちのサキュバスを当てたようなりアクションを取っているようならこちらに全賭けするつもりだったが……どうもそこまで都合の良い展開はないようだった。

残念に思いつつも、心置きなくスペシャルパックを引いた場合の可能性を見ていく。

まずは、スペシャルパックを1パックだけ引く道から。すると、当然のことながら喜んでいるビジョンはその道のほとんどが途切れており、どう足掻いてもその未来にはたどり着かないのがわかった。次に、スペシャルパックを10パック＋1パック引く道を見る。

すると大分多くの道が繋がったが、やはりその道は遠くか細い。が、道が繋がっているなら俺の幸運の範囲でたどり着けるビジョンということだ。

だが、ビジョンの中で一番俺が喜んでいる可能性の道はまだ所々

が途切れている。

では、さらに一億。11パック分買うと仮定してみる。すると、大分穴が埋まってきた。

もう一億。この時点で、遠野さんからサキユバスは買う資金はなくなる。だが、それでもまだすべての穴は塞がらない。

すでにこれ以外の道がすべて埋まり、かなり道は太くなっている。これは、どう見るべきか……。Cランクが30%のBランクが1%以下のスペシャルパックで、33パック買ってもまだ繋がらない道ということは、Bランクの可能性が高い。

また、喜んでいるということからしてもそのカードは投資した金額以上ではあるのだろう。

さらに一億。……繋がった。計四億の、44パック。

一番喜んでいるビジョンの次に喜んでいるビジョンを見る。こちららは、二億を突っ込んだ時点で道が繋がっていた。

零落スキル持ちのサキユバスを買い戻す金を残して二番目に良い結果を選ぶか、四億突っ込んで一番の結果を選ぶか……。

「あ、あの……?」

そこで、店員のお姉さんに声をかけられ我に返る。

「大丈夫ですか? その、血が出てますけど」

「あ、すいません。最近鼻血がよくでるんですよ」

と笑いながらハンカチを鼻に当てて誤魔化すが、お姉さんは引きつった笑みで。

「いえ、その、目からも出ちゃってますが」

「目からも!?!」

慌てて目じりに指を当てると少しだが血の涙が流れていた。

うおお、これはヤバイ！ 鼻血を流している人は見たことあつても、血涙をリアルに流してる人を見たことはない！

「あの、救急車をお呼びしましょうか？ というか、呼びますね」

「あ、いえいえ！ 大丈夫です。それよりパック買った方がいいですか？」

「ええ……！？ いや、今日は止めといた方が……」

「いえいえ、今日買います！」

「は、はあ……では何パックお買いになれますか？」

「――40パックで」

「よっ……！？」

と目をかつぴらくお姉さん。

こうなれば、俺も覚悟を決めた。中途半端は無しだ。少なくともコスト以上のリターンは確定している。ならばいざとなれば当たったカードを売って、サキユバスの購入資金に充てるという選択肢もある。

ならばここは最良の結果を掴むべきだ。なんせ次に蓮華が協力してくれるのは、半年後になるのだから。

お姉さんはしばし「このガキ、本当にそんな金持ってたのか？」という顔をしていたが、やがてハッと何かに気付いた顔をした。

「……お客さんどこかで見た気がするんですけど、もしかしてモンコロとか出てます？」

「あゝ、一応」

「なるほど！ ……私、今日は定時で上がれるんですけどおゝ」

胸元を強調しながらそう言ってくるお姉さんに、俺は苦笑して言った。

「魅力的なお誘いですけど、遠慮しときます。一応高校生なんで」
「あっそうですか。じゃお支払いは、ライセンスでよろしいですか？
あとマジですぐに病院行った方が良いですよ」

急に素っ気なくなっただお姉さんに苦笑しつつ俺はバックを貰って
帰宅したのだった。

第二話 幼女の足に縋りついてパックを引くだけの話 (後書き)

【Tips】カードの属性

カードの種族にはそれぞれ属性が存在する。

属性はスキルの対象先となるだけではなく、それ自体がステータスに影響している。

そのため、同じ戦闘力であつても属性が多い方がステータスや状態異常耐性などが高くなる傾向にあるが、同時に属性を対象としたスキルに対する弱点を抱えることにもなる。

またマスターによって、相性の良いカードの属性というモノも存在する。

第三話 美人なメイドはお嫌いですか？

さて、いよいよお楽しみ時間である。

俺と蓮華は、自室のベッドの上で向かいあうように座ると、小型のアタッシェケースを開いた。

このアタッシェケースは、スペシャルパックを10パック以上買った客に、とギルドがサービスでつけてくれたものだ。

さすがに、一億円の買物ともなるとギルドもビニール袋で渡してくるような真似はしないらしい。

昔は黒塗りのシンプルなデザインだったギルドのパックも、金と銀で彩られたカードの裏表紙を連想させる高級感溢れるデザインへとなっていた。

「よし、じゃあ、開けるぞ」

「おお……」

1パック1千万円のパックに、さすがの蓮華も目を輝かせる。

「……おおっ！ いきなりランクだ！」

パックの中身は、ランクカードのデュラハンとグール、エアコンペンダントという魔道具だった。

グールは外れとして、エアコンペンダントは、身に着けていると体周辺の温度と湿度を適温にしてくれるという人工魔道具だ。

一個百数十万はする高級品で、欲しいは欲しいが買うにはちょっと抵抗のある代物のため、こうしてアタリと一緒に出てくれると微妙にテンションがあがる。

デュラハンの性能については後でじっくりと見るとして、さつそくの当たりにテンションが上がった俺は、次々とパックを開けていく。

結果、約半分の計20パックまで開けた段階の成果は以下となった。

【ハズレ】市場価格で10万円以上100万円未満くらいの品。こんなもん一千万円のパックに入れんなというレベル。()内は個数

・不人気Dランクカード各種(14)：オーク、グール、ジャック・オー・ランタン、河童、黄泉軍など。

・魔道具

ミドルポーション(3)：全治数ヶ月以上の重傷もあつという間に癒せる薬。市場価格10万円ほど。

ハイポーション(2)：意識不明の重体レベルの大怪我も癒す薬。失われた部位の再生まではできない。市場価格50万円ほど。

やる気ポーション：飲んだ者のやる気を回復させるポーション。クリエーターの心強い味方。百本詰め合わせ。市場価格30万円。

カード化された食料：一月分の生鮮食品や調味料などの詰め合わせ。カード化されているため取り出さない限り腐らないが、中身は普通にスーパーなどで買える物ばかり。

オールリモコン：家の中のすべての家電がこのリモコン一つで操作可能。人工魔道具。

マーメイドの水着(6)：水中での動きを補正し、息が長く持つようにしてくれる水着。身に着けた者の好みにデザインが変わる。人工魔道具。

美白歯みがき粉：どんなに黄ばんでいる歯でもダイヤモンドの輝きを取り戻し、虫歯や口臭、歯槽膿漏も治してしてくれる歯磨き粉。

息、リフレッシュ！ 人工魔道具。

六文銭：三途の川の渡り賃。死んだ人の棺桶に入れることで無事成仏できるかも？ 用途がよくわかってないタイプの魔道具。

陰口帳：他人の自分への陰口が自動的に書き込まれるノート。鬱に注意。

・マジックカード

ビジョン：初等補助魔法・暗視の魔法が封じられている。暗闇でも太陽の下のようにはっきりと見えるようになる。

クリーン：初等補助魔法・清潔の魔法が封じられている。体や衣服についた汚れを弾き飛ばす。

キユア：初等回復魔法・解毒の魔法が封じられている。一部の状態異常の回復。

リフレッシュ：中等回復魔法・壮快が封じられている。体力と精神、様々な状態異常を回復する。

ブレス（２）：中等回復魔法・祝福の魔法が封じられている。魔力を回復させる。

リジエネレート：中等回復魔法・再生の魔法が封じられている。対象を一定時間回復させ続ける。

【まあまあ当たり】市場価格100万円以上1000万円未満。平均300万円くらい。高いので自分で買う気はしないが、パックに入っていればカード化されていることもあってそこそこ嬉しい品。

・人気Dランクカード

ケルピー：水棲の馬の魔物。水陸両用の騎獣として人気が高い。初期戦闘力160。マイナススキル無し。

ユニコーン：癒しと補助の魔法に特化した一角獣。素人でも扱いやすいと人気だが、処女でないと乗せてくれない。初期戦闘力150。マイナススキル無し。

アルラウネ：Dランクのエルフとも呼ばれる見目麗しい女の子カード。初期戦闘力170。マイナススキル有り。

フェニア：粗末な貫頭衣を纏った美しい女巨人。メニアのカードと同時に召喚することでその真価を発揮する。初期戦闘力180。マイナススキル無し。

・魔道具

エアコンペンダント(2)：身に着けていると体周辺の温度と湿度を適温にしてくれるペンダント。人工魔道具。

防音結界：内部の音を完全に遮断してくれる防音結界を発生させる装置。人工魔道具。

聖銀製の長剣：アンデッド系のモンスターの不死を解除し、再生能力を阻害する聖銀製の武器。人工魔道具。

魔石袋：いくらでも魔石が入り、重さも変わらない袋。魔石以外は入らない。

薬水の水差し：常に満杯まで入っている水差し。使わずに放置することで中身がポーシオンに変わる。一日でローポーシオン、一週間でミドル、一月でハイに。別の器に移すと数分で水に戻る。

名酒・酒屋殺し：常にお酒で満たされている酒瓶。放置すればするほど、どんどんおいしくなる。これを使って商売するのは法律違反なので注意。

空飛ぶ絨毯：空を飛ぶ魔法の絨毯。落下防止、風除け機能付き。最高速度は時速50キロ程度。

ヒュプノスの枕：この枕で寝ると一瞬で眠りにつけ、八時間の睡眠でどんな寝不足、過労も解消される。

透明金庫：持ち主以外には見えない透明の金庫。見た目よりもたくさん入る。防犯に最適。

サラマンダーの外套：火や暑さに高い耐性を持つマント。

・マジックカード

プロテクション：高等補助魔法・防壁の魔法が封じられている。
中等魔法レベルの一撃を完全に防ぎ、高等魔法レベルの攻撃をかなり軽減できる結界を張ることができる。

クレアヴォイアンス：高等補助魔法・千里眼の魔法が封じられている。その階層の構造が一定時間わかるようになる。

遭難：転移系の魔法が封じられている。まだ到達していない階層へとランダムに転移する。

【大当たり】1000万円以上一億円以下の品。出れば出るほど黒字。

・Cランクカード

デユラハン：首無し騎士の姿をした死を告げる妖精。装備化のスキルを持ち、プロクラスの冒険者の必須カード。初期戦闘力400。マイナススキル有り。

ヘクト：エジプト神話における出産と生命をつかさどる女神。蛙の被り物をした童女の姿をしている。初期戦闘力300。マイナススキル無し。

・魔道具

魔剣・ダーインスレイヴ：一度抜かれれば生き血を浴びるまで鞘に納まらないと言われる魔剣。その一閃は、決して癒えぬ傷を残すカードで言えば戦闘力500相当。

魔人のランプ：こすると三回だけBランクモンスター・ジン（女の場合はジーニー）が現れて戦ってくれる。

……ここまでの当たりで特に嬉しいのは、Cランクカードのデユラハンと魔道具のダーインスレイヴ、魔人のランプだろうか。

デュラハンはずっと欲しかった装備化のスキルを持つCランクカードだし、ダインスレイヴはヘタなCランクカードよりも価値のある魔剣だ。血を吸うという特性もあってイライザとの相性は抜群だろう。

魔人のランプも、いざという時にカードの召喚制限に左右されることなくBランクモンスターを呼べるというのが、心強い。残念ながらモンコロの試合ではこの手の魔道具は使用を制限されているが、そんなものは些細な問題だ。

ヘケトも、俺自身は特に必要なカードではないが、砂原さんとのトレードに使えるだろう。

他に嬉しい、というか気になるカードと言えば、Dランクの女巨人・フェニアだろうか。

フェニアは、レアな二体一对型のカードである。

二体一对スキルを持つカードは、二枚召喚しても一枚分の召喚枠しか消費せず、二枚揃うことで強力なスキルが使用可能となる（ケースが多い）という特徴を持つ。

フェニアも、一枚ではほぼ無能力だが、相方のメニアと同時召喚することで「グロツティの歌」というスキルを使用可能だった。

二体一对型のスキルは、二枚揃えないといけないこともあって強力な物が多いため、機会があればメニアを手に入れてみるのも面白いかもしれない。

ここまでのプラスマイナスは、パック代の二億よりもちょっとだけプラスと言ったところか。

Cランクカードや高額な魔道具のおかげで少しだけ利益が出たが、予想よりもハズレが多かった印象だ。

だがそれも、これらの品を定価で買ったらこれくらいの価値……という大雑把な計算によるものだ。もし、これらをそのままギルド

に売却した場合、この半分以下まで価値は目減りするだろう。
それを考えたら、この結果はむしろ大きくマイナスと言えよう。
それでも最後は大きくプラスになるはずだ、と運命操作の能力を
信じ、俺はパックの開封作業を再開した。

.....そして。

【ハズレ】（ ）内は追加の個数

・不人気Dランクカード各種（16）：オーク、グール、ジャック・
オー・ランタン、河童、黄泉軍など。

・魔道具

ミドルポーション（2）：市場価格10万円

ハイポーション（2）：市場価格50万円

カード化された食料（2）：一月分の生鮮食品や調味料などの詰
め合わせ。カード化されているため取り出さない限り腐らないが、
中身は普通にスーパーなどで買える物ばかり。

ヘアメディシンポーション：毛根の再生に特化するように調整
されたポーション。ハゲの救世主。人工魔道具。

ワーキング24：飲めば24時間、眠らずに絶好調で動き続けら
れる薬。しかし、24時間後には、通常の三倍の眠気と疲労が襲っ
てくるため注意。連続使用は二本まで。二十本入り。人工魔道具。
マーメイドの水着（5）：水中での動きを補正し、息が長く持つ
ようにしてくれる水着。身に着けた者の好みにデザインが変わる。
人工魔道具。

潔癖症のハンカチ：使うそばから綺麗になるハンカチ。洗濯要ら
ず。

文庫本図書館：文庫本の形をした図書館。この文庫本に既存の本を吸収することでいつでもその本が読めるようになる。仕舞った本は取り出し可能だが、この本が破損した際は中身も失われてしまうので注意。

【まあまあ当たり】

・人気Dランクカード

バイコーン：攻撃と妨害に特化した二角獣。荒々しい外見に反し、処女だろうが非処女だろうが乗せてくれる紳士。初期戦闘力170。マイナススキル無し。

リビングアーマー：高い防御性能を持つ低級アンデッド。アマチュアクラスの装備化スキル持ちとして人気が高い。初期戦闘力170。マイナススキル無し。

シルキー（4）：家事万能の美しい家妖精。メイド服を着ており、メイド好きにはたまらないカード。冒険のお供として一枚は欲しいと思っていたが、まさかの四枚ダブリ。戦闘力120。マイナススキル有り。

エンプーサ：省略。マイナススキル有り。

・魔道具

魔石発電機（2）：魔石を入れることで発電・蓄電してくれる家庭用の発電機。Fランクモンスターの魔石一つで一般家庭の一月分の電力を生み出す。人工魔道具。

聖銀製の長剣：アンデッド系のモンスターの不死を解除し、再生能力を阻害する聖銀製の武器。人工魔道具。

クマの毛皮：エスキモーの伝説にある、着た者を熊に変える毛皮。変身中は寒さに耐性を持つ。

夢魔のランプ：灯して寝ることで夢の中にサキュバスが現れてラッキースケベなイベントを起こしてくれる。エロ漫画未満、少年漫

画以上。個人的には大当たり。

代筆の手袋：使用者の思考と手の形を模倣して代筆してくれる生きた手袋。PCのキーボードも代わりに打ってくれる。単純作業には向いているが、クリエイティブな仕事にはあまり向いていないので注意。

もと暗しの灯台：この蠟燭を灯して寝ると、翌朝無くし物が蠟燭の元に現れる。

豊玉姫命のお守り：安産の神である豊玉姫命のお守り。安全に出産でき、痛みも全くない。

ティレシアースの薬：一月の間性別を反転してくれる薬。三年間の継続使用で完全に性別が変わる。

アスクレーピオスの薬：飲み続けている限り、どんな病気だろうと進行をストップしてくれる薬。一日一粒、三十粒入り。

アスクレーピオスの書：開くと自分の罹っている病のページが開かれる医学書。健康体だと開けない。

サキュバスの精力剤：死に掛けの老人でも体の一部が超元気になる薬。一回一粒、百粒入り。

・マジックカード

インシユアランス：高等補助魔法・保険の魔法が封じられている。マスターへのダイレクトアタックを一度防ぐ結界を張る。

レベルアップ：高等補助魔法・促成成長の魔法が封じられている。一時的に戦闘力が成長限界まで引き上げられる。ただし、その戦闘での経験値は得られなくなる。

【大当たり】

・Cランクカード

無し!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

・魔道具

カードホルダー：いくらでもカードの入るカードホルダー。その時取り出したいカードが自動的に一番上にくる。本人以外は取り出せない。プロ冒険者の必需品。

三天使の護符：一日一回、セノイ、サンセノイ、セマンゲロフという三体のＣランクモンスターを召喚することができる。また、新生児に持たせば病から守る加護を与える。

タラリア：翼の生えたサンダル。おそらくはペルセウスのゴルゴーン退治に登場した靴。履いた者の敏捷性を上げ、空中を高速で走れるようになる。

フィントン：フィン・マックールが食したとされる、食べた者に知恵や不思議な力を与えるとされる知恵の鮭。カードに与えることで、スキル『フィンの親指』を取得させることができる。

（フィンの親指：親指を啜えることで、思考能力を大きく向上させることができる。また両手で掬った水を癒しの水へと変えることができる。癒しの水の効能は、ミドルポーション＋リフレッシュと同程度）

「や、ややややや、ヤバアアアイ!!」

「あら〜……」

残り４パック、計４０パックまで開けた段階のリザルトに、俺は震えた。

ま、まさかのＣランク無し、だと……！ 三天使の護符とか、フィントンとか当たりの魔道具は出たが、ここまで一枚もＢランクが出てないのはヤバすぎる！

ど、どういうことだ？ これが一番俺の喜んでいるルートじゃなかったのか!?

あとシルキー、さすがに出すぎだろ！ いや、人気カードでアタ

りの部類ではあるけど！俺もメイドさんは好きだけど、こんなに出るとありがたみも薄れるわ！

ヤバイヤバイヤバイ！前半はともかく、後半は大赤字だ。たぶん、合計しても一億円分くらいにしかならないだろう。売った場合はもっと低くなる。

い、いや、まだだ！残りの4パックにBランクが眠っていれば逆転できる可能性が高い！

むしろ、運命操作のことを考えればほぼ確実にBランクがあるはず！

そう縋る様な思いで蓮華を見ると。

「うーん……こりゃ、ダメかもな。やつちまったな、歌麿」

「うおおおい！ちょ、ちょ、ちょ！え、残りに高額カードが眠ってるんだよな？ そうなんだよな？ そうだと言ってくれ！」

「は？ そんなのアタシが知るわけねーだろ」

「いやいやいや！だって運命操作はお前の能力だろ！？ パーフエクトリンクで俺も見だし！ ってことはアタリが出るってことじゃねーのか！？」

蓮華はヤレヤレと肩をすくめて首を振ると。

「じゃあ聞くけど、お前、ちゃんとカードが出たその瞬間を見たのか？」

「……は？」

絶句する俺に、蓮華はフンと鼻を鳴らして言う。

「お前の持ってた漫画に、未来予知と時間を吹き飛ばす能力を持つ敵がいたよな」

「あ、ああ……第五部のボスね」

「パーフェクトリンクで見える可能性のビジョンは、あの漫画の能力と似てる。お前は、『自分が喜んでいる光景』を見たが、それがどういう経緯でそうなったのかは光景から推測するしかない。また、それが最終的な結果なのか、過程なのかもわからない。と、言うことは、だ。お前が見たのはここまでのアタリの中のどれかを当てた時の喜びようであって、トータルでの結果じゃなかった可能性がある……」

「バ、バカな……」

「現にお前は新しいパックが販売されていることすら予知できなかつたじゃねーか」

その鋭い指摘に、俺は言葉を詰まらせた。た、たしかに……、その通りだ。

三鷹のギルドにいるビジョンとその結果に喜ぶビジョンは見えたが、新しいパックが売られていることは予知できなかった。つまり、俺の未来予知はそれくらい穴だらけということ。

そんなあやふやなモノに頼って四億もつぎ込むという行為の恐ろしさに、俺は今更ながら体を震わせた。

「ま、結果は残りの4パックを開けてみりゃわかるんじゃないか？」

突き放したような蓮華の物言いに、俺はごくりと喉を鳴らして残りのパックを開いていく。頼む、頼む、頼む……！

1 パック目。グール、ねこまた、シルキー。当たり。

2 パック目。オーク、シルキー、ハイポーション。やや当たり。

3 パック目。アマゾネス、ミドルポーション、ハーピー。当たり、だが……。

「恐怖で、指が震えだした。」

4パック目。これがラスト。頼む……！

シルキー！ シルキー！！ シルキー！！！！

「シルキー出すぎだろ！！ どうなってんだ！ どういう確率だよ！ ……ハッ！？ 確率……？」

恐る恐る蓮華を見る。

彼女は痛まし気に首を振り。

「……どうやら奇跡的なシルキー被りに幸運が吸われちまったようだな。……さすがにこの結果は見抜けなかった、この海の蓮華の眼を持ってしても！ ……ププツ」

「ば、バカな……！」

ぐにゃあ〜と眼前の光景が歪む。

「こ、こんな……嘘だ。運命操作の力を使って、4億円まで投資して、この結果？」

「そんな……俺はこれから運命操作の力を使って、ガンガン金を稼いでいくはずだったのに……。」

あの事件を解決して手に入れた五億円のひとつが、吹っ飛んじまった……。」

「これじゃ、メアのためにサキュバスを買う金も残ってない。」

「ああああ、なんでほぼ全額パックに突っ込んだんだ。」

「せめて二億に留めておけば……すまん、メア。すまん！」

「顔を上げる歌麿」

「……？」

頂垂れた状態から蓮華を見上げる。

彼女は、森の湖畔のように静かな眼でこちらを見下ろしていた。

「お前はこれまで奇跡的な幸運で幾度となく危機を乗り越えてきた。それは確かだ。だが、そのすべてが幸運によるものだったのか？」

アタシがお前の運命を操作した結果だと思っただろうか？ お前が全く足掻かなくても、今があったと思うか？」

「……………」

「幸運や偶然を頼りに生きるということは、運命の奴隷になるということだ。確かに時として運命の流れはお前を木の葉のように飲み込み、翻弄するだろう。だが、足掻くのをやめればただ流されるだけだ。大いなる流れに身を任せるのは、ある意味では楽で心地が良い選択なのかもな。あるいは、お前が確固たる意志を持って運命の流れに逆らわない、と決めるならば、それもまた良いだろう。それはそれで勇気のいることだからな。だが、それが本当にお前の望みなのか？」

「……………いや」

首を振り、立ち上がる。

「違う」

涙を拭って、まっすぐと蓮華を見る俺に、彼女はニヤリと笑う。

それで、気付いた。そうか、いつのまにか俺は蓮華の力に依存していたのか。力を使うのではなく、力に使われていた……。おまけに、ブレーキ役まで彼女に押し付けて……。

「運命操作の能力は、幸運の力を使って楽な流れに乗るための力じゃあない。おそらくは、過酷な激流に逆らうための力のはずだ。だから、幸運の前借りなんて言う反則が許されているんだろう」

そうして蓮華は胸元へと手を入れ。

「つーわけで、ホラよ」

「これ……！」

俺へとパツクを一つ差し出してきた。

そうか、途中で一つ抜き取っていたのか！ 後半からは、残りの個数で計算していたから気付かなかった。数えてみれば、後半のカードは57枚しかない。

「アタシの力を使うのは、構わない。運命操作を使ってパツクを引くのも、時には必要なこともあるだろう。だが、その力に溺れて生きていくのは止めておけ。その先に待つのは、運命の濁流にのみ込まれての、溺死だけだ」

「……わかった」

しっかりと頷き、パツクへと手をかける。

これが、俺が引く最後のパツクだ。これからは、それ以外の手段がない時以外は、ギルドのパツクと運命操作には頼らない。

そういう覚悟と決意を持って中身を取り出す。

一枚目――シルキー。

「いや、ちょっと待って……」

顔を伏せ、手で覆う。

一気に二枚目を捲る勇気がなくなった。

まさか、そんなことはない、よな……？

勇気を振り絞り、二枚目を捲る。――シルキー。

「ハイ!？」

思わず、引き攣った声が喉奥から漏れた。ベッドの枕へと顔を埋める。

嘘でしょ!？　こんなことつてある!？　蓮華さん!　灸をすえるにもちよつと熱すぎませんか!？

そんな俺の背中へとクスクス笑いが投げかけられる。

「落ち着けつて歌麿。ちゃんと、最後のカードを見てみるよ」

その言葉に恐る恐る顔を上げ、彼女の差し出してきたカードを見る。

そこには、身の丈以上の大盾を持って勇ましくポーズを取っている金髪の少女の姿が描かれていた。

「う……うおおおおおおッ!？」

一瞬だけ言葉に詰まり、次の瞬間には歓喜の雄たけびを上げてカードを奪い取るように手に取った。

「マジかマジかマジか……!」

目を皿のようにかっぴらいて何度もカードをマジマジと見つめる。だが、何度見ても現実是不変ならない。

そのカードの名は、アテナ。

—— Bランク最高クラスのカードだった。

第三話 美人なメイドはお嫌いですか？（後書き）

【Tips】人工魔道具と純正魔道具

魔道具には、人類が生み出した人工魔道具と、迷宮から生み出された純正魔道具の二種類が存在する。

両者の違いは、グレムリンなどの機械破壊によって破壊されるか否かである。

人工魔道具は、その多くがマイクロチップ等の機械によって制御されているため、機械破壊によってその機能を破壊されてしまうが、純正魔道具はどれほど複雑な構造であっても機械破壊で破壊されることはない。

ただし、人工魔道具であっても純正魔道具をただ加工しただけの魔道具は、機械破壊によって破壊されることはない（例：ポーション系の魔道具など）。

第三話 美人なメイドはお嫌いですか？

一時の興奮が収まってくると、最初は気付かなかった細かいところが気になってくるものだ。

すなわち、「なぜBランク最高峰のカードがギルドのパックに？」である。

瑕疵の無いアテナの一般的な相場は、90億から95億ほど。

これは世界中の冒険者から最高レベルの評価を下されていることを意味するが、単純な戦闘力だけならばアテナより強いカードはいくらでも存在する。

それでもそれらのカードの大半は、アテナよりもずっと低い価格で取引されている。

では、なぜアテナはそんなに評価されているのか。

その理由は、彼女が持つ先天スキル『アイギスの護り』にある。現在判明している『アイギスの護り』の能力は以下の通り。

アイギスの護り：ありとあらゆる邪悪や災厄を払う魔除けの盾、アイギスを使用可能。一定時間、自身と仲間たちへ絶対防御を付与し、敵へと石化の呪いをカウンターする。クールタイムは必要だが回数制限無し。また、ゼウスのアイギスと異なり雷雲を操る権能は無い代わりに都市の守護神であるアテナの能力故か、疑似的な安全地帯を作成可能。一日一回、十二時間持続。

前者の能力も凄まじいが、より重要なのは後者の能力だ。そう、このスキルは、世界でも有数の『安全地帯を作成できる』能力なのだ。

現在、世界中のAランク迷宮は、迷宮登場当時の混乱と無知により、そのほとんどが安全地帯を消滅させてしまっている。

カードの効果が未だわからず、現代兵器だけで戦っていた頃。軍は、迷宮入り口付近にはモンスターが侵入しないという習性を利用して、入口付近に防御陣地を作成し、モンスターを誘引して始末するという手法を取っていた。

安全地帯は入口付近だけではなく、各階層の前と階層内にランダムにも少数点在しており、それらは内部からモンスターに攻撃することで消滅してしまう。消滅した安全地帯は、その迷宮を踏破するまで復活することはない。

……この事実が判明したのは、第一次アングルモア以降、Bランク以下の迷宮が現れてからのことで、慌てて安全地帯での戦闘行為を禁止したが、時すでに遅し。その時点で未発見だった極少数の迷宮以外、ほぼすべてのAランク迷宮の安全地帯は失われてしまっていた。

だが、これを愚かだと馬鹿にする権利は誰にもないだろう。

こうして、ただでさえ困難なAランク迷宮の難易度を上げてしまった人類だったが、それでもAランク迷宮の攻略を諦めることはなかった。

迷宮消滅の鍵。それが眠る可能性が最も高いのは、最初に地球上に現れたAランク迷宮にあると各国は考えたからだ。

だが、安全地帯の有り無しは、迷宮の攻略難易度に大きく影響する。なぜなら、安全地帯がなければ転移すらもろくに出来ないのだから。

そこで各国は、なんとか消滅した安全地帯を復活させる方法はないか、あるいは安全地帯の代わりとなる物を作り出せないかを研究し始め、そうして見つけ出したのがアテナのような疑似的な安全地帯を作成する能力だった。

疑似的な、と付くのはこの能力で作成される安全地帯が不完全なモノだからだ。

まず、基本的にこの能力で作りに出された安全地帯は転移先として指定できない。

疑似安全地帯から正規の安全地帯に転移することができるが、その逆は出来ない。

それではあまり意味がないと思われるかもしれないが、実は裏道がある。

正規の安全地帯が消滅している場合に限り、安全地帯があつた箇所に疑似安全地帯を作ることでもそこを転移先に指名することができるのだ。

これは、安全地帯と転移先の座標は厳密には別物で、転移には両方の要素が必要なのだ……というのが有力な意見だが、実際のところはどうかかわからない。

ただ、入口と階段前以外の安全地帯は転移先のポイントとして使できないケースも多いため、これはなかなか信憑性のある説だった。

少し話がズレたが、要はアテナなどのカードはAランク迷宮の攻略に欠かせないということだ。

そのため、稀にアテナが市場に出回った時も軍やトップランカーの冒険者によってかっさらわれていく。

決して一千万のパックに入っていて良い存在ではないのだ。

それを踏まえた上で、スマホのアプリ図鑑片手に、このアテナの

カードをじっくりと見てみる。

【種族】アテナ

【戦闘力】950

【先天技能】

・都市と英雄の守護女神：知恵と戦と工芸を司る神であるアテナの権能を使用可能。

・アイギスの護り：ありとあらゆる邪悪や災厄を払う魔除けの盾、アイギスを使用可能。一定時間、自身と仲間たちへ絶対防御を付与し、敵へと石化の呪いをカウンターする。ゼウスのアイギスと異なり雷雲を操る権能は無い代わりに都市の守護神であるアテナの能力故か、疑似的な安全地帯を作成可能。

・英雄への加護：数々の英雄たちを導いてきたアテナの加護。対象に様々な恩恵を与え、さらには自身のスキルを限定的に貸与できる。

・来たれ、勝利の女神よ：従属神であるニケを召喚可能。一日一回、一柱のみ。

・高等魔法使い：高度な魔法をすべて使用可能。

【後天技能】

・純潔の誓い：生涯純潔であることを誓っている。男性からの攻撃・状態異常に耐性を持つ。純潔を失うとロスト。復活後はマイナススキルへ変化。

・神のプライド：高位の神格としての誇りと傲慢さを持つ。相手を認めぬ限り、人間であるマスターの言うことはまず聞かない。自由行動に対する極大のプラス補正。

・幼体：何らかの理由から心身ともに幼くなっている。常時、ステータスが大きく減少。いくつかのスキルが使用不可。

・臆病：戦闘を極めて忌避する。戦闘時、ステータスが大きく減少。

まず目を引くのが、かつてはユウキも持っていた臆病のスキルだ。これは、戦闘時にステータスが半減してしまう上に、精神的なモノから実質戦闘ができなくなってしまう、最悪のマイナススキルだ。ネット上でカードやスキルを勝手に評価しているサイトでは、臆病のスキルはマイナススキルランクで一番上から二番目のAランクとなっている。

ちなみにこのサイトにおけるAランクの定義は、『実質的な戦力外通告。カードの価値を大きく損なうレベル』となっている。

実際、初期のユウキの臆病っぷりにさんざん悩まされた俺から見ても、この評価は妥当なモノだ。

だが、その臆病スキルも所詮はAランク。上にはさらに『うんこっこ』ランクが存在する。

このサイトにおける、ウンコッコランクの定義は『カードの価値をうんこっこにしてしまう恐怖のスキル。その効果は、もはやうんこっことしか表現のしようがない。トレードなどで騙されてこのスキルを持つカードを掴まされた場合は、相手をぶっ殺しても許されるレベル。』というか、殺した』となっている。

……サイトの管理人の激しい怒りが伝わってくる文章だ。

この幼体スキルは、そのウンコッコランクに認定されているマイナススキルの頂点だ。

このスキルを持つカードは、座敷童のように子供の姿で登場する種族ではないにもかかわらず、子供の姿で現れる。

それだけならばむしろ大歓迎！ という層もいるだろうが、問題は『常時、ステータスが大きく減少。いくつかのスキルが使用不可』という効果だ。

スキルの効果は基本的に重複するため、アテナは戦闘時にステ-

タスが四分の一になってしまふ計算となる。

戦闘力の評価は、ステータスの数値だけに依存するものではないことが研究により判明しているが、ステータスの半減は戦闘力の半減とほぼ同義だ。

つまり、戦闘時のアテナの実際の戦闘力は、250以下ということになる。

これは、Cランクでも最低レベルの戦闘力、初期の蓮華以下だ。本来ならばBランク最高クラスの戦闘力だったことを考えると、あまりに寂しい数値である。

とはいえ、アテナに関しては戦闘力の低下自体は、カードを手放すほどの問題とはならない。

アテナの価値のほとんどはアイギスのスキルによるモノだし、彼女には眷属召喚の能力があるからだ。

彼女が呼び出すことのできる二ケの能力は以下の通り。

【種族】ニケ

【戦闘力】1200

【先天技能】

- ・ 勝利の翼：勝利の女神であるニケの権能を使用可能。
- ・ 月桂樹の冠：ニケが戦いの勝者へと与える栄光の証。対象のステータスを二倍にし、状態異常を一時無効化、汎用スキルを一つラックアップさせる。高等補助魔法を内包。
- ・ 勝利を捧げよ：戦死した英霊の駆る戦車隊を召喚する。無限召喚型。戦車の戦闘力は、戦闘力300相当。
- ・ 高等攻撃魔法

【後天技能】

- ・ 高位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。高位眷属体はオリジナルと遜色ない自

我と初期戦闘力の1.5倍の戦闘力を持つ。

眷属体故に後天技能を持たないとはいえ、Bランクの戦闘力を持ち、自分自身も眷属召喚のスキルを持つ。アテナじゃなく、二ヶを引いていたとしても歓喜していた性能だ。

十分に、アテナの弱体化を補うことができる。

つまり、問題になるのは、幼体化の後半の記述。いくつかのスキルが使用不可という効果の方だ。

おそらく、このアテナはアイギスが使えない。もしかしたら、二ヶの召喚も……。

そうでなければ、パックに入れられて投げ売りされるわけがないのだ。

だが、アテナレベルともなるとみんなマイナススキルの解消をするためにいろいろと努力するはず……。

そう思い、調べてみたところ。

「……なるほど、この幼体化スキル、消すための方法が見つからないのか」

かつての零落スキルと同じだ。臆病スキルのようにプラスの熟練度を積むことで解除・昇華できるスキルではなく、何らかの条件を満たすことで変化するスキル。

霊格再帰のように化ける可能性もあるが、その方法がわからない。うちは呪いと変わらない。

うーん、アテナに関する評価は未定だな。

実際に使ってみないことには判断がつかない。

少なくとも二ヶの召喚ができるようなら使う価値はあるだろう。

仮にそれが駄目でも、何億かでは売れるはずだ。

ウチに来たからには、なんとか使い物にしてやりたいところだが……。
俺はそう考えながらカードの整理をするのだった。

【種族】デユラハン

【戦闘力】400

【先天技能】

- ・産声は死の始まり：死を告げる妖精による、死の宣告。対象に対し、生命力を吸収する呪いを掛けることができる。
- ・亡者にも鎧：中等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターへと憑依することで、自身の戦闘力の半分を加算させることができ、また自身の後天スキルを共有する（マスターへの装備化の場合はすべての戦闘力とスキルを共有できる）。

- ・静寂の馬車：首なしの黒い馬が引く4頭立ての馬車、コシユタ・パワーを召喚する。コシユタ・パワーはカードには存在しないが、Dランク程度の戦闘力を有する。気配遮断、透明化の能力を持つが、水場を渡れないという欠点を持つ。

【後天技能】

- ・運動音痴：戦闘力のわりに妙に動きがとろい。行動全般にマイナス補正。

- ・ドジ：たまに信じられないようなミスを犯す。たとえ美少女でも何度も繰り返し返されると殺意が湧くレベルのドジ。行動時、ランダムで極めて強いマイナス補正。

- ・不屈の精神：どんな失敗や逆境にもめげない鋼の精神を持つ。やや学習しない傾向アリ。精神異常に対する耐性。逆境時、行動に強いプラス補正。

- ・剣術：刀剣の扱いに特化した武術スキル。武術スキルと効果重複。特定行動時、行動に強いプラス補正。

・総評

日本ではアンデッド系モンスターのイメージが強いが、実際は妖精の一種。

マイナススキルはあるが、運用に著しく支障が生じるほどではない。ギリギリ及第点。一度は俺が装備してダークスレイヴを使って戦うことも考えたが、マイナススキルを見て断念した。

当初の想定通り、イライザと同時に運用して戦力の底上げを狙うべきだろう。彼女の技能の技術と精密動作のスキルで運動音痴とドジのスキルをどれだけ相殺できるか……。

何気に眷属召喚のスキルを持つが、戦力と言う意味では期待できない。敵との遭遇を避けて迷宮を進むという意味では最適か。……ドジのスキルがやや怖いところではあるが。

【種族】フェニア

【戦闘力】180

【先天技能】

・二体一对：このカードは半身と呼べるカードと二枚で一つである。二枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力を二枚で共有する。

・グロツティの歌：休みも与えられず酷使され続けた女奴隷たちの呪いの歌。グロツティという願うモノをなんでも生み出す石臼を召喚する。グロツティは二個一对の石臼であり、姉妹であり半身の「メニア」と同時召喚でなくては使用ができない。連続使用により彼女たちを酷使した場合、『海王ミュージングの軍勢』が召喚され、フェニアとメニアを攫っていつてしまう。

・巨大化：巨人族の血を引いている。一時的に巨大化し、生命力と筋力を倍増させることができるが、巨大化中は知能と状態異常への耐性が低下する。

【後天技能】

- ・従順
- ・性技

・総評

珍しい二体一対型のカード。グロツティは、食料から幸運や平和と言った概念的なモノまで生み出すことができ、迷宮内での食料自給から敵避け、戦闘中の幸運まで汎用性が高い。その一方で酷使するとカードをロストする可能性がある。『海王ミュージーシングの軍勢』はマスターを傷つけはしないが、召喚中のカード自体は普通に襲ってくるらしい。

面白いカードなので、いつかメニアを手に入れて使ってみたいところ。

【種族】シルキー

【戦闘力】 120

【先天技能】

・中級家妖精：人間の代わりに家事をしてくれる妖精。……が、迷宮内では家などないためいまいち使いどころは不明。メイド、高等家事魔法を内包。

（メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包）

（高等家事魔法：高度な家事魔法を習得している。家事魔法は攻撃能力を持たないが、家の中でできることに不可能はない）

・使用人召喚：Eランクモンスター・ブラウニーを召喚する。無限召喚型。

- ・中等状態異常魔法

【後天技能】

・メイドマスター：メイドに必要な技能を必要以上に極めている。明らかにメイドに必要な技能も極めている。メイドスキルの効果極大向上。パーティー内のメイドスキルを持つ者の行動にプラス補正。メイド、下級収納、秘書、教導、演奏、舞踏、武術、精密動作、庇うスキルを内包する。

（下級収納：物を収納できる内部空間を持つ。下級は押し入れ程度の広さ）

（秘書：マスターの様々な行動をサポートできる。特に戦闘の役には立つわけではないが、一度試すともう欠かせない）

（教導：自身が持つスキルを他者へと教え導くことができる）

・従順

・諫死：マスターに対し強く失望した際、死んでマスターを諫めようとしてくる。

【種族】ブラウニー

【戦闘力】56

【先天技能】

・下級家妖精：人間の代わりに家事をしてくれる妖精。……が、迷宮内では家などないためいまいち使いどころは不明。みすぼらしい格好をしているが、衣服を与えるとロストしてしまうので注意。初等家事魔法を使用可能。

・初等状態異常魔法

【後天技能】

・下位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。下位眷属体は自我を持たず、オリジナルの初期戦闘力の8割ほどの力しか持たない。

・総評

シルキーは複数枚出たため、その中で最も優秀なカードを抜粋して紹介。

注目すべきはメイドマスターのスキル。ちょっとおかしいくらい大量のスキルを内包している。マスターとつくスキルは凄いと聞いたことがあるが、イライザの持つスキルのほとんどを内包しているとは……。

普通、これだけの後天スキルを持つカードは売られたりはしないのだが、パックに入っていた理由はおそらくこの諫死のスキルによるものだろう。自ら死のうとするスキルは、ちょっとカードとして致命的ではある。しかも条件が曖昧すぎる。

イライザの指導役として使っていきたいところだが、このシルキーに失望されることのないよう気を張り続ける必要があるようだ。なお残りのシルキーは、ドジや忘れん坊、面従腹背、メシマズ、怠け者などなど、メイドとしてちよつと問題のあるスキル持ちばかりであった。

ただイラストを見た限り、容姿は十人十色でバリエーション豊かな美人ばかりだったので、いつかメイド隊を召喚してみたいと思う。

その他のカードの紹介は、使う機会があれば。

第三話 美人なメイドはお嫌いですか？（後書き）

【Tips】二体一対スキル

一枠で二枚のカードを召喚可能となるスキル。召喚されたカードは、生命力が共有され、二体分のダメージを喰らわない限りロストしない。反面、一体に二体分のダメージが入ると二枚ともロストしてしまうこともある。

二体一対型スキルを持つカードは、二枚揃った時にのみ使用可能となるスキルを持つことが多く、その性能はワンランク上のカードのスキルにも勝るとも劣らない。

上位スキルの存在も確認されている。

第四話　ギリシャ系の神はヤベー奴しかいないという風評被害（事実）

夏休み、二日目。早朝。

強めの雨が地面を叩く中、俺は一人迷宮へとやって来ていた。

目的はもちろん、昨日手に入れたカードを試してみるためである。

今回来たのは、高尾駅にある熱帯林のDランク迷宮だ。

秋や冬は、そこそこ賑わう熱帯林の迷宮も、ただでさえ暑くてジトジトしている夏の時期は、滅法人気がない。

この暑い夏、せつかくなら海や涼しい山の迷宮に潜りたいと思うのが人情である。

そんな中、なんで俺がわざわざ人気のない迷宮に来たのかというと、アテナという超高級カードをあまり人目に触れさせたくなかったからだ。

いずれ世間にお披露目することもあるだろうが、事件の影響で世間の注目が集まっている今は、あまり悪目立ちしたくない。

迷宮に入り、一応周囲に他に人がいないのを確認した上で、俺は昨日手に入れたカードをカードホルダーから取り出した。

まずは、何と言ってもこのカードからだ。

「来い！　アテナ！」

まばゆい光と共に、白を基調とした鎧と金色の大盾を身に纏った少女が姿を現した。

歳の頃は、十歳をちょっと超えたくらいだろうか。黄金のように輝く波打つ髪は、お尻に届くほど長い。瞳は角度によって青色にも灰色にも見える不思議な輝きを宿しており、その顔立ちは幼げなが

らもすでに美しいと言って良い完成度だった。

彼女は最初キョロキョロと周囲を見渡し、やがて俺の顔を見るとその端正な顔を引きつらせ。

「ヒイ！？ 男ッ！？ お、犯される！」

「そんなことするかッ！」

バツとしゃがみこんで、身の丈ほどもある大盾に隠れる少女に、俺は激しくツツコんだ。

このガキ、なんて人聞きの悪いことを！ 俺は慌てて周囲を窺った。

良かった。誰もいない。念のために人気のない迷宮を選んでおいて助かった。ただでさえ蓮華のせいでロリコン疑惑をかけられつつあるのに、こんなところ見られていたら人生詰むところだった。

ホツと胸を撫でおろしていると、アテナが恐る恐る盾から顔を覗かせる。

「……た、確かに貴方は未だ清い身のようにですね」

さすがはギリシャの三大処女神というべきか、俺を一目見て童貞と見抜いたようだった。

大盾から姿を現して、偉そうに胸を張り俺を指さして告げる。

「この墮落した時代に純潔を保つとは感心です。そのまま一生、女を知らずに生きるように。良いですね？」

「いや、さすがに一生童貞はごめんなんだが……」

俺がそう言うとアテナは「騙された！？」という顔をし。

「ヒイッ！？ や、やはり妾^{わらわ}を手籠めにするつもりで呼び出したの

ですね！？ ニケ！ ニーケー！ 助けて！ 犯される！」

アテナの半泣きの助けを呼ぶ声に、光の柱が天より降り注ぎ、そこから二十歳ほどの金髪をショートボブにした美女が姿を現した。その背中には立派な白い翼が生えており、古代ギリシャ風の布の薄いドレスからは豊満な身体のラインが透けている。

……これが、ニケか。どうやら、眷属召喚は普通に使えるようだ。

「アテナ様、お呼びですか？」

「助けてください、ニケ！ この男に犯されそうなのです！」

「だからそんなことしねーって！」

「あらあら」

俺の抗議を他所に、ニケは母性溢れる笑みを浮かべて縋りつくアテナの頭を撫でる。

「よしよし、大丈夫ですよ。このニケがついていますからね」

「頼みましたよ、あなただけが頼りです、ニケ！」

「ああ……！ あのアテナ様がこんな風に私に縋りついてくる日が来るなんて……ハアハア」

頬を紅潮させて恍惚の表情でアテナの頭を撫でるニケ。やや怪訝そうな顔で見上げるアテナ。

あれ？ ちょっとこっちもおかしいかも？

ニケがアテナの小さな頭を撫でながら、こちらへと向き直る。

「さて、主の主様。どうか非力なアテナ様を組み伏せ、獣のように荒々しく蹂躪し、幼い秘部に白濁液を注ぎ込むのはちょっと待っていただけませんか？」

「ヒイツ！？」

「言い方アツ!!」

なんだその官能小説に出てきそうな表現は!?

俺が全身全霊でツッコむと、ニケはニッコリと微笑み、頷く。

「もちろん、主の主様のお気持ちはわかってます」

「いや、絶対わかってないと思う」

「確かに、アテナ様のおびえる顔を見ると嗜虐心が刺激されます。

この幼く整った顔立ちに全力で拳を叩き込み、前歯が全部無くなるくらいボロボロにしてやりたいという気持ちは、私にもよくわかりますとも」

「ほらあ! やっぱりわかってない! てかコイツ、ヤベーぞ!

こつちに来い、アテナ!」

「は、ハハハハ、ハイ!」

顔を青ざめさせたアテナが、慌ててニケから離れて俺の背に隠れる。

俺は彼女を、猟奇系サイコレズ女から庇いつつ、問いかけた。

「何!? ニケって普段からあんなにヤベー奴なの!？」

「そんなわけないでしょう!? 彼女にあんな一面があったなんて妾も初めて知りましたよ! というか知ってたら絶対呼びません!」
「確かに!」

そんな俺たちを見て、ニケは朗らかに笑う。

「ふふふ、そんなに怯えないください。実際にする気は欠片もないですから」

「本当か……?」

「ええ。だって、そんなのもったいないでしょう? たった一つの

実物を見て、無数の妄想を楽しむのが通のやり方ですから」

「そ、そうか……」

「微妙に安心できない答えなのですが……」

実行は否定しても内心では自らをポッコポコにしていることを否定されなかったアテナが、不安そうに顔をしょぼくれさせる。

「というわけで、主の主様もどうか実際に手を出すのはお待ちください。アテナ様は終生純潔を誓ったお方。もし純潔を失えばその代償としてロストしてしまうでしょう」

「うん、だから最初からそのつもりはないんだって……」

「ですのでどうしてもしたくなったらロストを免れない瀕死状態の時にすることをお勧めします。それならどうせ結果は変わりませんからね」

「ヒイ!?!」

「話聞いている!?　しないって言ってただけど!?!」

さてはコイツ、言葉は通じてても話は通じないタイプか!?

ニケは恭しく頭を下げ、言う。

「もしもどうしても情欲が抑えきれなくなりましたら、アテナ様にぶつけるより前にアタシに言ってください。このニケが身代わりとなりましょう」

「……ほ、ほほう」

……そうなってくると話が変わってくるな。なかなか話が通じることがないか。

「落ち着け、アホ!」

そこでパシンと頭を軽く叩かれた。
見るといつのまにか勝手に出てきていた蓮華が呆れたような顔でこちらを見ていた。

「お前、本当にその手の誘惑に弱いな……」
「う……」

だって、オラは童貞だから……。女体に興味津々なお年頃だから……。
そんな俺たちを、アテナとニケが真剣な顔で見っていた。

「……アテナ様」
「ええ……完全に枷が外れているようですね」

今のやり取りを見て、蓮華のプロテクトが外れていることに気付いたようだ。
まあ普通のカードにマスターの頭を叩くなんて真似はできないからな。

「で、どうなんだ、コイツラは。使い物になりそーなのか？」
「ん、そうだな。最低ラインは超えてそうだが。アテナ」
「……なんですか？」

蓮華の方を警戒しながらアテナが答える。

「カードの方には幼体のスキルが載ってたが、具体的にはどのスキルが使えないんだ？」
「む……」

アテナは一瞬口籠ったが、すぐに諦めたように嘆息すると。

「……仕方ありませんか。お察しの通り、妾は、代名詞たるアイギスを使うことができません。また、英雄に加護を与えることも、魔法も使うこともできないようです」

つまり、実質的に彼女は戦う術を持たないということか。考え込む俺を見て、ニケが一步前が出る。

「戦いであればこのニケがおりますのでご安心ください。むしろロストの危険がないという意味では通常のカードよりも使い勝手が良いかと」

「ああ……大丈夫だ。別に売り払おうとかは考えてない」

俺がそう言うと、ニケはホツとしたようだった。

……売られずに済んだことを安心したということは、少なくとも俺の元は悪くないと考えたということなのだろう。

あるいはこのアテナが「蘇生用のカード」になる可能性を嫌ったか。

まあアテナをロストする状況なんて考えられないが。どのマスターも最優先で保護するはずだからな。

「手持ちに加えるってことで決めたってことは、他の奴らも紹介したらどーだ？ ……さっきから何か言いたくてうずうずしてる奴がいそうだが」

「ああ、そうだな」

俺は他のカードたちを呼び出した。メンバーは、イライザ、ユウキ、メア、鈴鹿の四名だ。ドラंक迷宮の召喚枠は6枚なので、申し訳ないがドラゴネットには今回は、というか今回も遠慮してもらった。

……ドラゴネットはどうにも影が薄いというか、こういう時にババを引いてもらうことが多い気がする。

後で何らかの形でねぎらってやりたいところだ。

「もおおおお！ やっと出れたー！」

召喚されるなり真っ先にそう言ったのは、案の定メアだった。

「なんで蓮華ばっか自由に出入りできるの！？ 迷宮の外でもいつもマスターと一緒になんでしょ！？ ズルいズルいズルい！」

「うるせえな、しょうがねえだろ？ 羨ましいならお前も歌麿にプロテクト外してもらえや」

蓮華がそう言うつとメアの矛先は当然こちらにも向いた。

「そう！ マスター、そろそろ蓮華以外のカードともパーフェクトリンクしてよお。っていうか、コイツらはどういうこと！？ かなり高いカードなんじゃないの？ メアのランクアップはどうなったの！？」

「待て待て、まずは落ち着け。ほら、パウンドケーキをお食べ」

詰め寄るメアの口の上のコンビニで買ったパウンドケーキを突っ込むと彼女は大人しくそれを食べ始めた。

うむ、口に物が入っている間はしゃべらないように躡けた甲斐があったな。

「まずアテナはギルドのパックで当たったカードだ。だから買うよりもずつと安く手に入ってる。ニケは彼女が召喚した眷属だ。メアのランクアップ先のカードについては外の札商に頼んで探してもらってる」

……ただ見つかったとしてもそれを買う金はもう使っちゃったんだけど。

内心でそう呟いてると蓮華がジト目をしているのが見えた。

な、なんとか金策はするんでメアには何卒内密に……。

はあ、と小さくため息を吐いて蓮華が視線を逸らす。

「それと、パーフェクトリンクについてはどう頑張っても蓮華以外のカードだとフルシンクロ（99%）までしかできないんだからしょうがねえだろ？　むしろ、なんで蓮華だけできたのか俺が知りたい」

「むぐむぐ……ごくん。はあ……しょうがないか。ねえ、本当にリンクアップのことよろしくね？　このままじゃ本当に戦力外になっちゃうよ……」

「ああ……必ずリンクアップさせてやるから待ってる」

俺は罪悪感を刺激されつつ、メアと指切りをした。

そこへ少し離れたところで見ていたアテナがやってきた。

「……もし、そのパーフェクトリンクとはなんですか？　それがあの座敷童の枷が外れている理由なのですか？」

「ん？　ああ、パーフェクトリンクって俺たちが勝手に呼んでいるシンクロ率を100%にするリンクだ。これを使った結果、蓮華は迷宮の外でも召喚できるようになったんだ」

「リンクとは、確か人間たちが呼ぶカードとマスターの繋がりを利用する技術でしたね？　カードと完全に魂を重ね合わせるとは……何と無茶な真似を」

「ん？　もしかしてパーフェクトリンクってヤバイの？」

メアがそう問いかけると、アテナは何やらニケと二人で話してい

る蓮華を睨みつつ答えた。

「当たり前です。人間とカードでは魂の格が違います。人間にもわかりやすいように例えるならば、人間とカードでは浸透圧が違うのです。半透膜を挟んで2種類の濃度の液体が接するとどうなりますか？」

「……濃度の低い溶液から濃度の高い溶液へと溶媒が移動しようとする」

「カードの魂に満ちるのは、海水。人間の魂に満ちるのは、真水なのですよ」

……なるほど、これがパーフェクトリンクを使用した時に副作用が起こる理由か。

「うーん？ メアにはよくわかんないけど、パーフェクトリンクは使わない方が良かったこと？」

「ええ。枷を外す方法を持っているなら外してもらいたいと思ってましたが、こんな荒業を使っていたとは……これでは諦めるしかありませんね。しかしあの座敷童、あんな親し気な態度を取っておきながらこんなことをしているとは……とんだ曲者です」

「いや、蓮華はちゃんとパーフェクトリンクを使うなと忠告してくれてるよ」

俺は大切な相棒の名誉のためにもそう説明したが、アテナは首を振って否定した。

「最初の一回をやったこと自体が問題なのです。まともなカードなら絶対にしないし、できない。ましてや善神の類ならば尚のこと。

……良いでしょう。これも縁です。よく見れば少しながら英雄の相を得つつある様子。この英雄の守護神たるアテナが貴方を護ってや

るとしましよっ」

「あ、ああ……どうしてそうなったのかはよくわからんが、よろしく頼む」

「ついでには毎日三回祈りを捧げ、神殿を建てて供物を捧げるように。ああ、それから一生童貞でいること。わかりましたね？」

「それは断る」

「ッ！？ な、なぜ……？」

こうして、俺の仲間にビビリ幼女神のアテナと、クレイジーサイコレズのニケが加わったのであった。

第四話 ギリシャ系の神はヤペー奴しかいないという風評被害（
事実）（後書き）

【Tips】安全地帯作成スキル

本来迷宮の限られた場所にしか存在しないはずの安全地帯を作り出すことができる、世界有数のレアスキル。本来はちよつと便利程度の能力のはずなのだが、人類の無知によりAランク迷宮の安全地帯が消滅してしまった今、その価値が非常に高騰してしまっている。

このスキルで生み出された疑似安全地帯は、転移先の対象とはならないが、これはそもそも安全地帯と転移先の座標が厳密には別物であるためである。

第四話 ギリシヤ系の神はヤペー奴しかいないという風評被害)
事実)
(前書き)

・登場人物紹介

一条 かおり：マロのクラスの子ナンバー2。周りからは四之宮さんと対立していると言われているが、実は普通に仲良し。男子からは裏で、闇落ちした人造○間18号と呼ばれている。

第四話 ギリシャ系の神はヤペー奴しかいないという風評被害（事実）

熱帯林の木の根で凸凹とした道を、一台の馬車が駆け抜ける。

四体の首なし馬が牽く漆黒の馬車は、霊柩車を連想させる不吉な佇まいで、車輪からは青白い鬼火が立ち上っていた。

ふいに、馬車の前方に一匹のオークが姿を現す。

キョロキョロと辺りを見回す豚頭の大男は、猛スピードで迫りくる馬車に気付くこともなく、馬車と衝突。弾き飛ばされ地面に転がったところを踏みつぶされ、肉塊へと姿を変えた。

俺はそんな憐れなオークの姿を馬車の窓から見て、感心する。

「へえ、思ってたより乗り心地が良いな、これ。凸凹な地面でも振動もないし」

「ですね。敵にも見つからないですし、ぶつかっても衝撃一つ無いですし」

ユウキが頷く。

ちなみに振動がないのは、この馬車コシユタ・パワーが十数センチほどだが宙を飛んでいるためだ。

大きな穴や崖を飛び越えられるほどではないが、地形にあまり左右されず、踏むことで作動してしまうトラップを避けることができる。

また、透明化と気配遮断のスキルを持つため余計な敵と戦わずに済むことも有難かった。

欠点は川や湖といった水辺を渡ることができないことだが、その時は迂回や他の方法を取ればよいだけだ。

装備化のスキルにはかり注目していたが、このコンピュータ・パワーのスキルもなかなかだ。さすがデュラハン、プロクラスの必需品と言われるだけのことはある。

「で、どうだ。装備化の感覚は？」

「イエス、マスター……少しだけ身体の反応が遅れますが、問題ありません」

俺の問いかけに答えたのは、馭者席に座る漆黒の女騎士だった。

身に纏う鎧は女物の流麗なラインを描いており、顔の上半分を覆う兜からは艶やかな金髪が流れ出ている。

露出している部分は、全身の内顔の下半分だけだというのに、黒い鎧と白い肌のコントラストと浮かび上がるような紅い唇が、妙に艶めかしい。

お、おかしいな……。

アンナのエルフがデュラハンを装備した時は、清楚な女騎士と言った感じだったはずなのだが、イライザさんが装備した時のこの禍々しさと漂う色気は一体……。

デュラハンを身に纏うイライザさんの雰囲気は、完全に暗黒騎士と言った感じであった。

「……ま、問題なくて良かったよ。あんまりにも運動音痴やドジのスキルが足を引っ張るようならマイナススキルの無いリビングアーマーに切り替えることも考えてたから」

俺がそう言った瞬間。

「え〜！？ 酷いですよう、マスター！ ちゃんとアタシを使ってください！ ……勝手に喋らないでください」

イライザから今まで聞いたことのないような甘えた声が聞こえてきて俺たちはギョツと目を見開いた。が、すぐに気付く。

今のは、イライザじゃなく、彼女に憑依したデュラハンの発言か。

「失礼しました。マスター。……今のはデュラハンの発言ですので」「あ、ああ、わかってる」

誤解されなくなかったのか、わざわざそう説明してくるイライザに俺は苦笑した。

この元グーラーのヴァンパイアにも、「自分のキャラが崩れるのが嫌だ」という気持ちがあるんだなあ、と俺は微笑ましく思った。

それは他のメンバーも同じようで、蓮華、ユウキ、メアも温かい目をしていた。

「イライザ先輩はアタシよりも上手く身体を使ってくれますし、このまま先輩に使い続けて貰えれば、運動音痴でドジなアタシもクルでカッコ良い大人の女になれると思うんですよね〜！……デュラハン。あつ、ごめんなさい！」

一人芝居をしているように見えるイライザはなんだか滑稽で、悪いとは思いつつ俺たちは含み笑いをしてしまった。

それが気に障ったのか、珍しくイライザから微かに怒りのオーラが伝わってくる。

すると……。

「――イライザさん、淑女たるものそう簡単に感情を乱してはいけませんよ」

イライザの隣に腰かけていた二十代後半ほどの女性が、厳しい声で言った。

赤銅色の髪をシニヨンにして纏めた、メイド服を身に纏った美人……メイドマスターのシルキーだ。

「申し訳ありませんでした」

ペコリと頭を下げるイライザに鷹揚に頷くシルキー。

「淑女たる者、常に冷静で瀟洒でなくては。私が責任をもって貴女を淑女の中の淑女……メイドマスターにしてあげましょう」

「よろしく願います、先生」

その光景に、俺たちは「うーん」と顔を見合わせた。

出会ったばかりなのに、随分と仲良くなったもんだ。

メイドマスターのシルキーの多彩なスキルを教導してもらおうべくイライザと引き合わせてみたのだが、両者は何やら感じ入るものがあったようで、師弟の契りを結んでしまったのである。

メイドマスターのスキルはともかく、諫死のスキルだけは教導して欲しくないのだが……。

とイライザの行く末を案じていると……。

「あ、イライザさん。次の曲道、左です。右は結構な数の敵の反応があります」

「了解しました」

スマホのマップを見ていたユウキが言う。

我がパーティーで最大の索敵範囲を持つ彼女には、道案内も任せていた。

……ふっ、また俺のパーティー内での役割が無くなってきたな。リンクという重要な役割はあるが、今は使っていないしな。

なお、今リンクを使っていないのは新入りのシルキーを省いて会

話しないように、という気遣いからである。

今の俺ならシルキーとも簡単にリンクを繋げるが、好感度を稼いでいない状態でのリンクはカードに不快感を与えるからな……。

「……ん？ あれ、イライザさん、なんか敵の方に近づいているみたいですけど」

再びスマホに視線を落としたユウキが、頭を上げて不思議そうにイライザを見た。

「……申し訳ございません、マスター。どうやら右と左を間違えてしまったようです」

『ええっ？』

イライザから一生出てくるとは思ってもいなかったセリフに、ポカンと呆気にとられる俺たち。

「……どうやらデュラハンのドジスキルのせいようです。酷いです、イライザ先輩！ 人のせいにしないでください！」
「いや、確実にお前のせいだろ」

蓮華が呆れたようにツツコむと、皆うんうんと頷いた。

まさか、イライザが右と左を間違えるミスを犯す日が来るとは……。ドジスキル、恐るべし。

戦闘中じゃなかったから良いものの、勝つか負けるかの瀬戸際でドジスキルを発動されたらと思うとゾツとするな……。

少なくともドジスキルを消すまでは、拮抗した戦いではデュラハンを使わない方が良くかもしれない。

そんなことを考えていると……。

「これは一刻も早くメイドスキルを習得させる必要がありますね……」
「ん？ ねえねえおばさん、どうしてイライザのドジとメイドスキルが関係あるの？」

メアのおばさん発言にシルキーは一瞬ピクリと眉を動かしたが、特に何も言うことはなく、質問に答えた。

「私のメイドマスターのスキルには、他のメイドスキル持ちの失敗を打ち消す能力もありますので、マスター」

が、やはりイラツとしたのか、シルキーはメアにはなく俺に答えるという形で露骨にメアを無視した。

淑女たる者、簡単に感情を乱してはならないとは一体なんだったのか……。

「そ、そうだったのか、そんなことアプリには書いてなかったけどな」

「第一に、メイドマスターのスキルを持つカードが一枚あれば他にメイドスキルを持つ者を呼ぶ必要もないので、これまで気付かなかったのでしよう。第二に、無かったことになった失敗に気付くことは、難しいものです。メイドマスターを持つほどの者が、わざわざ自分の功績を主に誇ることもないですしね」

「な、なるほど……」

確かに、起こらなかつた事に気付くのは難しいか。しかも打ち消した本人が自分の功を誇らないタイプともなれば、気付くのは絶対に不可能だな。

このメイドマスターに関する新情報については、あとでギルドに報告しておくでしょう。いくらかの謝礼と社会貢献点が貰えるかも

しれん。隠すほどの情報でもないしな。

「会敵、間近です。さすがにコシユタ・パワーだけで倒すのは厳しい数ですけど、どうしますか、マスター」

ユウキの問う「どうしますか」というのは、戦うのか、彼女の持つ縄張りの主のスキルで敵を追い払うか、ということだろう。

今の彼女の戦闘力は、成長限界の1600。これは、Dランクモンスターまでなら追い払うことができる戦闘力だった。

俺は少し考え。

「まあ、戦うか。いざという時の為にカードのドロップ分の幸運を貯めておきたいし」

「了解です。それではボクに任せてください」

「リンクは要るか？」

「いえ、大丈夫です」

そう言つと、ユウキがヒラリと馬車を舞い降りる。

風のような速さで先行すると、先の方から彼女の遠吠えが聞こえてきた。

どうやら、二体の眷属、シロとクロを呼び出したようだ。

数十秒後、馬車が彼女たちの元へと追いついた時にはすでに戦闘は終わっており、地面に落ちた魔石を拾っているところだった。

馬車に乗る俺を見たシロとクロが、静かに片膝をつき、頭を下げる。

その姿は、まるで時代劇に出てくる忍びのような己を押し殺したモノだった。

ユウキの奴、よくもここまで仕込んだもんだ……。

と感心しつつ、どれくらい成長したのかを確認するため、ユウキのカードからシロとクロのステータスを呼び出して見る。

【種族】ライカンスロップ(クロ)

【戦闘力】800(MAX!)

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

- ・気配察知
- ・群れの主
- ・武術
- ・初等忍術(NEW!)
- ・従順(RENTAL!)

【種族】ライカンスロップ(シロ)

【戦闘力】800(MAX!)

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

- ・従順 忠誠(RENTAL!)
- ・気配察知
- ・武術
- ・人物眼：相手がどういった人物かをある程度見抜く目を持っている。対象の戦闘力の大小や、表面的な性格、感情がなんとなく感じ取れる。
- ・初等忍術(NEW!)

……おわかりいただけただろうか？

戦闘力がマックスマまで成長しているだとか、忍術をレンタルし続けた結果、初等忍術のスキルを覚えているだとか……そんなのはどうでもいい。

従順や忠誠のスキルの横についての表記を見てほしい。

——そう、この二体は、ユウキによって従順や忠誠のスキルを植え付けられているのである！

なんと恐ろしい。

こんなもの、一種の洗脳である。

忠誠のスキルは、主が失望されるような行動をとり続けていると消えてしまうというリスクがあるが、このレンタルされた忠誠のスキルにはそのリスクは全くない。

なぜなら、毎回忠誠のスキルを付けなおせば良いだけなのだから。

「うう〜ん……」

さすがに、これは……ユウキに一言注意すべきだろうか。

如何に自分の眷属、自身の一部とはいえ、道具扱いしすぎている気がする。

ある意味では、カードを使い捨てるマスター以上だろう。
だが……。

「……………」

俺は彼女に部下の扱い方を注意すべきか逡巡した後、結局何も言わないことにした。

ユウキの部下の扱いは、道具扱いではあるが、不死身の存在である眷属の使い方としては間違っていないのも事実。

二体の眷属の在り方も、ある意味では『本物の忍』っぽくはある。また、狼の群れという面から見ても、序列を絶対のモノとし、強制的に忠誠を誓わせるやり方は間違っていない。

それに……この二名は、ユウキがランクアップした段階で消滅が確定している存在だ。

蓮華に言わせれば、消滅ではなく「母なる海に還るだけのこと」らしいが、俺たちから見れば別れであることには変わらない。

下手に感情を移さず、ユウキのように徹底して道具として扱うのが、案外最適な運用方法なのかもしれない。

俺はそう自分に言い訳しつつせめてもと、シロとクロにパウンドケーキを一つずつ渡し、その苦勞をねぎらってやったのであった。

翌日、早朝。

「ふあああ………」

泊まり掛けでの迷宮攻略を終えた俺は、日が昇ったばかりの人気のない住宅地を歩いていた。

黄色い太陽を見ながら、ふと感慨にふける。

うーん、俺もDランク迷宮を24時間以内に踏破できるようになったか……。我ながら、成長したものだ。

いや、成長というよりも戦力が充実した、というべきか。

今回の迷宮の主は、ケンタウロスとその配下のユニコーンとバイコーンの群れだった。

ケンタウロスの機動力と正確無比な弓矢による狙撃に、無数のユニコーンとバイコーンによる多重の支援と妨害という、少し前ならかなり手古摺ったであろう強敵だったが……デュラハンとダーインスレイヴを装備したイライザと、蓮華、ユウキ、ニケの猛攻になす術もなく沈んだ。

Bランク級の戦闘力を持つこの4枚に攻められては、いかに迷宮のバックアップを受けているとは言えCランクモンスターが太刀打ちできるわけもない。念のため俺の傍に控えさせていた鈴鹿など、欠伸びながら見ていたほどだ。

Dランク迷宮は、もはや俺の敵ではない。特殊なギミックがあるうと、一人で安定して踏破できるだろう。

だが、Cランク迷宮を一人で攻略できるかということ、無理だと即答せざるを得なかった。

Dランク迷宮までの迷宮と、Cランク迷宮からの迷宮は、まったくの別物だ。

猟犬使いを捕まえてから、師匠に一度だけ連れていってもらったCランク迷宮。

俺はそこで、わずか二十三階で撤退を余儀なくされている。

Cランクモンスターの出現する、三十一階層以降の領域にすら到達することができなかったのだ。

一人で四ツ星に昇格するためには、ソロでCランク迷宮を踏破する必要がある。

Dランク迷宮とCランク迷宮の壁は、そのまま俺と師匠の力の壁だ。

その壁の厚さは、パーフェクトリンクを身に着け「もしかして、師匠を超えたんじゃないかね？」と慢心しかけていた俺の鼻っ柱を折るには十分だった。

とはいえ、焦りを感じる必要はない。

俺はすでに常人以上のスピードで、カードの戦力、リンクの実力共に急成長している。

むしろ足りないのは、経験と知識。

このまま地道に勉強していけば、Cランク迷宮を一人で踏破する日も必ず来るはずだ。

もっともその時は師匠もさらに先に進んでいるのだろうけど。

「……ん？」

俺は、通りの向こう側から見覚えのある女の子が犬を連れて歩いてくることに気付いた。

褐色肌と挑発的なボディラインに、金髪ショートのこと……ちよっと某人造人間18号っぽい髪形のヤンキー系ギャル。

我がクラスの女子ナンバー2、一条さんだ。

オフショルダーのトップスに、ダメージジーンズというラフな格好をした一条さんは、ちよっとヨボヨボした柴犬を連れていた。

「あれ、北川じゃん。おはよ。物々しい格好だけど、こんな早くから迷宮？」

「おはよ、一条さん。迷宮からの帰りだよ。そっちこそ早いじゃん」

一条さんって高尾の辺りに住んでたのか……。

などと思いつつそう言うと、彼女は髪をかき上げながら欠伸混じりに答えた。

「まあね、夏はアスファルトが熱くなっていっうちに散歩しないとだからさ。……この子も、もう年だしね」

そう言って、静かな眼で傍らの茶色の毛並みの柴犬を見下ろす一条さん。

茶柴は、年こそ取っているものの健康状態は良好そうで、可愛がってもらっているのが一目で分かった。一条さんを信頼しているらしく、リラックスするように脱力した尻尾が揺れている。俺はしゃがみこんで茶柴と目線を合わせた。

「行儀が良い子だね。うちのバカ犬とは大違いだね。名前はなんて言うの？」

「マロ」

「うん？ なに？」

「いや、だからマロだって。この子の名前」

え、マジ？

思わず顔を上げると、ニヤニヤと笑っている一条さんと眼が合った。

「眉のところが平安貴族っぽいっしょ？ だからマロ」

「ふ、ふうくん、なるほど……」

うん、まあ、そういう偶然もあるわな。うん。

「マロ、チンチン」

「ワン！」

「やめーやー！」

ここぞとばかりに下品な芸をさせる一条さんに突っ込むと、彼女はケラケラ笑って大きな胸を揺らした。

……うん、まあ、許す！

「てか、そういえばマロと北川って同じ年じゃね？ ウケるんだけど」

「マジ？ 十六歳か、かなり長生きだな」

「たまに健康のために犬用ポーシヨンとか飲ませてたからかな。でも、ま、そろそろかもね……」

そう言ってわしゃわしゃとマロ（犬）の顔を撫でまわす一条さんの横顔は、少し寂しそうに見えた。

その表情がなんだか急に『女の子』に見えてきて、俺はなぜか妙に戸惑った。

「……あのさ。獅子堂のことさ、ありがとね」

不意に、ポツリと一条さんが呟く。

「一応さ、仇みたいのとつてくれて、みたいなの？」

「ああいや……」

俺は何と言って良いかわからず、口籠った後。

「一条さんって、獅子堂と付き合ってたの？」

なぜかそんな馬鹿なことを問いかけていた。

……何聞いてんだ、俺。アホか。もし本当にそうだったならなんて言えば良いんだよ。

最悪な質問をしてしまい後悔していると、一条さんは苦笑して答えた。

「まさか。アタシ、オラオラ系嫌いだし。もっと思い通りになる男がタイプかな。あと浮気したくても出来なそうな奴。金持っていれば、なお良し」

なんかウチの御袋と同じようなこと言ってる……。
一条さんと付き合う男は確実に尻に敷かれそうだな。ウチの親父
みたいに。

「獅子堂は、なんて言うか……元幼なじみだったんだよ」
「元？」

幼馴染に元とかあるのだろうか……。
と首を傾げていると。

「小学校5年位だったかな、それまで近所に住んでただけで、
転校していつちゃったんだよね。だから元ってわけ。」

おじさんとおばさんが離婚してさ。おじさんが宗教に嵌まっちゃ
って、おばさんが獅子堂を引き取って、みたいなの。

んで、良くわかんないんだけどまたおじさんのところに戻ること
になって、中学二年位にウチの中学に転校してきたんだけど、おじ
さんもすでに再婚相手がいたりして。複雑な家庭環境に……すつか
り『ああ』なっちゃったんだよね」
「なるほど……」

何年も離れて暮らしていた父親と、新しい母親か。思春期の男の
子がグレてもおかしくない環境ではある。獅子堂も色々大変だった
ようだ。

「ちなみにさあ、獅子堂が北川に色々突っかかった理由はね、単
なる焼き餅。アイツ、楓のことが好きだったから」
「マジ!？」

死後に明かされる驚愕の事実! ……でもないか。四之宮さん、
好きな奴結構いるだろうし。

「んで、獅子堂は楓と同じグループになりたかったんだけど、結局そうはならなくて。んで、北川って楓と仲良いつしょ？ それで、って感じ」

「なるほどねえ」

「ま、アイツのアピール全部楓には逆効果過ぎて笑っちゃったんだけどさ。楓って、人の足を引っ張って上に行くこうとする奴、大嫌いだし。基本、努力家が好きだからね。超空回りって感じ。ね、そう考えると可愛く思えて来ない？ ハムスターみたいでさ」

ハムスターって……。ニヤツと笑ってくる一条さんに、俺は苦笑いするしかなかった。

「アイツもね、北川のこととは認めてたんだよ。でなきや、同じ冒険者って方法は取らないし。バリバリ意識してんの丸わかりじゃん？ 基本、格下は歯牙にもかけない奴だからさ」

それに、俺は南山の事を思い出していた。

俺が元々冒険者を目指した理由は、同じモブキャラでありながら冒険者となることでカーストトップグループに入った南山に嫉妬し、憧れたからだ。

なるほど、相手と同じ方法を取るのには、相手を認めていたから、か。

一条さんが、立ち上がりグツと背伸びをする。

「ま、そんな感じ。暑い中ごめんね。北川にはアイツのこと知って欲しくてさ。このままってのは、なんか……寂しいじゃん？」
『……なかなか情の深い良い女だな。ママさんにちょっと似てる』

それまで静かに見守っていた蓮華がそう囁いてきた。

確かに……ちょっとウチの御袋に似てるかもな。

そこで一条さんはポンと手を叩き、思い出したように言った。

「あ、そうだ。ちょうど北川に聞きたいことあったんだわ」

「俺に？」

「そう。……北川つて要らないカードのレンタルと違ってやってる？」

「カードのレンタル？」

思わぬ質問に俺は目を丸くした。

「ほら、大学の冒険者部とかだと新入部員にカードのレンタルとかするって言っじゃん。北川も冒険者部作るうとしてたんでしょ？」

「そういうのやってないかなって思ってたさ」

「いや、今のところやってないけど……」

「お願いできない？ とりあえず、50万なら担保に預けられるし。レンタル料は月に5万くらいかな？」とか考えてるんだけど」

そう言う一条さんの顔は真剣なモノに見えた。

ぶっちゃけDランクカードなら余ってるし、貸しても問題はないわけだが……。

「冒険者になりたいってことなのか？ あんな事件があったのに？」

「犯人は北川が捕まえてくれたんでしょ？ なら逆に安全じゃん。模倣犯とかの問題も起こってないしさ」

「そうだけど……どういふ動機からなのかって思ってたさ」

幼馴染の獅子堂が死んで、冒険者になりたいと思ったというのはちょっと気になるところだ。

……変に思い詰めることではないかと心配になる。

「あゝ、うゝ」

俺の問いかけに一条さんは顔を赤らめて悩むように悶えた。

彼女にしては珍しい態度だ。

やがて彼女は乱暴に髪をかき乱すと、俺の胸を軽く拳で小突いて

――。

「……憧れてんだよ、言わせんな、恥ずかしい」

――そう、赤いままの顔で言ったのだった。

第四話 ギリシャ系の神はヤベー奴しかいないという風評被害) 事実) (後書き)

【TIPS】恋愛ADV『モブ高生の俺でも冒険者になればリア充になれますか?』

マロたちの世界の、千個くらい隣の世界で売られているかもしれないギャルゲー。

ストーリー自体は、『平凡な高校生の主人公が、冒険者活動を通じてクラスや部活の女の子たちと仲良くなり、徐々にリア充となっていく、』というオーソドックスなもののだが、このゲーム独自のシステムとして『座敷童システム』という一風変わったシステムを採用している。

ゲームの流れとしては、闘技場で試合をすることでクラスのヒロインの好感度を上げ、迷宮に潜る事で冒険者部の後輩たちからの好感度が上がるという仕組みとなっているのだが ヒロインの好感度をいくら上げてもヒロインの個別ルートに行くことはできない。

これは、ゲーム内において主人公は本来ヒロインたちと結ばれる運命にないモブキャラであり、相棒である座敷童が運命を操作しヒロインとのイベントを起こすことでようやくヒロインと結ばれることが出来る、という設定だからである。

そのため、個別ルートに進むためにはヒロインからの好感度よりも『相棒である座敷童からのヒロインへの好感度』が重要となっており、仮にヒロインの好感度がMAXでも座敷童が『コイツとくっついて幸せになれない』と判断した場合、個別ルートに進むことすらできない……というシステムとなっている。

なお、攻略サイトを見ずにプレイした場合、90%以上の確率で座敷童エンドとなってしまう模様。

Q：牛……特定のヒロインの影が薄く、イベントが起こらないのですが……。

A：座敷童ちゃんからのヒロインへの好感度が低いのかもかもしれません。もつと座敷童ちゃんとのイベントを起こして、ヒロインへの好感度を上げましょう。

Q：ヒロインのイベを起こすために座敷童ちゃんを選んでいたら座敷童ちゃんエンドになってしまうのですが……これはバグでは？

A：仕様です。このゲームでは、座敷童ちゃんと結ばれるのが一番幸福になれるという設定なので、特に意識せずにプレイしていると高確率で座敷童ちゃんエンドとなります。ヒロインのイベが発生したら逃さずにイベをこなしましょう。

Q：ヒロインの個別ルートに入れたのは良いのですが、好感度が足りなくてバッドエンドになってしまったのですが……。

A：それはバッドエンドではなく座敷童ちゃんエンドの一つです。座敷童ちゃんエンドは、各ヒロインの個別ルートに一つずつと、メインに5つの十以上あります。なお、各ヒロインのエンドは一つずつです。

Q：結局、どうすればヒロインを攻略できるのですか？

A：頑張りましょう。

あくまで遙か遠い平行世界で売られているかもしれないだけのゲームの話なので、本編には関係ありません。

第五話 学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人(前書き)

・登場人物紹介

学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人：学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人。

第五話 学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人

夏休み、四日目。その日は、朝から家中がバタバタしていた。

「お母さん、愛の旅行用の歯ブラシセットってどこ？」

「時間ないから歯ブラシセットはあっちで買いなさい！」

「愛歌、俺の電動シェーバーどこいった？」

「知らないわよ！ いつもカミソリで剃ってるじゃない！ 今回もそうしたら？ っていうか、アンタら昨日までに準備しておきなさいって言ったでしょうが！」

あちこちでアレがないコレがないという声が響き、お袋がキレる声が一階まで聞こえてくる。

「なんかすげえな、お前んちって旅行行くときはいつもこんななのか？」

そんな騒ぎを、漫画を読みながら聞いていた蓮華が、俺に問いかけてくる。

俺は旅行用のバッグに着替えを詰め込みながら答えた。

「いや、いつもは前々から準備してるからここまでじゃあないな。今回は急に俺の予定が空いて急遽予定した旅行だからなあ」

北川家では毎年、夏休みには平均して2〜3回ほど旅行に行くのが習慣となっている。

旅行の予定は、夏休みの一月以上前から計画され、前もって準備

されているためいつもはスムーズに出かけることができるのだが、今回は少しばかり事情が異なっていた。

なぜなら、今回の旅行はつい先日にも急遽決まったものだったからだ。

今年の夏は、冒険者部の合宿の予定などでスケジュールがギリギリに詰まっていたため、北川家の旅行は夏休みの後半に一回予定されているのみとなっていた。

家族も今年は仕方ないと納得してくれていたのだが、実はお袋は内心で寂しく思っていたらしく、今回のアンナの補習でスケジュールに空きが生じたのを知るなり、急遽旅行をセッティングしたのだ。偶然にも、今年は東京のオリンピックの年であり、政府がオリンピックのために休日をずらした為、今日から4日間連休となっている。

土日は俺も愛も予定があるため、家族で旅行に行くチャンスは、親父も会社が休みのこの木曜と金曜しかなかったというわけだ。

「歌磨、そろそろ出るわよ！ 準備できてるの!？」

「もう終わるよ！」

「アンタだけじゃなくて、蓮華ちゃんの分もアンタが用意すんのかな？」

「わかってるって。蓮華のは、最初に終わってるよ」

俺はそう言うのと蓮華用のバッグを彼女へと放り投げた。

それを受け取る蓮華は、いつもの和服姿ではなく、女兒向けのTシャツとジーンズのミニスカートという現代風ファッションだった。今回の旅行は蓮華も実体化しての参加となっている。

俺は最初透明化しての参加で良いんじゃないかね？ と言ったのだが、家族全員からとんでもないと大反対されたのだ。

そのため、彼女も愛の服を借りての参加となっていた。

「よし、行くか！」

「ああ、待て待て！」

バッグを受け取った蓮華が部屋を出ようとするのを制止し、彼女の頭へとつば付き帽子を被せる。帽子のつばでその人間離れた美貌が隠れたことで、彼女の外見はどこにでもいる子供となった。

蓮華の顔は、モンコロなどを通じて世間に広く知れ渡っている。

カードは迷宮外で召喚できない、という固定観念からそうそう気付かれることはないだろうが、俺と共にいることと併せて、察しの良い者が気付かないとは限らない。

そのため、小細工ではあるがこの帽子は必須だった。

ちなみに、他人に蓮華の関係を聞かれた際は、愛の友達と説明することになっている。まあ、そんなことを聞かれることはないだろうが、念のためだ。

家中の戸締りを終え、玄関に鍵をかけると、車へと向かう。

白いセダンの扉を開けると、サウナのような熱気が顔を撫でた。

後部座席に乗り込んだお袋が顔をしかめながら言う。

「あつついわね。即、エアコンつけて」

「もうつけたよ」

ゴオオオツ！ という音を立ててエアコンが稼働するが、夏の日差しに温められた車内の温度はそう簡単に下がらない。

皆が熱さに顔をしかめる中、ふいに親父が助手席に座る俺が汗一つ掻いていないことに気付いた。

「お？ 歌麿、妙に涼しい顔をしてるな。……もしかして魔道具がなんか持つてるのか？」

俺は鋭いな、と苦笑しつつ胸元にしまったエアコンペンダントを

取り出した。

「アタリ。このエアコンペンダントで適温が保たれてるんだよ」

「お兄ちゃん、ズルい。愛にも貸して！」

「もう一つあるからそっち貸してやるよ」

俺がエアコンペンダントを後部座席の愛へと渡すと、それを見たお袋が感心した声を出した。

「あら、素敵なおペンダントじゃない。いくらしたのよ？」

「えっと……たしか買えば百数十万くらい、かな？」

『百数十万！？』

車内に驚愕の声が木霊する。

「は、いくら冒険者として必要だからってそんなのをポンと買うとはね」

「ああ、いや……これはギルドのパックで買ったもんだから」

「ほ、ギルドのパックはそう言うのも入ってるのか。ってことは百万で百数十万のが当たったわけだから、一応得はしてるのか」

「……うん」

そのわずかな沈黙を、しかしお袋は見逃さなかった。

ギリリと瞳を鋭く光らせて、俺へと詰問する。

「マロ、あんたパック何個買ったわけ？」

「う……！！」

俺が口籠っていると、お袋が蓮華を指さし言った。

「母さんが蓮華ちゃんに聞くまでがタイムリミットだと思いなさいよ」

そっちに聞かれるのだけはマズイ……！ 俺は慌てて答えた。

「……んじゅう個、です」

「なんですって？ もう一度、大きな声ではつきりと」

「四十個です！」

『四十……』

家族全員絶句した後、やがて親父が大きなため息を吐いた。

「はあ、4千万円か……俺の年収の何倍だ……？ 真面目に働くのが馬鹿らしくなってくるな」

「アンタね、自分で稼いだ金とは言え、もうちょっと慎重に使いなさいよ」

実際のところ、使った金額はその十倍なのだが、それだけは何とんでも知られなくなかった俺は、沈黙は金とばかりに押し黙った。両親が呆れたようにため息を吐く中、愛だけがはしゃいだ声を出す。

「4千万だつて！ すごい！ 愛のお小遣い何年分だろ。やっぱり、将来はお兄ちゃんみたいな冒険者と結婚しようつと」

「駄目よ、冒険者と結婚するのだけは止めておきなさい」

「そうだぞ、愛は一生結婚しなくて良い。ずっと実家で暮らしなさい」

親父の馬鹿な発言はスルーされ、母子の会話は進む。

「え〜、なんで〜?」

「いくらお金持っても、いつ死ぬかわからない職業はダメよ。マロには幸い蓮華ちゃんがついていてくれるけど、他の冒険者は本当にいつ死んでもおかしくないんだから。家庭は安定性が重要。冒険者は遊び相手で十分よ」

「ぷ〜。しょうがない、欲しいモノはお兄ちゃんにおねだりすることにして。旦那さんは、お父さんみたいに冴えなくても、お金持ちで、何でも言うこと聞いてくれて、浮気しない人を探すか〜」

親父は、愛の物言いに、金蔓扱いされて悲しいような、お父さんみたいな人と結婚すると言われて嬉しいような複雑な顔をした。

「ちょっと順番が違うわね。一番が何でも言うこと聞いてくれて、二番が浮気できなさそうなこと、三番がお金を持つてることよ。この順番を間違えると悲惨な目に遭うわよ」

「え〜? 何が違うの?」

俺も気になって耳を傾ける。

すると、答えは意外なところから来た。

「一番目は、恋人の条件として重要なんだろ。この条件が整ってないと、ママさんや愛みたいなたいプだと結婚までいかないってわけだな。二番目は、妻としての条件だな。浮気するような男とでは、家庭を築いても長続きしない。三番目は、母としての条件だ。どれだけ愛があっても、お金がないと子育ては難しいからな」

「蓮華ちゃん、正解」

ははあ、なるほど……と俺は感心した。隣では親父もそうだったのか、という顔をしている。

「ふうん。それじゃあお兄ちゃんはどうなの？」
「マロはねえ……」

とお袋は悩まし気に頬に手を当て。

「冒険者やるまでは一番、二番の条件は揃ってたんだけど、お金持ち始めてから二番がちよっとね」
「ちよっとちよっとちよっと！」

実の親からのあまりの評価に俺は憤慨した。

「名誉棄損甚だしい！ まだ恋人が出来たこともないのに！」

まさに浮気したくてもできない奴の条件に当てはまるとるじゃろが！ ……自分で言ってる悲しくなるけど！

「ふうん。じゃあいつも一緒にいる蓮華ちゃんに聞いてみましょうか。実際のところ、どうなの？」

「いやあ、ダメだな、コイツは。完全に気が多いタイプだ。子供出来たら違うんだろうけど、それまでは結構フラフラするタイプだわ」
「おおーい！！！」

お前、そんな風に思ってたのか！

「マロ、ダメだぞ。男なら俺みたいにちゃんと一人の女性を愛さないと」

そうキリツとした顔で言う親父だったが……。

「何言ってるの、完全に北川家の血でしょうが。あなたが浮気しな

かったのは、単に相手がいなくてできなかっただけ。マロみたいに女が寄ってきたら駄目だと思いつつ据え膳食べちゃうタイプでしようが」

「お父さんサイテー……」

「い、異議あり！ 冤罪だ！ 俺はマロとは違うぞ！」
「俺だってチゲーよ！」

醜く争う男性陣を、女性陣はバツサリと切り捨てる。

「見なさい愛、完全に血の濃さを証明してるでしょう？」

「蛙の子は蛙。子が蛙なら親も蛙だってことだ」

「蓮華ちゃん、それだと私も蛙ってことになるんだけど……。ま、いいや。それより、なんでお母さんはお父さんと結婚したの？ お父さんレベルなら他にもいたんじゃない？」

その質問に答えたのは、お袋ではなく親父だった。

「ふっふっふ……それはな、愛。お父さんが命がけでお母さんを護ったからだよ」

「え〜！？ 何それ！」

なんだかロマンティックなお話になりそうな予感に、愛が目を輝かせる。

「ま、簡単に言うと吊り橋効果って奴ね。まだお母さんがピチピチの女子高生だった時に第一次アンゴルモアが起きて、その危機をお父さんと乗り越えたってだけの話よ。あの時はまだ若かったから……十歳年上のお父さんが頼もしく見えちゃったのよね」

俺もガキの頃に両親の馴れ初めを聞いたことがあるが、親父は大

学生の頃、お袋が小学生の時に家庭教師をしていた時期があったらしい。

親父が大学を卒業するころに家庭教師は辞めたのだが、両者には元々面識があった。

そこでお袋が高校生になり立派なギャルになった頃、第一次アンゴルモアが起こった。

当時、モンスターは迷宮から出てこないと思いついていた人類は突如あふれ出したモンスターの大群に、完全にパニックに陥った。

迷宮の周囲には自衛隊による簡易基地が築かれていたため、完全に無防備な状態ではなかったものの、自衛隊は当初モンスターの群れに適切に対処することができず、多くのモンスターを取り逃がしてしまっただけという。

特に迷宮の数が多かった東京では、街に人々の死体が溢れ、インフラは完全に破壊、お金は紙切れに変わり、店には暴徒が押し寄せた。

その当時の状況を端的に表すなら、世紀末だ。

そんな中、親父は偶然かつての教え子であるお袋と再会し、民度が最底辺まで落ちた人々と、生存本能から性欲がマックスになった暴漢たちから若きお袋を守り切ったのだと言っ。

喧嘩もろくにすることがなかった親父がなぜお袋を守れたのかと言っと、その絡繰りはもちろんカードにあった。

カードの効果がわかったのはこの第一次アンゴルモアの最中であつたが、親父は「幸運にもカードを所有しており、偶然から自力でその使用方法にたどり着いた人々」——当時『サマナー』と呼ばれていた者の一人だったのだ。

ちなみに、どんな偶然か、親父が持っていたカードは、座敷童のカードだったらしい。

混乱の終わりの方で、そのカードは最後には親父たちを守って口ストしてしまっただけなのだが、親父たちが妙に蓮華に好意的なのはそのせいもあるのかもしれない。

「すごい！ 昔のお父さんってそんなにカッコ良かったんだ！
完全にヒーローじゃん！ 映画の主人公みたい！」

そんな話を初めて聞いた愛は、昔俺がその話を聞いた時と同じようにリアクションをした。

そして両親の反応も、当時と同じ、痛みと苦しみが入り混じったような苦笑이었다。

「ん、ヒーローってほど立派なもんじゃなかったかな。……花蓮ちゃんも守れなかったしね」

「花蓮ちゃんって、お父さんの座敷童の名前……？」

チラリと蓮華を見ながらの愛の問いかけに親父は首を振る。

「いや、当時は名づけのシステムも知らなかったからな。知ってたら絶対名づけしてやったんだが……。花蓮ちゃんってのは、途中で保護した小学生の女の子だよ。……どんな時も明るく勝気な子で、ずいぶん元気づけられた」

「そっか……」

なんだかしんみりとした空気となってしまう、車内に沈黙が落ちた。

そこでふとバックミラーを見ると、頬杖をついて外を見る蓮華の横顔が見えた。

……花蓮、か。

親父とお袋の馴れ初めの話など、聞いたのは何年も昔でほとんど忘れていたくらいなのだが、俺がこの座敷童に蓮華という名前を付けたのは、もしかしたらこの話が頭の片隅に残っていたからなのかもな……。

「ようやく着いた」

旅館の部屋に通された俺は、旅館特有の良い臭いのする畳に寝そべるとグツと背伸びをした。

そんな俺を見て、荷物を整理していたお袋が呆れた顔をする。

「だらしないわね、ただ車に乗ってただけなのに」

「それが逆に疲れるんだよ。最近、体動かしてた方がなんか疲れないんだよね」

「あらまあ、なんだか運動部みたいなことを言うようになって。ま、昔より健康的になったってことか」

「ねえ、お兄ちゃん、観光行こうよ、観光」

蓮華と一緒に小動物のようにキョロキョロと部屋をあちこち見まわっていた愛が、俺の元へとやってきて腕を引っ張った。

「え、ちよつと休もうぜ」

「駄目だよ、一泊二日なんだよ？ちゃんと観光できるの明日だけだし、晩御飯まであと3時間しかないんだからすぐ動かないと！

ね、蓮華ちゃん？」

「そうそう。ほら、レストかけてやるから」

「しょうがねえな」

のっそりと体を起こすと、適当にTVのチャンネルを変えていた親父が振り返って言った。

「あんまり遠くまで行っちゃ駄目だぞ。土地勘ないんだから。蓮華

ちゃん、ウチのが迷子にならないようにちゃんと見ててくれな」

「あいよ、任せとけ」

「……なんで年長者の俺に言わねえんだよ」

ブツクサ言いながら部屋を出る。

俺たちが泊まる旅館は清流の脇に建てられており、正面玄関を出ると風流な大きな赤塗りの橋が見え、そこを渡って坂を下っていくと、すぐにお土産屋が並ぶ観光街に到着した。

街は、俺たち同様この4連休を利用してオリンピックを見るのではなく旅行しようと考えた人々で溢れかえっており、非常に賑わっていた。

「あ、歌麿。足湯があるぞ。ちよつと休んで行こうぜ！」

あちこちのお土産屋を冷やかしつつ、愛の友達用のお土産を買わされていると、蓮華が道の先を指さして言った。

見ると茶屋の隣に足湯が併設され、そこで観光客が団子とお茶片手にくつろいでいる。

すぐに彼女の魂胆を察し、ジト目で見る。

「お前、ただ団子が食べただけだろ」

「へへ、バレたか」

蓮華はペロリと舌を出して笑った。すると当然のように愛が味方に回る。

「いいじゃん、愛も足湯入りたーい」

「……ま、俺もちよつと入りたいかな」

というわけで、三人で団子セットを購入し、足湯へと入った。

「ふい、足だけでも結構気持ち良いな」

「夏は足も蒸れるからね」

そんなことを話していると、ふいに隣に座っていた青年がこちらを見て大きな声を上げた。

「あっ、お前！ 北川歌麿！」

誰だコイツ、いきなり人を呼び捨てしやがって……。と、俺が胡乱な眼差しを向けると。

「あっ、お前、さては俺のこと覚えてないな？ 俺だよ、佐藤勇刃！」

「……………？ 誰だ？」

大柄で、格闘家のように鍛えられた身体つきをした敵つい顔立ちの青年。

……………駄目だ、マジで見覚えがない。

新手の詐欺か？

「名前言っても思い出して貰えねーのかよ！ 学生トーナメントでベスト4だった佐藤勇刃だよ！」

「……………あっ！ ああ！ お久しぶりです」

そこでようやく相手を思い出した俺は、慌てて頭を下げた。

そう言えば、居たな！ ユージン！ 師匠とアンナのキャラが濃すぎて完全に忘れていた。

そんな俺を見て、ユージンさんはガクリと頂垂れる。

「どうせ俺はお前ら三人に比べると地味だよ。ネットでも『学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人』とか言われてるしさあ」

そ、そんなこと言われてるのか。でもある意味『団長の手刀を見逃さなかった人』的な感じで覚えてもらっているのでは？

学生トーナメントのベスト4とか、普通なら放送一週間で忘れられてるだろうし。

「っていうか、お前らなんで俺だけ仲間外れにすんの？ 酷くない？ いや、わかるよ？ 俺だけ二歳年上でもう高校卒業しちゃってるし、実力も低いしね。でも誘うだけ誘っても良くない？ 一応こっから見えて三ツ星に昇格してるんだぜ？ 俺も地味に頑張ってるんだよ？ 大学で知らない女の子に、『佐藤さんって学生トーナメントでベスト4だったんですよね？ っことはやっぱり、翼様と一緒に猟犬使いを捕まえるのにも協力したんですよね？ 凄いです、尊敬します！』ってキラキラした瞳で言われた時の俺の気持ちわかる？ いや、俺は誘われてないから……って答えた時の『あ……』って感じのあの空気！ マジでいたたまれねーんだよ！ 大会の後、ベスト4全員で連絡先交換したのに、俺だけ誰からも連絡こねーしさあ！ 神無月やお前は連絡すると一応返事してくれるけど、十七夜月さんに至っては既読スルーだし！ お前らは三人でちゃんと連絡とりあってたんだろ？ それ知った時にどんだけ俺が傷ついたかわかる？ よくねーよ、そういうの！ ほとんどイジメじゃん！ 頼むから誘ってくれよ！」

恨みがましい目で愚痴を吐き出してくるユージンさんに、俺はそう頭を下げるしかできなかった。

「その、佐藤先輩がそんなに猟犬使いの件に参加したいと思ってた

なんて知らなかったので……」

すると途端にユージンさんはトーンを下げ。

「ああいや、別にそういうわけじゃないんだけどね。多分誘われても断ってたし。連続殺人犯と関わるなんて怖いじゃん？」

「なんなんだよお前」

俺は思わず敬語を忘れて突っ込んでしまった。

関わりたいのか、関わりたくねーのか、どっちなんだ。

「誘われてもたぶん断ってただろうけど、ベスト4仲間として誘っては欲しかったんだよ。わかる？ この繊細な気持ち」

「いや、めんどくせーわ！」

うちの鈴鹿みたいなこと言いやがって。そう言うのは可愛い女の子がやるからギリギリ許されるんであって、アンタみたいなむさくるしい男がやってもウゼーだけなんだよ！

「ところでさつきから気になってたんだけど、そっちの子は妹さん？」

「あ、はい。妹とその友達です」

「ふう〜ん」

ユージンさんはマジマジと愛の整った顔と深く帽子を被り直した蓮華を見て。

「……北川も複雑な家庭環境なんだな」

「義理じゃねーよ！ 実の妹だっつもの！」

失礼過ぎるだろ！ ……俺と愛を見た人はだいたいそう思うけど
さあ！

「そう言えば、北川はアレには参加するの？」

「何asca急に……アレとは？」

この人話題がコロコロ変わってなんか疲れる……と思いつつ俺が
首を傾げると、あちらも首を傾げた。

「あれ？ もしかして知らないのか？ この時期に俺くらい冒
険者でアレって言ったらアレしかねーだろ」

「モンコロかなにかですか？」

「ふう〜ん、マジで知らないのか。神無月とか十七夜月とかからも
何も聞いてないのか？」

「だからアレって何なんです？」

俺が若干イラつきながら聞くと、ユージンはニンマリと笑っ
た。

「ほほ〜ん、知りたいか？」

「……はい」

するとユージンは、わっ！ と顔をかつびらき。

「でもダメえええええ！！ 俺を仲間外れにしておいてこういう時だ
け教えてもらおうなんて虫が良いんだよ！！」

う、うぜえ……。

俺が眼輪筋をピクピクさせていると、ユージンは急にモジモ
ジとし始め……。

「でも、もし、今度からはちゃんと誘ってくれるなら教えてあげても、良いよ……?」

「じゃあ、いいです」

「なんでだよ!？」

いや、もうこの短いやり取りで、あんま関わりたくないリストに入っただし……。

かまってちゃんは鈴鹿でおなか一杯だ。

「後で教えてもらえば良かったって後悔しても遅いんだからな!」

最後にそう吐き捨て走り去って行くユージンさん。

そんな彼の後ろ姿を見て、愛がポツリと呟いた。

「……お兄ちゃんの友達って変わってる人多いね」

俺は否定しようとしたが、東西コンビやら冒険者部のみんなの顔が脳裏に過り、できなかった。

そんな俺を見て、変わってる奴筆頭の座敷童は、クツクツと笑うのだった。

第五話 学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人（後書き）

【Tips】サマナー

第一次アンゴルモアの際、偶然にもカードを所持しており、モンスターに襲われる中でその使い方にたどり着いた者たち。

カード使い、召喚士、契約者などとも呼ばれた。

彼らの存在が、今の冒険者社会を作り上げたと言っても過言ではない。

サマナーの大半は、モンスターに襲われる人々を保護するために動いたが、中には自らを選ばれし者と勘違いし、自らの勢力を作り上げることに躍起になった者や、欲望の赴くままに力を振るった者たちも少なからず存在したという。

第六話 裏切り

夏休み、六日目。

俺はやや雲行きの怪しい空を見上げながら、西八王子の駅前に東西コンビと待ち合わせしていた。

空には厚い雨雲がかかり、夕日を完全に隠している。

周囲では浴衣を着た男女が同じように空を見上げ、不安そうな顔を浮かべていた。

大丈夫か、この空。雨降らないよな……？ 今日とは花火大会だったのに……。

「よっ、マロ！」

「東野久しぶり。あ、これ、旅行のお土産」

「おっ！ サンキュー！」

俺が旅行のお土産を渡すと、東野は嬉しそうに覗き込んだ。

「中身なに？」

「悪いけどそんなに高いもんじゃねーよ。特産の蜂蜜を使ったクッキーとか、蜂蜜スティックとか。部屋に置いてあったお茶請けが美味しかったからさ」

「いや、十分十分！ ありがとうな」

東野はそう言って、いそいそと俺の渡したお土産をバッグへとしまい込んだ。

「あ、そうそう。この前のモンコ口見たぜ。珍しくタッグマッチだ

ったよな」

「ああ……」

と、俺はこの前の試合を思い出した。

前回の試合では、キヤットファイトにしては珍しくタッグマッチの戦いとなっていた。

タッグマッチは、四人の選手がランダムでペアを組み、各二枚のカードを使って戦うルールだ。

選手は一つのライフを共有し、相棒がへボだと足を引っ張られることになる。

俺の相棒は今回が二戦目の新人（しかも初戦黒星）で、相手チームはベテラン選手二人組だった。

試合はなんとか新人をカバーする形で勝利を収めることができたのだが、問題はタッグマッチというキヤットファイトではあまりやらない試合方式を引っ張り出してきたことだ。

タッグマッチは、主に出場する選手の人気差がある時にオッズをばらけさせる時に使う方式である。

この方法を使うということは、俺の対戦相手として相應しい相手が減ってきているということを意味していた。

キヤットファイトは、主に三ツ星が女の子カードだけを使って戦う番組だ。使用するカードはメインのCランクカードに、サブのDランクカード二枚という組み合わせが一番多い。

Cランクカードを三枚使ってくる選手となると、キヤットファイトの選手の中でも一握りとなり、選手の組み合わせのパターンが少なくなってくる。

組み合わせのパターンが少ないということは、客から飽きられやすいということだ。

キヤットファイトには、プロ以上の冒険者による『キヤットファイト・プロ!』という姉妹番組があるが、こちらから四ツ星を呼ぶ

のも少々問題がある。

プロライセンスを持っていてということとは、ソロでCランク迷宮を攻略したということであり、アマチュアの冒険者に太刀打ちできる存在ではないのだ。

リンクのことを知らない一般人であっても、アマチュアとプロでは分厚い壁が存在していることは知っている。

つまり、三ツ星と四ツ星の試合では肝心の賭けが成り立たないのである。

タッグマッチは、そういった選手間の実力差（人気差）がある時に、人気選手の足を引っ張らせることで賭けを成り立たせようとする苦肉の策だった。

今回の戦いでは俺も少々苦戦させられたので、今後はタッグマッチが中心となってくるかもしれないな。

とその時、スピーカーから夕方五時を告げるメロディーが流れ始めた。

「……西田のヤツ遅いな。アイツが遅れてくるなんて珍しい」

「どうしたんだらうな。大抵五分前には着くのに」

俺たちが首を傾げていると。

「おおーい、マロ、東野！」

「おせー……よ、西、田……」

振り返った俺は、予想外の光景に絶句した。

男物の浴衣を着た西田は、隣に浴衣姿の女の子を連れていた。

同年代と比べてかなり小柄で小動物っぽい可愛らしさのある、見覚えのある美少女。

「さ、桜井さん……なぜ、西田と」

東野が掠れた声で言った。

西田が連れた女の子は、去年同じクラスだった桜井さんだった。東野の問いに、西田は照れ臭そうに答える。

「実は……俺たち付き合い始めたんだ」

ガツンと頭を殴られたような衝撃だった。

馬鹿な……西田に、彼女が……だと？

一体どんな手を使ったんだ？ 催眠アプリか？

「嘘、だろ……？ 一体どんな手を使ったんだ？ ……催眠アプリか？」

かろうじて口には出さずに済んだ俺と違い、東野はあふれ出る嫉妬心が口から洩れ出してしまっている。

正直はた目から見るとかなりみつともなかったたので、俺は口に出さずに済んだ幸運に感謝した。

「人聞きの悪いことを。……まあ、普通に趣味を通じて、でだよ」
「趣味？ お前に女にモテる趣味があったとは知らなかったな」

コイツの趣味など、ゲームとロリ絵を描くことくらいだった筈だが。

桜井さんがもじもじと恥ずかしそうにしながら答えた。

「じ、実は私、コスプレが趣味で……」

「で、里香がやってたコスプレ用のSNSに俺がイラストを送ったのがきっかけてわけ。まあ当時は里香のアカウントって知らなかったんだけどね」

「そ、そんなことが……。
ってか、自分の萌え絵を送ってくるクラスメイトって普通にキモイだろ……。」

「奇跡的に波長がかみ合ったのか？ もはや、運命の出会いだな。」

「ってことで悪いんだけど、今日は二人で回っても良いか？」

「あ、ああ……彼女出来たんならしょうがない。な？ 東野」
「……………」

「返事がない。ただの屍のようだ。」

「マロならそう言ってくれると思ってたよ。じゃ、行こうか」

「う、ごめんね？」

「……………いえいえ。あ、これ、旅行のお土産、良ければ二人で食べてよ……………」

「おっ！ サンキュー！」

「北川くん、ありがとう」

「にこやかに去って行く二人を見送り、俺は東野の肩を揺さぶった。」

「おい、正気に戻れ」

「……………。西田のヤツ遅いな。電車、遅れてるのかも。電話してみるか？」

「お、落ち着け。今のは幻覚じゃねえよ」

「虚ろな目で現実逃避する東野を現実へと引き戻すと、東野はガクリと跪いた。」

「バ、バカな……西田に彼女が出来た、だと？」

「正直……俺もショックを隠し切れん」

「……俺、最初に彼女ができるとしたらマロだと思ってたんだ。だからそれについては覚悟が出来た。だが、これは不意打ちにもほどがある」

実は、俺も最初に彼女ができるとしたら自分だと思ってた。……とんだ思い上がりだったぜ。

「……どうする東野？ 花火見に行くか？」

「男二人でか？ 三人ならまだしも、それはキツイだろ……」

「だよな……」

まさかこんなことになるとは……。

と、その時。

「あれ？ 先輩、何してるんスか？」

「……アンナ、小夜！」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこにいたのは冒険者部の後輩女子二人だった。

二人とも浴衣を着ている。アンナは藍色の浴衣を、織部は薄紅色の浴衣を着ていて、ちょうど普段の二人のイメージカラーが逆転している感じだった。

「補習が終わったんで花火大会を見に来たんスよ」

「我はアンナに誘われてだな」

「……先輩はお友達とツスか？」

そう問いかけるアンナの目は、「男二人で花火大会を……？」と語っているように見えた。

「いや、実はもう一人来る予定だったんだけど……ドタキャンされたんだ」

彼女を連れてきたので別れた、というのはさすがに惨めすぎるので、俺はそう言った。

「そんなんすか。じゃあせっかくなんで一緒に回りますか？」
「是非！！」

そう答えたのは俺ではなく東野だった。

「マロもちろん良いよな！？」

「あ、ああ……」

東野の眼は「良いと言わなきゃ殺す」と語っており、俺の首は自動的に縦に振られた。

俺はこっそりと囁く。

（お前、ちよつと必死過ぎじゃね……？）

（馬鹿野郎！ お前、いつからそんなヤツになっちまったんだ？ 可愛い後輩の女の子とお祭りに行けるチャンス逃すようなヤツじゃなかっただろうが……ッ！ それともマジでロリコンになっちまったのか！？）

胸ぐらを掴みかからんばかりの勢いでそう言う東野に、俺はハッと目を見開いた。

確かに、ハーフ系美少女と、クール系美少女の後輩女子とお祭りに行くチャンスなど、一年前の俺なら歓喜していたシチュエーション！

(東野……俺が間違ってたよ)

(ふ……それでこそ俺の友達のマロだ。ついでにどっちか紹介してくれ)

(それは断る)

俺に彼女ができるまで、お前は独り身であり続けてくれ。

「そういえば、クラスでの先輩ってどんな感じなんですか？」

四人で並んで花火大会の会場へと向かう途中、会話の流れからアンナが東野へとそんなことを問いかけた。

「いや、俺はもう同じクラスじゃないからな。でも他のクラスでも評判はそんなに悪くないぞ。特に嫌われるようなことはしてないからな。クラスメイトの仇を取ったヒーローなわけだし」

「でもそんなにってことは悪い意見もあると」

なんでそんなに俺の悪い評判を聞いたがるんですかね、アンナさん？ 良い評判だけで良いじゃない。

東野は苦笑して答える。

「そりゃあ、目立てば当然僻みも出てくるさ。女の子カードばっか集めてキモイとか。人間にモテないからカードでハーレム作ってるだとか。実は神無月とデキてるだとか」

そ、そんな風に陰で言われてたのか……。というか、前二つはともかく、最後のは断固否定させてもらおう！

「あと……いや、なんでもない」

「なんだよ、聞かせてくれよ。隠された方が気になるだろうが」

俺がそう催促すると、東野はこちらを気遣うように続けた。

「まあ、これは気にしなくても良いと思うが……あとは、獅子堂を見殺しにした、とかだな。四之宮さんが襲われた日と、獅子堂が死んだ日と同じだったから、女の子は助けたけど、嫌いだっただ獅子堂は見捨てた、みたいな。なのに獅子堂の敵討ちをした、みたいに言われてるのがムカつく、とか。……獅子堂と仲の良かった奴だけが言ってるだけだけど」

「……………」

……まあ、そう言いだす奴は当然いるわな。

自分と仲の良かった友達が死んで、はいそうですかと簡単に割り切れるヤツばかりじゃない。

これで俺が事件を解決してなければ、不幸な事故、どうしようもなかったこと、と風化させられていくのだろうが、なまじ俺が解決に関わったせいで、俺ならば獅子堂を救えたのでは？ と考えてしまうのは、どうしようもないことだ。

もしも俺が彼らの立場だったとして、死んだのが東西コンビで、解決したのが南山だったら、理不尽と思いつつそういう想いが湧いてきた可能性はある。

「でもまあ、そういうのはマロと実際に話したこともないごく一部だよ。大半はお前を認めてるから安心しろ」

東野がフォローするようにそう言つと、話題を振った後輩組も悪いと思つたのかそれに続く。

「です。多少陰口叩かれてるくらいが健全ですよ。その分、好意的な人たちは自然に先輩を評価してるってことツスから」

「そうだぞ、我なんか未だにクラスで話す相手いないからな。一応我也事件の解決に寄与したはずなのに、まったく評価上がってないんだぞ」

「……小夜はマジでその口調だけでも直しなさいって。冒険者部での活動はそのままでも良いから」

織部のヤツ、キャラのために完全に学校生活を捨ててやがるな。ロックだぜえ……。

「逆に下級生ではマロの評判ってどうなの？」

「一年ツスか？ 悪くないですよ。と言っても、上の学年にいろいろ凄い冒険者がいるって程度みたいツスけど。……まあ、完全に上位互換がいるせいで女子からの影は若干薄めツスけど」

「師匠には勝てんわ。あらゆる意味で」

俺がそう嘆息すると、東野はニヤリと笑い。

「いやあ、そうでもないだろ。マロのウタマロに勝てるヤツは、日本人にはなかなかいないって」

「おま……！」

普通女子のいる場でそういうこと言うか！？

「先輩のウタマロ……？ どういう……あっ！」

遅れて気付いたアンナが俺の下腹部を見て顔を赤らめる。我らが部長は何気に下ネタに弱いのだ。

が、織部はそんなことはないらしく。

「先輩のは、そんなに、そのアレなのか？」

「具体的なサイズは控えさせてもらうが、マロは一年の水泳の授業の時、一人だけ学校指定の水着ではなく、市販の大きいサイズの水着の着用を学校に許可されていた……とだけ答えておこう」

「え、そんなレベルツスカ!？」

「やめろや! 普通に水泳の授業は俺のトラウマなんだぞ!」

一人だけ違う水着を履いている時のあの疎外感と、その理由を知った時のクラスメイトの驚愕の視線!

男子からは羨ましがられるときもあるが、基本的に俺のコンプレックスの一つなのだ。

そんな馬鹿話をしているうちに、花火大会の会場へと到着した。周囲には浴衣姿の男女で溢れかえり、前に進むのも一苦労な有様だった。

例年なら彼らに交じり、道端で花火を眺めていたモノだが、金を持っている今年は違う。

迷うことなく、フェンスで遮られた有料の観覧席へと入る。

東野がバッグから取り出したレジャーシートに座ったアンナが、並んだ屋台を指さし俺に言った。

「あ、先輩、屋台が出てますよ。うち、こういう屋台のモノって食べたことないんすよね。りんご飴とか、先輩奢ってください」

「お前、金持ってるくせに……。しょうがねえな。なんか買ってるからみんなちよっと待ってる」

「ありがとうございます!」「悪いな!」「礼を言おう」

りんご飴、チョコバナナ、焼きそば、焼き鳥といった定番の物を買って回っているうちに、空で花火が咲き始めてしまった。

しまったな……ちよつと買い過ぎたか。と頭を掻いていると……。

「先輩」

「お、小夜」

「少しお持ちしましょう」

「悪いな」

有難くりんご飴とチョコバナナを持ってもらう。

「とうかすでに買った分を持ってみんなのところへ戻っても良いんだぞ？」

「いえ、せつかくなので一緒に並びますよ」

「そっか……」

俺も一人では寂しかったので織部の気遣いに甘えることにした。

二人で列に並びながら夜空に打ちあがる花火を眺める。

観覧席で見るとは違い、角度的に建物に遮られて見えない部分もあったが、不思議と気にならなかった。

「……先輩」

「ん？」

ふいに、織部がポツリと呟く。

彼女は少しの間言い辛そうに、顎のラインで切りそろえられた髪先を弄っていたが……やがて。

「その……例の約束についてはどうなりましたか？」

「約束？」

俺と織部の間で何か約束なんてあっただろうか？
織部はますます顔を赤らめ、囁くように呟いた。

「あの……ホラー映画を、一緒に見に行く……って」

「あっ！ ああ！」

そう言えば、事件の捜査中、そんな話をしたこともあった。

具体的な日付を決めていなかったこともあり、てっきり社交辞令の類と思っていたのだが……。

「そうだな、今面白いホラー映画って何がやってたっけ？」

俺がそう水を向けると、彼女は待つてましたとばかりに話し始めた。

「実は、ステイブ・キング原作のホラー映画のリメイクがこの夏にやってまして。私、リメイク前のヤツが大好きですっと思いたいと思ってたんです。本当は去年公開の予定だったんですが、出演者やスタッフに原因不明の不幸が相次いで一年延期になったという曰く付きの映画でして……」

静かに、しかし頬を紅潮させて楽し気に話す織部。

花火に照らされたその横顔は、花火なんかよりも俺の目を惹きつける何かがあった。

第六話 裏切り（後書き）

【Tips】カードのランクと初期戦闘力（今更ですが、何気にTIPSを書いていなかったの……）

カードのランクは、大きく分けて六段階に分けられている。しかしこれは、カード自体に記載されているモノではなく、人間側が勝手に初期戦闘力と出現する階層で大雑把に分類したもの。

そのため、スキルを鑑みればワンランク上でもおかしくないカードや、そのランクにしては弱いと評価されるカードも存在する。

A・1000以上

B・500以上999以下

C・200以上499以下

D・100以上199以下

E・50以上99以下

F・49以下

第七話 突然のオファー

夏休み、七日目。

この日は、久しぶりのモンコロの試合日だった。

前回の試合から大体三週間ぶりだろうか。今までは一週間に一回か、二週間に一回だったので、少し期間が空いている。

事件のこともあり、俺の選手としての価値は高まっているはずだが、これほど期間が空いたのは、番組側も俺の試合相手をセッティングするのによほど苦慮しているのだろう。

タッグマッチで人気差を埋めると言っても毎回だと飽きられるかな。

今回の相手はまだ明かされていないが、一対一のスタンダードールなのは聞いている。

ただ、今回は珍しく番組側から座敷童、ライカンスロープ、ヴァンパイアを使って戦ってくれと使用するカードに指定があった。

俺のカードに有利な種族を使うことでオッズを均等にする試みだろうか。

そんなことを考えながら俺は、リングへと向かい――。

『――今日のキャットファイトは、特別企画！』日曜日のダウンタウン』とのコラボでお送りします。今回実証する説はこちら！プロ冒険者でも、がつつり育成されたアマチュアのカードに対して新品のカードを使って戦ったら、さすがに厳しいんじゃないか説――！』

『おおおお――！』

電光掲示板に表示されたお馴染みのテロップと、実況のアナウン

スに上がる観客たちの大歓声。

それを聞きながら、俺は「なるほど……そうきたか」と苦笑した。

「今回プロ冒険者には、番組側が用意したアマチュア冒険者のメイ
ンカードと同じ種族のカードを使っただきます。これらのカー
ドは迷宮からドロップしてそのまま売られた物を購入し、戦闘力の
みレベルアップの魔法で成長限界にした新品同然のカードとなつて
おります。後天スキルの詳細については伏せさせていただきますが、
マイナススキルはついておりません」

つまり、これはハンデ戦なのだ。

普通にアマチュアとプロが戦つては、勝ち目はない。

そこで、アマチュアの主力カードと同じ種族の新品のカードで戦
わせることで、勝敗の行方をわかりにくくする、という作戦なのだ
ろう。

プロが使うのは、番組が用意したマイナススキルこそないものの
普通のカード。対して、俺が使うのは名づけをして育成されたカー
ド、しかも座敷童は霊格再帰持ち。

これなら選手の腕に大きな差があつても良い勝負ができるのでは

……？

そう考えたのだろう。

しかし、日曜日のダウンダウンとは……。

確かにあの番組が企画しそうな試合だ。

実際、俺自身も興味がある。

今の俺が、プロ相手に同じカードを使ってどれほど戦えるのか……

…。

ただ一つ心配があるとすれば、ウチの蓮華とユウキが完全にラン
ク詐欺つてことだろうか。

プロクラスともなると手に入れたばかりのカードでも確実にフル
シンクロを、最低でも90%以上のシンクロが使えるだろう。

しかし、いくらフルシンクロにより通常の二倍近い戦闘力を引き出せるとはいえ、そもその馬力が違うのでは大分苦しい。

蓮華とユウキは、同種の二倍の戦闘力を持ち、俺も一枚だけならフルシンクロすることができる。

ぶつちやけ、シンクロによる戦闘力の上昇という点では俺とプロの間に差はないことになる。

そうなってくると問題となるのは後天スキルの差となるわけで…。

俺の心配をよそに、選手の入場が始まる。

『まずは赤ゲートから登場するのはお馴染みの北川歌麿選手！ 地味な見てくれとは裏腹に、霊格再帰の発見や凶悪事件の解決に尽力するなど話題に事欠かないキャットファイトのスター選手だ！ 鉄壁のガードを持つ吸血鬼、忍術を操るクノイチ人狼、そして霊格再帰を持つ座敷童の万全の布陣で挑戦だ〜！』

地味な見てくれは余計だろ。

そう口をへの字に曲げていたら、地味な見てくれと言われても仕方ないような相手が出てきた。

『対する白ゲートは、あのREIKAレイカの弟子ということで話題沸騰中！ REINAレイナ選手です！』

白ゲートから姿を現したのは、二十代後半ほどの妙齡の美女だった。

天使の輪の出来た茶髪のロングヘアに、ちょっとキツめだが美しい顔立ち、官能的な身体つきを強調するようなリングコスチュームを身に纏っている。

観客席へと向けて笑顔で手を振るその姿からは、芸人特有のキラキラオーラが迸っているように見えた。

おいおい！ マジかよ、本物のレイナじゃん……！

レイナは、現在絶賛ブレイク中のタレント冒険者だ。

元は女子総合格闘家で、ぶっちゃけ現役の頃はビジュアル優先で格闘家としては大した実力ではなかったらしいのだが、美しすぎる格闘家としてそこその知名度とファンを持つ選手だった。

強くて美しい選手が戦う姿、あるいは美人がボコボコにされる光景というモノには、一定の需要があるものだ。

結局、自分の力に限界を感じて引退してしまったのだが、その後彼女は冒険者へと転職し、ダンジョンチューバーとなる。

その動画は、一言で言うところREIKAの動画の模倣で、彼女はREIKAチルドレンと呼ばれる者の一人だった。

それでも元々そこその知名度を持っていたことと、美人であることもあって彼女はREIKAチルドレンの中では代表格のダンジョンチューバーとなり、REIKAとコラボしたことも何度があった。

そんな彼女が、ブレイクし始めたのは数か月前のこと。プロライセンスを取得したことがきっかけだった。

星の数ほどいるREIKAチルドレンの中でもプロまで行ったのはレイナが初めてで、TV局はこぞって『REIKAの弟子！』と彼女を持ち上げた。

……ただ、この『REIKAの弟子』という触れ込みについては、熱心なREIKAファンからは若干懐疑的ではあった。

第一に、プロ合格後にREIKAから祝福メッセージを貰い、過去のコラボ動画内でいくつかレクチャーは受けてはいるものの、本人からは公式で弟子認定されていないこと。

第二に、プロフェッサー型の冒険者を自称し、時間ができたらま

た迷宮攻略に専念したいと公言しているREIKAに対し、レイナは明らかにタレント業に注力し、モンコロを主な舞台としているグラディエーター型であること。

これらからレイナはダンジョンチューバーとしての弟子ではあるかもしれないが、冒険者としての弟子とは認められていない、というのがコアなREIKAファンの見方であった。

俺個人としてもレイナがREIKAの弟子というのは、冒険者の感覚から言っても『うーん……？』という感じであった。

動画外のこととはよくわからないが、動画内において特にレイナがREIKAから指導を受けているようには見えなかったからだ。

また動画の内容についても『迷宮やカードという存在に一般人にも興味を持ってもらう』『事を目的としているREIKAの動画に対し、レイナのそれは『冒険者である自分に興味を持ってもらう』事を目的としているような節が見られた。

まあ、これは俺がREIKAファンであるが故に偏見かもしれないが……。

だが、それでもレイナがソロでCランク迷宮を踏破し、プロライセンスを取得しているのは事実である。

冒険者歴も五年と長く、俺よりも経験、リンクの技術ともに高いことは間違いない。

カードの性能はこちらが上とはいえ、胸を借りるつもりで挑むべきだろう。

「今日はよろしくね、北川君」

「よろしくお願ひします。いつもTVで拝見させてもらってます」

試合開始の前に、闘技場の中央で握手をする。いつもはこんなことをしないのだが、今回はレイナの方から歩み寄ってきて握手の手を差し出してきたため、俺もそれに応えた形だ。

間近で見たレイナは、予想以上に美人で若々しかった。芸能人でプロ冒険者と言うことで、美容に使う金はたっぷりあるのだろう。それに、結構胸もデカイ。

「こちらこそ、君のことは知ってるよ。キャリア一年未満でプロに近いレベルの三ツ星冒険者なんて嫉妬しちゃう。今日は手加減できないと思うけど、ごめんね?」

「いえ、プロの実力を間近で拝見できるチャンスと思って頑張ります」

にこやかに笑顔を交わし、定位置へと戻る。

……さすが元格闘家のプロ冒険者と言ったところか。握手を交わした手は思った以上にゴツゴツとして力強かった。

これは、もしかすると予想以上に苦戦するかもしれん……。

————そうして試合は、オッズでは俺が不利という状態から始まった。

それぞれの選手のカードの後天スキルなどはマスクデータとなっている。

どれだけ蓮華たちが反則的なスキルを持っているか知らない観客たちからみれば、靈格再帰があるとはいえ、多少のカードの性能差などアマチュアとプロの技量の差には及ばないと考えたのだろう。

……あるいは、単純に俺とレイナの人気度の差か。

『それでは試合開始！ 両者カードを召喚してください!』

『——召喚!』

実況の試合開始の合図と同時に俺たちはカードを召喚する。

さて、まずは観客向けのパフォーマンズから、と俺が考えた瞬間。

『ッ!? マスター!』

蓮華への敵の人狼の奇襲を、間一髪、イライザが献身の盾で受け止める。

「開幕! 奇襲かよ……!」

まずはファンサービスから、というキャットファイトの暗黙のルールを知らないのか、あえて知らないふりをしているのか。レイナの初手は奇襲だった。

イライザと罅迫り合いをしている赤髪の人狼がニヤリと笑う。

『ごめんね、北川君。霊格再帰はさすがにキツイから速攻で沈めさせてもらっよ』

同時にグンツと人狼の膂力が倍増する。……いきなりフルシンクロか!

こちらも対抗し、イライザとフルシンクロする。それに気づいたレイナ選手と人狼が顔を顰めた。

『む、もうフルシンクロが使えるなんて、生意気……!』

満月でもなく変身もしていない人狼と、血を蓄えたヴァンパイアでは、さすがに膂力はこちらが勝るようだった。

一気に押し返してそのまま組み伏せ――。

『ッ!?』

――ようとしたところで、巧みにすかさず関節を極められた。

……勝負勘が良い！ さすがに近接戦では相手が一枚上手か！
素早く腕を霧化して、技から逃れる。

すると相手の人狼も小さく舌打ちをして、素早くバックステップで自分の陣地へと戻って行った。

仕切り直し。互いに睨みあう。

実況の声も耳に入らない俺に対し、レイナ選手は余裕の表情。

今のやり取りで自分の有利を確信したような顔だった。

実際、近接戦で圧倒的アドヴァンテージを持っているのはあちらだ。

マスターの格闘技能と武術スキルは、単純な足し算の関係にある。武術スキルは古今東西の武術の基礎の集合体である。そこからどういった動作を引き出していくかはカードやマスターのセンスや経験次第となる。

この点、格闘技経験者はすでに自分の型を持っているため、武術から最適な動作を引き出すことに長けている。

わかりやすく例えるなら、武術スキルを持つカードは格ゲーのキアラのようなものだ。同格キャラでの勝敗は、プレイヤーのセンスと練習量がモノを言う。

……やはり、出し惜しみは無しだ。霊格再帰を使う。

霊格再帰を使っつてはプロ相手にも圧勝してしまうかもしれない、それではマズイか……などと要らぬ心配をしていたが、とんでもない。

『蓮華、霊格再帰だ』

『了解』

蓮華が、黒髪の童女から、妙齢の美女へと姿を変える。

周囲に蓮華の花の香が漂い、神のカード特有の波動が広がった。

それを見たレイナ選手がさすがに顔色を変える。

さあ、ここからが本当の勝負だ。

俺は気合を入れ直し、全力でレイナ選手へと挑みかかった。

そして――――。

数十分後。

俺は一人、選手控室で頭を抱えて頂垂れていた。

――――瞬殺してしまった……。

完全にやり過ぎた。

霊格再帰した蓮華の戦闘力は、2300にもなる。内訳は、吉祥天の初期戦闘力×2（1500）＋座敷童成長分（700）＋霊格再帰（100）だ。

この数値は、最高ランクのBランクカードの成長限界をも超えている。

それがどういふことなのかということを思い出したのは、小手調べにライトニングを人狼へと向けて撃ったところ、一発で瀕死へと追いやってしまったのを見た時だった。

それを見たレイナ選手と言ったら……。ドヤ顔が一瞬でスツ……っていう顔になってたからな……。

その後、すぐに回復魔法を使ってカバーしたのはさすがだったが……まさかレイナ選手がフルシンクロを一体しか使えなかったとは考えてみれば、プロとは言え、三枚以上同時にフルシンクロできる者は少ない。

シンクロ率を高めていくことと、複数のカードとシンクロするのは、似ているようで全く異なる技術だ。

例えるならシンクロ率の高さが上手い字を書く技術だとすれば、複数枚のシンクロは左右の手でバラバラの文字を書く技術だ。

当然、シンクロする枚数が多くなればなるほどその難易度は飛躍

的に上昇していく。両手が埋まったら脚や口を使って字を書くしかないからだ。

彼女がプロになってから一年も経っていないことを考えれば、複数枚同時のフルシンクロが使えなくても無理はない。

一方で、こちらは戦闘力2300の吉祥天と、戦闘力1600のライカンスロープ、フルシンクロ可能なヴァンパイアと、実質的フルシンクロ三枚分以上の戦力だ。

それに気付いた時のレイナ選手の顔は『ちょ……お前フルシンクロ三枚できるのかよ』と語っていた。

途中でフルシンクロを止めて手加減するのもおかしいので、そのまま蓮華の力ということにして押し切ったのだが、これはちょっとマズイ勝ち方だろう。

ハンデ戦だったとはいえ、プロに圧勝したとなると、いよいよ本格的に対戦相手がいなくなって干されるかもしれない。

キャットファイトは、ロストするリスクも低く大金を稼げる良い場だったのだが……。

「北川さん、今ちょっと良いですか？」

俺が頭を抱えていると、顔なじみの番組スタッフ、田中さんが訪ねてきた。

俺が学生トーナメントに出る前から俺のTwitterをフォロワーしてくれていたという彼とは、待ち時間などに時折雑談をする仲である。

今日もそんな感じかと思ったのだが、彼の申し訳なさそうな顔にどうやら違つと察した。

「どうしたんですか？ そんな改まって」

「いや、ちょっと北川さんにお願ひがありました」

「お願ひですか？ ……日曜日のダウンタウン関係ですか？」

「あ、そちらは関係ないです、大丈夫です。……実は、キャットフ
アイトで夏の特番を企画しております」

「夏の特番」

「ええ、たくさんの三ツ星冒険者を集めて、誰がDランク迷宮を一
番早く踏破できるかを競う、という番組なんです」

そう前置きして、田中さんは企画を簡単に説明し始めた。

……ふむ、簡単に纏めるとレースとバトルロイヤルを足して二で
割ったような競技のようだ。

総勢百名の選手が集められ、女の子カードのみを使って三つのD
ランク迷宮の踏破タイムを競う。

選手はそれぞれ『星』というポイントを所有し、これを互いに賭
けあつて戦う、と。

この『星』はそのまま番組側からの選手への出演料であり、ゴー
ル後にお金やカードと交換可能。もちろん最初に一律で配られる十
個の星とは別に、レースの着順によってもドカンと星を貰える。

星の換金レートは一個百万なので、選手一人当たりの出演料は一
千万程度か。

モンコロの出演料としては、やや割が良いと言った感じ。ただ、
ロストの可能性は通常のキャットファイトの比ではないだろう。

「HP上で募集した一般公募とは別に、視聴率を確保するために番
組側がオフアールした特別枠を用意していたんですが、実は一人出ら
れなくなっちゃって」

「それで自分を、と」

「ええ、さっきの試合を見た上の人が『彼で良いんじゃないか』っ
て。急な話で申し訳ないんですけど……」

「それっていつやるんですか？」

「それが……実は一週間後です」

「一週間。うーん……」

モンコロレースか……。正直興味がそられないこともないけど、来週はさすがにキツイなあ。冒険者部の合宿とかもあるし。

俺がちよつと渋っているのを見た田中さんは、両手を合わせて拝んできた！

「お願いします！ 結構スケジュール的に厳しくて北川さんで絶対OK貰ってこいって言われてるんすよあ。ほら、賞品とかも結構豪華なんで、せめてこれ見て判断してみてください！ ね？」

押し付けられるように渡されたルールブックと賞品のリストを見ている。

目玉商品は、星600個で交換できるBランクカードのキマリス。一着で貰える星が500個なので、一着を取った上でそこそこ戦わなければ手に入らない感じだ。

キマリスはソロモン七十二柱と呼ばれるカードの一枚であり、ソロモン七十二柱の特徴として眷属召喚の上位スキルとされる『軍団召喚』の能力を持つ。軍団召喚は眷属召喚の能力を持つ眷属を複数呼び出す能力であり、圧倒的人気を誇る。

その中でもキマリスは希少な装備化スキルを持つカードであり、とても六億で買えるカードではない。最低でもその二倍、三倍はする。

換金すると星の価値は低く、カードを選ぶと星の価値は高くなるのだろう。

キマリスは魅力的だが、正直ロストのリスクを背負ってまで出場するほどじゃないなあ……と思いつながら何気なくリストを一枚捲り、俺は思わず驚きの声を漏らしかけた。

おいおい、マジか。蓮華が運命操作をしたわけじゃない、よな？

——
——
——そこには、零落スキル持ちのサキュバスの名前が並んで
いた。

第七話 突然のオファー（後書き）

【Tips】マルチシンクロ

シンクロリンクの応用で、複数枚同時にシンクロする技術。一つのことにとことん集中するフルシンクロと異なり、マルチシンクロは同時並行的な作業を要求される。

書道で例えるなら、シンクロ率の高さが字の上手さならば、マルチシンクロは両手で違う字を書いていく技術である。

男性はフルシンクロ、女性はマルチシンクロの方が得意な傾向がある。

第八話 夏！ 合宿！ 海！ 水着イベント！（前書き）

あとがきに、『やまだやまだ@yamada | yamada44
様より頂きました、水着イラストが載っています。
いつも本当にありがとうございます！

第八話 夏！ 合宿！ 海！ 水着イベント！

モンコロの翌々日。夏休み九日目。

俺はなぜか水着を着て海辺でビーチエアに寝そべっていた。

視線の先には、ごみ一つ落ちていない白い砂浜とエメラルド色の海、それと——水着姿で遊ぶカードたち。

先ほどからビーチバレーに興じているのは、蓮華、メアのキッズコンビと、師匠のアラディアとアナのエルフのクールコンビだ。

モンスターの力で叩いても壊れないモンスタースポーツ用のバレーボールと共に、激しい言葉の応酬を繰り返している。

「オラッ！ くたばれ、糞魔法少女！」

「魔法少女じゃない……私は立派な魔女。大人の女……」

「どこが大人の女だ！ このちんちくりんが！」

「それ、貴女が言う……？ それに私の方が胸も身長も大きい」

「アタシは美女形態という切り札があんだよ！」

「それは反則。ノーカウント」

蓮華とアラディアが不毛な言い争いをする横で、メアとエルフも舌戦を交わしている。

「アンタ、メアとキャラ被ってんのよ！」

「だからキャラなんて全く被ってないと言ってるでしょう……！」

「これで負けた方がイメチェンだからね！」

「クッ、相変わらず話が通じない……！」

四名のビーチバレーはなかなかの白熱振りだったが、残念ながら全員がロリ体型かスリムな胸元の持ち主だったため、飛んだり跳ねたところで揺れるモノがないのが残念なところであった。

ちなみに、蓮華は赤と白を基調としたスポーティーな水着を、メアは白とピンクのストライプ柄のビキニを身に纏っていた。

蓮華は色っぽさこそないが彼女らしい快活さを感じさせ、メアは中学入学したての女子が背伸びして大人っぽいのを選んだような可愛らしさがあり、二人ともよく似合っていた。

アラディアのジャネットもワンピースタイプの水着が、エルフのターニヤはクロスデザインのビキニが似合っていたが……やはり色気はあまり無かった。

審判を担当しているユウキも、身に着けているのは青色の競泳水着で、色気よりも健康的な魅力が前面にくる。

色気……という意味では、やはりイライザと鈴鹿の大人組の出番だった。

そのイライザはというと、彼女は寝そべる俺の横でゆったりと扇で扇いで心地よい風を送ってくれていた。

彼女が身に着けている水着は、黒のホルターネックのビキニで、豊満な胸元とスラリと長い美脚のラインが色っぽい、大人のデザインだ。

シースルーのパレオと麦わら帽子風の黒いビーチハットがちょっとセレブっぽいというか……なぜか愛人風の色気があった。

そんな彼女にビーチチェアに寝転びながら大きな扇で煽ってもらって、自分が大富豪になったかのように錯覚しそうになる。

さて、大人組のもう片方はというと、ビーチパラソルの下で涼んでいるところだった。

その巨大な乳房を挟みつぶすように体操座りをして、退屈そうに

蓮華たちのビーチバレーを眺めている。

と、俺の視線に気付いた鈴鹿が、ニヤアと笑みを浮かべてこちらへとやってきた。

「ねえ、マスター。どう、この水着は？ マスターが気に入りそうなデザインにしてみたんだけど、似合ってる？」

腰のパレオをカーテシーのように持ち上げて俺に感想を問うてくる鈴鹿。

それをじっくりと見ても良い、という許可と受け取った俺は遠慮なく観察させてもらうことにした。

鈴鹿の水着は、紫を基調としたレースアップのワンピースだった。レースアップとは、胸の谷間などが編み上げとなったデザインで、普通はセクシーだがやり過ぎにならないようにという趣旨の水着……のはずなのだが、彼女の暴力的な質量のせいで完全に胸元を強調するデザインとなっている。

イライザの水着が、清楚ながらも漂う大人の色気だとするならば、鈴鹿のそれはもう完全にAV女優とかグラビアアイドル方面の工口さだった。

どっちが好きだと言われたら、俺は躊躇ったのちにどっちも……とはにかむだろう。

ちなみに、彼女たちが身に着けている水着は、無駄にパツクでダブリまくった人工魔道具の『マーメイドの水着』である。

この魔道具には水中での動きを補助してくれ、息を長持ちさせてくれるメインの効果のほかに、持ち主の望む通りのデザインに変化する効果もついていた。

ウチのカードたちが多彩な水着を着ているのはそのためだ。

無駄に十一個もダブったこの魔道具ではあるが、この景色を見ると『まあいいか』という気持ちになるから不思議だ。

それによくよく考えると、俺とアテナ、ニケ、メイドマスターのシルキーの分を考えるとそんなに数に余裕がなかった。

店にまとめ買いしに行くのも恥ずかしいし、パックで当たって良かったと思うことにしよう。

そんなことを考えながら目の保養をしていると……。

「マロ……凄いだらしな顔してるよ……」

いつの間にかやってきていた師匠が俺の顔を見てあきれ顔で言う。

師匠は、膝下まで隠れる大きな水着に、上はTシャツとパーカーというガチガチに肌を隠す格好をしていた。

だが俺はそれには触れずに。

「そう言えば師匠。この前ギルドパックを買ったんですけど、あの薬が当たったんであげますよ」

「お、ありがとう！ アレもなかなか手に入りにくいモノだから助かるよ。えっと、定価で良いかな？」

「タダで良いツスよ。色々世話になってるんだし」

「そうはいかないよ。こういうのは親しき仲でもきつちりしとかないとね。何ならDランクカードとの交換にしようか？」

そう言うと、師匠はカードケースからカードの束を取り出して渡してきた。

とりあえず受け取り眺めていくが、いまいちピンとくるカードはない。

女の子カードも時折混じってはいるものの、この間のパックでDランクカードの種類がだいぶ増えたこともあり、俺のコレクターとしての欲を刺激するようなモノもなかった。

と、その時。

「お、メニアがあるじゃないツスカ。これとか大丈夫ですか？ 差額はお金で埋めるってことで」

「メニア？ ああ、フェニアを手に入れたんだ。うん、良いよ。お釣りは要らない」

「師匠……自分でこういうのはきっちりしないとって言ってたくせに」

俺が呆れながらそう言うと、師匠はニコツと微笑み。

「需要と供給だよ。お金があってもいつも手に入るとは限らないモノと、一枚だけじゃ使い道のないカードとの、フェアな交換さ」

「……ま、師匠がそう言うなら良いですけどね」

この話題はデリケートな部分でもあるため、俺はそう言って引き下がった。

「それにしても、予定とは少し違っちゃったけど、ちゃんと合宿できて良かったよ」

「ですね。……俺の都合に合わせてもらっちゃって申し訳ないですけど」

俺はそう言いながら、この海の迷宮へとくることになった経緯へと思いを馳せた。

一一一昨日。夏休み八日目、昼。

俺たちは、アンナの呼び出しを受けて学校近くのファミレスへと集まっていた。

「この度は、私の不徳により、合宿の開催に多大なご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

一週間の勾留から保釈されてきたアンナが、開幕そう詫びて頭を下げる。

その顔は罪悪感とともに、一時の自由を得たことによる解放感に溢れていた。

もっとも彼女は一週間後に再び補習に拘束されることが確定しているのだが。

「というわけで！ 次の補習が始まるまでの短い間ではありますが、合宿をしたいと思えます！」

『おお〜！』

アンナの宣言に師匠と小夜がパチパチと拍手をする。

それをウンウンと頷きながら受け止めていたアンナが、ふと一人だけ拍手をしていない俺に気付き首を傾げた。

「それについてなんだが……」

俺はおずおずと手を上げ、言った。

「すまん、今回はちょっと俺参加できそうにない」

俺の不参加表明に、冒険者部の面々に衝撃が走る。

「ど、どどどど、どうしてッスか？」

「実は……」

動揺するアンナに、俺はモンコロレースに出ることになったこと

を伝えた。

「というわけで、すまん！ どうしても賞品の零落持ちのサキユバ
スが欲しいんだ」

テーブルにゴンと頭を打ち付け詫びる俺に、アンナは「なるほど
……」と頷くと。

「そう言うことなら、今回の合宿はいつそのこと、そのレースの対
策に当てることとしましょう」

思わぬ提案に俺は目を丸くした。

「そりゃありがたいが……いいのか？」

「元々ウチのせいで計画自体グダってますからね。一週間じゃ海外
遠征とかCランク迷宮攻略とかは厳しいですし……。むしろ適当な
迷宮を攻略するより明確な目標ができた分、モチベーションが上が
って好都合ツス！ 皆さんもそれで良いツスか？」

アンナの確認に、師匠も織部も乗り気で頷いてくれた。

「もちろん」

「むしろそっちの方が楽しそうだ」

「おお！ ありがとう！」

やはり持つべきものは仲間だと俺は感動に打ち震えた。

「できれば冒険者部全体で参加したいくらいツスけど、一般公募が
もう打ち切られてるんじゃないツスね。冒険者部代表として先
輩になんとしても優勝してもらいましょう。とりあえず大会のルー

ルについてからまとめてみるとしましょう」

〈基本ルール〉

・選手の数には全部で百名。その全員が三ツ星冒険者。使用して良いカードは、女の子カードのみ。

・選手は、合計三つのDランク迷宮を踏破し、その合計タイムを競う。

・選手はスタート時に一律十個の星とゴール時に着順に応じた『星』を貰える。

・一着は星を五百個、二着は三百個、三着で二百個の星を獲得できる。

・道中で他の選手と遭遇してしまった場合は、この『星』を賭けて勝負。『星』を失った選手は失格。

・星はゴール後に賞品のカードやお金に換金可能。最初に配られる星が出演料の代わりとなるわけだが、ゴールできなかった選手の『星』は換金不可。

・賞品を選べる順番は着順の早い方とする。同着の場合は、星の多い方を先着とする。

・タイムリミットは、一週間。万が一誰も完走できなかった場合、その時点で所有している星の換金に応じる。

・安全地帯を破壊するような行為の禁止（安全地帯付近での戦闘禁止）。刑事罰に問われる行為の上、番組側としても企画を中止せ

ざるを得ないため賠償請求をさせてもらう。その他、窃盗・暴行など法律・公序良俗に反することは全般禁止。一発失格の後、通報。

・レース中に生じた選手のありとあらゆる損害は自己責任とし、番組はこれを補償しない。ただし、緊急時の救助要請は番組が行うモノとし、救助費や治療費は請求しない。

・イレギュラーエンカウントの発生が確認された場合は、レースを一時休止とし、アナウンスがあるまでその場で待機（最寄りの安全地帯への避難は可）。イレギュラーエンカウントの討伐及び、選手の救助は番組のプロ冒険者が請け負うが、プロが討伐を失敗したとみなされた時はその時点でレースを中止とする。

・やむを得ない事態によりレースが中止された場合、その時点で獲得している星一つにつき100万円の報酬を支払う。また、その時点で踏破階数の多い順に三名に星百個を別途支払うモノとする。

↳補足ルール

・レース中の魔道具の使用は基本的に自由とする。ただし、召喚系の魔道具は不可。

・ゴールまでのルートは最短ルートではなく、道中のチェックポイントを探し当て、通過しなくてはならない。チェックポイントを通過せずに、その次の階層へと移動してはならない。チェックポイントでは虚偽察知のスキルを使った不正チェックも行われる。

・チェックポイントは魔道具により隠されているが、各階層にヒントがちりばめられているので、まずはそれを探すべし。

・選手は一人一つ撮影兼不正防止用のドローンが配布される。このドローンを自ら破壊したり、相手のドローンを破壊した場合一発で失格。不慮の事故で壊れた場合は、すみやかに最寄りのチェックポイントで新しいドローンを貰わなくてはならない。

・三つの迷宮の内、二つはどの順番でクリアしても良いが、残りの一つは最後に踏破しなくてはならない。迷宮はそれぞれ、真昼の海と地下迷宮。最後の迷宮は二つを踏破してからの発表。

・他の選手と遭遇一一互いの距離が半径十メートル以内に一瞬でも接触一一した場合、三分以内に『闘争か逃走』を選択し運営へと送信。選択しなかった方は、自動的に逃走を選択したとみなされる。

・闘争を選んだ場合、星をいくつ賭けるかを同時に宣言。賭ける数一つでも多い方は、場に最大四枚までのカードを出すことができる。数が少なかった方は、三枚まで。同数の場合は両者三枚。敗者は賭けた星を渡し、一時間その階層で待機。数が少なければ負けた時のデメリットも少ないが、戦いには当然不利となる。

・逃走を選択した場合、星を一つ渡すことで戦闘を回避することができる。ただし逃走を選択した側は一時間その階層で待機しなければならぬ。

・互いに逃走を選択した場合、または、互いの距離が50メートル以上離れた場合は、戦闘自体が回避される。十分間は同じ相手と接触判定が行われなくなる。

・互いに闘争を選んでおきながら階層を移動する、安全地帯やチェックポイントに逃げ込む、大きく距離を取るなど、戦闘が起きなかった場合、逃走したと判断される選手を敗北とする。

・闘争中以外に選手やカードに直接的に危害を加える行為をしてはならない。また、通路を物理的に塞ぐなどの妨害行為をしてはならない。

・レース開始一時間以内、及び各階層の安全地帯、チェックポイントでは、他の選手との接触判定は行われぬ。

・星は一個につき二百万円かDランクカード一枚で補充可能。購入可能地点はスタート地点と各チェックポイントにて。ただし、この方法で補充できる星は十個まで（所有する星の数が十以上の場合は補充不可）。

↳特殊ルール

・番組側からは時折特殊ミッションが発令される。

・ミッションの結果次第では、プロの冒険者がハンターとして放たれることも……。

↳バトルのルールについて

・戦闘に使用可能なカードは、デッキに登録された十枚のカードに限る。カードをすべてロストした場合はリタイア。

・勝敗は、降伏宣言か、先にダイレクトアタックを受けた方、及び召喚したカードが全滅した方を負けとする。またデッキ登録したカードが三枚を下回った者は、リタイアとする。

・冒険者保護のための防御用の魔道具は、最初に十個配られ、チェックポイントで補充される。万が一魔道具を使い果たした場合、バトルは禁止。速やかに直前のチェックポイントに戻り、防御用の魔

道具を補充しなくてはならない。他参加者に出会った場合、自分が防御用の魔道具を使い切っている旨を宣言し、相手に星を一つ渡してバトルを回避しなくてはならない。一度星を渡した相手には、次に防御用の魔道具を補充するまで星を渡す必要はない。

・冒険者同士の戦闘に遭遇した場合、これを妨害してはならない。また、負けて待機中の者に勝負を挑むことはできない。

・不正があつた場合星をすべて没収の上、失格。

……零落スキル持ちのサキュバスは、星150個で交換できる。

なので最低でも三着には入りたいところだが、交換が着順優先なので、確実に手に入れるためには優勝する必要があつた。

「なるほど……あえて所々穴を作つてはあるようツスけど、基本的に問題なさそうツスね」

ルールを一読したアンナが言った。

「穴？」

「色々あるが一番は、冒険者が徒党を組んで連戦を仕掛けることを禁止していないところと、防御用の魔道具を失つた冒険者は無条件で星を渡し続けなくてはならないところだな。優勝候補を潰すために波状攻撃的に攻撃を仕掛けてくるチームが出る可能性がある」

俺が首をかしげていると、織部が答えてくれた。

なるほど、敗者には一時間戦闘を挑むことはできないが、勝つた相手に挑んではいけないとは書いてないから……。レースでの勝利を諦めた相手を買収して、ライバルに嫉けるヤツが出てこないと

は限らない。

続けて師匠が言う。

「さらに言うと、冒険者同士の戦闘に乱入してはならないとは書いてあるけど、迷宮のモンスターとの戦闘中に勝負を仕掛けてはならないとは書いてないね。Dランク迷宮だから六枚まで召喚できるわけだけど、モンスターの戦闘中にバトルを吹っ掛けられたら多い分は引っ込めなくてはいけなくなる。しかもモンスターは基本的に最初に交戦してた方を優先して攻撃する習性を持つからね。戦闘中の選手に挑むのはそれだけで有利だ」

つまり、モンスターと交戦中に仕掛けられたら三つ巴ではなく二対一になるというわけか。勝敗はダイレクトアタックとパーティーの全滅のみだから、ダイレクトアタックするのがモンスターだったとしても勝敗はついてしまう。

道中のモンスターならそれでも選択の制限時間内に始末できるだろうが、問題は主との戦闘中だな……。

「まあ深く読み込んでいけば他にも穴を見つけられそうツスけど、それは実践を通して先輩自身に見つけてもらいましょう」
「実践？」

俺が首をかしげると、アンナは自信満々に胸を張った。

「はい！ 実際に、レースと似た環境の迷宮を使って、冒険者部でレースをやってみるんすよ。先輩は実戦形式で、先輩以外の部員は他の選手の想定ということだ」

なるほど、それは面白そうだ。

「まずは海の迷宮からいくとしましょう！今日は準備期間で、明日はウチが選んだ迷宮で現地集合とします！それでは解散！」

こうして、俺たちは冒険者だけの模擬レース合宿をすることになったのだった。

第八話 夏！ 合宿！ 海！ 水着イベント！（後書き）

Twitterにて『やまだやまだ@yamada_yamad
a44』様より水着イラスト頂きました！
いつも、本当にありがとうございます！

水着イラスト集合カラー

<i497490—152877>

パーカー蓮華

<i497493—152877>

スク水蓮華

<i497491—152877>

第九話 合宿 一日目(仮)

「お待たせしました」

後ろからの声に、ハッと我に返る。

振り返ると、そこには水着に着替えたアンナと織部の姿があった。アンナは、黒のワンショルダービキニ。白い肌と年の割にポリウムのある胸部が強調され、とても魅力的なことになっている。腰の括れと、足の長さは、さすが外国の血が入っていると聞いた感じだ。

一方の織部は、股下まである大きめの白いTシャツを着ていて中身は良く見えないが、微かに透けた部分からおそらく中身は赤色のビキニタイプと思われた。

「どうツスカ？　もしかしてえ、悩殺されちゃいました？」

腰に手を当て、挑発的に問いかけてくるアンナに、俺はしみじみと頷き、答えた。

「いや、良いわ！　スゲー良い。控えめに言つて、最高」

「えっ！？　……あ、ありがとうございます。なんかそこまで褒められるとなんかアレですね」

俺の手放しの賞賛に、照れ臭そうに頬を赤らめ、前髪を弄るアンナ。

これはイケるかも、と思った俺はちょっとリクエストしてみた。

「ちょっとポーズとか取ってみてくれよ」
「え〜？ …… こうツスカ？」

半身で前かがみになって右膝に右手を当てるポーズを取るアンナ。
うーん、胸の谷間が強調されて、素晴らしい。

俺は上着のポケットにしまっていたスマホを取り出し写真を撮りながら言った。

「うーん、いいね！ 顎をちょっと引いて、視線はこっちで。そうそう、上目遣いで。うん、バッチリ！ じゃあ次はグッと背伸びしてみようか」

「こ、こうツスカ？」

「いいね！ いいね！ 流し目で、こつちを小馬鹿にする感じで。そう！ それじゃ、腕組みしてみて」

「こんな感じツスカ？」

「良いよ、そのままちょっと前かがみになってみようか。 …… そうそう！ じゃあ次はちょっと水着を緩めてみようか！」

「は、はい…… ってするわけないでしょ！ 何をやらせるんスカ！」

……チツ、ここまでか。俺は内心で舌打ちをすると、写真を消せとか言われる前にさりげなくスマホをしまった。

「セクハラ！ これはもう完全にセクハラですよ！」

眉を吊り上げて憤慨するアンナ。 …… ノリノリだったくせに。

「マロ、凄いね。モデルの少女をだましてエッチな写真を撮るカメラマンみたいだよ」

「というか、アンナもちょっとチヨロ過ぎるだろう。友人として将来が心配になったぞ……」

師匠と織部が感心と呆れが混じったような表情で言う。

「小夜は、そのTシャツを脱がないのか？」

「今の流れを見て脱ぐと思うか……？」

チツ、先に脱がせてからにすべきだったか。まあ良い。この先いくらでもチャンスはあるだろう。

話題を逸らすためにも、そろそろ本題へと入ることにする。

「それで、これからどうするんだ？」

俺の問いかけにアンナは顎に手を当て。

「……そうですね、今日は初日ということで、みんな公平に一位を目指して勝負してみましようか。条件を色々変えてやるのは二周目からで良いでしょう。……せっかくなんで賞品とか決めてみますか？」

「ほう、例えば？」

「うーん、そうですね。一位が最下位に一つ命令できる、とかどうツスカ？」

ニヤリと笑うアンナ。俺は勢いよく挙手した。

「はい、質問です！」

「……なんスか、改まって」

「その命令はエッチなものもありなのですか？」

俺の質問にアンナは顔を真っ赤にして吠える。

「アリなわけないでしょ！ 女子にメリットがないじゃないツスか！
ねえ、小夜？」

「……………」

「……………小夜？」

「……………えっ？ ああ、そう、だな」

織部は少しだけ頬を赤らめ、頷いた。

「…………と、というわけで！ 罰ゲームはエツチなのは無しってことで！ これは部長命令ツス！」

「了解。でも、罰ゲーム有りとなると、審判が欲しくなるな。それにチエックポイントとか、星とかはどうするんだ？」

もしアンナがチエックポイントを決めるとなると彼女だけ有利すぎる。

それは彼女もわかっていたのか、思い悩む顔をする。

これは自分が審判をやるべきだが、レースにも参加したいという顔だな。

それを見た師匠が言った。

「そういうことなら僕が審判をやるよ。三ツ星しか出られない大会ならそもそも僕は無理だしね」

「すいません、神無月先輩お願いしても良いツスか？」

「うん」

こうして師匠が審判をやることが決まった。

審判の仕事は、各チエックポイントやそのヒントを決めることと、部員同士が遭遇した時の賭けの裁定などだ。

「星についてはどうする？ 罰ゲームは一位と最下位にしか関係な

いんだろ？ 飴に意味がないとすれば単純に速さを競う勝負になっちまうんじゃないか？」

「星の代わりは飴玉で良いとして、上手く罰ゲームと絡めるのが思いつかないッスね……」

「先にある程度の罰ゲームのリストを作って、一位と最下位の飴の差額でリスト内から選べるってことで良いのではないか？ もし最下位が一位を上回っていたら罰ゲームも無しということだ」

「そういうことならみんながレース中に罰ゲームを考えておくよ」

う、師匠が考えた罰ゲームか……ちょっと怖いな。

「遭遇の判定については？」

「それについてはルールリストを見ていた時に思ったのだが、10メートルで遭遇というのはカードの索敵範囲を考えれば近すぎる。

これはほぼ確実に相手を見つけ近づいていると考えて良い距離だから互いに目視して声を掛けたら、で良いんじゃないか？」

「なるほど。星の賭け方については……同時に宣言して結果を師匠に連絡で良いか」

「闘争と逃走ではややこしいですし、デュエルとエスケープにしますか」

ああ……確かに、と頷く。

ということとは本番のレースでは専用の魔道具なんかを選手に配って、入力式にしそうだな。それなら後だしとかそう言うので揉めることもないだろうし。

でもそうになるとグレムリンなんか怖いが、そこらへんの対策はしてるんだろうか？

「その他、細かいルールは、まあ見つけ次第審判に連絡して、審判から全体にバッチで通信してください。もしかしたらそれで新しい

穴が見つかるかもですし」

「うん、わかった」

「ああ、それと、夜七時になったらそこでレースは中断で。みんなでご飯にして、一緒にキャンプしましょう」

「へえ、てつきり各自で済ますのかと思ってた」

と俺が意外に思いつつ言うと。

「何言ってるんすか！ それじゃいつもの迷宮攻略と変わらないでしょ！ せつかくなんだから合宿っぽいことしないと！ ……まあ最終日とかは他の冒険者の妨害とかを再現するために先輩だけ一人で寝泊まりしてもらいますけどね」

「俺だけかよ……まあ仕方ないけど」

「というわけで、朝と晩と寝る時は一緒ということ！ レースの範囲も全階層だと広すぎますし、初日は十階層までとしましょう。タイムリミットは夕食まで。明日は、十一階層から二十階層まで。それからは二十一階から最下層までを範囲としましょう。これなら一日以内に模擬レースができるでしょう」

なるほど、確かに全階層だと模擬レースの回数も二、三回が限界となるか。十階層ごとに区切るのが一番良いかもしれない。

「審判、チェックポイントは決まりましたか？」

「うん、出来たよ。適当だけどね。何度かやれば、運営が選びそうなところを予測できるかもね。こういうのはパターンができるものだし」

「確かに、階段の付近にはあまり置かないだろうしな」

師匠の言葉に織部が頷く。……プロファイリングが得意な織部なら、チェックポイントやヒントの場所を予め予想できるかもしれないな

い。

「さて、それじゃあ誰からスタートするかジャンケンで決めるとしましょうか」

そうして三回勝負の敵正なるジャンケンの結果、アンナ、織部、俺の順で一分毎の差をつけてスタートすることとなった。

「では、お先に失礼します！」

「先に行かせてもらおう」

アンナと織部を見送り、一分後、俺も海中の通路へと入る。

海辺型の迷宮は、その通路が深海へと続く海中トンネルとなっている。

不思議なことに、その次の階層の入り口は、また砂浜と空のある安全地帯へと繋がっていて、砂浜の安全地帯と海中トンネルを交互に行き来する形となっていた。

海中トンネルは、一見天然の水族館のようで面白いが、いつ水の壁の中からモンスターが飛び出してくるかわからないため気が抜けない仕様となっている。

また、地面には常に膝下まで波のある水がたまっているため、水中対策が必須となっていた。

もしもこれを怠るとかつての水虎との戦いのように動くだけで体力の消耗を余儀なくされることだろう。

今回はカードたちにはマーメイドの水着があることだし、俺も空飛ぶ絨毯に乗るため、移動は問題ない。

できればコンピュータ・パワーに乗れたらそれが一番良かったのだが、まあ水場では使えない以上仕方がないだろう。

「さて、まずはヒントのある場所に行かないとな」

スマホのマップアプリを起動し、師匠がマーカールしてくれたヒントポイントの場所を確認する。

ルールブックによればヒントの場所はわかるようになっていたことだったので、マップ上にポイントをマーカールし、そこに俺たちが到着したところで師匠が通信でヒントを教えてくれることになっていた。

だが、問題はそのヒントポイントにはアンナや織部も向かっているということだ。

彼女たちが向かう可能性が高いのは、入口付近と出口付近のヒントポイント。

最初からバチバチやり合うのは避けたい。誰かが戦っているうちに他の一人が先に進んでしまうのはあまりに痛い。

これは、本番のレースにも通じることだろう。

俺は多少遠回りになるものの、彼女たちが来なさそうなポイントへと向かうことにした。

————しかし。

「やはり来たな、先輩」

そこにはすでに織部が待ち受けていた。

ヒントポイントである小広場の真ん中で仁王立ちとなって不敵な笑みを浮かべている。

やはり、か……。予想通りの光景に、俺は内心で頷いた。

ユウキの索敵により彼女がそこで待ち受けているのはだいぶ前からわかっていた。

回避することも可能だったが、わざわざこうして接触した理由は一つ。

——もしかしたらここまでの道中でTシャツが濡れて中の水着が透けてんじゃない？

そう思ったからだ。

そして、俺は彼女の姿を見て予想が正しかったことを知った。

海水に濡れた白Tシャツは、彼女の肌へとぴったりと張り付き、その赤いビキニや体のラインを露わとしていた。

残念ながらその胸元は、着痩せすることではなく慎ましかであったが、くびれや腰から太もものラインは素晴らしいモノがあった。

うむ、やはり回避せずに接触を選んでよかった、と思いつつ俺は彼女へと話しかけた。

「小夜か」

「ふふ、まずはカードを仕舞って話そうではないか」

……………？

俺はやや怪訝に思いつつも、彼女が一枚のカードも召喚していないのを見て、特に断る理由もないか、と一度すべてのカードを送還した。

「良く俺がここへ来るとわかったな」

「先輩は普段、リスクを回避する傾向がある。ファミレスでも新しいメニューではなく、一度食べたことのある美味しかったものを何度も頼んだりな。危機的状況ではその傾向が一気に反転したりもするが……こうして安全なゲームでは非常に読みやすい」

「なるほど……それで、一体なんの用事だ？ わざわざこうして待ち伏せまでして」

「いや、単純な用事だよ。シンプルに……先輩と戦ってみたかっただけだ」

それだけ？　俺は眉を顰めた。織部のヤツ、最初からレースを捨ててるのか？

「アンナも神無月先輩も、実際に先輩と戦い、その強さを肌で感じている。それを我も味わってみたくなっただけだ」

なるほど……。

俺は深く頷くと、言った。

「そういうことなら、受けて立とう」

実のところ、俺も織部の戦い方には興味があった。

母山羊との戦いでヨモツシコメを使うのは見たが、あの時は土蜘蛛もロストしており、万全の状態ではなかった。

彼女も五億の金でカードを更新しているだろうし、その実力は全くの未知数。

いったい、この切れ者の後輩がどのような戦い方をするのか……自然と胸が高鳴った。

「そこなくては……失望していたところだ！」

俺の戦意に満ちた視線に、織部は牙を剥いて凶悪に笑うのだった。

第九話 合宿 一日目(仮)

「アンナに一人勝ちさせるのも面白くない。ここは互いに飴一つを賭けるとしよう」

いざカードを召喚しようとしたところで、機先を制するように織部がそう言った。

そう言えば、先に飴を賭けてから戦うんだっただな……、とルールを思い出す。

うっかりしてた。確かに、ここで全部賭けたところで喜ぶのアンナだけか……。

俺は頷くと、バッジの通信機能を使って師匠へとデュエルの選択と、飴一つを賭けることを伝えた。

すると……。

『マロ、飴一つベット。織部さん、飴三つベット。マロはカード三枚、織部さんは四枚召喚してください』

「んな!?!」

愕然として織部を見ると、彼女は意地悪そうにクツクツと笑った。

「おいおい、これは模擬レースだぞ? いくら可愛い後輩相手とはいえ、当然こういうことも警戒しないとな」

クソくやられた。だが、織部の言う通りだ。こういうことを本番にされないように気を付けるための模擬レースなわけだからな。

……まあ、それでもしてやられた感は否めないわけだが。

「ま、これはあくまでこういうこともあると先輩に教えたかっただけだ。先輩の実力を知りたいのは本当だ。我も三枚で戦うよ。それと、なぜ我が二つではなく三つ賭けたのか、あとでちゃんと考えておくように」

俺の顰めっ面を見た織部はそう言つと三枚のカードを召喚した。

一枚は、俺も持つデュラハン。プロクラスでは必須と言えるカードであり、ホラー映画をこよなく愛する彼女が手持ちに加えるとしたら極めて自然なカードだ。

二枚目は、和服を身に纏った妙齡の白髪の美女だ。これは一体何のカードだろうか？ 雪女……にしては雰囲気は婀娜っぽい。和服をはだけて豊満な胸元の谷間を露出する様は、江戸時代当たりの夜鷹を連想させる。

俺が二枚目のカードをジロジロと観察していると、彼女がニコリとこちらへとほほ笑んできた。

「お久しゅうございますな、北川殿」

「ん？ ……まさか、土蜘蛛か!？」

その古風な喋り方と久しぶりという発言に、相手の正体を察した俺は、思わず驚愕の声を上げた。

「そうか、女郎蜘蛛にランクアップさせたのか!」

「正解だ。さすが、女の子カードには詳しいな」

それ、もしかして皮肉ですか……？

しかし……あの不気味な土蜘蛛が、ランクアップでここまで変わるとは……。

まあ、今の姿は男を誘うための擬態みたいなもんだろうが。

そんなことを考えながら最後のカードへと目を向ける。

三枚目のカードは、また織部らしいカードだった。

人型の黒い霧……おそらくは雨雲に絡みつくように纏わりつくハツの雷。

「火雷大神か。ほのいかづちのおおかみこっちはもしかして黄泉醜女ヨモツシメメのランクアップか？」

「またまた正解だ」

しかし、女郎蜘蛛と火雷大神とはね……。

俺もその詳細をよく知るわけではないが、両方とも眷属召喚スキルを持つ強力なカードだ。

……こりゃちよつとキツイかもな。織部は増殖パーティーを好むのか。

特に火雷大神は強力な雷のスキルを操る、Cランクでも最強レベルのカード。その価格は女の子カードでもないのに一億近いと言え、その強さも伝わるだろう。

デュラハンで防御を固められつつ、延々と眷属召喚され続けたら相当厳しいことになるだろう。

これを打ち崩すには、無理やり速攻で決めるか……こちららも眷属召喚で対抗するかだ。

思案の末に俺が召喚したカードは、イライザと蓮華、……そしてアテナだった。

それを見た織部の顔が驚愕に歪む。

「あ、アテ……ナ!? 一体、どうやって……!?」

「へへ、実は……ギルドのパックで当たったんだよね」

「まさか、あの1パック1千万の狂ったパックですか? 一体いくら買ったんですか?」

「え、えへへ……よ、四億」

それを聞いた織部はクラリと立ち眩みを起こしたように上体を揺らし。

「先輩……さすがに、ちょっと、引きます……」

「……」
「しかし、そうですね、ギルドのパックで。それでこのタイミングで出してくるとは……。それにその姿……なるほど」

う、なんかすでにアテナがろくにスキルを使えないことがバレてそんな予感。

これ以上考察の時間を与えるのはマズイな。

「アテナ、ニケを召喚してくれ」

「うっ……せ、戦闘ですか……」

俺の言葉に、傍目にも狼狽えて織部のカードと俺の顔を交互に見るアテナ。そんな彼女に、俺は優しく語りかける。

「……アテナは戦わなくて良い。ニケを召喚してくれるだけで大丈夫だ」

「わ、わかっています！ 別に臆していたわけではありません！

歌麿よ、やるからにはこのアテナに勝利を捧げるのです！ 良いですわね!？」

俺の言葉が戦の女神としてのプライドを傷つけてしまったのか、顔を真っ赤にしつつも彼女はニケを召喚してくれた。

こちらがニケを召喚するのを見て、織部も素早く動き出す。デュラハンを身に纏い、大きく距離を取ると、女郎蜘蛛と火雷大神に眷属の召喚を命じた。

女郎蜘蛛が全長5メートル近い巨大な蜘蛛へと姿を変え、十数体

の子蜘蛛を産み落とすと、それは瞬く間に二倍三倍と膨れ上がり、3メートル近い大蜘蛛へと成長していく。

一方の火雷大神が呼び出したのは、五体のヨモツシコメだった。呼び出されたヨモツシコメたちは、さらにそれぞれが十数体の黄泉軍を召喚していく。

瞬く間に、小広場には大蜘蛛と死霊武者の軍勢が姿を現した。

対するこちらが召喚するのは、英霊たちによる戦車隊だ。一度に呼び出される数は四体と少ないものの、おそらく戦闘力百数十程度と思われる大蜘蛛と黄泉軍よりも一体一体の質は高い。

アンデッド軍と、戦車隊がぶつかり合う。両軍の後方からは、各カードたちの魔法砲撃や支援が飛び交い、戦闘というよりもはや戦争の体を成してきた。

戦車隊が、縦横無尽に戦場を駆けまわり一方的に敵を屠っていく。だがアンデッド軍は空いた穴を一瞬で埋め、その数がまるで減っていないようには見えない。

しかし、いくら無限に増えられると言っても空間には限りがある。そうなれば物を言うのは質の差だ。

爆発的な速度で増殖していくアンデッド軍に対し、こちらは数こそ少ないモノの敵にやられるペースが遅い。

反撃の機会は、空間内の敵戦力が飽和状態となった時だ。そこから蓮華たちの火力も高めて徐々に敵を削り、こちらの戦車隊の比重を増やしていく。

そこまでいけば、もはや俺の勝ちも同然だが……。

「……ふむ、頃合いか」

そんな俺の目論見を、織部が黙って見過ごすわけがなかった。

突然、彼女のいた辺りから黒い蒸気の柱が立ち上り、あつという間に巨大な雨雲が俺たちの上空を覆った。雨雲には無数の雷が走り、

不吉な胎動を轟かせている。

これは……！ と彼女の方を注視すると、火雷大神の姿が見えない。

だとすると、これは……！ マズイ！ 下は水場だ！ やられる！
俺は咄嗟に蓮華に上空に引っ張り上げてもらいつつ、カードたちにプロテクションのマジックカードを使った。

同時に、空から雷の雨が降り注ぐ―――ただし、敵に、だが。

「な、に……？」

落雷後の特有の臭いが鼻を衝く中、何が起こったのかわからず、思わず呟く。

俺にも、カードたちにも海水を通じて何の電撃も来ていない。

代わりに、雷撃を受けた黄泉軍たちは、その体を黒く焼け焦げさせつつも、身体に電流を纏わりつかせている。

自爆……？ いや、そんな筈はない。そんな無駄なことを織部がするわけがない。

それを証明するかのように、痛みを知らぬ武者たちが落雷のダメージなど知らぬとでも言うように戦車たちへと切りかかる。

速い……！ まるで彼ら自身が雷になったかのような速さ。

さらには、黄泉軍と接触した戦車隊には激しい感電が起こり、落雷を受けたようなダメージを負っていた。それが二体、三体と続き、屈強な戦車隊たちが急速に数を減らしていく。

「これは……！ 黄泉軍を雷の爆弾に変えるスキルか！」

特攻を終えた黄泉軍は役目を終えたとばかりに土へと還っていくが、元々あちらは雑兵。こちらの戦車隊と違い大した痛手ではない。

数の暴力をさらに自爆という方法で質の底上げをしてくる戦法。

織部のヤツ、殺意が高すぎるだろ……！

『聞こえるか、先輩』

その時、バツジ越しに織部の声が聞こえて来た。
思わず耳を傾けてしまう。

『火雷神の八ツの雷は、それぞれ雷が起こす現象を司っている。
大雷神は雷の強烈な威力を、火雷神は雷が起こす炎を、黒雷神は
雨雲の暗さを、咲雷神は雷が大木を引き裂く姿を、若雷神は落雷の
後の地上の恵みを、土雷神は雷が地上に戻る姿を、鳴雷神は鳴り響
く雷鳴を、伏雷神は雨雲に雷が隠れる様を。』

火雷神のスキル、八雷神のスキルはこれらを再現したものだ。
さあ、どれがどの雷神の能力かわかったかな？』

『……最初の雨雲は、黒雷神。』

黄泉軍に電流が纏わりついたのは、伏雷神。

雷のような速さは、鳴雷神。

黄泉軍が触れた戦車隊に激しい感電が起こったのは、咲雷神。

その威力は、大雷神と火雷神。

特攻を終えた黄泉軍が土へと還ったのは、若雷神と土雷神辺りで、
スキルのデメリットってところか』

『ふふ、概ね正解だ。少し補足すると、使用後に土へと還ってしま
うのはスキルの反動ではあるが、デメリットではない。土に還った
後、火雷神を若雷神で癒すという効果があるのだよ』

なるほど、無限に増える眷属を爆弾に変え、自己回復も図れると
いうサイクルなわけか。エコというかなんと…反則的な強
さだな。

『この八雷神の面白いところはだな、実は補助スキルではなく、呪
いスキルということだ。まず眷属を呪い、さらにその呪いを敵に移

すという流れなわけだな。……ところで、先輩は土蜘蛛のスキルについてのご存知かな？」

土蜘蛛のスキル？ 知らないな……。特に強いカードでも無いし、自分で使う予定もなかったから。

俺が答えられずにいると、織部はちよつと不機嫌そうな声で答えを教えてくれた。

「……どうやら可愛い後輩の手持ちのスキルも知らないようだから教えてやるう。土蜘蛛のメインスキルは、毒を食らわば皿まで。周囲の呪いを自身に集め、凝縮するスキルだ。ふふふ、上手いことラックアップの時引き継ぐことができてな」

……まさか！

俺は遠くに立つ元土蜘蛛の女郎蜘蛛を睨んだ。彼女の周囲には黒い霧が纏わりつき、不気味な髑髏を描いている。

「このスキルは強力なのだが、時間が掛かってな。時間稼ぎの雑談に付き合ってくれて、礼を言う」

「……」
「さて、戦車隊ももう一つも残っていない。こちらの自爆部隊はまだ半分ほど残っている。ここまで高めた呪いスキルを打ち込めば先輩のカードもタダでは済まない。――チェックメイトだ」

降伏勧告する織部に、俺は……。

「ふ、ふふふ……」

「……何がおかしい？」

突然笑いだす俺に怪訝そうな声を出す織部。

『いや、まさか、小夜“も”時間稼ぎしてたなんて。俺たちは互いに相手を間抜けだと思いなながら話してたのかと思っただらちよっとおかしくなつてな。——チエックメイトだ』
『なにッ!?!』

最後の宣言は、バツジ越しではなく、蓮華越しに彼女の背後から語り掛けてやる。

驚愕と共に背後へと振り返った織部は、吉祥天へと霊格再帰した蓮華を見ると、こちらへと振り返り俺の隣に立つ蓮華を凝視する。すると、こちらの蓮華は……ついでにイライザも霞のように姿を消し、赤髪の女鬼が入れ替わるように姿を現した。

「ふい〜……さすがに同時に二人に化けるのは疲れるなあ」

ふう〜と大きく息を吐いた鈴鹿がそう言って俺にしな垂れかかってくる。

そんな彼女を見た織部がチツと舌打ちをする。

『……なるほど、最初から騙されていたのか。これは一杯食わされた』

『吉祥天となつた蓮華の一撃なら、デユラハンの防御もぶち抜いてマスターに大ダメージを与える。降伏しろ』

『ふむ……仕方ない。諦めるざるを得ない、か。——正攻法で勝つのをな』

『なに?!』

俺が首を傾げると、背中を軽い衝撃が襲うのは同時だった。バツジの防御用の魔道具すら発動しないレベルの軽い攻撃。しかし、

それは確かに俺に対するダイレクトアタックだった。

恐る恐る後ろを振り返ると、そこには黒い霧が、Eランクモンスターナイトメアがいた。

『ほぼノーダメージだが、これもダイレクトアタック。私の勝ちだな』

『な……四体目!? 反則……じゃない、のか。クソッ! やられた!』

『ふふ、そう、ルール違反ではない。我は四枚まで召喚して良いのだからな。尤も召喚していたのは、先輩がここに足を踏み入れる前からだが』

『完全にやられたよ……。最初から俺は負けてたというわけか』

『ま、こういうこともあるかもしれないということだ。本番でどういうルールとなるかはわからないが、まずカードを一度すべて送還してからよーいドンで召喚とはならないはずだ。なぜならモンスターとの戦闘中の乱入がセーフなのだからな。おそらく、賭けの結果に応じて召喚しているカードを送還する流れとなるはず。となればこのように最初からカードが眷属を忍ばせてくる者も出るはずだ。そしてそれはカードの召喚数の範囲なら反則とはならない』

『勉強になったよ……』

『こちらこそ、あそこまで追い詰めて逆転されるとは思わなかった。ま、ルール上の勝者は我だがな。一時間、ここで待機してくれ』

そう言うのとニヤリと笑うと、織部はその場を立ち去っていった。それを見送り、俺はドボンと海水へと身をゆだねた。

「はあ、負けた! 負けた!」

プカプカと浮かびながら悔しさを吐き出す。

冷たい海水が熱くなつた頭と心を心地よく冷やしてくれる。

……ちよつとこここのところ連勝続きだから慢心してたな。

織部との勝負も、最後に一矢報いることができたが、内容は完全に負けていた。

この分だとアンナのヤツも一回り強くなってそうだな。

この合宿、思ったよりも手に入るモノが多いかもしれない。

そして一時間のロスをした俺は当然のようにレースでも最下位となつたのであつた。

第九話 合宿 一日目(仮)

「―――冒険者には、それぞれ得意な属性のカードというモノがある」

夜(と言っても周囲は明るい)、夕食を食べた俺たちは、師匠からリンクの講義を受けていた。

「リンクというのは、カードと心を重ねる技術だ。故に、どうしても本人が持つ嗜好や、体質というモノがリンクに少なからず影響を及ぼす。例えば織部さんの場合は、自身の嗜好によりアンデッド系のリンクが得意になるし、逆に十七夜月さんの場合はアンデッド系とのリンクが苦手になる。またそれとは別に生まれつき持った性質によって特定の属性とのリンクが得意になることもある」

例えば俺の場合、冒険者となつてからずっと女の子カードを使い続けてきたこと、また俺個人も女の子カードが好きなことから、男のカードと比べて圧倒的にシンクロなどのリンクがしやすかったりする。逆に無性のカードの方が男のカードよりもリンクしやすいからいだ。

「この体質によってリンクが得意になることを、先天属性。個人的嗜好や特定のカードの使い込みによってその属性が得意になっていくことを、後天属性と言う」

このうち、先天属性は生まれつきのモノなため不変、後天属性は心境の激しい変化やカードの使い込みによって範囲が変わっていく

こともあるらしい。

例えば、俺のように女の子カードが得意な冒険者でも、彼女を寝取られたりなんかしてビデオレターが届いたりしたら一気に女の子カードが苦手になることもある、ということだ。

「先天属性が何かを探し出すには、今まであまり使ったことがないのに妙に使いやすいカードがあれば大抵はそれが自分の属性だ。これはリンクを使えるようになった時期の初期であれば初期であるほど見つけやすい。もし仮に自分の好きなカード以外に見つからないのであれば、それは幸運にも自分の先天属性と後天属性が合致している可能性が高い。マロなんかはそのタイプだね」

師匠が向けてきた視線に、俺は頷き返す。

俺は幸運にも先天属性と後天属性が合致しているタイプだった。パーティーを女の子カードに固めているのは単なるスケベ心からという訳ではないのだ。

きわめて合理的思考からなのである。

どこかから聞こえて来た『先天性のドスケベが証明されたただけは……？』というクソガキの突っ込みは無視するものとする。

ちなみに、アンナは先天属性が善、後天属性が天使・精霊系カード。織部は先天属性が悪、後天属性が悪魔・アンデッド系となっている。二人とも先天属性と後天属性が比較的似通っているタイプだ。なお、真逆の属性の二人が友人であるように、冒険者の属性によって交友関係に影響が出てきたりすることはない。

某ゲームのアライメントとは似て非なるというわけだ。

「基本的に属性は、範囲が狭い方が、幅広いタイプよりも効果が強いと言われている。例えば、マロのように女の子カード全般に強いタイプよりも、アンデッドという特定の種族にのみ特化している織部さんの方がより得意不得意がはっきりしているわけだ。ただ、こ

れに関してはリンク自体の才能に差があることから、はつきりとした証拠があるわけじゃない。軍や冒険者全体の傾向を見て、そんな感じがする……といった程度だね」

そこで、師匠は顔を引き締めて真剣な空気を作る。

「ここまでみんなにとって周知の情報である属性について話してきたのは、この属性が冒険者におけるリンクの最終到達地点に関係してくるからだ」

『……………』

師匠の雰囲気が変わったことで、俺たちも姿勢を正して聞く姿勢となる。

ここからは、俺も初耳の情報だった。

「冒険者が使うリンク——プライベート（民用）リンクは、シークレット（軍用）リンクから漏れたごく一部のモノだ。軍がこれらの情報流出を放置しているのは、カードを使いこんでいるうちに自然と身に着ける可能性が高いリンクだからでもある。これから話す『ユニークリンク』は、このプライベートリンクを極限まで突き詰めていった先にある、限りなくパーソナルリンクの極みに近い技だ」

パーソナルリンクの極み……。

「ユニークリンクは、実のところ僕もまだ身に付けていないリンクだ。だから情報としてしか知らないんだけど……………その効果は『冒険者自身がスキルに目覚める』リンクだと言われている」

『ッ！？』

その言葉はちょっとした衝撃を俺たちに齎した。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。それって俺らも蓮華たちみたいに回復魔法が使えるようになるってことか？」

「ちよっと違う」

と、師匠は首を振る。

「ユニークリンクは、自分の属性のカードにカードのスキルのような効果を乗せるリンクなんだ。だから自分自身がスキルをえるようになるのとは、少し違う。……例えば、僕が知るユニークリンクだと『自分の属性のカードの育成効率が飛躍的に上昇する』とか『自分の属性のカードなら何枚でもフルシンク口できるようになる』だとか『自分の属性カード間で、スキルを一つカード全体が共有できるようになる』とかがあるみたいだ。まあ僕も伝聞だから良くは知らないんだけどね。発動条件があるヤツとかも多いみたいだし」

なんだそりや、無茶苦茶だな。特に最後のなんかは、上手くすりやアテナのアイギスが蓮華やライザなんかも使えるようになるってことか？ 霊格再帰や限界突破は？ ……さすがにどんなスキルでも、ってわけじゃないように思えるが。

「ユニークリンクは、自分の属性を極限まで突き詰めていったその冒険者固有のリンクと言われている。だからユニークリンクは、一人に一つだし、自分の嗜好が大きく影響してくる。こういうユニークリンクが欲しいと思って目覚めることもできないと聞く。ここら辺もシークレットリンクから漏れた理由なんだろうね。シークレットリンクは軍全体で共有できる可能性が高いってのも条件の一つだから」

「ユニークリンク……。話には聞いたことがありましたけど……。なんかますます念能○みたいッスね」

アンナの言葉に全員が『あつ、コイツ言いやがった!』という顔をした。

師匠は気まずそうに咳払いをし。

「ま、まあ、すぐに習得できる技術でもないけど、みんな自分の属性についてはよく理解した上でリンクを使ってみて。ユニークリンクはプロでも持っているとは限らないリンクの極みの一つだけど、目覚めれば唯一無二の武器となるはずだから」

そつ話を締めくくつたのだった。

「さて、そろそろマッサージは良いですかね、お嬢さん」

師匠の講義が終わり、俺はずっと肩もみを続けていた彼女へとそつ問いかけた。

「ふむ……まあ、今回はこれくらいで良いだろう」

ふう……。……。

織部の許可が下り、俺は彼女の肩から手を離すと大きく腕を回した。

もちろん俺が彼女の肩を揉んでいたのは、レースの勝者が彼女だったからだ。

俺との戦いで時間をロスしたはずのこの中二病少女は、あの後アンナに追いつき、言葉巧みに『エスケープ』を選ばせてその場を待機させることに成功したらしい。

結果、一位となった織部は、勝者の特権として俺に師匠の講義の

間の肩もみを命じたのだった。

最初は罰ゲームとはいえ、後輩の肌に合法的に触れられることを内心で喜んだ俺だったが、さすがに一時間近い講義の間肩もみを続けるのはしんどかった。

「なかなか上手かったではないか。次もその調子で頼む」

「次なんてねーんだよ」

ナチュラルにまた俺が最下位であるかのように決めつけやがって。

「そうツスよ。次に先輩に肩もみさせるのはウチツスからね！」

「お前の肩も揉まん。むしろお前らのどちらかに肩を揉ませてやる」

そんな俺たちのやり取りをみた師匠が笑う。

「レースに参加すればマロに肩を揉んでもらえるのか。こうなると僕が参加できないのが残念になってくるね」

「……………」

さすがに師匠が参戦してくると俺が勝つとは言えなくなってくるので、俺は視線を逸らして沈黙した。

「まあ、明日は公平なレース方式じゃなくて、ウチらがその他有象無象の選手となって先輩をあの手この手で妨害する感じにしようと思ってるんで、罰ゲームもないんすけどね」

「なんだ、そうなのか……………」

織部が残念そうに呟く。

俺もリベンジができなくて残念だ。

「まあ、先輩が条件を達成できなかったら罰ゲームって感じにしても良いんすけど」

「誰が飲むか、そんな一方的な条件。俺が条件を達成したらエッチな罰ゲーム有りなら乗ってやらんこともない」

「それはあり得ないんで、残念ながら罰ゲームは無し、ということ
で」

……………チツ。

「とりあえず今日の反省会としては、如何に相手のブラフを見抜いて出し抜くか、ツスね。結局、ウチも先輩もその点で小夜に上手くやられたわけツスから」

「ん……その点については、俺はもう対策がある」

「ほう……では明日お手並み拝見といこうではないか」

ニヤリと笑う織部だったが、残念ながら明日はマジで大抵の駆け引きは見抜ける自信があった。

というか、今日も本当は引つかかるはずがなかったのだ。

……あのスキルをちゃんと思い出しておけば。

「あと、神無月先輩、あのヒントはちょっとなんとかありません…

…? 数式を読み解いてチェックポイントの座標を割り出すのは、
ちよつと……………」

勉強の苦手なアンナが師匠へと苦言を呈す。確かに、あのヒントは俺もちよつと問題があると思った。多分、キャットファイトもあるんなヒントは出してこないだろうし。

「ありゃ、良いヒントだと思ったんだけどな。そうだね。じゃあ明日からは四つのヒントの点を結んだらチェックポイントがわかる方

式にするよ」

「某海賊漫画のロードポーングリフ方式ツスね。良いと思います」

「……実際、本番ではそのヒントの可能性が高いと我も思う。それなら必ず四つのヒントを集めてチェックポイントに行くことになるからな。五階層ごとにチェックポイントがあり、迷宮が26階層とすれば割とレースとしてちょうど良いのではないか？」

「問題は運営の出してくるミッションツスよね。こればかりは正体がわからないんで、模擬レースで再現できないですし、先輩に自力でやつてもらうしかないツスね」

そんな感じで反省会が終わり、カードたちは何をしているかと思いいどりを見渡してみると、何やらキッズたちがコソコソ集まって何かをしているのを発見した。

近寄って見てみると、どうやら蓮華、メア、アテナ、ジャネット（師匠のアラディア）で、なぞなぞを出し合っているようだった。

……もしかして、リドルスキルの対策だろうか？

「では問題です。世界の真ん中にあるモノとは、なんでしょうか？」

幼児向けのなぞなぞが載った本を片手にアラディアのジャネットが問いかけると、蓮華とメアが腕を組み考え始めた。

「世界の真ん中……？」

「え〜？ わかんない……。世界の中心ってことだから……。なんだろ？」

二人がうんうんと首を傾げていると、見事なドヤ顔を浮かべたアテナが答え始めた。

「ふふん、この程度、知の女神たるこのアテナにとっては余りに容易い問題です。世界の真ん中とは、人間に例えればお臍。つまり地球のへそと呼ばれるエアーズロツクを指しているでしょう。エアーズロツクは、元々はアポリジニにウルルと呼ばれていた聖地。その由来は、エアーズロツクが彼らの信仰する虹色の蛇の卵と信じられていたから。つまり世界の真ん中にあるモノとは、虹色の蛇、あるいはその卵です！ どうです？ 正解でしょう？」

「全然違う。無駄に考えすぎ」
「ッ！？ ば、バカな……」

アテナが愕然として打ちひしがれていると、蓮華がポンと手を打ち、答えた。

「あ、わかった。蚊か。せ、か、い、の真ん中だから蚊だろ」

「正解」

「ヨシッ！」

「そ、そんな子供騙しのような答えが正解だというのですか!？」

「いや、これ子供向けのなぞかけだから……」

アテナのヤツ、典型的な物知りだけど頭が固い奴になってるなあ。

「あゝ、なんでわかんなかったんだろ！ ねえねえ、次の出してよ

！ 次はメアが答えるから！」

「了解。では、次の問題です」

と、微笑ましく彼女らのなぞなぞ大会を見守っていると。

『……ちなみに、私もわかってたよ、マスター。即わかった。凄いでしょ?』

彼らから十メートルは離れたところで体育座りをしていた鈴鹿から、そんなリンクが届いた。

鈴鹿……。お前、そんな離れたところから地味に心の中で参加してたのか……。

相変わらず、みんなの輪の中に入るのが苦手なんだな……。

まあ、確かにこのロリっ子集団に混じるのはハードルが高いか。なら他の奴らと雑談でもすれば良いのに……と周囲を見渡してみると、ユウキは織部やそのカードたちと話しており、イライザもアンナやそのカードと話しているところだった。

師匠もトイレにでも行っているのか、姿が見えない。

これは……！ 鈴鹿のヤツ完全に孤立してやがる……！
………いつものことが。

『鈴鹿、今からアンナや小夜のところを回ってくるけど……暇なら俺と一緒に行くか？』

『……その人たち、良く知らないから何話せば良いかわからないし。なんかキラキラしてて苦手……』

うーん、これは完全に処置無しですな。

俺は彼女が自分自身の脚で立ち上がってくれらることをマスターとして期待して、まずはアンナの元へと向かうことにした（めんどいので見捨てた）。

鈴鹿の捨てられた子犬のような視線を背に、アンナのところへと向かうと、イライザはエルフのターニヤ、ペガサスのダンジョンテイオーと話しているようだった。

「よお、珍しい組み合わせだな。何の話をしてるんだ？」

「あ、先輩。なんかイライザさんが聞きたいことがあるみたいで」

「イエス、マスター。かつて見せていただいた、ペガサスに騎乗しての三位一体の攻撃についてお伺いしていました」

「ああ……」

母山羊を良いところまで追い詰めたアレか……と思いつ返す。

「確かに、アレは良いコンボだったな。どういう絡繰りなんだ？」

「うーん……、先輩とは明日戦うかもしれないんであまり手の内は晒したくないんですけど……」

俺も気になって問いかけると、アンナは躊躇いつつも結局は教えてくれた。

「ま、部員を導くのも部長の役割でしょう。あれはアムドの装備化と、ダンジョンテイオーの騎獣スキル、ターニヤの騎乗スキルの合わせ技ツス」

そう言っつて、アンナはスマホを見せて必要なスキルの詳細を教えてくださいました。

亡者にも鎧……は、俺も知っているので読み飛ばすとして、重要なのはペガサスの先天スキル『天馬空を行く』とエルフの後天スキル『走り馬にも鞭』だな。

・天馬空を行く：地上を駆けるように空中を縦横無尽に走ることができる。動き続けることで、耐久力と引き換えに筋力と俊敏性が大きく向上していく。最大値（二倍）まで上昇後、直線距離での助走で、『雷鳴と雷光を運ぶ者』を使用可能。高速飛行・騎獣スキルを内包。

（騎獣：騎乗スキルを持つ乗り手のステータスに自身の攻撃力と俊敏性を加算することができる）

（雷鳴と雷光を運ぶ者：一撃に限り、ステータスを三倍とし突進攻撃を放つことができる）

・走り馬にも鞭：騎獣スキルを持つカードの耐久力を下げ、筋力と俊敏性を一時的に倍増させることができる。ただし騎獣に大きな負担が掛かる。騎乗スキルの上位スキル。

「ま、他にもいろんなスキルで補強しましたが、軸となっているのはこの三つのスキルツスね」

うーむ……徹底的に攻撃力と機動力の強化を目指したって感じだな。

なるほど、強敵対策と言っていたが、これなら相当格上の敵にも大ダメージを与えることができるだろう。

多少脆い印象は受けるが、当たらなければ問題ない！ という強い意志を感じる。その分、範囲攻撃や、対飛行攻撃には弱そう……というか実際に弱かったが。

「それで、イライザは何が聞きたかったんだ？ 騎乗スキルを手に入れて、同じような事がしたかったとか？」

「イエス、マスター。騎乗スキルもですが、騎獣スキルの習得も検討しておりました」

「騎獣も……？」

俺は一瞬四つん這いにさせたイライザに跨る自分を想像して、慌てて振り払った。官能的でイケない世界の入り口が垣間見えた気がしたからだ。

「イエス、マスター。私も、一応狼へと変身することが出来ますので、かつてのユウキのようにマスターをその背に乗せて移動できるのでは、と考えたのです」

イライザは右手だけ狼の頭へと変身させると、ワンワンと吠えさせた。

「あ、ああ……なるほど、そうか。それもできるかもな……でもそれなら素直にドラゴネットに騎獣スキルを覚えさせてイライザは騎乗スキルを覚えた方が効率も良いと思うぞ」

「イエス、マスター。では、その方針で努力致します。……少しだけ、残念ですが」

「……ざ、残念って何が……？」

と、内心でドギマギしつつ、今度はユウキと織部たちの元へと向かう。

ユウキは、織部と元土蜘蛛で現女郎蜘蛛のツッチーと話しているようだった。

「よう、ユウキ、小夜。……あとツッチー」

「マスター」「先輩か」

「おお！ 北川殿！ 何か我が主に御用でございますかな？」

「いや、なに話してるのかなって気になってさ」

「……じ、実は」

とユウキは気恥ずかしそうに頭を掻き、答えた。

「どうにか前みたいにマスターを乗せて移動できないかという相談をしてたんです」

「え、こっちも……？」

と俺が驚くと、ユウキは首を傾げた。

「ん？ こっちも、とは？」

「あ、いや、こつちの話。……それにしても、どうして小夜に相談を？」

普通に俺に相談してくれば良いのに、と思いつつそう問うと、ユウキは若干気まずそうに答えた。

「あ、いえ……マスターはすでにドラゴネットさんに乗っついていらっしやいますし。これはボクの我が儘なので……。織部さんに相談させてもらっていたのは、ツッチーさんが女郎蜘蛛になった後も騎獣をやっていると聞いたので」

「ユウキ……そんなの気にしなくて良いのに。……しかし、小夜はツッチーに変わらず乗ってるんだな」

「うむ、我は先輩と違って次から次へと相手を乗り換える尻軽ではないのでな」

そんな言い方ある……？

「冗談はさておき……。話を聞いた限り、ユウキさんが騎獣を出来なくなつたのは、人狼化しても二足歩行のため乗り心地が悪いためと思われる。ならば、話は単純だ。純粋な狼の姿にも変身できるようになれば良い」

「うん？ そんなことできるのか？」

アプリのスキル図鑑にもそんなことは書かれていないし、モンコ口の試合なんかを見ても純粋な狼に変身するライカンスロープを見たことはないが。

「可能だ。二足歩行形態の方が小器用に立ち回れるため、四つ足形態に変身するメリットがあまり無いが故に使われないだけで、形態としてはしっかりと存在している。多少訓練が必要になるようだが

な」

そうだったのか……。

「訓練にまごつくようなら、騎獣スキルの習得も目指しても良いかもしれない。アレには、人やカードを乗せやすいように肉体に補正をかける効果もある。現に、うちのツッチーも騎獣スキルを取得したら少しだけ骨格を変形させられるようになったからな。元々狼形態が眠っているライカンスロープなら、よりその形態を引き出しやすくなるはずだ」

なるほど……。もし騎獣スキルを習得出来たら、イライザが習得を目指している騎乗スキルとのシナジーも生まれるし、良いかもしれないな。

「しかし、騎獣スキルってどうやって習得すれば良いんだ？」

「そんなもの、とにかく乗り続けるしかないだろう」

乗り続けるって……。乗るのが難しいから騎獣スキルが欲しいんだが……。

俺はユウキと顔を見合わせ。

「とりあえず、狼形態への練習からだな」

「……はい」

そう苦笑したのだった。

第九話 合宿 一日目(仮) (後書き)

【Tips】先天属性と後天属性

冒険者には、それぞれ得意なカードの属性が存在する。これは、リンクが心を繋ぐ技術であるため、マスターの体質や嗜好が影響してしまつたためである。

このうち、体質などの生まれつきの理由で得意となる属性を先天属性。個人的嗜好や特定のカードの使い込みにとつてその属性が得意になつていくことを、後天属性と言う。

先天属性と後天属性は、リンクのしやすさやカードの育成などに影響し、前者は変えることができないが、後者は嗜好の変化や使い込みなどによつて変わる(変わつてしまつ)こともある。

このマスターの得意属性を極めた先にある、マスター固有のリンクも存在する。

第十話 合宿 二日目（仮）

合宿二日目。

この日は、先に織部やアンナが潜伏し、他の冒険者との遭遇を想定した訓練を行うことになった。

シチュエーションとしては、『俺が一つ目の迷宮を24〜48時間程度で踏破し、星を20程度所有している状態で、戦力に欠けもなく、自由に使える財産が一億程度ある』という設定らしい。

保有している星の数やカードの戦力はともかくとして、なぜ踏破したタイムや所有する財産まで設定する必要があるのかと疑問に思ったが、頭の良い師匠や織部がわざわざ決めたというのだから、おそらく意味のある設定なのだろう。

そんなことを考えながら、ヒントを集め、チェックポイントへと向かう。

ここまで織部やアンナとの遭遇は一度もない。

……先に潜伏して襲撃してくるはずではなかったのだろうか？
これじゃ訓練にならないんだが。

何を企んでいるかわからないアンナや織部を警戒しつつ一個目のチェックポイントに到着すると、そこにはアンナと織部が俺を待っていた。

どういうことだ……？ チェックポイントでは戦闘できないはず
……と思いつつ近づいていくと、織部が話しかけてきた。

「……北川選手、だな？ よければ我と一つ取引をしないか？」

「……取引？」

「うむ、この先12階層までのヒントとチェックポイントの情報と
我の持つ星、欲しくはないか？」

なるほど、そういうシチュエーションか……。そうだよな、そういう選手も中には出てくるよな。

鈴鹿に一つアイコンタクトを送り、織部のロールプレイに乗ることにする。

「三つ、疑問があるな。一つ、なぜライバルに有利となる情報を売
るのか。二つ、買うとして、どうやって取引するのか。三つ、その
情報が正しいのかどうか。またそもそもこんなこと運営が許すのか」
「まず一つ目だが、我はもうライバルではない。この迷宮のトップ
陣を見て、レースの上位入賞は諦めた。カードも消耗が大きく、レ
ースを完走できる可能性すら低い。ならば、情報と星に価値がある
うちに、上位入賞の可能性のある選手に高値で売った方が、儲けは
大きいと判断しただけのことだ」

「ふむ……。二つ目は？」

「二つ目についてだが、我の持つ星十二個を一つ二百万円で買い取
って貰いたい。支払いについては、現金を持っているはずもないだ
ろうし、あとから振り込みをすれば、我も信用できぬ故、D
ランクカードを一枚一律百万円相当でどうだろうか？ ……星を買
うために要らないカードを多く持って来ているのだろうか？」

……実際、星と要らないDランクカードを交換できるシステムが
ある以上、こういう取引をやる可能性は高い、か。

星を金で買う予定はあまりなかったが、こういうことも想定する
なら要らないDランクカードくらいは持てるだけ持っていくべきか
もしれない。

「受け渡しの方法は？」

「当然、決闘でだ。カードを半分受け取り次第、こちらは星を全部
賭けて勝負し、即降参する。こちらの降参と星の移動を確認次第、

もう半分のカードを頂きたい。それから情報を渡す」

「……方法についてはわかった。最後の質問、情報の正しさの保証は？」

俺がそう問うと、織部はニヤリと笑い、答えた。

「そこは、信用してくれとしか言いようがないな。断るなら他の選手に同じ取引を持ちかけるだけだ。運営についても、ルールブックに禁止されていない以上、織り込み済みとしか思えんな」

嘘か本当かは自分で判断しろってことか。運営についても、こういう展開も視聴率のために織り込み済みなのだろう。

こちら辺で判断を下すべきか。と俺が考えたその時、急に割り込んできた声があった。

それまで黙ってみていたアンナが動いたのだ。

「ちょーおっと待った！ その貧乳なんかよりウチから情報を買わないツスか？」

「……関係ない奴は引っ込んでいろ」

貧乳呼ばわりに、演技抜きで怒っているように見える織部に対し、アンナは気にした様子もなく続ける。

「そのの女は、この先十二階層までの情報を売ると言っていたツスけど、ウチは最下層までのチェックポイントを売れるツス！ しかも星も一つDランクカード一枚で良いツスよ！」

「嘘だな。最下層までの情報なんて持っているわけがない。それともこの短時間で最下層までを往復したとでも？」

「ウチは一応この迷宮でのトップ陣の一人だったんで。普通にゲー卜を通って入口まで戻って来ただけツスよ。ま、主への挑戦権を賭

けた戦いで負けてリタイア確定ツスけど。と、いうわけで、ウチから買った方がお得ツスよ〜」

「騙されるな、話が美味過ぎる。我から買った方が安全だぞ」

四つの瞳が俺を覗き込む。

俺は考え込むフリをして鈴鹿へと問いかけた。

『……………どうだ？ どっちが嘘をついていた？』

『あゝ、ごめん。これ、全部演技だよな？ ってことは全部虚偽判定ってことになるみたい』

申し訳なさそうな鈴鹿の言葉に、俺は思わず天を仰いだ。

そうか！ しまったな、そうなるのか……………。演技も嘘の一種だもんな。

昨日織部へと語った、他の選手のブラフに対する対策とは、鈴鹿の虚偽察知だった。

相手が嘘をついているのがわかっていいるのなら、取引も直前で相手の気が代わりでもしない限りかなり安全に行うことができる。

が、あくまでロールプレイに過ぎないこの模擬レースでは虚偽察知も役には立たないようだった。

仕方ない…………、事情を説明するしかないか。

「あゝ、すまん！ ちょっとロールプレイ、中断で！」

俺は腕でTの字を作って待ったを掛けた。アンナが不思議そうに首をかしげる。

「……………？ どうしたんスか？ 何か疑問でも？」

「うん…………、実はうちの鈴鹿は虚偽察知のスキルを持っててさ。そのスキルで嘘を見抜こうと思ってただけ……………どうも演技も嘘に

含まれるらしくて」

俺の言葉に二人は顔を見合わせると、深々とため息を吐いた。

「虚偽察知とは、また良いスキルを持つてるツスね、先輩。迷宮内のトレードじゃ敵無しじゃないツスカ。そう言うのは早く言ってくれないと……無駄な演技やシチュエーションを設定しちゃったじゃないツスカ」

「とはいえ、その虚偽察知を持っているというのもまた先輩のブラフかもしれない。……鈴鹿、と言ったか？ その橋姫に質問だ」
「どうぞお？」

気怠そうに鈴鹿が頷くと、織部は咳ばらいを一つして。

「……アンナは、実は中学ではボッチ気味だった。これは、嘘か誠か？」

「ちょっ！？」

ギョツと目を見開くアンナを、鈴鹿は微妙に親近感を感じさせる眼で見つづ。

「あゝ、嘘はついてないみたい、マスター」

「お、おう……そうか」

「そうか……」。

「ふむ、どうやら本物のようだな」

「ちよ、ちよ、ちよ……突然何言ってるの、小夜！？」

「すまない。先輩が知らなくて、我らが知っていることで咄嗟に出してきたのがこれしかなかったのだ」

「絶対嘘でしょ、それ！」
『ちなみに、今のは嘘ね』

アンナの突っ込みを補強するように、鈴鹿が補足を入れる。織部
エ…………。
というか…………。

「アンナってこのキャラで友達いなかったの…………？」
「い、いなかったわけじゃないツス！ ほら！ 小夜だって中学からの友達ですし！」

「一応、我を含め何人かはいた。ちなみに、このキャラで友達がいなかったのではなく、このキャラだったから友達がいなかったのだ。一応歴史あるお嬢様学校だったからな」

「ああ…………」

なんとなく納得した。このキャラは、確かにちょっとお嬢様学校では浮きそうだ。あと、十七夜月家ってお金持ちではあるけど、ぶっちゃけ成り上がりの類だしね。昔ながらの上流階級とは相性悪そう…………。

そこで織部はお上品に口元を隠すと、伏し目がちに言う。

「十七夜月さんは、いつもお元気で、お人はよろしいのですけれど、わたくしとはいまひとつそりが合いません…………」

「お嬢様言葉止める！ それ、うるさくて頭が悪いから私は嫌いで意味でしょ！」

あ、アンナさん…………マジ切れじゃないツスカ…………。
やっぱりお嬢様はお嬢様で大変なんだなあ…………と俺が憐れみの眼差しを向けていると、それに気付いたアンナがガクリと頂垂れた。

「ああああ……なぜ、急にこんな流れ弾が。ウチの陽キャでコミュ
強なイメージが……」

……いや、申し訳ないけどそのイメージは元からあんまりなかつ
た、かな？ 普通にオタネタ会話にぶっこんでくるし、興味ない相
手には露骨に壁を作る割に、親しくなった人には急に距離詰めてく
るところとか、ちょっとコミュ障っぽいとは思ってた。

俺や東西コンビみたいなオタ入った陰キャからすると親近感湧く
けどね。

……鈴鹿もさつきから類友を見る目をしてるし。

「ま、アンナのことはさておき、このシチュエーションのネタ晴ら
しをしておくか。我の方を選んだ場合、値段は高いが、普通にチエ
ックポイントまでの情報を買える。一方でアンナを選んだ場合は、
実は取引の話は嘘で、アンナは他のトップ選手の仲間での迷宮に
早い段階でやって来た選手の足止め役という設定だった」

「……なるほど、勝っても消耗は免れない上に、一度騙されたら他
の選手から情報を買うのにも及び腰になるからな」

「そういうことだ。ま、虚偽察知のスキル持ちがいるなら、その手
の騙しは概ね大丈夫そうだな。ちなみに、今日はこの後も、一時間
安全に休息したいからと八百長試合を持ちかけてくる冒険者や、D
ランクカードを支払えば他の選手の足止めをしてやると言ってくる
冒険者などが出る予定だったが……」

「うん、まあ、選手間の取引については割と上手く立ち回れると思
う」

「となると……この後の予定をどうするか」

織部が顎に手を当て考えだしたその時。

「そんなの決まってるッス！ ウチとの戦いッスよ！」

「ええ……なぜ？」

「理由は、特に、ない！ 強いて言うなら、ウチの誘いに乗ればウチとの、両方の誘いに乗った場合は、ウチと小夜との連戦の予定だったからツスね！」

「まあ、良いけど……カードの枚数はどうする？」

「ふむ、普通に三対三で良いだろう」

「決まりツスね！ ウチが勝ったらさっきの記憶は忘れてもらっスよ！」

「記憶を忘れるのは無理だろ……」

アンナが召喚してきたのはお馴染みのエルフとペガサス、それと新顔の全身鎧の騎士であった。

騎士は背中に輝く翼を背負っていることから、おそらくは天使なのだろう。

天使の中でも顔まで隠れる全身鎧を身に纏った種族は一つしかない。

デュナミス。カ天使の名でも呼ばれる、装備化スキルを持ったBランクカードだった。

アンナのヤツ、デュラハンをデュナミスにランクアップさせたのか。昨日はまだデュラハンのまま、みたいな雰囲気だったくせに……。

いや、それはどうでも良い。問題は、アンナのBランクカードがよりにもよってデュナミスだということだ。

希少な装備化スキルを持つということでも俺もデュナミスのスキルは把握している。

・高潔と美德の鎧：高等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターへと憑依することで、自身の戦闘力を加算させることができ、また自身の持つ装備化スキル以外の先天スキル一つと、すべての後天スキルを共有する。この鎧は、邪悪な力に対する高い

防御力を有しており、また攻撃するだけでアンデッド系の不死状態を解除することができる。

基本的に、デュラハンの完全上位互換という感じだ。

戦闘力を完全に上乘せできるようになり、天使の特性である悪魔系に対する強い耐性と、アンデッド系の不死を解除できる能力を持ち、後天スキルに加えて先天スキルまで一つ共有できるようになっている。

そして、デュナミスの先天スキルの中で共有するモノと言えば、『地上の奇跡』しかない。

・地上の奇跡：実現象としての奇跡を司るデュナミスの権能。仲間全体のすべての状態異常を癒し、一定時間状態異常を無効化、耐性と耐久力を大きく向上させる。

天使系のモンスターは、退魔と防御の力に長けているが、デュナミスはその防御方面に完全に特化した性能となっている。

……アンナめ、徹底的にペガサスナイトの穴を埋めてきたな。よほど母山羊との戦いで失敗が心に深く刻まれたと見える。よさて、どうするか。

イライザの不死が解除されるのは……太陽が昇っているから元々関係ないとして、問題なのはペガサスナイトのアホみたいな攻撃力だ。

エルフの戦闘力が最大920、そこにデュナミスの戦闘力1680が加わり、合計2600……。さらに戦闘力860のペガサスの力と速さを加え、瞬間的に六倍の破壊力を出せる、と。

完全にやり過ぎだ。まさに力こそパワーと言わんばかりの脳筋構成。

デュラハンで防御力の補強をしたとしても、ペガサスナイトの圧倒的な破壊力の前には紙みたいなものだろう。

これに対抗できるとすれば、霊格再帰した蓮華とユウキのフルシ
ンク口くらいだが、それでも力と速さに特化したペガサスを捕らえ
られるかは不透明だ。というか、上空からエルフに弓で狙撃され続
けた時点でユウキは太刀打ちできなくなる。

この手の相手には搦め手、状態異常等で攻めていくのが定石だが、
それも完全に対策している。

……………ふっ。俺は小さく笑った。

どうしよう……………？ どう打ち破れば良いのか全く思いつかない。

一つ手があるとすれば……………。

俺は数秒の黙考の末、蓮華、メア、鈴鹿を戻し、ユウキ、イライ
ザ、アテナの三枚を残した。

「へえ……………アテナのカードを選んだんスか。どうやら重いマイナス
スキルがあるみたいツスけど、その力見せてもらいましょうか。…

…それにしても、蓮華ちゃんを残さないんスね」

「……………」

「へえ……………」

俺が答えずにいると、アンナも何かを察したのか、無言で緊張を
高めていく。

そんな俺たちの様子を見た織部が言った。

「ふむ。どうやら開始のきっかけが掴めないようだな。では我が合

図をしてやるっ」

『……………』

「……………始め！」

『ッ！』

俺たちは、「は」の音が聞こえた瞬間には、同時に動き出してい

た。

まずは、ユウキがその身を屈め、一瞬でその姿を消す。同時に、イライザが献身の盾を発動、アテナがニケを召喚する。

一方アンナは真つ先にデュナミスをその身に纏い、エルフに俺を狙撃をさせ、ダイレクトアタックを狙った。

デュナミスの白金の鎧は、縮地によって超高速でアンナの背後に現れたユウキの一撃を防ぎ切り、イライザの献身の盾はあちらの狙撃を防ぎ切った。

……チツ、やはり読まれていたか。

「……ふ、やはり、速攻を狙ってきましたか。ま、ウチの考案した最強無敵のペガサスナイトの唯一の欠点は、三対三の戦いにおいてマスターが無防備になってしまうことツスからね。先輩なら当然見抜いてくるツスよね。これが四対四なら完全無欠の布陣で先輩を歓迎できたのですが、残念ツス」

俺の小さな舌打ちを見抜いたアンナが、腹の立つくらいのだや顔でそう告げる。

ふん、好きに言ってる。少なくとも、これで三位一体の一角は崩すことができた。……その代わりに、エルフはペガサスに乗って空へと舞い上がってしまったが。

こちらへと上空から雨のように矢を降らしてくるエルフを睨みながら、俺は言った。

「ニケ、イライザに月桂樹の冠を使ってくれ」

「むむっ！？ なぜ貴方が妾の眷属たるニケに命令するのです？」

俺の言葉に、アテナが頬を膨らませる。

どうやら上司である彼女の頭を超えて指示をしてしまったことが、癪に障ったらしい。

今それどころじゃないんだが、と内心で少しだけ思いつつ、神である彼女のプライドを立てて頭を下げる。

「あ、ああ、すまない。アテナ、ニケに月桂樹の冠を使うように言ってくれないか？」

「力を失っているとはいえ、女神たる妾を蔑ろにすることは許しませんよ！……ニケ、やってあげなさい」

「了解いたしました。……戦闘中なのに空気読めないアテナ様可愛すぎندしょ、ハアハア」

ニケは、後半小声で何かを呟きつつ、献身の盾で矢の雨を懸命に防ぎ続けるイライザへと祝福を与えた。

光り輝くローリエの葉で造られた冠が、美貌の吸血鬼の頭上へと降臨し、その全身を淡い祝福の光が包み込む。

これによりイライザのステータスは大きく向上し、さらに汎用スキルを一つ、一時的にランクアップさせることが可能となった。ランクアップさせるのは、中等補助魔法だ。

すかさず、イライザは高等補助魔法のプロテクションを使用する。これは中等レベルの一撃を完全に防ぎ切り、高等攻撃魔法をも大きく軽減する防御魔法だ。

これにより、彼女の献身の盾が受け止める攻撃の圧力はだいぶ軽減されるようになった。

さらに、ニケ自身も交代でプロテクションを張ることで、互いの詠唱時間の際を埋める。

これで、こちらの護りは万全だろう。……もっとも、ペガサスがアップを終えるまでの間、とつくが。

それまでに、ユウキの方でデユナミスの防御を剥がす必要がある。そのユウキはと言うと、デユナミスを纏ったアンナと激しい攻防を繰り返しているところだった。

「ぬあ〜！？　なんでCランクのライカンスロープが、Bランクのデユナミスとタイムマン張れるんすか！？　そんなにシンク口率は高くないッスけど、一応シンク口も使ってるのに！　やっぱ先輩のカードってどっかおかしいって〜！」

わかりやすくテンパっているアンナだったが、その身が繰り出す剣撃は鋭く、重い。

高等レベルの装備化スキルは、戦場からマスターというわかりやすい弱点を消すことができるばかりか、後天スキル次第ではマスターを一流の武人へと変えることもできた。

加えて、アンナは幼少の頃から護身術を習わされている。身を守ることに特化した技を使う彼女の防御を打ち崩すのは、並大抵のことではなかった。

ユウキも分身の術でフェイントを入れたり、土遁の術、水遁の術で地中や水中から奇襲を仕掛けるなどしてアンナを惑わそうとしているが、その堅い守りを打ち崩すまでには至っていない。

上空を見ると、徐々にペガサスの動きが速くなっており、それに伴い矢の威力も重さを増している。……チャージがマックスになるまであと少しと言ったところか。

チャージがマックスになったところでアンナは、降伏勧告をしてくるだろう。

そうなればそれを素直に受け入れなくてはならない。カードが口ストするまで粘ってはならない。それが模擬戦のマナーだ。

なんとかそれまでにアンナの防御を打ち崩す必要がある。

仕方ない……多少おかしく思われるかもしれないが、フルシンク口を使うか……。

『ユウキ、人狼化と本能の覚醒を使うぞ』

『了解です』

これで、戦闘力の上昇の不自然さに気付かれないと良いが……。

「アオオオオオ……オオオンツッ！」

「ツッ!? ここで人狼化ツスか……!」

急速にその体を膨張させていくユウキに、アンナが焦りの声を漏らす。

「ならばこちらも!」

その宣言と共に、アンナのカードたちへと光の羽が無数に降り注ぐ。

……地上の奇跡を使って防御力の底上げをしたか。

「ふふん、これでそう簡単にはやられ……ツッ!?」

アンナが最後まで言い終わる前に、ユウキの拳が彼女の腹……というよりもサイズの差から上半身全体へと叩きつけられる。

人狼となったユウキのサイズは、4メートルを軽く超え5メートル近く、通常のライカンスロープよりも一回り大きい。

その巨体から繰り出される拳は、もはや点ではなく面での攻撃に近く。

そのくせ、その一撃はその巨体とは裏腹に、鋭く、速い。

「……ツッ!? ツッ!??!?!?!?!」

その一撃を全く目で追うことができなかったアンナは、殴られてから初めて攻撃に気付き、ただただ混乱することしかできない。

ユウキはサッカーボールのように転がるアンナへと追走し、その体を掴むとそのまま大きな顎へと啜え込む。

『……降参しろ。さもなくばデュナミスがロストするまでかみ砕く』
「は！？ な……！？」

アンナはダメージこそないものの、混乱して状況がつかめていないようだ。

……前から思ってたが、この赤毛のお嬢様は不測の事態に弱い傾向があるな。

仕方がない、少しだけ脅しを入れるか。

俺はユウキの顎に力を入れ、鎧へと大剣のような牙を少し食い込ませた。

白金の鎧にビキリ、ビキリと罅が入る音に、アンナが悲鳴を上げる。

「ヒイツ……！？ ぐ、五億の鎧が……！？」

真っ先に恐れるところがそこ？ いや、気持ちにはわかるが……。そこで観戦していた織部からストップが入った。

「そこまで！ この勝負、先輩の勝利とする！ ……アンナ、良いな？」

「……あ、うん」

呆然とアンナが頷く声に、俺は彼女を解放すると地面へと降ろした。

デュナミスの装備化を解いた彼女は、力なく海水の中にへたり込む。

「ええ……？ どういうこと？ おかしくない……？」

なにやらぶつぶつ呟くアンナ。

「どう考えても計算合わくないツスカ？ ライカンスロープの戦闘力は800。先輩がフルシンクロを使えるとしても、最大で1600程度。デユナミスの戦闘力が今1680ちょっとツスカから、戦闘力に差はない。むしろウチのシンクロがある分、若干ウチが有利なはず……。人狼化と本能の覚醒によるステータスの上昇があったとしても、それは地上の奇跡による防御力上昇分で、ある程度差を埋められたはず。おかしい……。どう考えてもここまで一方的にフルボッコされる戦力差じゃない……」

「……………」

アンナの考察に、俺は自分の顔が引き攣らないようポーカーフェイスを保つので精一杯だった。

鋭い……。というよりも、さすがに不自然だったか？

「どういうことツスカ？ 一体どんな絡繰りがあるんスカ？」

「い、いやあ、絡繰りなんて、無いよ？」

「そんなこと言わずに！ そう言えば、蓮華ちゃんもいくら霊格再帰があるとはいえ、強すぎますよね？ もしかして……。取得条件のわかってるスキルなんスカ？」

う、マズイ。蓮華にまで飛び火してきた！

「いやいやいや、本当に絡繰りなんてないって。……。他人のカードをあんまり探るのはマナー違反だぞ？」

「……………カードでないとすれば、新しいリンクツスカ？ そう言えば、聞きそびれていましたけど、あの時の戦いでどうして先輩は、一発で母山羊に取り込まれた獵犬使いの場所がわかったんスカ？ 偶然腹をぶち抜いたら、そこに獵犬使いが取り込まれていた、ってわけ

「じゃないツスよね？」
「う……！」

以前から薄々疑念をため込んでいたのか、アンナの疑問はとどまるところを知らず、その追求は厳しいモノだった。

だが、パーフェクトリンクも、蓮華たちの限界突破のことも、他には漏らせない秘密だ。絶対に言うことはできない。

そんな俺の固い決意を表情から読み取ったのか、アンナは攻め筋を変えてきた。

「……もちろん、タダとは言いませんよ。情報に相応しい見返りを払うと約束します」

「だから何にもないんだって。獵犬使いとのことも、本当に偶然だよ」

「……ちょ、ちょっとくらいなら、え……エッチな報酬でも良いッスけど？」

「ッ！？」

まさかの色仕掛け、だと！？

巖のごとく硬かったはずの決意に、わずかな、本当にわずかな亀裂が入る音が聞こえたような気がした。

だが、これに限ってはそんなことじゃ、頷くことはできない。

限界突破は俺にもよくわからないスキルだし、パーフェクトリンクの方は真正正銘の俺の切り札なのだ。

せめて、ちょっとだけエッチな報酬ではなく、超エロい報酬でもない……。

「———そこまでにしておけ、アンナ」

と、そこで織部のインターセプトが入った。

「それがレアスキルの情報だろうが、パーソナルリンクの情報だろうが、いくら仲間内とはいえ無理に聞き出して良い話じゃない。体と引き換えにというなら、ありとあらゆる変態プレイに付き合わせることになるぞ」

「う……確かに、先輩は変態っぽいッス」

チラリとこちらを見て、怖気づくアンナ。証拠もないのに、なんという言いがかり……！ 俺は憤慨した。

まったく、そう言うのは俺の検索履歴を見てから言って欲しいものだ。見られてからなら、まあ、仕方ないが……。

「そういうわけで、今は諦めておけ」

「……了解」

不承不承と言った様子で頷くアンナ。

俺はなんだか複雑な気分だった。安心したような、凄く貴重な機会を失ったような……。

織部がくるりとこちらへと振り返る。その顔には肉食獣を思わせる笑みが浮かんでいた。

「さて、先輩」

「な、なんだ……？」

「どうも流れがおかしくなっちゃったが、模擬レースの再開だ。なんと、アンナとの戦いを切り抜けてホッと一息吐く間もなく、その仲間がその場へと駆け付けた。さあ、どうする？」

そう言って、ツッチーや火雷大神を呼び出す織部。

連戦の気配に、俺は顔を引き攣らせたのだった。

第十話 合宿 二日目（仮）（後書き）

【Tips】迷宮内のトイレ事情

迷宮内におけるゴミなどは、基本的に人間などが片付けられない限り消えることはない。そのため、ゴミなどは冒険者自身が持ち帰るのがマナーとなっているが、中にはそうもいかないものもある。つまり、排泄物である。

各階層の安全地帯には、自衛隊が迷宮を調査した際に残した仮設トイレが設置され、これは魔道具の効果により汚物を瞬間浄化してくれる優れたものであるが、安全地帯以外の場所でトイレをする際には排泄物は冒険者自身が処理しなくてはならない。

アマチュア冒険者の多くは、安全地帯まで我慢するか、最悪地面を掘り返して埋めるなどする場合もあるが、持ち運び式の簡易トイレを携帯するのが一応のマナーとなっている。

金銭的に余裕のあるプロ、セミプロクラスの冒険者となるとカード化した個室トイレを持ち歩く者がほとんどとなる。

なお、余談ではあるが海外の迷宮は安全地帯にトイレを仮設していないことが多く、その衛生状態は控え目に言って地獄である。

第十一話 冒険者の強み

それからの三日間、俺は「ありとあらゆる状況を想定する」というお題目の元、冒険者部の皆にあの手この手でイジメられ続けた。

合宿三日目の訓練では、Dランクモンスターの出現する二十階以上の階層を舞台に、他の冒険者によるモンスタートレインや魔物寄せの臭い袋を使ったトラップなどの対処を行った。

さすがに直接カードで襲ってくる馬鹿はいないだろうが、他の冒険者が仕掛けた罠やモンスタートレインは法律上でも黒よりのグレーゾーンであるため、無いとは言い切れなかった。

冒険者が迷宮に罠を仕掛ける行為やモンスタートレインが、明確に法律で禁止されていないのは、それが迷宮と言う空間では普通にあることだからだ。

モンスタートレインについては、「モンスターから逃げ続けた結果、モンスタートレインを形成して他の冒険者に迷惑をかけるくらいなら、死ね」と言うことはギルドとしても出来ず。

罠に関しても、自分よりも数が多くて強大な敵相手に罠で対抗するのは冒険者としての技能の一つとされ、元々罠の溢れる迷宮をうつつく以上、他の冒険者が仕掛けた罠に引っかかったとしても、それは引っかかった方が基本的に不注意と判断されるからだ。

それでも、モンスタートレインや罠を仕掛けるだけ仕掛けて放置するような行為が迷惑行為であるのは明らかであるため、そういった行為の証拠を押さえられた場合、ギルドなどから嚴重注意や、悪

質な場合はライセンスの資格停止などの処分が下ることもある。

……あるのだが、犯罪として捕まることは滅多にない。

これらの行為が処罰されるのは、明らかに悪意を持って人をターゲットとしているという場合に限り、基本的には見逃される。例外は、本来罠の無いフランク迷宮におけるトラップの設置くらいで、これは法律で明確に禁止されていた。

常に撮影されるレースの最中にこういった行為をする者は少ないだろうが、それでも全くないとは限らない。

というわけで、モンスターレインを仕掛けられた上での冒険者の対処や、アンナや織部の仕掛けた殺傷力はないが悪質なトラップの対処などをさせられたのだった。

四日目の訓練では、他の冒険者から三分以内に50メートル以上逃げ切る訓練を行った。

このレースでは基本的に戦えば戦うほど不利となっていく。カードが消耗していくばかりか、自分が戦っている間にライバルはどんどん進む。時には漁夫の利を得ようと戦いの直後に挑んでくる者も現れるだろう。

そのため、他の冒険者……特に徒党を組んで襲ってくる者たちから逃げる訓練は、必須だった。

この訓練には、途中から師匠もプロのハンター役として加わった。もちろん、俺には内緒のサプライズだ。当然初回は逃げられるわけもなく、フルボッコにされた。一方的にやられたのは、師匠との腕の差もあるが、プロとの戦力差を想定すること、蓮華とアテナの使用を禁じられたからだ。一方の師匠はアラディアを始めとしたベストメンバー。勝てるわけがなかった。

その夜には、俺だけ一人でキャンプをさせられた拳句、三人に交代で騒音や光を当てられたりして眠れないように嫌がらせを受けた。

五日目。合宿最終日となる今日は、寝不足の状態でこれまでの総括として十五階層から最下層の主までの踏破を行った。一階層からではなく十五階層からのスタートとなったのは、さすがに半日では踏破することができないからだ。

道中では、モンスタートレインや臭い袋による疑似的なモンスタートハウス、アンナや織部の襲撃に、師匠の追跡まであった。

それらから何とか逃げ、時に戦い、最下層まで到達した俺を待っていたのは、主との戦闘中の襲撃だった。さすがに主とアンナを同時に相手取るのは厳しく、エスケープを選択するしかなかった。しかも、その後には当然のように織部からも決闘を仕掛けられた。

しかし、本番の前に主との戦闘にメリットはないと気づけたのは、幸運だった。その迷宮を一番に踏破してもポーナなどを貰えない以上、最後の迷宮は例外としても、主との戦闘は他の冒険者に押し付けた方がお得だ。

零落スキル持ちのサキユバスは星150個なのだから、俺は三位以上ならそれで良い。確実に手に入れるためにできれば一位を取りたいところではあるが、場合によっては各迷宮の一位を譲るのも手だった。

「――模擬レースの反省点と、本番での基本的な方針はこんなところツスね。他に何か気付いたことはありますか？」

その夜。

一通りの訓練を終えた俺たちは、この合宿の総まとめとして反省会と本番の作戦会議を行っていた。

「僕はないかな。まあ、限られた期間の中ではやれることはやったんじゃないかな。あとはマロの頑張り次第ってことで」

「我も特にないな。あとは先輩自身の対応力に期待するしかない」

織部と師匠の言葉に、俺は改めて皆に頭を下げた。

「今回は、俺のために何日もありがとう。マジで助かった」

「お礼と言うなら、ちゃんとレースで優勝してくれればそれで良いッスよ。優勝者インタビューなんか受けたりして、先輩と冒険者部の知名度を少しでも上げてきてください。それが巡り巡ってウチら全体の利益になるはずッスから」

「ああ、わかった」

俺が頷くと、アンナはパンと手のひらを打ち鳴らす。

「さて！ 合宿もこれで終わりということ、最後にちょっとしたレクリエーションをやって解散としましょう！」

「レクリエーションって……何をするんだ？」

「夏！ 合宿！ 海と来たら……花火でしょ！」

アンナはテントから花火を引っ張り出してくると、満面の笑みでそう言った。

……花火って。俺たちは夜九時を回っても真上で輝く太陽を見上げ。

「……この明るさで？」

俺たちが可哀そうな子を見ると、彼女はチツチツッ！ と微妙にムカつく感じで指を振り、言った。

「そんなことをウチが考えていないとでも？」

「ああ……そうか、一度迷宮を出てコンビ二の前でやるのか。まあ、

いいんじゃないか？」

「それじゃカードたちも参加できないじゃないツスか！」

「じゃあ結局明るい中でやるしかねーじゃん」

「そ・こ・で！ これの出番ってわけツスよ！」

そう言っただけで彼女がカード化を解除して取り出したのは、やたら古めかしく巨大な注連縄だった。

注連縄は、太さが大の男一抱え分もあり、長さも十メートル近くある、見たこともないほど巨大なモノだった。

何かの魔道具だろうか……？ と俺がそれをマジマジと観察していると、師匠が何かに気付いたようにポン！ と手を打ち鳴らした。

「ああ！ もしかして、それ……天岩戸の注連縄？」

「さすが神無月先輩、ご存知でしたか」

アンナが得意げにほほ笑む。

「師匠、天岩戸の注連縄とは？」

「最近になって使い道が判明した魔道具の一つだよ。いわゆるフィールド改変魔道具の一つで、確か一時間ほどその階層の天候を夜にできるんだっただけかな？」

師匠の言葉に、俺はギョツと目を見開いた。

「フィールド改変魔道具って……滅茶苦茶高いヤツじゃねえか」

その階層の環境を、自分のカードに都合が良いように書き換えられるフィールド改変魔道具は、どれも最低十億以上の値段が付けられている。一番高いのは『海』や『山』など地形を変更できるタイプや、天候を『昼』に変えるタイプだが、『雨』や『夜』などの条

件下で能力を発揮するカードも多いため、安いフィールド改変魔道具というものは存在しなかった。

そんなものを、わざわざ花火のために持ち出してくるとは……やはりコイツ、どこか感覚がズレている。

「ふふふ、ところがこれはまだ価値がわかる前に十七夜月家が研究用に買ったモノなので、当時は大した値段ではなかったのです。今回の合宿にあたり、倉庫に転がっていたのを拝借して来たと言っわけッス」

ああ、なるほど……最近使い道がわかったということは、二十年間近く用途不明のアイテムとして安値で扱われていたということだからな。そう言うこともあるか。

中には、こういう風に使い道がわかることで価値が上がることを見越して用途不明の魔道具を買い漁る投機家もいるにはいるが、その大半は二束三文のゴミを何年も抱えた拳句、大した効果ではないことが判明して買った時より安値が付き、失敗するケースが多いと聞く。

『使い道が判明していない』というのは、『これから化ける可能性がある』ということであり、その魔道具には未知に対して一定の価値が付けられる。それが判明することで逆に価値が下がる事もあるのだ。

言わば、一種のガチャである。

しかし……。

「花火がしたいなら素直に夜の迷宮に行けば良いものを、わざわざ昼の海を夜に変えるとは、なんともすさまじい力技だな」

「夜の迷宮じゃ、今度は昼の海が楽しめないじゃないツスカ！ ウチは冒険者部の皆とそのカードたちで海を楽しんだ、という思い出が欲しいんスよ！ 思い出は、金で買えない数少ないモノの一つッ

「スからね！」

「……なるほど」

「うーん、やっぱりなんだかんだ言っただけで、俺たちの部長はアンナ以外あり得ないな。」

「欠片の迷いもないアンナの蒼い眼を見て、俺は不思議と納得したのだった。」

満月の月明かりと、テントのランプだけが照らす暗闇の中で、色鮮やかな炎の花が咲く。

時間差で赤、青、緑と炎の色を変えていく手持ち花火を見て、俺は思わず呟いた。

「綺麗だな」

「ですね……」

俺の隣に座る織部が頷く。

「知ってますか、先輩たち。実は最近の花火って水の中でも消えないそうですよ」

「マジ!? それって魔道具ってこと?」

「いえ、化学です。なんでも中に酸素を発生させる薬品が含まれているんだとか」

「へえ、職人技だなあ」

俺たちが何気なく楽しんでいるこの花火も、色んな人の努力と閃きの結晶ってことか……。

ぼんやりと花火の炎を見ていると……。

「マロ、なんだか浮かない顔だね」

ふいに師匠が言った。

「なにか悩みでもあるのかな？」

「あゝ、いや……」

俺は一瞬だけ言うか言うまいか迷ったものの、結局言ってしまうことにした。

もしかしたら師匠ならこの胸のモヤモヤを解消してくれるかもと思ったからだ。

「実は、俺って冒険者としての強みが無いなって思ってる」

「冒険者としての強み？」

「例えば織部なら戦略、というか作戦を立てたり相手の心理を読むのが上手いだろう？ 師匠は冒険者としての技能が高水準にまとまっているし……俺はそういうのが無いな、と」

「……なるほど」

俺と師匠の会話を聞いていた織部が怪訝そうな顔を浮かべる。

「先輩は、土壇場での閃きというか、逆境に強いのが強みだと思うが……」

「いや、マロが言っているのはそういうんじゃないと思う。なんていうか、冒険者としての特色が薄いつて話だよな？」

「そう、そんな感じです」

師匠の言葉に俺は強く頷いた。

例えば冒険者としての力量を、リンク、戦略性、カードの質の三

つで表すとしたら、俺はどれも中途半端でカードの質ぐらいいしか冒険者の皆に勝るものがないのでは、と思うのだ。

そして、それはこの三つの中で唯一、金で代用できる資質だった。

「ふむ、僕が思うに、冒険者の力量は三つではなく四つだと思う」

「四つですか？」

「うん。つまり、カードの育成だね」

「……………」

「最近は変わりつつあるけど、今もモンコロではカードの育成はせずに、手に入れたカードを試合で数回使って転売するのが主流だ。プロがTVで使ったカードというだけで付加価値がついて高値がつくからね。そして人々の目に映る冒険者として最も多いのがグレードイーターなせいか、カードの育成という技能は、すぐに結果が出ないこともあってアマチュアの中でも軽視されがちだ。何ヶ月も掛けてスキルを習得させるより、より強いカードを手に入れた方が手っ取り早いしね。でも……………」

「でも？」

「僕はカードを育てる力というのは、リンクの才能にも劣らない重要な資質なんじゃないかと思ってる。戦闘力とか、先天スキルとか後天スキルなんてカードの表層的な力のごく一部に過ぎなくて、その奥にははるかに大きな力が眠ってるんじゃないか、ってね。マロのカードを見ると、特にそう思うんだ」

師匠はそう言つと、俺の眼を深く見つめながら言った。

「マロの冒険者の強みは、カードを育てるのが凄く上手いことなんじゃないかな」

「そりゃまた……………」

俺は苦笑し……………。

「地味な力ですね」

「だが、先輩らしい力だ」

織部は微かにほほ笑みながら、そう言ったのだった。

そんな風にまったりと花火を楽しんでいると。

「先輩たち、小夜、見て見て！」

俺たちが振り向くと、そこには音楽プレイヤーでアニソンを流しながら両手に花火を持ったアンナが立っていた。

一体何事かと思ってみていると、アンナはそのまま両手を振り回し、ダンスを踊り出した。

キレッキレの動きで見事なオタ芸を披露するアンナだったが……。

「アチツ！ アチチツ！」

当然ながら花火を振り回せばその火花の大部分は自分へと降り注ぐ。

アンナは苦悶の声を上げつつ、見事最後までダンスを踊り切った。

「……………ど、どうでした？」

「お、おお……………凄かった。けど……………」

「アンナ、熱くなかったの……………？」

「火傷とかしなかった？」

俺たちが心配してそう問うと。

「滅茶苦茶熱かったに決まってるでしょ！　というかむしろもう、痛かった！　でも、面白かったでしょ？」
「お、おお」

アンナ、体張ってんなあ……！
思わず呆れ混じりの尊敬の眼差しを送ってしまう。

「もう、マスター。はしゃぎすぎよ」

エルフのターニヤが、アンナへと窺めるように言う。

「練習の時のようにサイリウムじゃダメだったの？」

「花火だからウケるんだって！　火傷とかはカードのバリアで防げるし、一瞬熱いだけだから大丈夫、大丈夫！」

「もう……」

……何気にアンナとターニヤの会話らしい会話は初めて見る気がするが、なんか親戚のお姉さんって感じなんだな。

ちよつと意外な感じだ。

その後、大人しくアンナたちと安全に手持ち花火を楽しんでいると、波打ち際の方からやたら騒がしい声が聞こえて来た。

「――喰らえ！　蛇王炎殺黒龍破！」

「ヒャアアツ!?　ちよ、蓮華ア！　人に向かってロケット花火撃つな！」

キヤーキヤーと悲鳴を上げながら逃げ回るメアと、ロケット花火を持って追い掛け回す蓮華。

こういつ時って蓮華って一気にガキっぽくなるよなあ……。たま

にハツとするほど大人びて見える時もあるんだが……、とそれを眺めていると。

「あの……マスター、あれ、止めなくてもいいんですか？」

そうユウキが遠慮がちに問いかけてきた。

「別に良いだろ。メアも笑ってるし」

「ああ……なるほど。じゃあ放っておいて良さそうですね」

そう言っつて、ユウキはねずみ花火へと火をつけて放り投げた。

……なんかさつきからそればかりやってるな。

「ユウキ、それ気に入ったのか？」

「はい。なんか動きが面白くて」

ふむ……確かに俺も初めてやった時はかなり面白く感じたっけ。

さて、他の奴らは何をしているかと周囲を見渡すと、イライザと線香花火をしている鈴鹿の姿が見えた。

ほう、これは珍しい組み合わせ、とそちらへと歩いていく。

「あ、この前私を見捨てたマスターが来た」

俺に気付いた鈴鹿が恨めしそうに言う。

コイツ、まだ合宿初日のことを根に持ってるのか。

「それについては、お前にみんなの輪の中に飛び込む勇気を持って欲しかったからだって言っただろ？」

「その結果、私は心に深い傷を負ったんだよお？……私が参加した途端、白けたとばかりにクイズが終了した時の私の気持ちかわか

る？」

「ああ、うん……それについては、正直すまんかった」

俺は素直に頭を下げた。

でも、あれはお前の混じり方も悪いと思うんだよな。第一声が「こんな簡単な問題もわからないんですかあ？ 私はすぐにわかりましたけどあ」じゃあなあ……。

それに「なんか空気の読めない女が来ましたね。ここらで終わりにしますか」と返したアテナもキツ過ぎではあつたけどな。

ポツンと一人その場に取り残され、肩を震わす鈴鹿の姿は、さすがに憐れ過ぎた。

「そ、それにしてもイライザと鈴鹿とは珍しい組み合わせだな」

「イエス、マスター。橋姫となつてからの鈴鹿のスキルは、替えが利かず優秀なモノが多いため、どうにか私も習得できないかとお話ししていました」

イライザは、本当勉強熱心だな……。一体どこまで行きつく気だ？ そんな彼女を見た鈴鹿が視線を逸らし呟く。

「私の仕事が無くなるのに、教えるわけないでしょ……」

「なぜですか？ パーティー全体の戦力が向上することはマスターも喜ぶはずですよ」

一点の曇りもない赤い瞳に見つめられた嫉妬の鬼が顔を引き攣らせる。

私利私欲が欠片もないイライザと、独占欲の塊のような鈴鹿。ここまで真逆のヤツも珍しいだろうな。

「……前から聞きたかったんだけど、イライザはどうしてそんなに

スキルを習得したがるんだ？ 新しい仲間が加わると、真っ先にそのスキルが習得できないか聞きに行くよな」

「それは……」

俺の問いかけに、イライザは珍しく口籠り。

「それが、私の中で、最初に芽生えた感情だから、です。まだグーラーだった頃、私に新しいスキルが発現して喜ぶマスターの顔を見て、私は確かに、嬉しいと、そう感じたのです」

グーラーだった頃のように途切れ途切れにそう話すイライザを見て、俺はそうだったのかと、蒙を啓かれたような気分だった。

彼女が自我に目覚める前から知っていたことで、俺はいつしか彼女のすべてを知っている気になっていたが、とんでもない思い上がりだった。

まさか、イライザがそんなことを考えていて、スキルを習得したがる原点がそこにあったとは……。

「……いい、よ」

鈴鹿が、ポツリと呟く。

「特別に、イライザにだけは、スキルを教えてあげても良いよ。……って言うっても、どうやって教えれば良いかよくわかんないけど」

「鈴鹿……」

「ありがとうございます」

イライザがサラリと金髪を揺らして頭を下げる。

なんだかしんみりとした空気となって、俺たちはしばし無言で線香花火をやり続けた。

と、その時。

「センパ〜イ！ ちょっと手伝ってくださいッス！」

アンナに呼ばれ、そちらへと向かうとナイアガラの滝を設置しているところのようだった。

皆で協力し、二段階、横幅十メートルの超特大ナイアガラの滝を設置する。

最後に導線を長く引いてくると、アンナが蠟燭台片手にカウントダウンを始めた。

『5、4、3、2、1、ゼロ！』

導線は激しく火花を散らしながら、一瞬ですべての筒へと着火していく。

同時に、勢いよく火花の雨を降らし始めるナイアガラの滝。

『おお〜……！』

とても個人でやったとは思えない規模のそれに、思わず歓声が上がる。

最初は赤、次に緑、青、とエリアごとに色を変えていく火花の滝。その鮮やかな光を眺めながら、俺はふと強烈なノスタルジーに襲われた。

そう言えば、こうして友達と花火をやるのなんて、一体何年ぶりだろうか……。

小学生の頃は友達と毎年、夏の間は何回もやっていたというのに、中学に上がったあたりから全然やらなくなってしまった。

だからだろうか、花火をやると妙に小学生の頃の一番楽しかった頃を思い出す。

未だ男女の境がなかった頃、男女混合のグループで、何駅も離れた森へと自転車で行き、木の枝と段ボールで秘密基地を作った。

そこは蛍の育成もやっている自然保護区で、辺りが暗くなつてくると、一匹二匹、ホタルが小川の脇にあった秘密基地に迷い込んでくることもあった。

それをみんなで夢中になつてみているうちに、すっかり時間が遅くなつて、御袋たちにしこたま怒られたもんだ。

……あの頃、間違いなく互いに親友と思つていた大輔、アイツは今何をしているだろうか。中学に上がり、別々の区域へ行くことになつてからすっかり疎遠になつちまつた。

今じゃ、こうしてモンコロに出るようになっても連絡がないくらいだ。

そつえば、当時好きだった美雪ちゃん。中学に上がったらヤンキーで評判の悪かつた先輩と付き合ひだして、すげえ勢いでグレちやつたつけ。

……ああ、そうか。花火をしなかつた理由がわかつた。こうして小学生の一番楽しかつた頃を思い出しちまうからだ。

無意識に、楽しかつた過去を色褪せさせてしまうことに恐怖を感じ、それで花火を避けていたのだろう。

だが、それも――

「――どうツスか？ 綺麗でしょう？ わざわざ昼を夜に変えてまでやつた価値があつたと思いませんか？」

隣に立っていたアナが、下から覗き込むように笑顔を向けてくる。小学生のように自慢げで、子供っぽい笑顔。

「ああ、綺麗だな……」

――だが、それも今日で最後だ。もう人生で一番楽しかつた

夏の記憶として小学生の頃を思い出すことはない。

人生で一番楽しかった夏の記憶は、今日上塗りされた。

来年の花火で思い出すのは、きっと今日の花火だ。

こうして、この夏一回目の合宿は終わったのだった。

第十一話 冒険者の強み（後書き）

【Tips】フィールド改変魔道具

本来不変であるはずの迷宮の環境を変えることができる魔道具。迷宮内のモンスターは、その環境で万全の能力を発揮できるモノが生み出されるため、雨を晴れに、夜を昼にするだけでかなり有利に戦うことが可能となる。

中には陸を海へ、砂漠を森に変える物すら存在し、それだけでフィールド内のモンスターを全滅させることすら可能。

フィールド改変は、高ランク迷宮になるほど需要が増していくため、どれも非常に高値で取引されている。

第十二話 レース開始！

冒険者部の合宿が終わり、翌日は身体をじっくりと休め、そうして迎えた夏休み十五日目。

いよいよ、レース当日がやってきた。

スタート地点となる東京ドームダンジョンの闘技場では、百名もの三ツ星冒険者がひしめき合い、殺気に近いピリついた空気が漂っていた。

準備運動をしながら周囲を見渡してみると、大半の選手は一人で瞑想したり準備運動をしたりしていたが、中には数人で集まって話をしているグループも存在した。

防音結界を張っているためその会話の内容を窺うことはできないが、おそらく単純に友好を深めているわけではないだろう。

すでに徒党を組み作戦を練っている選手がいる、という事実は周囲の選手たちに強い警戒感を与えていた。

それに対する選手の反応は大きく分けて三つ。

自分には関係ない、と静かに自分のコンディションを整える者。

自分も仲間を作るべきだ、と声を掛けて回る者。

最後に、大部分を占める「どうしよう、自分も仲間を作るべきだろうか」と悩み周囲を窺うだけの者……。

その中で、俺が一番少数の静かにコンディションを整えるグループに属していた。

理由はシンプルで、今更グループを組む意味があまりないからだ。すでにグループを組んでいる者たちは、レースの以前から知り合

いだったか、このレースのために事前に動いてチームを作っていた者たちなのだろう。

彼らはすでにレース後の報酬の分配などについても話を付けており、極めて効率的に動くはずだ。

一方で、今からグループを作る者たちは、報酬の分配や役割分担などの話から始めることになる。仮に話がついたとしてもそれが確実に守られる保証はなく、ただ仲間割れのリスクを抱えるだけだ。

この場ですぐに動き出した行動力は認めるが、すでにグループを作っている者たちから一步も二歩も遅れている。俺のように一人で勝ち抜くための作戦と準備をしてきたソロ派の者たちからも、覚悟と準備の面で一步遅れているだろう。

最後のグループに至っては、論外である。一人で勝ち抜くための作戦を練っているわけでもなく、この場でグループを作り出す行動力もない。第一目標がレースを無事に生き残る事であり、カードのロストをしないのが最優先であることが、すでに透けて見えている。この場にいる三ツ星冒険者の中でも下位に属する者たち。

彼らはもはや、グループ派やソロ派の星稼ぎのための贅も同然の存在だった。

そんな風に周囲の観察をしていると、自分のカード——メイド服を着ているからシルキーだろう——にカメラを持たせた奇抜な格好をした青年がこちらへと近づいて来た。

「え、やはり皆さん非常にピリついてますね。……誰か話に付き合ってくれそうな人おらへんかな。あつ、有名人発見しました。多分あの人なら大丈夫でしょう。ちよつと声を掛けてみますね」

その発言に嫌な予感を覚えたのと同様、ダンジョンチューバーらしき男がこちらへと話しかけて来た。赤と黒のツートンカラーの髪で、ピエロ風のファントムマスクをしたやたら派手な外見をした男

だ。

「コイツ……見たことあるな。炎上系ほどひどくはないが、ちよくちよく炎上もしている……そう、『そろもん』とかいうダンジョンチューバーだ。」

「こんちわ！ 学生トーナメント王者の北川さんツスよね？ ちよつと今お時間良いですか？」

そろもんは、愛想の良い声で意外に礼儀正しく挨拶してくる。

俺はどう対応するか逡巡したが、結局普通に対応することにした。そろもんは、アンチも多いがファンも普通に多い。下手な対応をして悪意ある編集をされてファンに粘着されるリスクを負うよりも、無難に対応して流すべきだった。

「えつと……大丈夫です」

「ありがとうございます！ 実はダンジョンチューバーとして撮影してるんですけど、映しちゃっても大丈夫ツスカね？ もちろんダメだったらこのシーンもバツサリカットするんで」

「まあ、レース始まるまでなら。……えつと、そろもんさんですよね」

「おっ！ 動画見てくれてるんスね！ ありがとう、うわ、めっちゃ嬉しい！」

お世辞もかねて名乗りの前に相手の名前を言ってやると、わかりやすくテンションを上げるそろもん。

「まあたまに。最近忙しくてあんまり見れてないですけど」

「全然！ むしろ名前覚えてもらってるだけで嬉しい！ 北川さんは色々話題ですもんね。霊格再帰の発見から、凶悪事件の解決まで！ ……今日は他のチームメンバーの人とかも来てはるんですか？」

「いや、自分だけです」

そう答えると、大仰に胸を撫でおろすそるもん。

「あつ！ 良かった！ いや、猟犬使いを捕まえたメンバー揃ってたら俺絶対勝てへんもん！ いや、北川クン一人だけでも脅威的なライバルやけど」

「いや、自分なんかゴールするだけで精一杯ですよ」

「いやいやいやいや、そんなことないでしょ。優勝候補の筆頭格じゃないツスカ！」

……優勝候補、か。

これがモンコロの一種である以上、その過程と勝敗は賭けの対象となつている。

最も基本的な賭け方は、百名の選手を二十のグループに分け、そのうちの一人でも一位、あるいは三着以内に入る事ができるか、という予想をするモノだ。

このグループは、有力な選手と無名の選手の詰め合わせで構成されており、実質一人の有力選手に対する人気度でオッズが決まる。

この人気度が高い順に十名が、今大会における優勝候補と見られていた。

……ちなみに、この十名は、全員が番組側の用意した推薦枠であり、俺は大体三番目か四番目くらいの人気度であった。一応、対抗か単穴、人によっては本命と言った感じだ。

そこそこの人気はあるが、筆頭格というほどでもない。

そるもんは、そうして俺をやや持ち上げつつ、

「……すげえ厚かましいお願いなんですけど、今日使うデッキとかって見せてもらえたりできません？」

そつ手のひらを合わせてお願いしてきた。

……ついに来たか、本題が。見せられるわけねーだろ、ボケ！

と内心で悪態をつきつつ、うーん、と腕を組みたつぷり一分は悩む素振りを見せる。

「……いや、やっぱり厳しいですね」

「お願いします！ このレースの最中は誰にも見せないって誓うんで！ 本当に！ 破ったらダンジョンチューバー辞めますわ！」

レース終わったら動画としてネットに上げるんだろ？ 言えるわけあるか。

「そつだなあ……」

そこでまた一分ほど悩むフリをして。

「いや、やっぱりムリッスね。そこまでそろもんさんを舐めてないんで。むしろ一番のライバルと思ってるんで」

「いやいやいや、俺なんて北川クンの足元に及ばんから、ホンマ！ な、ハンデとしてこの通り！ 動画見てる人とかもめっちゃ喜ぶだろうし！」

思ってもないことばっか言いやがって。てめえの動画の取れ高のために手札を晒せるかよ。だからダンジョンチューバーは嫌いなんだよ。

無駄に影響力と拡散力だけはあるのが、厄介極まりない。

「ハンデなんて、むしろ逆にハンデくださいよ」

「なんで格上にハンデ渡すねん！ そうだ、ライバルだから見せるのがキツイってなら俺ら組まへん？ 俺らが組んだら絶対一位二位

通過だわ！」

「……………そうか、もしかしてこれが最初から本命だったのか？
チラリと、番組スタッフの様子を窺う。……………あと少し、か。」

「うーん、人と組むと報酬の分配とかめんどくさくないツスカ？」
「そこは平等に半々とか。途中で詳しく話し合っんで良いんじゃないっか？」

と、途中分解確定の提案をしてくる、そろもん。利用するだけ利用して捨てる気満々だな。やっぱりこれが本命ってのはないか。

「うーん……………」

腕を組み考えるフリをする俺に、徐々にイライラとした雰囲気醸し出すそろもん。「いちいち考え込むな、ボケ！ 冒険者ならさっさと決断しろ」という心の声が聞こえるようだ。
そんな風に俺が露骨に時間稼ぎをしていると。

『お集まりの選手の皆さん！ これよりレースの追加説明と一部ルールの変更点の説明をしますので、お静かにお願いします』

ようやく、レースの開始時間が来た。

「あ、時間が来ちゃったみたいですね。すいませんが、組む話は無しってことで。それじゃ！」

「……………チッ」

微かに聞こえた小さな舌打ちを無視し、俺はその場をホクホク顔で離れたのだった。

『本日は、お集まりいただきありがとうございます。レースのスタートに当たり追加の説明が必要となりましたので、説明させていただきます。まずは、今回のレースに使う魔道具をお受け取りください』

司会の男がそう言うと、選手一人一人にプロペラを生やしたバスケットボールほどの球体が飛来する。

俺の元に飛んできた球体は、俺の手に時計のような物をポトツと落とすとそのまま俺の周囲で滞空し始めた。

『今皆さんのところに飛ばしたのは、レースの様子を撮影し運営に送信するカメラアイとなります。ルールブックに書いてある通り、これが壊れた際には速やかに直前のチェックポイントまでお戻りください。カメラアイが壊れた状態で次のチェックポイントへと向かっても無効となりますのでご注意ください。さて、ではお手元の時計型の魔道具をご覧ください』

司会の男に言われ、視線を手元へと落とす。時計型の魔道具は、銀色のシンプルな造りとなっており、時計のある部分は長方形の黒い水晶体らしきものが嵌っているだけだった。

魔道具と言っていたが、一体どうやって使うのだろうか。

『そちらの魔道具は、カードギアというエメラルドタブレット社さんの新商品となります。機能に関する詳しい説明は、担当の方にお越しただいておりますので、そちらから』

司会の男が一步下がると、スーツ姿のキャリアウーマン風の美女が壇上へと上がった。

エメラルドタブレット社……国内最大手の人工魔道具の開発販売を行っている企業だ。

俺がパツクで当てたエアコンペンダントや、魔石発電機、マーメイドの水着などはこの会社が開発して販売している物だ。

『エメラルドタブレット社の広報担当、佐川と申します。よろしくお願ひいたします。カードギアの説明をさせていただきます。まずは起動のため、水晶体へのご自身の血を一滴垂らしてください。針は魔道具の側面に収納されております』

佐川さんの言葉に、選手たちは一瞬だけ顔を顰めつつも大人しく針で指を傷つけ水晶体へと血を垂らす。今更、針で血を出すことにブーブー言うような冒険者は、さすがにここにはいない。

俺たちが血を垂らすと、カードギア的水晶体から縦三十センチ、横二十センチほどの立体映像が浮かび上がった。

思わず「おおっ！」と驚きの声が漏れる。なんかSFっぽくてカッコいいな！

立体映像には、スマホの画面のようにいくつかのアイコンが並んでいる。

『お次に、お手持ちのカードを一枚水晶体に重ね合わせてください。一瞬で大丈夫です』

それに、俺は蓮華のカードを水晶へと触れさせてみた。
すると……。

『……むっ！？ これは……』

「蓮華！？」

立体映像に、蓮華の上半身が映し出される。

「一体どうなってる？」

『わからん……カードの中に急に外部への窓が現れた感じだ』

なるほど……召喚せずともカードと会話が可能になる魔道具なのか。これは便利だ。

と思っていると、佐川さんはこちらのド肝が抜かれるようなことを言いだした。

『そちらのカードギアでは、従来迷宮内でしか会話できなかったカードと、迷宮外でも会話ができるようになっていきます』

——ざわっ！

会場が、ドツと騒めいた。

今、なんて言った？ 迷宮外でもカードと会話できるようになるって言ったのか？

『カードギアは、よりカードと身近に……をコンセプトに開発された次世代の冒険者用品となっております。現時点では登録できる枚数は八枚程度ですが、徐々に枚数を拡張していく予定です。』

またカードとの会話機能以外にも、迷宮内でのオートマッピング機能、ライセンスと同等の救助要請機能、同じ迷宮内にいる他のカードギア所有者との通信機能など様々な機能が搭載されており、さらには機械を一切使用していないため、グレムリンによる機械破壊を受けない新しい形の人工魔道具となっております』

なる、ほど……そういう、ことか。

迷宮内でのオートマッピング機能に、救助要請……そして、グレムリンによって破壊されないという特性。

明らかに、猟犬使いの事件の影響を受けて開発された魔道具だった。

おそらくは、エメラルドタブレット社だけの開発ではなく、その裏には国が……軍事技術が流用されている。

グレムリンなどによる機械破壊対策は、長らく各国の軍の最大の課題だった。

グレムリンだけなら先に見つけて抹殺すれば良いのだが、クラック以上の迷宮では階層そのものが機械破壊の効果を持つことも珍しくない。数十階ある階層の内、いくつかに機械破壊効果を持つ階層が混じるだけでその攻略難易度は跳ねあがる。

故に、どの国も機械破壊対策を最優先課題として研究をしていた。その最有力候補として研究されていたのが、機械による制御に頼らない人工魔道具の作成である。

現在作られている人工魔道具は、迷宮産の魔道具を多少加工した程度の物を除き、そのほとんどが制御のためにマイクロチップや回路などを組み込んでいる。

これですら発表された時は、「ついに人類が魔道具を自力で造れるようになった！」と大ニュースになったのだが、残念ながら肝心の機械破壊対策とはならなかった。

それから数年、いつの間にか機械を全く使わない人工魔道具を造れるようになっていたらしい。

これまでは軍で独占していたのだったが、事件の影響を受けて民間流用に踏み切ったのだろう。

それほど政府が猟犬使いの事件を重く見ているということだ。

しかし、百人もの冒険者に一人一千万相当の参加費を配り、さらには上位入賞者にも十億円近い報奨を払うなんて、いくらキャットファイトとはいえ大盤振る舞いだとは思っていたが……。なるほど、国とエメラルドタブレット社がスポンサーだったというわけか。

大方、このレースも、このカードギアが正常に働くかを試験するための最終テストと宣伝を兼ねたものなのだろう。

『皆様にお配りしたカードギアは、開発段階の試作品ではありませんが、性能としては製品版のハイエンド品を想定した機能となっております。お気に召しましたら、ぜひ正式版をお求めください』

佐川さんが一步下がり、司会の男が再び前へと出る。

『試作品のカードギアは、血液登録した者以外は使えなくなることですので、今回お配りしたカードギアは、エメラルドタブレット社から皆さんに無料で贈呈することです』

おお〜！ と歓声が上がリ、壇上の佐川さんへと拍手が送られる。彼女はそれに照れ臭そうに頭を下げた。

発売前の商品を事前に手に入れられるとは……。これは素直に嬉しい。

『それでは、レースの説明の続きに戻らせていただきます。レースでは、このカードギアを使って『闘争と逃走』の選択や、賭ける星の数などを入力する形となります。またチェックポイントのヒントとの距離や方向も、マップアプリで分かるようになっておりますので、そちらを頼りにゴールを目指してください』

その他、カードギアの細々とした操作法などを説明し、レースの舞台についての話に移った。

『まず皆さまに挑んでもらう二つの迷宮についてですが……。一つは、ここからほど近い場所にある東京ドームシティ・ラクーアにある昼間の海型の迷宮。もう一つは、ここから少し離れた東京駅周辺にあ

る地下迷宮型となっております』

その言葉と同時にマップアプリに送られてきた地点情報を見る。

……地下型迷宮までの距離は電車と徒歩で片道30分ほどと言ったところか。

この二つの迷宮は、ギルドのアプリを調べても攻略情報が載っていない。つまり、一般公開していないシークレットダンジョンということだ。

一般公開されている迷宮だといくつか問題が出ることから予想していたことだったが、これで確定したか。

しかも、プロ冒険者にも限定公開されている旨味の少ない下位のシークレットダンジョンとは異なり、完全に国が独占している正真正銘のシークレットダンジョン……。

場にいる冒険者全体のボルテージが上がるのを感じた。完全非公開のシークレットダンジョンに潜れるのだ。冒険者なら、レースに関係なくテンションが上がって当然だ。

『こちらの迷宮は少々特殊な迷宮となっております、海型迷宮ではヴィーヴィルが確定出現、地下迷宮型では一階層につき数体のカーバンクルが出現するそうです』

おいおい……！ ヴィーヴィルってマジかよ！

ヴィーヴィルは、一言でいえばカーバンクルの完全上位互換的モンスターだ。倒すと戦闘に参加したモンスターの戦闘力を成長限界まで成長させ、確定で額のダイヤをドロップする。

このダイヤはヴィーヴィルダイヤと呼ばれ、最低でも一億円からの取引となる上、カードに与えることで戦闘力を上昇させるスキルを覚えさせることができた。

『これに際し、主戦での混乱が予想されますので、各迷宮の最下層

では先着一名の一時間のボーナスタイムを設けさせていただきます。このボーナスタイム中は、次の冒険者は最下層に入ることができません。一時間以内に主を倒しても封鎖が解かれることはありませんが、逆に一時間以内に主を倒せなかった場合は、先着の選手には最下層を退去していただき、二着目の選手に順番を譲っていただきます。』

つまり、もし瞬殺できれば一時間もライバルよりも先行できるということか。

先頭であることかなりのメリットが出てきたな。

先着一名を勝ち取れるレベルの選手が、主を倒せないなんてありえないので後者のケースは考えない。

『また、ヴィーヴィルダイヤは星百個と、カーバンクルガーネットは一つ星二個で買い取らせていただきます。もちろん、売らずにお持ち帰りいただいても大丈夫です。』

ダイヤが星百個で、ガーネットが星二個。一階層に数体カーバンクルが出現し、迷宮の階層が二十五階以上と考えると、星の総数自体は地下型迷宮の方が多いか。

だが、どう足掻いたところですべてのカーバンクルを独占することは不可能。

百個独占を狙ってヴィーヴィルダイヤを狙うか、少しでもお零れを貰うために地下迷宮へと向かうか……。

『説明に関しては以上となります。レースのスタートは今から五分後。午前十時ピッタリとなります。』

そう言って司会の男が下がると、冒険者たちは準備の最終確認や、グループを組んでいる者同士で作戦の見直しなどを行い始めた。

特にグループ派は基本戦略に狂いの生じる情報が開示されたため、やや焦っているような感じであった。

しかしそんな喧騒も、時間が近づいてくるにつれて下火となり、三十秒ほど前となると完全に静寂状態となった。

……10、9、8、7、6、5、4、3、2、――1。

『レースッ！ スタアアアーーット！』

開始のベルがけたたましく鳴り、選手たちが一斉に走り出した。

第十二話 レース開始！（後書き）

【Tips】エメラルドタブレット社

魔道具の開発、販売で国内最大のシェアを持つ大企業。今回マロがパックで当てた人口魔道具の数々はそのほぼすべてがこの会社の製品。魔道具のみならず、様々な冒険者グッズも販売している。

『世界をより素晴らしく』をモットーに生活に密着した魔道具造りを目指しており、人々からの信用信頼も高いが、裏では色々とい噂も絶えない。

以前から政府と秘密裏に協力し、機械破壊されない魔道具の開発に取り組んできたが、この度その集大成とも呼べるカードギアを発表した。

このレースは、その広告を兼ねたものでもある。

第十三話 物欲センサーは実在するか否か

東京ドームの外へと出た選手は、全体の七割近い集団と三割ほどの少数の集団に分かれた。

前者は海の迷宮へと、後者は駅へと駆け出していく。

海の迷宮を選ぶ者が多いのは、地下型迷宮に向かえば往復で一時間近いロス（正確に言えば三十分ほどの差）が生まれてしまうことを嫌ったのと、ヴィーヴィルダイヤを手に入れられればこのレースにおける黒字が確定するからだろう。

末端価格で一億からの取引となるヴィーヴィルダイヤさえ手に入られれば、もうその時点でリタイアしても良いほどの利益を得られる。

三つの迷宮を走り切る体力がない者でも、一つだけの迷宮を全力疾走するなら不可能ではない。

またキマリス目当ての者も、レースでの一位とヴィーヴィルダイヤで目標の星600に届くために一石二鳥に見えたのだろう。

一方で後者を選ぶ者たちは、少しでもカーバンクルガーネットによる少額の利益を拾いたい者が多く、ソロ派でもグループ派でもない有象無象が大多数を占めていた。

自分の力に自信のあるソロ派の者は前者を、グループ派は海と地下迷宮の二つに半々でメンバーを振り分けているようだった。

選手たちの最後方で走りながらその流れを観察していた俺は、魔法の絨毯へと飛び乗り、駅へと飛んだ。

俺が時間のロスが発生する地下迷宮を選んだのは、単純に人数が

少なかったからだ。

もしも、海型が少なかったならそっちを選んでいただろう。

迷宮のタイプや、直前のルール変更には左右されず、基本的に一つの迷宮は人数が少しでも少ない方を選ぶ……それが冒険者部の皆で考えた作戦方針だった。

魔法の絨毯で頭上を飛ぶ俺を見上げる他の選手たちの視線を感じながら、上空をショートカットした俺は、真っ先に改札を通り、ギリギリで電車に滑り込むことに成功した。

これで電車一本分リードすることができた、とタッチの差で乗れなかった選手たちの悔し気な顔に内心でガッツポーズをする。

そのまま真っ先に地下迷宮のあるダンジョンマーケットに到着すると、第一階層の安全地帯で番組スタッフがテントを張って待ち受けていた。

「おはようございます！ さっそくですが、こちらの端末にカードギアのタッチをお願いします」

言われた通りカードギアをタッチすると、カードギアの立体映像の右上に 10 という数字が刻まれた。

「そちらが星の残数となります。これで運営のコンピューターと北川さんのカードギアが紐づけされましたので、他の選手のカードギアとお取り間違いなどのないようご注意ください」

これで他の選手に寝ている間に物理的に星を盗まれたりする危険が無くなったわけか。

ま、それでもカードに見張りをさせる必要はあるけどな。

「それでは、頑張ってください！」

スタッフの激励を背に、まずはカードを召喚していく。メンバーは蓮華、イライザ、ユウキ、鈴鹿、デュラハン、そしてメイドマスターのシルキーだ。

すぐさまデュラハンを装備化したイライザが漆黒の馬車、コシユタ・パワーを召喚し、一斉に乗り込んだ。

「――頼んだぞ、イライザ、シルキー」

「イエス、マスター。お任せください」

「新人メイドの失敗は私がカバーして見せますので、ご安心を」

「よろしくお願いいたします、先生」

そう言っつて、メイドマスターのシルキーは自信満々に頷いた。

……これが、彼女を召喚枠の六枚の一つに選んだ理由である。

デュラハンのマイナススキルによって生じる致命的ミスを、メイドマスターのスキルで相殺するのだ。

そう、イライザはこの一週間というわずかな時間に新たなスキルを習得していたのである。

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】840（MAX！）

【先天技能】

- ・ 膏血を絞る
- ・ 夜の怪物
- ・ 中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・ 絶対服従
- ・ 多芸：新米メイド（NEW！）、演奏、畏解除、武術を内包する。

（新米メイド：メイドとして必要な技能を最低限収めている。たまに失敗してしまうことも。特定行動時、ランダムで弱いマイナス補正。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包）

・フェロモン

・奇襲

・静かな心 明鏡止水（CHANGE!）：一切の邪念なく、澄み切った心。精神異常無効、思考能力を大きく向上させる。

・献身の盾

・精密動作

・中等補助魔法 高等補助魔法（CHANGE!）

・魔力強化

・詠唱短縮

・直感

・フィンの親指（NEW!）：親指を啜えることで、思考能力を大きく向上させることができる。また両手に癒しの水を生み出すことができる。癒しの水の効能は、ミドルポーション＋リフレッシュと同程度。

新たに新米メイドのスキルを習得し、静かな心が明鏡止水へと、中等補助魔法が高等レベルにランクアップした。

性技と礼儀作法というメイドスキルの内半分のスキルを所有していたとは言え、この極めて短期間にメイドスキルを取得できたのは、元々キャンプでの料理や片付けの経験が蓄積されていたのと、この一週間のシルキーによる地獄の扱き、それに何よりも本人のやる気と努力の賜物だろう。

見事メイドスキルを得たイライザに対し、俺はお祝いとしてフィントンを与え、彼女はフィンの親指を習得した。

これで、彼女は血の再生以外にも回復スキルを得たことになる。

状態異常に対する高い耐性に、補助魔法と自己回復を備えた耐久型ガードの完成形と言えるだろう。

それにしても、ここ最近のイライザの成長は目覚ましいものがある。

彼女本来の資質の高さに加え、シルキーの教導や多芸などのスキルによってスキルの習得効率が上がっているとは言え、このスキルの習得速度、成長性は、はつきり言って異常だ。

……もしかすると、彼女の中で何かが開花し始めているのかもしれなかった。

『——イライザ、次、右だ』

『イエス、マスター』

敵の出現しない地下迷宮型とあって俺たちの乗る馬車は猛スピードで通路を進んでいく。

わずかに地から浮いていることからスイッチを踏むことで作動する罠の大半は素通りし、たまにある気配に反応して矢などを飛ばしてくる罠なども気配遮断でスルー。唯一生命力を感知して攻撃してくるタイプの罠だけは回避できなかったが、それは事前に罠を感知していたイライザが献身の盾で受け止める。

小部屋の扉やそこに設置された罠だけは馬車を止めてイライザが解除する必要があったが、それでも考えうる限り最速で迷宮を突き進んでいる。

ユウキの索敵によれば、他の選手たちはかなり後方だ。

完全に俺の独走状態である。

他の選手との接触判定が解放される一時間以内に出来る限り進んで置きたいところだが……と考えていると、最初のヒントポイントに到着した。

しかも……！ カーバンクルも一緒だ！

……もしかして、ヒントポイントはカーバンクルの部屋と重ねてあるのか？ いや、それはないか。人を見たらすぐに逃げ出すカー

バンクルと同じ場所にヒントポイントを設置するのは不可能。ただの偶然だろう。

すぐさまユウキにカーバンクルを拘束させ、デュラハンに始末をさせる。ほぼ未強化のデュラハンの強化は最優先である。

現れた金色のガツカリ箱に関しては……。

『蓮華、どうだ？』

『ん……まあまああってところだな。ハズレではない、はず』

『そうか……じゃあその幸運は貯金しといてくれ』

『了解』

そこそこのアタリを出すはずだった金色のガツカリの幸運を抑え込み、貯蓄へと回す。

当然、中身に期待はできなくなるわけだが——なんと中身は黄色のスキルオーブだった。

『……幸運を貯金したってことは、これはマイナスのスキルオーブの可能性が高いな』

『だな。幸運を貯金しなきゃプラスのスキルオーブだったかもな』

『失敗したか？ まあ、仕方ない。これは放置だな』

スキルオーブを使うことなく、カーバンクルガーネットを回収しその場を立ち去る。

これを後続の選手が—か八が使ったりしたら、ちょっと可哀そうな気もするが……まあ仕方ないだろう。

さて、ヒントは、と。カードギアに追加されたチェックポイントのヒントを見る。

【3のは。 x146、 y626】

……ん。「3のは」の内容はいまいちわからないが、xとyの方は、迷宮内の座標だろう。

まさかそのままチェックポイントの場所、ということはないだろうから……パターンBだろうな。

パターンBは、師匠が模擬レースのチェックポイントを決める際のいくつかある傾向の一つだ。

これは四つのヒントポイントの座標を線で結ぶことにより、二本の線が交差する中心点をチェックポイントとする方法だ。

他のパターンのように特に複雑な謎解きなどはないが、四つすべてを集めないと詳細な位置がわからないため、すべての情報を集める必要がある。

別名、海賊王方式。

さて、この階層のヒントは回収したことだし……。

『イライザ、クレアヴォイアンスを』

『イエス、マスター』

イライザが高等補助魔法・クレアヴォイアンス（千里眼）を使用すると、俺の脳裏にこの階層の構造が浮かび上がってきた。

千里眼の魔法は、現在いる階層の構造を一定時間知覚できるようになる魔法だ。

普段はギルドからマップ情報が買えるためあまり価値を見出されない魔法ではあるが、ギルドでも情報の取り扱いが少ないBランク迷宮や、そもそもマップを売っていないシークレットダンジョンなどでは必須となる魔法だ。

もしもイライザが高等補助魔法まで成長してくれていなかったら、このレースはかなり厳しいことになっていただろう。

メイドスキルと違って高等補助魔法のランクアップは狙ってやった結果ではなかったの、これは本当にラッキーだった。

一応、サブプランとしては可能な限り千里眼のカードをかき集める方法と、二ケの高等補助魔法に頼る方法があり、これはヒントポイントを一切合切無視して彼女の召喚時間制限内に行けるところまで行き、召喚時間制限が切れてからハーメルンの笛で階層を戻り、ヒントを集めていく……というモノであった。

前者の方法では莫大なコストが、後者の方法ではかなりの時間ロスが生じていただろうから、イライザが高等補助魔法を覚えてくれたのは本当に助かった。

というか、移動もデュラハン＆イライザ、罾の対応もイライザ、マップの把握もイライザと、イライザが大活躍すぎる。

これ、途中でイライザがロストしたら、詰むな……。

そう考えると、他の選手との戦いで彼女を使うのも考え物ではある。

とは言え、メインのガード役である彼女を外すわけにもいかないし……。

そんなことを考えながら突き進んでいくと、二階層目のヒントポイントに着いた。

敵は、普通にスケルトンやウォータースライムといった雑魚共だ。さすがに、二回連続でカーバンクルつてのはいないか。

敵を瞬殺し、ヒントを取得すると今度は【2のうち。x - 246、y - 634】と書かれていた。

……四つの点を結ぶタイプで確定だな。一応これでこの直線状のどこかにあることが判明したわけだが、問題なのは最初の暗号だな。多分、パスワードか何かだとは思いが……。

次の階層へと向かう途中、再びカーバンクルと遭遇する。

いいぞ……積極的に探しに行くほどではないが、こうして偶然出会えるのは純粹に嬉しい。

またデュラハンに始末させ、ガツカリ箱の幸運を貯金する。中身

はローポジションだった。ちょっと勿体ないが、さっきの針の傷を治すのに使ってしまう。

第三階層に到達するが、未だに俺たちに追いつく選手はいない。それどころか、二番手との距離もじわじわと引き離しつつある。

やはり、コシユタ・パワー＋畏解除＋千里眼の組み合わせは反則的だな。さすがイライザさんだ。うちのパーティーの迷宮攻略はイライザさんで持っていると言っても過言ではない。

それでも完全に引き離せないということは、この二番手のヤツも移動とマップを把握手段を持っているのだろう。……あるいは俺の軌道を把握し、それを追跡しているのか。

いずれにせよ、要注意人物だ。

このヒントは【1】のあ。x - 982、y - 342】で、道中でカーバンクルとは遭遇できなかった。

第四階層。ここではヒントに到達するまでに三回もカーバンクルと遭遇することができた。かなりラッキー。ちなみに、蓮華による幸運消費や運命操作は行っていない。純粋な偶然だ。これで、デュラハンとシルキーの戦闘力がMAXまで成長した。ヒントは、【4】のい。x 945、y 22】だった。

そうしてようやく、チェックポイントの存在する第五階層へと到達した。ここまでかかった時間は、三十数分程と言ったところか。かなりベストのタイムに近い。そろそろ、一時間の不接触タイムも終わるころだ。ここからは益々他の選手との距離にも気を払っていかなくてはならない。

チェックポイントは、至って何でもない通路上にポツンと置かれたテントだった。

中へと入ろうとしたが、結界が張ってあるのか、不思議と入口を開けることができない。

すると、中から声が掛けられた。

「――合言葉をカードギアに入力してください」

言われるままに「あ、ち、は、い」と入力すると。

「お入りください」

テントの中へと迎え入れられた。そこにはボディーマーを身に纏った冒険者らしき番組スタッフと、猫又のカード、グレムリンがいた。

一瞬グレムリンを見て警戒する俺に。

「ああ、ご安心ください。こちらは私のカードなので大丈夫です。カメラアイの映像を高速で確認するためなので、ご理解ください」
「あ、はい」

機械破壊が悪名高いグレムリンではあるが、電子の精霊としてデータの管理などの能力を持つという側面も存在した。良くも悪くも、最も現代的なモンスターなのである。

「え、それでは、これからする質問に、嘘偽りなくお答えください。……ここに来るまでの間に、何らかの不正を行いましたか？」

「……いいえ」

「――はい！ 結構です！ それでは、水晶にカードギアをタッチしたらレースを再開してください」

「あつ、はい」

これで終わりか、と思いつつテントを出る。

む……チエックポイントに寄ってる間に二番手のヤツがちょっと

距離を縮めてきてるな。それに三番手のヤツも同じ階層に追いついて来てやがる。

このプレッシャー、ちょっと嫌な感じだな……。

そう思いながら、俺はレースを再開した。

――それから約二時間後。俺は二十一階層に到達していた。

ここまでで、俺は合計十四匹のカーバンクルと遭遇し、ガーネットを手に入れていた。

特に探し回っているわけでもないのに、こつも順調に出会うことができたのは、蓮華の恒常的幸運の加護のおかげだろう。

その間、ガツカリ箱の幸運は貯蓄し続けてきたので、大分幸運を貯め込むことができた。

タイムについても、考えうる限り最高のタイムを維持し続けている。

正直、ここまでスムーズに進めるとは思っていなかった。

冒険者部での事前シミュレーションでは、他の冒険者との戦闘を避けても二十階層を超えるまでに最低三回の戦闘がある想定だったのだ。

そうならなかった要因としては、魔法の絨毯により俺だけ一本先の電車に乗れたこと、そこから一人で独走状態をキープ出来たこと、俺以外の先頭グループが戦闘を避ける方針だったことが多い。

――だが、順調なものもここまでだろう。

ここからは敵がDランクモンスターとなり、これまでのように瞬殺とはいかない。

またライバルたちも、俺に最下層一番乗りを許さないだろう。

これまではできるだけ戦わない方針だったが、ここからは積極的

に仕掛けてくるはず。

特に、俺の後ろをピッタリとくっついて離れない二番手のストーカー野郎だ。

三番手以下の臭いが割と入れ替わっている中で、コイツだけは不動の二位をキープし続けている。

明らかに目的があって俺のすぐ後ろという位置を保持していた。

——他の戦闘集団に動きがあったのは、それから五時間後。俺が二十五階層へと続く階段に到着した時のことだった。

『……ッ！ マスター！ 二番手の臭いと気配が消えました！ そのカードもです！』
『ッ！ ついに動いたか！』

野郎、やっぱり俺の後をトレースすることで次の階層までの最短ルートを探ってやがったな。

最後のヒントポイントの位置が分かった以上、もはや残すは二十五階層のチェックポイントのみ。

これまで五階層間隔でチェックポイントがあった以上、この先にはもうヒントポイントやチェックポイントはない可能性が高い。

ここが最後のチェックポイントということは、次の階層が最下層である可能性も高くなる。

俺が番組のプロデューサーなら、最下層は最後のチェックポイントの一個前くらいにするだろうからだ。

つまり、奴にとって俺はもう用済みというわけだ。ストーカー野郎だって千里眼のマジックカードの一枚や二枚は持つてるだろうからな。

……問題は、仕掛けるタイミングだ。
下手なタイミングで仕掛けても、後続集団に出し抜かれるだけだ。

——状況がさらに動いたのは、俺が最後のチェックポイントを通過した直後の事だった。

『マスター！ 三番手と四番手が接触しました！ 決闘を行うようです！』

『俺の一着が確定したと見て潰し合いに移行したか……！』

だとすれば、マズイ！ 二番手のヤツが俺に仕掛けてくるとしたらこのタイミングしかない！

ここまで来たら、二番手が追いついてくるまでに最下層へと滑り込むしかない……！

そう考え、次の階層へと続く階段へと向かった俺だったが——。

「よつやく会えましたね」

階段へと続く手前の小部屋。そこに待ち受けていたのは、ショートカットの赤髪と碧眼が美しい白人女性だった。

…… ストーカー野郎は、女だったのか。

そう内心で驚きながら、思いながら相手を観察する。

まず目を引くのは、180センチを優に超える長身だ。外国の女性は背が高い人が多いが、彼女は中でもかなり高い方だろう。

デカイのは背だけではなく、その胸もだった。人間で牛倉さんより胸の大きい女性とあったのは、彼女が初めてだ。

年齢については人種が違うということもあってよくわからないが、パツと見は俺よりも若干年上に見える。

顔立ちは整っており、鼻も高すぎず、顎のラインはシャープで、日本人受けしそうな美人さんだった。

その顔と胸元には俺も見覚えがあった。確か、番組側が用意した推薦枠の一人で、ヘレンとかいう名前だったはず。事前情報がほとんどなかったせいで、人気は十番目くらいだったが。

馬車から降りて、ヘレンと対峙する。

「……チェックポイントは俺が一着通過だったはずなんですが、どうやって先回りしたんです？」

「簡単なことですよ。チェックポイントは通らず、ここへ直行しただけのこと。そうでもしなければ、先回りできなそうでしたから」

ヘレンは流暢な日本語で答える。翻訳の魔道具を使っているのか、日本暮らしが長いのか……。

「しかしそれでは、俺に勝っても最下層には入れないのでは？」

「貴方を倒して一時間足止めしている間にゆっくりとチェックポイントを通過しますよ」

「その間に三番手が四番手に漁夫の利をかつさらわれたら？」

「もちろん彼らも道中でブチのめす予定なのでご安心を」

そう言うてにっこりと笑う彼女に、傍らの座敷童が愉快そうに笑い声をあげる。

「コイツ、可愛い顔して無茶苦茶だな！ 超面白いぜ！」

「ありがとう。貴女も素敵なカードね」

蓮華の賞賛に、にっこりと微笑み返すヘレン。その表情と態度からは、自身の経験に裏付けされた確かな自信が透けて見えた。強敵の予感……。

「さて、そろそろおしゃべりはここまでとしましょうか。あ、もちろん降伏してくれるというならそれでも結構ですよ」

「冗談」

鼻で笑い、俺は迷わず闘争を選択する。

すると、カードギアに星をいくらかけるかという入力画面が浮かんできた。

さて、どうするか。

星の賭け方としては、概ね四つのパターンが存在する。「一個だけ賭ける」「三つだけ賭ける」「一個だけ残して全部賭ける」「オールイン」の四つだ。

一つ目は、手札を三枚に抑える形に、リスクを最小限に留める賭け方だ。戦闘では確実に不利となるが、危うくなればすぐに降伏すればよいだけなので傷は最小限に抑えられる。ただ単に逃走を選ぶよりは……というやり方である。

二つ目は、リスクを抑えつつもリターンを最大限に狙っていく賭け方だ。二個ではなく三個賭けるのは、一個賭ける相手に対し二個で勝とうとする相手の一個上を行くためだ。さらに裏を掻いて相手が四つ賭けてくる可能性もあるが、そこまで行くとキリがないのでその時は潔く諦める。

三つ目は、リタイア対策に一つだけ残して、可能な限り勝利を狙っていく賭け方である。リスクは高いが、高確率で賭け自体には勝てる。

四つ目の賭け方は、ただのアホである。負ければ一発リタイアの勝負など正気ではない。

……が、この状況では少しばかり事情が変わってくる。

なぜなら、俺たちはここまでの道中で戦闘を一切行っておらず、その星の数に変動がないからだ。

互いに星十個しか持っていない可能性が高いこのシチュエーション

ンにおいてのみ、オールインは有力な選択肢として浮上する。
それを踏まえた上で俺が選択したのは一一一一三つ目の一個残し
てオールインだった。

『ノーモアベット!』

互いの選択が終わり、カードギアから判定が下される。

『ヘレン・ブレッケ。10スター! オールイン!』

その言葉に、俺は思わずピクリと眉を跳ね上げた。オールインか、
思いつきりの良い人だな……。

そんな俺の顔を見たヘレンはニヤリと笑い。

『北川・歌麿。11スター! 北川WIN! 四枚召喚可能です。
両者、一分以内に召喚数を規定数に収めてください』

「……なっ!？」

次の瞬間、驚愕に目を見開いた。

「不正……いや! そうか、カーバンクルガーネット!」

正解、と俺は頷いた。
ルールブックでは、

『星は一個につき二百万円かDランクカード一枚で補充可能。購入
可能地点はスタート地点と各チェックポイントにて。ただし、この
方法で補充できる星は十個まで(所有する星の数が十以上の場合は
補充不可)』

と記載されている。

ここで気になったのが、わざわざ『この方法で』と書いてあることだ。しかも、その後にかッコ書きで所有する星の数を十以上に出来ないとまで補足してある。

そんなことをせずとも、『ただし所有する星の数が十以上の場合には補充不可』と書けばよいだけだというのに、わざわざ『この方法は』と回りくどく書いてあるのは、暗に他の方法があると言っているも同然だ。

そこに来てレース開始前のヴィーヴィルダイヤとカーバンクルガーネットの説明である。これはもう、確定と言って良かった。

一応、ゴール後にしか換金できない可能性もあったが、それではレースとしてあまりに意味が薄くなる。こういった相手の裏を掻く演出のために、ルールブックには十個以上買えないと書いておいて、当日になってガーネットやダイヤとの交換を追加してきたとは思えない。

……と言つても俺がこれに気付けたのは、事前に織部から『星の入手手段は複数ある可能性が高い』と言われていたことと、実際にカーバンクルガーネットを手に入れられたことが大きい。

何個目かのカーバンクルガーネットを手に入れた時に、ふいに頭に「もしかして十個の保有制限を超えて星を交換できるんじゃないだろうか」と閃いたのだ。で、ダメ元で次のチェックポイントで聞いてみたら普通に交換できた、というわけである。

彼女もガーネットを途中で手に入れることができているれば、普通に気付くことができたかもしれないが、俺の通った後をひたすらついてきた彼女では、カーバンクルと出会うこともガーネットを手に入れることもできなかった。

同時にそれは、彼女の星の数が十以上存在しないことを意味する。故に、十一個の星を確保さえしておけば、ほぼ確実に勝つことがで

きるといっわけだった。

「……なるほど、これは盲点だった。でもまあ、多少不利になった程度で勝負の結果まで確定したわけじゃない。——みんな出ておいで」

ヘレンの呼びかけと共に彼女の背後の空間が揺らぎ、そこから漆黒の首無し騎士と、暗緑色の体毛を持った犬、体長20センチほどの小人の騎士が現れた。

……デュラハンとクーシーに、最後のは……確かディーナ・シー、だったか？ 日本ではあまり出現しない珍しいカードだが、取るに足りないEランクカードだったはずだ。

強気な発言とは裏腹に、Cランクは一枚でDランクとEランクか……正直拍子抜け——。
と、そこまで考えて、気づく。

「待て待て！ クーシーは女の子カードじゃないぞ！ ルール違反だ！」

「うん？ ああ！ なるほど」

俺の抗議にヘレンは納得したように頷くと。

「クーシー、変身して」

そう短く告げた。同時に、クーシーの身体が淡い光に包まれ、みるみるうちに人の形へと変形していく。やがて光が消え去ると、そこには犬耳と暗緑色の髪を持った妙齡の美女が全裸で立っていた。

「これで良いかしら？」

「……な」

馬鹿な……変身した、だと？ たしかに、本当は別の姿であっても、女の子の姿に変身できるカードならば女の子カードとして認められるが……クーシーにそんなスキルは……いや、待て。

そうか、変身ではなく、幻影や変化という可能性もある。それならば、普通に後天スキルとして習得可能な範囲だ。さすがに、幻影などの上辺だけ取り繕うようなスキルでは、女の子カードとしては認められない。

そう思い、鈴鹿を見るが、彼女は無言で首を振るだけだった。

虚偽察知に反応しないということは……これはただの幻影や変化ではなく、ちゃんと人間としての形態を持っているということか。

何らかの先天スキルを後天スキルとして引き継いだのだろうか？

だが、変身系の先天スキルは、眷属召喚同様ランクアップでの引き継ぎが出来ない——未だ確認されていない——タイプのスキルのはず……。

クーシーのように見えて、クーシーではない、のか……？ ……

まさか！

ハッと息を呑む。

慌てて、ヘレンのカードたちを確認する。

あのデュラハン……よく見ると微かに全身から黒い瘴気を立ち上らせている。放つ威圧感も、ウチのドジっ子とは段違いだ。

それと、ディーナ・シー。三ツ星冒険者がこの場面でEランクカードを出してくるのは絶対におかしい。それは、たとえどれだけ優秀な後天スキルを持っていたとしても、だ。

変身スキルを持ったクーシーに、黒いオーラを放つデュラハン、そして場違いなEランクカード……。

間違いない、ヘレンのカードたちは——！

「もう良いかしら？ カードとはいえ、レディを裸のままにしてお

くのはどうかと思うけれど」

「……あっ、はい、すいません。どうぞ……」

俺は慌てて頭を下げた。いかん、考察に没頭しすぎた。まるで俺が全裸のケモ耳美女を遠慮なく視姦してみたようになってしまった。実際にはそんなつもりはなかったが、傍目にはそうとしか見えなかっただろう。

心無しかこちらを冷たい眼差しで見つつ、ヘレンがクーシーを獣形態へと戻す。

……やはり、改めてみると俺の知るクーシーよりも、気品というか、神秘性が違うように見える。

とても、Dランクのカードとは思えない。

俺は嫌な予感が確信に変わるのを感じつつ、俺もシルキーと鈴鹿を送還する。残りのメンバーは、蓮華、イライザ+デュラハン、ユウキの四名となった。

『……………！』

両者無言で睨みあい、場の緊張が高まっていく。

『一分が経過しました。勝負を開始してください』

———そして戦いが始まった。

第十三話 物欲センサーは実在するか否か

両者の初手は、定石通りの行動から始まった。すなわち、防御と奇襲である。

俺はイライザに献身の盾を発動させ、後方へ退避。ヘレンは、デユラハンを身に纏い、防御を固めた。

同時に、俺は縮地でユウキを彼女の後方へと回り込ませ、得体のしれない小人の始末を謀る。

この小人が俺の知らない厄介な能力を持っていたとしても、それを発揮する前に始末してしまえば問題はない。

ユウキの抜き手が小人を貫く――一寸前、暗緑色の影が横合いから彼女へと飛び掛る。驚異的な反応を見せた敵のクーシーが割って入ったのだ。――速い！ やはり俺の知るクーシーの戦闘力ではない。

これに対しユウキは咄嗟に抜き手を裏拳へと変化させると、自分の喉元へと喰らい付こうとする魔狼の鼻先を痛烈に薙ぎ払った。ギャン！ と悲鳴を上げて壁へと叩きつけられたクーシーだったが、その時には小人は主の元へと避難していた。

主の肩の上に乗った小人はそのまま溶けるように鎧と一体化していく。するとデユラハンの漆黒の鎧の上にルーン文字を連想させる文様が浮かんだ。

リビンググアーマーやデユラハンなどの鎧化とはまた違うタイプの装備化スキル……。俺の知るディーナシーの能力ではない。

――やはり、本場アイルランド産のネイティブカードたちか。

カードの性能は、その土地の伝承や知識に影響を受ける。

同じ名前のカードであっても、日本とそれ以外の土地ではまったく別のカードと言って良い。

例えば座敷童などは、日本のカードであれば神・妖怪属性のランクカードであるが、海外においてはEランクの家精霊に過ぎない。デュラハン、クーシー、ディーナシー……。どれもアイルランドを本場とする妖精たちだ。

そのランクは、他国のそれよりもワンランクからツーランク高い。あの三枚のカードもランクも、おそらくB×C×DかB×C×Cと言ったところだろう。

Bランクは、プロクラスのカード。それを持っている時点で、この日本では無名の女性が、三ツ星冒険者でもかなりプロに近い選手であることを示していた。

さすがに、番組側が用意した推薦枠と言ったところか……。ヘレンが兜越しにくぐもった声で告げてくる。

「なかなか痺れる奇襲でしたよ。ですが……次はこちらの番です」

そう言つて、ヘレンは一枚のカードを二本の槍へと変化させた。彼女の身長よりも長い槍と、その半分程度の短槍。

……アイルランド人で長さの違う二本の槍。嫌な予感がプンプンするな。

俺は冷や汗を浮かべつつ、こちらもイライザにダインスレイヴを装備させ、シンク口率を高めていく。

それを見たヘレンから微かにほほ笑む気配がした。

「いざ、尋常に……！」

ヘレンが、恐ろしいほど力強い踏み込みでこちらへと切りかかってくる。

その突きは信じられないほど速く、フルシンク口しているイライ

ザでも完全には知覚出来ないほどに鋭い。

それでもこの多彩な吸血鬼が持つ直感は、その軌跡を捉え『的を誤ることはない』という逸話を持つ魔剣を以て、正確無比に槍の切っ先を弾いた。

しかし、金属音がこちらの耳へと届くよりも尚速く、二本目の牙が間髪かんはつを入れずに襲い掛かる。

ボクシングのワンツーにも通じるその隙の無い連撃は、素早く身を捻ったイライザの脇腹をわずかに穿った。

すぐに後ろへと飛びのいて、傷を血の貯蓄を持って癒す。

『ッ！』

……が、いくら再生させようとしても、傷は一向に癒える気配がない。

ならば、と蓮華に回復魔法を掛けてもらうが、こちらも効果がなかった。

——クソ、やはり治癒障害の能力か！

ギリッ、と強く奥歯を噛み締める。

嫌な予感はしていたが、これで間違いない。あの二本の槍はゲイ・ジャルグとゲイ・ボウだ。

ゲイ・ジャルグは、どんな魔法も打ち破るといふ力を。ゲイ・ボウは決して癒えぬ傷をつけるという逸話を持つ魔道具だ。

それ以上の詳細な能力は知らないが、少なくとも治癒障害の能力はバッチリあるようだった。

試しに、と初等の攻撃魔法を飛ばしてみるも容易く長槍で払われしてしまう。宙に解けるように消えていく火球……。通常の魔法の消え方ではない。

これで破魔の力も確定か……。しかし、こりゃちよつと拙いぞ。

今の短いやり取りでも、相手のステータスと技量がこちらを上回っているのが、肌で感じ取れた。

ヘレンは、本人が武術の達人で、装備化と武術スキルの性能をすべて引き出してくるタイプだ。派手さはないが、弱点がなく堅実で、モノコロでは地味に嫌われるタイプである。

戦闘力も、Bランクのデュラハン+ディーナシー（DかC）+魔道具に対し、Cランクのヴァンパイア+デュラハン（C）+魔道具と、こちらが不利だ。

これで剣と槍という間合いの差に加えて一本と二本という手数之差まで加わったら、さすがに厳しい。

――が、それはあくまで一対一ならば、の話だ。

今度はこちらの番だ、と金髪を靡かせ吸血鬼が双槍の騎士へと斬りかかる。相手がそれを迎え撃とうとしたところで、背後から人狼が奇襲した。

デュラハンと魔剣で武装したヴァンパイアに、Bランクの戦闘力を持つライカンスロープ。如何に本場のデュラハンとは言え太刀打ちできるものではない。

しかし……。

「マジ、かよ……」

思わず慄きの声が零れる。

二枚掛かりでの前後に挟んだ猛攻を、しかしヘレンは押されつつも的確に捌き続けていた。

確実に見えていないはずの角度からの攻撃を容易く躲し、一手で二手の攻撃を捌いて、時にはこちらの攻撃すらも利用するその防御

は、まるで綿密に打ち合わせされた時代劇の殺陣たてを見ているかのようですらあった。

お、おいおい……マジで達人級じゃねえか。イライザとユウキの二枚がかりで仕留められないとか……冗談だろ？

予想以上のヘレンの技量に俺は冷や汗を流すも、一方で確実に勝利の天秤はこちらへと傾いて来ていた。

このままでも押し切れそうではあるが、このレベルの達人を舐めはすまい。ここはダメ押しの一手を放つ。

『蓮華！ 今だ！』

『おう！』

クーシーの牽制を続けていた蓮華に、合図を送ると、突如ヘレンがズルリと足を滑らせた。

スリップの魔法と禍福は糾える縄の如しによる、不可避のトラブルだ。

「なっ！？」

足捌きに絶対の自信を持っていただろう達人の彼女は、あり得ぬミスに目を見開く。

これで、終わりだ。治療阻害の能力を持つのはそっただけじゃないってことを教えてやる。

バランスを崩したヘレンへとイライザが渾身の力で斬りかかり――。

『なっ！？』

つるり、と足を滑らせた。

『……………』

ステンと互いに尻餅を着いた両者は、気まずそうに咳払いをし、何事もなかったように立ち上がり後ろへと飛びのいた。

『おい、デュラハン……………』

『あわわ、アタシのせいじゃないです!』

『いや、確実にお前のせいだろ。いや、わざとじゃないのはわかってるけどさあ』

……………まさか、ここでデュラハンのドジスキルが発動するとは。

合宿中、一回しかドジが発生しなかったから、そんなに確率は高くないと少し油断していた。

やっぱ、シルキーのいない場所でデュラハンを使うのはリスクが高すぎるのか。

だが、枚数制限のあるこのレースでシルキーを使う余裕はないし……………。

現実逃避気味にそんなことを考えていると、

「今のは、ちょっと焦りましたよ。……………そっちが転んだ理由はよくわかりませんが」

「なに? そっちのスキルじゃないのか……………?」

俺は怪訝そうな顔をしてそうすつとぼけた。撮影もされている以上、ただのドジですっころんだとバレるのはさすがに恥ずかしくない。

ヘレンはしばし訝しむように黙っていたが、やがて。

「……………まあ、いいです。とにかく、予想よりも強かったので、ここからは全力でいかせてもらいます」

全力？ と俺が首を傾げると、彼女がひらりとクーシーへと飛び乗った。

騎乗と騎獣スキルのコンボか？ 確かに厄介と言えば厄介だが、
と思っっていると……。

「むっ……！」

クーシーとヘレンが空中に溶けていくように消えていく。

これは、透明化のスキルか！ なるほど、確かに最初に現れた時
も透明になって隠れていた。

自分だけではなくパーティー全体を透明にするスキルは珍しいが
……所詮透明化のスキルは姿を見えなくするだけだ。本当に消えて
なくなるわけではない！

俺はイライザとユウキを自分の周囲に控えさせると、蓮華に全方
位へと弾幕を張らせた。

この弾幕が魔槍に掻き消された空間こそが、ヘレンの潜む場所！

———が。

「……………？」

弾幕は掻き消されることも、何かにぶつかることもなく壁へと当
たり消えていった。

どういう、ことだ？ 透明化ではなく、転移だったってことか？

『ユウキ、匂いは？』

『それが……消えました』

『消えた？ いや、そうか……確かさつきも完全に匂いが消えてた
な。……まさか！』

『ッ!? ——マスター!』

俺の脳裏に閃きが走った瞬間、イライザが俺を突き飛ばした。転びながら振り返った俺が見たのは、彼女が生み出した白色の盾を、ヘレンの槍が紙のように切り裂いてイライザの胸を貫く光景だった。

心臓を貫かれたイライザはグラリと体を傾け、ボンツと煙を立てて丸太へと変わる。ギリギリのところ、ユウキの空蝉の術が間に合ったのだ。

それを見たヘレンは舌打ちを一つして、再び姿を消す。

『イライザ……!』

『大丈夫です。ダメージはありません』

『そうか……』

とホツと一息つき、気を引き締める。

ゲイ・ジャルグは、魔法攻撃を打ち消すだけじゃなく、魔力を使用するスキルの防御も貫くのか……。

いや、それよりも、このスキル……。一体どういう絡繰りだ? ただの透明化……ではない。透明化では実体の透過まではさすがにできない。

転移……近い気はするが、違う気がする。さっきの奇襲は、明らかに俺を観測した上で隙をついてきた感じだった。

『ッ! マスター!』

そこで再び敵が襲ってくる。

全く予兆のない攻撃に辛うじて反応できるのは、直感のスキルを持つイライザのみ。

彼女は手傷を負いつつも俺を守り抜き、再び敵が姿を消す。完全

なるヒットアンドアウェイ。

じりじりとした焦燥感に包まれながら、必死に敵の正体を探る。

奴らは、この場に確実におり、しかしそれは通常の透明化のスキルではない。転移にも似た、転移ではないスキル……。

デュラハン、クーシー、ディーナシー……一体どれのスキルだ？

デュラハンは死を告げる死妖精。クーシーは妖精郷を守る番犬。

ディーナシーは、零落した英雄の妖精。……妖精郷？

そうか！ これは異空間移動スキルか！ カードの中には、妖精郷や神界、冥界と言ったこの世界とはわずかに位相のズレた空間を自在に出入りできるスキルを持つ者も存在すると聞く。

おそらく本場のクーシーは、『妖精郷の番犬』として、能力で自在に妖精郷を出入りできるのだろう。

そしてその空間には、妖精属性を持つカードなら一緒に連れていくことができるのだろう。

そう考えれば、ヘレンが妖精属性のカードばかりで固めている理由も説明がつく。

推測に推測を重ねた憶測だが、おそらく合っているはず……。実際は違っても、相手が奇妙な空間を出入りして襲ってきているのは間違いないだろう。

だが、だとすれば相当拙いぞ……。能力の絡繰りはわかった。が、それを打ち破る手段が思いつかない。

この手の敵は、敵が姿を現した瞬間に一気に片を付けるのが定番だが、それができるなら、透明化する前の段階ですでに決着をつけている。

攻撃の予兆を察知できるのは直感スキルを持つイライザだけだし、それすらも本当に攻撃の直前に察知できるだけだ。そこから他のカードが反撃に移ろうとした時には、すでに姿を消している。

あまりに完成された戦略……。これを打ち破るには……。いや、そうか！

俺は、ハツと我に返った。

そうだ、別に打ち破らなくても良いのだ。

俺の閃きはリンクを通じてカード全体に広がっていく。皆が、ニヤリと笑った。

「アオオオオオオン！」

ユウキが雄たけびを上げ、人狼へと変身する。

瞬く間に変身を終えた彼女は、片腕で俺を抱えると、守るように俺を胸に抱き駆け出した。

向かう先は―――部屋の奥。階段へと続く通路。

階段を下つてしまえば、俺は運営によって逃亡判定を下されるだろう。

だが、それで問題はない。俺は一時間階層の移動を制限されるが、そこはすでに最下層（の可能性が高い）。俺は一時間のボーナスタイムの中でゆっくりと主と戦い、残った時間は休憩に使えば良い。勝者のヘレンは、指を啜えてそれを待つしかないというわけだ。最悪、最下層でなかったとしても次の階段まで一時間はかかる。どう転んだところで俺はあまり困らない。

俺の勝利条件は、二つあったのだ。

『マスター！』

俺たちが通路へと入ってすぐ、イライザが警告の声を発する。敵の奇襲の予兆。

やはり、妨害しに来たか！俺たちがもう一つの勝利に気付いたことに気付いたのだろう。だが……。

『――予想された奇襲なんて怖くねーんだよ、ボケ』
『……っ!?!』

予想通り俺たちの背後へと現れたヘレンたちを、蓮華の放った雷撃の奔流に飲み込んでいく。

その大部分はゲイザルグによって掻き消されてしまったモノの、彼女の跨るクーシーには少なからずダメージを与えることに成功した。

電流に身体を硬直させる暗緑色の魔狼。

それはつまり、妖精郷への退避もワントンポ遅れるということだ。

「ガアアアアアッ!」

その隙を、ユウキが見逃すはずもなかった。

鉄槌のような一撃をクーシーの頭へと叩き込み、拳一発でその意識を飛ばす。

「クーシー!?!」

ようやく聞けたヘレンの悲鳴のような声に、思わずニヤリと笑う。予想以上に作戦が上手く嵌った。

俺たちがヘレンの奇襲に苦慮していたのは、それがどこから、いつ来るのかわからなかったからだ。

全方位を警戒する中、攻撃とほぼ同時に警告されたところで、迎撃が間に合うはずもない。

――だが、それが後方からの攻撃に限定されていれば話は別だ。

方向が一つで、しかもそれが直線状であれば、一撃を喰らったとしても相手が再び姿を消すまでの間に一撃は叩き込める。

その一撃でクーシーを沈めることができれば、それでよし。躲されたり効かなかったなら、また階段を目指せば良い。その過程でまた襲ってくるならカウンターを狙うし、警戒して襲ってこないなら次の階層へと行かせてもらうだけだ。

その結果、次の階層が最下層なら実質的に俺の勝ち。最下層でないのなら、俺の負けだが……それを彼女がすぐに確かめる術はない。なぜなら彼女はこれからチェックポイントへと向かい、さらに三番手と四番手の勝者と戦わなくてはならないからだ。

その間に俺は次の階層の攻略を進めさせてもらう。

故に、彼女は俺の逃走をなんとかしても妨害する必要がある、その時点でクーシーの能力のメリットの大部分を自分で殺すことになる。結果、彼女はクーシーの気絶という致命的失敗を招き———そしてそれはここで終わりではない。

地面に倒れ伏したクーシーへと、間髪を入れずにユウキがその巨大な顎で喰らい付こうとする。

当然ヘレンはそれを阻止しようとするが、イライザが間に入って妨害する。

ここでデュラハンのドジが発動したらかなりヤバかったが、『幸いにも』それは起こらなかった。

ユウキがクーシーの頭をかみ砕こうとした——その時。

「待つて……！」

ヘレンの制止の声に、ユウキがピタリと動きを止める。

「参った。参りました」

そう言って、ヘレンがデュラハンの装備化を解いた。

すぐにカードギアを操作し。

『北川勝利！ヘレンのスターが移動します』

そう裁定が下った。こちらのカードギアを見ると、ちゃんとスターも移動している。

それを確認した俺は、ユウキにクーパーを開放させた。すると彼女はすぐにクーパーに駆け寄り、傷があまり深くないのを確認してホッと一息ついた。

「良かったわ……この子は銀行の担保に入れてたカードだから、ロストしてたらデュラハンを回収されちゃうところだった」

そう言っただけで安堵するヘレンに、俺は一瞬首をかしげ、すぐに納得する。

ああ、銀行の融資制度のことが。ってことは、このデュラハンも銀行の融資で買ったカード、と。海外の冒険者は羨ましいねえ……。冒険者の社会的信用……というか銀行からの信用が非常に低い日本と比べて、海外では命がけて人々の日常を守っているとして冒険者の信用は軍人の次くらいに高い（日本ではあまりピンとこないかもしれないが、海外では軍人はかなり尊敬される職業である）。

そのため日本ではほとんど降りない冒険者への融資も、カードや自分自身を担保に入れることで受けることができる。と聞く。

自分自身を担保にする、と聞くと一見奴隷制度が復活したように聞こえるかもしれないが、実際は返済が終わるまでシークレットダンジョンに潜らされ続け、その収穫をほぼすべて持っていかれるだけだ。

カードを担保にしている場合は、その担保のカードがロストした時点で融資を使って購入したカードを一時的に没収される。

色々と制限が掛けられてしまいが、この融資制度により海外の冒険者はより高いランクのカードを所有でき、その結果より安全に迷宮を攻略できるようになる上、その行動も慎重になるといって好循環

が生まれているらしい。

もつとも、その反面こうして少しでも不利になるとすぐに降伏、撤退しなくてはいけないとなるという欠点も抱えることになるが……それは自腹を切っている日本の冒険者もあまり変わらない。

もしも日本でも冒険者への融資が始まったら、かなりの冒険者が融資を求めらるだろう。

まあ、俺に関しては、北川家の家訓としてローンであつても借金はしない、というのががあるから借りることはないが。

それに、手持ちのカードを担保に入れる必要があるから、カードの名づけも出来なくなるのも俺の性に合わない部分ではある。

「……海外の冒険者に会う機会つてなかなかないからいろいろ話を聞いてみたいところなんです、先を急ぐんでそろそろ行かせてもらいます」

「ええ、私に勝ったんだから良い成績残してね。でないとも母国の仲間たちに笑われちゃうし」

「はい、ではまた！」

直前まで死闘をしていたとは思えぬほどにこやかなヘレンと別れ、俺は先へと進む。

……しかし、本場のクーシー、恐ろしく強敵だった。

異空間移動に獣人への変身能力……どちらもかなりレアなスキルだ。たったワンランク違うだけなのに、日本のクーシーとは性能が段違いである。

こつちも異空間移動スキルを持っていれば、対処は容易だったのだろうが……この手のレアスキルは欲しいと思つてもいつでも手に入るものではない。

とは言え、それは日本だからの話で、アイルランドではまたちよつと事情が違うのだろう。

日本で妖怪系や神仏系のカードが強いように、アイルランドやイギリスでは妖精系や精霊系のカードが強いと聞く。

『妖精の通り道』や『チェンジリング取り替え子』で知られるように、異空間移動や変身能力は妖精の代名詞のようなものだ。

本場の妖精種が、それらのスキルを結構な割合で持っていてもおかしくはない。

もしもユウキが未だクーシーのままだったなら、なんとかしてクーシーのネイティブカードを手に入れようとしていたことだろう。

……まあ、当時の俺じゃ札商とのコネもなかったし、意味のない仮定ではあるが。

海外のネイティブカードは札商でもないと手に入れられないからなあ……。

そんなことを考えながら階段を下ると、安全地帯に番組のスタッフが待機していた。

「選手の方ですね？ 先着一位、おめでとつございます！」

……良かった、やはりここが最下層だったかと思いつつ、三十代ほどの男性スタッフに話しかける。

「えっと、どうすれば良いんですか？ もう主に挑んでも？」

「その前にこちらの不正チェックと水晶タッチだけお願いします。え、それでは、これからする質問に嘘偽りなくお答えください。

ここに来るまでの間に、何らかの不正を行いましたか？」

「いいえ」

「はい！ 結構です！ ……ここだけの話、この主はスゴイですよ。頑張ってください」

「ん？ あ、はい」

少しだけ厭らしい顔をしてこっそりと囁いてくる男性に首を傾げつつ、俺は主を探すために安全地帯を飛び出した。

……とは言っても敵は気配を隠していないようで、この階層の中心で俺たちを待ち受けているようだった。

敵に近づくに連れ、徐々に甘い香りが漂い始める。

マスターはバリアによって状態異常から守られているというのに、どこか頭の奥が痺れるような、本能を刺激する匂いだった。

俺にとっては警戒心と共にもっと嗅ぎたくなるような香りなのだが、周りのカードたちはその香りに顔を顰めていた。例外は、イライザくらいだ。

「マジかよ……知識としては知ってたけど、実物ってこんなにクセーの？」

蓮華が顔を顰めて言うと、ユウキがコクリと頷いた。

「確かに、これは酷すぎますね。……ボク、ちょっと吐き気がしてきました」

「そんなにか？俺にはスゲー良い香りに感じるんだけど……」

と俺が首を傾げると、蓮華はフンと鼻を鳴らし。

「そりやお前はそーだろうな。……そうだ、イライザ、もしかしてお前のフェロモンで相殺できないか？」

「試してみます」

すると、彼女を中心にフワリと微かな柑橘系の香りが広がり、あの特徴的な香りを一掃した。

「あゝ、スツとした！　しかし、あんなクセー臭いを四六時中プンプンされたら、最悪友情連携のスキルを失っちまいそうだが」
「あん？　どういう意味だ？」

俺の問いに、しかしカードたちは答えず、蓮華だけが「見りゃわかる」とだけ短く返してきた。

それから少しして……。

主の元へとたどり着いた俺は、彼女の言葉の意味をようやく理解した。

階層の中心に位置する大広間に、不自然にポツンと置かれた豪華で巨大なベッド。

その上で、人間ではあり得ぬほどに蠱惑的で美しすぎる女が、気怠そうに身体を横たえている。

「マジかよ……」

呆然と、呟く

蝙蝠を連想させる小さな翼に、側頭部から伸びる山羊のような角。

そこにいたのは――――サキュバスだった。

透き通るように白い肌。性的な魅力をこれでもかと主張する身体つき。体を覆う申し訳程度の布切れは、乳房や腰のラインが丸わかりで、身体を隠す機能としては全く役に立っていない。むしろ、中途半端に隠れたところを想像させるかのようなデザインだった。ベッドに広がる、波打つ長い銀髪ですらも、どこか艶めかしい。

不意に、サキュバスと眼が合った。魔性の証である金色の瞳が友好的に弧を描く。彼女が身じろぎをしたことでその豊満な胸が重たげにタップンと揺れ、その重量感と柔らかさをこちらへと伝えてきた。そんな童貞には刺激の強すぎる光景に、思わず生唾を飲み込む。

……まさかモンスターとしてのサキュバスに会えるとは。

一応どんなモンスターでも出る地下迷宮型だからあり得ないことではないが、奇跡的と言って良い確率だ。

もしかして、番組側がTV映えのするモンスターになるように調節したのだろうか。

あり得る。これはキャットファイトだからな。最低でも女の子モンスターに調整してもおかしくない。

『で、どうすんだ？』

蓮華がどこか冷たい視線で問いかけてくる。

どうすんだ、とは運命操作を使うのか、ということか。前回の使用から約二週間。すでに因果律の歪みはほぼ消えている。

仮に使ってもリスクはほとんどないが……と考えつつ、俺は首を振った。

『いや、パーフェクトリンクも運命操作も使わない。幸運の貯金もだ。このサキュバスを手に入れたところで零落スキルは持っているにしろ。レースで確実に入賞するために、切り札は取っておく』

ここは切り札の切り処ではない。サキュバスは欲しいが、それは零落スキル持ちでなくては意味がない。目先の利益に囚われて、本命を取り逃しては本末転倒だ。

今回のレースで使うとすれば、メアのために確実に入賞するために使うべきだった。

『そうか』

俺の答えを聞いた蓮華が、一瞬だけニヤリと笑う。

……コイツ、また俺が欲に目がくらんでないか確かめたな。そんなことしなくても、パツクの時のお灸はちゃんと効いてるっ
ての。

俺は苦笑しつつ言った。

『んじゃ、さっさと倒すか』

『ああ』

これも所詮は通過点。メアのためにも先を急がないとな。

————そして、それから数分後。

「……ええ〜」

俺の手の中には、なぜか零落スキル持ちのサキュバスのカードがあつたのだった。

第十三話 物欲センサーは実在するか否か (後書き)

【Tips】ネイティブカード

その国や地域が発祥で、他国に比べて性能が高い種族のカードを、ネイティブカードと呼ぶ。

ネイティブカードは戦闘力がワンランクからツーランク高いだけではなく、そのスキルも他国のカードと比べて遙かに性能が高い。

たとえば、国外産のクーシーが気配遮断、良くて透明化のスキルしか持たないのに対し、本場アイルランド産のクーシーは、妖精を連れて自在に妖精郷(位相の異なった隣の次元)へと出入りするこ
とができる異空間移動スキルを持つ。

これはクーシーという存在に対するその地の人々の『理解』と『親和性』に対する差によるものである……と、主張する研究者もいる。

第十四話　もしかして俺、アイツのこと……。

「……………」

俺たちは、とても微妙な空気に包まれていた。

間違いない嬉しいはずなのに、素直に喜べないなんか変な感じ。

どうしても漂うコレジャナイ感……。

俺たちは、サキユバスのカードを手に入れる時は、達成感や充実感に包まれながらそれを手に入れると思っていたのだ。

それからレースの勝利を祝うパーティーをしながら、皆に見守られつつ、メアがランクアップする。

そんな筋書きを頭の中で描いていたし、実際イライザがヴァンパイアにランクアップした時はそんな感じだった。

それをメアが羨ましがっていたのはみんな知っていたし、故にそんな彼女のささやかな願いを叶えるために、みんなで一致団結して頑張ってきた。

それが、こんなあっさりとカードがドロップするとは……。

しかも、まさかの零落スキル持ち。

お目当ての物が手に入ったのは嬉しい。凄く嬉しいが……俺たちのこの一週間の努力は一体なんだったのかと思ってしまう。

例えるなら、海賊王の大秘宝を探しに冒険に出たら、一番目が三番目のあんまり強くない敵が、海賊王に託され隠し持っているのを見つけてしまった……って感じだった。

盛り上がりもへったくれもない展開である。

戦闘自体も全く盛り上がるものではなかった。

サキユバスは、魅了や幻影を得意とする対男性に特化したモンス

ターである。

対して、こちらは女の子モンスターしかいないパーティー。

汎用魔法や状態異常があるため、女性相手に全くの無力と言うわけでもないが、先天スキルの強みを潰されて格上の戦力に勝てるはずもない。

そもそも、このメンバーに対して主とは言えCランク一枚で何ができるのか、という話でもある。

サキュバス自体も、超人気カードではあるが、Cランク最強というわけでもない。精々、上の下と言ったところだろう。

ハツキリ言つて、まったく苦戦することなく終わってしまった。

哀愁漂う顔で消えていくサキュバスを見送り、さあ魔王とガツカリ箱を回収するかとしたところで、地面にポツンと落ちたカードを見つけた。

おお！ 幸運の貯金を使っていないのに、Cランクカードがドロップした！

と喜んで拾い上げてみれば、まさかの零落スキル持ち。

俺たちがレースに参加した動機が、道半ばで達成されてしまった瞬間だった。

きつとこの瞬間も撮影されて、ネットで生中継されてるんだろうなあ……。零落スキル持ちのサキュバスを手に入れるためにこのレースに出ることをTwitterで告知しちゃってるし、フォロワーの皆さんとか、どう思ってたんだろ……。

そんな風に微妙に現実逃避していると。

「な、なんでこんなあっさり……。いつもいつもメアの時だけ……」

地面に手を突き、頂垂れているのはメアである。

サキュバスのカードを手に入れ、とりあえずメアを呼ぶかと召喚した途端、彼女はこうして地面に崩れ落ちたのだった。

「蓮華の時はドラマチックな覚醒イベントがあつて、イライザの時は大会で優勝するために頑張つて、ユウキの時はなんかミステリアスな展開だったのに……どうしてメアの時だけいつもこうして地味な展開なの……」

心中察するに余りある……。俺たちはメアへと同情の眼差しを向けた。

このレースに向けた準備中、彼女は常にテンションが高かった。メアは、エンプーサへのランクアップの時も地味だったし、他のカードのように思い出深いイベントがあつたわけでもなかったため、今回のレースを自分のイベントだと思い非常に張り切っていたのだ。それが、まさかの道中での目的達成。しかもここまで彼女に大して出番なし。

彼女が複雑な気分になるのも無理はなかった。

ちなみに、鈴鹿の「私は……？」という小さなツッコミは全員にスルーされた。

「ま、まあまあ、良かったじゃん。これで確実にランクアップできるわけだし」

「そ、そうですね！ レースで優勝できるとも限らなかったわけですよ」

さすがの蓮華も憐れに思ったのか、そうフォローすると、ユウキがそれに続く。イライザは無言で頷き、鈴鹿は無視をされて拗ねたのかそっぽを向いていた。

そんな仲間たちのフォローにメアはやっと顔を上げた。

「そう、だよ。やっとランクアップできるんだもん。贅沢な悩みだよ……」

「そうそう！ 大体、Eランクのインプからサキュバスまで出世す

るヤツなんてお前くらいだぜ。その時点で超恵まれてるっての」「い、言われてみればその通りかも……」

メアがまんざらでもない顔をする。

確かに、わざわざインプをサキユバスまでランクアップさせるようなマスターは滅多にいないだろう。

俺はさらにプッシュしてやろうと一枚のカードを取り出した。

「そ、そうだ。メア、実はお前のために用意してた物があるんだよ」

「メアに？」

「ああ」

と頷いて俺は『三天使の護符』を彼女へと手渡した。

「サキユバスの霊格再帰用のキーアイテムだ。もしもランクアップ先がリリムなら、これですぐに変身できるようになるぞ！」

俺がにっこりと笑ってそう言っていると、後ろから小さく「あっ………」という蓮華の声が聞こえた。

それに首をかしげていると、メアが愕然と目を見開き。

「か、覚醒イベントもスキップされた……!!」

再び地面へと手を突いたのだった。

それから数分後。

紆余曲折あったが、無事メアはサキユバスへとランクアップした。

「ふふ〜ん、どう新しい私は！」

サキユバスとなったメアが、自分の身体つきを強調するようにポーズを取る。豊満な胸元がむにゅりと柔らかくそつに形を変える。

ランクアップにより、メアは小6か中1くらいだった見かけから、一気に高校生くらいまで成長した。

幼げな顔は、幼さを残しつつも大人びたモノとなり、スラリと伸びた肢体は女性らしい魅力的なラインを描いている。

エンプーサの頃の特徴であった真鍮の脚は消え、驢馬の尻尾は先端がハート形の黒い尻尾へと姿を変えた。

背中には飛ぶには頼りない小さな蝙蝠の翼が生え、側頭部からは山羊のようなくなるんとした角が伸びている。

まさに、人々が思い描くサキユバスに相応しい姿となっていた。

「……ゴクリ」

予想以上に好みの姿に成長したメアに、思わず生唾を飲み込む。そんな俺の姿に彼女は満足気に笑みを浮かべ。

「どう？ 成長したメアは。羨ましいでしょ〜」

「ああ？ なんでアタシが羨ましがらなきゃいけないんだよ」

そう言いつつも、蓮華は地味にイラツときている様子だった。

「本当は羨ましいいくせに〜」

そんな彼女の頬を、上機嫌にウリウリと突くメア。

……見かけは大人っぽくなくても中身は子供っぽいままだな、と苦笑する。

蓮華がメアの指をパシツと払いのけつつ、うんざりしたように言

う。

「あゝもう、いいから元の姿に戻れや」

「はいはい」

メアは肩をすくめ、エンプーサだった頃の肉体年齢に戻った。

……見かけを自在に変えられるのか。だが、顔立ちや肌艶などはエンプーサの頃よりも明らかに美しくなっていた。

そのまま蓮華とじゃれ合う彼女を見ながら、中身を考えればこっちの方がじっくりくるかな、と思いつつ成長したステータスを見る。

【種族】サキュバス（メア）

【戦闘力】690（140UP！）

【先天技能】

・巫山の夢：対象へと強力な眠りの呪いを掛け、夢の中へと入りこみ、精気を吸収する。相手が男性であった場合、初撃に限って耐性のある程度無視する。

・胡蝶の夢：対象に現実と見分けがつかないほどの精巧な幻影を見せる。その精巧さは、脳の錯覚によるダメージが生じるほど。対象が男性であった場合、相手の理想とする姿へと変身し、強力な魅了の呪いを掛けることができる。

・淫魔の肌：肌の触れた相手に快感を与えるとともに精気を吸収する。フェロモン、娼婦スキルを内包。

（娼婦：娼婦として必要な技能を収めている。淫らな心、性技、演奏、舞踏、礼儀作法を内包）

【後天技能】

・小悪魔な心

・一途な心

- ・友情連携
- ・初等魔法使い 中等魔法使い（CHANGE!）
- ・中等状態異常魔法 高等状態異常魔法（CHANGE!）
- ・人を呪わば穴二つ
- ・生還の心得
- ・零落せし存在 霊格再帰（CHANGE!）
- ・耐性貫通（NEW!）：対象の耐性を確率である程度無視し、攻撃の威力や状態異常の確率を上げることができる。
- ・詠唱短縮（NEW!）

サキユバスは、男性特化の状態異常型カードである。

対象が男であれば、耐性を無視した眠りや魅了のスキルにより、戦闘力の差をある程度無視して相手を一発で戦闘不能にできる強みがある。

反面、相手が女の場合は多少強い状態異常型に過ぎない。

それでも相手を眠らせなければほぼ無力だったエンプーサだった頃と比べ、圧倒的に使い勝手が良くなっているのは事実だった。

また、後天スキルについてもかなりの成長がみられる。既存のスキルが成長しただけでなく、新たなスキルを得ることができた。

その中でも特筆すべきは、耐性貫通のスキルだ。

カードはランクが上がるにつれてスキルに記載されない状態異常耐性がどんどん上昇していく。たとえば、状態異常耐性スキルを持っているカードであっても、ランクの低いカードの状態異常は、ランクの差により弾かれてしまうことが多い。

この耐性貫通のスキルは、相手の耐性をある程度貫通することができるパッシブスキルだ。

状態異常型のカードからすれば喉から手が出るほど欲しいスキルだが、滅多に出現することがないレア中のレアスキルである。

これでメアは格上であっても、状態異常型として戦えるカードとなった。

気になるのは霊格再帰後のステータスだが、さすがにここで試すのは勿体ないので、あとのお楽しみとするしかないだろう。

『で、これからどうする？ もつりタイヤするか？』

一段落したところで、蓮華が問いかけてくる。

確かに、当初の目的であるサキュバスは手に入れたわけだが……。

『いや、せつかくだからレースの優勝を目指す。……一応番組の推奨枠で参加してるわけだしな』

目的の物が手に入ったんでもう止めまーす、では確実に今後仕事
が来なくなるだろう。

そうして俺たちが海の迷宮に入った時には、時刻午後八時を回っていた。レース開始からすでに十時間近くが経っている。

「う……」

一階層の安全地帯に足を踏み入れたところで、クラリと軽いめま
いに襲われる。

かなりの強行突破で迷宮を踏破してきたため、レストで疲労を取
ってもぬぐい切れないリンクによる疲れが脳の奥を重く痺れさせて
いた。

ここまでで約十時間か。まあ、行けるだろ。

そう判断した俺は、ワーキング24のカード化を解除し、一気に
呷った。

迷宮産のポーシオンを成分調整して作られたこの目覚め薬は、使
用者の眠気を取り払い24時間絶好調をキープしてくれる効果があ

る。二本まで連続使用が可能のため、最大48時間は無理をする
とができる。

その代わり、使用後は通常の三倍の疲労と眠気が襲ってくるのだ
が……まあ、48時間以内にゴールできれば問題はない。

ワーキング24が喉を通り胃に落ちた瞬間、俺の視界がカツと広
くなり、脳がギンギンに冴え始めた。

うおお、スゲエ効き目だ。ちょっと怖くなるくらい元気になっ
てきた。

……今更ながら副作用がちょっと怖くなってきた。

とワーキング24を飲んだことを後悔しつつ、カードたちを召喚
しながら周囲を見渡す。

一階層の安全地帯には、数人の選手が力なく頂垂れて座り込んで
いた。

おそらく、早々にレースから脱落した者たちだろう。

ここにいるということは、星は失っていないがカードに損害が出
たということか。

その数の少なさに、俺は小さく舌打ちする。

……さすがに、ちょっと早すぎたか。

俺が人数の少ない方の迷宮を選んだのは、そちらを踏破後に人数
の多い迷宮で脱落した選手たちから情報などを買ったためである。

だが、俺が自分でも予想外なほどに順調に攻略できてしまった結
果、まだこちらの迷宮で脱落者があまり出ていないうちにこちらへ
と来てしまった。

これでは、チェックポイントの情報もあまり期待できないだろう。
こんな序盤に脱落しているような連中が、深い階層の情報を持っ
ているとは思えないからだ。

俺が密かに落胆していると彼らの一人が俺に気付き、こちらへと
やってきた。

「も、もしかして、地下迷宮の踏破者か？」

「ええ……まあ、はい」

「す、すげえ……こんなに早く踏破してくるなんて。な、なあ、ア
ンタ……その、もしよければ俺の星を買ってくれないか？」

「……………」

「い、一個百万……いや、八十万で良いぜ！ アンタなら確実にゴ
ールできるだろ？ 全部で五個ある。ど、どうだ？」

『一応言っとくと、嘘はついてないみたい』

切羽詰まった様子の男に対し、鈴鹿がリンクでそう告げる。

一個八十万か……悪くない話ではあるが、問題はこいつがどれく
らいチェックポイントの情報を知っているかだな。

下手すると、最初にチェックポイントすら到達していない可能性
がある。

とりあえず聞いてみるか、と口を開きかけたその時、不意にカー
ドギアがバイブレーションし、着信を知らせてきた。

これは……運営からのミッションか！

内容は――。

【ミッション！：地下迷宮型が北川歌麿選手によって踏破されたこ
とで、海型迷宮のハンターが深き眠りから目覚めようとしている！
解き放たれたハンターは最下層から這い上がり、選手たちを襲っ
ていくだろう！ これを阻止するためには、一時間以内に選手全員
で合計百個の星を捧げるか、北川歌麿選手を敗北か逃走させる必要
がある！ 選手全員で団結してハンターの解放を阻止せよ！】

「んなっ！？」

な、なんてミッションを発令しやがる……！

こんなん完全に一位潰しじゃねえか！ ここまでやるか！？

……どうする？ 最悪、一時間ここで待機していれば、他の奴ら

はどうにもできないが。

俺が考えこんでいると、一階層のあちこちでゲートが発生し、そこから何人かの選手たちが現れた。

……わざわざ転移でやってきやがったのか。贅沢なことだ。それにしても、早い。たまたま安全地帯の付近にいたか、あるいは仲間を待機させていたのか……。

「北川選手はいるか！ ミッションについて交渉がしたい！」

現れた選手たちの一人、がっしりとした身体つきをしたやや鷲鼻の男が声を張り上げる。

それに答えたのは、先ほどまで俺に星を売りつけてこようとしていた男だった。

「お、俺知ってるぜ！」

「どこだ!？」

「そ、その前に、俺の星を買ってくれよ。そしたら教える。い、一個百万の五個で良いぜ」

そう交渉する男に対し、転移で現れた男は冷たい視線で一瞥すると、その男が直前まで話していた者……つまり俺のところへとやって来た。

「北川選手だな？」

「いや、人違いですけど……」

「時間がない。つまらないやり取りをする時間が惜しいのは、お互い様だと思うが？」

……チツ。内心で舌打ちする。

まあ、普通に考えてわかるわな。優勝候補としてHP上に顔写真

も載っているわけだし、事前対策がバツチリのグループ派が優勝候補をチエックしないわけがない。

「そうですけど、何の御用ですか？」

「ミッションは見たんだろう？ みんなのために、降参か逃走してくれ」

思わず、鼻で笑ってしまった。

いくらなんでもその建前は酷すぎるだろう。むしろみんなの脚を出来るだけひっぱるように努力するのが、この手のバトルロイヤル型レースのはずだ。

鷲鼻の男はそれに一瞬だけ不愉快そうに眉を跳ね上げたが。

「プロ冒険者がハンターとして解き放たれたら困るのは、俺たちも君も同じだと思っが？」

確かに困る、と頷く。

だが……。

「困る度合いが全然違うでしょう？ そっちは最下層近く、俺は一階層。俺はあなたたちがハンターとやり合っている間に、距離を詰めることができる」

目下、ハンターの脅威に晒されているのは、俺ではなくあちらの方なのだ。

ある意味、このミッションは俺に対するボーナスと見ることもできた。

「俺たちのグループや、道中の冒険者全員を敵に回す気か？ ゴールすらも怪しくなるだろうな」

鷲鼻の男がそう言うと、彼の仲間らしい選手たちが俺を取り囲んだ。6、7、8……合計9人か。かなり多いな。

……戦闘禁止区域を一步でも出たら連戦&連戦をレースが時間切れになるまで仕掛けてやる、という脅しだろう。最悪共倒れになるうとも、お前だけは潰す、と。

まあ、そんなこと本当にできるとは思えないが……俺は余裕の表情で鼻を鳴らし、言った。

「ま、ハンターが放出されて困るのは、俺も同じ。だが、さすがにタダというわけにはいかないな。アンタらのグループが持っているすべての階層のルートとチェックポイントやヒントの情報を全部貰おうか」

「……欲張りだな。有利なのがどっちかわかってるのか？」
「もちろん」

と即答する。この交渉で有利なのは、俺の方だ。

「俺は別に一時間ここでゆっくり休んでも良いんだぜ？ 特に得することはないが、損することもない」

結局コイツ等には俺を無理やり、安全地帯の外に連れ出すこともできないし、こうしている間にもほかのライバルたちは先に進んでいるのだ。

鷲鼻の男は数秒ほど悩む素振りを見せたが、やがて渋々頷いた。

「わかった。情報を渡す」

「あ、今、コイツ嘘ついたよ」

間髪を入れずにそう言った鈴鹿の言葉に、ギョツと男が目を見開

いた。

俺は、さっそくかよ……とため息を吐きつつ。

「あ……時間の無駄だから最初に言っておく。見ての通り、このカードは虚偽察知のスキルを持つてる。嘘をついてもすぐわかるし、面倒だから三回嘘を吐かれた時点でこの話は無しだ。大人しく星を百個運営に捧げてくれ」

鷲鼻の男は諦めたようにため息を吐き「……わかった」と頷いた。

「ただし、渡せる情報は二十階層までだ。それ以上は渡せない。これで駄目なら取引も無しだ」

「……嘘はついてない」

鈴鹿の言葉に俺は数秒ほど考え、頷いたのだった。

その後、情報の交換を終え、俺が星を一つ賭けて降参したのを見届けると、彼らは転移で最前線へと戻っていった。

その際にチラリと見えたのだが、どうやら彼らもハーメルンの笛を持っているようだった。

まあ、ハーメルンの笛吹き男もこれまでに幾度となく倒されているし、その中にはあの不気味なピエロに認められた者もいるだろう。そう自分に言い聞かせるも、それを見て胸が騒めいたのは否めなかった。

————なんだ、この気持ち……。俺、もしかして、アイツのことを……？（トウソク）

なんて冗談はさておき。

彼らの持つハーメルンの笛を見た時、嫌な予感を覚えたのは事実

だった。

それは便利な魔道具を他の人も持っていることに対する安い独占欲ではなく、どちらかというパーフェクトリンク時に感じる因果律の歪みを見る時のそれに似ていた。

……イレギュラーエンカウントの残すドロップアイテムは、ただの便利なアイテムではなく、奴らが獲物に付けたマーカのようなものだ。

それを持つ者は、いずれ必ず奴らとの再戦が待ち受けている。

彼らはもしかすると、あの不気味なピエロとの再戦の時が近いのかもしれない。

さて、取引の結果この階層に一時留まることが決まった俺だったが、別に一時間大人しくしないではいけないとはルールに書いていない。

そこで俺は思わず出来た時間で、脱落者組と交渉をすることにした。

結果、俺は計三十一個の星を、要らないDランクカードと交換することに成功した。

俺は売っても大した金にならないDランクカードで一個百万円の星を、彼らは戦力を失った中で不人気カードとは言えDランクカードを実質タダで手に入れられる。

WIN-WINの取引と言えるだろう。

そうしている間に、地下迷宮からあちらのトップ陣が現れて俺を追い抜いていったが、特に気にすることもなかった。

道中のチェックポイントの情報を持つ俺の方が圧倒的に有利だからだ。絶対に途中で追い抜けるという確信があった。

そうして一時間の拘束時間が過ぎ、交渉した連中から星を回収した俺は、海の迷宮の攻略を開始した。

海の迷宮では、水場を渡れないコシユタ・パワーに乗れないため、主に魔法の絨毯での移動となる。

さすがに魔法の絨毯の面積（大体畳一畳ほど）では、カードたち全員を乗せることはできないため、迷宮探索に必須のイライザ、索敵と魔物除けを担当するユウキ、それに宙を飛べる蓮華とメア、を乗せての移動となった。

今度はヒントポイントに寄らずに済むこともあって、俺たちは最短距離をどんと突き進んでいく。

虚偽察知で嘘がなかったことはわかっているとは言え、念のため最初のチェックポイントはヒントを辿って情報が正しいかを確かめたが、特に騙しは仕込まれていなかったため、それ以降は最短距離を突っ走った。

嬉しい誤算だったのは、道中で他の選手たちが全く仕掛けてこなかったことだ。

どうやら、地下迷宮のトップ陣が現れ始めたことで彼らの思考が変化したらしい。

つまり、レースでの上位入賞を諦め、レースの完走と勝てる相手から星を拾う方向へと変えたのだ。

彼らは、レース終盤での星の取り合いに備えて、戦力の温存を始めたのだろう。

唯一警戒すべきは、海の迷宮組が雇った足止め用の選手たちだが、彼らは迷宮の深くで待ち受けているようで、今のところその気配は見られない。

結果、俺たち地下迷宮組は海の迷宮をほとんど妨害無しで進むことができていた。

一一一だが、そんな順調な状況も、二十一階層に着くまでのことだった。

約三時間後。二十一階層の安全地帯に到達した俺を待ち受けてい

たのは、鷲鼻の男の仲間たちだった。

「よお、予想より早かったな。北川選手」

「……何の用だ？」

「悪いけど、ここからは通行止めだ。通りたかったら俺ら全員倒して進んでくれ」

「チツ」

露骨に足止めしてきやがったか。

二十階層までの情報しか売ってこなかった時点で予想はしていたが、ここまで露骨にやってくるとは……。

どうするか……。逃げるのは不可能。とは言え、さすがに八連戦は厳しいな……。

「アンタらここを通る奴ら全員にこんなことしてるのか？」

「まさか！ 優勝候補のうち数人だけだよ。ちなみにアンタはその筆頭。アンタと他の候補者が同時に通ろうとしたら、アンタだけは止めるってさ」

「ああ、そう……」

随分と評価されてるみたいで、涙が出るほど嬉しいぜ。

「一応聞くが……交渉の余地は？」

「無い。他の奴らは星次第で通したりもしたが、アンタだけはそれも無しだ。うちのリーダーがこの迷宮を踏破するまではここで休んでいてくれ」

「そうか……」

仕方ない。やるしかない、か。

俺が覚悟を決めると、男たちがたじろいだ。

どつやらこつちがマジで戦闘を選ぶとは思っていなかったらしい。

「お、おいおい、本気か？」

彼らが慌てたようにそう言った時、不意にカードギアが震えた。

……また運営からの連絡か。あの鷲鼻の男が主を討伐したか？

だとすれば、この連中との交渉の余地も生まれるかもしれない……

…そう思いながらカードギアを見ると。

『なっ！？』

鷲鼻の仲間たちが愕然とした声を上げ、俺も思わず絶句する。おいおい、マジか……。

「おい！ リーダー！ お前どこにいるんだ？ 無事なのか！

おい！」

「クソ！ 駄目だ！ 通信が通じない！」

男たちが、慌ただしくリーダー（鷲鼻の男のことだろう）へとカードギアで呼びかけるが返事はない。

迷宮内ならどこにいても繋がるカードギアが通信できないということは、つまり、そういうことなのだろう。

「ご愁傷様に……」と思いつつ、カードギアへと視線を落とす。

そこにはこう書かれていた。

【緊急のお知らせ。海の迷宮、最下層にてイレギュラーエンカウンターの発生が確認されました。現在、プロによる討伐を行っておりますので、選手の皆様はその場で待機をお願い致します】

第十四話　もしかして俺、アイツのこと……。　（後書き）

【Tips】モンコロの放送

モンコロの試合は、まずネット上でリアルタイムの中継が行われた後、エンターテインメント風に編集されてTV番組として放送されるのが一般的な流れである。

ネット中継を行うのは、主にギャンプルのためであり、観客たちは試合前から試合終了直前までリアルタイムで変化するオッズを見ながらいつでも札券（モンコロ版の馬券のような物）を購入することができる。オッズは試合前の物が最も控除率が低く（割が良く）、試合が進むにつれて予想がしやすくなるため控除率も高くなっていく（割が悪い）。

普段マロたち学生が言うモンコロの放送は、TV放送の方。

第十五話 禍を転じて福と為す

その後、俺は鷲鼻の男の仲間たちに見張られつつ、二十一階層の安全地帯で運営からの連絡を待つこととなった。

今は、奴らから距離を取り、カードたちを見張りに建ててテントの中で休息を取っている。

しかし、嫌な予感がするとは思っていたが、まさかその日の内にやって来るとは……。

いや、別に現れたイレギュラーエンカウトが、あの笛吹き男とは限らないのだが。

それにしても、遭遇したのが自分じゃなくて良かった……。遭遇した人には申し訳ないが、本心からそう思ってしまう。

おそらく、この迷宮にいる全員がそう思っているだろう。

一人でCランクのイレギュラーエンカウトと戦うなんて冗談じゃない。

もし地下迷宮じゃなく海の迷宮を選んでいたら、と思うとゾッとする。

それから約一時間後。ようやくイレギュラーエンカウト討伐終了の連絡が来た。

どうやら、イレギュラーエンカウトに襲われた選手一一あの鷲鼻の男一一も無事らしい。

とりあえず無事なのは良かった。

だが、さすがに鷲鼻の男はリタイア確定だろう。イレギュラーエンカウトと遭遇して、レースが続けられるほど元気とは思えない。

などと考えていると、

『マスター、奴らがこっちへやってきています』

見張りに立っていたユウキがそう告げてきた。

テントから出ると、無傷だが酷く憔悴した様子の鷲鼻の男が仲間に支えられて立っていた。

数時間ぶりに見た鷲鼻の男は、この短い間に一気に十年ほど年を取ったようにすら見えた。

「やあ、北川選手……話がしたいんだが、構わないかな？」

「ええ、もちろん。……災難でしたね、大丈夫ですか？」

「はは……大丈夫とは言い難いな」

鷲鼻の男は弱気にはほほ笑む。初対面の時の強気な態度が嘘のようだ。

「……交渉がしたい」

「交渉？」

「ああ……俺たちはリタイアする。そこで、俺たちの星を買い取って貰いたい」

リタイアか。鷲鼻の男がリタイアするのはわかるが……。

チラリと、鈴鹿を見る。嘘は無し、か。

「そっちには頼りになる仲間たちが他にもいるみたいですが？」

俺がそう問いかけると、鷲鼻の男は首を振った。

「残念ながら、彼らは戦力にならない。……彼らの主力のカードは

すべて俺に集中させていたんだ」

主力カードの譲渡と、一点集中！

俺は彼らの大胆な作戦に驚愕した。

確かにそれならば、優勝候補たちに匹敵、あるいはそれ以上の戦力を確保できる。

しかし、自分の財産が持ち逃げされる可能性があるこんな作戦、思いついても普通は実行できない。

よほど確かな信頼関係がないと成立しない作戦だ。おそらく、彼らはこの大会のために臨時で組まれたチームではなく、普段からチームを組んでいる冒険者なのだろう。

でもまあ、その信頼関係も今日までだろうな……。

俺は鷲鼻の男を苦々しく睨む彼の仲間たちを見回しながら、他人事のようにそう思った。

その表情から察するに、彼らの預けたカードはそのほとんどがイレギュラーエンカウントにロストさせられてしまったのだろう。

つまり、彼らは数だけ多いハリボテだったというわけだ。

全く戦えないことはないだろうが、俺と実際に戦うことになっていたら、かなり焦ることになっていたのではないだろうか。

「買い取ってほしい星の数と金額は？」

「星は合計で182個。一つ90万円でどうだろうか。もちろん、この先の階層の情報もセットでつける」

……約一億六千万か。そんなん払えるわけねーだろ、と内心で呆れつつ答える。

「さすがに無理ですね」

「もちろん、ここで払ってくれなんて言わないさ。支払いはレース終了後で構わない。それなら十分払えるだろう?」

それなら確かに可能だが……。

「レース後で良いなんて、随分俺を信用してくれるんですね」

ここで俺が彼らを騙したとしても、それはあくまでレースのルール上のことだ。

星の売り買いなどの交渉も、レイズを吊り上げるための駆け引きとみなされるだろう。

レース後にはみ金銭的な価値の発生する星を俺がだまし取ったとしても、詐欺罪などに問われることはない。

故に、選手たちは現金やカードの交換とのみ、星の売り買いを行っているのだ。

そんな意図を込めてそう問うと、鷲鼻の男はニヤリと笑う。

「信用しているさ。君は有名人だ。俺たちとは『世間からの』信用度が違う」

なるほど……ね。チラリ、と俺たちの周囲を飛び回るカメラアイを見る。

確かに、俺と他の選手では信用度が異なるか。

世間での俺のイメージは、連続殺人犯を捕まえ、その賞金をすべて遺族に寄付した『正義の人』だ。

カメラアイで一部始終が撮影されている以上、他の選手と違い、詐欺で星を巻き上げることはできない。

たとえ、ルール上問題なかったとしても、放送を見た人々は俺へのイメージを悪化させることだろう。

それは、せつかく寄付した二十億をドブに捨てる行為だ。

高々、一億と六千万のために二十億で買った信用を捨てるアホは
いない。

だが……。

「もし俺がレースを完走できなかったら？」

まさかその時は払わなくて良いとは言わないだろう、と問いかけ
てみる。

「もちろんその時もちゃんと代金は払ってもらおう」

当然、とばかりに鷲鼻の男は言った。やはりな……。

「それじゃあ、さすがに90万じゃあ買えないですね。へタすりや
借金を抱えることになる」

「それじゃあいくらなら買ってくれるんだ？」

「そうですね。……一つ五十万なら」

「それはいくらなんでもないだろう。五十万なら大丈夫ということ
は、一億円分程度なら買えるんだな？ では、星一つ90万で一億
分買ってくれないか？」

「いやいや、そもそも90万じゃ、高すぎるんですよ。そっちは確
実に金が入るけど、俺はゴールしなきゃ大赤字なわけで。星一
つに90万の価値はないんですよ。ギリギリで60万ですね」

「君は今や優勝候補の筆頭だろう。その君がゴールできないなら誰
がゴールできるって言うんだ？ 俺たちも切羽詰まっているから、
こうして腹を割って内情を話したんだ。どうか助けると思って、8
5万で頼む」

「優勝候補なんて言っても、こうしてあなたたちに足止めされてた
わけで、この先こういった妨害がないとは限りませんよね。そう考
えるとやっぱり不安ですし……70万で」

「いやいや、仲間たちから聞いたぞ。普通に戦う気満々だったみたいじゃないか。みんな戦々恐々していたらしいぞ。コイツ、マジかよ……さすが優勝候補は胆力が違う！ ってな。なあ、あんまりイジメないでくれよ……80万。ここが本当に限界だ。駄目なら違う相手を探す」

ん……ここが限界か。俺以外、レース後の支払いなんてしてこないことを突けばさらに値下げできるだろうが……あんまり追い詰めてもな。

「そうですね……じゃあ、この後来る選手の内、有力そうな選手の足止めもしてくれるなら」

「む……？ いや、それは無理だ。恥ずかしながら、俺たちにはもうほとんど碌な戦力が残っていない」

「ああ、実際には戦わなくても大丈夫です。俺にしたみたいに脅してブラフをかけてくれれば、それで」

「ふむ、まあ……それなら。そうなるか一人一つは星を残さなくてはならなくなるから……渡せる星は173個になるわけだが、当然182個分で計算してくれるんだよな？」

「ん、そう、ですね。……では、星182個分で一つ80万の……えっと、一億四千五百万で。端数はオマケしてください」

「仕方ない。全部買い取ってくれるというのだから、それくらいのオマケはすべきだろうな」

「では？」

「ああ、交渉成立だ」

俺と鷲鼻の男は、カメラアイに映るよう固く握手を交わした。

そこで彼はようやく笑みを見せ。

「いや、本当に助かったよ……これで仲間たちのカードの弁償も多

少はできそうだ」

「いえ、こちらこそ」

「君の優勝を祈っているよ。これは本心だ。頑張ってくれよ」

鷲鼻の男はそう言うと、仲間たちの星を一人に集約するために安全地帯を出ていった。

——そして、それから四時間後。俺は海の迷宮を踏破したのだった。

海の迷宮を踏破し、迷宮を出たところでカードギアに運営からの連絡が届いた。

そこには、二つの迷宮を最初に踏破したのが俺であること、最後の迷宮は水道橋駅から十数分のところにある清土鬼子母神堂という特殊型迷宮であることが書かれていた。

「……………チッ」

それを見た俺は、思わず舌打ちしてしまった。

予想はしていたが、やはり最後は特殊型迷宮か。

わざわざ二つの迷宮をクリアしたら教えるなんてもったいぶっていることから予想はしていたが……できれば外れていて欲しかった。特殊型迷宮の特徴は、何と言っても道中にモンスターや罠が存在せず、主しか出現しないことだ。

当然、その分のリソースは主に注ぎ込まれており、特殊型迷宮の

主は迷宮のランクよりもツーランク上のモンスターが出現する。

つまり、Dランクの迷宮の場合、Bランクの主が出現するというわけだ。

また、出現する主は固定ではなく、挑んだ者が苦手とする、あるいは挑んだ者の強みをさらに上回るモンスターが出てくる。こちらにとって相性の良い相手は絶対出てこない。

なによりも、最大の問題は、特殊型迷宮の主は『こちらのカードの後天スキルをコピーしてくる』ということだ。

どのカードのどの後天スキルがコピーされるかはわからないが、最悪の場合、蓮華やユウキの限界突破や霊格再帰がコピーされることもあり得る。

もしも特殊型迷宮の主が限界突破を得て、さらには霊格再帰でAランクになったら俺では絶対に勝てないだろう。

特殊型迷宮は、別名『試練の迷宮』とも呼ばれている。

それは、特殊型迷宮がカードの種族の相性や後天スキルの性能だけでは踏破できない、冒険者自身の実力が試される迷宮だからだ。

多くの冒険者が、カードの性能だけに頼って迷宮を踏破する中、特殊型迷宮はそんな冒険者たちを試すようにメタ的モンスターを放つてくる。

それを破るには、冒険者自身が多少の相性の不利を覆せるくらいの実力を発揮するしかない。

また相手によって出るモンスターが変わるといった性質からか、特殊型迷宮には主を倒すまで一人しか入ることができない。

一人では無理でもみんなで力を合わせれば！ という攻略方法も使えないのだ。

この性質から、特殊型迷宮は四ツ星昇格のための実技試験の一つになっていると聞く。

アマチュアならともかく、プロになろうと言うならカードの性能

に頼ってばかりいないで、自分の実力で超えてみる、というわけだ。俺も四ツ星を目指す以上、いつかは特殊型迷宮に、とも思っていた。

だが……。

「勝てるか……？ 俺の今の実力で……」

思わず小さく弱音が零れる。

俺の力の大半が、蓮華やユウキと言った特殊な力を持つカードによるモノだと言うことはわかっていた。

今回の冒険者部の合宿でも、それを痛感させられた。

俺には師匠ほどのリンクの腕も、織部みたいな戦略性も、アンナのようない……アンナのようない……えっと、うん、まあ、アンナは置いておいて、師匠や織部のような冒険者としての強みがない。精々、ちよつとリンクを覚えるのが早いくらいだ。

師匠は、俺の強みは『カードを育てるのが上手いこと』なのだと言いが……それでは特殊型迷宮は突破できない。

ぶつちやけ、冒険者部の中で一番四ツ星昇格試験に躓くとしたら俺では？ という不安があった。

俺が立ち竦んでいると……。

『なあゝに、ボサツと突っ立ってんだよ』

「イテッ！」

見えない何かから、パシンと後頭部を叩かれた。

振り返りかけて、カメラで撮影されていることを思い出した俺は突然の頭痛に襲われたフリをしつつ蓮華へとリンクで問いかけた。

『なにすんだよ』

『お前がビビってるから活を入れてやったんだよ。感謝しろ』

『……別にビビってるわけじゃ』
『いや、どう見てもビビってただろ。何が怖いんだよ、この蓮華様に言ってみる』

そう言っつて姿の見えない座敷童が俺の頬を突いてくる。

『いや、特殊型迷宮の主っつて、こっちの後天スキルをコピーしてくるわけだろ？ もし限界突破や霊格再帰をコピーされたらヤベーと思っつてさ……』

『ハッ、何を言っつかと思えば』

俺の弱音を蓮華は鼻で笑う。

『スキルの性能や戦闘力だけで勝負が決まるなら苦労はねーんだよ、アホ！ もしそうなら、お前なんてとっくに死んでるっつーの』

その蓮華の言葉に、俺はハーメルンの笛吹き男との戦いを思い出した。

確かに、あの頃の俺のカードたちはみんな碌なスキルも持っていなかったが、強力なスキルを持つイレギュラーエンカウント相手に勝利を収めた。

あの後、ハーメルンの笛吹き男について調べてみて、『その真のスキル』を知って、心底ゾツとしたものだ。

蓮華が俺の首へと腕を回し、カメラに聞こえないようにそつと囁く。

「お前、最近スキルに頼り過ぎだ。もうちょっとスキルじゃなくてカード自身を信頼しろ」

『そう、だな……悪かった』

『ああ。それと、限界突破はともかく、霊格再帰はコピーされる可

能性はないだろうから安心しろ』

『うん？ そうなのか？』

『そーいうもんなんだよ、アタシを信用しろ』

限界突破はコピーされる可能性があり、霊格再帰はコピーされない……。

この二つの違いは何なのだろうか。霊格再帰にはキーアイテムが必要だからだろうか？

そもそも、なぜ霊格再帰というスキル名なのだろうか。

ただのランクアップできるスキルだとすれば、霊格『昇華』とかでも良いはず、というかそっちの方がしっくりくる。

再帰……再び帰る。つまり、そういうことか？ 零落スキル持ちは、元々はもつとランクの高いカードであり、故に霊格再帰のスキルで一時的に元のランクに戻ることができる、と。

だから、特殊型迷宮の主であっても霊格再帰のスキルはコピーできない。元に戻る先が存在しないから。

だが……なぜ蓮華たちはランクダウンなんてしたんだろうか。

そんなことを考えながら電車に揺られること、十数分。

俺は最後の迷宮に到着した。

清土鬼子母神堂は、普通に民家が立ち並ぶ路地の奥に、こぢんまりと存在する小さな寺社だった。

この寺社に初めて来た俺の印象としては、なんだかモノ悲しい、だった。

唯一、寺社を取り囲むように建てられた高い壁とゲートが、ここがただの寺社ではなく危険な迷宮であることを主張している。

迷宮化により参拝客も訪れなくなり、信者からも存在を忘れられた小さな寺社。それが、清土鬼子母神堂だった。

だが、それも中へと入るまでだ。

一步中へと足を踏み入れると、そこは外観からは想像も出来ない程に広大でねじれ狂った空間だった。

入口から無数に枝分かれした参道の先には、やはり無数の本堂があり、神像が無造作に乱立している。

東京ドームダンジョンと同じだ。元の建造物を取り込みつつ、それが何十倍、何百倍にも増殖され、空間が拡張している。

あそこも、外観は普通だが一步中に入るとたくさんの通路に枝分かれしており、その先に十数個ものの球場——今は闘技場風に改装されているが——が存在し、その一つ一つで毎日のように試合が行われているのだ。

初めて入ると、歪んだ空間に驚き、不快感を示す者もいるが、慣れば問題はない。

「……いるな」

無数に枝分かれした参道の先、人間の俺でもわかるほどの威圧感を放つ存在がいる。

その威圧感に覚えがあることに気付き、俺は眉を顰めた。

これは、嫌な予感が当たったか。

特殊型迷宮はこちらの嫌がるモンスターを出してくるため、予想していたことではあったが……。

俺は、蓮華、イライザ、ユウキ、メア、鈴鹿、それと少しだけ迷ったがデュラハンを呼び出すことにした。

デュラハンのドジは怖いけど、ここは少しでも戦闘力の底上げをしておきたい。

さらに……。

『蓮華、メア、霊格再帰だ』

出し惜しみはしない。最初から全力で行く。

『待つてました!』

と、メアが喜色を浮かべてリリムへと霊格再帰する。

褐色の肌は、どこか官能的な幾何学模様がピンクのラインで走り、山羊の角は黒く艶やかに、背中の翼が一回り大きくなる。

それに合わせて、蓮華も吉祥天へと霊格再帰した。足元から蓮華の花が咲き乱れ、肢体がスラリと伸びていき、天女のような羽衣を身に纏った美の女神へと姿を変えた。

『イライザ、二人にレベルアップの魔法を掛けてくれ』

『イエス、マスター』

レベルアップの魔法は、まだ育っていないカードの戦闘力を一時的に成長限界まで上げる魔法だ。戦闘による経験値は得られなくなるが、手に入れたばかりのカードを即戦力とできる。

このレベルアップの魔法により、霊格再帰持ちは、その種族本来の戦闘力を発揮できるようになるのだ。

【種族】 吉祥天（蓮華）

【戦闘力】 3100（MAX!）

【先天技能】

- ・ 吉祥天の真言
- ・ 二相女神
- ・ アムリタの雨

【後天技能】

- ・ 廃棄されし者
- ・ 限界突破

- ・ 明星の瞳
- ・ 霊格再帰
- ・ 自由奔放
- ・ 高等攻撃魔法
- ・ 詠唱破棄
- ・ 魔力回復
- ・ 友情連携
- ・ 高等状態異常魔法
- ・ かくれんぼ

【種族】リリム（メア）

【戦闘力】 1500（MAX!）

【先天技能】

・ 夢魔の女王：夢魔を統べる女王の娘であり、分身。眷属であるサキュバスを召喚することができる。無限召喚型。サキュバスの先天的スキルをすべて内包する。

・ 夢か現か：現実と夢の世界の境界線をあいまいにし、その場に
いる者全員の夢と名の付くスキルの効果を上昇させる。

・ 死の快樂：粘膜接触した相手に強力な快感を与えるとともに、
精気を吸収、あるいは分け与えることができる。投げキッスで遠隔
攻撃可能。直接接触で、威力極大上昇。相手が男性であった場合、
初撃に限ってありとあらゆる耐性を貫通する。

【後天技能】

- ・ 小悪魔な心
- ・ 一途な心
- ・ 友情連携
- ・ 中等魔法使い
- ・ 高等状態異常魔法
- ・ 高等補助魔法（NEW!）

- ・人を呪わば穴二つ
- ・生還の心得
- ・靈格再帰
- ・耐性貫通
- ・詠唱短縮

【種族】サキユバス

【戦闘力】360

【先天技能】

- ・巫山の夢
- ・胡蝶の夢
- ・淫魔の肌

【後天技能】

・下位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。下位眷属体は自我を持たず、オリジナルの初期戦闘力の8割ほどの力しか持たない。

これで、準備は万端だ。

蓮華は戦闘力3100にもなり、フルシンクロすれば戦闘力は6000相当にもなる。

たとえ相手が限界突破を持ったBランクの主であっても、戦闘力だけは上回れるはずだ。

メアは、さすがに蓮華に比べると落ちて見えるが、無限召喚型の眷属召喚を持っている。長期戦となればその総合力は限界突破を持つ蓮華にも劣らない戦力となるだろう。

蓮華とメアだけでなく、イライザ、ユウキ、鈴鹿に、オマケでデユラハンもいる。

これで負けるようなら、それは単純に俺の実力不足だったというだけだ。優勝は他の選手に譲り、俺は冒険者の実力を磨き直そう。

そんな諦めにも納得にも似たさっぱりとした気持ちで参道を進む。徐々に匂ってくる華の香りに、嫌な予感が確信へと変わっていく。やがて、本堂の前で立つこの迷宮の主が見えてきた。

咲き乱れた蓮華の花の上に立つ、天女のような羽衣纏った絶世の美女。

——この迷宮の主は、予想通り吉祥天だった。

第十五話 禍を転じて福と為す (後書き)

【Tips】特殊型迷宮の主

特殊型迷宮の主は、通常の迷宮と異なり、迷宮のランクよりツィランク上のモンスターが出現する（Bランク以上の特殊型迷宮は現在確認されていない）。

この主は、挑戦者の召喚しているカードの後天スキルを一つずつコピーする能力を持ち、途中でカードを入れ替えた場合であっても、前のカードの後天スキルは破棄されず、次のカードの後天スキルが新たに加わる。

また、出現する主は、その冒険者の思考を読み取り、相性の悪いモンスターが選ばれる。

この性質からか、特殊型迷宮の主には絶対に一人でしか挑むことができない（一人以上の立ち入りができない）。

別名『試練の迷宮』。

第十五話 禍を転じて福と為す

『行くぞ、蓮華！』

『ああ！』

敵の姿が見えた瞬間、俺が取った行動は問答無用の先制攻撃だった。

蓮華とフルシンクロし、最大火力の一撃を叩き込む。

仮に相手が限界突破を持っていようと、迷宮からエネルギーを回され強化されていようと、大ダメージは必至。

高等攻撃魔法・エクスプロージョンが吉祥天へと直撃し、爆炎と衝撃波が大気を激しく震わす。そこへさらにメアやイライザたちが次々と追撃の攻撃魔法を叩き込んだ。

やがて土埃が晴れた時、そこには明らかに深手を負った吉祥天の姿があった。

よし！ と喜ぶよりも先に、今はトドメを優先する。

ユウキを縮地で相手の背後へと回り込ませ、イライザに斬りかからせようとした――その時。

『マスター！』

イライザが突如警告を発し、献身の盾を発動した。――マズイッ！何が起こったのを把握するよりも先に、本能のままに蓮華からイライザへとシンクロの対象を切り替える。

さすがにフルシンクロとまではいかなかったが、ギリギリで80%ほどまでシンクロ率を高められたところで、俺たちの側面から流

星群が襲った。

『ぐううう……う、う！』

歯を食いしばって献身の盾を維持するイライザ。凄まじい速度で彼女がため込んだ血液が消費されていく。それを表すかのように、彼女と生命力を共有しているデュラハンの鎧までもが、ひび割れ徐々に砕け散っていく。

一拍遅れてメアがプロテクションの魔法で、蓮華がリジエネレイトを使いイライザのサポートをする。

なんとか敵の攻撃を凌ぎ終わった時、イライザはほぼすべての血液のストックを使い尽くし、身に纏う鎧も原形を留めておらず、口スト寸前と言った有様であった。

『イ、イライザア！』

メアが悲鳴のような声を上げつつサキュバスを召喚し、それをイライザへと捧げる。彼女は血走った眼で無防備なサキュバスの首筋に喰らい付き、無我夢中で血液を啜り始めた。

みるみるうちに傷が癒えていくのをチラリと確認して、今の攻撃の主を見る。

そこには漆黒の衣を纏った、病に爛れた肌と老婆のような髪を持つ醜い女が立っていた。

――黒闇天。やはり、出てきたか。

特殊型迷宮の主は、一体しか出現しないと言われている。だが、これは誤りで、正確に言えば一体ではなく、『一枠』と言うべきだった。

当然、その一枠で二枚召喚することができるようなスキルがあれ

ば、特殊型迷宮の主と言えど二体同時に出現することができる。

そう、例えば二体一對スキルや一一一その上位スキルである二相女神のように。

二相女神は、二体一對スキルのように二枚揃うことで使えるようになるスキルは存在しない（というよりも二枚揃わなくても代表的なスキルを使えるようになっていくというべきか……）が、その代わりに二枚揃った時の特典が強化されているスキルだ。

二体一對型スキルの頃にあつた生命力の共有に加え、『魔力や後天スキルの一部共有』や『使用回数制限があるスキルの条件緩和に回数の増加と共有』、『戦闘力の増加』など、様々な恩恵を持つ。

黒闇天も、それに靈格再帰できるタタリモツケのカードも手に入る見込みがなかったため、これまで強く意識してこなかったが、本来は二枚揃うことで力を発揮する強力なスキルなのである。

しかし、こちらが二相女神のスキルを活かせずとも、相手はこうして当たり前のように出現してくる。

迷宮によつては普通に一体ずつしか出現しないことも多いため、頼むから一体しか出て来ませんように、と祈っていたがどうやら無駄に終わったようだった。

……というよりも、俺のそんな苦手意識を汲み取ってこの二体を迷宮は呼び出してきたのだろう。

『……あ、雨……』

メアが上を見上げて呟く。

寺社の境内に、光り輝く雨が降り注ぐ。敵の吉祥天のアムリタの雨だ……。

こちらがイライザの傷を手当している間に、向こうもすっかり全

回復してしまつたようだ。

しかも、こちらは一回しか使えないアマリタの雨であるが、あちらは後何回も使えるだろう。

……………クソ、羨ましいな。

こついう時は、厄介な回復役から潰すのがセオリーだが、二相女神には生命力を共有する力もあるため、二枚分のダメージを与えなければ倒すことができない。

当然、わずかでも生命力が残っていればアマリタの雨で全回復してくるだろう。

ボスが全回復魔法を使つてくるとか、これがゲームだったら酷評レビューをあちこちに書き込んでいるところだ。

……とにかく、厄介極まりないが、攻略方法ははっきりしている。

二体同時でロストさせるほどの一撃を叩き込むか、二体同時に眠らせてメアが内部から衰弱死させるかのどちらかだ。

眠りの状態異常は、なんとか機会を見つけてこぞぞという時に試すとして、まずはじわじわと生命力を削りつつ、一撃で倒せる射程範囲内に収めるしかない。

問題は、相手はどう見ても限界突破持ちで、逆にこちらが一発でやられかねない火力つてことだ……。

『メアはそのままサキュバスの召喚を頼む。イライザは呼び出されたサキュバスをガンガン喰つて血を蓄えろ！ どうせこの火力じゃ出てきても即やられるだけだ』

先の流星群を見るに、確実に限界突破はコピーされている。そんな敵の前に戦闘力300台のサキュバスを出したところで、一瞬で溶けるだけだ。ならば、イライザの栄養源になつてもらつた方が良い。

『それとダインスレイヴはユウキに渡してくれ。ユウキ、これを履け』

イライザからダインスレイヴを受け取ったユウキへと、羽の生えたサンダル——タラリアを渡す。

今はまだ、相手は地上にいるが、空へと逃げられたらユウキに追いかける術はない。

イライザとユウキのどちらに渡すかギリギリまで判断するために温存していたが、ここはユウキに渡すのが最善だ。

『鈴鹿は姿を隠して、丑の刻参りを使えるタイミングを探してくれ。蓮華は主力だ。とにかくガンガン魔法を撃ち合っぞ』

指示を聞いたカードたちが動き出す。

ユウキの張った火遁の術による煙幕に紛れて鈴鹿が境内のどこかへと隠れ、イライザとメアが俺を連れて後方へと下がる。ついでにコシュタ・パワーを召喚し、その中へと隠れた。

無いよりはマシ程度の盾だが、気配遮断と透明化もついていることだし、ゼロよりは良い。

カードたちを通じた視界では、ユウキがタラリアによる高速移動と縮地で敵を翻弄しつつ、吉祥天へと斬りかかったところだった。

ダインスレイヴには再生阻害の効果がついている。さすがにアムリタの雨にはその呪いも洗い流されてしまいが、それ以外の回復魔法を無効化できるのは大きい。

一瞬で背後に回り込んだユウキに、さすがの吉祥天も反応できずにその背を袈裟斬りにされ——。

『なにっ！？！』

ユウキの切り裂いた吉祥天が丸太へと変わり、彼女からかなり離れたところへと吉祥天を抱いた黒闇天が姿を現した。

糞！ 高等忍術をコピーしやがったのか！

吉祥天を抱いた黒闇天は、縮地で境内を縦横無尽に駆け回りつつ、範囲攻撃魔法をばら撒き始める。

こうなるとユウキも魔法から逃げるのが精一杯で、蓮華もユウキを巻き添えにすることを恐れて碌に攻撃することができない。

『最悪の高速移動砲台だ……』

思わず呻く。

戦闘力の高さだけでなく、かなり戦術も駆使してきやがる……。と、その時黒闇天の抱えている吉祥天が親指を咥えているのが見えた。

『フィンの親指か……！』

フィンの親指で知能を高めた吉祥天が、頭脳となってこの作戦を指示しているのだ。

……このレースのためにした準備の数々が、逆に俺に牙を剥いてきているように感じ、俺は齒噛みする。

『メア！ 胡蝶の夢の幻影でユウキをサポートしてやってくれ！』

『うん！』

やむを得ず、サキユバスの召喚を一時中断させてメアをユウキのサポートへと回す。

メアの幻影はユウキの姿を隠し、偽物のユウキを何体も生み出すと、幻影たちは縦横無尽に境内を走り回った。

これで少しは楽になるはず……。

『嘘！　なんで！？　幻影に全然引つかからない』

だが、黒闇天たちは幻影には引つかからず、姿が見えないはずのユウキをピンポイントで狙ってくる。

クツ、これは……鈴鹿の虚偽察知か！

どういうことだ！　手に入れたばかりのスキルのくせに俺よりも上手く使いこなしてるじゃねーか！

俺のカードたちが持っているスキルは、敵に回すとこんなにも厄介だったのか……。

……いや、違う。そうじゃない。敵がスキルの使い方が上手いのではなく、俺がスキルの使い方、組み合わせが下手くそなだけなのだ。

だから、俺のカードのスキルのごく一部だけを持っているだけの敵に、こんなにも翻弄されている。

すべては俺の司令塔としての能力が低いため……。

一言で言ってしまうえば、俺は『カードゲーム』が弱いのだ。

へボプレイヤーが、なぜそのカードが世間で強いと言われているのかも良く理解せずに、とにかく強いからデッキに組み込むように……高い戦闘力とレアスキルを持つカードをかき集めた冒険者。それが、俺という男だった。

まさに宝の持ち腐れ。豚に真珠の、猫に小判。

……だがそれは、この場で気付いたからと言ってすぐにどうにかできる問題じゃない。

戦術の閃きは、センスと積み重ねた経験から生まれるモノだ。

ここを生き残って後でコツコツと定石を学ぶことは出来ても、この場で最適解を編み出すことは、俺には出来ない。

——だから、とりあえず真似から始めることにしよう。

初心者が上級者のデッキをそのままコピーしてその戦略を学ぶように、相手の戦略をそのまま真似させてもらう。

まずは、ユウキに蓮華を背負わせて、敵の高速移動砲台の真似をさせてもらう。ただ真似をするのではあまりに芸がないので、空中も含めて上下左右から魔法爆撃をしてやることにした。

これにより、相手は一方的に攻撃することができなくなり、両者の戦いは超高速の読み合いへと変化した。単純な速さの戦いから、相手の移動先を予測して攻撃しつつ、相手に移動先を予測されないように動かなければならないという頭脳戦へと戦いのステージが移行したのだ。

その頭脳戦を担当するのは当然俺ではなく、直感とフィンの親指を組み合わせたイライザだった。

俺はただネットワークの中間地点に過ぎない。
ひたすらに、イライザの思考が蓮華たちに届くまでのタイムラグを無くすことに専念する。

つまりは、複数枚同時のシンクロー—マルチシンクローである。
蓮華のフルシンクローを維持しつつ、シンクロー率は低くともユウキとイライザにも同時にシンクローを行う。

両手で上手な字を書くことはできなくても、右手でちゃんとした字を書きつつ、左手で落書きをしつつ、口で下手くそな口笛を吹く程度のマルチシンクローは今の俺にもできる。

考えてから伝えることになるテレパスと違い、マルチシンクローは思考を共有するリンクだ。

イライザが敵の動きを予測した時、同時に蓮華たちも同じ思考に至っている。

これにより、ようやく一心同体である吉祥天と黒闇天たちと同等の土俵で読み合いが可能となっていた。

そしてその読み合いは、演算能力で敵がやや上回りつつも、直感による理屈ではない閃きの分、今のところこちらがやや有利なようだった。

こちらの攻撃は少しずつだが相手の生命力を削りつつあり、逆に相手の攻撃は今のところ紙一重で回避できている。

このまま拮抗状態を維持できれば、勝負の天秤は徐々にこちらに傾いていくだろう。

……だが。

『う、ぐ……！』

コシユタ・パワーの馬車の中、俺は脂汗を流して激しい頭痛に耐えていた。

この状態の維持。ただそれだけのことが、今の俺にとって一番の難関だった。

未だ完全に習得していないマルチシンクロのぶつつけ本番での行使は、予想以上に脳と精神へと負担が掛かっていた。

一つのことには極限まで集中していくパーフェクトリンクとはまた違った、同時並行的作業を強いられるマルチシンクロの負担は、俺の普段使っていない脳の部位を酷く疲労させていく。

このままでは、間違いなく敵の生命力を削り切るまでにリンクが維持できなくなるだろう。

その前に、吉祥天と黒闇天をどうにかして一気に決着をつける必要があった。

だが、イライザが脳をフル回転させてもそんな隙は見当たらない。鈴鹿……はダメだ。今忍ばせている彼女を使っても、一瞬状況が楽になるだけ。むしろ伏兵の存在を教えてしまう分、大きなマイナスだ。見えない伏兵の存在は、少なからず相手にプレッシャーを与え、演算能力を割かせているのだから。

メアも、イライザの吸血ストック用のサキュバスを召喚するのに

忙しい。イライザは右手の親指を啜えつつ、蝙蝠形態とした左手でサキュバスの吸血を行っている。またいつ献身の盾を使うかわからない以上、イライザの補給は最優先事項だった。

デュラハン……は今となっては完全なお荷物だ。彼女を装備させていなかったらイライザがロストしていた可能性が高いので、判断ミスとまでは思わないが……彼女の存在を上手く使いこなせない自分を齒がゆく思う。

なにか、なにかこの拮抗を打破できる方法は……！

——マロの冒険者の強みは、カードを育てるのが凄く上手いことなんじゃないかな。

師匠の言葉が脳裏に蘇る。

それじゃあ、この場じゃ意味ねえんだよ……！ 強く、齒が砕けそうなほどに食いしぼる。今の手札じゃ勝てない敵にも、勝てるくらいに強みでないと……！

武器が欲しい。俺だけの、冒険者としての特徴が……。

『——マスター』

その時、ふいに俺の顔を温かいモノが包み込んだ。

一瞬遅れて、イライザの胸に抱きしめられたのだと気付く。

『イライザ……？』

『私が証明です』

『なにを言って……』

戸惑う俺に、イライザはまるで聖母のような暖かな笑みを向け、言った。

『私が、冒険者としてのマスターの強みの……証明となります』

その時、胸元に仕舞っていたカードが光を放った。カードのスキル習得の光。

カードを見てそれがどんなスキルかを見るよりも前に、それがどんな力なのか……心で理解した。

これは……このスキルは――。

『私は、もう、人形ではありません。貴方がずっとそうあれと望んでくれたから……』

これは、イライザというカードを象徴するスキルだ。この世でただ一人、彼女だけが持つ力。故に、このスキルには名前もない。

仮に、イライザそのものと言えるこの名も無きスキルに名を付けるとすれば――。

『――マイフェアレディ』

カードの光がひと際大きくなって、弾けた。

スキルの名付けにより、スキルが確かな形となって彼女へと定着する。

俺は彼女の胸元から身体を離し、言った。

『イライザ』

『はい』

イライザが、俺の命令を待ちわびるように頷く。

『――敵の吉祥天の“限界突破”をコピーしろ』

『イエス、マスター』

その瞬間、彼女のすべての力が拡張された。その力はフィンの親指へと注がれ、演算能力が飛躍的に向上する。

それは、蓮華とユウキの動きの向上という形で、直ちに戦場に反映された。

掠らせるのがやっとだった攻撃が直撃するようになり、敵の攻撃は手に取るようにわかるようになった。

一気に勝負の天秤がこちらへと傾く。イライザを通じて、こちらの陣地が加速度的に広がっていくのが、俺の平凡な脳みそでもわかった。

これが、イライザの新しい力。先天スキルでも後天スキルでもない、彼女だけの固有スキル……、敵や味方のスキルを一つコピーすることができるスキル。

多彩なスキルを貪欲に習得し続けてきた彼女だからこそ至ることの出来た、一種の極致。

そこで、境内に光の雨が降り注ぐ。敵の吉祥天が再びアムリタの雨を使ったのだ。

これでまた一回、敵に切り札を切らせることができた。

イケる……このスピードならできる。俺の脳みそのスタミナが切れるまでに、押し切れる。

勝利の予感に、俺の身体がカツと高揚するのがわかった。

だが……俺は理解していなかったのだ。

——俺たちが敵に回しているのが幸運の女神と、それと同等の疫病神だということを。

それは、偶然だった。計算の結果ではなく、不運な事故……。

蓮華の放った岩の槍により、黒闇天の放とうとしたライトニング

の魔法の軌道がズレた。

放たれた雷の槍は、両者にとつても予想外の方向へと向かう。

そう、隠れていた俺たちの乗るコシユタ・パワーの方へと。

ただの事故というにはあまりにもピンポイント過ぎる不幸。ならばそれは疫病神による必然と言っしかなく……。

『マスター……！』

イライザがギリギリで献身の盾で俺たちを守る。

限界突破で戦闘力が底上げされていたこともあり、なんとか一人で防ぎ切ることができた彼女だったが、さすがにコシユタ・パワーまでは守り切れず、俺たちは消滅した馬車から投げ出された。当然敵もこちらの存在に気付く。

さらに、攻撃を受けたことでなんとか保っていたマルチシンクロも解除され、司令塔を失った蓮華たちは機能不全に陥った。

その隙を、敵は当然見逃さなかった。

威力よりも発動速度を重視した中等攻撃魔法が、こちらへと放たれる。

——マ、ズイ……！

背筋が凍りつき、思考が走馬灯のように超高速回転する。

俺へのダイレクトアタックは、一度だけなら大丈夫だ。事前にインシユアランスの魔法を掛けてあるから、なんとかなる。二連撃であつても、冒険部のバツチがあるから問題ない。

問題は、傷ついたイライザだ。今の彼女にこの攻撃に耐えられる生命力はない。サキユバスを喰らって得た血液も先ほどのですでに底をついていた。

攻撃を喰らえばズイのは、俺ではなくイライザ。

ならば当然頭の切れる敵が狙うのは、傷ついた吸血鬼だった。

雷の槍が彼女を貫く一―寸前。

『アアアアアア!』

メアが、咄嗟にその身を曝け出した。

『メア……!』

激しい電流が一発で彼女の生命力を焼き尽くし、しかし、生還の心得がギリギリでその命を繋ぎとめる。

『じ、の……!』

そこでようやく蓮華たちが動き出すが、司令塔を失った一撃は虚しく空を切る。

それは、黒闇天たちがもう一度攻撃できる隙を作ってしまったことを意味していた。

黒闇天がこちらへと手のひらを向ける。追撃の気配。

引き延ばされた一瞬の中で、俺は選択に迫られた。

……イライザか、メアか。

どちらも、この状況で失うには重すぎる手札。

俺がわずかに逡巡している間に、真っ先に動いた影があった。

『イライザ――!』

半死半生の吸血鬼が、自らの意思で献身の盾を発動する。

こういう時に一切の躊躇なくその身を捧げることができるのが、イライザという女で。

しかし、それは俺たちの決定的敗北を意味してもいた。

黒闇天の背後が揺らめき、地上と宇宙を繋ぐゲートが現れる。

そこから流星群が降り注ぎ――

「……は？」

――なぜか黒闇天たちを直撃した。

ポカンと呆気にとられる。カードたちからも啞然とした感情が伝わってくる。他ならぬ黒闇天たちも、重傷を負いながら戸惑っている様子だった。

なんだ？ まさかうつかり自分を攻撃したとでも言うのか？ そんな馬鹿な……いや、まさか！

ハツとイライザの纏う鎧を見る。

その時俺の胸にこみ上げてきた感情は、筆舌に尽くしがたいものだった。

コイツら！ デュラハンのドジをコピーしてやがったな……！

後天スキルのコピーは、選択式ではなくランダムだったということか。ここまで相手にとって都合の良いスキルしかコピーされていなかったから、てっきり選択式だと思っていた。だが、今はそんなことどうでも良い。

重要なのは、これがチャンスだということだった。

途轍もなく、大きなチャンス。

俺が指示をするまでもなく仲間たちはそれを理解しており、すでに動き出していた。

自らのメテオの魔法で体を穿たれた吉祥天たちが、突如地面へと膝をつく。

蓮華のグラビティの魔法だ。凄まじい重力がそのまま彼女たちを押しつぶそうとした寸前、吉祥天のアムリタの雨が発動される。

全身の傷が消えさり、グラビティからも解放された吉祥天が顔を

上げた瞬間、その口を小さな淫魔に塞がれた。

死の快樂。直接の口づけは、一瞬で吉祥天の精気を根こそぎ奪い取っていく。

当然相手も黙って見ているわけがなく、黒闇天の放った雷の槍がメアを貫き――ポンと言う音を立てて丸太へと変わった。

空蝉の術。ユウキに抱えられ俺の元へと戻って来たメアは、すかさずイライザへと口づけをして、その精気を彼女へと移す。

精製された生命力である精気は、回復魔法や血液の吸収などよりも遙かに効率よく吸血鬼の肉体を癒してゆく。

その様を見ていた黒闇天が、憎悪の表情でこちらへと手のひらを向ける。メテオか、グラビティか。

だがそれが放たれるよりも一手早く。

『――鈴鹿!』

『ふふ、完全に忘れ去られたかと思ってたよ』

鈴鹿の丑の刻参りが発動していた。

黒闇天が胸を抑え、跪く。耐性無視の呪術攻撃は、種族として呪いに耐性を持つ黒闇天であっても抵抗できるものではなかった。

それを見た吉祥天が、アムリタの雨を放つ。これで五回目。……
一体何回使えるんだ。

だが、もうあと何回使えようと関係ない。

これで、決める!

『蓮華、メア、鈴鹿!』

『つむ!』 『任せて!』 『いくよあ〜!』

友情連携―― 『世界終末の夜』 × 『巫山の夢 + 耐性貫通』 × 『可

『愛さ余って憎さ百倍』

黒い雨が降り注ぎ、吉祥天と黒闇天がなす術もなく昏倒する。

すかさずメアが吉祥天の中へと入りこみ、数秒ほど様子を見て起きる気配がないのを見て取り、俺はドツカリとその場に座り込んだ。よ、ようやく、終わった……。

そのまま地面に大の字になろうとして、最後に一つ仕事が残っていたことを思い出す。

『……蓮華』

『ああ、やるのだな？』

俺は無言で頷き、深く彼女と心を重ね合わせていく。

パーフェクトリンク。こんな機会滅多にない。散々苦戦させられたことだし、ここで何としても吉祥天のカードを手に入れておきたかった——が。

『く……さすがに幸運が足りないか』

前回の使用から約二週間。途中でカーバンクルのガツカリ箱の分の幸運も貯めてきたが、BランクどころかCランクの確定ドロップ分の幸運も貯まっていなかった。

と、その時、ふと俺は自分の持つ幸運のほかに、大きな幸運の塊が傍に存在することに気付いた。

何気なくそれに触れ……。

『これは……！ そうか、そういうことだったのか！』

その正体を知った俺は、躊躇なくすべての幸運をつぎ込んでいく。同時に響く、何かが砕け割れる音。

そして――。

『マスター』

俺を呼ぶ声に目を開けると、そこにはイライザの整った顔があった。

彼女はカメラアイの死角になるように、こっそりと何かを渡してくる。

手の感触でそれが『二枚のカード』であることを確認すると、俺はニヤリと笑みを浮かべた。

『落ちる瞬間は？』

『イエス、マスター。ご安心ください。ユウキと私で隠しておきました』

『よくやった』

サキュバスのドロップの時は偶然だったため隠せなかったのは仕方ないが、今回のBランクカードのドロップはさすがに視聴者に見せることは出来ない。

さすがにサキュバスに加えて吉祥天と黒闇天のカードもとなれば、確率の偏りに疑問を持たれるだろう。

俺はカードをこっそりと懐にしまうと、背中のバッグを見た。そこには、道中で手に入れたカーバンクルガーネットが入っていたのだが……。

「やっぱり、そういうことか……」

カーバンクルガーネットがすべて砕け散っていることを確認した俺は、小さく呟いた。

あの時感じた、大きな幸運の塊は、カーバンクルガーネットだっ

ただ。

以前、師匠と共にカーバンクルの確定出現するシークレットダンジョンを見てから疑問に思っていることがあった。

それは、市場に出回っているカーバンクルガーネットの量の少なさについてだ。

シークレットダンジョン一つから算出されるガーネットの数は、一日につき十数個以上。今回の地下迷宮のように一階層で複数体出るような迷宮の場合、さらに多くなる。

カーバンクルの出るシークレットダンジョンは日本国内に相当数あると思われるため、一日の産出量は最低でも四桁以上となるはずだ。

それだけのガーネットは算出されているにしては、市場に出回っている量があまりに少なすぎる。

最初は、値崩れしないようにコントロールしているのかとか、魔道具の加工に使っているのかもしれないと思っていたのだが、今回のこれで別の可能性が浮上してきた。

すなわち、幸運操作や運命操作での幸運の補充としての使用方法だ。

これは、政府側に蓮華のようなカードを持つ者が存在し、政府もその能力を把握しているということを示唆していた。

「……………ふう」

ま、ここで考えても仕方ないことか。

俺に出来るのは、今まで通り蓮華の能力を隠して使っていくことだけだ。

それよりも気になるのは…………。

俺はイライザのカードを取り出すと、カメラに映らないようにそのステータスを見た。

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】 840（MAX!）

【先天技能】

- ・ 膏血を絞る
- ・ 夜の怪物
- ・ 中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・ フェロモン
- ・ 奇襲
- ・ 献身の盾
- ・ 精密動作
- ・ 高等補助魔法
- ・ 魔力強化
- ・ 詠唱短縮
- ・ 直感
- ・ フィンの親指

【固有技能】

- ・ マイフェアレディ（NEW!）

先天技能と後天技能欄の下に新たに現れた、固有技能欄……。その下には、俺が勝手に名付けたはずのスキル名が記載されている。

また、後天技能の欄からは絶対服従や多芸、明鏡止水と言ったスキルも姿を消していた。

固有技能……カードに先天技能や後天技能以外のスキルがあるな

ど聞いたこともない。

蓮華やユウキの限界突破も出鱈目なスキルではあるが、それでも既存のスキルの枠に収まっていた。

だが、これはこれまでのカードのシステムの枠から明らかに逸脱している。

ふと、師匠の言葉が脳裏に蘇った。

……先天スキルや後天スキルは、カードの表層的な力の一部に過ぎない、か。

師匠なら、このことについても何かわかるのだろうか。

俺は疲れ切った頭で、ぼんやりとそう思っただった。

——レースリザルト。

ゴールタイム：21時間11分。獲得星数225個。着順——1位。

第一回キャットファイト・バトルロイヤルレース優勝者・北川歌麿。

第十五話 禍を転じて福と為す (後書き)

【Tips】二相女神

二体一対型スキルの上位スキルとして、二相女神や三相女神が存在する。

二体一対型スキルがもう一枚のカードが存在しなくては無意味なのに対し、二相女神は場にもう一枚のカードがなくとも固有のスキルが使える、さらにはもう一枚のカードへと変身が可能と、条件が緩和されている。

だが、当然そのカードの真価が発揮されるのは二枚揃った時であり、生命力の共有に加え、

『魔力や後天スキルの共有』や『使用回数制限があるスキルの回数増加と回数共有』など、様々な恩恵を持つ。

その分一枚だけの時の性能は他のBランクカードに劣る傾向があり、他のカードに比べて若干値段は低くなる。

第十六話 夏はまだまだ続く（前書き）

番組側が想定していたレースの流れ。

1：参加する選手の主な戦力はCランク二〜三枚に残りはDランク程度で、優勝候補たちはC+かBランクを一枚持っている程度を想定。事前にチームを組んで参戦する選手たちのことは想定済みで、いわば大穴枠。

2：先行逃げ切り型の選手が、どちらかの迷宮を踏破する。想定タイムは、20〜30時間程度。

（ヴィーヴィルやサキュバスと言ったレアモンスターで取れ高もアップ！）

3：踏破した選手をターゲットにミッションを発動。普通に考えればターゲットが一時足止めされる展開となるので、ここでボス戦闘分の一時ボーナスを回収。

（もし星を捧げる展開となった場合は、それはそれで資金を回収できるので問題なし）

4：片方の迷宮が踏破されたことにより、選手同士の足の引つ張り合いや駆け引きが加速。さらにそれを数々のミッションでかき回しつつ、選手同士のバトルで取れ高アップを狙う。また選手同士の勝敗も賭けが行われているので、ここでも資金を回収できる。

5：トップ陣が、それなりに消耗しつつ二つの迷宮を踏破（想定タイムは48〜72時間ほど）。特殊型迷宮の主に阻まれる。特殊型迷宮の主な簡単な攻略方法は、マイナススキルをコピーさせて（た

だしやり過ぎればしつぺ返しが来る）から、一軍のカードたちで一気に倒しきる事。しかしデッキとして登録できるカードは十枚までのため、通常はマイナススキルばかりのカードを入れる余地はない。そのため、苦戦は必至。

6：三つ目の迷宮で阻まれた選手たちが、渋滞し始める。特殊型迷宮の主を倒すためには選手同士の協力が必要となる（具体的に言うと、選手の犠牲を前提とした神風アタック。特殊型迷宮の主は相手に合わせて姿を変えるが、削られた生命力などについては回復しないため、神風アタックが成立する。なお、吉祥天やハトホルなどの全回復スキル持ちが一回でも出ると振り出しに戻る模様）が、自分から犠牲となる選手はいないため、ここでかなり停滞する。すでにグループを組んでいるチームであっても、他のチームからの妨害を受ける可能性大。

7：十分に選手同士のギスギスしたヒューマンドラマが撮れたところで（残り時間24時間ほど）、ミッションを投入。クリアすればプロが特殊型迷宮の主を倒してくれる＝ミッションをクリアした選手が、実質の一位。

（仮に誰もミッションをクリアできず、誰もゴールできなかった場合でも、「誰もゴールできない」という大穴に賭ける人もいるため問題なし）

8：それらの予定を全部ぶっ壊して、マロが自力で特殊型迷宮の主を倒す。用意したほとんどのミッションが無駄になる。

イレギュラーエンカウントの発生は想定範囲内。イレギュラーエンカウントの発生時に『カードギアの通信機能がちゃんと遮断されるか』を確認するのも、このレースの目的の一つだった。発生しなければしないで、問題なし。

第十六話 夏はまだまだ続く

「――もしかすると、それってマロのユニークリンクなのかも」
レースが終わり、その夜。自宅へと帰宅した俺は、師匠と電話で話をしていた。

話題は、無事レースで優勝したこと、そのお礼。そして、イライザが目覚めた新たな力……固有技能についてである。

カードのステータスに新たに刻まれた、先天技能でも後天技能でもない未知の技能欄。これについて何か知っていることはないかと、師匠へと尋ねてみたのだ。

もちろん、『マイフェアレディ』の能力に関しては伏せて、だ。あの能力については、俺も感覚でしかわかっていないのだが、どうやら敵や味方の後天スキルを一時的にコピーできる能力らしいことはわかっていた。

スキルのコピーは、迷宮の主の中でも特殊型迷宮の主にしか許されていない反則技である。

いくら師匠とは言え、そう簡単に話せることではなかった。

師匠も能力の内容については気になったようだが、深くは踏み込んでこず、俺としても助かった。

そうして一通り俺の話聞いた師匠が言ったのが、この一言であった。

「ユニークリンク、ですか……」

師匠の言葉を、頭の中で反芻する。

ユニークリンク……冒険者の持つ属性を極めた先にあるという、リンクにおける一種の極み。

その習得には、ひたすらに自分に合った属性のカードを使っているだけでなく、プロであっても習得していない者がほとんどだという。そんなリンクを、冒険者歴一年未満の俺が使えたとは信じられないが……。

「そのイライザさんのスキルって、今はもうカードに記載されていないんだよね？」

「ええ、戦闘が終わって、リンクを切ったら無くなってました」

俺はそう言いながら、イライザのカードを見た。そこには、確かに得たはずの新スキルの名はどこにも存在していなかった。

同時に、消えていた絶対服従や多芸、明鏡止水のスキルが後天技能へと戻っていた。

「で、帰りに迷宮に寄ってまたリンクを繋いでみたら現れた、と」「現れたり、現れなかったり……ですね。なんか安定しない感じですね……」

帰り道、電車の中でイライザのカードを何気なく見たところ固有技能が消えていたことに気付いた俺は慌てて近くの迷宮へと寄り、もう一度固有技能を出現させてみようと同様な試みを行った。

そうしてわかったのが、イライザとシンクロを行っている時のみ極まれにいくつかの後天スキルが消え、固有技能へと変化するらしいということだった。

「目覚め掛け、ってことなのかな。いずれにせよ、リンク中にのみ出現するということは、マロの属性に影響を受けていると見るべきだろうね」

目覚め掛け……。俺の中で発芽し始めているユニークリンクが、イライザの高い資質と反応して一時的に形となった、ということなのだろうか。

「それとイライザさんの成長が、他のマロのカードと比べても早い件なんだけど」

「あ、はい」

「彼女は、もしかしたらギフトッドなのかも……」

「ギフトッド……?」

「極まれにあるらしいんだよ。妙にスキルの獲得が早かったり、戦闘力やスキル以上に強いカードが。いわゆる、カード中の天才って奴。そう言うのを、迷宮からの贈り物ってことでギフトッドカードって呼ぶんだ。……まあ、根拠のない噂みたいなもんだけどさ」

「へえ」

ギフトッド、か。確かにある分野に天才的な力を発揮する人間のことをそう呼ぶこともあるが、イライザはまさしくカードの中のギフトッドと呼べるだろう。

ユニークリンクについても、イライザと同じくらい付き合いの深い蓮華やユウキでは微塵も発動させられる気配がないことを考えると、原因は俺の才能というよりもイライザの方にあるのだと考えれば、むしろしっくり来た。

「……ところで、レース中カーバンクルガーネットとか結構手に入れたみたいだけど、それどうするの?」

「え……? ……普通に換金したり、母親とか妹とかにプレゼントするつもりですけど」

「ふうん……そっか」

「どうしてそんなこと聞くんです?」

「いや？ 特に大した意味はないよ。……もしかして、織部さんとかにプレゼントでもするつもりなのかな？ って思っただけ」
「いやいやいや、なんでそこで小夜が出てくるんですか」

俺が慌ててそう答えると、師匠は擲揄うような声音で。

「あれ？ でも今度映画デートに行く予定なんですよ？」

「いや、デートって感じじゃないッスよ。普通に映画とかを空いてる日に見に行く予定なだけです」

「アハハ、まあ、そういうことにしておこうかな。……ま、その固有技能とやらは僕も調べてみるよ」

「え、ええ……よろしくお願いします」

「何はともあれ……優勝おめでとう、マロ。それじゃあまたね」

「はい、また」

プツツという音とともに、通話が終わり。

「ふう……」

俺はどさりとベッドに身を預けた。

結局、師匠でも固有技能のことはわからなかったか……。

しかし、ユニークリンク、か。

もしこれが俺のユニークリンクによるものだとしたら、俺の能力は『カードに固有技能を追加するリンク』ということになるのだろうか？

……それは、なんとなくだが違う気がした。

きっと、固有技能自体はどのカードにも備わっているシステムなのではないだろうか。

故に、先天技能などと同じように欄としてステータスに並んでいるのだ。

ならば、固有技能とはカードを成長させていった先にある技能と考えることもできる。

では、俺のユニークリンクは『カードが固有技能に目覚めやすくなるリンク』ということなのだろうか？

……微妙に違う気もするが、方向性はあっている気がする。

元々師匠には俺のカードの成長は早いと言われていたし、俺のユニークリンクはカードの成長を手助けするタイプなのかもしれない。……いや、きつとそうだ。

カードの育成特化。それが俺の冒険者としての資質であり、強みなのだ。

俺はようやく冒険者として目指す道筋が見えた気がして、グツと力強く拳を握ったのだった。

――――それから二日後。

俺は都内の最大規模のプールへとやってきていた。

今日は終業式の日に約束していた、プールの日だった。

「それにしても、北川の仕事が予定より早く終わって良かったよ」

更衣室で水着へと着替えていると、神道がそんなことを言いだした。

「北川が突然、モンコロのレースの仕事が入ったからプール行けないかもって言い出した時は、これでプールの約束は完全に流れたな、って思ったもん」

「悪かったって。突然オフアーが来たからさあ。でも、ちゃんとプールの日までには終わらせてきただろ？」

俺が神道へとそう答えると。

「それがおかしいんよなあ。一週間の予定のレースで、二十四時間以内にゴールするとか」

そんなツツコミが、神道の反対側の方から聞こえてきた。俺はため息を吐きつつ、そちらへと首を向け。

「……つか、なんでここに小野がいるんだよ」

「師匠こそ冷たいんとちゃうか？ 可愛い弟子をハブいて女の子とプールに行こうなんて……」

「なにが可愛い弟子だ」

よよよ……と泣き真似をする小野へと突っ込みを入れつつ、横目で神道を見る。

すると彼は「悪い」と両手を合わせつつ。

「いや、なんかどこからか俺らがプールに行くって話を聞きつけたみたいでさあ。ちよつと断り切れんかった」

「いや、まあ、良いんだけどね」

小野には借りが無いこともないし、別に本気で嫌がっているわけではない。

ただ、当日待ち合わせ場所に行ってみたら当たり前のようにこの男が立っていたから少し突っ込みたくなっただけだ。

「そうそう、つまらんこと気にせんと、今日は楽しもうや！ こなチャンス滅多にないんやし！」

だが、やっぱりなんとなくイラツと来たので、俺は神道と二人で小野のケツへと蹴りを入れると、更衣室を出たのだった。

プールサイドへと出ると、プールはかなりの客で賑わっていた。プール自体はかなり広く、波のプールや流れるプール、ウォータースライダーなど見渡しただけでも10種以上のプールがあり、中にはショーも可能な広いエンタメプールもあったが、それでも少しだけ狭く感じるほどに多くの客が訪れているようだった。

「うひゃー、偉い組み合わせとるなあ。む……F発見」

「ウォータースライダーとか結構並んでるな。あれじゃ遊べるのは大分先になりそうだな。お、G発見」

「ありやGじゃなくてHはあるだろ……。……ある程度混雑が解消されるまで、波とか流れるプールで楽しむべきだな、こりゃ」

そんな風に、水着のお姉さんたちの鑑賞をしつつ女子勢を待っている。

「お待たせ〜！」

ついに待ちに待った瞬間がやって来た。俺たちは三人同時に勢いよく振り返り。

『おお〜！』

そう歓声と拍手を送った。

四之宮さんの水着は、黒色のクロス・ホルター・ビキニで、身体のラインに自信のある人にしか身に着けられないタイプのデザインだった。

さすがは読者モデルといったところか……こうしてみると本当にスタイルが良いのがわかる。

程よい大きさの胸の谷間と、くびれた腰にスラリと伸びた白い脚が何とも眩しい。

いつもは低い位置で一本結びにしている髪を、ポニーテールにしていることもあって、なんだか活動的な雰囲気だった。

その隣に立つ牛倉さんは、というと、こちらは白と黒のストライプ柄のタンキニで、自分の体型を隠すようなタイプの水着だった。

トップスは丈の長いタンクトップ型で、そのたわわな胸の谷間もウエストも完全に隠している。下もパレオを巻いており、太もものラインすらも隠す徹底ぶり。

……もしかして、四之宮さんほど身体が細くないのを気にしているのだろうか？

牛倉さんの密かなコンプレックスが窺えるようなチョイスだったが、彼女の名誉のために弁明しておく、牛倉さんは決してデブではない。

胸の大きな女性の中には、ぽっちゃりという言葉では誤魔化せないような体型の人も多いが、牛倉さんは同年代の娘と比べても太っていない。

むしろ胸のサイズを考慮すれば、かなり痩せ型と言えるだろう。

彼女のコンプレックスは、おそらく女子の理想的体型をしている四之宮さんの隣に居続けたからと思われる。

だから恥ずかしがらずに、大胆なビキニを着てくれ……！

俺は（口には出せなかったので）内心でそう叫んだ。

……そして、もう一人。俺は三人目へと目を向けた。

そこには、白の眼帯ビキニ姿の一条さんがいた。

牛倉さんほどではないがFかGはありそうなボリューム感ある胸元に、うっすらと縦に割れたくびれたウエスト、スラリと伸びるム

チムチとした太もも……。

それに日に焼けた褐色の肌と、その官能的な身体つきを隠そうともしない挑発的な水着のコントラスト。

こ、これはさすがにエロすぎるだろ……。ラノベの世界に一人だけエロゲのキャラが混じってるようだ。

俺は、思わずゴクリと生唾を飲み込みかけてなんとか堪えた。

ここでそんなリアクションをしたらさすがに露骨すぎる。

だが、俺の隣からはゴクリと唾をのみ込む音が聞こえてきた。

カードたちである程度免疫の出来ている俺と違って、コイツラは我慢ができなかったようだった。

そんな男性陣の反応を見た四之宮さんがため息を吐き、牛倉さんが苦笑する。

「ほらあ、だから言ったじゃん、かおり。その水着はさすがに刺激が強すぎるってさあ」

「そう？ 別に普通じゃね？」

そう言っただけ興味なさげに髪をかき上げる一条さん。

そんな何気ない仕草ですら、今はエロティックに見えた。

「師匠、ナイス」

「よく一条さんを誘ってくれた」

小野と神道がこっそりと俺に囁いてくる。

本来来る予定ではなかった一条さんがなぜここにいるのかというと、俺が誘ったからだった。

以前、犬の散歩中の彼女と遭遇した際、俺は有料でカードをレンタルするという契約を交わしていた。

基本的な内容としては、レンタル料は月額五万で最大二枚まで、ロストしてしまった場合は市場価格での弁償とし、最初に担保とし

て五十万円預かるということになっていた。

これは大学の冒険者サークルでのレンタル契約が元となっているのだが、大学のそれと違うのは、担保としてある程度の額を預かることと、メンター制度がないことである。

メンター制度とは、貸主である先輩が指導（と監視）をする代わりに、踏破報酬の何割かを持っていく制度で、先輩の指導を受けられ万が一の際に安全な反面、先輩がいない時は迷宮に潜ることが出来ないというメリットデメリットがあった。

このメンター制度については、新入部員が一人では迷宮に潜れないことを悪用してレンタル料をかさ増しさせて借金漬けにする悪質サークルが存在するなど問題もあるのだが、基本的にはイレギュラーエンカウント対策となっており、利点も多い。

そのため、俺がメンターをできない分、大学のそれよりもカードの質を高くし、盗難防止に担保として五十万円預かるということで話がついていた。

なお、契約内容の決め手となったのは、カードがロストした際の弁償方法として一条さんが言った「万が一の時はカラダで返す」というセリフだったりする。

……とまあ、そんなわけで、契約の内容については無事その場で話が纏まったのだが、問題となったのは「いつカードを渡すか」であった。

俺もこの夏はそこそこ忙しく、なかなか彼女にカードを渡す機会も少なく、そこで俺はふとした思い付きから、今日のプールの約束に彼女も誘ってみたのである。

今度四之宮さんや神道らとプールに行くんだけど、一緒にどう？と。

それに一条さんも頷き、他のメンバーも快く了解したことで、今日ここに一条さんもいるというわけだった。

我ながら、実にファインプレーであったと言えよう。

「さて、じゃあまずはどこに行く？」

俺はプールを見渡しながら皆へと尋ねた。

このプールには、定番の波のプールや流れるプールのほかに、4種のウォータースライダーや、湖のように広大なスイミングプールや、海底洞窟を模した迷路のプール、海賊船がモチーフのアドベンチャープール、温水プールなどが存在する。

……が、今見渡したところ波のプールや流れるプールは人で込み合って泳ぐには狭すぎ、4種のウォータースライダーにはどれも長蛇の列が並んでいるようだった。

「ウォータースライダーは昼ぐらいまでは空かないだろうし……水に漬かりもせずこの暑さの中あの列に並ぶつもりは、ウチはないな」

「私も」

「と言っても最初からスイミングとか温水プールってのもね。あれは遊び疲れたところにゆっくりプカプカするところだし」

そんな女子三人組の意見を考慮しつつ、男子勢が話をまとめる。

「ってことは、海底洞窟か海賊船だな」

「うーん、海賊船の方も結構子供たちで混んでんな。……ペアでの入場になっちゃうけど、海底洞窟の方でまずは良いんじゃない？」

「じゃそうするか。……ペアはどう決める？」

俺がそう言うと、すかさず小野が答えた。

「別に、普通にジャンケンとかでええんちゃう？」

「良いと思う」

「うん、賛成」

さすが小野だ、と内心で頷きつつ俺と神道は同意した。
こういう時、「誰々さんが良い」と指名するのは悪手である。

三人がそれぞれバラバラの相手を指名できればあまり問題はないが、もしも狙いがかち合った際、必然的に女子が一人あぶれることとなる。

そうなれば、この場にいる女子はみんな容姿に自信があるだろうから、確実に選ばれなかった女子のプライドを傷つけることとなるだろう。

それは、紳士として絶対に避けたい事態である。

……というのは建前で、本当は自分が選んだ女子から拒否られたら悲しいから、というのがピュアボーイたちの本音であった。

一一一一が。

「え、アタシ、北川と一緒に良いんだけど」

『ッ！？』

一条さんの発言で、その場に激震が走った。

小野や神道はもちろん、四之宮さんや牛倉さんすらもちよつと驚いたように目を見開いている。

まさか女子の方から指名してくるとは……よ、予想外だった。というか、え、なんで俺を？ も、もしかして一条さんって俺の事……？

と俺の中の思春期が暴走しかけたその時。

「ぶつちやけ今日来たメインの目的ってカードのレンタルのことで北川と話がしたかったからだし。早めに済ませて心置きなく遊びたいんだよね」

あ、そう言うことね……。

俺の中の思春期が一瞬で鎮火する。

いや、別に落ち込んでないけどね。俺、牛倉さん一筋だし。うん、本当、一条さんなら全然アリとか考えてなかったから。

俺が内心で誰ともなく言い訳をしていると、小野が俺の脇を肘で突いて来た。

「なんや師匠、カードのレンタルってどういうことやねん」

「んあ？ 別に一条さんが冒険者になりたいって言うから、有料でカードをレンタルするだけだよ」

「へえ、そんなん始めたんなら僕にも教えてくれや。どんなカード貸し出しとるん？ クランクも貸し出しとるんか？」

「クランクなんか貸せるほど持ってねーっつ。まあ……そういうのは後でな」

「後でな。絶対やで」

小野は目をギラつかせつつも、この場では引き下がった。

……なんか、コイツも結構ガチになってきたな。この夏休み、迷宮に潜りまくってるみたいだし、新学期にはもしかすると、もしかするかもな……。

「あ、一条さんもその話は昼飯の時ってことで良いんじゃない？

どうせカードの受け渡し自体は帰る時になるんだし」

「ん……まあ、それもそうか」

俺がそう言うと、一条さんも大人しく引き下がった。

それを見た四之宮さんがちょっとホッとしたように言う。

「じゃあ、シンプルにグーチョキパーで決めるってことで良いよね

「？」

『OK』

俺たちは頷き、拳を差し出した。

そして――――。

「――――結局、一条さんとか」

幻想的なライトが照らす洞窟風の水路を、ゴムボートで進みながら俺は小さく苦笑した。

そんな俺の小さな呟きを聞き逃さなかった一条さんが、細い眉を寄せ、凄む。

「は？ なに？ アタシじゃ不満とでも？」

「いやいやいや、滅相もない！ 光栄です、はい！」

俺が慌てて弁明すると、一条さんはフンと詰まらなそうに鼻を鳴らした。

「……………ま、いいけどね。どうせアレでしょ、北川は牛倉と一緒にいたりたかつたんでしょ？」

「えっ！？ ……な、なぜ」

「だって北川って巨乳好きじゃん」

「ッ……………！？」

ば、馬鹿な……………。なぜそれを知っている……………！？ まさか読心の魔道具か！？

俺が愕然としていると、一条さんは呆れたような、憐れむような眼で俺を見た。

「いや、さすがにわかるつての。アタシと話してる時もチラチラ視線感じてたし。逆に胸の小さい娘と話す時は全然胸見ないし……たぶん、クラス的女子はみんな知ってると思うよ?」
「マジっすか……」

うあゝ……し、死にてえ……。俺が胸見てるの、女子にみんなバシてたのかよゝ。ぐあゝ！　なんか、新学期学校に行きたくなくなってきた……。

俺が羞恥と自己嫌悪に頂垂れていると。

「ま、アタシはそういうの気にならないタイプだからいくら見られても良いけどね」

「えっ!?!」

そ、それって見放題ってこと!?!

「だからってガン見して良いとは言ってねーから」

グイツ、と首の方向を変えられる。う、今首から変な音が……。

「つか、アタシは気にしないけど、大きい娘は結構それがコンプレックスだったりするから、あんまり露骨に見ない方が良いんじゃないかね?　牛倉とかたぶんその典型だし」

「……はい。肝に銘じます」

俺はゴムボートの上で正座しつつ、頭を下げた。

まさか、女子に視線がバレバレだったとは……。もしかして、俺が収入や知名度の割にモテないのってそれが原因だったのか?　耳に痛かったが、今日ここで聞いて良かった。

これからは気を付けて……バレないように見るスキルを上げ

なくちゃな。

「……ところで、そろそろ本題に入りたいんだけど、どんなカード貸してくれるの？」

「あつ、ああ。一応これなんか良いんじゃないかと思ってんだけど」

と俺は腰に付けていたカードホルダーから数枚のカードを取り出した。

「とりあえずオススメはこれだな。リビンググアーマー」

【種族】リビンググアーマー

【戦闘力】170

【先天技能】

・ 生きた鎧：騎士の鎧に怨霊が宿った存在。鎧のどこかにある核を破壊しない限り消滅しない。状態異常耐性を内包する。

・ 鎧化：初等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターへと憑依することで、自身の戦闘力の四分の一を加算させることができる（マスターへの装備化の場合はすべての戦闘力とスキルを共有できる）。

・ 武術

【後天技能】

・ 虚ろな心

・ 剣術

・ 庇う

「やっぱり装備化スキルがあると安定感が違うよ。このリビンググアーマー

マーは武術スキルに加えて剣術スキルを持つてるから、いざという時に魔道具と合わせて装備してマスター本人が戦うってもアリだな」「へえ……装備化スキルつてのを持っていればマスター本人が戦うのもアリなんだ？」

思いのほか、自分自身で戦うことに乗り気な様子の一条さんに意外に思っている。

「何その顔。こう見えて、中学ん時は剣道部で、初段だったんだけど？」

「マジ!? すげえな……」

「まあね、最近は道場とかサボりがちだったけど……」

「へえ……まあそう言うことならリビンググアーマーはますますオススメだな。格闘とか剣道経験者は、武術スキルをより活かせるし。サービスに魔道具の剣もつけるよ」

「マジ? 超太っ腹じゃん」

俺が純粹な善意からダブっていた聖銀製の長剣を取り出すと、一条さんは目をしばたかせ……。

「……もしかして、身体でのお返しとかを期待してる?」

「いやいやいやいや! そういうんじゃないから! 純粹な善意だつて!」

慌てて首を振り、否定する。

ただでさえ、いつもおっぱいを見ている男というレッテル(事実)を張られているというのに、恩着せがましく身体での見返りを求めているヤツと思われたらたまったものではない。

すると一条さんはスツと身を引き。

「あつそう？　なんか悪いからおっぱいくらい触らせてあげようかと思っただけだ」

「え……」

思わず一条さんの胸元へと視線を送る。

そこには、推定FかGのたわわな膨らみが蠱惑的に揺れていて。

「でも純粹な善意ってんなら逆に悪いか。ごめんごめん」

「あ、うん……」

「あれ？　なんかテンション下がってる？」

「ううん？　別に？」

俺は無の表情で首を振った。

そんな俺を見てクスクス笑う一条さん。

そこでようやく擲揄われていたことに気付く俺。

くそ……舐めやがって！　次の機会があれば絶対そのおっぱいを揉んでやる。

と硬く決意しつつ、次のカードを出す。

「一枚目は、リビングアーマーで確定として、そうすると残りはサポーターかアタッカーかな。一応候補としてはこっちの二枚はどうかと思ってるんだけど」

そうやって俺が差し出したのは、ユニコーンとバイコーンのカードだった。

癒しと補助が得意なユニコーンで安定感を重視するか、攻撃と状態異常が得意なバイコーンでリビングアーマーの攻撃力不足を補うか……。

これはもはやその冒険者の好みの問題であるため、彼女自身に選んでもらった方が良いだろう。

……というのは建前で、本当はもしもユニコーンを渡して「これアタシじゃ乗れないんだけど」と突っ返されたら気まずいなんてもんじゃないから、というのが本音であった。
すると一条さんは二枚のカードを見て……。

「……もしかして、これって北川なりのリトマス試験紙？ さっきの仕返しのつもりだったり？」

「ッ！？ いやいやいや！ そういうつもりじゃないッス！ ホントー！」

一条さんのジト目に、俺は慌てて否定した。

よくよく考えれば、女の子にユニコーンとバイコーンを選ばせるとか、セクハラにもほどがある。どう考えても相手が経験済みかを調べているとは思えない。

もちろんそんな意図はなかったのだが、端から見てそう思われても仕方ない行動であった。

一条さんはそんな俺を目を眇めつつ疑わしそうに見ていたが、やがて。

「ふう〜ん……ま、良いけどね。一応、どっちでも大丈夫とだけは言っとく」

「あ、そっすか……」

俺はホッと胸を撫でおろしつつ、密かに思う。

どっちでも大丈夫ってことは、そういうことだよな？ ……正直、ちよつと意外だ。

「あれ？ このカードってなんか似てる。姉妹かなんか？」

そんな俺を他所にカードを眺めていた一条さんが、ふいに二枚の

カードを指さす。

それは、フェニアとメニアのカードだった。

「ああ、これは二体一对型ってカードで、二枚で一枚のカードなんだよ。一個の召喚枠で二枚召喚出来て、同時召喚で特殊なスキルが使えるってカード」

「へえ〜……」

俺がそう説明をすると、一条さんは興味深そうにフェニアとメニアのカードを手に取りマジマジと見つめた。

明らかに、ユニコーンやバイコーンの時よりも興味を引かれている様に、俺はふむ……と顎に手を当てた。

フェニアとメニアのカードは、正直あまり貸す気はなく、こんなカードもあるんだよ、という説明のために出したカードだった。

さすがにこの二枚のカードは、貴重な二体一对型のカードで、グロツティの歌という面白いスキルも持っていることもあり、貸すには惜しい。……が。

その一方で、この二枚のカードを実際に使う機会がそうあるかと言えば、首を傾げざるを得ないのも事実であった。

確かに、色々と希少なカードであるのは確かだが、正直今の俺のメンバーと比べると戦闘力不足なのは否めない。

ならば、このまま俺の女の子カードコレクションとして死蔵するくらいならば、むしろ……。

「……気に入ったんなら、リビングアーマーとそれにする？」

「え？ でも、レンタルできるのはDランクカード二枚までって話じゃなかったっけ？」

確かに、当初の話では貸し出すカードはDランク二枚ということになっていた。

これは、一ツ星の踏破報酬で安定してレンタル料を払えるのは二枚までが限界だからである。

俺は、たとえ知り合いであったとしても、いや、知り合いだからこそレンタル料の延滞などを許すつもりはない。

親しき中にも礼儀あり。知り合いだからこそ金の絡む話はちゃんとするべきで、故に彼女が払える分しか貸すつもりはなかった。

ただ、まあ……。

「……それは二枚揃わないと意味ないカードだから、一枚分のレンタル料で良いよ」

こっちが貸し出したいならば、多少は妥協しても良いだろう。

このまま死蔵するよりも、レンタル中に使いこんでもらった方がカードの成長にもつながるし、いざれ買い取りということになってもそれはそれで悪くない話なのだから。

……一瞬、ドラゴネットという言葉が脳裏を過ったが、そちらは頭を振って振り払った。

「――あのカードについては俺の手元においておく、蓮華と話し合って決めていた。」

「んん……」

一条さんはしばし迷うような、あるいは申し訳なさそうな顔で悩んでいたが、やがて。

「……じゃあ、そういうことでお願いしても良い？」

「了解。……まあ、あれだ。できれば大切にやってくれると嬉しいな」

「もちろん。約束する」

一条さんはそう力強く頷くと、そつと指で三枚のカードを撫でたのだった。

その後、ペアを変えて周回したり、誰が一番早く海底洞窟を抜けられるかなどを競っていると、ちょうど昼時となった。

「さすがに腹減って来たなあ。昼どうする？」

神道が腹をさすりながらそう言うと、小野が答えた。

「そつやなあ、男女で分かれてジャンケンして、男で負けたやつが買い出し兼昼飯奢り、女子で負けた子がその手伝いってことでええんちゃう？」

「俺は良いけど……」

と頷きつつ、神道を見る。俺と小野は金を持っているから昼飯の奢りくらい問題ないが、テニスに忙しい神道はあまり金を持っていないはず……。

「俺もOK」

と思っていたのだが、思いのほかあっさりと頷く神道。意外とお小遣いをもらっているのか、あるいは男の見栄か。

とにかく男子勢の合意は取れたので女子勢を見ると、あちらも問題なさそうだった。

そつして男女で分かれてジャンケンをした結果……。

「じゃ、行こうか四之宮さん」
「うん」

俺と四之宮さんが買い出しに行くことになった。

「みんなは何が食べたいつて？」

「え〜と、神道がケバブとアクエリで、小野がおにぎりと焼きそばとたこ焼きとポテトハンバーガー……ってあのデブ食いすぎだろ」

皆から預かったリクエストの書かれた紙を読み、俺は悪態をついた。

あのデブ、俺が金持つてることを知っているせいか、こういう時に遠慮がない。

「しょうがない、何往復するしかないか」

「だね。ま、小野のは後回しで良いっしょ」

「完全に同意」

俺たちは頷くと、フードコートへと並んで歩きだした。

「うは〜、やっぱプールから上がるとアッチィね〜」

「確かに、もう肌が乾いて来たもんなあ」

燦燦と照らすお天道様を見上げ、二人で愚痴る。

プールから上がってまだ数分も経っていないのに、身体はすでに乾きつつあった。

ある意味絶好のプール日和ではあったが、さすがに日差しがうつとうしかった。

「でも、アレだね。去年の今頃は、マロとこんな風にプールに来る

ようになるなんて想像もしてなかったよ」

「確かに。……俺にとって四之宮さんたちは完全に高嶺の花ってか、雲の上の人だったもんなあ」

「プツ、なにそれ」

俺の言葉にクスクスと笑う四之宮さん。

「いやいや、マジで。俺なんか、四之宮さんたちと言葉も交わすなんて恐れ多いって感じだったから」

「ふうん、変なの。部活やバイト先と違って、みんな同い年で、みんな学生じゃん。同じクラスなんだから」

「だよなあ……今となっちゃ俺もそう思えるんだけど、当時は違ってたんだよ」

不思議そうに小首を傾げて言う四之宮さんに、しみじみと頷く。

学校という子供だけの世界を半歩抜け出し、少しだけ大人の社会に出たことで、俺が思っていたよりもクラスメイト同士の間で差なんてないと気付けたが……当時の俺にとってクラスカーストによる差はとてつもなく大きなものだったのだ。

とりわけ、努力ではどうすることもできない容姿の差は、俺にとって絶対の差であった。

「……そっか。よくわかんないけどサ」

そう言って四之宮さんはスツと俺の手を握ってきた。

驚く俺に、彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべて言う。

「でも今はこうして隣で並んでるんだし、それで良いんじゃない？」
「……だね」

俺たちはそのままなんとなく手を繋いだまま歩き出した。

見上げた空はどこまでも高く、爽やかな風が肌を撫でるように通り過ぎていく。

夏休みはまだ十八日目。まだまだ夏は続く。

第十六話 夏はまだまだ続く（後書き）

【Tips】ギフトカード

カードにも、向き不向きや才能と言ったものが存在する。

同じ種族のカードであっても、その容姿や性格が異なってくるように、その才能にも大きな差が存在する。

カードの才能は、スキルの覚えやすさや後天スキルの最大習得数などに影響を及ぼし、その中でも天才としか言いようのないカードをギフトカードと呼ぶ。

イライザやメイドマスターのシルキーもまた、そうしたギフトカードカードの一枚である。

ギフトカードや高い才能を持つカードは、外見やステータスから見抜くことはできないが、ギフトカードの特徴として最初からレアな後天スキルを持っていることが多い。

メイドマスターのシルキーなどはこのタイプであるが、往々にして真なる天才……『努力の天才』とは、そう言ったわかりやすい特徴を持たないモノである。

PS：この小説を面白いと思ってくださったなら の方にあるツイッターの方もよろしくお願いします（・・・）

【Tips】 パーソナルリンク

冒険者が自力で発見、開発したオリジナルのリンク。その大半は、国や軍によって既に発見済みか既存のシークレットリンクの劣化品に過ぎないモノも多いが、中には完全オリジナルの優れたモノも存在する。

パーソナルリンクは、その発見者にとっても切り札のため、大半は独占され秘匿されているが、中には仲間内で積極的に教え合っているチームも存在する。

【Tips】 迷宮の初回踏破報酬

迷宮には初回限定ボーナスが存在し、初回踏破に限り主のドロップ率が千倍となりガツカリ箱の中身も豪華になる…… という噂。

真偽のほどは定かではないが、迷宮が実質スラム街や犯罪者の巢窟となつている発展途上国であっても、現れたばかりの迷宮には軍を派遣し封鎖しているため、それなりに信憑性が高い。

その一方で、噂が本当ならばAランクカードが世界で数えるほどしかドロップしていないのはおかしい、という意見も存在する。

【Tips】 特殊型迷宮

ゲートの先に異空間が存在する通常の迷宮と異なり、元々存在していた土地と建造物を取り込んで迷宮化する迷宮の総称。別名、試練の迷宮。

特殊型迷宮の特徴として、道中にモンスターや罠が存在せず、主

が一体（一枠）しか出現しないというモノがある。その分、主は通常の迷宮よりも大幅に強化されている。

また、外観は普通だが、一步中に踏み込むと内部が非常に拡張されているケースも多い。東京ドームダンジョンなども、内部に球場がいくつも存在しており、それらは闘技場へと改築され番組ごとに一つの闘技場を所有し毎日のように試合が行われている。

【Tips】カードの属性

カードの種族にはそれぞれ属性が存在する。

属性はスキルの対象先となるだけではなく、それ自体がステータスに影響している。

そのため、同じ戦闘力であっても属性が多い方がステータスや状態異常耐性などが高くなる傾向にあるが、同時に属性を対象としたスキルに対する弱点を抱えることにもなる。

またマスターによって、相性の良いカードの属性というモノも存在する。

【Tips】人工魔道具と純正魔道具

魔道具には、人類が生み出した人工魔道具と、迷宮から生み出された純正魔道具の二種類が存在する。

両者の違いは、グレムリンなどの機械破壊によって破壊されるか否かである。

人工魔道具は、その多くが機械によって制御されているため、機械破壊によって機能を破壊されてしまうが、純正魔道具はどれほど複雑な構造であっても機械破壊で破壊されることはない。

ただし、人工魔道具であっても純正魔道具をただ加工しただけの魔道具は、機械破壊によって破壊されない。

例：ポーション系の魔道具など。

【Tips】二体一对スキル

一枠で二枚のカードを召喚可能となるスキル。召喚されたカードは、生命力が共有され、二対分のダメージを喰らわない限りロストしない。反面、一体に二体分のダメージが入ると二枚ともロストしてしまうこともある。

二体一对型スキルを持つカードは、二枚揃った時にのみ使用可能となるスキルを持つことが多く、その性能はワンランク上のカードのスキルにも勝るとも劣らない。

上位スキルの存在も確認されている。

【Tips】安全地帯作成スキル

本来迷宮の限られた場所にしか存在しないはずの安全地帯を作り出すことができる、世界有数のレアスキル。本来はちょっと便利程度の能力のはずなのだが、人類の無知によりAランク迷宮の安全地帯が消滅してしまった今、その価値が非常に高騰してしまっている。このスキルで生み出された疑似安全地帯は、転移先の対象とはならないが、これはそもそも安全地帯と転移先の座標が厳密には別物であるためである。

【Tips】マロ(犬)

今年で十六歳になる柴犬。定期的に犬用ポジションを与えられているためか、長生きしている。一条かおりとは生まれた時から付き合いであり、彼女への忠誠心は人一倍高い。チンチンを初め、多彩な芸を熟す。巨乳好き。

【TIPS】恋愛ADV『モブ高生の俺でも冒険者になればリア充

になれますか？』

マロたちの世界の、千個くらい隣の世界で売られているかもしれないギャルゲー。

ストーリー自体は、『平凡な高校生の主人公が、冒険者活動を通じてクラスや部活の女の子たちと仲良くなり、徐々にリア充となっていく、』というオーソドックスなもののだが、このゲーム独自のシステムとして『座敷童システム』という一風変わったシステムを採用している。

ゲームの流れとしては、闘技場で試合をすることでクラスのヒロインの好感度を上げ、迷宮に潜る事で冒険者部の後輩たちからの好感度が上がるという仕組みとなっているのだが――ヒロインの好感度をいくら上げてもヒロインの個別ルートに行くことはできない。

これは、ゲーム内において主人公は本来ヒロインたちと結ばれる運命にないモブキャラであり、相棒である座敷童が運命を操作しヒロインとのイベントを起こすことでようやくヒロインと結ばれることが出来る、という設定だからである。

そのため、個別ルートに進むためにはヒロインからの好感度よりも『相棒である座敷童からのヒロインへの好感度』が重要となっており、仮にヒロインの好感度がMAXでも座敷童が『コイツとくっついても幸せになれない』と判断した場合、個別ルートに進むことすらできない……というシステムとなっている。

なお、攻略サイトを見ずにプレイした場合、90%以上の確率で座敷童エンドとなってしまう模様。

Q：牛……特定のヒロインの影が薄く、イベントが起こらないのですが……。

A：座敷童ちゃんからのヒロインへの好感度が低いのかもかもしれません。もっと座敷童ちゃんとのイベントを起こして、ヒロインへの

好感度を上げましょう。

Q：ヒロインのイベを起こすために座敷童ちゃんを選んでいたら座敷童ちゃんエンドになってしまうのですが……これはバグでは？

A：仕様です。このゲームでは、座敷童ちゃんと結ばれるのが一番幸福になれるという設定なので、特に意識せずにプレイしていると高確率で座敷童ちゃんエンドとなります。ヒロインのイベが発生したら逃さずにイベをこなしましょう。

Q：ヒロインの個別ルートに入れたのは良いのですが、好感度が足りなくてバッドエンドになってしまったのですが……。

A：それはバッドエンドではなく座敷童ちゃんエンドの一つです。座敷童ちゃんエンドは、各ヒロインの個別ルートに一つずつと、メインに5つの十以上あります。なお、各ヒロインのエンドは一つずつです。

Q：結局、どうすればヒロインを攻略できるのですか？

A：頑張りましょう。

あくまで遙か遠い平行世界で売られているかもしれないだけのゲームの話なので、本編には関係ありません。

【Tips】サマナー

第一次アンゴルモアの際、偶然にもカードを所持しており、モンスターに襲われる中でその使い方にたどり着いた者たち。

彼らの存在が、今の冒険者社会を作り上げたと言っても過言ではない。

サマナーの大半は、モンスターに襲われる人々を保護するために

動いたが、中には自らを選ばれし者と勘違いし、自らの勢力を作り上げることに躍起になる者や、欲望の赴くままに力を振るう者たちも少数存在したという。

【Tips】カードのランクと初期戦闘力

カードのランクは、大きく分けて六段階に分けられている。しかしこれは、カード自体に記載されているモノではなく、人間側が勝手に初期戦闘力と出現する階層で大雑把に分類したもの。

そのため、スキルを鑑みればワンランク上でもおかしくないカードや、そのランクにしては弱いと評価されるカードも存在する。

A・1000以上

B・500以上999以下

C・200以上499以下

D・100以上199以下

E・50以上99以下

F・49以下

【Tips】マルチシンクロ

シンクロリンクの応用で、複数枚同時にシンクロする技術。一つのことにとことん集中するフルシンクロと異なり、マルチシンクロは同時並行的な作業を要求される。

書道で例えるなら、シンクロ率の高さが字の上手さならば、マルチシンクロは両手で違う字を書いていく技術である。

男性はフルシンクロ、女性はマルチシンクロの方が得意な傾向がある。

【Tips】先天属性と後天属性

冒険者には、それぞれ得意なカードの属性が存在する。これは、リンクが心を繋ぐ技術であるため、マスターの体質や嗜好が影響してしまうためである。

このうち、体質などの生まれつきの理由で得意となる属性を先天属性。個人的嗜好や特定のカードの使い込みにとってその属性が得意になっていくことを、後天属性と言う。

先天属性と後天属性は、リンクのしやすさやカードの育成などに影響し、前者は変えることができないが、後者は嗜好の変化や使い込みなどによって変わる（変わってしまう）こともある。

このマスターの得意属性を極めた先にある、マスター固有のリンクも存在する。

【Tips】迷宮内のトイレ事情

迷宮内におけるゴミなどは、基本的に人間などが片付けられない限り消えることはない。そのため、ゴミなどは冒険者自身が持ち帰るのがマナーとなっているが、中にはそうもいかないものもある。つまり、排泄物である。

各階層の安全地帯には、自衛隊が迷宮を調査した際に残した仮設トイレが設置され、これは魔道具の効果により汚物を瞬間浄化してくれる優れものであるが、安全地帯以外の場所でトイレをする際には排泄物は冒険者自身が処理しなくてはならない。

アマチュア冒険者の多くは、安全地帯まで我慢するか、最悪地面を掘り返して埋めるなどする場合もあるが、持ち運び式の簡易トイレを携帯するのが一応のマナーとなっている。

金銭的に余裕のあるプロ、セミプロクラスの冒険者となるとカード化した個室トイレを持ち歩く者がほとんどとなる。

なお、余談ではあるが海外の迷宮は安全地帯にトイレを仮設していないことが多く、その衛生状態は控え目に言って地獄である。

【Tips】フィールド改変魔道具

本来不変であるはずの迷宮の環境を変えることができる魔道具。迷宮内のモンスターは、その環境で万全の能力を発揮できるモノが生み出されるため、雨を晴れに、夜を昼にするだけでかなり有利に戦うことが可能となる。

中には陸を海へ、砂漠を森に変える物すら存在し、それだけでフィールド内のモンスターを全滅させることすら可能。

フィールド改変は、高ランク迷宮になるほど需要が増していくため、どれも非常に高値で取引されている。

【Tips】エメラルドタブレット

魔道具の開発、販売で国内最大のシェアを持つ大企業。今回マロがパックで当てた人工魔道具の数々はそのほぼすべてがこの会社の製品。魔道具のみならず、様々な冒険者グッズも販売している。

『世界をより素晴らしく』をモットーに生活に密着した魔道具造りを目指しており、人々からの信用信頼も高いが、裏では色々と黒い噂も絶えない。

以前から政府と秘密裏に協力し、機械破壊されない魔道具の開発に取り組んできたが、この度その集大成とも呼べるカードギアを発表した。

このレースは、その広告を兼ねたものでもある。

【Tips】ネイティブカード

その国や地域が発祥で、他国に比べて性能が高い種族のカードを、ネイティブカードと呼ぶ。

ネイティブカードは戦闘力がワンランクからツーランク高いだけではなく、そのスキルも他国のカードと比べて遙かに性能が高い。たとえば、国外産のクーシーが気配遮断、良くて透明化のスキルしか持たないのに対し、本場アイルランド産のクーシーは、妖精を連れて自在に妖精郷（位相の異なった隣の次元）へと出入りすることが出来る異空間移動スキルを持つ。

これはクーシーという存在に対するその地の人々の『理解』と『親和性』に対する差によるものである……と、主張する研究者もいる。

【Tips】モンコ口の放送

モンコ口の試合は、まずネット上でリアルタイムの中継が行われた後、エンターテインメント風に編集されてTV番組として放送されるのが一般的な流れである。

ネット中継を行うのは、主にギャンブルのためであり、観客たちは試合前から試合終了直前までリアルタイムで変化するオッズを見ながらいつでも札券（モンコ口版の馬券のような物）を購入することが出来る。オッズは試合前の物が最も控除率が低く、試合が進むにつれて予想がしやすくなるため控除率が高くなっていく。

普段マロたち学生が言うモンコ口の放送は、TV放送の方。

【Tips】特殊型迷宮の主

特殊型迷宮の主は、通常の迷宮と異なり、迷宮のランクよりツーランク上のモンスターが出現する。

この主は、挑戦者の召喚しているカードの後天スキルを一つずつコピーする能力を持ち、途中でカードを入れ替えた場合であっても、前のカードの後天スキルは破棄されず、次のカードの後天スキルが新たに加わる。

また、出現する主は、その冒険者の思考を読み取り、相性の悪い

モンスターが選ばれる。

この性質からか、特殊型迷宮の主には絶対に一人でしか挑むことができない。

以上の事から、特殊型迷宮は別名『試練の迷宮』とも呼ばれ、四ツ星昇格のための実技試験の一つにもなっている。

【Tips】二相女神

二相女神や三相女神と呼ばれるスキルは、二体一对型スキルの上位スキルである。

二体一对型スキルがもう一枚のカードが場に存在しなくては無意味なのに対し、二相女神は場にもう一枚のカードがなくとも固有のスキルが使え、さらにはもう一枚のカードへと変身が可能と、条件が緩和されている。

だが、当然そのカードの真価が発揮されるのは二枚揃った時であり、生命力の共有に加え、

『魔力や後天スキルの共有』や『使用回数制限があるスキルの回数増加と回数共有』など、様々な恩恵を持つ。

その分一枚だけの時の性能は他のBランクカードに劣る傾向があり、他のカードに比べて若干値段は低くなる。

【Tips】ギフトカード

カードにも、向き不向きや才能と言ったものが存在する。

同じ種族のカードであっても、その容姿や性格が異なってくるように、その才能にも強い差が存在する。

カードの才能は、スキルの覚えやすさや後天スキルの最大習得数などに影響を及ぼし、その中でも天才としか言いようのないカードをギフトカードと呼ぶ。

イライザやメイドマスターのシルキーもまた、そうしたギフト

ドカードの一枚である。

ギフテッドカードや高い才能を持つカードは、外見やステータスから見抜くことはできないが、ギフテッドカードの特徴として最初からレアな後天スキルを持っていることが多い。

メイドマスターのシルキーなどはこのタイプであるが、往々にして真なる天才とはそう言ったわかりやすい特徴を持たないモノである。

〈三章終了時点〉

【種族】座敷童（蓮華）

【戦闘力】1500（MAX！）（吉祥天に霊格再帰後は、2300まで向上）

・以下、変化なしのため割愛。

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】840（MAX！）

【先天技能】

- ・ 膏血を絞る
- ・ 夜の怪物
- ・ 中等攻撃魔法

【後天技能】

・ 絶対服従

・ 多芸：新米メイド（NEW！）、演奏、畏解除、武術を内包する。

（新米メイド：メイドとして必要な技能を最低限収めている。たまに失敗してしまうことも。特定行動時、ランダムで弱いマイナス補

正。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包)

・フェロモン

・奇襲

・明鏡止水：一切の邪念なく、澄み切った心。精神異常無効、思考能力を大きく向上させる。

・献身の盾

・精密動作

・高等補助魔法

・魔力強化

・詠唱短縮

・直感

・フィンの親指：親指を啜えることで、思考能力を大きく向上させることができる。また両手に癒しの水を生み出すことができる。癒しの水の効能は、ミドルポーション＋リフレッシュと同程度。

【種族】ライカンスロープ(ユウキ)

【戦闘力】1600(MAX!)

・以下、変化なしのため割愛。

・シロとクロに「初等忍術」が追加

【種族】サキユバス(メア)

【戦闘力】690(140UP!) 初期戦闘力450+霊格再

帰分100+成長分140

【先天技能】

・巫山の夢：対象へと強力な眠りの呪いを掛け、夢の中へと入りこみ、精気を吸収する。相手が男性であった場合、初撃に限って耐性のある程度無視する。

・胡蝶の夢：対象に現実と見分けがつかないほどの精巧な幻影を見せる。その精巧さは、脳の錯覚によるダメージが生じるほど。対

象が男性であった場合、相手の理想とする姿へと変身し、強力な魅了の呪いを掛けることができる。

・淫魔の肌：肌の触れた相手に快感を与えるとともに精気を吸収する。フェロモン、娼婦スキルを内包。

（娼婦：娼婦として必要な技能を収めている。淫らな心、性技、演奏、舞踏、礼儀作法を内包）

【後天技能】

- ・小悪魔な心
- ・一途な心
- ・友情連携
- ・中等魔法使い
- ・高等状態異常魔法
- ・人を呪わば穴二つ
- ・生還の心得
- ・霊格再帰
- ・耐性貫通：対象の耐性を確率である程度無視し、攻撃の威力や状態異常の確率を上げることができる。
- ・詠唱短縮

【種族】リリム（メア）

【戦闘力】940（140UP！） 初期戦闘力700 + 霊格再帰分100 + 成長分140

【先天技能】

・夢魔の王女：夢魔を統べる女王の娘であり、分身。眷属であるサキュバスを召喚することができる。無限召喚型。サキュバスの先天的スキルをすべて内包する。

・夢か現か：現実と夢の世界の境界線をあいまいにし、その場にいる者全員の夢と名の付くスキルの効果を向上させる。

・ 死の快樂：粘膜接触した相手に強力な快感を与えるとともに、
精気を吸収、あるいは分け与えることができる。投げキッスで遠隔
攻撃可能。直接接触で、威力二倍。相手が男性であった場合、初撃
に限って耐性を半分ほど無視する。

【後天技能】

- ・ 小悪魔な心
- ・ 一途な心
- ・ 友情連携
- ・ 中等魔法使い
- ・ 高等状態異常魔法
- ・ 高等補助魔法
- ・ 人を呪わば穴二つ
- ・ 生還の心得
- ・ 霊格再帰
- ・ 耐性貫通
- ・ 詠唱短縮

【種族】サキユバス

【戦闘力】 360

【先天技能】

- ・ 巫山の夢
- ・ 胡蝶の夢
- ・ 淫魔の肌

【後天技能】

・ 下位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキル
を持たず、成長もしない。下位眷属体は自我を持たず、オリジナ
ルの初期戦闘力の8割ほどの力しか持たない。

【種族】橋姫（鈴鹿）

【戦闘力】900（MAX！）

・以下、変化なしのため割愛。

【種族】ドラゴネット

【戦闘力】340（MAX！）

・以下、変化なしのため割愛。

【種族】アテナ

【戦闘力】950

【先天技能】

・都市と英雄の守護女神：知恵と戦と工芸を司る神であるアテナの権能を使用可能。

・アイギスの護り：ありとあらゆる邪悪や災厄を払う魔除けの盾、アイギスを使用可能。一定時間、自身と仲間たちへ絶対防御を付与し、敵へと石化の呪いをカウンターする。ゼウスのアイギスと異なり雷雲を操る権能は無い代わりに都市の守護神であるアテナの能力故か、疑似的な安全地帯を作成可能。

・英雄への加護：数々の英雄たちを導いてきたアテナの加護。対象に様々な恩恵を与え、さらには自身のスキルを限定的に貸与できる。

・来たれ、勝利の女神よ：従属神であるニケを召喚可能。一日一回、一柱のみ。

・高等魔法使い：高度な魔法をすべて使用可能。

【後天技能】

・ 純潔の誓い：生涯純潔であることを誓っている。男性からの攻撃・状態異常に耐性を持つ。純潔を失うとロスト。復活後はマイナススキルへ変化。

・ 神のプライド：高位の神格としての誇りと傲慢さを持つ。相手を認めぬ限り、人間であるマスターの言うことはまず聞かない。自由行動に対する極めて強いプラス補正。

・ 幼体：何らかの理由から心身ともに幼くなっている。常時、ステータス半減。いくつかのスキルが使用不可。

・ 臆病：戦闘を極めて忌避する。戦闘時、ステータス半減。

【種族】ニケ

【戦闘力】 1200

【先天技能】

・ 勝利の翼：勝利の女神であるニケの権能を使用可能。

・ 月桂樹の冠：ニケが戦いの勝者へと与える栄光の証。対象のステータスを二倍にし、状態異常を一時無効化、汎用スキルを一つラックアップさせる。高等補助魔法を内包。

・ 勝利を捧げよ：戦死した英霊の駆る戦車隊を召喚する。無限召喚型。戦車の戦闘力は、戦闘力300相当。

・ 高等攻撃魔法

【後天技能】

・ 高位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。高位眷属体はオリジナルと遜色ない自我と初期戦闘力の1.5倍の戦闘力を持つ。

【種族】デユラハン

【戦闘力】 800 (MAX!)

【先天技能】

- ・産声は死の始まり：死を告げる妖精による、死の宣告。対象に對し、生命力を吸収する呪いを掛けることができる。
- ・亡者にも鎧：中等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターへと憑依することで、自身の戦闘力の半分を加算させることができ、また自身の後天スキルを共有する（マスターへの装備化の場合はすべての戦闘力とスキルを共有できる）。
- ・静寂の馬車：首なしの黒い馬が引く4頭立ての馬車、コシユタバワーを召喚する。コシユタバワーはカードには存在しないが、Dランク程度の戦闘力を有する。気配遮断、透明化の能力を持つが、水場を渡れないという欠点を持つ。

【後天技能】

- ・運動音痴：戦闘力のわりに妙に動きがとろい。行動全般にマイナス補正。
- ・ドジ：たまに信じられないようなミスを犯す。たとえ美少女でも何度も繰り返されると殺意が湧くレベルのドジ。行動時、ランダムで極めて強いマイナス補正。
- ・不屈の精神：どんな失敗や逆境にもめげない鋼の精神を持つ。やや学習しない傾向アリ。精神異常に対する耐性。逆境時、行動に強いプラス補正。
- ・剣術：刀剣の扱いに特化した武術スキル。武術スキルと効果重複。特定行動時、行動に強いプラス補正。

【種族】シルキー

【戦闘力】240（MAX！）

【先天技能】

- ・中級家妖精：人間の代わりに家事をしてくれる妖精。……が、迷宮内では家などないためまいち使いどころは不明。メイド、高

等家事魔法を内包。

(メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包)

(高等家事魔法：高度な家事魔法を習得している。家事魔法は攻撃能力を持たないが、家の中でできることに不可能はない)

・ 使用人召喚：Eランクモンスター・ブラウニーを召喚する。無限召喚型。

・ 中等状態異常魔法

【後天技能】

・ メイドマスター：メイドに必要な技能を必要以上に極めている。明らかにメイドに必要な技能も極めている。メイドスキルの効果極大向上。パーティー内のメイドスキルを持つ者の行動にプラス補正。メイド、下級収納、秘書、教導、演奏、舞踏、武術、精密動作、庇うスキルを内包する。

(下級収納：物を収納できる内部空間を持つ。下級は押し入れ程度の広さ。収納した物は、カードに戻したり迷宮を出るとその場に放り出されてしまうので注意)

(秘書：マスターの様々な行動をサポートできる。特に戦闘の役に立つわけではないが、一度試すともう欠かせない)

(教導：自身が持つスキルを他者へと教え導くことができる)

・ 従順

・ 諫死：マスターに対し強く失望した際、死んでマスターを諫めようとしてくる。

こちらは、Twitterにて『やまだやまだ@yamada-yamada44』様より頂いたイラストです。

本当にありがとうございます！

水着イラスト集合カラー

このイラストを本編で紹介するためだけに水着イベントを書いたよ
うなもんです。

< i 4 9 7 4 9 0 — 2 1 7 1 1 >

パーカー蓮華

< i 4 9 7 4 9 3 — 2 1 7 1 1 >

スク水蓮華

< i 4 9 7 4 9 1 — 2 1 7 1 1 >

シルキーズ集合

やまだやまださんが未登場のシルキーズを想像で描いてくださっ
たものなので、今後本編で出てきた際、描写が食い違う可能性がゼ
ロではない、と言い切ることができない可能性が微粒子レベルで存
在するかもわかりません。ご了承ください。

左から

1：面従腹背

2：能天気

3：メシマズ

4：守銭奴

5：杓子定規

6：怠け者

7：メイドマスター

8：ドジ

9：無愛嬌

10：忘れんぼ

と勝手に設定しました。

< i 5 0 2 2 2 0 — 2 1 7 1 1 >

七夕

< i 5 6 6 5 6 3 — 2 1 7 1 1 >

コミカライズ記念

< i 5 7 3 3 6 2 — 2 1 7 1 1 >

こちらは、Twitterにて『胃弱@Orw | iggywi』
様より頂いたイラストです。

本当にありがとうございます！

織部の女郎蜘蛛

エロい！ デカイ！

< i 5 0 2 2 2 1 — 2 1 7 1 1 >

TIPSまとめ4 イラストあり(後書き)

PS:この小説を面白いと思ってくださったなら
の方にあるツイッターの方もよろしくお願ひします〜)・・・(

【コミカライズ記念】掲示板ネタ・学生トーナメント（前書き）

モブ高生、コミカライズします！

本日7月16日より、コミックノヴァ様から連載スタートです。

作画はジャギ先生となります。

よろしく願いします！

コミカライズ記念に、第一章の時希望が多かった掲示板ネタとかマロのTwitterがどんな感じなのかを自分なりに書いてみました。

時系列は、学生トーナメントらへんとなります。

【コミカライズ記念】掲示板ネタ・学生トーナメント

「そろそろか……」

時刻は18時55分。スマホで時間を確認した小野弘之おのひろゆきは、ポテチやポップコーンなどのお菓子の袋と2リットルのコーラを用意すると、自室へと向かった。

勉強机の上に載ったノートパソコンの電源を付け、スマホを片手に、TVの電源も付ける。

静寂に満ちていた部屋がTVからの音声で一気になぎやかになった。

『――迷宮が現れ二十年。現代の文化は迷宮と共に発展してきた。その中で最も人気のあるコンテンツ、モンスターコロシウム。数多くの血を吸ってきたこの現代の闘技場に、今宵、学生たちが挑む！プロの卵たち、クリスマス特番、学生トーナメント開幕です！』

それを見た小野は小さく口の端を吊り上げ、ノートパソコンのアイコンをダブルクリックした。

それはとある匿名掲示板の専用ブラウザだった。

そこから、その番組の実況をしている板を開く。

【プロの卵の卵】学生トーナメント雑談スレ【TV番組の生贄】

46：名無しの冒険者さん

人いねえなー

クリスマス特番なのに過疎ってる

47：名無しの冒険者さん

クリスマスだからみんなデートにでも行ってるんだろ

49：名無しの冒険者さん

>>47

やめろ

やめろ……

50：名無しの冒険者さん

つか、そもそもグラディエーターのクリスマス特番の方にみんな行ってるんじゃないね？

所詮プロの卵たちは裏番組よ

51：名無しの冒険者さん

結局、何人くらい集まったん？

53：名無しの冒険者さん

>>51

総数68人

応募はもつといたみたいだけど、直前で大分日和った模様

54：名無しの冒険者さん

つてことは、4人余るのか

57：名無しの冒険者さん

番組のHP見る限り、一回戦は34組。二回戦は17組、三回戦は一人をシードにして、8組でまずは試合

勝ち残った8人でくじをひいて、ハズレを引いた奴がシードと戦

ってベスト8を決めるらしい

59：名無しの冒険者さん
ハズレを引いたら不利だな。でも予選を行うほど人数集まってないし、しょうがねえな

60：名無しの冒険者さん
そもそも、企画が無謀過ぎんだよ
セミプロでもない学生ばっか集めてトーナメントとかよく苦情こなかったなってレベル

61：名無しの冒険者さん
学生とは言え冒険者だろ？
むしろ迷宮より安全じゃね？

62：名無しの冒険者さん
命の危険と言う意味ならそうだけどカードのロストの可能性は迷宮よりもよっぽど高いだろ

63：名無しの冒険者さん
高校生以下の部門なんてほとんど1か2だろ？
虎の子のDランクカードをロストしたら廃業確定だな

64：名無しの冒険者さん
親の金で冒険者になった糞ガキどもがカードを失って泣き崩れる瞬間楽しみ

66：名無しの冒険者さん
>>64
わかる

こんな裏番組を見てるのなんてそれが見ただけだからなw

「ま、そんなもんか」

小野はここまでの掲示板の流れを見て小さく苦笑した。

表番組のグラディエーターの方では、総勢十名ものプロ冒険者たちがBランクカードを使いロストするまで戦うデスマッチを行うということで、だいぶ前からネット上で話題になっていた。

そのインパクトに対抗するために、前代未聞の高校生以下の学生トーナメントを開いたのだろうが……どうにも反応は良くなかった。未成年が殺し合いというのは興味が惹かれるが、所詮はテクニクもないアマチュア。しかもしょぼいカードばかりとあっては、滅多に見れないBランクカードでのサドンデスの方に注目が行くのはある種当然のことだろう。

世論の流れを確認しつつ、小野はスマホのSNSアプリを開いた。クラスメイト達のSNSグループでは、盛んに学生トーナメントについての発言がやり取りされている。

実際に自分の知人が出るかどうか、ネットとの熱の違いだろう。話題の中心は、参加を表明している北川歌麿がどこまで行くか。学生レベルの可愛いらしい賭けも行われており、一番人気は二回戦負け、二番人気は一回戦負け、三番人気が三回戦負けで、大穴がベスト4入りであった。準優勝以上の予想はない。

それに苦笑しつつ、小野はそこに南山の名前がないことを再確認した。

どうやら、南山の参加はみんなに隠し通せているようだ。

小野は、クラスメイト達には内緒でこっそりと南山を学生トーナメントへと送り込んでいた。

それは北川の活躍を阻止するため……ではない。むしろ本命は南山の廃業を狙ってのことだった。

小野は、南山のことが嫌いだった。というよりも、小野は大体のクラスメイト達のが好きではなかった。

小野の価値観は至ってシンプル。面白い奴が強い、である。学校生活で重視される要素は、概ね4つ。容姿、成績、運動神経、コミュニケーション能力である。

だが、このうち本当の意味で人生の役に立つものはどれほどあるだろうか。

容姿。確かに重要だ。恋愛から始まり、普段の人間関係においても容姿がもたらす第一印象は密接にかかわってくる。

……しかし、容姿は衰える。十代、二十代をピークとしそれ以降は上がることはなくひたすらに下がり続ける。

その時、容姿だけで生きてきた人間に、何が残るだろうか。

成績。人生を決定づけるという意味である意味最も重要かもしれない。この国では、良い大学に入れるかどうか、生涯収入を決定づける傾向がある。

だが、学生時代は成績が良かった人間が、いざ社会にでてみれば何の役にも立たないということが多い。

学歴は確かに重要だ。だが、周りが同じレベルの学歴ばかりとなった時、一体自分は何を持っているだろうか？

運動。体はいついかなる時においても資本だ。体力があつて困る時など存在しない。推薦で入れるほどの実績を上げれば、学歴すら手に入れることが出来る。

ところで、この世界でプロスポーツ選手として食っていける人間はどれほどいるだろうか？

プロになれる素質を持つというだけで一握り。しかしそこから大金を掴むことができるのは、さらに一握り。

どこよりも険しい弱肉強食の世界、それがスポーツの世界だ。

小野は考える。

容姿、成績、運動……どれも長い目で見れば人生の一時期的か役に立たない要素だ。

だが、コミュニケーション能力は違う。

生まれてから死ぬまで、コミュニケーション能力は役に立ち続ける。

同じ能力レベルの人間で集団をつくることになるこの現代社会の中で、他に差をつけることができるのは、コミュニケーション能力が高い人間だけだ。

よく、上司に胡麻をするのが上手いやつだけが出世していき、能力があってもコミュニケーション能力がない奴は出世できない……なんていう話を聞くが、そんなもの小野にとっては当たり前な話だった。

そもそも同じ職場にいるという時点で、おおよその能力に差がないことは証明されている。突出した能力があるならば、より上位の環境にいるだろうからだ。

そこで、多少の有能無能を分けたって、所詮はどんぐりの背比べ。ならば、同じ職場の中でコミュニケーション能力が突出した人間が出世していくのは当然のことなのである。

小野はかつて、根暗で友達が一人もいなかった。小学校三年生くらいまでの話だ。

それが変わったのは、小学四年生の頃。父親の仕事の都合で、大阪に引っ越したのがきっかけだった。

小野の通っていた小学校だけの話なのかもしれないが、東京の小学校では話題の中心はアニメや漫画、ＴＶドラマだったのに対し、大阪の小学校ではお笑い番組が話題の中心だった。

転校生だった小野は、今度こそ友達を作ろうと、周りに馴染むた

めお笑い番組を見まくった。

が、結局小野が大阪の小学校で友達を作ることはなかった。

大阪に来てわずか一か月で、再び東京に引っ越すことになったからだ。

最初に通っていた小学校とはまた別の小学校に引っ越した小野を待っていたのは、『大阪からの転校生』というレッテルであった。

『大阪から来たんだから面白いことの一つでも言え』という周囲の圧力に対し、小野は苦し紛れに大阪で人気だったローカルのお笑い番組のネタを披露した。

それが、偶然にもバカ受けした。

他人に笑われるのではなく、他人を笑わす。

小野の人生で初めての成功体験であり、忘れられない思い出となった。

一気にクラスの中心人物となった小野は、それからというもの面白い面白くないかで物事を判断するようになった。

面白い、というのは別にユーモアのセンスがある奴だけを指すわけではない。

小野の中で面白い奴と言うのは、どんな方向でも良いから周りから突き抜けた何かを持つ者のことだ。

良い意味で変わり者。それが小野の定義する面白い奴。

例えば、野球部の高橋などは朝から晩まで泥だらけになってボールを追いかけているのを、本気で面白いと思っている変わり者だ。プロを目指しているわけではなく、みんなにチヤホヤされるのを目的としているわけではなく、野球が本当に楽しいからやっている。実に、面白い人間である。

四之宮楓や牛倉静歌なども、あれで結構変わっている。

逆にナリキンや南山のような奴は、小野にとって何の価値も見いだせない人間であった。

何のオリジナリティもないファッションに身を固め、他者を蹴落とすことで相対的に自分の地位を上げようとするナリキン。

自身にはなんら特別なものはないにもかかわらず、冒険者という肩書だけで周りより自分が上だと思いついてる南山。

……なんもおもんない。それが彼らに対する小野の本音。

だから、消えてもらうことにした。

南山の実力はよく理解している。高価な眷属召喚型のカードで固めた、ただ数で押すだけの稚拙な戦法。それでごり押しして攻略していくのが奴の迷宮探索だ。

だが、それが通用するのは所詮ランク迷宮がせいぜいで、夏休みに挑んだ昇格試験では違うこの体で逃げ出してきたというのを小野は知っていた。

そんなアイツが、まがりなりにも二ツ星の北川に勝てるわけがない、というのが小野の見立てだった。

南山と北川が、大会でうまくぶつかるかどうかは運次第であったが、もし自分が番組側ならば同じ高校の二人を早めにぶつけるだろうな、とは考えていた。

そうなった場合、南山に屈折した想いを抱いているだろう北川は、高確率で南山のカードをロストさせるに違いない。

その際に、運よく同士討ちになってくれれば、小野にとって言うことはなかった。

当初大会に出るつもりはなかった南山を、出場するよう誘導するのは簡単なことだった。

知り合った当初からなぜか覗かせていた北川に対する謎の対抗心、それと小野が冒険者になったことによるカーリスト地位に対する危機感、最後に牛倉静歌に対する仄かな下心……。

それをほんのちよつと煽ってやるだけで、南山は大会への出場を表明した。

クラスメイトたちにそれを隠すように言ったのは、小野が南山を誘導したと思われなくなかったからだ。

南山は、北川に対しての異常な敵対心から彼の優勝を妨害するために大会に出場し……自滅した。

そういう風にみんなが察してくれるのが、ベストだった。

問題は、短期間で二ツ星まで上がり、イレギュラーエンカウントの討伐実績まである北川がどの程度まで行くか不明なことだったが……。

「まあ、勝ち進んだらその時はその時か。いやいや、北川君はイレギュラーエンカウントとも戦ったことあるんやし、意外と優勝したりするかもわからんで、と……」

小野は、SNS上で北川が勝ち進んだ時のために彼を持ち上げる為の布石と、逆に早々に負けた際にこき下ろすための布石、その両方を巧妙に撒きつつTV画面へと目を向けた。

そこには、数十組の対戦者の中でも、より選りすぐりのシーンを集めたのだろう、稚拙ながらも真剣さの伝わってくる戦いが映し出されていた。

101：名無しの冒険者さん

所詮はセミプロ未満の学生冒険者と思ってたけど、結構見ごたえあるな

103：名無しの冒険者さん

スポンサーのついてるプロと違って、負けてもカードの保証がないからな

ある意味プロより真剣さが伝わってくるわ

106：名無しの冒険者さん

カードをロストされた選手が、試合終了後に殴りかかったのはさすがに笑ったw

108：名無しの冒険者さん

自分のカードを全滅させられた負け選手と、勝ったはいいけど主力のDランクカードをロストした選手の互いに呆然とした顔とかw
何度見ても笑えるwww

109：名無しの冒険者さん

絶望、というタイトルで絵にしても良いくらいだなw

113：名無しの冒険者さん

JK冒険者が可愛いケットシーをロストされて泣き崩れるシーンを見た時

なんていうか……その…下品なんです……フフ……おつき……しちゃいましたね……

116：名無しの冒険者さん

>>113

「ぼ」を「お」に変えてもNGだからw
でもわかる

117：名無しの冒険者さん

モンコロの質としてはグレイエーターの方が圧倒的に上だけど
愉悦部としては断然こっちの方が上だな

120：名無しの冒険者さん

質は確かにあっちの方が上かもしれないけど熱はこっちの方が上
じゃね？

121：名無しの冒険者さん
負けた選手もみんな熱いわ

122：名無しの冒険者さん
てか、意外と名付けしてる奴ら多いんだな

124：名無しの冒険者さん
確かに

名づけをすると資産価値を失うから、ペット感覚での名づけは出来る限り避けるべきってのが、冒険者の認識じゃなかつけ？

125：名無しの冒険者さん
それはあくまでカードの転売で稼いでるグラディエーターの主張であつて

アマチュアではまた違ってくるんだろう

126：名無しの冒険者さん
俺も女の子カードに入れたら絶対名付けする自覚あるわ

128：名無しの冒険者さん
>>126

やめてくれ……貴重な女の子カードがまた独占されてしまう……

130：名無しの冒険者さん
女の子カードへの名付けが価格沸騰の要因の一つではあるからな

133：名無しの冒険者さん
お？ 次、同じ高校同士か

134：名無しの冒険者さん

同じ高校同士で初戦とかWWW
番組、確実に仕組んだろWWW

「お？ ついにか！」

小野は、TVから聞こえてきた選手たちの名前に、PCからTV
へと視線を移した。

そこには、南山と北川の冴えない顔が二つ並んでいた。
手元のスマホからSNSを見ると、そこには南山の参加を知らな
かったクラスメイトたちの驚きのコメントが土石流のように流れて
いた。

小野は、このことを知っていたのかというクラスメイトたちの問
いに対し、まったく知らなかったと惚けつつ、自身の策略が成った
ことに口端を吊り上げた。

「南山くん、どうやら負けてしまったみたいやなあ。短い間やった
けど、お世話になりました、と」

大会初日から数日たった今日にいたっても、南山から小野に対し
て連絡は来ていない。

彼の性格上、もし北川と当たって勝ったなら、絶対に小野には自
慢してくるはずだ。

にもかかわらずそれが無いということは、連絡できる精神状態で
はないということ。

それは、南山の敗北を意味していた。

「とりあえず、南山のカーストップ脱落と、北川くんのカースト
トップ内定は確定と」

小野はラインに北川有利のコメントを書き込んだ。
裏事情を知るが故の勝敗予想であったが、それを知らないクラス
メイト達は冒険者視点からの勝敗予想と見ることだろう。

140：名無しの冒険者さん

同じ高校でクラスメイトで、苗字が北と南ww
出来過ぎだなw

141：名無しの冒険者さん

これ学校でも絶対ライバル関係だろw
お互いにめっちゃ敵意むき出しじゃんw

142：名無しの冒険者さん

これは面白い戦いが見れそう

145：名無しの冒険者さん

召喚した

南はボアオークとハイコボルト×2か
典型的な増殖デッキだな

147：名無しの冒険者さん

プロだと速攻で潰されて終わりだけど

泥試合の多い学生トーナメントではアリな戦略じゃね？

148：名無しの冒険者さん

北はグーラーとザントマンと……あれ？ いない？

150：名無しの冒険者さん

たぶん気配を消してると思われ

151：名無しの冒険者さん

2にしては北の方、カードのランク低いな
こんなもん？ それとも見えないのがD？

153：名無しの冒険者さん

温存してるんじゃない？

まあ 2ならDランクカード一枚でもイケルっちゃあイケルけど

154：名無しの冒険者さん

もし温存ならヘタ打ったな

Dランクカードでも上位のボアオークとグーラーじゃあ勝負にな
らん

156：名無しの冒険者さん

あ……

157：名無しの冒険者さん

おお！ 速攻眠らされたwww

158：名無しの冒険者さん

ちょw えげつねえw

160：名無しの冒険者さん

あー、これは 2あるあるだわwww

161：名無しの冒険者さん

ザントマンとナイトメアのクソコンビのトラウマ蘇るわ

163：名無しの冒険者さん

お？ 冒険者の方かな？
どういつ絡繰り？

166：名無しの冒険者さん

>>163

Eランク迷宮で出るとウザい鉄板の組み合わせが、このザントマ
ンとナイトメアのコンビなんだよ

ザントマンで眠らせて、ナイトメアで寝てる間に殺される

南は 1か

状態異常対策もつてなさそうだな〜Fラン迷宮までは必要ないし

168：名無しの冒険者さん

1と 2の経験の差か

169：名無しの冒険者さん

つかこのグーラーも強いな

グーラーってこんな滑らかに動けたっけ？

171：名無しの冒険者さん

それよりも指示なしで動いてる方が気になるわ

これは相当仕込んでるな

172：名無しの冒険者さん

よく見ると、このグーラーさん結構美人

174：名無しの冒険者さん

蓋を開けてみりゃあスルスル勝ったな

175：名無しの冒険者さん

ボアをロストさせなかったのは、クラスメイトの情けか

179：名無しの冒険者さん

なんかこの大会で試合終了後に襲い掛かった奴いたとかSNSに流れてたけど、全然そんな様子ないな

181：名無しの冒険者さん

デマだろ

証拠の動画もなかった奴じゃん

それかさっきの殴りかかった奴を大袈裟に言ってただけか

185：名無しの冒険者さん

仮にそう言った事故が起こったとしても完全に番組側の準備不足
プロ意識のない学生相手のトーナメントなんか開いてるんだから
そういったトラブルに対しては人一倍気を遣っておくべき

186：名無しの冒険者さん

ガキなんだから頭に血が上りやすいだろうしな

「試合後に襲い掛かった……？ まさかな……」

小野の脳裏に一瞬だけ南山の顔が過ったが、すぐに振り払う。
いくらなんでもそこまでバカじゃあないだろう。
しかしそれにしても……。

「北川君、強いなあ」

北川が勝つのは予想通りだった小野だったが、この楽勝っぷりは
些か予想外だった。

南山に冒険者としてのテクニックがないのは知っていたが、持つ

てるカードの強さは別だ。南山のボアオークは、Fランク迷宮では無双と言える戦闘力を誇っていた。

一度お遊びで自分のオークと手合わせしてもらったことがあるが、眷属召喚抜きでも手も足も出なかったほどだ。

それを、同じD×E×Eの組み合わせで、しかもDランクカード最下級のグーラーで倒した。

これは、北川の育成能力の高さを物語っていた。

それに……と小野はかつての教室でのやり取りを思い出す。

あの時、北川は自分のカードを晒すのを嫌がっていた。

四之宮たちのフォローでうやむやになっていたが、あれはおそらく学生レベルでは持てないレアカードを持っていたからだ。

だが、この試合ではごく普通の学生冒険者レベルのカードしか使っていない。

つまり……隠し玉があるということだ。

「これは、ベスト4に届くやもしれんな……」

小野はSNS上での世論誘導を、北川を応援する方向に切り替えることにした。

おそらく北川はこの大会でそこそこの実績を残す可能性が高い。万が一ベスト4まで行った際、自分が敵対している空気だとカーストトップから落ちる危険性がある。

ならば、今の内から小野は北川を応援していたという空気を作るべきだ。

仮に北川がすべてのカードを失っても実力を示した以上ある程度の地位は保障されるだろうから、どう転んでも損はしないはず。

小野がクラスメイト達の世論を操作しているうちにもTV番組は進んでいく。

一回戦が終わり、場面が二回戦へと移ると北川はほとんど出なくなってきた。

見どころの有るシーンが無かったのか、あっさりと消えてしまったのか……。

判断に迷いつつも、ライン上では一貫して北川の味方をし続ける。そうと決めたらブレないのが重要だった。

同時にT w i t t e rでも番組の内容について適当に呟いていると、他のクラスの友人からとあるリツイートが回ってきた。

シユン：これってもしかして北川って奴のT w i t t e rじゃね？

それは、とある新人冒険者の活動日記だった。

ギルドのカードパックで、座敷童とクーシーとグレーラーを一気に当てた幸運な冒険者が、个性的すぎるカードたちに四苦八苦する内容のT w i t t e r。

その中の一体は、確かにあの試合に出ていたグレーラーであった。

……間違いない、これは北川のT w i t t e rアカウントだ。

このタイミングで特定できるとは、ツイてる。

小野はニヤリと笑うと、高速でそれまでの投稿内容を読み込み始めた。

グレてる座敷童のお菓子レビューに、小器用なグレーラーの演奏動画、クーシーのモフモフ動画と多彩なコンテンツがウケてか、なかなかのフォロワーを獲得しているようだった。

適当にいいね！の多かった動画を開いてみる。

『ハイ、今日のお菓子は、ダンジョンマートで独占販売している、死ぬほどうめえ棒です』

北川らしき声が、うめえ棒を映しながら言う。

すると、可愛い子供の声が横から飛び込んできた。

『えー、今日はうめえ棒かよ。ケチってんじゃねーよ』

カメラが移動し、紅い和服を身に纏った小学生くらいの美少女を映し出した。艶のある黒髪をパンキツシュに跳ねさせた、ちよつと眼つきの悪い女の子だ。

『ケチってねーよ。これは限定発売品で、うめえ棒のくせに一本百円もするんだぞ』

『うめえ棒のくせに百円!?!』

「たつか! そんなん出てたんか!」

思わず動画に向かってツッコミを入れてしまう小野。

「ようそんなん買う気になつたな……通常の十倍のうめえ棒とか、どんな味なんや」

北川が座敷童へとうめえ棒を手渡しながら説明する。

『ダンジョンマートの企画部と合同開発した、死ぬほどうめえ棒、マリーアントワネット味だ』

『マリーアントワネット味!? どんな味だよ!』

マジでどんな味だ……。

『まあまあ食ってみろって』

『あ、ああ……』

座敷童が恐る恐るうめえ棒を受け取る。通常の十倍の値段と云うだけあって、やたらキラキラした包装に包まれている。お馴染みのキャラクターもなぜかお姫様のようなドレスを身に纏っていた。

『ん？ この匂いは……』

袋を開けた座敷童が小さく呟く。なるほどね、と呟くと豪快に一口齧る。

小野はいつしか固唾を呑んで、彼女の反応を伺っていた。どうだ……どんな味なんだ？

座敷童がカツと目を見開く。

『う………』

「う？」

『う、うめえええ！ こ、これは！ ケーキ味！ ショートケーキの味だ！ 確かにうめえ棒特有のサクサク感がありながら、しつかりショートケーキの味と風味がする！ ぶっちゃけ、同じ値段のパウンドケーキなんかよりよっぽど美味しい！』

なるほど、マリーアントワネットだからケーキ味ということか、と小野は納得した。

『こりゃあ十倍の値段がするだけあるぜ。マジで死ぬほど美味しい！ おい、イライザお前も食ってみ！』

座敷童は、興奮しながら横に立っていたグーラーへとうめえ棒を勧める。

だがグーラーはすげなくそれを断った。

『いりません』

『あ？ なんでだよ、いいから食ってみろってマジで死ぬほど美味しいからよ』

『だから、いりません』

『なんでだよ！』

『まだ、死ぬわけには、いかないのよ』
『もう死体だろうが……!』

バシンと空の袋を地面へと叩き付ける座敷童。
そこで、動画は終わった。

「フフ」

ちよつと面白かった。全体の流れは北川の仕込みだろうか。
小野は彼の評価を少し上げることにした。

「しかしこれを見る限り北川くんの手持ちはCランクが一枚にDランクが三枚か。組み合わせ次第やけど、これはマジでベスト4入るかもしれへんな」

その小野の予想はアタリ、北川はベスト4へと入った。
ただしその過程については、一回戦以外印象に残らないものだった。

いつの間にか勝ち上がり、ベスト4に入っていたという感じだ。
高校生以下の部は、途中から明らかに神無月というイケメンと、十七夜月という赤毛の美少女に焦点が当たっており、他の選手は大体カットかダイジェストになっていたからだ。

北川が画面に戻ってきたのは、残ったベスト4の選手たちを集めてインタビューを行った時のことだった。

578：名無しの冒険者さん

残った選手が明らかに主人公組とモブに分かれてる件について

580：名無しの冒険者さん

これは……ちよつと残酷すぎますね

583：名無しの冒険者さん

決勝戦は神無月と十七夜月に100万ペリカ

584：名無しの冒険者さん

もうね、苗字からしてフラグが立ってますよ

586：名無しの冒険者さん

これ完全に番組側、この二人が残るように仕組んだろwww

589：名無しの冒険者さん

仕組むまでもなく、コイツラは残ったと思うけどな

カードも実力も（顔も……）違い過ぎる

590：名無しの冒険者さん

神無月は三ツ星冒険者か

セミプロクラスだな

591：名無しの冒険者さん

>>589

顔はやめて差し上げる……

592：名無しの冒険者さん

高校生で三ツ星は……。ベスト4入りは、やる前から決まっていた
ようなもんだな

595：名無しの冒険者さん

とは言え、強すぎるから出るなどとは言えないからな

コイツが出るのを知らなかった他の選手たちは可哀想でしたとい

うことだ

598：名無しの冒険者さん
むしろコイツと当たった選手は幸運だったんじゃない？
一体もロストしてないし
下手に拮抗した奴と当たる方がキツイという事実

599：名無しの冒険者さん
一理ある

601：名無しの冒険者さん
イケメン嫌い
はやくカード全部失ってやめろ

603：名無しの冒険者さん
格下ばっかの大会に出て僕が優勝しますとかうぜー

606：名無しの冒険者さん
出るまで格下ばっかって知らないんだから仕方ねーだろ

607：名無しの冒険者さん
佐藤ユージンwww

608：名無しの冒険者さん
モブなんだから無理すんなw

610：名無しの冒険者さん
ああああ、もう見てらんないよお……
これが共感性羞恥心って奴か……

611：名無しの冒険者さん

アナウンサーも空気読んでさつさと流したな

613：名無しの冒険者さん
アンナちゃん可愛いー

614：名無しの冒険者さん
語尾がツスとか、キャラ立ってんなw

616：名無しの冒険者さん
この苗字ってダンジョンマートの社長の？
って書き込んでるうちに答え出たわ

617：名無しの冒険者さん
あの社長、こんな可愛い娘さんいたのかよ

620：名無しの冒険者さん
知らねえの？ 結構前に超美人のフランス美人と結婚してるって
ことで炎上してたよ

622：名無しの冒険者さん
炎上ww
別に誰と結婚しても良いだろあれだけの金持ちなんだから

625：名無しの冒険者さん
どうみても童貞っぽいのにリア充だったってのが嫉妬を煽ったん
じゃね？w

628：名無しの冒険者さん
最後は北川か
コイツもウタマロってすごい名前だな

630：名無しの冒険者さん
顔はモブだけどアソコはデカそう
ウタマロだけに

631：名無しの冒険者さん
インタビュ―は無難にまとめたな
ユージンから学んだか

633：名無しの冒険者さん
ユージンは犠牲になったのだ……

635：名無しの冒険者さん
さすがにベスト4の賞品だけあってどれも良いカードばっかだな

638：名無しの冒険者さん
どれも最低500万はくだらないな

639：名無しの冒険者さん
誰もヨモツシコメには見向きもしない件ww

642：名無しの冒険者さん
そりゃあネコマタとかシルキーとか並んでる中、それは、ねえ……
……？w

645：名無しの冒険者さん
性能だけはクッソ良いんだけどね
ヨモツシコメ

Dランクでは間違いなく最強で、Cランクとも渡り合えるカード
なお、容姿

646：名無しの冒険者さん
神無月とユージンはさっさと決めたな

649：名無しの冒険者さん
予め決めてたんだろ

650：名無しの冒険者さん
ウタマロとアンナちゃんは迷ってんな

652：名無しの冒険者さん
事前に候補を決めてても実物を目の前にしたら迷うもんよ

654：名無しの冒険者さん
お？ アンナちゃんとウタマロの候補が被った

656：名無しの冒険者さん
候補が被った場合どうなの？

657：名無しの冒険者さん
話し合いで決めるんでしょ

659：名無しの冒険者さん
おお、大会の成績が良い方が勝ち取るとか熱い展開だな

660：名無しの冒険者さん
負けた方も、他に魅力的なカードあるし悪くない提案だな

663：名無しの冒険者さん
これ、番組的に次の試合ウタマロとアンナで組むんじゃない？

665：名無しの冒険者さん

決勝まで二人が残るとは思えないし戦わせないってのはありえないだろうしな

「とりあえずベスト4に残ったんか」

イマイチ盛り上がり欠ける展開ではあったが、結果は結果だ。

全国の高校生クラスの冒険者の中ではトップレベルであることを証明できたのはデカイ。

あとは損失を出来るだけ抑えられれば残りの学校生活も冒険者生活も安泰だろう。

ラインでも皆、クラスメイトがベスト4まで残ったことに興奮しているようだった。

そうして、準決勝が始まった。

顔面偏差値の残酷なまでの差もあって、人気は完全にアンナの勝ちのようであった。

まあ、ハーフの美少女とモブ顔の冴えない男だったら、誰だって美少女の方を応援するというものだ。

両者がモンスターを召喚する。

十七夜月選手のメンバーは、ユニコーンとリビンググアーマー、それにエルフの美少女。

それを見た小野は、思わず「うお、マジか」と呟いてしまった。

ただでさえ高額なエルフ、その女の子カードというのはモンコロですら……いやモンコロだからこそ滅多に見ることのないレアカードだ。

最低価格で一億から、スキルや容姿によってはその何倍もの値段になるという女エルフ。

そんなものを持っている中高生など、全国でも十七夜月選手くらいだろう。

ユニコーンもリビンググアーマーもDランクの中では高額なカードで、さすがダンジョンマートのご令嬢というところであった。

だが、彼女が高額なカードを持っているということはさほど不思議ではない。

小野にとって重要なのは、北川の方のカードであった。

北川が召喚したのは、グレーラーとエンプーサ、それに先ほどのT W i t t e r の動画でも見た座敷童だった。

「もの見事に女の子カードばっかやな」

欲望丸出しなハーレムパーティーに呆れつつも、しかしこれはスゴいな、と小野は唸った。

中高生レベルでDランクの女の子カードを持っているだけでも羨望の対象になるというのに、それを三枚……しかもそのうち一枚はCランク、というのは高校生のレベルを超えていた。

これを一回のカードパックで当てるとは……なんとという幸運。まさに宝くじが当たったようなものだ。

だが、入手手段は問題ではない。他人から羨ましがられるカードを持っている、ということが重要だった。

少なくとも、学校という空間においては……。

この大会でカードを失いさえしなければ、北川の立場は盤石だろう。

「となると、今の立ち位置じゃあ若干不味いな」

小野は、和解したとはいえ一度北川と対立しているところをクラ

スメイト達の前で見せてしまっている。

休み明け、北川が名実ともにカーストトップになった時、それを利用して小野を蹴落とそうとする動きが出る可能性があった。

「今のうちに旗色を明確にしておくべきだな」

小野はそう呟くと、SNS上での工作を開始した。

ぼつと出の奴が一気に活躍し始めると、どうしても嫉妬を募らせたり、邪推をする奴が湧いてくる。その火消しを始めたのだ。

同時に、クラスメイトたちには「みんなで北川を応援しよう」という空気を作り出す。

こうして北川がすんなりとカーストトップとして認められる下地作りをしつつ、成り上がる前から味方をしていた、という実績を積んでいった。

そうこうしているうちに、試合が始まった。

先手を取ったのは……意外にも北川であった。

701：名無しの冒険者さん

おお！？ 状態異常決まった！

702：名無しの冒険者さん

ダイレクト決まった！？

703：名無しの冒険者さん

防いだ！ ってか、アムドてw

705：名無しの冒険者さん

古いなw 今時のガキとか知らないだろw

706：名無しの冒険者さん

北川と座敷童ちゃんも反応してるやんけw

707：名無しの冒険者さん

結構最近の子も知ってるんだな。ってか座敷童ちゃんも読んでるのかw

709：名無しの冒険者さん

最近の復刻ブームに乗って再アニメ化しねーかな

710：名無しの冒険者さん

カードにも漫画読ませるとか、俺的に評価高い

713：名無しの冒険者さん

>>710

わかる

カードを使い捨てにする今の冒険者界隈の風潮嫌い

714：名無しの冒険者さん

北川って一回戦でも眠りの状態異常使ってたな

必勝パターンなのか？

717：名無しの冒険者さん

座敷童は回復魔法と状態異常の確率を上げる典型的なサポートタイプだからな。

エンプーサはデバフタイプで眠ってる相手の特効持ちだし

そういうコンセプトのパーティーなんだろ

719：名無しの冒険者さん

単に女の子カードだけ集めたってわけじゃないわけか

その後、十七夜月選手がイミユニティで状態異常対策を取ると、激しい攻防が交わされ始めた。

リビンググアーマーはグーラーが、エルフは座敷童が、ユニコーンはエンプーサがそれぞれ相手取る形だ。

得意の状態異常を封じられ不利かと思われた北川であったが、思いのほか善戦していた。

特に、グーラーの奮闘が目覚ましい。

リビンググアーマーとグール（グーラー）では、その評価に天と地ほどの差があるが、その理由は低級アンデッドであるグール（グーラー）では自分で高度な判断をできないところにある。

ところが北川のグーラーは、グール（グーラー）とは思えぬほど滑らかな動作で戦闘力が上のはずの相手の攻撃を捌きつつ、脇を抜けてマスターの元へとダイレクトアタックしに行こうとするリビンググアーマーを防ぐ、という臨機応変な対応を見せていた。

これは明らかに心を持つアンデッドの動きであり、アンデッドの自我を目覚めさせるのは並大抵のことではないと言われる中、北川がそこまでグーラーを育成したことを意味していた。

744：名無しの冒険者さん

このグーラーすげえな……

746：名無しの冒険者さん

アンデッドとか無機物系って高度な思考出来ないんじゃないかなかったですか？

748：名無しの冒険者さん

普通は出来ない

つか命令も碌に聞けないし、これは確実に心が芽生えてる動き

751：名無しの冒険者さん
低ランクのアンデッドで心が芽生えるとかあんの？

755：名無しの冒険者さん
不可能ではないけどアンデッドに心系のスキルを覚えさせるのは普通にスキルを覚えさせるよりかなり大変
カードの属性によってスキルの覚えやすさ、覚えにくさがあるから

760：名無しの冒険者さん
心が芽生えるくらい大切に育てたってことが
いいね

766：名無しの冒険者さん
人形とかアンデッドの本来心の無い存在に心が芽生える展開とか

……

大好物です

767：名無しの冒険者さん
よく見ればかなりの美人でスタイルも抜群だし
これならグーラーでも俺イケるわ

……臭いさえなければ

768：名無しの冒険者さん
座敷童ちゃんには漫画とか読ませたりカードに名づけもしてるみたいだし
この北川つてのは育成に力を入れるタイプみたいだな

772：名無しの冒険者さん

今の冒険者界隈の主流じゃないのかもしれないけど俺は好きよ
やっぱ女の子カードユーザーならちゃんと扱ってくれないとね

775：名無しの冒険者さん

女の子カードに名づけされると流動が無くなって個人的には困る
んだよね

価格が高騰する要因だしさ

試合の熱が上がるにつれて、スレの流れも徐々に加速していく。
どうやら表番組のグラディエーターの方から徐々に人が移動して
きているようだった。

ふと、小野は話題の中心が北川ばかりとなっていることに気付い
た。

この試合が始まる前は、十七夜月選手の容姿ばかりが注目されて
いたというのに……。

北川歌麿という、ただの無名の少年の名が、徐々に人々の頭に刻
まれ始めていた。

——先にミスをした方が終わる、緊迫した均衡状態。それを
先に動かしたのは……北川の方だった。

北川が目つぶしの魔道具を地面にたたきつける。

一瞬の閃光。十七夜月選手はそれにリビングアーマーを身に纏う
ことで対処するが、代わりに座敷童の姿を見失う。

姿を隠し、ダイレクトアタックを狙うつもりか。

十七夜月選手は、逆に先手を取って北川へのダイレクトアタック
を行うことで相手の作戦を破綻させることを目論むも、グーラーに
よって防がれてしまう。

そしてその隙を突かれ、状態異常対策の要であったユニコーンを

落とされてしまった。

昏倒したユニコーンに、夢魔が潜り込む。

こうなれば、ユニコーンのロストは時間の問題だろう。

時間制限が発生してしまったことで、勝負の天秤は一気に十七夜の不利へと傾く。

十七夜月選手は短期決戦を狙うも、それこそが北川の狙いだったのだろう。

意識から外してしまったエンプーサからの奇襲により、瞬く間に勝敗がついた。

北川の作戦勝ちだ。

804：名無しの冒険者さん

北川が勝ったか

カードの質的にはアンナちゃんの方が上だったんだけどな

805：名無しの冒険者さん

北川選手の作戦勝ちって感じが

811：名無しの冒険者さん

というよりもアンナちゃんの自滅もやや入ってる感じかな

眼潰しの後、座敷童が姿を消したところでアンナちゃんは無理に攻めに入らず守りに入っておけばよかった

北川選手からのダイレクトアタックを警戒してたみたいだけど

リビングアーマーを装備してるならダイレクトアタックはそんなに警戒する必要もないわけで

座敷童も姿を隠しているうちは積極的に攻撃に参加できないわけなんだから

リビングアーマーを自身の守りに置きつつ堅実に相手のカードを一枚ずつ落としていくべきだった

そのうち形成が不利になったら座敷童ちゃんも姿を現さずをえな
かったはず

820：名無しの冒険者さん

それは結果論だろ

あの時点では北川選手の狙いもわかっていなかったんだから

逆にダイレクトアタックを狙うことで相手の狙いをあぶりだすの
は間違いじゃない

そもそもリビングアーマーの装備化はそんなに防御力高くないか
らな

Cランクカード相手だとヘタするとマスターごと落とされる可能
性も十分ある

まあ確かに落ち着いて考えればもっと上手い手もあったかもしれ
ないがそれは安全なTVの前で考えてる俺らだからできることで、
高校生にあの状況で瞬時に最適解を出せてのは厳しいよ

あれは上手く相手の攻撃を誘ってユニコーンを落とし、さらにそ
れすらも布石にしてエンプーサの存在を相手の意識から外した北川
選手を褒めるべきところだろ

829：名無しの冒険者さん

ああ、そうか……たしかに高校生だもんな、完全に忘れてたわ
普段見てるプロの試合基準で考えてた

そう考えるとむしろ学生レベルとは思えないくらいにレベルたけ
ーな

830：名無しの冒険者さん

次の試合も楽しみになってきた

これまで掲示板の雰囲気は、高校生たちががむしゃらに戦う姿――

—あるいは無様にカードを失う様——を楽しむものだった。

だが北川と十七夜月の戦いが戦術を駆使するものであったためか、スレの雰囲気も戦術を考察する真面目な流れに変わりつつあった。

これはプロやセミプロクラスの試合を見る時と同じ空気であり、先の試合がそれに準ずるレベルであることを示していた。

「こりゃ南山程度じゃかませ犬にもなれないわけだ」

ここに至り初めて、小野は「南山に悪いことしたな」と苦笑した。北川の方が格上なのはわかっていたが、ここまで実力差があったとは……。さすがに素人に毛が生えたような奴をセミプロクラスにぶつけたのは残酷過ぎた。

「しかし、人間の才能ってのは、つくづく見かけからはわからんもんだ」

そうして準決勝第二試合が始まった。

……が。

899…名無しの冒険者さん

これは酷い……

901…名無しの冒険者さん

【悲報】ユージンさん、一切見せ場無しで瞬殺される

902…名無しの冒険者さん

ユージンだせーなw

910…名無しの冒険者さん

いや、これは神無月が強すぎるわ
これこそ完全にプロレベルだろ

911：名無しの冒険者さん
ユージンもアンナちゃんか北川にあたれば善戦できただろうにな
ロストしなかったのが唯一の救いか

912：名無しの冒険者さん
これもう優勝決まったろ
決勝戦やる必要がある？

921：名無しの冒険者さん
ベスト4まで残れば賞品はもらえるわけだし、ロストする可能性
がある以上北川選手としては出るメリットはまったくないな

929：名無しの冒険者さん
だな
さすがにこれと戦えつてのは酷だわ

神無月選手と佐藤ユージン選手の戦いは、あまりに一方的な物だ
った。

ユージン選手のカードは神無月選手のカードに終始翻弄され、実
力差を悟ったユージンの降参で幕を閉じた。
それは囲碁の上級者が初心者に指導碁を行うような、あるいは意
地悪な猫にネズミが遊ばれるような……そんな圧倒的格上による配
慮と残酷さが入り混じった光景だった。

「これは、北川の優勝の目は完全に消えたな……」

まあ、準優勝でも十分だろう。

ベスト4にさえ入れれば賞品は手に張るのだから、先の試合も合わせてここから先はもはや蛇足だ。

北川も一応挑む姿だけは見せて、カードを失う前に降参することだろう。

小野はクラスメイト達に向けては北川を褒めちぎりつつも、どこか冷めた気分でそんなことを思った。

20：名無しの冒険者さん

北川は座敷童、グーラー、クーシー

神無月はウィッチ、リザードマン、ケットシーか

一応カードのランクとしては対等か

23：名無しの冒険者さん
は？ Cランク4枚？

24：名無しの冒険者さん

決勝なのにCランクは一枚しか使わないとか

舐めプかよ

29：名無しの冒険者さん

……なるほど、自力で手に入れたモノじゃないから使わないと
そついうの嫌いじゃない

33：名無しの冒険者さん

俺は嫌い

結局舐めてるのが変わりないっしょ

38：名無しの冒険者さん
まあ……舐めてても勝てそうだからな

39：名無しの冒険者さん
北川も座敷童ちゃんも切れてんなw
めっちゃ悪い顔してるw

44：名無しの冒険者さん
この座敷童ちゃん結構良いよな

普通の座敷童は常にお澄まし顔だけど、この子はコロコロ表情変わって可愛い

51：名無しの冒険者さん
ちよつとグレてる感じなのが可愛いよな

52：名無しの冒険者さん
お、始まった

試合は北川の座敷童の不意打ちから始まった。
先の準決勝でも座敷童の奇襲から始まったから、北川の作戦というよりはもしかしたらあの座敷童の気性が大きいのかもしれない。
もっとも、その奇襲も相手のウィッチによりあっさり防がれてしまっ

お返しとばかりに今度は神無月が仕掛ける。

……そこからは一方的展開だった。

北川の護りの要であるグーラーはリザードマンに力負けし転がされ続け、クーシーは俊敏なケットシーを捉えられず、座敷童が仲間

のフロアに入るもそれもウィッチにより妨害される。

素人目に見ても、カードの地力と連携力に圧倒的差があるのがわかった。

北川もそれを肌で感じ取ったのか、顔に怯みが浮かぶ。

佐藤ユージンの時と同じ流れだ。

ここまでか……。

そう小野が思った時、座敷童の激励の言葉で北川が持ち直した。

「続けるのか……」

小野は意外に思った。

どう考えても勝ち目はないと思うが……何か勝算があるのだろうか。

そう思い戦いを見守るも、やはり試合の流れは変わらない。

先ほどよりは多少善戦しているように見えるものの、神無月は圧倒的格上だ。

じわりじわりと傷を負っていく北川のカードたち。

「なにがしたいんだ、北川は……？」

このまま良いところ無しでカードを失うつもりか？

それじゃただの馬鹿だぞ。

このままではせつかく手に入れたクラスカーストトップの切符も失いかねない。

北川はもう少し賢い奴と思っていたが、勘違いだったか……？

小野がそう思った時。

「……ッ!？」

まるでスイッチが切り替わったように北川のカードたちの動きが

変わった。

それまで翻弄されるだけだった神無月のカードの動きについていけるようになり、一つの生き物のように自然な動きを見せる。

これは……！ 一体何があった!？

小野は思わず立ち上がり、目を見張った。

連携というのは時間をかけて少しずつ高めていくものだ。それは人間もカードも変わらないはず。

それが急に変わるとすれば……。

「北川のカードのどれかが、何かのスキルに目覚めたのか……?」

小野は顎に手を当て考える。

思えば、いくら事前に仕込んであったとは言え神無月のカードは連携力が高すぎる。

まるで蜂や蟻などの社会性昆虫のような……。

訓練の賜物というよりフェロモンやテレパシーのようなもので交信していると考える方がしっくりくる。

そういえばプロクラスの試合でも特にマスターが指示を出している素振りはない。

これまでは特に深く考えず、事前に作戦を仕込んであったのだろうと思っていたが、プロクラスでは必須とされるようなスキルがあるのかもしれない。

いずれにせよ……。

小野はニヤリと笑い。

「この土壇場で新しいスキルに目覚めるとか……案外“持つとる”な……」

北川のカード、動き良くなってきた？

202：名無しの冒険者さん

確かに……攻撃喰らわなくなってきたな

223：名無しの冒険者さん

神無月のなんらかの癖を見抜いたか？

249：名無しの冒険者さん

というより北川のカードがそれぞれをフォローできるようになった感じか？

268：名無しの冒険者さん

スキル……かな？

カード間の連携力やコミュニケーションを補助するスキルに目覚めたんじゃないの？

連携とかそんなの。

281：名無しの冒険者さん

連携スキルは合体攻撃的な感じで別に連携力は上がらないぞ

293：名無しの冒険者さん

北川なんか苦しそう？ 頭痛か？

311：名無しの冒険者さん

動きは良くなったけど、やっぱり神無月に比べるとまだまだか辛うじて防御ができるようになったただけだな

329：名無しの冒険者さん

あっ………！

333：名無しの冒険者さん
座敷童ちゃん落ちた

351：名無しの冒険者さん
これで終わりか……

352：名無しの冒険者さん
まあ、よくやったよ
相手が悪すぎた

381：名無しの冒険者さん
神無月、どう考えてもプロクラスだもんな

409：名無しの冒険者さん
しかし知り合いのプロがこの決勝戦だけは見とけて言っていたの
はなんだったんだ？

「終わり、か」

座敷童が雷の槍に貫かれ地面へと墮ちる。
それを見た小野は、ため息交じりに嘆息し天を仰いだ。

「まあ……思ったよりもかなり楽しめたかな」

最初は南山が負けるところと、北川がカーストップに入るかどうかの確認だけが目的だったが、蓋を開けてみれば普通に試合として楽しめた。

ここから先は北川が降参するだけの展開だが……。

「クラスメイトのよしみで最後まで見届けてやるよ」

小野は視線をTVへと戻し。

「あ………？」

座敷童を抱きかかえたまま降参する気配のない北川の姿に眉を顰めた。

「なにやってんだ？ さすがに今度こそもう終わりだろ」

画面が北川へと寄っていく。

どうやら降参しようとする北川に対して座敷童がごねているようだった。

それを見た小野は呆れた。

カードの意思を尊重するは結構だが、大事な時の決断まで委ねてどうする。

どう考えてもここは降参一択だ。

カードは所詮カード。道具の意見に左右されてその道具を失うようじゃ素人以下の三流だ。

そんな小野の考えは、しかし次の座敷童の言葉で完全に吹き飛んだ。

『——お前が、言い訳しようとして、したからだ』

『お前、色々理由をつけて、負けを納得しようとして、しただろ……。そうやって負けたら、お前の人生に消えない負け癖がついちまう。いつか来る、絶対に負けられないところで、負けちまう……。そんな奴になっちまう、だろうが』

「……………ッ！」

ハツと胸を突かれる思いだった。

この試合を見る誰もが、試合の勝敗やカードの損害しか考えていなかった。

それは当然のことだ。所詮、こんな試合はお遊び。迷宮探索と違って負けても死ぬことはない。ならば、勝敗よりもカードを失うかどうかの方が重要となってくる。

だが、この座敷童は違った。

——この座敷童だけは、北川の今後の人生だけを考えて戦っていた。

確かに、誰がどう考えてもここで降参した方が賢い。

賢い選択だが…………それは敗者の賢さだ。

次があることが前提の、逃げの賢さ。

だが冒険者は…………、迷宮という世界では、たった一度の負けが死に繋がる。

この先、北川が冒険者をやっていくというならば、そんな考えは許されない。

『お、覚えとけ。本当に負けるその瞬間まで、足掻けない奴に……………幸運は、微笑まない、んだよ』

いつか来るかもしれない絶対に負けられない戦いの時、どうすれば良いか。

これまでの座敷童の戦いは、すべてそれを北川に教えるためのものだったのだ。

『なあ、知ってるか？ 名づけは、カード側が拒否することもでき

るんだぜ?」

「世の、マスターたちが、名付けをどう思ってるのかは、知らない。もしかしたら、ちょっとした保険程度に、考えてんのかもな。でも、アタシたちにとって、名前は——マスターの為なら何度だって死んでもいいって思ってる証拠なんだぜ?」

見てるこつちが恥ずかしくなるほどの青臭いやり取り。

だが、それを馬鹿にする気にはなれない。

それは、彼らが真剣だったからだ。

カードは命を、北川は人生を賭けている。

それが見てる者にも伝わり、胸を熱くする。

『……お前らが』

北川が懐から一本の瓶を取り出した。

おそらくはポーション。この場面で出してきたということは、北川も覚悟を決めたということなのだろう。

『全部割れても、必ず全部復活させてやるから、心配すんな』

北川の判断は客観的に見ても愚かなのだろう。

どう見てもここで降参する方が賢いし、これですべてを失ったらきつと彼らの決断と覚悟を馬鹿にする者も出るに違いない。

だが……。

「北川……お前、めっちゃ面白いな!」

それが良い! 面白い!

ここで降参することなんて誰にもできる。だがそんなのは普通過ぎる。何も面白くない。

こういつ時にすべてを賭けて挑めるヤツこそ、本当に面白い奴だ。周囲を楽しませることができ、本物の人気者だ。そういう奴こそを小野は尊敬する。

「全部失っても俺だけは味方してやるよ」

だから……。

「行け！ 北川！」

——その瞬間、花吹雪が舞った。

「……………は？」

思わず呆気にとられる。

闘技場一面に蓮華の花が無数に咲き誇り、花びらが舞い散る。

その中心に立つのは、天女の羽衣を纏ったあまりに美しい女神。

そして傍らには座り込んでポカンとしている北川。

小野はなにが起こったかわからず、答えを求めるようにPCを見た。

701：名無しの冒険者さん

は??????????

712：名無しの冒険者さん

変身した？

721：名無しの冒険者さん

アムリタの雨？ 吉祥天????? なんで?????

791：名無しの冒険者さん
このタイミングでランクアップさせたってこと？

839：名無しの冒険者さん
高校生がBランクの、それも吉祥天なんて持つてるわけねーだろ！
いくらすると思っただよ！

893：名無しの冒険者さん
つか見てたけどランクアップさせた様子なんてなかったし

904：名無しの冒険者さん
ってか、つよ……

吉祥天へと変身した北川の座敷童の力は圧倒的だった。
瞬く間に仲間の傷をすべて癒すと、重力波で神無月のカードを地
面へと叩き伏せ、宇宙から流星群を降らせる。

そのどれもに対処してみせた神無月もさすがではあったが、場の
流れは完全に北川の方にあつた。

ケットシーがクーシーに抑え込まれ、続いてリザードマンがグー
ラーに関節を極められ拘束される。

最後は互いのエースの一騎打ちとなり……当然のように吉祥天が
勝利した。

「勝った……のか？ ってことは北川の優勝？」

そう口に出して見るも、小野はどうにも実感が湧かなかった。

それは優勝よりも大きなインパクトがあつたからで、小野を含め
て視聴者たちは高揚感に包まれつつも混乱状態であつた。

56：名無しの冒険者さん
神無月を瞬殺かよ……

57：名無しの冒険者さん
これ反則じゃねえの？ さすがに……

101：名無しの冒険者さん
>>57

なんの反則なんだよ
どんなカード使っても自由だろ

158：名無しの冒険者さん
>>101

いやでも試合中のランクアップで有りなのか？
カードを四枚使った……ってことになんじゃねえの？

241：名無しの冒険者さん
>>158

いや、俺はじっと見てたけど北川がカードを使ってランクアップ
させた様子はなかった

291：名無しの冒険者さん
>>241

カード使わずにどうやってランクアップさせんだよ

401：名無しの冒険者さん
……いや、おまえらちよっと待て。

実況の言ってることが確かだとすると……カード使わずにランク
アップさせたって言うてねーか？ これ

559：名無しの冒険者さん

>>401

そう言ってるように聞こえた

668：名無しの冒険者さん

>>559

………つてことは新しいランクアップの方法を見つけ出したってこと？

この土壇場で？

701：名無しの冒険者さん

漫画かよ！！

704：名無しの冒険者さん

アムリタ？ アムリタを使えばランクアップさせられるってこと

か！？

705：名無しの冒険者さん

知り合いのプロがこの試合だけ見とけって言ってたのこれだったのか！

801：名無しの冒険者さん

別チャンネルのニュース番組では早速今回のことが報じられてんな

821：名無しの冒険者さん

番組の放送までは差し止められてたってことが

825：名無しの冒険者さん

まだ条件とか詳細はわかってないけど上位カードを使わないラン

クアップが可能ってのは確定ってことか！

829：名無しの冒険者さん

最後、吉祥天が座敷童に戻ったのを見るにランクアップは一時的か？

833：名無しの冒険者さん

これから自在に変身できるようになるのか、変身のたびに毎回アムリタが必要かで大分話変わってくるな

904：名無しの冒険者さん

アムリタが必要じゃあんま意味なくね？

951：名無しの冒険者さん

>>904

んなことねーよ！

Bランクカードを一時的にでもAランクできるなら十分すぎる効果があるわ！

955：名無しの冒険者さん

さすがにどのカードでもアムリタでランクアップできるってわけじゃないんじゃないの？

れいらく？ だっけ？

実況の言葉から見るにこの座敷童ちゃんもなんか特別なカードだったみてーだし

吉祥天だからアムリタで変身できたってことじゃねえの？

981：名無しの冒険者さん

>>955

……なるほど、それぞれ対応したキーアイテムがあるって考えた

方が自然か？

992：名無しの冒険者さん
れいらく……零落せし存在か？

998：名無しの冒険者さん

>>992

それってあのウンコツコランクなの？

徐々に考察スレに変わっていくスレについて行けなくなった小野は、そこでそっとパソコンを閉じた。

TVでは大学生の部がそのまま始まっているが、もはや誰も碌に見ていないだろう。

チャンネルを変えればニュース番組が、さっそく先の試合を流していた。

どうやら北川は小野が思っている以上にとんでもないことをやったようだ。

もはやクラスカーストがどうのこうのというレベルではない。

「……………」

小野は背もたれに大きく身を預けると、しばし目を閉じた。

脳裏に再生されるのは、この大会での、特に最終戦での北川の戦い。

あの座敷童が大怪我を負った時のあの顔……。

「…………ふ、ふくく」

思わず、笑みがこぼれた。

北川の奴、学校ではいつも悪目立ちしないように、ナナフシの如く息を潜めているくせに。

本当はメチャクチャ熱血キャラじゃねえか。
だが……。

「面白かった」

いつ以来だろうか、こんなに胸が熱くなったのは……。
他人を、素直にすげえな、と思ったのは……。

「冒険者、か……」

胸ポケットに入れていた冒険者ライセンスを取り出し、仰ぎ見る。
クラスカーストの維持のためだけに取得した小道具。
それを見て、小さく苦笑する。

「俺、つまんねえな」

クラスカーストに拘り、常にだれかを蹴落とし少しでも自分が上位に立つために策を巡らせて……。

そんなヤツの何が面白いのか。

面白くない奴を見下していたが、気付けば自分が一番面白くない奴になっていた。

そりゃあ四之宮にもツマンナイと言われるわけだ。
ナリキン以下の糞野郎だ。

……いや、さすがにそこまでじゃないか。

さすがに、満員電車でウンコ漏らした奴よりは糞野郎ではないだろう。

アレ以来学校に来ていないが、元気になっているだろうか？

……まあ、どうでも良いか。

「あーあ、こんなに面白い奴って知ってたら変なちよっかいなんか
出さなかったのによ」

小野はそうボヤキ、嘆息した。

今から友達になるには、さすがに印象が悪すぎる。

今更近づいていっても、有名人になった途端すり寄ってきたとし
か思われないだろう。

「いつそのこと、弟子入りでもしちまうか？」

冗談交じりにそう呟いて、いや悪くないんじゃないか？ と考え
直す。

肩書だけが目的で本気でやるつもりなど微塵もなかった冒険者だ
が、北川の試合を見て興味が湧いてきた。

もし北川を変えたモノがそこにあるのなら……。

「俺も本気で冒険者やってみるかな」

小道具のほずの冒険者ライセンスが、少しだけ輝いて見えた。

【コミカライズ記念】掲示板ネタ・学生トーナメント（後書き）

第4章については、八月中を予定しております。

連載再開いたしましたら、コミカライズと併せまして、またよろしくお願いします。

第一話 独占迷宮（前書き）

【注意】

四章前半までの投稿となります。後編開始の際に一部、場合によっては全体的に修正や変更、加筆が加わる可能性がありますので、そのつもりでご覧ください。

・登場人物紹介

立花日和：マロのクラスの担任。新任でありながらクラス担任を任されたことで少々キャパシティーオーバー気味。温厚で付き合いやすいため生徒たちからの人気は高いが、学生気分が抜けきっておらず、職務に対する意識は正直低い。

第一話 独占迷宮

「――職員会議の結果、冒険者部の設立が認められることになりました」

夏休み、十九日目。昼。

俺たち冒険者部は、学校からの連絡で校長室を訪れていた。

トロフィーやらメダルやらが棚に飾られた室内には、校長先生と教頭のほかに、なぜか日和ちゃん姿もある。

一体どういう用なのか。訝しむ俺たちに対し、校長から告げられたのが、先の一言であった。

「そ、それって、本当ツスか!？」

喜びつつも戸惑う俺たちに、校長は机に両肘をつきつつ重々しく頷く。その複雑そうな表情からは、必ずしもこのことを本心から歓迎しているわけではないことが見て取れた。

それを見て、俺たちも落ち着きを取り戻す。こりゃどうも厄介な裏事情がありそうだと。

「とは言っても、条件付きですが、ね」

「条件ツスか？」

「その前に、貴方たちは、我が校に現れた迷宮についてはどの程度知っていますか？」

首を傾げるアンナへと、校長が逆に質問で返してくる。
俺たちは顔を見合わせ、揃って首を振った。

「いえ、特に何も……。強いて言うなら、調査の期間が長いので、
Cランク迷宮かシークレットダンジョンなのかな、と」
「ほう、さすが冒険者。何も聞かされてなくとも、そこまではわかる
のですね。そう、お察しの通り、我が校に現れたのは、Cランク
迷宮でした」

へえ、やっぱりCランク迷宮だったのか……。と内心で思いつつア
ンナと校長の会話を見守る。

「ただ、厄介なことに我が校に現れた迷宮はただのCランク迷宮で
はないようでした」

「と、言うこと？」

「シークレットダンジョン？ ……でしたか？ 通常の迷宮よりも
旨味のある迷宮があるため、国が管理する迷宮があるのですよね？
我が校に現れた迷宮はそのシークレットダンジョンに近い迷宮ら
しいのですよ。ただ、やや厄介な性質を持つらしく、採算に合わな
いとシークレットダンジョン認定はされなかったようでした」

『……………！』

校長の言葉に、俺たちは眼の色を変えて顔を見合わせた。

準シークレットダンジョン！ ギリギリでシークレットダンジ
ョン認定されなかった、公開迷宮って事か！

自衛隊が独占を諦めたと言っても、その旨味は通常の迷宮を遙か
に凌駕する。もしも冒険者部で独占出来たなら、その利益は計り知
れない。

そんな俺たちの様子を見て、校長と教頭が疲れたように嘆息する。

「眼の色が変わりましたね……やはり冒険者にとってそういう迷宮は価値があるということですか。我々が懸念しているのは、その点なのです」

「……準シークレットダンジョンということが知れ渡れば、多くの冒険者が殺到することになる。学校としては部外者が頻繁に出入りするようになるのは避けたい。……そういうことツスカ？」

「その通り。多くの冒険者が出入りするようになれば、中には招かれざる客も混じることもあるでしょう。それを避けるためには専属の冒険者、それもプロチームを雇う必要がありますが、それは経費が掛かりますし、学内の者に任せられるのであれば、それが一番望ましい」

校長は、主に師匠を見ながらそう言った。

……遠野さんが言っていた通りだ。学校という部外者の出入りを嫌う空間であれば、俺たちに管理を頼んでくるのではないかと言っていたが、本当にその通りとなった。

「それで、肝心の条件とは何なんですか？」

「何、たった二つ、ごく当たり前なモノですよ。一つは、ちゃんとその迷宮を管理できるのか、その実力を示して貰いたい。つまり、夏休み中に、我が校に現れた迷宮を踏破すること。それが一つ目の条件です」

校長の言葉に、俺たちは、なるほど……と頷く。

引き受けたはいいが、管理できずにアングルモアを起こしてしまいました……では話にならない。

アングルモアを引き起こさないためには、数か月に一度の踏破か、毎日のようにある程度のモンスターを始末する必要があると言われる。

夏休みが終われば授業が再開することを考えれば、残り二十日の

休み以内に迷宮を踏破してみせる、というのはごく当たり前の条件だった。むしろ優しすぎると言っても良い。

となると、問題はもう一つの条件の方だ。

散々、渋っていた冒険者部の設立を認めるというくらいなのだ。生半可な条件ではあるまい。

「……………もう一つの条件は？」

真剣な顔でそう言うアンナに、校長たち三人は一様に厳しい顔つきとなり……………。

「もう一つの条件は、定期考査で平均点以上をコンスタントに取り続けることです。学生の本分とは、学業なのですからね。わかりましたか？ 十七夜月さん？」

「……………はい。頑張りまっす……………」

室内の全員から白い目を向けられたアンナは、蚊の鳴くような声でそう言って頂垂れたのだった。

「……………では、あとは顧問となる立花先生から詳しいことを聞いてください。」

というところで、俺たちは日和ちゃんを連れいつものファミレスへとやっってきていた。

「それじゃ、冒険者部の設立を祝って！ カンパ〜イ！！！」

そう音頭を取ったのは、異様にハイテンションな日和ちゃんだった。

ファミレス中に響き渡るほど大声に、周囲の客が何事かと振り返る。

『か、カンパニー』

そんな日和ちゃんに戸惑いつつも、俺たちはジュースのコップを打ち合わせる。

視界の端で、アンナが慌てて防音結界の魔道具を作動させるのが見えた。

「ちょっとどうしたの？ 皆テンション低いよ？ ほら、北川君もアゲていこー！」

「いや、はは……日和ちゃんこそ、めちゃくちゃテンション高いね……」

明らかに酒が入っているとしか思えないテンションの日和ちゃんに、俺は念のため彼女のコップを確認する。

ただのウーロン茶、だよな？ ウーロンハイじゃないよな？ ドリンクバーだし……。

ドン！ と疑惑のウーロン茶をテーブルにたたきつけ、日和ちゃんが吠える。

「当たり前でしょ！！ これではバレー部の顧問を合法的に断れるんだから！ 言っとくけど、冒険者部の話が一度流れてから『立花先生は随分やる気があるようですし、来年は期待してますよ』なんて言われて、バレー部の顧問路線がほぼ確定だったんだからね！ どれだけ焦っていたことか！ ま、これでバレー部の顧問の話は完

全に流れたでしょ！ 冒険者部なら顧問なんて言っても、私ができることなんて無いしね！ お飾り最高〜！」

『ああ……』

俺たち（特に俺とアンナ）は、日和ちゃんがハイテンションな理由に納得し、頷いた。

そう言えば、そんな話もあったな……。バレエ部の顧問を押し付けられたくなければ、先に冒険者部の顧問になれば良いんだよ！とアンナが脅すような形で顧問を引き受けさせたんだった。

「いや〜これで久しぶりに迷宮に潜れるわ〜」

あれ？ 日和ちゃんって冒険者だったのか。そうか、それでアンナも日和ちゃんを顧問に選んだんだな。

と、一人納得していると。

「あれっ？ 立花先生って冒険者だったんスか？」

いや、お前も知らなかったんかい……。

日和ちゃんも驚いてアンナを見やる。

「ええ？ 知ってたから私を誘ってきたんじゃないの？」

「いえ……顧問やってない教師がお局様の山本先生と新任の立花先生しかいなかったんで、その、消去法で」

「酷い！ まあ、いいけど！」

気まずそうに頬を掻くアンナに、日和ちゃんは拗ねたように唇を尖らせた。

「日和ちゃんって冒険者だったのか。なんか意外〜。ランクは？」

「大学で冒険者サークル入ってたからね。ランクは、一応二ツ星。本当に一応ね。Eランクなんて数えるくらいしか潜ってないし。カードもDランク二枚と後はEランクって感じ。……っていうか、北川君、さっきから何気にため口じゃない？ 先生をちゃん付けしない！」

ちよつと怒ったように睨んでくる日和ちゃんに、俺は軽く失笑する。

「何をいまさら。うちの学年、基本的にみんな日和ちゃんにため口じゃん」

「うっ……生徒に舐められてる」

「まあまあ、立花先生。生徒に嫌われてるより良いじゃないですか」

と頂垂れた日和ちゃんを師匠が慰めたところで、話を本題へと戻す。

「さて、それではそろそろ学校の迷宮についてのお話を聞いてもいいツスか？」

「あ、ごめんね、十七夜月さん。と言っても私は詳しいことはわからないから、はい、これ。自衛隊の方の資料の写し」

そう言っただけ日和ちゃんが差し出してきたレジユメの束をみんなで覗き込む。

角度的に読みにくい人もいるため、代表してアンナが読み上げる。

「え、まず階層数からツスね。メインルートが47階層の……30階層からの分岐が10階層？ うわ、さっそく複数回廊ツスか」

最悪、とばかりにアンナが顔を顰める。

複数回廊。迷宮の中に複数のルートが形成されているタイプの迷宮で、大抵の場合回廊の奥に存在する守護者ガーディアンを倒さなければ主への道が開かれない。

そのため、一つの迷宮を踏破するために実質複数の迷宮を踏破することとなる。

もちろん踏破報酬はメインルート分のみで、サブルートはタダ働きとなるため、冒険者からは基本的に敬遠されていた。

「まあ……Cランク迷宮からは複数回廊もそんなに珍しくないし、十階層分でもまだ良かったんじゃないかな？　それで迷宮のタイプは？」

「え、次に迷宮のタイプは……全階層ランダム環境のルート日替わり変則型、ってこれ……」

「うっ、ローグライクダンジョンか……」

これには、複数回廊と聞いても涼しい顔をしていた師匠も顔を顰めた。

ローグライクダンジョンは、日替わりで迷宮内部の構造が完全に変わるタイプの迷宮だ。

マップはもちろん、罫の配置や種類、出現するモンスターの種類まで、何もかも日替わりで変わる。

当然ギルドもマップを売っても意味がないので、冒険者は毎回自力で攻略していくこととなる。

唯一、海なら海、山なら山とフィールドの環境だけは変わらないのだが……。

「しかも全階層ランダム環境かよ……」

肝心のフィールドが全階層ランダム型とあっては、それもあまり意味がなかった。

ランダム環境型の迷宮では、フィールドの環境が数階層ごとに変化する。

全階層とつく場合、一階層ごとにフィールドの環境が異なり、真夏の海の次は真冬の雪山だったり、真昼の次は真夜中、豪雨の次は日照りであったりと、冒険者がありとあらゆる環境に適応できる装備と肉体作りを要求される。

一階層ごとに昼と夜が目まぐるしく変わり、気温や気候も滅茶苦茶なランダム環境型の迷宮は、屈強な軍人であっても音を上げると言われるほどで……肉体的には一般人に過ぎない俺たちでは、様々な魔道具のサポートが必須だった。

「……まあ、それはいいや。肝心のメインフィールド効果は？」

魔道具のサポートが必須ということは、逆に言えば魔道具さえあればなんとかなるということでもある。マップに関しても千里眼の魔法があれば問題ない。

問題は、この迷宮のフィールド効果だ。

Cランク迷宮からは、階層そのものが様々な効果を持つようになる。

その効果は『特定の属性に対するバフ・デバフ』『階層のモンスターに属性・後天スキルの付与』などの補助的なモノから、『機械破壊』『転移無効』などこちらの行動を阻害してくるモノまで幅広い。

Dランク迷宮とCランク迷宮に大きな壁があると言われるのもこのフィールド効果によるところが大きかった。

かつて俺が師匠と共にCランク迷宮に挑んだ時は、その階層のすべてのモンスターに『不死』特性が付与されており、有効な不死対策が霊格再帰した蓮華の高等攻撃魔法ぐらいしかなかった俺は撤退

を余儀なくされていた。

Ｃランク迷宮からは、冒険者は単純な戦闘力だけでなく、ありとあらゆる状況に対応できる手札が求められるのだ。

フィールド効果には、全階層共通のメイン効果と、階層ごとに個別のサブ効果があり、このメイン効果がその迷宮の大まかな難易度を決める。

自衛隊が「採算が取れない」と言うほどの効果なのだから、生半可な効果ではないだろうが……。

「……かい、ツス」

「なんて？ 良く聞こえなかった」

「……全階層機械破壊ツス」

「マジかよ……」

思わず漏れた俺の呟きは、冒険者部全員の代弁でもあった。

複数回廊だけなら、問題はない。クソ面倒臭いのは事実だが、面倒くさいだけで攻略の難易度自体にはさほど影響しない。

全階層ランダム環境のローグライクダンジョン。確かに厄介だが、これも単体なら問題はない。ハーメルンの笛を持つ俺たちは、一度帰宅しても翌日途中から攻略を再開できるし、環境の変化も魔道具のサポートがあれば、対応できる。

全階層機械破壊も、千里眼の魔法を習得し、カードギアがある今ならかつてほどの脅威ではないだろう。

だが、三つ全部揃ったのは、ダメだ。

全階層機械破壊ということは、人工魔道具の大半が使えないということになる。エアコンペンダントを始めとした人工魔道具抜きで、全階層ランダム環境の迷宮を攻略するとなると一気に難易度が跳ねあがる。

人工魔道具が駄目ならば純正魔道具を揃えれば良いと思うかもしれないが、純正魔道具は人工魔道具と比べて圧倒的に高価なため、ありとあらゆる状況に合わせて多種多様な純正魔道具を用意するのは資金的に厳しいものがある。

一層ごとの攻略難易度が上がるとなると、Cランクモンスターが出現する三十一階層以降の階層が十階層分も増えるというのも一気に負担となってくる。

「く、クソゲー。これはさすがにクソゲーすぎる。……今からでも校長にやっぱムリですって言うてくるべきじゃないか?」

ハッキリ言っつて、学生の俺たちの手に負える案件とは思えなかった。

間違いなく、Cランク迷宮でもトップクラスの難易度。さすが、国が「要らね」と放り出すだけのことはあった。

「そんな！ みんななら大丈夫！ 頑張ろう！」

バレー部の顧問がしたくないだけの保身の女がなにか言っているが、当然のように無視する。

「まあ、そうしたい気持ちもわかるんスけど……そうするには旨味の方が捨てがたいんスよねえ」

「そう言えば、見返りのことはまだ聞いてなかったな。そんなに美味いのか?」

俺がそう問うと、アンナはコクリと頷き。

「はい、かなり……。各階層に一体のカーバンクルと、サブルート
の守護者にヴィーヴィルが確定で出現するらしいッス」

『それは……』

アンナの言葉に、俺たちは絶句し。

「それは、確かに挑むだけの価値があるね……」

「まさかカーバンクルは毎日出現するのか？」

「あ、いや、さすがにそこまでは……。どうも踏破することに再出現するようになるタイプみたいッスね」

「なるほど……さすがに毎日出現じゃないか。だったら準などつかずにシークレットダンジョン認定されていただろうしな。それでも一周あたりの利益は約二億。一人五千万、か……」

「慣れてきて、攻略チームとガーネット回収チームを分担できるようになれば、さらなる利益向上も見込めるかも」

師匠と織部がそう言い合う中、俺は逸る鼓動を抑えられずにいた。まさか、こんなに早くカーバンクルガーネットやヴィーヴィルダイヤを手に入れられる機会が訪れるとは……。

あのレースの終わりのことから考えても、カーバンクルガーネットが『幸運補給』の魔道具であることは間違いないだろう。おそらく、その上位互換であるヴィーヴィルダイヤも似たような効果を持つはずだ。

レースが終わってから、俺もどうにかしてカーバンクルガーネットやヴィーヴィルダイヤを安定して手に入れられる方法はないかと考えてはみたものの、上手い方法は思いつかなかった。

普通に店やネットオークションで買う、というのはあり得ない。ただの一般人である俺がカーバンクルガーネットを大量かつ定期的に買い続けられ、確実に悪目立ちするだろうし、国に蓮華の能力のことが感づかれる可能性がある。

もしも国が蓮華のような特殊なカードを確保していた場合、確実に網を張っているだろうからだ。

だが、この迷宮を冒険者部で独占できたなら、誰にも怪しまれずに安定してカーバンクルガーネットやヴィーヴィルダイヤを手に入れることができる。

取り分に関しても、税金対策のために宝石のまま貰いたいと言えば皆にも怪しまれることはないだろう。

そうなれば、単純に取り分を金で貰うよりもさらに大きな利益…
…Bランクカードのドロップやパックでの入手を狙うことができる。いや、それどころか、皆に蓮華の能力を打ち明けて宝石を全部俺に任せてもらえれば…いやいやいや、さすがにそれは早いか。

皆を信用していないわけではないが、読心の魔道具などもある以上これに関してはできる限り慎重にすべきだ。

とにかく、カーバンクルガーネットやヴィーヴィルダイヤを安定して入手できるというメリットは果てしなく大きい。

確かに難易度の高い迷宮だが、攻略のメソッドさえ確立してしまえば、いずれ安定して攻略できるようになるだろう。

沸々と、血液が煮えるようなやる気が沸き立ってくる。

乾いた唇を舐めて潤し、俺は言った。

「俺は、ダメ元でもチャレンジするべきだと思う」

「……だね。少なくともこの夏休み中は準シークレットダンジョンを独占できるってことだし」

「うむ。一度も挑戦せずに諦めるなど、冒険者としてあり得ん」

俺たちの意見を聞いたアンナが、総括するように言う。

「決まりツスね。予定してた海外遠征は完全に白紙に、夏休み後半はこの迷宮に集中するってことで。……装備に関しては、ウチが部長としてある程度用意しておきますが、皆さんも各自用意をお願いします」

「了解。それじゃさっそく明日……は準備もあるだろうから明後日^{あした}

から攻略開始するってことで」

珍しく気の逸った様子で師匠がそう言うと、アンナがちょっと気まずそうに待ったをかけた。

「あ、いえ……まだ補習が二日残ってるんで、攻略は明明後日（めいめいごじつ）から
お願いします。その、ウチも準備があるんで」

『……………』

というわけで、この二日間は各自準備を行うということとなった。
実のところ、これには俺も助かった。

明後日にはレースの表彰式と賞品交換があるからだ。

俺も色々と買い揃えないといけないものがあるし、この二日間で
準備は万端としておくでしょう。

「ね、ねえ……この迷宮ってそんなに儲かるの？ せ、先生も何か
手伝おうか？ あれ？ 皆聞いている？ ちょっと、無言で置いてか
ないで〜！」

なんか言っている日和ちゃんをスルーしつつ、俺たちはさっそく
準備に動き出すのだった。

第一話 独占迷宮（後書き）

【Tips】準シークレットダンジョン

様々な事情によりギリギリのところまでシークレットダンジョン認定を逃れた迷宮。

準シークレットダンジョンの多くは、所有者との契約や、あるいは土地ごと購入されていたりしてすでにプロチームに抱え込まれているケースが多く、やはり一般の冒険者は基本的に入れない。

数少ない誰の手付かずにもなっていない準シークレットダンジョンも、多くの冒険者が殺到することで普通の迷宮並みに旨味が薄まってしまっている。

それだけに上手く準シークレットダンジョンを独占できた際の利益は莫大であり、トッププロとその他大勢のプロとを分ける鍵となっている。

Twitterにて『やまだやまだ@yamada | yamada44』様よりコミカライズ記念のファンアート頂きました！
いつもありがとうございます！

TIPS4に追加してあるので、どうぞご覧ください！

第二話 俺の中ではデート

一一一翌日、夏休み二十日目。

昼下がりの立川駅前で、俺は織部と待ち合わせをしていた。

目的はもちろん明後日から始まる過酷な迷宮攻略のための装備を
買うため……というのは建前で。

真の目的は、その『ついで』に行われる映画デートにあった。

もちろん、織部との会話ではデートなんて単語は一度たりとも登
場していない。

あくまで装備を整えるついでに、以前から約束していた映画を見
ることになっている。

が、女の子と二人っきりでショッピングして映画を見るとい
うのは、俺の中ではれっきとしたデートであり、つまるところこれは俺
の人生における人生初のデートということであった。

……もっともデートと思っているのはこちら側だけなのが、悲し
いところであったが。

待ち合わせの時間まで、手持無沙汰にスマホを弄っていると、さ
っそく先日のレースのことが……というかカードギアのことがSN
Sなどで話題になっていた。

レースの最中については賭博用にネットで生中継されていたが、
一般用のエンターテインメント風に編集された番組はまだ放送され
ていない(というか、一応まだレースは続いている)。

にもかかわらず、すでにSNSで大きな話題となっているのは、

今回のレースが思っていたよりも世間に注目されていたのと、カードギアという新しい魔道具のお披露目があったからだ。

——— 迷宮の外でもカードと会話ができるようになる。

この機能は、冒険者よりもむしろ一般人の興味を惹いたようだった。

冒険者になって迷宮に入るのは怖いけれど、可愛い（格好いい）カードとおしゃべりしてみたい！ と考える人々はかなり多かったのだ。

すでにエメラルドタブレット社のHPにはサーバーが落ちるほどの問い合わせが殺到しているようで、レースの参加者がネットにアップした使用感をレビューした動画は、軒並みバズるか炎上していた。

俺も、あれから家に帰ってから説明書を見ながら色々と弄って見たところ、登録できるカードは入れ替え可能で、カードのビジョンもカードギアから10メートルくらいは自由に移動できたりと、思いのほか自由度が高いことがわかった。

従来は、各階層の安全地帯に一つずつ中継器を置かなければできなかった迷宮内と外部との連絡も、カードギア同士なら普通に連絡が取れるし、地上においても北海道から沖縄まで日本中どこでも通話やメッセージを送ることが可能と、もう完全に次世代の携帯といった感じだった。

今後、レース時に使ったカメラアイのような様々な付属品も発売予定らしく、より迷宮攻略の実況がやりやすくなるとダンジョンチユーバーたちが自分の動画絶賛していた。

もう完全にカードギアに注目をかっ攫さらわれた形だが、優勝者である俺のことも一応は話題になって……。

『一週間のレースで一日以内にゴールしててワロタw』

『相変わらず蓮華ちゃんがかっこ良くて素敵だった。メアちゃんも念願のランクアップおめでと〜！ 今回勝った五万円で美味しいモノ食べます！』

『たまたま強いカードを手に入れただけなのにイキって、マジで見ててイラつくわ。女の子カードでハーレム作ってるのもキモ過ぎる。つか、途中で目的の物手に入ったんならさっさとリタイアしろや。俺の十万返せ、クソガキが！』

『もう完全にプロクラスのデッキと実力。アマチュアの試合とか大会に出るのはもはや荒らしレベル。というか、勘弁してください（震え声）』

などなど、全体的に賛の声の方が多かったものの、否の方もチラホラ見受けられた。

なお、最後ののは、某『学生四天王最弱の顔と名前が思い出せない人』の書き込みである。

一応彼も参加していたらしいのだが、まったく気づかなかった。どうやら知らない間に一瞬で追い抜いていたようだ。いまさらではあるが、この前遭遇した時に言っていた「アレ」とはこのレースのことだったのだろう。

まあ、基本的にはまだTV放送されていないこともあって、話題はレースのことよりもカードギアについてがメインだった。

今日もここに来るまでの間にカードたちと会話しているのを見て、『売ってくれ』とか『譲ってくれ』とか、酷いになると『自分だけ持つてるなんてズルい！ エメラルドタブレット社に私にもタダで渡すように言え！』なんて言ってくるヤツすらいた。

本人以外は使えないとちゃんと放送されていたはずのだが、カードギアの存在を知っていてもそのことは知らない人は結構多いようであった。

大体は説明すれば引き下がってくれるのだが、最後までいなちよつと頭か心のどっちかがおかしい人には、『少しだけ不幸』になつてもらいその隙にその場を立ち去らせてもらった。

今は変な奴を寄せ付けないため、カードたちとの会話は諦めカードギアは仕舞っている。

ちなみに、学校の皆からも連絡が来て『優勝おめでとう！ ネットニュースで初めて知って驚いた〜』とか『先に言ってくれればみんなで応援したのに』とか少しだけ文句を言われつつも普通に祝福のコメントを貰っていた。

そうしてスマホを弄りつつ待っていると……。

「お待たせしました、先輩」

ようやく、待ち人がやって来たようだった。

時間を見ると、ちょうど待ち合わせ時間のピッタリ五分前。実に彼女らしい到着だった。

スマホを仕舞い、軽く手を上げる。

「よ、小夜」

「こんにちは。もしかして、大分待たせてしまっていましたか？」

「いや、全然」

それより……と俺は織部の全身を見渡し。

「その服、似合ってるな」

そう、称賛した。

今日の彼女の装いは、いつものパンク風厨二ファッションとは異なり、白を基調としたノースリーブのシャツと黒いパンツスーツの

大人びたデザインだった。

いつもの厨二風ファッションもそれはそれで似合ってはいるのだが、今日の服はクールで大人っぽい彼女にピッタリで、とても似合っていた。

俺のお世辞抜き称賛に、織部は照れ臭そうに髪先を弄って眼を泳がせた。

「あ、ありがとうございます。先輩も似合って、……似合って、……いや、普通ですね」

「……だろ？ 安いのも高いのも、俺が着ると凄く普通になっちゃうんだな〜これが」

俺はそこそこ高かったブランド物のTシャツを指で摘まんで、ヘラリと笑う。

「……ちよつと気合入れて着てきたけど、次からユニク〇で良いな、こりゃ。」

「そ、それで、どうしますか？ 先に装備を買いに行きますか？ それとも先に映画を見に行きますか？ 一番早い上映時間までまだちよつと時間がありますが」

「気まずい空気を払拭するように、織部がやや早口気味に問いかけてくる。」

「俺は腕時計を見つつ、できるだけ今思いついたように聞こえるように……。」

「ん、そうだな……装備の大半は家に配達してもらつとしても多少は持って帰ることになるだろうし、嵩張るだろうから先に映画だな。時間まで……そこらのカフェに入って何か食べるか。映画見ながらポップコーンとか食べるだろうし、軽くて良いんじゃないか？」

織部が笑顔で頷いたので、俺は内心で胸をなでおろしつつ「事前に調べてあった」女性に人気だというカフェへと彼女を誘導するのだった。

「――そう言えば、先輩はもうレースの賞品は交換したんですか？」

二人でランチを食べながら雑談をしていると、話の流れはやはり徐々にレースについてへと移っていった。

俺はカルボナーラをフォークで巻きながら答える。

「いや、賞品の交換は明日の表彰式の後で行われることになっているから、まだだな」

「なるほど、でももう何を選ぶかは決めているんでしょう？」

「もちろん」

今回のレースで俺が最終的に得た星の数は、合計725個。

そのうちの600はまず、目玉商品のキマリスに使わせてもらった。

目玉商品だけあってキマリスの交換効率は全商品の中でもトップ。他のカードや魔道具の市場価値がおよそ星一個当たり150〜250万円程度なのに対し、300万円近い交換効率となっている。

希少な軍団召喚持ちで装備化スキル持ちということもあり、これを逃す手はない。

キマリスは高位の悪魔系カードに多いように両性の属性を持っため、女の子カードに適性を持つ俺とも相性は悪くない（逆に無性のカードが多い天使とは、男カードほどではないが相性が良くなかつ

たりもする)。

このままデュラハンと合わせて同時に運用しても良いし、ゆくゆくはデュラハンのランクアップ先という手もあるだろう。

残りの125個についてだが、カードは一枚のみで主に魔道具を選ぶことにした。

カードの方は、星25個のマヨヒガというランクカードを選んだ。

これは滅多に市場に出回らない希少な異空間型スキル持ちで、自身の内部あるいは自身そのものが異空間となっているタイプのカードだった。

海外の有名どころではティル・ナ・ノーグや桃源郷などが存在する。

この手のモンスターの特徴としてはまず、空間そのものをいくらか攻撃したところで倒せず、内部に隠れる本体(核)を倒さなくてはならないことと、本体自体はさほど強くないという点が上げられる。そのため主な戦闘方法は、内部に取り込んだ敵にリドルスキルを仕掛けつつ生命力を吸収したり、内部の味方の支援を行ったりといったものとなるのだが、異空間型モンスターには戦闘以外にも有益な使い道がある。

それは、その異空間を利用した安全で快適な拠点としての用途だ。異空間型モンスターの内部は、外部と完全に隔離されているため、豪雨の中だろうが吹雪の雪山だろうが、周囲の環境の影響を受けずにぐっすりと体を休めることができる。

ランクが上がることに過酷な環境が増えていく迷宮において、装備化スキルと並んでプロクラスの必需品と言われていた。

ちなみにマヨヒガは家妖精——家妖精というかもはや家だが——としての属性を持っているため、シルキーのランクアップにも使うことができる。

魔道具の方は、大通連と黄金の手綱、そしてドラゴネットのキーアイテム五種を選んだ。

大通連は、持つ者に神通力を与えるという伝承を持つ三明の剣の一振り、カードが装備することで戦闘力を200向上させ、神通力のスキルを一時的に得ることができる。

三明の剣は三種すべて揃うことで真価を発揮すると言われており、二つ三つと重ねていくことで神通力のスキルも強力が多彩になっていく。

大通連のみでは他のスキルで言う初等クラスが精々となるのだが、神通力は強力なレアスキルであるため、初等クラスといえども侮れない。

具体的に言えば、大通連のみで付与される神通力でも、「念動力（神足通）」、「地獄耳（天耳通）」、「悪意の感知（他心通）」、「物質の記憶を読み取る（宿命通）」、「カルマを見る（天眼通）」、「除霊（漏尽通）」とその能力は幅広い。

それだけにその需要も相応に高く、星も七十個と高額だった。

カードで言えばBランククラスのお値段である。

とはいえ、市場に出回ることもなく、値段以上に入手が難しい魔道具ではあるので、これでも安い方だろう。

もし残りの二振りもリストにあれば、キマリスを諦めてでも揃えていたところである。

黄金の手綱だが、これは装備させたカードに騎獣のスキルを、手綱を握る者に騎乗のスキルを一時的に付与する魔道具だ。

おそらく元となっている伝承は、アテナが英雄ベレロポーンに与えたとされるペガサスを乗りこなすための黄金の手綱なのだろう。

これは、騎乗スキルを得たがっていたイライザと、騎獣スキルを得たがっていたユウキに対するご褒美として選んだ。お値段は星十个也。

最後に、ドラゴネットのキーアイテム五種についてだが、これは色々と片っ端から試していけば一つはヒットするだろう、という適当な考えからである。

現在の研究でわかっているドラゴネットのキーアイテムは全六種のため、五つも試せばどれかヒットする可能性は高い。もしヒットしなければ、残りの一種で確定するということで、その時はその時だった。

「……………なるほど、なかなか良いものを選びましたね」

俺の選んだ品を聞いた織部が少し羨ましそうに言う。

「だろ？ マヨヒガなんかは今回の迷宮攻略でも役に立つだろうしな」

「普通に羨ましい……………。しかし、今回のレースは先輩としても得るモノが多かったようですね」

「まあ、な」

「当初の目的だった零落スキル持ちのサキュバスに、キマリス、マヨヒガ、いろいろな魔道具、それになにより——吉祥天・黒闇天の戦利品」

「え……………」

ドキリ、と心臓が跳ねる。

なぜ……………それを……………！？

「あの戦いで先輩も戦術を学び、一つ殻が破れた感がありますし……………これはまた差が広がってしまいましたね」

「あ、ああ……………」

なるほど、そっちな……………。内心でホッと胸を撫でおろす。一瞬力

ードのドロップのことがバレたのかと思ってマジでビビった。

「……いや、戦術を学んだってほどじゃないし、その方面に関してはまだまだ勉強中だよ。小夜の足元にも及ばないさ」

ちなみに、吉祥天と黒闇天のカードについてだが、今のところランクアップは保留としている。

アドヴァンテージカードの最大の強みは、その復活コストの安さだ。

確かに、ランクアップすれば強さはより安定するし、運が良ければ零落スキルが残ってさらなる霊格再帰への道が拓けるが、ロストしてしまった際の復活は絶望的となってしまふ。

ランクアップ自体はいつでもできるし、蓮華はいつでも復活できる状態で運用する、という両親との約束もある。

そういうわけで、現状そこまで戦力に困っているわけではないこともあり、判断は保留としていた。

「……………。…………ご謙遜を。…………ところで、先輩はレース中にお金で星を結構買い取っていたはずですが、そちらの支払いの方大丈夫なんですか？ カードのパックで相当散財していたはずですが…………」

「ああ、それね…………」

と苦笑し、頷く。

「知り合いにカードを買い取ってもらえることになったから、一応なんとかなる」

レース中に鷲鼻の男から星を一億四千五百万で買った俺だったが、これは俺の貯金総額を若干超える額だった。

俺は当初これを星の換金ですることと払うつもりだったのだが、

賞品を選んでいるうちに欲が出てきた。

どう考えても星を現金に換金するのは金をドブに捨てる行為だ。できる限り星は賞品と交換したい……そこで思い出したのが、砂原さんのことだった。

以前買ったパックで当てたチケット。これを砂原さんに買い取ってもらったのだ。

個人間でのカードの売買は経費として計上できないのでその年の税金が高くついてしまうのだが、事情を聞いた砂原さんは快諾してくれた。

しかも、ギルドの買い取り価格よりもかなり高く、市場価格よりも若干安めという価格で、だ。

受け渡し自体はあちらのスケジュールの都合で少し先となっているが、お金自体はすでに振り込んでもらっている。

これで驚鼻の男への支払いはなんとかかなりそうだが、砂原さんには一つ大きな借りができてしまった。

本人は元々欲しかったカードだったから気にするなどと笑っていたが、そう遠くないうちになにか借りを返さなくてはならないだろう。

「そうですね……」

なんとかなる、という俺の返答を聞いた織部は少し残念そうにそう呟いた。

「先輩が金策に困っているようなら私が貸しても良いと思っていたのですが」

「さすがに後輩の女の子から金を借りたりしないって。それなら素直に星を換金するわ。つか、なんで残念そうなんだよ」

「それはもう」

織部はニヤリと笑って。

「先輩に貸しを作る貴重なチャンスですからね」

「闇金よりエグイ利子がついてそう」

「利子なんて、そんな。むしろお金では一円たりとも受け取らないのでご安心ください」

「むしろ怖いわ」

― 体金の代わりに何をさせられることやら……。

そんなようなことを話していると、織部のスマホからアラーム音が鳴り始めた。

「あ……そろそろ時間みたいですね」

もうそんな時間が、と時計を見て見ると。

「……ちょっと早くないか？ まだ上映まで三十分近くあるぞ？」

「ここから映画館まで五分くらい掛かりますし、夏休みだから売店も混むでしょう。早めに行って損はないかと」

そんなもんか、と頷いていると織部がフツと微笑んだ。

「それに……私は映画が始まるまでのあの時間も好きなんです」

「ああ……」

それはなんとなくわかる気がした。あの薄暗闇の中で、上映を待つあの独特の気配。あれは家でDVDを見る時は絶対に味わえない、映画館でのみ味わえる醍醐味だった。

むしろそれを味わうためにわざわざ映画館に観に行くと言っても過言ではないだろう。

「なるほど。じゃあ行くところか」
「はい」

俺たちは互いに笑みを交わすと、連れだって映画館へと向かうのだった。

第二話 俺の中ではデート（後書き）

【TIPS】異空間スキル

カードのスキルには、妖精郷や神界、冥界と言った異空間に出入りできたり、あるいは異空間そのものを作り出せるモノも存在する。それら、この世界とはわずかに位相のズレた空間に干渉すること出来るスキルの類を異空間スキルと呼ぶ。

異空間の内部は外部と完全に隔てられているため、内部から外部へ攻撃を出来ない代わりに外部からの（異空間スキル持ち以外の）干渉も受けない。

プロクラスでは、この性質を利用して異空間型スキル持ちを迷宮内での安全な拠点として利用している。

装備化スキルと並び、プロクラスの必需品とされている。

第三話 キマリスは 仲間になりたそうに こちらを見ている！
(前書き)

・登場人物紹介

鷲鼻の男：モンコロレースにおいてマロと対立したが、イレギュラーエンカウトと遭遇してしまい自らと仲間から預かったカードをロストした。その後、少しでも利益を得るためマロへと星の買い取りを持ち掛け、星を売った。ハーメルンの笛を所持していたようだが……？

遠野さん：アンナのコネで知り合った馴染みの札商。カードや魔道具だけでなく、一般人では知り得ない情報なども商品として取り扱っている。最近、久しぶりに妻に会ってもどこか素っ気ないことを悩んでいる。

第三話 キマリスは 仲間になりたそうに こちらを見ている！

『 11110、9、8、7、6！ 』

東京ドームの闘技場。レースのスタート地点となった場所にて、壇上上がった司会の男がカウントダウンをする。

彼の背後に設置された十個の大型スクリーンには、さらに十分割された映像が映し出されており、そこにはレースの参加者たちの姿が映し出されていた。

ほとんどの参加者が諦めたように地面にへたり込んでいる中、この場にいる者たちが注目しているのは三つ目の迷宮へと懸命に走る冒険者たちの集団。

最後の関門の特殊型迷宮の主は、すでにミッションの報酬により運営のスタッフにより倒されている。

そのため、あとはたどり着いてさえしてしまえばゴールとなる。

清土鬼子母神堂のゲートを目前としながらも、無情に進むカウントダウン。

そして――。

『 3、2――1！ タイムアップ！ レース終了――！ 』

参加者全員のカードギアが一斉にアラーム音を鳴らす。

膝から崩れ落ちる冒険者たちの集団。

こうして、第一回キャットファイト・バトルロイヤルレースは終了した。

「――うん、確かに振り込みを確認した」

「ではこれで、レース時の契約は満了ということだ」

星と景品の交換を終えた俺は、東京ドーム近くの喫茶店で鷺鼻の男こと田中さんと会っていた。

目的はもちろん、レース中の星の支払いについてである。

「ありがとう、助かったよ。これでカードを預かった他のメンバーへの補償もなんとかなる」

「いえいえ、こちらこそ」

「しかしよくよく考えると凄いな。なんせ高校生がポンと一億払っちゃうんだから」

どこか揶揄うようにそう言う田中さんに、俺は「あ………」と頬を掻いた。

「まあ、あんまり実感はないんですけどね。稼いだ端からカードとか魔道具に使っちゃうんで、右から左に言うか……」

「なるほどね……確かに冒険者は入る金もデカイが出てく金もデカイからなあ」

「そうなんですよ。あと大金って言っても一千万超えた辺りからあんまピンと来なくて……」

「あゝ俺も最初の頃はそうだったなあ。まあ、金の使い方を覚えてからは実感が湧くようになったけど……君の場合はまだ高校生だからなあ」

「金の使い方ですか？」

俺がそう問うと田中さんは気恥ずかしそうに頭を掻きつつ。

「うん、まあ、夜のお店で豪遊したり、女の子に高いプレゼント送ったりとか……そう言うのだよ」

「ああ……」

あんまり良い金の使い方じゃないな、と苦笑する。

「ま、それも当分出来ないだろうけどな……ハーメルンの笛も無くなっちまったし」

「ハーメルンの笛、ですか……」

「ああ、かつてイレギュラーエンカウトと出会った時に手に入れたモンだったんだけどな。転移の魔法が使い放題っていうスゲエ魔道具だったんだ。俺が三ツ星になれたのもその魔道具の力が大きい。チームメンバーもハーメルンの笛目当てで集まったようなもんさ……」

そこで田中さんはアイスコーヒを一気に呷ると、やや乱暴にテーブルに置いた。

「だが今回のレースでまたそのイレギュラーエンカウトと出会っちゃってな。ハーメルンの笛も没収されちゃった。たぶん、見込み違いと判断されたんだろうな……」

「没収、ですか？」

「ああ……。戦闘中はカードの状態でしまってたんだが、助かった後に使おうとしたら力を失ってたんだ。今じゃただの笛さ……」

……ハーメルンの笛吹き男のお眼鏡に適わなかった奴は、たとえ生き残ってもそのドロップアイテムは効力を失う、ということか。

消耗型ではない魔道具が突然その効力を失うなど聞いたことがな

い。やはりイレギュラーエンカウントはそのドロップアイテムまでどこか異質だ。

あまりハーメルンの笛に頼り過ぎない方が良いのかもしれない……と思うも、すでにこの笛の力は俺の戦略の中枢にガッチリ食い込んでしまっている。

今更この笛を手放すことはできない。

危険とわかっているのに手放すこともできない魔性の道具……まさしく魔道具だ。

「チームメンバーから預かったカードもロストして、ハーメルンの笛も失って、チームは解散さ……。残ってるのは予備のDランクカードだけ。ランクこそ三ツ星のままだが実質二ツ星に落ちたようなもんだ」

悲惨な話だ……。

彼が悪い……というよりは普通に運が悪かった話なので、同情を禁じ得ない。

まあ、Dランク迷宮のイレギュラーエンカウントに遭遇して生きているだけ御の字とも言える。

Dランクカードが残ってるというのなら再起の目はあるし、普通に生きていくだけの金も稼げるだろう。

……冒険者を続ける意思があるのなら、の話だが。

「じゃ、俺はもう行くよ」

「はい、いつかまた」

「ああ」

席に着いたまま田中さんを見送った俺は、すぐにスマホを取り出すと次の相手へと電話を掛けた。

『はい、遠野です』

「あ、北川です。こちらの用件は終わりました」

『了解です。ではそちらに向かいますね。十五分ほどで着くと思いますので』

「はい、お待ちしています」

十五分か……。紅茶のお代わりでも頼むか……。とウェイトレスさんを呼び止める。

「すみません、紅茶のお代わりを」

「はい、かしこまりました。他にご注文はよろしいでしょうか？」

「ええ」

と言いかけたその時。

『苺のタルト！』

と蓮華の声が脳裏に突如響いた。

『な、なんだ突然』

『苺のタルト頼んでくれ、この期間限定の奴！』

『いや、頼んでもお前食えないだろうが』

『そんなのお前が喰ってるフリすりゃいいだけじゃねーか。な？』

頼むよ……。一生のお願い。この店に入った時からずっと食いたかったけど、あの鷲鼻がいる間はずっと我慢してたんだからさ！』

『お前の一生は何回あんだよ』

と言いつつ。

「あゝ、すみません。苺のタルト一つ」

どうにも蓮華のおねだりには弱い俺であった。

それから俺がタルトを食べるフリをして蓮華に「あーん」で食わせてやっている、ちょうど十五分ほどで遠野さんが入口に姿を現した。

手を振り自分の存在を知らせると、遠野さんは笑みを浮かべてこちらへとやってきた。

「いやあ、お待たせしました。今日はお時間作っていただき、ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ呼びつける形になってしまい申し訳ありません」

心なしかいつもより丁寧な態度の遠野さんにこちらも頭を下げる。

「さて、まずは北川さん。この度はレースのご優勝おめでとございます」

「あゝ、あはは……ありがとうございます」

「いやあ、ぶつちぎりでしたね。まさか一日以内にゴールするのは……さすがです」

「運が良かっただけです。たぶん、二度は無理です」

「またまたご謙遜を。ところで賞品については、やはりキマリスを？」

「ええ、まあ、一応目玉だったんで」

「ああ、良かった。……実は今日呼びしたのは、そのキマリスについてなんです」

おっと、もう本題に入ってきたか。

朗らかな表情から真剣な雰囲気となる遠野さんに、こちらも姿勢

を正す。

「実は、北川さんのキマリスをどうしても欲しいと仰っている方がいます」

「キマリスを、ですか……」

俺は腕を組んで考えるポーズを取った。

やっぱ、そういう用件か。

大会が終わったら即会いたいなんて連絡が来た時点で予想はしていたが……。

しかし、キマリスか……。正直、手放したくない。

そんな俺の内心を読み取ったか、遠野さんがバインダーをカバンから取り出しつつ言う。

「一応、北川さんが欲しがらるだろうなというカードをご用意させていただきました。どうぞ、こちらのリストを見てから決めていただく、というのは……」

「……拝見させていただきます」

あんま気乗りはしないが、見もせず断るのも失礼だよな……。遠野さんにはいろいろお世話になってることだし。

という感じでリストを見た俺は驚きに目を見開いた。

これ……。どれもキマリスを超える市場価格のカードばっかだ。

中には30億を超える物や滅多に市場に出回らない金額以上に希少なカードも載っている……。

向こうからトレードを持ちかけてきた以上、キマリスよりも若干価値の高いカードを出してくること自体は予想していたが……これはさすがに予想を超えていた。

「どうでしょうか、キマリスとの交換でも満足していただけるもの

を揃えたつもりなのですが」

「それは、確かに……これなら。しかし、これでは赤字なのでは？」

キマリスの平均市場価格は十五億前後。高くとも十八億を超えることは滅多にない。このリストのどれを選んででも赤字確定のはずだ。

「いえいえ、これがそのキマリスの価値ですよ」

どこか含みを持たせた感じの遠野さんの言い方に、首を傾げる。

「と、言いますと？」

「つまりは……北川さんも使ったカードにプレミアがつくような冒険者になってきた、というわけです」

な、なるほど……そう言うことか。プレミア、か。

人気のあるグラディエーターが実際に試合で使ったカードには、市場価格を大きく超える額が付けられることも多い。

その付加価値は選手の人気度合いや使い込み具合に大きく左右されるが、それがその選手を代表するようなカードであったり、何かの大会の優勝賞品であったりする場合、時として市場価格の十倍の値が付くことすらあるという。

「北川さんはアマチュアクラスではありますが、プロ入りを確実視されている新進気鋭の冒険者です。すでに靈格再帰の発見や凶悪犯の逮捕など大きな実績を上げ、今回のレースでもその実力と成長を証明しました。モンコロの試合においても試合数は少ないですが、その全試合で勝利を収めている。加えてカードに名づけをする主義でもあるので、そのカードも市場に出回りにくい……と、カードにプレミアがつく要素は十分ですよ」

遠野さんはそう俺を褒めちぎるが、まあ実際は俺自身のプレミアというよりも、このキマリスが第一回モンコロールスの実質的優勝賞品ということが大きいのだろう。

アンナが猟犬使いの賞金を全額寄付した効果も多少はあるのだろうが、所詮はアマチュアクラスの俺の人気など大したことはないはずだ。

まあ、今後俺がプロになって何らかの実績を立てることを期待しての、ちよっとした投資と言ったところなのだろう。

「それで、どうでしょう？ 何か気に入ったカードはありますか？」

「そう、ですね……。今のところこの二つが気になる感じですね」

そう言っただけが指さしたのは、古代ギリシャ風のドレスを身に纏い弓を構えた女神と、狼の毛皮を頭から被った女戦士の二枚のカード。

片や、長く艶やかな黄金の如き髪と成熟した豊満な肉体を持ち、銀の馬車に乗った妙齡の美女。

片や、健康的で鍛えられた肉体と、被った毛皮で顔の上半分が隠されて尚、その顔立ちの美しさが察せられる凛々しい表情の美少女。ギリシャ神話の月の女神セレーネーと、北欧神話の戦士ベルセルクだった。

第三話 キマリスは 仲間になりたそうに こちらを見ている！
(後書き)

【TIPS】死神からの贈り物

イレギュラーエンカウントたちが残す特殊な魔道具は、ただの便利な道具ではなく彼らが獲物と認めた者たちへの勲章であり、マーキングとしての側面を持つ。

そのため死神からの贈り物を持つ者はイレギュラーエンカウント全般とのエンカウント率が上がり、特に贈り物の主とはいずれ必ず再会する定めとなっている。

それは仮に贈り物を手放し、冒険者を辞めて迷宮に潜らないようにしても避け得ぬ運命である。

再会の際、それが死神たちを失望させるものだった場合、運よく生き延びられたとしても贈り物に込められた力は没収される。

もしそれが嫌ならば、自らが獲物に相応しいことを証明し続けるか、死神たちに真の意味で認められなければならないだろう。

第三話 キマリスは 仲間になりたそうに ーこちらを見ている！
(前書き)

Q：蓮華にタルトをどうやって食わせたの？

A：蓮華は「かくれんぼ」のスキルで透明になれるので、マロの横から顔をピツタリくつつける形で周囲にバレないようにタルトを食べてました。

第三話 キマリスは 仲間になりたそうに こちらを見ている！

【種族】セレーネー

【戦闘力】750

【先天技能】

・輝く満月の女神：月と魔法の女神であるセレーネーの権能を使用可能。

・三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・凍てつく月の世界：周辺一帯を月明かりが照らす夜のフィールドへと塗り替える。味方以外の眷属を一掃し、新たな眷属召喚を封じる。場に、アルテミス、セレーネー、ヘカテーの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日一回のみ。

・獅子座の護り：眷属であるネメアーの獅子を召喚可能。一日一回、一体のみ。

・高等魔法使い

【後天技能】

・神のプライド

・簡易神殿：地面に魔方陣を描くことでその場に簡略化した神殿を形成することができる。神殿内において、全ステータス向上、持続回復、一部スキルの出力向上。神属性は効果向上。

・詠唱短縮

・魔力回復

【種族】ネメアーの獅子

【戦闘力】1050

【先天技能】

・ 鉄壁の毛皮：高等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターへと憑依することで、自身の戦闘力を加算させることができ、また自身の持つ装備化スキル以外の先天スキル一つと、すべての後天スキルを共有する。この毛皮は、物理攻撃に対する高い防御力を有しており、一定以下の威力の物理攻撃を無効化する。

・ 獅子座の加護：獅子座の加護により弱点を突かれぬ限り不死の力を持つ。怪力、自己再生、不死を内包する。脇腹を攻撃されることで解除。

・ 食物連鎖：喰らったモノを糧とし、その力を一部取り込むことができる。捕食により自己再生し、相手のステータスの一部を一時的に自分に加算する。

・ 本能の覚醒

【後天技能】

・ 高位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。高位眷属体はオリジナルと遜色ない自我と初期戦闘力の1.5倍の戦闘力を持つ。

【種族】ベルセルク

【戦闘力】900

【先天技能】

・ 最高神の戦士：北欧神話の最高神オーディンに仕える戦士。初等ルーン魔術、戦士スキルを内包する。

（初等ルーン魔術：北欧におけるローカルスキル・ルーン魔術を初等レベルで使用できる）

（戦士：戦士に必要な技能を収めている。武術、剣術、槍術、弓術、

騎乗スキルを内包する)

・狂気を纏う者：狂気に身を委ね殺戮を行う。一定時間暴走状態となり一切のコントロールが効かなくなる代わりに時間内は『不滅』状態となり、全ステータス三倍、状態異常無効。効果切れ後、一定時間行動不能。

(不滅：効果中、生命力以上のダメージを負ってもロストを免れることができる)

・生命の泉：尽きることない生命力の源。生命力、耐久力、一部状態異常耐性を常時大きく向上させる。自己再生、持続回復を内包する。

・物理強化：物理的な攻撃の威力を強化する。

【後天技能】

・狩人：武術、弓術、遠見、追跡、気配遮断スキルを内包する。

・無拍子：武術系スキルの工程を省くことが出来る。熟練度により効果上昇。

・見切り

セレーネー。

アルテミス、ヘカテーと合わせ、三位一体の月の女神として有名なカードである。

これら三柱の女神はそれぞれ月の満ち欠けを象徴しており、半月のアルテミスは成長途中の少女を、満月のセレーネーは成熟した女性を、新月のヘカテーは終わりゆく老女(と言ってもヘカテーもちやんと妙齡の美女ではあるが……)を表していると言われている。

三位一体のカードには他にもヒンドウ教のブラフマーとヴィシユヌとシヴァ、北欧神話のウルズとヴェルザンディとスクルドなどが有名だが、これらは総じて二相女神とはまた違った二体一対型スキルの上位スキルを持つ。

セレーネーが持つ三相女神は、二相女神同様、二体一対型スキル
の上位スキルである。

なぜ二相女神の上位スキルと呼ばないのかというと、単純に上位
互換と呼ぶには長所と短所があるからだ。

三相女神が二相女神よりも優れている点は、まず一枠で召喚でき
る数が三枚であること。次に、三枚揃った際は強力な固有スキルが
使用可能なこと。

劣っている点は、二相女神と違い別のカードに変身することがで
きないこと。また後天スキルまでは共有できないこと。

二相女神や三相女神といった二体一対型のスキルの強みは、一枠
で複数枚のカードを召喚できることにあり、その枚数が増えるとい
うのはシンプルに強い。特にこの手のスキルはモンコロなどの数が
制限されている場で無類の強さを発揮する。……強すぎて試合が組
まれにくくなるくらいに。

ただし、三枚揃えると強い、というのは現実的に考えるとデメリ
ットにもなりうる。それは、揃えられなければ何の意味もないとい
うことだからだ。

Cランクならまだしも、Bランクともなると個人で三枚揃えるの
は、不可能とまでは言わないものの相当な困難だ。

ぶっちゃけBランクの女の子カードを三枚も揃えられるならす
でに一生遊んで暮らせるだけの資産があるわけで、そこまですて三位
一体のカードを揃える意味があるかというのは、疑問である。

そういって言えば、枠の圧縮効率が低くとも一枚で別のカード
の力が使える二相女神の方がコスパ的に優れていると言えるだろう。
後天スキルが共有できないというのも、大きすぎるデメリットだ。

ただ、三相女神には二相女神にはない大きな長所が存在する。

それが、三枚揃った際にのみ使用可能となる専用スキルだ。

セレーネーたちの『凍てつく月の世界』は、極めて希少な眷属召喚殺しのスキルである。

現在のセミプロクラス以上の環境をトレーディングカードゲームに例えるなら、ぶつちぎりの眷属召喚一強である。

プロフェッサーだろうとグレイディーターであろうと、デッキに眷属召喚持ちが入っていないと話にならない、そういうレベルだ。

眷属召喚持ちに対抗しようとした場合、最も手っ取り早いのがこちらも眷属召喚持ちをデッキに入れることであり、如何に眷属召喚持ちを上手く回せるかが基本戦略となっている。

これがカードゲームならばあまり健全な環境とは言えず、運営によるテコ入れが期待されるところなのだが……あいにくこれは現実だ。迷宮の登場から約二十年、調整らしい調整が入る様子はない。

つまり、この眷属召喚一強の環境は今後も続くということだ。

そんな中、極めて貴重な対・眷属召喚スキルと呼べるのが、この『凍てつく月の世界』だった。

相手の眷属召喚を封じつつこちらは眷属召喚をし続けることができるこのスキルは、まさに俺TUEEE！の権化。

モンコロで使用した日には二度と試合を組まれないこと必至である。

ある意味リアル禁止カードみたいなものだが、迷宮内ではそんな暗黙の了解など存在しない。

思う存分俺TUEEE！ したところで誰の文句も入らない。

まあ、三相女神を揃えられる時点で十分世間的には俺TUEEE！状態ではあるのだが。

三枚揃えようと思ったたらそれこそ60〜70億はかかるわけだ……プロチームが共同購入してようやく揃えられるかどうかといったレベルだろう。

当然軍の方では当たり前のように使われているのだろうが、それでもなおAランク迷宮をどの国も踏破できていないというこの魔境

っぷり……。

まあ50階層以上では普通にセレーネーとかも出現してくるだろうからね……仕方ない。

一方のベルセルク。こちらはシンプルに一枚で強いタイプのカードである。

高い戦闘力と圧倒的な近接能力を持ち、一定時間『不滅』状態になることができる『狂気を纏う者』と、初等ランクではあるが北欧のローカルスキル、ルーン魔術のスキルを持っている。

ローカルスキルを持っていることからわかるように、このベルセルクは日本産ではなく北欧産のネイティブカードなのだろう。

日本にはベルセルクというカードは存在せず、劣化ベルセルクと呼ばれるバーサーカーのカードがDランクにあるのみだからだ。

ルーン魔術は、付与に特化したスキルで、攻撃的な魔法こそ少ないものの味方や魔道具にルーンを刻むことで圧倒的な汎用性を持つ優れたスキルである。

探索、結界、除霊、解呪、姿隠し、強化、敵避け、遠見……。

その汎用性は、高等ルーン魔術スキルさえあれば大半の魔道具が必要なくなると言われるほどだ。

切り札の『狂気を纏う者』は、コントロールが効かなくなるという大きなデメリットはあるものの味方を攻撃することはないし、同ランクならば一枚で迷宮の主に対抗できるほどの強力なスキルである。

平常時はその近接能力とルーン魔術でテクニカルに立ち回り、いざという時は暴走状態となって短期決戦や撤退の際の殿に置くこともできる、高水準に纏まった強カードである。

さて、どうするか。

これは難しい問題だ。

数あるカードの中からこの二枚のカードを選んだのにはもちろん理由がある。

セレーネーはイライザの、ベルセルクはユウキのランクアップ先なのだ。

つまり、イライザとユウキのどちらをランクアップさせるかという話なのだが、実のところユウキをランクアップさせるのは少し問題があった。

ユウキをランクアップさせた場合、限界突破や真眷属召喚といった特殊な後天スキルがどうなるか分からないのだ。

無事に引き継がれればそれで良いのだが、引き継がれない可能性も普通にある。

その場合、せっかくランクアップしたというのに特に戦闘力のアップには繋がらず、復活コストだけが跳ねあがるという結末となってしまうだろう。

それにシロとクロが失われてしまうのもある。

だが、イライザの方であれば特にそういったリスクもなくメリックだけを享受できる。

唯一の懸念点は、『マイフェアレディ』が使えなくなるかもしれないことだが……これに関しては彼女の資質が大きく関わっている可能性が高いためあまり心配はいらないだろう。

というわけでこの二つだけを見比べた場合、ランクアップさせるならばイライザの方……ということになるのだが、ここで問題となってくるのが残りの月の三相女神についてだ。

実は、ユウキはアルテミスにも、メアはヘカテーにランクアップ適性を持つのである。

セレーネーの真価を最大限発揮させようと思うならば、アルテミスとヘカテーも揃える必要がある。

そうだったら、ユウキとメアもアルテミス、ヘカテーにランクアップすることになるだろう。

もちろん、ユウキたちはアルテミスらにランクアップせずにそのまま使い、アルテミスとヘカテーは新しい仲間としてイライザとセツトで使うという手もある。

そうすればせっかく得たメアの霊格再帰も無駄にはならないし、ユウキの特殊な後天スキルについても悩む必要はない。

だが、Bランクの入手困難さを考えた場合、これ以上ユウキやメアに新しいランクアップ先を用意する余裕はない可能性がある。

下手するとユウキたちはこれ以上ランクアップできぬまま現役引退ということすらあり得る。

それはあまりに心苦しい。やはりどこかでアルテミスらにユウキらをランクアップさせることになるだろう。

つまり、この選択は単純な戦力アップだけでなく、今後の俺のデッキ戦略にも関わってくるのである。

月の三女神ルートを選んだ場合、すべて揃うまで真価を發揮できない上に、せっかく得たメアのリリムへの霊格再帰も失われることになる……。

一方でベルセルクを選んだ場合、変にランクアップ先に縛られることがなくなる分、ランクアップがやりやすくなる。

それに、月の三相女神はどれも後衛よりのカードというのもデッキのバランスを考えるとあまり良くない。

そもそも今のウチのメンバー自体がやや後衛よりなわけで。

ここで近接特化のベルセルクが手に入れば今後のデッキ構成はかなり楽になるだろう。

マイナス要素である暴走についても、もしかしたら勇者スキルでコントロールできるようになるかも？ と少しだけ期待してもいる。

上手く歯車がかみ合えば劇的に戦力アップが見込めるだろう。

だが、すべてそろった際に強いのは月の三相女神の方であるのも事実……。

ロマンを追いかけるか、現実路線でいくか。

……いや、待て。

いつの間にか交換することを前提に考えていたが、キマリスをそのまま使うという選択肢もある。

キマリスをそのまま使うメリットは、二つ。

一つは高位の装備化能力によりメンバー一人にBランク一枚分の戦闘力を上乗せできること。

これはヘタにだれかランクアップさせるよりもよほど使い勝手が良い。

戦闘力不足により二軍に甘んじてはいるが、優れたスキルを持つカードを一線級にすることができし、いざという時には俺自身のガードにも使える。

もう一つは、軍団召喚スキルという数の暴力を得られること。

数の暴力はウチのパーティーに最も欠けていた要素であり、その厄介さは織部との模擬戦でも嫌と言うほど味わった。

わざわざ月の三女神を揃えずとも、眷属召喚に対抗するなら眷属召喚持ちをデッキに入れる方が手っ取り早い。

これからCランクが雑魚敵としてわんさか湧いてくるCランク迷宮に挑む身としては、喉から手が出るほど欲しい能力だ。

……ヤバイ。考えれば考えるほど、キマリスが魅力的に見えてくる。

デメリットは、せつかく高い価値のカードを交換できるのにそのチャンスを捨てることになること。

キマリスでセレーネーやベルセルクと言った高額カードが手に入るチャンスなどこれが最初で最後だろうし、「今だけ！ 特別！ 貴方だけ！」というヤツだと考えるとチャンスをどぶに捨てようとしている気がしてくる。

とは言えデッキの内情を考えると現状で最適なのがキマリスなの

も確かなわけで……。

「ここは一つ賭けに出てみるか……？」

「遠野さん……」

「はい、なんでしょう」

「これ、ちよっと……保留ってのはできないですか……？」

「もちろん。良いですよ」

「やっぱダメか……えっ!？」

「高額カードのトレードですからね。ここですぐ答えを出してくれないなんて無茶なことは言いませんよ」

「あ、そ、そうですか……」

「そりゃそうか……。考えてみれば十億以上の資産のやり取りだもんな。」

「ただ先方の事情と言うのもありますから……。できれば半年、最悪でも一年以内に答えを出していただけると助かります」

「半年から一年……。かなり余裕があるな。」

「それだけあればキマリスを実際に使ってどうするか決めるだけの時間は十分ある。」

「その間に新しいBランクカードを手に入れる可能性もゼロではない。」

「変化する状況に合わせ、最適なトレードを（あるいはトレードしないことも）選択できる。」

「ただあらかじめご承知おいていただきたい点がいくつか」

「はい」

「まず、正式にお断りいただくまではカードがトレードできない状態にしないでいただきたい、というのが一点」

トレードできない状態。つまり名づけしたりロストしたりしないようにしろ、ということだ。

まあ当然の要求だな、と頷く。

「次にキマリスを使用し、その結果マイナススキルなどを得てしまった場合、こちらの提示するカードを変更させていただく、あるいはこの話自体をなかったことにさせていただく場合もある、というのが一点」

これも当然の話だ。

マイナススキルがつけば当然カードの価値も下がるし、最悪もう要らないとなるのも当たり前のことだ。

「逆に北川さんが使っていくうちに優れたスキルなどがついた場合であっても、これ以上のカードを提示するのは難しい、というのが一点」

……ふむ、良いスキルがついてもこれ以上キマリスの価値は上がったたりしないということか。

マイナススキルがつけば価値が下がることを考えるとアンフェアなように感じなくもないが、すでにかなり高めの価値を付けられていることを考えればこれも納得せざるを得ない。

「最後に、これらのリストは複数の希望者の提示品からとなりますので、時間の経過と共にリストに変更がある可能性もあります。これは増減ともに話になります」

……このリスト、複数人からの提示品のリストだったのか。
まあ、考えてみれば当たり前の話か。何十億もするカードのリストなんて大企業であつても用意するのは難しい。
複数人の富豪、あるいは企業からなるリストと考えるのが自然だ。リストに変更があるということはセレーネーやベルセルクが消える可能性もあるわけだが、仕方ないか。
逆にもつと良いカードが追加される可能性もあるわけだしな。

「以上になりますが、問題はないでしょうか？」

「はい、問題ありません。それでよろしくお願いします」

よし！ これである程度の猶予が出来た。

俺が内心でガッツポーズを取っていると……。

「それとこれは個人的なお願ひなのですが」

「なんですか？」

「できれば正式にトレードするまでの間にサインを作っていただけ
ると助かります」

「さ、サイン？」

「ええ、やはりこれが北川さんのキマリスという証拠が必要となりますから、その証明代わりに」

「あ、ああ……なるほど」

サイン……正直ちょっと恥ずかしいな。

でもさっき無理気味なお願ひを聞いてもらった身としては断り辛い……。

仕方なく俺は頷いた。

「わかりました……でも俺サインなんて持ってないし、どう作れば

良いのかもわからないんですけど」

「わかります。皆さん最初はそうおっしゃいますから。まあ、そういうのはプロに頼んで作ってもらうのが楽だと思いますよ」

「プロ、ですか」

「ええ、今はネットで数千円くらいで頼める時代ですから
「なるほど」

しかし俺がサインを、ね」。

家族や東野たちにバレた日には憤死しちゃうな。

こりゃあなんとしても隠し通さねば……。

そう覚悟する俺であったが、後日蓮華によって家でサインの練習をしていたところを家族にバラされ羞恥にのたうち回ることになるとは、この時は予想だにもしていなかったのだった。

第三話 キマリスは 仲間になりたそうに こちらを見ている！
(後書き)

モブ高生のコミカライズ第二話が更新されました！

コミックノヴァ様ではすでに先行公開済みで、ニコニコ静画様の方は明日から公開となっております！

下のリンクから飛べますので、ぜひよろしくお願いします！

第四話 オーダーメイド

夏休み、二十二日目。早朝。

俺はまだ薄暗い通学路を一人歩いていた。

明け方ということもあり周囲に人気はないが、軍人のようにボデイーマーを身に着け、子供一人くらいは入りそうなバックパックを背負った物々しい装いの俺を、時折すれ違う人々がチラチラと見てくる。

『ついにこの日がやってきたね、マスター！　パワーアップしたメアちゃんの力を見せる時が！』

突然俺の前に手のひらサイズの立体映像が現れ、銀髪褐色肌の美少女の上半身が映し出された。

山羊の角と小さな蝙蝠の翼を生やした人外の少女は、やる気をアピールするようにシユババツとシャドーをする。

念願のサキユバスになり、リリムへの霊格再帰も得たメアはやる気満々のようであった。

『……霊格再帰の先輩として言うておくが』

そんな彼女へと親友の座敷童が一つアドバイスを送る。

『迷宮の主との戦い以外で霊格再帰するチャンスはあんまりねーぞ』

『なん……だと……』

バンバン霊格再帰して眷属召喚を使って活躍する自分を想像していたのだろうメアが、愕然とする。

『Dランク迷宮でもアタシが道中で霊格再帰するところなんてあんななかっただろ？』

『で、でもそれは主以外で霊格再帰するまでもなかったからじゃ……』

『それもあるが、主な理由は一日一回しか使えない霊格再帰を温存するためだ。むしろCランク迷宮では切り札としてさらに霊格再帰は慎重に使われるはずだぞ』

そう言つて「なあ？」とこちらを見る蓮華に俺も頷いた。

メアの霊格再帰は、Cランクモンスターがいくらかでも湧いてくるCランク迷宮では、ある意味蓮華以上の戦力だ。

Cランク迷宮ではこちらの数倍の敵に囲まれることも想定される。その際、サキュバスを無限に召喚できるメアは、数の差という不利を覆すことが出来る唯一の切り札だ。

そんなメアをどうでも良いところで使つて、いざという時切り札がありませんでは話にならない。

よつて、彼女の霊格再帰の使用は蓮華以上に慎重なモノとなるだろう。

『そんな〜』

せつかくの霊格再帰が自由に使えないことを知つたメアがガツクリと項垂れる……が。

『でも切り札的存在つても悪くないかも！』

すぐに持ち直した。

前はコンプレックスからか拗ねると長かったメアも、ランクアップによりかなりポジティブになったようであった。

まあ実際、今のメアは霊格再帰以外にも男性特攻、人を呪わば穴二つ、生還の心得、耐性貫通と切り札と呼ぶに相応しい力があつた。……出会った頃はただのインプだった彼女がよくここまで育つたものだ、と少し感慨深くなる。

『これは蓮華からマスターの相棒の座を奪い取る日も近いかも！』

……そしてすぐに調子に乗っちゃうところも、彼女の可愛いところだった。

『ああん？ 百年はえーんだよ、ボケ』

『雑魚じゃありませーん。お前と同じC+です』

そう言い返すメアに、蓮華は「ふん」と鼻を鳴らし、何やらコマカミ辺りを弄る様な仕草を見せると……。

『最大戦闘力たったの1500か。雑魚が』

『ぐ……！』

戦闘力というカード間の絶対の格差を持ち出され、言葉に詰まるメア。

晴れてランクアップと霊格再帰という力を得た彼女であつたが、蓮華との間にはまだ限界突破という越えられない壁が存在していた。……いつもならこの辺りで泣きが入るメアだが。

『ふ、ふん……カードの価値は戦闘力だけじゃないわ！ 私たちに

はもう一つの格付けがある！——そう、値段よ！』
『……ッ！』

思わぬメアの反撃に、今度は蓮華の方が言葉に詰まる。

……なかなか興味深い展開になってきた。

カードが自分の価格をどう思っているのか、というのはマスターとしては気になりつつも簡単に聞けない繊細な話題である。

かつて学生トーナメントの際、蓮華は自分の値段にコンプレックスを持っているようなそぶりを見せていたが……。

『メアのサキュバスは最低でも一億以上なんですけど座敷童さんのお値段はおいくらでしたっけ？』

『ぐぐぐ……て、てめえ』

『確か四千万円でしたっけ？ あ！ でも、確か蓮華さんは半額シールが貼られてたから二千万か。うん、お手頃！』

『ああ！？ 半額シールなんて張られてねーわ！ そもそもアタシは吉祥天にいつでもランクアップできるんだから、そっちの値段で考えるべきだろうが！』

『でもお預け喰らってんじやん』

『くっ！』

……今日のメア、レスバつえーな。

と感心しながら見守っていると、蓮華がこちらをギツと睨み。

『おい、歌麿！ 今すぐアタシを吉祥天にランクアップさせろ！』

しまった、こちらに飛び火して来たか。

「お前、それは話し合ってただしないうつてことで納得しただろうが」
『メアに舐められたままでいられるかよ！』

ガキかよ。……ガキだったわ。座敷「童」だし。どう宥めたもんか……と俺が頭を抱えていると。

『はあ、まったくこれだから安物どもは……。五十歩百歩の争いを、見苦しい』

そこへ急に割って入る、新たな口リ。

『値段で言うならば、このアテナが一番に決まっているではないですか。尤も、この妾に値段を付けること自体が不敬極まりないです』
『がね』

そう言っただけで、見事なドヤ顔を晒すアテナに、しかし蓮華とメアはしばらくとした眼差しを向け。

『いや、アンタこそマジモンの欠陥品じゃん』

『零落スキル持ちだった頃のアタシ以下。半額シールどころか、80%オフレベルだろ』

『な、な、な……！』

滅茶苦茶辛辣な二名の言葉に、愕然とするアテナ。

……うん、まあ、ぶっちゃけ反論の余地がないというか、このアテナの価値って眷属召喚を除けば他のアテナの蘇生用としてしかないというか……。

『歌麿！ 貴方の信ずる守護神が木っ端の神と淫魔風情に馬鹿にされていきますよ！ 貴方はそれで良いのですか！？』

涙目となって縋るような眼差しを向けてくるアテナ。

いや、うちの守護神はイライザさんなんだが……。

「ちゃんと幼体スキルの解除方法は調べているのですか!?」 歌麿

「!」

「解除方法かあ……」

うーん、と腕を組み考える。

俺もどうにかアテナのマイナススキルを解除できないかと色々調べてはみた。

が、色んな考察サイトを見ても幼体解除に繋がりそうな情報は見つからなかった。

俺自身も、もしかして一見迷宮内では使い道のない『育児』スキルが幼体解除に繋がるのでは? とか自分なりに考えてみたが、すでに何年もかけて幼体スキル持ちを『育児』スキルで育成してみた研究所があるらしく、俺が思いつくようなことは頭の良い奴らが先に思いついているよなあ……としみじみ思った。

というわけで。

「いやあ、探しているんだけど……ちょっと見つからなかったわ」
「くっ……」

今しばらくアテナが本領発揮する日は来ないようであった。

まあ、だからと言って売り払ったりする予定もないけどな。

このアテナを売り払えば、彼女が行きつく先は蘇生用だろうし、一度でも呼び出して会話してしまった以上、それはさすがに気が引ける。

そして何よりもこのアテナとは『フィーリング』が合う。

俺も冒険者だからデッキを組む際は戦闘力やスキルのことを考えて組む。だが、最後の決め手はフィーリングとなる。

これが結構に馬鹿にならない話で、自分の体質や嗜好がダイレク

トに影響してくるリンクにおいて、フィーリングというのは重要な要素なのだ。

というわけで、俺はどんなに有用なカードであっても、フィーリングが合わなければデッキに組み込むことはないし、逆に今は欠点だらけのカードであってもフィーリングが合えばとりあえず手元に残して置くつもりだった。

「ま、これから潜るCランク迷宮で思わぬヒントが見つかるかもしれないし、それを期待するしかないな」

『頼みますよ、歌麿……。妾の臆病スキルもおそらくは幼体スキルによる弱体化が影響しているはず。幼体スキルさえ解除されれば妾も万全に力を発揮できるはずなのです』

「ああ、期待しているよ」

俺は本心からそう言った。

アテナがすべての力を発揮できるようになれば、単独でのCランク踏破すらも夢ではない。

Bランク最高峰のアテナには、それだけのポテンシャルがある。

そうなれば、今はプロチームの一員というだけの俺であるが、単独でのプロライセンス取得も可能となるだろう。

『……でも、マスターももうCランク迷宮か、メアが出会った時はまだ一ツ星だったのに、そう考えると凄いよね』

俺とアテナの会話を聞いていたメアが、どこか感慨深そうに言う。……そうか、メアを手に入れたのは二ツ星昇格試験のことだから、あの時はまだ一ツ星だったか。

それが、一年と経たずCランク迷宮に挑もうとしている……そう考えると確かに凄いといしか言いようがなかった。

『このままのスピードで駆けあがっていったら、一体どうなっちゃうんだろ?』

「そりゃあ……………」

俺は答えようとして言葉を失った。

まったくビジョンが浮かばなかったからだ。

一年前は、まだ冒険者ですらなくスーパードでバイトをしていた。それが今ではCランク迷宮に挑もうとしている。

じゃあ、一年後は一体どうなっているのか…………。

全く想像できなかった。

とにかく高みを目指してガムシヤラに突っ走ってきたが、目指すところも無いのに走り続けてどこへ向かうつもりだったのか…………。

これまでは漠然とプロを目指していたが…………。

俺は、冒険者としての目標を持っていなかったことに今更ながら気付いたのだった。

「お、来たね。おはよ、マロ」

「おはよう、先輩」

校門に着くと、そこにはすでに師匠と織部の姿があった。

「ああ、おはよう」

俺の顔を見た師匠と織部が首を傾げる。

「うん? どうしたの、マロ?」

「なんだか顔色が悪いが……」

「……ちよつと昨日眠れなくてさ。ところで、アンナは？」

周囲を見渡し言う。

話題を逸らすためになんとかそう言ったが、彼女はこういう時に大抵一番乗りしてくるので、姿が見えないのは気になった。

「まだ来ていないな……もう五分前なのだが」

スマホを取り出して織部が答える。

「……小夜、スマホ持って来たんだな」

スマホは、冒険者の必需品だが、今回の迷宮では役立たずだ。

うっかり持ち込んで壊れたら困るので、俺は家に置いてきていたのだが……

「うむ、確かに迷宮の中では役には立たないだろうが、一人くらいは持ってきていないといざという時に連絡を取れないのも困るだろうと思つてな。もちろん迷宮に入るときには置いていくさ」

なるほどね、と後輩の気配りに感心しつつ問う。

「それで、アンナから連絡は来てたか？」

「いや、何も。アレはあれで真面目な性格をしているから、ここにきて何の連絡もないということは時間までには着くということなのだろう」

そう織部が言った瞬間。

「――皆さん、おはようございます！ 時間通りッスね！」

通りからではなく、校門の向こうからアンナの声が聞こえてきた。
……なんだ、もう学校に着いてたのか。

「皆さん装備についてはばっちりッスか？ 一足先に迷宮の場所を見てきたんスけど、もう自衛隊の方々は撤収して、ダンジョンマートもすでに商品が並んでました。さすがダンジョンマート、仕事が早い！」

朝からテンション高いなあ……。

まあ、気持ちはわかる。今日からの攻略次第で、莫大な富を生み出す準シークレットダンジョンを独占できるかが決まるのだ。気分が高揚しないはずもない。

それに加えてアンナは補習から解放されたというのもハイテンションの要因なのかもしれない。

壊れたら困る機械類の類だけ下駄箱のロッカーに預け、いよいよ迷宮へと向かう。

うちの高校には珍しく展望台があるのだが、数年前に天文学部が廃部となって以降、屋上ごと封鎖され長らく使われていなかった。

今回迷宮が出現したのはこの展望台で、すでに展望台に隣接する形でダンジョンマートが建っていた。

「おっ、マジでダンジョンマートが出来てる」

「学校側には悪いが、学生の身としては学内にコンビニが一個あると助かるな」

「最寄りのコンビニも結構遠いッスからね」

「これからは屋上も出入り自由になるだろうし、お昼をここで食べる生徒も増えるかもね」

そんなようなことを話しながら迷宮へと入ろうとしたところで、ふと気づく。

「おつと危ない。このまま入ったらライセンスが破壊されちまうところだった」

俺の言葉に、皆もハツと自分のライセンスを取り出す。

「危ないところでした。ゲートを開けるのに必要だからナチュラルに持ち込んで壊しちゃうところでしたね」

「どこかに預けるところは……ないか。このまま床に置いていくしかねえか」

「まあ、今日のところは他の人間も入ってこないし、盗まれる危険はないだろう」

「うーん、でもいつまでもこのままってのもちょっと不用心ツスね。家に頼んでゲートの部屋にコインロッカーでも設置してもらえように頼んでみます」

そうしてライセンスを床に置いて、今度こそ迷宮へと足を踏み入れた俺たちを待っていたのは、灼熱の太陽と砂漠の大海原だった。

「あつちいな……」

俺は、決して沈まぬ太陽を忌々しく睨みながら、ホルダーからサラマンダーの外套を取り出した。

カードパックで当てたこのマントは、持ち主を火や暑さから守るという効果を持つ魔道具だ。

これにより燃え盛る家屋だろうが炎天下の砂漠だろうが火傷一つ負わずに行動できるようになるのだが、このマントが防いでくれる

暑さは肉体に支障をきたさないレベルなため、30度前半までの熱は普通に通してしまう。

30度オーバーという気温は、エアコンペンダントですっかり真夏でも快適な温度に慣れてしまった俺にはやや厳しいものがあつた。とめどなく噴き出してくる汗を拭いしつつ他の冒険者部の面々を見ると、皆もルーンの刻まれたお守りや氷精らしきモンスターを召喚したりと各々の方法でこの暑さに対応しているようであつた。

「アンナ、この階層のサブフィールド効果は？」

俺はさりげなくアンナの召喚した氷精の近くに寄って涼みつつ問いかけた。

Cランク迷宮から発生するフィールド効果には、その迷宮全体が持つメインフィールド効果のほかに、階層一個一個が個別に持つサブフィールド効果が存在する。

かつて俺が【不死】の効果を持つ階層で撤退せざるを得なかつたように、フィールド効果によっては圧倒的格下相手に思わぬ苦戦をさせられることも十分にあり得た。

「えっと……この階層の効果は衰弱のデバフみたいッスね」

自衛隊から渡された資料を読みつつアンナが答える。

「衰弱か……」

俺は一面の砂漠を見渡した。

目印らしい目印もなく、道なき砂の大海原。

ただでさえ体力を奪う灼熱の砂漠の中を、衰弱の効果で体力を奪われながら進まなければいけないというわけか……。

なかなか鬼畜な組み合わせだ。

やはりCランクの壁を一枚隔てて一気に難易度が上がった感がある。

まあ、でも……。

「雑魚しか出てこないことを考えれば、まだマシな方か」

「うむ、この手の階層は敵が手強くなればなるほどに地獄だからな……」

しっかりと準備をしてきた俺たち冒険者部の面々からすれば、さほどの障害でもない。

「さて、ではまずはカーバンクルを探しながら先へと進むとしましょうか。全員がひとまとめに行動しても無駄でしょうし、ここは手分けして……」

「いや、ちよつと待ってくれ」

アンナがバラバラになっての行動を指示しようとしたその時、織部から待ったがかかった。

「みんなで手分けして探しながら進むのも悪くはないが、先輩には一人先に進んでもらうのはどうだ？」

「俺だけ？」

「ああ。Cランク迷宮とは言え我々の実力ならばFランク階層の攻略は容易のはず。ならば最も時間と労力を要するカーバンクルの探索は我々に任せ、ハーメルンの笛を持つ先輩にはどんどん先に行ってもらった方が効率的だ」

「なるほど……。確かに千里眼持ちのカードと転移の魔道具を持つ先輩を遊ばせておくのは非効率か……。先輩がアマの中ではトップクラスの機動力を持つことはレースの結果からも証明されるわけですし」

問題は……、とこちらを見るアンナ。

「先輩には行けるところまで一人でCランク迷宮を進んでもらうこととなりますが……大丈夫ツスか？」

その質問に答えたのは、俺ではなく師匠だった。

「それは、大丈夫なんじゃないかな？ 以前一緒にCランク迷宮に潜った時もEランク階層を単独で踏破できるだけの力はあった。さすがにCランク階層は厳しいだろうけど、今のマロならこの迷宮でもDランク階層まで踏破できる実力はあるはずだよ」

「ああ、俺もあれから成長したし、今回は準備もバッチリだ。任せしてくれ」

この場で唯一のプロからのお墨付きと俺の同意を聞いたアンナは一つ頷く。

「ではお願いします。でも念のため行けたとしてもEランク階層までにしておいてください。ここはCランク迷宮の中でもトップクラスの難易度ツスから、慎重に行きましょう」

「了解」

「それじゃあこの自衛隊の資料は渡しておきますね。カーバンクルガINETTを回収したらバッジで連絡するんで、次の安全地帯に到達した時に迎えに来てください。転移でまだ未回収の階層に送ってもらう……って感じでどうツスか？」

「わかった」

大まかな方針が決まり、さっそく四方へと散らばっていく仲間たちを見送る。

……この広大な砂漠でたった一匹のカーバンクルを探すのは大変だろうな。

ただ先へ進むだけで良いという単純な役割を与えてもらったことに感謝しつつ、俺もカードを呼び出すことにする。

まずはイライザからだな。千里眼の魔法を持つ彼女を呼ばなくては攻略も始まらない。

移動はデュラハンのコシユタ・パワーか魔法の絨毯か。どちらでも問題ないが、衰弱のフィールド効果もあることだし、ここは魔法の絨毯で……。

そこまで考え、ふとドラゴネットの顔が脳裏に過った。

ドラゴネット、か……。

これまでであえてあまり触れないようにしてきたが、ある意味良い機会か。

こういう時にドラゴネットを呼ばないのなら、何のためにキーマアイテムを用意したのかという話になってしまう。

このまま放置し続けるくらいならば、いっそ手放してしまった方が良い。

そして、それはしないと……ドラゴネットは手元に置いておくと決めたのは俺自身のはず。

ならば……。

「来い！ ドラゴネット！」

光と共に現れたのは、漆黒の鱗を持った小型の竜。

ピシリと背筋を伸ばしこちらを見つめるドラゴネットへと、恐る恐る声を掛ける。

「……久しぶりだな、ドラゴネット」

「ハッ！ お呼びいただき光荣であります！」

敬礼のつもりだろうか……バツと翼を大きく広げハキハキと答えるドラゴネット。

その態度からは、半ば放置気味であったことへの不満は全く感じられない。

「―――本当に、このドラゴネットに『裏』なんてあるのか……？」

俺はかつてした蓮華との会話を思い出した。

「―――歌麿、あのドラゴネットには一応注意しとけよ」

それは、猟犬使いの事件が一応の解決を迎えて、少し経った頃……。

俺が自室で所持カードの整理を行っている時のことだった。

普段使っていないカードのスキルを見ながら、レギュラーメンバーとのシナジーを狙えないか考えていたところ、ふいに蓮華がそう言ったのだ。

蓮華が仲間に対してそんなことを言うのは初めて聞いたので、俺は内心でかなり驚いた。

「……なんかあったのか？」

「おそらくだが、たぶんあのドラゴネットには裏がある」

「……それは、なんか企んでいるってことか？」

俺はドラゴネットの実直な態度を思い返しながら問い返した。

ドラゴネットは強力だが扱い辛いと言われるドラゴン系にあって、滅私奉公のスキルもあってかとても従順で使いやすいカードである。

その従順さに甘えて些か便利に使い過ぎていることは否めないが、裏で何か企むほどの恨み辛みを貯め込んでいるほどには見えなかった。

蓮華を信頼している俺だが、彼女が全知全能だとまでは思っていない。何らかの思い違いや勘違いという可能性もあった。

「アレは多分、お前らが呪いのカードと呼ぶものに近い」

「……呪いのカード」

その時、俺の頭に過つたのはアヌビスのカードに殺された獵犬使いの手下の男だった。

呪いのカードには、カードからマスターを守るセーフティを外す力がある。

もしもドラゴネットもその呪いのカードというのならば、確かに警戒は必要だろう。

……だが、呪いのカードというのならば鈴鹿や、他ならぬ蓮華自身も呪いのカードのはず。

呪いのカードとは言え、それが必ずしも持ち主に牙を剥くとは限らないのだ。

ならばなぜ、鈴鹿の時は特に何も言わなかったというのに、ドラゴネットの時だけこうして警戒するのか。

そんな俺の疑問に対し、蓮華はどこか言葉を選ぶように答えた。

「……確かに、鈴鹿は呪いのカードではあるが、アレとは少し違う。呪いのカードは、言わば製造過程で歪みが出た規格外品だ。規格外品だけに多少不具合は出たりするが、まあそれだけだ。鈴鹿の奴も寂しがり屋なだけで、マスターを積極的に害する意識はない。規格外品ではあるが……」
『贈り物』^{プレゼント}であることには変わりないからな」

規格外品……なるほど、確かに蓮華や鈴鹿は、良くも悪くも規格

外という言葉が似合う。

通常の座敷童や鬼とはかけ離れた性格。カードでありながらマスターである人間を操ることのできる力……。

まあ、蓮華の出鱈目さに比べると鈴鹿はちよつとおかしなカードという枠を越えないが、普通じゃないのは確かだ。

それに恐れを感じないのは、彼女たちが俺を害することはないと信じているからだろう。

かつて鈴鹿は一度だけ俺を操ろうとしたことがあったが、あれは彼女なりに俺の身を案じてのこと。俺の人生を滅茶苦茶にしてやるう、とかそういうものではなかった。

便宜上、呪いのカードなんて呼んではあるが、彼女たちは俺を不幸にする存在ではないのだ。

なるほど、確かに呪いのカードであつても贈り物に変わりないの
だろう。

贈り物というものは、幸せなモノなのだから。

逆に言えば……。

「だが……アレは違う。アレには、明らかに悪意が籠められている
不幸なモノは贈り物とは呼べないということだ。

「あのドラゴネットの忠実な態度は演技つてことか？」

「いや、多分ドラゴネット自身にその意識はない。今のアレの人格
は、内に秘めた悪意に気付かれないための外殻みたいなもんだ」

「外殻……」

それは、カード本来の人格に仮初の人格が覆いかぶされている、
ということだろうか？

そんなことがあるのか？ そんなことが可能なのか？

悪意ある呪いのカードに、善良な人格を被せて他人のところに潜

ませるなど……。

もしそうだとすれば、まるでトロイの木馬のようだ。

普段は危険な存在だと悟らせず、いざという時にその本性を露わにして宿主を操る……。

言わば真の呪いのカードと言ったところか。

……ドラゴネットは元々俺が獵犬使いに襲われた迷宮で青木兄とトレードしたものだ。

ならば、やはり送り主は青木兄、か？ あのタイミングで獵犬使いに襲われたこともあってかなり怪しく思える。

いや、ウイルスみたいなもんとすれば無差別にばら撒かれていたのをたまたま彼が手に入れてしまったという可能性も高いか。それがたまたま俺のところに戻って来た、と。

怪しくはあるが、現在のところは推定無罪といったところ。

「選択肢としては大体三つ」

蓮華が指を三本ピツと立てる。

「危険物はさつさと手放すか、あえて爆発させて送り主の真意を探るか。あるいは……」

「あるいは？」

「仮初の人格たる外殻が本物になるほどにちゃんと育てるか……悪意を完全に封じ込められるくらいにな」

「……………」

「ま、どれを選ぶかはお前次第だ。……アタシはどの選択肢を選んでも、お前の意思を尊重するぜ」

「……マスター？」

ドラゴネットの気遣わしげな声にハッと我に返る。

「いや、何でもない。それよりお前に見てもらいたいものがあるんだが」

そう言っただけ俺が取りだしたのは、星で交換したドラゴネットのキーアイテムだった。

——蓮華に忠告されてからというものの散々悩んだが、俺はドラゴネットの仮初の人格を本物にする道を選ぶことにした。

最初はさっさと売り飛ばしてしまうことも考えた。……が、それはそれで誰かにババを押し付ける形となるし気が引ける。

かといって、あえて暴発させて相手の出方を探るのもリスクがある。

ならば仮初の人格を本物にして不発弾化させてしまう方が俺の性に合っている……そう思ったのだ。

もしそれで地雷が爆発したとしてもそれはしょうがないことだ。蓮華や鈴鹿もいることだし、たぶんドラゴネットに乗っ取られることはないだろう……たぶん。

というわけで、これまで放置気味だったドラゴネットであるが、歩み寄りの第一弾として俺が用意したのがこのキーアイテムだった。

「これは……」

ドラゴネットが、食い入るようにキーアイテムを凝視する。

真竜の角、飛竜の翼膜、地竜の化石、毒竜の瞳、龍の玉……。

これらはそれぞれドレイク、ワイバーン、ザウルス、バジリスク、東洋龍に対応するキーアイテムだ。

これにヴィーヴィル（半人半竜）を加えた六種が、ドラゴンとしての基本的な分類とされている。

とりあえずこの五つのキーアイテムのどれかに反応してくれたら思っているのだが……。

「どうだ？ 何か感じるものはあるか？」

「……………」

「ドラゴネット？」

「ッ！ 申し訳ありません、つい魅入ってしまい……。そう、ですね……妙に惹きつけられるモノを感じるのは……………」

そう言っただらゴネットが爪先で示したのは、真竜の角。

ドレイクか。ある意味正当進化系って感じだな、などと俺が思っている……………」

「これ……………それと、これと、これ……………」

「えー!？」

ドラゴネットは続けて飛竜の翼膜、毒竜の瞳、龍の玉を指差していく。

ザウルス以外の全部、だと……………？

確かに、遠野さんから貰った研究データから複数の霊格再帰を持つカードがあるということは知っていたが、それは極めて稀という話だったはず。

しかもそれらだっただけでほとんどが二つの霊格再帰を持つだけで、三つ以上は世界でも数例という話だったはずだ。

その貴重な多重霊格再帰持ちが、偶然俺のところへ……………？

あまりに出来すぎている。作為を感じざるを得ない。ドラゴネッ

トを送り込んできた者があえてそういったカードを選んで送って来た。……そんな風に感じてしまう。

だとすれば相手の狙いはなんだ？ ドラゴネットを霊格再帰させること、か……？

もしそうならこのままドラゴネットを霊格再帰させようとするのは危険かもしれない。

やはり、手放すべきか……？ しかし……。

俺の考え過ぎなのかもしれない。

だが……直感があった。

この問題からは、安易に逃げるべきではない。この経験は、必ずいつか俺の身を助けてくれる、という直感が。ならば……。

「……ドラゴネット」

「ハッ！」

「お前さえ良ければ、名づけをしたいと思っているんだが」

「……む。名づけ、でありますか」

これまで明朗に答え続けてきたドラゴネットが、ここで初めて悩む素振りを見せる。

俺は緊張しつつ、返答を待った。

そして。

「実に光栄な話ではありますが……申し訳ございません。未熟者ゆえ、今はまだ……」

「そ、そうか……」

初めて名づけを断られた俺だったが、内心では逆にホッとしていた。

これまで放置気味であったドラゴネットとの間に、名づけを受け

入れてもらえるほどの絆を築いていたとは俺も思っていない。

逆に名づけを受け入れられる方が不自然。無条件で名づけを受け入れるよう仕込まれていたのでは？ と疑っていたところだ。

だが、ドラゴネットはちゃんと名づけは断った。

少なくともこの外殻的人格については白と考えても良いだろう。

ならば、あとはこの外殻的人格との仲を深めていけば良いだけだ。

「申し訳ございません……」

「いや良いんだ。いつか、ドラゴネット自身が受け入れても良いと思ったら言ってくれ。まあ、それはともかくこのキーアイテムについては受け取ってくれ」

「ハッ、いえ、しかし……」

「元々お前のために用意したものだし、遠慮なく受け取ってくれと助かる」

これらのキーアイテムは、霊格再帰のため以外にはあまり使い道のないアイテムとなっている。

一応使おうと思えば使い捨ての魔道具として使うこともできるが、その効果が値段と釣り合っているとは言い難い。

ならばいつかドラゴネットが名づけを受け入れてくれる日を期待して、あらかじめ与えてしまっても変わらないというものだ。

「……………」

しかし、名づけを断ったことへの後ろめたさか、ドラゴネットは中々受け取るうとしない。

零落スキル持ちの本能からか、何度か手を伸ばそうとしては引っ込めるといふことを繰り返している。

もう一押し、か？ いや、だが下手なことすると滅私奉公が働いて逆に受け取ってくれなくなるかもしれない。

どうしたものか……と俺が頭を抱えたその時。

『マスター、よろしいでしょうか？』

カードギアからイライザの立体映像が浮かび上がる。

彼女が自分からこの機能を使って話しかけてきたのは初めてのことで、俺は内心かなり驚きつつも答えた。

「なんだ？」

『そういつことでしたら、ドラゴネットの教育はこの私に任せて頂けませんでしょうか？』

「イライザに？」

これまた珍しいことが起こった。まさかイライザが誰かの面倒をみたいと言い出す日が来るとは……。

『聞けばそのドラゴネットは未熟さ故マスターの名づけを受け入れられないとのこと。であれば、未熟でなくなれば名づけを拒む理由もなくなるかと……』

「いや、それは……」

未熟者故つてのは建前で、本音としてはまだ名づけを受け入れられるほど俺のことを信じ切れていないだけだと思っが……。

……まあ、イライザにはまだ、本音と建て前の判断は難しいか。

『それに……』

とイライザはわずかに口籠り……。

『……これは個人的なことなのですが、ドラゴネットの教育は私が

教導スキルを得るための貴重な経験になるかと』

「ああ、なるほど」

俺は納得した。

イライザにはメイドスキルの習熟と共に教導スキルの習得を命じていたが、順調な前者と異なり教導スキルの方は遅々として進んでいなかった。

俺は単にレアスキル故に必要な熟練度が多いスキルなのだろうと気にしていなかったが、イライザが教えを受けるばかりで誰かを教えた経験がないため、と考えれば納得できる。

「そういうことなら、イライザに任せようかな。ドラゴネットがそれで良いならだけど」

「ハッ！ 了解であります。これよりイライザ殿の指導下に入ります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします」

ビシッと敬礼するドラゴネットの眼は、いつになく精気に満ちているように見えた。

やはりドラゴネット自身も、戦力外の自分の身に何かしら思うところがあつたのかもしれない。

そんなドラゴネットを見て、イライザも心なしか満足げに頷き。

『お任せください、マスター。必ずやドラゴネットを一人前のメイドに育て上げて見せます』

「え？ メイド？」

思わず八モる俺とドラゴネット。

そんな話だったっけ……。まあ、いいか。ドラゴネットの教育はイライザに任せるとしよう。

俺は助けを求めるような目を向けてくるドラゴネットからスッと

目を逸らした。

こうしてイライザに初の弟子（部下？）が出来たのだった。

第四話 オーダーメイド（後書き）

【TIPS】フィールド効果

アマチュアクラスとプロクラスを分ける最大の壁、それがフィールド効果である。

フィールド効果には全階層に共通して付与されるメイン効果と、一階層ごとに個別のサブ効果があり、メイン効果がその迷宮の大きな難易度を決める。

フィールド効果は、プラスの効果は迷宮側のモンスターにのみ、マイナスの効果は冒険者側のみに働くという特性があるため、冒険者側は常に不利な戦いを強いられることとなる。

第五話 ヒヤシンス

「とりあえずここまででは順調にくれましたね」

ドサリと教室の椅子に座りこみアンナが言った。
教室の窓から見える外はすっかり暗い。

時刻は夜八時。目標であったEランク階層への到達と、道中の力
ーバンクルガーネットもすべて回収した俺たちは、今日の攻略はこ
こまでとし、地上へと帰還していた。

「しかし、予想以上に手古摺ていずったな。やっぱり環境の変化とフィール
ド効果が地味にキツイわ」

さすがに低階層ということもあり道中の敵に苦戦することはなか
ったが、それ以上の敵として立ちふさがったのが、急激な環境の変
化と嫌がらせのようなフィールド効果であった。

炎天下の砂漠、吹雪の雪山、大雨の密林、冷氣漂う鍾乳洞、溶岩
の流れる火山、夜の墓場……。

暑さにはサラマンダーの外套、寒さにはエスキモーの熊の毛皮、
雨風にはアンナから借りた嵐除けのルーンのお守りと、各種魔道具
で対策はとったものの……こうも一階層ごとに気温差も昼夜も出鱈
目に変わると恐ろしく体力が削られていった。

もちろん魔法で体力を回復させながら進んだのだが、自律神経と
かが狂うというか、精神の方がすり減っていくのだ。

一階層ごとに、魔法で回復させても取れないダルさが少しずつ蓄
積されていくのがわかった。

それに拍車をかけたのがフィールド効果で、敵のバフの類はまだ

敵が雑魚なので問題なかったのだが、スキル封印やら特定属性召喚不可やら……こちらの能力やカードを制限してくるものには参った。特にスキル封印については、千里眼の魔法も畏解除も使えなくなることもあって、二ツ星昇格試験以来の手探りでの迷宮攻略を強いられることとなった。

どこにあるかわからない畏に警戒しながら進むのはかなり精神が削られ、自分が迷宮攻略において如何にイライザへと依存していたのかを改めて自覚した出来事だった。

「予想以上に手古摺ていずらされたと言えば、カーバンクルツスよ。まさかこんなに見つけるのに時間が掛かるとは……」
「それな……」

俺たちは同時に深々とため息をついた。

早朝から始めて15時間以上にも及んだ迷宮攻略であったが、こつも長時間の探索となった最大の要因が各階層のカーバンクル探しであった。

Eランク階層に到達してからは俺も搜索に合流したのだが、すでに攻略開始から十時間近くが経っていたというのに合流時点で4階層までしか回収できていなかったほどだ。

途中で織部が俺のキマリスの権能なら隠された財宝の在り処……すなわちカーバンクルの居場所がわかるのでは？ と気付かなかつたら今日中にすべてのガーネットを回収できなかつたかもしれない。

「しかし、こうなると先輩に先行してもらうメリットもほとんどないツスね。結局先輩がいないとカーバンクルも探すのに時間がかかるわけですし」

「うーん、あるいはガーネット回収係にキマリスを預けるって手もあるが」

俺の提案にアンナは数秒ほど難しい顔で腕を組み……。

「……いや、それはやめておいた方が良いでしょう。同じチームとは言え、カードの貸し借りはトラブルの元になるんで」

……確かに、鷲鼻の男こと田中さんのチームが解散した最大の要因も借りたカードを失ったことだったな。

田中さんを襲った不幸は、ハーメルンの笛など色々と俺に通じるところがあって他人事とは思えない……。貸す側が俺の方だとしてもカードの貸し借りはやめておいた方が無難だろう。

カードのレンタルは、最悪失っても構わない物、関係が切れても良い者に限るべきだ。

「どうしても仲間のカードが全体に必要なならチームで買い上げて共有財産にするべきですね。……報酬の分配を増やす形での分割払いでも良ければその方がウチとしても助かるんすけど」

「あ……」

伺つような目で見てくるアンナに、今度はこちらが難しい顔になる。

「実はキマリスは買い取りのオファーが来てんだよなあ……それも結構良い条件で。今は思うところがあつて保留にしてもらってるけど」

「ああ……大会の賞品ですし、先輩も結構有名になってきましたもんね。そりゃプレミアもそこそこ付くか……」

ガツクリと頂垂れるアンナ。

「申し訳ないツスけど、チームで買い取る形になる以上、相場以上

の金を出すのはちょっと難しいツスね。ただ、ウチのチームで買取るなら、メリットとして先輩にも使用権が残る形になるっていうのは考えておいてください」

「わかった」

遠野さんのところに売るなら、相場よりもプレミアがついた状態でトレードできる。

ウチのチームに売るなら分割払いかつ相場通りの査定だが、ある意味で俺の手元に残るのがメリットというわけか。

名づけやランクアップへの使用はできないが、必要とあらば俺も使えるというのはかなりデカイ。分割払いが終わってないうちは、ガーネット回収以外では俺が優先的に使わせてもらえるだろうし。

それに何より、分割払いをガーネットでの支払いにしてもらえば自然な形でガーネットの入手を増やすことができる、か……。

ここにきてキマリスの株価が思わぬ形で急騰してきた感じだ。ますますキマリスのトレードが悩ましくなってきた。

「にしても、先輩がカードの貸し出しを提案するって……ちょっと意外ツスね」

「そうか？」

「ええ、先輩は名づけ派ですし、カードに対する独占欲は結構強めだと思ってたんで。二線級のカードならともなく、キマリスは普通に一線級ですし」

「あ……」

なるほどね……そういうことか。

「確かに自分で使っちゃって一度決めたカードなら、まだ名づけをしないでなくても絶対に貸し出ししたりはしないけど……別に俺も手に入れたすべてのカードを使っちゃってわけでもないしなあ。使ってみて、フィ

ーリングが合わないと感じたり、まだ本格的に使つかどうか決めてないうちは貸し出したり手放したりすることもあるさ」

例えば、学生トーナメントの時に使ったナイトメアとか、一条さんに貸し出してるフェニアとメニアとか。

能力的には優れているので一度使ってみたけれど、長く使うにはなんとなくしっくりこなかったので手放したカードというのは、いくら存在する。

そういったカードは、碌に使いもせず俺の元で死蔵するよりも大事にしてくれる持ち主のもとに流れ着くことを祈って手放してやるのが、マスターとしての思いやりとも言えた。

そう言う意味では、キマリスはアテナたちのように一発で使いたいと思うほどの強い手ごたえもなく、しかし即座に手放すほど相性が悪いわけでもない、いわば試用期間かアルバイト的な感覚が強かった。

これからキマリスがうちの正社員になれるかはその働きぶりを見て、といったところか。

「ただいま」

「晩御飯買ってきたよ」

そこで屋上のダンジョンマートに晩飯を買いに行ってくれていた
師匠と織部が戻って来た。

「お、ありがとうございます」

「サンクス。いくらだった？」

「いいよ、これぐらい」

「ん、じゃあ次は俺とアンナが買い出しに行くってことで」

「了解ッス」

俺は取り出しかけていた財布を戻し、今回は有難くご馳走してもらうことにした。

「……ってわけで、明日からはパーティー全体で進むことにしました」

カップ焼きそばを啜りながら、アンナが二人のいない間に決まったことを話すと二人も納得したように頷いた。

「了解。まあ分かれて行動するメリットも無くなったもんね」

「逆に一緒に行動した方が、千里眼の魔法が使えない階層の攻略が効率的になるしな。そういう意味では私の提案は無駄だったな。すまなかった」

「まあそれは結果論ツスから、気にしないで」

「許してヒヤシンス」

「あ、全然気に病んでないな、これ。フォローして損した。……まあ本当に謝る必要はないんすけどね。あの時点では、キマリスがこんな形で役立つなんて、持ち主の先輩ですら気付いていなかったわけだし」

う、そこを突かれると俺も痛いな。軽く頭を下げておく。

「許してヒヤシンス」

「もしかして流行ってるんすか、それ？ 元ネタ知らないんすけど」

お、アンナはこのネタ知らないのか。漫画には詳しいのに珍しいな。もしかして日常系には興味が薄いんだろうか？

「まあ、良いです。話を戻しますけど、計算外だったのはむしろ力―バシンスの方って話ツス」

「うーん、確かにね。他のシークレットダンジョンに潜った時はこんなに大変じゃなかったし」

確かに、俺が師匠と一緒にシークレットダンジョンに潜って経験値稼ぎをした時はこんなにカーバンクルを見つけるのも大変じゃなかった。

まあ、あれは地下迷宮型だったからというのもあるが。

地下迷宮型はモンスターの出現位置が固定化されているから、最もカーバンクルを見つけやすい迷宮なのだ。総当たりで探していけば必ず見つかるのだから。

「……思ったんすけど、この迷宮って普通より明らかに広いッスよね？」

「やっぱり？ 俺もそう感じてた」

「うむ、階層の広さはランクが上がれば上がるほど広がっていくモノだが……」

皆の視線が師匠へと集中する。

「……うん、そうだね。この迷宮は他のCランク迷宮と比べてもかなり広いと思う。多分、Cランク迷宮の中でも最大クラスなんじゃないかな？」

「ああ、やっぱりッスか……」

プロ冒険者のお墨付きに、俺たちはガツクリと頂垂れた。

ランダム環境、フィールド効果、ローグライクダンジョンの三つに加えてフィールドの広さも地味な障害というわけか……。

「先輩が攻略していて特に厄介だと思ったことは？」

織部の質問に今日一日を思い返しながら答える。

「やっぱ、一番キツかったのはスキル封印の階層だな……。千里眼の魔法が使えなくなるのも痛かったけど、何より罨解除が使い物にならなかったのがとにかく怖かった。テレポーターの罨とか」

迷宮の罨もランクが上がれば上がるほど凶悪化していく。ウチは守護神イライザがいるため普段罨の怖さを意識することはないが、本来迷宮の罨というある意味モンスターよりも恐ろしい存在だ。

特にCランクからはテレポーターの罨がある。

これは、某ゲームの『いしのなかにいる』ほどの凶悪さはないが、迷宮内のどこかの場所に完全ランダムで飛ばされるという罨だ。

それだけなら転移系の魔道具があれば大した脅威でもないと思うかもしれないが、この罨の厄介なところはその時召喚しているカードと引き離されてしまうということだ。

迷宮内の階層は、基本的に一階層ごとに独立している――仮に地下を掘り進めて行っても次の階層に到達できないことは証明されている――ため、マスターと召喚されたカードが階層を隔てると、カードはスリープ状態へと移行してしまう。

この状態になると、マスターはそのカードを呼び出すことも戻すこともできなくなり、召喚されていたモンスターも実体化が維持できなくなる。いわば意識はあるが見ることも触ることも出来ない幽霊状態となるらしい。

この状態を冒険者業界では『迷子状態』と呼ぶのだが、これを解除するにはカードを迎えに行く必要がある。

迷子状態のカードに下手に動かれると合流が極めて困難になるため、基本的にカードにはその場に留まってもらい、マスターがそこまで迎えに行く形になるわけだ。

このシステムにより、マスターが安全な一階層に留まってカードだけ派遣して迷宮を攻略するということができないようになってい

るのである。

ちなみに、異空間型カードの中に籠ってカードに指示だけ出す…ということができないのも同じ理由によるものだ。異空間型スキルも内部が外部と隔離されているため、カードだけ出すと迷子状態となってしまう可能性がある。そのため、それを防ぐため、異空間型カードは、マスターとカードが内部と外部で別々に存在する場合、空間が遮断されず、誰でも目視可能の出入り自由となってしまうという仕様となっている。

もしも俺がこの罠に掛かった場合、迷宮攻略の際はイライザを常に出しっぱなしにしているので彼女とも逸れることとなり、かなりピンチなことになると思われる。

テレポーターの罠は、転移系の魔道具の位置情報を消す効果もあるため、なんとか安全地帯まで来てもカードとすぐに合流することはできない。

どの転移系の魔道具も一層には必ず飛べるので、またそこから攻略し直しというわけだ。

トッププロ冒険者の中には、低階層でこのテレポーターの罠を見つけたら敢えて掛かって攻略の効率化を図る強者つわものもいるという。

「確かに、テレポーターの罠は要注意ツスね。もしひっかかった場合は、そこがDランク階層以上だったら迷わず緊急避難のカードを使ってください。命大事に、です」

真面目な顔でそう言うアンナに、俺たちは了解と頷いた。

Eランク階層以下は、まあ、この面子なら自力で助かるだろう。

「あと敵に関してFランク階層だから大した障害にならなかったけど、これがDランク、Cランクの敵だとかかなりヤバいと思う。向こうは普通にスキル使ってくるし」

「……どうもスキル封印が最大のネックになりそうッスね。資料によると……Dランク階層に一つ、Cランク階層に三つありますね……。メインルートに一つ、サブルートに二つッス」

よりによってCランク階層に三つかよ……。思わず顔を顰める。

「師匠、プロの目線から見て他にヤバい効果は？」

「うーん、Cランク階層はどんな効果でもキツクはあるんだけど、眷属召喚付与、不死付与、気配遮断付与、召喚制限二枚……この辺が特に嫌われているかな」

階層すべてのモンスターが眷属召喚持ちとか想像するだけでうんざりするし、召喚制限二枚などソロでの攻略は無理と断言できるレベルだ。

「どれもバッチリありますね……」

もちろんDランク階層以上で複数個です、と言うアンナに皆同時にため息を吐く。

「あゝ、やめやめ！ 暗い話は終わり！ それにCランク階層も悪いことばかりってわけじゃない。……だろ？」

「確かにな。Cランク階層からはアイテムのドロップがある」

Dランク階層まではカードか魔石ぐらいいしか落とさない迷宮のモンスターたちであるが、Cランク階層からはそれに加えてたまに魔道具を落とすようになる。

例えばワイバーンからは飛竜の翼膜、サラマンダーからはサラマンダーの外殻、そして……吉祥天からはアマリタ、といったようにモンスターの伝承やスキルに由来した品が手に入るようになるの

だ。

もちろんアムリタなどのレアアイテムのドロップ率は相応に低くなるが、ハイポーションやマジックカードといった有り触れた魔道具などはそれなりの確率でドロップすると言われている。

そしてこれこそが、プロとアマチュアの間には越えられない収入の差がある理由であり、セミプロたちがリスクを冒してでもプロを目指す動機の一つだった。

正直なところ、カードのドロップでの収入と言うのは大したことがない。

確かに、Cランクからはギルドの買い取り価格も市場価格の五割から八割で買い取ってくれるようになるし、踏破報酬もDランクの三倍以上……と一見Cランク迷宮での稼ぎは美味しく見える。

だがCランクカードのドロップ率は、わずか0.1%。実に千体倒して一枚落ちるかどうかという確率となる。

いくらCランクカードの買い取り価格が高いと言っても、カードのドロップを収入の柱にできる数字ではないのだ。

実のところ……フィールド効果や倒しやすさと言った点を考慮すると、Cランクモンスターを一体倒すまでの間にDランクモンスターを五体以上倒す方が「時間当たりの狩り効率」は良いとさえ言われていた。

モンスターがドロップする魔石に関しても、モンスターが強くなればなるほど大きくなっていくが、特にランクによって買い取り効率が上がるということはない。

つまり、カードや落とす魔石だけを考えるならば、Cランク迷宮はさほど美味しい稼ぎの場ではないのだ。

——しかし、ここに魔道具のドロップが加わると話はまるで変わってくる。

モンスターが魔道具を落とす割合は、そのモンスターにもよるが大體一割程度と決して低くない。

落とすアイテムにしても、ガツカリ箱のようにランクを逸脱した大当たりこそないが、その分大外れも存在しない。最低限の質が約束されているのだ。

つまりこれまでと違いモンスターと戦えば戦うほど利益を得られるようになるのである。

カード目当てか経験値稼ぎでも無ければ基本的にモンスターとの戦いにメリットのなかったDランク階層までと違い、これは大きい。

霊格再帰の発見からは二束三文だったアイテムにも値が付くようになったし、今から楽しみでしかなかった。

第五話 ヒヤシンス（後書き）

【TIPS】カードの迷子状態

迷宮の階層というのは一見して繋がっているように見えてもすべて独立している。そのため、いくら地下を掘り進めていったところで次の階層へたどり着くことはできない。

これにより資源系の迷宮はどれだけ採掘しても資源が尽きないという恩恵があるわけだが、階層を隔てるとマスターとカードとの繋がりが切れてしまうという弊害も存在する。

マスターとの繋がりが切れたカードは、意識はあるが一切の干渉が出来ない透明の幽霊のような状態となり、これを冒険者たちは専門用語で迷子状態と呼んでいる。

迷子状態となったカードは、マスターが持つ『本体』（札の方のカードも召喚されたモンスターも冒険者業界ではカードと一纏めに呼称するため、札の方を区別するためにこう呼ぶものとする）と『召喚獣』が合流するまで使用不可となるため、マスター自身が迎えに行く必要がある。

これはヘタに迷子状態のカードにうろつかれることで合流が困難になるのを避けるためであり、稀に予めその取り決めをしていなかったカードが一種のロストのような状態となるケースもある。

階層を隔てると繋がりが切れるのは、マスターが安全な場所からカードだけを派遣して迷宮を攻略するのを防ぐための機能と考察されているが、次の階層への階段と安全地帯付近は辛うじて繋がっているため、階段前から次の階層の様子を探るといった小技も存在する。もつとも、安全地帯が消滅したAランク迷宮でぐらいいしか使えないテクニクではあるが。

第五話 ヒヤシンス（前書き）

Q：スキル封印で幼体とかドジとかのマイナス効果も封印されるの？

A：されません。プラスの効果だけが封印されます。

フィールド効果の説明がわかりにくかったようなので、バフ・デバフをプラス・マイナスに変更しました。

つまり、スキル封印の効果はプラスのスキルにだけ作用し、マイナススキルなどの封印されることでプラスに働く効果は作用しない、ということですよ。

フィールド効果は単なるギミックではなく、迷宮側からの「試練」であるため、マイナス×マイナスでプラスになる、なんて抜け道は存在しないわけですね。

Q：スキル封印の階層って後衛型のカード役立たずじゃね？

A：はい、役立たずです。「わざ」「コマンドが封じられ、ただの「こうげき」「コマンドでしか攻撃できなくなるので、前衛型のカード頼りとなります。

ただ「どうぐ」「コマンドは使えるので、「おうじやのつるぎ」「みたいに使用することで魔法が発動する魔道具などがあれば、後衛型のカードでも十分に戦力になります。

第五話 ヒヤシンス

「さて、ご飯も食べ終わっただし、この後どうする？」

弁当に蓋をして師匠が皆に問いかける。

「ふむ……家に帰るか、近くのビジネスホテルにでも泊まるか。効率だけを考えるなら近くのホテルに泊まるのが一番だが……」

「この迷宮の攻略は一泊二日じゃ終わんないだろうっからなあ……」

精神的負担を考えるなら、多少攻略の時間が減っても家に帰ってぐっすり休むのが一番か……。

と、一旦家に帰る空気になりかけたその時。

「いやいやいや、何言ってるんすか！ このまま学校に泊まるに決まってるじゃないッスか！」

アンナが赤い尻尾を振り乱しながらそう待ったを掛けた。

「せっかくの学校に泊まり込みができる機会ッスよ！？ それをわざわざ家に帰るとか、ホテルに泊まるとか……あり得ないでしょ！」

「ええ……学校に泊まると言うのか？ わざわざ？ こんな埃っぽい床で？」

お嬢様育ちの織部が顔を顰めるが、アンナはもちろん！ と力強く主張した。

「当たり前でしょ！ 学校が始まったらもう学校に泊まれる機会なんてそうそう無いんスよ！？」 学校での合宿！ ああ、まさに部活って感じじゃないッスか！」

そう熱弁するアンナに織部は呆れ、師匠は苦笑しているが……俺はアンナのこういうところが好きだった。

改めて周囲を見渡してみれば、夜の学校は何とも言えぬ非日常感があった。

蛍光灯に照らされた夜の教室は、机や黒板の配置などは変わらぬのに昼とは全く違う顔を見せ、不思議な高揚感があった。

普段は喧騒に満ちた廊下も今はシンと静まり返っていて、非常ベルのランプだけが照らす暗闇は天然のお化け屋敷のよう。

外から聞こえてくる虫の鳴き声すらも、今は極上のBGMだった。通いなれたはずの学校が、今となってはどんな高級ホテルよりも魅力的に見えてくる。

それはきつと、今この時……高校生という瞬間を逃せば、どれだけ金を払っても泊まる事が出来ない場所だと言うことに気付いたからなのだろう。

しかもそれは、天文学部が廃部となった今、冒険者部だけに許された特権なのだ。

こんな絶好の機会を無造作に投げ捨てようとしていた自分に驚く。本当に……十七夜月アンナは、こういう普段なら見逃してしまいたいような大切な瞬間を見つけ出す天才だった。

「俺は賛成。二人は？」

「そうだねえ、せつかくだし学校に泊まるるか」

「まったくアンナは……。それで、学校に泊まるのは良いとして風呂はどうする？ 我は風呂に入れないのは絶対に嫌だぞ」

「うーん、近くに銭湯か何かないか探してみます」

「あ、ちよつと待った」

ロッカーからスマホを取り出しに行こうとしたアンナを呼び止める。

「なんスか？」

不思議そうに小首を傾げるアンナに、俺は言う。

「風呂なら俺が用意できるぞ」

———ただし、迷宮内で良いならの話だが。

『おお〜！』

第11階層。爽やかな風の吹く夜の草原に突如現れた洋館を見た冒険者部の面々が、歓声を上げた。

「まさか先輩が異空間型のカードを持っていたとは……今回のレースの賞品ツスか？」

「ああ」

「ふむ、しかし交換するのはマヨヒガという話ではなかったか？」

俺が何を交換するのかを予め聞いていた織部が首を傾げる。

確かにマヨヒガであれば、普通は伝統的な日本家屋の姿をしている。

ところが目の前のこれは、どこからどう見ても三階建てのモダンクラシックな洋館。

マヨヒガではなくウィンチェスターハウスを交換したのか？ と

首を傾げる織部に俺は少し笑い。

「ま、それは中に入ってみればわかるさ」

そう言っつて俺は洋館へと向かって歩いていく。

俺が玄関の前へとくると、重厚な両開きの扉が勝手に開いていく。中へ入った俺たちを一人のメイドが出迎えた。

「おかえりなさいませ、ご主人様。ご友人方もようこそ。歓迎いたします」

恭しく頭を下げたのは、妙齡の美人。

どこかハーフっぽい顔立ちは、まさに妖精のように整っている。

毛先に行くにつれ赤みを増していく黒髪をシニヨンに纏め、大正時代頃の女中服を思わせる和服メイド服を身に纏うその立ち姿には、一分の隙も無い。

それを見た織部が納得したように頷いた。

「これは……そうか、シルキーからランクアップさせたのか」
「正解」

このメイドの正体。それは元メイドマスターのシルキーと呼ばれていたカードが、マヨヒガへとランクアップした存在だった。

そもそもマヨヒガというカードは、基本的に姿を持たない。

姿は見えないが確かにその存在を感じる……それがマヨヒガと呼ばれる怪異の在り方だ。

故に、核となる存在も本来は無色透明。

こうして姿を見せるとすれば、それは他のカードからランクアップかマイナーチェンジをしたケースのみ。

通常は日本家屋のマヨヒガがこのような洋館風となったのも、進

化前のシルキーの影響を多分に受けたせいであった。

ちなみに、彼女にはランクアップと共にオードリーという名前を与えていた。

由来は、映画『マイ・フェア・レディ』においてイライザ役を務めたオードリー・ヘップバーンから。

感覚的にはオードリーはまだ俺の名づけを受け入れてくれるほどの好感度を築けていないと思っていたのだが、試しに名づけの意思を聞いて見ると思いのほか彼女はあっさりを受け入れてくれた。

その理由が、俺自身ではなく彼女の弟子的存在であるイライザにあるのは言つまでもない。

故に、俺は彼女にイライザと繋がりのある名前を与えたというわけだ。

ステータスは、以下の通り。

【種族】マヨヒガ

【戦闘力】420（120UP）

【先天技能】

・ 敵の家でも口を濡らせ：迷い家とも言われる、家型の異空間を展開できる。招かれざる客を拒み、受け入れた者には安息と幸運を授ける。異空間系スキルを持たない敵からの干渉を受けない。内部にいる味方へ幸運、持続回復を付与する食事を提供できる。効果は二十四時間持続するが、外へ出ると効果が落ちる。

・ 上級家妖精：家妖精というよりも、もはや家の化身あるいは守り神と呼ぶべき存在。メイド、高等家事魔法、上級収納を内包。

（上級収納：物を収納できる内部空間を持つ。上級は体育館程度の広さ。収納した物は、カードに戻したり迷宮を出るとその場に放り出されてしまうので注意）

・ かくれんぼ

【後天技能】

- ・メイドマスター
- ・従順
- ・諫死
- ・中等補助魔法
- ・中等回復魔法

使い込みが浅かったからか特に引き継げた先天スキルはなかったが、本命の後天スキルは無事引き継げたため問題はない。

マヨヒガというカード自体がバフに特化しているため、完全に回復・補助要員となった形だ。

異空間型スキルである『敵の家でも口を濡らせ』も、特に敵にデバフを与えるタイプではないため、戦闘後の回復要員という使い方がメインとなるだろう。

「オードリー、風呂だけ入りたいから案内してくれ」

「かしこまりました。こちらへ」

彼女の後に続き、赤い絨毯が敷かれ蝋燭が照らす廊下を進む。

どこまでも続く廊下は、外観よりも明らかに長く広い。これは、この家が一種の異世界となっているからであった。

やがて地下へと続く階段を降り浴場へと到着するとオードリーが風呂の説明を始めた。

「当家の浴場は、大浴場が一つ、一人用が三つとなっております。一人用の浴場はそれぞれ、疲労回復・ストレス解消に効果のある雪の湯、肩こり腰痛・筋肉痛に効果のある月の湯、冷え性・便秘解消・美肌に効果のある花の湯となっております。大浴場ではそれらを総合的に体験することができるようになっております。より高い効果をお望みの場合は大浴場よりも一人用の湯をお勧めいたします」

『ほお……』

オードリーの説明を聞いた皆が感嘆の声を上げた。

マヨヒガは広さの許す限りであれば内部の構造をかなり自由に弄ることが出来る。

なので、現在使い道のあまりない客室数を減らし、当初は大浴場一つだけだった浴場を三つ増設し、さらにその効果を分散、特化させ雪の湯、月の湯、花の湯を作らせてみた。

「浴場が四つとは……随分お風呂に凝ったんスね、先輩」

「まあな……マヨヒガはどうしても迷宮内での使用が前提となるし、慰安を重視してみた」

マヨヒガを手に入れたのは、迷宮攻略が長期化するCランク以降の迷宮に備えてである。

長期での迷宮攻略で最も注意すべきなのが精神的な疲労によるミスである以上、精神慰労を重視するのは当然のことだ。

賞品の中には敵への攻撃も可能でもっと手頃なDランクのウインチエスターハウスもあったが、あえてCランクで回復・補助特化のマヨヒガを選んだのもそれが理由だ。

「なににせよ、グツジョブです！ 迷宮内で温泉に入り放題とは、

これは嬉しいサプライズ！」

「雪月花か……どれに入るか迷うな」

「男女がいることだし、ここは誰がどの風呂に入るか予め決めておこうか」

「賛成ツス。じゃあまずは家主である先輩から選んでください」

「ん、じゃあ有難く……そうだなあ。今日は疲れたし、雪の湯で」

「じゃあウチは月の湯で。最近肩こりが酷くって」

そう言って肩を回すアンナ。……確かに肩が凝りそうなポリウ
ムである。

「なんとという唐突な巨乳アピール……。我はどちらでも良いが、神
無月先輩はどうする？」

「うーん、そうだなあ、ここはせっかくだし大浴場にしようかな。
大浴場を一人で使っちゃなかなか無いし」

「了解した。では我は花の湯にしよう」

スムーズにそれぞれが入りたい湯が決まったところで、アンナが
こちらへと振り返る。

「あ、そう言えばシャンプーと買ってどうなってます？ 無いなら
ダンジョンマートで買ってきますけど」

「ああ、それならトラベルセットの奴がある。ダンジョンマートで
適当に買ったヤツだけだな。まあこだわりとかあるなら次からは自
前のを用意してきてくれ」

「覗きとかしないでくださいよ？」

俺から小さなトラベルセットのシャンプー類を受け取りつつ、ア
ンナが揶揄うように言う。

それに「覗かねえよ」と笑い返しながら俺も脱衣所へと入り、ふ
と思つ。

……今、すぐ隣の部屋で部の女子たちが裸になっているのか。

そう考えるとなんだかドキドキしてくる。

ウチの女子たちのレベルはかなり高いからな……。

まあ、だからと言って覗きなんてしないが。

確かに見て見たくはあるが、確実にバレるだろうし、見つかった

時のリスクも——！——！？

その瞬間、俺の脳裏に悪魔の閃きが走った。

——もしかして、オードリーとリンクすればバレずに覗けるのでは……？

いやいやいや、止せ。考えるな。仮にバレなかったとしてもそんなことをして良いわけがない。

そう俺の中の良心がブレーキを掛けるが……。

——大丈夫、バレなきゃ問題ないって。知らないのか？ 犯罪はバレなきゃ犯罪じゃねえんだぜ？

悪魔はさらに誘惑を囁いてくる。

た、確かにバレさえしなれば……。いや！ よくよく考えればアンナたちも冒険者だ。リンクの悪用について気付かなかったはずがない。その上で、俺を信用してくれたのだ。それを裏切るわけにはいかない！

——お前、それでも男か？ たとえその後には地獄が待っているようにも、女の裸のためなら命を賭けるのが男つてもんだらうが！
行け！ 覗け！ そしてすべてを得て、失うが良い！

う、うおおおおお！ 黙れえええええ！ ……つて！

「何してんだよ、蓮華！」

俺は先ほどから悪魔のように俺を誘惑していた蓮華にツッコんだ。

「ちえっ！ 我に返っちまったか」

ツマラナそうに唇を尖らせる蓮華。

「お前、何がしたいんだよ……わざわざリンクまで使って俺自身の思考かのように見せかけやがって」

危うく誘惑に負けるところだっただろうが。

「いや、これでマジで覗きに行ったら、しばらくお前を強請るネタに困んねーな、と思ってさ」

「洒落にならんわ」

大体、俺を強請ってどうするっていうのか。今でも、お菓子やらゲームやらのおねだりは大抵聞いてやっているというのに……。

弱みを握った蓮華が、俺にどんな無茶ぶりをしていたかと思うと背筋に悪寒が走る。

……その後、風呂上りにアナのエルフ（ターニャ）が密かに隠し持っていた虚偽察知のスキルでチェックを受けた俺は、悪魔の誘惑に乗らなくて良かったと心底安堵したのであった。

「そつだ、先輩。せっかくだから少し付き合ってもらいたいことがあるんだが……」

寢床作りを終え、あとは寝るだけと言ったところでふいに織部がそんなことを言ってきた。

「どうした？」

「先輩は数年前、ここの天文台で自殺者が出たという話は知ってるか？」

「え……何それ知らない」

そう答えたのは俺ではなく顔を青くしたアンナだった。

「あれ？ 死んだのはトイレでつて話じゃなかった？」

そう首を傾げる師匠に、俺は転校したばかりでよく知ってるなど驚いた。

きつと噂好きの女子にでも教えてもらったのだろう。

「ああ……まあ、そんな話聞いたことあるな」

「せ、先輩まで……やめてくださいよ」

ますます顔を青ざめたアンナが言う。

「ふむ……アンナは知らなかったか。では教えてやるう」

「え、いや、マジでいら……」

フルフルと首を振るアンナを無視し、織部は勝手に語り始める。

まあ、話自体はよくある話だ。

幽霊部員ばかりで、不良のたまり場となっていた天文学部と天文台。彼らに目を付けられた哀れな女子生徒と、教師の目の届きにくい天文台で行われた陰湿ないじめ……。

「……卒業生を兄弟に持つ生徒によると、なかなかエグイイジメだったらしい。いじめに耐え兼ね、最後には自分で命を絶つくらいには、な。実際はいじめがエスカレートして殺してしまったのを自殺に見せかけたという話すらある」

さも実際にあつた事件かのように語る織部であつたが、実のところ俺はこの話の信憑性はかなり疑わしいと思つていた。

天文学部が不良のたまり場となつていたこと、数年前にいじめられていた女の子がいたのは事実らしいのだが、俺が軽く調べてみたところこの学校で自殺者が出たという記事は出てこなかつた。

学校での自殺者というのは、仮に全国区のニュースにならずとも地元では結構なニュースになるし、いつまでも語り継がれるものだ。おそらくは、天文学部の廃部といじめられていた少女が退学か転校なりして学校から姿を消したのを当時の生徒たちが結び付け、面白半分に作り上げた怪談話であろう……と俺は考えていた。

「で、その話がどうしたんだ？」

俺は可哀想に小動物のようにプルプル震え出したアンナを見ながら織部へと問いかけた。

「うむ。女子生徒が自殺した天文台と、主にイジメが行われていたトイレにはその女子生徒の霊が出るらしい。それが本当か霊能力者である先輩に確かめてほしいと思つてな」
「え？ マロつて霊とか見える人なの？」

師匠が驚いたようにこちらを見る。俺は慌てて首を振つた。

「いやいやいや、別に霊能力者じゃないから」

「だが獵犬使いの事件を追っているときは、しっかりと霊視していたではないか」

「へえ〜！ そんなことが……」

「いや、あれはアレっきりというか……」

調査中にはあつた俺の残留思念的なモノを見る能力は、蓮華の復活と前後して消え去っていた。

おそらくあれはソウルカード状態だった蓮華から何らかの干渉を受けていたからだったのだろう。

まあ、俺も別にそういうのを見たいわけではないから消えてもらつて全然良かったのだが……。

「つていうか、俺この学校に通つていてそんなの一度も見たことねえし……」

「昼と夜ではまた別なのでは？」

「迷宮を出た時点ですでに暗かつただろ？」

俺がそう言つと織部もガツカリした様子で納得したようだった。

「ふむ……まあ、そうか……」

「じゃ、じゃあ噂は噂つてことツスよね？」

対照的に明るい顔となるアンナ。

「まあな、そもそも俺が軽く調べてみたところ、イジメは本当だけど別に自殺者が出たつてニュースは見つからなかつたし」

「なんだ……すでにある程度調べていたのか。道理で食いつきが悪いわけだ」

それで織部はこの怪談に完全に興味をなくしたようで、退屈そうに自分のテントへと入つて行つてしまつた。

……ちなみに教室内でわざわざテントを張っているのは、床が埃っぽいからである。

アンナなどは、テントは風情がないと主張したのだが、夏休みに入り生徒が掃除しなくなつた教室は予想以上に埃が溜まつており、

とても寝袋で寝れる状態ではなかったのだ。

その点、俺たちの使う冒険者用のテントは、空調管理万全、自動清浄機能付きの人工魔道具であるため、下手な安宿に泊まるよりもよっぽど快適に過ごすことができる。

風情がないというアンナの意見には同意しないところもなくはないのだが、明日も攻略を控えている身としてはさすがに風情を優先するわけにはいかなかった。

「じゃあ、明日も早いですし……そろそろ寝ましようか」

「おやすみ」

「また明日」

教室の電気が消され、俺たちは各々のテントの中で眠りについた。

「……ぱい。先輩」

「ん……？」

俺は誰かに揺すられ、目が覚めた。

寝ぼけまなこを開くと、暗闇にアンナの顔が見えた。

「なんだ……？ もう朝か？ ……まだ暗いじゃん」

「す、すいません……その、トイレに一緒に行ってくださいませんか？」

「はあ？」

何言っただコイツ。

俺の胡乱気な視線にアンナが暗闇でもはっきりわかるほどに顔を赤らめる。

「お前、男子じゃなくてそういうのは小夜に頼めよ……」

「それはそうですね……！ 小夜だとなんか脅かしてきそうじゃ

ないツスカ」

「ああ……」

納得した。確かに、織部はそういうことしそうだ。

「師匠は？ あっちの方が俺より紳士だぞ」

「それも同意しますけど……こういう時は霊能力者の方が頼りになるかな、って」

「だから霊能力者じゃ……ああ、まあ、いいわ。ついてってやるよ」

俺は説明がめんどくさくなり、立ち上がった。

アンナがホツとした顔で言う。

「すみません、ありがとうございます」

「ん〜」

おざなりに返事をして、二人でトイレへと向かう。

……が。

『待て、歌麿』

トイレを目前としたところで突然蓮華が制止を掛けてきた。

俺は思わず足を止める。

「ど、どうしました、先輩？」

突然足を止めた俺を、アンナが不安そうな顔で振り返る。

「いや、ちょっと待ってくれ」

それだけ言って、蓮華へと問いかける。

『どうした？』

『そのトイレに入るのは止めておけ』

『……………どうして？』

『どうしても、だ』

いつになく強引な蓮華の様子に、俺はゴクリと唾をのみ込んだ。
お、おいおい、なんだよ……………そんな風に言われると俺も怖くなっ
てきちゃうじゃねえか。

俺は蓮華の忠告に大人しく従うことにした。

「……………このトイレはやめておこう」

「え、ど、ど、ど……………どうして？」

俺はどう答えるか迷った末。

「どうしても、だ」

蓮華に倣って強引に押し通すことにした。

アンナはゴクリと唾をのみ込み、黙って頷いた。

俺はそれを見て、ホルダーから大通連を取り出し具現化した。

突然武器を取り出した俺を見てアンナがギョツとする。

「な、な、な、なぜ武器を……………？」

「まあ、念のためだよ……………」

大通連が持ち主に与えてくれる神通力のスキルの中には除霊の能力もある。

人間の俺では大通連の能力は引き出すことが出来ないが、ほんの

わずかでも除霊の効力を期待して持つておくことにした。

アンナは何かを凄く問いた気にしていたが、結局黙ってついていくことを選択したようであった。

二人で一階のトイレへと向かう。

「ハアツ……ハアツ……！」

スマホのライトだけが照らす暗い廊下に、アンナの荒い息が響く。それは疲れによるものではなく確実に恐怖によるもので、少女の恐怖の息遣いに俺の緊張まで高まっていった。

まるで迷宮の中にいる時のように五感が鋭くなっていき、肌で周囲の様子が感じ取れるほど敏感になっているのがわかる。

これほどの緊張感は、冒険者になった頃以来だった。

いつしか俺たちは固く手を握りあつて進んでいた。

手の中の自分以外の体温が、得体の知れない恐怖の中で唯一の安心感を俺に与えてくれた。

……コイツの手、ちっちゃくて柔らかいな。

俺がそんな場違いな感想を抱いたその時。

——バンツ！

「ツ！？」「ヒイ……ッ」

突然、窓が叩かれたように揺れた。

「な、な、な……なに、が？」

「……風が窓を叩いたんだろ」

「あ、ああ……風ツスか。なんだ」

「……………」

俺は全く揺れていない窓から見える木々の葉っぱをチラリと見ると、アンナの手を引いて先へと進んだ。

やがて俺たちは一階のトイレにたどり着いた。

「あ、あの、じゃあ、ここで待っていてくださいね」

「ああ」

俺は周囲を見渡しながら答えた。

「……………」その、できれば耳なんか塞いでいてくれると」

「スマホの音楽でも流しとけ……………」

「あ、ああ……………」そうツスね」

アンナは苦笑してスマホを取り出し、トイレに入ってしまった。
……………」そしてすぐに出てきた。

「……………」どうした？」

「あ、あ、あの……………」トイレの床が水浸しで……………」

「え……………」？」

夏休み中の学校のトイレが……………」？ 有り得ない。水漏れ、か？
俺は恐る恐るトイレへと入って行き……………」。

「……………」どこも濡れてないぞ」

「えっ！？ そんな！」

俺の背に隠れて目を瞑っていたアンナが、驚きの声を上げる。
だが、目の前に広がるのは何の変哲もないトイレの光景だった。

愕然としているアンナへと問いかける。

「どうする……?」

「……いえ、できれば違うトイレに……」

「わかった」

今度は三階へと向かう。

……アンナがかなりモジモジしている。

俺に声をかけた時点で結構迷っての行動だろうし、そこから二度お預けを喰らった上に、ゆっくりと進んでいるため、相当限界が近くなっているようだった。

そうしてようやく三階のトイレにたどり着いたその時、ポツリとアンナが言った。

「……そういえば、先輩。イジメられた生徒の学年って何年だったんスか?」

「それは……」

俺は三階の……三年生用のトイレをチラリと見た。
それを見たアンナが、半笑いでしゃがみ込む。

「オワタ……」

「い、いや、まだ職員用のトイレがあるから」

「それって一階ッスよね? ……そこまで持たないです」

マジか。

俺は思わず天を仰ぎ、ふと気付いた。

「そつだ、ダンジョンマートのトイレは?」

「いやいやいや! そこが一番無理ッス!」

「いや、でもダンジョンマーケット自体は新設だろ？」
「それは……そうツスけど」

アンナはしばし葛藤していたが、しかし最後には乙女のプライドが勝ったのか、屋上へと向かうことを決めた。
恐る恐る階段を上がり、屋上の扉を開ける。
空には雲一つない星空が広がり、俺たちは束の間恐怖を忘れた。

「じゃあ、ちよつと行ってきます」

俺たちが近づくとダンジョンマーケットに明かりが灯り、そこでようやくすべての恐怖から解放されたアンナがホッとした顔でトイレへと駆け込んでいった。

それを見送って、俺は虚空へと呼びかけた。

「お前、やったな……？」

すぐに返答が来る。

「す、すまん……座敷童の性が抑えられなかった。正直、めちゃくちゃ楽しかった」

やっぱりか！

俺は深々とため息を吐いた。

この一連の流れが蓮華の悪戯だと俺が気づいたのは、一階のトイレが水浸しになった辺りのことだった。

アンナが見た時は水浸しだったのに、俺が見た時は水が消えていたなど、本当の心靈現象でも無ければ魔法ぐらいしかありえない。
そして可能性が高いのは断然、後者であった。

『お前……さすがに洒落にならんぞ、これは……』

『……でもちよつとは役得だったんじゃないかね？』

悪びれた様子もなくそう言う蓮華に、俺はしばし口籠り……。

『まあ、ちよつとな……』

そう答えた。

——余談ではあるが、翌朝この話を聞いた織部は文字通り地団駄を踏んで悔しがり、そしてこれ以降アンナは学校へ泊まること言い出さなくなったのだった。

第五話 ヒヤシンス (後書き)

【TIPS】許してヒヤシンス

某日常系漫画で登場したギャグ。一見しようもないギャグに見えるが、実は紫ヒヤシンスの花言葉は英語で「ごめんなさい」「許してください」であり、教養を必要とする高度なギャグであったことが後々判明し、大きな話題となった。

第六話 登竜門

翌朝、俺たちは早朝から迷宮の攻略を再開した。

Eランク階層。昨日よりも敵のランクは一つ上がるが、障害となり得ないことに変わりはない。

ユウキの縄張りの主スキルの効果は健在で、敵とは会うことすらなく先へ先へと進んでいく。

F・Eランク階層の敵は、環境とフィールド効果……それだけだ。それらに当たって、今日は四人での攻略だからか昨日よりもずつと楽に感じる。

それは一人の時よりも魔道具が充実するためか、あるいは苦勞を分かち合う仲間がいるからか。

キマリスの存在によりカーバンクルガーネットの回収も順調で、わずか6時間ほどで俺たちはEランク階層を踏破した。

もつとも簡単なのはここまでだ。

縄張りの主の効果が通用するのは2ランク下まで。実質Bランク相当の戦闘力を持つユウキならばDランクの敵すらもその範疇ではあるが、CランクのライカンスロープがDランクの敵まで遠ざけるのはさすがに不自然だ。

アンナたちにはユウキの敵除けのスキルを使っているとだけ説明してはいるが、プロの師匠ならばそのスキルが縄張りの主であることも察しがついているだろう。

限界突破のスキルは最優先隠ぺい事項である以上、Dランク階層からは縄張りの主を使うことはできない。

フィールド効果次第ではDランクの敵であっても無視できない脅

威となりうる。

つまり、これからが本番だということだ。
そう思って覚悟を決めていたのだが……。

「――D階層は攻略しません。ショートカットしようと思いません」

アンナの発言に、俺はポカンと口を開けて絶句した。

今、俺たちは、マヨヒガで休憩を兼ねて昼食をとっているところだった。

オードリーが作ってくれた絶品のサンドイッチに舌鼓を打ちながらも、話題は自然とDランク階層をどう効率的に攻略するかという話に移っていった。

そこで開口一番アンナが言い放ったのが、Dランク階層は攻略しないというまさかの発言であった。

「攻略しないって……」

どうやって、と聞こうとしてすぐに気づく。

「もしかして、遭難のマジックカードを使っていることか？」

「はい。はっきり言ってDランク階層の攻略は時間の無駄ですから。夏休みまでという時間制限がある以上、時間切れの可能性は少しでも減らすべきです。」

Cランク迷宮とは言え、今更Dランク階層を攻略したところで大きく成長するわけでもありませんし、ボス部屋まで行って日数に余裕があるようならカーバンクルガーネット回収を兼ねて攻略する……くらいで良いと思います」

アンナの説明に、一同はなるほど……と納得する。

Dランク階層での戦いはCランク階層での戦いの良い予行演習にはなるだろうが、逆に言えば予行演習以上の役には立たない。

本番がCランク階層での戦いであり、夏休みまでという時間制限がある以上Dランク階層はスキップできるならスキップしたいところだ。

しかし……。

「遭難を使うとは……贅沢な話だ」

俺はハーメルンの笛を使い放題だからいまいち実感が湧かないが、遭難のカードは非常に高額だ。

安い時でも300万はするカードを、準シークレットダンジョンとは言えCランク迷宮の攻略に使うとは……。

普通はBランク迷宮の攻略に使うものだぞ……と呆れるような感心するような気持ちでアンナを見る。

「ええ、まあ……確かにコストはかかりますが、確率としては三分の二以上の確率でCランク階層のどこかには転移できるわけですから、そんなに分が悪い賭けでもありませんね」

「なるほど……」

「あ、もちろんこの分はウチの自腹なのでご安心を。皆さんに負担はおかけしませんので」

「いやいや！そこは俺も出すよ。チームで使うんだから」

自腹を切るといふアンナに慌ててそう言うと、皆も頷き自分も出すと言った。

「いや、マジで気にしなくて良いッスよ。ウチの独断ですし」

「ダメダメ、こういうのはしっかりしないと……逆にチームとして

ダメな金の使い方ならちゃんと反対するし」

俺がキマリスを貸し出しても良いと言った時に、こういうのはちゃんとしなさいといけないと言ったのはアンナの方だ。

マジックカードはモンスターカードと違って消耗品なのだから、尚更しっかりしなくてはいけない。

「うーん……それもそうか。じゃあ申し訳ないツスけど、これに関してはチームでの負担ということだ」

「うん。あ、それと今更だけ貸してもらってる緊急避難のカードについてはどうする？ ガーネットの配分から少しずつ払う形にした方が良いか？」

今更ながら俺が猟犬使いの調査の時から借り続けている緊急避難のカードを話題に出すと。

「あ、それに関してはチームに誘った者としての責任があるんで、そのまま持つておいてください。というかそういう細かいことまで言い出すと、先輩のハーメルンの笛の分の報酬の分配とか、神無月先輩のプロライセンス分の報酬とか、色々めんどくさいことになるんで、ある程度はゆるい感じでいきましよう」

……確かに、あんまり厳密に貸し借りを計算し出すと逆にめんどくさいか。

俺にはハーメルンの笛、師匠はプロライセンス、アンナは実家の金とコネと、メンバーそれぞれに特徴があり、お互いに助けられている面も大きい。

それを金銭的な価値に変換するのは難しいし、何より友情や信頼に値を付けるようでなんとなく嫌だ。

「む……そう考えると私の貢献度が低いな……」

「いやいや、小夜は頭脳面で貢献してくれてるじゃないツスカ」

「ああ、小夜のテスト予想には俺も助けられたし」

「そうそう、僕も転校したばかりだから助かったよ」

「アンナなんかもしかしたら今も補習中だったかもしれないぞ」

「ああ……それはマジであり得ますね」

全教科補習となった自分の姿を想像したのか、ガツクリと頂垂れるアンナ。

それを見た織部も一応の納得をしてくれたようであった。

「ん……今は皆の厚意に甘えておくとしよう。しかし、何らかの方法は考えておかねばいかな……」

「まあ、あんまり思い悩まないようにな」

努力で取得した師匠のプロライセンス以外は、俺のハーメルンの笛も、アンナの生まれについても運の要素が大きい。

プロライセンスに関しても、いずれはオンラインワンじゃなくなるだろうしな……。

誰が貢献しているとか、していないとか、あんまり考えすぎてもギスギスするだけだ。

俺は今の雰囲気が入っているのだから、このままで良い。損得だけで付き合っているわけじゃないのだから。

食事を終えマヨヒガを出たらさっそく遭難のカードを使用する。

転移した先は、薄暮時の森……いや山のフィールドのようだった。

「先輩、ここが何階かわかりますか？」

「……イライザ」

「イエス、マスター」

アンナの質問をそのままイライザへとパスする。
彼女はハーメルンの笛に額を当てて集中すると答えた。

「……わかりました。ここは42階層かと思われます」

「おお、なかなか良い位置じゃないツスカ！」

アタリと言っても良い位置を引けたことにアンナが喜びの声を上げた。

「サブルートが十階層分だから、本ルートは確定か」

「まあ、守護者を倒さないと主への挑戦はできないけどね」

「それでも主手前までスキップできたのはラッキーではあるな」

「どうする？ とりあえず主の手前まで行くか？ それとも引き返してサブルートから攻略していくか？」

俺はアンナへと問いかける。

「うーん……まず主の手前まで行きましよう」

「良いのか？ もし途中でテレポーターの罠に掛かったら位置情報もリセットされるぞ」

そうならば、数階層分ではあるが主ルートの数階層分の攻略が無駄になる。

「ええ、大丈夫です。元々スキル封印の階層は先輩抜きで攻略して、階段までの安全なマップが出来たら先輩を連れて次の階層に行くつもりだったんで。位置情報のことは心配しないでください」

おいおい、俺抜きかよ……。

と思つたが、確かにハーメルンの笛の位置情報が失われるリスクを考えたら俺抜きで攻略して、テレポーターの罠がないルートを探し当ててから俺が同行した方がリスクは少ないのか。

もし部員がはぐれても攻略済みの階層ならすぐに迎えに行けるしな。

アンナたちがスキル封印の階層を攻略している間は……俺はドラック階層の攻略でもやっとくか。

「じゃあ、主ルートの攻略からするか。ここのサブフィールド効果は？」

「えっと、42階層の効果は……おっふ、召喚制限二枚ツスね」

「うへえ……最悪がスキル封印ならその一歩手前って感じだな」

「しかし一人二枚か。誰がどのカードを召喚するかが問題だな」

織部が腕を組み、言う。

通常は一人八枚まで召喚できるため、誰がどのカードを召喚するかなどの役割分担はそこまで考えないが、一人二枚しか召喚できないこの階層においては個人個人の役割分担が重要となる。

「まず、畏解除を持つカード。次に索敵系スキル。回復系も必須か」

「ふむ、数的不利を少しでも埋めるため、着族召喚持ちも一枚は欲しいな」

「その上で前衛2、遊撃2、後衛2、補助2位がちょうど良い感じツスカね？」

「いや、前衛はもう少し欲しいな」

「じゃあ前衛3、後衛2、遊撃1、補助2って感じツスカね？」

そこで黙って見守っていた師匠が待ったを掛けた。

「……いや、ちょっと待ってくれ。多分、僕らは想定通りには動けないと思う」

その言葉の意味にすぐに気付いたのは織部だった。

「……そうか。連携不足か」

「うん。一人のマスターがリンクを使って戦うならその配分がベストなんだろうけど」

マスター同士にリンクはない。つまり、二枚ずつのカードが個別に戦う形になるのか……。

だとすれば、守りの要となる前衛を他の人間に任せるのは不安が残るな。

「……一人一枚前衛のカードを呼び出すのが結果的には安全か？」

「ん、そうなるだろうな」

「とすると、畏解除とかの役割を持たせた上で担当を考えると――」

皆で話し合った結果、呼び出すカードは以下の通りとなった。

俺：イライザ（Cランク・前衛・畏解除要員）、ユウキ（Cランク・遊撃・索敵要員）

師匠：前鬼・後鬼（Cランク・前衛、後衛・二体一対型）、アラディア（Bランク・補助・回復要員）

アンナ：デュナミス（Bランク・前衛）、エルフ（Cランク・後衛）

織部：デュラハン（Cランク・前衛）、火雷大神（Cランク・補助・眷属召喚要員） or 女郎蜘蛛（Bランク・補助・眷属召喚要員）

決め方としては、高ランクカードの少ない織部とアンナから決めて、俺と師匠が足りない部分を埋める形となった。

回復要員としては霊格再帰でアムリタの雨を使える蓮華と、高等魔法使いスキルを持ち後衛として万能のアラディアのどちらにするか議論となったのだが、アラディアは魔力回復・消費軽減系のパッシブスキルを持つということで継戦能力を重視し、基本的にアラディアを使うこととなった。

また後衛の攻撃要員についても師匠が前衛と後衛を両方こなせる二体一対型のカードを持つということで、俺の担当は畏解除・索敵の斥候となった。

索敵要員に関しては、師匠の後鬼も索敵の真似事のようなことができるが、気配察知スキルは持たないらしく、やはり気配察知を持つユウキが選ばれた形だ。

もっともこの陣営はスタート地点の話で、ダメージや魔力消費次第で高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変にカードは入れ替えられていく予定だ。

そうして作戦も決まり、俺たちの本当のCランク迷宮攻略がいよいよ始まったのだった。

一一一少し、想定が甘かったか。

「また敵の増援！ Cランク三體！ 眷属のDランク十體！ 眷属を送って、小夜！」

「もう送っている！」

「メテオを撃つ！ 十七夜月さん、射線を空けてくれ！」

「ちよつと待ってください！ ……今！」

「了解！」

俺はさかんに飛び交うやり取りを見ながらそう反省せざるを得なかった。

今、俺たちは敵の猛攻に晒されていた。

押し寄せる敵の一体一体は大したことがない。俺たちならば一人でも倒せる戦闘力だ。

だが、それが数体ずつ断続的になると話が違ってくる。

最初は一体の討ち漏らし。そこへ増援が来て、討ち漏らしが二体に。そうして徐々に殺しきれない敵が積み重なって行って、やがて眷属召喚持ちが現れたことで戦力バランスは完全に狂い、敵の数はついに二十を超えた。

こうなると八枚しかないこちらは一気に苦しくなってくる。

「ッ！ 先輩、すまん、そっちに一体抜けた！」

織部がこちらへと警告を飛ばすと同時、敵が俺の眼前へと現れる。神々しさすら感じる生命力溢れた巨大なヒグマ——キムンカムイだ。

織部の展開した眷属の包囲網を突破してこちらへと迫るアイヌの伝承に伝わる山の神は、その毛並みを敵の返り血と己の血の両方で染めつつもその敵意は衰えさせることなく、大木のように太い腕をこちらへと振りかぶった。

脆弱な人間の身体などバターのようには切断してしまいそうなその爪は、しかし俺まで届くことはなく、キムンカムイは横合いから突っ込んできた同じくらい巨大な狼に噛みつかれ、地に組み伏せられる。

巨狼の背には冷たい美貌の女が跨っており、その手には一振りの長剣と黄金の手綱が握られていた。

女は突撃の勢いのままその剣をヒグマの眉間へと突き立てる。

いくら通常の生物とは比較にならないほどの生命力を持つモンス

ターと言えど、急所というものは存在する。脳へと剣を差し込まれたキムンカムイは、それでも十数秒ほど藻掻いていたが、やがてその身を一つの魔石へと変えた。

それを確認してから俺は織部へと答えた。

「こちら北川、キムンカムイは倒した」

「……さすが」

織部が微かに笑う。

だが一息つく間もなく、さらなる敵の増援が現れる。

「ごめん、織部さん！ 少しでもだけ眷属巻き込む！」

「了解した！ どうせいくらでも湧いて出る！ 気にせず敵ごと撃つてくれ」

「ごめん、小夜！ こっちも眷属ごとやっちゃった！ 壁を抜かれそうだから至急補充の眷属を送って！」

「死ね」

「ちょ……！ ウチの時だけ態度が違いすぎでしょ！」

自分の時だけとても辛辣な返事をされたアンナが抗議の声を上げると、織部は珍しく声を荒らげ――。

「当たり前だ、このボケが！ これで一体何度目だと思っている。

敵にやられた数よりもお前にやられた数の方が多いぞ！」

「うう、だって急に射線に入られたから……」

「気持ちはわかるが、眷属召喚で呼び出したトークンはカードと違って大雑把にしか動かせないんだ。そっちが配慮してくれ」

「はあ……い……」

うん……、やっぱり連携の面で問題があるな……。まあ、ろくに

練習もしていないから仕方ないが。

リンクにより一心同体の動きが出来るカード同士と違い、リンクで繋がっていない人間同士の連携は純粋な練習と経験により高めていくしかない。

それですら、どれほど高めたところでリンク以上の練度とはなり得ないだろう。

人間同士でもリンクが繋がられるような魔道具でもあればな……。そんなようなことを考えながら戦っていると。

「マロ！ ターゲットを発見した！」

先ほどから後鬼の式神をドローンのように飛ばしていた師匠から、ようやく敵の眷属召喚持ちを見つけたとの知らせがあった。

眷属召喚持ちさえ始末してしまえばかなり楽になる！

「了解！ すぐに向かう！」

俺はすぐさま答えると手のひらサイズの式神を掴み、巨狼――狼形態となったユウキの背へと跨った。

イライザが俺を後ろから抱えるような形で固定すると、ユウキが風のように駆けだした。

景色が凄まじい速度で後ろへと流れていく。

こうしてユウキに乗るのはクーシーの頃以来だが、その乗り心地は正直以前よりもかなり良い。

身体が大きくなったためか毛皮も厚くなっており、天然のクッションは俺の尻が半ば沈みこむほどに柔らかく、手触りも極上。

黄金の手綱の効力によるものが、跳ねるように駆けているというのに揺れらしい揺れもほとんど感じられない。

これならば、かなりの悪路であっても尻が痛くなることはないだろう。

ユウキも狼形態を手に入れたし、良い買い物をした……と俺はほくそ笑んだ。

ターゲットに近づくにつれ散発的に襲ってくるようになった下級レッサー悪魔を屠りながら進むこと数分ほど、俺たちは眷属を吐き出し続ける羊頭の悪魔を発見した。

猛スピードで迫る俺たちに気付いた羊頭の悪魔がこちらへと振り返り、すぐに反転して逃げ出そうとする。

ここで逃がせば厄介なことになる！ と判断した俺は一つ切り札を切ることにした。

『やるぞ、イライザ！』

『イエス、マスター』

———マイフェアレディ。

イライザのカードが発光し、そこに新たな技能が浮かび上がる。未だ不安定なその発動を確認した俺はニヤリと笑みを浮かべ、そのままユウキの限界突破スキルをコピーさせる。

さらにレベルアップの魔法により戦闘力を最大化。騎手であるイライザの戦闘力が激増したことにより、騎獣であるユウキのスピードも加速する。

騎手のスピードが上がることで騎獣のスピードも上がる……というのは少し不思議な感覚もするが、騎乗スキルは自身のパワーとスピードを騎獣へと上乗せするスキルだ。騎手自身のスピードが上がる事で、合算のスピードが上がるのはシステム上何もおかしくはない。

通常のCランクの4倍以上もの速度となった俺たちはみるみるうちに羊頭の悪魔との距離を詰め、勢いのままその首を刎ねた。

その後も遊撃として飛び回って戦い、三十分後。眷属召喚持ちを始末した俺たちは徐々に数の差を逆転し、戦闘に勝利したのだった。

「ふう〜、ようやく一息つけましたね」

オードリーの淹れてくれた紅茶を片手にアンナが言う。

戦利品をかき集めた俺たちは、一度休憩のためにマヨヒガへと避難していた。

「敵に異空間スキル持ちがないのは幸運だったな、こうして安全に休憩がとれる」

クッキーをハムスターのように齧りながら言う織部。
その顔には、さすがに色濃い疲労がにじみ出ている。

「まあ、マヨヒガから一步でも出たら出待ちしてるファンの方々と連戦&連戦だけだな」

マヨヒガは異空間スキルを持たない敵の干渉を受けないが、別にそこに存在していないわけではない。

一度敵に認識されてしまえば、敵はいつまでもそこで俺たちが出てくるのを待ち続けることだろう。

下手な場所で籠れば周辺一帯をモンスターに囲まれ、ちょっとした四面楚歌……ということもあり得た。

一応かくれんぼのスキルで姿と気配を隠してはいるが、敵は俺たちの気配が消えたこの周辺をしつこく嗅ぎまわっていることだろう。
というか……。

「これ、もしかしてDランク階層に戻って連携の練習をしてからの方が良いんじゃない？」

「うっ……！」

俺がふともらした言葉に、アンナが顔を引き攣らせた。それを見て俺も失言に気付く。

しまった、少しアンナの判断を責めるような感じになっちまったか。

「……と思ったけど、三時間経つてもこの階層を攻略できてないことを考えるとそんな時間はないか」

俺が慌ててそうフォローを入れると師匠もそれに続く。

「うーん、こんなに時間が掛かるのはこの階層と後はスキル封印の階層くらいだと思うけど……まあDランク階層で練習したところで時間の無駄なのは確かだろうね。一週間や二週間Dランク階層で練習を積んだところで、劇的に連携力が上がるでも無し。なら難易度の高いCランク階層で痛い目を見ながら身に着けて行った方がよほど上達も早い」

そう言う師匠の台詞からは、「……その方がこの迷宮を踏破できなかった場合も得るモノが大きいだろう」という言外の意味が読み取れた。

もしかして、師匠はこの迷宮の攻略は難しい、あるいは出来ないと考えているのか……？

確かにこの階層にしたって師匠一人で攻略できるとは考え辛い。

プロ試験では、召喚制限のない迷宮を宛がわれたのか、あるいは人工魔道具などもフルに活用して走り抜けたか……。

いずれにせよ、この迷宮ほどの糞仕様ではなかったはずだ。

ということとは、この迷宮の難易度はある意味で四ツ星昇格試験以上……そういう風に考えることもできる。

「もしかしてこの迷宮って俺たちが思っていたよりも難易度高いのか……？　ちよつと疑問に思っただよな……　なんで学校側は俺らから金を取らねえのになつてさ」

この迷宮の一周あたりの利益は、カーバンクルガーネットとヴィルダイヤだけで二億。

一月に一周もできれば年二十億以上の利益が出るわけで、專業のプロチームともなればそれ以上の利益が見込める。

迷宮の管理は通常有料で依頼するモノであるが、この利益は逆に冒険者側がお金を払って独占の権利（と攻略の義務）を買いレベルだ。

学校法人についての法律やら売り上げについてはよく知らないが、仮にこの迷宮で得た利益の一割でも使用料として貰えるならば、学校側としてもぜひとも欲しい筈。

もちろん部外者を極力入れたくないというのも本音なのだろうが、それだけでは少し説明がつかなかった。

莫大な利益を生む迷宮の管理を、あえて学生に使用料タダで任せると理由があるとすれば……。

「使用料タダでもプロチームが嫌がる難易度……　ってことツスカ」
「まあ、プロから見てもあんまり攻略したくない迷宮なのは確かだね。準シークレットじゃなければ僕も絶対嫌だし」

師匠はそう苦笑し、ただ……と続け。

「それだけにこの迷宮は登竜門となりうると思う」

そう言ったのだった。

第六話 登竜門（前書き）

2021/9/5

Aランク迷宮が一般公開されていない、という記述の削除。一章の最初の方に、プロクラスからはAランク迷宮であっても自由に入りできるという設定を書いてあったのを忘れてました（笑）

Aランクには入れるが、Aランクには自衛隊が常駐しているので、内部で完全に自由に行動できるわけではない……って感じです。よろしくお願いします。

第六話 登竜門

「登竜門ツスカ？」

アンナが首を傾げると師匠は頷いた。

「実は……プロクラスでもCランク迷宮ってあんまり潜らないんだよね」

「そうなのか？ てっきりCランク迷宮ばかり潜ってるよばかり……」

俺は意外な思いで聞き返した。

それはアンナや織部も同じだったようでやや目を丸くしている。

Dランク迷宮とCランク迷宮におけるリターンの最大の違い、それはドロップアイテムの有無だ。

ドロップアイテムがCランク階層以上からしか存在しない以上、どう頑張ってもDランク迷宮でCランク迷宮以上の稼ぎを出すことは不可能。

それ故に、多くの冒険者たちはCランク迷宮に潜れるようになるプロを目指すのだ。

……そう、思っていたのだが。

「まあ確かにドロップアイテムは魅力的なんだけど……Cランク迷宮はプロであっても大変過ぎるんだよ。精神的な負担を考えればDランクをたくさん潜った方が楽なんだ」

Dランクはそれに特化した編成なら一日で攻略できるようになるしね……と言う師匠に俺はなるほどと頷いた。

アマチュアクラスの俺でも三つ（実質は二つだが……）のDランクを二十四時間で踏破出来たくらいだ。

プロクラスならDランク迷宮を一日で踏破というのは難しくないはず。

仮にCランク迷宮の攻略が三日以上かかるチームならば、Dランクを潜った方が心身ともに負担も小さい。

カードのドロップやドロップアイテムといったモンスターを倒すことで得られる利益を一切切り捨てて、迷宮の踏破報酬だけに収益を絞るプロがいても何らおかしくはなかった。

特にイレギュラーエンカウントのことを考えると、尚更Dランク迷宮をメインとした方がリスクは低い。

「ちょ、ちょっと待ってください。Cランク迷宮に潜らないなら、なんでみんなチームを組んでまでプロを目指すんすか？ それじゃあ意味ないじゃないツスカ」

アンナの言う通りだ。

Dランク迷宮がメインとなるなら、別に大変な思いをしてプロになる必要もない。

逆に、プロとなる事で様々な義務に縛られることとなる。

なのになぜプロを目指すのか……。

「理由は大体三つ」

師匠は指を三本立てて答えた。

「一つは税金の関係だね。アマチュアクラスは累進課税だけど、プロクラスは分離課税だから」

これについては周知の事実であったので、ただ頷く。

累進課税とは、所得が多いほど税率が高くなる制度であるが、分離課税は所得の種類ごとに個別に課税され、どれだけ所得が増えても累進課税が適用されることはない。

プロが迷宮から稼いだ利益に掛かる税金は、所得税10%、住民税5%、迷宮災害復興税5%のきっかり20%のみ。

アマチュアクラスの時点で経費として認められる範囲などで様々な優遇を受けている冒険者であるが、プロクラスはさらに優遇されているのだ。

「もつとも、プロクラスからは迷宮の踏破にノルマが課せられますけどね」

その代わりプロクラスからは色々と義務が課せられるようになる。アンゴルモア時の一般人の保護（これはアマチュアクラスにも多少はあるが、プロは比べほどにならないほどに重い）や、迷宮踏破のノルマなどだ。

プロクラスが年間に課せられるノルマは、Dランク10個にCランク3つ。

どちらもプロクラスなら大した負担ではないが、それは万全の状態ならばの話。

怪我やカードのロストなどの事情によるノルマの免除は一切認められておらず、未達成＝即三ツ星への降格となるため、そこそこ重いノルマと言える。

「そのノルマが二つ目のプロになるメリットだ」

ところが師匠はそんなことを言う。

「どついつことツスカ？」

「ノルマとなる迷宮はどの迷宮でも良いわけではなくて、一定期間攻略が行われていない迷宮が対象となってるんだけど……」

そこまで聞いて、俺たちもピンときた。

そうか、ギルドのクエストか！

攻略する迷宮を冒険者が自由に選べる以上、必然的に攻略される迷宮にも偏りが生じる。

中には冒険者に不人気で全然攻略が行われない迷宮もあり、それはアンゴルモアの要因となりうるため、ギルドもそう言う迷宮に対しクエストという形で賞金を懸けることで冒険者の攻略を促している。

その懸賞金は難易度にもよるが大体踏破報酬の二倍以上。通常の踏破報酬ももらえるため、実質三倍以上の報酬を得ることができる。故に、たまにクエストが発生すると冒険者が殺到することになる。つまり、ノルマがメリットということは……。

「ノルマの対象の迷宮には、通常のクエストと同じように踏破報酬の二倍以上の賞金が懸けられてる。つまり……」

「アマチュアクラスに提示されたクエストは、プロのあまりってことか……なんかズルいな」

俺なんかクエストに応募するたびに抽選に外れ続けてきたつてのに……。

思わずボヤくと師匠は苦笑した。

「まあそれだけギルド……国もCランク迷宮を攻略して欲しいってことだよ。正直、自衛隊はAランク迷宮での間引きとBランク迷宮の踏破でいっぱいいっぱいらしいし」

元自衛官の姉を持つ師匠の言葉には重みがあった。

国民に不安を与えないためか、そう言う情報はあんまり民間まで降りてこないからなあ……。

「三つ目のメリットは、今回の僕らのようにプライベートダンジョンの管理ができることだね」

うちの高校に現れた迷宮のように、あまり部外者に入ってもらいたくないところに現れた迷宮は、管理のための冒険者を雇って一般の冒険者の入場を制限することがある。

こうした私的に入場を制限した迷宮を、プライベートダンジョンと呼ぶ。

大富豪の中には、リゾートタイプのフランク迷宮を土地ごと買い取ってプライベートダンジョンとしているケースもあると聞く。

「プライベートダンジョンの管理費用の相場は、フランク迷宮で月百万。一つランクが上がるごとに十倍となっていく。まあ、今回みたいに準シークレットダンジョンだったらタダとか逆に入場料を貰えるケースもあるけど、よほどの金持ちでもなければ一般公開せざるをえない額だ」

フランク迷宮を何ヶ月かに一回攻略するだけで毎月百万……。Eランク迷宮ならそれだけで年収一億だ。あまりに美味しすぎる。迷宮の管理はプロにしか許されていないので、特権と呼ぶに十分な利権だ。

そりゃみんなプロを目指すわけだ……。

としみじみと考えていると、アンナが肩を竦ませて言った。

「まあ、迷宮の管理はコネがすべてツスけどね。プロってだけで貰える仕事じゃありません。むしろ有望な冒険者への繋ぎが目的とい

うか、初めから迷宮の管理だけで食っていこうと思ってる輩はお呼びじゃないですし」

それもそうか。

それだけ美味しい仕事となれば、見ず知らずの他人に任せたりはしないだろう。

よほどのコネか、逆に富豪側が付き合いを持ちたい相手へのプレゼントという感じになるだろう。

迷宮の管理を任せる代わりに、その冒険者が何かレアカードや魔道具を手に入れた際は優先的に交渉できるって感じか。

「十七夜月さんの家ならプライベートダンジョンも持ってるんじゃないの？」

「まあ、ウチというかダンジョンマーケット所有のものがいくつもあるっちゃありますね。Eランクの特殊型が一つに、社員の慰安用にFランク迷宮がいくつか……」

おお……さすがは十七夜月家。

そういえばダンジョンマーケットはファンタジーランドジャパンとか持ってるもんな。あれも考えてみればプライベートダンジョンか。

こういう時、コイツが本当にお嬢様なのだということを出す。普段はオタク気質でちょっとズレてるだけの女の子って感じなん

だけだな。

「さすが十七夜月……」

「ただFランク迷宮の方はファンタジーランドジャパン（FLJ）の管理のオマケにタダでやってもらってるらしいですけどね」

そう言うアンナだが、ファンタジーランドジャパンは特殊型の迷宮なので主を倒すだけで済む。主はCランクモンスターだが、Eラ

ンク迷宮を一個踏破するよりよっぽど楽だ。

毎日主を倒さなくてはいけないのが手間ではあるが、それだって考えようによってはメリットだ。なんせ、毎日踏破報酬を手に入れられるのだから。

それで年収一億なら俺だってFランク迷宮の管理くらいタダで引き受けるだろう。

「それで……プロになったら色々とメリットがあるのはわかりましたけど、この迷宮が登竜門になり得るといっことはどういう意味ですか？」

すっかりと脱線してしまった話をアンナが強引に戻す。

「プロの多くは、プロになった時点で満足してそこで歩みを止める。少数のさらに上を目指す者たちも、しかし今後はBランク迷宮というさらに分厚い壁に阻まれその大半が挫折する。Bランク迷宮はCランク迷宮よりもさらに過酷だからね。その壁を乗り越えられるごく少数の強者たちに共通する点はただ一つ。Cランク迷宮に、その中でも最難関の迷宮に挑み続けた……それだけだ。

——敢えて困難な道に挑み続けた者だけが、五ツ星の頂に指をかけることを許される」

……五ツ星。事実上の冒険者の頂点だ。

冒険者のランクは六ツ星までであるが、六ツ星の達成条件が事実上不可能なため、実際は五ツ星までと言われている。

なんせ、六ツ星の昇格条件はAランク迷宮の踏破。

Aランク迷宮が今まで踏破されることがない以上、六ツ星などないも同然だ。

五ツ星の昇格条件は、至ってシンプル。四ツ星冒険者であること、

Bランク迷宮の踏破実績があること。ただこれだけなのだが……これが、頗るすこぶ難しい。

現在五ツ星とされているのはそのほとんどがチームでの認定によるモノで、一人でBランク迷宮を踏破した真の五ツ星は世界でも十数人しかいない。

この十数人にしただって、そう国が発表しているだけで本当に踏破したのか怪しい者や、国が威信をかけて最大限のバックアップをした結果の者が混じっており、純粋な個人でBランク迷宮を踏破したのはわずか数人と言われている。

五ツ星ともなると、一年のうち迷宮の中にいる方がよほど長いと言われており、プロフェツサータイプの中には一年のうち一月ほどしか地上に滞在していない者すらいるほどだった。

まさしく人生を捧げてようやく到達することができる、それが五ツ星という領域だった。

「もちろん、ただ難易度の高いCランク迷宮に挑むだけでは身体より先に心が壊れてしまう。モチベーションを保つには飴だつて必要だ。飴と鞭のバランスが重要。それが――」

「準シークレットダンジョンってわけッスか。なるほど、それで登竜門……」

アンナの言葉に、師匠は「その通り」と頷く。

……俺も少しだけわかってきた。

なぜ準シークレットダンジョンなんてものが、あるのか。

いくら普通のシークレットダンジョンと比べて効率が悪いと言っても、自衛隊ならば十分に管理できるし、利益も出るだろう。

むしろ独占状態のままの方がカーバンクルガーネットなどの需給もコントロールしやすいはず。

なのに、なぜわざわざ民間にパイを分け与えるような真似をするのか。

これは国が用意した、五ツ星を育てるための餌なのだ。
そして俺たちはそれにまんまと飛びついて、リスクに挑もうとしている……。

「ここで皆に聞いておきたいことがある。それは、これから僕たちがチームとしてどんな冒険者を目指していくのか、ということだ」

師匠が皆を見渡しながら言う。

「僕らは現状でも世間的には十分成功している。正直アガリの状態と言っても良い。

無理をする必要はなく、Dランク迷宮の踏破報酬だけでもそれなりに贅沢をして暮らしていけるだろう。

その上で、あえてリスクを負ってでも貪欲にさらなる高みを目指していくのか。

あるいは、現状に満足し、最低限のノルマだけをこなして生きていくのか……」

場に沈黙の帳が落ちる。

アンナも、織部も難しい顔で考え込んでいた。

「師匠は……？」

俺は問いかけた。

この場で唯一のプロでありチームの要である師匠は、一体どういう冒険者を目指しているのか……。

「僕は……僕の場合は、冒険者としての目標は正直ない。僕にとって冒険者は手段だ。

目的さえ遂げれば、冒険者をやる理由もない。まあ、すぐに辞め

る理由もないけどね。

強いて言えば日々を暮らしていけるだけの金があれば良い、って感じになるのかな？

だから皆に聞いておきたかった。僕はできる限りそれに付き合うよ。このメンバーといるのは好きだからね」

師匠の目的……アレか。

なるほど、冒険者がただの手段であるならばそうなるか。

「ウチは……」

俯いて考え込んでいたアンナが顔を上げた。

皆の顔を見渡し、言う。

「私は当然上を目指します。

良い機会なので言うておきましょう。

私はアンゴルモアによる文明崩壊はいずれ必ず、早ければ十年以内で起こると考えています。

その際、火星のテラフォーミングが間に合えば一部の人は火星に移住することができですが、大部分の人々は地球に取り残されることになるでしょう。

私はその時、仮に火星に移住する権利を勝ち取れたとしても地球に残るつもりです。

そして、自分の勢力を作りたい」

じ、自分の勢力……？

俺は予想外の言葉に、思わずポカンと口を開けてアンナを見た。

俺よりも年下の女の子は、酷く大人びた表情で己の夢を語る。

「モンスターが溢れかえり、権力者や富裕層たちが火星へと逃げ去

った地球は、既存の社会システムや秩序が完全に失われた世界となるでしょう。

そうなれば物を言うのはモンスターから身を守るだけの武力、すなわちカードとリンクの技量です。

必然的に、地球に残った一部の富裕層や企業、冒険者たちが力を持つことになる。

人々もそれらを頼りに集まることでしょう。

つまり、我々が勢力を築き上げる余地は十分にあるということですよ。

その勢力のトップは別に私で無くても構わない。ただ、父のように自分の力で一つの勢力を築き上げてみたい。

それが、私の望みです。

もつとも……残念ながら、私自身にはリンク……冒険者としての才能は、あまりないようです。

だけど、他の勢力作りに必要な能力やセンスは持っているつもりですし、そのための勉強もしてきました。

どうか皆さんには私の勢力作りに協力して欲しいと思っています」

コイツ、色んな意味で凄いな……。

正直俺は、アンナに対して尊敬と同時に恐怖を覚えざるを得なかった。

外見が似ているだけの、別種の生物を見るような感覚すらあった。高校生の時点で自分の勢力を持ちたいとかそんなことを考えるものなのか？

ただの空想や中二病というわけではない。アンナには確かなビジョンと実行力がある。

この冒険者部もその一環だろう。

アンゴルモアによる文明崩壊……。いつか冒険者部に俺が誘われた時もそんなようなことを言っていたが、ここまで本気だったのか。彼女と知り合ってもう数か月になるが、十七夜月アンナという少

女がどういった人間なのか、臆気ながら俺にも見えてきた。

——ロマンティックな現実主義者、それが彼女の本質だ。

ラノベに憧れて冒険者部を作ってみたり、合宿の時はわざわざフールドを書き換えてまで花火をやったり……。

基本的に浪漫重視の行動をしているため一見わかり辛いですが、その奥底には冷徹なまでの現実主義者としての顔が存在している。

十七夜月アンナは、いざという時は決して情に惑わされない……。

仮に冒険者部の誰か一人を犠牲にしなくては全滅する時が来たとしたら、彼女は苦しみつつもより被害の小さい方を選択することだろう。

その彼女が、アンゴルモアによる文明崩壊は必ず起こるといふのなら、認めたくはないがそれは確かに起こる可能性が高いに違いない。

その時、俺はどうすれば良いのか……。

俺が考えこんでいると、織部がポツリと呟いた。

「我は……私は、アンナほどの強い意志はない。

将来の夢、という意味ではプロクラスのグラディエーターとして活躍するのが夢ではあるが……それも特に急いでいないしな。

大学卒業までにプロライセンスを取得してデビューできれば良い。正直、私はアンナのように文明が崩壊するとは思っていない。人類はそこまで愚かではないはずだ。

仮に第三次アンゴルモアが起こるとしてもそれはもっと先のことだろう。

それまでの間に、アンゴルモアを生き抜けるだけの力をじっくりとつけていけば良い。

その間に何らかの解決策が見つかる可能性はゼロではない。迷宮の消滅が確認された以上、迷宮を消滅させる方法はあるはず。無論、皆が上を目指すなら付き合つが、リスクを背負ってまで急いで強くなる必要までは感じないというのが正直なところだ」

……アンナがロマンティックな現実主義者ならば、織部は現実主義のロマンチストだ。

その中二病的な振舞いとは裏腹に普段はかなり常識的で現実的な思考をする彼女だが、その内面はかなり情が深く夢見がちな乙女みたいなどころがある。

占いが好きでラッキーアイテムを持ち歩いたり、俺のことを霊能力者と思って目を輝かせたり、実は部屋はぬいぐるみで一杯だったり……（アンナ談）。

あからさまに周囲に壁を作っているためクラスでは孤立しているようだ、一度懐へ入れた者への面倒見はかなり良い。

お嬢様学校を内部進学せずに、わざわざアンナに付き合つてこの高校に入学してきたのもその顕^{あらわ}れだ。

クラスで孤立気味というのも、彼女なりの自己防衛なのだろう。

つまり、織部小夜という少女は、親しい人を失うことに酷く臆病なのだ。

それ故に、簡単には他人を懐には入れず、一度懐に入れると今度は常に一緒に居たがる。

しかし、その臆病さが、普段は明晰な彼女の思考に歪みを生じさせている。

織部は、アンゴルモアはすぐには起こらない、人類が結束して協力し合えばその間に何らかの解決策を探し出せる……と信じているようだ、それは「今日と同じ日常が明日も続いて欲しい」という無意識の願望が多分に混じっていると云わざるを得ない。

俺自身の考えは織部のモノに近いが、どちらが現実的かと言われればアンナの方だろう……。

ふと気づくと、皆がこちらを見ていた。

俺の答えを待っているのだ。

「俺は……」

俺が冒険者になったのは……単にスクールカーストを成り上がりがたかったからだ。

スクールカーストを成り上がって、意中の女の子を振り向かせたかった。ただそれだけ。

カードのことも便利な道具としか思ってたし、感情があり話すことが出来ることを知っていても、そこに人格は認めてはいなかった。

だが……蓮華たちと出会い、ハーメルンの笛吹き男との戦い、学生トーナメントを経て、その考えも変わっていった。

カードにも一枚一枚に意志があり、こだわりがあり、魂があることを知った。

そして、その輝きに魅せられた。

もっとコイツらと一緒に冒険したいと思った。

ああ……そうか。そういう意味では俺も師匠と同じなのか。

俺にとって冒険者は、コイツらと一緒に冒険をするため手段に過ぎない。

ある意味、冒険者をやること自体が目的なのだ。

だからゴール地点も達成する度に動かされた。

最初はスクールカーストで成り上がればそれで良かったのに、カーストトップになった後も三ツ星を目指し、それが達成されたら

今度はプロを目指した。

プロなんて高校生のうちになれるわけがないと思っていたから、当面の目標としてはちょうど良かった。

何も考えずに蓮華たちと迷宮に潜り続ければ良いだけだからだ。

だが、アンナたちが入学してきてチームを作ることになり、そこに四ツ星の師匠が加わったことで思いがけず早々に目標が達成されてしまった。

正確に言えば俺はまだプロではないが、プロクラスのチームに所属しているなら同じことだ。

そうして、俺はまた目標を失った。

プロ以上の目標などそうそう見つからないため俺は宙ぶらりんの状態となったが、そこにタイミング良くモノコロレースやら学校の迷宮やらとイベントが舞い込んできたため、俺は次の目標を考えずに済んだ。

もしこのままこの迷宮を踏破していたら、俺は今度こそ進むべき道を見失っていたことだろう。

あるいは、その前に大失敗をしていたかもしれない。

そんな地に足がついていない俺の状態を、師匠は見抜いていたのだろう。

だからこのタイミングで今後について、なんて話題をぶっこんできたのだ。

いよいよ俺も冒険者としてのゴールを定める時がきたのかもしれない。

だが、すぐには思いつかない。
アンナに付き合っただけで勢力作りをするというのも悪くはないのだろう。

文明崩壊が起こるにしろ起こらないにしろ、第三次アンゴルモアに備えるのは必要なことだ。

ただそれが、リスクを取ってでも最短距離を突っ走るか、安全にゆっくりと力を付けていくか……という話だけで。

しかしそれは十七夜月アンナの目標に付き合っているだけで、北川歌麿の目標ではない。

彼女の目指すところが俺の目標というなら話は別だが、そうでないならいずれ付き合い切れなくなる時が来るだろう。

アンナの『流れ』は、ただ流されるだけの者には急すぎる。

仮に同じ道を往くとしても俺自身の目標が必要だ。

冒険者としての俺のゴールはどこにあるのか。

俺は、冒険者として何を為したいのか……。

「……まあ、すぐに答えを出せなんて言わないよ。みんなもそうだ。

この迷宮を踏破するまでの間に改めてじっくりと考えてみれば良い」

俺が答えを出せずにいるのを見て、師匠はそう締めくくったのだ。
った。

第六話 登竜門（後書き）

【プライベートダンジョン】

私有地などに現れた迷宮のうち、プロなどに管理を任せるなどして一般の冒険者たちには公開しない迷宮のことをプライベートダンジョンと呼ぶ。

一般公開されている迷宮と比べアンゴルモアの可能性が高いプライベートダンジョンは、国によって厳しい基準を設けられており、フランク迷宮であっても四ツ星以上でなくては管理できず、その依頼料も非常に高額となっている。

そのためほとんどのプライベートダンジョンはフランク迷宮か、逆にCランク迷宮以上の準シークレットダンジョンとなっており、その所有者も個人ではなく法人が多い。

プライベートダンジョンの管理は冒険者として非常に美味しい仕事だが、それだけに管理の仕事を任されるかどうかはコネ次第である。

なお、プライベートダンジョンとは言えアンゴルモア対策のためゲートの設置は義務であり、一定期間攻略が行われていないことを感知すると即座にプライベートダンジョン認定が解除され、管理者の冒険者ライセンスも没収される。

第七話 道は運（ちか）きに在りて遠きに求む

翌日、俺は一人八王子の街をぶらぶらしていた。

あれからなんとか一日掛けて42階層を踏破した俺たちは、予想以上に溜まった精神的疲労に一度休みを取ることにした。

俺は降って湧いた休みに、家でゴロゴロして過ごそうかと思っていたのだがどうにも心がモヤモヤして落ち着かず、こうして当てもなく街をブラついていた。

ギルドのカードショップを覗いたり、新発売の冒険者用品を物色してみたりするもさして興味を惹かれるモノもなく、いつしか俺の足は昔の思い出を辿るように懐かしの場所へと向かっていた。

通っていた小学校、秘密基地を作った森、魚釣りをしたドブ川……。

普段は全く思い出さないといいのに、不思議と現場を前にすると当時のことが鮮明に蘇ってくる。

好きな女の子にあえてちょっかいを出したりして普通に嫌われたこと、友達に捨てられたエロ本コレクションの隠し場所を教えたら翌日すべて持ち去られていて喧嘩したこと……。

中にはのたうち回りたいほど恥ずかしい記憶もあって、そう言う時は足早にその場を立ち去った。

もしかして普段思い出さないのは記憶を封印したからなのだろうか……？

などと思いつつも、小学校の前を通った時は、俺の通っていた校舎がすでに取り壊されて新校舎となっているのを知って、思わぬ寂しさに襲われたりもした。

そうしてよくたまり場としていた公園と隣接した駄菓子屋へとや

って来た時。

「あ、お兄ちゃん」

友達と遊んでいた愛が俺を見つかけ声を掛けてきた。

「愛？　ここで遊んでたのか」

「うん。アオイちゃんとミオちゃんと一緒に」

「お久しぶりでーす」

「ども」

愛の幼馴染で良く家に来る二人がペコリと小さく頭を下げてくる。アオイちゃんは物怖じしない社交的な性格で、髪を染め最新のファッションに身に包んだ今時の女の子。

ミオちゃんは一見黒髪ロングの物静かな文学少女といった風貌なのだが、女子小学生でありながら投資に興味があり、すでにお年玉で株やバイナリーオプションをやっているという強者だった。

うちの愛も小学生にしてはませている方だと思うが、この二人と比べるとまだまだ普通でちよっと安心するのは内緒だ。

『よっ！』

『ちゃんと水分を取っていますか、愛？』

「あ、蓮華ちゃん、アテナちゃん！」

ブウンツ……と蓮華とアテナの立体映像が浮かび上がり、愛へと挨拶する。

元々仲の良かった愛と蓮華であったが、カードギアで外部とコミュニケーションがとれるようになるるとすぐにアテナも仲が良くなった。

意外だったのはメアがあんまり愛と仲が良くならなかったことで、

別に嫌いというわけではないようだが、どうやら迷宮の外でも蓮華と遊べることに嫉妬しているようであった。

一見陽気で人見知りしない印象のメアであるが、実はその性質は『深く狭く』な内側へと向かっているところがある。

そういう所は鈴鹿と通じるところがあつて、蓮華、メア、鈴鹿の友情連携はメアが仲立ちとなることで成立しているのかも？ と思つたり。

そんなわけで微妙に壁のある愛とメアだが、愛の方はメアと仲良くなることに積極的で、アニメ鑑賞などを通じて愛とメアの距離は徐々に縮まりつつある。

なので、俺は特に干渉せず、温かく見守るつもりであつた。

一方のアテナというと、何やら愛のことが妙に気に入つたのか、夏休みの宿題の面倒を見てやつたり、一緒にクイズ番組を楽しんだりと、ほとんど姉のように接している。

すぐビビる印象の強いアテナだが、あれですぐに蓮華やメアと打ち解けたりとコミュ強なので陽の者同士愛とは波長が合ったのかもしれない。

他にも、イライザとオードリーがお袋に我が家のレシピを教えてもらつたり、ドラゴネットとデュラハンが親父から将棋を学んだことで意気投合したり、ユウキがマル（愛犬）に謎の対抗心を燃やしたりと、カードギアのおかげで我が家は大分賑やかになってきた。

「うわゝ、それが話題のカードギア！？ いいなあゝ」

「凄い。なんかSFみたい。……これはエメラルドタブレット社の株価値はまだまだ上がるな」

空中に浮かび上がるビジョンを見たアオイちゃんとミオちゃんが眼を輝かせて寄ってくる。

こういう所はまだまだ子供だなと微笑ましくなる。……ミオちゃ

んの喜び方はちょっとズレてる気もするが。

「私も欲しいな〜、マロマロちょうだい？」

「無理。一度登録したら本人しか使えないし。発売されたら親にねだって買ってもらうえ」

「発売日っていつなの？」

そうアオイちゃんに問われ、俺はアンナから聞いたことを思い出す。

「ん〜、たしか夏休み明けからだったはず。とりあえず一週間のリリースでも不具合とか出ないのを確認できたのと、思った以上に世間の反応が良かったからこの試作機をそのまま正式版ってことにして発売日を早めたとかなんとか」

カードギア、アンナがどうにかコネを駆使して手に入れようとしたけど、結局無理だったんだよな。

というよりも、夏休み明けには発売されると聞いて無理に手に入れようとせず引き下がったと言うべきか。

その代わり、夏休み明けには俺の持っているのと同じハイエンドモデルを人数分確保できたらしいので、さすがは十七夜月家のコネといった感じであった。

「ふうん……まあいいや。それよりもさ〜、またファンタジーランド連れてってよ〜」

「忙しいからダメー。菓子奢ってやるから我慢しろ」

俺はアオイちゃんのおねだりを軽く躲すと駄菓子屋を指差して言った。

「やった！」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「ゴチになります、マロ兄さん」

一目散に駄菓子屋へと駆け込んでいく三人を見てまだまだガキだなとほくそ笑みつつ、俺も駄菓子屋へと向かう。

すると俺を見た店主の婆ちゃんが懐かしそうに声を掛けてきた。

「あら、久しぶりだねえ。小学校卒業以来だから五年ぶりくらいかい？」

「婆ちゃん久しぶり」

そうか、もう5年くらいになるのか。

学校帰りに寄ることのできた小学生の頃と違い、通学路に被らない中学は自然とここからも足が遠ざかっていた。

元々ここは小学生たちのたまり場であり、小学生たちを委縮させることになるからと、中学が上がったらこの公園も卒業する空気があったため、婆ちゃんも卒業した子が来なくなるのは慣れっこだろうが……。

こうして顔を覚えてもらっているのを知るとたまには顔を出せばよかったなと思ってしまう。

「TVで見たよ。冒険者になって、なんだかすごい発見をしたり、すごいじゃないの」

婆ちゃんはそう言って俺の肩を叩いた後、心配そうに言う。

「……でもあんまり危険な真似はしないようにね」

おそらく猟犬使いの件を言っているのだろう、と俺は大人しく頭

を下げた。

「お兄ちゃん、これ買って！」

お菓子を選び終わった愛たちがそう言って買い物カゴを渡してくる。

その中にはジュースやお菓子がカゴいっぱいまで入っていた。

コイツ等……マジで遠慮がねえな。半分くらいダメ元なんだろうが……。

と思いつつ「一日で食べつくしたりすんなよ」と注意だけしてカゴを婆ちゃんの元へ持っていく。

数年間ご無沙汰だった分、店に金落としていかねえとな。

婆ちゃんが山盛りの菓子を見て目を丸くする。

「おや随分買ったねえ、払えるかい？」

「大丈夫、稼いでるからさ」

と言ってスマホを取り出そうとして気付く。

しまった……！ 財布忘れた！

こここのところスマホと冒険者ライセンスだけで買い物していたから！

妹たちの手前、ここで財布忘れたというのはカッコ悪すぎる……。

と俺が焦っている。

「ああ、P O y P a y 使えるよ」

そう言ってレジの横の電子マネーの対応リストを指差す婆ちゃんに、俺はこの日最大の時の流れを感じたのだった。

「そう言えば、お前らなんか将来の夢とかあるの？」

公園のベンチで愛たちと並んでアイスを食っていた俺は、ふと思いついて愛たちへと問いかけた。

「え、なんか突然だね。どうしたの？」

俺の突然過ぎる問いに愛も首を傾げる。

「ああ、いや……ちよつと俺も将来の事で悩んでさ」

「えー？ お兄ちゃん冒険者やるんじゃないの？」

「ん？ いや、そうだな。冒険者やることだけは決まってるな」

驚く愛に首を振って否定する。

そう、冒険者をやること……それ自体は決まっている。

問題は、どういう冒険者になるか、だ。

「あ、なんだ、ビックリした。将来のことで悩んでるって、プロフェッサーになるかグラディエーターになるかって話？」

「んん……まあ、そう言うのもあるか」

モンコロも文化の一つとして世界中に広まったことで、そろそろワールドカップを作ろうという話もある。

そこでの優勝を目指し、グラディエーターとして世界一になる……というのも冒険者としての目標としてはアリではある。

「ふうん……よくわからないけど、グラディエーターを目指すならパパとママも安心するかもね。プロフェッサーと違って命の危険はないし」

「ああ……」

確かに、お袋たちはそちらの方が安心するだろう。
親を心配させない、というのも重要な要素だ。

「ウチはモデルになりたいな」読者モデルのスカウト来ないかな」

ふむ、アオイちゃんはモデルになりたいのか……。

二人とも愛の友達だけあって可愛いし、アオイちゃんは足もスラリと長いから、中学に上がったたらスカウトとかあるかもしれない。

「私は投資家になる。目指せ、億トレーダー」

……相変わらずこの子だけちょっと愛たちとは世界観が違うな。

「ミオちゃんは投資家としてどれくらいの腕なの？」

俺が問うと愛が答えた。

「ミオちゃんは凄いわ、十万円から始めて一年で5倍にしちゃったんだから」

「5倍!? そりゃ凄いな」

「いやたまたまです。最初に名前を知ってるってだけで買った株がどんどん上がって5倍になっただけなんで」

いやそれでも十分凄い……。大抵の奴は、上がり切るまでにどこかで利確しちまうからな。

投資もギャンブルも、金を持っている方が圧倒的に有利というのは変わりない。

個人投資家のほとんどが退場することになるという世界で、運が良かったとは言え資産を数倍にできたのは凄いことだ。

俺も株で資産運用を出来ないかと勉強してみたことがあるが、あまりに複雑怪奇な世界に、こりや迷宮に潜った方がよほど堅実に稼げると断念したことがある。

今なら蓮華の能力もあるしもしかしたらイケるかもしれないが……それで億とか稼いだら迷宮に潜る気が無くなりそうだし、なにやりしつぺ返しが来そうで怖い。

ということであは株とか投資には手を出す気がなかった。

「二人とも凄いな、私は将来とか考えたこともないな」

「え？ そうなの？ 愛は冒険者になりたいと思ってた」

「うん」

「うん、冒険者にはなってみたいけどね。お兄ちゃんみたいにプロを目指せるかって言ったら私は無理かなって最近思ってたさ。なんだかね、危険で恐ろしい世界だしね」

俺は少し驚いた。

愛は冒険者の良い面しか見ていないと勝手に思っていたからだ。

だから、もし愛が俺を見て冒険者なんて簡単だと思ってる冒険者になるうとしたのなら、その危険性などをしっかり教えておこうと思っていたのだが……。

「そうなんだ、なんか勿体ないな、せつかく凄い冒険者のお兄ちゃんがいるのに」

「身近で見てるからこそ私たちにはわからない苦労が見えてるのかも」

「はえ、やっぱりそうなんだ。クラスの男子とかは中学上がったら冒険者になってマロマロのことくらいすぐに超えるとか息巻いてるけどね」

「アレこそ現実が見えてない。ただイキってるだけ」

「確かに」。この前もさあ、吉田の馬鹿が――」

それから如何にクラスの男子たちが馬鹿で阿呆かという話題へと移ってしまい俺は苦笑した。

しかし……小学生も色々考えてるもんなんだな。

俺がこのくらいの時は、将来のシの字すら考えていなかったと言
うのに。

小学校の卒業文集、将来の夢にはなんて書いたっけ……。

アイスが溶けて地面に落ちるまで考えたが、どうにも思い出せな
かった。

愛たちと別れた俺は、再び駅周辺まで戻ってブラブラしていた。

街を歩いていると、色々と冒険者関係の職業があることに気付く。

例えばビルの大型ビジョンに流れているCM。それに映っているのは人間ではなく、俗にタレントカードと呼ばれる芸能活動をするカードだ。それらのタレントカードに払われる給料を受け取るのは、当然カード自身ではなくその所有者である。

俺も霊格再帰が発見され騒がれた当初、いくつかの事務所から蓮華にタレント活動をさせてみないかというオファーを貰ったことがある。

世間的な知名度と人気を得たカードにタレント活動をさせてその報酬を受け取る『カードプロデューサー』。これも今の世の中ではれっきとした職業である。

例えば書店の店頭に置かれた雑誌。その見出しには預かったカードにスキルを仕込む育成屋なるビジネスの実態が紹介されている。変なところに頼むとそのままカードの持ち逃げをされるというトラブルも存在するようだが、信頼と実績のある大手などはそこそこの

大金が掛かるといふのに半年以上の予約待ちとなっている、と聞く。育成は俺の冒険者としての長所の一つだ。獵犬使いの件で知名度と信頼もそこそこある。育成屋をやることも不可能ではないだろう。

他にも壁には自衛隊の募集のポスターが張られているし、遠野さんのような札商という生き方もある。冒険者としてのそれなりの活動実績があれば推薦で行ける大学も多いし、迷宮関連の研究をしている企業や機関も多い。

今までは我武者羅に突っ走ってきたが、こうして立ち止まって周りを見渡して見ると意外と色々な道が広がっていることに気付く。

何も迷宮に潜り、闘技場で戦うだけが冒険者ではないのだ。

「あれ？ マロ？」

そんな風に八王子駅の空中遊歩道ヘデストリアンデッキから駅前の風景を眺めていると、後ろから声が掛けられた。

聞き覚えのある声に振り返ると、そこにいたのは案の定東西コンビであった。

「東野、西田！　なんで八王子に？」

俺の問いに東野が答える。

「格ゲーしに来たんだよ。メルシーブラッドメルブラが6台あるの八王子のゲーセンだけだし。お前こそ何してんだ？」

「俺は適当にブラついてるだけだよ。久しぶりフリーだったから」

「お前……今日休みなら言えよ。そしたら誘ったのに」

「すまんすまん、昨日の夜急に決まったからさ」

俺は東野へと軽く謝ってから西田へと目を向け。

「とういか……西田、痩せた？」

西田がニヤリと笑う。

「あ、やっぱりわかる？ 実は里香から冬コミでは一緒にコスプレしようって誘われててさ。今の体型じゃ格好つかないからダイエット&筋トレ中」
「マジか……」

あの生まれてから一度も痩せてた時期がないと言っていた万年デブが、彼女のためとはいえダイエットと筋トレをする日が来るとは……。

西田は何気に背も高いし、肩幅もあって体格良いから、痩せたらなかなか精悍な感じになるやもしれん。

「とりあえずマロも暇ならゲーセン行こうぜ。コイツと二人だと要所所で惚気を挟んできて殺意湧くんだよ」
「はいはい」

独り者特有の荒んだ眼で言う東野に苦笑しつつ三人で行きつけのゲーセンへと向かう。

それからゲームに興じることしばし……。

「バ、馬鹿な……一勝もできない、だと……？」わが目を疑う東野。
「貴様、いつそんなにやりこみを……。冒険者活動で忙しかったはずでは……」慄然とした眼差しを送ってくる西田。

そんな二人に、俺は「ククク……」と嗤った。

俺が最近やりこんでないと思っただけで油断したな……。こっ見えて俺

は毎晩のように蓮華と熾烈な死闘を繰り広げているのだ。

最初の頃はコンボなども理解せず一方的に俺に勝られるだけ――接待プレイをすると逆に機嫌が悪くなるから本気で相手をするしかないのだ――だった蓮華も、コンボや駆け引きを覚えた結果、最近ではかなりの腕になりつつあった。

リンクを習得してからというものの動体視力や思考速度も上がり、特に最近はその成長が顕著な俺にとって、プロゲーマーでもない東西コンボを負かすことなど赤子の手をひねるよりも容易いことであった。

「くそ〜！ マロをフルボッコしつつジュースとかゲーム代を奢らせる計画が！」

「マジかよ〜、お前ホントに真面目に冒険者活動してんのか？」

東野がわなわなと震え、西田が悔し気な視線を向けてくる。

やはりコイツら、そういうつもりだったか。一番勝率が悪い奴がジュース奢りなんて言い出した時点でそうじゃないかと思ってたぜ。

「残念だったな、オラ、西田ジュース買ってこい。ダッシュでな」

「わかったよ……二人ともお汁粉で良いよな？」

「いいわけねーだろ！ ちゃんと冷たいジュース買ってこい」

俺はそう言って西田のケツを引っ叩いたのだった。

「あのさ、なんか悩みでもあんの？」

ゲーセンを出てジュースを飲みながら一服していると、東野がそんなことを言いだした。

「どうして？」

「いや、なんかいつものマロと違うからさあ。なんかどこか上の空っていうか……」

「ああ、それは俺も思った。マロが冒険者になった頃もこんな感じだったわ」

「……………」

コイツら……凄いな。

俺はピタリと言い当てられたことに驚いた。

同時に、友人たちの俺への理解の深さになぜか嬉しくもなる。

そうだな……せつかくだし相談してみるか。

「あのさあ、お前らって将来のこととか考えてる？」

「な、なんだよ、急に……もしかしてマロの悩みってそういう感じの話？」

「まあそんな感じ」

「え……マジか。そんなこと言われても俺らも特に将来のこととか考えてないからなあ」

なあ？ と西田へと同意を求める東野だったが……

「いや？ 俺は将来イラストレーターとして食っていききたいと思っただけだ」

「ヴェッ！？」

西田の答えに、東野はなぜか酷い裏切りを受けたかのような顔をした。

「へえ、西田がイラスト描いてるのは知ってたけど……プロを目指してたのか」

「まあね。最初はラノベかソシヤゲの仕事から始めて、いずれはゲーム制作とかもしたいなって考えてるんだよね」

「ゲーム制作ってそういう会社に専属絵師として入るってこと？」

「いや、出来れば気の合う仲間と同人から始めて、いずれ会社に来たらなって考えてる」

「マジか〜！」

予想以上に具体的に考えていることに俺は驚きを隠せなかった。

「そこまで言うってことは、もしかしてすでに動き始めてんの？」

「まあね。SNSで絵を上げてるのもある意味その一環だし。やっぱり同人から立ち上げるとなると絵の力が大きいからさ、今のうちから少しでもファンを作っておこうと思って。プログラムに関しては里香が高校卒業したらそっち系の専門学校進む予定だから俺も同じ学校のイラスト学科に入って、そこでサークル作って……ってのが今のところ理想かな」

「ほおおお〜！ お前、凄いな。出来たら俺にもやらせてくれよ」

「むしろマロも手伝ってくれよ。第一作は冒険者物にする予定だから。監修？ っていうの？ そういうのやってくれると嬉しい」

「おお、やるやる。最後のクレジットにちゃんと俺の名前も乗せてくれよ」

「逆にありがたいわ。実際の冒険者監修ってことにできるし」

そこで西田が思い出したように問いかけてきた。

「ってか、なんでそんな話すんの？」

「ああ……実は——」

俺は先日ほかの師匠の話を、所々暈しつつ二人へと話していった。

「……………なるほどなあ、難しい話だなあ」

俺の話聞いた東野が難しい顔で腕を組む。

「冒険者としての目標、ゴールかあ……………なんつーか、俺には想像もできないレベルだわ。すまん、俺はあんまり役に立てん。マロがしたいようにするのが一番、としか……………」

「ああ、わかってる。ありがとう」

苦心の末、月並みな言葉を送って来た東野に苦笑しつつ、同じく難しい顔で考える西田へと目を向ける。

将来のことなど碌に考えていない東野と違い、目標に向けて努力している西田には俺も少しだけ期待を寄せていた。

しばし答えを待っていると、やがて頭の中で言葉をまとめたらしい西田が口を開き始めた。

「うーん……………なんというか、マロはその都度にゴールを動かしてきたって言ってたけど、別にそれって悪いことじゃなくね？」

「とどうと？」

「うん。例えば俺だってゲーム会社を立ち上げるのが目標だけど、別にそこがゴールってわけじゃないし、むしろある意味でスタート地点なわけじゃん？」

そうなると次はヒット作を出すことが目標になるわけだけど、それで大ヒット作を出したら終わりってわけじゃないよな？

そりゃそれで満足する人もいるだろうけどさ、普通は次々とヒット作を出したいってなるもんだろ？

むしろここがゴールって決めつけるのって逆に危険なことだと思うな……………」

「……………！」

俺は西田の言葉にハツと目を見開いた。

ゴールを決めつける危険性……。それはゴールを持たなくてはいけないと思っていた俺にとってまさしく目から鱗な言葉だった。

西田はさらに続ける。

「っていつか、冒険者の世界について俺は詳しくないからよくわからないけど……マロは目標とゴールを混同してる気もするな。

マロって冒険者……っていつかカードに一生関わっていききたいんだろ？」

ならもうそれって人生ってことじゃん。

人生って、目標はあってもゴールはないんじゃないかな？」

ゴールはない……。

「勝手に自分の終着点はそこだって決めて、ゴールしたは良いけど燃え尽き症候群になったマロは見たくねーな」

なんだかんだ言って、おれらのヒーローだしさ……。

と気恥ずかしそうに言う西田に、俺も照れくさくなって俯いた。そんな青臭い空気を払拭するように、おどけた風に東野が言う。

「……っていつかお前ら将来とかそういう話すんの止めてくれよ。なんか焦るじゃねえか」

俺は東野へとジト目を向けて言った。

「いや東野はちょっと考えた方が良い……」

「俺らもう高2だし、普通に進路とか考える時期だろ」

「クラスの奴らもこの夏は予備校の夏期講習とか行ってる奴ら多いぞ」

「一緒になつて遊んでる俺が言えたことじゃねえけどさ、高校出たら働くつもりじゃないなら勉強した方が良いんじゃないかね？」

「うああああ！ 聞きたくない！」

東野は耳を塞いで叫ぶ。

だが俺たちは容赦なく追撃していく。

「お前が耳を塞ぎ目を閉じて現実逃避してる間にも現実が進んでるんだぜ？」

「高3になつて慌てて受験勉強するも志望校には落ちて、親からもフランの進学は認めてもらえず止む無く浪人。浪人中も家に金を入れるように言われバイトを始めるも、そのうち勉強もせずにフリーター化。高校時代の同級生から同窓会の知らせが来るもフリーターである自分を知られたくなくて欠席。そうしているうちにどんどん昔の友人たちとの付き合いも希薄になつていき、年齢が進むごとにバイトも続けにくくなり……」

「やめるおおおおおお！ つか、俺のことはいいんだよ！ 話聞いて思つたけど、牛倉さんのことはどうなつたんだよ！ マロが冒険者になつた最初の動機つてぶつちゃけそれだつただろ！」

「う……！」

思わぬ反撃に俺は仰け反つた。

「牛倉さんはなあ………なんというか、親しくなればなるほどに、その中に越えられない壁を感じるというか………」

「ああ………それはなんとなくわかる。牛倉さんって人当たりは良いけど、なんか一線を引いて接してる感じがあるよな」

「ってか牛倉さんつてたぶん男に興味ないというか………ぶつちゃけ

——

「おっとそこまでだ！」

禁断のワードを言いかけた西田を俺は制止する。

「それ以上はやめてくれ……頼む」

「お、おう……すまん」

「まあ、本人の口から聞くまではシュレーディンガーの猫だからな……」

東野の言う通りだ。

仮に牛倉さんが男に興味ない系だったとしても、それを本人の口から聞くまでは俺にも微粒子レベルの可能性が存在するのだ。

……もっともそれを確認する勇気は俺にはないが。

「どうする？ もう一戦するか？」

腕時計を見た東野が問いかけてくる。

「格ゲーはもういいよ。なんかマロすげー強くなってるし。カードマスターやろっぜ」

「カードマスターなら勝てるしな。マロ雑魚だし」

「んだとコラ！ 金に飽かせて組んだ俺の金満デッキの力を見せてやる！」

「可哀想なマロ……少ないお小遣いでデッキのやりくりをする少年の心を失ってしまったのね……」

「俺たちでレアカードの力に頼り始めたマロに戦略とデッキコンセプトの大事さを教えてやるーぜ、西田」

——その夜、俺は小学校の卒業文集を引っ張り出し、将来の夢の欄を読んでみた。

そこには、「冒険者になって好きなカードを集め、最高のデッキを作る」と書いてあったのだった。

第七話 道は邇（ちか）きに在りて遠きに求む（後書き）

【TIPS】アイテムドロップ

迷宮のCランク階層以上では、倒したモンスターが魔石やカード以外にも魔道具を落とすようになる。

そのドロップ率は一割程度と決して低くなく、また落ちるアイテムの価値もモンスターのランクにより一定以上の質のものが落ちるため、プロクラスの大きな収入源となっている。

モンスターが落とすアイテムの中には極まれにレアドロップと呼ばれる希少品が含まれており、そのほとんどは高値で取引されているが、中には使い道がわかっていないために安値が付けられているものも存在する。

霊格再帰の発見以降、それらのハズレもキーアイテムとしての使い道があるとわかり、ハズレの数はかなり減ったが、それでもまだある程度のハズレが存在している。

落とすアイテムは一定以上の大きさのモノはカード化されて出現するが、人間程度の大きさの物まではそのままの大きさでドロップするため、プロクラスからはその運搬方法にも頭を悩ますことになる。

第八話 二度あることは三度ある

火山が噴火し、流れ出た溶岩流が川となり『壁』となった地獄のような光景の階層。

そこで俺は十を超えるCランクモンスターと対峙していた。

牛、馬、豚、虎と様々な動物の頭を持った筋肉隆々の鬼たちは、フィールドに相応しいどれも地獄の獄卒である。

身の丈2メートルを遙かに超える鬼たちは拷問具のような禍々しい金棒を振り上げ、こちらを磨り潰そうと迫る。

それに相対するのは、やはり鬼。妖艶な女鬼と、気品を感じる女吸血鬼……鈴鹿とイライザだ。

ダインスレイヴとデュラハンの鎧を身に纏うイライザに大通連を振るう鈴鹿の二枚は、数に勝る屈強な鬼たちを洗練された武術で見切り、投げ、躲し、転ばせ、いなしてよく対抗してはいるが基本的に劣勢であり、じりじりと後退させられている。

その美しい肌には少しづつ傷が刻まれ、一方の鬼たちは傍目にもわかるほどに傷を負った端からそれが塞がっていく。

この階層のフィールド効果は回復不能。こちらの傷は癒すことができず、相手は鬼系の先天スキルの自己再生により何もしくとも傷が癒えていく……。

それを歯がゆく思いつつ、今はイライザたちに耐えてもらうしかない。

そして、ついに彼女たちが溶岩流の壁を背に追い詰められ――。

『今だ!』

俺は伏せていたカードたちに一斉に号令を下した。
隠れていた蓮華の攻撃魔法が鬼たちへと降り注ぎ、ユウキが空蟬の術でイライザたちを救い出す。

突然敵の姿を見失った獣頭の鬼たちは混乱するが、そこに新たに召喚されたメアのスキルが掛けられた。

蓮華、鈴鹿、メアの友情連携のスキルにより効果範囲、状態異常確率ともに引き上げられた胡蝶の夢は、鬼たちを一体残らず幻影に掛け、魅了した。

魅了された鬼たちは、メアの仕掛けた幻影に導かれるようにフラフラと一か所に集まり――そこにあった罠を盛大に踏み抜いた。

轟音。地面が吹き飛び、赤い柱が立ち上がる。

それは一言で言うならば溶岩の間欠泉。

噴き上げた溶岩はそこにいた鬼たちを焼き尽くし、しかしどうい
う仕掛けか周囲への影響は多少熱気がくる程度で全くない。

やがて赤い柱が消えた時、そこには鬼たちのドロップアイテムだ
けが残されていた。

それを見て思わず呟く。

「Cランクが即死、か……。相変わらずこの罠の破壊力には寒気が
走るな」

まあ、それを悪用している俺たちが言えたことではないが。
そこに師匠がやってきて言った。

「お疲れ様、マロ。そろそろ交代しよう」

「了解。サンクス」

師匠に礼を言って、織部のデュラハンが呼び出したコシユタ・バ
ワ一の馬車へと戻る。

「うは……！ 涼し〜」

中に入った俺はひんやりとした冷気に喜びの声を上げた。

馬車の中には盥に入った大きな氷の塊が置かれており、それが冷
気の発生源であった。

「お疲れツス、先輩」

「ご主人様、ドリンクをどうぞ」

「おお、ありがとうオードリー」

後方からデュラハンのドジ対策をしてくれていたオードリーが差
し出してきたスポーツドリンクを有難く受け取る。盥の氷水で冷や
されたドリンクは犯罪的な美味しさだった。

「ふう〜……しかし、俺たちも大分Cランク迷宮に慣れてきたな」

「ですね、全員で戦わなくてもよほどキツイフィールド効果じゃな
ければ交代制で戦えるようになりましたし」

まあウチと小夜は二人セットでようやくツスけど……と肩を竦め
るアンナ。

俺たちがCランク迷宮の攻略を始めてから、早くも二週間が経っ
た。

すでに俺たちはサブルートのをほとんどを攻略し、守護者のヴィー
ヴィルがいる階層を目前とするところまで来ていた。

最初はCランク階層を一つ踏破するだけで一日近くかかったこと

から試験の達成も危ぶまれたが、スキル封印や召喚制限と言った厄介なフィールド効果以外の階層はそこまでキツくもなく、大体一日に2〜3階層は進めることが出来ていた。

この二週間のリザルトは以下の通りだ。

カードのドロップ

- ・Dランクカード合計24枚（その内、人気カード8枚）
- ・Cランクカード合計4枚。

ドリュアス：木精のニンフ。エルフに迫るほどの美貌を持つ人気女の子カード。アルラウネを眷属召喚する能力を持つ。

レオナルド：サバトの雄山羊と呼ばれる、羊頭の悪魔。淫魔の一種であり、魔女たちのサバトを取り仕切る。Dランク相当の下級悪魔を呼び出す眷属召喚スキルを持つ。

馬頭鬼^{マスキ}：馬頭の地獄の獄卒。二体一対型のカードであり、牛頭鬼^{ウスキ}とセットでその真価を発揮する。

やまらのおろち：ヤマタノオロチではない。八つの蛇の頭の代わりに男の一物が生えた下ネタの権化のような妖怪。海外での別名はジャパニーズヘンタイモンスター。その外見から主に女性冒険者たちによってドロップしても即ロストさせられることも多い哀れなカード。実は普通に結構強く、特に女相手には無類の強さを発揮する。

アイテムのドロップ合計262個

- ・レアドロップ（13）

白紙のカードの束：カード化の魔道具。十枚入りで対象をカードに保存することができる。所持禁止類魔道具。

バロメツ（2）：羊が実る奇怪な樹。たまにカニの味がするものが混じっている。食べても人体に影響はない……らしい。

飛竜の翼膜（2）：ワイバーンの翼。カードに使用することで一定時間ワイバーンのような翼が生え、飛行が可能となる。5〜10

回は使用可能。

毒竜の瞳：バジリスクの瞳。使用することで対象に猛毒と石化の
状態異常。5〜10回は使用可能。

薬水の水差し

魔石袋（2）

遭難のマジックカード

転移のマジックカード

レベルアップのマジックカード（2）

・ノーマルドロップ（249）

ミドルポーション（134）

ハイポーション（29）

中等攻撃魔法のマジックカード（51）：各種中等攻撃魔法のマ
ジックカード。

イミュニティのマジックカード（6）：免疫のマジックカード。
一定時間、状態異常を防ぐ確率を上げる。

アンロックのマジックカード（4）：開錠のマジックカード。鍵
のかかった扉や宝箱の罠を解除する。

コンセントレーションのマジックカード（7）：集中のマジック
カード。次の魔法の威力と消費魔力を二倍にする。

マジックウエブのマジックカード（4）：拘束のマジックカード。
相手を魔法の糸で拘束する。

リフレッシュ（5）：中等回復魔法・壮快の魔法が封じられてい
る。体力と精神、様々な状態異常を回復する。

ブレス（5）：中等回復魔法・祝福の魔法が封じられている。魔
力を回復させる。

リジエネレート（4）：中等回復魔法・再生の魔法が封じられて
いる。対象を一定時間回復させ続ける。

カーバンクルのドロップ

・ガーネット合計49個。未回収残り6個（Cランク階層スキル封印分3個、Dランク階層未踏破分3個）。

・金色のガツカリ箱

宝籤（2）：十枚セットの黒色無地のカード。使用することでラウンドでモンスターカードへと変化する。

転移のマジックカード

ミドルポジション（15）

ハイポジション（2）

ハズレ（29）

今回の攻略では、蓮華の特性を知られなくなかったため特に幸運操作などはしなかったのだが、冒険者部全体の運気が高まっていたのか、期待値以上にカードがドロップし、また所持禁止類魔道具などもドロップした。

まずカードについて。

ドロップしたカードは、各自のカーバンクルガーネットやヴィーヴィルダイヤの配分からの支払いで引き取ることが可能ということになった。

値段については、ギルドの買い取り値段を参考に、そこから他の部員が持つ四分の一ずつの所有権を買い取る…という形となる。

例えばギルドでの買い取り価格が4000万円のカードがあったとして、まず購入希望者がこれを4000万円分のガーネットで買い取る。

その後、購入者含めて4000万円分のガーネットを四等分する……という流れだ。

もしも購入希望者が二人以上の場合は、オークションとなる。

それぞれのカードについてだが、まずドリュアスはアンナが引き取っていった。

ドリュアスはエルフとの相性も良くシナジーが見込めるため、それを狙ってのものだろう。

実はドリュアスは俺も欲しかったのだが、人気カードでギルドでの買い取り価格も8000万円を超えるということで泣く泣く諦めた。

欲しい理由もコレクション的な意味合いが強く、戦略性によるものではなかったため、理性がギリギリで欲望を上回った形だ。

次にレオナールは織部と師匠が取り合いになった結果、6000万円で師匠が引き取っていった。

魔法のサバトを取り仕切るレオナールと、魔法の守護神であるアラディアのシナジーを狙っての物と思われた。

レオナールとの争いに敗れた織部は、馬頭鬼^{マスキ}を2000万円で引き取っていった。もし今後牛頭鬼^{コスキ}がドロップした際は織部が優先的に取得できる権利付きだ。

そして、やまらのおろちに関してはその当然のように誰も欲しがらなかった。

やまらのおろちのように誰も欲しがらなかったカードは、しばらくはチームでの預かりとなり、年末まで誰も欲しがらなかった場合売り飛ばされることとなる。これは他の魔道具類も同様で、税金のことを考えてため込んだカードや魔道具の精算は基本的に新年に行われることになった。

例外は、部員全員の同意があった時か……チームが解散することになった時のみだ。

俺以外のメンバー全員がカードを購入したため俺のガーネットの配分は9000万円分……数にして45個とほぼすべてのガーネット

トを受け取れることになった。

これだけあればいろいろと実験に使えそうである。

次に魔道具類に関して。

まずは法律で所持・使用が禁止されているカード化の魔道具についてだ。

これについては、ドロップしたその日のうちにギルドで売り払った。所持禁止類魔道具は取得から売却まで時間が経てば経つほどギルドの取り調べが長くなるため、即売り払うことが推奨されていた。取り調べには虚偽察知の魔道具が使われ、そこで引つかかると今度は読心の魔道具が使われ他の余罪もないか徹底的に洗われることとなる。

ちなみにCランク迷宮に年に一回以上入った者は、年一回ギルドの取り調べを受ける義務があるため、これを回避することはできない。

なお、カード化の魔道具の買い取り価格についてだが、これは十枚入りで一千万となった。ギルドのカード化のサービスが一回百万なので、ギルドの取り分はゼロの形だ。

これはあえてギルドの取り分をゼロにすることで、隠し持つメリツトを無くしギルドへの積極的な売却を促す措置である。

そのため、所持禁止類魔道具の売却で得た収入には税金もかからない。

普通の冒険者にとって犯罪に使うつもりでもなければ、さっさとギルドへと売り払って必要な時だけサービスを利用すれば良い………というわけだ。

……カード化の魔道具に関しては試してみたいことがあったのだが、法を破ってまで試したいこともなかったのだ、素直に諦めた。

またモンスターからのドロップ以外に金色のガツカリ箱からドロ

ツプしたアイテムとして、転移のマジックカードと宝籤のカードが2セット出た。

宝籤のカードは、通常のモンスターの表面が黒色に染まっている外見の魔道具で、使用することでFランクからAランクのどれかのカードに変化するという魔道具だ。

当然高ランクほど出現する確率が下がり、Dランク以上が出る確率は1%以下なのだが、かつて一度だけどこかの国でAランクが出たことがあり、一枚百万円とその効果の期待値に反して国が妙に高値で買い取っている魔道具であった。

そのため自分で使ってFランクやEランクカードの雑魚カードに化けさせてしまうよりもギルドに売ってしまった方が賢いのだが……：こういう運次第の魔道具というのは俺の、というか蓮華の最も得意とするところである。

本来ならば年末での換金アイテム行きの予定であったが、皆に交渉してその場で頭割りで配分してもらった。

ちょうど二十枚と四人で割り切れるのも良かったのだろう、「先輩も大概ギャンブラーツスねえ」とアンナに笑われつつも5枚手に入れることに成功した。

もしかすると出現した時点で結果が決まっている類の魔道具なのかもしれないが、それを確かめるのも目的の一つだ。

この迷宮の攻略が終わりに、ガーネットを受け取ってから色々を試してみるつもりだった。

その他、モンスターを倒した際の魔石や踏破報酬の魔石に関しては、チームでの活動費として積み立てられ攻略に必要な物資に使われることとなった。

これは誰かのカードがロストした際の補填にも使われるとのことなので、特に誰も反対はしなかった。

以上のように様々な成果のあったCランク迷宮攻略だが、得たモノは何もカードや魔道具ばかりではない。

Cランク迷宮で戦えるだけの経験と戦術も大きな成果だ。

罨や環境を逆に利用する戦術もその一つ。

通常、迷宮のモンスターたちはデフォルトで罨の存在を感じる機能があるため、罨に掛かることがない。

そのため冒険者側にとって迷宮の罨とは邪魔なだけの存在と考えてしまいがちなのだが、何もモンスターには罨が効かないというわけではない。

そのため、魔法で罨のある場所に吹き飛ばしたり、魅了して罨を踏ませたりして上手く追い込んでやれば、逆に罨に嵌めてやることでダメージを与えることも可能だった。

Dランク迷宮まではそんな小細工をせずとも力押しで勝っていたため思いつかなかったが、ランクが対等となってくるCランク迷宮では「あと一押し！」が欲しい時も多く、必要に駆られて手に入れた戦術の一つであった。

ちなみに罨やフィールドの環境を利用した戦術はプロでは割と必須技能らしいのだが、俺たちが思いつくまで師匠は教えてくれなかった。

曰く、こういうのは自分で思いつかないと意味がないから、とのこと。

そう言うのいいから最初から一から十まで教えてくれ、と思ってしまうのは俺が今時の若者だからなのだろうか……？

一一一一とまあそんな感じで、最初は少し躓いたものの順調に攻略を進め、俺たちはついに残すは守護者と主を倒すだけという所まで来た。

「……さて、この階段を降りればヴィーヴィルとの戦いが待っているわけだけど……守護者の性質については覚えてる、マロ？」

「Cランク階層に入ってから微妙に教師モードに入ってる師匠がそう問いかけてくる。」

「はい、先生。まず守護者は主同様迷宮のバックアップを受け強化されます。ランクアップはしないものの、単体強化か眷属召喚の能力を付与されます。また、サブフィールド効果が一つ追加され、メインフィールド効果と合わせてすべて守護者仕様へと変更されます」

俺の回答に神無月先生は「その通り」と頷く。

「このうちメイン効果については、守護者の種族の強化に特化したものになることが多い。この迷宮の場合だと、機械破壊が種族・ヴィーヴィル強化になるわけだね。眷属召喚型の守護者だと種族・ドラゴン強化とか少し効果が落ちる代わりに範囲が広がることもある。まあ、迷宮からの強化と合わせて大体通常よりも2倍はステータスが強化されると考えておいて。」

さて残りのサブフィールド効果についてなんだけど、これはある程度ランダムとなっている。ランダムとは言っても、守護者にとって意味のない効果はない。例えば雪女の守護者に炎強化とかね。

ではここで問題です。もしサブフィールド効果がスキル封印や召喚制限などだった場合、皆ならどうしますか？」

「はい！」

と勢いよく手を上げたのはアンナだった。

「リセマラします！」

「うん、正解。サブフィールド効果は一日経てばまた変わるからあ

んまりキツイようなら出直す方が無難だね」

まあ、俺たちの場合は日数制限があるからいつまでもリセマラするわけにはいかないが、スキル封印とか来たらリセマラせざるを得ないだろう。

それでも本命の主のことを考えればリセマラできるのはせいぜい2回までくらいか。

「……ヴィーヴィルの弱点とかについては、皆も予習してきただろうから別に良いか」

その師匠の言葉に皆で頷く。

ヴィーヴィルは魔法全般に強い耐性を持つ一方、物理攻撃に弱いモンスターだ。つまり物理で殴れば良いというある意味やりやすいモンスターとなっている。

注意点としては、ありとあらゆる攻撃を一度だけ反射する先天スキルを持っていることだが、これについては大技で一気に沈めようとせず、ジャブやボディーブローのようにジワジワと攻めていけば良いだけなので特に問題ない。

「じゃあ、行こうか」

俺たちはお互いの準備が整っていることを確認し、守護者の階層へと足を踏み入れた。

「ぐわあああ——ッ!——」

穏やかな日差しが木々の隙間から差し込む湖畔に、戦闘シーンをカットされたヴィーヴィルの悲鳴が響き渡る。

ドゥツ！ と地に倒れ伏したヴィーヴィルは、しばし恨めし気にこちらを睨んでいたが、やがてその美女の上半身と飛竜の下半身という異形の身を一つの宝箱へと姿を変えた。

それを見たアンナが額を拭いつつ言う。

「いや、ヴィーヴィルは強敵でしたね！」
「白々しい……」

ひたすら囲ってボコるだけの戦闘で強敵も何もないだろう。守護者としていくら強化されていようと、32対1で苦戦するはずもない。

これでフィールド効果がスキル封印や召喚制限だったら話は別だったが、もしそうだったら出直してきただけのこと。つまり、相手には勝ち目など端からなかったわけだ。そりゃあヴィーヴィルも恨めし気な眼をするというものである。

「ま、倒した敵なんてどうでも良いッス。重要なのは宝箱ッスよ、宝箱。ダイヤ以外に何が入ってるかな」

いそいそと宝箱を開けようとするアンナを、やはり中身に興味津々の俺たちも囲む。

皆が見守るなか宝箱の蓋が開けられ――。

「お、おお……？ ダイヤが……二つ？」

宝箱の中に入っていたのは、大粒のダイヤだった。片や無色透明の大きさ以外は一般的なダイヤ。

もう片方はサファイアかと錯覚するほどに青い、不思議な輝きを

持つダイヤ。

無色透明の方が恐らく確定ドロップのヴィーヴィルダイヤだとは思うのだが……。

「これは……もしかしてホープダイヤか？」

蒼いダイヤを覗き込んだ織部が呟くように言った。

「ホープダイヤ？ それって確か不幸を呼ぶとか言う……？」

「うむ。持ち主を次々と破滅させながら、人の手を渡り歩いていく呪われたダイヤ……それがホープダイヤだ。もつともそれはあくまで脚色された都市伝説のようなもので、実物はアメリカの博物館にある。だがこれは――」

「ホープダイヤの伝説が元に生まれた魔道具……本物の呪いのダイヤってことか」

俺が引き継いでそう言うと、織部はコクリと頷いた。

さて、どうしたもんか……こりや随分と難しいモノが出てきたもんだ。

これが呪われた宝石なんていう都市伝説がついているだけのただの宝石だったなら気にせず持ち帰って売り払って終わりだったのだが、それがちゃんと効果を持った魔道具となると話は違ってくる。

伝説を元にしたと思われる魔道具の類は、基本的にその逸話に沿った効果を持つ。

それが、持ち主を不幸にしたという逸話を持つならば持ち主を不幸にするのは間違いないのだ。

「……どうします？ ヴィーヴィルダイヤだけ回収して、ホープダイヤの方はこのままおいて帰りますか？ それとも一応持ち帰るだけ持ち帰って売れるかどうか試して見ます？」

「うーん、どうだろう。逸話通りの効力を持つなら、触るだけでも危険かも……。もしかしたら持ち主の幸運をすべて吸い取ってから次の人のところへ行く……。なんて効果かもしれないわけだし」
「ああ……。そういうケースもありますね」

アンナと師匠がそう話し合っているのを織部と二人見守っている
と……。

『ふうん？ おい、歌麿。どうやらこのダイヤ、不幸だけ運んでくるってわけでもなさそうだけ』

ホープダイヤを覗き込んでいた蓮華がそう言った。

『どづいことだ？』

『このダイヤ、幸運と不幸が絶妙なバランスで同時に混在してやがる。普通は幸運と不幸は互いに打ち消し合うもんなのだが、このダイヤの中には幸運は幸運のまま、不幸は不幸のまま同時に存在しているみてーだな』

『つ、つまり……。？』

察しの悪い俺に蓮華は一瞬呆れたような眼差しをくれた後。

『つまり、このダイヤは持ち主の運の揺れ幅を大きくする効果を持つってことだよ。本当なら小金を得る程度の幸運を大金を得るモノに、本来なら軽い怪我を負う程度の不幸を大怪我にするモノに……。それがこのダイヤの効果ってわけだ』

『なるほど……。？』

それが本当だとすれば、幸運をある程度コントロールする俺たちにとっては中々有用な魔道具かもしれない。

不意のトラブル、例えばイレギュラーエンカウントなんかは恐ろしいが……持っているだけで効果がある類の魔道具もカード化している状態では効力を発しない。普段はカード化しておけば一種の封印として機能するはず。

そうして俺が一人考え込んでいると。

「では、皆さん。このホープダイヤは持ち帰らずここに置いていく
つてことで良いツスカ？」

「僕は構わない」

「我もだ」

「……………」

「先輩？」

「あ、いや……誰もいらなら俺が欲しいんだが」

俺がそう言うと皆が「ええっ!？」と驚きの声を上げて俺を見た。

「いや、マロ……魔道具の効果を甘くみない方がよいよ」

「本当にホープダイヤだとしたらギルドも高くは買い取ってくれないでしょうし、下手したら引き取り料とか取られる可能性もありますよ?」

「そうツスよ、それにただでさえ先輩は見た目の割にトラブル体質なんスから」

見た目は余計だ。

「……ホープダイヤの逸話を考えるに、このダイヤはただ不幸を呼ぶだけの魔道具じゃないように思える」

「というと?」

「逸話では、ホープダイヤの持ち主は最後には破滅してはいるものの成功者の元に渡っているのは間違いない。ある意味では富の象徴

であることは間違いないわけだ。つまり、このダイヤは与えた幸運の不幸を最後に回収する魔道具、あるいは単純に運の振れ幅を大きくする魔道具と考えることもできる」

俺は蓮華に聞いた話をさも自分の意見かのように語った。

「ふむ……まあ、一理ある、かな？ でもそうだとしてもリスクがあることには変わりない気もするけどね」

「普段はカード化しておくから大丈夫だろ。迷宮で宝箱を開ける時とかだけ使ってみようかと」

「なるほど……それなら大丈夫、なのかな？」

俺の言った使い方に、皆も首を傾げつつも頷く。

「まあ……要らなくなったら適当な迷宮でポイ捨てるって手もありますからね。もし先輩の言った通りの効果なら使い道がないわけでもないですし。先輩が欲しいならあげても良いとウチは思いますが……」

「我も構わんが……」

「うーん……ちょっと心配だけど、効果が気になるのも事実かな」

そういうことで、このホープダイヤは無事俺の物となった。

迷宮を出たら速攻でギルドに行つてカード化しておくことにしよう。

「さて、まだ時間がありますけど……どうします？ Dランク階層のガーネットを回収に行くか、一度ボス部屋を覗いてみるか」

「うん……一度ボス部屋を覗いてみる、で良いんじゃないかな？」

フィールド効果がちょうど良かったら速攻でDランク階層のガーネットを回収して、一度休憩を取り、24時間以内にボスに挑む。ボ

スのフィールド効果がキツかったらDランク階層のガーネットを回収して、一日休み……これが一番時間的な口スは少ないと思う」「ではそうしましょうか」

特に異論がなかった俺と織部も領き、ハーメルンの笛でマーキングだけしておいた最終階層へと飛ぶ。

「お、フィールドが変わってる」

以前チラリと覗いた時は夜の砂漠だったフィールドは、無機質な地下迷宮へと姿を変えていた。

というより、戻ったというべきか。

さすがにBランクモンスターともなると、周囲の環境を自分好みに書き換える力も大分強くなり、かなり大胆にフィールドを書き換えてくる。

Dランクの水虎ですら通路を水浸しにすることができたのだからBランクともなると砂漠にするくらい容易ということなのだろう。

地下迷宮ということは、相手は特に地形で有利不利にならないタイプのモンスターなのだろう。

「うーん、地下迷宮ツスカ。となるとボスの傾向をフィールドから探るのは不可能ツスね」

「だな。まあ、まずはフィールド効果の確認からだ」

「ですね」

その後皆でフィールド効果の確認を行ったが、特にスキル封印や召喚制限といった厄介な効果は確認されなかった。

「特にデバフらしきデバフは無し、と。こりゃ主の強化に全振りで間違いなさそうツスね」

「……とすると、まあアタリの方ではあるか。ぶっちゃけバフよりもこっちのデバフの方が戦略狂ってキツイからなあ」

「こうなると主の種族だけでも確認しておきたいッスね。それで与しやすそうな相手なら速攻でDランク階層のガーネットを回収して、今日にでもこの迷宮を踏破しちゃいましょう！」

『異議なし』

と頷き、念のため安全地帯を出てから各自気配遮断持ちのカードを斥候として放つ。

「とりあえず、眷属召喚型ってわけじゃなさそうだな」

しばしカードを走らせてみたものの、今のところ気配らしい気配はない。

眷属召喚型であればこの時点ですでに誰かが眷属と接触しているもおかしくない。それがないということは、少なくとも眷属召喚型ではないということになる。

これはますます美味しい相手だ……と俺が考えていると。

「マロ、油断は禁物だよ。主が眷属召喚型で、フィールド効果が気配遮断、透明化って暗殺特化編成の可能性もある」

「あ……」

そうか、そのパターンもあつたか。いかな、ついDランク迷宮を基準に考えていた。

「……そう言えばマロ、これから先どうするかもう決めた？」

俺が反省していると、ふいに師匠が問いかけてきた。

それに、アンナや織部も興味深そうに俺を見てくる。

「ん〜まあ、一応」

「聞かせてもらっても良いツスカ？」

「ああ……とりあえず上を目指せるだけ目指すことにしたよ。それが目標を一番達成できそうだからな」

「ほほう、その目標とは？」

「それは秘密」

俺は笑って誤魔化した。

……さすがに「最高のデッキを作る」なんて高校生が言うには子供っぽ過ぎる。

特にこの大人びた奴らが多い冒険者部の面々の前では、絶対に口に出せなかった。

「え〜、なんでツスカ。教えてくださいよ。あ、わかった！ 全女の子カードを集めてハーレムを作ることか？」

「違います〜」

と否定しつつ、それも結構アリだな……と密かに心のメモ帳に記しておく。

最高のデッキを作った際には、次の目標として目指しても良いだろう。

「ふうむ……先輩の目標とやらは気になるが、まあそういうことから我もアンナに付き合うことにするか」

「僕も、前言った通り出来る限り付き合うよ」

師匠と織部がそう言つと、アンナが嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「あゝ、良かった！ これで冒険者部全員で一丸となって上を目指せませぬね！ 皆さんにはアンナと愉快な仲間王国の幹部の椅子を用意しておきますから期待しておいてくださいッス！」
「もし本気でその名前にするつもりなら絶対協力できねーわ」

などと言いつつ先へ進んでいくと、ユウキが敵の気配を捉えた。それを皆にも伝え、皆のカードと合流させてから慎重に主へと近づいていく。

主らしき気配は一か所から動く様子がない。
やがて見えてきた主の姿は……。

「……牛？」

一匹の牛であった。

乳牛だろうか？ ホルスタイン柄の大きく乳の張った牛が、どこか苦し気に地面に横たわっている。

Bランクにこんなモンスターいただろうか……と脳内のモンスターリストを探っていると。

「ま、さか……」

ポツリと師匠が呟いた。

その顔は、今まで視たことがないほどに強張り、心なしか青ざめて見えた。

同時に師匠の金華猫——もしやかつて戦ったケットシーだろうか？——が、牛へと近づいていく。

「ちょ！ あんまり近づくと戦闘に……！」

「待てアンナッ！」

それを見たアンナが慌てて止めようとするが、それをさらに織部が止める。

「見れば織部も顔色が悪い。」

「先輩、私たちも近づいてみましょう。……たぶん、戦闘にはなりません」

戦闘にはならない？ ……………まさか。

それで俺にもようやくあの牛の正体が臙氣にわかってきた。もしそうなら……。

コウキを牛へと近づけていく。

やがて全員の斥候用カードが牛の傍へと寄ると……。

「ブモオオオオオオオツ！！」

牛が酷く苦しみ、ボコボコとお腹が不気味に脈動し始めた。

それを見た師匠が呟く。

「間違いない——クダんだ」

その瞬間、牛の腹を突き破ってソレは現れた。

卵が腐ったような臭いが周囲にプンと漂う。

あまりの悪臭に、カード越したというのに俺たちは数歩後ずさってしまった。

「あ、え、え……………！」

ソレは、まさしく異形としか言いようのない姿をしていた。

ソレに体毛はなく、ピンク色の肌はうっすらと内臓が透けて見え
ていて。

ソレに手足はなく、のたうつその姿は醜い芋虫に似ていて。

——ソレは牛の頭でなく人間の老人のような悍ましい顔をしていました。

眩しそくに瞼を閉じていたソレが眼を開く。

そして半分飛び出したような眼球をギョロギョロと動かして、やがてこちらを見つけるとゆっくりと口を開いた。

「来るよ、ちゃんと聞いておいて」

静かに言う師匠に無言で頷く。

俺たちが見守る中、老人の顔を持った子牛は妙に甲高い声で言う。

「あ、あ、あ……三度目の禍が、この地を襲う。地獄の蓋は開かれ、あふれ出した滅びが地上を覆うだろう。守りの盾は、すでに謀略に倒れた。汝、生き延びたくば、滅びに備えよ」

ガクリ、と子牛が首を垂れる。

その身が少しずつ消え去っていき、最後には一つの宝箱が残された。

『……………』

場を沈黙が支配していた。

何分も誰も喋らない、喋ることが出来ない時間が続く。

俺はクダンの残した予言を頭の中で繰り返し反芻していた。

クダンというモンスターは、極めて特殊なモンスターだ。

極まれに迷宮の最下層に出現し、予言を残して死んでいく……。

それだけならば、ただの奇妙なモンスターだが、問題はクダンが現れるのは大きな禍の前だけであり——その予言が絶対に、それも半年以内に起こるといふ点だ。

予言の自己破壊という言葉がある。

予言がされたことによつて、それを知った者たちの行動が変わり結果として予言が外れてしまう……という現象のことだが、クダンの予言に関しては予言の自己破壊は起こらない。

それが人災であれ、天災であれ、どれだけ努力したとしても絶対に回避できないことが、過去の予言により証明されている。

クダンの予言に関して人間ができることは一つ。……それが起こるものとして備え、少しでも被害を小さくすることだけだ。

そして今回のクダンの予言。

三度目の禍……その単語で思い浮かぶものは二つ、第三次世界大戦と第三次アンゴルモアだけだ。

このうち世界大戦は、迷宮の出現により各国の意識が内側に向かつている現状、起こる可能性はかなり低いように思える。

となると可能性が高いのはやはり第三次アンゴルモアだ。

しかし、こちらに関してもアンゴルモア対策がかなり万全に近いことを考えると、半年以内に起こる可能性はやはり低いように思える。

それでも第三次世界大戦と比べると可能性が高いと言わざるを得ないのは、二度と起こらないとされていた第二次アンゴルモアが起こってしまったという事実があるためだった。

第一次アンゴルモアでの失敗から、人類は第二次アンゴルモアを起さぬよう万全の対策を行っていた。

にもかかわらず起こってしまった第二の悲劇。

しかもそれは全世界同時という未曾有の大災害であった。

その原因は、十年経った今でもはっきりしていない。

研究者の中には、原因が見つからないことこそが理由……つまりアングルモアは対策を行っていたとしても何らかの負担が溜まっていずれ必ず起こってしまうのでは？ という説を唱える者もいる。

まあこれに関しては、中国が迷宮を増やすために第一次アングルモアを人為的に起こしてからわずか五年後に第二次アングルモアが起こっているため、時限爆弾説は一応否定されていた。

とにかく、起こらないとされていたモノが起こってしまった実績がある以上、アングルモアの可能性は否定できない。

むしろ確実に起こると考えて行動すべきだろう。

気になる点はもう一つある。

それは守りの盾は謀略に倒れたというフレーズだ。

守りの盾とは何を指しているのか。謀略とは。誰が誰に仕掛けたものなのか。

単に比喻という表現もある。

だがどうにも嫌な予感がしてならなかった。

「……とりあえず、ギルドにクダンが出たことを報告しよう」

師匠が半ば独り言のように言った。

クダンが出た際は速やかにギルドに報告することを義務付けられている。

普通は録画などもして提出するのが望ましいとされているが、機械破壊の迷宮に潜っていたことを言えば虚偽察知の魔道具を使って証明してくれるだろう。

踏破報酬を回収し、出口のゲートへと向かう。

師匠と織部に続いてゲートをくぐるうとしたところで、アンナに呼び止められる。

俺は何気なく振り返って――凍り付いた。

「なんだが大変なことになっちゃいましたけど、これから頑張りましょうね！」

そう言って屈託なく笑うアンナの貌は、どこか楽し気で……。

眩暈がするほどに妖艶だった。

第八話 二度あることは三度ある（後書き）

【TIPS】件の予言

クダン。この不気味で哀れな子牛ほど人々に忌み嫌われ、しかし重要視されているモンスターもいないだろう。

迷宮出現以降、ただの一人も被害を出していないこの無力なモンスターが嫌われる理由は、ただ一つ。

不吉の兆候だからである。

クダンという妖怪は、大きな災害の前にのみ姿を現すと言われている。

それだけなら災害を未然に防ぐことが出来ると嫌われることもなかっただろうが、クダンの性質が悪いところは、その予言が決して回避できないと言われていることだ。

そして、大規模な自然災害や戦争がほぼ無くなったこの時代において、災害とは一つしか意味しない。

この日本のマイナーな妖怪の名が世界中に知れ渡ったのは、第二次アンゴルモアの際である。

全世界でほぼ同時に現れたクダンに対し、世界各国は手を取り合っただけでアンゴルモアの防止に動いたが、結局防ぐことが出来なかったという苦い経験を持つ。

四章前半は以上になります。後半は書き溜め中です。ので気長にお待ちください。

PS：この小説を面白いと思ってくださったなら の方にあるツイ

（ ・ ・ ・ ） ツターの方もよろしくお願いいたします。

第九話 朱に交われば……。 (前書き)

明日、1月20日よりコミカライズ版モブ高生が発売となります！
すでに書店に並んでいる書店もあるようです。

マジでクオリティーの高い作画となっているので、どうかよろしく
お願いします！

第九話 朱に交われば……。

「愛歌、シャワー用の水はどこに置く？　ここでいいか？」

「あー、そこは予備のTVを置くからダメ。そっちの隅の方に積んで置いて。あ、歌麿、そこはまだ拭き掃除終わってないからモノ置かないで！」

「あいよ」

「おかあさくん、漫画持ってきていい？」

「嵩張るからダメ。タブレットの電子書籍だけで我慢しておきなさい」

――――8月31日。夏休み、最終日。

我が北川家は、家族総出で地下シエルターの整理を行っていた。

無造作に詰め込まれていた家具やらレジャー用品を運び出し、何年もかけて堆積した埃をふき取り、一週間ほどかけて綺麗にした部屋に様々な物資を運び入れていく。

「……ふう。こんなもんか」

そうして粗方の物を運び入れ終わり、俺は額の汗を拭しつつ部屋を見渡した。

そんなに広くはない部屋の内部には、最低限の居住空間を確保しつつも容量ギリギリまで様々なモノが詰め込まれている。

優に一年間は引き籠れるだけのカード化された食料と水に寝袋。外の情報を得るための小型のTVとラジオ。排泄物を浄化してくれる人工魔道具の簡易トイレ。水を濾過循環させることで何度でも同じ水を使うことができるシャワーテント。

この地下シェルターは、有事の際に家族が避難するためのものだ。有事の際……つまりアンゴルモアの際は、このシェルターへと避難して自衛隊の救助を待つ手筈となっている。

こうした地下シェルターは、アンゴルモア以降……より正確に言うなら第二次アンゴルモア以降に家を建てる際のデフォルトの装備となっており、今ではどこのご家庭でも当たり前前にみられる光景となっていた。

「なんとか準備が間に合ったな……」

隣へとやってきた親父が、同じように室内を見渡しながら言う。

「だね……まあこんなに急いでやる必要もなかったかもしれないけど」

「とは言ってもいつ来てもおかしくないものだからな。備えあれば患いなしと言うし、早め早めに準備しておいて損はない」

そう言っただけで親父は大きく伸びをした。

「しかし、いくら何年も使っていないからって、物置代わりにするもんじゃないな。いざという時に困る。……平和ボケしてたかな」

「まあ、十年近く使われなかったわけだしねえ」

平和ボケと言われれば否定はできないが、長年使われていないとなれば徐々に埃やら要らない物が積み重なっていつてしまうのが、人の営みというものだ。

カード化した食料や水が準備してあっただけマシというものだろう。

「十年か……歌麿がここを使ったのって、6歳か7歳の頃だったか？」

「ん〜、確か小1の頃だった気がするから、それくらいかな」

「そうか、時が経つのは早いもんだなあ……。当時のことは覚えてるか？」

「……少しだけ」

第二次アンゴルモアの時のことは、俺も小さかったこともあつてかなり臆気だ。

それでも突如鳴り出した不吉なサイレンの音と、険しい顔で俺と赤ん坊だった愛を抱き上げてシエルターへと駆け込む両親の表情は、なぜか鮮明に記憶に残っている。

シエルターでの生活は、おそらく数日から一週間程度だったとは思うのだが、子供の頃の感覚からするとかなり長期にわたる生活に感じたものだ。

突然のことで玩具の類も持ち込めず暇つぶしをできなかったことが、その時間を長く感じさせた要因の一つなのかもしれない。当時は備えも不十分で、非常食と水こそ豊富にあったものの、トイレはおまるやゴミ袋、シャワーなど当然ないと、かなり過酷な環境だったのも大きいだろう。

それでも幼心に我が儘を言って泣き叫んだりしてはいけないと思つていて、愛が泣き出さないようにあやして過ごしていたのは覚えている。

それは両親に迷惑を掛けたくないという殊勝な思いからではなく、幼いながらに今騒ぎ立てたら命はないというのを感じ取っていたからだ。

シエルターなんて言つと如何にも安全で頑丈そうだが、実際には

周囲を厚めの鉄板を覆って防音処理を施しただけの地下室で、万全の護りというには程遠い代物だ。

雑魚から身を隠すことはできても、Dランク以上のモンスターの攻撃に耐えられるようなものじゃない。

特に壁や地面をすり抜けられる死霊系モンスターには、無いも同然だった。

幼い俺は、そう言った事情を知らずとも、本能で外敵に存在を悟られては命がないことを感じ取っていたように思う。

「……歌麿」

「うん？」

そんなようなことをぼんやりと思い返していると、と親父が真剣な顔でこちらを覗き込んできた。

「何度も聞いて悪いが、確かにクダンの予言を聞いたんだな？ 第三次アングルモアが起こる、と」

「……はつきりとアングルモアって言ったわけじゃないけどね。三度目の禍つてのがアングルモアを指す確率は、かなり高いと思う」

「そうか……。なんにせよ、こうして早めに知れて助かった。値上がりする前に必要なものを揃えられたしな」

「クダンの予言が発表されたら絶対色んなものが値上がりするだろうしなあ……」

クダンのことをギルドに報告してから一週間が経つが、今のところ政府から民間に向けた警告はない。

おそらくだが、今はまだ俺たちの発言の裏取りをしているところなのだろう。

虚偽察知により俺たちの発言に嘘はないとわかっているだろうが、カメラ等で映像として残せなかったこともあり、予言の内容について

て考察しつつ、他の冒険者からの目撃情報を集めていると言ったところか。

それでもごく一部では情報が洩れつつあるのか、カード関連で高騰の兆しが見られた。

とりわけその兆候が見られるのは装備化スキル持ちと異空間型スキル持ちで、これらは普段の迷宮攻略でもそうだが、アンゴルモアでは特に頼りになるカードたちであった。

同時に食料を生み出す能力を持つカードや魔道具もジワジワと値上がりつつあり、一方で普段は値段が高い女の子カードが徐々に値下げを始めていた。

女の子カードの相場が下がりつつあるのは、アンゴルモアの気配を察した富裕層がコレクションしていた女の子カードを手放して実用性の高いカードを集め始めたことにより、従来のコレクション重視のトレンドから実用性重視のトレンドに切り替わったからなのだろう。

こういう時、子飼いのプロ冒険者を持ち、独自の情報源がある富裕層は強い。

そう言う意味では、おそらく最速に近い形で情報を掴めた俺たちは、まだ不幸中の幸いと言えた。

俺や愛の大学進学用に貯めていた貯蓄を切り崩して、値上がりする前に俺を除く家族全員分のリビングアーマーを手に入れることができたからだ。

地下シェルターには、シルキー集団を始めとして俺の使っていないDランクカードも置いてある。

リビングアーマーとシルキーたちを始めとしたDランクカードがあれば、もし俺が不在中にアンゴルモアが起こっても、俺が迎えに行くまでなんとか身を守れる可能性は、かなり高い。

いざという時のために魔人のランプも預けた。三回だけだがBラ

ンクモンスターを呼び出せるこの魔道具があれば、大抵の危機はなんとかなるはずだ。

正直、シャワーテントやらトイレやらといった物を置いたのは、万が一俺がすぐに迎えに行けない不測の事態が起こった時のための保険みたいなものだ。

魔石発電機のおかげで家電も普通に使えるし、防音結界を張ればシャワーやトイレの音が漏れる心配をする必要もない。薬水の水差しとアスクレーピオスの書があれば怪我や病気もあまりしなくて良いだろう。ポーシヨンやマジックカードなどもこれからはこの地下シエルターに保管するつもりだ。

たぶん、下手に避難所なんかに行くよりもよほど安全で快適な生活を送れるだろう。

……その副作用として、俺が四億もカードパックを買ってしまったことがバレてしまったが、些細な問題だ。

さすがに、発電機とか冒険に必要な物が多すぎて誤魔化せなかった。

アテナの存在が露見した頃からかなり疑われていたのもある。

お金の使い方について説教されたが、思ったよりは軽く済んだ。

アングルモアが起こればお金なんていくらあっても役に立たないし、パックから出たアイテムがかなり役に立つものだったのも大きいだろう。

「んじゃ、部屋に戻るわ」

「歌麿」

「ん？」

俺が階段を上がろうとすると、親父が呼び止めてきた。

まだ何か用があるのかと振り返ると、真剣な眼差しの親父と眼が合った。

「正直……親として情けないが、アングルモアが起こったら父さんよりお前の方が頼りになる」

「……………」

その時、俺はいつの間にか自分が親父と同じくらいの背丈となっていたことにハッと気付いた。

「頼んだぞ、歌麿」

「わかった」

俺は親父と同じ目線の高さでその眼を見つめ返し、しっかりとそう答えたのだった。

「パパさん、なんか微妙に死亡フラグ立ててなかった？」

「縁起の悪いこと言うんじゃないぞねえ！！」

部屋に戻るなり洒落にならんことをほざいたクソガキに、俺はキレた。

仮にも福の神が、そう言うこと言うんじゃないぞねえ……！ 不吉つてレベルじゃねーぞ！

「悪い悪い。まあ、楔だよ。これで逆にフラグ折れただろ」

「まったく……………」

へらへらと笑う蓮華に、俺は深々とため息を吐いて、ベッドへと

腰かけた。

……まあ、こいつがこういう風にふざけているということは、本当に親父に不穏な気配はないということなのだろう。

案外マジで禊だったのかもしれない。

ぶつちやけ、ちょっと死亡フラグっぽいって俺も思ったしな……。

「で………ついに試すのか？」

そう言う蓮華の視線の先には、机の上に置かれた五枚の宝籤カードがあった。

「ああ、宝籤カードにお前の能力が通用するのか実験する」

アングルモアに向けて、俺はこれまで以上の力を手に入れなければいけない。

冒険者にとって力とは、すなわちカードである。

この宝籤カードは、迷宮に潜るよりも手っ取り早く力が入る可能性がある魔道具だった。

「まずはどうするんだ？」

「とりあえず一枚目は普通に使う。お前ならそれでこの宝籤カードが予め結果の決まってるものかわかるだろう？」

「ん、そうだな。ランダム性のあるものならお前の運気が変動するからな」

「というわけで一枚目は普通に試してみることにする。……宝籤、使用！」

宝籤カードが淡い光を放ちモンスターカードへと変化する。

「ゴブリン、か……。ハズレだな。どうだった、蓮華？」

「ん……どうやら運気で結果が変動するタイプの魔道具みてーだな」
「良し！」

俺は力強くガッツポーズした。
まずは第一関門突破だ。

「よし、じゃあ次は、これを使つての実験だ」

そう言つて俺が取りだしたのは、カーバンクルガーネットだった。

「それをどうするんだ？」

「まず、このガーネットが運命操作を使つてない状態でも使えるのかを試す。それで内部の幸運を使用出来たら、三枚目はホープライヤも使つてホープライヤの効果量を計測する」

ガーネットの幸運を運命操作無しに使用できるならば、上手くすれば因果律の歪みを生まずにBランクカードを手に入れることができるはず。

運命操作と比べて大雑把な運氣の操作しかできない幸運操作は、どうしても使用する幸運量にロスが生じるが、それでも因果律の歪みを生まずに済むのは大きい。

「なるほどな……試してみる価値はあるか」

蓮華はガーネットを一つ手に取る。

しばし、矯めつ眇めつ眺めていたが……。

「……無理だな。座敷童の能力じゃできない。たぶん、これは権能クラスの力が必要だな」

「つまり吉祥天への霊格再帰が必要つてことか……。よし、やつて

みてくれ
「よし！」

蓮華が、座敷童から吉祥天へと霊格再帰する……が。

「アレ？」

俺は、吉祥天となった蓮華の変化に目を丸くした。
いつもなら妙齡の女性に姿を変えるはずが、今回はいつもの蓮華と同じ年ごろの姿のまま、服装だけ吉祥天の物となっている。

「服装、だけ？ いや……」

良く見れば少しだけ顔つきが大人びているし、座敷童だった頃よりも明らかに美しくなり、雰囲気も心無しか神々しくなっていた。
……胸元も、ちよっぴり大きくなっている気がする。

だが、外見上の変化はそれぐらいで、生意気そうな表情も含めて、あとはいつもの彼女そのままだった。

マジマジと見つめる俺に、蓮華はプイと顔を背け……。

「毎回大人の姿になってたらめんどくせーだろうが」

「ふうん……まあ、良いけど。そう言うことも出来たんだな」

「まあな。まあ、アタシも霊格再帰に慣れてきたってことだろ」

「なるほどなあ」

そう言えば最初の頃は口調も変わっていたけど、そのうち変身してもガラの悪い口調のままになってたっけ。

いつの間にか蓮華の花が咲き乱れる演出も無くなってたし……霊格再帰に習熟するとそう言うののコントローラができるようになるのかもしれない。

メアなんかはリリムに霊格再帰しても特に性格も変わってなかったし、外見年齢も最初から自在に変えられたみたいだが、あれは元々淫魔的な性格をしていたのと、相手の好みによって外見を変えられる淫魔の種族特性が大きかったのかもしれない。

とにかく、霊格再帰しても普段の蓮華のままの姿、性格というのは結構な話だ。

ぶっちゃけ、吉祥天モードの時ってちょっと神々しすぎて蓮華じゃないみたいで少しだけ違和感があったからな。

やっぱりコイツはこの見かけと性格が、一番しっくりくる。

……絶対に口には出さないが。

「で、ガーネットはいくつ使う？」

「とりあえず一つかな。それで十分結果は変わるだろ」

「ん、少なくともフランクってことはねーだろうな。よし、じゃあ使っぞ」

そう言っつて蓮華がガーネットを握って砕いた――その瞬間。

「……………お!？」

今、俺の中に何かが満ちるのが微かにだがわかった……………!

かなり集中しなければその存在を認識することができないが……

……もしかしてこれが幸運のエネルギーという奴か!?

「どうした？」

「いや……………なんとなくだが、幸運のエネルギーがわかる……………気がする」

「ハアツ……………!？」

『今、なんと言いましたか!??』

蓮華が驚愕に目を見開くと同時に、横から割り込んできたのはアテナだった。

浮かび上がるビジョンに映し出された彼女の表情は、かなり険しい。

『幸運のエネルギーを感じ取った……そう言ったのですか？』

「お前の気のせいじゃねーのか？ 人間が幸運のエネルギーを、運気を感じ取れるなんてあり得ねー」

「気のせいと言われると、マジでなんとなく感じてだから否定できないんだが……」

「やっぱ気のせいなんかな？ なんかそんな気がしてきた……と俺が納得しかけたその時。」

『いえ……』

俺と蓮華の会話を聞いたアテナが首を振る。

『あり得ないこともないです』

「どーいうことだよ？」

『わかりませんか？ 貴方のせいですよ、蓮華？』

「アタシの？ ……まさか」

『そのまさかです。貴方とのパーフェクトリンクとやらのせいで、歌麿の魂が変質しつつあるのです』

「……ッ!？」

刃物のように険しく鋭いアテナの眼差しに、蓮華が胸を貫かれたように後ずさった。

俺の魂が、変質している……？

『歌麿、初めて会った時に言ったことを覚えていますか？』

「初めて会った時……？ 人間とカードの魂の格がどうか、そう言う話のことか？」

『そうですね。あの時、妾は貴方に液体の浸透圧に例えて説明しましたね？』

「ああ……浸透圧の違いにより、俺の魂のエネルギー的なモノが少しずつだが蓮華側に移動してしまっただろ？」

『ええ、普通であれば魂のエネルギーを失えば当然肉体の方に影響が出て、病や急激な老化などの不具合がでるはずなのですが、貴方はそれをアムリタで強引に癒すことで乗り切ってきた。いわば、失った液体をアムリタという神の液体で補填し続けてきた形です。…貴方がパーフェクトリンクと呼んでいるその業、^{わざ}だんだん負担が少なくなってきたのでは？』

「あ、ああ……てつきり鍛錬の成果かと」

『もちろんそれもあるでしょう。ですが、最大の要因は別にあります』

それは、つまり……。

アテナは、俺をまっすぐと見つめ、まるで断罪するように、言った。

『つまり……貴方は、徐々に人間ではなくなりつつあるということです』

第九話 朱に交われば……。 (後書き)

・コミカライズ版作画のさぎやまねん先生がTwitterに上げてくださった蓮華イラストです。

こちらの絵柄が気に入った方は、コミックの方もいかがですか？

< i 6 1 6 8 1 5 — 2 1 7 1 1 >

第九話 朱に交われば…… (前書き)

コミック第一巻、本日発売です！

第九話 朱に交われば……

部屋には、重い沈黙が満ちていた。

……人間じゃなくなりつつある、か。

なるほど、さすが知を司る女神だけあって、アテナの説明はわかりやすく、納得できるものだった。

だが……。

俺は、思い悩むような表情の蓮華をチラリと見て、アテナへと問いかけた。

「それで、俺に何の影響があるんだ？」

結局それが重要だ。俺の魂が人外に近づくことで、果たして何の影響があるのか……。

それに対するアテナの答えは……。

『わかりません』

だった。

「わからないって……」

『妾も全知全能というわけではありませんし、こんなバカな真似をする人間と——』

チラリと冷たい眼差しで蓮華を見る。

『……カードには、会ったことがありませんので。良い方に考えるならば、魂の格が上がることで肉体が頑強になったり、何らかの力を得たり、老化が遅くなつて寿命が延びたりするかもしれません』

なんだ結構良いじゃん！

なんて内心で少し喜んでいると、アテナが冷たい目で続けた。

『逆に……悪い方に考えるならば、それこそキリがありません。ある日突然ぼっくり死んでしまつかもしれないし、腕が生えたり目が増えたりするかもしれません。蓮華そっくりに容姿が近づいていつて、女の子になつてしまふ……なんてこともあるかもしれませんね』

腕が生えたり、眼が増えたりするつて……化け物じゃん。それはさすがにマズイ……。

『つまり……わからないことこそがデメリット、というわけです。そして……』

アテナが蓮華を横目に見る。

『最大の問題は、ソレがこの問題に思い至らなかった、ということです。普段のソレは間違いなく常に貴方を気にかけて、大切にしているように見えます。しかし、特定の事となると途端に貴方の安全に気を払わなくなる……』

「アタシ、は……」

『悪いことは言いません。歌麿、早いうちにソレとの縁を切りなさい。……ソレが今以上の力を取り戻す前に』

そこで、部屋に沈黙が落ちた。

静かな眼差しで俺を見るアテナ。顔を顰め、どこか泣きそうな……初めてみる表情をした蓮華。

俺は数秒ほど目を瞑り、自分の心に迷いが無いことを確認すると、答えた。

「アテナの忠告は嬉しいが……俺は蓮華と縁を切るつもりは、無い」
「……ッ！」

蓮華が息を飲み、アテナが本当に憐れなモノを見る目をした。

俺の人生は、蓮華たちとの出会いによって変わり、始まった。その時から、終わりも蓮華たちと共にあると決まったのだ。

たとえその道が、善意によって塗装された地獄へと続く道だろうと、蓮華と別れるということだけはあり得なかった。

『殉教者……か。つくづく惜しい』

そう言つて首を振るアテナに、これまで黙っていた他のカードたちが次々に答えた。

『ちよつとアテナ、あんまソイツをイジメないでくれる？ 張り合い無くなつたらつままないし』

『メア。別にイジメていたわけでは……』

『よくわからない部分も多かったです……蓮華さんがマスターの敵に回るのはありえないと思いますよ』

『ユウキ……。妾が心配しているのは……まあ、良いです。言つても伝わらないでしょうし』

『くふふふ、無駄無駄。その手の忠告は私が散々したし、今更ぼつと出のアンタの言うことなんか聞くわけないじゃん』

『は？ 何ですか、貴方。馴れ馴れしいですね。勝手に話しかけてこないでくれます？』

『くっ……コイツ、私にだけ!』

なぜかいつも鈴鹿に対してだけ妙に塩対応なアテナに苦笑しつつ、俺は蓮華の背中を軽くポンと叩いて言った。

「ま、蓮華だけじゃなく他の仲間もいるし、なんとかなるだろ」
「歌麿……」

そんな俺たちを見たアテナが呆れたように首を振る。

『殉教者相手にいくら言っても無駄ですね。まあ、ソレの人格も強くなりつつあるようですし、必ずしも悪い目に転ぶとは限りませんか。ですが、これだけは約束してください。それが次の霊格再帰を得るまでに、妾のマイナススキルを解除する……』と』

「……わかった」
『そして大きな神殿を建て、万の信者を集めるように』
「それは断る」

舌打ちして消えていくアテナを見送り、蓮華へと振り返る。
そして、努めていつも通りの口調で言った。

「よし、じゃあ実験の続きをやるか!」
「この流れでやるのか……まあ、いーけどよ」

蓮華は少しだけ照れ臭そうに微妙に俺と目を合わさずに、しかしどこか安心した様子で答えた。

「まあな。霊格再帰の時間制限もあるし、サクサクやっていくぞ」

まずは、ガーネット一個分での幸運操作からだ。

蓮華が頷き、ガーネットの内部に蓄えられた幸運のエネルギーを宝籤カードへと注ぎこんでいく。

……やはり、エネルギーを感じ取れるな。

普通の量の幸運エネルギーはわからずとも、ガーネットぐらいの大きな幸運の塊なら、かろうじてその量と流れを感じ取ることができる。

ガーネットの幸運エネルギーがすべて注ぎ込まれたところで、俺は宝籤カードを使用した。

結果は……。

「おっ！ 送り狼か」

送り狼。Dランクの狼型のモンスターだ。夜道を歩く人の後をつけて、相手が転んだところを襲うという妖怪である。親切を装って女性を送るように見せかけて女を襲う男を指す送り狼という言葉はこの妖怪が語源と言われている。

宝籤カードでDランク以上が出る可能性はわずか1%以下。送り狼はDランクでも下位の方のカードだが、ガーネット一つでこの結果は悪くない。

これは、俺が持っていたても活用できないだろうし、愛にでも預けておくとしよう。

送り狼は、人を襲うだけでなく、地域によっては無事に帰れるように見守ってくれるという逸話を持つ妖怪だ。

学校帰りにアンゴルモアが起こった時には、愛が無事に家まで帰れるようお守りとなってくれるはずだ。

「じゃあ次はホープダイヤを使って試すぞ」

今度は、ガーネットと共にホープダイヤを取り出して、再び宝籤カードを使う。

これでCランクが出るようなら、ホープダイヤにはかなり期待できるが……!?!?

「おお……!?!?」

俺は、現れたカードを見て、思わず歓喜の声を上げてしまった。

古代ギリシャ風の衣服を身に纏い、羊のような角を持った妙齡の美女のカード。

「アマルテイヤ、Cランクか!」

一気にCランクか! Dランク上位のカードができれば御の字と思っ
っていたが。

宝籤カードの出現確率がどうなっているのかはわからないが、カードのドロップ率に準じていると仮定するならば一気に十倍近い結果になったことになる。

つまり、ホープダイヤはガーネット十個分の効果ということか? いや、さすがにそれは、効果が大きすぎる気もする。

それよりは、ガーネットが持つ幸運は元々ギリギリCランクに届かないくらいで、それがホープダイヤによってCランクに届くようになった。

そう考えた方がしっくりくる。

「しかし、アマルテイヤか……」

アマルテイヤは、ギリシャ神話において幼いゼウスに自らの乳を与えて育てたと言われるニュンペーだ。

彼女の逸話は幾通りものパターンがあるのだが、その中でも共通して語られることが多いのが、ありとあらゆる食料を生み出せる豊饒ルヌコピアの角というアイテムを持つというものだ。

カードとしての彼女もその力をスキルとして有していて、主に果物や動物の乳をメインに様々な食材を生み出し、それを食したもののステータスを一時的に強化できるという効果を持つ。

普段の迷宮攻略でも役立つだろうし、これからアングルモアに向けて食料の供給源としてもどんどん価値があがっていくだろう、かなりの当たりカードだった。

「うーん……迷うが、これはシエルター行きかな」

自分で使うという選択肢が頭を過ったが、熟考の末これは地下シエルター行きとすることにした。

アマルティアは『王の乳母』としての役割を持つ神だ。砂原さんが持つバステトもそうだが、『王の乳母』や『王の養育者』といった役割を持つカードは、守りのスキルを持つことが多い。

アマルティアのそれは、バステトほど守りの力はないが、気配遮断の効果を持つ結界を張り、内部にいる者のダメージを肩代わりするスキルを持つ。

アングルモアにおいて、気配遮断の結界は、下手な戦闘型のカードよりもよほど頼もしい能力だ。

迷宮攻略にも有益なカードではあるが、ここはやはりシエルター行きだろう。

Ｃランクカードが一枚でも家に備えてあるだけで、安心感がだいぶ違う。

……さて、それではいよいよ最後の実験、本命の時間だ。

「蓮華、パーフェクトリンクをするぞ」

「はあ！？ おま、さっきの話をおぼれたのかよ！？」

俺の言葉に、蓮華がギョツとした顔をした。

さすがに、さっきの今で俺がパーフェクトリンクを使おうとするとは思っていなかったのだろう。

だが……。

「ああ。はつきり言って、あるんだかないんだかよくわからないリンクを恐れてパーフェクトリンクを封印する余裕はない」

前回のアンゴルモアでは、なんとかAランクモンスターが迷宮の外に現れることを阻止できたが、より迷宮数が増えた今回のアンゴルモアでは、Aランクモンスターが地上にあふれ出してしまつかもしれない。

Bランクモンスターまでならなんとか迷宮周辺で封じ込めができる自衛隊と言えど、さすがにAランクモンスターの封じ込めはできないだろう。

いわば、地上そのものがAランク迷宮と化すということだ。ハッキリ言って、そうなればBランクカードがいくらあっても安心できない。

パーティー全部をBランクで揃えて、ようやく必要最低限の装備というレベルだ。

Aランクモンスターを前に、あの時パーフェクトリンクを使ってカードを手に入れておけば良かったと後悔しても遅いのだ。

家族を守るためにも、少しでも強いカードを手に入れる必要がある……。

「アンゴルモアが始まるまでは、因果律の歪みが発生しないギリギリまでパーフェクトリンクを使って戦力を揃えていくつもりだ。その代わり、このアンゴルモアを乗り越えられたらパーフェクトリンクはもう封印する」

「……………」

俺の方針に、蓮華はしばし顔を歪めて懊悩していたが……。

「正直……アタシはもう、アタシ自身が一番信じられない」

それは、俺が初めてみる蓮華の弱音を吐く姿だった。

「アテナが言ったことは正しい。アタシの中には、アタシじゃない意思が存在していて、ソレは自分の力を取り戻すためにアタシたちを誘導してる。これまでは自覚できなかったけど、今ハッキリとわかった。なぜなら……」

そこで蓮華は少しだけ言い淀むようなそぶりを見せ、しかし結局は諦めたように続けた。

「……なぜなら、事ここに至ってもお前がパーフェクトリンクを使っても問題ないと、そう考えているアタシが、心のどこかであるからだ。どう考えてもこれ以上パーフェクトリンクを使うのはヤバいはずなのに、な」

「蓮華……」

基本的に俺の意思を尊重する蓮華であるが、本当にヤバいことに関しては忠告してくれる。

その蓮華が、明らかにヤバいパーフェクトリンクに関して問題ないと思ってしまうというのは、確かに思考を操作されている可能性が高かった。

「たぶんソイツは、アタシたちが気付かないように運命操作をしているはずだ。その結果発生した因果律の歪みを、アタシたちは知覚できないようにしてな。つまり、アタシたちが知らないうちに因果律の歪みが溜まりまくっている可能性があるってことだ。それでも

お前はパーフェクトリンクを使うのか？」

「ああ、使う」

即答した俺に、蓮華が眼を見開く。

「お前らしくないな、蓮華」

そんな彼女へと、俺はあえて不敵に微笑んで見せた。

「重要なのは、自分の意思で生きることだ。だろ？」

蓮華がハツと息を飲む。

これは、いつかお前が言ったセリフだぞ。

「状況や選択肢が強制されていることなんて、人生じゃ普通にあることだろ。俺は、家族を守る力を手に入れるためパーフェクトリンクを使うと自分の意思で決めただ。たとえ、そういう選択をするように状況を整えられていたとしても、その意思は俺のものだ。なら、その結果どうなったとしても少なくとも納得はできる」

納得できる。それが、最も重要だった。

逆に、運命を操作されているかもと、ここでパーフェクトリンクを使わず、その結果力及ばず家族が死んだら、俺は一生後悔するだろう。

納得して死んでいくのと、後悔しながら爺になるまで生きていくのならば、俺は前者の方が好みだ。

そして、それは――

「なるほどな……納得か。確かに、それは重要だな」

——蓮華も同じはずだった。

いつものように勝気な笑みを取り戻した蓮華に、俺はニヤリと笑う。

「それに、降りかかる火の粉はお前たちが払ってくれるんだろ？」

「ああ……そうだな」

「それじゃあ、ジメジメした話題はここまで。さっさとガチャを回して、爽やかに終わろうぜ」

パンと手を叩いて、蓮華へとパーフェクトリンクを使った。

99%のフルシンクロの壁を越え、俺と蓮華の魂が完全に同調する。

生身でも少しは幸運のエネルギーを感じ取れるようになったからだろうか、可能性の道がいつもより鮮明に見える気がした。

だが……。俺は思わず眉を顰めた。

『どついうことだ？ Aランクカードを引ける未来が無い……』

どれだけ可能性の道を探そうとも、Aランクカードを引ける未来はどこにも存在しなかった。

途中で道が途絶えているわけではなく、そもそも可能性の道自体が存在しないのだ。

可能性が存在しないならば、どれだけ幸運を消費してもカードは手に入らない。

宝籤カードでは、Aランクカードは手に入らないのか？

だが、噂では一度だけだがAランクカードが出たという話だったはず。あれは、ただのデマだったのか？

……まあ、良い。元々、Aランクカードを引けるとも思っていなかった。

予定通りBランクカードを引くでしょう。

Bランク以上のカードを引くのに必要な幸運の量は……と。

一つ、二つ、三つ、……合計二十個か。

特殊型迷宮で吉祥天と黒闇天をドロップした時の使用量が十四個だったから、それよりも多い。

迷宮と違って、攻略や戦闘などの試練を超えていないからだろうか？

ホープダイヤの分の幸運量はどれくらい加算されているんだろうか？

首を傾げつつ、一先ず幸運を消費して宝籤カードを変化させる。

そうして手に入れたカードは一一一。

「……………吉祥天、か」

実に意味深な、意味深すぎるカードだった。

「あるいはそんなこともあるかとも思ったが、もはや隠す気ゼロだな。蓮華、因果律の歪みは？」

「……………いつも通りの量だ」

「そうか……………」

ただの偶然なのか、あるいは運命操作をされていて、その分の因果律の歪みは隠されているのか……………。

「とりあえず、アムリタを使うぞ」

「ああ、頼む」

鼻血は出ていないが、身体に倦怠感があるのでアムリタを使ってもらう。

これでまた人間から一歩遠のいたか……………なんてな。

「む……？ 歌麿、見てみる。ガーネットが十個しか割れてねーぞ」
「お？」

蓮華の言葉に傍らのガーネットを見ると、使用するはずだった二十個のガーネットのうち、十個が無事に残っていた。

「これは……ホープダイヤのおかげってことか？」
「どうやらそうみたいだな」

となると、ホープダイヤの効果はガーネット十個分くらいってことか？

いや、というよりも幸運量をランダムで数倍にするって感じかな。

Bランクを運命操作で引くのに必要だった幸運量がガーネット二十個。

必要な幸運量が、カードのドロップ率に比例するとすれば、Cランクを引くのに必要な幸運量は凡そガーネット十個。

ガーネット一つの幸運操作では、ホープダイヤ未使用でDランク、ホープダイヤ使用でCランクだったことを考えると……ガーネット一つ分の幸運量はDランク以上Cランク未満で、ホープダイヤの増幅量は大体二倍から十倍くらい……かな？

ああ、いや、そもそも宝籤のカードを迷宮でのカードのドロップ率に当てはめること自体が間違ってるのか……。

となると、確定なのは、少なくとも二倍以上に増幅してくれるって程度だな。

まあ、これに関しては何度かやって記録を付けていくうちに揺れ幅もわかってくるだろう。

今はそれよりも吉祥天のカードだ。

このタイミングでこのカードを引いたことには、『いい加減ランクアップさせろや、オラツ!』という何者かの意思をヒシヒシと感じる。

まあ、これで吉祥天は二枚目となったわけだし、ランクアップさせても良いのだが、そうなるとアンナたちにどう説明するかが問題となってくる。

……そろそろ蓮華の能力について説明すべきか？

アンゴルモアという脅威を前にして、隠すメリットよりも隠すデメリットの方が大きくなってきた。

蓮華の能力を正直に伝えて、ガーネット等を優先的回してもらった方が、より効率的に戦力を強化できるだろう。

「でも、なあ……」

引っかかるのは、あの日のアンナの表情だ。

あの時、アイツは明らかに喜んでいた。

多くの人に被害が出るであろうアンゴルモアを前に、自分の能力を試す時が来たと高揚しているように見えた。

その彼女に、蓮華の能力を告げた場合、どう転ぶか全く予想できない。

じゃあ、隠すとしていつまで隠すのかという問題もある。

アンゴルモアが始まったら、吉祥天と黒闇天を始め、それまでに手に入れたBランクカードを隠さずに使うことになるだろう。

そうなれば、どちらにしろ蓮華の能力がバレることになる。

それならば、アンゴルモアよりも前に知らせておいた方が信頼に繋がる。

逆に隠し通す気ならば、冒険者部自体から離れた方が良い。

だが、それはアンゴルモアという脅威を単身で生きていくことを意味する。

……無理だ。一人で生きていくという意味なら出来るだろうが、家族を守ろうと思ったなら集団に所属する必要がある。

それになにより、すでに俺は冒険者部という集団に愛着を抱いてしまっている。

アンナに対しても危うさを感じる一方で、その思想に惹かれつつある気持ちもあった。

……やはり、いつまでも隠しておくというのは無理があるな。

アンゴルモアよりも前に開示する必要があるだろう。

問題は、開示の仕方と時期。

……とりあえず、この吉祥天に関してはランクアップさせてしまおう。

「蓮華、ランクアップするぞ」

「あん？ ……いいのか？」

「ああ……これ以上引つ張ると、逆にランクアップせざるを得ないシチュエーションに追い込まれそうで怖い」

「ああ……それは、あり得るな」

蓮華が顔を顰めつつ頷いた。

今考えると、コイツが霊格再帰を手に入れた時のシチュエーションもちょっと疑わしいところがあるしな。

偶然アムリタを事前に手に入れていて、偶然それが霊格再帰のキーアイテムだったというのは些か出来すぎている。相手が、霊格再帰が無ければ勝てず、またカードをロストさせないよう手心を加えてくれる師匠だった、というのも合わせてだ。

霊格再帰に覚醒するための舞台を整えるよう運命を操作されていたとは思えない。

というわけで、ついに蓮華をランクアップさせる時がきたわけだが……。

俺は、三枚のカードを見比べた。

【種族】 吉祥天

【戦闘力】 1500

【先天技能】

- ・ 吉祥天の真言
- ・ 二相女神
- ・ アムリタの雨

【後天技能】

- ・ 高等攻撃魔法
- ・ 高等補助魔法
- ・ 詠唱短縮
- ・ 限界突破 (蓮華)
- ・ フィンの親指 (イライザ)
- ・ 虚偽察知 (鈴鹿)

【種族】 黒闇天

【戦闘力】 750

【先天技能】

- ・ 黒闇天の真言：黒闇天の不運と呪いと毒の権能を使用可能。
- ・ 二相女神
- ・ 世界終末の夜：ありとあらゆる呪いを孕んだ毒液の雨を降らすことができる。様々な状態異常と共に高等攻撃魔法クラスのダメージを与える。高等攻撃魔法、高等状態異常魔法を内包。

【後天技能】

- ・ 追加詠唱：通常よりも長く詠唱することで、最大二倍まで威力を強化することが出来る。

- ・ 魔力消費軽減：魔法使用時の魔力消費を軽減する。
- ・ 魔力強化
- ・ 高等忍術（ユウキ）
- ・ 生還の心得（メア）
- ・ ドジ（デユラハン）

まず、レースの時に手に入れた吉祥天と黒闇天のステータスが、これ。

特殊型迷宮でのドロップは、元々持っていただろうスキルに加えてコピーしたスキルのうちいくつかを持った状態で落ちる。

コピーしたスキルの枠数は、出現した迷宮のランクによって違い、Dランクの迷宮ならば大体三つくらいコピーして落ちるのだが、今回は二体一対型のカードだったため六つすべてのスキルをコピーした状態でドロップしたわけだ。

特殊型迷宮では、上手くすればこのように強力なスキルを持ったカードをドロップさせることも可能な迷宮なのだが、強いスキルを持ったカードを連れて行けば行くほど敵は強くなるし、逆に弱体化を狙ってマイナススキルを持ったカードをたくさん連れて行けばドロップするカードの価値も落ちる。

しかも、どういうわけかプラススキルよりもマイナススキルが引き継がれる可能性の方が、圧倒的に高いのだ。

まあ、楽しんで試験を通ろうとしたペナルティーと言ったところなのだろう。

ちなみに、この性質を利用して零落スキルを持ったカードを生み出せないかという実験が行われたが、特定のスキルはコピー対象にならないらしく、失敗に終わったらしい。

そして、今回新しく手に入れた方の吉祥天のステータスがこちら。

【種族】 吉祥天

【戦闘力】 750

【先天技能】

- ・ 吉祥天の真言
- ・ 二相女神
- ・ アムリタの雨

【後天技能】

- ・ 神のプライド
- ・ 高等補助魔法
- ・ 魔法陣：魔法陣に対する一定の知識と技能を持っている。魔法陣を介しての魔法の威力強化や、持続化、トラップ化を可能とする。

一見、特殊型迷宮から手に入れた吉祥天の性能の方が優れているように見える。

限界突破のおかげで戦闘力は二倍になっているし、即戦力クラスのスキルが揃っている。

……しかし、蓮華のランクアップ先と考えると、実は新しいカードの方が優れたカードだったりする。

正直、強い方の吉祥天はすでに蓮華が持っているスキルと被りまくっているのだ。

両者の内、蓮華が持っていないスキルは、高等補助魔法、フィンの親指、虚偽察知、神のプライド、魔法陣の五つ。

この内、高等補助魔法は両方とも持っているため、判断材料から除外する。

残るは、四つとなるわけだが……虚偽察知はパーティーで一枚持っていれば良いスキルだし、フィンの親指は有益であるがアイテムで手に入るスキルである。

一方で、神のプライドはマイナススキルとしての側面を持つスキルだが、しっかりとした信頼関係があれば自由行動に極大のプラス補正がある強スキルだし、何より魔法陣のスキルが有益過ぎる。

魔法陣のスキルは、読んで字のごとく魔法陣を作成することができるスキルだ。

魔法陣は、詠唱での魔法よりも発動に時間が掛かる分威力を強化出来たり、予め地面や物に仕込んでおくことで魔法の遠隔起動や持続化を可能とする。

つまり、攻撃魔法の魔法陣を仕込んで罾を造ったり、回復魔法や補助魔法が持続化する魔法陣を描いて簡易的な陣地としたり、紙に書いて持っておけばいつでも好きな時に発動できる……いわば簡易的なマジックカードとして使えることもできる、ということだ。

最後のが特に反則的で、ぶつちやけカード化の魔道具に魔法陣のスキルで魔法を込めたのがマジックカードなんじゃねえの？ と俺は疑いを持っているくらいだ。

もしそうならばマジックカードの相場が大きく崩れかねないし、こっそりカード化の魔道具を使おうとする冒険者も出るだろうからギルドもガンとして認めないが、冒険者たちの見解としては間違いないだろうと見られている。

このように実に有益な魔法陣のスキルであるが、強力なスキルで良く見られるように全くの無制限というわけではない。

まず魔法陣は、普通に魔法を使うよりも大きな魔力を使う。次に、時間経過と共に込められた魔力が徐々に失われていき、それが魔法一発分の魔力を下回った時点で消滅する。最後に、魔法陣を作った者がカードに戻った時点で魔法陣が消滅する。つまり、迷宮を出た時点ですべての魔法陣が消滅する。

要は、迷宮内で簡易的なマジックカードを大量生産しても、迷宮外でマジックカード代わりに売ることができないということなのだ

が……それは迷宮外で活動できない普通のカードの話。

迷宮外でも普通に活動できる蓮華なら、迷宮を出入りしても魔法陣が消滅しない……はず。

実のところ、この魔法陣のスキルを見た瞬間から、俺の心は半ば決まっていた。

唯一の懸念点は、ランクアップによって蓮華の限界突破が失われないかだが……これについてはおそらく心配せずとも大丈夫だろう。蓮華の中にいるという者の狙いが力を取り戻すことならば、限界突破が失われるようなことはないはずだからだ。

同時に、それはユウキのランクアップに対する懸念も大分軽くなるということ。

そういうわけで、俺は新しい方の吉祥天でランクアップをすることを決めた。

「それじゃあ、ランクアップするぞ。……霊格再帰した状態でもランクアップできるのかな？」

俺がふいに浮かんだ疑問を口にすると、蓮華も首を傾げた。

「どうだろうな？ できなくても何も起こらないだけで、問題ないんじゃないか？ 別にカードが失われたりはしねーだろ」

「それもそうか」

ということとで蓮華のカードへと吉祥天のカードへと重ね合わせる。徐々に薄く消えていく吉祥天のカードと、光を放つ蓮華のカード。どうやら普通にランクアップできるようだ。

そうして光が消えた時、そこには特に変化した様子のない蓮華と、ステータスの変化したカードがあった。

……なんとも盛り上がらないランクアップだが、今まで何度も霊格再帰でランクアップ後の姿を見てきたからこんなもんだ。

だが、カードのステータスの方は、ちょっとした事件が起こっていた。

【種族】 吉祥天（蓮華）

【戦闘力】 2100（初期戦闘力750×2＋成長分700－零落スキル分200＋霊格強化分100）

【先天技能】

- ・真吉祥天の真言
- ・真二相女神
- ・真アムリタの雨

【後天技能】

- ・廃棄されし者
- ・限界突破
- ・明星の瞳
- ・霊格再帰 零落せし存在（CHANGE!）
- ・霊格強化（NEW!）：霊格再帰を得たカードがランクアップした際に得るスキル。霊格再帰の戦闘力強化を引き継ぎ、零落スキルによるスキルの弱体化を軽減する。
- ・自由奔放 天衣無縫（CHANGE!）：自由行動への極めて強いプラス補正、精神異常と拘束スキルの無効化、状態異常に対する耐性。

・高等攻撃魔法 高等魔法使い（CHANGE!）

- ・詠唱破棄
- ・魔力回復
- ・友情連携
- ・かくれんぼ

・神の寵愛（CHANGE!）：高位の神からの寵愛を受けた証。プライドの高い神から寵愛を受けることは極めて珍しく、世界でも

数例しか確認できていない。自由行動への極めて強いプラス補正、マスターからの命令に対する極めて強いプラス補正。ダイレクトアタック時に、カードへのダメージのフィードバックを軽減する？（マスターのバリアの強度がカードの防御力と同等に？ 詳細不明）スキル所有者は情報提供をお願いします。日本冒険者協同組合）

・魔法陣（NEW！）

「なんじゃ、こりゃ……」

先天スキルに全部、真がついてやがる。

当たり前みたいに零落スキルを引き継いでいたり、色々スキルが変化していたりと後天スキルも色々と気になることになっているが、先天スキルの異常さに比べたら些細なことだ。

先天スキルつてのは種族で固定のもので、変化しないはずじゃなかったのか？

「蓮華、この真つてのはどういふことなんだ？」

「ん……」

俺の問いかけに蓮華は、しばし自分の中で整理するように目を瞑り。

「まず、真言の方は普通に出力が強化されてるだけみたいだな。まあ、お前に与えてる幸運の加護がちょっと強くなった程度に思っておけば良い。次にアムリタの方だが、若返りの効果とスキル使用回数も回復も出来るようになった感じだな。あと回数もちょっと増えた」

「若返りとスキル回数の回復って……」

軽く言ってるけど、とんでもないこと言ってるぞ……。

この能力を公表すれば、世の富豪や権力者たちが群がってくるかと間違いなしだ。

仮にアンナたちに蓮華の能力のことを言うとしても、若返り効果については絶対秘密だな。

「若返りの方は、どこまで若返るんだ？ 使ったびに若返って赤ん坊になるのは、ちょっと困るんだが」

「ああ、それは安心しろ。元々アマリタとかの若返りは、本人が望む年齢までしか効果ねーから」

なら、その点では安心か。

「それとスキル回数の回復は、全回復じゃなくて、アマリタ一回につきスキル回数が一回分回復する感じだ。それに、スキル回数が回復するスキルの使用回数も回復できない」

「ふむ、そこらへんはスキル回数を回復できるスキルの基本ルール通りなのか」

ハトホルの『母なる愛の雫』のようなスキルの使用回数まで回復できる類のスキルは、スキル回数回復系スキルの使用回数は回復できないというルールがある。

まあ、これが可能ならハトホルがいれば『母なる愛の雫』 『真アマリタの雨』という形で無限ループできてしまうから仕方ない。

「回数については、単体で一日五回。黒闇天が場にいる場合は、合わせて十回って感じだな」

「もう使用回数についてはあんまり心配しなくて良さそうだな……」

一気にパワーアップしたことにもはや少し呆れてしまうが、アンゴルモアを控えている身としては頼もしい限りだった。

「それで、真二相女神についてだが……」
「そう、それ。それが一番気になってた」

ただでさえぶっ壊れ性能だった二相女神が、真化してどうなったのか……。

「……これについては、見せた方が早いかな。黒闇天のカードをくれ」
「ん？ あ、ああ」

蓮華に言われるがままに黒闇天のカードを渡すと……。

「えっ!？」

蓮華が、黒闇天のカードをバリバリと噛み砕く。
これ、ユウキの真眷属召喚の時にも見た光景だぞ！

「ふう。歌麿、カードを見てみる」
「え？ ……な!？」

カードを食い終わった蓮華に促されカードへと視線を向けた俺は、本日何度目かわからない驚愕に目を見開いた。

【種族】 吉祥天 / 黒闇天 (蓮華)

【戦闘力】 2600 (500UP!)

【先天技能】

- ・ 真吉祥天の真言
- ・ 真二相女神
- ・ 真アマリタの雨

【後天技能】

- ・ 廃棄されし者
- ・ 限界突破
- ・ 明星の瞳
- ・ 零落せし存在
- ・ 霊格強化
- ・ 天衣無縫
- ・ 高等魔法使い
- ・ 詠唱破棄 知恵の泉（CHANGE!）：尽きることなき魔力と、魔法に対する様々な知識と技能を持つ。魔法系スキルの習得率向上。魔法系ローカルスキルの習得可能。魔法発動時、極めて強いプラス補正。魔力感知（NEW!）、魔力隠蔽（NEW!）、魔力回復、魔力強化、魔力消費軽減、詠唱破棄、追加詠唱、魔法陣を内包。

（魔力感知：他者の魔力に対する感覚を強化し、隠蔽された魔力を見破りやすくする）

（魔力隠蔽：自分の魔力を隠蔽し、魔法の発動や魔法陣の存在を隠しやすくする）

- ・ 友情連携
- ・ かくれんぼ
- ・ 神の寵愛
- ・ 高等忍術（NEW!）
- ・ 生還の心得（NEW!）
- ・ ドジ（NEW!）

「おま！ ドジを引き継いじゃってるじゃねえか！」

「いや、最初に言うことがそれか……？」

「いや、わりと死活問題だろ！ 今のお前のスペックでフレンドリーファイアは洒落にならん！」

脳裏に蘇るのは、レースでの自爆した黒闇天の姿。あれが、わが身に降りかかったらと思うとゾツとする。

「心配しなくても、知恵の泉とか神の寵愛とか、行動に極大補正がかかるスキルがあんだから大丈夫だったの」

「そ、そうか……言われてみればそうだな」

ドジのスキルはランダムで極大のマイナス補正がかかるスキル。二重、三重に極大プラス補正のスキルを持つ蓮華なら十分相殺可能だ。

「でもなんとなく心配だから、早めにドジスキルは消すようにしよう。なんならお前もメイドコースに入門するか？」

「ソイツはかんべん。心配せずとも、極大プラス補正スキルが揃ってんだから、そのうち勝手に消えるっつの」

ドジスキルの解除方法は、地道に行動を成功させ続けることなのだ。極大プラス補正スキルがあると常に行動が大成判定となるため、ドジスキルを消すための熟練度も上がりやすい。

俺が、様々な技術系スキルを持つイライザとデュラハンをセットで行動させているのは、これが理由である。

装備者が獲得した熟練度のうちいくらかは、装備化スキル持ちにも入ると言われているのだ。

「で、この種族が二重になってると、戦闘力が500上がったのは、なんでだ？ それと黒闇天のスキルが引き継がれているみたいだけど……」

「お前も大体想像ついてるだろうけど、黒闇天はアタシの中に取り込まれた。戦闘力が上がったたり、黒闇天のスキルが統合されたのはその影響だな」

そう言って、蓮華は真二相女神の説明を始めた。

曰く、真二相女神は、真眷属召喚同様カードを取りこんで自在に召喚することができるようになるスキルである。召喚されたカードの戦闘力は、本体と同値となる。

真眷属召喚と違うのは、取り込めるカードが片割れとなる種族一枚のみだということ。厳密に言えば眷属ではなく、分身であること（眷属を対象とするスキルの影響を受けない）。

二相女神との違いは、共有される後天スキルが一部ではなく全部となる事。同時召喚時の恩恵である戦闘力増加が、二倍となること（吉祥天の場合は250）。

そして、二体で合体することで別のカードに変身することができるようになること……。

「変身？」

「ああ、二相合一……二つの存在を一つとすることで、存在を昇華できるようになる。まあ、疑似的な霊格再帰みたいなもんだな」

「霊格再帰ってことは……まさかAランクになるってことか!？」

喜色を露わにする俺に、しかし蓮華は首を振る。

「吉祥天と黒闇天の昇華先は、鬼子母神だ。鬼子母神のランクは、お前ら人間の分類だとどうなってる？」

「鬼子母神は……Bランクだな」

「Aランクじゃなくて残念だったな」

「いや……」

肩を竦め言う蓮華に、俺は首を振って否定した。

「鬼子母神は、アテナと同様Bランク最上位のカードだ」

そのランクの最上位とは、戦闘力こそ上位のランクに届かないものの、他のカードに見られない唯一無二のスキルを持つか、上位ランクにも匹敵するスキルを持つカードへと与えられる評価だ。

アテナが前者の意味でBランク最上位ならば、鬼子母神は後者に当たる。

——ガーネットと宝籤カードのコンボ。ランクアップで大幅にパワーアップした蓮華。

蓮華の中に眠る謎の存在や、パーフェクトリンクによる副作用など色々と気になることはあるが……。

アンゴルモアを生き残り、家族や友人たちを守れる希望が湧いてきた。

だが、まだまだだ。

AランクやBランクの群れ相手に太刀打ちできるほどの力ではない。

油断せずに、戦力を揃えていかなければ……。

俺はそう決意するのだった。

第九話 朱に交われば…… (後書き)

【TIPS】モブ高生簡易年表

1999年7月 迷宮出現。
2000年1月 アメリカでレイスの被害。世界的に迷宮の封鎖を開始。

2000年7月 先進国を中心に第一次アンゴルモア発生、迷宮の攻略が続いていた国には被害無し。カードの使用方法が明らかになる。冒険者の原型であるサマナーの登場。

2003年8月 北川昌磨、一条愛歌、出来ちゃった結婚する。

2004年2月 マロ、誕生。アメリカで冒険者ギルド発足。

2004年8月 中国、ロシアを始めとするアンゴルモア未発生
の国が、迷宮数の増加のため、あえて第一次アンゴルモアを起こす。
民間への被害なし。

2009年3月 愛、誕生。北川家、夢のマイホームを得る。

2010年7月 第二次アンゴルモア発生。全世界同時。

2011年4月 日本、アメリカの冒険者制度をパク。

2012年、
者ブームの到来。 モンコロなどの冒険者関係のメディア化、冒険

2019年10月 マロ、冒険者に。原作開始。

第十話 ちよつとした小物で一時的に人気者になる奴っているよね

「おはよー！ 久しぶりー！」「ヤバ、めっちゃ焼けてるじゃん！」
「もう屋上見た？」「見た見た。マジで学校にコンビ二建ってた！」

新学期の朝。

一か月ぶりの学校は、夏休み中の静寂とは打って変わって喧騒に満ちていた。

「うあー、夏休みが終わっちゃまったー」

「学校来たくねー。夏休み後一ヶ月くらい伸びてくれえ」

「やべーよ、課題半分くらいしか終わってねー」

夏休みが終わってしまったことを嘆く学生たちは、しかし台詞とは裏腹にその表情は明るい。

なんだかんだ言っつて、久しぶりに会う友人の顔にテンションが上がっているのが一目瞭然であった。

「よっ、師匠。久しぶり」

後ろからポンと肩を叩かれ振り返ると、そこには小野の姿があった。

その顔は真っ黒に日焼けし、心無しか体つきも良くなっているように見えた。

「よ、久しぶり。なんか黒くなったな」

「まあなあ。ここんところずっと砂漠の迷宮に潜ってたからなあ」

「なんでまた……。せつかくなんだから涼しい迷宮に潜れば良いものを」

夏に砂漠の迷宮とか……正気か？

小野は肩をすくめて答えた。

「バイトやバイト。砂漠の迷宮でカードを使ってピラミッドを作るバイトしててん」

「なにそのバイト!？」

ピラミッド作るバイトとか初めて聞いたんですけど!？

そして同時に脳裏にチラつく、とある男の顔。

「僕も最初そう思ったわ。雇い主もファラオみたいな格好して変な人やったし。まあ、実働はカードやから楽で給料も良いバイトやったんやけどな。……っっていうか師匠、あの人と戦ったことなかった?」

もう確定じゃん。完全にファラオ砂原じゃん。あの人なにやってんの……?」

「でもおかげさんで新しいDランクカードも手に入れて、ホラ!」

そうやって小野が自慢げに見せてきたのは、計六枚のDランクカードだった。

「おゝ、ようやく揃ったか! おめでとう!」

「へへへ、ありがとさん。ま、師匠からしたら大したことないやろうけどな」

そう言う小野だが、俺は普通に感心していた。

Dランクカード六枚というのは、アマチュアクラスにとって一つの目標となる数字である。

三ツ星冒険者になるための試験迷宮。それをクリアするためには必要最低限の戦力とされるのが、Dランクカード六枚だからだ。

小野は、この春に二ツ星になったばかり。

それからわずか半年程度で三ツ星に手が届くところまで来ているのは、ちよっとした偉業ですらあった。

俺のようにハーメルンの笛や蓮華のような特殊なカードを持つわけでもない小野が、いくらかカードを融通したとはいえ、半年でここまで来るとは……。

素直に賞賛に値した。

「いや、普通に凄いわ……。おめでとう」

「ありがとうございます」

小野は照れ臭そうに頭を掻いて、しかし次の瞬間には一転して真面目な顔となった。

「ところで、師匠に聞きたいことがあるんですけど」

「どうした？」

小野は周囲を軽く見渡して、声を潜めると。

「……師匠は、クダンの予言があったって話、もう聞いたか？」

「ッー」

思わず顔を強張らせた俺に、小野は納得したように頷いた。

「やっぱり師匠も、もう知ったか」

「お前、それどこで聞いた？」
「聞いたというか、まあ、ネットの噂やな。クダンの予言を聞いたってSNSの書き込みがあつて、まあすぐに消されたんやけど、スクショが僕のところに戻ってきてな。最初はどっかのアホが注目集めたくてホラ吹いたと思っただんやけど、なんとなく気になって。念のため軽く調べたらカード魔道具の相場がなんか値上がり始めてたから、これはもしや……と思つてな」
「そうか……」

相変わらず目ざとい奴だ。この時点でネット上のわずかな情報からクダンの予言にたどり着くとは……。
ちよつと普通じゃないというか、正直キモいレベルの情報収集能力だ。

「で、どうなんや？」
「ぶっちゃけて言うと……まず間違いない。俺もクダンを目撃した」
「……………マジ、か」

小野はしばし絶句した後、なんとか絞り出すように呟いた。

「それ、映像かなんかに残つとるか？」
「いや、機械破壊の迷宮だったから……」
「その腕に着けるとるカードギアは、飾りか？ それ録画機能もついとるんやろ？」
「斥候用のカードだけ先行させてる状況だったんだよ。ボスの種族だけでも探ろうつてな」
「チツ……まあ、なら、しょうがないか。で、予言の内容は？」
「確か……『三度目の禍が、この地を襲う。滅びが地上を覆う。守りの盾は、すでに謀略に倒れた。汝、滅びに備えよ』……こんな感じだった筈」

「うっむ……」

小野は腕を組み、十数秒ほど考えた末。

「間違いなさそうやな。しかも全世界的にカードの値上がりとトレンド転換が起こってることから察するに、こりゃ日本だけじゃなく世界各国でも見つかったるな」

「……第二次と同じ全世界同時型ってことか？」
「たぶんな。つまり、海外の応援は期待できないってわけや」

政情が不安定な国の中には、自国の戦力だけでは迷宮の管理も出来ない国も存在する。

そう言う国では、迷宮からの戦利品と引き換えに、国連などがアンゴルモア対策を請け負っている。

だが、国連軍はあくまで各国の兵から拠出された戦力であるため、自国でアンゴルモアが起こった際には、当然そちらを優先して兵を引き上げてしまう。

つまり、全世界同時にアンゴルモアが起こった時は、国連軍の助けは得られないというわけだ。

「まあ、海外の応援は元々望み薄だったけどな。在日米軍も、撤退して久しいし」

ちなみに在日米軍が撤退したのは、第一次アンゴルモアよりも前……レイスにより本国の部隊に甚大な被害が出た時期のことである。その様は半ば夜逃げのようだったと揶揄されたが、まあ……当時アメリカ軍が受けた被害は洒落にならなかつたから仕方ない。

アメリカ軍の撤退は、日本だけでなく全世界同時に行われ、世界の警察を自認していたアメリカが突然その役割を投げ捨てたことで、当時の世界情勢は一時大きく混乱したという。

まあその結果、世界的に「所詮他国は肝心な時は頼りにならない。自分の国のことは自分でどうにかするべきだ」というナシヨナリズムの波が起こり、その波に乗って日本も憲法や自衛隊関連に関し大きなメスを入れ、それが第一次アンゴルモアの被害を抑えることに繋がった……という面もあるため、一概に悪い出来事とは言えなかった。

「師匠は、これからどう動くつもりや？」

「ん……たぶん冒険者部全体でアンゴルモアに備えることになると思う。今日の放課後、会議をする予定だ」

「冒険者部か……」

小野は顎に拳を当て、考え込むような仕草を見せ。

「なあ、今更やけど冒険者部に入れてくれへん？」

小野の言葉は、半ば予想通りのものだった。

「うーん、どうだろうな。アンナがどう言うか……」

勢力作りがしたいと言っていたことから、将来有望そうな小野を断つたりはしない気もするが……逆に今は少数精鋭での生き残りを目指すと言い出してもおかしくない。

アンナの勢力作り云々ってのは、本来数年かけてのプランだったはずだからな。

もちろん、一転して「戦いは数だよ！」とばかりに人数を集める可能性もあるわけだが……。

「一応、頼んではみる。猟犬使いの事件で協力してくれた件もあるし、たぶん大丈夫とは思うが」

「頼むわ。無理だったら早めに言ってくれ。違うアプローチで行くから」

「わかった。……ちなみに他のアプローチって？」

「ひたすら迷宮に潜りまくるか、どこかのプロチームに入れてもらうか。いずれにせよ、学校は辞めるやるな」

そこまでか……。

いや、考えてみれば当然の話か。俺は学校の迷宮があるから、学校を辞めるといふ選択肢は端からなかったが、そうでなかったら小野のように退学か休学でもして、死に物狂いで迷宮に潜りまくっただろう。

……コイツは、正直もう身内判定だ。もし冒険者部で迎え入れられなかったら、俺個人で支援するでしょう。

そうして小野と情報交換をしていると、いつの間にかクラスの前までやってきていた。

物騒な話は、ここまでだな。

俺も小野も、気持ちを日常のそれに切り替えて、皆へと挨拶していく。

「おはよう」

「おはよーさん！」

「おはよう、北川くん、小野くん」

「久しぶりー！」

クラスメイト達と挨拶を交わしながら、クラスの中心の席へと向かうとそこにはすでに牛倉さんを除くお馴染みのカーストトップ勢と、なぜか一条さんの姿があった。

……これは、一条さんがグループ合流したかな？ 一緒にプールに行ったことで四之宮さんらとの距離が縮まったのかもしれない。

そんなようなことを考えながら、挨拶を交わし席に着く。

「牛倉さんは？」

「静歌は吹奏楽の朝練。学園祭が近いからね」

「あゝ、もうそんな時期か……」

今年は、ウチのクラスは一体何をやるんだろうか。

あんまり準備が必要な出し物は、迷宮攻略もあるしゴメン願いたいんだが……と考えていると……。

「よお、北川。見るよ、アレ」

そう言っつて、神道が顎で指し示した先には、ちょっとした人だかりが出来ていた。

クラスの皆に囲まれているのは、眼鏡で冴えない容姿（俺が言えた義理ではないが……）の大人しそうな男子。確か文科系グループのヤツだったはずだ。

基本的に物静かで目立たないタイプで、あんなふうに皆に囲まれるようなキャラじゃなかったはずだが……。

「なんや、アレ？」

「カードギアだよ。加藤のヤツ、あややってカードの立体映像をさつきから皆に見せびらかしてんだよ」

どことなくツマラナそうに言う神道に対し、小野は感心したように加藤の方を見る。

「ほお、やるやん。確かアレ昨日発売されたばっかで、しかも抽選倍率百倍以上って話やなかったっけ？」

「……そうだよ、俺も抽選に応募したけど落ちた」

なるほど。俺は苦笑した。それでさつきから微妙に加藤にトゲトゲしかったのか。

「北川、ちよつとあそこに突っ込んで、そのカードギア見せびらかして来いよ。所詮は廉価版の加藤に、そのプレミア品の性能差を見せつけて来い」

「やだよ、そんなカツコ悪い」

そんなんやつた日には、クラス中からドン引きされた上に、加藤からも要らん恨みを買うこと間違いなしだ。

「しっかし、正直羨ましいわ。僕ら冒険者にとって喉から手が出るほど欲しいアイテムやからな、アレ。……ぶっちゃけ、ただカードとおしゃべりするだけが目的なら譲ってもらいたいくらいやわ」

マジなトーンの小野の言葉に、神道もやや神妙な顔になり。

「まあ、お前ら冒険者は、生存率に直結するって話だからな。でも、このカードギアは一般人にも、というかむしろ一般人にこそ需要があると思うぞ」

神道の言葉に、四之宮さんも頷く。

「だよな。あんなことあって冒険者になろうって気はポツキリ折れちゃったけどサ。やっぱカードを初めて召喚した時は感動したもん。迷宮に入らずにカードとまたおしゃべりできるならウチも欲しいなって思ったし」

「これまでカードとコミュニケーションがとれるってのは冒険者だけの特権だったからな。むしろ俺たち一般人の方がカードギアに対

する憧れは強いよな」

「……まあ、それはわかるんやけどな」

一般人二人の意見に、小野も渋り顔で理解を示す。

「でも本来は冒険者用品なんやから、こつちを優先してほしいって気持ちはやっぱあるわ」

「でもよ、カードギアに一般人の需要があるってのは、冒険者にとってもそんなに悪い話じゃないんじゃね？　なんか低ランクのカードの買い取り価格も上がってるんだろ？」

「まーね、それは確かにある」

神道の言葉に頷いたのは、これまで気だるげに無言で机に突っ伏していた一条さんだった。

「これまでの三倍近く買い取り価格になってるから、アタシみたいな駆け出しからすると結構助かる」

彼女の言う通り、現在Fランク・Eランクのカードの買い取り価格は、市場価格の三倍近くまで上昇していた。

その原因は言うまでもなくカードギアの存在で、発売が発表されてすぐ多くの人々がカードを買いにギルドへと殺到した。結果、常にダブリ気味の低ランクカードが品薄状態になり、カードの買い取り価格が上げられるという異例の事態が起こっていた。

これは日本で冒険者ギルドが発足して以来初めてのことからしく、ちよっとしたニュースになっていた。

……もつとも買い取り価格が上がっているのは、女の子カードや可愛らしい動物系のカードが主で、ゴブリンやゾンビと言った不人気カードの価格は従来通り低いままだったのだが、それでも買い取り価格の高騰は多くのアマチュアクラスにとっては福音と言えた。

「まあ、確かにその通りなんやけどな。僕の場合、このブームが来るちよつと前に低ランクカードは全部売ってもうてん……はあ」

……が、中にはその恩恵に与れなかった運の悪い者もいるようで、小野は深々とため息をついていた。

たぶん、Dランクカードの購入の足しにするためだったんだろうな……。

つまり、小野にとってこのブームは単にカードギアが手に入りにくいだけ、ということになる。それでは愚痴りたくもなるだろう。

かくいう俺もEランク階層までの敵は基本的にスルーしているため、このブームとは無縁の状態にあった。

「あーあ、エメラルドタブレット社が冒険者枠を別に用意してカードギア売ってくれへんかな。そういうことしてくれへんと、いつまで経っても本当に必要な層に行きわたらんで」

「そしたら冒険者登録してでも手に入れようとする奴も出てきたりして。転売とかで高く売れるし」

嘆く小野に神道が冗談めかしてそう言うと、四之宮さんもそれに頷く。

「あり得るかも。で、そのまま普通に冒険者になっちゃったりして」「カードギアを手に入れるために登録だけしたはずがそのまま冒険者デビューしちゃう、木乃伊取りが木乃伊になる的な奴もいるかもな。加藤とか、来週あたりに冒険者デビューしてもおかしくねーし」

案外、それが目的かもな……。

笑いながら話す神道と四之宮さんを見ながら、俺は内心でそんな

ことを考える。

このカードギアという魔道具。冒険者向けの商品なのは確かなのだが、発売にあたり冒険者枠を用意していなかったり、迷宮の外でもカードと会話できるなどの迷宮攻略に不要な機能がついていたり、むしろ一般人への普及を目的としての商品のように思える時がある。

もちろん、単にマーケティング的に考えて、精々十数万しかない冒険者よりも、一億人以上の日本国民全体を対象とした方がマーケットも広いから、という可能性もある。

というか、普通に考えたらそうなる。

だが、このカードギアという商品は、元々は冒険者の迷宮内での死亡率を下げるため、国と共同開発した……という代物だったはず。それを、一般向けを意識しすぎて本来のターゲットである冒険者に行き渡らなくしてしまうのは、あまりに本末転倒である。

にもかかわらず国の方でこの状況を放置するならば、それはすなわちこの状況こそが国の狙いだった……と考えることもできる。

この状況、すなわち一般人の迷宮やカードへの興味を高めるのが目的だったのかもしれない。

カードギアが、話題となりブームが起きる。カードギアに登録するためのカードをギルドに買いに行く。会話だけでなく実際に呼び出して触れ合いたくなる。冒険者登録へ。

そんな筋書きを期待してのもの……と考えるのは俺の考えすぎだろうか？

そこで、そう言えば……と一条さんに問いかける。

「一条さん、冒険者活動は順調？」

「まーまーかな。リビングアーマーは使いやすいし、フェニアとメニアも良い子だしね」

どうやら、一条さんも順調にやっているようだ。

カードを貸しだしてからほぼノータッチだったから心配していたが、カードたちとも仲良くやっっているようだし良かった。

「つか、Dランクカードが三枚もあってFランク迷宮に苦戦してたらヤバイっしょ」

確かに……と苦笑する。

リビングアーマーがあればFランク迷宮ではダイレクトアタックによるロストの心配もないし、なにより通常二枚しか召喚できないFランク迷宮でDランクの二体一対スキルはかなりのチートだ。

あとは畏解除を持った斥候と回復役をEランクカードでも良いから揃えられれば、二ツ星にも挑めるだろう。

そんなようなことを考えていると……。

「パーティーも揃ってきたし、次の休みで二ツ星昇格試験に挑むつもり」

「はッ!? 早くね!？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

小野も驚き半分、呆れ半分の表情で言う。

「おいおい、一条さんはまだ冒険者になって三週間とかそこらやる? ちょっと早いんとちゃうか?」

「そんなに驚くようなこと? 夏休みだったんだから、Fランク迷宮くらい十個踏破してもおかしくないっしょ」

「いや……というより、パーティーが揃ってるかどうかを心配してるんだが……」

Fランク迷宮とEランク迷宮の違いは、畏の存在だ。

Cランク迷宮ほどの凶悪さは無いものの、畏の存在は大半の一ツ星を挫折させる大きな障害だ。

俺が二ツ星昇格試験の頃は、まだイライザさんも畏解除スキルを持っていなかったため、当たって砕けるの男解除戦法を取るしかない、最初は大いに苦戦したものだ。

今なら、いくら蓮華の回復魔法があつたとはいえ畏解除も無しにEランク迷宮に挑むのがどれほど無謀だったかわかる。

せめてFランクカードでも良いから畏解除スキルを持つカードを用意してから挑むべきだったのだ。

そんな教訓を一条さんに伝えようと口を開きかけ……。

「パーティー？ 畏解除と回復役なら一応揃えてるよ。畏解除スキル持ちのブラウニーに、回復役のFランク五枚」

「あ、そうなの？」

あら優等生。そういうえば、一条さんってこの外見で結構勉強もできるんだよな……。

ふむ、畏解除スキル持ちならば戦闘力は必須じゃないからブラウニーでも問題ないし、生命線である回復役がFランクというのはやや不安なところだが、五枚も揃えているところからローテーションで回していくスタイルなのだろう。

「せっかく低ランクカードの買い取り価格が上がってんだから、今の内に出来るだけ稼ぎたいと思って。Fランク迷宮を踏破しても精々十万つしょ？ なら売れるEランクカードをかき集めて売った方が効率良いかかって。試験中はEランク迷宮貸し切りみたいなもんだし」

「な、なるほど……」

俺と小野は思わず声を揃えて頷いた。

たしかに、低ランクカードの買い取り価格が高騰している今ならそれもアリなのか。

Eランクカードの買い取り価格は、通常時で一万から十万円。その三倍なら最高で三十万で売れる計算となる。ドロップ率は5%だから、凡そ二十体倒して一枚の計算。

……普通にFランク迷宮を踏破するよりも時給良さそうだな。

それに今はどこのFランク・Eランク迷宮もカードのドロップ目当ての冒険者が群がってるだろうから、試験という名目で一月の間Eランク迷宮を貸し切りに出来るというのは、かなりデカイ。

場合によっては、試験中に安めのDランクカードを買い取るようになるかもしれない。

「まあ、自分でいろいろ考えてるならいいや。なんか口づるさく言っただけよ」

「別に？ 北川はカードのオーナーなわけだし、心配して当然っしょ」

ヒラヒラと手を振る一条さん。サバサバしておられる。

「二ツ星に合格したら、なんかお祝い贈るよ」

「おいおい師匠、そんな僕貰ってへんで」

軽い気持ちでそう言つと、なぜか横から変な奴が食いついて来た。なんでお前にお祝い贈ってやらなきゃいけないんだよ……。

二ツ星になるのに協力したのが、お祝いみたいなもんだらうが。

「物は良いからさ、そのうちで良いから迷宮連れてってよ」

「迷宮に？」

「そ。ウチの学校のことなら最高だけど、どっかのDランクで良いからな」

「うーん、なるほど……」

迷宮か……。

アンゴルモアのことかなければ、すぐ頷くんだが……。

「冒険者部の方があからなあ……」

「一回だけ、そのうち余裕がある時で良いからサ」

そこで、予鈴のチャイムが鳴った。

「一条さんは席から立ちあがりつつ、俺の肩をポンと軽く叩き。」

「ま、考えておいてよ」

そう囁いて去って行ったのだった。

「一緒に迷宮ね……考えておくか。」

第十話 ちよつとした小物で一時的に人気者になる奴っているよね(後書き)

【TIPS】モンスターの戦闘力

同じランクの階層帯であっても、モンスターの戦闘力は深い階層に行くほど高くなる。

特に各ランクの一層目のモンスターは、カードの初期戦闘力の八割ほどしかないとされ、深い階層であってもモンスターの戦闘力がカードの成長限界まで強くなることはない。

これが、同じ種族であっても迷宮のモンスターよりもカード方が強いとされる所以である。

無論、最下層の主に関しては別で、主はその種族のMAX戦闘力かつ主補正による様々な強化が入る。

第十一話 備えあれば患いなし

「よっこそ、我が冒険者部の城へ」

放課後。

我らが部長様に呼び出され、三階の空き教室にやってきた俺達を待っていたのは、わが目を疑うような光景であった。

教室の床には高級そうな赤い絨毯が敷かれ、中央にはデンと陣取った黒檀の円形テーブルと、大企業の役員でも使っていそうな黒革のリクライニングチェア。

黒板は、同じ大きさのホワイトボードに替えられ、反対側の壁際には頑丈そうな鋼鉄のロッカーが、その存在感をアピールしている。その他にも窓際には100インチはありそうな大型モニターに、本がぎっしり詰まった本棚と大きめの冷蔵庫、天井にはエアコン、テーブルの上には人数分のノートパソコンと、学校に似つかわしくないほどの豪華な内装となっていた。

「こ、これは……アンナ、お前がやったのか？」

俺たちは、しばしその光景を前に固まっていたが、やがて復活した織部が震える声でドヤ顔のアンナへと問いかけた。

「フッフッフ、どうツスか？ 良い感じでしょう？ 皆さんが、この一週間ご自宅の備えを行っていた間、特にやることもなかったウチは、こうしてこの部屋の改装を行っていたというわけです」

「アンナ、お前、消えるのか……？」

「何でツスカ！ 消えませんか！」

俺の言葉に可愛らしく憤慨するアンナだが、いくらなんでも、これは……やらかしというレベルを超えていた。

学校の空き教室をここまで派手に改造するとか。

下手すれば、いや、下手しなくとも良くして停学、悪けりや退学レベルだ。

俺がリーダー退学の危機に震えていると……。

「ああ！ 安心してください。ちゃんと学校側から許可は取ってますから。部室の改装は、ある程度自由に行って良い、とね」

「部室？」

首を傾げる俺に、アンナは満面の笑みを浮かべ両手を広げ。

「そう、ここは我々が冒険者部の部室！ うちの拠点ってわけッス！」

「な、なるほど……」

そうか、部室か。

そう言えば、正式に部活になったんだもんな。それで部室が与えられたってわけか。空き教室を一つ丸ごととは、学校側も豪気なことだ。

しかし、それにしても……。

俺は、グルリと部屋を見渡すした。

これは、凄いな……。きつとウキウキしながらレイアウトやら調度品を決めたんだらうなあ、と容易に想像できてしまう豪華っぷりだ。

……あの円形テーブルは、もしかして円卓でも意識してるんだらうか？

まさに、アンナが思い描く理想の城、といった感じであった。

「さて、それではさっそく会議に入るとしましょう。皆さん、冷蔵庫からお好みの飲み物をとって、適当な席へとどうぞ」

ホワイトボードの前へと移動したアンナに促され、言われるがままに冷蔵庫からジュースを取って、各々適当な席へと着く。

「記念すべき第一回円卓会議では、第三次アンゴルモア時の方針と、その対策について話し合いたいと思います。進行役は、僭越ながら部長であるこの十七夜月アンナが務めさせていただきます」

マジで円卓会議なんかい。

コイツも何気に織部並の中二病だよなあ……だからこそ仲が良いんだろつが。

ってか、円卓ってあんま縁起良くないよつな。

内心で呆れる俺を他所に、アンナはクールな表情で続ける。

「まず、方針についてからツスけど、これについてはとにかく生存第一に考えていきたいと思います。」

皆さんには、ウチの勢力作りがしたいという夢をお伝えしましたが、今は忘れてください。今はとにかく、部員全員での生存を第一目標に、一致団結して行動したいと思います。

なお、ここで言う部員全員での生存というのは、その家族も含めたものとなります」

へえ……。

俺は、アンナの掲げた生存第一という方針に、一先ず安心した。

良かった……。ここで「これはチャンスです！ここは、リスクを冒しても勢力作りをしましょう！」とか公言されたら、さすが

についていけなかったからだ。

「基本的な方針が決まったところで、アンゴルモアについての基礎知識を共有しておきたいと思います。皆さんにとっては、すでにご存知のことかと思われるですが、少々お付き合いください」

アンナは、赤毛の尻尾を揺らしホワイトボードへとペンを走らせる。

アンゴルモアとは、と丸っこい可愛らしい文字で書く振り向いて説明を始めた。

「まず、アンゴルモアとは、迷宮外にモンスターが溢れ出す現象です。なぜアンゴルモアが起こるかのメカニズムは完全には解明されておらず、ただ迷宮の攻略を一定期間しないと発生してしまうことだけが判明しています。第二次アンゴルモアが起きた理由については現在も不明で、今回のアンゴルモアについてもおそらくは不明のまま迎えるでしょう」

ちゃんと対策が取られていたにもかかわらず第二次アンゴルモアが、しかも全世界同時に起こってしまった原因については、今も学者たちが頭を悩ませながら研究をしているが、その理由はいまだに明らかになっていない。

仮説ならば無数に発表されているが、それを実行するわけにもいかず、その証拠を証明できていないのが現実だった。

「アンゴルモアは、いくつかのフェイズに分かれています」

【第一フェイズ】

FランクからDランクまでの階層の安全地帯が一時的に効果を消失し、モンスターたちが階層を移動可能となる。

地上に近い順にモンスターが迷宮からあふれ出し、同時に急速に迷宮が増殖を始める。この段階では、新しく増えた迷宮からはモンスターの氾濫はない。

【第二フェイズ】

第一フェイズであふれ出したモンスターたちが暴れることで迷宮にエネルギーが溜まり、Cランクモンスターが溢れ出す。さらに、新たに増えた迷宮の一部からもモンスターの氾濫が始まる。

【第三フェイズ】

Bランクモンスターが溢れ出す。

【第四フェイズ】

詳細不明。おそらくAランクモンスターが溢れ出すと思われる。そこまで行けばもはや人類の手には負えず、アンゴルモア中に、第四次アンゴルモア分のエネルギーが溜まる可能性がある。

「第一次アンゴルモアでは、迷宮の数が少なかったこともあり、なんとか第一フェイズで封じ込めることが出来ました。封鎖をすり抜けたモンスターもいたものの、死霊系モンスター以外には大きな被害はありませんでした」

第一次の際は、迷宮周辺を自衛隊が封鎖していたこともあり、モンスターによる被害は比較的少なく済んだ。

むしろ、モンスターによる被害よりも人間同士のパニックや暴動による被害の方が大きかったと聞く。

中には世界の終わりと勘違いして、かなり好き放題した人間もいたようだ。

もちろん、被害が比較的少なく済んだとは言っても当時の人たちからしたらとんでもない被害であり、あくまで第二次アンゴルモア

と比べて少なかったというだけの話である。

「次の第二次アンゴルモアでは、事前にクダンの予言があったこともあり、様々な対策が取られました。Aランク以外の迷宮を一通り踏破し、Aランク迷宮での間引きの量も増やしました。改めて未発見の迷宮がないか国内中を調査し、しかし、それでも結局アンゴルモアは起きてしまいました。……しかも、その被害は、第一次の時の比ではなかった」

カードや魔道具の使い方が判明し、クダンの予言があってもなお、第一次の時以上の被害が出てしまったのは、シンプルに迷宮の数が多かったせいだ。

第一次と比べて迷宮数が激増してしまったことで、すべての迷宮の封じ込めが出来ず、主に低ランク迷宮からあふれ出したモンスターによる被害により、一気に第三フェイズまで進んでしまった。

国も冒険者制度を導入する前から、迷宮のゲート前に鋼鉄製の扉を設置するなどしていたが、この扉で封じ込めができるのはEランクモンスターまでであり、Dランク以上のモンスターの攻撃に長時間耐えられるものではなかった。

そのことは自衛隊もわかっていたため、Cランク以上の迷宮に戦力を重点的に置きつつも全国のDランク迷宮にも少数ながら部隊を配置していた。

しかし、壁や地面を透過できる死霊系モンスターのすり抜けを防ぐことができず、それらが各地のFランク・Eランクの迷宮の扉を破壊して回ったことで大量の低ランクモンスターが地上に溢れ、加速度的にフェイズが進んでしまった。

迷宮から氾濫したモンスターが被害を出すことで段階的に強力なモンスターが溢れ出すという性質が判明したのは、この時のことだ。

それでも致命的なことにならなかったのは、第一次アンゴルモアを教訓に護身用のカードや地下シエルターを所有していた家庭が多く、ある程度の自衛ができていたことが大きい。

第二次アンゴルモアでの被害を見て、国も自衛隊だけの対処は不可能と判断。導入に慎重だった冒険者制度を日本でも取り入れることを決めた。

「迷宮の数は、第一次で百個から千個に、第二次で五千個に、現在では七千個を超えました。千個でも全迷宮のカバーが出来なかったんですから、七千個でどうなるのかは考えるまでもありません。

……国も今度こそ国の存亡をかけてアンゴルモアに挑むでしょうが、それでも第三フェイズまでで封じ込めることが出来るかは、まあ、良くて半々といったところでしょう」

……部屋の雰囲気重い。まるで、空気にタールが混じったようだった。

改めて聞くと、実に絶望的な話だ。

何が絶望的って、仮に運よく今回のアンゴルモアを乗り切れたとして、間違いなく第四次アンゴルモアは乗り越えられないことだ。

第三次が起きた時点で第四次の到来は確定となり、第四次では行きつくところまで行くだろう。

第四フェイズに何が起るかは不明だが、まずAランクモンスターが出現するようになるだろうことは間違いない。

Aランクモンスターが闊歩するようになった世界で、人類は絶滅せずに生きていられるのか？

アンナは文明が崩壊すると言っていたが、それで済むのだろうか。……案外、その時はその時、滅ぶならしょうがないと考えていそうだ。

「危機感を共有できたところで、具体的な対策の話へと移っていきたいと思います」

厳しい現実を前に部員たちが黙り込む中、唯一いつもと変わらぬ様子を崩さず、アンナが言う。

不思議な話、それだけで少し空気が軽くなる。

こういう時、常日頃からアンゴルモアに対して心構えをしていた彼女の存在は、実に頼もしかった。

「アンゴルモアは、フェイズの進行を一か月間以上食い止めることで終了すると言われています。まずはこの期間を生き残ることを目標に、アンゴルモアがいつまでも終わらないことも想定して行動していきたいと思います」

俺たちは頷いた。

どこの国でも第一次アンゴルモアが一か月間ほどで終わったこと、第二次アンゴルモアが第三フェイズに移行してからやはり一か月間ほどで終わったことから、アンゴルモアはフェイズの進行を一か月間ほど食い止めれば終了すると見られている。

仮に第四フェイズが最終フェイズだとして、それから一か月間でアンゴルモアが終了したとしても、その頃には人類文明は致命的なダメージを受けているだろう。

俺たちは、アンゴルモアによって大ダメージを受けた世界か、永遠にアンゴルモアが続く世界のどちらかでも生きていけるよう備える必要がある。

……だが、まずはアンゴルモア中の行動についてだ。

「まず、アンゴルモア中は、出来るだけ皆一緒に行動したいと考えています。理由は、単独行動はそれだけでリスクがあるからです。まずは、何よりも優先して部員とその家族の合流を目指す。そのた

めには、低ランクモンスターしか出現しない第一フェイズでの行動が、重要となります」

アンゴルモアが始まってから、モンスターたちが鋼鉄の扉をぶち破って出てくるまで、少なく見積もって五〜六時間くらいの猶予がある。

その間に家族を回収して、冒険者部との合流を目指さなくてはならない。

数時間あれば余裕だろと思うかもしれないが、日中バラバラの行動をしている時にアンゴルモアが起こった場合、小学校とか会社とかスーパーにいる家族を回収し、部員たちと合流するのは、結構タイトなスケジュールとなるだろう。

「ここで問題となるのが、合流場所なんすけど……その前に皆さん、自分の身内以外にはどれぐらいの範囲を助けたいと考えていますか？」

アンの問いかけに、俺たちは顔を見合わせた。

自分の身内以外か……難しい質問が来たな。だが、確かに考えておかないといけないことでもある。

誰も彼も救っていては、本当に助けたい人が手のひらから零れ、自分自身も潰れてしまう。

それでもなお出来る限り多くの人を助けたいと考えるならば、それ相応の準備をしておかなくてはならない。

「我は……」

真っ先に口を開いたのは、身内とそれ以外ではつきりと線を引いている織部だった。

「家族と友人が最優先だ。それ以外を積極的に助けるつもりはない。さすがに目の前で死にかけていたら助けるが、その後の衣食住の面倒まで見るつもりはないな」

織部の答えは、ドライではあるが現実的なものだった。

自分の身ですら危ういアンゴルモアという極限状態で、赤の他人の生活の面倒まで見ていられない、家族や友人を優先したい、という彼女を責めることは誰もできない。

もしもいるとすれば、それはアンゴルモアの脅威を理解していないか、自分は誰も助けなくせに誰かに助けてもらって当然と考えている寄生虫だけだろう。

「僕は……自分の手が届く範囲は出来る限り助けたいかな」

逆に、そう答えたのは、師匠だった。

「……僕の兄は自衛官で、第二次アンゴルモアの時には人々を守って気高く死んだ。僕はそんな兄のことを誇りに思ってるし、その死に恥じない生き方をしたいと思ってる。民間人の保護は冒険者の義務でもあるし、自分が潰れない範囲で助けてい。……僕の場合は、守らなきゃいけない身内も特にいないしね」

姉さんなら僕がどうこうしなくてもたぶん勝手に生き残るでしょ、と肩を竦めて見せる師匠。

師匠のそれは、俺や織部と違って特に守る者がいない、ある種の身軽さからくるものだった。

身内についてもお姉さん一人しかおらず、彼女は俺たちが守ってあげなきゃいけないほど弱くはなく。親しい友人についても転校してきたばかりで俺たち冒険者部くらいしかいないし、俺たちは同士であって庇護の対象ではない。

師匠の出来る限り人を助けたいという懐の広さは、背負う者がいない余裕によるものだ。

そして、それは守るべき者のいる俺や織部には真似できないタイプの強さだった。

「俺は……家族と友人たちが最優先。余裕があれば、学校のみなもって感じかな……」

織部と師匠と比べて優柔不断な表現となってしまったが、家族や友人以外は切り捨てられるほど割り切れないし、かといって師匠のように見ず知らずの人たちを助けたいと思うほど余裕があるわけでも、心が広いわけではない。

家族や友人を最優先に守りつつ、余裕のある範囲で顔見知りを手助けしていきたいという、実に中途半端なものとなってしまった。

……本音を言えば、俺も本当は織部よりの意見だ。

家族や冒険者部の仲間、友人たちが最優先で、それ以外は究極的にはどうでも良い。

この場合の友人というのは、東西コンビや四之宮さんらカーストトップグループのメンバーを指し、その他は愛の幼馴染のアオイちゃんやミオちゃん、友人たちの家族ぐらいまでがギリギリ救いたいと思えるラインで、あんまり話さないクラスメイトや同じ学校というだけの生徒たちなどは……ぶっちゃけライン外だ。

そりゃあ目の前で死にかけていたら助けるが、その後の生活の面倒まで見る義理も義務もない……というのが正直なところだ。

織部ほどではないが、俺の世界もなかなか狭いのだ。

それでも今回学校のみんなを救う範囲に含めたのは、俺にも欲があるからだ。

——俺のカードたちに、格好いい姿を見せたいという欲が。

自分の大切な人間だけを助けたいという人間には大いに共感するが、やっぱり多くの人を助けようという人間は凄いいし、カッコいいと思う。

俺は、カードの前ではできる限りカッコいい人間でいたいのだ。

……俺が、無関係の人間を助ける理由なんて、そんなもんだ。

故に、その原動力がカードたちに良いところを見せたいという欲である以上、カードたちを失ってまで自分の欲を追い求める気はない。

あくまで大切なのは、家族と家族も同然のカードたち。その優先順位だけは、はき違えるつもりはなかった。

「なるほど、皆さんの考えは大体わかりました」

三者三様の俺たちの意見に、アンナは特に感想を述べることもなく頷いた。

「ウチの意見も述べさせてもらうと、ウチとしては学校の人たちやこの地域の人々を中心に救助できる準備を整えておきたいと考えています」

……そっちの方向で来たか。

正直、冒険者部の面々で一番考えが読めなかったのがアンナだ。織部と師匠の意見はある程度予想できたが、アンナは身内以外を全部見捨て少数精鋭での生き残りを図るとか、あるいは逆に出来る限りの人々を助けて勢力を形成すると言ってもおかしくなかったからだ。

「理由は、そのつもりで準備しておくのが、一番リスクが無いから

です」

ん？ どういうことだ？ 思わぬ言葉に、俺は首を傾げた。リスクという意味なら、織部の方針がローリスクなはずだが……。

「生存第一ということでは考えるなら、小夜の言う通り身内だけでどこかに隠れ潜むのが一番。ですが、最初から身内だけの避難を想定して動いた場合、ある程度幅を持たせたとしても準備がそれ相応のものとなります。

かといって誰もかれも救う前提ではいくら準備をしてもキリがなく、時間も資金も足りません。

ならば、実際にどうするかはさておき、初めからある程度の人々を受けられる準備をしておく方が、色んなケースに柔軟に対応できると考えました」

大は小を兼ねると言いますしね。と締めくくるアンナに、俺たちも納得の表情で頷いた。

確かに、初めから少数精鋭での想定で準備するよりもある程度の人々を受けられる準備をしておいた方が合理的である。

最初は身内だけを守るつもりでも、なし崩し的に第三者を受けられることになった時に「物資が足りません！」では目も当てられないし、ある程度受け入れの範囲を定めておけば、それ以上の人流に關しては断固とした意志で断ることができる。

……なにより、第三者の受け入れについて意見が割れたとしても、少なくとも準備に対する行動については一致団結することができる。部員たちの感情にも配慮した優れた案だった。

さすがは我らがリーダーだと感心しつつ、問題が一つ。

「その救う範囲を学校周りに限定した理由は？ ……学校を合流地点や拠点として考えているなら、あんまり相応しくないだろ」

俺は、同じ懸念を抱いているだろう部員たちを代表して問いかけた。

災害時のガイドラインとしては、避難所の第一候補は最寄りのギルド、ギルドが遠い場合は警察署、大きな病院、指定のホテル・学校・公民館などとなっているわけだが……おそらくウチの高校は、Cランク迷宮が出現した時点で避難所指定から外れている。

Cランク迷宮をその内部に有するウチの高校は、アングルモア時にはそこら辺の道端よりもむしろ危険なスポットとなる。

学校にいる時にアングルモアが起きた場合は仕方ないとしても、合流地点としても拠点としても適していないことは明らかだった。

「理由については複数あるんですが、まずは、アングルモアが起きた際に我々が学校にいる可能性が割と高いからですね」

「……すでに部員が全員揃ってるからってことか？ それだとさすがに理由が薄いだろ。一先ずギルドとかの安全な避難所に向かってから、カードだけ遠隔で派遣して家族の回収をすれば良い」

アングルモアの際に一番安全なのは、どう考えてもギルドの避難所だ。

ギルドの避難所には、元自衛官の職員などの戦力もいるし、カードや物資などもたんまりとある。

なまじ自分で拠点を用意するよりもよほど安全なはずだった。

「いや、待ってくれ、先輩。家族を回収するよりも前にギルドの避難所に行くのは、我も賛成しない」

「……僕たち冒険者は、アングルモア時には出来る限り一般人を守る義務を負うからね。特に四ツ星チームの僕たちは、重い義務を負う。避難所に行った時点でギルドの指揮系統に組み込まれ、家族を回収する行動の余地は無くなる可能性が高い」

「なるほど……」

一度指示系統に組み込まれば、先に自分の家族や友人の救助を優先してくれ！ という我が儘は通らなくなる可能性は高い。ギルドの近くに家族がいるならば冒険者の精神面を考慮され許可されるだろうが、仕事や通学などで市外にいる場合は確実に救助の許可は下りないだろう。

「まあ、ギルドの指揮なんざ知ったこつちゃねえ！ と無視して行動しても良いんすけど、その場合結局は避難所を離れることになるでしょうし、ライセンスも資格停止となる可能性が高いでしょう。」

自衛隊が第三次アンゴルモアを収束させられる可能性も『まだ』残っている以上、アンゴルモア後に冒険者ライセンスが没収される可能性がある行動は、なるべく慎むべきでしょう。

その点、学校に残って生徒や避難者を守っていれば、それを建前にある程度自由に行動できるというわけです」

まだ、ね……。

アナナのそれは、自衛隊がアンゴルモアを収束させられないことがハッキリした時点で、既存のルールを無視して好きに動く、と暗に言っているも同然だった。

「……家族を回収してからギルドの避難所に行くというのは？」

「その場合は、メリット・デメリット両方ありますね。」

メリットは、他の場所よりは安全なこと。ギルドのカードや魔道具などの支援を受けられること。

デメリットは、行動の自由が無くなる事。避難できる人数に限りがある事。そして……ポーションなどの魔道具やカードの供出を求められる可能性があること」

「……は！？ カードの供出！？」

なんだ、そりゃ!?

驚愕する俺に、師匠が教えてくれる。

「第二次アンゴルモアの時に実際にあったことなんだよ。自衛隊の避難所に避難してきた人から、国が高ランクのカードや有益そうな魔道具を半ば強制的に買い上げたんだ。一般人が使わずに持っているより、自衛隊が使った方が効率的だからね。」

その時に色々とゴタゴタがあったから、今じゃ正式に法律が作られて、アンゴルモアの際には自衛隊やギルドがカードの強制買い取りが出来るようになってるんだ。

ちなみにこれ、四ツ星の筆記試験で出るよ」

マジか……。筆記試験の勉強は少しずつ進めてるけど、それは知らなかったな……。

最悪、魔道具は仕方ないとしても、カードの供出はマズい。

主力メンバーについては名づけているから心配ないが、俺もすべてのカードを名づけているわけではないからな。

もしアテナを持っていかれて、それが蘇生用に使われなんかしたら、精神的なダメージは計り知れない。

……予め名づけておこうにも、彼女のプライドの高さを考えるに、たぶんマイナススキルを解除するまで受け入れてくれないだろうしな。

「もちろん、取り上げられたカードや魔道具は、アンゴルモア終了後にすべて補填されたそうですが、今回はどうなるかわかりませんからね。仮にアンゴルモアを上手く乗り越えたとして、ちゃんと補填されるかどうか……」

「ギルドの避難所がマズいのはわかった。でも学校の迷宮の問題はどうする? そもそもどうして学校に拘るんだ? 他の拠点じゃダ

メなのか？」

「学校に拘るのは、この部室を物資の保管所にするつもりだからです。」

今は迷宮で手に入れた換金前の魔道具類やカードは、ギルドの貸金庫に預けていますが、そのまま預けておくのは問題があるのは、先ほどの話で理解しましたよね？

早いうちにギルドの貸金庫からどこかに移しておく必要があります。」

そこに設置したロッカーは、収納スキルを持った純正魔道具で、見た目以上に大量の物資が入り、登録した人間以外は中身を取り出すことができないようになっていきます。今後、ここの迷宮で手に入れた物資は、あそこに保管しようと思っています。」

あれ、魔道具だったのか……。

学校をここの迷宮の戦利品の保管庫にするつもりだったから、ここを拠点にすることに拘っていたわけか。

引っかかる点はあるが、今は置いておくとして。

「学校の迷宮については？」

結局、一番のネックとなっているのは、そこだ。

「迷宮については、速攻で踏破して沈静化することで対処するつもりです。」

「沈静化って……。」

ずいぶんと簡単に言ってくれる……。

確かにその迷宮の主を倒すか迷宮を踏破することで、その迷宮からのモンスターの氾濫は沈静化することができる。

だが、攻略に専念できる夏休みですら約二週間かかったのだ。ア

ンゴルモア中に、一日や二日で攻略できるわけがない。

迷宮の主が地上に出てくるのを待ち構えるにしても、その間濁流のようなモンスターの氾濫を抑え込む必要がある。

予め最終階層まで踏破して、アンゴルモアが起こったら速攻で主を倒すなら話は別だが、さっきの口ぶりからしてこの迷宮の攻略は続けるつもりだろう。

「その口ぶりだと、何か考えがあるのだろうか？ もったいぶらずにさっさと言ったらどうだ？」

「まあ、考えてほどもないんだけどね。ぶっちゃけただのゴリ押しだし。遭難のカードを使おうと思って」

「遭難って……。おい、まさか」

「そのまさかツスよ、先輩。階層数分の遭難のカードを使って、一日で踏破します」

『ゴリ押し過ぎる！』

俺たちは声を揃えて叫んだ。

全階層分の遭難のカードを使うって、いくらかかるんだよ。一枚三百万円として、五十階層分で……。一億五千万円とかか。

そんなの……。あれ？ この迷宮の利益なら普通に払えるな。

最初はとんでもないと思っただが、冷静に考えてみれば普通にアリな案だった。

「……学校の迷宮が問題ないなら、別に学校が拠点でも良いか。物資の保管所に学校を選んだのも、即迷宮の攻略ができるようにか」「はい。下手に離れたところに物資保管所を作ると、物資を取りに行くこと自体がリスクとなりますからね」

うーん、しかし……。

「そこまでして学校を拠点にする必要があるか？ 一億五千万あれば、その分をカードとかの購入費に回した方が有意義な気もするが」

気になるのは、やはりそこだ。

俺の言葉に、他の二名も頷いている。

どうもアンナは、初めから学校を拠点することありきで話を進めている気がするのだ。

アンナは、しばし言いづらそうに口籠っていたが……。

「じ、実はすでに遭難のカードは、四十枚ほど集まってるんです……」

え？ ほとんど揃ってるじゃん。

「ええ……もう買っちゃってたのか？ いつから？」

「学校の迷宮を攻略し始めるちょっと前からツスね……。万が一にでも期間中に攻略できなくなると困るんで、念のために……と」

『あー……』

なるほど……。

そういうことか……なら、まあ、わからんでもない。

「えー……。まあ、もう遭難のカードがほとんどあるなら、俺はそれで良いけど……」

と織部たちを見ると苦笑しつつ頷いていた。

まあ、ぶっちゃけ地上の拠点なんてギルド以外はどれも一緒だからな。ただのコンクリートの箱に過ぎない。

拠点の本命は、異空間型カードだ。地上の拠点など、アンゴルモア時に速やかに蓄積してある物資を回収できる場所なら、どこでも良いのだ。

そう言う意味では、迷宮からの戦利品を貯めやすく、アンゴルモア時に俺たちがいる可能性が高い学校は悪い場所ではない。

……俺にとつても、ガーネットの補給場所を確保できるというのは、好都合だしな。

頷く俺たちを見て、アンナはホツとした様子で言う。

「助かります。どうせなら有効に活用したかったんで。売ってもいいんですが、どうしても買値以下になっちゃいますからね」

しかし、学校を拠点にすることは問題ないが……。

「正直これを聞くかどうかは迷ったんだが……十七夜月家は頼れないのか？ ハッキリ言って、学校を拠点にしたりギルドに頼るよりも安全な気がするんだが」

「あ……」

あんまり彼女の家の力に頼るのは問題があるとわかっているが、四の五の言ってる場合ではないのも事実。

正直、十七夜月家の個人所有しているシエルターなんかに入れてもらえれば、ギルドなんかに頼るよりも安全かつ快適に過ごせるだろう。

そんな俺の問いかけに、アンナは頬を掻きながら露骨に困ったようなくさを見せる。

「……わかりました。皆さんにはお話ししておこうと思います。絶対に他言無用でお願いしますよ？」

「わかった」

「……ウチの両親は、火星への移住計画が失敗したり、間に合わなかった場合のために用意してあった巨大シェルターに入ることが決まっています。ウチは出資者の家族ということで入ることができますが……」

ああ……なるほどね。

言葉を濁すアンナに、俺たちは曖昧な笑みを浮かべることしかできなかつた。

そういう漫画みたいな話って本当にあるのね……。

「アンナはそこに入らなくて良いのか？」

「ないッスね。なんかツマンなさそうだし」

もし俺たちのことを心配してのことなら……と思いつつ問うてみると、アンナはあっさりと首を振って見せた。

ツマラナそうだからとは、実にアンナらしい答えではあるが……。

「その、ご両親は反対とかしてないのか？」

「そりゃあもちろん大反対ですよ。このままいけば、そう遠くないうちに縁を切られそうな勢いです」

「ええ……？ マズいじゃん」

実家のコネが使えなくなったアンナなんて、可愛くておっぱいが大きくて、先見の明とリーダーシップがあつて、男のロマンに理解があるだけの女じゃん。

「あ、ちなみにそのことで父から先輩に話があるらしいんで、そのうちよつと時間作ってもらって良いですか？」

「ヒョッ！？ ど、ど、どどうして!？」

動揺する俺にアンナは困った様子で頭を掻きつつ。

「いや、なんかウチがアンゴルモアで別行動するのは、先輩のせいだと思ってるみたいなんスよね。どうもウチがこの高校に進学したのもそれが理由と思ってるみたいだし」

ど、どうしてそんな勘違いを……。

もしかして、アンナがこの高校に入学して来たのを俺のせいだと思ってるのか？

お嬢様学校に通っていた一人娘が、高校は突然一般校へ。そこには、学生トーナメントで彼女を破った男が。そのままその男と部活を作り、なぜか凶悪事件を共に追いかけはじめ、しまいには家族とシエルターに入らずにアンゴルモアを共に生き延びると言い出す……。

クソッ！ 端から見たら完全にそういう関係にしか見えねえ……！

もしかして、アンナの冒険者部への色んな支援を、俺が貢がせてると思っただろうな？

もしそうだとしたら、完全に抹殺対象だぞ……。

「まあ、無視してもらっても構わないんですけど、気が向いてくれたら会ってくれと助かります。さすがに最近うつつとうしくなってきたんで」

無視できるわけねえだろ……！ 逆に恐ろしいわ！

「あ、ああ……わかった。近いうちに会うわ……」

「大丈夫か、先輩。もしなんだったら我も一緒に会っても良いが……

…十七夜月のおじさんとは知らない仲でもないし」

「いや、大丈夫」

織部を連れて行ったらそれこそ誤解を解くのは不可能だ。娘だけじゃなく、その唯一の親友にまで手をつけてるとしか思われんわ。

「というわけで、アングルモアが始まったら十七夜月家の支援には期待できないと思ってください。というか、準備の時点から頼れないと思ってもらえると助かります」

まあ、わざわざ娘が別行動するための協力はしないだろうなあ。

「話を戻しますが、アングルモアの際の合流地点兼拠点の第一候補は学校ということが良いですか？」

『異議なし』

まあ、他に候補も無いしな、と頷く。

駄目そうなら最悪ギルドに駆け込めば良いし、マヨヒガがあるから少数での放浪生活も可能だしな。

「合流地点と拠点が決まったところで、次はどういったものが必要か考えていきましょう。とりあえず皆さん、各々必要だと思うものを片っ端から上げてみてください。その際、他の人の意見を否定するのは無しで。一先ず自由にボードに書き出してみてくださいから一つずつ吟味して、優先順位を決めていきましょう」

俺たちは頷き、必要だと思うモノを挙げて言った。

「とりあえずは水と食料だよな。カード化した食料だけじゃなくて、食料自体を生み出せるカードや魔道具も必要だ。あと服とかも」

「回復魔法が扱えるカードやポーシヨンの類もいくらあっても多す

ぎということはないだろうな。ポーションを生み出せる魔道具は特にだ」

「マヨヒガのような異空間型カードも欲しいよね。過酷な状況だから、少しでも気が休まる場所が必要だよ。生活を快適にしてくれる魔道具も欲しいね」

「必須ってわけじゃないだろうけど、本とかゲームとかそういうのもあった方が良さよな。学校が拠点なら図書室もあるけど、所詮は学校の図書室だしな」

「ふむ、家電を使うことを前提とするなら、魔石発電機と魔石もだな。まあ、発電機は学校に備え付けのものもあるし、魔石についてはいくらでも手に入るだろうが」

「せっかく視聴覚室とかあるんだし、DVDを見れるようにして簡易的な映画館にするのも良いかもね。防音結界で外に音とか漏れないようにしてさ」

「……ぶつちやけ、避妊具とかも必要じゃね？ 絶対、そういうことをする奴出るだろうし」

「……避妊具だけじゃなく、色んな生活雑貨が必要かもね」

「下着の替えに、シャンプーやリンス、ボディソープ。歯ブラシセツト。男なら剃刀とシェービングクリーム。女なら化粧品等……。すべてを上げればキリが無いな」

「んー、マヨヒガで寝泊まりするにしても、どうしても部屋数が足りないよな。風呂とか潰してリソースをすべて部屋数に振り分けても百部屋くらいが限界だし。教室で雑魚寝することになるなら仕切りになるカーテンとかもか？ ダンボールベッドとかマット、毛布とかは学校に元々あるだろうけど」

「どれくらいあるかわからないし、僕らでも準備しておいて損はないだろうね」

「モンスターの襲撃で校舎が壊れることを考えたら、そういう修理用の物資も必要か？ ああ、いや、家事魔法があれば多少の修理はどうにかなるか。いや、修理のための材料は必要なのか？ 使った

ことねーから仕様がわからないな……」

「ああ、シルキーとかの家事魔法は、多少の欠損部は勝手に埋まるよ」

「うーん、さすが魔法……」

いざアイデア出しをすると、次から次へと湧いてくる。

そうして雑談を交えつつも思い付く限りのアイデアを出し尽くすと、次は優先順位を決めていく。

最終的に、優先順位は以下の通りとなった。

残りの遭難のカード 食料系 異空間型カード（できれば異界クラスを一枚） 各部員の戦力増強用カード

>>（必須レベルの壁）>>

回復系カード及び魔道具>装備化スキル持ち及び眷属召喚持ち

>>（金がある分だけ揃えていきたい物の壁）>>

雑貨類> 便利系魔道具

>>（あれば便利な物の壁）>>

娯楽類（他の物を揃えて余裕があれば……）

この優先順位とは、必ずしもその順に手に入れていくということではなく、同時にどちらか手に入れられそうな時、優先順位が高い方を優先するという順位である。

そのためカードと比べ安価ですぐ手に入るカード化された食料品や雑貨などは、むしろ最初にある程度の量を手に入れることになる。

「……物資の調達については、こんな感じっスかね。」

正直、異界クラスの異空間型カードは値段的にムリ目な感じもしますけど、異界クラスが手に入れば食料問題も一気に解決するんで、積極的に狙っていきたいっスね」

異空間型カードも高ランクとなってくると妖精郷や桃源郷など一つの異世界が丸々入っているレベルとなり、それ一枚で食料問題も防衛についても一発で解決する。

それだけに値段についてもそれ相応に高く、アングルモアに向けて価格も高騰していくだろうが、狙っていくだけの価値はあった。

「各自の戦力増強については、カーバンクルガーネットの分配をそのまま続行するんで、各自で戦力を揃えてください。ウチの迷宮からのドロップ品を狙っても良いですしね。

その他の食料系のカードや異空間型のカードについては、誰も欲しがらなかったカードの売却や、不要な魔道具の売却で揃えて行くと思います。

まあ、前回攻略でのドロップを考えるに、二周か三周で異空間型カード以外は最低限揃えられるんじゃないツスカね？」

今回のCランク迷宮攻略では、カードだけでも一億五千万相当のドロップがあった。それも市場価格ではなく、ギルドの買い取り価格での値段だ。

そこに魔道具の売却益を含めれば、Bランクになると思われる異空間型カードは厳しいとしてもそれ以外の必要最低限の物資やカードは揃えられるだろう。

……まあ、メンバーが欲しいカードが多くドロップした場合、物資の調達に回す資金も減り、それだけ物資の調達も遅くなるが、戦力の増強が最優先なので仕方ない。

もし遭難のカードがすべて揃うまでにアングルモアが起きてしまった際には、学校を拠点とする案は破棄し、本当に身内だけの少数精鋭での生き残りを図るサブプランへと移行することとなっている。

「―――大体的方針と対策は、これで決まった感じツスカね？」

皆さんから何かありますか？」

その後も細々とした想定を話し合い、最終下校時間の十八時が近づいてきて窓の外もすっかり暗くなってきた頃。

会議の締めくくりとしてアンナが皆へと問いかけた。

何かあったかなと首を傾げ、そこで小野のことを思い出した。

「あのさ、うちのクラスに小野って奴がいるんだけど……」

「うん？ ああ、あの猟犬使いの事件の時に、調査に協力してくださった人ツスね」

おお、アンナの記憶にちゃんと残っていたか。これは話が早い。

「アイツ、すでにアンゴルモアの前兆について嗅ぎ付けててさ。冒険者部に入りたいて言ってるんだけど……」

「ああ、なるほど……そういう話ツスか。この段階で、特にコネのない一般人が嗅ぎ付けるとは……やりませぬ」

アンナは少し考え込むような仕草を見せ。

「結論から言うと、皆さんが反対でなければウチとしては問題ありません。小野先輩には、情報収集能力という強みもありますしね。ただ、正式な入部は今すぐではなく、政府がクダンの予言の発表をしてからしてもらおうよう伝えてもらえますか？」

「予言の発表後？ なんでだ？」

「そのまま伝えていただければ、たぶん小野先輩がウチの思っている通りの人ならそれで理解してくれると思います」

ふむ、俺にはよくわからんが……。

「……わかった。とりあえず入部については問題ないってことなんだな？」

「はい。小夜や神無月先輩もそれで良いですか？」

「先輩の友人なら問題ない」

「僕も大丈夫」

こうして、小野の冒険者部の入部は無事通ったのだった。

第十一話 備えあれば患いなし（後書き）

【TIPS】沈静化

アンゴルモア時、迷宮の踏破か迷宮の主を討伐することにより、その迷宮におけるモンスターの氾濫を一時的にストップさせることができる。

これにより、アンゴルモア時の被害を減らすことができるが、沈静化はあくまで新たなモンスターの氾濫を防げるだけであり、すでに溢れ出してしまったモンスターが消滅することはない。また、沈静化した迷宮に一匹でもモンスターが入りこめば、モンスターの氾濫が再開する。

迷宮の踏破＝迷宮の主の討伐ではないのは、迷宮の主がすでに迷宮外に出ている可能性もあるからである。その場合、主が階層を移動した段階で出口のゲートが最下層に出現しているため、そこを通れば踏破扱いとなる。その場合、当然ながら踏破報酬は出ない。また主が最下層に戻った時点で出口のゲートも消える。

沈静化できる期間は、およそ一か月ほど。その期間中に再度踏破することで期間は延長できる。

第十一話 備えあれば患いなし (前書き)

【コミック第一巻発売中!】

コミックノヴァさまとニコニコ静画さまで、コミック発売記念の告知漫画が更新されてます。

まだご覧になってない方は、ぜひどうぞ!

前話のTIPSを思い付いたので、追加しました。

第十一話 備えあれば患いなし

「では、今日のところはこれで終わりということ。皆で無事にア
ンゴルモアを乗り切れるよう、明日から頑張りましょう!」

アンナの号令に拍手で応え、ようやく長時間に渡る会議も終わっ
た。

部室の鍵を閉め、皆で学校を出る。

そのまま駅前まで差し掛かったところで……。

「じゃあ、俺は立川でちょっと買い物があるから、ここで。また明
日」

そう言って、改札へと消えていく皆を見送った。

そのまま近くの喫茶店に入ると、紅茶だけ頼み、一人静かに待つ。
それから二十分ほどして……。

「お待たせしました、先輩」

遠目にも目立つ赤毛を揺らし、楽し気な笑みを浮かべてアンナが
やって来た。

「会議が終わったら皆にバレないように二人つきりで話したい……
なんて」

アンナは、悪戯っぽい笑みを浮かべて俺の顔を覗き込み。

「もしかして、愛の告白とか？」

そう言っただけでクスクスと笑った。

「……楽しそうだな」

「フフ、そうですか？ ……そうかもしれませんね。あ、お姉さん、レモンティーのホットを一つ」

「かしこまりました。他にご注文はよろしいですか？」

「大丈夫です」

店員の女性を見送り、アンナがこちらへと向き直る。

「それで、愛の告白じゃないのなら何のお話ですか？」

「まあ、それは紅茶が来てからにしよう」

「へえ……？ わかりました」

それから店員さんが紅茶を運んでくるまで、俺たちは無言で静かに待った。

何が面白いのか、アンナは店内にいる人々の様子をじっと眺めている。

テーブルの拭き掃除をしたり注文を取りに行く店員や、仕事帰りに一服している様子のサラリーマンなど、店内に特におかしな物や人は見当たらない。

だと言うのに、アンナは美術館か博物館の鑑賞でもしているかのような眼差しで、飽きもせず店内の人々の様子を眺めている。

彼女の目に何が映っているのが気になって、俺は問いかけた。

「……さっきから何を見てるんだ？」

「ん？ 日常……ッスかね」

「日常？」

辺りを見渡す。……確かに、この店内の様子は日常の光景だ。つまり、どこでも見られるものであり、何も特別なものではない。俺がその意図をさらに問おうと口を開きかけたその時、店員さんが紅茶を持ってきた。

……なんとなく、機を逃した感があるな。まあ、大したことでもないから良いか。

と防音結界の魔道具をカバンから出そうとして、俺はテーブルの上ですでにそれが置かれていることに気付いた。

思わずアンナの方を見ると、彼女はチェシヤ猫のように悪戯っぽく微笑んでいる。

「こつというのが必要なお話かと思って。もしかして、違いました？」

「……いや、そういう話だ」

俺は妙に乾く喉を、紅茶で一口潤した。

「今日、アンナを呼んだのは……アングルモアの前に俺の秘密を話しておこうと思ってさ」

そこでチラリと反応を窺う。

アンナは、テーブルに肘をつき組んだ指の上に顎を乗せ、薄く微笑んで話の続きを待っている。

そのどこか妖艶な貌に少し動揺しつつ、俺は続けた。

「アンナは俺の運が良すぎると感じたことはないか？」

「運、ですか？ ……確かにレース中にサキュバスを手に入れたり、パックでアテナを当てたり、『持ってるな』と思ったことはありますね」

「まあ、サキユバスに関してはマジで偶然なんだが……アテナの方は偶然じゃない。必然だ。それがアテナだったのは偶然だが、Bラックが当たるのは、わかっていた」

「……まさか」

アテナの顔から笑みが消える。

ここからが、正念場だ。俺は一つ唾をのみ込み、言った。

「単刀直入に言おう。俺は自分の運をある程度コントロールできる。そういう力を持つカードを持っている。……ッ!？」

その瞬間、俺は全身を視線が一瞬で這い回るの感じた。

俺の拳動から、ありとあらゆる情報を抜き取るうとしている……。

まるで昆虫の複眼にじつと見つめられているかのような感覚。

アテナは、すべての感情が抜け落ちたような無表情で、蒼い瞳だけ小刻みに動かしながら、しばし俺を注意深く観察していたが……やがて。

「……何か、証拠となるものは？」

そう、囁くような声で問いかけてきた。

俺は、なんとか生唾と共に動揺を飲み込むと……。

「そうだな……次の迷宮攻略で、吉祥天になった蓮華を見せる。それじゃ足りないか？」

「いえ、十分です」

そう短く答え、アテナは肘を抱えて無言で俯いた。

その顔は、赤い髪で覆い隠され、その表情を窺い知ることにはできない。

俺はそれを最初、話の信憑性を吟味しているのだろうと思っただが、よく見ると微かに身体が震えていることに気付いた。

「……アンナ？」

「いえ、すみません。……少し、興奮してしまっただけ」

アンナが、ゆっくりと顔を上げる。

その時には、身体の震えも収まり、少なくとも表面上はいつも通りの彼女となっていた。心無しか、頬が紅潮して瞳が潤んでいるように見える程度だ。

「先輩には何か秘密があるとは思っていましたが、これほどは……。ちなみにこの話、他の人には？」

「いや、今のところアンナだけだ。……今まで黙ってて悪かったな」「いえいえ、秘密にして当然のことですから。むしろ先輩が慎重な性格で良かったです。……本当に。しかし、そうですね、私だけ。フフ……」

一瞬微笑んだアンナは、そこで指をコメカミに当て困ったような顔をした。

「しかし、そうなると少し困りましたね。……先輩がそういう力を持っているとなると、それに見合うだけの報酬を払うことができるかどうか」

「あ、いや、そういうつもりで言ったわけじゃないんだが……」

俺がこの話をアンナへと話したのは、ガーネットを換金ではなく俺に回してもらい、冒険者部をより効率的に強化するためだ。

能力をアピールして、報酬の配当を増やすことを目論んでのものではない。

だが、そんな俺にアンナはキツパリと首を振り。

「いえ、能力と成果に対して正当に報いなければ、いずれその組織は必ず崩壊してしまいます。先輩は何か欲しいものはありますか？」
「……ある。今回アンナに秘密を話したのも、それに関係した話だ」

俺の答えにアンナが満足げな笑みを浮かべ、頷いた。

「お伺いしましょう。なんでも言ってみてください」

「さつき俺がある程度運をコントロールできるって話はしたと思うんだが、当然ノーコストって訳にはいかない。これまでは普段の運を少しずつ貯めて、主と戦う時とか、ギルドのパックを引く時とかに貯めた運を一気に使ってたんだが……最近幸運のエネルギーを外部から補充できる方法を見つけたんだ」

俺の言葉に、アンナは顎に指を当て、数秒ほど考え込むような仕草を見せると……。

「……もしかして、それってカーバンクルガーネットですか？」
「ッ！？」

な、なんでわかったんだ！？

俺が愕然としていると、アンナは少し自慢げに微笑んで。

「先輩の迷宮攻略中の様子から、もしかしてそうかなーと。ただの高額な換金アイテムに対して、妙に執着しているように見えたので」「マジか……もしかして他の部員も気付いてると思う？」

「どうでしょう？　ウチは普段から部員たちの様子に気を払うよう気を付けているので気付けただけですし、もしかしたら小夜あたりは気付いてるかもしれないッスけど……先輩の能力を知らなければ

特に疑問にも思わないんじゃないツスカね？」

「そうか……」

ホツと胸をなでおろす。まあ、ガーネットの効果を知らなければ、気のせいかな？ で終わるだろうしな。

「しかし、ガーネットですか……なるほど。と、なるとやはり国もこの能力については気付いてるんスカね？」

「やっぱ、アンナもそう思うか？」

「はい。まず間違いないと思います。そう考えると色々と納得できることも多いですし。……ちなみに、その能力は宝籤カードにも有効だったり？」

「一応有効だ。でも、Aランクカードは、どうやらどれだけガーネットがあっても無理っぽい」

「ふむ？ なるほど、Aランクは色々と特殊って話ツスカらね。まあ、そういう話なら報酬はガーネットと宝籤カードってことで良いツスカ？」

「まあ、そうしてくれるなら有難いけど、織部や師匠への分配はどうするんだ？」

「ああ、それについては現金での分配に切り替えようと思います。この先、普通に考えたらアンゴルモアに向けてガーネットとかの装飾品に関しては間違いなく値下がりしますからね。ガーネットでの分配よりも現金での分配の方が、皆も有難いはずですから納得してもらええると思います。」

口実としては、ウチが実家のコネで売り捌くことにして、みんなからはこれまで通り一つ200万で買い取って、裏で先輩に流す感じツスね」

「うーん、確かに表向きガーネットはただの宝石だし、これからほとんど値下がりしていくか。……つか、その口振りだと織部や師匠には俺の能力については隠すのか？」

「おや？ その方が良いと思ったんすけど、違いました？」

可愛らしくキョトンと首を傾げるアンナに、俺は首を振って肯定した。

「……いや、違わない。読心の魔道具とかがある以上、秘密を知るのは出来る限り少ない方が良いからな。……でもガーネットをだまし取るようで、ちょっと心苦しいな、と」

「うーん、気にしすぎだと思えますけどね。一応、市場価格で買い取るわけですし」

「だが、ガーネットにはそれ以上の価値がある」

「ふむん」

そこでアンナは少し考え込む素振りを見せ。

「一つお聞きしたいんですけど、ガーネットってウチらでも普通に使えるんすか？」

「……いや、普通は無理だな。通常のカードでは、ガーネットに秘められた幸運を引き出すことは不可能だ。ただ砕いても中に秘められた幸運は使うことはできない」

「なら、やはり気にしすぎですね。ガーネットが先輩の手に渡った瞬間その価値が跳ね上がることを気にしているなら、それは原石とカット後の価値の差と考えたらどうでしょう？」

「原石とカット後？ ……なるほどな」

その発想はなかったな。

なるほど、普通の人にとって、ガーネットは宝石の原石そのもので、俺はカット職人というわけか。原石を原石との価格で買い取った後、カットして高く売ったとしてだまし取られたと憤る人間はいないだろう。その差額は、カット職人の技術と能力分の差だからだ。

「まあ、どうしても気になるなら、その力で異界クラスのカードを入手していただけるとウチとしては嬉しいですけどね。先輩のカードであっても、その恩恵は冒険者部全員が受けられるわけですし」
「いや、さすがに狙ったカードを出せるってわけでもないんだが……」

「ふむ……でも何枚かBランクカードを出して、それを売れば異界クラスのカードであっても買えるわけでしょう？」

「ああ……そうか、言っただけじゃなかったな。俺の能力については、そんなに使い勝手の良いもんじゃないんだ。ぶっちゃけ使用にはリスクがある」

「……リスク、ですか？」

眼を細めるアンナに、俺は頷いた。

「ああ、自分の好きなように未来をコントロールしようとする行為は、あとで幸運の揺り戻しが襲ってくる可能性がある。俺は因果律の歪って呼んでるけどな。確実にBランクカードを出そうとすると、この因果律の歪が溜まるんだ」

「因果律の歪……」

アンナが顎に手を当て、視線を伏せる。

「因果律の歪は、時間経過で自然と消えていくから、歪を蓄積させないように能力を使うなら、まあ、一月に一回か二回が限界だな。もう一つ幸運操作って能力もあるけど、おそらく数倍のガーンネットを消費する上、確実にBランクカードが出るとは限らない」

「なるほど……まあ、月に一〜二枚Bランクカードが手に入るって時点で十分凄いっすけどね。……ちなみに、ガーンネットと言ってますが、ヴィーヴィルダイヤの方はどうなんですか？」

「わからない。試したことがないから」

「なるほど、では次にその能力を使う時はこれを試してみてください
い」

そう言っつてアンナが渡して来たのは、ヴィーヴィルダイヤだった。

「これは……」

「前回の迷宮攻略で、ガーネットと違って割り切れないためウチが預かっていたヴィーヴィルダイヤです。ウチのコネでガーネットと交換して分配する予定でしたが、これを使って実験してみてください
い」

「ふむ、その分の皆への分配はどうするんだ？　というか、ガーネットを一括で買い取って換金するってさっき言っただけど、その金はどうするんだ？」

「それについては、先輩頼りで申し訳ないんですが……次Bランクカードを出したら、それを預けていただけませんか？　それを売ったお金で小夜と神無月先輩にはガーネット分の分配金を払うという形にしたいんです。その代わりに、ウチの分のガーネットの分配金は要りませんので」

アンナの提案に俺は眉を顰めた。

「Bランクカードを渡すのは良いけど、お前の分の分配が無しつてのはダメだろ。ちゃんと受け取ってくれ」

「お気になさらず。先輩がウチのチームに所属してくれる報酬としては少なすぎるくらいツスから」

「いや、受け取ってくれ。それが、Bランクカードを渡す条件だ。というか、俺がBランクカードでアンナからガーネットやダイヤを買い取るって形にした方が、シンプルで良くないか？」

変にややこしくするよりも、その形の方がわかりやすく良いだろう。

「うーん、本当に気にしなくて良いんですが、先輩がそうしたいというのなら……。そうですね……。では、こうしましょう。今から私たちのリーダーは先輩ってことで」

「ええ？」

なんか予想外の方向に話が……。

「先輩がリーダーなら、自分の能力を使ってチームを強化するのも自勢力を強化してるだけってことになりますからね。こうなったらウチがリーダーをするよりもその方が良いでしょう」

あれだけ拘っていたリーダーの地位をあっさり受け渡したアンナに、俺は困惑しつつ。

「いや、俺、リーダーとか興味ないんだが……。それにアンナはリーダーシップがあるし、リーダーはそのままお前がやってくれろと俺としても助かる」

「おっ、なんか意外と高く評価してくれてたんすね」

「まあな。今日の会議も色々なパターンを考えてきてたんだろ？ 部員たちがどんなことを言っても瞬時に対応できるようにさ。そんな出来る社会人みたいなことができるのは俺らの中でお前だけだよ。俺には無理だ」

学校の成績は悪いアンナだが、それは単に興味がない……。という価値を見出していないだけで、頭自体は決して悪くない。いや、むしろある意味では秀才タイプである織部よりも優れているといっ
て良いだろう。

「フフ……ありがとうございます。そう言ってもらえると準備して来た甲斐がありました」

アンナは、俺のお世辞抜きのお褒めに嬉しそうに笑い。

「でもそうですね、そういうことなら先輩は裏……真のリーダーということでしょうか？ 表向きのリーダーは今まで通りウチが務め、その裏では先輩の意向を聞く、というのが？」

「うーん、それに何の意味があるのかよくわからんが……要はこのままアンナがそのままリーダーをやるってことだろ？ なら、それで良いさ」

俺がそう言うと、アンナはパンと嬉しそうに手を鳴らし、満面の笑みを浮かべた。

「決まりツスね！ 改めて、これからもよろしくお願いしますね、真リーダー！」

「リーダーは辞めてくれ、マジで……。さて、そろそろ大分遅くなってきたし、帰るか」

「ですね。……あ」

「ん？」

そのまま席を立とうとしたところで、アンナが不意に思い出したような声を上げたので、腰を中途半端に浮かした形で止まる。

「……申し訳ないんですけど、父と会う件、真剣に考えてもらっても良いですか？ ちよっと、正式に紹介しておきたくなったので」

そう言って意味深に笑うアンナ。

……正式に紹介ってなんなの？ 怖いよ……。
と内心でビビりまくりつつ、俺は曖昧に頷くしかなかったのだっ
た。

第十一話 備えあれば患いなし (後書き)

【TIPS】アンゴルモアのフェイズ

過去の経験を基に、アンゴルモアはいくつかのフェイズに分けられている。

【第一フェイズ】

FランクからDランクまでの階層の安全地帯が一時的に効果を消失し、モンスターたちが階層を移動可能となる。

地上に近い順にモンスターが迷宮からあふれ出し、同時に急速に迷宮が増殖を始める。この段階では、新しく増えた迷宮からはモンスターの氾濫はない。

【第二フェイズ】

第一フェイズであふれ出したモンスターたちが暴れることで迷宮にエネルギーが溜まり、Cランクモンスターが溢れ出す。さらに、新たに増えた迷宮の一部からもモンスターの氾濫が始まる。

【第三フェイズ】

Bランクモンスターが溢れ出す。

【第四フェイズ】

詳細不明。おそらくAランクモンスターが溢れ出すと思われる。そこまで行けばもはや人類の手には負えず、アンゴルモア中に、第四次アンゴルモア分のエネルギーが溜まる可能性がある。

人類が実際に経験したのは第三フェイズまでで、第四フェイズの

存在はあくまで想像となる。

しかし、パターンの考えてこの通りになる、あるいはそれ以上の最悪の事態となる可能性は非常に高い。

第一次アンゴルモアでは、迷宮数も少なく、迷宮付近の封鎖も済んでいたこともあり、第一次フェイズで被害を食い止めることができた。

だがその結果、人類は、フェイズは進行するという重要な情報を得ることができず、幸運にも第一次アンゴルモアを起こさずに済んだ国が、迷宮数を増やすために自らアンゴルモアを起こすという愚行に繋がってしまった。

第十二話 頭の良い奴の道具じゃ困るんだよ

「よっ、小野」

「師匠、おはよーさん」

翌朝。登校口で小野を見かけた俺は、ポンとその肩を叩いて挨拶した。

「例の件、オツケーだったさ」

「ホンマか!？」

挨拶もそこそこに入部の件が通ったことを伝えてやる。すると、小野はパツと顔を輝かせ、胸をなでおろした。

「助かる。マジでありがたいわ……今回ばかりは国も頼りにならんかもしれないからな」

「ただ……」

「ただ？」

「今すぐってわけじゃなくて……正式な入部は、政府が予言のことを発表してからにしてくれて、アンナが」

「ふむ？」

俺がアンナの言伝を伝えると、小野は少し考え込んだ様子を見せ

「ああ……なるほど、そう言うことか。わかった。理解した、と言っていたと部長ちゃんに伝えておいてくれ」

「……お前には意味が分かったのか？」

「まあ、な。たぶん、そう言うことやるって程度やけど」
「どついつ意図なんだ？」

俺がそう問いかけると、小野は少し周囲を気にする素振りを見せつつ、声を潜めて答えた。

「うーん、たぶん……部長ちゃんは、予言の発表後に殺到するであろう入部希望のまとめ役を僕にやらせる気なんやと思う」

「予言の発表後に入部希望が殺到するかも……ってのは俺も理解できるが、なんで纏め役をお前にやらせるんだ？ それに、それなら今すぐでいいだろ」

「そこは、まあ、繊細な民衆心理のコントロールってところやな。」

……一応聞いとくけど、師匠たちはアンゴルモアのことを政府の発表よりも前に広く警告する気はないんやろ？」

「ああ……今物価が上がったら困るし、なによりギルドからも口止めされてるからな。ギルドや国から睨まれたくない」

俺たちが目撃した予言については、その内容について精査が終わってないこともあり、余計な混乱を招かないようにと、ギルドから口止めされていた。

もちろん家族や友人にそれとなく警告して準備を促す程度ならペナルティーもないだろうが、不特定多数の人に警告するような真似をすれば確実にギルドからの警告が来るだろうことは間違いなかった。

最悪の場合、ライセンスの一時停止などの処置がとられる可能性もあった。

今、この状況で迷宮に入れなくなったら致命的だ。
それだけは、絶対に避けなくてはならなかった。

「……で、だ。予言が発表されたら、学校の奴らは当然師匠らに予

言の事を知っていたのかって聞いてくるわけやろ？」

「……ああ、なるほど。そういう話か……」

ようやく話の流れがわかり、俺は頷いた。

「でも、それは白を切れれば良いだけの話だろ？」

「だが、一抹の不信感が残る。そんじょそこらの一ツ星、二ツ星なら知らなくてもおかしくないやろうけど、師匠たちは四ツ星も在籍するプロチームやからな。なんらかの情報を掴んでいてもおかしくない。……というイメージがある。実際、こうして事前に情報を掴んどるわけやしな。その頃には、今よりもさらにカードの相場も値上がりしとるやろうし、鋭い奴は確実に疑いを持つ」

他ならぬ自分がそういうタイプだからか、小野の言葉には説得力があった。

「確かに……その可能性はあるか。でもそれがなんで小野の入部を遅らせることに繋がるんだ？」

「……師匠つて答えが人からすぐ聞ける時は深く考えない癖があるよな。自分一人で考えなきゃいけない時は結構深く思考するの……」

「う……」

小野に痛いところを突かれた俺は思わず呻いた。

確かに、俺は人から答えが聞ける時は、自分で考えずにすぐ聞いてしまう癖があった。

「それ、頭の良い奴に誘導される可能性があるから直した方がええで。特にこれからはな」

「わ、わかった……気を付ける」

「とりあえず、自分で軽く考えてみ」

小野に促され、自分なりに思考を巡らせてみる。

……そうか。なんとなくわかった気がする。

「……新しい部員が入ってきたら、物資の貯蔵状況などから俺たちが事前に準備を整えてきたことがバレる可能性がある。だから、小野に新入部員をまとめさせることで既存のメンバーとグループを分け、こちらの内情を掴ませないようにするのが目的か。

既存メンバーに新入部員を率いさせないのは、新入部員たちがすでに不信感を抱いている可能性があるから。故に、傍目には同じ新入部員で、実際はその前から内々にメンバー入りが決まっていた小野にやらせる」

「正解。……かどろかには実際のところわからんけどな、少なくとも僕はそう考えた」

アンナの奴、あの一瞬でそこまで考えたのか……。

いや、違うか。元々、予言の発表後に入部希望が殺到することを予想していて、その中から自分に都合の良い手駒を見つけ出す計画だったのだろう。

そこにちょうど良い小野という駒が自分から転がり込んできたから、そのまま使うことにしたって感じか。

「しかし、そうなると部長ちゃんは、アンゴルモア時この学校を拠点にする気か？」

はア……ッ！？

俺は思わず驚愕の表情で小野を振り返ってしまった。

「その顔を見るに、どうやらそのようやな」

俺の顔を見て、ニヤリと笑う小野。

「どうしてそうなる？ いや、待て……わかった。そうか、そうだよな。新入部員を受け入れるってことは、そう言うことになるか」
「そう言うことやな。入部希望者を戦力化する気が無いならそもそも入部させなきゃ良い。そしたら事前に情報を掴んで準備していたことが露見するリスクもない。それを、リスクを背負ってでも入部させるってことは、校内の冒険者たちのコントロールをしたい証拠。つまり……」

「学校という集団そのものの勢力化が目的。アンゴルモアが始まれば必然的に校内の冒険者たちの発言権も上がる。その大多数をあらかじめ抱き込んでおいてしまえば、その他大勢の生徒のコントロールもできるってわけか」

「もちろん、学生が校内にいる日中に事が起きればって話やけどな。それでも、事前に準備しておいて無駄にはならへん。どうせ、冒険者部の受け入れの有無にかかわらず、予言が発表されれば校内の冒険者数も増えるんや。なら、みすみす別勢力を校内に作らせるくらいなら、最初から取り込んでしまえっちゅう話やな」

……アイツめ、何が勢力作りの話は忘れてくださいだ。思いつきりそのために動いてるじゃねえか。

アンナの意図がわかり、俺は思わずニヤリと笑ってしまった。
人によっては騙された！ と憤るのかもしれないが、俺は逆にこの強かさが頼もしかった。

思い返せば、昨日の会議は最初から学校を拠点とする結論ありきだったように思える。

もつとも、部員たちが出来るだけ少数精鋭での行動を望んだのなら学校の勢力化も諦めたのだから、日ごろから部員たちの様子に気を配るようになっていた……と言っていたアンナのことだ。俺た

ちの性格も把握した上で、この計画を立てたのだらう。

まあ、安全第一の第一方針に反しないうちは、好きに二鳥目、三鳥目を狙えば良い。

それぐらいの方が、リーダーとして相応しいというものだ。

「……ま、そういうことなら、今から準備しとくわ」

「準備つて、何するんだよ？」

「ま、色々や。今のままやと、僕もちよっと冒険者部と近すぎるかな。今の内に二軍のひな型を作っておく必要があるやろ？」

二軍……新入部員グループのことが。

何をする気かわからんが……。

「冒険者部が事前に準備を始めてることがバレるような真似はすんなよ。……アンナはお前が思ってるより怖い女だぞ」

「わーっとる！ ま、二軍については僕に任しとき！」

小野は自信ありげに胸を叩き、そう笑うのだった。

放課後になると、俺たちはさっそく迷宮の攻略に入った。

ボディーアーマー姿となって屋上のダンジョンマートへと向かう俺たちを見て、まだ校内に残っている生徒たちが俄かにざわめく。

「おい、見るよ、アレ」「何かスゲー格好だな。軍隊みてえだ」「あの赤毛の娘、めっちゃ可愛くね？」

「あ、神無月先輩だ。やっぱカッコイイ、モデルみたい」「アレ、神無月先輩がリーダーなのかな？ プロだし」「いや、なんかあの

赤髪の娘が部長ってさ」「え〜？　なんで？」「知らなーい。なんか凄いいお金持ちの娘らしいし、それでじゃね？　スポンサーとか？」「ソントク？　ってヤツ？」

「あれ、学校に出来た迷路を攻略するのかな」「ウチの学校の迷路ってCランクだろ？　ってことはアイツ等みんなプロなのか？」「プロなのは神無月だけじゃなかった？」「ふうん、プロが一人でも一緒に居れば、Cランクに入れるようになるとかそんな感じなんかな？」「たぶんそうじゃね？　プロチームって、四ツ星以上は一人か二人であとはほとんど三ツ星って聞いたことあるし」

「つか、聞いた？　C組の藤原さん、神無月先輩に告ったけどフラれたってさ」「聞いた聞いた！　神無月先輩は、所詮は雰囲気美人の藤原さんレベルじゃ無理でしょ」

「えっぐ〜。辛辣過ぎっしょ。ま、でも確かにね。あの赤髪の娘クラスじゃないと付き合ってもコンプレックスで潰れそう」「あのレベルとなると、隣に立つのはちょっと……ね。遠くで眺めてるだけで満足って感じ」「ね、目の保養〜」

「あ〜あ、俺も冒険者部に入れてもらえねーかな。金欲し〜」「無理無理。冒険者でもないのにどうやって入るんだよ」「そこはホラ、プロならDランクカードも余ってるだろうしさ。一枚ぐらい貸してもらおうかさ」

「そこまで甘くねーだろ。お前みたいに考えた奴が、冒険者部を作るって話になった時殺到したらしいけど、全部落とされたらしいぜ」「あ〜、やっぱそうか。大学のサークルとかだとそういうサービスもやってるって聞いてワンチャンって思ったんだけどな」

「つか、一応冒険者の奴も落とされたらしいから、ハードル高めなんだろ」「あー、プロが在籍するレベルだもんな。北川もTV出てくるくらいだし、ガチ勢ってことか」「……北川と言えば、アレがめ

「つちやデカイってマジなのかな」

「……ってか、今気づいたけど、なんか一人平凡なの混じってね？
他みんな美形なのに」「あの人も冒険者としてかなり凄いらしい
よ。大会で何回も優勝してるし、ホラ、例の事件の犯人も捕まえた
らしいし」

「それ、神無月先輩がって話じゃなかった？」「いや、あの人も……
……ってか冒険者部みんなで捕まえたってさ。だから、誰がって話じ
ゃないっばい」

「へえ、ってか詳しいね。もしかして、ファン？」「……うん、
まあ、ちょっとね、ちょっと」「ええ……？ マジか……」

複数人の生徒たちが、同時に思い思い話しているせいで、俺たち
のことを噂していることはわかるが、その内容まではわからない。

たまにカクテルパーティー効果で自分の名前が出た時だけ局所的
に耳に入ってくるくらいだ。

それでも、全体的に雰囲気としては悪い物ではないのは肌で感じ
取ることができた。

割合としては、好奇心が四割、羨望や嫉妬が三割、好意よりの無
関心が二割、残りは……無責任な噂話や邪推などの様々な悪感情の
ブレンドと言ったところだろうか。

そんなようなことを考えながら、ダンジョンマートを通り、ゲー
トの部屋へと入る。

ゲートのある部屋には、一週間前にはなかった頑丈そうなコイン
ロッカーが設置されていた。

……大方部室の改装のついでに突貫工事で設置されたのだろう、
と心なしかドヤ顔をしているアンナをみんなでスルーしつつ、ライ
センスやスマホなどの電子機器を預け、ゲートを通る。

迷宮へと入ると、俺たちはさっそく各々のカードを召喚し始めた。

……さあ、いよいよ新たな蓮華のお披露目だ。

「うん？ ……マロ、蓮華ちゃんのその姿は？」

蓮華の変化に最初に気付いたのは、師匠だった。

「ああ……ようやく吉祥天にランクアップさせたんだ」

俺は、できるだけ自慢げに見えるようにニヤリと笑って師匠へと答えた。

「それは……おめでとう。でも、一体どうやって？」

師匠は一瞬絶句し、すぐにそう問いかけてきた。

まあ、当然気になるわな。

Bランクカードともなると、そこら辺の迷宮でドロップしました、とはいかない。

どうやって入手したのかが気になるのは、師匠じゃなくても当たり前のことだ。

アテナの時は、直前に大金が入っていたのと、一目で訳アリ品とわかる容姿だったため、深く追及されなかったが、吉祥天に関してはそうはいかない。

俺が、蓮華のランクアップに訳アリ品を使うはずがない、と師匠たちも良く知っているからだ。

もちろん、ちゃんと言い訳は用意している。

当初は蓮華のお披露目からの能力バラしを予定していたから、特に言い訳など考えていなかったのだが、昨日秘密を話すのは当面アソナだけと決めてから、二人で軽く打ち合わせして、それなりの言い訳を考えていた。

それはズバリ、キマリスと吉祥天をトレードした、というものだ。

これからの学校の迷宮攻略において、カーバンクルの捜索ができるキマリスは必須のカードである。

そのキマリスにトレードの話が来ていることを知ったアンナは、キマリス自身を担保に父親のコレクションである吉祥天を買い取って、それをキマリスとトレードした……というシナリオだ。

アンナパパは、娘がアンゴルモア時に別行動を取ることを反対しているらしいため、微妙に苦しい言い訳ではあるが、キマリスを担保とすることで何かと暴走しがちな娘の手綱を握りたいのだろう……とアンナ自身に説明させることでなんとか説得力を補強する作戦だった。

その代わりに、担保扱いとなるキマリスは、戦闘に参加させることができず、ガーネットの探索要員としての扱いのみとなるが、まあ、やむを得ないだろう。

ちなみに、キマリスと吉祥天だと女の子カードであることを差し引いてもキマリスの方が若干お高い——というよりもBランクカードともなると女の子カードだからと価値が三倍になったりはない——上に、今後眷属召喚持ちはほとんどん価値が上がっていくということ、しばらくアンナの分のガーネットの配分を俺の方に回す、ということになっていた。

もちろん、表向きそういうことにするだけで、配分についてはそのままだ。

「ああ、それは……」

「——もしかして、レースの時のドロップですか？」

「……！？」

思わず、ギョツとして彼女の方を見た俺を見て、織部は得心したように頷いた。

「やはり、そうでしたか」

「……どうしてそう思ったんだ？」

こうなれば誤魔化すことは出来ないだろうと、俺は織部へと素直に問いかけた。

もしも、俺が気付いていないだけでカメラに映っていたなら大惨事だからだ。

「いえ、この前デー……映画を見に行った時、先輩の態度から何となくそう思ったので」

「……マジか」

アンナといい、織部といい……ウチの部の女子たちは洞察力が高すぎるだろ。

それとも俺が特別わかりやすいのか……？

内心で頭を抱えつつ、俺は頷いた。

「……ああ、実はレースの時に吉祥天を手に入れてたんだ」

「色々と気になることはあるけど……なんでそれを今まで隠してたの？」

師匠が問いかけてくる。またも当然の疑問だ。

だがこれについては言い訳する必要もない。普通に説明すれば良いだけだ。

「隠してたっていうか……言う必要もなかったから、かな。霊格再帰があるからランクアップさせるよりそのまま使う方がロストの時のコストも低かったし」

「ああ……確かに」

と、納得したように頷いた師匠だったが……。

「でも、じゃあなんでこのタイミングでランクアップさせたのかな？ マロが言うようにランクアップはリスクの方が高いと思うんだけど」

純粋な疑問なのか、あるいは何か疑いを持っているのか……。師匠は、妙にしつこく追及してくる。

「それは色々と理由があるけど、一番の理由は……蓮華に零落スキルが残るかが知りたかったからだな」

これも、本当のことだ。

「今回のアングルモアでは、Aランクモンスターも出現する確率があるだろ？ その時に、一時的とは言えAランクになれるカードがあれば心強いと思ってさ」

「随分なギャンブルな気もするけど……それで、結果は？」

俺は、その質問については答えず、ただニヤリと笑ってみせた。

「まさか……残ったんすか！？」

俺の笑みを見て驚愕の声を上げたのは、黙って成り行きを見守っていたアンナだった。

昨日俺から運命操作のことは聞いた彼女であったが、それだけに新たなニュースに驚きを隠せなかったのだろう。

「き、キーアイテムは？ 霊格再帰まで至ったんすか！？」

「いや、まだそこまでは……ランクアップさせたのは先日だし、なにより今となつちやAランクへのキーアイテムは、下手なBランクより高かったりするからな……」

「そう……ッスか」

俺の返答を聞いたアンナは、自分が逸っていたことに気付いたのか、幾分かトーンダウンした後。

「霊格再帰先の見当はついてるんスか？」

「まあ、一応な。Bランクともなると、ランクアップ先も少なくなってくるし」

BランクからAランクにランクアップさせた例が少なく、吉祥天の霊格再帰例がないため推測となってしまうが、これまでのランクアップの基本ルールに沿うならば、吉祥天の起源や権能と共通点を多く持つ神がランクアップ先となるはずだ。

例えば同じ二相女神で権能にも共通点の多いイシユタルとエレシユキガルなどだ。

「イシユタル……うーん、思い当たるキーアイテムはないッスね。

……なんだろ、シユメール神話は詳しくないからなあ」

ブツブツと呟きながら悩むアンナ。

「まあ、此処でいま考えても仕方ないだろ。運が良ければアンゴルモアまでにめぐり合うし、運が無ければめぐり合うこともできない……そういう代物だろ、このクラスのキーアイテムはさ」

「……そうッスね。『運良く』手に入ることを祈るしかないッスね」

アンナが一瞬だけ、皆に見えないように目配せをしてくる。

「で、今日は……というか今日からの攻略はどういう予定なんだ？」
「どんなくなって言われると困るんすけど……まあ、普通に攻略していきますよ。まあ、出来るだけ効率をよくするために、工夫はしようと思いますが」

「具体的には？」

「とりあえず、スキル封印の階層までは皆で一緒に行きます。移動は騎獣に乗って、戦闘は全部回避ッスね。スキル封印の階層まで来たら、先輩は一階層に戻ってガーネットの回収。他の部員は、レポートの罫がないルートのマップングです。Cランク階層まではこの繰り返しッスね。そこからはさすがに集団行動ッス。目標としては一月に一周ッスけど……厳しいようならCランク階層で遭難を一枚くらい使うかもです。とにかくガーネットの回収のために周回数を増やしたいですし」

ふむ……と皆で頭の中でシミュレーションしてみるも、特に粗は見つからない。

一周目であった夏休みの攻略より洗練されている。

「今回は遭難のカードを使うのはCランク階層からなんだな」

「そりゃそっちの方が効率良いッスからね。前は、Dランク階層にどれくらい時間が掛かるのかわからなかったのと、Cランク階層は出来る限り多く体験したかったんでDランク階層で遭難を使いましたけど、今回はできればCランク階層の方をむしるスキップしたいんで」

もちろん、校長との期限が間に合わないようなら赤字覚悟で遭難を使いまくる予定でしたけど……と付け加えるアンナに、なるほどと頷く。

冒険者としての経験値稼ぎをメインとした夏休みと、収益重視の

これからの攻略の違いというわけか。

「異論も無いようですし、そろそろ攻略に入りましょうか」
『了解』

――その後は特にトラブルもなく順調に階層を踏破し、スキル封印のある七階層まで到達したあたりで、夜九時を回っていたこともあり、その日の攻略はお開きとなった。

翌日は、スキル封印の階層の攻略を行う冒険者部のメンバーと別れ、一人カーバンクルガーネットの回収を行う。

その過程で、蓮華の戦闘力も成長限界の3400まで上がった。カーバンクルの経験値は、回収系の密かな特権の一つであった。

翌日も、その翌日も……。

放課後は、毎日夜10時までコツコツ迷宮に潜り、休日は泊まり込みで一気に攻略を進め……。

そして、あっという間に一か月が経過した。

第十二話 頭の良い奴の道具じゃ困るんだよ（後書き）

【TIPS】アンゴルモア時のガイドライン

アンゴルモア時は、決してパニックにならず、落ち着いて行動してください。

ご自宅にシエルターがある方は、シエルターで自衛隊か四ツ星以上の冒険者が迎えに来るまで待機を、ご自宅にシエルターがない方や外出中にアンゴルモアが発生してしまった方は、最寄りの避難所へと速やかに避難をお願い致します。

避難所は、可能であれば最寄りの冒険者ギルドへ、ギルドが遠い場合は、警察署や大きな病院、指定のホテル、学校、公民館などへの避難をお願いします。

アンゴルモア中は、機械破壊による事故を防ぐため、交通機関は使えなくなります。車やバイク等での移動も極力避け、無理に自宅に帰ろうとせずに、とにかくまずは身近な避難所に向かってください。

避難所には、受け入れ人数に応じて最低一枚以上のクランクカードを配備しており、また食料等もカード化して備蓄しております。

そのため食料や着替え等の持ち込みは必要ありませんので、ご安心ください。

第十三話 大人たちも頑張っていたんだよ（前書き）

第十三話 大人たちも頑張っていたんだよ

一一一十月一日。

「二年D組。10時から劇やっています！ 無料ですので、よろしく
お願いします！」

「一年A組、カジノやってまーす！」

「三年B組、メイド喫茶やっています〜！ 可愛……くはないかもし
れないけど、JKにご奉仕して欲しい方はどうぞ〜！」

この日は、ウチの高校の学園祭だった。

ウチの高校では、特に入場チケットなどは配布していないため、
近隣の住民でも自由に入れるようになっていた。

そのため、正門近くでは各々のクラスの呼び込み係が声を張り上
げて客引きを行っており、その脇には焼きそばやチョコバナナ、綿
菓子などの定番の食べ物売る屋台なども並んで、かなり本当のお
祭りに近い賑わいとなっていた。

そんな中、俺はというと……。

「二年C組、クレープ屋やってまーす！ 椅子に座ってお休みにな
りたい方は、ご休憩いかがですか〜」

『クレープ……どうぞ』

『クレープ美味しいですよー！ 食べたことないけどー！』

カードギアでイライザやメアのビジョンを出して客引きをやって
いた。

なぜ俺が客引きをやっているのかというと、カードギアという客

引きに使えそうなアイテムを持っていると……ぶっちゃけ、事前の準備にほとんど参加しなかったからだ。

これはどこの学園祭でも同じだと思っただが、学園祭での役割は準備と当日の係に分かれていることが多い。

皆できれば当日は色んな所に遊びに行きたいわけで、当日の係は準備にあんまり貢献しなかったヤツから割り振られていく。

迷宮攻略で碌に準備に参加しなかった俺が、当日の係を割り振られるのは当然のことであり、こればかりはカーستトップのパワーを以てしてもどうすることもできない。

そのため、普通の奴は二日間の内どちらか一日、かつ午前か午後のどちらかの持ち回りなのに対し、俺は二日間とも午前と午後の両方とも客引きをやらされることとなっていた。

「おお、これって噂のカードギア？ 凄いね」

「どうも。二年C組でクレープ屋やってるんで、どぞー！」

「もしかして、キャットファイトの北川選手？ レースでの優勝おめでとございます！ いつも応援してます！」

「応援ありがとうございます！ よければ二年C組でクレープ屋やってるんで、どぞー！」

「あの座敷童の子は出さないの？」

「アイツはこういうの大っ嫌いなんで……。よければ二年C組でクレープ屋やってるんで、どぞー」

俺の客引きはやはり目立つのか、他のクラスの客引きよりも明らかに注目度が高い。

声を掛けられることも多く、中にはモンコロでの俺のファンなんかもいて、そう言う人たちにはイライザやメアと軽く会話させてあげたりとかしてファンサービスしてみたりもした。

ちなみになぜイライザやメアなのかというと、蓮華はこういうこととは端から拒否、アテナはあまり大っぴらにできず……というわけ

で、イライザとメア、ユウキと鈴鹿、デュラハンとドラゴネットのコンビでローテーションを組んで客引きを行っていた。

当初はオードリーもローテーションに組み込んでいたのだが、リアルメイドであるオードリーの存在は大いに人の目を引き、近くのかわいい子はいないらしい）メイド喫茶の客引き担当からの猛抗議を喰らい、メイドっばいカードは敢え無く出禁となった。

「……さすがに、北川くんのカードギアは凄いな」

客の波が退いて来たところで、クラスメイトの加藤が声を掛けてきた。

同じくカードギアを持っているということ客引き担当となっていた彼だったが、登録しているカードの差からか俺ほどの集客力はなかった。

そのためか、こちらを見るその表情は、やや複雑なものを滲ませているように見える。

まあ……普段目立たない加藤としては貴重な活躍の場だったのが、俺に搔つ攫われたようで面白くないのだろう。そこらへんは、元々日陰の存在だった俺としても理解できるところだ。

「俺のは、モンコロでの補正もあるからなあ……」

「確かに、北川くんは有名人だもんね」

それで納得したのか、眼から複雑な色が消える加藤。

カードギア抜きにしても、俺自身が今やそここの知名度を誇る。普通に街を歩いている分には、特徴のない顔立ちもあって気付かれることは少ないが、こうしてカードギアでカードたちのビジョンを出していれば、『あの北川歌麿』と気付く人も結構な割合でいる。カードギアの物珍しさに加えて、持ち主の知名度も加わるのだから、加藤と集客力に差が出るのは当然のことだった。

「ところでさ、冒険者ってどんな感じ？ やっぱ危険だったり大変だったりするのかな？」

「……興味あるのか？」

そう問い返すと、加藤はちよつと照れ臭そうな顔で頭を掻いた。

「まあ、ちよつとね。カードギアを手に入れてから興味が出てきてさ……」

……やっぱこういう奴が出てきたか。

とりあえず当たり障りのない答えを返しておく。

「うーん、危険じゃないとは言えないし、大変かどうかは人によるけど……少なくとも俺は冒険者になったことは後悔してないな」

「そっか……」

そこで加藤はやや挑むようなそぶりを見せ……。

「ねえ、北川くんってカードのレンタルとかやってる噂で聞いたんだけど」

ああ……なるほど、そういう系の話か。

まったく、どこで聞いたのかは知らないが……。

「あー、すまん。ちよつと前はそういうことも少しだけやってたんだけど、今はやってないんだ」

「……どうしてか聞いても良い？」

「簡単に言うと、貸し出せるカードがないんだよ。今まではソロでやってたから余ったDランクカードとかもあっただけけど、今はチ

ームでやってるからドロップもチームで一纏めにしててさ。戦利品の清算とか分配は、税金の関係で新年にまとめてやることになってるから……ぶっちゃけDランクカードに関しては、ソロの頃より自由になるカードが少ないんだ。だから、今はレンタルとかする余裕はちよつとない」

「ああ、そうなんだ」

もちろんこれは、加藤の話を通る建前だ。

確かに当初は、税金のことを考えて年末に一括して戦利品の分配や清算を行う予定だった。

が、アングルモアがいつ起こるかわからない今となつては、年末まで戦利品を抱えている余裕はない。そのため、迷宮を一回踏破するごとに分配や売却をするシステムに切り替わっていた。

税金に関してはやや高くついてしまつが……来年も税金を払えるくらい社会が安定してくれているなら、それはそれで喜ばしいことだ。

よつて、今現在レンタルするカードに余裕がないのは事実だが、レンタル用のカードくらいすぐに……それこそ数日ほどで手に入るのである。

にもかかわらずこつという言い方をして遠回しに断つたのは、俺が使わないカードでもできるだけ家族用にストックしておきたいのとなにより高額なカードをレンタルするほど加藤のことを信用できないからだ。

正確に言えば、信用できるほど加藤のことを知らないから、と言うべきか。

加藤から話が広まつて次から次へとカードを貸してくれという輩が寄つてきたら面倒だからというのもある（……こつして加藤がやってきてる時点でこれに関しては手遅れな気もするが）。

とは言え、それをそのまま言つたら無意味に角が立つ。よつて、こつして遠回しに断つたというわけだ。

それに……。

「そういう話なら俺より小野に言った方が良いと思うぞ」

カードのレンタルという話なら、俺より良いところがある。

「小野くん？」

「ああ、アイツ、今三ツ星昇格試験のためにDランク迷宮に潜ってるから。多分、レンタル用のDランクの一枚か二枚か持ってると思う」

これは別に、小野に加藤のことを押し付けたわけではない。

小野自身から、カードのレンタルの話を持ち掛けられたら自分に回してくれと言われているのだ。

その思惑についてハッキリ聞いたことはないが、おそらくこれも「二軍の雛型を作る」という話と関係があるのだろう。

なお、三ツ星昇格試験にあたり、小野には、俺からCランクカードを一枚貸し出している。

冒険者部の誰も欲しがらなかったカードを一枚買い取り、それを貸し出したのだ。

購入代金に関しては、表向きはガーネット払いとし、実際にはアナナに渡したBランクカード……ディオニユソスの売却代金から支払われた。

これは、二週間ほど前に宝籤カードで引き当てたカードで、Bランクカードの中ではそれほど戦闘向きではないにもかかわらず、15億もの大金で売れた。

ディオニユソスの市場価格は、俺の記憶が確かなら一月ほど前まで7〜8億ほどだったはずなので、凡そ二倍ちかくに高騰していることになる。

おそらくその理由は、アングルモアを見据えた富裕層による需要

が増したためだろう。

ギリシヤ神話の酒神であるディオニユスは、極上の美酒を生み出す権能を持つのだ。

迷宮出現以前の話であるが、ロマネコンティの中には億を超える額が付けられていたものもあつたくらいだ。

アンゴルモアでの避難中、神が生み出すお酒をいくらでも飲めるとなれば、それくらいの金を出しても惜しくないという金持ちも多いのだろう。

ちなみに、貸し出したカードは、やまらのおろちである。

持ち逃げ……はさすがに心配してないが、万が一ロストされても痛くないカードとなると、これくらいしかなかったのだ。

なんせ、市場価格で一千万、チームからの買い取り価格で500万という破格の安さだったので……。

実質Dランクカード並みの値段で、能力はCランクカードでもそこそこと言う、レンタル用のカードとしてみれば最適なカードなのだ、やまらのおろちは。

「そっか、ありがとう。小野君に聞いてみるよ」

お礼を言って離れて行く加藤を見送る。

……ふう、これでこの一月で三人目か。

そのすべてがカードギア持ちというあたりに、カードギアが一般人たちに与える影響力を感じる。

校内ですらこれだ。きつとギルドの方では、毎日のように新規登録者がやってきているのだろう。

カードギアも順調に増産が進んでいるというし、これからも冒険者の数はどんどん増えていくに違いない。

もしかして、アンゴルモアさえ来なければ、そのうち国民のほとんどがカードの一枚や二枚は持っているという時代が来たのだろうか

か。

そこで、ふと気付く。

そうか……国の狙いはそれだったのかもしれない。

携帯端末の所持率は、国民の九割近い。もしも携帯の代わりにカードギアをみんなが使うような日が来れば、国民のほとんどが最低でもカードを一枚以上持ち、アングルモア時にも多少の自衛を誰もができるようになる。

そうなれば、フェイズの進行も遅くなり、その間に自衛隊がアングルモアを終息させられる可能性も高まる……。

たとえアングルモアが不可避のもので半年ごとに定期的に起こるようになったとしても、国民一人一人がDランクカードを持ち、モンスターに対処できるようになれば、フェイズもそれ以上進まず、それはアングルモアの克服を意味する。

アングルモアも、毎年来る大きな台風程度 of 感覚になる日が来たかもしれない。

そこまで考えて、首を振る。

いずれにせよ、仮定の話だ。国民のほとんどがカードギアを持ち、アングルモア時に自衛ができるようになるまでには、時間が足りなすぎる。

人類は、間に合わなかったのだ。

それだけが、事実だった。

「さて、それでは皆さん心の準備は大丈夫ですか？」

迷宮の最下層。古代ギリシャを思わせる白亜の神殿のフィールド、

その安全地帯にて。

車座に座る部員たちの顔を見渡しながら、アンナが問いかける。俺たちは、それにただ無言で頷き返した。

学園祭が終わり、その翌日の休み。

俺たちは約一か月越しに主に挑もうとしていた。

前回の攻略では、結局本来の主ではなく特殊型モンスターのクダンが出現してしまったため、これがCランク迷宮における初めての主戦となる。

すでに偵察により、主の正体も判明している。

黄金色の鎧を身に纏い、両手に巨大な槍を二本持った偉丈夫……ギリシャ神話の戦神、アレースだ。

フィールド効果については、その詳細は判明しなかったものの、特にこちらにデバフが掛かっている様子もないため、主を強化するタイプのモノと思われた。

「しかし、いい加減休みが欲しいな。体力的なアレは魔法やポーションでなんとかなるにしても、さすがに精神的にきつい」

この一ヶ月間、俺たちは一日の休みも無く迷宮に潜り続けていた。昼は学校の授業をちゃんと受け、放課後は毎日夜十時近くまで迷宮に潜り、休日は泊まり掛けで攻略を行う日々。

さすがに一ヶ月もの間、休みもなく毎日過酷なCランク迷宮に潜るというのは、いくら魔法による回復やポーションがあっても精神的に辛いモノがあり、心が休息を求めている。

俺の愚痴に、他の面々も頷いているのを見て、アンナも少し考え込むような仕草を見せ……。

「そうツスね。じゃあ、今日首尾よく主を倒せましたら、明日の日曜は丸一日休みにして、以降は日曜と木曜は休みにしましょうか」

「ふむ……日曜と木曜にした理由は？」

織部が問いかける。

「日曜の休みは、一日完全リフレッシュの日があった方が良くから。木曜は金曜と土曜の泊まり込みに備えてツスね」

なるほど、休日が一日丸ごと休みになるのは有難いな。
だが……。

「日曜を丸ごと休みにしてペース的には大丈夫なのか？ 正直、休日
が攻略のメインだろ？」

「そこらへんは、遭難のカードを上手く使っていこうかな、と。正直、このままだとスキル封印の階層はコスパが悪すぎますし、なんか思ったよりも遭難のカードのドロップ率が良いんで」

確かに、スキル封印の階層は、この迷宮の攻略において完全にネックとなっていた。

今の俺たちは、夏休みの攻略でCランク迷宮に多少慣れたこともあって、Cランク階層までは凡そ一週間、Cランク階層は平日で一階層、休日は二〜三階層のペースで進むことが出来る。

それでもここまで来るのに約一ヶ月もかかってしまったのは、スキル封印の階層で平日の攻略が完全に足止めされてしまったせいだった。

スキル封印の階層の踏破は、今の俺たち（……と言っても俺は未参加だが）でも、丸一日は掛かる。

Dランク階層までならまだ平日でも一日で踏破できるから良いが、Cランク階層は平日では踏破できないのが痛すぎた。

途中からはスキル封印の階層の平日の攻略は諦めて、戦いやすい階層でドロップ目当てに戦っていたが、その時間を遭難のカードで

短縮して休日に充てる……というのは名案に思えた。

使用する遭難のカードについても、今回の迷宮攻略だけで三枚もドロップした。

すでにいつアンゴルモアが起こっても良いように階層数分の遭難のカードは集めてあるので、今回手に入れた分は完全な余りということになる。

それをスキル封印の階層のスキップに使うというのは、普通に売るよりよほど有意義な使い方だった。

「それでは、そろそろ行きましようか」

休憩を兼ねた雑談が終わり、俺たちはカードを伴い安全地帯を出る。

——その瞬間、俺たち目掛けて無数の矢が降り注いだ。

だが、師匠の隣に立っていた美しい黒髪の鬼——後鬼が一歩前に出て、その手に持っていた鉄扇を一振りすると凄まじい風が起こり、矢をすべてはじき返してしまう。そればかりか、柱や通路の陰に隠れていたその射ち手たちまでも吹き飛ばしてしまった。

芭蕉扇。一度仰げば風を呼び、二度仰げば雲を呼び、三度仰げば雨が降るといふ効果を持つ魔道具だ。今回の攻略で得た戦利品の一つである。

突風で壁に叩きつけられた敵が、その姿を露わにする。

それは、肌も露わな格好をした美しい女戦士たち……アマゾネスたちだった。

神話上では、アマゾネスはアレースを祖とする部族とされている。そのため、アレースは自身の娘とされる三名のアマゾネスの女王

「――ヒツポリユテー、アンテイオペー、ペンテシレイアを呼び出すことができ、彼女たちもまた配下であるアマゾネスたちを無限に召喚できる眷属召喚のスキルを持つ。」

このアマゾネスたちは、そのアレースの軍勢召喚スキルによって呼び出された先兵たちであった。

『アテナ』

『わかっています。二ヶ！』

眷属召喚には、眷属召喚がセオリーだ。

アテナに命じられた二ヶが、戦車隊を呼び出していく。

他の部員たちもまた、各々の眷属召喚持ちのカードに命じ、それに続く。

英霊の戦車隊、黄泉軍や大蜘蛛、アルラウネ、邪悪な風貌の下級レッサー悪魔たち……。

この場における数の差は瞬く間に逆転し、一転して少数派となつてしまったアマゾネスたちに、二ヶの戦車隊を先頭に各々の眷属たちが突撃していく。

アマゾネスは、優秀なDランクであるが、こちらの眷属もどれもDランク。バランスも戦車隊と黄泉軍が前衛、アルラウネとレッサーデーモンが後衛とこちらの方が整っている。

今や数にも劣るアマゾネスに太刀打ちできるものではなく、容易く一蹴できる。

「……………ッ！」

「む……………！」

「――はずだった。」

だが、結果は逆。

アマゾネスたちの声にならぬ咆哮と共に、こちらの眷属たちが腕の一振りでも吹き飛ばされていく。

明らかにDランクの戦闘力を逸脱した戦闘力。これは……。

『アレースの軍神としての権能ですね』

アマゾネスの戦いぶりを見たアテナがつまりなそうに言う。

『なるほど……これが』

よく見れば、アマゾネスたちの美しい顔は獣のように歪み、その身体をうっすらと赤いオーラが覆っていた。

これは、狂化のスキルを発動している時の特徴だった。

アレースは、『城壁の破壊者』の異名を持つ神である。

アテナと同じギリシャ神話の軍神であるが、『都市の守護者』の異名を持ち、戦場における勝利や栄光を司るアテナと異なり、アレースは戦場における破壊や狂気を司る。

そのため、そのスキルも守りのアテナに対し、より攻撃的というか荒々しいものとなっている。

アレースの持つ『城壁の破壊者』と『アレースの帯』は、味方に戦う力と、狂気を与えるスキルだ。

具体的に言うと、味方全体にレベルアップの魔法を掛け、さらに戦士、狂化のスキルを付与することができる。

狂化は、劣化ベルセルクと呼ばれるバーサーカーが持つスキルで、戦闘を終了するまで暴走状態となり徐々に生命力が減っていく代わりに、全ステータスが三倍となるスキルだ。

生命力が尽きるまでに敵を倒しきれなかった場合、そのままロスとしてしまったりリスクを背負ったスキルだが、全ステータスを三倍と

いう上昇量は凄まじい。

レベルアップの魔法で、眷属体でありながらカードの成長限界と同じ戦闘力まで引き上げ、戦士のスキルで戦うための術を与え、狂化のスキルでそのステータスを三倍にする……。

このスキルにより、アレースは眷属たちの実質的な戦闘能力をワンランクアップさせることができると言われていた。

狂化によるロストのリスクも、いくらでも呼び出せる眷属なら大したデメリットとはならない。

これほど眷属召喚と相性の良いスキルも無いだろう。

まさに軍神と呼ぶに相応しい力だ。

神話上では人間のディオメデス相手に負けたり、ギリシャ神話一の暴れん坊ヘラクレスに半殺しにされていたりとあまり良いエピソードの無いアレースであるが、カードとしては非常に優れた神なのである。

……とはいえ、如何に強力なスキルとはいえ、対処の方法はある。

「……オードリー！」

俺は、敢えてリンクではなく肉声でオードリーへと呼びかけた。

俺の呼びかけに、後方から支援を行っていたオードリーが頷き、マヨヒガを展開する。

俺の声から一連の流れを注視していた部員たちは、それでこちらの意図を察し、速やかにマヨヒガへと退避していった。

眷属たちを殿に置く形で、無事マヨヒガに全員入った俺たちは、そこでホッと一息ついた。

「ふう、あとはアレースのスキルの効果時間が切れるのをここで待つだけだな」

アレースのスキルは確かに強力であるが、その効果時間は一時間

と短い。

ならば、こうして安全な空間に閉じこもってスキルの時間切れを待てば良いだけの話だった。

ちなみに、安全地帯や他の階層に避難しないのは、そうすると主の生命力やらスキル回数やら諸々が全回復してしまうためだ。

そのため、あくまで同じ階層のバトルフィールドで時間切れを待つ必要があった。

そういう点でも、比較的安全に時間切れを待てる異空間型カードはプロの必需品と言えた。

「……もつとも、まだ気は抜けないツスけど」

僅かに緩んだ部員たちの意識を締め直すように、アンナが言う。

確かに、このヒキコモリ戦法には、二つほど懸念があった。

一つ目は、主用のフィールド効果によって、アレースのスキルの効果時間が延長されている可能性があること。

主専用のフィールド効果の中には、スキルの効果時間を延長したり、スキルの回数制限を無限にしたりといったモノがある。

デバフの類が特にない今回の戦闘では、特にその手の効果が選ばれている可能性が高かった。

そして、もう一つが……。

「ツ……！？ ご主人様！」

オードリーの警告と同時に、マヨヒガ全体が大きく歪むほどの衝撃が俺たちを襲った。

壁に大穴が空き、粉塵が視界を阻害する。

「おいおい、展開がはえーな……」

軽くむせながら、ぼやく。

アマゾネスたちの強化のタイミングといい、俺たちが閉じこもって即襲撃してくることといい、敵はどうやらかなりせっかちな性格のようだった。

……二つ目の懸念が、これだ。

アレースの『城壁の破壊者』は、相手の『陣地』を破壊して侵入できる効果を持つ。

縄張り、結界、神殿、城塞……そして異空間。

アレースの前に、破れぬ陣地構築系のスキルは無い。

例外は、迷宮の安全地帯、それとアテナのアイギスくらいか。

俺たちが、マヨヒガに籠り時間切れを待とうとも、かの戦神は我が物顔で乗り込んでくることができるのであるのだ。

粉塵が晴れ、乱入者がその姿を現す。

四頭立ての戦車に乗った鎧姿の美青年……主であるアレースの登場だった。

第十三話 大人たちも頑張っていたんだよ (前書き)

第十三話 大人たちも頑張っていたんだよ

『オードリー、念のためにどこかに隠れている』

アレースの姿を確認すると、俺は即オードリーを後方へと下げた。アンゴルモアが迫る中、貴重な異空間型スキル持ちをロストさせるわけにはいかない。

『かしこまりました。ご武運をお祈りします』

俺の命を受け、オードリーが一礼して姿を消す。

さて……こつも早くアレースが突っ込んでくるのは些か予想外だったが、これはこれで悪くない。

軍勢召喚持ちにやられて最も嫌なパターンは、姿を隠されて延々と眷属を呼ばれることだからな。

向こうが、わざわざ姿を現してくれるなら、むしろ好都合。

まずは、アレースと共にマヨヒガに入り込んできたアマゾネスたちの駆除からだ。

『蓮華！』

『了ー解ッ！』

蓮華が、半身である黒闇天を呼び出す。

その姿は、かくれんぼのスキルで隠されているため見えないが、リンクで繋がっている俺には確かにその存在が感じられる。

マヨヒガの中に、漆黒の呪いの雨が降り注ぐ。
ありとあらゆる呪いが凝縮された雨は、まるで溶かすようにアマ
ゾネスたちを消していく。

強力な狂化のスキルであるが、その弱点は衰弱や毒、呪いといっ
た生命力を削っていくモノと相性が悪いことだ。

ただでさえ生命力が削られる中、それを加速させてやればあつと
言う間にロストさせられる。

効果中無敵状態となれるベルセルクのスキルとは、そこが違うと
ころであり、バーサーカーが劣化ベルセルクと呼ばれる所以だ。
ゆえん

アレースもまた、身体を毒と呪いに蝕まれ、苦悶の声を上げる。
それを確認し、俺は小さくほくそ笑んだ。

……レースの時にすでに吉祥天と黒闇天を手に入れていたのを織
部に見抜かれた時は、一体どうなるかと思っただが、こうして大つぴ
らに黒闇天が使えるようになったのは僥倖だった。

黒闇天を呼び出す時のエフェクトがカード召喚のそれと異なるた
め、召喚する時に注意する必要があるが、それもかくれんぼで姿を
消した状態で呼べば問題ないしな。

マヨヒガ内のアマゾネスが粗方消え去ったところで、オードリー
に命じさせて大穴の空いた壁を閉じさせる。

これで新たなアマゾネスは、正面玄関以外から入って来られない。
さらに、マヨヒガは、すでにアレースの襲撃に備えその内部構造
を変化させ、玄関からこのホールまでの道筋を複雑に迷路化させて
いる。

外で召喚済みのアマゾネスたちがここまでやってくるには、今し
ばらくの時間が掛かるだろう。

もちろんアレースが再び壁をぶち破れば、そこから新しいアマゾ
ネスたちが入ってこられるだろうし、この場で眷属を再召喚するこ
ともできるだろうが……その時間は与えない。

アレースが新たな行動を起こす前に、全員で総攻撃をかける。

たとえば主補正とフィールド効果によって強化されたBランクカードであるうと、総勢三十枚を超えるカードの集中砲火に耐えられるものではない。

特にこのホールは、アレースの突入に備えて包囲網が敷けるよう内部構造を弄ってあるのだ。

アレースがそのスキルでこちらの『障地』……有利な効果を破壊しようとも、『地形』という有利までは無視できない。

蓮華を始めとする高等攻撃魔法持ちの重力魔法により地面に押さえつけられたアレースへと、容赦なく降り注ぐ攻撃・状態異常魔法と弓矢の雨。

みるみるうちに削られていくアレースの生命力に、俺が内心で勝利を確信したその時。

「む……！」

ドクリ、と空間が脈動した。

同時に、アレースが急速に膨張していく。

マヨヒガの天井を突き破り、どこまでも高く伸びていくアレース。もはやこちらからは、膝をついた下半身しか見えず、その脚すらも高層ビルのように太く高い。

「巨神化か！」

巨神化。状態異常に弱くなる代わりに、生命力、耐久力、筋力を数倍するという巨人化の上位スキルだ。

強化の倍率を上げれば上げるほどその身体も大きくなっていき、最大である十倍まで強化した時の身長は、元の百倍ほどにもなる。

元のアレースの身長が2メートルほどだったから、最大まで強化しているならば全長は約200メートルにもなる。その圧倒的な体格差は、そのままリーチと攻撃範囲の差となっており、ただの張り手、足払いが全体攻撃になるほど。ただでさえステータスが強化されている主の生命力やら耐久力が十倍になるといふのは、絶望的である。

———ただし、アレースが男でないならば、とつぐが。

巨神化は確かに強力なスキルであるが、デカくなればなるほど状態異常に弱くなるという致命的なデメリットがあった。

俺から見れば、先ほどまでの通常形態の方がやりにくかったくらいだ。

『作戦通りだ！ やるぞ！』

『おー！』 『りょーかーい！』 『はあ、しょうがないなあ……』

友情連携——『真吉祥天の真言』 × 『真黒闇天の真言』 × 『可愛さ余って憎さ百倍』 × 『巫山の夢』

神の属性を持つカードは、特にスキルを持たずとも状態異常に耐性を持つ。

それに加えて主補正とフィールド効果で強化されているアレースは、男性特攻で耐性貫通を持つメアであっても確実にスキルが通る保証はない。

しかし、自らのスキルにより状態異常耐性が低下した今ならば話は別。

そこへ、真スキル化した吉祥天と黒闇天の権能スキル、鈴鹿の呪術強化とモリモリにバフを盛っているのだ。

ここまですれば、いくら主といえども確実に通る。

通らなかつたとすれば、それはもうフィールド効果で状態異常そのものが無効化されていた場合のみ。

しかし、それは無いことは、ここまでの戦いで確認済みだ。

ぶつちやけ、ここまでの戦いは、アレースが状態異常無効のフィールド効果を受けているかを確認するためのモノだった。

が、ここで誤算が一つ。

それは、巨神化アレースの身体の大きさだった。

「マズイ！ アレースが倒れるぞ！」

グラリと身体を傾けたアレースを見た師匠が、顔を青くしつっ叫んだ。

あの巨体の下敷きになったら、カードのバリアがあるとなかろうと一発で死んでしまう……！

俺たちは慌てて逃げだした。

アレースが、マヨヒガを潰しながら倒れる。

なんとか下敷きを免れた俺たちは、転倒の衝撃でアレースが目覚めないかじつと見守り……目覚める気配がないのを確認してホッと一息ついた。

「いやー、危なかつたツスね。アレースの巨体を計算してませんでした」

額の汗を拭いつつ言うアンナに、織部が冷や汗を浮かべつつ頷く。

「巨神化スキルのことは知っていたが、やはり知識と実際では大違いだな」

切れた緊張感の中、二人が軽く反省会に突入しかけていると、師

匠がパンパンと手を叩いた。

「ほらほら、まだ気を抜かない。アレースはほぼ倒したようなものだけど、召喚されたアマゾネスは健在だよ。マヨヒガが半壊した今、どこからでも入り放題なんだから」

師匠の注意に、女子二人が『あつ……！』と慌てて周囲の警戒をした。

ちなみにだが、俺はちゃんと周囲の警戒をしていた。

これが、後輩二人との経験の差だ……と言いたいところだが、以前同じように師匠に注意されたことがあっただけである。

その後、続々と現れだしたアマゾネスの始末をしながらアレースの様子を窺っていると、ようやくメアがアレースの生命力を削り切った。

あと一口でアレースを食い終わるところでストップさせ、アンナへとアイコンタクトを送る。

それを受けてアンナが頷き返すのを確認し、俺は蓮華とパーフェクトリンクを行った。

――――― 迷宮攻略中、運命操作を使うに値する主が出た際は、運命操作を使うと決めていた。

何が出るかわからない宝籤のカードに対して、実際にその眼で見てもその価値を測れる迷宮の主をみすみす逃す手はない。

織部と師匠に運命操作のことを隠している現状、このアレースの所有権は冒険者部で共有のものとなってしまいが、仕方ない。これで冒険者部全体の生存率が高まれば、俺はそれでよい。

むしろ精神的には、こちらの方が楽ですらある。

アンナは、アングルモア後に正式に俺に所有権を移しても良いと言っていたが、これは隠し事をしているペナルティーみたいなもん

だ。
アレースは、アングルモア後もそのまま冒険者部の共有とするつもりだ。

さて、ドロップに必要な幸運量は……ガーンネット十四個か。

ほぼ吉祥天と黒闇天をドロップした時と同じ数。

特殊型での二枚同時ドロップも、単体でのドロップも同じドロップ率ということなのだろうか？

そんなことを考えながらも、ガーンネットの幸運を注ぎ込んでいくやがて、アレースが消え去り……。

「……や、やった！ ドロップした！ 皆さん見てください、カードがドロップしたツスよ！」

アンナが、歡喜の声を上げた。

裏事情を知っている俺からするとわざとらしいくらいの大袈裟な喜びようだ……。

「な、なに！？ ホントか、アンナ！？」

「え！？ ホントに？」

他の部員は特に疑問に思わなかったようで、というかそれどころではないようで、小走りにアレースのいたところへと走っていく。

俺もそれに「おいおい、マジかよ……！」などと言いつつ続いた。

「うわ、ホントにドロップしてる！」

「まさか、こんなにも早くBランクカードがドロップするとはな……」

……！

普段クールな師匠と織部も、めったにないBランクカードのドロ

ツプに興奮しているようだ。

これを見ると、アンナの大袈裟な喜びよりも満更不自然な演技というわけでもなかったのかも知れないと思いつつ、俺もなるべく興奮したように……。

「アレースって市場価格いくらだっけ？ これ一枚でアンゴルモアに必要な物資全部揃うんじゃない？」

「アレースは……確か少し前で四十億くらいで、今は六十億くらいだったかと。アンゴルモア向きの能力ですし、これからもっと値上がるかもしれません」

六十億という金額に、皆に見えない衝撃が走った。

それは、この状況を仕組んだ俺も例外ではなかった。

まさか……そんなに高いとは。

ちよつとだけ、ディオニユスじゃなくこつちが宝籤のカードで出てくれれば……と思っってしまったくらいだ。

「……どうするんだ、アンナ？ 売るのが？」

言葉もでない様子の皆の代わりに、動揺の少ない俺が代表して問いかける。

「皆さんはどう思いますか？」

こつちいう時、まずアンナは皆の意見を聞くことから始める。

「我は……すまん、正直判断がつかん。売ればアンゴルモアの備えに関しては大体解決するだろうが、アンゴルモア時の戦力としても欲しいしな」

「僕も、判断つかないな。売るにしてもタイミングが難しいよね。」

アレースは今後も値上がっていく可能性が高いけど、当然他のアングルモア向けのカードも値上がっていくだろうし……どっちが得なのか。残しておくとして、誰が使うかって問題もあるよね」

織部と師匠は、実質保留か。

つまり、俺とアンナの意見が結論に大きく影響することになる。

アンナの事前の読み通りだ……。

「俺は、取っておくべきだと思う」

みんなの視線が俺へと集中する。

「アレースは、アングルモアの時に真価を発揮するカードだと思う。アレースの眷属の強化に特化したスキルは、俺たち全員の眷属持ちの価値を一段階上昇させる価値がある」

眷属の戦闘能力を実質ワンランクアップさせられるということは、ウチのメアならBランクカード相当のサキュバスを無限に召喚できるということだ。

確かに、売れば物資問題は一気に解決するだろうが、手放すにはあまりに惜しすぎる。

「売るにしても、アレースならこれからも値上がりしていくだろうし、今焦って売る必要はない。もしアングルモアが間近に迫ってきて、それでも物資が揃ってなかったらその時売れば良い。それまでに物資が揃えば売る必要もなくなる」

俺の言葉に、皆は確かに頷く。

「取っておくとして、誰が使う？ 所有権はチームとしても、これ

だけのカードを眠らせておくのは惜しいだろう」

織部の問いかけに、俺は唸った。

「うーん……とりあえず、俺は却下だな。男カードだし」

「そういう意味では、ウチも無しッスね。アレースは何気に悪属性
ッスから、ウチとは相性が悪いッス」

「ふむ。我は、相性は悪くないが……無しだな。趣味に合わん」

皆の眼が、一人残った師匠へと向かう。

「……じゃあ、僕が使わせてもらおうかな。相性も悪くないし」

師匠は、極まれにいるというどの属性とも少しだけ相性が良いタイプである。

いわば、万能属性とでも言うべきか。

この手のタイプは、せつかく万能属性を持って生まれてきても結局後天属性によって得意不得意が生まれてしまっらしいのだが、師匠は満遍なくカードを使うことで後天属性も偏りが生まれにくいようにした、真の万能属性の持ち主だった。

その最大のメリットは、通常は属性に縛られがちなデッキを、自由に構築できることだ。

どうしても属性によりデッキの傾向が偏りがちな冒険者にとって、師匠のような万能属性が一人でもチームにいと、戦略の幅が大きく広がる。

こうして有能なカードを手に入れてもそれを活かせる者がいない時、その受け皿となる……というのも隠れたメリットだった。

それから。

踏破報酬を回収し迷宮を出た俺たちは、いつものファミレスで打ち上げを行うことにした。

部室に鍵を掛け皆で学校を出た頃には、時刻も夜八時を回っており、辺りはすっかり暗くなっていた。

それでも、Ｂランクカードをゲットしたこともあり、皆の雰囲気は明るい。

織部と師匠も、珍しくテンション高めにアレースを使った戦略などを熱く議論している。

「先輩、例のアレは大丈夫ツスカ？」

そんな中、二人の意識がこちらに向いていないのを確認したアンナが、こっそりと話しかけてきた。

……例のアレ。運命操作による因果律の歪みのことか。

「ああ、大丈夫だ」

「そうツスカ……何かあったら、即ヴィーヴィルダイヤを使ってくださいね」

——ヴィーヴィルダイヤには、因果律の歪みを打ち消す効果がある。

この効果が判明したのは、二週間ほど前。宝籤カードからディオニユスを引き当てた時のことだ。

次の運命操作では試してほしいと渡されたヴィーヴィルダイヤだったが、ダイヤ自体は幸運のエネルギーを持っていないことはすぐにわかった。

だが、カーバンクルガーネットの類似品と思われるヴィーヴィルダイヤに、何の絡繰りもないとは考えづらい。

そうして色々調べてみたところ、どうやらこのダイヤには因果

律の歪みを打ち消す力があるらしい、ということがわかったのだ。

使用したダイヤは、ガーネット同様粉々に砕けてしまう。

打ち消せる歪みの量については、少なくとも運命操作一回分は消せるようだが、それ以上については不明。一定量を消せるのか、あるいは歪みの大きさに関わらず一個で全消しできるのか……実に気になるところだが、それを知るために歪みを溜める気にはなれない。今のところは、運命操作による因果律の歪みは出来る限り時間経過で消しつつ、前回の歪みが消えないうちに運命操作を使う必要が出来た時のみ、ヴィーヴィルダイヤを使う……使い方を想定していた。

因果律の歪みによるしっぺ返しがどうなるか分からないし、万が一『見えない歪み』が溜まっていた場合を懸念しての備えだった。

「ところで、今回ガーネットはいくつ使いました？」

「えっと……七個、だな。本来は十四個消費のはずだったんだが」

宝籤カードで吉祥天を出した時は、二十個のはずが十個で済み、デュオニユソスの時はさらに少なくわずか四個で済んだ。

それで、今回は十四個使用のはずが七個……。

どうやらホープダイヤの効果は、運の揺れ幅を二倍から最大十倍程度にすることで間違いなさそうだ。

「ふむふむ……ホープダイヤがあれば、ガーネット七個から十個でBランクカードが一枚手に入るわけッスか。やはり反則的ッスね、先輩のその力は……」

「俺の……ってわけじゃないけどな。蓮華の力だ」

「あんま違わない気もしますけどね、先輩しか使えないカードの能力なわけですし。……運命操作じゃない、幸運操作でしたか？ 因果律の歪みが発生しない方では、どうなってます？」

「そっちは正直微妙だなあ……あんま安定しなくてさあ」

すべての幸運のエネルギーを精密にコントロールできる運命操作と異なり、幸運にある程度の指向性を与えることしかできない幸運操作では、どうしても使用する幸運量にロスが発生する。

ガーネット十個分の幸運量があったとして、カードのドロップ率に割り当てられる幸運量は、ガーネット五個分から八個分が精々で、あとは他の『幸運な出来事』に流れて行ってしまふのだ。

なので……。

「多分、安定してBランクカード出そうと思ったらホーブダイヤ込みで最低二十個以上は必要になると思う」

「そうツスか……それでも因果律の歪みを気にせずにBランクカードが出せるというのは大きいツスね」

確かに、ガーネットを大量に消費するとは言え、因果律の歪みを気にせずに済むのは幸運操作の大きなメリットだ。

因果律の歪みを考えれば、運命操作が使えるのは月に一回か二回。大体二月に三回と言ったところか。そこからさらにヴィーヴィルダイヤ一個につき一回。一月に一個手に入るとして、アングルモアまでに最大六個か、七個。

ガーネットは、月に五十個近く手に入るから、そのうち二十個は運命操作として、一月に三十個はストックできる。幸運操作でBランクカードを出すには二十個は欲しいから、やはり二月に三回か……。

同じように暗算をしていたのか、指折り数えながらアンナが言う。

「大体二月に八枚はコンスタントにBランクカードを得られそうってわけツスね。となると問題になってくるのは、宝籤カードツスか。前回は二セット落ちたのに、今回は一セットも落ちませんでしたからね……」

「宝籤カードは、ギルドでも売ってないからなあ。冒険者たちから買い集めるって手もあるけど、大々的に募集したら確実に目立つだろうし……」

「国も確実にガーネットと宝籤カードには網を張ってるでしょうからね……」

つまり、自力で手に入れるしかないということだ。

「……先輩の力で宝籤カードをガツカリ箱から出すってのはできないんすか？」

「あゝ、それは無理なんだよな……カードの種族を選んだり、ガツカリ箱から出る魔道具の指定とかはできない」

俺に出来るのは、ランクの高そうなカードやアイテムが出る可能性が高い道を選ぶところまでだった。

「うーん……そこまで上手いきませんか。まあ、そのうち出るのを期待して、それまでは節約して使っていくしかないッスね。ヴィーヴィルダイヤはいつでも使えるわけですし」

「だな」

「——とところで、明日って特に予定ないッスよね？」

「？……ああ」

突然の話題転換に一瞬首を傾げ、織部と師匠の議論が終わりかけていることに気付いた。

目ざといな……と思いつつ、俺も話を合わせる。

「まあ、さつき明日が休みって決まったわけだからな」

「そっッスよね」

と、アンナは頷き、ニッコリと笑った。

「では、そろそろ例の件、お願いしても良いですか？」

「うっ……」

俺は思わず呻いた。

っ、ついにこの時が来てしまったか……。

「何の話？」

そこへ、師匠たちが話に加わってくる。

「いやホラ、以前ウチの父が先輩に会いたがってるって話をしたじゃないツスか」

「ああ……なんかマロと十七夜月さんの関係を誤解してるって言う」

それで、師匠も話の流れがわかったのか、納得したように頷く。

「まあ、この一月は迷宮の攻略が忙しかったんで、それを口実に先送りしてたんすけど、さすがに最近煩くなってきた……」

「なるほど……迷宮も踏破してキリも良いし、ちょうど明日も休みだから……ってわけか」

「そーいうことツスね」

「で、マロは何をそんなに嫌がってるの？」

「何でって……」

師匠の問いかけに、俺は顔を顰めて答えた。

「普通嫌だろ……こんな、娘さんをくださいみたいな挨拶。しかも、実際は付き合ってすらないんだぞ」

「別に実際は付き合っていないなら良いじゃない」

どこか面白がるように言う師匠に、気軽に言ってくれるぜと舌打ちする。

「他人事だと思って……。相手がそう思ってるのが問題なんだっつの」

「いや、まあ、そこらへんはウチの方から父に何度か説明したんで、その手の誤解は解けた……と思うんすけど」

「そうなのか？」

「はい。……………たぶん」

「たぶんかよ」

そこはきつちり誤解を解いておいてくれ……。

「いやあ、まあとにかく、付き合ってるにせよ、付き合っていないにせよ、一度先輩を連れてこいって煩くて……………」

「まあ、しょうがないから行くけどさ……………恋人云々って誤解だけはもう一度言っておいてくれよ」

「わかりました」

俺が改めてそう言つと、アンナは頷いたものの、やや不満そうな顔をして……………。

「……………けど、そこまで否定を念押しされると乙女心としては少々複雑なモノがありますね。そんなにウチと誤解されるのはご不満ツスカ？」

「いや、そう言つわけでもないんだけどさ……………」

実際、アンナは彼女としては申し分ない女の子だ。

可愛いし、スタイルも良いし、ノリが良くて男の趣味嗜好にも理解がある。きつと恋人に出来たら楽しいことだろう。……最近たまに見せるようになった危険な側面も、彼女の魅力と言えば魅力だ。だが……。

「なんかアンナのお父さんって怖そうじゃん。あと、娘を溺愛して父親と会ってシチュエーションが、もうなんか嫌……」
『ああ……』

俺の明け透けな本音に、皆が苦笑する。
ウチにも愛がいるからわかるのだが、ちゃんと娘を愛している父親にとって、娘の彼氏とは、明確に敵なのだ。
温厚なうちの親父ですら、愛が男子の名前を出すと若干警戒した空気を出すくらいである。

一説によると、娘に恋人ができる感覚というのは、自分の女に他の男ができる感覚と極めて近いらしい。
それは、別に娘に恋愛感情を抱いているとか、娘を自分の女と思っているわけではなく、娘を守る父親としての本能がそうさせるのだと言う。

よって、娘が彼氏ないしそれに準ずるような存在を家に連れてきた時、友好的になる父親など存在しない。

娘を愛するすべての父親は、娘の彼氏と対面したその瞬間、圧迫面接官と化するのだ。

しかも、今回俺が会うことになるのは、明らかに娘を溺愛していると思わしき、大企業の社長……。

クラク迷宮に一人で挑む方が、まだ気楽だった。

「まあ、明日一日だけ我慢していただくことで」

「そうそう、殺されるってわけじゃないんだしさ」

「別に嫌われても良いぐらいの気持ちで行けば良い。多少の怪我な

ら魔法やポーションで治るのだからな」

ボコボコにされる前提ですか、織部さん？
俺はがっくりと項垂れるのだった。

第十三話 大人たちも頑張っていたんだよ (後書き)

【TIPS】 迷宮数の推移とランクごとの割合

迷宮は当初、どこの国でも人口百万人あたりに一個出現し、そのすべてがAランクであった……とされている。

あやふやな表現であるのは、当時の人類では五十階以上に到達できなかつたためである。

しかし、フィールド効果などの迷宮のギミックから考察するに、初期に現れた迷宮はすべてAランクだったので？ という見方が主流となっている。

日本においては、当初百程度であった迷宮数は、第一アンゴルモア千以上に増加し、第二次アンゴルモアで五千を超え、以降一年ごと約二百ずつ増え、現在では七千以上となっている。

ランクごとの内訳は、

Aランク	: 約100
Bランク	: 約200
Cランク	: 約500
Dランク	: 約1500
Eランク	: 約2000
Fランク	: 約3000

となっており、Aランクの数は初期から変わっていないが、第一次の頃はAランクよりも少なかったBランクの数がついに二倍近くなってしまうこと、徐々にDランク以上の割合が増えつつあることが極めて問題視されている。

第十四話 ラストプレゼント

翌日、俺はアンナの案内で彼女の家を訪れていた。

今や日本でも有数の大富豪、十七夜月家。その家は果たしてどれほどの豪邸なのか……。

昨夜急遽クリーニングに出した制服（下手なブランドの服を着ていくよりも無難と判断した）を身に纏い、緊張しつつ向かった俺だったが――。

「案外、普通なんだな……」

予想に反し、こじんまりとした普通の一軒家を前に、俺は思わず拍子抜けして呟いた。

十七夜月家の外観は、一言で言えば横長の白い豆腐だろうか。

二階建てで、縦よりも横に長く、飾りらしい飾りは全くない、シンプルなデザイン……たしか、シンプルモダンと言っただろうか？特徴としては、一階部分に全く窓がなく、代わりに二階は一面ガラス張りとなっていること。ガラスは特殊な加工が施されているのか、カーテンも無いのに外から中は窺い知れない。

確かに北川家よりも二倍ほど大きいものの、大豪邸といった感じはなかった。

ＴＶで見る十七夜月社長は派手好きな印象だったが、私生活では案外おとなしめなんだろうか？と首を傾げていると……。

「意外ツスカ？ま、中に入ってみればわかりますよ」

意味深に笑うアンナに促され、妙に頑丈そうな扉を開け、中へと入る。

「…………おじゃまします」
「いらつしやいませ」

玄関部分は、まるでモデルルームのように綺麗で、なんだか妙に生活感が無かった。

普通、他所の家に入るとその家の生活臭みたいなモノが漂ってきて「ああ、他の家に来たんだな…………」と思うモノなのだが…………。そんなことを考えながら奥へと進んでいく。

「………………………」

…………やはり、おかしい。

玄関までならともかく、他の部屋、リビングまで生活感が無い。

これでは、本当にモデルルームだ。

それに、アンナがリビングなどに俺を案内せず素通りしているのもおかしい。

それに、アンナの両親はどこなのか。

たとえ気に入らない男がやってきたとしても、出迎えぐらいはすると思うのだが。

そうしている間にもどんどん奥へと進み、地下室への階段を下り始めた辺りで俺はついに堪えきれずに問いかけた。

「…………なあ、どこに向かつてるんだ？」
「もちろん、両親の元にツスよ」

…………なんか嫌な予感がするな。

ホラー映画だと、死体とか剥製とかになったアンナの両親を見せられるパターンだぞ、これ。

そんな馬鹿なことを考えていると……。

「おいおい、なんでダンジョンマートと同じ鋼鉄の扉があんだよ……」

階段の先には、お馴染みの鋼鉄の扉があった。

「まさか……この先に迷宮があんのか？」

「いえ、無いッスよ。これは単純に頑丈なんで設置してるだけッス」

そこまでして何を守ってるんだよ……と思っている間に、アンナは指紋認証やら網膜認証やら、妙に厳重なチェックを行っていた。

まるでスパイ映画のような光景に絶句していると、プシューという音と共に扉が開く。

その先には……。

「……門？」

高さ3メートル、横幅2メートルほどの重厚な門が、部屋を中心に建っていた。

これは……いや、まさか！

「もしかして、転移門か!？」

「「明察」」

転移門。

二個一セットの魔道具で、設置した地点を相互に転移することができる魔道具だ。

使い捨てではなく、何度も使用できる希少な転移魔道具であり、何よりも迷宮外でも使えるということ。国が片っ端から買い占めており、市場に出回ることが全くない魔道具だった。

これ、個人が所有できるモノだったのか……。

「ウチがスポンサーをやってるプロ冒険者から買い取ったらしいッス」

「なるほどね……」

「じゃあ、手を繋いでもらって良いッスか？」

「え？」

思わずアンナの顔を見ると、彼女は少しだけ気恥ずかしそうに……。

「や、これ事前に登録した人じゃないと使えないんで。一緒に連れて行きたい人がいる場合は接触する必要があるんスよ」

「ああ、なるほど……わかった」

頷き返し、アンナの手を握る。

……うわ、手えちつちゃ、柔らけえ。

思わずニギニギしたくなる衝動を抑え、アンナと共に門へと触れる。

すると次の瞬間、景色が歪み……。

「……眩しー！」

眼を刺す強い光に眼を細めつつ周囲を見渡すと、そこは見知らぬ草原だった。

さわさわと草木が揺れ、心地よい風が頬を撫でる。

その中に潮の香を嗅いだ気がして振り返ると、そこには綺麗な青

い海が広がっていた。

「ここは……。」

「ここは十七夜月家が所有する無人島ツス。さっき通って来た家は、まあダミーみたいなもんスね」

「無人島……ダミー……」

「色々想像を超え過ぎてついていけねえわ……。」

「そんなに特別なことじゃないツスよ。先輩の家にもシェルターがありますよね？　ウチの場合は、それがこの無人島つてだけツス」

「全然規模が違うわ」

「これだから金持ちは……。」

「でも今の先輩なら、買おうと思えば無人島の一つや二つ買えるでしょ？」

「そんなこと……できる、な」

「そこそこのBランクカードを一枚か二枚売れば、小さい島くらいなら買えるだろう。」

「迷宮は、人口が多いところに発生しやすい性質を持つため、無人島には迷宮も基本的にない。」

「Bランクカードを一枚買うか、そもそも迷宮の存在しない安全な土地を買うか……という違いと考えると、十七夜月家の考えもわからないでもなかった。」

「じゃ、そろそろ家に向かいますよ。徒歩だとちょっと遠いんで、魔道具で移動しましょう。確か先輩も飛行型の魔道具を持っていたよね？」

「ああ」

俺は空飛ぶ絨毯を、アンナは人工魔道具と思わしきSFチックなバイクを取り出して乗る。

見覚えがある。たしか国内バイクメーカーとエメラルドタブレット社が共同で開発した、空飛ぶバイクだ。

「それ、かけえなあ！」

「でしょー？ まあ、学校の迷宮じゃ使えないんすけどね」

そんなようなことを話しながら飛んでいると、本当の十七夜月家が見えてきた。

それは、俺が当初抱いていたイメージ通りの大豪邸であった。

普通の家が優に十個は収まってしまうような白亜の宮殿のような家。玄関前の広場には噴水があり、庭にはウォーターライダー付きの巨大なプール。裏には小さな滝があつて、小川も流れていた。

「うわ、すげえ……ハリウッドスターの家みたいだ」

「無駄に広いだけッスよ」

滅多に見ることのできない豪邸に眼を輝かせる俺に対し、アンナは冷めた様子で家を見下ろす。

案外、これだけ広いと実際に住んでたら不便なことも多いのかもしれない。

噴水前に着陸する。

玄関まで行くと、アンナが扉を開けて迎え入れてくれた。

「どうぞ、先輩。今度こそいらっしやいませ」

「ありがとうございます、おじやまします」

玄関ホールは、やはり予想通り広がった。

だが、外観を見た時ほどの驚きはない。

内装で言えば、マヨヒガも負けず劣らずの豪華さだからだろうか？

「ただいまー！ 先輩連れて来たよー！」

アンナがそう叫びながら先へと進むと、すぐにパタパタという音を立てて二人の男女がやって来た。

一人は、アンナの姉かと思うほどに若々しく美しい赤毛の美女。朗らかで優しそうな笑みを浮かべ、豊かな母性の象徴を揺らしてこちらへと小走りに駆け寄ってくる。……こんなことを思ってしまうのもアレだが、かなり、デカイ。俺はあまり見ないように、もう一人の方へと視線を逸らした。

女性と違いゆっくりと歩いてくるその男性の顔には、俺も見覚えがあった。TVでも何度も見たことがある、十七夜月 創そうち一社長……その人だ。

若いころはそれなりに精悍だったのだろうと思われる顔は、かなり丸みを帯びてしまっていて、お腹周りなんかも大分ポッコリしてしまっている。それでも肥満だとか、メタボだとかそう言った悪印象が湧かないのは、その活力に満ちた顔つきによるものだろう。実年齢は五十近かったはずだが、十歳は若く見えるほどのエネルギーを感じる。

この人が、日本を代表する大企業の社長。となれば、隣に立つアンナの姉にしか見えない女性の正体も限定されてくる。

つまり、この二人こそ、アンナのご両親だった。

「パパ、ママ。こちらが、北川先輩」

「北川歌麿です。娘さんにはいつもお世話になっております。本日はお招きいただき、ありがとうございます」

アンナが軽く俺を紹介したので、俺も頭を下げて挨拶する。
定型文に近いセリフではあったが、特に問題はない言葉遣いのはずだった。

……が。

「ほう？ お世話ねえ？」

アンナパパが意味深に呟いた。

「具体的にどう、お世話になっているのか……ぜひ聞きたいものだねえ、うん？」

そう言っただけ俺の肩に手を置き、顔を寄せて凄むアンナパパ。
うわ、さっそく来たよ。

俺が何も言えずに顔を引き攣らせていると……。

「————な——んてな！ 冗談冗談！」

一転してアンナパパは笑顔となり、そのまま俺の肩を抱いて招き入れてくれた。

「いやあ、一度こういうことが言ってみたくてね！ ようこそ、よく来てくれたね。さ、上がって上がって！」

「あ、はい……」

「もう！ そういうのは止めてって言ったでしょ！」

目を白黒させて戸惑うしかない俺に代わり、肩を怒らせてアンナが抗議する。

「すまんすまん、つい我慢できなくてな。ホラ、なんせ、ある意味

娘を持つ父親の憧れのシチュエーションだろう？」

「……まあ、その気持ちはわからないでもないけど」

そこで理解示しちゃうんすね、アンナさん。やっぱ似たモノ親子か。

「パパもアンナが家に初めてボーイフレンドを連れてきて、テンション上がってるのよ。許してあげて。北川さんもごめんなさいね」

「ああ、いえいえ。おじゃまします」

「貴方たちとは一度お会いしたいと思つてたの。ねえ、パパ？」

「ああ。本当によく来てくれた。夕食はまだだろう？ デイナーを用意してある、ゆっくり食事をしながら話をしよう」

「ありがとうございます。いただきます」

思いのほか歓迎してくれるらしい雰囲気にもホッと一安心しつつ、俺は頭を下げたのだった。

一一一十七夜月家での夕食は、実に楽しいものとなった。

半住み込みで雇っているのだという専属シェフの松本さんの作る食事は、三ツ星レストランにも勝るとも劣らないもので一一一といても俺は三ツ星レストランで食べたことなんて無いのでアンナパパの紹介を鵜呑みにしただけであつたが一一一俺は貪り喰わなように気を付けて食べなくてはならなかつた。

如何に美味しい食事とはいえ、その場の雰囲気も酷ければその味も砂を噛むようなものとなる。しかし、アンナパパは聞き上手の語り上手で、来客の俺に気を遣わせることもなく、自然に話を盛り上げてくれた。

食事が終わった頃には、俺はすっかりアンナパパに気を許してお

り、なんとというか親近感のようなものすら抱いていた。

こういうのを、カリスマというのだろうか？

大企業の社長の、恐るべき人心掌握術であった。

「我が家の食卓はどうだったかな？」

「とても楽しくて美味しい夕食でした。ありがとうございます」

「それは良かった。松本もきつと喜ぶよ」

―――食後。

俺は、二人で話したいというアンナパパと共に十七夜月邸を案内して貰っていた。

十七夜月邸は、外観に違わずその中身も豪華で、ビリアードやゲームなどが置かれた遊戯室に、小さな映画館のようなシアタールーム、ちょっとしたジムのようなトレーニングルームや、屋内温水プールに、来客を持って成すためと思われるバーカウンターまであって、まるでリゾートホテルのような設備の整いようだった。

「この島には、魔道具を埋め込んでいてね。島自体を気配遮断と透明化の結界で覆っているんだ。海流も少し操作していて、ゴミはもちろん漂流者なんかも絶対に流れ着かないようにしている。転移門を通らなくては、この島にたどり着けないようになってるんだ」

「へえ〜……それってやっぱりアンゴルモア対策ですか？」

「もちろん。いくら頑丈な建物を作ったところで、高ランクモンスター相手には限界があるからね。見つからないこと、それこそが一番の防衛策というわけだ」

「なるほど……」

「地下には大型商業施設用の魔石発電機もあるし、屋敷の設備は全部オール電化にしているから、電力に関しては心配することはない。魔石の備蓄も地下に優に二百年分はあるから安心してくれ」

「……？ はい」

俺は少しだけアンナパパの引っかかるモノを感じたが、とりあえず頷いた。

「清掃についてもこの屋敷そのものが一つの人工魔道具となっているから、自動的に汚れや埃ほこりなんかは綺麗にしてくれる。だから特に掃除の必要もない。生ごみは肥料にしてくれる魔道具があるから、それに適当に突っ込んでおけば良い。それ以外のゴミに関して、魔力化してから電力に変えてくれる魔道具が地下にあるから、それで処理すれば良い」

「……………」

やはり、おかしい……。

最初はただ屋敷の設備自慢かと思っていたが、この口ぶりはまるで……。

「まあ、あとの細かいことはアンナに聞けばわかるだろう。思い入れのある家だから、大事にしてくれると嬉しい」

「それは……。どういう意味でしょうか？」

俺が思わず立ち止まり問いかけると、アンナパパも振り返り俺の顔を見た。

「この家と島は君にあげる、という話だよ」

その顔は至って真顔で、冗談を言っている顔ではなかった。

「まあ、さすがにタダというわけにはいかないがね」

「……これほどの豪邸を島ごと買えるほどの余裕はありませんが」

「なあに、金については心配しなくて良い。ちょっとした依頼を聞いてくれれば、それで良い」

「依頼……?」

「そう。いざという時は、アンナだけでも連れてこの島に逃げると……それがこの島と家を譲る条件だ」

「やっぱり、そういう話か……」。

「君たちが今進めている学校の拠点化とやら、失敗した際には逃げ込むための場所が必要だろう?」

「……結論からお答えしますが」

俺がそう言うと、アンナパパはニッコリとほほ笑んだ。

その笑みは、娘であるアンナそっくりだった。

「うん、いいね。話が早い」

「この話、お引き受けします。いざという時は、必ずお嬢さんを連れてこの島に逃げるとお約束します」

「良かった。これで一安心だ」

そう言って大袈裟に胸を撫でおろすアンナパパは、しかし心から安心しているように見えた。

「ただ、一つ……いや二つほどお聞きしたいことが」

「なぜ、無理やりにもアンナを連れて行かないのか。なぜ、君なのか……かな?」

「……はい」

さすが、アンナパパだ。俺の疑問など百も承知といった感じか。

「アンナからもう聞いていると思うが、私たち夫妻は特別なシエルターに避難することになっている。設計上は、Bランクモンスターの襲撃にも耐えうる、政府の高官なども逃げ込むシエルターではあるが、それもどこまで安全か疑わしい……」

「なぜです？ 聞いた話では安全そうに聞こえますが」

「仮に『外』からの攻撃に安全だとしても『内』側はどうかかわらないという話だよ。考えてもみてくれ、多くの人間が高ランクカードを持って、閉鎖的な空間に逃げ込んだぞ？」

「ああ……」

俺は深く納得した。

なるほど……それはある意味外よりも危険かもしれない。

Bランクカードを持った人間がいるというのは、ある意味でBランクモンスターがいるというのと変わらない。

高ランクカードが大量に集まるというのは一見安全そうだが、裏を返せばそれだけの爆弾が一か所に集まるということ。

しかも、彼らのほとんどは、これまで人の上にしか立ってこなかったような人間たちだ。

想像するだけで悍ましい、複雑怪奇な人間模様が展開されることだろう。

……戦国の世では、あえて家を分けて両陣営につくことで、どちらが勝つても家が続くよう計らった事例も多かったという。

アンナを無理にでもシエルターに連れて行かないのも、言い方は悪いが、ある意味で保険というわけだ。

見たところ、アンナママもまだ若い。子供ならシエルター内でも作れるだろうしな。

「それで……なぜ自分を？ アンナに……娘さんに直接譲れば良かったのでは？」

俺がもう一つの疑問を問いかけると、アンナパパは肩を竦めてみせた。

「娘は、きつとこの家も島も受け取らんだろうな。アレは、外見こそ幸いにも妻に似てくれたが、中身は私そっくりだ。親に対する反抗心……いや、向上心が強いというべきか。いつまでも親の庇護下にいることが耐えられないのだよ。自立できるだけの力を身に着けた今、私からの施しを受けることを良しとはすまい」

「ふむ……その割にはこれまで、あー、家の力を結構利用してきたように思えますが……」

「そりゃ未熟なウチは、使えるモノは使うだろう。私だってそうだった。そこは意地を張ったって、自立の 때가遠のくだけだ。むしろ、私のコネをこれまで使ってこず、自力でやっていたら、私は絶対にシエルターに連れて行ったよ。無駄死にするだけだからね」

なるほど……。俺は納得した。これは、確かにアンナは父親似だ。

「アレも中学生の頃までは要らん意地を張っていたところもあったがね。大会で、君に負けたことで良い意味で吹っ切れたようだ。高校に入ってから、ちゃんと親に頼るようになって安心したよ」

ふむ……確かに、初めて会った時のアンナは、父親の七光りと見られることを嫌っているような印象だった。

だが、高校で再会した時には、むしろ実家のコネを最大限利用するようになっていた。

どういふ心境の変化かと思っていたが、どうやら俺との対戦がきっかけになっていたらしい。

もつとも、俺との戦いがどう作用したのかは、よくわからないが。

「だが、自立すると決めてからも親に頼っているようでは、成長の

妨げになる。私もこれからは協力しないつもりだ。……とはいえ、私も娘が可愛い。最後に一つ……贈り物がしたくてね」

それが、この家と島というわけか。

「これだけのモノを受け取ったら、君もアンナからはそうそう離れたりはしないだろう？ 見たところ、義理やら人情といったものを人一倍大切にしているタイプと見た。ブラック企業でも、お世話になった先輩や上司がいる限りは離れられないタイプだな」

これ、褒められてるのか？ あんま、褒められてないような……？ 複雑な表情をしていたのだろう、俺の顔をみたアンナパパが笑う。

「もちろん褒めているんだよ。娘の仲間としてこれほど心強い存在はいない、とね」

「そ、そうですか……」

オタクの娘さんってブラック企業の社長タイプじゃないツスよね？ とは聞けなかった。

「義理堅く、冒険者としての才能もある。運も持っている。なによ、女が群がるほど色男というわけでもない。娘のパートナーとして、まあ、ギリギリ、オマケつきではあるが……及第点と言ったところだ」

一部引つかかるところはあったが、娘を愛する父親からの評価としては、これ以上高いものはないだろう。

どうやら、俺はアンナパパに認められたようだった。

「娘を頼んだよ、北川歌麿くん」

「はい」

俺は、アンナパパが差し出してきた手を、硬く握り返したのだった。

「父に何か変なことされませんでした？」

「ん……何もなかったよ」

帰り道、見送りに出てくれたアンナが、二人きりになった途端に問いかけてきた。

「ふうん……なら良いツスけど」

そう言いながらも、アンナは俺の全身をジロジロと見渡している。アンナパパ、娘からの信用無いな。と苦笑していると……。

「ところで、この家と島は、無事に貰えました？」
「ッ！？」

俺は思わずギョツとしてアンナを見た。
そんな俺の顔を見てアンナが笑う。

「あつ、やっぱりそういう話でしたか」

「お前、聞いて……いや、カマをかけたのか？」

「カマをかけたというか、まあ、父ならそうするだろうな……と」

コイツ……すべてお見通しだったのか。

アンナパパなら俺にこの家と島を譲るだろうと思っていたから、俺を今日家に招いたのか？

というか……。

「お前……それがわかってるなら素直に受け取ってやれよ。お前が受け取らないからわざわざ俺に渡すっていう遠回りなことまでしたんだぞ……」

親不孝な奴だな、と俺が呆れているとアンナは意味深に微笑み。

「フフ……父がウチに贈りたかったのは、先輩ツスよ」

「は？」

呆氣にとられる俺に、アンナが島全体を指し示すように両手を大きく広げて見せた。

「父は、この島と……それに親の愛を先輩に託すことで、先輩がウチから離れられないように楔をつけたんです。この先、もう守ってやれない自分たちの代わりに、娘を守ってくれる忠実な部下を、とそれが、今日の父の本当の狙いというわけです」

「……………」

そうか、そういうことか……。

今日の一連の流れをようやく理解し、俺は深く納得した。

アンナパパが、今日俺を招いたのは……娘に忠実で信用できる戦力を遺すためだったってわけか。

しかも、そのために使われるコストは、どうせ自分たちはもう使わなくなるこの家土地と、今日一日分の時間だけ。

実質捨てるだけのモノで、見事にプロクリスの冒険者を一人、娘の部下とすることができたわけだ。

なんというコストパフォーマンス。これが大企業の社長か……、と思わず苦笑してしまうくらいだ。

なにより、一番苦笑せざるを得ないのは、結局思惑通りに俺がアンナを守ってしまっただろうこと。

まさしく十七夜月社長の人物眼は、正しいと言わざるを得なかった。

しかし……。

「それを俺に言ったら、せつかくの策略が台無しじゃないか？」

もし俺がそれで逆に絶対にアンナパパの思惑になど乗ってたまるか反発したらどうするつもりだったのか。

「ウチなりの誠意ツスよ。先輩はウチを信頼して、最も重要な秘密を話してくれました。そういう人を、父の策略で言いなりにしたくないな、と」

なるほどね……。

「そう言うわけなんで、父との約束とかは抜きにして、この島は遠慮なく貰ってください。先輩の能力に対する対価としては安すぎますが、ウチから……というか十七夜月家から渡せるモノはこれくらいなんで」

「そんなこと言って、俺がいざという時は、自分だけ逃げるとは思っていないんだろう？」

俺が少し意地悪にそう問いかけると、アンナはペロツと可愛らしく舌を出す。

「あ、バレちゃいました？ 正解です、先輩の性格を考えたら、仲間やご家族くらいは連れて逃げてくれるだろうな、とは思ってました。まあ、それが父との約束によるものなのか、あるいは先輩自身の意思によるものなのかが、ウチとしては重要なんですよ。乙女心的にね」

乙女心ね……と苦笑する。

「一体いつから、この島の存在は計画の内だったんだ？」

「うーん、最初からツスね。学校の拠点化は、この島の存在ありきではありました」

だろうな、と頷く。

アンナの用意周到さを考えれば、学校以外のサブ拠点を用意しないのは不自然だからな。

十七夜月家に頼れないにしても、皆で田舎の一軒家でも買い取ってそこをサブ拠点化するくらいはしてもおかしくないと思っていた。まあ、学校が攻め落とされたら特定の拠点を持たずに放浪するのかもしれないから、そこまで疑問に思ってもいなかったのだが……。

「ただ、それが先輩に譲られることになるかどうかは、半々でしたね。父が先輩を家に呼ぶように言いだしてから、もしかして？ っと感じます。で、先輩が秘密を明かしてくれた時に、ウチもこの拠点を先輩に渡すことを決めました。たとえ父が先輩に譲らなくても、です」

「なるほど……ちなみに俺がもし秘密を話してなかったら？」

俺がそう言っていると、アンナはニヤリと笑い。

「その時は、このネタバレはありませんでしたね」

つまり、アンナパパの思惑通り、アンナの駒になってたってことか。

いや、まあ、結果は変わらないんだけどな。

「でも、これでいざという時の逃げ場もバッチリというわけか」

「ですね。……もう先輩のものなんで、ウチがどうこう言える義理じゃないんですけど、一応このことは他言しないようしてもらえると助かります」

「わかってるよ」

……いざという時に自分たちだけは逃げられる場所を用意してるとてのは、間違いなく嫉妬と反感を買うだろうからな。

それに、この島は本当に最後の逃げ場だ。できれば使わないに越したことはない。

そのためにも、『表』の拠点である学校の拠点化を万全としておきたいところだった。

異界クラスの異空間型スキル持ちに、食料等を生み出せる魔道具やカード。ドワーフなどの生産能力を持つカードもまだまだ欲しいし、装備化スキルや眷属召喚スキル持ちはいくらあっても多いということはない。欲しいカードや魔道具はいくらでもある。

クダンの予言の発表があったら物価も上がるだろうし、本当に時間が無い……。

と、そこまで考えたところで、ふと気づく。

「そういえば、政府の発表遅いな……」

「……そうツスね。予言の精査をしていた……という言い訳が世間に通るのは、精々一ヶ月やそこらが限界なんで、そろそろ発表され

てもおかしくないんすけど」

「もしかして、最後まで隠し通す気じゃあるまいな？」

「さすがにそれは……無いと思いたいっすけど。だとしたら相当マズイことになりますし」

政府の発表がないということは、政府は世間からの批判を気にしていない……すなわち、アングルモアの終息自体を諦めている、と取ることもできる。

その場合、最悪自衛隊の出動自体なく、自分たちの身の回りの護りだけを固めることもあり得た。

映画や漫画の見過ぎと言われるかもしれないが、一部の都市（あるいは異界クラスのカードの中）に戦力を集中させて安全地帯を作る……なんて可能性もある。

自衛隊も、大半は庶民出身だろうから人々を見捨てて権力者たちを守れ、なんて命令に従うとは思えないが、家族をその都市に住まわせてやると言われたら従う者たちも一定数いるかもしれない。

「まあ、そろそろ発表あるんじゃないっすか？」

「そう願いたいもんだな」

一一一だが、それから一週間経ち、二週間経ち。

……十月が終わろうとしても、政府からの発表は無かったのだっ
た。

第十四話 ラストプレゼント（後書き）

【TIPS】 転移門

二個一セットの転移アイテム。大きさがネックであるが、使い放題で、迷宮の外でも使える貴重な転移アイテムであることから、人類に非常に重宝されているアイテム。

一般人の所持は禁止ではないが、国が金に糸目を付けずに集めているため、入手は実質不可能に近い。

Aランク迷宮の攻略はもちろん、ギルドのシェルターにも相当数配備されており、転移門による疑似的なネットワークにより、全国のギルドと人員及び物資のやり取りが可能となっている。

こんな貴重なアイテムを家と島ごとくれるなんて……アンナパパってすごく良い人なんだね！

第十五話 不意打ち

「なんか、すっかりハロウィーンって感じ」

放課後。

一条さんと二人で八王子の街を歩いていると、街の風景を見た彼女がポツリと呟いた。

彼女の視線を辿ると、そこにはオレンジ色のカボチャ頭が。

そうか……明日は、ハロウィーンか。

それはつまり、俺が冒険者になって一年が経っていたことを示していた。

ふいに、俺が冒険者になった日のことが脳裏に蘇る。

もしあの時、蓮華たちを引かなかったら、今頃俺はどうしていただろうか……。

アングルモアが目前に迫っていることも知らず、東西コンビとのほほんと過ごしていたのだろうか。

……そのままアングルモアを迎えた時のことを想像し、背中に冷たいモノが走る。

改めて、あの時蓮華たちを引けたのは人生最大の幸運だったとしみじみ思う。

あれで、俺の人生は、まさに180度変わったのだから。

「なんか、悪いね。アタシの我が儘に付き合ってもらっちゃってさ」

物思いに沈む俺に、一条さんが珍しくややバツが悪そうに言った。

それに、俺は首を振って答える。

「いや、気にしないで。俺も気分転換になるから」

ここ最近俺は、冒険者部が休みの日に、一条さんと共にDランク迷宮に潜る日を送っていた。

以前、お願いされていた二ツ星昇格のお祝いというわけだ。

当初の話では一回だけという話だったが、俺も彼女がどういった迷宮攻略をしているのか気になっていたこともあり、一回と言わずに一周踏破するまで付き合うことにしたのである。

たまの休みくらい、家でしっかり心身を休めた方が……とは俺も思うのだが、どうにも家でごろごろしていると焦りのようなものが膨らんできて、どうにも落ち着かないのだ。

気分転換になるというのも嘘ではなく、普段Cランク迷宮の過酷な環境に揉まれていると、Dランク迷宮の簡単すぎるくらいの難易度が心地よく感じるのである。

ならば、負担にならないくらいに迷宮に潜っていた方が、精神衛生上良いというわけだった。

「ふうん……でも学校の迷宮の攻略とかも忙しいっしょ？ そっちは大丈夫なわけ？」

「ああ、大丈夫。だいぶ、落ち着いて来たから」

この二か月の攻略で、アンゴルモア対策は結構整ってきた。以下が、新学期からのリザルトである。

カードのドロップ

・Dランクカード合計25枚（その内、人気カード8枚）：すべ

て冒険者部でキープ。

・Cランクカード合計7枚。

ペルセポネー（零落スキル持ち）：ギリシャ神話の冥府の女王。同ランクのセイレーンを無限召喚できる、Cランクでも最高峰の眷属召喚スキル持ち。……なのだが、零落スキルにより眷属召喚スキルを失っている。織部が2億4000万で購入。

レディヴァンパイア：イライザのロスト用の保険に、俺が4500万円で購入。

ドワーフ（2）：エルフと並ぶファンタジーの代表格。優れた鍛冶や工作の腕を持つ。冒険者部でキープ。

雪女：日本人なら知らぬ者はいない女妖怪の代表格。雪や氷のフィールドでは無類の強さを発揮する。今後の女の子カードの値下がりを考え、4000万円にて売却済み。

マジウス：ウィッチの男版。2000万にて売却済み。

ケンタウロス：半人半馬。1500万にて売却済み。

・Bランクカード合計1枚

アレース：ギリシャ神話の軍神。ギリシャ人に嫌われていたのか、碌な逸話がないが、その性能は軍神に相応しい。冒険者部でキープ。師匠が運用。

アイテムのドロップ合計544個

・レアドロップ（29）

紫金紅葫蘆：今回の主であつた金角よりドロップ。名前を呼んだ相手を問答無用で吸い込めて閉じ込めることができる瓢箪。中には毒液が詰まっており、相手を徐々に溶かしていく。閉じ込められる時間は相手の戦闘力に依存し、Dランクモンスター程度なら自力で出る前に溶かしきることが可能。

コールドアイロン（10kg x 2）：魔よけの力を持った金属。壁などに混ぜることで、霊体モンスターのすり抜けを阻害する効果があり、金と同じ価格で取引されている。10kgあたり7000万円で売却済み。

孟婆湯：飲んだ者の記憶を完全に失わせる薬湯。所持禁止類魔道具。買い取り価格1000万円。

白紙のカードの束（3）：売却3000万円

竜の生き血（2）：カードに与えることで、鋼のように硬い身体と高熱への耐性を一時的に与えることができる。冒険者部でキープ。

集中鉢巻：作業の前に頭に巻くことで、一つのことに集中できる鉢巻。一時間持続し、再使用には十分のインターバルを要する。受験勉強に最適。冒険者部でキープ。

バベルのカフス：ありとあらゆる意思を持つ生物の言っていることがわかるようになるカフス。外国人はもちろん、動物や一部の植物などにも使えるが、高度な知能を持っていない生物相手だと大雑把な意思しか伝わらない。冒険者部でキープ。

カードホルダー（2）：冒険者部でキープ。

魔石袋（3）：冒険者部でキープ。

遭難のマジックカード（8）：冒険者部でキープ。うち三枚は、攻略に使用済み。

転移のマジックカード（3）：冒険者部でキープ。

レベルアップのマジックカード（2）：冒険者部でキープ。

・ノーマルドロップ（518）：すべて冒険者部でキープ。

アダーストーン（11）：真ん中に穴の開いた石。幻術や隠れた存在を見抜く力を持ち、穴を通して見ることで透明化スキルや異空間スキルを目視できる。使い捨て。

ポーション類(333)

中等クラス以下の各種マジックカード(174)

カーバンクルのドロップ

・ガネット合計104個。未回収残り6個(Cランク階層スキル封印分6個)

・金色のガツカリ箱

芭蕉扇：西遊記に登場する風を起こす扇。一度扇げば風を呼び、二度扇げば雲を呼び、三度扇げば雨を呼ぶ、という効果を持つ。師匠が4000万で買い取り。

変若水：若返りの水。一つにつき、一歳若返る。回復効果の無いアムリタ。8000万円で売却。

ギューゲースの指輪：自在に姿を消せるようになる指輪。迷宮の外でも使用可能なため、所持禁止類魔道具となっている。買い取り価格5000万円。

アルスルグウェン：別名、アーサー王のマント。透明マントとも。身に付けた者の姿を消せる魔道具。所持禁止類魔道具。買い取り価格5000万円。

惚れ薬：飲ませた相手の自分への好感度を増幅する薬。そもそも好意を抱いていない相手には効果が薄くなる上に、使った際に相手に急速に耐性がついていくため、最終的に破局が約束されている、ある意味呪われたアイテム。それでも悪用しようと思えばいくらでもできるため、所持禁止類魔道具となっている。買い取り価格1000万円。

宝籤のカード(2)：今回は皆で分配せずに、裏で俺がすべて買い取り。

以下、冒険者部でキープ。

アリアドネーの糸：安全地帯で使用することで、迷宮の入り口へと転移できる魔道具。転移先が入り口に限定されているため、使い放題の転移系の魔道具としては安い、それでも一億以上で売れる。道標の手帳：目標を書き込むことで、達成のための手順がスケジュールとして記載される手帳。書かれた通りに行動すれば大抵の目標は達成できるが、自身に出来る能力の限界ギリギリを要求するため、実行には強い意志が必要。

ネームモノクル：相手の名前を頭上に表示してくれる片眼鏡。相手の名前を忘れた時に便利だが、つけていることで逆に「あつ、コイツの名前覚えてないな……」と思われてしまうことも……。

分身の巻物：使えば24時間の間、自分のコピーを一体生み出してくれる。自分の代わりに作業を行わせることができ、その経験や記憶は消失後に本人へと統合される。ただし話したりすることはできないので、人と会う仕事には不向き。一回限り、三巻セット。

完全消化薬：体内の消化効率を上げ、食べた物をすべて吸収できるようにする丸薬。有害なモノは、取り込まれずに分解される。トイレに行かなくて済むため、軍人や冒険者御用達の一品。ただし、太りやすくなるため、使いすぎに注意。

脂肪変換薬：体内の脂肪を筋肉へと変換してくれる薬。生きるために必要な部位から変換されていくため、女性の場合は胸が小さくなってしまうことも……。

代眠の小人：自分の代わりに睡眠をとってくれる小人。眠気の解消や頭の整理は行ってくれるが、肉体の疲労までは回復してくれないため、使い過ぎによる過労に注意。

着火グローブ：指を鳴らすことで、指先に小さな火を出すことが出来る指空きグローブ。ただそれだけの、カッコいいだけのアイテム。中学二年生くらいの男子に人気。

緊急避難のマジックカード

転移のマジックカード(4)

ミドルポジション(29)

ハイポジション(6)

ハズレ(50)

モンスターからのドロップや、ガツカリ箱からアタリからの売却益だけで4億以上。それにカーバンクルガーネットが2億円分に、ヴィーヴィルダイヤでさらに2億円の、合計8億円。

このうち、ガーネットと売却された(あるいは買い取りされた)カードのドロップの分は、各部門たちに配分されるとして、残りのドロップアイテムの売却益により、学校の拠点化に必要な物資は、最低限整った。

あとは異界クラスの異空間型カードをどうにか手に入れたら、時間制限までにどれだけ物資を蓄えられるか……といった勝負になるのだが、実は異界クラスの異空間型カードについては、俺とアンナで密かに確保済みであった。

そのカードの名は、ヘスペリデス。

ギリシャ神話において食した者を不死にするとされる黄金のリンゴがあるとされる果樹園——ヘスペリデスの園を呼び出すことが出来るカードだ。

ヘスペリデスというのは、個体名ではなく複数形で、夜の女神ニクスが生んだ三人のニンフたちの名称である。

そのため、ヘスペリデスは一枚のカードで複数の本体が出現する珍しいタイプのカードとなっている。

日本の妖怪で言うと、カマイタチ鎌鼬などが複数体のカードとして有名だろうか？

鎌鼬は、相手を転ばす役、相手を切りつける役、切りつけた相手に痛みを消す薬を塗る役……とそれぞれ別の役割を持った三匹の鼬が出現する妖怪だ。

一枚で三体も出てくるからには、通常の三倍の強いのかと言えばその逆で、むしろ一体一体は戦闘力が分散されているため非常に弱い。三相女神の逆パターンと言えればわかりやすいだろうか？

三体全員やられない限りロストしないのが、唯一の長所である。そのため複数体のカードは、ランク詐欺と言われることも多いのだが……ヘスペリデスに関しては問題ない。

なぜならば、彼女たちは異空間型カード。本体はむしろオマケで、その真価は、スキルの方にあるからだ。

ヘスペリデスの園は、ゼウスの妻であるヘラが所有する果樹園で、そこには食した者を不死にするという黄金のリンゴを実らせる樹が一本だけ存在する。ヘスペリデスは、その黄金のリンゴの樹を世話するニンフたちに過ぎない。

黄金のリンゴの樹には、さらに護り手があり、それが百の頭を持つことで有名な、かのラドンである。

ラドンはBランク相当の戦闘力を有し、常に黄金のリンゴの樹を守るように常駐している。

仮に倒されても一日で復活し、しかもラドンが倒されてもヘスペリデスの園はロストすることはない。あくまでも本体はヘスペリデスたちだからだ。

黄金のリンゴは、侵入者たちを強烈に惹きつける効果を持ち、モンスターはもちろんマスターを持つカードたちであってもそれは例外ではない。

黄金のリンゴに惹きつけられた侵入者たちの相手をラドンがしている間に、ヘスペリデスたちはどこかに身を隠す……というのが、このカードの基本的戦術であった。

ヘスペリデスの園には、黄金のリンゴの樹以外にも様々な果物を

実らせる果樹が豊富にあるため、食料の供給源としても期待できる。つまり、ヘスペリデスの園は、俺たちが欲していた防衛力と食料供給源を兼ねたカードというわけだ。

ちなみに、黄金のリンゴについてであるが、残念ながら逸話ほどの効果は無い。精々、十年ほど老化を抑制する程度である。

それも魔道具としてドロップした黄金のリンゴの方であり、ヘスペリデスの園で取れる黄金のリンゴに不死の効果は無い。

吉祥天のアムリタの雨もそうだが、若返りだとか不死だとかの効果を持つアイテムと同名のスキルを持つていても、そのスキルに若返り等の効果は、基本的に無い。

基本的に、と言ったのは蓮華のような例外があることを俺が知っているからで、普通は無いと断言される。

ヘスペリデスの園の黄金のリンゴも、食べた者に一度だけ『生還の心得』スキルを24時間付与できる、という効果となっている。

ただ、このリンゴの優れている点は、あくまでスキルではなくカードが生み出すアイテムだということだ。

食料などを生み出すカードが生み出した物は、カードを送還したり迷宮から出て消えたりしない性質を持つ。

つまり、ヘスペリデスの園が生み出す黄金のリンゴ(偽)は、『生還の心得』スキルを付与できるアイテムとしてストックができるのだ。

難点は、一週間に一つのペースでしか実らないこと、収穫後は普通のリンゴ同様腐ってしまうことだが……入れた物が腐らないなんて魔道具はいくらでもある。

そのため、黄金のリンゴ(偽)は、『生還の心得』スキルを付与できるアイテムとしてそこそこ市場に出回っていた。

お値段は一つ百万円。やや高い気もするが、基本的な購買層がプロクラスであること、一つのヘスペリデスの園から年間で50個ほ

どしかり収穫できないことを考えれば、これぐらいはするのだろう。

異空間型カードが値上がっていること、黄金のリンゴ（偽）がそれなりのお値段で売れることも相まって、ヘスペリデスも30億と非常に高額であった。

それだけのお金をどうしたのかというと、それはもちろん新しく宝籤カードで出したBランクカードで賄った。

この一月で、俺は宝籤カードからさらに二枚、新しいBランクカードを手に入れていた。

一枚目は、アレースをドロップしてから二週間後に手に入れた、ヒュドラ。

かのヘラクレスと戦った不死の怪物として有名なドラゴンの代表格であり、逸話通りの不死身の生命力と、ありとあらゆる耐性を貫通する毒を持つ強力なカードである。売却価格は、20億円。

二枚目は、先日金角・銀角を倒した後に引き当てた、スレイプニル。

北欧神話の主神オーディンの騎馬であり、邪神ロキの血を引くれつきとした神獣である。

その八本の脚は、空中も自在に駆けることができ、冥府であるヘルヘイムをも行き来した逸話を持つ。騎獣としては最高クラスであり、異空間移動スキルを持つ優秀なカードではあるが、如何せんBランクでは下位ということもあり売却価格は、6億となった。

合わせて26億とヘスペリデスを買うにはやや足りなかったが、不足分は以前ガーネットとダイヤの買い取り代金としてアンナに渡したディオニュソスの売却益から出した。

元々ディオニュソスの売却価格は、半年分のガーネットとダイヤ代をキープしてもまだ余るし、ガーネットや部員が買い取ったカー

ドの代金の分配は、俺にも当然ある。

というわけで、食料など物資もある程度揃い、異界クラスのカードも確保したことで、今この瞬間にアングルモアが来ても最低限大丈夫なくらいの準備が整ったこともあって、俺も一段落ついたな……といった感じであった。

こうして冒険者部が休みの日に一条さんに付き合うくらい大した負担ではない。

「なら良いけど……この借りはいつかちゃんと返すから」

「別に気にしなくて良いけど。別に無料ってわけでもないんだし……むしろ貰いすぎってどうか」

一緒に潜ると言っても俺は基本的に後方から見ただけだ。

元々、安全にDランク迷宮を体験したいという話だったため、一条さんが危なそうな時だけ手出しする約束となっている。

そのため、ドロップ等も基本的には一条さんのモノで、俺が少しでも手助けした場合は俺が貰う、ということになっていた。

踏破報酬に関しては、コーチ代として俺が貰えることになっており、今のところ一条さんも俺に頼ることもなく順調に攻略を進めているのもあって、今では逆に申し訳なく思っているくらいだった。

「アタシとしては、安すぎと思っただけだね。こうして学校に通いながらDランク迷宮を攻略できるのも、北川の笛のおかげなわけだし」

それに……と一条さんが俺の顔を覗き込む。

「北川が教えてくれるアレも……本当はお金払えば教えてもらえる

つてわけでもないんだろ？」

「まあ、ね……」

俺は、この迷宮攻略中に、軽くではあるがリンクの指導を行っていた。

それは、ただついていくだけで踏破報酬を貰うのに申し訳なく思ったこともあるが、最大の理由は、彼女がリンクに目覚めつつあるのに気付いたからだった。

一条さんのそれは、時々カードの感情が伝わってくる、何を言わずともカードが思い通りに動いてくれることがある……程度のものであったが、間違いなくテレパスの発露の前兆であった。

リンクに関しては、小野にも口頭でその概念と習得方法について教えてはいるが、未だに習得には至っていない。

小野が冒険者になったのは、俺とほぼ同時期であるが、別に奴にリンクの才能が無いわけではない。これが、普通の冒険者という奴なのである。

にもかかわらず、一条さんはわずか三ヶ月足らずという短い期間で、自力でテレパスの習得に至りかけていた。

俺がテレパスを習得したのも二カ月とちょっとくらいであったが、これはハーメルンの笛吹き男との遭遇という危機的状況を乗り越えた経験と、大会中にリンクの存在を知り得たことが大きい。

特に生命の危機を経たわけでもなく、普通に迷宮に潜っていただけの彼女が自力でリンクに目覚め掛けたというのは、恐るべき才能と言えた。

おそらく一条さんならば、俺が特に指導せずともそのうちテレパスを習得できたことだろう。

ならば、ここで教えてあげて恩を売った方が得策というものだった。

「北川ってプロにはなんねーの？ 実力的にはもうプロクラスなん

でしょ？」
「うーん……」

確かに、俺はこれまでプロを目指して頑張ってきた。だが、今となっては、プロを目指す意味が薄れてきたのも事実だった。

プロのメリットは、主に税金面とCランク以上の迷宮に入れることだが、アングルモア後にはそれらのメリットは消える。

文明が崩壊すれば税金なんて徴収できなくなるだろうし、ゲート前の扉についても内側からぶち破られて自由に入れるようになることだろう。

一方で、四ツ星からは様々な義務が増える。

メリットは消え、義務だけが残る……デメリットしかないのだ。

まあ、その義務も無視してしまえば良いだけなのだが、要は四ツ星というか冒険者のランク制度自体が、無意味になる可能性が高いのだ。

ああ、でも、四ツ星になればギルドの避難所に行ったとしてもカードや魔道具の供出を断れるようになるのか。

プロからカードや魔道具を取り上げたとして、それを誰に使わせるのかという話だからな。

むしろ、避難してきた人たちから供出させたカードが回ってくることになるだろう。

それと、後は単純にネームバリューか。

四ツ星という肩書は、人々に大きな安心感を与えるだろうし、四ツ星冒険者の肩書を振りかざすだけで、人々が素直に従ってくれることは多いだろう。

……まあ、でもそれを踏まえてもメリットはないか。

供出はギルドの避難所に行かなきゃ関係ないし、ネームバリューもすでにプロに匹敵するものがあるしな。

そこまで考えて、俺は答えた。

「いつかはなるだろうけど、無理に学生の間にならなくても良いかな」

「ふうん……まあすでにCランク迷宮に潜ってるしね」

「そうそう。それより、今日はいよいよボス戦だけど、準備は大丈夫？」

俺は、迷宮が近くなってきたところで彼女へと問いかけた。

当初の予定では、主は俺が担当することになっていたのだが、これまでの一条さんの戦いぶりを見て、まずは彼女一人でやらせてみることになっていた。

現在の彼女のデッキは、俺が貸した三枚のDランクと、この攻略で得たDランク四枚となっている。

三ツ星への壁と言われるDランクカード六枚の条件こそ達しているが、Cランクカードは無く、俺が貸したカード以外はドロップ品をそのまま使っているため、カード同士のシナジーなどは期待できない。

主に挑むには、些か戦力不足は否めないが、ピンチになったら俺が助けに入れるし、これも経験になると、まずは彼女一人で挑まずことにしたのだ。

「ま、頑張る」

……大丈夫かな。

まあ、いざとなったら俺が助けに入れば良いし、確かになんとかなるか。

むしろ、失敗も貴重な経験……昇格祝いのプレゼントのうちだ。

そんなようなことを考えながら、俺たちは迷宮へと入るのだった。

第十五話 不意打ち（前書き）

【作者からのお願い】

感想への感想は、感想欄が荒れる原因となりますので、ご遠慮いただけると助かります。

他の方の感想を見て、疑問に思った設定などを作者に質問するのは大丈夫なのですが、議論のような形になってしまつと、感想欄ではなく掲示板のようになってしまつので……。

また、感想を書く際も、それを見た方の感情を逆なするような書き方は謹んでいただけると嬉しいです。

どのような感想を持つのも読者の皆様の自由ですが、その感想を他の方も見るということを意識して書いてほしいな、と。それが、感想欄に限らず、顔の見えないネット上での付き合いのマナーかと百均は思います。

極力避けたい事態ですが、皆様が感想欄も含めて作品を楽しめるよう、荒れる方向に向かうと作者が判断した場合は、感想の削除や原因となる読者さまのブロックを行わせてもらう可能性があります。現在、百均のブロックリストはゼロ名ですので、ここに誰も乗らないことを本心から祈ります。

最後に。

作品を読む際、自分にとって不快な感想を書く人をミュートしてみるというのも手かなと、個人的に思います。

ぶつちやけ、百均も好きな作品を読むときは結構そうしてたりします。

せつかく「これ超おもしろー！ この気持ち、みんなと分かち合いたい！」と思つて感想欄を覗きに行つて、真逆の感想を見たら興

ざめですしね。

趣味の合わない人はガンガンミュートして、一旦感想欄を閉じ、ミュートしたことすら忘れてから感想欄を楽しんだりしてます。

戦ってたら切りのない世の中ですので、上手く見ないフリするというのがも生き方の一つかな、と。

もちろん、自分の作品の感想は経験値のために全部眼を通してますけどね。

作品を読む前に、ツマラナイことを言って申し訳ございませんでした。

これからもモブ高生をお楽しみいただければ幸いです。

第十五話 不意打ち

「相変わらず、反則的に便利だね、ソレ」

迷宮に着いてすぐ最下層へと飛ぶと、一条さんがハーメルンの笛を見て羨ましそうな顔をした。

「まあね。これのおかげで、今の俺があると言っても過言ではない」

実際、これが無かったら俺は学生トーナメントで優勝することはおろか、出場することすら厳しかっただろうし、そうなれば師匠と出会いリンクを教えてもらえることもなく、この夏休みでようやく三ツ星になれたかどうかと言ったところだろう。

とは言え……。

「まあ、それも俺が学生だからってのはあるんだけどね」

ぶつちやけ、專業なら泊まり掛けで攻略すれば良いだけだから、そんなに転移アイテムは必要ないっちゃ必要ない。

もちろん、あればクツソ便利なのは確かだが、転移アイテムが必要となってくるのは、Cランク以上の深い迷宮からだ。

Cランク以上の迷宮ともなると、マヨヒガなどのカードがあっても、定期的に地上で休まないと身体よりも先に精神の方がおかしくなってしまう。それは、魔法で定期的に心を癒しても同じこと。基本的に、迷宮はまともな人間が長く滞在できるようにできていない

のだ。

逆に言えば、Dランク以下の迷宮ならば一気に攻略して、あとでゆっくり休めば良いだけの話となる。

「確かにね。……うーん、なかなか主見つかんねー」

話しながらもドローンを使って索敵をしていた一条さんが、ぼやくように呟いた。

俺や冒険者部の面々ならリンクを繋いで斥候要員を出すところだが、リンクを覚えたばかりの彼女にはそれはまだ難しい。

そこで彼女が取り出したのが、このドローンだった。

ドローンを使つての索敵というのは、俺にはなかった発想で、最初一条さんがそうやって索敵していると聞いて感心したものだ。

「アサシン型……かな」

もしアサシン型の主とすれば、ドローンでの発見は難しいだろう。

「俺が索敵しようか？」

「いい。アタシ自身が出て、釣りだす」

そう言つて、一条さんはリビンググアーマーを召喚し、装備した。

アサシン型の主を見つけ出すのは、ちゃんとした索敵要員がいても難しい。

ダイレクトアタックの脅威も、装備化をしているならば半減する。自分を囷にして敵を釣りだす……というのは、乱暴ではあるが解法の一つだった。

俺もそのまま続こうとして、ふと思いとどまる。

———そうだな、一応、俺も装備化しておくか。

俺は、一枚のカードを呼び出した。
現れたのは、女性らしい曲線を描いた鎧を身に纏った首無し
の騎士、デュラハン。

そのままいつもの流れでイライザに装備化しようとする彼女を慌
てて呼び止める。

『待った！ 装備化するのは、俺だ』

『えー！？ マスターと！？』

『ああ、お前もようやくドジを克服したことだしな——ドレス』

俺は、ほほ笑んで彼女の名を呼んだ。

そう、彼女はついにドジスキルを克服し、名前を得たのだ。

【種族】デュラハン（ドレス）

【戦闘力】800（MAX！）

【先天技能】

- ・産声は死の始まり
- ・亡者にも鎧
- ・静寂の馬車

【後天技能】

・運動音痴 精密動作（CHANGE！）

・ドジ 七転八起（CHANGE！）：何度転んでも諦めない挑
戦の精神を持つ。スキルの習得率上昇。精神異常に対する耐性。逆
境時、行動に極大の強いプラス補正。

・不屈の精神：どんな失敗や逆境にもめげない鋼の精神を持つ。
やや学習しない傾向アリ。精神異常に対する耐性。逆境時、行動に
大きなプラス補正。

・ 剣術：刀剣の扱いに特化した武術スキル。 武術スキルと効果重複。
特定行動時、行動に大きなプラス補正。

・ 武術（NEW！）

動きを阻害していた運動音痴のスキルは、動作を補助する精密動作へ。

長らく彼女の不名誉な代名詞となっていたドジスキルは、七転八起というレアスキルへと変化した。

どちらも劇的に強くなるスキルではないが、確実に役に立ち、また今後の成長に繋がるスキルである。

これはまさに彼女と、彼女を導いたイライザとオードリーの努力の成果であり、これを祝福して俺は彼女にドレスの名を与え、彼女もそれを受け入れてくれた。

ドレスの名をつけたのは、彼女が主に女の子カード相手に装備化することを考えてのことであるが、時と場合によってはこうして俺が装備化することもある。

男の俺がドレスというのもおかしいが、まあ、彼女自身の性別も考えてのことなので仕方ない。

『やったー！ ついにこの日か！ このままずっとカード専門のワ
ンポイント要員として使われるのかと！』

イライザではなく、俺が装備すると聞いたドレスは諸手を上げて
歓喜する。

『テンションたけーな……、そんなに嬉しいか？』

蓮華が、呆れ顔で聞く。

『そりやもう！ 装備化スキル持ちの真価が発揮されるのは、マスターとの装備化時ですしね。いやー、キマリスさんが入ってきて、てっきりこのままマスター専用機の座を奪われるのかと……』
『そんなもんか……？ アタシにはよくわからん世界だぜ……』

俺もよくわからない。たぶん、装備化スキル持ちにしかわからない世界なのだろう。

……今後も、俺よりもイライザとかとのセットが多いことは、今は黙っておこう。

『まあ、それはさておき、一条さんも待ってることだし、さっさと装備化しよう』

『了解！』

半透明化したデュラハンが、俺の身体に重なるように纏わりつく
と、そのまま甲冑が具現化。気付けば俺は、全身に鎧を纏っていた。
これが、装備化の感覚か。

なんというか、違和感がないのが、逆に違和感というか。

全身に甲冑を纏っているのに重さは特に感じず、兜越しでも素顔
と同じように視界は開けている。軽く小手を撫でてみれば、鈍くで
はあるが触感もしっかりとあった。

最初の一步目こそ上昇した身体能力に戸惑うも、ドレスと軽くシ
ンクロしたらその感覚のズレもすぐに消えた。

これまではイライザに使用した方が効率なため使ってこなかった
が、なるほど、これは凄い。装備化して自分自身で戦うマスターが、
一定数いるのも頷ける。

軽く準備運動して感覚を馴染ませると、俺は待たせていた一条さ
んへと振り向いた。

「お待たせ」

「別に……っつか、北川って普段装備化使わねーの？」

う、さすがにバレたか。

まあ、俺の動きは明らかに初めて装備化を使う奴そのものだった
だろうしな。

一緒に安全地帯を出ながら答える。

「まあ、カードに使う方が多いかな」

「へえ、勇気あんね」

「勇気？ 俺が首を傾げていると、一条さんは言う。」

「アタシは、装備化無しで迷宮攻略するとか絶対無理だわ」

勝気な彼女らしくない言葉に一瞬驚くも、すぐに納得する。

「まあ、ウチにはイライザさんがいるからなあ。下手な装備化よりも
安心感があるし」

逆に、俺は一条さんみたいに装備化を使って直でモンスターと戦
うとかは無理だ。

最初の頃、警棒片手にゴブリンに挑みかかったこともあったが、
なんて無謀なことをしたのかと今思い返しても肝が冷える思いだ。

俺の言葉に、一条さんも納得したように頷き。

「プレイスタイルの違いってヤツかー」

「そうそう」

「っつか、ならなんで今回は装備化したん？」

「ああ……それは――――」

と俺が答えようとしたその時。

「かおりっち！」

突然、一条さんのカードが、彼女の前に飛び出した。同時に、吹き上がる鮮血。

身を挺してマスターを庇ったのは、粗末な麻の貫頭衣を身に纏った大柄の美女、フェニア。俺が貸した二対一体の女奴隷のカードだった。

腹部を刀で貫かれたフェニアは、しかしその柄をしっかりと握りしめ、文字通り血を吐きながら叫んだ。

「今……！！！」

「死ね、オラアアアッ！」

間髪を入れず、一条さんが見えない敵がいるであろう空間へと斬りかかる。……が。

「あぁッ!?!」

スカッと見事に空ぶった一条さんが、怒りの声を上げた。

「逃げんじゃねー！ 糞がッ！」

フェニアの腹部に刺さった凶器を床に投げ捨て、傷口にポーシヨンを掛けてやりながら、一条さんは周囲を見回して吠える。

「……………」

一条さん、ガラ悪いなー。

吠える彼女を一步離れたところから眺めながら、そんなことを思う。

俺が半ば他人事なのは、戦力的に余裕なものもあるが、敵が俺を襲ってこないとわかってるからだ。

無傷の迷宮のモンスターは、基本的に狙いやすい方を狙う傾向がある。

装備化したマスターと、装備化していないマスターなら後者を。Bランクカードを召喚しているマスターと、Dランクカードしか召喚していないマスターなら後者を……と言った具合に、様々な条件を複合的に判断し、より狙いやすい方を狙うようになってるのだ。

俺が普段しない装備化をしたのも、主の奇襲を一条さんの方に誘導するためである。

これは別に彼女を困にしたわけではなく、むしろ一人で戦った場合の経験を積みたいという彼女の意思を尊重しただけだ。

本来なら彼女一人しかいないわけで、そうなれば必然的に奇襲されるのも一条さんの方になるからである。

……とはいえ、その意図を説明する前に奇襲されてしまったわけだし、ここは少しだけアドバイスを送ってあげようか。

「一条さん。敵ならもう見えてるよ」

「ッ!? ……クソッ! そういうことかよ」

怪訝そうな顔で俺を振り返った彼女だったが、すぐに答えに思い至ったのか、バツと床に投げ捨てた剣の方を見た。

すると、バレたかと言わんばかりに、血まみれの刀がふわりと宙に浮く。

透明化や気配遮断のスキルが有効なのは、一撃を与えるまでだ。

奇襲後に刀が姿を現したのは、そういうわけであり、逆に刀以外に姿を現す敵がいなければ、それは刀こそが敵の本体というわけだ。

しかし……と宙に浮く刀を見て、密かに思う。

——付喪神とは、なかなか珍しいモンスターだ。

付喪神は、少々特殊な装備化モンスターである。

その能力は、物品への憑依。既存の物品に憑依することで、モンスター化することができる。

迷宮で出てくる付喪神は、大抵迷宮が用意したのであろう剣や鎧に憑依した状態で出現してくるのだが、カードとしてドロップした場合は、こちらの好みで憑依するアイテムを選べる。

その際、元となったアイテムの能力は、そのままスキルとして引き継がれる。

つまり、イライザが持つダインスレイヴに憑依させた場合、その回復障害と戦闘力アップの効果をそのままスキルとして持った付喪神となるというわけである。

当然付喪神自身もランク相当の戦闘力を持ち、マスターや他のモンスターへの装備化することもできる。

難点は、カードに取り込まれてしまうので迷宮の中でしか使えなくなってしまうこと、消耗品に憑依させると使い切った瞬間にロストしてしまうこと、別のアイテムに憑依替えると前のアイテムは消え去ってしまうことか……。

少々癖はあるが、魔道具をスキルとして取り込むことができるというユニークなカードだった。

もしドロップしたら面白いことになるかも、と思いつつ一条さんと付喪神の戦いを見守る。

「……ッ！」

人間ではありえない軌道から斬りかかってきた付喪神に対し、一条さんは一歩下がって冷静に剣で受け、はじき返す。

そこへ、メニアが強烈な蹴りを叩き込むも、くるりと身を翻した付喪神が刃で受け止め、鮮血が舞った。

……武器そのものが本体の敵に、格闘は厳しいな。

「フェニアとメニアは無理に前に出なくて良い！ グロツティの歌を！」

一条さんもそう思ったのだろう、双子の奴隷たちを後方へ下げ、残りのDランクカードたちと共に自分が前へと出る。

そのまま激しく剣戟を交わす。

「おいおい、すげえな……」

思わず、ポツリと呟く。

Cランクの付喪神相手に、Dランクのリビングアーマーで互角に打ち合っただけ。

膂力と速度で勝る付喪神に対し、無駄のない動きと先読みで対等に渡り合う一条さん。

道中でその腕は見せてもらってはいたが、ワンランク上の敵とも戦えるレベルだったのか……。

ただ、惜しむべきは……。

俺は、彼女の残りのDランクカードを見た。

ライラプス、オーク、ユニコーン、ジャック・オー・ランタン……。

この攻略中に得たそれらのカードたちは、前衛・後衛・補助とバランスよく揃ってはいるものの、付喪神と一条さんの応酬を前に手をこまねいているだけで、碌に助けに入れていない。

それはカードたちが悪いわけではなく、純粹に付き合いの浅さからくる連携不足と……なによりも一条さんが上手くリンクを使えていないことに原因があった。

彼女は、手に入れたばかりのカードでリンクを使えるだけのレベルには、まだない。

ここでテレパスだけでも使えたら、一気に形成は傾くのに……。そう思いつつも、まだ一条さんには難しいか……と考えていたその時、四枚のカードたちが突然戦いに参加した。先ほどまでの動きが嘘のような、一心同体の連携。

「これは……！」

間違いない、これはテレパスの動き。

ここにきて、テレパスを使えるようになったのか。しかも、自身も戦いながら！

しかし、なぜ急に……。

そう疑問を抱いた俺の視界に、光る白を挽くフェニアとメニアの姿が映った。

そうか、グロツティの歌のバフにより、リンクに意識を割く余裕が出来たのか。

見たところ、ラインを繋げるのは同時に四枚程度が精いっぱいのようなが、それでも他のカードが連携に入れるのは大きい。

勝利の天秤は急速に彼女へと傾いていき、やがてライラプスが付喪神の刀身を噛み砕いた。

同時に、糸が切れた人形のように一条さんが、へなへなと力なくへたり込む。

「おめでとう！ お疲れ様！」

俺は駆け寄り、スポーツドリンクを差し出した。

装備化を解除しながら受け取り、勢いよく呷る一条さん。

改めて見ると、彼女はまるでフルマラソンを走ったかのように全身にぐっしょりと汗を掻いていた。頬に張り付いた金髪が、ちよっ

とセクシーである。

一気にペットボトル一本飲み干した彼女は、ぷふうーと息を吐き……。

「はぁー！ 生き返った！」

「すごいな、実質一人でDランク迷宮踏破じゃん。しかも……」

俺は地面に落ちたカードに眼をやった。

「まさか、カードもドロップするとは……」

「マジ！？ ラッキー！」

言いながらチラリと蓮華を見るが、小さく首を振って返される。
「……」

道中のドロップ率も良かったし、生まれつき運のよいタイプなんだろうか。

「……」

「え？」

何気なく渡された付喪神のカードを受け取り、俺は首を傾げた。
「……」

「あげる。今回のお礼」

「え？ ……いやいやいやいや、さすがに受け取れないわ。俺は手出ししてないし」

「受け取ってよ。元々そういうつもりだったしさ。アタシは、今回手に入れたリンクの技術とDランクカードだけでジューブン」

「いや……やっぱ、受け取れない。俺にもプライドがあるしね」

契約では、一条さんが一人で倒して得たモノは彼女のモノ。俺の取り分は踏破報酬と、俺が手出しをしたモノという約束だった。

付喪神に関しては、一言アドバイスを送っただけで、一条さんが一人で倒したのだから、これは明らかに彼女のものだった。

やっぱり踏破報酬が欲しいと言われても渡せないように、この付喪神を貰うこともできない。

「んー……じゃあ、リビングアーマーとフェニアたちを売ってよ。それなら良いっしょ？」

「フェニアたちを？」

「うん。アタシも、結構コイツらに愛着湧いてきてるしさ」

そう言っつて、微笑みあう一条さんとフェニアたち。

それを見て、俺も少し考えてみる。

ふむ……。現在の付喪神の市場価格は、四千万円ほどだったはず。一方でフェニアたちの市場価格は、大体二千万から三千万の間と言ったところか。

付喪神をギルドで売った場合の値段は二千万から三千万ちよつとと言ったところだから、一条さんからしてみればギルドで付喪神を売ってから、俺からフェニアたちを買うのも同じということになる……。

とはいえ、CランクカードとDランクカードでは、ギルドの買い取り価格に大きな差があるのは事実。

やはり、フェアナトレードとは言い難い。

なにより、アングルモアが迫る中、クラスメイトからCランクを巻き上げるといふのは、あまりに気が引ける。

……そうだ、こつこつのはどうだろうか？

「あー、じゃあこつこつのはどうだろう。付喪神とフェニアたちはトレードする。その上で、付喪神を一条さんに新しくレンタルする

つてのは」

「付喪神を？」

「うん。それで、一条さんが付喪神を欲しくなったら、フェニアたちと同じ値段で付喪神を売るよ。レンタル料も、フェニアたちと同じってことで」

これならば、そんなに不公平なトレードでもないだろう。

「あー……うー……」

一条さんは、しばし悩むように付喪神のカードを見ていたが、やはり初めて手に入れたクレジットカードには愛着があったのか。

「じゃあ、北川がそれで良いなら……それで」

「うん」

「あー！」

一条さんが地面に大の字に寝っ転がる。

「これでようやく貸し借りゼロにできると思ってたんだけどなー」

「……貸し借りに拘り過ぎじゃね？」

あるいは、俺に借りを作りたくなかったか。……だとしたら結構シヨック。

「単純に、モヤモヤすんだよね。誰かに借りを作ってたままだとさー。こっ見えても夏休みの宿題はさっさと終わらせてから遊ぶ派なんで」
「あー」

なるほど、その気持ちは少しわかる。

「ま、俺への借りは、物とか金じゃないので返してよ」「
……もしかして、マジでカラダでのお返し狙ってる?」

……ネラツテナイヨ。

俺はそつと目を逸らしたのだった。

「ん?」

踏破報酬を回収し、迷宮を出たところで、俺は街が妙に騒がしいのに気付いた。

街中というのは、常にある程度の喧騒に満ちているものだが、目の前のこれは些か日常のそれと様子が違った。

どこか焦りがあると言うか、恐怖を感じるというか……。

そこで、ちょうどポケットのスマホが震えた。

何気なく画面を見て、ギョツと眼を見開く。

「なんじゃ、こりゃ……」

携帯の待ち受け画面には、百を超える着信や、SNSの通知が表示されていた。

これは、いよいよただ事じゃないぞ……。

「……なんかあつたん?」

「わからん」

着信の内、三割ほどはアンナのモノで、俺はとりあえず彼女へと

折り返しの電話をかけた。

「もしも『先輩ツスカ！？』」

こちらが一言目を言う前に、食い気味にアンナが叫んだ。

『何してたんスカ、もー！ ずっと連絡してたんスよ』

「ごめん。迷宮に潜ってたんだよ」

『……休みの日まで潜ってるとか、さすがにヒくんスけど。って、そんなこと今はどうでも良いツスカ！』

アンナは、スツと一息吸って……そして、言った。

『――――星母の会が、クダンの予言を発表しました』

第十五話 不意打ち（後書き）

【TIPS】マイナーチェンジ

同ランクの別種族のカードを消費して種族を変更、同種族のカードでステータスの上書きをすることをマイナーチェンジと呼ぶ。

ランクアップ同様、元となったカードの容姿の一部と自我を引き継ぎ、熟練度と運次第でスキルを引き継ぐことができるが、後者の同種族による上書きの場合、完全にステータスが上書きされる。

普通の冒険者にとって余りにメリットが少なく、ランクアップ以上に利用する者が少ないため、その存在自体を知らない者もいる。

第十六話 十七夜月アンナの焦燥

『——このようなことを突然言って申し訳ございません』

ノートパソコンの四角い画面の中で、白い美少女が頭を下げている。

『ですが、この動画をご覧の皆様にとっては突然の事と思われるかもしれませんが、我々にとっては、これは少なくとも二か月は前のことなのです』

髪も服も肌も白い中、唯一赤い目に怪しい光を宿しながら、巷で聖女と呼ばれる女は言う。

『我々も、当初は、しかるべき方々に任せるべきと考えていました。その方が、社会的混乱も少なく、もつとも良い時期に発表されることになるだろう……と』

かすかに眼を伏せ……。

『しかし、待てど暮らせど、その時が来ることはなく、二か月の時が経った今、我々はこう判断せざるを得ませんでした。……このままでは、発表よりも先に悲劇が訪れかねない。社会に混乱を招くことになるうとも、人々が準備をする時間を与えるべきだ、と』

聖女は悲痛な表情で、訴えかけるように言う。

『このようなことを突然言っても、すぐには信じてもらえないかもしれません。我々の過去の過ちにより、星母の会自体を信じられない方もいらっしゃるでしょう。ですが、これだけは信じてください。――このクダンの予言は、真実なのだということを……』

そこで、アンナは動画の再生を止めると、嘆息するように言う。

「まずいことになりましたね……」

星母の会によるフライング発表の翌朝。

俺たち冒険者部の面々は、授業前に部室に集まって緊急会議を行っていた。

議題は、もちろん聖母の会の発表と、それがもたらすであろう今後の影響について、だ。

影響については、すでに出ている。

昨日の帰り道の時点で、ギルドには予言の真偽とカードを買い求める人々の長蛇の列が並び、スーパーやドラッグストアでは食料品や医薬品等が枯渇。なぜかマスクやトイレトペーパーまでが店頭から消えた。

政府にも問い合わせが殺到し、急遽用意された専用HPは数分もしないうちにダウン。

一秒ごとに高まっていく政府への批判に対し、総理による緊急記者会見が開かれ、正式なクダンの予言の発表が行われたが、なぜ隠蔽していたかの具体的な説明はなく、炎上はさらに加速する結果に終わった。

今朝出かけにみたニュースでは、偉そうな肩書を持ったコメンテーターたちが、親の仇のように政府を批判、罵倒していた。

「何がマズイって、これで政府の信頼が地に落ちたことですよ。な

んせ、二か月以上もの間クダンの予言を隠蔽していたわけッスからね。……政治屋たちの馬鹿さ加減によっては、総理の辞任を求める可能性すらあります」

「……いくらなんでもそれはないだろ」

この一分一秒を争う状況で、総理を交代させてなんの得があるというのか。

なにも無能な人間から順番に総理に選んでいるわけではないのだ。一刻を争うこの状況での足の引つ張り合いは、百害あって一利なしなのは、政治の素人である俺ですらわかる。

日本が滅んだら次の選挙で議席取っても何の意味もないんだし……と笑う俺に対し、アンナは冷めた表情で首を振って見せる。

「わかりませんよ。シエルターの中で政治ごっこを続けるつもりなら、今のうちにライバルの足を引つ張っておこう……そんなようなことを考える馬鹿もいるかもしれせん」

「……………」

「ここで、そんな馬鹿いるわけがない……と胸を張って否定できたらどれほど良かったことが。」

「星母の会め、余計なことを……とは、さすがに言えぬか」

織部の言う通り、星母の会が先走ったというには、政府の動きがあまりに遅すぎた。

俺たちもそうだが、予言の事を知る人間は相当焦っていた。星母の会が発表しなくとも、早晩他の誰かから暴露があっただろう。

しかし、それにしても……。

「なぜ政府は、隠蔽の理由を言わなかったんだらうな……………」

せめてちゃんとした理由を話せば、ここまでの騒ぎにはならなかっただろうに……。

そんな俺の呟くような疑問に答えてくれたのは、師匠だった。

「たぶんだけど、外交が絡んでいるんじゃないかな？」

「外交？ ……そうか」

カードの相場を見るに、日本だけでなく世界各国でクダンの予言があった可能性は高い。

つまり、クダンの予言を隠蔽していたのは日本だけではないということ。

その裏には、世界各国で連携してのアンゴルモア対策が行われていたのだろうが、それを素直に言うわけにはいかない。

おそらくは今日中にでも、アメリカを筆頭に世界各国が、クダンの予言の発表を行うことだろう。

泥をかぶってくれた日本に感謝をしながら……。

「で、これからどうする？」

師匠が言った。

「そうだ、重要なのはソレだ。」

発表がここまで遅れた理由は気になるが、より大事なのは自分たちが生き残るためには何をすべきかだった。

「……発表こそ予想外のところからでしたが、結局我々がやることは変わりません。幸い、食料品等の物資に関しては粗方集め終わっているのです、これからはカードや魔道具を中心に狙っていきましょう」

「ガーネットに関してはどうする？」

これからは、カーバンクルガーネットは資金源とならないのではないか。

そう問いかける織部に対し、アンナは平然と答える。

「ああ、それに関しては心配しないで。すでにガーネットの売り先に関しては契約済みだから、少なくともアンゴルモアが始まるまでの分は、これまで通りの相場で捌ける」

「ふん？ なるほど……」

織部は、少しだけ怪訝な顔をしたものの、特に何も言わずに頷いた。

ここはあまり深くツッコまletakないところだったので、俺は内心でホッと胸をなでおろした。

「それよりも、この後皆さんクラスメイトからクダンの予言について聞かれると思いますが……」

「わかってるよ。知らなかったフリをすれば良いんだろ？」

みなまで言うな、と俺たちは頷いた。

「はい。……そんな噂を聞いたことはある、くらいのことと言っても良いツスけど、まさか本当とは思わなかったとか、適当にはぐらかしてください。絶対に、予言を知っていたことは秘密に」

「ふむ……。もしクラスメイトたちに、冒険者部に入りたいと言われたらどうすれば良い？」

「……そうだね。放課後にはたくさん入部希望者が殺到すると思うけど？」

「それは――――」

とアンナが答えかけた時、ちょうど予鈴のチャイムが鳴った。

「もうこんな時間ツスか。とりあえず冒険者部に入りたいと聞かれ
たら部長に聞いてくれとウチに回してください。では、また放課後
に」

そうして、朝のミーティングは解散となった。

それからは大変であった。

予想通り、俺たち冒険者部員の元へ、クラスメイト……いや、他
のクラスの生徒たちすら殺到した。

朝のHRと担任のヒヨリちゃんを無視しての質問攻め。

「星母の会の発表は本当なのか?」「予言の内容は、アングルモア
を意味しているのか」「アングルモアが来たら、どうすれば良いか」
その中には、当然「予言のことは事前に知っていたのか」という
ものもあった。

休み時間の度に襲来してくる質問者たちに、俺はトイレに行く隙
すら見いだせず、小野がさりげなく助けてくれなければ、失言か小
便のどちらかを漏らしていたことだろう。

なんとか放課後を迎えた俺たちを待っていたのは、大量の入部希
望者の群れであった。

入部希望者の数は、優に百を超え、当然ながらライセンスもDラ
ンクカードも持っていない生徒が多かった。

彼らの目的が冒険者になることではなく、アンゴルモアでの戦力、あるいは俺たちの庇護を求めていることであることは、明らかであった。

だがアンナは、今度は彼らを門前払いにせず、全員の面接を行うことを宣言した。

以前はライセンス持ちであつても追い返していた彼女のこの方向転換に、チャンスを見出した生徒は多く、部室の前には連日長蛇の列が並んだ。

そんなようなことをしていたら当然迷宮攻略をする時間などあるわけもなく、その間の攻略は、アンナ抜きでのものとなった。

予言の存在が知れ渡つた今、かつてのように門前払いすれば反感を買う。形だけでも一通りの面接を行う必要がある。そこから有望そうなだけ拾い上げれば良い……と、この時点では俺たちも不満はなかった。

それから一週間後。

迷宮攻略に専念していた俺たちが気づいた時には、わずか四名しかいなかった冒険者部は総勢60名に膨れ上がっていたのだった。

「はえ〜……先輩このニュース見てくださいよ。政府が国民全員にEランクカード一枚とFランクカード五枚の配布を決定ですって。なんか急速に世界が変わっていきますねー」

「……………」

笑顔でそんなスマホのニュースページを見せてくるアンナに対し、俺は眉を顰め無言で返した。

「あれ？　なんかご機嫌斜めツスカ？」

こちらのあからさまに不機嫌な様子を見たアンナが、可愛らしく小首を傾げる。

そんな彼女に、俺は言った。

「お前、ちょっと最近強引すぎるぞ」

俺は今、部室で彼女と二人つきりになっていた。

副部長として、最近のアンナの行動にやや思うところがあり、織部と師匠に先に帰ってもらい、二人で話せる時間を作ったのだ。

俺の言葉に、アンナは少し考え答える。

「ふむん……カードの貸し出しの件ツスカね？」

俺が無言で頷くと、アンナはやや困ったように頬を掻いた。

「えーっと、でも先輩にだけはあらかじめ言っておきませんでしたっけ？　先輩も良いつて……」

たしかに、俺にだけはアンナから事前に連絡があった。

部員数は結構増やすかもしれません、と。

俺もそれにわかったと答えていた。

だが……。

「いくらなんでも、入部希望者の半分以上を入れるのはやり過ぎだ」

俺が想定していたのは、まずはライセンス持ちを中心に、二軍として有望そうな奴を十数人程度受け入れ、それ以上は段階的に増やしていくというもの。

一気にこれほどの数を増やすのは、さすがに予想外だった。

「しかも、カードまで貸し出して……」

新規入部者のうち、ライセンス持ちはわずか十名ほど。残りの五十名弱は、当然カードも金も無く、そんな彼ら彼女らに、アンナは冒険者部でキープしていたDランクカードを貸し出し、さらには冒険者登録料すらも彼女が負担していた。

部でキープしているDランクカードは、共有物である。それをろくに知らない奴らに貸し出すことに対して、さすがに他の面々から苦言というか心配する声が上がったが、アンナはこれをすべてのDランクカードを彼女が買い取るという形で、押し通した。

アンナの所有物を貸し出したわけだから俺たちが文句を言う筋合いはないのだが、この急速な勢力の拡大には、元々排他的な性質を持つ織部はもちろん、師匠ですらも眉を顰めていた。

自勢力を作る、というアンナの野心があまりに剥き出しだったからだ。

とはいえ、俺が問題としているのは、部員数の急激な拡大でも、アンナの野心についてでもない。アンゴルモアを前にしてアンナと他の中核メンバーとの間に亀裂が入ってしまうことだった。

なので、他の二人には先に帰ってもらい、こうして副部長として抗議というか牽制をしに来たというわけだった。

「んー、あー……ごめんなさい！　なんか、ちょっと思い違いがあったみたいです。でも、とりあえずはウチの考えを聞いてもらっても良いツスか？」

「ああ」

「ありがとうございます。……我々は、この二か月ほどの努力と、なにより先輩のおかげでかなりの戦力を揃えることに成功しました。おそらく、我々だけでも第二フェイズまでは余裕でこの拠点を防衛

できるでしょう。そんな我々にとって、もつとも足りていない物がなにかわかりますか？」

もつとも足りていない物？

単に足りていないというならば、すべてが足りないと言えるが、もつとも足りていない物が……。

「……時間、とか？」

そう俺が答えると、アンナは苦笑した。

「確かに、それもウチらにとって一番足りていない物ツスね。答えは、召喚枠ツス」

なるほど……。俺は深く納得した。

どう足掻いても手に入らない物を除けば、確かに俺たちに最も足りないのは、ソレだ。

アンゴルモア中の召喚枠は、フェイズに関係なく十二枚となっている。これは、Aランク迷宮に準ずる。

つまり、第三フェイズまでは冒険者は、むしろ迷宮よりも有利な状況で戦えるということなのだが、一般人を守ることを考えるとこの十二枚という召喚枠はあまりに少なすぎた。

俺が仮に召喚枠すべてをBランクカードで埋めたとしても、一人で学校の皆を守りきれるかと言えば、それは間違いなく不可能だ。

それは、三相女神や軍勢召喚のスキルを持ったカードがあったとしても同じことだ。召喚枠という制限がある限り、どうしても一人に出来ることには、限界があるのだ。

その問題を最も手っ取り早く、かつローコストで解決しようと思えば、なるほど、召喚枠すなわち人手を増やすのが手っ取り早い。

この方法の最も良いところは、保護要員をそのまま防衛力に回せることだ。

保護要員が傷つくリスクを減らしつつ、戦力を増やせる。まさに一石二鳥。
問題は……。

「持ち逃げや、敵前逃亡に関してはどうする？ それと、暴走のリスクは？」

その人材が、信用できるかということ。

カードを貸したからと言って、大人しく従ってくれるとは限らない。最悪、カードという力を得たことで増長し、保護すべき人々に逆に横暴に振る舞う奴も出てくることだろう。

いや、必ず出てくる。

「前者に関しては、これからアングルモアが起きるまでの間に見定めていくつもりです。明らかに持ち逃げしそうな奴は面接の時点で弾いてますし、臆病者に関してはカードを没収していきます。契約書にもそう書いてますしね。暴走に関しては、これを見てください」

そう言ってアンナが差し出してきたのは、新入部員のリストだった。

名前と学年と性別、それに貸し出したカードを記入しただけのシンプルなものだったが、それを見て俺はすぐにあることに気づいた。

「……女が多いな」

リストのうち実に三分の二ほどが、女子だった。

「新入部員に関しては、女子を優先して取るようにしました。これ

で、少なくとも性的な暴走に関してはある程度防げるんじゃないかな、と思つてます。女子の眼があれば、馬鹿なことをする男子も減るでしょうし、まあ、いざとなれば処分するだけのことです」

処分……。極刑じゃないツスよね、アンナさん？

ま、まあ、これで少なくともある程度の横暴についてはセーブが利くか。逆に、女尊男卑的な風潮ができないかが心配ではあるが、そこはまあ、なんとかなるだろう。

というか……。

「小野はともかくとして、一条さんも入部したのか……。それに、東野と西田、神道も」

リストの一番上の方には、俺が良く知る面々の名前が載っていた。一条さんに関してはそんなに驚きはないが、東西コンビや神道に関しては寝耳に水だったのでちょっと驚いた。

「先輩の知人については、ほぼ無条件で合格にしました。レンタルするカードについても良いのを回すつもりツス」

どうやら村度させてしまったようだ……。

「この名前の横のマークはなんだ？」

リストの中には、無印と、○印、○の中には小の字が入った者がチラホラと見受けられた。

「ああ、それはライセンス持ちツス。小の字が入っているのは、小野さんからレンタルしたカードで冒険者になった人たちツスね」

「ふうん、なるほど……。小野派つてことか」

見ると、小野派はライセンス持ちの約半分ほどを占めているようであった。

学内の冒険者の総数は、元々十数名ほどでいたはずであったから、こうしてみると元々のライセンス持ちは、その過半数以上が冒険者部へは入らなかつたということになる。

「……お前、どんな門前払いの仕方したん？」

「ちょ、ウチのせいじゃないツスよ。普通に、相手のプライドを傷つけないように断りましたって。今は普通に様子見してるだけじゃないツスか？」

カードを持ってない奴ですら入部できるんだから、ライセンス持ちなら諸手を上げて歓迎されると思ってるのだから。

……こう言つては何だが、時勢を見る力がないな。

むしろライセンス持ちが優遇されるのは、今の時期だけだということ。

「まあ、アンナの考えはわかつた。召喚枠が必要というのは、俺も同意見だ」

FランクやEランクカードの中にも、便利なスキルを持つものが多い。たとえばブラウニーやシルキーなんかは、迷宮攻略よりも日常生活で輝くカードの筆頭だ。戦力とはならずとも、避難所生活を快適にしてくれることだろう。

少数精鋭では、それらのカードを有益に活用できないのは、俺も問題と思つていたところだった。

「ただ、次からちゃんとみんなに相談してからにしてくれ。理由さえ話してくれれば納得するんだから」

「そう……ツスね。ちょっと、いや、かなり焦ってたのかもしれない
せん」

「焦り？ なるほどな……」

確かに、アンナが焦る気持ちもわかる。

当初の予想では、一か月程度で政府の発表があると思っていたのが、二か月。しかも、別の場所から暴露されたわけだからな。

本来は、部員たちと意思疎通を取りながらも少し段階を踏んで増やしていく予定だったのが、計画を早回しにせざるを得なくなり、結果として事を性急に見せてしまったということか。

そう想像した俺だったが、しかしアンナの焦りの要因は単なる時間の問題ではなかったよう……。

「政府の発表がここまで遅れた背景について想像すると、どうしても……ね」

「……………」

政府、か。

確かに、政府の動きについては不安を覚えざるを得ない。

一週間経った今でも、発表が遅れた理由については黙秘してるしな。

……ひよつとしたら、星母の会の発表がなかったら、まだ黙秘してて、誰かが暴露するまで秘密にするつもりだったんじゃないかとすら思ってしまうくらいだ。

そして、それは日本だけでなく世界全体の話で、決して仲良しこよしとは言い難い国を含めてそこまで密に連携を取っていたというのが、もはや不気味としか言いようがなかった。

国が頼りになるかわからなくなってきたことで、ただでさえ不透明だったアンゴルモア後の未来が、ここにきてさらに予測が困難になっている。

その焦りは、俺の中にも、いや、全国民の中にあつた。

……もしかしたら、このアンナの暴走とも言える行為も、単純な勢力の拡大というよりは、少しでも多くの生徒に最低限自衛の力を与えてやりたかっただけなのかもしれない。

勢力化のことを考えれば、少数による全体の統制が一番リスクもなく効率的なわけだからな。このカードをばらまくようなやり方は、むしろ彼女の勢力化という目的に反していると言える。

男子より女子を優先しているのも、戦力よりも自衛力を重視している証明だ。

というか、これ、もしかしてアンナなりに俺の意向を尊重した結果だったりするんだろうか？

家族と友人が最優先、余裕があれば学校の皆も……という会議の時の俺の言葉をアンナなりに実行した結果が、これなのかもしれない……。

そして、今回のことで気づいたことが一つある。

それは、どうもアンナは報連相を怠る癖があるようだ、ということ。なまじ頭の回転が速く、行動力がある分、突っ走る傾向があるというか……。

いや、一応報告や相談とかはしてるのか。ただ、それに幅を持たせているだけで。

まあ、それで深く聞かずにOKサインを出した俺にも問題あるんじゃないかな。

真リーダー云々はいまだにピンとこないが、副部长としてもうちよい深く聞いておくべきだった。

アンナも悪かったし、俺も悪かったということだな。

まあ、俺もアンナも、所詮は高校生。ちゃんと社会に出たこともない身で、組織運営の真似事をしているのだから檻褸はろが出るのも無理はない。

お互い、これから成長していけば良いのだ。
……その時間があれば、の話だが。

「ところで、先輩に一つお願いがあるんすけど……」
「ん？ なんだ？」

自分のことを棚に上げて注意から入ってしまったこともあるから、
ちよつとしたことなら聞いてやろう。

そんな思いで問うた俺に、アンナはまるでコンビニにお使いを頼
むような気軽さで言う。

「ちよつと四ツ星昇格試験受けてきてもらっても良いツスカ？」
「はあ？」

俺は突然の話に、呆気にとられた。

「四ツ星って……」

そんな簡単になれたら苦労しないし、なにより……。

「今さら四ツ星になるメリットあるか……？」
「まあ、そうなんですけどね」

とアンナはため息を一つ吐き。

「実は、神無月先輩がちよつと一時離脱するかもしれないらしくて
……」

「え！？ ……やべえじゃん」

「ヤバいツス。マジヤバです。最初聞いた時、ショックのあまりア
へ顔ダブルピースするかと思いましたがよ」

「どんなショックの受け方だよ」

とはいえ、実際これはかなりヤバイ。語彙力が貧相になって、ヤバイしか出て来なくなるくらいヤバイ。

なんせ、師匠が離脱したら、当然Cランク迷宮にも入れなくなるわけ。今後の計画も大きく崩れることになる。

「えー、理由はなんでって？」

「言えない、というか知らないそうです。どうしても断れない筋から、もしかしたら呼ぶかもと言われたそうで……」

「マジか……」

師匠が断れない筋となると、お姉さん絡みだろうか？

アンゴルモアを前に、渡世の義理なんて無視するか、あるいはその前に貸し借りを清算しようとするかは人それぞれだろうが、師匠は間違いなく後者の人間だろうしな……。

そういう人間だからこそ信用してアレースの運用を任せてるわけだし。

「それっていつからいつまでよ？」

「うーん、いつからの方は、早くて一か月後くらい。いつまでの方はちょっとわからないそうです。……アンゴルモアが始まったら即合流するそうですが」

果たして本当に戻ってこれるのか、戻ってきてくれるのか……。

「一か月後か……」

「なんで、先輩にはそれまでの間に四ツ星になってもらえたら、と」
「うーん、話は分かった」

だが……と、俺は申し訳なく思いながら言う。

「正直、厳しい……」

「……やっぱ、そうツスよね」

「ああ。実技の方はなんとかなるにしても、その、筆記の方がな」

俺も筆記試験の勉強はしているも、これが予想以上に難しい。

四ツ星の筆記試験の合格に必要な勉強時間が、平均して凡そ50時間ほどとされている。これは宅建士などの資格に匹敵する難易度だ。

実技だけならともかく、筆記含めとなると厳しい……というか絶対に無理だった。

ところが、そんな俺に対しアンナはキョトンと首を傾げると。

「ん？ 実技の方は大丈夫なんスか？」

「ああ……まあ、たぶんなんとかなると思う」

通常のCランク迷宮よりも遥かに困難なウチの学校の迷宮に潜るうちに、俺も多少なりとも冒険者として成長した実感がある。

今の俺なら、パワーアップした蓮華の能力もあれば、なんとかソロでのCランク迷宮踏破も不可能ではないはずだ。

そんな俺の答えを聞いたアンナは、喜色を浮かべパンと手を叩いた。

「おお！ じゃあ、イケるじゃないツスカ！ 筆記の方はウチがクリアしてますからね！」

俺は思わず「あつ！」と声を上げていた。

すっかり忘れていたが、このアンナは、筆記試験をすでにパスしていたのだ。

しかし……。

「お前、よくあの試験を中学の時に合格できたな……あつ」

そこまで言つて、俺は気づいた。気づいてしまった。

コネ……か。

「な、なんスカ……あつ！　つて！　言つときますけど、完全に努力の賜物ツスからね！　一応国家試験の一種なんで、コネとか不正とかは通用しないんで！」

それもそうか……。

「つてか、お前あの試験合格できる頭があるのに、なんでそんな頭……というか成績悪いの？」

「……いや、そこまでストレートに言われると普通に傷つくんすけど。あの試験を合格したのに成績悪いというか、合格したから成績悪いというか……」

「ああ……なるほど」

……学校の勉強を生贄に捧げて、試験に合格したか。

考えて見りゃ、冒険者やりながら500時間も他の勉強してたら、そりゃあ学校の勉強も疎かになるつてもんだ。

基礎となる中学の範囲が身についていないのだから、高校の範囲も当然理解できるはずがない。

頭の回転自体は速く記憶力も悪くないアンナが、赤点を取っているのは、単にやる気の問題と想っていたが、実際は四ツ星試験の勉強のせいだったのだ。

「ま、いまはその話はいいや。実技はなんとかなりそう。筆記はア

ンナがクリアしてる。となるとあとは踏破実績となるが……」

「ん〜……それに関しては大丈夫だと思います。実は、近々四ツ星昇格試験が簡略化されるって話でして」

「え？ マジ？」

「ええ……まあ、まだ表沙汰にはなっていない話ではあるんすけど、まあ、まず間違いないと思います。どうも、国も少しでも四ツ星を増やしたいらしく、Dランク迷宮の踏破実績は十個に、筆記試験もカードギアの持ち込みを可にするとかしないとか」

「えー……カードギアの持ち込み可とか、めっちゃ簡単になるじゃん」

「そうなんすよ！ こちとら学校の成績を生贄にしてまで合格したつてのに！」

机に拳を打ち付けて悔しがるアンナ。

まあ、気持ちはわかる。

カードギアには、ダンジョン内での揉め事を解決しやすいよう六法全書もインストールされている。

そのカードギアが持ち込みとなると、試験の難易度は一気に自動車の免許くらいまで落ちる。

学校の成績を犠牲にし、おバカキャラのレッテルを貼られたアンナからすれば、腹立たしいにもほどがあるだろう。

「そこまで簡単になるなら、俺一人でも四ツ星に合格できそうだな」

ぶっちゃけ、一番のハードルだった試験がカードギア持ち込み可になるなら後は実技さえ超えてしまえば四ツ星になったも同然だ。

「うーん、それはちょっと待ってもらえませんか？ 神無月先輩の

離脱の件、これって四ツ星なことが絡んでる気がするんすよね……」

「ああ……なるほど、それは確かにありそうだな」

四ツ星を招集しなくてはいけない何かがあり、それに師匠のお姉さんのラインから声をかけられた……そんな感じはする。

となると、俺が四ツ星を取っても、師匠と同じように招集される可能性もあるわけで、それでは意味がない。

「……とりあえず、詳しいことがわかるまでは実技までに留めておくか」

「それが無難だと思います」

あと問題点は何があったかな……そうだ！

「俺が別行動になるなら転移とかガーネットの回収はどうする？
というかそもそも学校は？」

俺が別行動している間は、当然ハーメルンの笛による効率的な攻略もできなくなる。俺も、いくらハーメルンの笛があっても学校を通いながら試験を受けるのは厳しいものがある。

「ガーネットの回収に関しては、ウチも宝探しの能力を持ったカードを手に入れたんで大丈夫ツス。学校に関しては……ぶっちゃけもう真面目に授業受ける必要ないでしょ。学校もこうなったらとやかく言ってこないツスよ。というわけで、これからは授業を休んで泊りがけで迷宮に潜るんで、ハーメルンの笛がなくても一月くらいならなんとかなります」

「なるほど……」

たしかに、予言が発表された以上、バカ真面目に授業を受ける必要はもうないか。

一か月や二か月学校を休んだって留年しないしな。

……しかし、これでカーバンクルリーダーことキマリスさんもお役御免か。いよいよ本格的に運用を考えないとな。

そのまま使うか、トレードするか、あるいはデュラハンのランクアップに使うか……。

「……それと、先輩が試験のために別行動している間のドロップについてなんですが」

「む、そうだな、そこはちゃんと決めておかないとな」

同じ冒険者部ということで戦利品はすべて分配するのか、あるいは別行動中は手に入れた隊の物とするのか……。

「試験中、先輩が手に入れたカードについては、先輩の物にしちやってください。その代わりに、学校の迷宮で手に入れたカードについては、こちらで分配させていただきます。ただし、ガーネットや金色のガツカリ箱からのドロップについては、冒険者部の都合で先輩に別行動してもらわなければならないから、先輩にも分配します」

なるほど……ドロップについては手に入れた隊の物か。まあ、別行動中の隊が何をいくつ手に入れたかの把握は難しいし、その記録も煩わしいしな。

そして、一番の懸念だったガーネットの分配は、冒険者部都合の場合は分配有り、自分都合の場合は分配無しか。つまり、今回の場合だと俺はチーム都合だからガーネットを貰えるが、個人都合で離脱する師匠はもらえないって形だな。

ちょっと師匠がかわいそうな感じもするが、個人都合で離脱している人にまで分け前を与えていたら、他の人員に不満が溜まるだろうから、ここら辺はシビアに定めていくべきだな。当然、アレースのように冒険者部の共有物に関しても、持ち逃げ防止のために置いていってもらわなければならないだろう。

「ま、これは建前ツスけどね」

ふむふむと頷いていたら、アンナが聞き捨てならないことを言い出した。

「建前？」

「はい。べつに、別行動なんだろうがドロップは公平に分配しても良かったんスけど……この方法なら先輩が手に入れたカードは先輩の物に出来るでしょう？」

そう言って意味深に笑うアンナ。

それで、俺もようやく彼女の意図を理解した。

「……ああ、なるほど、そういうことか」

「そういうことツス」

つまり、せつかく別行動になるんだから、思う存分自分の戦力を強化してこいってことか。

たしかに、冒険者部で行動している間は、せつかくBランクカードをドロップしても皆の共有財産になるからな。

それでアンゴルモアでの生存率が上がるなら俺としては何の不满もなかったのだが、アンナとしては気になる部分だったのだろう。

たしかに、考えてみれば、これは魅力的な話だ。

昇格試験の一月間は、Cランク迷宮と特殊型迷宮を一つ、独占できる。

当然踏破してしまえば試験はそこで合格となってしまうが……逆に言えば主さえ倒さなければ、欲しいカードの主が出るまでリセマラできるということ。

残念ながらCランク迷宮の方は、ローグライクダンジョン（ルー

ト日替わり変則型)でもない限り一発勝負となってしまうが、特殊型迷宮の方は、俺のデッキの弱点を突くか、強みを上回ってくるカードが出てくるから、ランクアップ用のカードが手に入る可能性はかなり高いだろう。

しかし、一か月か……。

運命操作をした時のみ見える謎の闇。それは、かなり間近に迫りつつある。

たぶん後二か月くらいはあるとは思うが、それでも闇自体が近づいてきたり離れたりにしているため確実ではない。

これがアングルモアかはわからないが、その可能性はかなり高いだろう。

その前になんとか特殊型迷宮にまた行っておきたいと思っていたので、これは渡りに船な話だった。

「わかった。……試験中に、一回り成長して戻ってくるよ」
「期待します」

アンナはそう言って、ニッコリと笑ったのだった。

第十六話 十七夜月アンナの焦燥（後書き）

【TIPS】カードの生み出したアイテム

カードが生み出したアイテムは、基本的にカードに戻した後や迷宮を出た後も物質として残る。

中には植物だけではなく、牛や豚などの動物すら無から生み出すカードすら存在する。

そうして生み出された食物は、当然ながら人間が食べても何の問題もなく、中には特殊な効果を持つモノもある。

ヘスペリデスの園が生み出す黄金のリンゴ（偽）もその一つだが、迷宮から出現する同名の魔道具と比べて効果が著しく落ちる。

そのため、こうしたカードが生み出した魔道具は、迷宮産の魔道具と区別するために疑似魔道具と呼ばれる。

これらのアイテムは、売る際にちゃんと疑似魔道具であることを明記することが義務付けられているが、見た目が同じであること、食べないと効果の真偽が分からないことを利用した詐欺は後を絶たない。

第十七話 自分たちのよく知る駅やビルの地下に謎の空間がある
ってワクワクするよね

翌日。俺は八王子駅の冒険者ギルドを訪れていた。
理由はもちろん、四ツ星昇格試験の申し込みをするためである。

四ツ星試験の実技試験は、大きく分けて三つ。

Cランク迷宮の単独踏破、Dランクの特殊型迷宮の踏破、そして
……プロ冒険者との対戦だ。

このうち前者二つは、ネットで申請すれば当日から潜り始めるこ
とができるが、最後の対戦については試験官の事情もあるため予約
制となっていた。

今日は、ついなのでこの予約もしてしまうつもりだった。

「……おや？ 北川さんお久しぶりです」

「重野さん！ お久しぶりです！」

カウンターで四ツ星昇格試験の申請をしていると、懐かしい人と
再会した。

俺が冒険者になった時の担当者であり、学生トーナメントの時に
はリンクの存在を教えてくれた恩人——重野さんである。

「今日はどいつだった御用ですか？」

「あ……四ツ星昇格試験の申請を」

「おお！」

俺がそう言うと、重野さんは頬を緩めた。

「あの北川さんが、ついに四ツ星昇格試験を……。月日の流れってものは早いものですねえ、つい先日にも冒険者になったばかりと想っていたのに……」
「ははは……」

俺の感覚からすると冒険者になったのは、遙か昔のことなんだけどな……。

まあ、考えて見りやまだ一年しか経っていないわけで、重野さんからすればつい先日なのかもしれない。

「ふむ……そういうことなら、実技の方はせつかくなので私が担当しましょうか？」

「え？」

「私も一応プロライセンスは持っているので」

「えーっと……」

突然の提案に俺が戸惑っていると、重野さんは声を潜めて囁くように言う。

「……正直、普通に申請するとかかなり時間がかかるかと。アンゴルモアが始まるかもということ、試験官が中々見つからないんですよ」

「あー……」

なるほど、言われてみれば、アンゴルモアが迫るこのタイミングで試験官やっている暇なんてみんな無いか。

試験官がいくらもらえるのかは知らないが、金銭的には雀の涙だらうしな。クエストなんて半分ボランティアみたいなもんなわけだし。

俺は重野さんへペコリと頭を下げた。

「すみません、お手数ですがお願いできますか？」

「もちろん。ではいつにしますか？ 北川さんさえよければ、この後すぐでも大丈夫ですが」

「この後すぐできるんならこちらとしても助かりますけど……試験つてそんなにすぐ終わるんですか？」

「ええ、まあ、北川さんならすぐ終わると思いますよ」

「じゃあ、今受けたいんですけど……」

「では、こちらに」

「頑張ってくださいね」

受付のお姉さん（お世辞）に笑顔で見送られ、重野さんとエレベーターに乗る。

重野さんがそのままカードキーのようなものを翳すと、ボタンを押さずともエレベーターは下降していく。

回数を表すメーターが、最下層である地下一階を過ぎてもエレベーターは止まらず、それから優に三階は下ってからようやく停止した。

「ここは……」

エレベーターを降りた先にあつたのは、優に体育館数個分はある広大な空間だった。

一面無機質な鋼鉄に覆われ、壁にはいくつもの扉が並んでいる。

奥には広い通路も見え、さらに同じような空間が連なっているのが窺えた。

「ここは、アンゴルモアの際の避難所……シエルターです。最大十万人収容でき、材質は霊体モンスターのすり抜けを阻害し、クラン

クモンスターの攻撃にもある程度耐えることができるようになって
います」

へえ……ギルドが避難所になっているのは知っていたが、こんな
に広大な空間になっていたとは……。

「あの扉は？」

たくさん並ぶ扉の内、三つだけ赤く塗られた扉を指差す。どうも、
東京・立川・高尾と書かれているように見えるが……。

「あの扉は、転移門が置かれた小部屋と繋がっています。転移門は
それぞれのシエルターと繋がっていて、人員の調整や……万が一こ
のシエルターが落ちた際の避難ができるようになっていきます」
「なるほど……」

ある程度ギルド間で移動ができるようになってきているのか。これな
ら別々のギルドに避難した家族との合流も可能だし、人員や物資の
調整ができるなら、一か所に人が集まってパンクするリスクも減る。
なかなか考えられているな。……カードや物資の供出を求められ
たり、色々ときき使われそうなことを除けば、結構魅力的に見えて
きた。

……しかし、なんでシエルターに案内されたんだろうか？
そう内心で首を傾げていると、赤い扉の横にある部屋へと案内さ
れた。

扉には、シミュレーションルームと書かれている。
中へと入ると、そこは教室ほどの広さで、SFチックな機械があ
ちこちに設置されたドーム状の空間となっていた。

「こちらは、カードのビジョンを実物大で表示できる部屋となります。まあ、カードギアの部屋版みたいなものですね」

「へえ……」

俺は興味深く部屋を見渡した。

こんなものが密かに開発されていたのか。まるつきり、カードギアの進化系じゃないか。

……いや、違うか。元々はこちらがメインで開発されていて、その研究成果をカードギアに流用したのだろう。

「立体映像なので触れることはできませんが、ビジョン同士は互いに干渉することができます。そして、その強さは、カードのステータスによります」

「それって……」

「ええ……安全に戦闘シミュレーションができるということです。ちなみに、リンクも使えるようになっていますよ」

なるほどね、俺がここに案内された理由がわかった。

「では、これを」

そうやって重野さんが手渡してきたのは、三枚のカードだった。

種族は、三枚ともフランクカードのゴブリン。

「これは？」

「試験用のカードとなります。私も同じ種族でスキルにも差がないものを使用させていただきます」

ふむ……そういう形式か。

てつきり手持ちのカードで戦うのかと思っていたが、どうやら純

粹にマスターの腕を見るテストのようだ。

……「リンクも使えるようになっていきます」ね。なんとなく、どういうテストが予想できる。

「……その顔ですと、どんなテストか予想がついたみたいですね」
「ええ……まあ、リンクがどのくらいできるのかを調べるテストなんでしょう？」

「はい。本来ならば、この試験ではじめてリンクについての情報が開示されることになっています。Dランクまでならともかく、Cランクからはリンクがなければ通用しませんからね。……もっとも、このレベルまで来る冒険者ともなると、元々知っているか、リンクという名称を知らずとも使いこなしている人が多いですが」

例外は、資金の力でごり押ししてきたような人くらいです。と肩をすくめて見せる重野さんに、俺はさもありなんと頷いた。

「では、カードの所有権を登録したら、そこに立っていただけませんか？」

言われるがままに三枚のゴブリンの所有権を登録し、部屋の中央付近で重野さんと向かい合うように立った。

「テストの第一問は、リンクの存在を知っているかをその動きから測るものなのですが……北川さんにはその必要がないから飛ばすとして、第二問であるシンク口の強度を測らせてもらいます。それでは普段迷宮できるようにカードを召喚してみてください」

その通りにしてみると、俺の前に半透明の三体のゴブリンが出現した。

「おお……なんかSFっぽい」

「わかります、なかなかワクワクするシチュエーションですよ。では私のゴブリンたちと手四つで組んでください。プロレスのあれです」

俺はゴブリンたちとリンクを繋ぐと、その通りの恰好をさせた。

「第二問は至ってシンプルです。私のゴブリンを力でねじ伏せたら合格となります。それでは、はじめ！」

合図と共に、ゴブリンたちへのシンク口率を上げていく。

30%、40%、50%……。

こちらがシンク口率を上げるのに合わせて重野さんもシンク口率を上げているのか、ゴブリンたちの力は完全に拮抗している。

その均衡が崩れたのは、俺のシンク口率が60%を超えたあたりのことだった。

まず、重野さんのゴブリンの内一体が、ガクリと膝をついた。

次いで、70%を超えたところでもう一体も膝をつく。

そこで意識を一体に集中させたのか、シンク口率は80%、90%どんどん上がっていった。

そしてやがてゴブリンとのシンク口率が99%……フルシンク口に達したところで、ふいに重野さんがシンク口を解いた。

相手のゴブリンに怪我をさせぬよう、慌てて力を抜く。

「お見事！」

その言葉に、俺もシンク口を解いて、大きく息を吐いた。

「手に入れたばかりのカードでこれだけのシンク口が使えるなら文句なしのプロクラスです。……まさか、冒険者になって一年程度で

「ここまで成長するとは」

「ありがとうございます。これで、合格ですか？」

「はい。リンクの実技に関してはこれで合格となります」

これで終わりか。

本当に、あっという間に終わったな。

「では、私はこれで」

「今日は、本当にありがとうございます」

ギルドのフロアに戻って、別れの挨拶を交わす。

「いえいえ。……これから大変でしょうが、なんとか生き残りましよう」

「はい！」

そこで、重野さんがポンと手を打ち鳴らす。

「そうだ、よければ連絡先を交換しておきませんか？ 私も実はロードギアを持っているんですよ」

「連絡先、ですか……？」

俺は思わず考え込んでしまった。

そんな俺を見て、重野さんが言う。

「……もしかして、アンゴルモア時のギルドからの協力について引っかかってたりします？」

「あー……アハハ」

笑ってごまかすしかない俺に、重野さんが苦笑する。

「安心してください。これは100%私用ですから。公務員重野ではなく、重野個人としてのものです。お約束いたします」

……まあ、私用ってことなら良いかな。最悪、何言ってきたも無視できるしな。

連絡先の交換を終え、ギルドを後にする。

駅ビルを出たところで時計を見ると、わずか三十分ほどしか経っておらず、時刻はまだ昼前だった。

『んで、これからどうする？ さっそく迷宮に行くのか？』

蓮華が問いかけてくる。

『いや、今日はこの後人と会う予定があるから、攻略はその後だな』

……とはいえ、約束の時間までは少々余裕がある。

特殊型迷宮の主をチェックするくらいの時間は、あるかもしれない。

試験用の特殊型迷宮は、以前レースの終着点にもなった清土鬼子母神堂である。

待ち合わせ場所である水道橋とも近いし、ちょっと寄ってみるとしよつ。

一発でお目当ての主が出れば、今後のCランク迷宮攻略も楽になるのだが……。

そんなようなことを考えながら、電車を乗り継ぎ、向かった特殊型迷宮であったが……。

「む……………」

主の姿を見た俺は、わずかに落胆した。

……ハズレ、か。

思わずそう口にしてしまいそうになり、慌てて口を閉じる。それだけは、絶対に口にしてはならない単語だった。今までどれだけその力に助けられてきたというのか。

たとえ、狙っていたカードではなかったとはいえ、そんな恩知らずな言葉だけは、決して言うてはならない――！

「なんだ、ハズレか」

「つてお前が言うんかい！」

せつかくこつちが気を遣って口には出さなかったというのに……！
そんな俺に蓮華はキョトンと首を傾げ。

「なんだよ、ハズレじゃねーの？」

彼女が指さす先には、もはや見慣れたと言っていい二柱の女神の姿があった。

特殊型迷宮の主。それは、またもや吉祥天と黒闇天だった。

「それとも、今回もアレが狙いだっただのか？」

「いや、まあ、違うんだけどさ……」

俺は、微妙に気まずい思いで否定した。

吉祥天と黒闇天は、決してハズレではない。むしろアンゴルモアでのロストの可能性を考えたら何枚でも欲しいカードだ。

……だが、今は他のメンバーを強化できるカードの方が欲しい、
というのも事実だった。

最善は、複数のメンバーを纏めてランクアップさせられる三相女神。次点で、単体でも大幅強化できるカード。それが、条件だった。

「なんだよ、じゃあハズレじゃん」

とはいえ、その吉祥天当人である蓮華に言われると、それで良いのかとも思ってしまう。

吉祥天という種族にプライドは無いのだろうか？

「……ダブル吉祥天なんてさせねーよ」

「ん？ いまなんて？」

「なんも？ ホラ、お目当てのじゃなかったんだから、さっさと行くぞ」

「イタツ！ わかったから蹴んなつての！」

俺は、蓮華にケツを蹴られながら迷宮を後にした。

……ダブル吉祥天は無し、と。

そう心のメモ帳に刻みながら。

それから一時間後。

「や、北川くん。久しぶり！」

「お、お久しぶりです……砂原さん」

俺は、都内の喫茶店にて砂原さんと会っていた。

お互いの予定が合わずのびのびになっていたヘケト、その受け渡しをするためである。

アングルモアが始まれば、こうしてカードを渡すこともできない。そのため、俺たちはなんとかこうして会う時間を作ったわけだが……。

「砂原さん……その恰好、寒くないんですか？」

俺は、半裸状態のファラオファッションの砂原さんに、恐る恐る聞いた。

「うん。エアコンペンダントを使ってるからね」

ああ、そりゃそうか。

……だが、なんとも寒々しい格好だ。

「ま、季節には合わない恰好なのは認めるよ。でもしょうがないよね。日本は、ファラオに合うファッションが少なすぎる」
『相変わらずイツちゃってんな』

平然と肩をすくめる砂原さんに、蓮華が呆れたような、感心したような声で言った。

まあ、いろいろと凄い人だよな。

とりあえず、今日の本題を片付けてしまおう。

俺は、ヘケトのカードを取り出した。

「あの、コレ……約束のカードです。遅くなって申し訳ありません」

「ああ！ ありがとう」

砂原さんはヘケトのカードを大事そうに受け取ると、笑った。

「遅くなったのはこっちの都合もあるから気にしないでくれ」

「そう言ってもらえると助かります」

俺はホッと内心で胸をなでおろしながら頭を上げた。

これで用事は済んだが、ハイさようならではあまりに味気ないの

で、軽い雑談を交わす。

お互いの近況から入り、どういう風にアンゴルモア対策をしているのかとか、政府の対応についてなどの話から、話はだんだん日常のふとしたことへと流れていった。

「よくママチャリに付いてるチャイルドシート。あれにたまにカバー一つについてることあるだろ？」

「あー、ありますね。雨よけのヤツ」

「うん。あれって母の愛そのものだよな」

「母の愛……ですか？ まあ……」

「だって、後ろに乗ってる子供はカバーのおかげで雨に濡れないけど、それを漕いでる母親はズブ濡れなわけだろ？ 自分は濡れても我が子は絶対にカバーする。まさに母の愛だと思ってさ」

「なるほど……確かに言われてみれば、母の愛そのものですね」

「この前、雨の中自転車を必死に漕いでるお母さんを見て、ふとそう思ってた。今までは視界に入っても何も思わなかったんだけど、予言の発表以来そういうのが妙に目に付くようになってねえ……」

「……………」
「北川くんは、子供のころチャイルドシートに雨よけカバー付いてた？」

「ウチは……そうですね、付いてました」

「おっ！ 母の愛だねえ。……守ってやりなよ」

「はい」

そんな話をしつつ、頼んだ飲み物がお互い無くなりかけてきた頃、俺はどうしても聞きたかったことを最後に聞くことにした。

「ところで、砂原さんはなんでもピラミッドを造ってらっしゃるか…………？」

「おー！ 良く知ってるね」

「実は友人が砂原さんのバイトに参加してて。……小野っていうんですけど」

「ああ！ 小野君ね！ 彼は良かったよ、いろいろと気が利いてねえ。あれはどこ行っても出世するタイプだね。間違いない」

「その、どうしてピラミッドを？」

「ふむ……どうして、か」

砂原さんは、ティーカップを置いて真剣な顔で話し始めた。

「きっかけは、うちのカードの一枚が、やたら神殿を欲しがったことだ」

「神殿を？」

俺の脳裏にアテナの顔が過った。

……結構神殿を欲しがる神のカードは多いんかな？

「最初はそんな金も無いしスルーしてたんだけど、ちょうど良い迷宮を見つけてね。材料も迷宮内で手に入るし、俺もピラミッドを前から作ってみたかったこともあって、ちょっと造ってみることにしたんだ」

ちょっと作ってみたかった程度でピラミッドを造っちゃうのは凄いな。

「……で、実際に作ってみたら、ちょっと面白いことが分かった」「面白いこと？」

「うん。……ここからは、オフレコにしてほしいんだが」「はい」

姿勢を正し、真剣に聞く態勢を取る。

「北川くんは、簡易神殿というスキルは知ってるかな？」
「ええ、陣地系のスキルですよ。神属性を特に強化する」
「そうだ。……ところで、簡易とつくということは、簡易じゃない神殿も存在すると思わないか？」

まさか……！

俺の反応を見て砂原さんは、満足げに頷く。

「……俺は思うんだよ。カードが妙に欲しがる物っていうのは、単なる趣味嗜好による物じゃなく、自分の欠けた部分を埋める物で、それを無意識に欲しているんじゃないか、ってね」

零落スキルを持つカードは、キーアイテムとなる物を強く求める傾向がある。

もし、それが零落スキルだけの話じゃなかったら？

自分の力を発揮するために、それに相応しい『場』を必要とするカードもいるとすれば……？

「ま、どういう効果があるかは、実際に造ってのお楽しみってことで。……君が神殿を造ることがあるかはわからないけどね」

「いえ、非常に参考になりました。ありがとうございます」

「ははは。役に立ったなら良かった」

「……もしアンゴルモア中困ったら、ウチの高校に来てください。そこを拠点に活動する予定なんで」

「へえ……それは頼もしい。なら俺のピラミッドの場所も教えておこうかな。あんまり大勢だと困るけど、家族と友人くらいなら受け入れられる余裕はあるからさ」

「ありがとうございます」

まさか、アテナがしつこく求める神殿に意味があったとは……。考えてみれば、神が力を発揮するのに、これ以上相応しい場はない。

そして、神殿の効果が世間に知れ渡っていない理由も頷ける。

カードのためにわざわざ神殿を建築してやるうなんて奇特な人が、砂原さん以外にそういるとは思えないからだ。

研究者などは神殿を造ったりしないだろうし、知っている人たちもそれを言いふらしたりはしないだろう。

それにおそらくだが、ただ神殿を造るだけではダメなはずだ。

アテナが神殿の他に求めた物は、もう一つある。

それは、信徒……すなわち信仰だ。

それも、アテナという種族ではなく、彼女個人（個神？）に捧げられるものではなくてはならないはず。

かつて、アテナが俺へと言った言葉がふいに蘇る。

……殉教者、か。

俺は、砂原さんが去った後も、一人思案に暮れるのだった。

第十七話 自分たちのよく知る駅やビルの下に謎の空間がある
ってワクワクするよね（後書き）

【TIPS】ビジョニコロシウム

カードギアの原型にして、上位モデル。

いわば部屋丸ごとのカードギアで、実寸大のビジョンを出すことができる。

ビジョンは、人や物に触れることはできないが、ビジョン同士で干渉することは可能であり、リンクを繋いで戦わせることもできる。元々は、迷宮外での『安全で安定した』カードの召喚（＝カードの軍事利用）を目的として開発された試作品。残念ながらビジョンに実体を持たせることはできなかったが、リンクの練習としては最適であり、軍での安全なトレーニングマシンとして正式採用された。いずれは専用の施設を全国に配置し、よりスポーツ性を高めた次世代のモンコロとなることを期待されていたが、残念ながら日の目を見ることはなかった。

今は、アンゴルモア時の避難民の戦力化を見越して各ギルドに少数ずつ配備されている（四ツ星試験での使用は、カモフラージュとリンクのデータ取りを兼ねてのこと）。

PS：この小説を面白いと思ってくださったなら の方にあるツイッターの方もよろしく願いします〜（．．．）

第十八話 もっと今を大事にしたらどうだ？

「よくさあ、バトル漫画とかでやたら重い服を着たりする修行があるじゃん？」

「迷宮の安全地帯。休憩中に俺は、ふと蓮華へと話しかけた。

俺の言葉に、タブレットで漫画を読んでいた蓮華も顔を上げて答える。

「あー、あるある。重い甲羅を背負ったり、全力で靈力を放出し続けないと満足に動けなくなるヤツだろ？」

「そうそう、ソレ。……俺、今さあ、それを実感してるわ」

冒険者部の皆と別れ、四ツ星昇格試験を受け始めてから十日後。

俺は、早くも38階層まで到達していた。

「いやあ……こうして普通のCランク迷宮に潜ると、学校の迷宮が如何に地獄だったのかがわかるわ」

迷宮のフィールドは、何の変哲もない地下迷宮型で、無駄に広大な砂漠も、視界が白く染まるほどの吹雪も、一步足を踏み外したら即死確定のマグマも流れておらず、小部屋での戦闘なので敵の数も限定的。戦闘のタイミングも自分で選べる。

メイン効果こそ衰弱デバフとやや鬱陶しいが、それは持続回復魔法で相殺できるし、何より厄介なスキル封印の階層がほとんどないのありがたい。

メインルートの階層数も40階層と少なく、複数回廊でもないこともあって、たった十日で踏破寸前まで来ることができた。

四ツ星になるための最大の関門であるCランク迷宮の単独踏破が、約十日……。

「いつの間にか俺ってこんなに強くなってたんだなあ」

「なーに言ってるんだ？」

俺がしみじみと頷いていると、蓮華が後ろからのしかかってきた。そのまま俺の首を腕で締めるようにして、言う。

「強くなったのはお前じゃなくて、アタシらな」

「ぐ……」

ニヤニヤと厭味つたらしく笑う蓮華に、しかし俺はぐうの音も出なかった。

実際、こんなにも楽にここまでこれたのは、カードたちの成長のおかげが大きかった。

ランクアップして大幅にパワーアップした蓮華はもちろんのこと、この数か月でレギュラーメンバーのすべてが新しいスキルを取得するなどの成長をしていた。

その中でも、とりわけ大きく成長したのは、この四枚。

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】1680（MAX！）

【先天技能】

- ・ 膏血を絞る
- ・ 夜の怪物
- ・ 中等攻撃魔法

【後天技能】

- ・フェロモン
- ・奇襲 暗殺（CHANGE!）：攻撃時、相手に気づかれていない場合、相手の防御力を割合で無視し、ダメージに+補正。
- ・献身の盾
- ・精密動作
- ・高等補助魔法
- ・魔力強化
- ・詠唱短縮
- ・直感
- ・フィンの親指
- ・限界突破（NEW!）

【固有技能】

- ・マイフェアレディ（教導コピー中）：敵味方の内一体の後天スキルを一つコピーすることができる（？） 絶対服従、多芸、明鏡止水を内包（？）
- （多芸：新米メイド メイド（CHANGE!）、演奏、畏解除、武術、騎乗（NEW!）を内包する）
- （メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包）
- （騎乗：乗り物や動物の操縦に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正）

【種族】ライカンスロープ（ユウキ）

【戦闘力】1600（MAX!）

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

- ・ 忠誠
- ・ 小さな勇者
- ・ 真なる者
- ・ 限界突破
- ・ 真眷属召喚
- ・ 縄張りの主
- ・ 高等忍術
- ・ 騎獣（NEW!）：人や物を乗せやすい体勢を維持したまま、普通に動くことができる。騎乗スキルを持つ乗り手のステータスに自身の攻撃力と俊敏性を加算することができる
- ・ 物理強化（NEW!）：物理的な攻撃の威力を強化する。
- ・ 見切り（NEW!）

【種族】サキユバス（メア）

【戦闘力】1000（MAX!）

【先天技能】

- ・ 巫山の夢
- ・ 胡蝶の夢
- ・ 淫魔の肌

【後天技能】

- ・ 小悪魔な心＋一途な心
- ファムファタル（CHANGE!）：時として相手を破滅させてしまうほどの魔性の魅力をもった運命の女。その種族の限界値まで容姿を美化する。マスターへの好感度でステータス増減。自由行動に対する極めて強いプラス補正。精神異常無効。

- ・友情連携
- ・中等魔法使い
- ・高等状態異常魔法
- ・人を呪わば穴二つ
- ・生還の心得
- ・霊格再帰
- ・耐性貫通
- ・詠唱短縮
- ・高等攻撃魔法（NEW！）
- ・魔力強化（NEW！）
- ・魔力回復（NEW！）

【種族】ドラゴネット（マイラ）

【戦闘力】590（MAX！）（390 + 霊格再帰分50 × 4）

【先天技能】

- ・小竜玉：生命力を生み出し貯蓄する竜の心臓。
- ・竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。

・竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をプレスとして吐き出すことで、魔法の範囲・威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。

【後天技能】

- ・零落せし存在 霊格再帰（CHANGE！）：ドレイク（480）、ワイバーン（450）、バジリスク（430）、東洋龍（420）。数値は、初期戦闘力。

- ・滅私奉公
- ・初等魔法使い
- ・新米メイド（NEW！）
- ・戦術（NEW！）：戦術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。

まず、特筆すべきは、イライザの固有技能の定着と、限界突破の習得だろう。

レース以来、俺はマイフェアレディの発動安定化に努めてきた。その甲斐あって一月も経ったところには安定して発動できるようになり、さらに一月も経つとカードに固有技能の表示が定着した。

以降は、俺がリンクしてない時でも他のカードのスキルをコピーし続けることが可能となり、試しに限界突破をコピーさせ続けたところ、ついに限界突破のスキルを習得するに至った。

これは、二重の意味で朗報であった。

一つは、コピーしたスキルであってもちゃんと熟練度が蓄積されること。もう一つは、限界突破が熟練度で習得できるスキルであることが、これで証明されたからだ。

つまり、時間はかかるが俺の持つすべてのカードに限界突破のスキルを覚えさせることも可能だということだ。

今はその第一段階として、イライザに教導スキルをコピーさせ、習得させようとしているところだった。

残りの三枚についても、ユウキとメアもそれぞれいくつもの新しいスキルを習得してくれたし、そして何より、これまで頑なに名づけを断っていたドラゴネットが、ついに名づけを受け入れてくれ、四つの霊格再帰を手に入れた。

名前の由来は、ギリシャ神話の怪物キマイラから。複数の霊格再帰先を持ち、いくつもの姿と能力を使い分ける彼女には、かの怪物の名が相応しい。

四つの霊格再帰を得たことで戦闘力もその分上昇し、零落スキルにより失われていた竜息と初等魔法使いのスキルを取り戻し、さらにイライザの指導により複合スキルである新米メイドを得た。……
戦術は、趣味の将棋が高じたのだろうか？

竜のブレスは、ドラゴンを強種族たらしめている強スキルである。自身の魔法スキルをブレスとして撃ちだすことができるこのスキルは、通常は詠唱が必要となる魔法を、息を吸って吐くという二工程まで短縮し、その威力・範囲ともに強化できる。

戦闘力も500を超え、霊格再帰も含めれば一軍メンバーたちに混ざっても見劣りしないレベルとなった。

この他にも蓮華がドジスキルを解消したり（残念ながらドレスのように上位スキルには変化しなかった）、鈴鹿が地味に気配遮断スキルを新たに覚えたりしているのだが、特に大きい変化となるとこの四枚となる。

故に、この快進撃はカードのおかげ、と言われたら決して否定できないのだが……。

「いやでも、俺も成長はしてるだろ？ マルチシンクロも結構できるようになってきたしさあ」

モンコロレースの時は、同時に三枚程度しか維持できなかったマルチシンクロだが、今ではなんとか八枚同時にシンクロできるようになっていた。

枚数を三枚程度に絞れば、フルシンクロさせることも可能だ。

カード……特にイライザさんの成長と比べればささやかではあるが、俺もちゃんと成長しているのである。

「ま、頑張りは認める」

それは蓮華もわかっていたのか、あっさりとそう頷いた。

「だろ？」

「だがお前のドヤ顔が気に入らない」

酷すぎない？

「お前、なんかちょっと怒ってない？」

「別に？」

いや、確実に怒ってる………というか拗ねてる反応だろ、それは。なんかしたかな、と俺が考えていると、スススと寄ってくる影があった。

「そのちんちくりんは、最近あの赤毛の人間にばっか構って、私たちに構ってくれなかったことを拗ねてるんだよあ」

「あ………」

あ、あゝ！ そういうことか。

そう言えば、前もこんなようなことあったっけな。あれも確か冒険者部を作ろうとしてた頃だったか。

「拗ねてねーよ！ それはお前だろ！」

「あだ！ ひーん、クソガキが暴力振るうよー！」

かすかに頬を赤くした蓮華にローキックを喰らった鈴鹿が、わざとらしく縋りついてくる。

よしよしと頭を撫でてやりながら、俺は蓮華の方へと振り向いた。

「あー、悪かったよ。たしかに………最近は何んていうか、冒険者部の方にばっか目が向いてた」

「だから拗ねてねーって。ただ、まあ………お前はもつと『今』に眼を向けるべきなんじゃねーの？ とは思うけどな」

「今………？」

「ああ。今だけだろ……家族で一緒に食卓囲んだり、一緒にTV見てゲラゲラ笑ったり、のんびり犬の散歩に出かけたり……そういうのができるのはさあ」

俺は、ハツと息を呑んだ。

「お前が、家族を守るために必死になってんのはわかるが、なんていうか、あー……」

「いや、大丈夫……よくわかった」

確かに、蓮華の言う通りだ。

なんでもない日常が送れるのは……今、だけだ。

アンゴルモアが始まれば、家族みんなでTVを見ることも、マルを散歩に連れて行くこともできなくなる。

それは、もしかしたら一年後も、十年後も、百年経っても……未来永劫そんな日常は戻ってこないかもしれないのだ。

ここ最近俺は、家でダラダラすることを時間の無駄と思って、冒険者部が休みの日すらも迷宮に潜っていたりしていたが……本当はそれこそが時間の無駄で、知らず知らずのうちに黄金にも匹敵する時をドブに捨てていたのかもしれない。

「そうだな……どうせあとは、主のリセマラするだけなんだし、久しぶりに家でゴロゴロすっかな」

幸いなことに、この迷宮はルート日替わり変則型であったため、主は毎日切り替わる。

おそらくは、プロクラスからは最低限千里眼の魔法が使えるカードが必要になることが故の仕様なのだろうが、俺にとっては実に好都合であった。

おかげさまで、最下層目前まで到達した今、あとは欲しいカード

の主が出るまで、最下層と試練の迷宮を毎日チェックするだけの日々である。

せつかくなので期間中は泊まり込みでランクカード集めをしようと思っていたが、それは日中ほどほどに抑えて、夜はちゃんと家に帰って家族一緒に晩御飯を食べるとしよう。

「そうそう。あと今の内に紙の漫画とか買っておいでくれよ。電子書籍とか、アングルモアが始まったらそのうちサービス停止する」

「あー……一応アンナが結構漫画とか買い集めてるみたいだけどな」
「それって借りもんじゃん。アタシはいつでも自分が好きな時に読める奴が欲しいんだよ。あと菓子だな。食材は結構集めてるけど、駄菓子とかはそんなに集めてねーだろ。駄菓子屋開けるレベルで買ってくれ」

「わかったわかった」

と俺は蓮華を押しとどめる。

まあ、確かにお菓子もある程度ストックは必要か。

「ねーねー！　そういうことなら、メアも可愛い服とか欲しくな」
「ええ？」

ふ、服……？

予想外の方向からのおねだりに、俺は困惑した。

「アングルモアが始まったら自由に外を出歩けるようになるんですよー？　だったら、せつかくだし色んな服着ておしゃべりしたーい」
「あー……」

それは、盲点だったな。

普段の迷宮攻略じゃあ、着替える暇もないし、カードに戻すたびに恰好が元に戻るから服を着替えるという発想がなかったが……カードたちも女の子だ。いろいろと着飾りたいと思うのも当然のことか。

ふと気づくと、メアに限らずこの場にいるすべてのカードたちが、無言で俺に期待の眼差しを向けてきていることに気づいた。それは、あのイライザさんすらも例外ではなかった。

どうやら、俺が思っている以上にファクションに対する潜在的な欲求は高かったらしい。

……もしかして、これアングルモア後のニーズをそのまま表しているんじゃないだろうか？

となると服を買い占めるよりも……。

「……オードリー、家事魔法って服を作ったりとかできるのか？」

「はい。高等家事魔法に不可能はありません」

そう胸を張ってみせた完全無欠のメイドマスターは、しかし次の瞬間にはスツと眼を逸らし……。

「……ただデザインセンスに関しては、その限りではありませんが」

どうやら自信がないらしい。

その横でイライザが何かをアピールするかのようはこちらを見つめてきているが……うん、まあ、誰にだって向き不向きというものはある。

「ならデザインに関してはメアたちが希望を出すからさー、その通りに作ることってできる？」

「……そうですね、完成形をちゃんと示していただけなら、あとはイメージの問題なので、はい可能です」

オードリーの返答にカードたちは「わー！」と歓声を上げた。

「それと、無から作り出すことはできませんので、材料となる糸や布などは必要になると思われます」

「となると、今の内に布とかは買い集めておく必要があるか」

「それならいつそアラクネーを手に入れてはどうですか？」

そう言ったのは、アテナだった。

アラクネーか……。確かにアラクネーなら布を織ることも、その材料となる糸を出すこともできる。

だが……。

「このチビ……冷血にもほどがあんでしょ……」

鈴鹿が、アテナへとドン引きした視線を送りながら呟いた。

アラクネーは、アテナが認めるほどのギリシャ神話一の織り手だが、その傲慢さからアテナにより罰され、蜘蛛の怪物へと変えられたという逸話を持つ。

つまり、アラクネーは、ギリシャ神話に何人かいるアテナの被害者の一人だった。

「知りませんね。便利に使えるのですから、便利に使ってやれば良いのではないですか？」

非難の視線もなんのその。平然と言い放つアテナ。

ほんまギリシャ神話の神は畜生揃いやでえ……。

まあ、実際、アラクネー一枚で服飾関連については全部解決する。値段もランクで手ごろだし、アンゴルモアまでに一枚確保しておくでしょう。

「ところで、そろそろ試練の迷宮の方の主が切り替わる頃じゃねーか？」

「おっと……」

蓮華に言われて時計を見れば、確かにそろそろ主の切り替わる時間だった。

「そろそろお目当てのが出てくれると嬉しいんだけどなー」

モンスター自体は、結構良いのが出てるんだけど、如何せん俺と相性が悪いのがなー。

三相女神のエリーニユスとか、双子のフレイとフレイアとか、ソロモン七十二柱のシトリーとか……。

特にシトリーは、軍勢召喚を持ち、俺たちのデッキのメタとなる女性特化のスキルを持つ強カードだったので、かなり迷った。学校の迷宮の方に出ていたらノータイムで運命操作していただろう。

復讐の女神のエリーニユスも、三相女神というところは良かったのだが、そのほかの要素が俺の好みではなかった。スルー。スキルも他のメンバーへのシナジーがなかったし……さすがに老婆は、ね。

フレイとフレイヤの双子神も、かなり惹かれるものがあったのだが、有効活用には男のフレイの運用も必要だったので、泣く泣く断念。

うーん、さすがにそろそろ出てもおかしくないんだけどなー。俺のデッキと相性が良いか、上位互換となると結構限られてくるし……。

そんなことを考えながら、試練の迷宮へと向かうと……。

「む……これは、当たり前なんじゃねえか？」

迷宮に入るなり、蓮華が言った。

「マジ？」

「ああ……少なくとも、三相女神であることは確かだな」
「おお〜！」

これは、ついにいよいよ来たか……！
ユウキを召喚し、斥候へ向かわせる。

やがて、彼女の眼を通して見えたのは――三柱の美しい女神の姿だった。

「う……！ く……！ これ、は……」

その姿を見た俺は、思わず呻いた。

「どうだった？ ……お目当てのだったか？」
「いや……」

蓮華の問いかけに、俺は首を振った。

「違った。あれは、ケルトの三女神だ……」

髪もドレスもマントも、すべてが血のように紅い女神は、ヴァハ。
灰色の髪を靡かせ両手に二本の槍を持った、勇ましくも妖艶な女神は、モリガン。

闇よりも暗い黒髪を持ち、ゾツとするほど美しい女神は、ネヴァン。

アイルランドの、ケルト神話における戦争の女神たちだった。

「セレーネーたちじゃなかったか……で、どうする？ 帰るか？」

「いや、戦う」

「お？」

俺の答えに、蓮華は軽く目を見開いた。

「いいのか？ お目当てのセレーネーたちじゃないが」

確かに、俺の本来のお目当ては、セレーネーたち月の三相女神だった。

イライザたちのランクアップ先であり、一発で三枚ドロップできるセレーネーたちは、今回の試験における大本命であった。

だが、このヴァハたちも決して悪くない。

というか、出現が予想外であっただけで、セレーネーたちに匹敵する大当たりだ。

まずヴァハは、魔法のスペシャリストであり、強力な男性特化のスキルを持つ。その効果は、敵全体の男を対象に、産みの苦しみと狂乱の呪いを与えるというもの。

産みの苦しみとは、すなわち陣痛と出産の痛みとそれに伴う体力の消耗であり、これだけで大抵の男モンスターは行動不能になる。

さらには、敵モンスターのコントロールを不能にし、敵味方の識別ができなくする狂乱の呪い付きだ。

次のモリガンは、アーサー王伝説のモルガン・ル・フェイとも同一視される女神で、戦士に加護と祝福を与える女神である。そのスキルは、対象一体にレベルアップの魔法を掛け、ステータスを二倍にし、自己再生と状態異常耐性を付与するというもの。また本体自体も優れた戦闘能力を持ち、戦士スキルと高等攻撃魔法スキルを持

つ。

最後のネヴァンは、死を告げる妖精であるバンシーとデユラハンの原型であり、アーサー王伝説の泉の貴婦人の前身となった女神である。それ故かネヴァンは、バンシーとデユラハンの眷属召喚能力を持ち、また自身も加護型の高等装備化クラスを持つ。

装備化スキル持ちを眷属召喚できる極めて希少なカードで、また無限召喚型であるためこれ一枚で自軍の大幅強化ができる、超つよつよカードだった。

ぶつちやけネヴァン一枚だけでも運命操作の使用が確定するレベルなのだが、この三枚が揃うとその価値はさらに飛躍的に跳ね上がる。

この三枚の特殊スキルの名は、破壊と殺戮と勝利の宴。

その効果は、ネヴァンの装備化対象とモリガンの強化対象を全体化し、ヴァハのスキルに陣地破壊効果を追加するというもの。

全体化とはどういうことかと言うと、眷属含めたすべての味方の戦闘力がMAXとなつてステータスは二倍、さらにネヴァンの戦闘力とその後天スキルをすべて共有できるということだ。

ネヴァンの眷属召喚能力は装備化スキルに含まれたモノであるため、さすがに召喚された眷属がさらに眷属を召喚するという地獄絵図とはならないものの、どんな雑魚モンスターでもBランク並みの戦闘力にしてしまうという正真正銘のぶつ壊れスキルだ。

当然、敵として出現したならば、これらの効果すべてが牙を剥いてくることになる。

この手のスキルの正攻法は、まともに付き合わずスキルの時間切れまで逃げるか隠れるかするのが一番なのだが、アレース同様どこ

に籠ろうが、障地破壊の効果により乗り込んでくる。

眷属召喚で対抗するにも、どんな雑魚カードもBランク並みの戦闘力にしてステータスを二倍にしてくるネヴァンたちには、生半かな眷属召喚では太刀打ちできず、自己再生と状態異常耐性も付与されるため絡め手も効き辛い。

残る手は、眷属召喚そのものを封じること。

つまり……………。

俺が振り返ると、蓮華は不敵な笑みを浮かべた。

一一一一真二相女神の出番というわけだった。

第十八話 もっと今を大事にしたらどうだ？（後書き）

第十八話 もっと今を大事にしたらどうだ？

さて、戦うと決めたなら、問題は召喚するカードだ。

呼び出したカードが、ドロップするカードの性能を左右する以上、召喚するカードは慎重に選ばないとな……。

吉祥天と黒闇天は、三つずつ計六つのスキルをコピーしてドロップした。つまり、三相女神の今回は、計九つのスキルを覚えさせてドロップさせられるということだ。

どのスキルがコピーされるかは運次第――さすがに運命操作でコントロールはできなかった。それが出来たら試練にならないということなのだろう――ではあるが、どのスキルがコピーされても嬉しいカードを選びたいところだ。

まずは、戦闘メンバーとなる六枚から決めていこう。

蓮華は確定として、イライザ、ユウキ、メアも安定の決定。残りの二枚は、ドジスキルを克服したドレスと、霊格再帰でパワーアップしたマイラで行こう。霊格再帰により多彩な先天スキルを持つ彼女は、後天スキルをコピーしてくる特殊型迷宮の主向きのカードだ。残る三枚のコピー要員だが、鈴鹿とオードリー……それとヘスペリデスにするか。

俺はヘスペリデスのカードを取り出すと、そのステータスを見た。

【種族】ヘスペリデス

【戦闘力】600

【先天技能】

・黄昏の娘たち：世界の西の果てに住まう三人のニンフたち。ア
イグレー、エリュティア、ヘスペレトウーサの三名で一枚となつて
おり、複数体同時に出現し、その戦闘力も複数に分散される代わり
に、すべての個体が死なない限りロストしない。歌手、農家、メイ
ドを内包。

（歌手：歌手に必要な技能を収めている。歌唱、演奏、舞踏、精密
動作を内包）

（農家：農家に必要な技能を収めている。耕作、栽培、畜産、集団
行動を内包）

（メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、
礼儀作法を内包）

・ヘスペリデスの園：ヘスペリデスたちが住まうとされるヘラの
果樹園を展開する。ヘスペリデスの園には、食べた者に不死を与え
る黄金のリンゴが実るとされ、それを守護するBランクモンスター
のラドンが住まう。この園に実る黄金のリンゴには不死の力はない
が、侵入者を強烈に惹きつける効果があり、食した者に『生還の心
得』を一時的に付与する。また、非常に美味。

・上級地精霊：下級の地母神に近い地の精霊。存在するだけで大
地に恵みを与え、植物の成長を促進させる。地形操作、地質操作を
内包。

（地形操作：周辺の地形を望み通りに改変できる）

（地質操作：周辺の地質を望み通りに改変できる。少量ではあるが、
土から貴金属や宝石を作り出すことも可能）

・高等補助魔法

【後天技能】

・従順

・中級収納：物を収納できる内部空間を持つ。中級は十畳程度の

広さ。

・簡易神殿：地面に魔方陣を描くことでその場に簡略化した神殿を形成することができる。神殿内において、全ステータス向上、持続回復、一部スキルの出力向上。神属性は効果向上。

へスペリデスに期待するのは、簡易神殿のコピーだ。

簡易神殿は優秀な陣地系スキルだ。へスペリデスがすでに持つとはいえ、このカードを最前線に出すことがほとんどないだろうことを考えると、戦闘向きのカードに一枚コピーさせておきたいスキルである。

その他のスキルについても、高位の神は『神のプライド』を持つ可能性が高いから従順がコピーされても良いし、中級収納もニーズの割に取得がしにくいスキルだからコピーできて損はない。

というわけで、コピー要員はへスペリデス含めたこの三枚で行くことにする。

「よし、行くか」

まずはコピー要員を召喚し、それを戦闘メンバーに入れ替え、イライザにドレスを装備させ、蓮華が黒闇天を呼び出し、メアを霊格再帰させ……と諸々の準備を整えたところで、満を持して主へと挑む。

安全地帯を一步踏み出し、相手の間合いに入った瞬間、敵は待ち構えていたように即座に動き出した。

ネヴァンが眷属の召喚を開始し、ヴァハが地面に魔法陣を描き始め、モリガンが前衛として姉妹たちの前に立つ。

……改めてこうしてみると、前衛、後衛、サポーターと姉妹でバランスよく揃っているものだ。

そんなようなことを考えながら、こちらもメアにサキュバスの召

喚を始めさせる。

序盤は、互いに様子見からスタートした。

向こうは眷属を増やしてからでないかと戦略が回らないところがあるし、ヴァハのスキルも男性特化であるため、積極的に動かないのも頷ける。

だが、こちらがそれに付き合う必要もない。

様子見なのはお互い様だが、嫌がらせレベルのことはさせてもらう。

『マイラ、バジリスクだ』

『ハッ！』

俺の命を受け、マイラが鶏の頭部にも似た頭部を持つ、巨大な大蛇へとその身を変える。

【種族】バジリスク（マイラ）

【戦闘力】1060（MAX！）

【先天技能】

- ・ 毒竜玉：猛毒と生命力を生み出し貯蓄する毒竜の心臓。
- ・ 毒竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。その鱗には猛毒が含まれており、攻撃してきた者を毒に侵す。

- ・ 毒竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をプレスとして吐き出すことで、魔法の威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。その吐息には猛毒が含まれている。

- ・ 毒を以て毒を制す：ありとあらゆる毒を喰らい、それを糧とすることができる。自身の毒の効果を強化し、また毒により回復する毒の魔眼、石化の魔眼を内包する。

（毒の魔眼：見るだけで状態異常を与える魔眼）

（石化の魔眼：見るだけで状態異常を与える魔眼）

【後天技能】

- ・ 霊格再帰
- ・ 滅私奉公
- ・ 初等魔法使い 中等魔法使い
- ・ 新米メイド
- ・ 戦術

バジリスクは毒の状態異常に特化したドラゴンである。

猛毒は、耐性を一定割合無視する上位の状態異常であり、状態異常耐性があるうとも完全には無効化できない。

バジリスクは、その猛毒を全身に孕んでおり、自らが攻撃した者はもちろん、自らを攻撃してきた者にすら毒を与えることができる。

さらには、『毒を以て毒を制す』のスキルにより、毒で回復することが可能で、自らが生み出す毒により常に持続回復状態にあり、通常の竜種と比べても生き汚いと言えるほどの生命力を誇っていた。

その分、他のドラゴンに比べて攻撃能力は低い傾向にあるため、状態異常と生命力で勝負する持久戦型と言えるだろう。

敵単体で出現した際は、しぶとく鬱陶しいだけの敵であるが、他のモンスターと同時に出現すると途端にデバフ役として輝き始める……そんなモンスターである。

それは、こうして味方として存在する時も同様だ。

マイラが、全長40メートルを超える巨大な身体をくねらせ、その嘴から毒々しい暗緑色のブレスを吐き出す。

ブリザードの魔法が元となっているのか、氷の粒子が混じるそのブレスは、デュラハンの鎧の肉体を凍り付かせ、また宙へ浮かぶバンシーたちを猛毒で冒し、墜落させていく。

バジリスクのブレスは、ランクであるバンシーとデュラハンたちを一網打尽にするほどの効果はない。

だが、放置していれば確実にその生命力を削り、眷属の増加を抑制するだけの効果はある。

その間、こちらは着実に眷属を増やしていくことができる……。

敵の判断は早かった。

ネヴァンたちの威圧感が一気に倍増し、毒に冒されていたデュラハンたちが生き生きと動き出す。

彼女たちの特殊スキル『破壊と殺戮と勝利の宴』を発動させたのだ。

デュラハンと合体したバンシーの一体が、上空から俺へと斬りかかってくる。

その前に立ち塞がるは、我らが盾イライザ。

両者の剣が激突し——イライザが吹き飛ばされる。

幸いにして、技量の差により力の大半を受け流すことに成功したようだが、その光景は俺に衝撃を与えた。

同時に、脳内の冷静な部分がすばやく電卓をはじく。

ステータス二倍強化については、フルシンクロ分の戦闘力向上と相殺として……。

イライザの戦闘力は、1680。そこにドレスの戦闘力の半分400が加わり、さらに戦闘力500相当のダインスレイヴも持つ。一方で相手はというと、バンシーのマックス戦闘力が760で、そこにデュラハンの戦闘力の半分400が加わり……差は1420。同じタイプの装備化スキルは重複しないから、本来ならここは互角の場面のはず。

だが、結果は圧倒的な力負け。

これは、ネヴァンが限界突破をコピーしていることは確定か。

いくら限界突破をコピーされたとはいえ、フル装備のイライザが

いくらでも湧いてくる雑魚敵に太刀打ちできないとは……！ やっぱ、このスキル……いくら三相女神とは言え、ぶっ壊れてやがるな遊びは無しだ。こっちも切り札を切る……！

『蓮華！』

俺の呼びかけに、無言で応える気配。

吉祥天と黒闇天……二人の蓮華が、光に包まれ、一つに重なっていく。

同時に、大気が……いや、空間そのものが震えはじめた。

ただならぬ異様な気配に、女神たちが警戒するように凝視する。

やがて、繭から孵るように、妙齡の美女が姿を現した。

長く艶やかな朱の混じった黒髪に、母性の象徴のような豊満な乳房としなやかな四肢。その美しい顔立ちは、娘である吉祥天とどこか似ている。

天女の羽衣をはだけ、母というには些か色気に溢れる鬼子母神はその端正な顔をどこか苦し気に――しかしそれすらもどこか官能的に……――歪めているように見えた。

『う……く……！』

『どうした、蓮華！？』

『……ふう。いや……なんでもない。少し……飲まれそうになっただけだ』

『それは……』

本当に大丈夫なのか……？

『そんなことより、さっさと指示出せ。ナイスバディになったアタシのカラダに鼻の下伸ばしてんじゃねーぞ』

『伸ばしてねーよ』

「どうやらいつもの蓮華のようだ、と内心で胸をなでおろしつつ、命令を下す。」

『……喰らい尽くせ、蓮華』

『ああ……！』

蓮華の黒曜石の瞳が、金色に染まり、まるで獣のように縦に割れる。

スキル——『鏡面神格荒魂・鬼子母神』。

自らの子供を産むために、他人の子を攫い喰らっていたという鬼子母神の、荒魂としての側面を表す子殺しの権能。

その効果は、眷属殺し。場に存在するすべての眷属を敵味方問わずに喰らい尽くす。

四方八方、ありとあらゆるところに、空間の裂け目が……いや、『□』が現れる。

『□』は抗いようのない力で眷属たちを吸い込み、咀嚼し、飲み込むと、消えていった。

両者の眷属が一掃されたことで、一気に場が寂しくなる。

だが、それは一時的なこと。『鏡面神格荒魂・鬼子母神』のスキルには、セレーネたちのスキルのように新たな眷属召喚を封じる効果はない。

そして、眷属喰らいのスキルは一日に一度切りの切り札。

故に、その前に勝負を決める。

スキル——『鏡面神格和魂・鬼子母神』。

喰らった子供を栄養に、自らの子供を産み出す、子産みの権能。

生贄に捧げた眷属の数だけ、Bランクモンスターの羅刹・羅刹女を召喚することができるスキル。

召喚に生贄というプロセスを挟むためか、生み出される眷属も些か特別製だ。

【種族】羅刹

【戦闘力】 3600 (MAX!)

【先天技能】

- ・ 修羅道を往く者：決して終わりのない戦いに明け暮れる修羅道の住人。狂気と戦いこそが日常であり、それ故に死を恐れず、狂化状態でも暴走状態とならず、自らの意思で狂化を解除できる。戦士、狂化を内包。

(狂化：戦闘を終了するまで暴走状態となり徐々に生命力が減っていく代わりに、全ステータスが三倍となる)

・ 二体一对

- ・ 死なば諸共：自身がロストする際、自らに最もダメージを与えた存在に戦闘力と受けたダメージに応じたダメージを与える。夫婦であり半身である「羅刹女」と同時召喚でなくては使用ができない。
- ・ 生還の心得

【後天技能】

- ・ 最高位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。最高位眷属体はオリジナルと遜色ない自我と初期戦闘力の2倍の戦闘力を持ち、また召喚者の後天スキルを一つ共有できる。

・ 限界突破

【種族】羅刹女

【戦闘力】 3400 (MAX!)

【先天技能】

・修羅道を往く者：決して終わりのない戦いに明け暮れる修羅道の住人。狂気と戦いこそが日常であり、それ故に死を恐れず、狂化状態でも暴走状態とならず、自らの意思で狂化を解除できる。戦士、狂化を内包。

（狂化：戦闘を終了するまで暴走状態となり徐々に生命力が減っていく代わりに、全ステータスが三倍となる）

・二体一対

・死なば諸共：自身がロストする際、自らに最もダメージを与えた存在に戦闘力と受けたダメージに応じたダメージを与える。夫婦であり半身である「羅刹」と同時召喚でなくては使用ができない。

・自己再生

【後天技能】

・最高位眷属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。最高位眷属体はオリジナルと遜色ない自我と初期戦闘力の2倍の戦闘力を持ち、また召喚者の後天スキルを一つ共有できる。

・限界突破

鬼子母神が生み出す眷属は、最高位眷属体というスキルを持ち、これはオリジナルの成長限界と同じ戦闘力と、親が持つ後天スキルを一つ共有することができる。

共有するスキルは、もちろん限界突破。

戦闘力にして3000オーバーの羅刹の集団が、空間の裂け目から雄叫びのような産声と共に姿を現す。

一気に多勢に無勢となったネヴァンたちは、新たな眷属を召喚するも完全に焼け石に水。

ネヴァン達が呼び出す眷属の戦闘力は、バンシー（ 760×2 ）+デュラハン（ $800 \div 2$ ）+ネヴァン（ 1600×2 ）の500

0オーバーで、モリガンらにおいては6000を超えるが、圧倒的数の差と、自爆特性を持つ羅刹たちによって、その生命力はみるみるうちに削られていく。

その光景に勝ちを確信した俺は、今のうちに運命操作をしようとして、ハッと気づいた。

『お、おい！ お前、今の姿で吉祥天の権能は使えるのか！？』

『あっ……マズイ！』

蓮華が慌てて変身を解く。

鬼子母神が場から消えたことにより、眷属である羅刹たちの姿も消える。

だが、三姉妹たちはすでに致命傷を負っており、その生命力は風前の灯火。

間に合うか間に合わないかの瀬戸際で、俺はなんとかホープダイヤを取り出し、運命操作を発動した。

法則から言って確定ドロップにはガーネットが十四個必要であるはずだが、個数の調節をしている暇がないため、ちよっと多めに持ってきた二十個ほどのガーネットを一気にぶち込む。

果たして結果は――

『ぎ、ギリギリ……』

『あ、危ねえ……』

三姉妹がいた場所には、三枚のカードの姿があった。
へなへなと力なく座り込む。

これでドロップし損ねたら、洒落にならなかったぞ……。

脱力している俺の元へ、メアたちが三姉妹のカードを持ってきてくれた。

受け取り、そのステータスを確認する。

【種族】ネヴァン

【戦闘力】1600

【先天技能】

・死と勝利の戦女神：戦場における死と勝利の女神であるネヴァンの権能を使用可能。

・三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・破壊と殺戮と勝利の宴：『毒のある女』の装備化対象と『大いなる女王』の強化対象を眷属含む味方全体に拡大し、『赤い鬘のヴァハ』の効果に陣地破壊の効果を追加する。場に、ネヴァン、モリガン、ヴァハの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日に一回のみ。

・毒のある女：死の予兆であるバンシーとデユラハンの起源。高等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターを祝福することで、自身の戦闘力を加算させることができ、また自身の持つ装備化スキル以外の先天スキル一つと、すべての後天スキルを共有する。バンシーとデユラハンを無限召喚可能。

【後天技能】

・神のプライド

・眷属強化：場の味方眷属の眷属体スキルをランクアップさせる。
・遠見の術：上空に疑似的な眼を生み出し、高くから俯瞰するように周囲を見ることが出来る。

・メイドマスター（オードリー）

- ・限界突破 (イライザ)
- ・高等忍術 (ユウキ)

【種族】モリガン

【戦闘力】 820

【先天技能】

・支配と殺戮の戦女神：支配と殺戮の女神であるモリガンの権能を使用可能。

・三相女神

・破壊と殺戮と勝利の宴

・大いなる女王：愛した者に祝福を与える夢魔の女王。対象一体にレベルアップの魔法を掛け、ステータスを二倍にし、自己再生と状態異常耐性を付与する。戦士、高等攻撃魔法を内包。

(戦士：戦士に必要な技能を収めている。武術、剣術、槍術、弓術、騎乗スキルを内包する)

【後天技能】

・神のプライド

・物理強化

・怪力

・目隠し鬼 (鈴鹿)

・かくれんぼ (蓮華)

・不屈の精神 (ドレス)

【種族】ヴァハ

【戦闘力】 780

【先天技能】

・怒りと破壊の戦女神：怒りと破壊の女神であるヴァアの権能を使用可能。

・三相女神

・破壊と殺戮と勝利の宴

・赤い鬘のヴァア：出産間近であるにもかかわらず馬と競争させられたヴァアの怒り。敵全体の男に陣痛と同等の痛みと体力の消耗を与え、また狂乱の呪いを与える。

（狂乱：コントロール不能となり、敵味方の識別ができなくなる状態異常）

・高等魔法使い

【後天技能】

・神のプライド

・魔力回復

・簡易神殿（ヘスペリデス）

・詠唱短縮（メア）

・戦術（マイラ）

限界突破は、ネヴァンだけか。それと、案の定黒闇天はコピー対象とならなかつたか。

まあ、しょうがない。他のカードも限界突破をコピーしてたらここまで楽には勝てなかつただろうし、それを差し引いても良いスキルが揃っている。……神のプライドだけはちょっと気になるところだな。

カードの確認をしている俺に、メアたちが興奮気味に話しかけてくる。

「蓮華の新スキル、ヤバくない！？ 眷属殺しだけじゃなく、眷属

召喚もできるのは反則的じゃない？」

「凄かったですねー。ボク、ちよつとビビっちゃいましたよ」

確かに、鬼子母神のスキルは、ちよつと怖かった。

神という種族の、荒ぶる側面を見せつけられたというか。

あれが、Bランク最上位……ほぼAランククラスのスキルか。

「……あれ？ 蓮華、なんか元気くない？」

そこで、メアが蓮華の様子に気づく。

確かに、普段ならここでメア相手にイキリ散らかすところだ。

「ああ……ちよつとさすがに疲れてな。やっぱり霊格が変わるヤツつて、最初はキツいわ」

「あー、わかる。メアも、最初に霊格再帰使った時はキツかったし」

ふむ、鬼子母神の変身も、霊格再帰のような負担があるのか。

となると、慣れないうちは変身時間とかも短いのかもな。

蓮華も、霊格再帰を覚えた頃は変身時間も短く、だんだん最大時間である一時間に伸びていった感じだし。

そうだ、霊格再帰と言えば……。

「マイラ。今日は活躍だったな」

「ハッ！ 恐縮であります！」

バジリスクの毒により、相手の切り札を早めに切らせることができた。

同じことは、蓮華の黒闇天にも出来たとは思うが、回数制限のあるスキルを使わずに相手に切り札を切らすことができたというのは、戦略的に大きい。

マイラの活躍は、今日だけの話ではない。

四種の霊格再帰を覚えてからというもの、彼女の働きは目覚ましく、これまでの鬱屈ぶりを晴らすように八面六臂の活躍だった。

しかも、四種の霊格再帰を持つマイラは、一種の霊格再帰しか持っていないかった蓮華やメアと異なり、通常の四倍もの時間変身し続けることができ、さらに時間内であればいつでも形態を切り替え可能という特性を持っている。

最もバランス良く戦闘能力に優れるドレイク、飛行能力に優れた広範囲の高速移動が可能なワイバーン、魔法能力とバフに特化した東洋龍、生命力と毒のデバフ特化のバジリスク……。

壁役からバフ・デバフ、偵察に移動まで。今やマイラは、イライザに次ぐ万能タイプとなりつつあった。

だが、そんな大活躍のマイラに、嫉妬の炎を燃やす者もいるように……。

「むぐぐぐ……ちょっとおかしくありませんか？　なんで、新武器を手に入れた私より、最近パワーアップしたソイツが先に活躍するんです？」

カードギアのビジョン越しに、恨めし気な眼差しをマイラへと送る鈴鹿。

そんな彼女に、俺たちは顔を見合わせた。

「……なに言ってるんだ、鈴鹿？　普段の迷宮攻略じゃちゃんと活躍してるじゃないか」

実際、普段の迷宮攻略では、鈴鹿も大通連を片手に迷宮のモンスター相手に無双している。

大通連は、特異なスキルである神通力を持ち主に与える優れた魔道具だ。

サイコキネシスによる型に嵌らぬ戦闘ができる神足通、フロア中の音を拾える天耳通、悪意を感じし不意打ちを防ぐ他心通、サイコメトリーによる畏の鑑定を可能とする宿命通、霊体モンスターへダメージを与える漏尽通……と、それ一本で迷宮攻略に必要な能力を粗方与えることができる。

その大通連の効果もあつてか鈴鹿は、同ランクであるCランク階層の敵を相手に、まるで格下を狩るように無双していた。

その活躍ぶりに、仲間たちからも敬意の対象となり、『掃除屋鈴鹿』『雑魚敵無双の鈴鹿』の異名を与えられたほどだ。

しかも、いろいろと嫉妬深い彼女に気を遣い、大通連は事実上彼女専用となつているくらいなのに……一体何が不満だというのか。まるで理解できないと首を傾げる俺たちに、鈴鹿は酷くもどかし気に言う。

『そうだけど！　なんか、描写されてない気がする！　私の活躍がバツサリカットされてる気がするんだよあ、マスター！』

やれやれ……何を言い出すかと思つたら。

「何を馬鹿な……漫画やラノベじゃないんだから。なあ？　蓮華？」

同意を求めて蓮華を振り返つた俺だったが、予想に反し彼女は鈴鹿に同情的な眼差しを送つていた。

「……安心しろ。たぶん、多分近いうちにてこ入れが入るから」

『……ホント？　信じるからね、クソガキ』

「ドレス、マイラと来たんだから、サイクル的に次はお前辺りだろ」

……一体何の話をしているんだか。

おっと、そろそろガツカリ箱を回収しないとな。
まあ、どうせ踏破報酬以外はるくなのが入っていないだろうが。
そんなようなことを考えながら、ガツカリ箱を開けると……。

「お……！？」

ガツカリ箱には、珍しくアタリが入っていた。

「これは……？」

短槍……だろうか？

長さは1メートルほどで、先端にはシンプルなナイフのような刃先が、柄には何らかの植物らしき葉、狼、馬、蛇が調和を持って刻みこまれている。

穂先があるから槍と判断したのだが、反対側に行くほど徐々にだ
が太くなっていく独特な造りをしており、石突がある部分は窪み……
…というか何らかの器のような形となっていた。

『ふむ、槍ではなく杖ではないですか？』

「ああ、杖か」

なるほど、そっちの方がしっくりくる。

『意匠は、狼と馬と蛇……それにトリカブトですか』

「うーん、何由来のアイテムだろう」

『さて……なんとなく魔術や死を象徴する神な気もしますが』

俺とアテナが杖について考察していると、こういう時はあまり関わってこないメアがいつの間にか近くへと寄ってきて、杖を覗き込んでいることに気づいた。

「……どうした、メア？ なにか気づいたか？」

「あ、マスター。たぶんただけ、これ……メアのキーアイテム、かも？」

「マジ！？」

まさか、メアももう一つ霊格再帰を持っていたとは……。

しかも、それがちょうどこのタイミングで手に入るとは、なんと
いう幸運——いや、待て！

俺は、慌ててガーネットの使用数をチェックした。

こんな幸運が偶然起こるはずがない！ 偶然でないのならば、そ
れは……！

俺が腰に着けていたポーチを見ると、そこには見事にすべて砕け
散ったガーネットがあった。

やはり、必要分を超えた幸運の分が、ガツカリ箱へと流れてしま
ったか……。

……いや、それもおかしい。

ホープダイヤを使うとガーネットが砕けずに済むように、余った
幸運は使用されずに残る。

幸運操作ならばともかく、すべての幸運エネルギーをコントロー
ルできる運命操作で、余った分が勝手にどこかに流れ込むというこ
とはないのだ。

故に、俺は大胆に手持ちすべてのガーネットをぶち込んだのだ。

にもかかわらず、すべてのガーネットが砕け散ったということは
……。

「使われた、か」

蓮華の中に潜む意思が、その分の幸運をドロップへと勝手に割り
振ったということ。

なぜメアのキーアイテムを……これから俺に必要なという
となのだろうか？

あるいは……他の物を出そうとして失敗したか？

『え……てこ入れってそっち!？』

考え込む俺を他所に、鈴鹿のどこかズレたツツコミが境内に響く
のだった。

第十八話 もっと今を大事にしたらどうだ？ (後書き)

【TIPS】多重霊格再帰

二個以上の霊格再帰を持つカードは、その分変身時間が伸び、さらに時間内ならば他の姿に切り替えることができる。

霊格再帰の変身時間と『溜め』の関係は、格闘ゲームの必殺技ゲージがイメージとしては近い。

通常の霊格再帰持ちはゲージを一本しか持たないが、多重霊格再帰持ちはその分ゲージを複数持っている。ゲージが一本でも溜まっていれば変身可能だが、ゲージを一本溜めるためにかかる時間は同じで(一日一本溜まるとすれば、マイラは全部で四日かかる)、一本だけ使用し残りの三本は残しておくという使い方もできない(一度変身すれば、すべてのゲージを使い切る)。

第十九話 貴重な日常（前書き）

限界突破と装備化のステータス計算式が分かりにくかったようなので、前話に軽い計算式を追加。

また、羅刹たちのステータスも加筆しました。

・眷属バンシীর計算式

バンシীর初期戦闘力が380、デユラハンの初期戦闘力が400、ネヴァンの初期戦闘力が800とする。

モリガンのスキルにより、全体にレベルアップの魔法がかかり、これらの戦闘力が成長限界まで一時的に成長する。

デユラハンの憑依型中等装備化とネヴァン祝福型高等装備化は、別タイプなので同時に装備化可能。

以上を踏まえると、眷属バンシীর合計戦闘力は、

バンシীর(760) + デユラハン(800 ÷ 2) + ネヴァン(1600) = 2760。

ここにネヴァンの装備化により限界突破が全員に共有されることによつて、最終的な数値は5520。

さらに、ステータス二倍のバフがかかる……って感じ。

さすがに限界突破は持っていませんが、Bランク以上の迷宮ではコイツ等やセレーネたちが普通に出てくる。

前回のアンゴルモアでは、コイツ等が迷宮の外に出ようとしてくるのを迷宮内で必死で食い止めているうちに、いつの間にかアンゴルモアが終了してた……というのが当時の自衛隊員の感想。

第十九話 貴重な日常

俺が四ツ星昇格試験を受け始めてから、早くも三週間が経った。この日、俺は八王子の喫茶店にて、遠野さんと会っていた。用件は、もちろんキマリスのトレードについて、だ。

「――さて、この度はお忙しい中お時間を頂き、誠にありがとうございます」

久々に会った遠野さんは、心無しか以前よりもやつれているように見えた。

やはりこんなことになって、札商である彼も相当忙しいのか、その顔には濃い疲労の色が見える。その上、深々と下げた頭には、ストレスの象徴である十円ハゲまで出来ていた。

「それで、キマリスのトレードに応じていただけるとか？」
「はい」

キマリスについては、悩みに悩んだが、結局トレードに出すことに決めた。

アンナがガーネット探しに使える新たなカードを手に入れ、眷属召喚が可能なカードが増えつつある今も、軍団召喚を持つキマリスの価値はいまだ健在である。むしろ、ネヴァンというパーティー全体を装備化できるカードを手に入れたことにより、さらに上昇したというて良いだろう。

それでもトレードに応じることにしたのは、どうしても欲しいカードがあるのと……やはりキマリスとのフィーリングが合わなかつ

たのが、最大の決め手だろう。

この三週間でキマリスは実際につかっけて試してはみたが、どうにも『俺のカード』という感覚がなかったのだ。

キマリス自身も、俺のことを嫌ってはいないが、好いてもいないのがなんとなく伝わってきた。

それは、俺はあまりキマリスを有効活用できなかったからではなく、俺自身があまり悪魔という種族好みの性格ではないからであるようだった。

悪魔という種族が好むのは、自分の欲望のためなら親兄弟をも犠牲にできる人間や、あるいは自分の魂を捧げるほどにたった一人の人間に執着するような人間なのだ。

家族や友人たちの安全のために駆けずり回っている俺は、キマリスから見てあまり面白い人間に見えなかったに違いない。

元々、俺とは相性がそれほど良くなかったということなのだろう。キマリスを手に入れられるほどの金やコネを持つ人間は、俺のような人間よりも悪魔が好みそうな者が多い。

こうなった以上さっさと手放してやる方が、キマリスのためというものだった。

「トレードに関してですが、さすがに世界がこんなことになってしまったため、大会の優勝賞品というプレミアは換算することができません。ただ、それ以上にキマリス自身の価値が上がってきているので、以前の条件よりもさらに良い条件でトレードすることができ
ます」

アングルモアを前に、プレミアだのなんだのといった付加価値は、ほぼゼロとなってしまった。

しかし、キマリスに関しては装備化スキルと軍団召喚により、日を追うごとに値上がりしており、むしろプレミア付きだった頃よりも高くなっているくらいだった。

「……それで、トレードの条件は本当にこれで良いんですか？」
「ええ———零落スキル持ちの瀬織津姫せおりつひめ。それと小通連。それで
お願いします」

瀬織津姫は、穢れを祓い清める川の神であり、橋姫や鈴鹿権現（
鈴鹿御前）と同一視される神である。

マイナーではあるが、れっきとしたBランクカードであり、橋姫
と同一視されることからわかるように、鈴鹿のランクアップ先で
ある。

当初の予定では、特殊型迷宮の方でイライザたちのランクアップ
先となる三相女神を、Cランク迷宮の方では鈴鹿かドレスのランク
アップ先を狙う予定だった。

ところが、予想に反して特殊型迷宮の方でデュラハンのランクア
ップ先となるネヴァンが入ったため、Cランク迷宮の方では鈴
鹿のランクアップ先に絞って狙うこととなった。

しかし、なかなかアタリが出ず、残り十日を切った昨日の時点で
良い感じの主が出現したら運命操作を使うと決めたところ、その矢
先にかなり欲しい主が出てしまったため、そのカードを手に入れる
ために運命操作を使ってしまったのだ。

それ自体は、まあ良いのだが、問題はこれで鈴鹿のランクアップ
の目途が立たなくなってしまうことである。

そこで思い出したのが、遠野さんの存在であり、キマリスのトレ
ードというわけだった。

「クダンの予言の発表以降、零落スキル持ちのBランクカードも値
上がりしていますが、それでも瀬織津姫とキマリスでは、オマケを
付けてもまだキマリスの方が高い。それに三明の剣を求めていること
から鈴鹿御前を狙っているんでしょうが、三明の剣は最後の顕明連
を手に入れるのが最も難しい。大通連Cランク、小通連Bランク、

顕明連Aランクと言われるほどですからね。国内では今までに一振りしか見つかってませんし」

「ハハ……まあ、ロマンですよ、ロマン。やっぱり、Aランクへの霊格再帰って憧れるじゃないですか。それに、小通連だけでも十分有益ですし」

「ふむ……まあ、北川さんがそれで良いなら、こちらとしても助かりますが。ああ、ちなみにその瀬織津姫ですが、大通連と小通連に反応したことは確認しています」

へえ……！ ソイツは朗報だ。

ってことは、あとは顕明連さえ揃えればマジで鈴鹿御前に霊格再帰できるのか。

……まあ、それが最も難しいんだが。

あ、そうだ。

「遠野さんってアラクネーって在庫持ってます？」

「アラクネー？ ああ、なるほど、最近地味に人気ですよね」

「あ、やっぱりそうなんですね」

「ええ、生産系のカードはどれも徐々に値上がりしていますよ。やはり、皆さん万が一文明が崩壊した後のことを考えるようで」

考えることはみんな一緒か。

「もし今在庫があるならぜひ買いたいんですが」

「ああ、そういうことでしたら、この場でお譲りしますよ」

「ええ……？」

譲るって、タダってことか？ 仮にも商人がそれで良いんだろうか？

「ぶつちやけ、Cランク一枚くらいなら、キマリスくらいのトレードになると、誤差ですよ、誤差。このままだとさすがに良い取引とは言えないんで、これぐらい付けさせてください」

……遠野さんがここまで言っつてことは、マジで損な取引だったんだな。

俺なりに相場を調べての取引だったんだが、零落スキル持ちの瀬織津姫なんて参考になる相場が見つからなくて、かなり適当な取引になったことは否めない。

それでも今のキマリスの価値はわかっていて、Bランクカード並みの希少度と言われる小通連も付けたんだが、それでもまだ安かったよつだ。

こりやもう一枚か二枚くらいCランクカードを付けられたかもな……と思いつつも、あまり欲をかいても良いことはない、とアラクネーを手に入れられたことに満足して家路につくのだった。

『――岳口教授は、政府の全国民一律カード配布の件、どう思
いますか？』

『いやあ、やはりですねえ、Eランクカード一枚とFランクカード五枚では到底足りないと思いますよあ、ええ。アングルモアが始まれば、Dランク以上のモンスターも出現するわけで、ええ。』

それを考えれば、やはり国民全員にDランクカードを配るくらいしないと、フェイズの進行を食い止められないと私は思いますねえ、

ええ』

『飛鄭^{ひてい}さんは、今の岳口教授の発言をどう思いますか？』

『私は、Eランクカードを配ることも反対ですな。』

過去のアンゴルモアでは、モンスターの被害だけではなく、カードを悪用した犯罪も行われました。カードを迷宮の外でも召喚可能となるアンゴルモアでは、カードを持つすべての人が加害者となりえる。

Dランクモンスターが迷宮からあふれ出すまで、数時間程度の余裕があります。それまでに避難所に行けば、カードの必要なてないわけですよ。少なくとも、避難所ではすべてのカード、魔道具を一時的に回収するくらいの措置は必要だと思いますな』

『それはどうでしょう？ すべての人が避難所に入れるとは限らないと私は思いますけどねえ、ええ。』

ギルドの避難所は、比較的大きな駅にしかなく、大体どこも五万から十五万程度。指定都市であれば人口50万人程度、中核市なら人口20万人はいるわけで、ええ。

誰でも頑丈で安全なギルドの避難所に入れるわけではない以上、学校や病院、ホテルなどの臨時の避難所に籠ることになる人達には、最低限の自衛手段くらいは用意してあげるべきだと私は思いますけどねえ、ええ』

『臨時の避難所に指定された学校や病院、ホテルなどの場所には、Cランクカードを一枚、規模に応じてさらに追加のDランクカードを数枚配備することが決定されましたよね？』

フェイズ1までならそれらのカードで十分避難した方々を守ることができるとでしょう。やはり私はモンスターよりも、人間の悪意こそを警戒すべきと思いますね』

『Cランクカード一枚とDランクカード数枚で、数百人という人間を守り切れるとでも？ やはり、全国民にDランクカードを一枚は配るべきと私は思いますね、ええ。もし私が総理なら、そうしますよ、ええ！』

『全国民にDランクカードを配るなんて、そんな財源はどこにあるんです？ そもそも、一億枚以上のDランクカードなんて……どうやって用意するんです？ Dランクカードのドロップ率をご存じない？』

大体、私はアンゴルモア自体疑問視していますね。予言のどこにもアンゴルモアなんて単語はないじゃないですか！』

『君ねえ！ それを言ったら議論がなりたたないだろうが！ アンゴルモアが起こったらという前提で我々は話しているわけで――』

そこで、番組のチャンネルが切り替わる。

「はあ、最近、同じような番組ばかりねえ」

夕食中、なんともなしにつけていたTV番組を見ていたお袋が、リモコンをテーブルに置きながらうんざりしたように呟いた。

「私、もうこういうの見飽きた」

「たしかに、繰り返し同じようなことを言ってるな」

愛の嘆きに、親父も頷く。

実際、ここの所毎日同じような番組が繰り返し流れている印象があった。

アングルモアが起こったらのリアルなシミュレーションをしてくれる番組なんかは、最初は助かったが、それも繰り返し同じようなのを流されるとうんざりするし、それにああいふ番組は些か偏っているというか、一部の危機を大袈裟に煽り過ぎているように見えた。そういえば、と俺は愛に声をかけた。

「愛、なんか学校でカードの使い方を学ぶ授業が始まったんだって？」

「あ、うん。自衛隊の人たちと、迷宮に行つてカードの召喚とか、順番でモンスターと戦つたりしたよ。なんかクラスの馬鹿な男子たちが、カード同士でバトルさせたりして、泣くほど怒られてた」

アホだよなー、と言う愛に、俺も親父も苦笑した。

自分が小学生男子の頃を思い出したら、その男子生徒たちを笑えなかったからだ。

そりゃあ、普段からモノコロみたいな番組を見ていて、ポンとカードを渡されたらそういう行動をする男子も出てくる。男子小学生とは、そういう生物なのだ。

「しかし、やつぱ小学生とかまでカードを配るのはやり過ぎだったんじゃない？ 馬鹿なことするガキも出てくるしさ」

避難所生活でカードを使って悪戯するガキとか出てきたら、軽い地獄絵図だぞ。

「ふむ、難しいところだが、そういう馬鹿な子たちに抵抗するためにもやはりカードが必要になるだろうしな。……馬鹿なことをするのは子供だけじゃないだろうし」

そういう親父の視線の先には、お年寄りに配布されたカードをだ

まし取ったとして、若者のグループが逮捕されているニュースが流れていた。

確かに、子供とか大人とか関係なしに馬鹿な奴は出てくるか。

「っていつか、お兄ちゃんの学校じゃそうなの……あつ。そうか、お兄ちゃん学校に……」

「おい！ 引きこもってるみたいに言うな！」

気まずそうに目を逸らす愛へと、俺は断固として抗議した。

俺は、単なる登校拒否ではなく、ちゃんと事情があつて休学しているのだ。

そんな俺へと、親父は複雑そうな顔で問いかけてくる。

「うーん、こんな状況だから仕方ないっちゃ仕方ないが、学校はもう行かないつもりなのか？」

「いや、行くよ」

「お？ そうなのか？ なら良いんだ。……学校なんて今しか通えないからな」

「……わかつてる」

俺は神妙な顔で頷いた。

今なら、学校に通えるというのが、どれだけの贅沢だったのかわかる。

いまさらではあるが、わずかに残った貴重な日常は、大切にしておごしていくつもりだった。

……とはいえ、今の学校にどれだけかつての日常が残ってるかは、疑問だが。

試験が始まってからは、試験に集中するため学校のことに関して

は、完全にノータッチになっている。

実際は、報告を受け取るくらいに余裕はあったのだが、学校を離れている俺に出来ることなどあんまりないし、アンナの考えはこの前ので大体わかった。

よって、他の部員ともちゃんと相談して進めるようにとだけ言って、後は任せることにしたのだが……。

たぶん、俺の知る学校とは様変わりしていることだけは、予想がついた。

アンゴルモアの脅威を前に、今までのようにのほほんと過ごせる人間は少ない。

街を歩いていてもシャッターを下ろした店も増えてきたし、急速にかつての日常が失われていくのを感じる。

おそらくそれは、学校も例外ではないだろう。

……まあ、それも明日になればわかることか。

俺は内心で嘆息すると、親父へと言った。

「まあ、昨日で試験も全部終わったし、明日からまた学校に通うよ」

俺の三週間にわたる主ガチャは、ヘファイストスを昨日ドロップしたことで終わりを告げた。

ヘファイストス……そう、男カードである。

男カードであるにもかかわらず、鈴鹿のランクアップ先を差し置いてでも手に入れたのは、このカードがどうしても必要だったからだ。

ヘファイストスは、ギリシャ神話における鍛冶・工芸の神である。アイギスに、アルテミスの矢、ハデスの兜、アキレウスの盾といった武器の類から、ゼウスの玉座や自我を持って動く三脚器（今でいう自動車椅子）のような道具類、はては青銅の巨人タロースやかのパンドラの箱で有名なパンドラまで。

ギリシャ神話における名のあるアイテムは、大体は彼の作品である。

だが、その有能さに反して、その逸話は不遇の一言。

女神ヘラの最初の子でありながら醜いという理由で天から海に投げ捨てられ、妻のアフロディーテには外見で嫌われた上に浮気され離婚。女日照りのあまりか、仕事場にやってきたアテナに欲情して彼女の足にぶっかけ（マイルドな表現）をしたという、極まったキモオタでも中々しないような奇行に走っている。

そんなエピソードを持つヘファイストスさんであるから、手に入れようとした時は、アテナからそれはもう滅茶苦茶反対された。

一緒に召喚されるだけで妊娠してしまう、とまで言っていたからな……。

実際、神話の中ではぶっかけられた白濁液を拭きとった羊毛から人間の上半身と蛇の下半身を持つエリクトニオスが生まれているから、あながち被害妄想とも言い切れない。なお、アテナはちゃんとエリクトニオスを引き取って育てている。偉い。

それでも、アテナの強い反対を押し切ってまでヘファイストスを手に入れたのは、彼女にも無関係な話ではない。

彼女が強く求める神殿。

それが、ヘファイストス一枚あればすべて事足りるからだ。

ヘファイストスは、鍛冶・工芸の神である。当然、その範疇には建築も含まれている。

また、ヘファイストスは、自らの助手でありブランクモンスター
のキュクロプスを眷属として呼び出すことができ、キュクロプ
スたちもまたブランクのサイクロプスたちを召喚することができる。
サイクロプスは、キュクロプスの英語読みのはずなのだが、迷

宮においては別のモンスターとして出現する国が多い。知性と優れた鍛冶の腕を持つ下級神がキュクロプス、知性のない怪物としての存在がサイクロプスということなのだろう。

サイクロプスは、工作の腕は持たないが、力仕事には最適の存在である。キュクロプスたちが監督となり、ヘファイストスが設計・建築・全体指揮を行う。

つまり、ヘファイストス一枚で神殿が建つのである。

これには、アテナもぐぬ顔で納得せざるを得なかった。

というわけで、俺のデッキに男カードが初めて正式に加わったのだった。

ただし、リンクへの悪影響を考え、俺が彼にリンクを……という戦闘に使うことはないだろう。

完全なる生産要員というわけだ。

「……お！ じゃあリンク迷宮を踏破したのか。これで歌麿もブ口ってわけか」

「おめでとう、やったじゃない」

「お兄ちゃんすごい！」

俺の試験終了宣言に、家族全員が顔を綻ばせる。俺はそれに苦笑しながら答えた。

「いや、まだ実技クリアしただけだから、四ツ星じゃないんだけどね。あ、そうそう、新しいカード渡しておくわ」

そう言って、俺は今日新しく手に入れたCランクカードを親父へと手渡した。

「む、悪いな。正直、助かる。でも、こんなに渡してお前が使う分は、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。使わないのだけ渡してるし」

おかずを口に運びながら平然と言う俺に、しかし親父は心配そうな表情で言う。

「だが、すでに二十枚以上は預かってるぞ」

二十枚……改めて聞くと、凄い枚数だな。

だが、本当に大丈夫なのだ。なぜなら、俺がこの三週間で手に入れたCランクカードはその倍近いのだから。

俺のこの三週間のリザルトは、以下の通り。

カードのドロップ

- ・Dランクカード合計104枚（その内、人気カード42枚）
- ・Cランクカード合計48枚（その内、4枚は購入によるもの）

付喪神：特殊な装備化モンスター。面白いモンスターなので当然キープ。

モルモー：ギリシャ神話の吸血鬼にして淫魔。ヘカテーにエンプーサと共に仕えると言われている。エンプーサの無限着属召喚持ちキープ。

サキュバス：メアの復活用に当然キープ。

デュラハン（2）：一枚は愛に、もう一枚は親父に。二人が持っていたリビングアーマーは、家にいる時間が多いお袋が持つことに。

・新規購入分

アラクネー：ギリシャ神話の蜘蛛の怪物。美しい女性の上半身と

蜘蛛の下半身を持つ。神すら認める優れた織り手で、どんなシルクよりも極上の肌触りの糸を自ら生み出すことができる。アングルモア中の生産要員。今日、遠野さんから購入。

壺中之天：見た目は小さな壺だが、その中は立派な建物となっており、核となる仙人が常に温かい料理と美酒で持て成してくれる。

異空間型カード。家族の避難先として地下室へ。

マヨヒガ（2）：やはり合流に時間がかかった時のことを考え、愛と親父に一枚ずつ。

残りの39枚：十枚は、マヨヒガ等の購入資金に売却済み。残り
は、大半を家族へ。誰がどれを持つかは本人たちに任せた。家族全
員分のカードホルダーを渡しているのので、盗難の恐れはない。

・Bランクカード一枚
へファイストス

アイテムのドロップ合計164個

・レアドロップ（13）

白紙のカードの束：売却1000万円。

コールドアイロン（10kg）：魔よけの力を持った金属。壁な
どに混ぜることで、霊体モンスターのすり抜けを阻害する効果があ
り、今や金以上の価格で取引されている。1億4000万円で売却
済み。

バベルのカフス：愛が欲しかったので、愛へ。……マルと話して
る時に、たまにこつちを憐れむように見てくるのが気になる。

薬水の水差し（2）：地下室行き。

カードホルダー（2）：さらに一個購入し、家族全員で一つずつ。

魔石袋（4）：家族全員に一つずつ。

遭難のマジックカード：俺が所有。

レベルアップのマジックカード：地下室行き。

・ノーマルドロップ（152）
ポーションやマジックカード等、すべて地下室行き。

・新規購入分

廉価版カードギア（3）：ようやく、普通に買えるようになってきたため、アングルモア時の連絡用に家族全員のカードギアを購入。

わずか三週間、それも一人で潜っているにも拘らず、これほど大量のカードをドロップしているのには、もちろん絡繰りがある。

元々、真・スキル化したことにより、蓮華の幸運の加護も高まり、俺のドロップ率は通常の十倍ほどになっていた。

冒険者部の皆と潜っていた時は、ドロップ率の異常に気付かれぬようその分の幸運を貯蓄に回し、良いカードや良いアイテムを落とす敵が出現した時にだけ幸運操作をする……という使い方をしていたのだが、試験中は一人になったため貯蓄をせずに全体的にドロップ率を上げていた。

これにより、俺のCランクカードのドロップ率は1%となっていたのだが、ここにさらに一日一個のガーネットを消費することで、Cランクカードのドロップ率をさらに三倍の3%という驚異の数値とすることに成功していた。

ガーネット約二十個でCランク約40枚が多いか少ないのかは、ホーブダイヤ有りならガーネット七個でBランクカードが一枚手に入ることを考えると、人によって判断が分かれるところだが……強力なBランクカード一枚よりもCランク複数枚の方が役に立つ場面もあるだろう。

ちなみに、このドロップ率増加については、『事故』が怖いためにホーブダイヤは使用していない。

蓮華の加護を持つ俺であっても、極まれに運がマイナスに振れる

瞬間は存在する。ホープダイヤの威力を考えると、日常使用は厳禁だった。

「大丈夫だって。蓮華のおかげでこれくらい普通にドロップするからさ」

「そうか……蓮華ちゃんは本当にすごいな」

そう言って、二人で蓮華の方を見る。

すると、将棋の駒を持ってないドレスとマイラの代わりに指してやっていた蓮華が顔を上げた。

「あん？ 呼んだ？」

「いや、お前は本当に我が家の守り神だって話だよ」

「なんだそりゃ」

呆れた顔をする蓮華だったが、よく見るとその頬は微かに赤くなっていた。

「どれ、ちよつと勝負を見せてもらおうかな」

食べ終わった親父が、いそいそと盤の前へと移動する。

……見てもわからんと思うがなあ。

戦術スキルを有し様々な定石を駆使用するマイラと、独特の感性から思わぬ手を打つドレスの勝負は、もはや俺如きではついていけないレベルとなりつつある。

俺以下の腕前で、下手の横好きの親父ではなおさらだろう。

なにやら訳知り顔でうんうんと頷きながら見ているが……あれは確実にわかってないな。

「今日はなにするー？」

指し手を親父と交代して手が空いた蓮華に、愛が問いかける。

「人生ゲームに一票」

『メアも』

『ふ、今日こそは妾が勝ちます』

メアとアテナの言葉を聞いて一つ頷いた蓮華が、もう一つのビジョンに振り返る。

「鈴鹿もそれでいいか？」

『……………いいよ』

しづしづ……………といった表情を装いつつ内心で喜んでいるのが明らかなき様子で、鈴鹿が頷く。

それを見て、俺は内心でホロリと涙を流した。

鈴鹿……………自然に遊びに入れるようになったんだな。

今は蓮華がメアとアテナの仲介役となっているが、いつかは鈴鹿自身から仲間に入れてと言える日も来るだろう。

甘い香りにキッチンの方を見ると、イライザとオードリーがお袋からお菓子作りを教わっているところだった。

きっと後で人生ゲームが盛り上がってきたところで差し入れをするのだろう。

ソファアのところでは、ユウキがマル相手に忠犬とはなんたるかを説いている。

ユウキ……………残念ながら、その馬鹿犬はもう手遅れだ。

そうして北川家では、今日も平和で穏やかな、しかし黄金のように貴重な時間が過ぎていくのだった。

第十九話 貴重な日常（後書き）

【TIPS】おっぱいランキング

どっかででリクエストされた、乳比べ。

ハトホル

>> (世界最胸の壁) >>

鬼子母神・蓮華

>> (母神の壁) >>

ヘレン>牛倉 鈴鹿

>> (爆乳の壁) >>

神無月姉、一条>オードリー、イライザ アンナ

>> (巨乳の壁) >>

吉祥天(大)・蓮華 四之宮さん>ユウキ

>> (普乳の壁) >>

ロリ吉祥天・蓮華 サキユバス・メア

>> (ちっぱいの壁) >>

座敷童・蓮華、アテナ、愛

>> (おっぱいと胸板の壁) >>

小野>織部 マロ

第二十話 ポケットティッシュみたいに無造作に使い捨ててきた癖に……。

「これは……」

翌朝、学校へ登校した俺は、違和感に眉を顰めた。

久しぶりの学校は、以前とは明らかに雰囲気異なっていた。

まず、登校時間だというのに、明らかに生徒数が少ない。

記憶に残る光景よりも、三分の二から半分程度に感じる。

また、生徒たちから俺に向けられる視線も大分変化している気がした。

以前は、好意よりの好奇心や羨望が半分以上を占めていて、嫉妬や邪推といった悪感情もあったが、それもさほど強いものではなく、無関心の生徒が多かった。

だが、三週間ぶりの学校では、無関心の生徒は消え、八割ほどの生徒が強い尊敬や羨望を、残りの二割が強い嫉妬や憎悪を向けてくるようになった。

前者の生徒の中には、俺がすれ違う際に廊下の端によって頭を下げてくる者すらおり、逆に後者の生徒は、わざと肩をぶつけてきたり、舌打ちを聞こえるようにしてくる者がいた。

感情の正負の差はあれど、両者とも明らかに同じ学校に通う生徒に対する対応ではない。

前者の対応など、どちらかという国防衛大とかの上下関係に近い感じすらした。

まるで自分が異物になってしまったような感覚に、拭いきれない違和感を覚えつつも自分のクラスへと到着すると、四之宮さんが以前と同じ笑みで迎えてくれた。

それに内心でホツとしつつ、席へとつく

「おはよー、マロ。なんか久しぶりだね」

「おはよう、四之宮さん。……他の皆は？」

挨拶を交わしながら、他のカーストトップグループが見えないことを問いかけると、四之宮さんは曖昧な笑みを浮かべた。

「あー……たぶん、みんな今日も来ないんじゃない？」

「え？ どういうこと？」

「いや、最近みんな迷宮に潜って学校来ないからさ」

は？ 学校を休んで迷宮に潜っていたのは、俺だけじゃなく、みんなもつてことか？ ……って、まさか。

俺は、半数近くが空席となっている教室を見渡しながら恐る恐る問いかけた。

「……もしかして、この空席ってみんな迷宮攻略に？」

「全員じゃないけど、まあ大体そうかな。今、クラスの三分の二くらいは冒険者だから」

「マジかよ……」

それって冒険者部のせいだよな……？ 普通のクラスメイト達が、そう簡単にドリンクカードを買い取るわけがないし、冒険者部がレンタルしたからとしか考えられない。

「それって、このクラスだけ？ まさか……学校全体の話じゃないよね？」

「うーん、ウチのクラスは特に多い方だと思うけど、でも学校の半分くらいはもう冒険者部かな……」

「……………」

俺は絶句した。

ウチの学校って、全学年で600人以上いるんだぞ。

その半数って……そこまでいったら、もう部じゃねえだろ。

「ってことは、学校の半分くらいが授業にも出ずに迷宮に潜ってるってこと?」

だとしたら学級崩壊ってレベルじゃねーぞ。

「さすがにそこまでは……。ローテーションしてるみたいだから、その半分くらいかな」

ってことは、ウチのクラスでは三分の一、他のクラスでは四分の一って感じが。

それでも大分休んでいるが……。

「それ、先生とかは、なんも言わないの?」

「うーん、それがねえ、先生たちの間でも大分意見が割れてるみたいでさー。先生たちも冒険者部派と反冒険者部派に真っ二つになってる感じなんだよね」

うわぁ、先生たちにまで波及してるのかよ……。

「ヒヨリちゃんなんかは冒険者部派の筆頭なんだけど、ずっと迷宮に潜って生徒たちの引率をして。授業も全部自習だし……他の冒険者部派の先生たちも似たようなもので、逆に反冒険者部派の先生たちが自習の見回りに来てるくらいで……」

それ、もう教師失格だろ……。

反社養成校と呼ばれるような高校でも、もうちょい教師に熱意があるぞ。

そりゃ、反冒険者部派なんてもんもできる。自分たちに仕事を押し付けて迷宮に行ってる同僚がいるんだからな。苛立たしいなんてもんじゃないだろう。

ここに来るまでの俺に対する視線も理解できた。要は、生徒たちも冒険者部派と反冒険者部派に分かれてるってことか。

前者は、冒険者として格上の俺に敬意を払い、後者は半ば教育システムを崩壊させた冒険者部にヘイトを向けている、と。後者の中には、冒険者部に入りたくても面接で落とされた奴らも混じっているのだ。

……まあ、いいや。これ以上は、アンナに直接聞くことにしよう。

「……クラスの三分の一くらいは迷宮に行ってるとして、それ以上に空席が目立つ気がするけど？」

「その子らは、家の事情で休んでる子らだね。学校に行くこと自体が危険って家に籠ってたり、中には家族みんなで迷宮が少ない県や島に引っ越した家とかも結構あるみたい」

「あー、なるほどね」

確かに、そろそろそういう家庭も出てくるころか。

学校自体は冒険者部のおかげで安全ではあるが、多くの生徒はそれを知らないし、そもそも通学自体がリスクではあるもんな。迷宮の数は人口に比例するという統計もあるし、人のいない土地に引っ越しという選択肢も理解できる。

……特に、今は学校に来てても授業すらやってない教師もいるらしいしな。一般の生徒からみて、マジで来る理由がない。

ってか、逆に四之宮さんはなんで学校に来ているんだろうか。

「……四之宮さんは、なんで学校に来てるの？ いや、悪い意味じゃないわ」

「あー、ウチは、まあ、その、ね……」

四之宮さんは、微かに頬を染め、チラリと見て、俯いた。

……この、反応は。

いや、待て。勘違いするな。中学時代の黒歴史（教訓）を思い出せ。

隣の席の女子に脈があると思って、毎日頑張って話しかけた結果どうなった？

あの時の「毎日毎日、よくしゃべるねえ……」という言葉と、うんざりした顔を思い出せ。

……うん。……落ち着いたわ。

ふっ、危うくまた一年くらい女子と話せなくなるところだったぜ。勘違い、ダメ、絶対。

「まあ、ホラ、ウチはアパートだからシエルターとかも無いし、学校の方が逆に安全かなって」

「なるほどね」

ホラな？ ちゃんと理由があんだよ。

ここで「もしかして、俺に会いたくて……？」なんて勘違いしてたら即死だったわ。危ない危ない。

迷宮じゃなく、日常の中にこそ危険なトラップはあんだね。

『……哀れなり、歌麿』

黙れ、蓮華。

同情するならカノジヨをくれ……！！

『なんだ、まだ彼女作ること諦めてなかったのか？』

諦めてねーわ。

……いや、今恋人が出来たら困るっちゃ困るんだけどな。

ぶっちゃけ、俺がどうしても守りたい梓は家族と友人たちでいっぱいいっぱい、これ以上抱えきれない……って、そうそう。

「あ、そうだ。これ、渡しておくよ」

俺は、四之宮さんらに渡そうと思っていたものをコツソリと彼女へと手渡した。

「これ……！」

Dランクカード六枚を受け取った四之宮さんが、眼を見開いてこちらを見る。

「さすがに受け取れないって」

四之宮さんは、周囲を見渡し言う。

「いいから。受け取っというて」

「でも……」

「あげるわけじゃなく、預けるだけだから」

「うーん、それでも申し訳ないっていうか……もはや怖い。これ買ったらいくらするの？ ヤバ、なんか手が震えてきた……」

「うん、まあ、お守り代わりだと思ってさ。あくまで登下校中とか休日にアンゴルモアが起こったら、それで無事に避難できるように感じて。だから悪いんだけど、それで冒険者活動とかはしないでほしいかな」

「や、もう迷宮とかはどつちにしろ怖くて入れないんだけどさ。……お守りかあ」

「それと、これは牛倉さんの分。……ってか、神道が冒険者になったのは知ってるけど、牛倉さんも？」

「あ、静歌でもあるんだ。静歌は、休学組かな。あの子の家って地主だから結構大きいし、立派なシエルターもあるから」

「なるほどねー。まあ、一応渡しておいて」

「うーん、自分でわた……いや、ううん、わかった。ありがとう、預かってく。……けど、ホントにいいの？」

「うん。他にも親しい友人にはみんな配る予定だし」

小野と一条さんには、Ｃランクカードを一枚ずつ。東西コンビや四之宮さんらカーストトップグループの皆にも、Ｄランクカードを六枚ずつ配る予定だ。

今回の四ツ星昇格試験で家族分のカードは十分集まったので、そろそろ友人たちにもカードを回しとかないとな。

友人の身の安全のためにも……ってのもあるけど、アンゴルモア後の信用できる人材ってのは、カードよりも貴重になってくるだろうし。

「でも、そんなに配って大丈夫なの？」

「平気平気」

俺は、それこそ昼飯のパンを奢るような軽い態度であえて応えた。ちょっと成金っぽくて感じ悪いかもしいが、これくらいの方が相手の申し訳なく感じなくて良いだろう。

しかし、全校生徒の半数が冒険者部に、ね……。クラスメイトに一人でも冒険者になった奴が出てきたら大騒ぎしていたのが、嘘のようだ。

アンゴルモアが間近に迫ればこうなるのもわかるが……。

俺は、空席が目立つ教室を見渡した。

……学校の日常を、もう味わえそうにないのだけが、少し残念だった。

「先輩の実技突破を祝ってカンパイ！」

アンナの音頭に合わせて、俺たちはジュースのコップを打ち鳴らした。

放課後。俺は、冒険者部の初期メンバーの皆に、いつものファミレスでお祝いパーティーを開いてもらっていた。

「や、ごめんね、僕の都合でマロには面倒を掛けて……」

乾杯をしてすぐ、師匠がそう頭をさげてる。

「いやいや、良い経験になったんで」

「しかし、あっさり一発で実技をクリアするなんて……。マロも、もう完全にプロクラスだね」

これまでも世間には、完全にプロクラスと言われてきたが、本物のプロである師匠からもお墨付きをもらい、俺は内心でかなり誇らしくなった。

「筆記試験や諸々の条件も簡略化されたことだし、マロもこの勢いで四ツ星になっちゃえば？」

「うーん……」

「まあまあ、今はそんな話いいじゃないツスか！　せつかく皆で集まったんですし、もつと面白い話しましょうよ！」

俺がなんて答えたものか迷っていると、アンナがそう割り込んできた。

「なんか面白いカードとか魔道具手に入れました？」

師匠や織部から見えない角度からそう言うアンナの眼は、余計なことは言うなと語っていた。

ふむ…… Bランクカードのドロップは当然言えないとして、家族に渡した分も言いつらいとなると、残りは……。

「そうだな。アラクネー、付喪神、モルモー……こんなところかな？　魔道具は特に面白いのは無し。コールドアイロンが出たから売って金にしたわ」

「へえ、確かに面白いのが出たね」

「アラクネーツスか。生産系は揃えたつもりでしたけど、食材系に偏ってましたし、地味にウチらに欠けていた要素ツスね」

「うむ。服を自分たちで作れるのは助かるな」

アラクネーの名に、女性陣……特にファッションにこだわりのある織部のテンションが上がる。

やっぱり、そこらへんは気になるところなのか。

「僕としては付喪神も面白いと思うね。……アンゴルモアが始まったら学校そのものを付喪神化できるか試してみたいな」

その師匠の言葉に、俺たちは三人で顔を見合わせた。

学校そのものを付喪神化？　その発想はなかったな……。

「……確かに、試してみる価値はありそうツスね」

「もし内部の人工魔道具を取り込んで付喪神化できるなら、機械破壊で破壊されなくなったり、回復魔法で治せるようになるかもしれない」

「もし可能であれば、付喪神の価値は跳ね上がりますね」

「人工魔道具の付喪神化は、すでにデータがあつたはず。確か機械破壊が効かなくなったはずだよ」

「拠点内部に置かれただけの物に関してはどうなるかご存じツスか？」

「そこまでは……。そもそもどこまで大きな物を付喪神化できるかわからないし。たぶんどっかの研究所じゃ研究してるんだろっけ」

「……そうツスね。そこについてはウチの方で調べてみます」

アンナは忘れないようにスマホに何かメモすると、バッグからリストを取り出して俺に渡してきた。

「ついでなんで、こちらが手に入れたカードと魔道具についても共有しておきますね。なにか欲しいのありますか？ 買い取りになります」

「ん」

俺は、ざっとCランクカードとレアドロップの欄にだけ眼を通した。

カードのドロップ

・Cランクカード合計5枚。

牛頭鬼^{ゴスキ}：牛頭の地獄の獄卒。二体一対型のカードであり、馬頭鬼^{メスキ}

とセットでその真価を発揮する。 織部が買い取り。

ヴィーヴィル：美女の上半身と飛竜の下半身を持つ竜人。魔法全般に強い耐性を持ち、ありとあらゆる攻撃を一度だけ反射する先天的スキルを持つ。冒険者部でキープ。

ジャンヌ・ダルク：ウィッチの亜種。生まれは人間だが、魔女として火刑に処された逸話により、迷宮においてはモンスターとして出現する。魔女でありながら聖女としての側面も持ち、攻守において高い安定感を持つ。二年の一条かおりヘレンタル。

ウィッチ：冒険者部でキープ。

マギウス：ウィッチの男版カード。二年の小野弘之ヘレンタル。

アイテムのドロップ

・レアドロップ（15）

コールドアイロン（10kg×5）：10kgあたり1億4000万円。合計、約七億で売却済み。

白紙のカードの束：売却済み一千万。

真竜の角：ドレイクの角。使用することで魔法の威力を上げ、鋭い切れ味を持つ角を生やす。5〜10回は使用可能。

龍の玉：東洋の龍が持つ玉。使用することで、高等魔法使いスキルを一時的に付与する。5〜10回は使用可能。

名酒・酒屋殺し

サラマンダーの外套

バロメッツ

短距離転移のマジックカード：ショートテレポートの魔法が封じられている。数メートルから50メートルほどの距離を一瞬で転移できる。緊急回避用。

遭難のマジックカード

レベルアップのマジックカード

クレアヴォイアンスのマジックカード

カーバンクルのドロップ

・ガーネット合計90個。未回収残り20個

・金色のガツカリ箱

宝籤（5）：十枚セットの黒色無地のカード。使用することでラウンドでモンスターカードへと変化する。

宝箱（2）：両てのひらに乗る程度の小さな宝箱。開けると中にカード化されたアイテムが入ってる。宝籤のアイテム版。「ガツカリ箱の中にさらにガツカリ箱が入ってた……」by冒険者。

髭切：渡辺綱が鬼を切ったとされる刀。鬼属性に対する特効と再生阻害の効果持ち、500相当の戦闘力を持つ。

転移のマジックカード（2）

「ふむ……ガーネットの数に比べてドロップが少ないな」

「今回は、簡単に地上に帰れないので、一気に迷宮を駆け抜けて踏破する方針にしたんすよ。」

とにかく先に進むことを優先して戦闘自体を回避したんで、ドロップは少なくなっただんすけど、代わりに現在二周目の踏破目前って感じっす。ただコールドアイロンに関しては高騰中なんでちょっと優先的にドロップを狙ってる最中ですね。売却費は、そのままヨヒガなどの異空間型スキル持ちの購入に充てました」

なるほど……。コールドアイロンは、今やガーネットなんかよりもよっぽど資金源になるからな。

「お、ヴィーヴィルがドロップしたのか……」

「はい。……先輩買い取りますか？ 確か、ドラゴネットが、ヴィー

「ヴィルダイヤに反応してましたよね？」

「……確かに、ウチのマイラがヴィーヴィルダイヤに反応を示していた。」

最初にヴィーヴィルを倒した時は、人間勢が集まっていたので遠慮して言わなかったらしいのだが（滅私奉公がマイナスに働いた形だ）、実はダイヤに惹かれるものがあつたのだと言う。

つまり、マイラはこれで五種の霊格再帰を持つということになる。ヴィーヴィルダイヤは、キーアイテムに使うより因果律の歪みの解消という唯一無二の役割があるためこれまで与えていなかったのだが、ヴィーヴィルのカードがドロップしたとなると話が違ってくる。

俺は少し考え、頷いた。

「そうだな。買い取らせてもらえるか？ それと、この髭切も」

「髭切もツスカ？ 他に欲しがってる人もいないんで別に良いツスけど、別に買い取らずとも使いたいなら先輩が使っても良いツスよ？」

「いや、買い取るよ。ちょっとと思うところがあつてな。合計でいくらになる？」

「そうツスね。後で相場を調べてから連絡します」

まあ、実際はガーネット用の資金から出るんだろうけどな。

「……ってか、ついつい聞きそびれたけど、この学校の有様はどういうことだよ？」

ハッと思い出した俺が問うと、アンナはアチャーと天を仰いだ。

「やはりお気づきになりましたか」

「そら気づくわ」

バカにしとんのか。

「アンナよ、こうなったら年貢の納め時という奴だ。洗い浚い先輩にぶちまけてしまえ」

「そうそう、ちょっとマロに怒られた方がよいよ。いくらなんでもやり過ぎ」

ここぞとばかりに敵に回る織部と師匠に、アンナはバツの悪そうな顔で頬を掻いた。

「や、ウチが特になにかしたってわけじゃないんすけどね……別にウチは学校休んでまで迷宮に潜れとは一言も言ってませんし、部員数に関しても流れによるものというか」

「そうなのか？」

「はい。……先輩やウチらが授業休んでまで迷宮に潜ってるのを見た新入部員たちが、勝手に真似をし出したというか」

「あー……」

そうか、俺たちが率先して授業サボってたら、そりゃ真似する生徒も出てくるか。

「で、それがなんで全校生徒の半分も冒険者になる事態に繋がるんだ？」

「ふむん……。まず、新入部員の皆さんは、自分たちも学校の迷宮に潜りたがったんすよ。彼らにとって迷宮＝学校のというイメージが強かったのと、プロがついていけば安心という考えからでしょうね。……でも、当然連れていくわけにはいかないッスよね？」

「まあ、そりゃあなあ……」

ただDランクカードを持つてるだけの新米冒険者が、あの迷宮の過酷さについていけるわけがない。

なんなら第一階層の砂漠すら踏破できないだろう。

「でも、それをストレートに言うわけにはいきませんし、新入部員に詰め寄られる中、どうしたものかと思っていたところ、小野さんがやってきまして」

「小野が？」

「ええ、Cランク迷宮に連れていけとは言わないから、せめて新入部員たちにDランクカードを返済できるチャンスを与えてくれ……と土下座してきまして」

「ふむ……つまり、Dランク迷宮に自分が連れていくって言うてんのか？ その代わりに、Cランクカードをいくらか貸してくれ、と」

俺がそう言うと、師匠がちょっと驚いた顔をした。

「マロ、よくわかったね」

「いやぁ……アイツの考えそうなことだから」

小野の考えが理解できてしまう、というのはなんとなく嫌な気分だった。

ついでに言うと、新入部員たちが学校の迷宮に入りたがったのも小野の誘導だろうし、土下座もヤツお得意のパフォーマンスだろうな。

「ウチはその提案を飲むことにし、小野さんと女子で唯一二ツ星だった一条かおりさんをそれぞれ男女のリーダーとし、お二人にCランクカードをレンタルしました。さらに、プロの引率もなく学校外の迷宮に行くわけですから、立候補してきた立花先生にマヨヒガを

一枚預け、顧問として引率してもらおうことにしました」

なるほどね……。あのジャンヌダルクとマジウスのレンタルはそういうことか。

それに、先生にマヨヒガを持たせることで、初心者揃いの新入部員たちでもストレス無く泊りがけで攻略をできるように整えた、と。

「こうして新入部員たちが自力でDランクカードを手に入れられる環境が整ったわけッスけど……。ここで一つ問題が発生しましてね」

「問題？」

「はい。……。カードを手に入れた部員が、友人にカードのレンタルを始めたんスよ」

「あー……。なるほど」

そうか、そういう事も当然起こるか。

俺が、四之宮さんや東西コンビにDランクカードを配ったように、仲の良い友人にDランクカードをレンタルするヤツがいても不思議ではない。

当然、中には悪意を持って異性にカードをレンタルする輩もいることだろう。見返りにカラダを要求したりな。

「小野さんからの報告でそれを知ったウチは、このままでは色々問題があると判断し、カードのレンタルを始めた生徒へウチからレンタルしたカードの返却を求めました。当然、カードを没収された生徒は、自分が貸し出した方のカードの返却を友人に求めました。

これで一応、だいたい元の形に戻ったんスけど、このままでは再度同じことが起こると判断したウチは、新しくDランクカードを手に入れた生徒にはウチからレンタルしたカードの返却を求めるところにしました。

その上で、回収したカードを人格的に問題ない生徒へとより積極

的に貸し出すことにしました。無差別に校内の冒険者が増えるくらいなら、せめて冒険者部の方でコントロールした方がマシッスからね。

そうして増えた新人部員たちがDランクカードを手に入れ、それを返却しに来て、ウチはそれをさらに入部希望者へレンタルし……」
「ってサイクルでどんどん校内の冒険者数が増えてきた、と」

なるほどなあ。

校内の半数以上の生徒が冒険者になったカラクリがわかり、俺は深く頷いた。

確かに、その方法なら効率よく冒険者を増産できるか。

三ツ星冒険者が一人でもいれば、一ツ星冒険者を量産できるという良いモデルケースだな。

これまで同様の手法を誰も取らなかつたのは、カードを貸す側にメリットがないからだろう。

カードを持ち逃げされたりロストされるリスクを背負って、リターンは精々一月分のレンタル料と恩を売れることぐらいしかないからな。

アングルモアが迫り、少しでも人手が欲しいこんな状況でもなければ、誰もやらないだろう。

ただこの方法では、アンナよりも実際に面倒を見ている小野たちの方が新人部員たちへの影響力が強くなってしまいが……まあ、彼女もそれはよく理解しているだろうし、問題はないのだろう。

「ね？ 特に悪いことはしてないでしょ？ そりゃ、さすがに一気に増やし過ぎたのは認めますが、皆さん戦う力がないことを不安がってましたし、死人はもちろん大きな怪我をした人たちもゼロ。みんな喜んでましたよ。先輩も、廊下で頭を下げられたんじゃないっすか？」

……ふむ。

まあ、確かに悪いことは何一つやってない、か。
校内の半数以上を取り込んだと聞いた時は、反射的にやり過ぎだ
と思ってしまうたが、話を聞けば仕方ない部分もあるし、何より冒
険者数の増加は、そのまま自分で身を守る生徒が増えることに繋
がる。

懸念であったカードの力で横暴を行う生徒の存在も、校内の半数
以上がカード持ちとなったら、暴力を振るえる相手も減るだろうし、
それを止める生徒の数も同じように増えている。

結果的には、アンゴルモア中の校内の治安安定に繋がるだろう。

半ば学級崩壊を超え学校崩壊となってしまうって、教頭たちまとも
な教師たちに迷惑をかけてしまっているが、ぶっちゃけ学校の勉強
なんてアンゴルモア中は何の役に立たないしな……。

仕方ない……か。

と、俺が納得しかけたその時。

「―――だが、他の生徒たちの日常を奪った」

鋭い一言が、場を切り裂いた。

ハッ、と師匠を見る。

師匠は、いつになく険しい表情で真正面からアンナを睨んでいた。

「普通の生徒たちが過ごせる、平和で貴重な最後の日常だったのに」
「……………へえ」

スッ……と、アンナの顔から表情が消え失せた。

急速に、場の空気が冷えていく……。

「……そんなに大事な日常なら、なぜ皆もつと大事にしなかったんです？」

「なんだって……？」

眉を顰めて聞き返す師匠に、アンナはうつすらと冷笑を浮かべて言う。

「だって、そうでしょう？ この日常がいつまでも続かないことなんて、わかりきっていたことじゃないですか。TVでもお偉い学者さんたちが何度も迷宮終末論を唱えて、警告してくれてましたしね。でも、世の大半の人たちは、そんな現実から目を背けて、いつまでも今日と同じ明日が続くと妄信してきた。危機に備えるわけでもなく、かといって残された日常をできる限り楽しむわけでもなく。ひたすら怠惰に浪費してきた。いや、今も浪費し続けている。この平和な時間が嗜好品であることに気づかないまま……」

「私は、大事にしてきましたよ。アングルモアに備えて戦力を整えつつ、親友と同じ高校に入って、尊敬に値する先輩と一緒に部活をつくり、夏には一緒に花火をして、学校にお泊りして……。ただ単に危機に備えるだけじゃなく、限りある貴重な日常を、できる限り楽しむ努力をしてきました」

楽しかったこの一年に想いを馳せるように、暖かな笑みを浮かべていたアンナだったが、そこで一転して露骨な嘲笑へと表情を切り替える。

そして、吐き捨てるように言った。

「他の生徒たちの日常を奪った？ ハッ、知った事かよ。どうせアイツ等、街中で配られるポケットティッシュみたいに、無造作に一日一日を使い捨ててきたんだろうが。いまさら、ちよっぴり残った

日常を大事にしてんじゃねーよ」

「アンナが、師匠を睨む。

内に秘めていた怒りを吐き出すかの如く、凶悪に歯を剥き、言った。

「――これまで怠惰に過ごしてきたモブ（キリギリス）どもは、これから来る冬の時代で無駄に過ごしてきた日常をオカズに、自分を慰めてろ……！」

場に、重い沈黙が落ちる。アンナの発する異様な威圧感に、誰も一言も発することができずにいた。

やがて、師匠が絞り出すように言う。

「……………それが、君の本音か」

アンナは、ニッコリと……………しかし常のそれとは明らかに違う冷たい笑みで応える。

「だとしたら？」

「学校のみんなや、近隣住民を助けるといっつのは……………嘘か？」

「まさか！ ちゃんと助けますし、そこらの避難所よりずっと安全で快適な待遇を約束しますよ。……………可愛い可愛い、将来の領民（働きアリ）候補ですからね！」

空気が、異様に重かった。

俺と織部は、頬に冷や汗浮かべて、肩を寄せ合い場の片隅で息を潜めているしかなかった。

なぜ、こんなことに……俺の実技試験突破おめでとうパーティー
のはずだったのに。

「……………ふう」

師匠は、しばし難しい顔で黙り込んでいたが、やがて大きいため
息を吐くと、言った。

「……近隣住民や一般生徒たちを助ける気があるなら、僕から何も
言うことはない。……たとえ君が腹の中でどう考えていようとね」

それを聞いたアンナは、わざとらしく胸を撫でおろし、パンと両
手を打ち鳴らした。

「あー、良かった！ こんな『くだらないこと』で喧嘩なんて馬鹿
らしいですからね。仲良くしましょう、仲間なんですから」

「くだらない、ね……」

師匠が、ポツリと呟いた。

——その後は、とても食事を続ける空気ではなくなり、解散
となった。

一人家路へと歩きながら、考える。

まさか、アンナがあんな毒を内に秘めていたとは……。

いまさら、ちよっぴり残った日常を大事にしてんじゃねーよ、か。

これは、耳が痛かったなあ……。
たぶんアンナは、俺に言ったつもりもないだろうし、俺のことを
そう思っていないからこそあの場でそう発言したのだろうが、これは
まさに俺に突き刺さる言葉だった。

俺こそ、アンナの言う日常を大切にしてこなかったキリギリスの
一匹だからだ。

日常の大切さに気付いたのは、つい最近のことで、最後にちよっ
ぴりだけ残った部分を、いまさら後生大事にして過ごしている。

しかも、蓮華に忠告されなければそれすら無駄遣いしていた、マ
ジもんの大馬鹿者だ。

アンナが怒る気持ちもわかる。

俺の知る限り、十七夜月アンナほど毎日を大事にしてきた人間は
いない。

彼女は、この世界にあつて、平和な日常が貴重品であることを認
識していた数少ない人間だった。

そんな彼女から見て、怠惰に毎日を過ごしている人々たちは、酷
く無駄使いをしているようにしか見えなかったのだろう。

だが……その一方で俺は、それが必ずしも悪いこととは思わな
いのだ。

なぜならば、『日常の大切さに気付かずにごしてきた日常』も、
決して無意味だとは思わないからだ。

まったりした穏やかな時間や、無邪気な笑顔は、そういう日常の
中にしか存在しない物だ。

……アンナは、いささか時間に追われ過ぎるところがある。

バイキングで時間制限ギリギリまで好物を腹に詰め込む客のよう
に……まるでゆっくりすることを罪かのように考えているように思
えるのだ。

師匠は、あれでのんびり屋さんところがあつて、空いた時間を

お昼寝して過ごすのが幸せ……みたいなのところがあるから、そういうところも二人は真逆と言えるだろう。

いずれにせよ、今回のことで、師匠とアンナの間に確実に溝ができたのは間違いない。

二人ともリアリストであるため、個人的な感情が冒険者部の行動に支障をきたすことはないだろうが、その思想に差があり過ぎるのは明らかだ。

「はあ……」

思わずため息がこぼれ出た。

アンゴルモアが目前に迫ったここで、アンナと師匠との間に溝ができてしまったのは本当に痛い。

平和な今ですら溝が生まれてしまったのだ。

さらに厳しい判断が迫られるアンゴルモアが始まったら、一体どうなってしまうのか……。

……いや、違う！ どうなってしまうのか、じゃねえ！

いつまで他人事なんだ！ 二人の間に溝が生まれてしまったのなら、俺がその間に立てば良い。俺だけじゃない、織部だっている。

人間関係、些細なことで溝ができることなど珍しくはない。

そういう時にどう立ち回るのか、それが重要なのだ。

そうとなれば、アンゴルモアが始まるまでの間に、どれだけ両者の関係を修復できるかだな。

どうか、これ以上二人の溝が広がるような事件が起こりませんように……。

俺は、夜空へとささやかな祈りを捧げた。

——全冒険者に向けてAランク迷宮攻略の公募の通知が届いたのは、その夜のことだった。

第二十話 ポケットティッシュみたいは無造作に使い捨ててきた癖に……。 (後書き)

【TIPS】日常

十七夜月 アンナは、冒険者部の中で最も日常の価値を知り大事にしてきたが、しかしその一方で、自らを異物として排斥し続けてきた日常を構成するパーツ（キリギリス）たちに対しては、深い怒りと嫌悪を抱いている。女王蟻である彼女が愛する対象は、同胞である蟻たちのみ。

織部 小夜は、冒険者部の中で最も日常を愛しているが、しかしそれが限りあるものである事実からは目を背け、それがいつまでも続くと妄信してきた。彼女は、怠け者の働き蟻である。だが、女王はそれを許すだろう。なぜならば異種たちの中にあつて、彼女は唯一女王の孤独を癒してきてくれた存在なのだから。

神無月 翼は、冒険者部の中で最も日常を守るために行動してきた人間であるが、みんなの日常を守るためならば自らの日常を切り捨てられる人間である。同じ蟻でありながら、微かに漂う違和感に、女王は疑惑を確信へと変えつつある……。

そして北川 歌麿は ……。

第二十一話 ハンプティダンプティは元に戻らない(前書き)

第二十一話 ハンプティダンプティは元に戻らない

「12月1日より、冒険者協同組合・自衛隊共同でのAランク迷宮攻略を行う。」

ついては、攻略に参加する人員の募集を行う。

参加資格は、個人での三ツ星ライセンスの所持か、四ツ星以上のチーム及び個人。

参加者には、三ツ星にはCランクカードを一枚とDランクカード五枚、四ツ星以上にはBランクカードを一枚貸し出すものとする。

報酬は――――」

「――――貸し出したカードを、踏破の有無に関わらず作戦終了時点で与える、ねえ」

ギルドから届いたクエスト通知をそのまま読み上げたアンナは、最後に軽く鼻で笑うと、俺たちの顔を見渡した。

「答えは決まり切っているようなものツスけど、一応聞いておくと思います。冒険者部として、このクエスト、どうすべきと思いますか？」

翌日、早朝。

俺たちは、昨夜届いたギルドからのクエストについて話し合っために授業前に部室へと集まっていた。

「最初に言っておくけど……冒険者部の結論がどうであれ、僕はこ

れに参加するつもりだ」

アンナの問いに真つ先に答えたのは、師匠だった。師匠の参加発言に、アンナはピクリと一瞬だけ眉を動かしたものの、何も言うことはなく発言の続きを待つ。

「以前話した一時的離脱つてのが、コレでね。悪いけど、冒険者部の方でどういう結論が出ても参加させてもらう」

「ああ……やはり、絶対に断れない用事つてこれでしたか」

アンナは、納得したように頷いた。

「了解です。事前に聞いていた通りですし、神無月先輩はクエストに参加してもらっても大丈夫です。……一応聞いておきますが、ちゃんと戻ってきてもらえるんすよね？」

「そのつもりだよ。……その時にちゃんと居場所が残ってたらだけど」

「ありや、なんか一気に信用無くなっちゃった感じツスね。ちゃんと残ってるんで安心してください」

「うん。ありがとう」

表面上は穏やかだが、どこか寒々しいやり取り。

昨日までは確かにあった暖かな友情や信頼は消え、二人の関係はビジネスライクなものとなってしまうていた。

俺が内心でため息を吐いていると、アンナは次に織部へと視線を向けた。

「小夜はどうする？」

クエスチョンマークを付けつつも、微塵も織部の答えを疑ってい

ない様子でアンナが問いかける。

それに織部はしばし苦悩するように沈黙し、そして答えた。

「……私は、参加したい」

アンナが、露骨に「はあ？」という顔をした。

「小夜、狂ったの？ この依頼、どう見ても冒険者を最下層までの露払いに使う気満々でしょ。露払いと言えば聞こえは良いかもしれないけど、軍の体力を温存するための肉の盾じゃん。そりゃ神無月先輩みたいに四ツ星ライセンス持ちで、自衛隊にコネがあるなら大事にしてもらえるだろうけど、私や小夜程度じゃ良いように使い潰されて終わりだよ」

……アンナの言い様に師匠が苦笑するが、特に反論する様子はないかった。

実際、この依頼はかなりキナ臭い。

常は自衛隊だけで攻略しているAランク迷宮に、なぜ冒険者を募集するのか。

少なくとも、冒険者を大事にして活躍させるような接待はしてくれないだろう。

師匠が参加するのだって、たぶん元自衛官のお姉さん絡みだろうしな。

冒険者を募集するくらいなんだから、予備自衛官なども当然集めていることだろう。

「……そ、それでも私は、アングルモアを阻止できる可能性があるなら、参加したい。この日常を守れる可能性があるなら……」

「さ、小夜……」

目じりに涙を浮かべ、微かに震えながら言う織部に、アンナが絶句する。

よく見れば、化粧で隠されてはいるが、織部の顔には濃い隈があった。

きつと、一晩思いつめた結論に違いない。

俺は、ここで初めて彼女がかなり追い詰められていたことに気づいた。

織部が、かなり保守的な人間であることは知っていたが、そんな彼女にとってアンゴルモアによりこれまでの日常が崩れるかもしれないというのは、かなりストレスだったのだろう。

思い返せば、クダンの予言以降、彼女の口数はだいぶ減っていたように思える。

そんな哀れな親友の姿に、アンナはその手を握り、訴えかけるように語り掛ける。

「小夜、落ち着いて……ね？ Aランク迷宮を攻略することでアンゴルモアが阻止できるって決まってるわけじゃないでしょ？ ただ、一番最初に現れた迷宮で、これまで踏破されてない迷宮だから、そこに鍵があるって思われてるだけで、何の確証もないんだよ？」

「そ、それは……そうだけど、でも……」

いつになく弱弱しく視線を彷徨わせる織部に、アンナは一つ頷くと言った。

「じゃあ、こうしよう。ここは、多数決で決めるってのは、どう？」

「多数決……？」

「そう。小夜は参加に賛成、私は反対。一人でも参加するって言うてる神無月先輩は除くとして、浮いている票が一つある。ここは、先輩の選択次第で決めるって言うのは？」

お、俺……？

「もし先輩が参加したいって言うなら、私も、冒険者部みんなで参加しよう。だから、先輩が参加したくないって言うなら……小夜も諦めてくれる？」

「……それなら」

三人の眼が、俺に集中する。

決断は、俺に委ねられた。

なんだか妙に重圧を感じる立場になってしまったが……俺の答えはすでに決まっている。

「――俺は、参加するつもりはない」

その瞬間、何かが決定的に定まった気がした。

それは、運命操作を使った時の感覚にも似ていて……。

しかし、これは誰に操作されたものでもなく、間違いなく俺の自身の選択によるものだった。

きっと、この選択は、世界には何の影響もないものだが、俺の人生にとっては極めて重要なものだったのだろう……。

俺が冒険者になると……百万円のカードパックを引くと決めた時のように、蓮華にアムリタを使うと決めた時のように、俺の人生を左右する選択の一つだったのだ。

それが、なんとなくわかった。

俺の答えに、アンナが満足げに頷き、織部が頂垂れる。

そして師匠は……俺をまっすぐ見つめ、問いかけてきた。

「理由を聞いても、いいかな？」

「……家族だよ。もしAランク迷宮に入っているうちにアングルモ

アが起きて、それが原因で家族や友人の危機に間に合わなかったら……俺は耐えられない。あるかないかわからない希望のために、そんなにリスクは冒せない。それが、理由だ」
「……なるほど、家族か」

師匠は小さく嘆息すると、苦笑した。

「それじゃあ、仕方ない」

「ああ……」

そこで、笑みを浮かべたアンナがパンと手を打った。

「じゃ、決まりってことで。小夜も、それで良いよね？」

「……うむ。ここに来てダダをこねるつもりはない。家族が大事なものは……我も同じだしな」

口調がいつものそれに戻った織部は、小さく笑い。

「正直、ちょっとホツとしたところもあるしな」

「柄にもないこと言うから」

「返す言葉もない。アンナの言う通りだ」

弛緩した空気が流れる中、予鈴のチャイムが鳴った。

「おっと、もうこんな時間ツスカ。じゃあ、また放課後に」

そうして皆で部屋を出て、各々の教室に行こうとしたところで、俺は師匠に呼び止められた。

「マロ、ちょっと付き合ってもらって良いかな」

それに、アンナがピタリと足を止めて振り返る。
釣られて織部も振り返った。

アンナは無表情で、織部は不安そうに俺たちを見る。

俺は、そんな二人に手振りで先に行くように促し、二人の姿が見えなくなったところで、師匠へと問いかけた。

「で、なに？」

「ここじゃちよっと」

「……わかった」

師匠の後に大人しく付いていく。

階段を下り、一階に降りて、昇降口で靴を履き替え、ついには校門を出てしまった。

一体どこまで行くのか……。

聞きたい気持ちもあったが、グツと堪え、黙ってついていくと、近くのダンジョンマートに着いた。

……コンビニに用があるわけではないだろう。それなら屋上に行けば良い。迷宮に用があるのだ。

だが、ここにある迷宮はFランクだ。今更Fランク迷宮に何の用があるというのか。

「ここから一気に最下層まで駆け抜けたいんだけど、大丈夫？」

「良いけど……最下層じゃないとできない話なのか？」

「うん」

一応調べてみたが、別にイレギュラーエンカウントが発生しているというわけでもないようだった。

……嫌な予感が膨れ上がっていく。何かが、終わる予感。

このまま踵を返して帰ってしまおうか。

そんなことを考えながら、ユウキとイライザを召喚して師匠と最下層へと駆け抜ける。

この迷宮はかなり小規模のようで、全三階層ほどしかなく、あっという間に最下層へと到着した。

主であつたヘルハウンドをさつさと始末すると、師匠はカードをすべて戻した。

それに合わせて、俺もユウキとイライザを戻す。……ただし、念のため蓮華だけは姿を消して傍にいてもらうことにした。

そうして、傍目には二人っきりになったところで、俺は師匠へと問いかけた。

「で、何の話なんだ？　こんなところまで連れてきて」

「うん。単刀直入に言うけど、僕と一緒にAランク迷宮の攻略に参加してほしいんだ」

やっぱりそういう話か。俺はため息をつき、答えた。

「それについては、さっき結論が出たはずだけど？」

「家族については心配しなくて良いよ。自衛隊の一個小隊が護衛についてくれるから」

「……はあ？」

何言ってるんだ？

なんで自衛隊が俺の家族を守るんだよ。師匠にそんな権限はないし、そもそも一冒険者を引っ張り出してくるために自衛隊を一個小隊も使ったら本末転倒だろ。

あまりに馬鹿々々しい話に、俺は半分笑いながら問い返した。

「なんでそこまでして俺を参加させるんだよ。レースに優勝したからか？」

「君が迷宮を消滅させたからだよ」
「……………」

ああ、やっぱ、そうなのか……。
怒りは無かった。ただ、失望だけが静かに心に広がっていった。

「悪いけど、それは勘違いだよ。アレは俺じゃないし、理由も知らない」

「それは、君が忘れてるだけだ。いや、記憶を改竄かいざんされてると言うべきかな」

「改竄……？」

「そうだ。マロはおそらく、正規じゃない方法で迷宮を消滅させた結果、そのペナルティーとして記憶を改竄されたんだよ」

「……………」

「もっと踏み込んだ話をしようか。ユウキちゃんだっけ？ そのライカンスロープ、ずいぶん変わったスキルを持つてるようだね」
「ッー!？」

思わず、ギョツと目を見開いた。

「真なる者、限界突破、真眷属召喚……聞いたことのないスキルばかりだ。そんなカード、どうやって手に入れたのかな？」

「……………アンタ、何者だ？」

俺は耐えきれずに、とうとう問いかけてしまった。

この数か月間、ずっと我慢していた、決定的なその問いを……。

「もう察しがついてるんじゃない？」

「……………やっぱ、国からのスパイだったのか」

俺の言葉に、師匠が苦笑する。

「スパイなんてカッコいいモノじゃないけどね。精々調査員ってところかな。……その口振りだと大分前から気づいていたようだね」
「まあ、な。さすがにタイミングがあからさま過ぎたし」

俺たちが猟犬使いの捜査をしているところに捕獲クエストを持ってきて、事件後にわざわざ転校までしてくるなんて……なにかあると思わない方が、無理がある。

それでもこれまでその疑問を封じ込めてきたのは、仲間だと思いついたからだ。

裏表などない、本当の仲間だと。

アンナや織部がどう思っていたかは知らないが……少なくとも俺はそうだった。

なぜなら、師匠は――神無月は、俺が初めて心から敬意を抱いた冒険者であり、師匠だったのだから……。

「……まあ、さすがに気づくよね。もつとタイミングとか気を配った方が良いと言っただけだね」

苦笑する神無月に、俺はガリガリと頭を搔きながら言った。

「で、俺のことを探つてなにかわかったのか？」

「そりゃまあ色々だね。国内でも数例しか確認されていない『幸運操作』のカードを所有し、ガーネットの効果にも気づいている。そして何よりも、カードのプロテクトを解除してカードを完全開放してしまっている……」

「チッ、やっぱりアタシのことまで気づいてんのかよ」

これまで黙って聞いていた蓮華が、俺を庇うように姿を現した。

「どーする？ 全部バレてるみてーだけど」
「ああ……」

参った……。こつも丸裸にされてるんじゃないかな。
完全に手のひらの上だったってわけか。

「一応聞くけど、どうやってバレたんだ？ 読心の魔道具か？」
「いや、読心の魔道具は、僕ごときには使用許可は出ないよ。アレは、国にとつても諸刃の剣だからね」

「じゃあ、なぜ？」

「まあ、実際、マロは上手く隠してたよ。少なくとも、お金の動きで秘密を探ることはできなかった。……でも、蓮華ちゃんとのリンクでは秘密を垂れ流しだった」

リンク？ ……まさか。

「リンク・ピーピング。他人のテレパスを盗聴するシークレットリンクだ」

……… やられた。俺は、天を仰いだ。

そんなリンクがあるとは、完全に盲点だった。

いや、よく考えれば気づく余地はあった。

リンクにより、ようやく人間はカードの戦闘速度についていくことができる。口頭での意思疎通では、指示が間に合わないのだ。だと言いつのに、人間同士で高速で意思をやり取りできる技術や魔道具が存在しない。

これでは、Aランク迷宮の攻略など出来ようがない。

あるいは読心の魔道具こそがそれかと思っていたが、ちゃんとあったのだ。

人間同士でテレパスを繋げるリンクが……。

「テレパスには、他の人にも聞こえてしまうオープンテレパスと、限られた相手だけ届くようにするクローズドテレパスがあるんだ。まあ、ネットゲのオープンチャットとグループチャットみたいなものだね。どちらも気づいちゃえば、マロならすぐ使えるようになると思うよ」

「……ソイツはどうも。できればもっと早く教えてくれればありがたかったけどな」

「そうしてあげたかったけど、そうもいなくてね」

こちらの皮肉にも平然と返してくる神無月に、俺はため息を吐いて気分を切り替えると問いかけた。

「で、これからどうなる？」

「別に、どうもしないよ。このアンゴルモアを回避できたら、これまで通り好きに迷宮に潜ったり、モンコロの試合に出たり、ガーネツトの効果で荒稼ぎしても良い。心配しなくとも、完全開放したカードを従えてる人間相手に力尽くでどうこうするのは、国だってできないよ。ただ、時々迷宮の消滅に協力してもらっただけだ。ちゃんと報酬だつて出ると思うよ」

「ふうん……」

意外と、自由にさせてもらえるんだな。……それが本当なら、だが。

「だが、俺はマジで迷宮の消滅の方法なんて知らないぞ」

「そこは、当時の状況を再現して探ってみよう」

そう言って神無月が取り出したのは、遭難のカードだった。

「気づかなかったと思うけど、迷宮消滅直後すぐにマロには読心の魔道具によって尋問が掛けられていた。その際、君の思考に矛盾があることが判明した」

「……やっぱり読心の魔道具も使われてたか。あの見舞いに来た刑事さんか、あるいは看護師や医師の誰かか。仕方ないとはいえ、クツソ気分悪いな。」

しかし、矛盾ね。

「調書によれば、マロは獵犬使いに襲われた際、転移のカードで逃げたことになってる。でもハーメルンの笛を持つマロにとって転移カードって最も無用な物だよな？」

「……まあ。でもさっさと売り払わなかったことを言ってるなら別におかしくないぞ。税金の関係で、普通冒険者が魔道具を売り払うのは、何か欲しいモノがある時だ」

「そう、だから転移のカードを売らずにいたことは、おかしくない。おかしいのは、使う予定の無いカードをわざわざ使いやすい胸ポケットにしまっていたことだ」

「……確かに。」

まあ、手に入れたマジックカードをとりあえず胸ポケットに入れてそのまま忘れてしまうことはたまにあるので、そこまでおかしいことではないが、それが転移のカードとなると話は違ってくる。

絶対に使う予定のない転移のカードは、完全に別の場所にしまっておくか、家にも置いてくるはず……。

「可能性として考えられるのは、マロがすごく物臭な性格だったか……転移ではない別のカードだった可能性だ」

あるいは……。チラリと、俺は難しい顔で考え込む蓮華を見た。胸ポケットにしまったまま忘れるよう、干渉されていたか……。

「……で、遭難のカードってわけか」

「そう。まあ、何度再現実験をしてもダメだったらしいんだけどね。マロなら違うんじゃないかってね」

「まあ、やっても良いけど。ダメだったら、もう俺のことは放っておいてくれ」

俺は家族を守らなきゃならないのだ。

「うーん……それについては僕にどうこうできる権限はないんだけど、マロが再現できないんなら国も興味を失うんじゃないかな」

「だと良いが……」

言いながら俺は遭難のカードを無造作に使用し——そのまま意識を失った。

「……い！　おい、起きろ！」

「う……」

俺は、蓮華に頬を叩かれ、気が付いた。

「……は……」

そこは、無数の球体が宙を漂う白い空間だった。

学校の体育館ほどの空間に、シャボン玉のような球体が漂っており、その中には……。

「カード？」

その時、俺の脳裏に強烈なデジャヴが過った。

いや、待て、知っているぞ。俺はこの空間を知っている！

そうだ、俺はここでユウキのランクアップに使用したライカンス
ロープを手に入れたのだ。

「……その様子だと、思い出したようだな」

「蓮華……お前らはこのことを知っていたのか？」

「いや……」

蓮華が首を振る。

「アタシはその時ロストしたばっかで意識がハッキリしてなかったし、たぶんユウキもその時はカードキーじゃなかったから、お前同様に記憶の改竄が行われたはずだ」

「カードキー？」

「……この空間に入れる資格を持ったカードのことだ。本来はAランク迷宮を攻略した時にマスターキーが手に入り、そのマスターキーを使って各クリアランスレベルのカードキーを手に入れるのが、本来の手順らしいが……」

……よくわからんが。

「俺がこの空間に入れるのは、そのカードキーを持っているからってことか？」

「ああ、ユウキがそうだ。ユウキはDランクまで迷宮に入ることができる」

「……ユウキがカードキーだとすると、なんで最初は入れたんだ？」

……お前か、蓮華？

そう目で問いかけると、蓮華は神妙な顔で頷いた。

「ああ、アタシは廃棄カードキーと言われる存在だ。廃棄カードキーは、一度限りだが、自分のクリアランスレベルまでの迷宮に入ることが出来る」

「……………ふう」

色々と聞きたいことはあるが、一気に新情報が入ってきて感情の整理がつかん。

それでも、一応これだけは聞いておこう。

「お前、なんでそんな重要な情報を今まで黙ってたんだよ」

「言えなかったんだよ。わかれ」

「わかった」

まあ、そうだと思ってた。記憶を改竄しても、そのカードが勝手にバラしたら意味ないからな。

なんらかのロックがかかってしかるべきだ。

「ところで、ししよ……神無月は？」

「……別に師匠で良いんじゃないやねーの？ たぶん、スパイになったのは、お前にリンクを教えた後だろうし。無理に心に壁を作んなくても良いだろ。そーいうの、向いてないぜ」

「……………だな」

残念ながら師匠は、国からの諜報員だったが、俺にリンクを教えしてくれた恩人であることは間違いない。

そりゃあ思うところがないとは言わないが、まだギリギリで友情

は残っていた。

俺は一つ頷き感情の整理をつけると、改めて問い直した。

「で、師匠は？」

「ここに入れるのはカードキーを持つてる者だけだ。たぶん、今頃迷宮の外に放り出されてるところだろうぜ」

なるほどね……。

「さて、これからどうするか……」

俺は周囲に浮かぶシャボン玉を見渡しながら呟いた。

たぶん、中のカードを手に入れた時点で出られるんだろうが。

「……特に欲しいカードがないのなら、シャボン玉に触れるのは止めておけ」

「なんでだよ？」

俺が問うと、蓮華はクイとシャボン玉を顎で示した。

「ちよつと覗き込んでみる」

言われるままに、近くのシャボン玉を覗き込んでみる。

そこには、どこかの競馬場らしき光景が映っていた。

一斉に馬たちがスタートし、猛スピードで駆けていく。しかし、終盤一人の騎手が振るった鞭が、隣にいた馬の眼を叩いてしまい、騎手が地面へと投げ出されてしまった。そこへ迫りくる後続の馬たち……。幸い騎手は即死こそしなかったようだが、蹄に耕されたその体は、瀕死の重傷であることは明らかだった……。

「ゲツ……………！」

騎手の痛みと恐怖が、シャボン玉を見るこちらにもダイレクトに伝わってきて、俺は呻きながらシャボン玉から距離を取った。

これは……………」

「これは、近いうちに起こり得る不幸を映したものだ。迷宮はこの不幸を未然に収穫し、モンスターの姿で出現させてるわけだ」

つまり、それは……………」

「迷宮は、不幸を回収して消す装置ってことか……………？」

「ん……………まあ、そういう見方をすることもできるな」

「でも、それじゃあ……………」

迷宮を消したら、回収されるはずだった不幸はどうなる……………？

「当然、不幸はそのまま起こることになる」

その瞬間、俺を強い吐き気が襲った。

俺は一度迷宮を消してしまっている。

Fランクモンスターの不幸でこれなら、俺が消してしまったドラック迷宮は？

俺は何人殺してしまったんだ……………？

「……………言つとくが、迷宮を消したとしても、本来の姿に戻るだけだ。怪我をする運命だった者が怪我をして、死ぬはずだった者がそのまま死ぬだけ。お前が殺したわけじゃない」

「だが、俺が迷宮を消さなきゃ助かったんだろ……………？」

「そうとは限らない。そもそも、その不幸を消せるだけの回数のも

ンスターを倒さない限り、不幸が回避されることはない。誰も試練を超えられなかったってことだからな。迷宮もそこまで甘くはない。ついでに言うと、一つの不幸を同ランクの複数で同時に処理してつから、お前が一つの迷宮を消した程度でその不幸が確定するってわけでもない」

……ということは、必ずしも俺が助かる可能性を消したとは限らないってことか。

少しだけ胸が軽くなった気がした。

「ちなみに迷宮を踏破するたびに、結構な量の不幸が解消されるから、お前は結構人を救ってると思うぜ」

「なら、良かったよ……」

「つつても、迷宮を一つ消せば、その分効率も悪化する。迷宮を消してもお前は全く悪くないが、良心が咎めるってなら、どうしても欲しいカードがなけりゃ止めとけ」

「そうする。……ところで、それなら俺はどうやって外に出れば良いんだ？」

「安心しろ。ここで手に入れられるのはカードだけじゃない」

そう言う蓮華は、シャボン玉の間を縫うように先へと進んでいく。その後を黙ってついていくと……。

「あつたあつた。これだ」

そこにあつたのは、バレーボールサイズの虹色の水晶体だった。

「これは？」

「これは、ガチャだ」

「ええ……？」

あんまりにあんまりなワードであった。

「お前、それはいくらなんでもねーだろ」

「いや、実際それが一番わかりやすいし……この水晶体に触れば、迷宮のランクよりワンランク以上高いアイテムがランダムに手に入るんだよ。この迷宮だとEランク以上のアイテムだな。ちなみに、このランクは人間が決めたランクとは別だから、そこんところ注意な」

なるほど、それは確かにガチャだわ……。いわば、Eランク以上確定ガチャチケットってわけか。

「これに触ったら迷宮を壊さずに外に出れるんだな？」

「そうなる」

「……ちなみに、幸運操作とかは？」

「あー、ランダムとは言ったが、アイテム自体はこの迷宮が出現した時点で決まってるんだよな。だから今、幸運操作とか運命操作しても出てくるアイテムは変わらない」

じゃあ、仕方ない。

……しかし、中身がすでに定まっているとはいえ、ちょっとドキドキするな。

「……ちなみに、お前ずっと気絶してたから結構時間経ってるぞ」

「それを早く言え！」

俺は慌てて水晶体へと手を触れた。

その瞬間、周囲の空間が歪み、気が付くと俺は迷宮のゲートの前に立っていた。

「触れた瞬間放り出されるのか……」

それに……。

「ゲートが白くなってる？」

呟く俺に、透明となった蓮華がリンクを通じて語り掛けてくる。

『完全沈静化状態だ。しばらく……まあ一年くらいは、この迷宮を攻略しなくてもアンゴルモアは起きないし、他の迷宮が原因でアンゴルモアが起こってもこの迷宮からはモンスターは出て来ない。それに普通の沈静化と違って、外部からモンスターが入ってきても沈静化は解除されない』

ってことは、こういう状態を全迷宮で起こせばアンゴルモアは回避できるってことか。

現実的には厳しいだろうが、この絶望的な状況にあって、少しだけ希望が湧いてきた。

『ところで、ガチャは何が出た？』

『っと、そうだった』

俺は、いつの間にか手の中に握りしめていた一枚のカードを見た。そこには、ポーションらしきもののイラストが描かれていた。これは……。

『……ミドルポーションだな。ま、そんなもんだ』

『うるせえ。……しかし、今回は記憶を失わなかったな』

『今回は、正規カードキーで入ったからな』

『なるほどね……』

そんなようなことを話しながら、鋼鉄の扉を開けコンビ二部分に戻ると……。

「マロ！」

外で待ち構えていたらしい、師匠が駆け寄ってきた。
しまった……こっちの問題をすっかり忘れていた。

さて、どうしたもんか。

俺の持つカードキーは、おそらくDランク迷宮までしか入れない。
Aランク迷宮の攻略に連れていかれても無意味だ。
どうにかして納得して貰い、国を説得して貰わないと……。

「あ……Aランク迷宮の攻略の件なんだけど」

「それどころじゃない！」

俺を遮り、師匠は叫ぶ。

その形相を見て、俺はすべてを悟った。

「――アンゴルモアが始まった！」

終わりが、始まったのだ。

第二十一話 ハンプティダンプティは元に戻らない（後書き）

【TIPS】カードキー

迷宮のコアルームへの入室許可を与えられた特殊なカード。

蓮華やユウキは、このカードキーであり、『真なる者』『廃棄されし者』といったスキルがその証となる。

カードキーには、クリアランスレベルが設けられており、下位のカードキーで上位の迷宮のコアルームに入ることはできない。

本来であれば、どこかのAランク迷宮を踏破し、その報酬として得られるマスタキーを使って下位の迷宮を消滅させることでようやく手に入れられる代物なのだが、廃棄カードキーを使うことで不正に入手することも可能。

不正侵入であっても入手したカードキーは、ちゃんと正規の物でその使用にも問題はないのだが、不正に侵入した際の記憶は、ペナルティーとして改竄される。

コアルームへの入室に、遭難のカードは必ずしも必要ではなく、カードキーを所持し、最下層にある出口のゲートを潜る際にコアルームに行くことを望めば入室は可能。遭難のカードを使用しての入室は、裏技となる。

PS：明日試しに五章の話を試験的にカクヨムに載せてみようかと思っています。

五章は現在執筆中なので、この一話も更新再開時に内容を変更する可能性が高いため、それでも良いという方のみ覗いてみてください。さい。

の方にあるツイッターの方に、カクヨムへのリンク載せてあ

ります。

TIPSまとめ5 イラストあり(前書き)

二話連続投稿となります。

「第二十一話 ハンプティダンプティは元に戻らない」
をまだ読んでない方は「前へ」をどうぞ。

四章後半は、これで最終話となります。

五章に行く前に、全体の設定の見直しと微調整を行おうと思います。
主な修正点は、

- ・ 四章での描写の諸々の調整。表現の修正。
- ・ 耐性貫通と耐性無視の仕様調整
- ・ ステータスの表現の統一
- ・ スキルのランクアップの際、どのスキルが統合され、消滅したかが分かりにくい点の修正。

例：小悪魔な心＋一途な心 ファムファタル（CHANGE！）
・ 真スキルやマイフェアレディ等の「・」とスキルの最初につく「・」
が連続して見苦しい点の改善（まだ考え中）

例：・真・二相女神（真を・が困んでいてなんか変）
等になります。

大筋のストーリーラインは変わりません。

感想返しも明日からぼちぼち再開しようと思います。

これおかしくね？と思ったら感想欄でご指摘いただけると幸いです。

22/02/08

四章第二話を修正

・織部とデート時に食べたものをペロンチーノからカルボナーラへ変更（デート未経験っぷりを描写したかったのですが、さすがに無いなと思ったため）

・カードギアの詳しい性能を若干加筆。

第十一話 備えあれば患いなし

・アンナとの会話内容を変更。ガーネットの価値については、宝石の原石のようなものとして、その真の価値が発揮されるのはカット職人であるマロの手に渡った時のみ、という感じにしました。

裏設定では、ガーネットはBランクの幸運関係の神なら幸運操作はできずとも幸運の解放自体は可能でしたが、蓮華のような特別なカードでないとガーネットを使用できないことにしました。

第十三話 大人たちも頑張っていたんだよ

・アレース入手時の描写を加筆。

22/02/25

TIPSのステータス一覧の諸々の表現を修正。

・上昇を向上、「極めて大きな」及び「大きな」を「極めて強い」「強い」で統一。

・「耐性無視」対象の耐性がある程度無視する」「耐性貫通」確率で対象の耐性がある程度無視する」で変更。それに伴いサキユバスとリリムのスキルを微調整。

・「真・眷属召喚」などの真スキル及び「マイ・フェア・レディ」の「・」を削除。

・ニケのスキルを若干強化。「ステータスを大きく向上させる」を「ステータス二倍」に。

・収納スキルを「低級」「中級」「上級」から「下級」「中級」「上級」に変更。

22 / 03 / 07

・収納スキルや異空間型スキルの収納した物品について。

通常のアイテムは、迷宮を出た瞬間にその場で放り出される仕様で統一。ただしカード化したアイテムについては、収納スキルや異空間型に限らずカードに持たせたままにできるものとする。

(例：カード化したハーメルンの笛をイライザが所持したまま召喚している件など)

・ネメアーの獅子の屍喰らいのスキルを食物連鎖へ変更。

・ベルセルクの一定時間ロストしない効果を『不滅』状態と定義。

22 / 03 / 30

ステータス二倍や三倍等の計算式の仕様変更。

ステータス二倍とステータス三倍のスキルを重ね掛けした場合、単純に $2 \times 3 = 6$ 倍とするのではなく二倍 (+100%) + 三倍 (+200%) = 四倍 (+300%) とすることにしました。

22 / 05 / 05

5章、カクヨムの方で先行公開済みです。

そのうち誤字脱字を修正したものをなるべく投稿する予定ですが、先に読みたい方はどうぞ。

【Tips】準シークレットダンジョン

様々な事情によりギリギリのところまでシークレットダンジョン認定を逃れた迷宮。

準シークレットダンジョンの多くは、所有者との契約や、あるいは土地ごと購入されていたりしてすでにプロチームに抱え込まれているケースが多く、やはり一般の冒険者は基本的に入れない。

数少ない独占されていない準シークレットダンジョンも、多くの冒険者が殺到することで普通の迷宮並みに旨味が薄まってしまっている。

それだけに上手く準シークレットダンジョンを独占できた際の利益は莫大であり、トッププロとその他大勢のプロとを分ける鍵となっている。

【Tips】異空間スキル

カードのスキルには、妖精郷や神界、冥界と言った異空間に出入りできたり、あるいは異空間そのものを作り出せるモノも存在する。それら、この世界とはわずかに位相のズレた空間に干渉することが出来るスキルの類を異空間スキルと呼ぶ。

異空間の内部は外部と完全に隔てられているため、内部から外部へ攻撃を出来ない代わりに外部からの（異空間スキル持ち以外の）干渉も受けない。

プロクラスでは、この性質を利用して異空間型スキル持ちを迷宮内での安全な拠点として利用している。

装備化スキルと並び、プロクラスの必需品とされている。

【Tips】死神からの贈り物

イレギュラーエンカウントたちが残す特殊な魔道具は、ただの便利な道具ではなく彼らが獲物と認めた者たちへの勲章であり、マーキングとしての側面を持つ。

そのため死神からの贈り物を持つ者はイレギュラーエンカウント全般とのエンカウント率が上がり、特に贈り物の主とはいずれ必ず再会する定めとなっている。

それは仮に贈り物を手放し、冒険者を辞めて迷宮に潜らないようにしても避け得ぬ運命である。

再会の際、それが死神たちを失望させるものだった場合、運よく生き延びられたとしても贈り物に込められた力は没収される。

もしそれが嫌ならば、自らが獲物に相応しいことを証明し続けるか、死神たちに真の意味で認められなければならないだろう。

【Tips】フィールド効果

アマチュアクラスとプロクラスを分ける最大の壁、それがフィールド効果である。

フィールド効果には全階層に共通して付与されるメイン効果と、一階層ごとに個別のサブ効果があり、メイン効果はその迷宮の大きな難易度を決める。

フィールド効果は、プラスの効果は迷宮側のモンスターにのみ、マイナスの効果は冒険者側のみに働くという特性があるため、冒険者側は常に不利な戦いを強いられることとなる。

【Tips】カードの迷子状態

迷宮の階層というのは一見して繋がっているように見えてもすべて独立している。そのため、いくら地下を掘り進めていったところ

で次の階層へたどり着くことはできない。

これにより資源系の迷宮はどれだけ採掘しても資源が尽きないという恩恵があるわけだが、階層を隔てるとマスターとカードとの繋がりが切れてしまうという弊害も存在する。

マスターとの繋がりが切れたカードは、意識はあるが一切の干渉が出来ない透明の幽霊のような状態となり、これを冒険者たちは専門用語で迷子状態と呼んでいる。

迷子状態となったカードは、マスターが持つ『本体』（札の方のカードも召喚されたモンスターも冒険者業界ではカードと一纏めに呼称するため、札の方を区別するためにこう呼ぶものとする）と『召喚獣』が合流するまで使用不可となるため、マスター自身が迎えに行く必要がある。

これはヘタに迷子状態のカードにうるつかれることで合流が困難になるのを避けるためであり、稀に予めその取り決めをしていなかったカードが一種のロストのような状態となるケースもある。

階層を隔てると繋がりが切れるのは、マスターが安全な場所からカードだけを派遣して迷宮を攻略するのを防ぐための機能と考察されているが、次の階層への階段と安全地帯付近は辛うじて繋がっているため、階段前から次の階層の様子を探るといふ小技も存在する。もつとも、安全地帯が消滅したAランク迷宮でぐらいいしか使い道がないテクニクではあるが。

【プライベートダンジョン】

私有地などに現れた迷宮のうち、プロなどに管理を任せるなどして一般の冒険者たちには公開しない迷宮のことをプライベートダンジョンと呼ぶ。

一般公開されている迷宮と比べアンゴルモアの可能性が高いプライベートダンジョンは、国によって厳しい基準を設けられており、Fランク迷宮であっても四ツ星以上でなくては管理できず、その依頼料も非常に高額となっている。

そのためほとんどのプライベートダンジョンはFランク迷宮か、逆にCランク迷宮以上の準シークレットダンジョンとなっており、その所有者も個人ではなく法人が多い。

プライベートダンジョンの管理は冒険者として非常に美味しい仕事だが、それだけに管理の仕事を任されるかどうかはコネ次第である。

なお、プライベートダンジョンとは言えアンゴルモア対策のためゲートの設置は義務であり、一定期間攻略が行われていないことを感知すると即座にプライベートダンジョン認定が解除され、管理者の冒険者ライセンスも没収される。

【Tips】アイテムドロップ

迷宮のCランク階層以上では、倒したモンスターが魔石やカード以外にも魔道具を落とすようになる。

そのドロップ率は一割程度と決して低くなく、また落ちるアイテムの価値もモンスターのランクにより一定以上の質のものが落ちるため、プロクラスの強い収入源となっている。

モンスターが落とすアイテムの中には極まれにレアドロップと呼ばれる希少品が含まれており、そのほとんどは高値で取引されているが、中には使い道がわかっていないために安値が付けられているものも存在する。

霊格再帰の発見以降、それらのハズレもキーアイテムとしての使い道があるとわかり、ハズレの数はかなり減ったが、それでもまだある程度のハズレが存在している。

落とすアイテムは一定以上の大きさのモノはカード化されて出現するが、人間程度の大きさの物まではそのままの大きさでドロップするため、プロクラスからはその運搬方法にも頭を悩ますことになる。

【Tips】件の予言

クダン。この不気味で哀れな子牛ほど人々に忌み嫌われ、しかし重要視されているモンスターもいないだろう。

迷宮出現以降、ただの一人も被害を出していないこの無力なモンスターが嫌われる理由は、ただ一つ。

不吉の兆候だからである。

クダンという妖怪は、強い災害の前にのみ姿を現すと言われている。

それだけなら災害を未然に防ぐことが出来ると嫌われることもなかっただろうが、クダンの性質が悪いところは、その予言が決して回避できないと言われていることだ。

そして、大規模な自然災害や戦争がほぼ無くなったこの時代において、災害とは一つしか意味しない。

この日本のマイナーな妖怪の名が世界中に知れ渡ったのは、第二次アンゴルモアの際である。

全世界でほぼ同時に現れたクダンに対し、世界各国は手を取り合っただけでアンゴルモアの防止に動いたが、結局防ぐことが出来なかったという苦い経験を持つ。

【Tips】モブ高生簡易年表

1999年7月 迷宮出現。

2000年1月 アメリカでレイスの被害。世界的に迷宮の封鎖を開始。

2000年7月 先進国を中心に第一次アンゴルモア発生、迷宮

の攻略を続けていた国には被害無し。カードの使用方法が明らかになる。冒険者の原型であるサマナーの登場。

2003年8月 北川昌磨、一条愛歌、出来ちゃった結婚する。

2004年2月 マロ、誕生。アメリカで冒険者ギルド発足。

2004年8月 中国、ロシアを始めとするアンゴルモア未発生
の国が、迷宮数の増加のため、あえて第一次アンゴルモアを起こす。
民間への被害なし。

2009年3月 愛、誕生。北川家、夢のマイホームを得る。

2010年7月 第二次アンゴルモア発生。全世界同時。

2011年4月 日本、アメリカの冒険者制度をパク。

2012年～ モンコロなどの冒険者関係のメディア化、冒険者ブームの到来。

2019年10月 マロ、冒険者に。原作開始。

【Tips】モンスターの戦闘力

同じランクの階層帯であっても、モンスターの戦闘力は深い階層に行くほど高くなる。

特に各ランクの一層目のモンスターは、カードの初期戦闘力の八割ほどしかないとされ、深い階層であってもモンスターの戦闘力がカードの成長限界まで強くなることはない。

これが、同じ種族であっても迷宮のモンスターよりもカードの方が強いとされる所以である。

無論、最下層の主に関しては別で、主はその種族のMAX戦闘力かつ主補正による様々な強化が入る。

【Tips】沈静化

アンゴルモア時、迷宮の踏破か迷宮の主を討伐することにより、その迷宮におけるモンスターの氾濫を一時的にストップさせることができる。

これにより、アンゴルモア時の被害を減らすことができるが、沈静化はあくまで新たなモンスターの氾濫を防げるだけであり、すでに溢れ出してしまったモンスターが消滅することはない。また、沈静化した迷宮に一匹でもモンスターが入りこめば、モンスターの氾濫が再開する。

迷宮の踏破≠迷宮の主の討伐ではないのは、迷宮の主がすでに迷宮外に出ている可能性もあるからである。その場合、主が階層を移動した段階で出口のゲートが最下層に出現しているため、そこを通れば踏破扱いとなる。その場合、当然ながら踏破報酬は出ない。また主が最下層に戻った時点で出口のゲートも消える。

沈静化できる期間は、およそ一か月ほど。その期間中に再度踏破することで期間は延長できる。

【Tips】アンゴルモアのフェイズ

過去の経験を基に、アンゴルモアはいくつかのフェイズに分けられている。

【第一フェイズ】

FランクからDランクまでの階層の安全地帯が一時的に効果を消失し、モンスターたちが階層を移動可能となる。

地上に近い順にモンスターが迷宮からあふれ出し、同時に急速に

迷宮が増殖を始める。この段階では、新しく増えた迷宮からはモンスターが氾濫はない。

【第二フェイズ】

第一フェイズであふれ出したモンスターたちが暴れることで迷宮にエネルギーが溜まり、Cランクモンスターが溢れ出す。さらに、新たに増えた迷宮の一部からもモンスターの氾濫が始まる。

【第三フェイズ】

Bランクモンスターが溢れ出す。

【第四フェイズ】

詳細不明。おそらくAランクモンスターが溢れ出すと思われる。そこまで行けばもはや人類の手には負えず、アンゴルモア中に、第四次アンゴルモア分のエネルギーが溜まる可能性がある。

人類が実際に経験したのは第三フェイズまでで、第四フェイズの存在はあくまで想像となる。

しかし、パターンの考えてこの通りになる、あるいはそれ以上の最悪の事態となる可能性は非常に高い。

第一次アンゴルモアでは、迷宮数も少なく、迷宮付近の封鎖も済んでいたこともあり、第一次フェイズで被害を食い止めることができた。

だがその結果、人類は、フェイズは進行するという重要な情報を得ることができず、幸運にも第一次アンゴルモアを起こさずに済んだ国が、迷宮数を増やすために自らアンゴルモアを起こすという愚行に繋がってしまった。

【Tips】アンゴルモア時のガイドライン

アンゴルモア時は、決してパニックにならず、落ち着いて行動してください。

ご自宅にシエルターがある方は、シエルターで自衛隊が四ツ星以上の冒険者が迎えに来るまで待機を、ご自宅にシエルターがない方や外出中にアンゴルモアが発生してしまった方は、最寄りの避難所へと速やかに避難をお願い致します。

避難所は、可能であれば最寄りの冒険者ギルドへ、ギルドが遠い場合は、警察署や強い病院、指定のホテル、学校、公民館などへの避難をお願い致します。

アンゴルモア中は、機械破壊による事故を防ぐため、交通機関は使えなくなります。車やバイク等での移動も極力避け、無理に自宅に帰ろうとせずに、とにかくまずは身近な避難所に向かってください。

避難所には、受け入れ人数に応じて最低一枚以上のCランクカードを配備しており、また食料等もカード化して備蓄しております。

そのため食料や着替え等の持ち込みは必要ありませんので、ご安心ください。

【Tips】迷宮数の推移とランクごとの割合

迷宮は当初、どこの国でも人口百万人あたりに一個出現し、そのすべてがAランクであった……とされている。

あやふやな表現であるのは、当時の人類では五十階以上に到達できなかつたためである。

しかし、フィールド効果などの迷宮のギミックから考察するに、初期に現れた迷宮はすべてAランクだったのでは？ という見方が主流となっている。

日本においては、当初百程度であった迷宮数は、第一アンゴルモアで千以上に増加し、第二次アンゴルモアで五千を超え、以降一年ごとに約二百ずつ増え、現在では七千以上となっている。

ランクごとの内訳は、

Aランク：約1000
Bランク：約2000
Cランク：約5000
Dランク：約15000
Eランク：約20000
Fランク：約30000

となっており、Aランクの数は初期から変わっていないが、第一次の頃はAランクよりも少なかったBランクの数がついに二倍近くなってしまうこと、徐々にDランク以上の割合が増えつつあることが極めて問題視されている。

【Tips】 転移門

二個一セットの転移アイテム。大きさがネックであるが、使い放題で、迷宮の外でも使える貴重な転移アイテムであることから、人類に非常に重宝されているアイテム。

一般人の所持は禁止ではないが、国が金に糸目を付けずに集めているため、入手は実質不可能に近い。

Aランク迷宮の攻略はもちろん、ギルドのシェルターにも相当数配備されており、転移門による疑似的なネットワークにより、全国のギルドと人員及び物資のやり取りが可能となっている。

こんな貴重なアイテムを家と島ごとくくれるなんて……アンナパパ
ってすつごく良い人なんだね！

【Tips】マイナーチェンジ

同ランクの別種族のカードを消費して種族を変更、同種族のカードでステータスの上書きをすることをマイナーチェンジと呼ぶ。

ランクアップ同様、元となったカードの容姿の一部と自我を引き継ぎ、熟練度と運次第でスキルを引き継ぐことができるが、後者の同種族による上書きの場合、自我と人格そのままに完全にステータスが上書きされる。

普通の冒険者にとってあまりにメリットが少なく、ランクアップ以上に利用する者が少ないため、その存在自体を知らない者もいる。

【Tips】カードの生み出したアイテム

カードが生み出したアイテムは、基本的にカードに戻した後や迷宮を出た後も物質として残る。

中には植物だけではなく、牛や豚などの動物すら無から生み出すカードすら存在する。

そうして生み出された食物は、当然ながら人間が食べても何の問題もなく、中には特殊な効果を持つモノもある。

ヘスペリデスの園が生み出す黄金のリンゴ（偽）もその一つだが、迷宮から出現する同名の魔道具と比べて効果が著しく落ちる。

そのため、こうしたカードが生み出した魔道具は、迷宮産の魔道具と区別するために疑似魔道具と呼ばれる。

これらのアイテムは、売る際にちゃんと疑似魔道具であることを明記することが義務付けられているが、見た目が同じであること、

食べないと効果の真偽が分からないことを利用した詐欺は後を絶たない。

【Tips】ビジョニコロシアム

カードギアの原型にして、上位モデル。

いわば部屋丸ごとのカードギアで、実寸大のカードビジョンを映し出すことができる。

ビジョンは、人や物に触れることはできないが、ビジョン同士で干渉することは可能であり、リンクを繋いで戦わせることもできる。元々は、迷宮外でのカードの召喚（＝カードの軍事利用）を目的として開発された試作品。残念ながらビジョンに実体を持たせることはできなかつたが、リンクの練習としては最適であり、軍での安全なトレーニングマシンとして正式採用された。

いずれは専用の施設を全国に配置し、よりスポーツ性を高めた次世代のモンコロとなることを期待されていたが、残念ながら日の目を見ることはなかつた。

今は、アングルモア時の避難民の戦力化を見越して各ギルドに少数ずつ配備されている（四ツ星試験での使用は、カモフラージュとリンクのデータ取りを兼ねてのこと）。

【Tips】多重霊格再帰

二個以上の霊格再帰を持つカードは、その分変身時間が伸び、さらに時間内ならば他の姿に切り替えることができる。

霊格再帰の変身時間と『溜め』の関係は、格闘ゲームの必殺技ゲージがイメージとしては近い。

通常の霊格再帰持ちはゲージを一本しか持たないが、多重霊格再帰持ちはその分ゲージを複数持っている。ゲージが一本でも溜まっていけば変身可能だが、ゲージを一本溜めるためにかかる時間は同じで（一日一本溜まるとすれば、マイラは全部で四日かかる）、一本だけ使用し残りの三本は残しておくという使い方もできない（一度変身すれば、すべてのゲージを使い切る）。

【Tips】おっぱいランキング

どっかででリクエストされた、乳比べ。

ハトホル

>> (世界最胸の壁) >>

鬼子母神・蓮華

>> (母神の壁) >>

ヘレン>牛倉 鈴鹿

>> (爆乳の壁) >>

神無月姉、一条>オードリー、イライザ アンナ

>> (巨乳の壁) >>

吉祥天(大)・蓮華 四之宮さん>ユウキ

>> (普乳の壁) >>

ロリ吉祥天・蓮華 サキュバス・メア

>> (ちっぱいの壁) >>

座敷童・蓮華、アテナ、愛

>> (おっぱいと胸板の壁) >>

小野>織部 マロ

【Tips】日常

十七夜月 アンナは、冒険者部の中で最も日常の価値を知り大事にしてきたが、しかしその一方で、自らを異物として排斥し続けてきた日常を構成するパーツ（キリギリス）たちに対しては、深い怒りと嫌悪を抱いている。女王蟻である彼女が愛する対象は、同胞である蟻たちのみ。

織部 小夜は、冒険者部の中で最も日常を愛しているが、しかしそれが限りあるものである事実からは目を背け、それがいつまでも続くと妄信してきた。彼女は、怠け者の働き蟻である。だが、女王はそれを許すだろう。なぜならば異種たちの中にあつて、彼女は唯一女王の孤独を癒してきてくれた存在なのだから。

神無月 翼は、冒険者部の中で最も日常を守るために行動してきた人間であるが、みんなの日常を守るためならば自らの日常を切り捨てられる人間である。同じ蟻でありながら、微かに漂う違和感に、女王は疑惑を確信へと変えつつある……。

そして北川 歌麿は――――……。

【Tips】カードキー

迷宮のコアルームへの入室許可を与えられた特殊なカード。

蓮華やユウキは、このカードキーであり、『真なる者』『廃棄されし者』といったスキルがその証となる。

カードキーには、クリアランスレベルが設けられており、下位のカードキーで上位の迷宮のコアルームに入ることはできない。

本来であれば、どこかのAランク迷宮を踏破し、その報酬として得られるマスタキーを使って下位の迷宮を消滅させることでようやく手に入れられる代物なのだが、廃棄カードキーを使うことで不正に入手することも可能。

不正侵入であつても入手したカードキーは、ちゃんと正規の物でその使用にも問題はないのだが、不正に侵入した際の記憶は、ペナルティーとして改竄される。

コアルームへの入室に、遭難のカードは必ずしも必要ではなく、カードキーを所持し、最下層にある出口のゲートを潜る際にコアルームに行くことを望めば入室は可能。遭難のカードを使用しての入室は、裏技となる。

〈 四章終了時点 〉

【種族】 吉祥天 / 黒闇天 (蓮華)

【戦闘力】 3400 (MAX!) (初期戦闘力750×2 + 成長分1500 + 黒闇天分500 + 霊格強化分100 - 零落スキル分200)

【先天技能】

- ・ 真吉祥天の真言：詳細不明。加護の出力向上？
- ・ 真二相女神：半身とも呼べる別の神の力を借り、変身することが出来る。場に半身が存在する場合に限り、戦闘力500向上。生命力・魔力・スキル回数・後天スキルのすべてを共有可能。また、半身と一つとなることで、別の存在へと変身することが可能となる。半身となるカードを取り込むことで、上記の効果がいつでも発動可能に。ステータスを完全に共有し、半身を分身として召喚可能とな

る。

・真アマリタの雨：完全なるアマリタの雨を降らす。若返りとスキル回数回復の効果を追加。単体での使用可能回数五回。黒闇天が同時に場にいる場合、合計十回。

【後天技能】

- ・廃棄されし者
- ・限界突破
- ・明星の瞳
- ・零落せし存在
- ・霊格強化：霊格再帰を得たカードがランクアップした際に得るスキル。霊格再帰の戦闘力強化を引き継ぎ、零落スキルによるスキルの弱体化を軽減する。

・天衣無縫：自由行動への極めて強いプラス補正、精神異常と拘束スキルの無効化、状態異常に対する耐性。

・高等魔法使い

・知恵の泉：尽きることなき魔力と、魔法に対する様々な知識と技能を持つ。魔法系スキルの習得率向上。魔法系ローカルスキルの習得可能。魔法発動時、極めて強いプラス補正。魔力感知、魔力隠蔽、魔力回復、魔力強化、魔力消費軽減、詠唱破棄、追加詠唱、魔法陣を内包。

（追加詠唱：通常よりも長く詠唱することで、最大二倍まで威力を強化することが出来る）

（魔力消費軽減：魔法使用時の魔力消費を軽減する）

（魔法陣：魔法陣に対する一定の知識と技能を持っている。魔法陣を介しての魔法の威力強化や、持続化、トラップ化を可能とする）

（魔力感知：他者の魔力に対する感覚を強化し、隠蔽された魔力を見破りやすくする）

（魔力隠蔽：自分の魔力を隠蔽し、魔法の発動や魔法陣の存在を隠しやすくする）

・友情連携

・かくれんぼ

・神の寵愛： 高位の神からの寵愛を受けた証。プライドの高い神から寵愛を受けることは極めて珍しく、世界でも数例しか確認できていない。自由行動への極めて強いプラス補正、マスターからの命令に対する極めて強いプラス補正。ダイレクトアタック時に、カードへのダメージのフィードバックを軽減する？（マスターのバリアの強度がカードの防御力と同等に？ 詳細不明。スキル所有者は情報提供をお願いします。日本冒険者協同組合）

・高等忍術

・生還の心得

【種族】ヴァンパイア（イライザ）

【戦闘力】1680（MAX!）

【先天技能】

・膏血を絞る

・夜の怪物

・中等攻撃魔法

【後天技能】

・フェロモン

・奇襲 暗殺（CHANGE!）：攻撃時、相手に気づかれていない場合、相手の防御力をある程度無視し、ダメージにプラス補正。

・献身の盾

・精密動作

・高等補助魔法

・魔力強化

・詠唱短縮

・直感

- ・フィンの親指
- ・限界突破（NEW!）

【固有技能】

- ・マイフェアレディ（教導）：敵味方の内一体の後天スキルを一つコピーすることができる（？） 絶対服従、多芸、明鏡止水を内包。
- （多芸：新米メイド メイド（CHANGE!）、演奏、罨解除、武術、騎乗（NEW!）を内包する。）
- （メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包）

【種族】ライカンスロープ（ユウキ）

【戦闘力】1600（MAX!）

【先天技能】

- ・月満つれば則ち虧く
- ・狼に衣
- ・本能の覚醒

【後天技能】

- ・忠誠
- ・小さな勇者
- ・真なる者
- ・限界突破
- ・真眷属召喚
- ・縄張りの主
- ・高等忍術

- ・ 騎獣（NEW！）
- ・ 物理強化（NEW！）：物理的な攻撃の威力を強化する。
- ・ 見切り（NEW！）

【種族】サキユバス（メア）

【戦闘力】1000（MAX！）

【先天技能】

- ・ 巫山の夢
- ・ 胡蝶の夢
- ・ 淫魔の肌

【後天技能】

・ ファムファートル（CHANGE！）：時として相手を破滅させてしまうほどの魔性の魅力をもった運命の女。その種族の限界値まで容姿を美化する。マスターへの好感度でステータス増減。自由行動に対する極めて強いプラス補正。精神異常無効。

- ・ 友情連携
- ・ 中等魔法使い
- ・ 高等状態異常魔法
- ・ 人を呪わば穴二つ
- ・ 生還の心得
- ・ 霊格再帰
- ・ 耐性貫通
- ・ 詠唱短縮
- ・ 高等攻撃魔法（NEW！）
- ・ 魔力強化（NEW！）
- ・ 魔力回復（NEW！）

【種族】橋姫（鈴鹿）

【戦闘力】900（MAX！）

【先天技能】

- ・可愛さ余って憎さ百倍
- ・丑の刻参り
- ・千変万化

【後天技能】

- ・目隠し鬼
- ・武術
- ・見切り
- ・良妻賢母
- ・追跡
- ・虚偽察知
- ・友情連携
- ・気配遮断（NEW！）

【種族】ドラゴネット（マイラ）

【戦闘力】590（MAX！）（390 + 霊格再帰分50 × 4）

【先天技能】

- ・小竜玉：生命力を生み出し貯蓄する竜の心臓。
- ・竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。

・竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をプレスとして吐き出すことで、魔法の威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。

【後天技能】

- ・霊格再帰（NEW！）：ドレイク（480）、ワイバーン（4

50)、バジリスク(430)、東洋龍(420)。数値は、初期戦闘力。

- ・ 滅私奉公
- ・ 初等魔法使い
- ・ 新米メイド(NEW!)
- ・ 戦術(NEW!)：戦術に対する一定の知識と技能を持っている。特定行動時、行動にプラス補正。

【種族】バジリスク(マイラ)

【戦闘力】825(430+成長分195+霊格再帰分50×4)
(レベルアップ使用時1060)

【先天技能】

- ・ 毒竜玉：猛毒と生命力を生み出し貯蓄する毒竜の心臓。
- ・ 毒竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。その鱗には猛毒が含まれており、攻撃して者を毒に侵す。

・ 毒竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をプレスとして吐き出すことで、魔法の威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。その吐息には猛毒が含まれている。

・ 毒を以て毒を制す：ありとあらゆる毒を喰らい、それを糧とすることができる。自身の毒の効果を強化し、また毒により回復する。毒の魔眼、石化の魔眼を内包する。

(毒の魔眼：見るだけで状態異常を与える魔眼)

(石化の魔眼：見るだけで状態異常を与える魔眼)

【後天技能】

- ・ 霊格再帰
- ・ 滅私奉公
- ・ 初等魔法使い 中等魔法使い

- ・新米メイド
- ・戦術

【種族】デユラハン（ドレス）

【戦闘力】800（MAX！）

【先天技能】

- ・産声は死の始まり
- ・亡者にも鎧
- ・静寂の馬車

【後天技能】

・精密動作（CHANGE！）

・七転八起（CHANGE！）：何度転んでも諦めない挑戦の精神を持つ。スキルの習得率向上。精神異常に対する耐性。逆境時、行動に極めて強いプラス補正。

・不屈の精神：どんな失敗や逆境にもめげない鋼の精神を持つ。やや学習しない傾向アリ。精神異常に対する耐性。逆境時、行動に強いプラス補正。

・剣術：刀剣の扱いに特化した武術スキル。武術スキルと効果重複。特定行動時、行動に強いプラス補正。

・武術（NEW！）

【種族】マヨヒガ（オードリー）

【戦闘力】600（MAX！）

【先天技能】

・敵の家でも口を濡らせ：迷い家とも言われる、家型の異空間を展開できる。招かれざる客を拒み、受け入れた者には安息と幸運を授ける。異空間系スキルを持たない敵からの干渉を受けない。内部にいる味方へ幸運、持続回復を付与する食事を提供できる。効果は二十四時間持続するが、外へ出ると効果が落ちる。

・ 上級家妖精：家妖精というよりも、もはや家の化身あるいは守り神と呼ぶべき存在。メイド、高等家事魔法、上級収納を内包。
（メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包）

（上級収納：物を収納できる内部空間を持つ。上級は体育館程度の広さ。）

- ・ かくれんぼ

【後天技能】

・ メイドマスター：メイド、低級収納、秘書、教導、演奏、舞踏、武術、精密動作、庇うスキルを内包する。

- ・ 従順
- ・ 諫死
- ・ 中等補助魔法
- ・ 中等回復魔法

【種族】ヘスペリデス

【戦闘力】600

【先天技能】

・ 黄昏の娘たち：世界の西の果てに住まう三人のニンフたち。アイグレー、エリュティア、ヘスペレトウーサの三名で一枚となっており、複数体同時に出現し、その戦闘力も複数に分散される代わりに、すべての個体が死なない限りロストしない。歌手、農家、メイドを内包。

（歌手：歌手に必要な技能を収めている。歌唱、演奏、舞踏、精密動作を内包）

（農家：農家に必要な技能を収めている。耕作、栽培、畜産、集団行動を内包）

（メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、

礼儀作法を内包)

・ヘスペリデスの園：ヘスペリデスたちが住まうとされるヘラの果樹園を展開する。ヘスペリデスの園には、食べた者に不死を与え、黄金のリングが実るとされ、それを守護するBランクモンスターが住まう。この園に実る黄金のリングには不死の力はないが、侵入者を強烈に惹きつける効果があり、食した者に『生還の心得』を一時的に付与する。また、非常に美味。

・上級地精霊：下級の地母神に近い、地の精霊。存在するだけで大地に恵みを与え、植物の成長を促進させる。地形操作、地質操作を内包。

(地形操作：周辺の地形を望み通りに改変できる。)

(地質操作：周辺の地質を望み通りに改変できる。少量ではあるが、土から貴金属や宝石を作り出すことも可能)

・高等補助魔法

【後天技能】

・従順

・中級収納：物を収納できる内部空間を持つ。中級は十畳程度の広さ。

・簡易神殿：地面に魔法陣を描くことでその場に簡略化した神殿を形成することができる。神殿内において、全ステータス向上、持続回復、一部スキルの出力向上。神属性は効果向上。

【種族】ネヴァン

【戦闘力】1600

【先天技能】

・死と勝利の戦女神：戦場における死と勝利の女神であるネヴァンの権能を使用可能。

・三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・破壊と殺戮と勝利の宴：『毒のある女』の装備化対象と『大いなる女王』の強化対象を眷属含む味方全体に拡大し、『赤い鬘のヴァハ』の効果に陣地破壊の効果を追加する。場に、ネヴァン、モリガン、ヴァハの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日に一回のみ。

・毒のある女：死の予兆であるバンシーとデユラハンの起源。高等クラスの装備化スキル。他のカード、あるいはマスターを祝福することで、自身の戦闘力を加算させることができ、また自身の持つ装備化スキル以外の先天スキル一つと、すべての後天スキルを共有する。バンシーとデユラハンを無限召喚可能。

【後天技能】

・神のプライド：高位の神格としての誇りと傲慢さを持つ。相手を認めぬ限り、人間であるマスターの言うことはまず聞かない。自由行動に対する極めて強いプラス補正。

・眷属強化：場の味方眷属の眷属体スキルをワンランクアップさせる。

・遠見の術：上空に疑似的な眼を生み出し、俯瞰するように周囲を見ることができ。

・メイドマスター（オードリー）

・限界突破（イライザ）

・高等忍術（ユウキ）

【種族】モリガン

【戦闘力】820

【先天技能】

・ 支配と殺戮の戦女神：支配と殺戮の女神であるモリガンの権能を使用可能。

・ 三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・ 破壊と殺戮と勝利の宴：『毒のある女』の装備化対象と『大いなる女王』の強化対象を眷属含む味方全体に拡大し、『赤い鬘のヴァア』の効果に陣地破壊の効果を追加する。場に、ネヴァン、モリガン、ヴァアの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日に一回のみ。

・ 大いなる女王：愛した者に祝福を与える夢魔の女王。対象一体にレベルアップの魔法を掛け、ステータスを二倍にし、自己再生と状態異常耐性を付与する。戦士、高等攻撃魔法を内包。

（戦士：戦士に必要な技能を収めている。武術、剣術、槍術、弓術、騎乗スキルを内包する）

【後天技能】

・ 神のプライド：高位の神格としての誇りと傲慢さを持つ。相手を認めぬ限り、人間であるマスターの言うことはまず聞かない。自由行動に対する極めて強いプラス補正。

・ 物理強化

・ 怪力

・ 目隠し鬼（鈴鹿）

・ かくれんぼ（蓮華）

・ 不屈の精神（ドレス）

【種族】ヴァア

【戦闘力】 780

【先天技能】

・ 怒りと破壊の戦女神：怒りと破壊の女神であるヴァハの権能を使用可能。

・ 三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・ 破壊と殺戮と勝利の宴：『毒のある女』の装備化対象と『大なる女王』の強化対象を眷属含む味方全体に拡大し、『赤い鬘のヴァハ』の効果に陣地破壊の効果を追加する。場に、ネヴァン、モリガン、ヴァハの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日に一回のみ。

・ 赤い鬘のヴァハ：出産間近であるにもかかわらず馬と競争させられたヴァハの怒り。敵全体の男に陣痛と同等の痛みと体力の消耗を与え、また狂乱の呪いを与える。

（狂乱：コントロール不能となり、敵味方の識別ができなくなる状態異常）

・ 高等魔法使い

【後天技能】

・ 神のプライド：高位の神格としての誇りと傲慢さを持つ。相手を認めぬ限り、人間であるマスターの言うことはまず聞かない。自由行動に対する極めて強いプラス補正。

・ 魔力強化

・ 魔力回復

・ 簡易神殿 （ヘスペリデス）

・ 詠唱短縮 （メア）

・ 戦術 （マイラ）

『やまだやまだ@yamada | yamada44』様より、蓮華イラストを頂きました！

いつもありがとうございます！

・蓮華カードギアビジョン(?)

<i618776—21711>

こちらは、コミカライズ版作画のさぎやまれん先生が、Twitterにアップしてくださったイラストとなります！

こちらの絵柄が気に入った方は、コミックの方もいかがですか？

<i616815—21711>

TIPSまとめ5 イラストあり(後書き)

PS:この小説を面白いと思ってくださったなら
の方にあるツイッターの方もよろしくお願ひします〜)・・・(

第一話 人生で最も長い一日 (前書き)

コミカライズ二巻、本日発売です！
よろしく願います！

第一話 人生で最も長い一日

——アンゴルモアが始まった。

その師匠の言葉を聞いた俺は、すぐにダンジョンマートの外へと飛び出した。

途端に、コンビニのBGMと自動ドアに遮られていたサイレンの音が俺の耳に届いた。

『こちらは、立川市役所です。ただいま、緊急避難のお知らせをしております。大規模迷宮災害が発生しました。くれぐれも落ち着いて、最寄りの避難所へと速やかに避難をお願いします。繰り返しします。繰り返しします。こちらは、立川市役所です。ただいま——』

街のあちこちからは、そんなスピーカー放送と共に人々のパニックの音が聞こえてくる。

道路には、乗り捨てられた車が放置されていて、その隙間を縫うように大きなバッグを背負った人々が駅の方へと向かっていた。

彼らの中には、カードらしき獣に乗った者や、人型のカードに守られるように移動している者も多く、アンゴルモアが本当に起こっているのが一目瞭然だった。

それらを尻目に、まずはカードギアをチェックする。

時刻は12時04分。アナと織部からいくつものメッセージが届いており、その中に紛れて家族全員からの無事と現在所在を伝えるメッセージが入っていた。

どうやら、お袋は家におり、親父と愛もちゃんと会社と学校にいるようだった。

それに、ひとまずホッと一安心する。

「マロ、とりあえず学校へ行ってみんなと合流しよう!」

「ああ!」

師匠の言葉に頷き、俺もカードたちを召喚する。

ユウキに跨って学校へと向かう——その前に。

「予定通りだ。蓮華、イライザ、メア、マイラはお袋と愛のところへ向かってくれ」

マイラが、大きな翼と群青色の美しい鱗を持った流線的なフォルムのドラゴン——ワイバーンへと変身し、カードたちがその背に次々と乗り込んでいく。

アンゴルモアが始まったら、この四枚のカードを真っ先に家族のところへと向かわせると決めていた。

八王子までは、ワイバーンへと霊格再帰したマイラに乗って途中の小学校で蓮華とメアを降ろし、黒闇天を召喚。黒闇天、イライザ、マイラの三名で家に向かう……そういう予定だった。

親父の名前がないのは、職場が遠い(と言っても同じ都内だが)のと、お袋と愛を最優先に動くと二人で話し合っていたからだ。

今はどこの企業もちゃんとしたシエルターと物資を福利厚生の一環として用意しているし、親父には多めにカードを預けてあるから、なんとかなるだろうという判断である。

「……大丈夫か?」

「大丈夫だ。行ってくれ」

他のカードたちが全員マイラの背に乗る中、唯一残った蓮華がチラリと師匠を見てそう問いかけてきた。

それに対し、俺はしつかりと頷き返す。

……師匠が国のスパイだったことが発覚した今、自分が傍を離れることを心配する蓮華の気持ちはわかる。が、師匠もそこまで俺に悪意的なわけでも、国に忠誠を誓っているわけでもないだろう。

おそらく、俺を探ることで第三次アンゴルモアを防げる手段が見つかるなら、程度の気持ちだったはずだ。

それがもはや手遅れになった以上、師匠が俺を国に売り渡す理由はない。

……それに、今なら師匠と敵対しても逃げ切るくらいの力はある。たしな。

あえて言葉にしたわけではないが、蓮華は俺の眼を見てそれを悟ったのか、踵を返しマイラへと乗り込む。

ワイバーンの巨体が飛び去って行くのを見送ると、俺も黄金の手綱を握りユウキへと乗り込んだ。

「お待たせ、師匠。行こうか」

「……まだ僕のこと師匠って呼んでくれるんだ？」

俺の師匠呼びに、師匠は少し驚いたような顔をして、そう聞いてきた。

……そこはさりげなくスルーしてくれよ、と思いながら俺は答える。

「……師匠は師匠だろ」

「……ありがとう」

謝りかけて、代わりに感謝の言葉を口にした師匠に、俺は聞こえなかったフリをして問いかけた。

「……ところで、アンゴルモアが始まったのはいつなんだ？」

「マロが迷宮から出てくるほんの十分前だよ」

十分……それならたいして時間のロスはないか。

俺が内心で胸を撫でおろしていると、師匠が険しい顔となっていた。

「それより、妙なことがある。アンゴルモアが始まったっていうのに、自衛隊の姿が見えないんだ」

「……なんだって？」

アンゴルモアが始まれば、自衛隊は即各地の迷宮へと派遣される。できる限り多くのDランク以上の迷宮を沈静化するためだ。

十分程度ならまだ準備をしているんじゃないかと思うかもしれないが、自衛隊にはアンゴルモア番というものがあり、常に一定数が休憩を兼ねてアンゴルモアに備えているのだ（と以前見たTVで言っていた）。

加えて、ここ立川には、自衛隊基地がある。

この立川で自衛隊の姿が見えないということは、それはすなわち自衛隊がまだ出動していないことを意味した。

「……なにかトラブルが起こったか？」

「わからない。迷宮の外に放り出されてすぐに担当自衛官に連絡したんだけど……その時も連絡がつかなかったんだ」

「それは、どれくらい前の話だ？」

「アンゴルモアが始まる一時間は前だね」

「一時間……」

少なくともそれくらい前には、師匠への対応を取れないくらいの何かが起こっていたということか。

単に師匠の優先順位が低いだけなのか、あるいはよほどのことが

起きたか……。

前者なら良いが、師匠の件は「迷宮消滅の鍵」と考えると、その可能性は低そうだった。

そもそも、師匠のカミングアウト自体が自衛隊からの指示だろうか。

その報告を受け取らないのは、どう考えても不自然である。

「――先輩！」

そんなことを話しているうちに、学校へ到着すると、校門でアナと織部が待ちかまえていた。

「遅いッスよ！ どこに行ってたんスカ、もう！」

「すまん！ 一体どうなってる？」

「それについては、すみませんが、小夜に聞いてください。ウチは予定通りこれから神無月先輩と、迷宮の沈静化に向かいます。……協力してくれますよね？ 神無月先輩？」

「もちろん」

アナと師匠が屋上へと向かっていくのを見送り、俺は織部へと向かい合った。

「とりあえず先輩、縄張りの主を発動してもらって良いか？」

「わかった」

俺は、ユウキに縄張りの主を発動させた。

これで、フェイス1で漏れ出てくるような弱いモンスター……特にグレムリンのような厄介な雑魚を学校に寄せ付けずに済む。

「で、今どうなってる？」

「先輩たちがどこかに行つてから、しばらくしてアングルモアが始まった。全校生徒が体育館に集まることになって、我々は先輩たちに連絡を取つたが連絡がつかず、先輩のクラスの人に聞いたところ教室にも戻っていないという。そこで、学校の外に出たと判断し、ここで待つていたところだ」

なるほど……迷惑をかけてしまったようだ。

「先輩は、もうご家族のところへカードは？」

「向かわせた。織部は？」

「我もだ」

「じゃあ、俺たちも体育館に向かうか」

アングルモアが始まったら、まず回収する家族がないアンナと師匠が迷宮の沈静化に向かい、俺と織部は家族の回収を行いつつ、学校の皆を落ち着かせる予定となっていた。

そうして二人で体育館へと向かうと、ヒヨリちゃんが壇上に立つて全校生徒にむけて説明を行っているところだった。

『えーっと、それはですね……あつ、北川くん！ 良いところに！』

ヒヨリちゃんが、救いを求めるように俺の名を呼んだ瞬間、全校生徒がバツと俺たちの方へと振り向いた。

「……ッ！」

物理的な圧力すら伴つていそうな視線の集中に、思わず一步後ずさりしかけるのをなんとか踏みとどまる。

同時に、生徒たちの列が割れ、壇上までの道ができた。

なんだこれ、モーゼか……？

俺は不安や期待の混じった全校生徒たちの視線を浴びながら、狼形態のユウキを引き連れ壇上へと向かった。

ヒヨリちゃんからマイクを受け取り、生徒たちを見渡す。

……大体、300人から400人つてところか。

なんだか、妙な気分だった。緊張で心臓はドキドキしてるのに、頭はこれ以上ないくらい冴えている。迷宮内で強力な主と戦う時と同じ状態。

俺は、一つ唾を飲み喉を軽く潤すと、全校生徒へと語り掛けた。

『冒険者部の副部長の北川です。まず、現時点でこの学校は安全なのでご安心ください』

俺がそう言うと、体育館にホツとした空気が広がった。

ゲート前に設置された扉によってアングルモアが始まってすぐは、モンスターがあふれ出すことはない。

そのこと自体は、ここ最近TVで繰り返し流されていたため知っている生徒も多いだろうが、こうして断言されるとやはり安心するようだった。

『うちの学校に迷宮があることから不安に思っている方々も多いでしょうが、ただいま部長である十七夜月かのうと、プロライセンスを持つ神無月が迷宮の踏破へと向かっていると聞いています』

……なんだか、首を傾げている生徒や先生がそこそこいるな。ああ、そうか。沈静化を知らないのか。

俺は、補足説明をすることにした。

『アングルモア中に主の撃破か迷宮の踏破を行うと、迷宮は沈静化

し、その迷宮におけるモンスターの氾濫をストップさせることができます。つまり、この学校の迷宮については、心配する必要はないということですよ』

俺がそう言つと、生徒のみならず先生たちの間にもざわめきが広がった。

それを黙って見守っていると、校長が拳手をしたので、問いかけた。

『どうしましたか？ 校長？』

「その沈静化……あー、誰かマイクを。」「……ごほん、失礼しました。つまりその沈静化というのをを行うことにより、アンゴルモアを収められるということなんだろうか？ ……なんででしょうか？ そもそも、ウチの学校の迷宮をそんな短時間に踏破できるものなんでしょうか？」「」

良い質問だ……と思いつながら答える。

『順番にお答えします。まず沈静化できるのは、主を倒すか踏破した迷宮だけとなります。なので、アンゴルモア自体は続きます。あくまで、学校の迷宮に関してはモンスターを吐き出さなくなるとご理解ください。次に、ウチの学校の迷宮を短時間で踏破できるのは、我々冒険者部が、そのために準備してきたからです』

そこで俺はみんなを見渡すと、言った。

『我々は、このアンゴルモアに備えてできる限りの準備を行ってきました。全校生徒が一年以上食べられるだけの食料や、食料自体を生み出すカード。それに皆さんの避難先となる異空間型のカードも用意しました』

そうやって、俺はオードリーを召喚すると、マヨヒガを展開させた。

俺の背後に、空間を歪ませながら豪華な洋館が現れる。

体育館の壁やスペースを無視して現れた洋館に、生徒たちがどよめいた。

『この洋館には、大浴場もあり、寝室数も十分あります。我々はこれと同様のカードを十枚以上用意しました。自衛隊が我々を迎えに来るまでの間、何不自由しない……とまでは言いませんが、ビジネスホテル程度の快適な生活を提供できるでしょう』

俺の言葉に、不安に苛まれていた生徒たちの雰囲気はだいぶ安らぎ、それどころか修学旅行前のような浮ついた空気すら漂ってきた。「トランプとか持つてくれば良かった」とか「ダンジョンマートで買えるんじゃない？」という能天気な声すら聞こえてくるほど。

それでもまだ心配そうな顔をしている生徒たちも一定数いて、そんな彼らへと俺は背後のユウキを示しながら言った。

『モンスターの襲撃についても、このユウキは弱いモンスターを遠ざけるスキルを持ち、それ以上の強いモンスターの襲撃に関しては我々冒険者部が対処に当たります。そもそも異空間型カードの中にいけば、たいいていのモンスターは侵入することができませんのでご安心ください』

そこでようやく、見える範囲すべての生徒たちの顔に安堵の色が広がる。

特に、冒険者部の新入部員らしき生徒たちの顔には、誇らしげなものすら浮かんでいた。

『次に、ギルド等の避難所についてですが……』

ここが安全だと分かってもらったところで、他の選択肢も与える。

『希望の方については、少数ずつ順番にはありますが、ギルドへと送らせていただきます。ギルドに避難するもよし、ここで自衛隊の救助を待つのもよし。ただし移送については、モンスターがゲート前の扉を破って出てくるまでの間とさせていただきます。それ以降は、移送自体がリスクとなってしまうので。希望者は、それまでの間に……そうですね、各クラスの担任にまで申し出てください。』

……お願いできますか、先生？』

事後承諾の形となってしまったが、否とは言わせぬ流れで俺は校長の方へと問いかけた。

ここで、自分たちでやってくれたの、勝手な事するな、だの言う余裕は彼らにもないだろう。

案の定、校長は素直に頷いてくれた。

『わかりました。皆さん、この話が終わったら、希望者は各担任……いえ、教頭のところまで来てください』

校長は、先生たちの顔を見て、幾人かの先生の顔が見えないことに気づき、苦虫を噛み潰したような顔でそう言った。

……それに、マジで職務放棄してる先生の数が多いんだな。別に俺のせいではないのだが……なんだか申し訳なくなってしまうた。

『ところで、北川くん……冒険者部に質問なのですが』
『なんででしょう』

『ギルドではなくこの学校に残ると決めた場合、家族をここに呼ぶ』

ことは可能でしょうか？』

……………へえ？

俺は、意外な気持ちで校長を見た。

この手の質問が出るのは想定内だったが、それがまさか校長から出てくるとは思わなかった。

そもそも、この学校は俺たち冒険者部の物ではないし、部外者を呼び込む権利もない。

にもかかわらず、この質問をしてきたということは、校長は実質この学校の支配権は冒険者部にあると認めたようなものだった。

理事長であり経営者でもある校長が、そう認めたという事実は、それだけ重い。

まあ、俺たち冒険者部が学校を去れば、ここは避難所でもない、ただのコンクリートの箱なのだからさほど不思議でもないが……それでも俺たちのようなガキにあっさりと主導権を受け渡せるのは、大人たちのプライドを考えればかなり意外だった。

『結論から言うと、可能です。俺……自分も、家族をここへ呼んでいる途中ですから』

俺がそう言うと、あちこちからざわめきが上がった。「私も家族を呼びたい！」「俺も！」「ズルい！」「別にズルくねーだろ！」「という声も聞こえてくる。

それを無視して、俺は続けた。

『ただ、協力できる範囲には限界があることをご理解ください。言っておきますが、準備を整えてきたとは言っても、ここよりもギルドの方が安全ですし、ご家族もギルドに避難できるのであればそれが一番ですから』

『わかりました。……ここに残ることを決めた方で、ご自宅が学校

の近くにある方は校長である私まで来てください』

……校長の方から学校の近くだけに限定してくれたか。正直、ありがたい。

冒険者部の方で断ると角が立つからな。

「しつもん！ 自分で迎えに行くのは別にええんやろ！」

そう大声で質問してきたのは、小野だった。

いつの間にか体育館の入り口にやってきていた彼は、ボディーマーを身に纏い、不敵な笑みでこちらを見ている。

その周囲には、同じような恰好をした新入部員らの姿が。

……どうやらアンゴルモアが起こって急いで迷宮から戻ってきたようだった。

『自分で家族を連れてくる分には、問題ないな』

俺の答えに、遠目に小野がニヤリと笑うのが見えた。

「八王子に住んどる奴で、家族を連れてきたい奴はおるか！？ 僕と一緒にいくなら連れてきたってもええで！」

「高尾で家族を迎えに行きたいって人はアタシまで声をかけて！」

小野が続いて一条さんが声を張り上げると、次々と新入部員たちが声を上げ始めた。

「三鷹まで家族を迎えに行きたいんだけど、俺だけじゃ心細いから誰か一緒に来る奴いない！？」

「日野の人集まってー！」

「国分寺の人は、こっちだよ！」

あつという間に、それぞれの最寄りごとに班が出来ていく。
俺はそんな光景をみながら、織部へと声をかけた。

「小夜、悪いんだけど、部室から転移系以外のマジックカードとポ
ーションを全部持ってきてくれ」

「……良いのか？」

「こつという時用だろ」

織部は体育館を見渡し……。

「そつだな。確かにその通りだ」

そつ頷き、部室へと走っていった。

『家族を迎えに行く人たちは、最寄り駅ごとに班長を決めたらこつ
ちへ来てくれ！』

生徒たちは顔を見合わせて、すぐに班長を決めてやってきた。

……ずいぶん早いな。予め決まっていたのだろうか。

こちらへやってきた班長達の顔ぶれを見ると、小野と一条さんを
始めとして、東西コンビや神道と顔見知りが多く混じっていた。彼
らは一様に、腕に廉価版カードギアを着けている。

ああ、なるほど、カードギア持ちを班長に選んだのか。

そう納得しているうちに、織部がポーションとマジックカードを
抱えて戻ってきた。

俺は、彼らへと平等に人数分のポーションとマジックカードを配
っていた。

「一応マジックカードとポーションを渡しておくけど、できればモ

ンスターが溢れ出す前に戻ってこれればそれが一番良い。くれぐれも、カードがあるから大丈夫とは思わないように。いいか、着の身着のままが良いから無理やりでも連れてくるんだ。物だけならそのうち取りに行くこともできる。準備がどうこうとか、持っていくた
いものが、とか言い出す家族がいたら、ぶん殴ってでも連れてこな
いと全員を危険にさらすことになるぞ」

「わかった」「ありがとうございます」「すげーな、これだけで一財産だぞ」
「ありがとうございます」「……ウチのお兄ちゃん、ヒキコモリな
んだけどスムーズに連れ出せるかな」

そこで、最低限にラインを繋ぐだけに留めておいた蓮華たちから
テレパスが届いた。

『歌麿、トラブル発生だ』

『どうした？』

言いながら、蓮華たちと五感を共有する。

蓮華たちは愛の小学校に到着済みで、イライザたちはお袋と合流
して小学校へ向かっているところのようだった。

『愛を連れて行こうとしたんだが、教師どもに止められた。本当に
保護者のカードかわからない相手に生徒を渡すわけにはいかない、
とか言ってるが……ありゃ戦力としてアタシらを引き留めたいだけ
だな』

『チツ……そうか、わかった』

クソ、蓮華たちの戦闘力の高さが裏目に出たか。

有名カードで、愛と顔見知りの蓮華相手に、本当に保護者のカ
ードかどうかわからないもないものだろう。

どう考えても本音は、俺のカードたちを引き留め、守ってもらい

ただだけだ。

これじゃ、お袋を小学校に向かわせても愛を引き取って来られるかはわからないな……。

最悪、お袋ごと小学校に留め置かれる可能性がある。

『仕方ない。お袋と合流したら、無理やりにも連れてこい』

『愛の友達はどうする？　なんか一緒についていきたがってるのが、この前あった二人の他に結構いるみてーだけど』

『あー……』

愛は、友達多いからなあ……。

お誕生日会とか、普通にクラスの半分くらい連れてくるし。

さすがに、その人数を無理やり連れてくるわけにはいかない。

愛と、幼馴染の二人だけ……いや、しかし……。

……うん。迷ったら予定通りに、だな。とりあえず愛だけでも連れてきて、お友達についてはそれから考えましょう。

そう蓮華に返事をしようとした時、アンナと師匠が体育館の入り口に姿を現した。

ずいぶんと早いな、と感心ながら織部と二人の元へ駆け寄る。

「お疲れ！　ずいぶん早かったな」

「うむ、沈静化は無事に済んだのか？」

「ええ……沈静化はできたんですが」

……なんだ？　その割には、ずいぶんと表情が暗いが。

「結構苦戦したのか？　カードがロストしたとか？」

「いや……」

俺の問いに、師匠が首を振る。

「主が、最下層にいなかったんだ……」

主が最下層にいなかった？

俺はその意味がわからず首を傾げ――二次の瞬間、全身からブワリと汗が噴き出した。

主が最下層にいなかったということは、それは、つまり……。

顔を蒼ざめさせる俺と織部に、師匠は固い声で絶望的な事実を告げる。

「――――どうやらアンゴルモアは、前回のフェイズを引き継ぐらしい」

第一話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】スキル回数回復スキル

スキルの回数制限を回復させることができるスキル。

強力なスキルは回数制限が定められていることが多く、その使用回数を回復させられる数少ない手段として、スキル回数回復スキル持ちは非常に需要が高い。

ただし、スキル回数回復スキルの使用回数を、スキル回数回復スキルで回復させることはできない。

また、スキルの回数制限と、スキルのクールタイムは別物であるためクールタイムも回復させることはできない。

霊格再帰は、スキル回数回復スキルで回復できないことから、回数制限のあるスキルではなく、非常に長いクールタイムを要するスキルという見方が有力である。

第二話 人生で最も長い一日

「アンゴルモアのフェイズは引き継がれる……」

それは、あまりに絶望的な知らせだった。

俺たちの、いや人類のアンゴルモア対策は、アンゴルモアがフェイズ1から始まることを前提に考えられていた。

その前提が崩れれば、当然すべての戦略に狂いが生じることとなる。

……だが、よくよく考えてみれば、アンゴルモアの度にフェイズがリセットされる保証など、どこにもない。

第一次が、たまたまフェイズ1で終わり、第二次もフェイズ1から始まったことで、アンゴルモアはフェイズ1から始まるという固定観念が出来ていたに過ぎない。

おそらく学者や官僚たちの中には気づいている者もいたのだろうが、民衆に対してはTVを通じてアンゴルモアはフェイズ1から始まるという思い込みが刷り込まれていた。

理由は簡単。民衆が知ったところで、百害あって一利なしだから。俺たちは、知らず知らずのうちにメディアと政府によって誘導されていたのだ。

……なにせよ、戦略の修正が必要だ。

今がすでにフェイズ3だということは、すでにBランクモンスターが地上へと向かっていることだろう。

いや、それだけではない。すでに出現しているであろう新たな迷宮から、モンスターが溢れ出している可能性がある。

そう思い至り、上空を移動するイライザたちの眼から地上を見下ろしてみるも、今のところモンスターが地上を徘徊している様子は

なかった。

……フェイズの進行と、新規の迷宮からモンスターが溢れる現象に関係はない？

いや、今はそんな考察をしている場合じゃない。
とりあえず考えるべきは……。

「アンナ。今、最寄り駅ごとに班を作って、生徒たちの家族を迎えに行かせようとしているところなんだが、フェイズ3まで進行しているなら、どうすべきだと思う？」

俺は、フェイズ3だろうが4だろうが何としてでも家族を迎えに行くが、他の部員たちはそうはいかないだろう。

いくらDランクカードを持っていようと、フェイズ3ではBランクモンスターと遭遇した時点で死確定だ。

「そう……ツスね。中止……いえ、希望者はそのまま行かせてください。フェイズ3とはいえ、モンスターが階層を移動するのはそれなりの時間がかかります。モンスターが地上にあふれ出すまでにはまだ余裕があるはず。今が、家族と合流できる最初で最後のチャンスでしょう」

確かに、今を逃せば生徒たちが家族と合流できるチャンスはないか。

固唾を飲んで俺とアンナの会話を見守っていた生徒たちが、その言葉を聞いて体育館の外へと駆け出して行った。

その中に四之宮さんの姿を見かけたので、呼び止める。

「四之宮さん！」

「な、なに!?!」

「悪いんだけど、フェイズがすでに進んでる件、牛倉さんにも伝えておいてくれる? 家、近いんだよね?」

「あ、うん! 大丈夫、そのつもりだったから」

俺が言うまでもなかったか。

そのまま外へと駆けていく四之宮さんを見送り、俺も蓮華たちへとテレパスを飛ばす。

ちょうど、小学校では、お袋と愛が合流したところだった。

『蓮華。お袋と愛だけでも強引に連れてこい。愛はこっちで説得する』

『了解。ま、もう説得の必要はねーけどな』

『? どういう……?』

俺が問いかけようとしたその瞬間、笛の音色と共に蓮華たちの視界が一変した。

小学校から、どこかの路上へと景色が切り替わる。

ダンジョンマーケット……? これは、先ほどまで俺と師匠が潜っていた迷宮か!

「先輩!?!」

アンナの声を背に、すぐさま体育館の外へと飛び出す。

そのまま先ほどの迷宮の方へと視線を向けると、マイラに乗って学校へと向かってくるのが遠目に見えた。

『まさか、ハーメルンの笛で転移してきたのか!?!』

『イエス、マスター。どうやらアンゴルモア中は、地上でも転移できるとなるようです』

『おお！？』

まさかハーメルンの笛にそんな効果があったとは……！ 他の転移の魔道具は、変わらず迷宮内でしか使えないままだったのに！
マイラが学校の校庭に着陸する。真っ先にピヨンと飛び降りてきたのは、我が家の愛犬マル。

マルはそのまま一直線に俺の元——を通過過ぎて、斜め後ろで待っていたユウキ目掛けて駆け寄っていく。

……まあ、わかっていた。この馬鹿犬が、俺を頼りにするわけがないなんてことはな。

続いて、お袋と愛も降りてくる。そのまま二人は、青い顔でへなへたとへたり込んだ。

「歌麿……アンタいつもこんな風に移動してるの？」

「こ、怖かった……」

ああ、うん、まあ、慣れないうちは怖いよな。

慣れたら魔道具での飛行よりむしろ安心感があるんだが。

なににせよ、これで第一目標だったお袋と愛の回収は済んだか。

『マスター、こちらを』

そう言っただけでイライザが渡してきたのは、家の地下室に保管していた魔道具類の入った金庫とガーネットが入った袋だった。

『カード類は、お母上が。ガーネット類はマスターが使うこともあるかと、こちらにわけておきました』

『ナイスだ、イライザ』

家の物資を回収するだけでなく、俺がすぐ使う可能性のあるガー

ネットを分けて渡してくれるとは……。本当に気が利くようになった。

金庫は部室に置いておくとして……。ガーネットはこのまま俺が持つでしょう。何が起こるかわからないからな。

そんな風にイライザとやり取りをしていると、愛がおずおずと話しかけてきた。

「お兄ちゃん……。あの、学校の友達についてなんだけど」

「ああ、わかってる。これからギルドに皆連れてってやるから安心しろ」

いつになく遠慮がちに言ってくる妹に、俺は皆まで言うなと強く頷き返した。

フェイズ1までならともかく、すでにフェイズ3まで進行していることがわかった以上、ここで何もしなかったら見殺しにするも同然だ。

さすがにそれは、後味が悪い。

この学校に連れてくることは色々と難しいが、ハーメルンの笛の新たな効果もわかった以上、ギルドに送り届けることくらいわけない。

俺の答えに、愛もホツとした笑みを浮かべる。

「うん！　ありがとう、お兄ちゃん！」

「ああ。……。そういうわけで、すまんがちょっと小学校へ行く」

俺はいつのまにか傍にやってきていたアンナへと、ハーメルンの笛で地上も転移できるようになったことを簡単に説明し、小学校の子供たちをギルドへと送り届けてくる旨を告げた。

「わかりました。……あの申し訳ないんすけど、そういうことなら家族と合流した班員の回収って可能ですか？」

ふむ……班員の回収か。

可能か不可能で言えば可能だろうが、問題は班員を回収しながら、Bランクモンスターが地上に溢れだすまでに親父を回収できるかな。

『イライザ、転移の仕様はどうなってる？ 行ったことのない場所にも転移できるのか？』

『……いえ。転移できる範囲は、アングルモアが始まってからハメルンの笛が通ったことのある地点だけのようです』

申し訳なさそうに首を振るイライザだが、それでも十分過ぎる効果である。

迷宮内でしか使えなかった頃と比べて格段に自由度が上がっている。

そういうことなら、たぶん大丈夫だな。

ワイバーンの平常飛行速度は、ハヤブサ以上。ここ立川から親父の職場がある池袋まで十分もかからない。

班員たちの回収をしてるうちに、転移範囲も広がるだろうし、十分間に合うはずだ。

「了解。各班が駅まで着いたら連絡してもらって良いか？ それとその金庫も部室へ運んでおいてくれ」

「了解ッス。最寄り駅ごとに一人は予めカードギアを渡してあるんで、ウチの方から連絡……あっ！」

「どうした!？」

「い、いえ……」

なにかあったのかと問いかける俺に、アンナは悔し気に顔を歪め、地団駄を踏んだ。

「くう〜！ ……絶好のチャンスなのに、こんなこともあるのかと
って言い忘れた！」

「あ、そう……」

余裕ツスね、アンナさん。逆に頼もしいけどさ。

ってか、あっさり班長が決まったり、ソイツらがカードギアを持つたのは、アンナの仕込みだったのか。

まあ、確かに「こんなこともあるのか」と言っていないだけのシチュエーションと努力ではある。……言い損ねたけど。

アンナのおかげでいい具合に脱力した俺は、イライザへと振り返った。

『よし、まずできるだけ八王子駅に近いところに転移してくれ』

『イエス、マスター』

マイラに乗り込んだ状態で、ハーメルンの笛で転移する。

そこから八王子駅の付近まで飛ぶと、そこには大量の人が群がっていた。

北口も南口も、まるで昆虫の死骸に群がる蟻のように人々が密集している。

「これは……酷いな」

我先に避難所に入ろうとしている人たちが押し合いへし合いして、あちらこちらから怒号や子供の泣き叫ぶ声で、まさに地獄絵図だった。

ギルドの人員が、群衆の整理を行おうとしているが、完全に焼け

石に水状態。誰も言うことを聞かない結果、より避難が遅れるという状態となっていた。

これ、下手したら、モンスターがあふれ出すまでにギルドのシエルターに入れないんじゃない……。仕方ない。

『蓮華、アムリタの雨を頼む。もちろん例のヤツは抜きでな』

『あー、了解』

アムリタの雨は、精神すらも癒す完全回復魔法だ。混乱や恐慌といった精神状態であっても平常時に戻す。

いささか贅沢な使い方ではあるが、この場では最適な使い方だった。

「な、なんだ……？」 「綺麗……」 「あ、足が……！」

降り注ぐアムリタの雨に、人々がぼかんと上空を見上げる。

何が起こったのかは理解していないようだが、少なくとも先ほどまでの混乱状態は脱したようだった。

ギルド職員も一瞬呆気を取られていたが、すぐに我に振り返り避難民の誘導を再開する。

先ほどまでの混雑ぶりが嘘のように、地下シエルターへの入り口に吸い込まれていく人々。

それを見下ろしていると、こちらへ背に翼の生えた天狗らしきモンスターが飛んでくるのに気付いた。

大天狗……いや、Cランクにしては威圧感がある。それにあの赤い鳥の面と翼、Bランクの迦楼羅か！

だとすればマスターは……。

俺の前にやってきた迦楼羅が口を開く。

『北川さん！ 私です、重野です』

迦楼羅を通してそう語り掛けてきたのは、俺の予想通りの人物だった。

やはり、この八王子ギルドでBランクカードを使役し、このタイミングで俺に話かけてくるとすれば、重野さん以外ないだろうと思っていた。

『いやあ、助かりました。ありがとうございます。もしかして、ギルドへ避難しに来たのですか？』

「あー、いや、ちよつと様子を見に来たところです。それよりも重野さん……」

俺は、アングルモアがすでにフェイズ3となっている可能性について伝えた。

全国規模の組織であるギルドのことだ。すでに知っている可能性も高いが、現状で俺たちが最速で知っている可能性もある。

残念ながら、その懸念は当たっていたようで……。

『マジ、か……』

俺の言葉を聞いた重野さんは、絞り出すようにそう言った。

『そんな報告届いてないぞ……上は何をしてるんだ……』

「あの……」

『ああ、いえ、すみません。教えてくださってありがとうございます』

「いえ、それで、妹の通っている小学校の子供たちを、こちらのギルドに避難させたいと考えているんですが……」

『ああ、そうですね……。フェイズ3なら、そうした方が良いでしょう』

よう。……申し訳ございませんが、お願いしても良いですか？』
「はい。ありがとうございます」

よし、これでギルドもフェイズ進行の情報は共有したな。あとは、勝手に各避難所に伝えてくれるだろう。

重野さんと話を付けた俺は、続いて愛の小学校へと轉移した。

突然、校庭の上空に現れた俺たちに、グラウンドに集まっていた子供たちがざわめき指をさしてくる。

俺は教師たちが集まっているあたりへとマイラを着陸させた。

「君！ 突然何の……もしかして北川か！？」

駆け寄ってきたやせ型の中年教師が、俺の顔を見て驚きの声を上げる。

見れば、俺が小6だった時の担任だったスギセンこと杉山先生だった。

「杉山先生！ お久しぶりです！」

「久しぶりだなあ！ お前の活躍、TVで見てるぞ！」

「あー、ははは。恐縮です」

「言葉遣いもちゃんとしちゃってまあ……あの悪ガキだった北川がこんなに立派になるとはなあ。ホラ、覚えてるか？ 修学旅行でお前らがエツチなDVDを持ち込んで――」

なんだかそのまま昔話に花を咲かせそうな杉山先生を慌てて制止し、本題に入る。

「いや、先生。懐かしいのは、俺もなんですが……先に片付けておきたい用事がありました」

「おお！ そう言えば何の用で来たんだ？ 北川の妹なら、そこに

いるカードたちが攫うように連れて行ったが」

「はい。この生徒たちのギルドへの避難をお手伝いさせていたどころかと思ひまして」

「ギルドへ!? そりゃあ助かる! 実は、今からギルドへ行こうとしていたところなんだ」

「そうなんですか?」

先生たちもギルドに避難しようとしていたのか。

どおりで、地下シエルターじゃなくてグラウンドに整列してたわけだ。

「うん、お前のカードが妹を強引に連れて行ったことで、ここも安全じゃないんじゃないかって話になってな……」

なるほど……。

一般人よりも確実にアングルモアに詳しい冒険者が、血相抱えて家族を連れ去っていったわけだからな。さすがに危機感を覚えたか。

「それと、学校にもいくらかカードを配備されてはいるが……誰もカードをうまく扱える自信がないってのもあつてな」

杉山先生が、言いづらそうに言う。

そうなんだよなあ。それが問題なんだよ。カードをポイッと渡されて、最初からうまく扱えたら冒険者なんていらないわけで。

カードを使いなれている冒険者ですら、他の人を守るのは大変なんだから、ただの素人がたった数枚のカードで何十人、何百人という人たちを守り切れるわけがないのだ。

まあ、無いよりよっぽどマシなだけだよ……。

「お前がこのままここにいてくれるなら、カードもお前に預けて良

「いつて校長たちも言うと思うが……?」

「すいませんが……」

「だよな……。すまん、忘れてくれ、大人として情けないことを言った」

「いえ」

杉山先生はそう言うが、別に情けないとは思わない。

教師が考えるべきは、教え子の身の安全だ。俺がここの護りにつけばそれだけ子供たちが安全になるのだから、ダメ元でも頼み込むのは当然のことだ。蓮華たちを留め置こうとしたのだから、結局はそれだ。

なりふり構わず子供たちを守ろうとする大人たちを、俺は見つともないとは思わない。

「で、ギルドへの避難を手伝ってくれるんだろう?」

「はい。とりあえず、一クラスぐらいずつ俺の周囲に集まってもらっても良いですか?」

「わかった」

転移系の魔道具は、使用回数や転移先に制限はあっても人数に関しては、特に制限がない場合が多い。

なので一気に全員運ぶこともたぶん可能だろうが、転移先のスペースを考え、一クラスずつ運ぶことにした。

低学年から順に、駅前のバスロータリーへと転移させていく。

その最中、子供たちの親が小学校へ駆け込んできたりもしたので、その人たちも一緒にギルドへと送ってあげた。

そうしているうちに、とうとう愛のクラスの番がやってきて……。

「マロ兄さん、なんで愛だけ連れてったんです?」

「マロマロ、ウチらも愛のとこへ連れてってよー」

俺の顔を見るなり真っ先にそう言ってきたのは、案の定アオイちゃんとミオちゃんのロリ二人組であった。

これまでは、俺の後ろに控えるマイラなどのカードが怖かったのか、興味深げに見つつも特に声を掛けてくることのなかった子供たちだが、この二人に関しては顔見知りの気安さか平然と声をかけてきた。

「連れて行ってやっても良いけど、そしたらお前ら、親と離れ離れになるぞ。どうせギルドの方に避難するだろ？」

「あー、そっか。そうですね。しょうがない、か」

「だね。どうせマロマロたちもあとでギルドに来るっしょ」

そんな風に二人を説き伏せていると、目ん玉をキラキラとさせた男子がやってきた。

う、嫌な予感……。

「あ、あの、北川選手ですよな？ キャットファイトのグラディエーターの」

「あー……うん。そうだよ」

「いつも試合見ってます！」「あのドラゴン撫でも良いですか？」

「ファンです！ サインください！」「中学上がったら冒険者になるんで、弟子にしてもらって良いですか!？」

「――――アナタたち！ 迷惑かけないでっつて言ったでしょう!？」

あなたたちが騒げば騒ぐほど、わ……みんなの避難が遅れるのよ!？」

俺がどうあしらったものか迷っていると、担任らしき中年の女性がヒステリックな声を上げながら駆け寄ってきた。

彼女は俺へと媚びたような笑みを浮かべると……。

「ごめんなさいねえ、最近の子供たちときたら、全然大人の言うことを聞かなくなってる……」

そう言って頭を下げてくる彼女に、俺がどう対応して良いかわからず曖昧な笑みを返していると……。

「……この先生きらい」

「ヒステリックばあ……」

ロリ二人組が、俺の後ろからこっそり囁いてきた。

『ちなみに、愛を連れていくのを邪魔したのもコイツな』

そんな二人に、蓮華も補足するようにそう伝えてくる。

……あー。なるほど、この人か。確かに、あんま感じの良い先生じゃないな。

そこへ、杉山先生がやってくる。

「どうしました？」

「杉山先生、いえ、この子たちが騒いで冒険者の先生を邪魔してたもので、ちよつと注意を」

「あー、なるほど。……北川、すまん。有無を言わずに連れてっちゃってくれ」

「了解です。ほら、みんな並んで並んで」

そうして、愛のクラスで少しだけ詰まったものの、無事に全クラスをギルドへと送り届け終える。

ギルド周辺はまだ人混みであふれていたが、ちゃんと列はスムー

ズに進んでいたもので、子供たちもモンスターの氾濫までにはシエルトーに入れるだろう。

最後に残ったのは、校長や教頭などのクラスを担当していない先生たち。

彼らの元へと向かうと、丸顔で若干赤ら顔の校長先生が、俺へと深々と頭を下げてきた。

「ありがとうございます、北川さん。助かりました」

「いえいえ、じゃあ、先生たちも送りますね」

「ああ、いえ、私たちは結構です」

「え？」

首を傾げる俺に、校長先生は言う。

「これから子供を迎えに来る親御さんもくるかもしれませんが、すでにギルドへ避難していることを伝える人も必要でしょうか？」

「それは……でも看板とかで良いんじゃない？」

「でしょうね。でもモンスターが溢れ出したら、移動も大変になるでしょう？ この学校に配備されたカードでも、少数の親御さんたちを守ってギルドに連れていくことぐらいはできると思っていますね」

そう言っつて校長先生は数枚のカードを見せてきた。

Dランクのウインチェスターハウスに、Cランクのデュラハン、アマルテイヤ、それと金剛力士が二枚……。

なるほど、これが小学校規模の避難所に配備されるカード。……

うん、悪くない。

門神である金剛力士は、阿吽像として寺院の門に安置されることが多いからか、同じ金剛力士同士での二体一対スキルを持つ。

そのスキル効果は、正面からの攻撃に対する不死と、入口以外からの侵入者の防止。

ウィンチエスターハウスやマヨヒガなどの家型の異空間型カードと併せて運用することで、グッと安全性が増す防衛特化型のカードである。

ウィンチエスターハウスは、Dランクではあるがその收容人数に関してはCランクのマヨヒガを大きく上回る。

その客室数は、デフォルトで百部屋。一応一人部屋ではあるが、子供たちなら複数人を詰め込むことも可能だろうし、食堂や風呂などを潰せば部屋数はさらに増やせる。すべての子供たちを詰め込むことも可能だろう。

その上でアマルティアの気配遮断結界で存在を隠し、入口に金剛力士を配備して侵入経路を限定、守りを固める……。

これなら、フェイズ1までなら鉄壁だろうし、フェイズ2以降もある程度の安全性を確保できるだろう。

移動に関しても、アマルティアの気配遮断結界があれば比較的完全に移動できるはず。

さすがにCランクがあふれ出したら厳しいだろうが、Dランクまでなら……。

「……………わかりました。でも、モンスターが溢れ出したら、その時点で即ギルドへ移動してください」

「わかってます。重ね重ね、この度はありがとうございました」

俺はそう言って深々と頭を下げる校長たちに見送られながら、マイラに乗って飛び立った。

どうか、あの人たちが無事にギルドにたどり着けますように、と祈りながら……。

第二話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】某サイトにおけるマイナススキルの評価基準

うんこっこ：極めて重いデメリットに加えて、解除条件が判明していない。カードの価値をうんこっこにしてしまう恐怖のスキル。その効果は、もはやうんこっことしか表現のしようがない。トレードなどで騙されてこのスキルを持つカードを掴まされた場合は、相手をぶっ殺しても許されるレベル。というか、殺した。

A：通常の使用が出来なくなるほどの極めて重いデメリットがある。実質的な戦力外通告。カードの価値を大きく損なうレベル。

B：大きなデメリットがある。蘇生用カードとしての使用が視野に入ってくる。ドロップした時に持っている、かなりガツカリするレベル。

C：デメリットのみ。ドロップした時に持っているときちょっと舌打ちするレベル。

D：デメリットがメリットを上回っている。ここら辺から名実ともにマイナススキル認定されてくるレベル。

E：メリットとデメリットが同じくらい。使い方次第。値段への影響はほとんど気にしなくて良いレベル。

F：メリットがデメリットを上回っている。多少癖はあるが、あっても全然気にならない、むしろちょっと嬉しいレベル。

第三話 人生で最も長い一日

小学校を飛び立った俺は、いつ回収の連絡が来てもすぐに迎えに行けるよう、線路沿いに飛んで転移できる場所を増やすことにした。立川や八王子の周辺は、転移からすぐに飛んでいけるので、東京方面へと向かって中央線沿いに進んでいく。

これは、親父の職場にも近づくことになるので、一石二鳥であった。

そうして、三鷹辺りまで到達したところで、さっそく家族の回収を終えた班が現れた。

それは、やはりというかなんというか、小野率いる八王子駅班であった。

八王子駅班は、高校のある立川に近いこともあって、他の駅と比べても生徒数は多めである。にもかかわらず、より近くて生徒数も少ない日野などの班よりも早いのは大したものだった。きつと小野がケツを叩いて急がせたのだろう。

すぐに八王子駅に転移すると、大分避難も進んだようで、地面が見えないほどだった群衆は、目に見えて減っていた。それでもまだ結構な人が残っていたが、特に混乱している様子は見られない。

そんな避難する人々の列から少し離れたところで、小野達がこちらへ手を振っているのが見えた。

「ヨッ、さすがだな、お前の班が一番目だぞ」
「へっ、当然」

ドヤ顔で胸を張る小野の後ろには、リュックサック一つ背負っただけの生徒の家族たちの姿が見えた。

きつと、半ば脅すようにして、ろくに準備する間も与えずに、緊急時のバックアップだけ掴ませて避難させてきたのだらう。……それで、正解だ。

そこへ、四之宮さんが小走りに駆け寄ってくる。

「マロ、ちよつと良い？」

「四之宮さん。どうしたの？」

「うん……静歌のことなんだけど」

俺は、そこで避難してきた人たちの中に牛倉さんの姿が見えないことに気づいた。

……そうか、ギルドの方に行ったのか。まあ、普通に考えてそっちの方が安全だろうしな。

こちらが迎えに行くまでにタイムラグもあつた。残念だが、仕方ないか……。

そう考えていると。

「あのね、ウチが静歌の家に行ったら、誰もいなくて……」

四之宮さんが、妙に深刻そうな顔で言った。

「……？ 普通にギルドにすでに避難してたんじゃない？」

「ウチも最初はそう思ったんだけど、念のため玄関開けてみたら鍵がかかってなくて、中にコレが……」

そう言いながら、四之宮さんがポケットから取り出したものを見て、俺の顔も思わず険しくなる。

それは、星母の会のロザリオだった。

「これは……」

「それと、これも……」

続いて渡されたのは、少しだけ厚みのある封筒。中を覗くと、そこには俺が四之宮さんを通じて渡すように頼んだDランクカードが入っていた。

一緒に入っていたメモを見ると「せつかくの厚意なのに、ごめんなさい。このカードは私には必要ないのでお返しします」と、書いてあった。

すっかりとした楷書体の文字。習字をやっているためか少しばかり女の子らしくないこの達筆は、間違いなく牛倉さんの筆跡だった。

「静歌が星母の会に入信してたなんて初めて知ったし、なんで言ってくれなかったんだろうと思って……」

「……………」

クダンの予言の発表以来、星母の会は急速にその規模を拡大していた。

それは、政府に先駆けて予言の発表を行ったことも大きかったが、最大の理由は彼らの持つシエルターと防衛力にあった。

ギルドのシエルターも、すべての人を収容できるわけではない。この八王子にしても、人口50万人に対して、シエルターの最大収容人数はわずか10万人。一時的に詰め込むだけならその三倍くらいは入れられるかもしれないが、それでもすべての住人を受け入れられるわけではない。

椅子取りゲームに敗れた場合、自宅かギルド以外の避難所で自衛隊の救助を待つことになるわけだが、誰もがシエルター付きの家に住んでいるわけでもなく、ギルド以外の避難所は防衛力に不安がある。

そこで、人々が眼を付けたのが、常日頃から星母の会が宣伝していた信者用の巨大シエルターだった。

星母の会は、かねてからアンゴルモアに備えて巨大シエルターを建設しており、最大百万人を収容できるシエルターを全国にいくつも所有していることを宣伝していた。

防衛力に関しても会が所有するカードをHP上で広く公開しており、軍勢召喚持ちや異界クラスのカードも豊富で、異空間型カードも含めればその収容力は、ギルドのシエルターにも匹敵すると言われていた。

ギルドも異空間型カードくらい所有しているだろうが、どのカードをどれくらい持っているかは公開していないため、そのキャパシティはどうしても不透明となる。

そのため保険的に星母の会へと入信するケースが増えていた。

だが、誰でも入れるギルドのシエルターに対し、星母の会のシエルターは当然信者のみであり、また信仰の度合いによって中での待遇も異なる。

信仰の度合い……すなわち星母の会への貢献度である。

貢献度は、寄進という形である程度は金で買えるのだが、一定以上のランクに上がるためにはお金以外の方法で会へと貢献しなくてはならない。

その中でもっとも貢献度が高いとされているのが、家族の教化であった。

最近では、家も土地も全財産を星母の会に寄付した挙句、家族すらも会へと売り飛ばす――というと些か悪意的すぎる表現かもしれないが――熱心すぎる信者が問題視されており、ネット上では「ついにカルト宗教が本性をあらわしてきた！」と話題になっていた。

牛倉さんの家も、そうやって一家ごと入信してしまったのだろうか。

星母の会シエルターなら、自宅のシエルターに籠るよりよほど安全ではあるだろうが……。

それにしても親友である四之宮さんにすら何も言わないなんて……。そんな思いがぐるぐると頭の中をめぐり、暗い顔をする四之宮さんに何の言葉も掛けてやれないでいると……。

「……おい、いつになったら避難するんだ!? こっちは取るモノも取らずに急かされてきたんだぞ!」

小野の後ろの方にいた偉そうなおっさんが、そう金切声を上げた。それにかなりイラツとしたものの、実際のんびりとしている時間もないのは確かだった。

仕方ない……。かなり気になるが、話はあとだ。

「ごめん、とりあえず先に送るよ。詳しい話はそのあとで」
「うん……」

ひとまず、小野たち八王子班を学校へとハーメルンの笛で送り届けると、四之宮さんから続きを聞く前に今度は一条さんら高尾班から連絡が来た。

高尾班を送り届けた後は、日野。日野の次は国分寺と、次から次へとやってくる連絡に、次第に俺の頭は作業に没頭していつてしまったのだった。

「なんとか間に合ったか……」

なんとかモンスターが地上へ溢れ出してくる前に学校へ戻ってき

た俺は、足に伝わる地面の感覚にホッと一息ついた。

すべての班員とその家族を回収し終わり、ギルドへの避難を望む生徒たちも今しがた送り届けてきた。

まだまだやることは残っているものの、少しだけ肩の荷が降りた感じだ。

だが、一休みする前に……。

『イライザ、マイラ。悪いが、もうひとつ飛びしてくれ』

最後の大事な仕事。親父の回収のために、イライザたちを親父の職場へと向かわせる。

『イエス、マスター』

『了解であります』

さて、あとは……そうだ、四之宮さんに牛倉さんのことを聞かないとな。

「北川副部長、お疲れ様です！」

イライザたちを見送りながらそんなようなことを考えていると、後ろから声を掛けられた。

振り返ると、そこには一年のリボンを着けた女子生徒が二人。

体育会系なのだろうか？ 二人ともやけにキツチリしているといつか、なぜか直立姿勢を取って、相当緊張した様子だった。

「えっと……？」

「十七夜月部長より、生徒の護送が一段落したら、部室へと来てほしいとのことですよ！」

マジか。

四之宮さんに話を聞きに行こうと思ってたのに……どうするかな。

獵犬使いの事件では、終始星母の会の影がチラついてた。

別に、あの事件の黒幕が星母の会だという証拠があるわけでもないし、客観的に見て被害者側は星母の会の方だ。

怪しく思う理由も、単にいろいろと星母の会に都合の良い終わり方だったからというだけだが……それはそれとして、あそこはかなりきな臭い。

少なくとも、知人が入信しようとしたら絶対に止めるくらいには、不信感を抱いていた。

今ならまだ四之宮さんが説得すれば、牛倉さんだけでも連れ戻せるかもしれない。

だが、アンナの用件も単なる連絡事項ではないだろうし、俺たち全員の今後に関わる話のはず。

フェイズ3のこと。今後の対策。俺の秘密と保有戦力について。そして……師匠が国のスパイだったこと。

どれも、俺自身で参加しなくてはならない議題ばかりだ。

しかし、牛倉さんのことも気になる……。

その時、脳裏に閃きが走った。

そうだ！　ここは、四之宮さんの方には、オードリーに行ってもらうってのはどうだ？

彼女は秘書スキル持ちだ。四之宮さんから俺が聞くより詳細に聞き出して、一言一句間違えずに後で伝えてくれることだろう。

うん、そうしよう。

っと、その前に彼女たちにお礼を言っておかなくちゃな。

「わかった。ありがとう」

「いえ！　任務ご苦労様でした！」

俺の簡単な礼に、頬を紅潮させて走り去っていく後輩女子たち。
……やっぱ、おかしいぞ。任務とか言ってるし。この危機的状況に酔ってるんだらうか？

内心で首を傾げながらもオードリーを四之宮さんの元へ向かわせ、俺自身は部室へと向かう。

その道中でも、やはり妙にかしこまった態度の生徒たちとすれ違
う。……さきほどの後輩女子たちと同じだ。

昇格試験明けも道を開ける生徒や頭を下げてくる生徒がいたが、それがさらに深まった感じである。彼らが俺に向ける視線には、単なる上下関係以上の畏怖が籠っているような気がした。

そんな彼らを、彼らの家族らしき大人たちが異様な目で見ているのも、この雰囲気の異常さを証明していた。

こりやまたアンナがなんかしたな……と思っていると、部室へと到着した。

部室の前には、一般生徒やその家族らしい人たちの人だかりができていて、それを新入部員らしき生徒たちが扉の前に立って通せんぼしているところだった。

「あつ、北川副部長！ お疲れ様です！」

俺の姿に気づいた新入部員たちが、俺に一礼して扉への道を開ける。

それを見た一般生徒たちの家族らしいおばさんが、俺が冒険者部の人間だと気づいたのか近くに寄ってきて――「待った、母さん！」――俺に声を掛ける前に息子らしき生徒に制止された。

「なによ、あの子冒険者部の人なんでしょ？ なら貴方もいれても
らえるように頼まない」と「いいから！」

母親を押しとどめたその男子生徒は、俺の邪魔にならないように道を開けると、ペコリと頭を下げてきた。

それを見た他の生徒の家族たちも、何かを察したのか声を掛けてくることもなく、遠巻きに見るだけに留めるようだった。

俺は、その一連の流れに冷や汗を浮かべつつ、無言で一礼し、逃げないように部室へと入り。

「アンナ、この状況は一体なんだよ!」

開口一番そう言った。

お疲れ様です、と言おうとしていたのだろうアンナは、口を「お」の形にしたままキョトンと首を傾げる。

そんな彼女に代わり、師匠が問いかけてきた。

「この状況って? どうしたの、マロ?」

「どうもどうも……」

俺は嘆息し、言った。

「すれ違う生徒たちが皆おかしい態度取ってくるんだよ……まるで社長か軍の上官に対するみたいにあ」

『ああ……』

俺の言葉に、みんなも納得したように頷く。

「それはウチらも一緒ッスよ」

「さすがにマロほどじゃないだろうけどね」

「というか、それはほぼ先輩のせいだぞ」

「俺……?」

思わず問い返すと、織部だけでなく三人とも頷く。

「まあ、冷静に考えてみてください。アンゴルモアが始まって不安な中、みんなの前に立って不安を鎮め、安全な場所を用意し、生徒たちの家族を回収する。そりゃあ、誰だって『すごい！』『この人がいれば大丈夫だ！』って思っつてもんです」

「うむ。加えて、小学校の子供たちをギルドに送り届けた件も徐々に広まりつつあるしな」

「見ず知らずの他人を、しかも子供たちを率先して助けるといっのは、見栄えも良いしねえ」

「ああ……なるほどね」

俺は納得すると、脱力して椅子へと腰かけた。

確かに、改めて他人から聞けば、我ながら大した働きぶりだった。その99%はハーメルンの笛の効果とはいえ、俺が生徒たちやその家族たちを助けたのはれっきとした事実。

今まで迷宮に潜ったこともなく、初めて転移を味わう生徒らやその家族は、転移という現象そのものを俺の力と錯覚したかもしれない。

そりゃあ畏怖や尊敬の一つや二つ抱くし、同時に依存するのも当然だ。

「……ところで、お袋と愛は？」

「先輩のご家族なら、小夜の家族と一緒に、あちらに……」

そう言っつてアンナが部屋の片隅へと視線を向けると、そこには一つの古びた壺がポツンと置かれていた。

これは……壺中之天か。

壺中之天は、一言で言えば中国版マヨヒガである。外観こそただの壺だが、その内部は立派な建物となっており、核となる老人が美

美味しい料理やお酒で持て成してくれるというカードである。

今頃、中華料理に舌鼓を打ちながら、両家族の交流を深めているところだろう。

「このままだと、冒険者部の中枢メンバーの家族ってことで色々と要求してくる輩も出てくるかもしれないで、先輩と小夜の家は隔離させてもらいました。幸い、先輩のご家族が小型の異空間型カードをお持ちだったので、そちらに」

さすがアンナ、やることにそつがない。

俺は、彼女の気配りに感謝した。

「ところで、こちらからも一つ質問が……」

「……なんだ？」

アンナは、チラリと師匠を見て……。

「神無月先輩とのお話ってなんだったんですか？ 一体どこに行っていたんです？」

……ふう。やはりその話になるか。

さて、どこから話したものか。

俺が言いよんどんでいると、師匠が言った。

「それについては、僕から説明するよ」

「……どうぞ」

アンナは無表情に頷き、先を促す。

「うん。まず、察しがついているように、僕は国からの依頼でこの

学校に転校してきた……調査員だ」
『……………』

その師匠の言葉に、しかしアンナも織部も特に反応を示さなかった。

やはり、二人とも察していたらしい。

特に最近のアンナの態度は露骨だったからな……俺が実技試験に通って冒険者部が師匠無しでも学校の迷宮に入れるようになってからは、完全に排除に入っていた。

二人の冷めた反応に、師匠は苦笑いを浮かべながら続ける。

「目的は、迷宮消滅の鍵を握っているであろうマロの調査だ」

「……それで、何かわかつたんスか？」

「それについては、これからマロに聞こうと思う」

そう言って、師匠は俺に視線を向けてきた。続いて、後輩二人もこちらを見る。

俺は小さく嘆息すると、答えた。

「ああ。迷宮を消滅させる方法を俺は知っている」

『……………ッ！？』

全員に衝撃が走るのがわかった。

知っているかもしれない、とは思っていても実際に俺の口から断言されるとやはり驚きだったのだろう。

「マロ！ ということは、記憶は完全に取り戻したのか！」

「ああ……。どうやら一度正規の方法で入れば、記憶の改竄は解除して貰えるらしい」

「ちょ、ちょっと待ってください！ 記憶の改竄！？ 一体なんの

話なんですか!？」

織部が、混乱もあからさまにひっくり返った声で問いかけてくる。

「落ち着いてくれ。順番に話していくから」

そうして俺は、時系列順にすべてを話していった。

猟犬使いに襲われた際に、苦し紛れに遭難のマジックカードを使ったこと。

結果、俺は迷宮のコアルームに不正侵入してしまったこと。

コアルームに入ることができたのは、蓮華が廃棄カードキーと呼ばれる特殊なカードだったからであったこと。

コアルームで、ライカンスロープのカードに触れた結果、俺はそのカードを手に入れ、直後迷宮が消滅したこと。

その後、俺の記憶は改竄され、コアルームのことも、侵入の方法も忘れてしまったこと……。

「すべてを思い出したのは、さつき師匠と迷宮に行つて、最下層で遭難のカードを使った時のことだ」

そこで、俺は一度話すのを止めた。

みんなに情報の整理の時間を与えるためだ。

それからたつぷり一分は誰も言葉を発しなかったが、やがて師匠がポツリと問いかけた。

「マロが、さっきの迷宮を消滅させなかったのは、どうして?」

「それは……」

俺は、これを話して良いものか迷ったが、結局は言うことにした。他の皆が、どういふ判断を下すか知りたかったからだ。

「それは、迷宮が人々の不幸を消化するための装置だったからだ」
「それはッ!? ど、どういう……?」

動揺する師匠へ、俺はコアルームで見た光景を話した。

カードの浮かんだシャボン玉。そのシャボン玉に浮かんだ『不幸な事故』の光景。そして、蓮華から聞いた迷宮のモンスターと不幸の関係を……。

それを聞いた皆は再び難しい顔で黙りこみ……。

「いろいろと聞きたいことはあるんですが、まずはこれだけ。この学校の迷宮を、その完全鎮静化状態にはできますか?」

「いや、俺が持つカードキーのクリアランスレベルはDランク迷宮までだ。Cランク以上の迷宮は消滅も完全沈静化もできない」

「そうツスカ……」

そう言っただけで黙り込むアンナに対し、織部が明るい声で言う。

「だが、これは朗報だぞ! Dランク以下の迷宮を消滅、あるいは完全鎮静化させられるだけでも迷宮の脅威は大きく減る! このアングルモアをフェイズ3のまま乗り切れれば、希望はまだある!」

もはや浮かれていると言っても良い様子で捲し立てる織部だったが、それに対しアンナはフラットな表情で首を振る。

「それはどうだろうね、小夜。……神無月さん、このことはすでに国には?」

「いや……報告しようとしたが連絡がつかなかった」

「でしようね……」

そのアンナの言葉に、織部が睨むように彼女を見る。

「どういうことだ、アンナ？ 何か知ってるのか？」

「何も知らないよ。ただ、アングルモアが始まってもう数時間は経つていうのに、自衛隊の姿を見ないのはなぜかな、って」

「それは……」

織部は絶句し、額に汗を浮かべて考え込み始めた。

「そうだ、確かにおかしい……なぜ、まだ自衛隊が出動していないんだ？ すでにDランク以上の迷宮の封鎖や、住民たちの避難誘導を行ってなければおかしい……しかも、ここは基地のある立川だぞ！」

……これが数分やその程度の話ならともかく、一時間以上の遅れというのは、極めて致命的で重大なトラブルが起こっていることを意味していた。

これが、この立川周辺の話なら良い。だが、もしこれが全国規模の話だとすれば、それはトラブルではなく、あるいは……。

「……これは、見捨てられましたかね？」

ポツリとアンナが呟いた。

「馬鹿な！」

「本当にそう思う？ 頭の良い小夜なら、すでにフェイズ3とわかったその瞬間に、その可能性は頭を過つてたんじゃないの？」

「……！」

織部は、反論しようとしたのか唇を震わせたが、結局その口から

言葉が出てくることはなかった。

確かに、迷宮消滅の方法も、完全鎮静化のことも知らない政府が、フェイズ3のことを知った段階で、一般国民たちをすべて見捨ててもおかしくはなかった。

各避難所に配られたCランクカードも、所詮はできる限りフェイズ1を長引かせるための方策だ。

フェイズ2に進んだ時点で、ギルド以外の避難所は棺桶へと変わる。

すでにフェイズ3ともなれば、なおさらのこと。

だが……。

「いや……だとしても僕からの連絡すら受け取らないのはおかしい。これは直通回線だ。どんなに忙しくても一言二言聞く程度の余裕はあるはず」

俺は、師匠の言葉に内心で頷いた。

そうだ。それが、おかしい。

仮にすべてを投げ出して逃げたとしても、迷宮消滅の情報だけは知りたいはず。ならば、師匠の回線だけは生かしておくはずなのだ。なのに、それにすら出ないということは、やはり自衛隊そのものに重大なトラブルが起こったことを意味する。

「なににせよ、今は様子見ツスね……自衛隊が無事機能していることを確認してから、そういうことは考えましょう。アンゴルモアの終結や、次のアンゴルモアの阻止を考えるのは、ひとまずこの時を生き残ってからで良いでしょう」

「それは……そうだな。まずは、生き残ってこそか」

「だな」

織部は、何か言いたげに口を開きかけたが、すぐに自分を納得さ

せるように頷いた。

俺も、それに続く。

なぜ迷宮は生まれたのか。アングルモアとは何なのか。迷宮を生み出した存在は、善なのか悪なのか。カードキーとは。蓮華は一体何者なのか。

疑問は尽きないが、それを蓮華に聞かないのは、結局それが今を生き残ることに直接関係ないからだ。

彼女が、自分からそれを説明しないのが、その証明。

迷宮消滅の方法と、完全鎮静化。最低限この二つだけあれば、生き抜ける目があるから、それだけは真っ先に教えたのだろう。

スマホの作り方や仕組みを完全に理解していなくとも、使い方が知っていれば問題ないように……迷宮の消し方と完全鎮静化の方法だけ、今は理解していれば良い。

ならば、今後の世界や、世界の真実やらを知るのは、状況が落ち着いてからで良いだろう。

「でも、その前に……一つはつきりさせなくてはならないことがあります」

そう前置きし、アンナは師匠へとゾツとするほど冷たい眼を向けた。

王や女王が敵国の者を見るように厳しく、それでいて昆虫のように無機質な眼差し……。

場の空気が急速に張り詰めていく中、彼女は言った。

「結論から聞きますが、神無月さんはこれからどうしますか？」

第三話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】ランクごとの先天スキル数の目安

A：5個以上。

B：4～5個。

C：3～4個。

D：2～3個。

E：1～2個。

F：1個。

ランクが上がるにつれ、下位のランクのスキル効果を内包するものが多くなるため、実際のスキル数以上に性能差が開いていく傾向にある。

第四話 人生で最も長い一日

アンナの言い方は、疑問形でありながら、まるで断罪するかのようであった。

まるで空気が電気を帯びているかのような、ピリついた雰囲気。それに、俺は内心で嘆息した。

さすがにこのまま、なあなあで済ますわけにはいかないか……。

もはやこうなれば師匠がスパイを続ける意味もないが、だからといってスパイだったという過去が消えるわけではない。

リーダーであるアンナとしては、決して見過ごせぬ点だろう。織部もすでに、身内判定を完全に解いた表情で師匠を見ていた。

そんな二人の顔を見た師匠は一つ頷き、言った。

「そうだね……さすがに、国のスパイであることがバレた以上、このままここにいられないことは理解してるよ」
「別に出てく必要は無いだろ」

俺は、咄嗟にそう言っていた。

アンナがピクリとその細い眉を動かす。

「……国に色々と情報を流されるのは困るけど、それさえ止めてくれたら、貴重な戦力だし、このまま残ってくれると嬉しいんだが」

スパイされていた身で我ながらお人よしだとは思うが、師匠がリンクを教えてくれていなければ、今の俺はいない。

独学では、現時点でパーフェクトリンクを習得できていなかった
だろうし、下手したら獵犬使いの襲撃の時に普通に死んでいた可能
性もある。

それらを抜きにしたって、俺よりもリンクの技量が高く万能型の
師匠は、戦力として価値がある。

シークレットリンクについても、自衛隊が頼りにならないとわか
った今、秘匿し続ける義理もないはず。

というか、俺の秘密を探っていた分、絶対に吐いてもらう。

特に、ピーピングリンクとテレパスの応用については今後の生命
線となり得る技術だからな。

そんな強い決意を秘めた俺の言葉に、アンナは少し考え込むよう
な素振りを見せ……。

「ふむ……ウチとしても、他の方々が良いのなら、残ってもらえる
と助かりますが。もちろん、スパイ行為は止めた上で……っすけど。
小夜は？」

「……ふう。スパイされていた先輩がそれで良いと言うのだから、
我から言うことはないな」

俺とアンナが、師匠の残留を賛成した事で、織部も嘆息しつつ頷
いた。

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、やっぱり出ていくよ。スパ
イがいるとみんなも落ち着かないだろうしね」

「そっすか。残念です」

アンナが、さして残念そうじゃない感じで頷く。

いや、気持ちはわかるが、もうちょい本腰入れて引き留めてくれ
……。

スパイだったとはいえ、シークレットリンクの唯一の情報源なん

だから。

俺が、師匠を引き留めようと口を開きかけた時、わずかに早く師匠が言った。

「……ただ、その代わりと言ってはなんだけど、僕の妹を受け入れてもらって良いかな？」

「妹……？」

アンナが、コテンと首を傾げる。

俺も内心で首を傾げた。

師匠に妹がいたなんて初耳である。

「うん。四ツ星ではないけれど、それだけの実力を持つことは僕が保証するよ」

俺は、そこでピンときた。

おいおい、まさか……！

「もしかして……小鳥ちゃんのこと？」

「うん」

俺たちのやり取りを聞いたアンナが問いかけてくる。

「もしかして、先輩会った事あるんですか？」

「あゝ、一応。師匠の……双子の妹さんだよ」

「……なるほど」

アンナが、師匠へと問いかける。

「一応確認させてもらいますが、その妹さんとやらも国からのスパ

「いじゃないツスよね？」

「ああ、それは安心してほしい。妹は、国とは完全に無関係だ。今後スパイになることもない。断言する」

「……『そういうこと』なら、ウチとしては構いません。小夜は？」

「……ああ、我も、『そういうこと』なら構わない」

二人は、どこか呆れたように頷いた。

……すでに二人も察しているようだが、小鳥ちゃんなんて人物は存在しない。

その正体は、性転換薬ことテイレシアースの薬を服用した師匠である。

師匠は、性別を変えてこれまでの身元を捨て去ることで、国との縁を切ると暗に言っているのだ。

……と二人はきつと思っているのだろうが、実は違う。

師匠は、この機会に自分の性癖を満たそうとしているだけである。

実は、師匠には、隠れた性癖があった。

性転換願望。女体化して着飾ったり……女体の神秘を探るという性癖が。

言っておくが、師匠の精神的な性別は男だし、性的対象も女だ。

別に、悲しい過去があつて、それで心が歪んでしまったなんてこともない。

百パーセント性癖。師匠は、単に女になった自分の姿が好きなだけなのだ。

一種のナルシズムとでも言うのだろうか。師匠曰く、理想の異性が女体化した自分だっただけ、とのこと。

俺がそれを知ったのは、リンクの修行をしていた頃の話で、休憩

中に蓮華とTSモノのギャグ漫画を読んでいたら、突然暴露されたのだ。

以降、師匠は俺と二人きりの時は、時々テイレシアースの薬を飲んでくるようになった。

まあ、性癖については人それぞれである。

俺たちは、それを生暖かい目で見守ることにした。

ちなみに、俺が以前師匠に渡した薬もテイレシアースの薬である。師匠は、すでに完全性転換分の薬を集め終えているのだが、それはそれとして遊ぶ分のテイレシアースの薬を常に必要としているので、トレードしたというわけだ。

高校を卒業したらこれまでの姿を捨てて、戸籍も書き換えるつもりとは聞いていたが、この機会に計画を早めることにしたらしい。

なお、師匠のお姉さんは当然この性癖を知っており、それを心底気持ち悪いと思っているらしく、二人の仲はかなりドライである。

「ああ、それと、妹のデツキ構成は僕と似通ってるけど、偶然だから気にしないで」

平然とそう言う師匠に、後輩女子二人も呆れたように嘆息する。

「ああ、はい、そうツスカ。わかりました」

「……仮に同じ容姿で同名の名づけをしたカードがあっても気にしないことにするよ」

開き直った変態はつえーな、とそれを眺めていると……。

「ッ………!?!?」

「どうかしましたか、先輩?」

微かに息を漏らし、顔色を変えた俺に、アンナが目敏く気づく。

「……迷宮からモンスターが出てき始めた」

マイラの背に乗るイライザの眼からは、ダンジョンマートを破壊しながら路上に溢れだすモンスターたちの姿が映っていた。

幸い、人々も粗方近くの避難所や自宅の地下に避難済みなのか、人の姿は路上に見えないが……。

その時、ちょうどマイラの霊格再帰が解けた。

ってことは、アングルモアが始まって約四時間経ったってことが、予定よりもちよつとモンスターが溢れ出すのが早い。

空から見渡す限り、まだそんなにモンスターが溢れてる様子は見られないから、たぶんこの迷宮が早かっただけなのだろうが……。

「そうですか……モンスターが溢れ出したなら、CランクやBランクが地上へ出てくるのもそう遠くなさそうですね」

いくら避難所に避難していようと、そこに配備されているカードは精々がCランク数枚とDランクがいくらか。Cランクが地上に溢れ出したら到底抵抗できるものではないし、Bランクは言うまでもない。

避難している人たちの中に三ツ星やプロが混じっていれば、多少は生存率も上がるだろうが……。

「……モンスターの氾濫が始まった以上、長々と会議をしている時間ありませんか。せいぜい後一つや二つ程度ですが、何かありますか？」

そう言って、アンナは意味ありげに俺を見てきた。

……そうだな、言うならこのタイミングしかないか。

「実は、みんなに秘密にしていたことがある」

……といつても、もはや知らないのは織部くらいだが。

アンナには自分で話したし、師匠は自力で探り当てたからな。

そう思いながら師匠をチラリと見ると、コクリと頷き返してきた。

「……そうだね。これ以上は、スパイだった僕はここにいない方が
良いだろう。それじゃあ、妹が到着したらよろしく頼むよ」

そう言つて、師匠は部屋を出ていった。

いや、そういうつもりで見たんじゃないんだが……まあ、いいや。
ここにいられるとややこしいのは事実だ。

俺は気を取り直すと、主に織部へと向けて俺の秘密を話した。

——蓮華の持つ、運命操作の能力について。ガーネットの真
の能力。それを使って、宝籤カードを使ってBランクカードを得て、
アングルモアに向けて準備を整えてきたこと。そして、アンナにだ
けは事前に話して、ガーネットの裏での買い取りを協力して貰って
きたこと。

「……………」

織部はそれを腕組して黙って聞いていたが、途中から指で二の腕
を叩き、あからさまにイライラとし出した。

やがてすべてを聞き終わると……。

「いろいろと聞きたいことはあるが……なぜアンナにだけ話したん
だ？」

「それは……正直、師匠のことを内心では疑っていたからだ。だが、
それを認めたくはなかった……だから、だな」

「ふん……」

アンナと小夜だけに話せば、師匠にだけ話さないことになる……。それは、内心では師匠をスパイと断定したも同然となる。俺は、それを精神的に避けたのだ。

故に、リーダーであり、ガーネットを得るためにどうしても必要となるアンナにだけ話すことにしたのだ。

まあ、結局師匠はスパイで、こうして織部にだけ不義理をする形となってしまうのだが……。

「つまり、知らなかったのは私だけってことですか、そーですか」

「うわー、めっちゃ露骨に拗ねてる……」。

いつもの中二口調を投げ捨て、普通の女の子口調になるくらい、思いつき織部はわかりやすく拗ねていた。

彼女には申し訳ないが、ちょっとかわいいな……と思ってると。

「てゆーか、先輩の理屈はわかるけど、アンナはさあ、私に話せたんじゃない？」

「えっ!？」

突然矛先を向けられ、アンナが動揺する。

「先輩は自分の師匠だからスパイと認めがたかったんだろうけどさあ、アンナは神無月先輩のこと疑ってたでしょ？ ぶっちゃけ私も怪しいと思ってたし、アンナも当然そうだったんでしょ？ じゃあ、裏ではこっそり話しても良かったんじゃない？ そうでしょ？」

「えーっと、それはあゝ……ホラ、やっぱり人の秘密を勝手に話すのは問題だし……」

「ふーん、ほー、へえ、なるほど……どーだか!！」

部屋に気まずい沈黙が落ちる。

織部はむっつりと黙り込み、俺とアンナは冷や汗を浮かべながら何も言えなかった。

無言の室内に、織部が机を指で叩く音だけが響いている……。

「……先輩」

「はい！」

なぜか敬語で答えてしまう俺。

織部は、まるで刑事のように鋭い目で、しかしどこか不安そうに俺へ問いかけてくる。

「アンナに話したのは、アンナがリーダーで、ガーネットを手に入れるために必要だったから……だけなんですよね？」

「あ、ああ。そうだ」

「二人の間に、他に秘密はもうありませんね？」

「ああ、ない。……あ！」

「……なんです？ 他にも何か秘密が？」

「あー、いや、アンナとの秘密というか……最悪の場合、アンナの親父さんから、娘を連れて逃げるようになって避難所を一つ任される」

あまり言い触らさないようにしてほしいとは言われていたが、織部には言っても構わないだろう。

「……ああ、十七夜月のおじさんとあった時の話ですか。なるほど……おじさんのやりそうなことです」

「そ、そうだ。あとはもう、ホントそれだけ」

「ふうん……一応聞きますが、先輩とアンナだけの最後の逃げ場じ

やないですよ？ それ、私……と家族も連れて行ってもらえるんですよ？」

「ああ、それはもちろんだ。約束する」

俺がまっすぐ織部を見つめて断言すると、彼女はようやく納得したように頷き。

「……ま、そういうことなら我から言うことはない。軽々に言える秘密でないのも確かだしな」

いつもの口調に戻ってくれた。

俺もアンナも、ホッと胸を撫でおろす。

「だが……次からは、我だけ仲間外れというのは止めてくれ。傷つく……」

「わかった約束する」

「うん。これからはもうあんまり隠すようなこともないしね」

……ふう、しかしこれでなんだか肩の重荷が全部降りた気分だ。色々あったが、ちゃんと秘密を話せてよかった。

「それで、宝籤のカードで出したBランクで、アンゴルモア用のカードを買ったと言っていたが、それは何を買ったんだ？」

「ああ、これだ」

俺はヘスペリデスのカードを取りだすと彼女へと見せた。

「……ほう、異界クラスの異空間型カードか。なるほど、良いカードだ。これなら内部の容量も問題ないし、食料問題も解決する。侵入者は黄金のリングへと向かっていくから住民の安全の確保も簡単

だし、アングルモア向けのカードだな」

「だろ？」

「異界クラスのカードがあるならば、そろそろ生徒たちを避難させた方が良くはないか？ 今は縄張りの主の効果で弱いモンスターは近づいてこないが、いずれ強いモンスターが引き寄せられるわけだろう？」

「ああ、そうだな。その通りだ」

俺はそのままヘスペリデスを召喚しようとして、思いとどまった。待てよ……異空間型カードは、外部にカードを派遣したり、マスター自身が外部に出ている場合は、空間を隔離できず、誰でも出入り自由となってしまう。

今現在、親父を迎えに行くためにイライザたちを派遣している以上、ヘスペリデスの園を展開してもあまり意味がない。

それに、俺たち冒険者部員は、今後も外部での活動が多くなる可能性が高いだろう。

諸々の事情を考えるなら、ヘスペリデスの運用は、むしろ……。

「あのさ、ちょっとお袋に会いに行つて良いかな」

「うん？ ああ、そういうことツスか。了解ツス」

「なるほど、確かに我々が使うよりも、ずっと内部にいる人間が使った方が良さそうだな。先輩の家族なら信用もできるし」

二人は、俺が説明するまでもなく俺の意図を読んで頷いてくれた。こういう時、頭の回転が速い人間は話が早くて助かる。

「んじゃ、ちょっとお袋のところへ行つてくるわ」

「了解ツス」

部屋の片隅置かれた壺へと向かう。

壺に触れ、数秒ほど立つと入場の許可が出たようで、俺は中へ吸い込まれていった。

内部は伝承通り、中華風の豪華な建物となっており、奥からは美味しそうな料理の匂いが漂ってくる。

玄関先で待っていると、真っ白い髭を伸ばした仙人風の老人が出て迎えにやってきた。

「主のご家族の方ですか？ ようこそいらっしゃいました。どうぞこちらへ」

「ありがとうございます」

壺中之天の核らしき老人に案内され、お袋たちが待つ部屋へと向かう。

やがて部屋へと到着すると、そこではお袋たちと織部の家族たちが談笑していた。

祖父母らしき二組のご年配の夫婦が二組。織部の両親らしき夫妻と、おばらしき中年の女性が一人。織部の姉妹か従妹かはわからないが、大学生くらいの美人と中学生くらいの美少女が一人ずつ。

織部は、付き合いのある親族を全員連れてきたらしい。

「ホント、お宅の息子さんはご立派で羨ましいわあ。アンゴルモアに備えてこんな立派なカードまで用意してるなんて！」

「いえいえ、そんな……織部さんの方でも異空間型カードの用意はされていらしたんでしょう？」

「まあ、一応。ただ、娘の趣味なのか、薄気味悪くてあまり長居したいところではありませんでしたね。なんか幽霊でも出そうで……。それに比べて、ここは実に居心地が良い。料理もおいしいし、お酒もありますしね」

「それでも、ご家族のために異空間型カードを用意してくれるなんてお優しい娘さんじゃないですか」

「ハハハ。そうですね。家族想いで優しい、自慢の娘です」

「ウチの娘、家ではよく歌麿くんのことを話すんですよ。あれは間違いなく惚れてますね」

「まあ……！ ホントに!？」

「うわー……めっちゃ入り辛い話してる。勘弁してくれよ……」。

と俺が部屋の入口で立ち往生していると、子供たちのグループの方で話していた愛がこちらに気づいてしまった。

「あ、お兄ちゃん!」

その瞬間、全員の視線が俺へと集中する。

俺は、なぜか体育館でみんなの前で話した時以上の圧力を感じ、背中に汗を流した。

「どうぞー」

「あ、どうも」

大学生くらいのお姉さんが、お袋たちが話しているテーブルの、空いている椅子を引いてくれたので、仕方なくそちらへ座る。

近くで見ると、大学生くらいのお姉さんも、中学生くらいの娘も、顔立ちが織部に良く似ていた。違いはその胸元のポリウムで、二人はかなり豊満であった。……これは、従妹だな（確信）。

俺が席へとつくと、開口一番お袋が問いかけてくる。

「歌麿、お父さんは?」

「今、イライザとマイラを向かわせてる。そろそろ到着する頃だと思っ」

「……そう。あ、こちら織部さんのご家族」

「初めまして。北川歌麿と申します。娘さんには、いつも同じ部活

でお世話になっております」

「初めまして、小夜の父です。こちらこそ、いつも娘がお世話になって、ありがとうございます」

続いて、織部母、祖父母、そしてお姉さんと妹（まさかの姉妹だった……）と挨拶を交わす。

とりあえず社交辞令的やり取りを終えると、俺は本題へ入った。

「お袋、ちょっと良いかな」

首を傾げるお袋を通路へと連れ出すと、俺は言った。

「ちょっとお袋にお願いがあつてさ」

「なにかしら」

俺はヘスペリデスのカードを渡し、このカードがこの壺中之天よりも大規模な異空間型カードであること、そのマスターになってほしい旨を伝えた。

「ええ……？　ちょっと困るわよ。値段は知らないけど、これってすごく高いカードなんですよ？」

話を聞いたお袋は、当然のごとく困惑した。

「まあ、ぶつちやけクソ高い。それだけに信用できる人にしか預けられないんだよ」

「うーん、歌麿がそのまま使つてのは無理なの？　その方が色々安全じゃない？」

「マスターが外に出てたり、カードを外部に派遣している間は、空間の隔離ができなくなるんだよ。俺は今後も外部で活動する必要が

あるからさ」

「うーん……それも親としては止めて欲しいんだけど、もう私の言えることじゃないわね……わかった預かっておく」

「よろしく。使い方についてなんだけど……」

俺が、ヘスペリデスの具体的な運用方法について説明しようとしたその時。

『ピ……ガガッー！……ガガガッ！』

突然の異音。その発生源は……俺の腕に着いているカードギアだった。

なんだこれ……？

これが、こんな挙動をするのを見るのは初めてだ。

異空間型の中にいるから電波？ 的なモノが届きづらいのだろうか？ いや、でも今は空間隔離もされてないしな……。

「ごめん、ちよつと外に出てくる。とりあえずカードのマスター登録だけしておいて」

「あ、うん」

ひとまずヘスペリデスのカードだけは渡し、壺中之天の外へ出る。

すると……。

『……ろ！ 歌麿……！』

「親父！？」

いつになく切羽詰まった親父の声が聞こえてきた。

「親父！？ どうした！？ 何があった！？」

『――ブツッ！』

カードギアへと呼びかけるも、今度はうんともすんとも言わなくなってしまった。

「先輩、どうしました！？」

俺の様子を見て異変を悟ったアンナたちが駆け寄ってくる。

「わからん！ 親父になんかトラブルがあったらしい」

イライザたちは……池袋駅が見えたところか！

そこまで来たなら十分だ。適当なビルの屋上に降りてもらい、転移で迎えに来てもらう。

『ユウキ、オードリー！ 今すぐ俺のところへ来てくれ！』

リンクで別行動させていた二名を呼び出しつつ、俺はアンナたちへと言った。

「ちょっと親父のところへ行ってくる。すまんが、カードは全部連れて行くぞ。ヘスペリデスの運用方法については、アンナたちの方からお袋に伝えておいてくれ」

「了解ッス。お気を付けて」

「お義母さんたちについては任せてくれ」

「ああ……！」

部室へ駆け込んできたユウキたちと共に窓から校庭へと飛び降り

ると、ちょうどイライザたちが転移してくるところだった。
転移のゲートが消える前に、皆と池袋へと飛ぶ。

『……歌麿!』

池袋駅が見えるビルの屋上へ到着すると同時に、途絶えていた親父との通信が繋がった。

「親父! 無事か!？」

『は!?! 何言ってるんだ? お前の方こそ大丈夫なのか?』

「は? な、なにが?」

『なにが……って。助けてくれて連絡してきたのはお前の方だろ
う!?!?』

——ゾワリと全身の毛が逆立った。

とっさに鈴鹿を召喚し、親父へと呼びかける。

「親父、今言ったのはすべて本当か!？」

『あ、ああ、本当だ』

「マスター! 嘘じゃない!」

まずい……! これは、畏だ……!

「イライザ……!」

バツと振り返った俺の眼に映ったのは、彼女の持つハーメルンの
笛が黒く染まっついていく姿。

いくら息を吹き込もうと、かすかな音すら漏れない。

「これは……！」

そこで、追い打ちをかけるようにアンナからの通信が届く。

『先輩！ 今、ピエロみたいなモンスターが来て、妹さんを！
——歌麿！ 愛が、愛がッ！ ——ちよ、お母さん、落ち着いて！』

アンナとの通話が切れ、続いて重野さんからの着信が届く。
反射的にそれに出ると。

『北川さん！ 今、良いですか！？ お預かりした小学校の子供たちが、攫われました！ 目撃した職員曰く、イレギュラーエンカウントが現れたと！ 大変申し訳ございません！』

「マスター、両方とも本当！」
「くっ……！」

ガリツと奥歯をかみ砕く。

「やら、れた……！」

やられた！ やられた！！ やられた！！！！！！

ここでッ！ このタイミングでッ！ ここまでやるか……ッ！？
アングルモアが始まったら地上でも使えるようにして、散々活用させ、こちらを油断させたところで、笛を使えなくする。

すべては、俺が大切にする者たちを確実に攫い、俺に恐怖と焦燥感を与えるため……！

その瞬間、俺は、あの道化師の嘲笑を確かに聞いた。
クソつたれ……！！

「マスター！」

イライザの声にそちらを見ると、笛が血のように紅い光の糸を彼方へと伸ばしていた。

あつちは、八王子のある方。

子供たちを救いたければ、やってこいということか……！

一瞬これも罠かとも思ったが、直感的にこれ自体は罠ではないと感じた。

相手の目的が俺の再戦ならば、決闘の地に嘘はつかないはず。

むしろ、その場自体が罠であることを警戒すべきだった。

「マイラ、これを使い！」

「これは……！」

俺が渡した物、それは大粒のダイヤの原石…… ヴィーヴィルダイヤだった。

霊格再帰の時間を使い切ってしまったマイラだが、新たな霊格再帰を得れば一時間分の変身時間を追加で得ることができる。

つまり、一時間だけだが、再びワイバーンに変身できるということだ。

俺が投げ渡した物を見たマイラが、それをすぐさまかみ砕く。

ドラゴネット形態だったマイラの身体が光に包まれ、そのシルエツトがどんどん大きくなっていく。

やがて光が消えた時、そこには美女の上半身と飛竜の下半身を持った半人半竜の姿となったマイラの姿があった。

【種族】ヴィーヴィル（マイラ）

【戦闘力】945（初期戦闘力400＋成長分195＋霊格再帰分50×5＋ヴィーヴィルダイヤ分100）

【先天技能】

- ・宝竜玉：生命力と魔力を生み出し貯蓄する宝竜の心臓。
- ・宝竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。魔法攻撃に対する極めて高い耐性を持つが、物理攻撃にやや弱い。
- ・宝竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をブレスとして吐き出すことで、魔法の威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。二種の魔法を同時に織り込むことができる。
- ・破鏡再び照らさず：戦闘力が減少するがメイド等のスキルを内包する人間体と、戦闘力が上昇する半人半竜の形態に変身することができる。額の宝石は、一日に一撃だけありとあらゆる攻撃を反射する効果を持ち、人間形態ではペンダントとして他者に貸し出すことも可能。メイド、中級収納スキルを内包。

【後天技能】

- ・霊格再帰
- ・滅私奉公
- ・初等魔法使い 中等魔法使い
- ・新米メイド 先天スキルに統合
- ・戦術
- ・ヴィーヴィルの瞳（NEW！）：一日に一撃だけありとあらゆる攻撃を反射することができる。戦闘力が常時100上昇する。

ヴィーヴィルとなったマイラの間部分、アッシュゴルドの髪をショートカットにし軍服っぽい衣装に身を包んだ、切れ長の蒼眼がクールな美女という、なんとなく彼女に抱いていたイメージ通りの容姿だった。

いつもならば新たな形態をもう少し観察しているところだが、今は時間がない。

すぐさまワイバーン形態へと切り替えてもらい、その背に皆で乗り込む。

「行くぞ！ 光が指し示す方へと飛べ！」

光の方へと一直線に飛ぶマイラの背で、俺はイライザに抱えて貰いながらドレスを召喚した。

現れたのは、優美な女性型のデュラハン……ではなく、冷たいほどの美貌を持つ黒髪の女神ネヴァン。

【種族】ネヴァン（ドレス）

【戦闘力】2000（400UP！）

【先天技能】

- ・死と勝利の戦女神
- ・三相女神
- ・破壊と殺戮と勝利の宴
- ・毒のある女

【後天技能】

- ・精密動作　メイドマスターに統合。
- ・七転八起
- ・不屈の精神
- ・剣術　高等忍術に統合。
- ・武術　高等忍術に統合。
- ・神のプライド　消滅。
- ・眷属強化
- ・遠見の術
- ・メイドマスター
- ・限界突破
- ・高等忍術

「ドレス！ 早速で悪いが、マイラに装備化を！」

「了解です！」

ネヴァンとなったドレスは、その冷たい美貌には似つかわしくないほどの愛想の良さで敬礼すると、マイラへと祝福を掛けた。

一気に2000も戦闘力が上昇したマイラの飛行速度がグンと加速する。

もはや眼を開けていられないほどの風圧だが、そこへさらにドレスとマイラの双方へとレベルアップの魔法を蓮華に掛けてもらう。

これで、マイラの合計戦闘力は、約5000となった。

イライザに抱えて貰わなければ吹き飛ばされそうなほどの速度に、これならあつという間に到達するな、とわずかながら安堵した……その時。

——バキンという不吉な音が、どこからか鳴り響いた。

なんだ？ と俺が疑問に思うよりも前に。

『ッ！？ マスター！？』

急停止の衝撃が、全身を襲った。

投げ出されないように黄金の手綱を握りしめながら、マイラの眼を通して前を見れば、突如現れた空間の歪みが、俺たちを飲み込もうとしていた。

その大きさは、視界全体を埋め尽くすほどで、とつさに避けることも叶わず、俺たちは空間の歪みに為すすべもなく飲み込まれた。

「こ、ここは……？」

まず感じたのは、潮の香り。

続いて目に飛び込んできたのは、夕日に照らされた砂浜と、少しだけ濁った黒っぽい海。そしてポツリポツリと立った廃墟のような

家屋。周囲には、うつすらと煙のような霧が漂っていた。

「漁村……か？」

何らかの異空間型カードに飲み込まれ……いや、待て、それはおかしい！

これほどの広い空間を持った異空間型ともなると、確実にBランク以上。Bランクモンスターが迷宮外に溢れだすには、さすがに早すぎる！

俺は、カードギアでアンナたちに連絡を取ろうとしたが、連絡できなかつた。

こ、これは……！

「い、イレギュラーエンカウントかッ！」

こ、ここで……。一刻も早く愛のところへ行かなければならないこのタイミングで……！

こんな『不幸』が……。

絶望が俺の心を覆っていき、ぐにやりと視界が歪む。

視線を落とした俺の眼にカードホルダーが映った。

半ば無意識に、カード化したホープダイヤを取り出す。

カードに描かれたダイヤは、見事に砕け散っていた……。

「……歌麿、悪い知らせだ。今さっき、急激に因果律の歪みが膨れ上がって……そして、消えた」

「ハハ……」

乾いた笑い声が漏れた。

そうか……。これが、ホープダイヤの真の効果か。

もたらした幸運の分だけ、因果律の歪みを内部に蓄積し、ここぞ

というタイミングでそれを解放する……。

持ち主を必ず破滅させると言われる、呪われたダイヤ。それを甘く見たツケが、これか……。

『——顔を上げなさい！ 歌麿！』

殴りつけるような厳しい声が、俺の心を叩いた。

ハッと顔を上げると、そこには険しい顔をしたアテナのビジョンが目の前に浮かんでいた。

『英雄が簡単に諦めるな、この愚か者が！』

「アテナ……」

『貴方が諦めたら、貴方の助けを求める人々は、愛は一体どうなるというのですか！』

「ッ……！」

そうだ、その通りだ！ 俺以外に、愛たちを救える人間はいないのだ！ こんなところで膝をついている暇はない。

心のどこかで、ガチン！ と強烈にスイッチが切り替わった。

事ここに至ってもふわふわと定まっていなかった自分の在り方が、いま確かに定まった。

家族を、大切な人たちを守る。このアングルモアで、誰一人失わせたりしない。この手が届く範囲の全員を、理不尽から守り切つてやる。

それを邪魔する敵は、皆殺しだ……！

『そう、それでよい。それでこそ、妾の英雄に相応しい』

俺の顔をみたアテナが、満足そうに微笑む。

それは、まさに英雄を導く女神の笑み、そのものだった。それに、思わず見惚れていると――

「……ああ、クソツ。完全に先に言われちゃった！」

ガリガリと頭を掻きながら蓮華が言った。

今までになく悔し気な顔をする彼女を、ここぞとばかりに鈴鹿が煽る。

『ぶつぶぶ、いつも偉そうにしてる癖に、一番良いところを持ってかれてワロター！ クソガキさまあ！』

「うるせー！ だが、まあ、アテナの言う通りだ。最後まで諦めない者だけが、幸運をつかむ資格がある」

「そう、だな」

俺は、かつて蓮華の霊格再帰を発見した時のことを思い返しながら頷いた。

あの時、みっともなく足掻きに足掻いたからこそ、今の俺たちがある。

ならば、今回も全力で、最後まで足掻くとしよう。

「それで、これからどうする？」

蓮華の問いかけに、俺は地上を見渡した。

まずは、敵の正体を見抜かなければ……。

「マスター、あそこに倒れている人が」

「なにッ？」

イライザの視線を借りて見てみると、家の影から一本の腕が伸びていた。

白いスーツに、金の腕時計……モンスターじゃない、人間だ！
慌ててマイラを着陸させ、念のためにレギュラーメンバーたちを全員呼び出した上で慎重に近寄っていく。

イライザが畏の有無を確認しながら倒れた人の腕を取り、こちらを見て首を振った。

手遅れだったか。しかし、この死体……妙だ。

最初は、スーツのデザインやイケイケな腕時計からそれなりに若い人だと思っていた。髪もロン毛で、金髪に染めているから、最初はホストかとも。

だが、実際に間近で見ると、その手はかなり皺くちやで、明らかに老人のそれだった。

お年を召した方でもイケイケな格好をする人はたまにいるが、さすがにこの格好はチグハグ過ぎた。

それに、死因も気になるところだ。パツと見、外傷もなく、付近に流血の後もない。

まるでここでぼっくり寿命が尽きたかのような……。

漁村のフィールド、外傷もなく行き倒れた老人の死体、そしてイレギュラーエンカウント。

俺の背筋に、悪寒が走った。半ば確信に近い、嫌な予感。

イライザに老人の死体を仰向けにしてもらい、その懐を漁ってもらう。

目的の物はすぐに見つかった。

「孔雀院 綺羅……21歳」

ホストクラブと思わしきその名刺には、二十歳ほどの若い男性の顔が印刷されていた。

その髪型と服装は、間違いなく目の前の死体と同じもので……。

「確定、だな」

蓮華がポツリと呟いた。

俺は頷く。

「ああ、間違いない。――浦島太郎だ」

それは、日本人なら誰もが知る昔話の主人公にして、全冒険者に最も恐れられている最悪の敵の名だった。

恐れられる理由は、単なる強さからではない。

全イレギュラーエンカウント中、浦島太郎だけが持つある特性にあった。

――一分速一年の老化。浦島太郎の残酷な結末を再現した、このイレギュラーエンカウントが強制する【ルール】。

故に、その効果は、カードのバリアでも防げない。

第四話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】装備化のタイプ

マスターや他のカードに自身の戦闘力やスキルを加算することができるスキルを装備化スキルと呼ぶ。

一口に装備化スキルと言ってもその性質によっていくつかタイプがあり、タイプが異なれば同じ対象に同時に装備化できる。

装備化のタイプとしては、装備化スキルの八割以上を占める最もポピュラーな憑依型、本体と装備化対象が別行動可能な祝福型、物品に憑依し同タイプとも同時に装備化可能な物品憑依型、強力な代わりに重いデメリットのある呪い型などがあり、後者になるにつれ希少となる。

第五話 人生で最も長い一日（前書き）

コミカライズ二巻、発売中！

第五話 人生で最も長い一日

「ふうー……」

敵の正体を知った俺がまず行ったのは、深い深呼吸だった。

体内の焦りや恐怖を空気ごと吐き出して、体中の酸素をリフレッシュする。

相手が浦島太郎ならば、最初のうちは敵は出て来ない。ある意味では安全だ。

だから、まずは冷静になれ。浦島太郎との戦いにおいて最大の敵は、焦りと時間なのだから。

新鮮な酸素に、頭がクリアになっていく……。

「ずいぶん、落ち着いてるんだな？ もっと焦るかと思ってたぜ」

蓮華が、ニヤリと笑いながら問いかけてくる。

俺は答えた。

「焦ってもしょうがないからな」

そう、敵が浦島太郎だろうがなんだろうが、やることは決まっている。

一刻も早くこの敵を倒し、愛たちの元へ駆けつけ、ハーメルンの野郎をぶっ殺す……それだけだ。

元々、可能な限り早く敵を倒す必要があったのだ。そこに俺の寿命と言う時間制限が加わったところで、大した違いはない。

せいぜい、愛に会った時に俺自身と一目でわかってもらえるのか

不安なくらいか。

「ふふ、覚悟の決まった良い顔です。英雄とは、そうでなくては。それで、敵の攻略法は見当がついているのですか？」

「ああ、だいたいはな」

アテナの問いに、俺は頷いた。

冒険者にとって最悪の敵ということもあって、浦島太郎の情報は比較的詳しく知れ渡っている。

浦島太郎は、死神どもの中でも珍しい、逆順のストーリーで構成されているイレギュラーエンカウトだ。

すなわち、本来は「亀を助ける」「亀に竜宮城へ連れて行ってもらう」「乙姫らの歓待を受ける」「玉手箱を開けて一気に老人になつてしまう」という流れなのに対し、「玉手箱を開けて老人になつてしまう」という結末から冒険者たちに押し付けてくるのが、このイレギュラーエンカウトのやり方なのだ。

故に、まずはここどこかに隠されている玉手箱を見つけてその箱を閉じなければならぬ。

「問題は……」

俺は、周囲をぐるりと見渡した。

砂浜にポツリポツリと立つ粗末な家屋。全部で二十戸のこの家々のどこかに、玉手箱は隠されている。

普通に総当たりで調べていけば良いじゃないかと思うかもしれないが、死神どもの謎かけは、そんなに甘くはない。

浦島太郎の老化効果は、誰かが家の中に存在している間、さらに加速するという性質がある。

その速度は、通常時の十倍。およそ一分間に十年の老化がその身を襲うことになる。

カードたちと手分けして調べたとしても、一つの家を調べるのに最低一分。この一分という数字は、十枚のカードで一つの家を調べた際の最短の速度であり、召喚できるカードが少なければ少ないほど必要な時間は増える。

つまり、一つの家を調べるたびに最低でも十年の寿命を支払う必要があるというわけだ。

正解の確率は、わずか5%。総当たりでは、すべてを調べる前に確実に寿命が尽きてしまう。

ギルドが推奨する【フェイズ1・宝探し】の攻略は、大きく分けて二つ。

一つは、力技。単純に人海戦術で一気に調べてしまうというもの。人数が二十名もいれば、最小のコストですべての家を調べることができる。

だが、そんな大人数で攻略するチームはプロでも珍しいし、何より俺は一人だ。

眷属召喚で穴埋めするにしても、自我を持たない中位以下の眷属体は、こういう繊細な作業には向いていない。最悪、玉手箱を破壊してしまう可能性すらある。そうなれば、次の獲物がやってくるまでここに閉じ込められることになる。ジ・エンドだ。

もう一つは、正攻法。ちゃんと謎解きをして正解の家を見つけ出す。

しかし、当然のことながらギルドの資料には、謎解きの解法は記されていないかった。

リドルスキルは、挑戦者の知識量によって問題が変動する。下手に解法を教えることで、難易度のさらなる上昇を防ぐための措置な

のだろう。

謎解きに掛かる時間は、早い者で凡そ十分から二十分ほど。常人は、その数倍がかかるのが普通らしい。

さて、どうするか……。

まず思いつくのは、運命操作を応用した予知で正解の家を見つけ出してしまふことだが……。

「……………駄目か」

可能性の道は見える。だが、その先の結果は、黒い霧で覆われて見えなかった。

今がアンゴルモア中だからか、あるいはイレギュラーエンカウントによる妨害か……。

この分では、幸運操作も無駄だろう。

「アテナ、お前の知の権能で答えはわからないか？」

知の女神の権能は、人類の集合知へのアクセス権。これまで人類が蓄積してきた知識という名のインターネットを検索し、これまでロストした同種の記憶を記録として参照することができる。

集合知はこれまで死んだ人間の知識の蓄積なため（生きている人間の知識はスタンドアローン化している）、古くて多くの人を知り得る知識ほど調べやすく、新しく一部の人間しか知り得ない情報ほど調べにくいという性質はあるものの、世界的に情報が共有されており、大量の被害者のいるイレギュラーエンカウトについての情報ならば、検索できる可能性が高い。

期待を込めて見る俺に対し、しかしアテナは首を振り。

「おそらく知の権能で解答を得ることは可能でしょうが、リドルス

キルの『ズル』に引つかかる可能性が高い。やめておいた方が無難でしょう」

「そうか……」

こちらの事前知識で出題が変わるだけでなく、出題中のカンニング行為に対しても途中で出題が変わる可能性があるというわけか。

知識ではなく、純粋な知恵や勇気を試してくるリドルスキルの性質から考えて十分にあり得る話だった。

「イライザ、直感やフィンの親指ならどうだ？」

「申し訳ありません、マスター。家々の微妙な違いや違和感はわかるような気がするのですが、正解の家までは……」

「そうか……イライザとアテナはすべての家を見て回って、外観から正解が導け出せないか試してみてください。みんなもそれを手伝ってやってくれ」

各々の家に散らばっていくカードたちを見送りながら、俺はその場に残って次なる打開策を探る。

謎解きの方はあの二名に任せるとして、眷属召喚による人海戦術は本当に使えないだろうか？

……そうだ、鬼子母神！ 羅刹たちならばどうだ！？

最高位眷属体ならば、オリジナルと同等の自我を持つ。手持ちの眷属召喚持ちにガンガン眷属を召喚させてから、全部で200体ほど召喚すれば、一気に搜索できる！

この後に控える闘いで、鬼子母神の子殺しの権能が使えなくなるのはかなり痛いが、やむを得ん！

『蓮華、鬼子母神に変身してくれ。羅刹たちを召喚して、人海戦術で一気に片付ける！』

『む……うーん』

俺のテレパスに、しかし蓮華は悩まし気な意思を返してきた。

『……何か問題でも？』

『いや、羅刹どもって、いわゆる修羅の道の住人なんだよな。年がら年中戦いに明け暮れて、それを苦にも思っていない連中なわけだ。だから戦いに関しては頼りになる奴らなんだけど、なんつーかガサツというか、ぶっちゃけ物事を力で解決する傾向があるというか……』

『もついい、わかった……』

つまり、宝探しには不向きというわけか。玉手箱を破壊されるのは、さすがにマズイ。

チツ、やはり正攻法、謎解きで挑むしかないか。

『……ところで、歌麿。ここに入ってから何分経った？』

蓮華の問いに、俺はカードギアを見た。

『正確な時間はわからないが、たぶんまだ五分は経っていないはずだ』

『少なくとも、二丁三分は経ったんだな？』

『ああ……それがどうかしたか？』

俺がそう問い返すと、蓮華が目の前にふわりと降り立った。そして俺の顔をマジマジと眺め……小さく嘆息した。

「やっぱりな……」

「どうした？」

「お前、ここに入った時とまるで見た目が変わってねーぜ」

「なに？」

俺は思わず自分の顔を撫でた。

見た目が変わっていない？ 少なくとも二年か三年は老化しているはずなのに？

俺らぐらいの年頃は、ほんの一年、二年の時間で大きく変化する。それが、まったく見た目がまったく変わっていないということは……。

「……パーフェクトリンクの副作用か？」

「たぶんな。今のお前は、常人とくらべて何倍か老化が遅くなってるんだと思う」

「つまり、寿命も……」

「ああ、おそらくその分長くなってるはずだ」

それを聞いた瞬間、俺はニヤリと笑った。

そういうことなら、話は早い！

『みんな集まれ！ 謎解きはもういい！ すべての家を片っ端から調べていく！ ユウキとアテナは、シロクロとニケの召喚も！』

寿命と言う枷が外れたならば、わざわざ時間のかかる謎解きに付き合っている暇はない。

総当たりで、正解の家を見つけ出す！

「ま、そうなるわな……ところで、あのケルトの神どもは召喚しなくて良いのか？」

「む……そうだな」

蓮華の問いに、俺は若干迷った。

ケルトの三女神を手に入れてすぐ、俺はその召喚を試していた。そのうち、ネヴァンに関しては、ドレスのランクアップに使ったから問題なかったが、残りの二柱に関しては違った。

案の定というか、なんというか神のプライドがマイナスに働き、俺に従うことを拒否してきたのだ。

曰く「戦士でもない者に祝福を授けるつもりはない」「這いつくばって請えば命くらいは守ってやるが、我らに命令するな」とのこと。

それからなんとか関係を改善しようと何度か呼び出してみたものの、手ごたえはゼロ。それどころか、呼び出すたびに徐々に対応が冷たくなっていくのを感じた。

最近では、アングルモア前にそれ以上関係を悪化させることを懸念して召喚するのは控えていたのだが……この状況ではそうも言うてられない。

——何故ならば、浦島太郎の戦闘力は、Aランク相当の可能性が高いからだ。

イレギュラーエンカウントは、迷宮の主を乗っ取る形で出現する。それは、アングルモア時でも変わりはない。

故に、本来はフェイズ相当のランクで出現するのが道理。

だが、アングルモアは、奴らにとつての祭だ。

過去の記録によれば、死神どもの戦闘力は、そのフェイズにおける最大ランクの敵よりも、明らかにワンランクほど戦闘力が高かったと記載されている。

迷宮の主が、その迷宮のランクよりもワンランク高く出現するよ
うに、イレギュラーエンカウントもは、アングルモア時はワンラ
ンク分の補正が掛かるのだらう。

つまり、たとえ乗っ取ったのがCランク迷宮の主であろうと、ア
ングルモア中はAランク相当の戦闘力となるというわけだ。

一口にAランクと言ってもその戦闘力はBランク以下よりさらにピンキリで、噂によればその初期戦闘力は低いもので1000台、ネイティブカードで最高クラスの存在ともなると3000を越えるカードと聞く。

成長限界もBランク以下とは異なるらしく、浦島太郎がどの程度の戦闘力かはわからないが、最悪戦闘力一万越えも想定された。

そんな怪物相手に、三相女神ほどの戦力を遊ばせている暇はない。まずは誠心誠意頼んでみて、それでも断られるならやむを得ないリンクで強引にねじ伏せるしかない。

――シンクロの応用、マリオネット。

強制的にカードを動かすことができるこのリンクならば、反抗的なカードであっても一時的に使うことができる。

もちろん、その分カードからの心象は悪化し、最悪の場合一発でマイナススキルが芽生えることもあると聞くが……今回はかりは、仕方がないだろう。

そんな覚悟を決めつつ、俺はヴァハとモリガンの二柱を召喚した。燃え盛る焰のように紅い髪を靡かせた怒りと破壊の戦女神と、妖艶さと勇ましさを兼ね備えた支配と殺戮の戦女神が姿を現す。

「ふん、このヴァハを不躰に呼びつけるとは、不敬であるぞ小僧……む？」

「これは……なるほど、死神に囚われたか」

現れるなり、即座に現状を把握した二柱へと、俺は言った。

「端的に状況を説明させてもらおう。ハーメルンの笛吹き男に家族と子供たちが攫われた。それを助けに向かっている途中、別のイレギュ

ラーエンカウントに捕まっちゃった。おそらくは、浦島太郎だろう。一刻も惜しい、俺のことは認めがたいだろうが、ここは従ってくれ」

二柱の女神は、じつと俺の顔を見ている。

……どうだ？ 俺はドキドキしながら彼女らの返答を待った。

頼む、頷いてくれ！

「……ふん、ま、よかろう。モリガンよ、汝はどうする？」

「ひとまず、従ってやろう」

思いのほかあっさりと頷く二柱の女神に、俺は思わず拍子抜けした。

前回呼んだ時は、取り付く島もないって感じだったのに……。

俺は、つい問いかけた。

「いいのか……？」

「まあ、な。今の汝は、民のために戦場へ向かう男の顔をしている。守るべき者のために手段を選ばぬ……戦士の貌よ」

「武の気配がないのはちと残念だが、武だけが戦士の条件ではない。戦士であるならば、その行く末に祝福を授けてやるのが、このモリガンの役目……」

「そうか……助かる」

俺は、ホッと胸をなでおろした。

これで、ケルトの三相女神の運用に対する不安は消えた。

この後に控える戦いもそうだが、玉手箱探しの人員が増えたのも地味に大きい。

これで人手は、蓮華（吉祥天と黒闇天）、イライザ、ユウキ（+シロ、クロ）、メア、鈴鹿、アテナ（+ニケ）、オードリー、マイラ、ドレス（+ヴァハ、モリガン）の9枠15名。

残りの召喚枠は、三枚。これを遊ばせるのはあまりに惜しい。…
…そうだ！

俺は、かつてカードパックで引き当てたシルキーズを取り出した。今までは家族に預けていたシルキーズだったが、みんなのカードが充実したことにより、使い辛いマイナススキル持ちのこのカードたちも、再び俺の手元に戻ってきていた。

ドジ、面従腹背、怠け者、能天気、忘れん坊……とメイドにあるまじき個性持ちばかりだが、その中でも守銭奴、メシマズ、無愛嬌と玉手箱探しに支障のなさそうカードを選んで召喚する。

現れたのは、ツインテロリ（守銭奴）、ニコニコほんわかお姉さん（メシマズ）、爆乳ヤンキー系（無愛嬌）とバリエーション豊かなメイドたち。

現れたシルキーズが、思い思いに口を開きかけ。

「静まりなさい！」

「ッ！」

機先を制するようにオードリーが一喝した。

メイドの中のメイド、メイドマスターたる彼女の一声に、マイナススキル持ちのメイドたちは一斉に直立不動となる。

「これよりご主人様から、状況説明があります。心して拝聴するよ
うに」

『はいッ！』

「では、ご主人様どうぞ」

「あ、ああ……」

スツと一礼してくるオードリーと代わり、俺はシルキーズへと語り掛けた。

「あー……今、俺たちはイレギュラーエンカウント、浦島太郎に囚われている。この状況を脱するには、このどこかに隠されている玉手箱を見つけ出さなければならぬ。呼び出されたばかりでアレだが、協力してくれ」

『かしこまりました！』

シルキーという種族特性か、あるいはオードリーの威光か。素直なシルキーズに俺は内心で満足しつつ、カードたちを二つのグループに分けた。

この人数で一つの家を調べるのはさすがに勿体ない。二つに分けた方が効率的だ。

グループAは、俺をリーダーとし、蓮華（黒闇天）、鈴鹿、アテナ（+ニケ）、マイラ、オードリー、シルキーズ（3）の十名。

グループBは蓮華をリーダーとし、蓮華（吉祥天）、イライザ、ユウキ（+シロ、クロ）、メア、ドレス（+ヴァハ、モリガン）の九名とした。

直感持ちのイライザと、智慧の女神であるアテナ。それとメイドマスターであるオードリーとドレスを、それぞれ別のチームに分けた形だ。

「それでは、搜索開始！」

両グループが決まったところで早速動き出す。

俺は、Aグループの面々を引き連れ、最寄りの家へと入った。

「チツ、やっぱり中はそれなりに広いか。それに、汚ねえ……」

家の内部は、外観の粗末さに反して何倍も広く、嫌がらせのよう

に鍋やら壊れた農具やら破れた網やらと無駄に物が散乱していた。

「むむむ、これは腕が鳴りますねー。ピカピカにしちゃいますよー」
「別に片付けなくても……いや」

腕まくりしながら言うほんわかメシマズシルキーに、俺は玉手箱さえ見つけ出せば良いと言いかけて、止めた。

このゴミ屋敷状態の中、あるかどうかもわからない玉手箱を探すのに、片付けながら探すというのは良いアイデアかもしれない。

一度探したところに、もしかしたら見落としがあるかもしれない……という不安から解放されるのは、かなり大きいだろう。

問題は、このゴミの山を外に出すだけで結構時間が掛かってしま
いそうなことだが……。

「ご主人様、それでしたら収納スキルが役立つかと」

「おお、そうか！ それがあつたな」

オードリーからの提案に、俺はポンと手を打った。

マヨヒガの上級収納スキルは、ウチの高校の体育館ほどの収納スペースを持つ。

シルキーにしても、後天スキルに下級収納スキルを持つ個体が多く、この三枚にしても下級収納スキルを所有している。それにダミ
ーのゴミ類を放り込めば、外に捨てに行く手間が省けるだろう。

「それに、ゴミ捨てだけならば召喚したブラウニーでも事足りるか
と」

「そうだな、分別した後のゴミなら、眷属にも任せられるか。それ
じゃあシルキーで誰かグループBの方に行ってくれ」

「あー……じゃあ自分が行きますよ」

そう手を挙げたのは、シルキーズの中でも屈指の豊かなバストを持つ、無愛嬌シルキーだった。

現れてからずっと不機嫌そうな顔を崩さない彼女だが、愛想がないだけでシルキーとしての能力に最も問題がないのは、このシルキーだろう。

「頼んだ。……よし、みんなゴミを片付けながら玉手箱を探してくれ」

各自バラバラに散っていく中、俺も手近なゴミの山に取り掛かると、スススと寄ってくる影が一つ。

誰だ？ と顔を上げて見ると、それは守銭奴ロリのシルキーだった。

「へへへ、旦那様。もし玉手箱を見つけたらボーナスなんか出たりします？」

コイツ……状況分かってんのか？

厭らしい笑みを浮かべて、揉み手でそう言ってくる守銭奴ロリシルキーに、俺は怒りを越して呆れてしまった。

さすが、パックに入れられるだけのことはある。

視界の端で、オードリーが青筋浮かべてこちらに来ようとするのを手で制し、俺は守銭奴ロリシルキーに問いかけた。

「とりあえず手動かしながら話せ。……ボーナスって何が欲しいんだよ？」

経験上、こつこつマイナスキル持ちは、無理に抑えつけない方が良い。

報酬次第でやる気を出してくれるなら、逆に扱いやすくすらあつ

た。

「そりゃもうコレですよ、コレ」

俺の問いに、守銭奴ロリシルキーは、指で輪っかを作って銭のジエスチャーをした。

「人間はお金さえあれば大抵のものを手に入れられるんですよね？
お金サイコー！」

「お金貰つてもお前じゃ使えねーだろ」

「そこはホラ、私が受け取った報酬の分、旦那様に外で買い物してきてもらうつてことで」

「メイドのくせにマスターをパシリにいかせんのかよ……まあ別にいいけど、人間の金なんて今は紙切れ同然だぞ？」

「えっ……！？」

驚愕の表情で、ゴミを収納スキルに放り込んでいた手を止める守銭奴ロリシルキー。

「手え、止めんなって。……常識的に考えて、モンスターが溢れ出してる状況で、買い物なんてできるわけねーだろ」

「あー、なるほど。アレ始まつちゃってたんですか。どつりでたくさん召喚してるなーと思ってたんですよ。んー、そういうことなら、魔石ですね。魔石ください」

「魔石？ 魔石ねえ……」

魔石は、なにも人間だけに価値があるものではない。

カードや……迷宮のモンスターですら魔石を本能的に欲し、モンスターたちの前にばら撒けば、人間をそっちのけでそちらに向かうことが判明している。

どうやらカードやモンスターたちにとって、魔石というのは美味……というか快感に近いモノを得られる嗜好品という認識らしかった。

もちろん、万能のエネルギー源たる魔石が、ただの嗜好品というわけもなく。

勿体ないから普通はそういう使い方はしないが、カードに与えれば体力や魔力の回復や食材等を生み出せるカードの生産量を増やすなどの効果もあった。

ウチのカードたちは不思議とあまり欲しがらないが、他の冒険者のところでは魔石を積極的に欲しがるカードも少なくなく、酷いになると魔石を与えないとあんまり言う事を聞かないカードもいると聞く。

故に、このシルキーが魔石を欲しがるのも不思議ではないのだが……。

「まあ、いいけど」

「やた！ うおー！ やる気がモリモリ湧いてきましたよー！」

守銭奴ロリシルキーの動きが、目に見えて加速する。報酬を約束したことで、守銭奴スキルのプラス補正が働き出したようだ。

みるみるうちに減っていくゴミの山に、俺も負けじと手を動かしながら、ふと考える。

守銭奴のマイナススキルを持つシルキーが、金の代わりに魔石を欲した、か。

これから先も金の価値が回復しないならば、あるいは魔石こそが……。

いや、今はどうでも良いことが。

俺は雑念を振り払うと、作業に集中することにした。

———それから、俺たちは怒涛の勢いで家々の搜索を進めていった。

最初の家でこそ、不慣れだったことと見落としが怖くて必要以上に丁寧に探し過ぎて三分も掛かってしまったが、次の家では二分。三件目以降は、一分ほどで探せるようになった。

だが、肝心の玉手箱は中々見つからず、ようやく見つけ出したのは、両グループ合わせて十六軒目のこと。

俺の身体が、百年分老化したころのことだった。

第五話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】浦島太郎 その1

浦島太郎は、死神たちの中でも珍しい逆順のストーリーで構成されているイレギュラーエンカウトである。

そのため、冒険者たちは浦島太郎の悲惨な結末から体験していく形となる。

フェイズ1の玉手箱探しでは、一分ごとに一歳老化していくフィールドで、玉手箱を探していくことになる。

この老化効果は、カードのバリアであっても防ぐことはできない。玉手箱は、二十軒ある家の中のどこかにあり、家の外観に隠された様々なヒントから正解の家を見つけ出すというリドルスキルであるが、襲ってくる敵もおらず、謎を解けずとも総当たりで調べていけばやがて正解にたどり着くことができる。リドルスキルの中では優しい部類の構成となっている。

ただし、家の中に誰かが入っている間は、十倍の速度で老化が進んでしまうことを除けば、だが。

その性質上、召喚枠の少ない低ランク迷宮ほど玉手箱を探すのに時間が掛かるため、たとえ五ツ星の冒険者であっても死にかねず、また浦島太郎を倒しても老化した身体は元に戻らないことから、冒険者から最も恐れられているイレギュラーエンカウトである。

第六話 人生で最も長い一日

「さすがに、ずいぶん変わったな……」

合流した俺を見て、蓮華が開口一番そう言った。

常人の速度にして約百歳分の老化。

パーフェクトリンクの副作用で老化がずいぶんゆっくりになっているらしい俺であっても、さすがに一目でわかるほどの変化がでているようだった。

「ちょっと、パパさんに似てきたかも」

蓮華が、マジマジと俺の顔を覗き込みながら言う。

彼女の眼を通して見る俺は、二十代後半から三十路手前ほどのオッサンになっていた。

身長も数センチほど伸び、身体も厚みを増した結果ピッタリだった制服がだいぶキツくなって、袖や裾もつんつるてんとなっている。その顔立ちは、確かに昔写真で見た二十代後半の頃の親父に似ていた。

違いは、その眼つきか。優しい眼をしている親父に対して、大人になった今の俺の眼つきは、かなり険しい……。

「で、玉手箱は？」

「ああ、これだ」

そう言って蓮華が、飾り紐のついた、漆塗りの黒い小箱と蓋を渡してくる。……子供の頃絵本で見た玉手箱そのものだ。

その中は当然のごとく空っぽだったが、内部は真珠のように不思議な輝きを放ち、わずかに煙が渦巻いている。

「よし、閉じるぞ」

みんなが頷き返してくるのを確認して、玉手箱を閉じる。

その瞬間、周囲の景色が歪み、気が付けば俺たちは深い海の底。美しく神秘的で、しかしどこか寒々しい竜宮城の中にいた。

不思議と水の入ってこない寝殿造の渡り廊下からは、珊瑚の木々や小石のように敷き詰められた真珠で出来た枯山水が見える。

その幻想的な光景に思わず息を呑んでいると、ふいに外から泳いできた人魚と目が合った。

女中風の和服を身に纏った人魚は、ニツコリと微笑みかけた後、一瞬にしてその美しい顔立ちを醜い半魚人のそれへと変え、襲い掛かってきた。

その鋭い乱杭歯の牙が俺に届くよりも早く、あらかじめ警戒していたイライザがその前に立ちふさがり、半魚人へと強烈なアツパーを喰らわせた。

半魚人のへし折れた牙が宙に舞い、それらが地に落ちるよりも早く、ケルトの三女神たちの槍がトライデントのごとくその身体を串刺しにする。

顔面、心臓、水月の三つの急所を貫かれた半魚人は、それでもしぶとく藻掻いていたが、やがて力尽きて煙のように消え去った。

それを確認してから、俺はイライザへと問いかける。

「……手ごたえはどうだった？」

「おそらくは、互角。Bランククラスかと」

「そうか……」

眷属体でBランク。これで、浦島太郎の戦闘力はAランクで確定

か。

ちよつとだけ、Bランク以下の可能性も期待していたんだがな…
…さすがにそこまで甘くはないか。

「……行くぞ。次は乙姫だ」

このフェイズ2・竜宮城からは、老化現象がストップする代わりに、竜宮城の住人達が襲い掛かってくるようになる。

これらのモンスターたちは当然のごとく無限湧きであり、フェイズ2のボスである乙姫を倒すまでは、いくら倒しても意味がない。

だが、今回は先ほどの玉手箱探しよりは簡単だ。

なぜなら乙姫の居場所は、宴会場で固定されているし、そこまでの道順も千里眼の魔法でわかるからである。

俺たちは、襲い掛かってくる竜宮城の住人たちを跳ねのけつつ、乙姫の元にたどり着いてぶっ殺せば良いだけだ。

シンプルで実に良い。

宴会場へと走りながら、俺はそれぞれのカードたちに眷属の召喚を命じた。

ドレスのデュラハンはもちろん、ニケ、シルキーズにも眷属を召喚させる。

ニケの戦車隊も、シルキーズのブラウニーも戦力という点では役には立たないが、これらの眷属たちは、蓮華とケルトの三女神のスキルの材料となる。

今の内に召喚しておいて損はない。

なお、メアはお休みである。男性特化の彼女は、女の乙姫相手には相性が悪いし、効くかどうかはわからないが、ハーメルン戦に備えて温存しておく。

念のために、カードにも戻して、代わりにシルキーをさらに一体召喚しておく。

選んだのは、生真面目な表情で敬礼したポーズで描かれたドジスキル持ちの小柄なシルキーだ。

フェイズ1では、万が一玉手箱を壊されたらと怖くて召喚できなかったドジスキル持ちだが、単純な眷属召喚ぐらいならオードリーがいることだし問題ないだろう。

なお、オードリーとシルキーズについては、蓮華が鬼子母神のスキルを使った時点でカードに戻すつもりだ。

CやDランクの彼女たちをAランク相当のイレギュラーエンカウントとの戦いに巻き込むのはさすがに酷だ。

ただし、マイラについては、浦島太郎を倒した後に俺たちを残った変身時間で運んでもらう必要があるため、召喚したまま残ってもらう予定だった。

「お呼びでしょうか、ご主人様！　つと、うわわ！　走りながらの召喚とは！」

「慌ただしくて悪いな」

「いえ！　お気になさらず！　それで、どういったご用件でしょうか！」

「とりあえず、ブラウニーの召喚を頼む。現在の状況とかについては、こっちのオードリーに聞いてくれ」

「うわ！　メイドマスター！　あっちにも！？　とんでもない職場来ちゃったな……」

額に汗を滲ませるドジっ子シルキーをオードリーに任せ、俺は鈴鹿を傍へ呼ぶ。

『鈴鹿！』

『なに？　……もしかして』

何かを察したのか期待に眼を輝かせる鈴鹿に、俺は頷き瀬織津姫

のカードを取り出して見せた。

『ああ、ドタバタしてるところで悪いが、ここでお前をランクアップさせる』

霊格再帰のキーアイテムが揃ってない状態で、零落スキル持ちのBランクカードにランクアップさせるのはリスクがあるため、これまであえてランクアップはさせてこなかったが……さすがにこの状況で今の戦闘力のまま鈴鹿を放置する方が危険だ。

Cランク相応の戦闘力しか持たない鈴鹿では、いつロストしてもおかしくない。

瀬織津姫になればロストした際のコストは跳ね上がるが、復活用の橋姫のカードも手元がない以上、ロストのリスクは同等。

ならば、ここは少しでも戦闘力を上げてロストの可能性を減らすべきだった。

『よし！ これで、私もBランク！』

子供のように飛び跳ねて喜びを露わにする鈴鹿を尻目に、俺は彼女のカードに瀬織津姫のカードを重ね合わせた。

二枚のカードが光を放ち、一つへと合体する。

同時に、召喚されたままの鈴鹿の身体も光を放ち……光が消えた時、そこには女神へと姿を変えた彼女の姿があった。

【種族】瀬織津姫（鈴鹿）

【戦闘力】1000（初期戦闘力750 + 成長分450 - 零落スキル分200）

【先天技能】

・ 被い水に流す被戸大神：はらえとのおおかみ水の流れを司る水神にして穢れを払う被神である瀬織津姫の権能を使用可能。

- ・浄化の水垢離：清めの水を降らし、場の穢れを根こそぎ洗い清める。敵味方全員の状態異常を治し、一定時間状態異常を無効化する空間を形成する。
- ・清濁併せ呑む水の理：同一視される橋姫の力を内包し、眷属として召喚することができる。無限召喚型。橋姫の先天スキルをすべて内包する。……のが本来のスキルであるが、零落スキルの影響により、眷属召喚能力は失われている。
- ・中等魔法使い

【後天技能】

- ・目隠し鬼
- ・武術
- ・見切り
- ・良妻賢母：妻や母として理想的な技能をすべて備えている。…ただしその愛を裏切らない限り、だが。料理、清掃、育児、性技を内包する。
- ・追跡：マーキングした対象の気配を追跡することができる。
- ・虚偽察知：対象の偽りを見抜く。
- ・友情連携
- ・気配遮断
- ・零落せし存在（NEW!）
- ・剣術（NEW!）
- ・鑑識眼（NEW!）：物のおおよその価値や希少度、真偽を見抜くことができる。このスキルで見分けられるのは、あくまで人間にとつての価値となるため、どれほど希少で役だつ物であっても人間がその価値を見出していなければ、その本当の価値はわからない。

橋姫の頃にあつた鬼の角は消え、衣装も薄い青を基調とした上品なものとなっている。

穢れを払う水神であるからか、その身が放つ雰囲気も、どこか見るだけで心が改まるというか、冷たい湧き水のように清浄さを感じられた。

一方で、鈴鹿個人が持つどこか危うげな印象は健在で、それが瀬織津姫の持つ清楚な雰囲気と絶妙に合わさり、アンバランスな魅力を醸し出していた。

さしずめ、一見清楚だが、危険な色気を放つ魔性の美人といったところか。

スキルに関しては、瀬織津姫の目玉スキルである『清濁併せ呑む水の理』の眷属召喚能力こそ零落スキルにより欠落状態にあるものの、橋姫の先天スキルをすべて内包しているため、純粹にパワーアップした形だ。

新たに取得したスキルのうち特筆すべきは、後天スキルの鑑識眼で、これは物の真偽や凡その価値がわかるスキルである。

残念ながら魔道具の効果や名前がわかるスキルではないものの、物の真偽や現在の市場価値を測れるこのスキルは、これまでの価値観が通用しないアングルモア後の世界において虚偽察知と並んで必須レベルとなるスキルかもしれない。なかった。

『アハハハハッ！』

さつそくレベルアップの魔法を掛けてやると、鈴鹿は水を得た魚のように両手に大通連と小通連を握って、襲い掛かってきた半魚人たちに斬りかかっていった。

二振りの三明の剣により零落スキル分の戦闘力の低下を穴埋めし、中等レベルの神通力を得た鈴鹿の戦闘力は、Bランク相当の半魚人たちにも十分通じるようだった。

『まったく童のようにはしゃいで……』

そんな鈴鹿の様子を見て、俺の隣を走っていたアテナが呆れたように呟く。

それから真剣な表情となると、俺をまっすぐ見つめ言った。

『歌麿、走りながら良いので聞いてください』

『どうした？』

『さきほどの玉手箱探しの最中、妾の枷がいくつか外れるのを感じました』

『なにッ！？』

俺は、アテナのカードを取り出して見た。

【種族】アテナ

【戦闘力】950

【先天技能】

- ・都市と英雄の守護女神
- ・アイギスの護り
- ・英雄への加護
- ・来たれ、勝利の女神よ
- ・高等魔法使い

【後天技能】

- ・純潔の誓い
- ・神のプライド
- ・幼体 技能解放（CHANGE!）
- ・臆病

『幼体スキルが……！？』

これまで誰も変化させることのできなかつたマイナススキル中のマイナススキルである幼体のスキルが、技能解放というスキルへと変化していた。

『未だ力の半分は封じられたままですが、少なくとも技能の行使に關しては問題ないようです』

つまり、ステータスは半減したままだが、アイギスや魔法を使えるようになったということか……。

臆病スキルも残っている以上、攻撃に参加させるのはまだ難しいだろうが、疑似安全地帯を作れるようになったのは、かなりデカイ。戦闘時以外なら補助や回復魔法などでサポートできるようになったのも地味に嬉しいところだ。

しかし、なぜ突然……。てつきりアテナの幼体スキル解除の鍵は神殿にあると思っていたのだが……。

『浦島太郎の老化、か……？』

俺の呟きにアテナが頷く。

『おそらくは、時間経過こそが幼体スキルの枷を外すための条件の一つだったのでしよう。先ほどの強制的に老化させる空間が、疑的にその役割を果たしたのだと思われます』
『なるほどな……』

幼体スキルの解除には、その種族が成長するだけの時が必要だったというわけか。

『必要な時間は種族によって異なるのですが、妾の場合はおよ

そ百年……。その間一度もカードに戻すことなく、召喚し続ける必要があったのではないでしょうか？」

『百年……』

そりゃあこれまで解除方法が見つからなかったわけだ。

他の種族……例えば十年ほどで成長する種族だったとしても、その間ずっと召喚し続けなければならぬとすれば、幼体スキルを解除するまで一度も迷宮を出れないことになる。

そんなの、最初から解除条件を知らなければ達成できるわけがない。

浦島太郎のように強制的に老化させてくるような敵と遭遇しない限り短時間で幼体スキルを解除することはできず、そして研究者がイレギュラーエンカウントと戦うことはない……と。

無理ゲーだな。

『だが、幼体スキルを解除できたわりに外見は変わらないんだ？』

アテナの全身を見回しながら言う俺に、彼女は馬鹿にするように鼻で笑う。

『フツ、観察力が足りませんね。よく見なさい、ちゃんと身長が伸びているでしょう？ 1センチも！』

百年も経って、たった1センチ……？

どうやらこのアテナは、幼体スキルがなくともあまり発育がよろしくないタイプの個体だったようだ。

なんにせよ、アテナのアイギスが解放されたのは朗報である。

愛たちと合流した後、どうやってその安全を確保しつつハーメルンの笛吹き男と戦うか悩みどころだったのだが、これでその心配もなくなった。

いかにイレギュラーエンカウトと言えども、アテナの疑似安全地帯は破れないらしいからな。

最悪からのスタートだったが、少しずつ運が向いてきている気がする。

この流れでサクツと浦島太郎も倒してしまいところだ。

……それから、宴会場に近づくとつれ密度を増していく半魚人どもの襲撃を蹴散らしながら進むこと約十分。
俺たちはついに乙姫の元へとたどり着いた。

東京ドームの球場ほどの宴会場では、人魚の他に鯛やヒラメ、鮫や鯨といったありとあらゆる海洋生物たちが優雅に宙を泳ぎ、楽しんで舞を披露していた。

その中心にて、何人もの宮女たちに傳かれている仙女こそ、この竜宮城の主　乙姫だった。

手拍子をしながら魚たちの舞を見ている乙姫は、美の女神に匹敵するほどに美しい。

慈しみの表情で竜宮城の住人を見守っていた乙姫だったが、隣の宮女に囁かれ、こちらへ振り向く。

「おや、これは妙なこと。本日は、誰もお招きしていなかったはず。……ですが、せっかくお越しになられたのです。どうぞ、宴を楽しんでいかれてはどうです?」

遠く離れているというのに、まるで耳元で囁くように聞こえる不思議な声。

美しき竜宮城の主は、まるで悪意を感じさせぬ純粹なる善意を持つて、俺たちへ言う。

「美味しいご馳走や、人魚たちの美しい舞で歓迎させていただきま
す。なに、時間のことならお気になさらず。ここは海底の楽園。こ
こにいる限りは、歳も取らず、永遠に楽しい時を過ごせるのですか
ら」

そこで乙姫は、俺の顔をじっと見つめ、労わるように薄く微笑み。

「その老いた身体も、ここでじっくりと休養を取れば必ずや元に戻
りましょう」

「……………はあ〜」

思わず、ため息が漏れた。

本当に……………なんて醜悪で悪辣な罠。

乙姫は、何一つ嘘を吐いていない。

歓待を受けている間、俺たちは安全だ。敵は一切攻撃をしてこな
いし、様々な料理や芸、望めば乙姫や人魚らの身体でもって最高の
持て成しをしてくれる。

滞在中は歳も取らないし、それどころかフェイズ1で老化してし
まった身体すらも徐々に若返っていく。若返り過ぎて赤ん坊になっ
てしまうなんてこともない。本人が望む肉体年齢で、若返りは止ま
る。まさに至れり尽くせり……………。

だが、それこそがこのフェイズ2における罠。

フェイズ2では、乙姫らの歓待を受けている時間に比例して、一
分ごとに一歳ずつ若返っていく。

ただし、一度でも乙姫らに敵対行動を取った時点で、それらの効
果はすべてひっくり返る。

五歳若返ったのなら十歳、十歳若返ったのなら二十歳……………。歓待
を受けている間に若返った分の倍の老化が、反動として返ってくる

のである。

そうして来客を心理的に身動きできないようにして、徐々にその存在を竜宮城の住人へと変えていってしまうのが、この乙姫のやり方なのだ。

……これの性質が悪いところは、完全に竜宮城の住人になる前ならば、他の冒険者がやってきて乙姫らを倒してくれれば、若返ったまま元の姿に戻れることだ。

その上、乙姫の歓待を受けている間、この竜宮城は外と流れる時間が異なり、ここでの一時間は外部での一日に当たる。

完全に竜宮城の住人になってしまつまでには、凡そ一日の猶予があると言われている。つまり、外で24日経つまでの間に誰かが助けにきてくれれば、若返つたままここから解放される可能性もあるのだ。

24日。ほのかな期待を抱くには十分過ぎる時間である。

それゆえに、フェイズ1で老けすぎてしまった者の中には、乙姫らの誘いに乗ってしまう者が一定数いると言われている。

ここで乙姫を倒したところで、フェイズ1で老いてしまった体は元に戻らない。ならば、ここで誰かが助けにきてくれるのを待つ方が……。

どうしても、そう考えてしまふのだ。

そして、やがて身も心も竜宮城の住人になっていく。

この楽し気に舞を披露している鯛やヒラメたちもあるいは……。

だが、俺はそんな誘いに乗るつもりもないし、できない。

今こうしている間も、愛たちはハーメルンの笛吹き男に弄ばれながら、俺の助けを待っているはずなのだから。

故に……。

『蓮華、鬼子母神に変身しろ』

『……いいのか？ ここで使って』

『ああ。どうせハーメルンの笛吹き男には眷属召喚の類は通用しない』

童話・ハーメルンの笛吹き男とは、子供攫いの物語だ。

故に、ハーメルンの笛吹き男は、強力な対眷属召喚能力眷属強奪の権能を持つ。

召喚した眷属のコントロールを根こそぎ持っていかれてしまうこの能力の前に、眷属召喚は、悪手中の悪手。

それでいて、奴自身はワンランク下の鼠型モンスターを無限召喚してくるのだから、その厭らしさが分かるというものだ。

ハーメルンの笛吹き男というイレギュラーエンカウントに対して、鬼子母神は絶望的に相性が悪い。

ならば、ここで切ってしまうのが得策というもの。

「愚かな……うつろう世の何が良いのか。ここにおれば、永久の命と平穏が待っているというのに」

俺たちの敵対を察した乙姫が、理解できないという顔で言う。

そんな乙姫に構わず、鬼子母神へと変身した蓮華は『鏡面神格荒魂・鬼子母神』を発動。ここまでで召喚した眷属と、宴会場に満ちる竜宮城の住人を根こそぎ喰らう。

その中には元人間もいたのだろうが、眷属体スキルを問答無用で喰らう鬼子母神の子殺しの権能は、一切の区別なくすべてを一掃する。

代わりに現れるのは、数えきれないほどの羅刹たちの軍団。

「何故生き急ぐ？ 外界のなにが魅力なのだ？ 外界は我らの同胞が暴れまわっているだけでなく、人同士の争いも待っているのだぞ

？」

一転して四面楚歌となってしまうた乙姫は、しかし周囲を取り囲む羅刹たちには眼もくれず、俺にだけ語りかけてくる。

その眼には、欠片の敵意もなく、ただただ憐れみの色だけがあった。

「そもそも貴様、人間から逸脱し始めておるのだろうか？ 人から外れし身で、人の営みに混じってどうする？」

『破壊と殺戮と勝利の宴を発動しろ』

ケルトの三相女神の特殊スキルにより、すべての羅刹たちの戦闘力とステータスが倍増する。

戦闘力6000オーバー、ステータスに至っては狂化との併用で四倍にもなった羅刹たちが乙姫へと襲い掛かる。

「……排斥されるぞ。人は異物を決して受け入れはしまい。人の世に、貴様の居場所はない」

全身を切り刻まれ、その美しい肢体と顔を血に染めつつも、乙姫は一切の無抵抗。

苦悶の表情を浮かべつつ、ひたすらに純粹なる善意でもって俺へと語り掛けてくる。

「ここにおれ。妾は貴様のことが気に入ったぞ。姿が変わるのが嫌ならば、特別に今の姿のまま留めておいてやろう。共に永劫の刻を過ごそうではないか」

その憐れみと罪悪感を抱かずにはいられない姿に、俺はもう一度深いため息を吐いた。

本当に、酷い毘だ……。

童話・浦島太郎における乙姫とは、善意の怪物である。

物語の終わりで浦島太郎は、家族も友人もすべて失い最後には若さすらも失ってしまうが、そこに乙姫の悪意はない。

彼女は、ただ、亀を助けてくれた浦島太郎にお礼をしたかっただけだ。ただ、自分にできる最大のおもてなしをしてあげただけだ。最後の玉手箱にしたって、それを開けない限りは問題のない代物だった。

そこにあるのは、すべて善意。

ただ、人と人外の感覚のズレがあっただけ……。

ただ、浦島太郎に自分のところへ帰ってきてほしかっただけ……。ただ、いつまでも自分の元において欲しかっただけなのだ。

「何故、断る。何故、冷たく残酷な世を選ぶ。貴様も、浦島の太郎めも……何故、妾を選ばぬ……」

最後まで無抵抗のまま全身を切り刻まれた乙姫が、ガクリと膝をつく。

羅刹たちが、その首を無情に跳ねようとした　その瞬間。

「ならば、もう要らぬ」

「ッ……！」

乙姫の雰囲気 garaり と一変する。

来る……！！

善意の怪物が、その愛を憎悪へと反転させる。

乙姫の身体が、爆発的に膨張。周囲を取り囲む羅刹たちを弾き飛ばしながら、みるみるうちに宴会場の三分一ほどもある巨体へと変貌していく。

同時に、周囲の景色にも変化が。

もはやまやかしは要らぬとばかりに壁や床、天井が剥がれ落ちていき、中から現れたのはまるで内臓のような肉塊の壁。

ご馳走も急速に腐敗して、周辺にアンモニアと腐った海水が混じったような強烈な悪臭が漂いだす。

やがて乙姫が変身を終えた時、そこにいたのは、さきほどまでの美しい姿が嘘のような醜悪な亀の怪物だった。

ほっそりとした四肢は、無数の触手の集合体に。衣はびっしりと藤壺が生えた漆黒の甲羅へ。唯一、甲羅から延びる長い首だけは、元の美しい乙姫の顔のまま、それが逆に冒瀆的であった。

戦闘形態となった乙姫が、その首をもたげ、大きく息を吸い込む。口の端から漏れ出る漆黒の瘴気　　ブレスが、来る！

身構える俺たちに対して、乙姫がブレスを放った先は、自身へと群がる羅刹たちへだった。

まずは、鬱陶しい羽虫どもから始末しようと言うのだろう。瘴気のブレスを浴びた羅刹たちが、グズグズと身体を溶かしていきながら断末魔の悲鳴を上げる。

幾重にも強化された羅刹たちが、一発で……！　なんとこの威力！　その背筋が凍るような光景を前に、しかし、俺は内心でホッと安堵の息を吐いていた。

良かった……ちゃんと、そちらへとヘイトを向けてくれたか。

あえてカードたちには攻撃をさせず、眷属にだけ攻撃させた甲斐があった。

乙姫の戦闘力は、浦島太郎と同等のAランク。

その上、その初撃は、人間形態で受けたダメージ分を威力に上乘せしてくると、ギルドの資料には書いてあった。

乙姫の戦闘力がどの程度かは知らないが、あの羅刹たちの様子を見るに、ドレスを装備化したイライザであっても耐えきれなかった

だろう。

だが、その破壊力の高さが、今回ばかりは仇となる。

『ガアアアアッアアアッ』

！？
『

ブレスを浴びた羅刹たちがその身を崩していくのと同様、乙姫の全身に無数の裂傷が生まれしていく。

羅刹どもの持つ『死なば諸共』は自分がロストする際に受けたダメージ分のダメージを相手へと返す自爆型のスキルだ。

さらに今回は、ケルトの三女神との運用が前提であるため、羅刹たちには限界突破ではなく生還の心得を付与してある。

生還の心得は重ね掛けできないため、元々生還の心得を持つ羅刹には無意味となってしまいが、羅刹女に付与することで合計二度、死の淵で踏みとどまることが出来る。

……つまり、ブレス三発分のダメージを返すことができる。

戦闘力6000オーバーの羅刹を一撃ロストさせるような強力な一撃を、羅刹たちの分だけカウンターされるのだ。

如何に強大な生命力を持つ乙姫であっても即死は免れない。もちろんこれらはすべて作戦のうちである。

乙姫の初撃が、人間形態の時に最もダメージを与えた者へ放たれるのを知っていて、あえて羅刹たちだけを睨けていたというわけだ。

『馬鹿、な……』

見事に自滅する形となった乙姫が、地に倒れ伏す。

すると竜宮城が歪み 気づけば俺たちは最初の海辺に立っていた。

違いは、並ぶ家々が廃墟ではなくそれなりに新しくなっているのと、周囲に煙のような霧が立ち込めていないこと。

「これは……」

『マスター！』

「ッ……！」

ユウキの警告に、反射的に彼女の視線の先を辿ると、そこには一人の青年が立っていた。

浅黒く日焼けした肌の、古めかしい衣服を身に纏った立派な偉丈夫。

青年は、俺たちを鋭く睨みながら言う。

「亀を寄ってたかって虐めるとは、見下げた奴ら。一つ懲らしめてやるっ」

虐める……？

その言葉に乙姫を振り返ると、そこには巨大な亀の姿はなく、あちこちから血を流した一匹の小さな海亀がいた。

それを見て、理解する。

なるほど……俺たちは、さしずめ亀をイジメていた悪ガキどもの役回りと言ったところか。

本来ならば、ここで俺たちがやられるのが筋書き通りなのだろうが……お話のようにそう都合よくやられてやるわけにはいかない。

『かかれ！』

まだ三分の一ほど残っている羅刹たちを浦島太郎へと嗾ける。

比較的詳細に書いてあった乙姫と違い、浦島太郎の戦闘スタイルについてはほとんど書いていなかった。

せいぜい魔法系のスキルは持たず、近接戦中心なことくらいだ。故に、まずは眷属をぶつけ、その能力を探る。

四方八方から襲い掛かる羅刹たちに対し、浦島太郎は徒手空拳で

立ち向かう。

上段からの斬撃を拳を回転させることで流し、カウンター気味に顎へ一撃。背後からの横薙ぎをまるで見えているかのようにかがんで躲し、水面蹴りで足を払う。それを跳んで交わした左右の羅刹たちに対しては、流れるような重心移動でカポエイラのように逆立ちとなって両の足で同時に蹴りを叩き込んだ。

おいおい……戦闘力6000オーバーの、それも狂化とモリガンのスキルでステータス+300%のバフが掛かった羅刹が、数体掛かりでも傷一つつけられねえのかよ……！

見たところ、浦島太郎と羅刹たちのステータスはさほど離れていない。いや、おそらくはステータス自体は羅刹たちが若干ではあるが勝っているはず。

当たり前だ。いくらAランクとはいえ、ステータスが四倍になった羅刹ども以上のステータスであってたまるかという話だ。

にもかかわらず傷一つつけられないのは、純粹な技量の差！ コイツ、近接特化型か！

だが……。

「グツ……！？」

少しずつ、しかし着実にカウンターを入れていた浦島太郎が、ついに羅刹の一体を屠ったその瞬間、その逞しい肉体から無数の血が噴き出した。

しかし逆に苦悶の表情を浮かべてうめき声を上げる浦島太郎。

その傷は、致命傷ではないにしろかなり深い。

羅刹を倒したということは、その対となる羅刹女をもロストさせたということ。

一気に二体分のダメージを受けた浦島太郎の動きが、傍目に鈍り

徐々に攻撃を受け始める。

『ふむ……回復スキルや自動再生系のスキルは無し、か』

まだ油断は禁物だが、このままなら普通に勝てる……か？

いくら高い戦闘力と技術を持っていても、回復スキルも絡め手の類も持っていないじゃな。

とはいえ、もしかすると羅刹たちのように自爆スキル持ちという可能性もあるため、念のためヘスペリデス産の黄金のリングを皆に食わせておく。

これで、万が一の場合でも大丈夫だ。

リングを齧りながら観戦する俺たちの前で、浦島太郎が二組目の羅刹を倒し……それが勝負の決め手となった。

二度目の大ダメージに浦島太郎がガクリと膝を突き、そこへすかさず羅刹たちが群がる。

逆転のスキルを使うなら、ここしかないが……？

より一層油断なく注視する俺たちの前で、しかし浦島太郎は何の術もなく羅刹たちに身体を貪られていく。

切り札らしきスキルを使う気配はない。

終わり、か……？ これで？ 本当に？

呆気なさすぎる……と少しだけ拍子抜けしてしまう。

まあ、Aランク相当とはいえ、純粋な近接戦闘型ならこんなものか。

浦島太郎というイレギュラーエンカウントの脅威は、結局のところフェイズ1の老化とフェイズ2での誘惑のように戦闘力に関係ないところがあり、そこにリソースを注いでいる分、直接的な戦闘はあまり得意ではないタイプなのかもしれない。

……いや、というよりも鬼子母神の羅刹召喚が強すぎるのか。

ランクを実質一つ上げると言われている狂化スキル持ちのBランクの集団というだけでも脅威なのに、二体一対スキルと自動再生のスキルのせいで狂化持ちのくせに中々死なず、倒したら倒したで道連れにしてくる。

そんな生きた爆弾を、一気に、かつ召喚してくるのだ。

対抗するには、無敵や絶対防御、最低でも眷属召喚か上位の回復スキルが必須。

いくらイレギュラーエンカウトと言えども、近接特化型ではどうしようもないというものだ。

そして、浦島太郎の身体が徐々に宙に溶けるように消えていき……。

「　　亀を寄ってたかって虐めるとは、見下げた奴ら。一つ懲らしめてやるぞ」

なッ……………!?!?

背後から聞こえた声にバツと振り返る。

そこには、何事もなかったかのように無傷の浦島太郎が立っていたのだった。

第六話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】浦島太郎 その2

無事に玉手箱を見つけ出せたならば、舞台は竜宮城へと移る。

竜宮城にいるのは、浦島太郎と同格の乙姫とそのワンランク下の眷属たちであり、冒険者たちは無尽蔵に沸く眷属たちの襲撃を潜り抜け、宴会場にいる乙姫の元へとたどり着かねばならない。

宴会場では、乙姫による魅力的な誘いが待っている。

誘いに乗った場合、冒険者たちは至福の歓迎を受けながらフェイズ1で老化した身体を少しずつ癒すことが出来る。凡そ一時間ほども経てば、己が望む年齢に戻ることが出来るだろう。

ただし、これは乙姫による『善意に満ちた』罠であり、竜宮城に滞在するうちに徐々にその存在が変えられていき、24時間も経てば、完全に竜宮城の住人となってしまふ。

途中でそれに気づいて戦いを挑んでも、時すでに遅し。乙姫らの歓迎に対して仇で返す輩には、若返った分の倍の老化という痛烈なしっぺ返しが待っている。

宴会中の竜宮城は外界とは時間の流れが異なり、竜宮城での一時間は外界の一日に相当するため、あるいは罠とわかっていながら乙姫の誘いに乗るといふ手もあるだろう。

完全に竜宮城の住人となる前に、次の挑戦者が乙姫を倒せたなら、変質も解除され、若返ったままで開放されるからである。

その一縷の望みにかけて、乙姫の誘いに乗る者は後を絶たない。

次にやってきた者も自分と同じように考えるかもしれない、というところからは眼を逸らして……。

第七話 人生で最も長い一日

「馬鹿な……！」

復活！？ ギルドの資料には、そんなこと書いてなかったぞ！
ただ、フェイズ3は浦島太郎を倒せば終わりとしか……！

「く、もう一度だ！ かかれ！」

再度、羅刹たちを喚ける。

さきほど同様、数体の犠牲と引き換えに、共に再び浦島太郎を倒す。

……が。

「亀を寄ってたかって虐めるとは、見下げた奴ら。一つ懲らしめてやるっ！」

「マジかよ……！」

俺は、当たり前のように復活した浦島太郎を前に、顔を顰めた。
間違いない。コイツ、不死身だ。なにか外部に弱点を隠し持っている、それを突かない限り延々と復活してくるタイプ。
なんだ？ どうすればコイツの不死状態を解除できる？
そこで、弱々しくぐったりしたウミガメが目に入る。

「……亀、か？」

俺たちの配役は、亀をいじめる子供たち。

ならば、ここで亀を殺してしまえば浦島太郎が竜宮城に行くこともなく、物語は完全に破綻する！

俺の殺意に呼応する形で、イライザ、鈴鹿、ケルトの三相女神が、それぞれの武器でウミガメの甲羅を貫く。

空気が漏れるような細かい断末魔を上げ、息絶えるウミガメ。

……どうだ！？

「貴様らアアアアア！！！」

浦島太郎が憤怒の形相となり、その身体を漆黒のオーラが包む。放たれる威圧感も一段……いや数段跳ね上がる！

「何の罪もない亀を苛めるだけに飽き足らず、その命まで奪うとは！ 何たる非道！ もはや容赦せん！」

「くっ……！」

駄目だったか！ それどころか、トリガーを踏んでパワーアップさせてしまった。

浦島太郎が、一瞬で俺の前に移動する。

カードたちの五感を通して見てすら、瞬間移動かと錯覚するほどの超スピード。

『マ……ズ、イ……！』

迫る命の危機に、俺の思考速度が限界を超えて加速する。

滑らかに動く浦島太郎の手刀を目で追えるようになるも、俺もカードたちも石になったようにピクリとも動けない。

指先一本動かすのに一日掛かるのではないかというゆっくりとした時間が流れる中、手刀が俺の胸を貫こうとして——半透明のバリアがそれを阻んだ。

インシュアランスの魔法。

冒険者部のバッジに籠められた保険の魔法が役に立ったのだと、一拍遅れて理解した。

だが、危機はまだ過ぎ去っていない。

手刀の一撃を弾かれた浦島太郎が、返す手で俺の身体を頭から真っ二つにせんと、腕を振り下ろして……その腕がぐしゃぐしゃにへし折れた。

「ぬッ!？」

異常な結果に、浦島太郎が困惑の声を上げて一歩後ずさる。

二度目のダイレクトアタックを阻んだのは、俺の身体を薄く包み込むように現れた金剛石の膜だった。

ありとあらゆる一撃を反射するヴィーヴィルの破鏡再び照らさずスキル。それは人間形態であれば、ペンダントという形で貸し出すこともできる。

俺は、それをマイラから借りていたのだ。

本来は、ハーメルン戦に備えてのことだったのだが、思わぬところで役だった。

思わぬ反撃に痛手を負ってしまった浦島太郎は、しかし、様子見はせずに三度目の王手をかけてくる。

一度目は保険の魔法。二度目はヴィーヴィルのスキル。三度目は、存在しない。それを敵もよく理解していた。

無事な左腕を、俺の頭目掛けて振り下ろす浦島太郎。

そこに、ギリギリ……本当にギリギリのタイミングで、イライザが滑り込んできた。

鉄槌のごとき上段からの振り下ろしを、その手に持つダイインスレイヴで受け止め――

『ガッ！？』

そして、剣ごと頭を粉々に砕かれた。

『イライザッ！？』

フルシンクロが、彼女の深刻なダメージを俺にダイレクトに伝えてくる。

明らかかな致命傷。だが、ヘスペリデス産の黄金のリンゴと、吸血鬼の生命力により、まだギリギリのところまでロストを免れている。今ならまだ回復魔法をかければ……！

————しかし。

『くッ………！』

蓮華がアムリタの雨を使うよりも早く、浦島太郎の回し蹴りが叩き込まれた。頭部を失ったイライザの身体が、木の葉の如く吹き飛んでいく。

同時に、懐からカードがロストする音が響いた。

イライザが……！ 嘘だろ！？ ドレスを装備化して、フルシンクロもしてんだぞッ！ それが、必殺技でもないただの通常攻撃で………！

だが、その犠牲は無駄ではない、無駄にはしない！

彼女が稼いだわずかな時間で、ユウキが俺の身体を縮地で後方へ運び、羅刹たちが浦島太郎へと追いついていた。

襲い掛かる羅刹たちに、浦島太郎の剛拳が唸り、その内の一体の頭を一撃で砕き、返す手でもう一体の首を軽々と跳ね飛ばす。

なんとという威力！ だが、これで………！

羅刹たちの自爆スキルにより、浦島太郎の頭と首から血が噴き出して――

「なッ!？」

次の瞬間、俺はわが目を疑った。

半ば砕けた浦島太郎の頭が、逆再生のようにみるみるうちに治っていく。

自動再生……いや、首の方の傷は治ってない。これはッ!

『吸収攻撃か!』

マズイ、マズイ、マズイ……!

与えられたダメージを返す羅刹たちの自爆スキルと、与えたダメージ分回復する吸収攻撃は、致命的に相性が悪い。せっかくの自爆が、ほぼ無効化されてしまう!

どうする……!？　メアの男性特攻なら……いや、ダメだ。ここで新たなカードを召喚しようとするれば、真っ先に始末される!　羅刹たちに防御や回復魔法をガン積みして、なんとか一撃死を免れつつ、自爆時のダメージを増やすか?　ある程度のダメージが蓄積したところで、一斉に自害させれば浦島太郎の生命力を削り切れるやもしれん……!

殺しきれなかった場合、羅刹たちがいなくなって一気にピンチになってしまいが、他に方法は……いや、待て!　そうだ!

『アテナ!　アイギスを使うぞ!』

俺はそう呼びかけるも、アテナの返事はない。

隣を見れば、彼女は浦島太郎を前に青ざめてブルブルと震えていた。

く……！ 臆病スキルか！
俺は、彼女の肩を掴むと訴えかけた。

『頼む、アテナ！ 戦いには参加しなくて良い！ ただアイギスを発動するだけで良いんだ！』

『う……！ わかっています！ わかって、いるのですが……』

アテナが震える手で大盾を構えるも、アイギスは発動しない。

幼体スキルが解除されてスキルが使用可能となっても、臆病スキルによる恐怖が戦闘中のスキル発動の妨げとなっているのだ。

……アテナは、無理だ。臆病スキルほどのマイナススキルとなると、気合や説得でどうにかなるものでない。

仕方ない。リスクーではあるが、羅刹たちの一斉自爆作戦しか……！

俺がそう覚悟を決めたその時。

『おいコラ、アテナ！ テメエ！ この期に及んでふざけんじゃねーぞ！』

蓮華の怒声が、リンクを通じて響き渡った。

羅刹たちに補助魔法を掛けながら、彼女は吠える。

『ここで諦めたら愛がどうなるって焚きつけたのは、テメーだろうが！ 歌麿はちゃんと立ち上がったぞ！』

ハッと、アテナが眼を見開く。

『そうだ、愛……！ 妾のパス……』

『女神気取るなら、ちゃんとテメーの台詞くらい責任持て！ ちっとは根性見せる！』

「ッ……！ 黙れ、下郎！ さつきから上から目線で偉そうに！ 誰に向かって口を聞いている！」

キツと蓮華を睨み返すアテナ。

もはや、その表情に怯えの色は欠片も見られず、身体の震えも完全に消えていた。

同時に、胸元のアテナのカードが光を放つ。

何が起こったのかは、見なくともわかった。

俺はニヤリと笑い、復活用のヴァンパイアのカードでイライザを復活させ、次に備えた。

アテナが、手に持つ大盾を天へと掲げ、勇ましく宣言する。

「我が名は、アテナ！ 都市の守護神にして、英雄たちを導く者！ 我がアイギスの力を見よ！」

蓮華たちと羅刹たちの身体を、神秘的な光が包み込む。

どこか温かく、勇気が湧いてくるその光は、アテナによる絶対防御の加護。

浦島太郎は、そんな俺たちの変化に、知ったことかと言わんばかりに拳を振るい――

「なにッ！？」

バチン！ と強く拳を弾かれた。

殴られた羅刹は、当然の如く無傷。一方で、浦島太郎の手は、光に触れた部分がうっすらと石となっていた。

アテナのアイギスは、絶対防御に加えて、石化の呪いもカウンターする。

こうなれば、いくらイレギュラーエンカウトとはいえ、なす術がない。

一方的に攻撃され、反撃は石化状態の進行という形で返ってくる。石化が進むにつれて、浦島太郎の動きも鈍っていき、ついには羅刹たちの攻撃もその身に届き始める。

もちろん、カードたちも遊んでいるわけではない。攻撃魔法と共に石化の魔法を重ね掛けすることで、さらに石化の進行を促進させる。

やがてその身が完全に石化したところを、羅刹たちによってバラバラに打ち砕かれ、浦島太郎は消滅した。

そして――――。

「亀を寄ってたかって虐めるとは、見下げた奴ら。一つ懲らしめてやるっ」

「……ダメ、か」

当然の如く復活してきた浦島太郎を見て、俺は思わず落胆した。今のは、少しだけ期待したただけだな……どうやら強化状態を倒しても無意味らしい。

良く見れば、ウミガメも同様のように復活していた。それを見たカードたちも悪態をつく。

「チツ！ 復活してくるんじゃないよ。完全にそのまま倒せる流れだったろうが」

「全く、せつかくの妾の覚醒シーンだったというのに、空気読めない敵ですね。まるで鈴鹿のようです」

「流れるように私を貶めてくるの止めてくれない？」

絶対防御のおかげで余裕が出てきたのか、軽口をたたき合うカードたちを尻目に、俺はどかりと浜辺で胡坐をかいて座りこんだ。

ふと、視界の端に金髪が揺れるのに気付き、顔を上げるとイライ

ザが隣へとやってきていた。

『イライザ、二度目のロストだが、大丈夫か？』

『イエス、マスター。問題ありません。不覚を取り、申し訳ありませんでした』

『いや、お前は悪くない。おかげで命拾いしたよ。ありがとう』

そうイライザに感謝を伝え。

「……………ふうふうふうふう」

俺は深々と息を吐いた。

何はともあれ、これで一分だけであるが、考える時間ができた。

アイギスの絶対防御は、使用回数の制限こそないが、一回につき十分のクールタイムがある。

なんとしてでも、アイギスの効果が切れるまでのこの一分間で、

浦島太郎復活のタネを突き止めなくては。

まず、情報の整理からだ。

この浦島太郎は、何らかの条件を満たさない限り、無限に出現し続けることは間違いないだろう。

ウミガメも復活したことから考えるに、物語上のある一定の時点……悪ガキたちが亀を苛めているシーンの最初に戻るギミックに違いない。

浦島太郎を倒すとシーンが巻き戻るのは、物語のストーリーに矛盾するからなのだろうが、ウミガメを殺すと浦島太郎がパワーアップしたりと、どこに地雷が埋まっているのかわからないところが厄介だ。

この手のタイプは、色々な方法を試行錯誤して解除条件を探るのがセオリーだというのに……これでは、色々な方法を試すのが怖く

なる。

うーん……どうしたものかな。悪ガキとして浦島太郎に懲らしめられるってのは、普通にそのまま殺されて終わりだろうから無しとして。

俺たちが逆に亀を助ける？ ……すでにイジメてるシーンから始まっている以上無意味だな。

亀をイジメたことを謝る……アリではあるが、イレギュラーエンカウントの厄介さを考えるに、そう簡単にはいかないだろう。最悪、ストーリーが進行することでフェイズ2に差し戻される可能性すらある。

参ったな。マジで答えが見つからない。

ギルドも、なんで「浦島太郎を倒せば終わり」としか書いてねーんだよ。たぶんリドルスキルの関係なんだろうけど、難易度が変わらないレベルでヒントを——いや、待て。

俺の脳裏に、電流のような閃きが走る。

そうだ。なぜ、ギルドの資料には、フェイズ3の情報が詳しく乗っていないかったのか。

フェイズ1では玉手箱の場所は書いていなかったが、老化の速度等については書いてあった。

次のフェイズ2では、乙姫の誘惑についてや、戦闘形態時の攻撃方法、人間形態時に与えたダメージが、戦闘形態のヘイトとブレスの威力に繋がることも事細かに書いてあった。

なぜならば、そこまでは書いても問題なかったから。

ではなぜ、このフェイズ3では、浦島太郎を倒して終わりとしか書いていなかったのか。

それは、それ以上書いてはマズかったから。

逆に言えば、書いてある情報自体に嘘はない。

浦島太郎を倒せば終わり。これが、書ける範囲で最大のヒントだ

つたとすれば……。

つまり、倒すべき浦島太郎とは――！

『みんな、付いてこい！』

それだけを言い、ユウキの背に飛び乗る。

向かうは、フェイズ1で玉手箱があった家。

確証はない。だが、『本物の』浦島太郎がいるとすれば、そこしかない……！

――はたして、俺は賭けに勝った。

家の扉を蹴破って中へ突入した俺たちの前には、空の玉手箱を前にへたり込んだ老人の姿があった。

数百年間死なずに老い続けたらこうなるのだろうかというほどに枯れ果てた、まるで動くミイラのような男。

……やはり、そういうことだったか。

先ほどまで戦っていた浦島太郎は、いやフェイズ1やフェイズ2すらも、この浦島太郎が空の玉手箱の中に見ていた夢だったのだ。

それこそが、イレギュラーエンカウント浦島太郎の全貌……！

『ユウキ！』

人狼形態の右腕が振るわれ、老いた浦島太郎の身体を真つ二つに両断した。

まるで小枝を折る様な手ごたえ。

あまりの手ごたえの無さに、あるいはこれもダミーだったのか？と疑いを抱いたその時。

家の外で蓮華たちが足止めしていた若いころの浦島太郎が消え、

同時に周囲の景色も歪み、俺たちは気付けばフェイズ1の廃墟の中にいた。

これは……と周囲を見渡していると。

「全てを、失うぞ……」

地面に転がった浦島太郎の上半身が、突然言った。

まるで樹のうろを風が通り抜けた時のような、空虚な声。

反射的にそちらへと顔を向けると、落ちくぼんだ眼窩と眼が合った。

「お前も、人外に魅入られておるのだらう……？」

無言の俺に、老いた浦島太郎は、まるで訴えかけるように語り掛けてくる。

「人外どもの感覚は、人間とは、違い過ぎる」

「……………」
「奴らにとっては祝福であろうと、人間にとっては、それは……」
「———それでも、俺は後悔なんかしない」

気付けば、俺はそう言っていた。

イレギュラーエンカウトとも対話したところで、隙となるだけと言うのに……。

どうしても、この男が他人に思えず、そう返事をしてしまっていた。

そこで、ちょうど蓮華たちが廃墟の中へと入ってきた。

カードたちに囲まれる俺を見て、浦島太郎が微かに笑った……気がした。

「若い、な。良いだろう。持っていけ……」

そう言って、浦島太郎は俺に玉手箱を指差し……今度こそ完全に消滅した。

同時に周囲の景色も解けるように消えて行つて——いつの間にか、俺はコンクリートの道路に立っていた。

すべてが幻だったのかと錯覚しそうになる中、俺の目の前には確かに浦島太郎の魔石と、玉手箱が存在していた。

『マスター！ 敵です！』

俺がそれを拾い上げた瞬間、ユウキがこちらに迫る敵の気配を察知し、鋭く警告を飛ばした。

それは、襷褌切れのような服を身に纏い、憎悪と苦痛に顔を歪めた怨霊——Cランクモンスターのレイスだった。

一直線に俺目掛けて迫る怨霊の前に鈴鹿が立ちふさがり、その手に持った二振りの刀で十字に切り裂く。

漏尽通（除霊）の力を宿した三明の剣の前に、レイスは断末魔の雄たけびをあげて消えていった。

コツンと音を立ててカードが地面へと落ちる。

イライザがそれを回収するのを他所に、俺は周囲をぐるりと見渡した。

「もうこのランクのモンスターが……」

街のいたるところから上がる黒煙と、四方八方から響き渡る獣たちの咆哮。

眼に見える範囲の建物は、すべて大なり小なり破壊され、ひび割れたアスファルトの地面には、真新しい赤黒い血の跡が……。

「ッ……！ 行こう……」

獣たちのおたけびに混じって、人間の悲鳴が聞こえた気がして、俺は逃げるようにワイバーンへと変身したマイラの背に乗り込んだ。マイラの変身時間が残っているうちに、愛のもとへと向かわなければ。

『救えるかもしれない人間』が眼に入らぬよう、ひたすら前をだけを見ながら飛ぶ。俺の背に絡みつく無数の手の幻影を感じながら……。

そうして、俺たちはようやく光の線の終着点へと辿り着いた。

「ここは……」

そこは、見覚えのあるダンジョンマートだった。

周囲がモンスターの襲撃により被害を受ける中、ポツンと無傷のままのそれは、忘れもしない。

俺たちが初めて潜った迷宮であり、かつてあの道化師と戦った迷宮だった。

「なぜ、ここに……」

ここの主を乗っ取って現れた……ってことはないだろう。

せっかくのお祭りに、わざわざ雑魚の身体を乗っ取って現れることとはあるまい。

ここには後から入っただけで、その身体は確実にCランク迷宮の主を乗っ取ったモノのはず。

それはつまり……。

——俺たちは、これからAランク相当のイレギュラーエンカ

ウント相手に、わずかに一枚の召喚枠で戦わなければならない、という
ことを意味していた。

第七話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】浦島太郎 その3

浦島太郎の第三フェイズでは、若かりし頃の浦島太郎との戦いとなる。

これは、浦島太郎が悪ガキたちから亀を救うシーンの再現であり、悪ガキの配役を与えられた冒険者たちに勝ち目は端からない。

仮に浦島太郎を倒したとしても、シーンの最初へと戻され、永遠に戦い続けることになる。

これを解除するには、フェイズ1同様、本物の浦島太郎を探すというリドルスキルを解かなければならない。

本物の浦島太郎の居場所は、冒険者たちの知識量によって変動し、何も知らなければフェイズ1で玉手箱を見つけ出した家にいるが、それを知っている場合は別の場所に再配置される。

本物がいる場所を間違えるたびに若かりし頃の浦島太郎が段階的にパワーアップしていき、そのステータスは最大で十倍近くにもなる。

なお、亀を殺してしまうと、一気に最大強化状態となってしまうため、厳禁。

第八話 人生で最も長い一日 (前書き)

コミカライズ二巻もよろしく!

第八話 人生で最も長い一日

「あのさ……好感度下がること覚悟で言うけどさ」

誰もが険しい顔でダンジョンマートの自動ドアを睨む中。
ポツリと、そう呟いたのは鈴鹿だった。

「正直……諦めるってのも、選択肢の一つだと思う。フランク迷宮で、Aランクの死神と戦うなんて……無理だよ」

重い沈黙。

蓮華もアテナも……他のカードたちすべてが、何も言わない。ただ静かに、俺の返答を待っている。

無理、か。たしかにその通りだ。召喚制限にハンデの無かった浦島太郎戦ですらかなりの苦戦を強いられた。いや、苦戦どころか、アテナの覚醒がなければ危うく全滅していてもおかしくなかっただろう。

ギミック型の浦島太郎でそれなのだ。純粹な強さが試される戦闘型のハーメルンの笛吹き男相手に、わずか二枚の召喚制限で立ち向かうのは、もはやただの自殺行為。それは、俺もわかっている。だが……。

「……………」

静かに目を閉じ、冷静に自分の心を確かめる。

……うん、大丈夫だ。迷いはない。

俺は、まっすぐに鈴鹿の眼を見返すと、言った。

「ありがとう、鈴鹿。だが、それはできない」

「………すでに手遅れだったとしても？」

「そうだ」

俺は即答した。

……彼女の言いたいこともわかる。

愛と子供たちが攫われてから数十分。はっきり言って、時間が経ちすぎた。

考えうる限り最短で浦島太郎を倒してきたつもりだが………それでもこの数十分という時間は、ハーメルンの笛吹き男が、子供たちを皆殺しにするには十分過ぎる時間だった。

だが、それでも俺は、まだ愛が……愛だけは、生きているという確信があった。

——なぜならば、俺はおそらく俺の眼前で愛を殺してやろう、と考えているだろうからだ。

そうでなければ、ここまで用意周到に俺を家族から引き離そうとはしてこないだろう。

奴は、俺のこのアンゴルモアでの行動を——あるいはもっとずっと前から——見た上で、あえて愛を攫ったのだ。

すべては、俺が大事にしている存在を目の前で奪うため……。

お袋をついでに攫わなかったのは、奴の嗜好からか。

故に、おそらく愛はまだ無傷のはず。

もちろん俺が遅すぎればその限りではないだろうが……おそらくは、まだ許容範囲。

むしろ、ここで俺が諦めたその時こそ、愛の死は確定する。

それはもはや、仮にすでに愛が死んでいたとしても、精神的には

俺が殺したようなものだった。

俺は、兄として、わずかでも愛が生きている可能性がある限り、絶対に助けに行かなければならないのだ。

「……だよねえ。マスターならそうするよねえ。わかってた、わかってたけどさあ」

俺の答えを聞いた鈴鹿は、ガクリと頂垂れ、深いため息を吐いた。

「あゝあ、どうせみんなこれで私のこと、もっと嫌いになったんだろうなあ」

「……いえ」

嘆く鈴鹿に、そう首を振ったのは意外にもアテナだった。

「むしろ妾は、貴女のことを見直しましたよ。嫌われるとわかっていても、必要な選択肢を提示するのは……とても勇気のいることですからね」

「クソガキ……!!」

「あなたの評価を、道端のゲロから、蛆虫に格上げしておきます」

「クソガキ……!!」

「……お前ら、意外と仲良いよな」

蓮華が呆れたようにつぶやいた。

「しかし、どうしたもんか……」

召喚枠は、たった二枚。誰を呼び出すべきか。

単純に数で言うならば、蓮華とケルトの三相女神だ。蓮華にドレスを装備化させれば、戦闘力を共有する黒闇天にも戦闘力向上の効

果が共有される。

だが、切り札である鬼子母神のスキルはすでに使用済みな上に、ケルトの三相女神の特殊スキルもハーメルンの笛吹き男とはやや相性が悪い。

どちらとも眷属召喚とのシナジーがあつて最大の効果を発揮するスキルだからだ。

だが、他のメンバーを見ても、二相女神や三相女神ほどのアドヴァンテージを有するカードはいない。

どうするべきか……。

「……誰を呼ぶか迷ってんなら、とりあえずアタシとアテナにしておけ。奴のスキルについてはわかってんだろ？」

「そう、だな……」

奴の力を考えれば、確かに蓮華とアテナは外せない、か。

————ピピピピ。

その時、カードギアに着信があつた。

………重野さんか。

「はい、北川です」

「北川さん！ 良かった、繋がった！ あれからどうなりましたか？ 子供たちは救出できましたか？」

「いえ……実は————」

俺は道中で浦島太郎と遭遇して、未だハーメルンの笛吹き男と戦えていないことを伝えた。

『そうですか……浦島太郎と。このタイミングで奴と遭遇してしま

うとは、不運……いえ連携でしょうか？」

「おそらくは……ハーメルンの笛が指し示す進行方向上に待ち構えるようにいましたから」

『偶然と言っには出来すぎている、と。ところで……その、老化の方は大丈夫ですか？』

「それは……幸いなことに大丈夫です。フェイス1は、十分ちよつとでクリアできたので」

『そうですか！ それは、良かった……。いえ、私も浦島太郎と出会ってしまったことがあったので』

「重野さんも？」

なるほど、そうだったのか。

重野さんは、どう見ても初老に差し掛かっている。迷宮が現れた二十年前の時点で、三十は確実に超えていただろう。その年齢で、フルシンクロができるほどリンクに習熟しているのは妙だと思っていた。

浦島太郎に遭遇したことで老化し、引退せざるを得なくなったと考えると頷ける。

『ところで北川さん。ここからが本題なのですが……』

「はい」

『我々ギルドは、救援の人員を送らないことを、決定いたしました』
「それは……」

『すいません……。本来であれば、子供たちを守れなかった我々が真っ先に動かねばならないところなのですが、我々はシエルターから移動できない決まりとなっているのです。こういう場合、代わりに自衛隊が動くことになっているのですが、なぜか連絡がつかず……』

「……………」

やはり、いまだ自衛隊は機能不全となっているままなのか。
これはもう、今後も自衛隊は頼りにならないことを前提に動くべきだな。

『そこで、北川さんがハーメルンの笛吹き男の討伐に動くのであれば……の話なのですが』

「なんででしょうか？」

やっと本題が来たか、と少し期待しつつ俺は答えた。

単に救助を送れないというだけなら連絡してくる必要はない。

ならば……？

そうして、続く重野さんの言葉は、俺の期待通りのモノだった。

『人員は送ることができませんが、その代わりにカード等の支援物資なら送ることができます。もちろん、相手が相手ですからロストの可能性も考慮して、返却の必要はありません』

よし！ と内心でガッツポーズをする。

だが、問題はどんなカードを送ってくれるかだ。Cランクカードや生半可なBランクカードでは、この枠に限られた状況では大した助けとはならない。

そう考えていると、カードギアにメッセージが送られてきた。

それは、支援物資のリストであった。

リストには、ハーメルンの笛吹き男との戦いで役立つであろうアイテムに加え、三枚のBランクカードが載っていた。

『その魔道具類に加え、そのBランクカードの中からどれか一枚。それが、当ギルドが送れる最大の支援になります。……すいません、それ以上は私の権限でも難しく』

そう詫びる重野さんに対し、俺の意識はその三枚のカードの一枚に釘付けとなっていた。

これは、やはりそうなのか……そうということ、なのか？

「……………」

『……………北川さん？』

グルグルと思考を巡らせていた俺は、重野さんの怪訝そうな声にハッと我に返った。

「すみません、少し考え込んでいました」

『いえ、それでどれにするか決められましたか？』

「ええ。俺が欲しいのは————」

俺は頷くと、そのカードの名を告げた。

『では、本当に救援はいららないんですね？』

「ああ」

数分後。

八王子駅にひとつ飛びしてカードと物資を受け取って来た俺は、ダンジョンマートで何か使える物がないか物色しながら、アンナとカードギアで話していた。

店内は、死神の気配を察してか不自然なほど荒らされていない。以前戦った時に役立った催涙スプレーなどを無造作にカゴへと詰め込みながら、俺はアンナへと答える。

「正直、ここで全員が共倒れになる方が怖い。みんなは学校を守ってくれ」

わずか二枚の召喚制限のことを考えれば、人手は少しでも多い方が良いのはわかっている。

だが、俺は彼女たちをこの戦いに巻き込むつもりはなかった。

それは、彼女たちのデッキの戦力や学校を守ってもらいたいのもあったが、一番の理由は、これが極めて個人的な戦いだからだった。愛は、俺にとっては世界でたった一人の大事な妹だが、他の皆にとってはさして話したこともない友人の妹に過ぎない。その他大勢の子供たちにしても同じこと。

それを助けるために、Aランク相当のイレギュラーエンカウントとの戦いに皆を巻き込むわけには、さすがにいかない。

ハーメルンの笛吹き男のスキルを考えれば、なおさらのこと。

故に、この戦いは俺一人で片を付ける必要があった。

……相手方も、それがお望みだろうしな。

「俺への助けは、頼んだ物を送ってくれるだけで良い。……そっちにはお袋もいるしな」

『そう、ですか……。わかりました。頼まれたものはそろそろそちらへ着くと思います』

「ありがとう」

『……必ず帰ってきてください』

アンナとの通話が切れるとほぼ同時に、ダンジョンマートの外にフワリと翼の生えた馬が降り立った。

その背に跨るのは、デユナミスを装備した麗しいエルフの女騎士ターニヤ。

俺が店の外へ出ると、ターニヤはわざわざペガサスから降りて、部屋に置きっぱなしにしていた俺の迷宮攻略用のバックパックを一つ手渡してくれた。

「……ご武運を」

「ああ」

短くそれだけやり取りをして、彼女はペガサスへと跨って飛び立っていった。

それを数秒見送り……。

「よし、行くぞ！」

パンと頬を叩いて気合を入れ直し、店内へと戻る。

カゴに入れてあった諸々のモノをバッグに詰め込んで、奥へ。

店内とゲートを遮る扉の前に立った時、ユウキがスンスンと鼻を鳴らしながら警告してきた。

「マスター、扉の向こうにモンスターの気配が……」

俺はそれに頷き返し、皆の準備が整っているのを確認してから、扉を開いた。

その途端、扉に張り付いていたモンスターたちが、店内に雪崩れ込んでくる。

ゴブリン、ワイルドウルフ、スライム、アルミラージ、コボルト
————なんだと?????

俺がモンスターたちの顔ぶれに疑問を持つと同時に、蓮華の手から放たれた雷の奔流がモンスターたちを一掃した。

「……今の見たか？」

パラパラと魔石やカードが落ちる中、俺はカードたちへと問いかけた。

「ああ、Eランクのモンスターが混じってた」

そう蓮華頷くと同時、迷宮のゲートから新たなモンスターたちが溢れ出してくる。

その中には、ゴブリンたちFランクのモンスターに混じって、コボルトやヘルバウンドといったEランクが混じっていた。

「育ったか……！」

どういう理屈かは知らないが、迷宮の中にはアンゴルモア中はその規模を拡大するものもあると聞く。

この迷宮もFランクからEランクに育ったとすればッ！

俺たちは溢れ出してくるモンスターたちを蹴散らし、迷宮の中に突入した。

召喚枠数を越えたカードたちの侵入により、召喚されていたカードたちの内、枠を超えるカードたちがランダムで召喚解除される。残ったのは、イライザ、鈴鹿、アテナにケルトの三相女神たち。

「よし！ やはり四枠になってる！」

グッ！ と拳を握りしめてから、ふと疑問に思う。

奴もこの迷宮が育ってることは、気づいているはず……。

単純にこちらの召喚枠を削りたかったのなら、他のFランク迷宮を選べばよかっただけのこと。

にもかかわらずここを選んだのは……この迷宮で戦うことに拘ったか、あるいは俺たちへの手心のつもりか。

多分だが、拘りの方っぴいな。ここはいろいろな意味で思い出の地。

イレギュラーエンカウントの中でも奴はそういう演出に拘りそうなイメージだった。

いずれにせよ、俺たちにとっては、好都合。

これで、大分楽になる。少しだけ勝機が見えてきた。

すかさず、メンバーを蓮華、アテナ、ケルトの三相女神、そしてユウキに入れ替える。

護衛役となるイライザではなくユウキを召喚したのは、迷宮内の移動と索敵のためだ。

ここからは、いつハーメルンの笛吹き男と遭遇してもおかしくないという前提で動く。

ユウキに縄張りの主を発動させてモンスター除けをさせると、彼女の背に乗り込んで、最下層へのルートを駆け抜ける。

文字通り風を超える速度で、一歩ごとに地面にクレーターを作りながら、踏み抜いた罅が発動するよりも疾く。

ドレスの装備化の力もあり、ユウキは一階層十数秒とかわらずに次々と突破していく。

いつしか俺たちは、かつて一週間かけた道のりを数分で踏破できるようにになっていた。

「む……！？」

十二階層目か十三階層目か……正確な階層は数えていなかったからわからないが、その階層に足を踏み入れた瞬間、俺たちは明らかに変わった雰囲気之急ブレーキを掛けた。

腐臭漂う薄暗い黒の森……。

振り返ってみれば、そこには階段は無かった。

『到着したか……。ユウキ、愛たちの居場所はわかるか？』

俺の問いに、ユウキはスンスンと鼻を鳴らした後、渋面を作って首を振った。

『すみません、あまりに他の臭いが強くて……』
『そうか。仕方ない。……よし、一度戻れ』

俺はユウキを戻すと、代わりに鈴鹿を召喚した。

『鈴鹿、愛たちを追跡してくれ』
『なるほどね、了解』

大通連と小通連を渡しながら言う俺に、鈴鹿がニヤリと笑う。
神通力スキルのうち宿命通は、過去視の能力である。初等クラスまでは物質の記憶を読み取るサイコメトリーが精々だったが、中等クラスともなれば、近い過去の映像を見ることが可能となる。

追跡スキルを持つ鈴鹿ならば、過去の映像であってもそこからマ
ーキングして愛たちを負うことができるはずだった。
そうして愛たちの痕跡を追って移動を始めた俺たちであったが…
…。

『……マスター、またあつたよ』
『糞ッ……!!』

鈴鹿からの報告に、俺は舌打ちした。

だが、その時俺の胸にあつたのは、怒りではなく、焦りと恐怖…
…そして罪悪感であり、この態度も虚勢に近かった。

俺たちの視線の先には、ハーメルンの笛吹き男からの『メッセー
ジ』があつた。

モズの早贄のごとくお尻から口まで串刺しにされた、少年の死体。
顔と喉を掻きむしった後が見られるその苦し気な形相からは、生

きたまま串刺しにされたことが窺えた。

ただ殺すだけではなく、可能な限り苦しめることを目的とした、あまりに惨たらしい死に様。

だが、それだけならば、俺も同情はすれど、ここまで胸をかき乱されることはない。

似たような『アート』は、かつて奴と遭遇した際にも眼にしているからだ。

問題は……この少年が、明らかに愛と共に攫われた子供たちの一人であることだった。

……愛の代わりに、攫われた子供たちが奴の暇つぶしに弄ばれている可能性については、俺も思い至っていた。

奴にとって必要な人質は、愛一人。そのほかについては、オマケならば、その扱ひも手ごろに摘まめるお菓子……いや、お菓子についてくる玩具程度となる。

ここまでなるべくそのことについて考えないようにしてきたが……こつとして現実を目の前に突きつけられると、胸を万力で締め付けられるような気分だった。

俺がギルドへと送り届けたりしなければこの子は、ハーメルンの笛吹き男に眼をつけられることもなかったのでは……？

意味のない仮定とはわかってはいるが、どうしてももそう考えずにはいられない。

こついった悪趣味なおブジェは、これまでもいくつも見つけていて、しかもそれは、明らかに愛たちのいる場所への道しるべとして置かれていた。

その事実が、俺の精神をガリガリと削ってくる。

さらに俺を追い詰めているのが――

『チツ！ マスター、また来るよ！』
『ッ……！』

鈴鹿の警告にそちらを向くと、森の一角が生き物のように騒めいていた。

一拍遅れて俺の足にかすかな振動が伝わってくる。

振動は徐々に大きくなっていった……ドーン！ と褐色の塊が飛び出してきた。

蓮華たちが魔法を次々と打ち込むと、塊がわずかにばらける。

血と臓物をまき散らしながら吹き飛ぶパーツを良く見れば、それが一匹のドブ鼠であることがわかる。

塊の正体は、無数のドブ鼠たちの集合体で……。

一一一そして、数千もの鼠たちで構成されたそれは、一体一体がBランクの戦闘力を持っていた。

襲い掛かる鼠たちの津波にカードたちが俺を守るように方陣を組む。鈴鹿とモリガンが壁となり、後衛陣がそれを援護する。

重力波、流星群、雷の雨、マグマの奔流と様々な攻撃魔法が撃ち込まれるも、鼠たちの勢いはまるで衰える気配はない。

鼠たち一匹一匹の強さはさほどでもない。戦闘力は、Bランク最低クラス。本来ならば、『破壊と殺戮と勝利の宴』を使用したウチのカードたちの敵ではない。

……それが少数ごと、間をおいてのものならば。

数千もの大群によるいつまでも続く襲撃に、鈴鹿たち前衛の生命力は、少しずつ着実に削られていく……。

『う、く……！ マスター、もう限界！』

『クッ！ あと三十秒耐えてくれ！ あと二十秒、十秒……アテナ

「わかってます！ アイギスよ！」

俺たちの身体をアイギスの絶対防御の光りが包みこみ、攻撃して来た鼠たちが次々と石化していく。

それにホッと息を吐く間もなく、俺たちはすばやく回復魔法で傷を癒すと、簡易神殿と回復魔法の魔法陣で簡単な陣地を敷く。

ギリギリのところでは陣地の形成に間に合ったところで、アイギスの絶対防御の光が消えた。

簡易神殿と回復の魔法陣のおかげで、ようやく前衛たちの壁がなんとか安定する。

それから鼠たちの津波は優に数分は続き、永遠にも思える長さのそれを耐え抜いた時、俺たちは体力も魔力も尽きかけ、死屍累々となっていた。

地面に蹲り、リンクの負荷でズキズキと痛む頭を抑えながら、俺は地面を殴りつけた。

「クソツ！ いくらなんでも反則的すぎんだろ……！」

鼠たちの一体一体の強さは、問題はない。

問題は、その数……いや、増殖スピードにあった。

ハーメルンの笛吹き男が召喚する鼠たちは、特にこれと言った戦闘用のスキルを持たない代わりに自己増殖……自分と全く同一の個体を召喚するスキルを持つ。

その増殖速度は、一分間に二十体。呼び出された眷属がさらに眷属を呼び、文字通り鼠算式的に増加していく。

幸いにしてその総数には上限があるらしく、最大数は一万ほどで止まるようだが、それだけいたら無限とほぼ代わりなく、どれだけ減らしてもすぐに上限まで回復してくる。

たとえば一体一体が雑魚（それでもBランククラスだが）でもその

数は脅威的で、俺たちは、消耗を回復するために襲撃の度にアマリタの雨の使用を余儀なくされていた。

俺は、アテナを戻し、一枚のカードを取りだした。

それは、蓮華のロスト復活用にこれまで死蔵して来たもう一枚の吉祥天のカードだった。

蓮華と違って、大人の色気を漂わせる妙齡の女神が姿を現す。

それを見て複雑そうな顔をする蓮華を他所に、俺は吉祥天へと言った。

「吉祥天、アマリタの雨を頼む」

「やれやれ、またか……まったく我は回復アイテムではないのだぞ」

吉祥天はぶつくさそう言いながらアマリタの雨を使うと、カードへと戻っていった。

……この吉祥天が神のプライド持ちじゃなくて本当に助かった。

おかげで、吉祥天のノーマルアマリタ使用 蓮華の真アマリタ

吉祥天のスキル回数回復 ノーマルアマリタ使用 というサイクルにより、真アマリタの雨の使用回数を最小限に抑えることができる。

ノーマルアマリタにはスキル回数回復効果が無いが、だからこそノーマルアマリタの使用回数は真アマリタで回復させることができるという、ちよつとしたテクニクだった。

それでもすでに蓮華のアマリタの雨を五回も使ってしまったというのが、この階層に入ってからからの激戦っぷりを物語っているのだが……。

「……ハーメルンの笛吹き男の眷属召喚が、これほど厄介だったとは」

かつて戦った時は本体であるハーメルンの笛吹き男の戦闘力が低かったためか、鼠たちの上限も百体程度と少なく、状態異常耐性も低かったため大した脅威ではなかった。

催涙スプレーなどで簡単に行動不能にできたからだ。

だが、Bランクとなつて状態異常耐性も相応に上がった鼠たちには、ダメ元で上のダンジョンマートから持ってきていた催涙スプレーも当然のごとく効果が無く。

高等状態異常魔法やアイギスによる石化カウンターは効果があったが、状態異常に掛かった個体を他の鼠たちが即座に始末（というか後続に踏みつぶされて破壊）されるため、封殺するには至らなかった。

アマリタを使わずに、マヨヒガやアテナの疑似安全地帯に籠つて襲撃をやり過ぎしたり、時間をかけて回復するということも考えた。が、そのやり方ではこちらが回復するまでの間に相手も数を回復されてしまうし、俺たちが出てくるのを待ち伏せしてからの戦闘回復の無限ループに嵌ってしまうことが容易に予想できる。

結局、俺たちは襲撃の際に出来る限り敵の数を削つて、それが回復するまでの間に少しでも進むという方法を選ぶしかなかった。

今はとにかく、愛の元にたどり着くまでに真アマリタの使用回数が持つことを祈るばかりだった。

それから。

度重なる襲撃に、ついにアマリタの雨の使用回数が最後の一回となり、俺の心を本格的に絶望が覆い始めた時……。

『マスター！　ここ！　着いたよ！　ここにいるー！』
『なにッ！？』

俺たちは、ようやく愛たちのところへとたどり着いた。

そこは、森の中の少しだけ開けた空き地で、一見すると何も無い。

だが……。

俺は懐から真ん中に穴の開いた石……アダーストーンを取り出すと、石の穴を覗いて周囲を見渡してみた。

すると、そこには案の定、古風な和民家がポツンと建っていた。

「ビンゴー！」

愛には、マヨヒガのカードを預けていた。

そこに籠って、鼠たちの襲撃をやり過ごしていたのだろう。

つまり、愛はまだ生きている……！

すぐに鈴鹿をオードリーへと切り替えると、俺たちはマヨヒガの中へと突入した。

『アテナ！ 今すぐ疑似安全地帯を！』

ハーメルンの笛吹き男が、愛を襲うとしたらこのタイミングしかない！

俺が愛と再会した瞬間に、転移してきて俺の前で愛を殺そうとしてくるはず。

故に、このタイミングで疑似安全地帯を張る！

アテナが頷き、大盾を掲げると力の波動が一带へ広がった。

————……チツ！

その瞬間、俺はハーメルンの笛吹き男の舌打ちが聞こえた気がした。

同時に、この迷宮に入ってからずっと感じていた奴の気配が遠ざかっていく……。

だが、まだ安心するには早い。それは、愛の無事を確認してからだ。

「愛！ どこだ！ 迎えに来たぞ！」

大声で叫びながら屋敷へと上がると、すぐに反応があった。建物内部の景色が歪み、玄関正面に大広間の襖が出現する。それが勢いよく開け放たれ……！

「お兄ちゃん！」

愛が、勢いよく飛び出してきた。

俺は、両腕を広げてそれを受け止め、強く抱きしめた。

「うあああああああ！ 怖かった！ 怖かったんだよおおお！」

「ああ……もう大丈夫だ」

この小さく細い身体が、ちゃんとまだ温かいことを心から感謝しながら、俺は泣きじゃくる妹の頭を撫で続けるのだった。

第八話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】知の神の権能

知を司る神の権能は、人類の集合知とこれまでロストしてきた同種たちの『記録』へのアクセスを可能とする。

集合知は、人類誕生から現在に至るまでの『死者たち』の知識の集積であり、俗にいうアカシックレコードである。

その性質上、知の権能でアクセスできるアカシックレコードは、古くて多くの人を知りうる知識ほど検索しやすく、新しくて一部の人しか知り得ない知識ほど検索に時間がかかり、またあくまで人間の目線での物であるため、必ずしもその情報が正しいとは限らない。この欠点を補完すべく、知の神の権能は、これまでロストしてきた同種たちの『記録』をも共有している。

これにより、知の神という人間以上の視点から俯瞰的に情報を精査し、また比較的新しい情報を共有することが可能となっている。

そのため、時代が進めば進むほど知の神の権能はその性能を深めていく性質を持つ。

ある意味で『成長する権能』と呼べるだろう。

第九話 人生で最も長い一日

「……お兄ちゃん、ちよつと顔つき変わった？」

ひとしきり愛を抱きしめて、身体を離したところで、俺の顔を見た愛が言った。

「なんかちよつと大人っぽくなったような……？」

「そうか……？」

俺は、自分の顔を撫でながらすつとぼけた。

浦島太郎によって老化した身体は、ここにくるまでの真アムリタのラッシュでほぼ元通りになっているはずだが、1〜2歳ほどは歳を取ってしまったのかもしれない。

が、そんなことはわざわざ愛に言つつもりはない。

浦島太郎との遭遇も、それによる老化も、愛は何も知る必要はない。

あまりそれに触れられなくなかった俺は、話題を逸らす意味も込めて愛へと問いかけた。

「それにしても、良くこんな奥まで逃げてこれたな」

入口からここまでかなりの距離がある。

正直、もつと浅い場所でマヨヒガに籠ってくれていたらもう少し楽だったんだが……。

ちよつとだけそう思いながら言うと、愛は涙ながらにここまで逃げて来た経緯を語ってくれた。

ハーメルンの笛吹き男にここに攫われてきてすぐ、愛はマヨヒガを召喚してそこに籠ったらしい。

これは、モンスターの姿を見かけたらすぐにそうするように俺が予め言い含めていたからで、そのおかげで異空間スキルを持たない鼠たちの襲撃は回避できたというわけだ。

しかし、お袋たちのところから愛を攫ったように、ハーメルンの笛吹き男は……というかイレギュラーエンカウトどもは、異空間型内部へ侵入することが出来る。

マヨヒガに籠る愛たちに対して、ハーメルンの笛吹き男は、時折現れては子供たちを一人ずつ攫っていったらしい。

愛たちは襲撃を受けるたびに少しずつ場所を移動し、気付けばこんな奥まで来ていたとのことだった。

「そうか……良く頑張ったな」

俺は愛の頭を撫でてやりながらその奮闘を労わってやるしかなかった。

突然ハーメルンの笛吹き男のような不気味極まりない怪物に襲われ、俺からカードを預かっていたことにより必然的に多くの子供たち命を背負うことになって。

しかし、どれだけ頑張っても一人また一人と攫われていく子供たち。その中にはきつと顔見知りもいたに違いない。

さぞ、恐ろしく辛かったことだろう。

「それで他の子供たちは？」

「こつち」

愛に手を引かれる形で、子供たちがいる部屋に案内される。

客室の多くを潰して形成したと思われる大広間では、子供たちが布団に包まって静かに眠りについていた。

大体百数十人ほどか……。それなりに大きな子が多い。どうやら愛と同じ学年の子供たちが中心に攫われたようだった。

これもハーメルンの笛吹き男の嗜好によるものか、あるいは単に一纏めになっていて攫いやすかったからか。

部屋の中央には、くるんとした羊の角を持った白髪の美女がいて、こちらに気付くとニッコリと微笑みかけてきた。

「アマルティアか」

「うん。パニックになってる子も多かったから眠らせてもらったの」「良い判断だ」

国からカードを配られている子供たちが、パニックになって良いことがあるとは思えない。

俺が愛でも同じ判断をしたことだろう。

「子供たちはこれで全部か？」

「う、うん……。ただ、何人かの男子が敵を倒すって行って飛び出していつちゃって……」

「……………」

俺は、何も言わずに愛の頭を撫でた。

男の子らしい冒険心の結果というにはその結末は悲惨すぎ、しかし愛が罪悪感を抱く必要がないことだけは、確かだった。

「……………愛」

一通り愛や、アオイちゃんやミオちゃんといった顔見知りの子供たちの無事を確認した俺は、愛へと向き直ると言った。

「俺はこれから愛たちを攫ったモンスターを倒しに行く。それまで

「ここで大人しく待てるな？」

俺の言葉に愛が動揺する。

「え？ ど、どうして？ ここで助けを待てば良いじゃん！」

「……助けは、来ない」

俺は伝えるか伝えまいか迷ったものの、結局はそう真実を伝えることにした。

助けが来ないのは、今だけの話じゃない。

これから先ずっと……下手したら永遠に、誰も助けしてくれない世界が来るかもしれないのだ。

ギルドが、子供たちをシエルターから攫われても人的救援を出せず、自衛隊とも連絡がつかないというのは、そういうこと。

もう、大人たちが守ってくれる社会は終わったのだ。

愛には、今のうちにそれをわかってもらおう必要があった。

「で、でも……！」

なおも言いつのろうとする愛を、ふわりとアテナが抱きしめる。

「大丈夫。大丈夫ですよ、愛。妾がついていますから」

「……………うん」

それでやっと愛も安心したのか、身体の力を抜いて頷いた。

そんな愛の頭を撫でてやりながらアテナがチラリとこちらを見てくる。

俺は無言で頷き返した。

疑似安全地帯を張っている間、アテナはその範囲から動けない。

安全地帯は、マスターが中にいる状態で外でカードに戦闘させて

も解除されるし、中にいるカードに外のカードへと回復や支援をさせても解除されてしまう。

つまり、ただでさえ召喚枠が少ない中、アテナ抜きでハーメルンの笛吹き男と戦わなければならぬということ。

だが、そんなことはわかりきっていたことだ。

アテナを愛たちの守りに置くことは、彼女のアイギスが解禁された瞬間から覚悟していたことだった。

『……しかし、どうやって倒す？』

これまで無言で俺たちのやり取りを見守っていた蓮華が、そう問いかけてきた。

『アムリタはあと一回。このままだとハーメルンの笛吹き男にたどり着くこともできずに鼠どもに食い殺されかねんぞ』

『……………』

実際、状況は苦しい。いや、絶望的と言って良い。

使用回数が十回に増え、早々使い切ることもないだろうと高を括っていた真アムリタの雨も残り一回。

無尽蔵に沸く鼠に対する抵抗策はなく、眷属召喚による数での抵抗も封じられている。

だが……。

『策はある』

俺はそう言うと、重野さんから受け取ったカードを取りだした。

【種族】アルテミス

【戦闘力】 800

【先天技能】

・満ち行く三日月の女神：月と獣を司る女神であるアルテミスの権能を使用可能。

・三相女神

・凍てつく月の世界

・双子神：伴侶や親兄弟などの密接な関係にある別の神の力を借りることができる。アポロンの先天スキルを一つ使用可能。

・遠矢射る：強力な呪いを込めた必中の弓矢を放つ。稀に即死。相手が女性であった場合、初撃に限って防御力無視、威力二倍。回数制限はないが、十分間のクールタイム有り。場にアポロンがいる場合に限り、攻撃対象が敵の女性全体に拡大される。装填、狩人スキルを内包する。

（装填：魔法を武器に籠めて放つことができる）

（狩人：狩人に必要な技能を収めている。武術、弓術、遠見、追跡、気配遮断スキルを内包する）

【後天技能】

・純潔の誓い

・神のプライド

・高等攻撃魔法

・高等状態異常魔法

一一一アルテミス。

俺が求めていた月の三相女神の一角にして、ユウキのランクアップ先。

残り二柱の神が揃えば、眷属封印の特殊スキルが使用可能となる。そして、その片方は、すでにこの手の中にある。

【種族】サキユバス（メア）

【戦闘力】1100（MAX!）（初期戦闘力450＋成長分450＋霊格再帰分200）

【先天技能】

- ・巫山の夢
- ・胡蝶の夢
- ・淫魔の肌

【後天技能】

- ・ファムファートル
- ・友情連携
- ・中等魔法使い
- ・高等状態異常魔法
- ・人を呪わば穴二つ
- ・生還の心得
- ・霊格再帰（CHANGE!）：リリム（700）、ヘカテ（950）。数値は、初期戦闘力。
- ・耐性貫通
- ・詠唱短縮
- ・高等攻撃魔法
- ・魔力強化
- ・魔力回復

【種族】ヘカテ（メア）

【戦闘力】1600（初期戦闘力950＋成長分450＋霊格再帰分200）（レベルアップ使用時2100）

【先天技能】

・欠けゆく新月の女神・月と闇夜を司る女神であるヘカテの権能を使用可能。

・三相女神

・凍てつく月の世界

・冥府の三叉路：ヘカテーの冥府神としての能力。自らが管理する冥府の一角を展開できる。月・夜闇・死・魔等の属性を持つ味方を強化（ステータスの大きな向上、持続回復、『生還の心得』を付与）し、それらの属性を持つ敵を弱体化（ステータスの大きな減少、衰弱、不死状態の解除）させる。

・魔女たちの女王：ラミアアの母とも呼ばれるヘカテーの騎行。眷属であるラミアアを召喚することができる。無限召喚型。高等魔法使いを内包する。

【後天技能】

・ファムファータル

・友情連携

・人を呪わば穴二つ

・生還の心得

・霊格再帰

・耐性貫通

・詠唱短縮

・魔力強化

・魔力回復

・巫山の夢

・淫魔の肌

ケルトの三女神との戦いで手に入れたメアの新たなキーアイテムそれは、ヘカテーへの霊格再帰を可能とするモノだった。ヘカテーは、月の三女神の中で最も入手が難しいとされるカードである。

その理由は、シンプルにその強さにある。

敵と味方にデバフ・バフをばら撒く強力な異界クラスの異空間型スキルに、同じBランクであるラミアーを無限に召喚可能。

ラミアーは、Cランクのモルモーを無限召喚でき、そのモルモーもエンプーサの無限召喚スキルを持つ。

これほどの展開能力を持つカードは、Bランクでも珍しい。

ネヴァン同様、三相女神でありながら単体でも十分に強いカードであり、それ故にセレーネーやアルテミスと異なり市場に出回るこ
とがまずないカード。

セレーネーとアルテミスが手元にあっても三相女神を揃えようとする者はいないが、ヘカテーが偶然手に入ったら何が何でも三枚を揃えようとする……そういうレベルのカードだった。

『月の三相女神による眷属封印、か。まあ、それしかねーだろうな。……だが、残りの一枚はどうする？』

『それは、これを使う』

そう言っ
て俺が取りだしたのは、ガーネットが入った宝石袋と宝籤カードだった。

アンナに届けてもらったもののうち、本命はこれだった。それを見た蓮華が小さく嘆息した。

『やっぱそうか……しかし、引けるのか？』

『引ける。確実に』

俺は、断言した。

メアの新たなキーアイテムがヘカテーのものと分かった瞬間から、俺の中にはある予感があった。

それは、いつか必ずヘカテーの……月の三相女神の特殊スキルが必要となる時が来るのではないか、というもの。

その予感
は、重野さんから受け取ったリストの中にアルテミスの

名があつた瞬間に確信へと変わった。

同時に、俺の中にあつた一つの疑惑もまた、確信へと変わった。すなわち、蓮華の中に眠る存在は、俺たちが勝手に警戒していただけで、少なくとも敵ではないのでは……ということだ。

思い返せば、その存在が介入してくる時というのは、俺の危機が迫る前ばかりだ。

大会前に都合よくアムリタを手に入れられたこと。猟犬使いに襲われる前にタイミング良く遭難のカードを手に入れられたこと。レース中に零落スキル持ちのサキュバスを手に入れられたことも、おそらくそうなのだろう。

極めつけが、パーフェクトリンクの副作用である。

浦島太郎との遭遇を前に偶然、都合よく、年を取りにくい副作用が出るなんてことがあり得るだろうか？

あり得ない。必然、そう考えるのが自然。

であれば、蓮華がパーフェクトリンクに危機感を抱けないのも当然である。俺には、パーフェクトリンクの効果以上に、その副作用こそが必要だったのだから。

確かに、蓮華の中のナニカが、全幅の信頼を置くには危険すぎる存在であることは、間違いない。

蓮華の中の存在がもたらしたものは、決して良いモノだけではない。

ハーメルンの笛吹き男との一度目の遭遇にしる、アンゴルモア前にホープダイヤなんて釣り餌をこれ見よがしに与えられたのにしる、おそらくは蓮華の中のナニカによる仕込みだろうからだ。

そう考えれば、この状況自体が、蓮華の中のナニカのせいと言える。俺自身の選択、自業自得によるものがあるとはいえ、だ。

しかし、それでも、事ここに至れば間違いない。

蓮華の中のナニカは、俺に死んでもらっては困るのだ。

その真意がどうであれ、それだけは間違いない。

——ならば、この後一手足りない状況でも、きっと介入があるはず。

俺は、胡坐をかいて座ると、袋の中のガーネットとダイヤを畳の上にはら撒いた。

残りのカーバンクルガーネットは、元々持っていた約70個に加え、先ほどアンナのターニヤに届けてもらった90個の計160個。ヴィーヴィルダイヤは、合計4つ。

ガーネットが20個あればBランクカードを引けるから、8回は引ける計算となるが……因果率の歪みのことを考えれば、チャンスはせいぜい5回。

その5回で、俺はセレナーを引き当てなければならぬ。さもなければ……。

俺は、アテナに抱きしめられた愛を見て、グツと唇を噛んだ。

「……やるぞ」

俺はそう言うと、蓮華とパーフェクトリンクを行った。

瞼の裏に広がる可能性の道は、そのほとんどが謎の闇に覆われて結果はおろか、道筋までろくに視ることが出来ない。

おそらくこれは、アングルモア中ずっと続くのだろう。

それでも宝籤のカードを引く程度の、直近の可能性の道くらいならなんとか見通すことができた。

これなら、なんとかカードのドロップや宝籤カードの運命操作くらいならできるだろう。

俺は祈る様な気持ちで一つ、また一つとガーネットの幸運を注ぎ込んでいく。

頼む！ 出てくれ……！

ガーネットが砕け散る音と共に、宝籤カードが変化する。

美しい女神の姿が垣間見え、俺の胸が期待に高鳴る。
まさか、一発で……！？ と、その名前を見て。

「フレイヤ……？」

しかし、それはお目当ての月の女神ではなく、北欧神話における
愛と豊穡の女神だった。

生と死、戦いを司る美しく力のある女神であるが、今俺が求めて
いるカードではない。

「く……っ！」

違うのか？ 俺の推測は間違っていたのか？ いや、まだだ！

あと4回チャンスはある！

俺はじわりじわりと湧いてきた不安を振り払い、ヴィーヴィルダ
イヤで因果率の歪みを解消すると、二度目の運命操作を使った。

「白虎……次！」

三度目。

「スレイプニル……まだだ！」

四度目。

「キ、キマリス」

ま、まずい。チャンスはあと一回。これで出なければ……。

俺の推測は、間違っていたのか……？

所詮は、都合の良い推測だったということか？

それとも、蓮華の中の存在であってもそこまでの力はない？
頼む、これで出てくれ！

俺はまさに神に祈る気持ちで五回目の運命操作を行う。
結果は————。

「よ、黄泉津大神……！？」

俺は、思わぬ結果に眼を見開いた。

黄泉津大神は、伊邪那美命いざなみのみことの黄泉での神格であり、Bランク最上位のカードである。

イザナミの頃の国産み、神産みの権能は黄泉戸よみとへを開くして黄泉の住人となつてしまったことで失われているが、代わりに黄泉神としての……死を司る権能を有している。

古事記によれば、イザナミは夫である伊耶那岐神いざなぎによる黄泉の国訪問の際、「お前の国の人間を毎日千人殺してやる」と呪いの言葉を放ったという。

黄泉津大神は、それを象徴するかのように『眷属殺し』のスキルを持つ。

それは、俺が求めていたスキルだ。

だが……黄泉津大神のそれは、一日に五回、その場の眷属を一掃するというもの。

通常であれば十分過ぎるスキルだが、無尽蔵に鼠を召喚できるハームルの笛吹き男には心許ない回数だ。

やはり、眷属封印でなければ……。

だが、気になるのは、なぜここで眷属殺しのスキルを持つ黄泉津大神が出た意味だ。

偶然か？ あるいは「これで乗り越えて見せる」ということか？
ならば、これ以上引いても無意味……？

五回までとはいえ、場の眷属を一掃できるなら、一回につき数分はハームルの笛吹き男と戦える余裕はある、か？

……いや、やはり無理だ！　せめて一時間は続く月の三相女神による眷属封印でなければ！

「……………」

やる、しかない……か。

俺は無言で、次の宝籤のカードを手に取った。

グイーグイルダイヤは使いきったが、ガーネットはまだ残っている。

まだ、Bランクカードを引くことはできるとのことだ。

さらに運命操作を使おうとする俺を見て、蓮華は「何も言わない。」

少し離れたところで愛の相手をしていたアテナもまた、静かに俺を見守るのみ。

もはや、色々と警告する段階は過ぎたということなのだろう。

これより先は、どのような結末であっても俺自身の選択によるもの。

俺も、誰かに責任を押し付けるつもりはなかった。

「やるぞ」

静かに告げて、六回目の運命操作を使う。

ズン！　と因果律の歪みが一気に重みを増す感覚。

初の二連続での歪みの蓄積は、一回だけの時と比べてはるかに大きな歪みとなった。

歪みの蓄積は、単純に足し算で増えていくのではなく、掛け算に近い形で増えていくのかもしれない。

やはり、これまで因果律の歪みを解消してからにしてきたのは、正しかった。

三連続の歪みの蓄積は、マズイ。直感的にそう理解する。

だが……。

「デイ、ディアーナ……」

月の女神ではあるが、こちらはローマ神話の神……。当然ながら、これでは凍てつく月の世界を発動することはできない。

どうする……？ 感覚的に、おそらくここが新たな死神を呼び寄せずに済む安全ライン。

「……知ったことか！」

こうなったら、三体目だろうが、四体目だろうが、何体でも相手をしてやる！

どうせハーメルンの笛吹き男を倒せなければ終わりなのだ。

今はただ、奴を倒すことだけを考える！

完全に吹っ切れた気分で、七度目の運命操作を行う。

これで駄目なら八回目。八回目が駄目だとしても……その時はあ
る手札で戦うのみ！

たとえ死んでも、奴に絶望した顔だけは見せてやらん！

そう決意する中、宝籤のカードが変化していく。

そして――――。

「みんな、準備は良いか？」

十数分後。

しばしの休息をとり、心身を休めた俺は、マヨヒガの玄関口で皆を振り返った。

そこには、蓮華、アテナ、ケルトの三女神……そして新たな三柱

の女神の姿があった。

満月を思わせる輝く金髪と深紅の瞳に、絶世のという表現が陳腐に感じるほどの極まった美貌。官能的な肢体を古代ギリシャ風の銀のドレスに包み、黄金の冠を頂いた満月の女神セレーネー。

ミニワンピース風の純白のドレスと胸当てに身を包み、満ち行く三日月を象徴するかのように、成長途中の少女の美しさと溢れんばかりの活力を漲らせ、身の丈ほどもある大弓を背負った三日月の女神アルテミス。

月の無い夜のような漆黒のドレスに身を包み、幼い風貌と裏腹にどこか老獪な雰囲気と妖艶さを漂わせた新月の女神ヘカテー。

それは、月の三女神となったイライザ、ユウキ、メアたちであった。そう、俺は賭けに勝ったのだ。

【種族】セレーネー（イライザ）

【戦闘力】2340（初期戦闘力1500＋成長分840）（レベルアップ使用時3000）

【先天技能】

・輝く満月の女神：月と魔法を司る女神であるセレーネーの権能を使用可能。

・三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・凍てつく月の世界：周辺一帯を月明かりが照らす夜のフィールドへと塗り替える。味方以外の眷属を一掃し、新たな眷属召喚を封じる。場に、アルテミス、セレーネー、ヘカテーの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日一回のみ。

・獅子座の護り：眷属であるネメアーの獅子を召喚可能。一日一

回、一体のみ。

- ・高等魔法使い

【後天技能】

- ・フェロモン

- ・暗殺

・献身の盾+頑丈 不滅の盾：防御系スキルの最高峰。後天スキルで、これ以上の性能の防御スキルは現状確認されていない。周囲の味方のダメージを肩代わりすることができる。使用中、防御力と生命力が三倍となり、一日に一回だけ一分間『不滅』状態となることができる。

（不滅：効果中、生命力以上のダメージを負ってもロストを免れることができる）

- ・精密動作

- ・魔力強化

- ・詠唱短縮 詠唱破棄

- ・直感

- ・フィンンの親指

- ・限界突破

- ・生還の心得（NEW！）

- ・神のプライド（LOST）

- ・魔力回復

・文武一道：魔導と武道……二つの道に通じる真理を理解した証。魔法系のスキルを物理系のステータスで、物理系のスキルを魔法系のステータスで発動することができる。

- ・膏血を絞る

【固有技能】

・マイフェアレディ（知恵の泉）：敵味方の内一体の後天スキルを一つコピーすることができる（？） 絶対服従、多芸、明鏡止水

を内包する。

(多芸：メイド、演奏、罨解除、武術、騎乗を内包する)
(メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、
礼儀作法を内包する)

【種族】アルテミス(ユウキ)

【戦闘力】2400(初期戦闘力1600+成長分800)(レベルアップ使用時3200)

【先天技能】

・満ち行く三日月の女神：月と狩猟を司る女神であるアルテミスの権能を使用可能。

・三相女神

・凍てつく月の世界

・双子神：伴侶や親兄弟などの密接な関係にある別の神の力を借りることができる。アポロンの先天スキルを一つ使用可能。

・遠矢射る：強力な呪いを込めた必中の弓矢を放つ。稀に即死。
相手が女性であった場合、初撃に限って防御力無視、威力二倍。回数制限はないが、十分間のクールタイム有り。場にアポロンがいる場合限り、攻撃対象が敵の女性全体に拡大される。装填、狩人スキルを内包する。

(装填：魔法を武器に籠めて放つことができる)

(狩人：狩人に必要な技能を収めている。武術、弓術、遠見、追跡、
気配遮断スキルを内包する)

【後天技能】

・忠誠

・小さな勇者

・本能の覚醒

・真なる者

- ・ 限界突破
- ・ 真眷属召喚
- ・ 縄張りの主
- ・ 高等忍術
- ・ 騎獣
- ・ 物理強化
- ・ 見切り
- ・ 純潔の誓い
- ・ 神のプライド（LOST）
- ・ 高等攻撃魔法
- ・ 高等状態異常魔法
- ・ 残滓結晶（NEW!）：かつて取り込まれ、ランクアップの際に失われた真眷属体の残滓……らしい。眷属体の人格・容姿情報を保存し、所有スキルの一部を有している。人物眼スキルを内包する。

ランクアップにより、ここ最近の強敵たちの出鱈目な強さに押されがちだったイライザたちも、名実共に一線級の戦力に返り咲いた。ネットワークだった戦闘力は、MAX時で約3000となり、限界突破を持たないがため一段劣るメアも、ドレスらの装備化を使用すれば、横に並び立つことが出来る。

だが、戦闘力の上昇以上に眼を引くのが、後天スキルの成長である。

文武一道、不滅の盾、詠唱破棄、生還の心得、残滓結晶……。

文武一道は、スキルの発動に求められるステータスを、自分の得意なステータスで判定できるという、特化型のカードを万能型とするレアスキル中のレアスキルである。

大抵のカードは、ステータスの偏りと同様にそのスキルも偏るか、

元々万能型のステータスとスキルのため宝の持ち腐れとなりやすいスキルだが、イライザのように多彩なスキルを持ち、セレーネーのような魔法特化型のカードにとっては、真の万能型となれる最高のスキルの一つである。

月の三相女神のデメリットの一つが、後衛型に偏ることだったが、これでその心配の一つも消えた。

不滅の盾は、防御系の最高峰となるスキルである。その効果は、献身の盾の完全上位互換。身代わり効果はそのままに、使用時のステータス上昇効果が三倍となり、さらに一日一回だけであるが不滅状態となれる効果を持つ。

つまり、浦島太郎戦のように、オーバーキルレベルのダメージを受け続けても一分間はロストせずにはすむというわけだ。

効果切れ後は、当然そのままロストしてしまうことになるが、効果切れまでにアマリタの雨等で全回復させればロストせずにはすむし、何よりイライザには生還の心得がある。

浦島太郎戦でのロストの経験により、いつの間にか取得していたこのスキルがあれば、高確率でロストを免れることができるだろう。このクラスのスキルとなると、ドロップした時に持っているものであり、育成により取得した例はほとんどないレベルのレアスキルとなる。

ハーメルン戦で蓮華を庇った瞬間から始まり、数々の戦いで仲間の代わりに血を流し続け、今ここにイライザはガード役として完成に至ったのだ。

この二つのスキルの他にも、詠唱破棄へのランクアップやヴァンパイアからの膏血を絞るの引継ぎ……そしてなにより、残滓結晶という失うだけだと思っていた真眷属召喚の思わぬ引継ぎ要素も嬉しい誤算だった。

人格情報やその後天スキルの一部を引き継げるのなら、これから

はガンガンカードを取りこませていける。……まあ、さすがに真眷属召喚をこれから活用できる機会はなさそうだが。

何はともあれ、無事にセレーネーを引くことができ、イライザたちも大幅にパワーアップさせることができた。

これでハーメルンの笛吹き男への勝ち目も大分見えてきた。

ハーメルンの笛吹き男の曲のレパートリーは、全部で五つ。

奴の戦闘力と同数を上限とした、自己増殖型の鼠を召喚し襲わせる【蝗鼠のカーニバル】。

自身の眷属を一掃し、自身のステータスを向上させる【レミングの行進曲】。

相手の眷属体のコントロールを奪い、敵全体に魅了の状態異常を与える【サーカスへの誘い】。

殺した子供たちの魂を死霊系モンスターとして召喚する【仔羊たちの晩餐会】。

そして視力と脚の自由を奪う【ハーメルンの笛吹き男】。

このうち、眷属召喚である【蝗鼠のカーニバル】と【仔羊たちの晩餐会】は、月の三相女神のスキルで封印。鼠百体につき10%、最大で十倍程度までステータスを向上させる【レミングの行進曲】に関して、連鎖的に封殺。

眷属強奪のスキルである【サーカスへの誘い】に対しては、眷属召喚をしないことで対応し、魅了の状態異常については元々耐性を持つメンバーが多いのと、耐性を持たないカードのためにギルドから精神異常耐性を上げるアイテムを受け取って来た。

唯一【ハーメルンの笛吹き男】に関しては対策らしい対策は取れなかったが……曲の大半は封殺することができた。

これで奴の脅威は半減したが……まだ油断はできない。

奴は、浦島太郎や狼と七匹の子ヤギのような複雑なリドルスキル

を持たない、純粋な戦闘型のイレギュラーエンカウント。

メインスキルである楽曲のほとんどもを封じても、まだまだ厄介なスキルを持っている。

覚悟を決めて、行かなくては……。

「じゃあ、愛。行ってくる」

「絶対、戻ってきてね……？」

「ああ。約束する」

最後に愛の頭を撫でて、アテナをチラリと見る。

彼女はコクリと頷いて、愛を奥へと連れて行った。

その姿が見えなくなるまで見送って、俺は玄関の引き戸に手をかけた。

すると、カタカタと扉がかすかに音を立てた。

最初は風かなにかかと思っただが……震えの発生源は、俺だった。

そこではじめて俺は、自分の手が震えていたことに気付いた。

手だけじゃない脚も震えているし、心臓もやけに大きく脈打っている。

「ああ……」

そうか。俺は、怖いのか。当然だ。いくら覚悟していたって、死ぬかもしれないのに恐怖を感じなかったら、それはただ壊れてるだけだ。

———どうする？ なんなら今回はアタシ一人で倒してきてやつてもいいぜ？

不意にそんな声が脳裏に蘇り、俺はハッと蓮華を見た。

彼女は、何も言わずに静かな眼差しで俺を見ている。

「ふ……」

小さく笑みが漏れた。

そうだな、俺はもう子守りが必要なマスターじゃない。

あの時の俺ですら立ち向かえたのだ。今の俺が出来なくてどうする。

深く、深く深呼吸をする。

すべての恐怖を吐き出し、代わりに詰め込めるだけの覚悟を身体へと取り込む。

そして。

「行くぞッ！」

勢いよく扉をあけ放ち、外へと飛び出した。

その瞬間。

「――ゲームオーバー」

痛みは、無かった。

ただ、ドンと何かに強く押されたような感覚だけがあった。

一拍遅れて、ズルリと視界が傾いていく。

落下する感覚の中、俺が見たのは上半身を失い突っ立った自分の

下半身と、表情を凍り付かせる蓮華たち。

「エンターテインメントは意外性がなくちゃネ！」

そして、してやったりと嗤うハーメルンの笛吹き男の姿だった。

第九話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】モンスターの現代兵器耐性

迷宮のモンスターやカードたちは、そのランクが上がるにつれ戦闘力の数値以上に現代兵器等に対する耐性が上がっていく。

Fランクのモンスター程度なら武道経験者なら銃無しでも倒せるが、Eランクになると銃無しでは到底太刀打ちできなくなり、現代兵器が通用するのはCランク……それも中位クラスまでとなる。

Bランクともなると、物理法則自体が通用しなくなり、たとえば兵器であっても倒すことはおろか碌なダメージも与えることができないとされている。

第十話 人生で最も長い一日 (前書き)

コミカライズ二巻、発売中！

第十話 人生で最も長い一日

――マスター殺し。

それが、ハーメルンの笛吹き男の二つ名だった。

あの戦いの後、俺は奴について隅々まで調べ上げていた。

そうして知ったのが、奴の真のスキルと、マスター殺しという異名。

死神呼ばわりされているイレギュラーエンカウントの中で、奴だけマスター殺しなんてたいそうな二つ名がつけられているのには、もちろん相応のわけがある。

絶対攻撃。奴の大鎌は、全ての防御を無効化し攻撃する力を持つ。それは、カードのバリアですら例外ではない。

瞬間移動と絶対攻撃。この二つのスキルにより、ハーメルンの笛吹き男は、低ランクの迷宮での出現であつてもプロを殺しうる極めて危険なイレギュラーエンカウントとして警戒されていた。

それを知って以来、俺はハーメルン対策を考え続けていた。

それは、いつか必ず来るであろう再戦の時を予感していたからだ。

対策は、すぐに思い付いた。

一つは、絶対防御で相殺すること。アテナを手に入れた時は、運命だと思った。マイナススキルこそ特盛であるが、それを何とか解除してアイギスが使えるようになれば、ハーメルンの笛吹き男に対する切り札になる、と。

だが、それは奴が愛を攫ったことで使えなくなった。

それが奴の思惑通りであることは理解していたが、俺はアテナを子供たちの護りに置かざるを得なかった。

対策は、もう一つあった。

本命は、絶対防御での相殺だったが、絶対防御の入手難易度は極めて高い。ハーメルンの笛吹き男との再戦までに手に入らない可能性は高かった。

故に、アイギスを手に入れるまでは、もう一つの方法こそが本命であった。

必要なのは、覚悟だった。

痛みを受け入れる覚悟……。

故に――――。

「な、に？」

ハーメルンの笛吹き男が、驚きに眼を見開く。

――――この奇襲も、想定済みであり。

むしろ罠に掛けたのは、俺の方であった。

ハーメルンの笛吹き男が、自身の胸を貫通した二本の槍を信じられぬと見下ろす。

いや、驚いているのは、槍にはない。

ほぼは無傷の俺のカードたちだった。

それを見て、俺は小さくほくそ笑んだ。

「ゴフツ……読み、切った、ぞ」

バリアが役に立たないのならば、初めからそんなものは切っておけば良い。

枚数分……八枚分のマルチフルシンクロしておけば、俺がダメー
ジ負った後、カードたちがそのフィードバックを受けることも無く
なる。

その分、奴に反撃する余裕が、生まれる……。
俺の仕事は、痛みへの覚悟と、シンクロを維持するために意識を
手放さないこと……。

あとは、信頼するカードたちが、やってくれる……。

「あ、ガ……ッ」

だが、嗚呼……。

腹が、熱い。まるで巨大な鉄板の上で焼かれているかのよう。そ
れでいて、じわじわと背筋を上ってくるおぞましいほどの冷気。

自分の意思と反して脳が勝手に脚を動かそうとして、しかし腰か
ら先はなく、その喪失感に行き場を失った電気信号がビクビクと腹
筋を痙攣させる。

その度に、内臓や血と一緒に命が流れ出て行くのがわかる。

身体を真つ二つにされるといふのは、想像以上に、想像を絶する
ものだった。

いつそ感覚を麻痺させてくれりゃ楽なのに、脳内麻薬でピンピン
に活性化した脳は、その全てを詳細に把握して余すことなく俺に伝
えてくる。

そんな地獄の中で、しかし俺はフルシンクロだけは維持し続けて
いた。

それだけが、この狂気の時間の中で唯一正気を保つ術だった。

『マスター！』

『クソッ、無茶しやがって！』

時間にして一秒か二秒か。体感的には限りなく長い時間を耐え忍

んでいると、ようやく現実が体感時間に追いついてきた。

ユウキが俺の身体を抱き上げ奴から距離を取り、蓮華がさかさず十回目のアムリタの雨を発動する。

俺の上半身と、切り離された下半身が光に包まれ、一つへと戻る。死んでいなければありとあらゆる傷を癒す神の雫は、俺の身も心も完全に元通りにしてくれた。

それでやっと余裕を取り戻した俺は、ニヤリと蓮華に笑ってみせた。

『だが、賭けには勝った……』

身を挺して奴の攻撃を誘導するこの作戦には、致命的な欠けがあった。

それは、脳天から真つ二つにされたり、頭を砕かれたりして即死した場合に、全滅してしまう可能性があったことだ。

だが、俺はこれまでの過程からそれはないと踏んでいた。

なぜなら、それじゃあハーメルンの笛吹き男が俺の死に様を楽しめないからだ。

俺が驚き、絶望する顔を見たい……奴は必ずそう考えているはず。故に、俺が何もわからず死ぬような真似はしてこない、という確信があった。

結果として、俺は賭けに勝った。

「チッ！」

奇襲の失敗を悟ったハーメルンの笛吹き男の姿がかき消える。

瞬間移動。絶対攻撃のクールタイムが回復するまで、逃げきろうというのだろうか。

だが。

『逃がすか!』

そうはいかせるか!

絶対攻撃のクールタイムが回復する十分以内に、片を付ける!

奴の瞬間移動能力も、無制限というわけではない。

短距離転移は、最大100メートルの連続使用は二回まで。再使用には、一分間のクールタイムが必要となる。

愛たちを攫ったような長距離転移も、なぜか戦闘中は使ってこないというデータがある。おそらく、何らかの条件があるのだろう。

200メートルの距離などBランククラスにとっては一瞬の距離。高等忍術持ちの俺たちならば猶更のこと。

そして、奴の存在はすでにマーキング済み。ユウキの狩人のスキルでどこまでも追跡することができる。

「フンッ!」

追いつがる俺たちを見たハーメルンの笛吹き男が、鎌を笛へと変えて高々と吹いた。

森全体が震え、四方八方から鼠たちの洪水が襲ってくる。

『ユウキ、イライザ、メア!』

月の三相女神が、その特殊スキルを発動する。

彼女たちの全身から闇が噴き出し、周囲を夜に染め上げていく。

空には、巨大な蒼い満月が浮かび、その光を浴びた鼠たちが溶けるように消えていった。

これまで散々俺たちを苦しめてくれた鼠どもが溶けて消えていくのは、実に気分が良い。

これで、邪魔するものはもう何一つもない。さて、どうする？
胸の中で問いかけると、奴は逃げるのを止め、振り返ると高らかに宣言した。

「今宵は、リピーターのお客様ということで、順不同、口上も抜きにしてお送りします！ それではお聞きください。【ハーメルンの笛吹き男】」

クソ、そういうのもアリなのかよ！

『ユウキ！』

俺の意思に答え、狩猟の女神がその弓に矢をつがえる。

矢には、漆黒の闇が纏わりついており、それは重力波の魔法が装填されている証だった。

衝撃波を伴いながら放たれた矢に、ハーメルンの笛吹き男を取り囲むように音符のバリアが現れて――パリンと碎け散った。

矢が奴の右腕を貫き、その瞬間、込められた重力波の魔法が解放。凝縮された重力波の魔法が極小のブラックホールとなって奴の腕を削り取り、二の腕から切断した。

「よし！」

その光景に、俺は思わずガッツポーズを取る。

奴のバリアは、絶対防御ではなく、一定以下のダメージをカットするもの。

その上限は、おそらくBランクの成長限界……およそ数値にして戦闘力2000程度。ギルドの資料には、成長限界まで育てたBランクの攻撃は全く通用しなかったが、そこへ装備化を併用したところバリアを打ち破った、という記録が残っていた。

戦闘力2000以下の攻撃のカットは、低ランク帯では絶対防御に近い性能を誇るが、このランクではダメージ軽減としかなり得ない。

そして、ハーメルンの笛は両腕用。これで奴はもう曲を奏でることができない！

「チツ、無粋な……」

片腕を失ったハーメルンの笛吹き男は、舌打ちして笛を鎌へと切り替え、肉弾戦の構えに移る。

そこへ降り注ぐ高等魔法の雨。宇宙からの流星群、局地的に凝縮され増幅された重力波、地球の内核から召喚されしマグマ、そして不死者を消滅させる聖なる光の剣……。

ハーメルンの笛吹き男は、それに身体を削り取られながらも灰髪の戦女神へと迫る。

敵の狙いを察したモリガンは、チラリと後方にいる俺を横目で見てから、それを迎え撃った。

無事にモリガンにたどり着いたハーメルンの笛吹き男は、そのままぴったりと張り付いて離れない。

こうなると広範囲、高威力の高等攻撃魔法は使い辛くなる。

自然と俺たちも近接戦の体制へとシフトした。

それぞれ大通連と小通連を装備したイライザ、モリガンが前衛となり、矢と装填によりピンポイントでの攻撃が可能なユウキが遊撃、他の面々が回復や補助魔法、魔法陣に簡易神殿とあらゆる形で援護する。

単体の戦闘力こそ奴の方が高いが、三体一という数の不利と、途切れなく送られる回復や補助魔法、そして何よりも片腕というハンディキャップに、徐々に奴の身体に傷が増えていく。

……ここまでは、事前に想定し、覚悟を決めていた分有利に立ち向かえている。

このまま押し切れるか？ と思ったその時、ハーメルンの笛吹き男の姿が消えた。

もう一分経ったのか！

『ッ！ 追っぞ！』

一瞬だけ奴のダイレクトアタックを警戒した後、すぐさま追跡に入る。

絶対攻撃のクールタイムが回復するまで、あと九分。

このペースなら倒しきれぬ！ 倒しきる！

そうして、木々の間をすり抜けて奴に追いついた俺たちが見たのは……。

『な、に……！？』

一心不乱に子供の死体を貪り喰らう奴の後ろ姿だった。

俺たちが、追いついたことに気付いたハーメルンの笛吹き男が、

ゆっくりと振り返る。

その二重となった口を赤く染め、にんまりと嗤う道化師には、しっかりと二本の腕が揃っていた。

『屍喰らい……！』

あるいは、その類似スキル！

この森の死体の山は、単なる趣味の産物ではなく、一種の食糧庫だったのか……！

だとすれば、マズイ！ このまま追いかけてこを続けたらクールタイムまで逃げ切られる！

くるりと道化師が背中を向ける。

マズイマズイマズイマズイ！！

アイツ、このまま逃げ回る気だ！

おそらく戦って時間を稼ぐよりも無様に逃げ回る方が良いと判断したのだろう。

どうすれば良い？ どうすれば……！？

打開策を求めた俺の脳がスパークして――――。

「お前らは、一体何なんだ！？」

咄嗟に出てきたのは、そんな言葉だった。

考えて口にした言葉ではないが、それは確かに奴の足を止めた。続けて、心のままに問いを投げかける。

「何が目的なんだッ？」

ハーメルンの笛吹き男の俺に対する執着は常軌を逸している。

いくらアンゴルモアで自由に外を出歩けるようになったとはいえ、俺の家族を人質に取り、初めて出会った迷宮を決闘の場所を選ぶなど、手が込み過ぎている。

しかも、その道中には浦島太郎という他のイレギュラーエンカウトトまで現れた。明らかに連携している。イレギュラーエンカウトが一個人に対してここまでしてくるなんて、聞いたことがない。

ハーメルンの笛吹き男は、振り返ると答えた。

「我々は、ただ歪みを正しているだけですよ」

喰い付いた！ 蓮華たちがすかさず包囲し退路を塞いで攻撃に移る中、俺は言葉による奴の足止めに専念する。

「歪み？」

「そう、本来死んでいるはずの存在が、何食わぬ顔で生きている。

生きていてはならない者が生きている。本来生まれてくるはずのなかった存在が、あるいは死んでいるはずの存在が生きている。ならば、あるべき形に少しでも戻すべきでしょう?」

ハーメルンの笛吹き男は、イライザたちと戦いながらも意識だけはしっかりとこちらへと向け、答えた。

「……俺はあの時、本当ならお前に殺されて死んでいるべきだった。だから付け狙うってことか?」

「いやいや、まさか、それ以前の話ですよ」

「それ以前?」

コイツと出会う前? 初めて迷宮に潜った日? いや、もっと前

……生まれる前?

まさか……!

俺の顔を見たハーメルンの笛吹き男が、ニヤリと笑う。

「そう、人類は本来、二十年以上前、1999年にそのほぼすべてが死んでいるはずだったのです」

1999年。迷宮が出現した年……。

「それがどういった因果によるものだったのかは、幾重にも『現実改変』が行われた今となつては我々でもわかりません。が、とにかく、本来あるはずであった人類文明の滅びが無理やり捻じ曲げられたことだけは確かです。……そんなことをすれば、何が起こるか、アナタなら良くご存じなのでは?」

「因果律の歪み……」

「そのとおおおーリッ!」

ハーメルンの笛吹き男は、イライザに左腕を切り飛ばされ、脇腹をユウキの矢に抉られながらも楽し気に笑う。

「あなた方がアンゴルモアと呼ぶものは、つまり揺り戻しなのです」
「よ」

迷宮が発生したからアンゴルモアという不幸が生まれたのではなく、初めに『滅び』があつて、それを吸収するために迷宮が作られたということか？

迷宮は、不幸の回収装置。

最初に処理ギリギリの巨大な不幸を放り込まれていたとすれば、それが処理される前に新たな不幸がどんどん追加されれば、それがあふれ出してもおかしくない。

それが、俺たちがアンゴルモアと呼ぶ災害の正体……？

その時、ユウキの矢がハーメルンの笛吹き男の右足をちぎり飛ばした。

バランスを崩した奴の胴をすかさずケルトの三女神たちが地面へと串刺しにして、イライザが残った腕と足を切り飛ばす。

あつという間に達磨状態となったハーメルンの笛吹き男が、ぼやくように言った。

「あーあ、これで終わりですか。少々おしゃべりに夢中になりすぎましたか」

そんな姿を見て、俺は思わず最後に問いかけていた。

「お前、なんで会話に付き合ってくれたんだ？」

俺の狙いが足止めだということには、当然コイツも気付いていた

はず。

なのに、なぜそれに付き合ってくれたのか。

途中からは、瞬間移動のクールタイムが回復しても逃げもせず…

…。

俺の問いに、ハーメルンの笛吹き男は、なぜそんなことを聞くのかわからないとばかりに首を傾げ――――。

「だってこんなネタバラシ！ 他の奴らに持ってかれたら勿体ないでしょう？」

俺は、思わず呆れを通り越して感心してしまった。

「お前、本当にエンターテイナーだよ」

俺の本心からの言葉に、演出に拘る道化師はニヤリと笑って。

「ふれぜんと・ふぉー・ゆー」

最後にそう言い残し、ボロボロとその身体が崩れ去っていく。

同時に周囲の景色も元のごく普通の森へと戻っていき、後には見たこともないほど巨大な赤い魔石と……一枚のカードが残された。

「こ、これは……」

と俺が無意識にそのカードに手を伸ばそうとしたその瞬間。

『ッ！？』

『マスター！？』

カードが一人手に浮かび上がり、俺目掛けて飛び込んできた。

反射的に飛びのいた俺の前にイライザが瞬時に立ちふさがり、しかしカードは彼女の身体をすり抜けて俺へと……いや、胸元のカードを入れたポケットへと突っ込んでくる。胸元のカードが黒い光を放ち……。

「ッ、うあああああ！？」

イライザが、身体をくの字に曲げて苦悶の声を上げる。

「イライザッ！？」

俺は、その場にいた全員が、イライザの元へ駆けつけ、その身体を取り囲む。

普段、苦痛の声をあげない彼女が、ここまで苦痛の声を上げるなんて……！

俺の脳裏に、かつて猟犬使いがアヌビスを生贄に捧げて狼と七匹の子ヤギを召喚した光景が蘇る。

イレギュラーエンカウトが、迷宮の主やカードを乗っ取って出現するとすれば、イライザは……！

イライザの身体を黒い稲妻が纏わりつき、その姿が変わっていく。銀のドレスから、赤と黒を基調としたバニースーツのような道化師服へと。顔には化粧がほどこされ、唇には真っ赤な紅ベニが、涙袋の下にも赤い涙マークが浮かび上がる。

そして、その手には……いつの間にかハーメルンの笛が握られていた。

「い、イライザ……」

「ッ……離れる、歌麿！」

呆然とする俺を、蓮華が無理やりに引っ張って距離を取らせた。

他のカードたちもイライザを取り囲むように武器を構える。その表情は、皆一様に険しい。

そんな……まさか、嘘だろ？

場の緊張感が加速度的に高まっていく中、イライザがゆっくりと顔を上げる。

その顔は……。

『マスター……？』

……いつものイライザのソレで、俺たちはホッと安堵の息を吐いた。

どうやら、ハーメルンの笛吹き男に完全に乗っ取られたとか、そういう展開ではなさそうだった。

『大丈夫なのか、イライザ？』

そう呼びかけながら、リンクの上でも彼女の異常を探っていくが、特におかしなところはない。

イライザは、なんだかセクシーな格好となってしまった自分の身体を見渡しながら答える。

『大丈夫です。……少し違和感はありますが、なんともありません』
『違和感？』

やはり何かあるのか、と俺たちの間にピリリとした空気が走る中、イライザが首を振る。

『いえ、不調や不快感ではないのです。ただ、急にできることが増えて……』

『ふむ？』

珍しく戸惑い浮かべるイライザに、俺は彼女のカードを取りだした。

【種族】セレーネー（イライザ）

【戦闘力】3000（レベルアップ使用中）

【先天技能】

- ・輝く満月の女神
- ・三相女神
- ・凍てつく月の世界
- ・獅子座の護り
- ・高等魔法使い

【後天技能】

- ・フェロモン
- ・暗殺
- ・不滅の盾
- ・精密動作
- ・魔力強化
- ・詠唱破棄
- ・直感
- ・フィンの親指
- ・限界突破
- ・生還の心得
- ・魔力回復
- ・文武一道
- ・膏血を絞る

【固有技能】

- ・マイフェアレディ（知恵の泉）：敵味方の内一体の後天スキル

を一つコピーすることができる(?) 絶対服従、多芸、明鏡止水を内包する。

(多芸：メイド、演奏、毘解除、武術、騎乗を内包する)

(メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包する)

・ハーメルンの笛(NEW!)

「これは……」

固有技能の欄に、ハーメルンの笛が追加されている。

これが、この変化の原因か？

『できることが増えたと言ったが、何ができるようになったんだ？』

俺の問いに、イライザは顎に手を当てて少し考え……唐突にその姿が消え去った。

『ッ!?!?』

それに、完全に警戒を解いたわけではなかったカードが俺の周囲を取り囲み、辺りを見渡す。

イライザは、すぐに見つかった。彼女は、俺から十メートルほど後方に立っていた。

『ハーメルンの笛吹き男の瞬間移動スキルか……!』

俺の驚きの声に、その通りとイライザが頷く。

「マジか……!」

つまり、ハーメルンの笛吹き男のスキルを使えるようになったというのか？

鼠の召喚や眷属強奪も使えるのだろうか？ 絶対攻撃は？ イレギュラーエンカウントの空間の展開や、他の迷宮への転移能力はどうなっている？

俺が、さらに詳しく聞こうとしたその時。

『……色々と気になるのはわかりますが、戦いが終わったのならそろそろ愛を迎えに来ては？』

アテナからそんなテレパスが届いた。

ハツと我に返る。

……そうだな。まずは、愛を迎えに行くでしょう。きっと、心配している。

だが、その前に、一つだけ。

俺は、ハーメルンの笛吹き男の残した大きな魔石を拾い上げながらイライザへと問いかけた。

『イライザ、ハーメルンの笛の転移はもう使えるのか？』

『……イエス、マスター。ただ、座標地点はすべてリセットされているようです』

『そうか……』

ハーメルンの笛吹き男の最後の嫌がらせか、あるいはスキル化の影響か。

俺は一瞬だけ落胆したものの、すぐに気を取り直して言った。

『イライザ、少し試しに自分だけで迷宮の外に出て見てくれるか？』

通常は迷宮外に出ればカードの召喚は当然解除されるが、アング

ルモア中は外に出ても解除されることはない。

召喚したまま中に入れたように、俺たちが最下層に留まったままイライザだけ外で単独行動させられるかもしれない。

もし階層移動と同様にカードとの繋がりが切れて迷子状態になったとしても、すぐに合流は可能だし、試して見る価値は十分あった。

「大丈夫なようなら悪いがそのままちよつと学校までひとつ走りしてくれ」

「イエス、マスター」

イライザがうやうやしく一礼する。

その動作にどこか奴の姿が被り、微妙な気分になっていると、イライザが一台の豪華な馬車を呼び出した。セレーネーの空を駆ける魔法の馬車だ。

ふむ……セレーネーのスキルはこの姿でも使えるのか。考えてみれば、三相女神のスキルで枠が確保されているユウキとメアは今も召喚されてるしな。セレーネーのスキルは健在と考えるべきだ。

しかし、イライザはずっとあのセクシーな格好のままなんだろうか？ 個人的には嬉しいが、些か刺激が強すぎる気も……。

そんなことを考えつつ魔法の馬車に乗って去って行くイライザを見送って、俺たちは愛の待つマヨヒガへと向かう。

「——お兄ちゃん！」

マヨヒガの玄関の扉を開けると、待ち構えていた愛が飛びついて来た。

俺の腹部に顔をうずめ、そして頬にべっとりついた血の跡にギョツと飛びのく。

「お、お兄ちゃん、これ……!?!?」

「あー……」

俺は何と誤魔化そうか迷って、制服が全体的に血まみれなことに気付くと、誤魔化すのを諦めた。

切断された制服の後を見たら、何が起こったかは一目瞭然だ。これは、誤魔化しようがないか。

結果、俺が取った行動は、愛を抱きしめ、ただその頭を撫でるというものだった。

「大丈夫。もう全部終わったことだから。さあ、お袋のところに戻ろう?」

「……………うん」

長い沈黙の後、コクリと愛が頷く。

納得したわけではないが、これ以上に俺に負担を与えまいと疑問を飲み込んでくれたのだろう。

そんな妹の気遣いのおかげがたく思いつつ、俺は天を仰いだ。

「……………ああ……………それにしても、長い一日だった。」

第三次アンゴルモアの幕開けから始まり、生徒たちやその家族の回収、小学校の子供たちをギルドに送り届けて、愛たちが攫われ、イレギュラーエンカウトとの二連戦……………。

間違いなく、俺の人生で最も長い一日だった。

さすがに、疲れた……………。

そう思っていると、イライザから念話が届いた。

『……………マスター、少しよろしいでしょうか?』

それに、嫌な予感を覚えつつ答える。

『どうした？』

『見ていただいた方が、よろしいかと……』

そうイライザが言うと同時に、彼女の目にしている光景が俺の脳裏に映し出される。

———そこには、地獄があった。

天には無数の竜や天使、悪魔が飛び回り、地上へと向けて流星群や雷の雨を降らし。

地には、百メートルを超える巨人たちが闊歩して、家々やビルを踏みつぶす。

火の海に包まれた街からは、もはや人の営みは欠片も見当たらない。

確かに、そこにある……しかし、どこか現実感の無い光景。

これは、本当の光景なんだろうか？

ただの街じゃない。俺が生まれ育った街なんだぞ……？

どの店がどこにあるのか完全に頭に入ってる駅前の大通りも。友達と何度も自転車で駆け抜けた坂道も。子供の頃に秘密基地を作った公園に、俺の家がある住宅地も……！

全部、燃えている。

あそこで瓦礫の山になってる小学校だって、ほんの数時間前までは無傷だったのに……。

それが、こんな、まるでハリウッド映画みたいな……。

まだ夢を見ているだとか、幻覚を見せられていると言われた方が納得できる。

だが、五感を共有するイライザからは、確かに炎の熱や様々なモ

ノが燃える臭い、そして誰かの悲鳴が聞こえてきて……。

「…………お兄ちゃん？」

俺の異変を察した愛が、不安げに見上げてくる。俺は、何も答えず彼女を抱きしめる腕に力を込めた。

今はただ、俺が守り切ったこの小さな体の温かさだけが、真実だった。

第十話 人生で最も長い一日（後書き）

【Tips】ハーメルンの笛吹き男

イレギュラーエンカウトは、大きく二つのタイプに分別することができる。

リドルスキルによる搦め手を得意とした罠型と、リドルスキルを用いず純粹な戦闘能力を有する純戦闘型である。

前者はその性質上ランクによる弱体化の影響を受けずらいためむしろ低ランクの方が脅威が増す傾向があり、逆に後者は本来のランクに近づくほど加速度的にその脅威が増して（あるいは戻って）いく。

浦島太郎は前者、ハーメルンの笛吹き男は後者の典型となる。

ハーメルンの笛吹き男が呼び出す鼠の眷属は、主の戦闘力によってその最大数が変化し、Aランクともなるとその数は万を超える。

これに対抗するには対眷属スキルか眷属召喚による数で抵抗するのが最適となるが、対眷属スキルは貴重な上に生半可なスキルではその増殖スピードに対抗できず、眷属召喚スキルでは、ハーメルンの笛吹き男が持つ眷属強奪のスキルにより根こそぎ奪われてしまいうりスクがある。

高ランク帯でこのイレギュラーエンカウトと遭遇した際には、数の暴力という言葉の意味を思い知ることになるだろう。

だが、これらの最上位の眷属召喚能力すらもハーメルンの笛吹き男の真の脅威の前には霞む。

ハーメルンの笛吹き男の真の脅威。それはマスターのバリアすら無効化する絶対攻撃と、予測不可能な瞬間移動によるマスター殺し

のスキル ではない。

享樂的な道化師としての側面に隠れた冷徹な戦略家としての側面。それこそがこのイレギュラーエンカウントの真の脅威である。

手下の鼠を囓け、じつと消耗を待つ狡猾さ。悪趣味なアートの見せかけて回復のための食料を森のあちこちに配置する計画性。

時には人質を取り、時には詭弁を弄して惑わせ、時には敵に背を見せて逃げ回る柔軟さ。

この戦略家としての側面とマスター殺しの能力がかみ合った時、ハーメルンの笛吹き男はまさしく死神と化す。

一方で、享樂的な道化師としての振る舞いも決して仮面ではない。

この恐るべき死神に唯一付け入る隙があるとすれば、そのエンターテイナーとしてのこだわりだろう。

TIPSまとめ6

【Tips】スキル回数回復スキル

スキルの回数制限を回復させることができるスキル。

強力なスキルは回数制限が定められていることが多く、その使用回数を回復させられる数少ない手段として、スキル回数回復スキル持ちは非常に需要が高い。

ただし、スキル回数回復スキルの使用回数を、スキル回数回復スキルで回復させることはできない。

また、スキルの回数制限と、スキルのクールタイムは別物であるためクールタイムも回復させることはできない。

霊格再帰は、スキル回数回復スキルで回復できないことから、回数制限のあるスキルではなく、非常に長いクールタイムを要するスキルという見方が有力である。

【Tips】某サイトにおけるマイナススキルの評価基準

うんこっこ：極めて重いデメリットに加えて、解除条件が判明していない。カードの価値をうんこっこにしてしまう恐怖のスキル。その効果は、もはやうんこっことしか表現のしようがない。トレードなどで騙されてこのスキルを持つカードを掴まされた場合は、相手をぶっ殺しても許されるレベル。というか、殺した。

A：通常の使用が出来なくなるほどの極めて重いデメリットがあ

る。実質的な戦力外通告。カードの価値を大きく損なうレベル。

B：大きなデメリットがある。蘇生用カードとしての使用が視野に入ってくる。ドロップした時に持っている、かなりガツカリするレベル。

C：デメリットのみ。ドロップした時に持っているときちょっと舌打ちするレベル。

D：デメリットがメリットを上回っている。ここら辺から名実ともにマイナススキル認定されてくるレベル。

E：メリットとデメリットが同じくらい。使い次第。値段への影響はほとんど気にしなくて良いレベル。

F：メリットがデメリットを上回っている。多少癖はあるが、あっても全然気にならない、むしろちょっと嬉しいレベル。

【Tips】ランクごとの先天スキル数の目安

A：5個以上。

B：4～5個。

C：3～4個。

D：2～3個。

E：1～2個。

F：1個。

ランクが上がるにつれ、下位のランクのスキル効果を内包するものが多くなるため、実際のスキル数以上に性能差が開いていく傾向にある。

【Tips】装備化のタイプ

マスターや他のカードに自身の戦闘力やスキルを加算することが

できるスキルを装備化スキルと呼ぶ。

一口に装備化スキルと言ってもその性質によっていくつかタイプがあり、タイプが異なれば同じ対象に同時に装備化できる。

装備化のタイプとしては、装備化スキルの八割以上を占める最もポピュラーな憑依型、本体と装備化対象が別行動可能な祝福型、物品に憑依し同タイプとも同時に装備化可能な物品憑依型、強化率が高くなる代わりに重いデメリットのある呪い型などがあり、後者になるにつれ希少となる。

【Tips】浦島太郎 その1

浦島太郎は、死神たちの中でも珍しい逆順のストーリーで構成されているイレギュラーエンカウントである。

そのため、冒険者たちは浦島太郎の悲惨な結末から体験していく形となる。

フェイズ1の玉手箱探しでは、一分ごとに一歳老化していくフィールドで、玉手箱を探していくことになる。

この老化効果は、カードのバリアであっても防ぐことはできない。玉手箱は、二十軒ある家の中のどこかにあり、家の外観に隠された様々なヒントから正解の家を見つけ出すというリドルスキルであるが、襲ってくる敵もおらず、謎を解けずとも総当たりで調べていけばやがて正解にたどり着くことができる、リドルスキルの中では優しい部類の構成となっている。

ただし、家の中に誰かが入っている間は、十倍の速度で老化が進んでしまうことを除けば、だが。

その性質上、召喚枠の少ない低ランク迷宮ほど玉手箱を探すのに時間が掛かるため、たとえ五ツ星の冒険者であっても死にかねず、

また浦島太郎を倒しても老化した身体は元に戻らないことから、冒険者から最も恐れられているイレギュラーエンカウトである。

【Tips】浦島太郎 その2

無事に玉手箱を見つけ出せたならば、舞台は竜宮城へと移る。

竜宮城にいるのは、浦島太郎と同格の乙姫とそのワンランク下の眷属たちであり、冒険者たちは無尽蔵に沸く眷属たちの襲撃を潜り抜け、宴会場にいる乙姫の元へとたどり着かねばならない。

宴会場では、乙姫による魅力的な誘いが待っている。

誘いに乗った場合、冒険者たちは至福の歓迎を受けながらフェイズ1で老化した身体を少しずつ癒すことが出来る。凡そ一時間ほども経てば、己が望む年齢に戻ることが出来るだろう。

ただし、これは乙姫による『善意に満ちた』罠であり、竜宮城に滞在するうちに徐々にその存在が変えられていき、24時間も経てば、完全に竜宮城の住人となってしまう。

途中でそれに気づいて戦いを挑んでも、時すでに遅し。乙姫らの歓迎に対して仇で返す輩には、若返った分の倍の老化という痛烈なしっぺ返しが待っている。

宴会中の竜宮城は外界とは時間の流れが異なり、竜宮城での一時間とは外界の一日に相当するため、あるいは罠とわかっていながら乙姫の誘いに乗るという手もあるだろう。

完全に竜宮城の住人となる前に、次の挑戦者が乙姫を倒せたなら、変質も解除され、若返ったままで開放されるからである。

その一縷の望みにかけて、乙姫の誘いに乗る者は後を絶たない。

次にやってきた者も自分と同じように考えるかもしれない、というところからは眼を逸らして……。

【Tips】浦島太郎 その3

浦島太郎の第三フェイズでは、若かりし頃の浦島太郎との戦いとなる。

これは、浦島太郎が悪ガキたちから亀を救うシーンの再現であり、悪ガキの配役を与えられた冒険者たちに勝ち目は端からない。

仮に浦島太郎を倒したとしても、シーンの最初へと戻され、永遠に戦い続けることになる。

これを解除するには、フェイズ1同様、本物の浦島太郎を探すというリドルスキルを解かなければならない。

本物の浦島太郎の居場所は、冒険者たちの知識量によって変動し、何も知らなければフェイズ1で玉手箱を見つけ出した場所にいるが、それを知っている場合は別の場所に再配置される。

本物がいる家を間違えるたびに若かりし頃の浦島太郎が段階的にパワーアップしていき、そのステータスは最大で十倍近くにもなる。なお、亀を殺してしまうと激怒し、一気に最大強化状態となってしまうため、厳禁。

【Tips】知の神の権能

知を司る神の権能は、人類の集合知とこれまでロストしてきた同種たちの『記録』へのアクセスを可能とする。

集合知は、人類誕生から現在に至るまでの死者たちの知識の集積であり、俗にいうアカシックレコードである。

その性質上、知の権能でアクセスできるアカシックレコードは、古くて多くの人を知りうる知識ほど検索しやすく、新しくて一部の

人しか知り得ない知識ほど検索に時間がかかり、またあくまで人間の目線での物であるため、必ずしもその情報が正しいとは限らない。この欠点を補完すべく、知の神の権能は、これまでロストしてきた同種たちの『記録』をも共有している。

これにより、知の神という人間以上の視点から俯瞰的に情報を精査し、また比較的新しい情報を共有することが可能となつている。そのため、時代が進めば進むほど知の神の権能はその性能を深めていく性質を持つ。

ある意味で『成長する権能』と呼べるだろう。

【Tips】モンスターの現代兵器耐性

迷宮のモンスターやカードたちは、そのランクが上がるにつれ戦闘力の数値以上に現代兵器等に対する耐性が上がっていく。

Fランクのモンスター程度なら武道経験者なら銃無しでも倒せるが、Eランクになると銃無しでは到底太刀打ちできなくなり、現代兵器が通用するのはCランク……それも中位クラスまでとなる。

Bランクともなると、物理法則自体が通用しなくなり、たとえば核兵器であっても倒すことはおろか碌なダメージも与えることができないとされている。

【Tips】ハーメルンの笛吹き男

イレギュラーエンカウントは、大きく二つのタイプに分別することができ。

リドルスキルによる搦め手を得意とした異型と、リドルスキルを用いず純粹な戦闘能力を有する純戦闘型である。

前者はその性質上ランクによる弱体化の影響を受けずらいたためむしる低ランクの方が脅威が増す傾向があり、逆に後者は本来のランクに近づくほど加速度的にその脅威が増して（あるいは戻って）いく。

浦島太郎は前者、ハーメルンの笛吹き男は後者の典型となる。

ハーメルンの笛吹き男が呼び出す鼠の眷属は、主の戦闘力によってその最大数が変化し、Aランクともなるとその数は万を超える。

これに対抗するには対眷属スキルか眷属召喚による数で抵抗するのが最適となるが、対眷属スキルは貴重かつ生半可なスキルではその増殖スピードに対抗できず、眷属召喚スキルでは、ハーメルンの笛吹き男が持つ眷属強奪のスキルにより根こそぎ奪われてしまうリスクがある。

高ランク帯でこのイレギュラーエンカウントと遭遇した際には、数の暴力という言葉の意味を思い知ることになるだろう。

だが、これらの最上位の眷属召喚能力すらもハーメルンの笛吹き男の真の脅威の前には霞む。

ハーメルンの笛吹き男の真の脅威。それはマスターのバリアすら無効化する絶対攻撃と、予測不可能な瞬間移動によるマスター殺しのスキル——ではない。

享乐的な道化師としての側面に隠れた冷徹な戦略家としての側面。それこそがこのイレギュラーエンカウントの真の脅威である。

手下の鼠を嚇け、じつと消耗を待つ狡猾さ。悪趣味なアートに見せかけて回復のための食料を森のあちこちに配置する計画性。

時には人質を取り、時には詭弁を弄して惑わせ、時には敵に背を見せて逃げ回る柔軟さ。

この戦略家としての側面とマスター殺しの能力がかみ合った時、

ハーメルンの笛吹き男はまさしく死神と化す。

一方で、享樂的な道化師としての振る舞いも決して偽りではない。この恐るべき死神に唯一付け入る隙があるとすれば、そのエンターティナーとしてのこだわりだろう。

〈五章終了時点〉

【種族】吉祥天／黒闇天（蓮華）

【戦闘力】3400（MAX!）（初期戦闘力750×2＋成長分1500＋黒闇天分500＋霊格強化分100－零落スキル分200）

【先天技能】

- ・真吉祥天の真言
- ・真二相女神
- ・真アムリタの雨

【後天技能】

- ・廃棄されし者
- ・限界突破
- ・明星の瞳
- ・零落せし存在
- ・霊格強化
- ・天衣無縫
- ・高等魔法使い
- ・知恵の泉
- ・友情連携
- ・かくれんぼ

- ・ 神の寵愛
- ・ 高等忍術
- ・ 生還の心得

【種族】羅刹

【戦闘力】 1800 (MAX!)

【先天技能】

・ 修羅道を往く者：決して終わりのない戦いに明け暮れる修羅道の住人。狂気と戦いこそが日常であり、それ故に死を恐れず、狂化状態でも暴走状態とならず、自らの意思で狂化を解除できる。戦士、狂化を内包。

(狂化：戦闘を終了するまで暴走状態となり徐々に生命力が減っていく代わりに、全ステータスが三倍となる)

・ 二体一对

・ 死なば諸共：自身がロストする際、自らに最もダメージを与えた存在に戦闘力と受けたダメージに応じたダメージを与える。夫婦であり半身である「羅刹女」と同時召喚でなくては使用ができない。

- ・ 生還の心得

【後天技能】

・ 最高位着属体：スキルとして呼び出された仮初の肉体。後天スキルを持たず、成長もしない。最高位着属体はオリジナルと遜色ない自我と初期戦闘力の2倍の戦闘力を持ち、また召喚者の後天スキルを一つ共有できる。

【種族】羅刹女

【戦闘力】 1700 (MAX!)

【先天技能】

- ・ 修羅道を往く者

- ・二体一対
- ・死なば諸共
- ・自己再生

【後天技能】

- ・最高位眷属体

【種族】セレーネー（イライザ）

【戦闘力】 2340（初期戦闘力1500＋成長分840）（レベルアップ使用時3000）

【先天技能】

・輝く満月の女神：月と魔法を司る女神であるセレーネーの権能を使用可能。

・三相女神：このカードは、別の側面とも言える別のカードと三位一体である。三枚召喚しても迷宮の召喚枠を一つしか消費しない。また生命力、魔力、スキルの使用回数を三枚で共有する。

・凍てつく月の世界：周辺一帯を月明かりが照らす夜のフィールドへと塗り替える。味方以外の眷属を一掃し、新たな眷属召喚を封じる。場に、アルテミス、セレーネー、ヘカテーの三枚が揃っている場合のみ使用可能。一日一回のみ。

・獅子座の護り：眷属であるネメアーの獅子を召喚可能。一日一回、一体のみ。

- ・高等魔法使い

【後天技能】

- ・フェロモン
- ・暗殺

・献身の盾＋頑丈 不滅の盾（CHANGE!）：防御系スキルの最高峰。後天スキルで、これ以上の性能の防御スキルは現状確認

されていない。周囲の味方のダメージを肩代わりすることができる。使用中、防御力と生命力が三倍となり、一日に一回だけ一分間『不滅』状態となることができる。

（不滅：効果中、生命力以上のダメージを負ってもロストを免れることができる）

- ・精密動作
- ・魔力強化
- ・詠唱短縮 詠唱破棄
- ・直感

・フィンの親指

・限界突破

・生還の心得（NEW!）

・神のプライド（LOST）

・魔力回復

・文武一道：魔導と武道……二つの道に通じる真理を理解した証。魔法系のスキルを物理系のステータスで、物理系のスキルを魔法系のステータスで発動することができる。

・膏血を絞る

【固有技能】

・マイフェアレディ（知恵の泉）：敵味方の内一体の後天スキルを一つコピーすることができる（？） 絶対服従、多芸、明鏡止水を内包する。

（多芸：メイド、演奏、罨解除、武術、騎乗を内包する）

（メイド：メイドに必要な技能を収めている。料理、清掃、性技、礼儀作法を内包する）

・ハーメルンの笛：詳細不明。使用時は、バニーガール風の道化師服へと姿が変わる。

【種族】アルテミス（ユウキ）

【戦闘力】2400（初期戦闘力1600＋成長分800）（レベルアップ使用時3200）

【先天技能】

・満ち行く三日月の女神：月と獣を司る女神であるアルテミスの権能を使用可能。

・三相女神

・凍てつく月の世界

・双子神：伴侶や親兄弟などの密接な関係にある別の神の力を借りることができる。アポロンの先天スキルを一つ使用可能。

・遠矢射る：強力な呪いを込めた必中の弓矢を放つ。稀に即死。相手が女性であった場合、初撃に限って防御力無視、威力二倍。回数制限はないが、十分間のクールタイム有り。場にアポロンがいる場合限り、攻撃対象が敵の女性全体に拡大される。装填、狩人スキルを内包する。

（装填：魔法を武器に籠めて放つことができる）

（狩人：狩人に必要な技能を収めている。武術、弓術、遠見、追跡、気配遮断スキルを内包する）

【後天技能】

・忠誠

・小さな勇者

・本能の覚醒

・真なる者

・限界突破

・真眷属召喚

・縄張りの主

・高等忍術

・騎獣

・物理強化

・見切り

・純潔の誓い

・神のプライド（LOST）

・高等攻撃魔法

・高等状態異常魔法

・残滓結晶（NEW!）：かつて取り込まれ、ランクアップの際に失われた真眷属体の残滓……らしい。眷属体の人格・容姿情報を保存し、所有スキルの一部を有している。人物眼スキルを内包する。

【種族】サキュバス（メア）

【戦闘力】1100（MAX!）（初期戦闘力450+成長分450+霊格再帰分200）

【先天技能】

・巫山の夢

・胡蝶の夢

・淫魔の肌

【後天技能】

・ファムファートル

・友情連携

・中等魔法使い

・高等状態異常魔法

・人を呪わば穴二つ

・生還の心得

・霊格再帰（CHANGE!）：リリム（700）、ヘカテー（950）。数値は、初期戦闘力。

・耐性貫通

・詠唱短縮

・高等攻撃魔法

- ・魔力強化
- ・魔力回復

【種族】ヘカテー（メア）

【戦闘力】1600（初期戦闘力950＋成長分450＋霊格再帰分200）（レベルアップ使用時2100）

【先天技能】

・欠けゆく新月の女神：月と闇夜を司る女神であるヘカテーの権能を使用可能。

- ・三相女神

・凍てつく月の世界

・冥府の三叉路：ヘカテーの冥府神としての能力。自らが管理する冥府の一角を展開できる。月・夜闇・死・魔等の属性を持つ味方を強化（ステータスの大きな向上、持続回復、『生還の心得』を付与）し、それらの属性を持つ敵を弱体化（ステータスの大きな減少、衰弱、不死状態の解除）させる。

・魔女たちの女王：ラミアアの母とも呼ばれるヘカテーの騎行。眷属であるラミアアを召喚することができる。無限召喚型。高等魔法使いを内包する。

【後天技能】

・ファムファータル

・友情連携

・人を呪わば穴二つ

・生還の心得

・霊格再帰

・耐性貫通

・詠唱短縮

・魔力強化

・魔力回復

- ・巫山の夢
- ・淫魔の肌

【種族】瀬織津姫（鈴鹿）

【戦闘力】 1000（初期戦闘力750 + 成長分450 - 零落スキル分200）

【先天技能】

・ 袂はらえい水に流す袂戸大神のおおかみ：水の流れを司る水神にして穢れを払う被神である瀬織津姫の権能を使用可能。

・ 浄化の水垢離：清めの水を降らし、場の穢れを根こそぎ洗い清める。敵味方全員の状態異常を治し、一定時間状態異常を無効化する空間を形成する。

・ 清濁併せ呑む水の理：同一視される橋姫の力を内包し、眷属として召喚することができる。無限召喚型。橋姫の先天スキルをすべて内包する。……のが本来のスキルであるが、零落スキルの影響により、眷属召喚能力は失われている。

・ 中等魔法使い（高等魔法使いからランクダウン）

【後天技能】

・ 目隠し鬼

・ 武術

・ 見切り

・ 良妻賢母：妻や母として理想的な技能をすべて備えている。…
…ただしその愛を裏切らない限り、だが。料理、清掃、育児、性技を内包する。

・ 追跡：マーキングした対象の気配を追跡することができる。

・ 虚偽察知：対象の偽りを見抜く。

・ 友情連携

・ 気配遮断

・零落せし存在（NEW！）

・剣術（NEW！）

・鑑識眼（NEW！）：物のおおよその価値や希少度、真偽を見抜くことができる。このスキルで見分けられるのは、あくまで人間にとつての価値となるため、どれほど希少で役だつ物であっても人間がその価値を見出していなければ、その本当の価値はわからない。時価がわかる程度の能力。

【種族】ドラゴネット（マイラ）

【戦闘力】740（MAX！）（390 + 霊格再帰分50 × 5 + ヴィヴィルの瞳100）

【先天技能】

・小竜玉：生命力を生み出し貯蓄する竜の心臓。
・竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。物理攻撃及び魔法攻撃に対する耐性を持つ。

・竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をブレスとして吐き出すことで、魔法の威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。

【後天技能】

・霊格再帰（NEW！）：ドレイク（480）、ワイバーン（450）、バジリスク（430）、東洋龍（420）、ヴィーヴィル（400）。数値は、初期戦闘力。

・滅私奉公

・初等魔法使い

・新米メイド

・戦術

・ヴィーヴィルの瞳（NEW！）：一日に一撃だけありとあらゆる攻撃を反射することができる。戦闘力が常時100上昇する。

【種族】ヴィーヴィル（マイラ）

【戦闘力】945（初期戦闘力400＋成長分195＋霊格再帰分50×5＋ヴィーヴィルダイヤ分100）

【先天技能】

- ・宝竜玉：生命力と魔力を生み出し貯蓄する宝竜の心臓。
- ・宝竜鱗：極めて頑丈な竜の鎧。魔法攻撃に対する極めて高い耐性を持つが、物理攻撃にやや弱い。

- ・宝竜息：竜の代名詞とも言える技。魔法をプレスとして吐き出すことで、魔法の威力を強化し、詠唱無しで放つことができる。二種の魔法を同時に織り込むことができる。

- ・破鏡再び照らす：戦闘力が減少するがメイド等のスキルを内包する人間体と、戦闘力が上昇する半人半竜の形態に変身することができる。額の宝石は、一日に一撃だけありとあらゆる攻撃を反射する効果を持ち、人間形態ではペンダントとして他者に貸し出すことも可能。メイド、中級収納スキルを内包。

【後天技能】

- ・霊格再帰
- ・滅私奉公
- ・初等魔法使い 中等魔法使い
- ・新米メイド 先天スキルに統合
- ・戦術
- ・ヴィーヴィルの瞳（NEW!）：一日に一撃だけありとあらゆる攻撃を反射することができる。戦闘力が常時100上昇する。

【種族】ネヴァン（ドレス）

【戦闘力】2000（400UP!）

【先天技能】

- ・死と勝利の戦女神
- ・三相女神
- ・破壊と殺戮と勝利の加護
- ・毒のある女

【後天技能】

- ・精密動作
- ・七転八起
- ・不屈の精神
- ・剣術 高等忍術に統合。
- ・武術 高等忍術に統合。
- ・神のプライド 消滅。
- ・眷属強化
- ・遠見の術
- ・メイドマスター
- ・限界突破
- ・高等忍術

【種族】モリガン

【戦闘力】 820

【先天技能】

- ・支配と殺戮の戦女神
- ・三相女神
- ・破壊と殺戮と勝利の宴
- ・大いなる女王

【後天技能】

- ・神のプライド
- ・物理強化
- ・怪力

- ・目隠し鬼
- ・かくれんぼ
- ・不屈の精神

【種族】ヴァハ

【戦闘力】780

【先天技能】

- ・怒りと破壊の戦女神
- ・三相女神
- ・破壊と殺戮と勝利の宴
- ・赤い鬘のヴァハ
- ・高等魔法使い

【後天技能】

- ・神のプライド
- ・魔力強化
- ・魔力回復
- ・簡易神殿
- ・詠唱短縮
- ・戦術

【種族】マヨヒガ（オードリー）

【戦闘力】600（MAX！）

【先天技能】

- ・敵の家でも口を濡らせ
- ・上級家妖精
- ・かくれんぼ

【後天技能】

- ・メイドマスター：メイド、低級収納、秘書、教導、演奏、舞踏、武術、精密動作、庇うスキルを内包する。
- ・従順
- ・諫死
- ・中等補助魔法
- ・中等回復魔法

【種族】アテナ

【戦闘力】 950

【先天技能】

- ・都市と英雄の守護女神
- ・アイギスの護り
- ・英雄への加護
- ・来たれ、勝利の女神よ
- ・高等魔法使い

【後天技能】

- ・純潔の誓い
- ・神のプライド
- ・幼体 技能解放（CHANGE！）：詳細不明。先天スキルはすべて使用可能になったが、常時ステータス半減はそのまま。外見も残念ながらほとんど変化しなかった（身長が1センチ伸びたとか伸びないとか）
- ・臆病 小さな勇者（CHANGE！）：通常、臆病スキルは消滅か勇敢スキルへと変化するが、ユウキに続き勇者スキルに変化した。イレギュラーエンカウントとの戦闘中での変化が条件か？ Aランクの浦島太郎に石化の状態異常が通ったことから、イレギュラ

ーエンカウント特攻スキルの可能性アリ。

魔道具図鑑（前書き）

この前に「第十話 人生で最も長い一日」と「TIPSまとめ6」
を更新しています。
あとコミカライズ二巻、発売中です。

魔道具図鑑

【魔道具の区分】

- ・ 純正魔道具：迷宮からドロップした純正の魔道具。
- ・ 人工魔道具：人類が作り出した、あるいは純正魔道具を加工した魔道具。大半はマイクロチップによって制御しているため、グレムリン等の機械破壊の影響を受ける。
- ・ 人工純正魔道具：人工魔道具の内、機械破壊の影響を受けない魔道具。これまではポーション類を成分調整した物や、迷宮産の貴金属を武器に加工した物が主であったが、カードギアの登場と共にこれからの人工魔道具のメインストリームとなることが期待されている。次世代型魔道具とも。

【純正魔道具】

- ・ モンスターカード：モンスターを召喚できるカード。召喚中、召喚主を守るバリアを張ることが出来、モンスターがダメージを肩代わりしてくれる。召喚モンスターは基本的には召喚主に従順だが、中には反抗的な個体も存在する。
- ・ 宝籤のカード：十枚セットの黒色無地のカード。使用することでランダムでモンスターカードへと変化する。
- ・ 宝箱：両てのひらに乗る程度の小さな宝箱。開けると中にカード化されたアイテムが入ってる。宝籤のアイテム版。「ガツカリ箱の中にさらにガツカリ箱が入ってた……」by冒険者。
- ・ カードホルダー：いくらでもカードの入るカードホルダー。その時取り出したいカードが自動的に一番上にくる。本人以外は取り出せない。プロ冒険者の必需品。
- ・ 魔石袋：いくらでも魔石が入り、重さも変わらない袋。魔石以

外は入らない。

・ハーメルンの笛：イレギュラーエンカウント【ハーメルンの笛吹き男】が落とした笛型の魔道具。迷宮の安全地帯で使用することで、到達済みの階層へと転移することができる。使い放題の転移の魔道具は極めて希少。

・転移門：二個一セットの転移アイテム。大きさがネックであるが、使い放題で、迷宮の外でも使える貴重な転移アイテムであることから、人類に非常に重宝されている。一度設置すると、再設置は不可能。

・スキルオーブ：モンスターに与えることでスキルを習得させることができるオーブ。必ずしも良いスキルだけ得られるわけではなく、マイナスのスキルを得ることも普通にある。迷宮から持ち出すことはできない。

・カーバンクルガーネット：カーバンクルが落とす大粒のガーネット。幸運をもたらすとして、最低二百万円ほどで取引されている。特に特別な効果はないようだが……？

・ヴィーヴィルダイヤ：ヴィーヴィルが落とすダイヤ。モンスターに使用することで、戦闘力を100ほど上昇させ、攻撃を反射することができるスキルを習得させることができる。

・ホープダイヤ：持ち主に破滅をもたらすとされる呪われたダイヤ。持ち主の幸運と不運の揺れ幅を大きくする。

・アマリタ：ありとあらゆる傷や病を癒し、一歳ほどであるが若返り効果を持つ霊薬。その効果から非常に高額で取引されている。

・ローポーション：患部にかけるか飲むことで傷や病を癒してくれる薬。ポーションとしての効果は低く、かすり傷を癒す程度の効果しかないが、風呂に垂らせば美肌効果、手に振りかければ手荒れを一瞬で癒し、飲めば体調を瞬く間に整えてくれると、日常使いに

は最適。市場価格1万円ほど。

・ミドルポーション：患部にかけるか飲むことで傷や病を癒してくれる薬。全治数ヶ月以上の重傷もあつという間に癒せる。市場価格10万円ほど。

・ハイポーション：患部にかけるか飲むことで傷や病を癒してくれる薬。意識不明の重体レベルの大怪我も癒す。失われた部位の再生まではできない。市場価格50万円ほど。

・薬水の水差し：常に満杯まで入っている水差し。使わずに放置することで中身がポーションに変わる。一日でローポーション、一週間でミドル、一月でハイに。別の器に移すと数分で水に戻る。

・変若水：若返りの水。一つにつき、一歳若返る。回復効果の無いアマリタ。

・テイレシアースの薬：一月の間性別を反転してくれる薬。三年間の継続使用で完全に性別が変わる。

・アスクレーピオスの薬：飲み続けている限り、どんな病気だろうと進行をストップしてくれる薬。一日一粒、三十粒入り。

・サキュバスの精力剤：死に掛けの老人でも体の一部が超元気になる薬。一回一粒、百粒入り。

・完全消化薬：体内の消化効率を上げ、食べた物をすべて吸収できるようにする丸薬。有害なモノは、取り込まれずに分解される。

トイレに行かなくて済むため、軍人や冒険者御用達の一品。ただし、太りやすくなるため、使いすぎに注意。

・脂肪変換薬：体内の脂肪を筋肉へと変換してくれる薬。生きるために必要な部位から変換されていくため、女性の場合は胸が小さくなってしまふことも……。

・魔剣・ダインスレイヴ：一度抜かれれば生き血を浴びるまで鞘に納まらないと言われる魔剣。その一閃は、決して癒えぬ傷を残

す。カードで言えば戦闘力500相当。

・髭切：渡辺綱わたなべのつなが鬼を切ったとされる刀。鬼属性に対する特効と再生阻害の効果持ち、500相当の戦闘力を持つ。

・大通連：持つ者に神通力を与えるという伝承を持つ三明の剣の一振り。カードに神通力のスキルを与え、200相当の戦闘力を持つ。残りの三明の剣と同時装備で効果向上。

・小通連：持つ者に神通力を与えるという伝承を持つ三明の剣の一振り。効果は他の三明の剣と同じだが、大通連よりも希少。

・顕明連：持つ者に神通力を与えるという伝承を持つ三明の剣の一振り。効果は他の三明の剣と同じだが、三つの中で最も希少。

・芭蕉扇：西遊記に登場する風を起こす扇。一度扇げば風を呼び、二度扇げば雲を呼び、三度扇げば雨を呼ぶ、という効果を持つ。

・紫金紅葫蘆：学校迷宮攻略三回目の主であった金角よりドロップ。名前を呼んだ相手を問答無用で吸い込めて閉じ込めることができる瓢箪。中には毒液が詰まっており、相手を徐々に溶かしていく。閉じ込められる時間は相手の戦闘力に依存し、Dランクモンスター程度なら自力で出る前に溶かしきることが可能。

・冥府の松明：ケルトの三女神との戦いでガツカリ箱から手に入れたメアの第二のキーアイテム。先端にはナイフが埋め込まれ、短槍のようでありながら、その実は祭杖であり、月光の象徴である松明でもある。柄に刻まれたトリカブト、狼、馬、蛇は、ヘカテーを象徴するもの。

・サラマンダーの外套：火や暑さに高い耐性を持つマント。

・クマの毛皮：エスキモーの伝説にある、着た者を熊に変える毛皮。変身中は寒さに耐性を持つ。

・タラリア：翼の生えたサンダル。おそらくはペルセウスのゴルゴン退治に登場した靴。履いた者の敏捷性を上げ、空中を高速で

走れるようになる。

・空飛ぶ絨毯：空を飛ぶ魔法の絨毯。落下防止、風除け機能付き。最高速度は時速50キロ程度。

・魔人のランプ：こすると三回だけBランクモンスター・ジン（女の場合はジーニー）が現れて戦ってくれる。

・三天使の護符：一日一回、セノイ、サンセノイ、セマンゲロフという三体のCランクモンスターを召喚することができる。また、新生児に持たせば病から守る加護を与える。

・フィントアン：フィン・マツクールが食したとされる、食べた者に知恵や不思議な力を与えるとされる知恵の鮭。カードに与えることで、スキル『フィンの親指』を取得させることができる。

・黄金の手綱：アテナが英雄ベレロポーンに与えたとされるペガサスを取りこなすための黄金の手綱（と思われる魔道具）。装備させたカードに騎獣のスキルを、手綱を握る者に騎乗のスキルを一時的に付与する。

・天岩戸の注連縄：その階層の天候を『夜』にするフィールド改変魔道具。フィールドの環境を書き換えることのできるフィールド改変魔道具は、極めて高額。

・アスクレーピオスの書：開くと自分の罹っている病のページが開かれる医学書。健康体だと開けない。

・アリアドネーの糸：安全地帯で使用することで、迷宮の入り口へと転移できる魔道具。転移先が入り口に限定されているため、使い放題の転移系の魔道具としては安い、それでも一億以上で売れる。

・コールドアイロン：魔よけの力を持った金属。壁などに混ぜることで、霊体モンスターのすり抜けを阻害する効果があり、金と同じ価格で取引されている。

・ネームモノクル：相手の名前を頭上に表示してくれる片眼鏡。相手の名前を忘れた時に便利だが、つけていることで逆に「あっ、

コイツの名前覚えてないな……」と思われてしまうことも……。

・バベルのカフス：ありとあらゆる意思を持つ生物の言っていることがわかるようになるカフス。外国人はもちろん、動物や一部の植物などにも使えるが、高度な知能を持っていない生物相手だと大雑把な意思しか伝わらない。

・バロメツツ：羊が実る奇怪な樹。たまにカニの味がするモノが混じっている。食べても人体に影響はない……らしい。

・ヒュプノスの枕：この枕で寝ると一瞬で眠りにつけ、八時間の睡眠でどんな寝不足、過労も解消される。

・分身の巻物：使えば24時間の間、自分のコピーを一体生み出してくれる。自分の代わりに作業を行わせることができ、その経験や記憶は消失後に本人へと統合される。ただし話したりすることはできないので、人と会う仕事には不向き。一回限り、三巻セット。

・代眠の小人：自分の代わりに睡眠をとってくれる小人。眠気の解消や頭の整理は行ってくれるが、肉体の疲労までは回復してくれないため、使い過ぎによる過労に注意。

・道標の手帳：目標を書き込むことで、達成のための手順がスケジュールとして記載される手帳。書かれた通りに行動すれば大抵の目標は達成できるが、自身に出来る能力の限界ギリギリを要求してくるため、実行には強い意志が必要。

・透明金庫：持ち主以外には見えない透明の金庫。見た目よりもたくさん入る。防犯に最適。

・中級収納金庫：冒険者部に設置されたロッカー。中級収納スキルと同等の性能を持つ。

・名酒・酒屋殺し：常にお酒で満たされている酒瓶。放置すればするほど、どんどんおいしくなる。これを使って商売するのは法律違反なので注意。

・夢魔のランプ：灯して寝ることで夢の中にサキユバスが現れて

ラッキースケベなイベントを起こしてくれる。エロ漫画未満、少年漫画以上。

・代筆の手袋：使用者の思考と手の形を模倣して代筆してくれる生きた手袋。PCのキーボードも代わりに打ってくれる。単純作業には向いているが、クリエイティブな仕事にはあまり向いていないので注意。

・もと暗しの灯台：この蝋燭を灯して寝ると、翌朝無くし物が蝋燭の元に現れる。

・豊玉姫命のお守り：安産の神である豊玉姫命のお守り。安全に出産でき、痛みも全くない。

・集中鉢巻：作業の前に頭に巻くことで、一つのこと集中できる鉢巻。一時間持続し、再使用には十分のインターバルを要する。受験勉強に最適。

・潔癖症のハンカチ：使うそばから綺麗になるハンカチ。洗濯要らず。

・着火グローブ：指を鳴らすことで、指先に小さな火を出すことが出来る指空きグローブ。ただそれだけの、カッコいいだけのアイテム。中学二年生くらいの男子に人気。

・陰口帳：他人の自分への陰口が自動的に書き込まれるノート。鬱に注意。

・文庫本図書館：文庫本の形をした図書館。この文庫本に既存の本を吸収することでいつでもその本が読めるようになる。仕舞った本は取り出し可能だが、この本が破損した際は中身も失われてしまうので注意。

・真竜の角：ドレイクの角。使用することで魔法の威力を上げ、鋭い切れ味を持つ角を生やす。5〜10回は使用可能。

・龍の玉：東洋の龍が持つ玉。使用することで、高等魔法使いスキルを一時的に付与する。5〜10回は使用可能。

・飛竜の翼膜：ワイバーンの翼。カードに使用することで一定時間ワイバーンのような翼が生え、飛行が可能となる。5〜10回は使用可能。

・毒竜の瞳：バジリスクの瞳。使用することで対象に猛毒と石化の状態異常。5〜10回は使用可能。

・竜の生き血：カードに与えることで、鋼のように硬い身体と高熱への耐性を一時的に与えることができる。

・アダーストーン：真ん中に穴の開いた石。幻術や隠れた存在を見抜く力を持ち、穴を通して見ることで透明化スキルや異空間スキルを目視できる。使い捨て。

・発火石：投げつけることで初等攻撃魔法一発分のダメージを与えられる石。

・臭い袋：魔物寄せの臭い袋。

・六文銭：三途の川の渡り賃。死んだ人の棺桶に入れることで無事成仏できるかも？ 用途がよくわかってないタイプの魔道具。

・白紙のカードの束：カード化の魔道具。十枚入りで対象をカードに保存することができる。所持禁止類魔道具。

・孟婆湯：飲んだ者の記憶を完全に失わせる薬湯。所持禁止類魔道具。買い取り価格1000万円。

・惚れ薬：飲ませた相手の自分への好感度を増幅する薬。そもそも好意を抱いていない相手には効果が薄くなる上に、使ったびに相手に急速に耐性がついていくため、最終的に破局が約束されている。ある意味呪われたアイテム。それでも悪用しようと思えばいくらでもできるため、所持禁止類魔道具となっている。買い取り価格1000万円。

・ギユゲースの指輪：自在に姿を消せるようになる指輪。迷宮の外でも使用可能なため、所持禁止類魔道具となっている。買い取り

価格5000万円。

・アルスルグウェン：別名、アーサー王のマント。透明マントとも。身に付けた者の姿を消せる魔道具。所持禁止類魔道具。買い取り価格5000万円。

・マジックカード

『キユア』：初等回復魔法・解毒の魔法が封じられている。一部の状態異常の回復。

『リフレッシュ』：中等回復魔法・壮快が封じられている。体力と精神、様々な状態異常を回復する。

『ブレス』：中等回復魔法・祝福の魔法が封じられている。魔力を回復させる。

『リジエネイト』：中等回復魔法・再生の魔法が封じられている。対象を一定時間回復させ続ける。

『イミュニティ』：中等回復魔法・免疫のマジックカード。一定時間、状態異常を防ぐ確率を上げる。

『ビジョン』：初等補助魔法・暗視の魔法が封じられている。暗闇でも太陽の下のようにはつきりと見えるようになる。

『クリーン』：初等補助魔法・清潔の魔法が封じられている。体や衣服についた汚れを弾き飛ばす。

『アンロック』：初等補助魔法・開錠のマジックカード。鍵のかかった扉や宝箱の罠を解除する。

『コンセントレーション』：中等補助魔法・集中のマジックカード。次の魔法の威力と消費魔力を二倍にする。

『プロテクション』：高等補助魔法・防壁の魔法が封じられている。中等魔法レベルの一撃を完全に防ぎ、高等魔法レベルの攻撃をかなり軽減できる結界を張ることができる。

『クレアヴォイアンス』：高等補助魔法・千里眼の魔法が封じられている。その階層の構造が一定時間わかるようになる。

『インシユアランス』：高等補助魔法・保険の魔法が封じられている。マスターへのダイレクトアタックを一度防ぐ結界を張る。

『レベルアップ』：高等補助魔法・促成成長の魔法が封じられている。一時的に戦闘力が成長限界まで引き上げられる。ただし、その戦闘での経験値は得られなくなる。

『マジックウェブ』：中等状態異常魔法・拘束のマジックカード。相手を魔法の糸で拘束する。

『転移』：転移系の魔法が封じられている。到達済みの階層の安全地帯へと転移する。

『遭難』：転移系の魔法が封じられている。まだ到達していない階層へとランダムに転移する。

『緊急避難』：転移系の魔法が封じられている。その階層の安全地帯へと転移する。

『短距離転移』：転移系の魔法が封じられている。数メートルから50メートルほどの距離を一瞬で転移できる。緊急回避用。

【人工魔道具】

・冒険者ライセンス：冒険者を証明するライセンス。身分証の他、ギルドと提携している店で使える電子マネーをチャージすることもできる。実は人工魔道具であり、緊急時にはギルドに救助要請を送ることも可能。救助には多額の費用が掛かる上、一番救助が必要なイレギュラーエンカウント相手には無意味。人工魔道具であるため、機械破壊の影響も受ける。

魔石発電機：魔石を入れることで発電・蓄電してくれる家庭用の発電機。フランクモンスターの魔石一つで一般家庭の一月分の電力を生み出す。

・エアコンペンダント：身に着けていると体周辺の温度と湿度を適温にしてくれるペンダント。

・防音結界：内部の音を完全に遮断してくれる防音結界を発生させる装置。

・オールリモコン：家の中のすべての家電がこのリモコン一つで操作可能。

・マーメイドの水着：水中での動きを補正し、息が長く持つようになっている水着。身に着けた者の好みにデザインが変わる。

【人工純正魔道具】

・カードギア：冒険者の必需品！ をコンセプトに作られた、機械破壊の影響を受けない次世代の人工魔道具。迷宮外でもカードと会話ができるのが最大の売りで、迷宮内でのオートマップ機能、ライセンスと同等の救助要請機能、同じ迷宮内にいる他のカードギア所有者との通信機能など迷宮攻略に必要な機能が一通りそろっている。アンゴルモア中の通信手段としても開発されているため、従来の携帯の機能も搭載されており、国内ならどこでも通話、インターネット可能。その上、買い切り型で月々の使用料無料と、完全に携帯会社を殺しにかかっている。

・冒険者部バッジ：冒険者部の愛と友情、そして選民思想の証。通信と防御の魔道具が組み込まれており、迷宮内では自動的に『インシュアランス（保険）』の魔法がかかり、迷宮内外にかかわらず通話が可能。冒険者部の中でも創立メンバーだけが持つ。

・聖銀製の長剣：アンデッド系のモンスターの不死を解除し、再生能力を阻害する聖銀製の武器。

・やる気ポーション：飲んだ者のやる気を回復させるポーション。クリエーターの心強い味方。百本詰め合わせ。

・ヘアメディシンポーション：毛根の再生に特化するよう調整されたポーション。ハゲの救世主。

・ワーキング24：飲めば24時間、眠らずに絶好調で動き続けられる薬。しかし、24時間後には、通常の三倍の眠気と疲労が襲ってくるため注意。連続使用は二本まで。二十本入り。

・美白歯みがき粉：どんなに黄ばんでいる歯でもダイヤモンドの輝きを取り戻し、虫歯や口臭、歯槽膿漏も治してしてくれる歯磨き粉。息、リフレッシュ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n0112fi/>

モブ高生の俺でも冒険者になればリア充になれますか？

2022年12月31日02時35分発行